ガンダム・ユーフォリア

まひろっく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガンダム・ユーフォリア

【Ｎコード】
Ｎ３６６９Ｒ

【作者名】
まひろっく

【あらすじ】
原作ガンダム全作品を用いた、パラレルワールドの中で展開される物語です。

やたら細かい設定が自慢?!

歴史と世界の設定（前書き）

【新たなる黒歴史】

最近になって、私が発掘した資料がある。

これによると、数百年前にも、今と同じようにＭＳが戦場を駆け、人が互いに血を流しあった時代があったという。

その時代は、★ユーフォリア帝国★なる巨大な軍事帝国が、世界を統べようとした時から始まり、その後の繁栄と没落、新たなる時代の幕開けへと至ったらしいが…。

これについて、現在発見された資料だけでは、その時代の一部しか明らかにできておらず、またその資料の真偽も疑問視されているため、いまもって歴史的には認められていない。

だが私は、この話が実話であるにせよ、虚構であるにせよ、描かれた悲劇から学ぶことは多いと考える。

できうるならば、この本を紐解いた方々に、人が互いに憎しみ争うことの無意味さを知っていただたならば、幸いだと思う次第である…。

歴史と世界の設定

人類が宇宙の開発を手がけ始めてから、１００年が過ぎていた時代。

世界は、地球のヨーロッパ、アジアを主な領地とする『ユーフォリア帝国』

同じく、北南米とオセアニアを治める『ルビス共和国』

そして、月面都市や、宇宙に築かれた多数のコロニーの集まりである『宇宙連合』

の３つによって、分割統治されていた。

分割と言っても、３つの勢力の仲はけして悪いものではなく、ただ政治的なスタイルの違いだけで区分されていたにすぎない。　互いに相手を尊重し、平和条約を結び、人類は繁栄していた。

…1人の男が帝位につくまでは。

宇宙歴１０２年、ユーフォリア帝国皇帝に即位したラインザックは、従来の和平路線を、強硬な拡大政策へと転ずる。

彼は、秘密裏に新兵器ＭＳ、すなわちザクとジンの開発を手がけ、さらにミノフスキー粒子を軍事的に利用する方法を確立させる。

こうして軍事的アドバンテージを確信した皇帝は、宇宙歴１０４年３月、突如として共和国との和平条約を破棄、共和国領への侵攻を開始したのである。

完全に虚を突かれた共和国軍は、各地で壊滅的被害を被り、開戦後わずか３週間で北米が、２ヶ月で南米の要塞ジャブローが陥落、オーストラリア大陸へと逃げ延びざるを得なくなる。

そんな共和国を見てとったラインザックは、あろうことか宇宙にまで侵出し、軍事力に劣る連合に無理矢理従属を迫り、各コロニーの独立を踏みにじる。

さらに、いまだ降伏を拒む共和国に対し、連合より奪取した１基のコロニーを地球軌道を伺う宙域まで移動させ、降伏しないならば、共和国を地球上から消すと宣言。

こうして世界は、ラインザック…　後に大武帝と諡される男１人の前に膝をついたのであった…。

…ただ、人類が未曾有の悲劇に見舞われるまでには、まだ僅かな猶予が残されていた。

大武帝ラインザックは、野心家で、傲慢な人となりではあったが、同時に聡明で、情勢と人を見る目に長けていた。

自身が得た領地を、自らの手足となるべき帝国貴族に分配したほか、敵になれば容赦ない反面、味方についた諸勢力は思いのほか厚遇し…。

強権ではあったが、意外にも手堅く世界を統治したのである。

また、この皇帝に見出だされた宰相ユギンは、皇帝亡き後も世界を取り仕切り、各地で起こる不協和音と混乱を巧みな政治的手腕で抑え、５０年近い帝国全盛期を築いたのであった…。

…だが、そんな豪腕皇帝と名宰相の後を継ぐ者に、帝国は恵まれなかった。

元々強引に築かれた繁栄を、宰相ユギン亡き後、時の皇帝レミルは維持できず、各地で反乱が勃発する。

しかも、その心労から失意のうちに病床に倒れた皇帝を見るや、忠実なはずの帝国貴族たちは、次の皇帝の後継に、それぞれの支持する皇族を掲げて暗躍し始めてしまう。

そんな時流を憂いた皇太子ランドルフと第3皇子ラングレイは、自らが武威を示すことで、かつての帝国を取り戻そうとし、チベットにある帝国首都『パンドラール』にほど近いインド地方で反乱を続ける『インドラ』を討伐する軍を発するが、インドラの英雄『楽園の剣』によって返り討ちに遭い、共に戦死。

次代の英雄候補までも失った帝国は、もはや軍や貴族たちを統轄する機能を失い、戒めから解き放たれた帝国軍は、各地で暴走を始める。

そして宇宙歴１５０年、暴走を続ける帝国軍は、ついに引いてはいけない引き金を引いてしまう。

なんと、反乱鎮圧のため、ＮＢＣ兵器を始めとする戦略兵器を用いた、皆殺し作戦を行ったのである。

帝国に対して反旗を翻していた、あるコロニーは戦略核で灰となり、またある場所では、ミラージュコロイドを用いて潜入したＭＳが、猛毒のＧ３ガスを散布。

世界の各地で、阿鼻叫喚の地獄絵図が現出され、ここにきて人類は、滅亡の危機を迎えたのである…。

…そして悲劇から、５年の月日が流れる。

滅びの時を待つだけかと思われた人類だったが、人類は人口の半分近くを失いながらも、なんとか生き延びていた。ただそれは、別に帝国軍が平和を愛する心を取り戻した訳ではなく、単に世界の秩序が崩壊し、帝国自身も反帝国ゲリラ活動と、経済の崩壊により、かつてのような大きな動きが取れなくなっていただけにすぎない。

依然として世界は混沌としており、各地で血で血を洗う紛争が続いていた。

…しかし、人類にも希望の光は残されていた。

世界を憂う諸勢力は、密かに力を蓄え、帝国を倒す機会を伺い始めていたのだ。

また、諸悪の元凶たる帝国の側でも、自らの暴虐を正すべく、改革を志す者たちが現れ始め…。

ようやく時代は、新たなる秩序を求め、動き出そうとしていた…。

第1章　復讐の炎（前書き）

（主人公紹介です。　読んでね）

まだ帝国が繁栄を保っていた頃。

地球のとある街で、その子は生まれた。

★エヴァニー・ア・ヴェンジャー★

父と母は帝国貴族の一翼である共に、帝国軍で部隊を率いるエリート士官。

そんな恵まれた環境で成長するなか、エヴァニー自身も将来有望な少年と言われ、もてはやされていた。

…しかし、宇宙歴１４７年。

地球圏を統括する帝国の後継問題を機として、帝国政府は統制を失う。

結果、帝国軍は乱れきり、様々な紛争が地球をも荒廃させてしまう。
帝国では、一部の者が裕福な暮らしをする反面、辺境の荒廃ぶりは筆舌に尽くしがたかった。

ことこれに及び、エヴァニーの両親も次第に帝国軍に反感を持つようになる。

そして宇宙歴１４９年ヴェンジャー家は反帝国軍『大地の叫び（グランズ）』を結成し、帝国に反旗を翻したのだった。

グランズは各地の勢力を糾合し、徐々に勢力を拡大する。しかし帝国軍は、グランズを含む世界中の反帝国勢力に対して、徹底排除を決定。

その方法は凄惨を極め、なんとグランズは帝国軍の毒ガス攻撃によって、活動中のほぼ全員が殺され、壊滅させられてしまう。

「せめてお前だけは」

そう母が言って着せてくれたノーマルスーツ越しに見えたのは、目から…　指先から…　そして全身から血を流し倒れていく大人たち

の姿。

時に、エヴァニー・ア・ヴェンジャー11歳。

悲劇は、少年の心を深く切り裂いた…。

第1章　復讐の炎

月日は流れ、宇宙歴１５５年、エヴァニー・ア・ヴェンジャー１６歳。

地球の砂漠にある街『グルノーベン』　そこでエヴァニーは、３０人程の仲間と共に暮らしていた。

エヴァニーの心に宿った復讐の炎はいまだ熱く、エヴァニーはグランズを再び結成すると、各地で帝国軍に関連する施設を襲う日々を送る。

今、目の前にしている施設も、帝国の研究所だという話だったのだが…。

エヴァニー「こっちは何もなさそうだ。　シベリア、そっちはどうだ？」

エヴァニーは隣の部屋にいた男に声をかけた。　落ち着いた面持ちで辺りを探る、この２０前後の男がシベリアらしい。

シベリア「…こっちもダメだ。　耳寄りな情報が、聞いて呆れる」

エヴァニー「まあ、そう言うなよ。　もう少し何かないか、探って

みようぜ」

グランズの参謀役のシベリアは渋い顔をしていたが、エヴァニーはあまり気にした様子もなく、他の仲間と別の部屋や通路をあら探しし始めた。

???「おい、エヴァニー。　これはなんだと思う?」

エヴァニー「サルティン。　なんかあったのか?」

エヴァニーが駆け寄る。　サルティンと呼ばれた男は、床下を指差した。

サルティン「派手に崩れてるが、コレ、階段に見えないか?」

サルティンの言葉通り、周囲は埃にまみれ、所々、壁が剥がれて崩れていた。　だが、たしかに隙間があり、その下に続く空間がある。

サルティン「…もしかして、地下に秘密基地とかあったりするとか?」

サルティンは、嬉々として残骸をどけ始める。

エヴァニー「気をつけろよ？　まさか中に人はいないだろうが、崩れて閉じ込められたら厄介だ」

エヴァニーはそう言ったが、覗いた空間は意外なほどがっちりしていた。　崩れるどころか、荒れた様子もあまりない。　さすがに、埃や塵は積もり放題だったが。

エヴァニー「よし、行ってみよう」

エヴァニーとサルティンは、仲間を外に待たせて、2人だけで階段を降りて行く。

サルティン「…これは…？」

シベリア「設計図とパーツだな」

サルティン「うわっ！　シ、シベリア！　いつの間に！！」

サルティンは、心底驚いたような顔をしていた。

サルティン「…いるならいるって言えよ。　ただでさえ、影が薄いんだから…」

シベリア「…影が…　薄い…」

サルティンの言葉に、シベリアは少しだけ考え込むような仕草をする。

エヴァニー「で、シベリア。　何のパーツなんだ?」

エヴァニーは尋ねた。

シベリア「ＦＸ―５５０…　スカイグラスパーみたいだな。　ちょっと古い戦闘機だが…」

シベリアは辺りを確認しながら、ゆっくりと喋る。

シベリア「…そうだな。　たぶんこれくらいパーツがあれば、１機や２機くらいなら、組み立てられそうだ」

エヴァニー「マジかよ?!」

反帝国レジスタンスは、資金や資材に恵まれていないのがふつうだった。　グランズもそうで、そこに戦闘機が手に入るかもとなれば、エヴァニーの驚きも無理はなかった。

サルティン「よし、なら持って帰ろう。　エヴァニー、いいよな？」

エヴァニー「もちろんだ。　連れて来たプチモビを使えば、これぐらいは運べるだろう」

エヴァニーが外の仲間に声をかける。　プチモビが階段付近を拡げ、続いてパーツを慎重に運び出して行く。

1時間後、エヴァニーと仲間たちは、トラックに積み換えられた資材を持って、グランズのアジトに帰って行った…。

【2】

エヴァニー「ナディア！　スカイグラスパーはどうかな？」

エヴァニーはグランズのアジトに帰るなり、迎えた女性にそう叫んだ。

ナディア「…スカイグラスパー？」

ナディアと呼ばれた女性は、エヴァニーに促されて、持って帰ったばかりの機材の山を見る。

ナディア「…確かに、悪くないね。　帝国の頃にいじったことがあるから、この戦闘機についても多少知ってるよ。　バラバラだと言っても、ここまで綺麗な状態で保存されてたなんて、信じらんないね。」

ナディアは感心した風に言う。

サルティン「それで、動かせる状態まで、できるのか?」

ナディア「はっ！　舐めないでくれないか?　あたしを誰だと思ってる。」

自信満々に宣言する。

サルティン「がっはっは。　じゃあ任せたぞ」

思わぬ戦利品が動くと知ってか、サルティンは豪快に笑う。

シベリア「…ところで、パイロットは誰がやるんだ？」

シベリアの声に、周りが少し考え込む。　戦闘機とＭＳでは、もちろん操縦が違う。　ましてふだん使っているプチモビとでは、似ているところの方が少ないかも知れない。

エヴァニー「うーん…」

リナレス「皆さーん！　とりあえずご飯でも食べながら考えませんか？」

悩む仲間たちに、明るい声がかけられる。

エヴァニー「…そうだな。　急いで決めても仕方ないし、ゆっくり飯でも食いながら話すか」

そうして、全員がテーブルについて…。

【3】

サルティン「じゃあ、あの戦闘機のパイロットは俺で決まりだな！」

夜まで、話し合いという名前の意地の張り合いが続いたのだが、結局最後には、飛行機の操縦経験があるサルティンが、と妥当かつ、当然すぎる結論が出た。

エヴァニー「まあ、サルティンは元パイロットだったしな？　意地を張ってみても、まともに操縦できるのはお前だけだよ」

エヴァニーの表情は、悔しさ2割、諦め8割といった辺りか。

ナディア「何だい？　サルティンが乗るんなら、整備は適当でいいね」

サルティン「おーいおい！　殺す気かぁ？」

エヴァニー「ハハッ」

リナレス「エヴァ！笑ってないで、ちゃんと言わないと」

シベリア（…うるさい…）

仲間たちの賑やかな笑い声が響く。

【3】

…そこへ。

グランズ仲間「おい！　カタルーナの仲間から通信だ」

エヴァニー「なに?!　何て言って来てる?」

エヴァニーだけでなく、その場にいた全員が真剣な眼差しに戻る。

グランズ仲間「カタルーナの街から南に１０ｋｍの所に、帝国軍の新しい駐屯地を見つけたそうだ。　戦力はいま確認しているらしいが、少なくとも１機のＭＳと戦車がいるらしい」

グランズ仲間「…まさか、俺たちを潰す気か?」

仲間の1人が低い声で言う。　グランズも反帝国レジスタンスである以上、帝国軍に狙われてもおかしくはない。

シベリア「いや、本腰入れて潰しに来たにしては、数が少ないな。偵察か…　もしかすると、先遣部隊という可能性もあるか」

シベリアが参謀らしく意見を言う。

エヴァニー「どうすればいい？」

シベリア「むしろ、エヴァニーはどうしたい？　敵の数が少ないということは、仕掛けるにしても、逃げるにしても、今がチャンスということになる」

サルティン「そんなもん決まってるだろ？」

エヴァニー「今のうちに叩こう」

そこにいた仲間全員が強く頷いた。

エヴァニー「…よし。　すぐ出発だ」

ナディア「…待ちな」

意気込む仲間たちに、思わぬところから待ったが入った。

ナディア「急ぐのは結構だが、スカイグラスパーはどうするつもりだ？　どんなに急いでも、完成までまだ半日かかるぞ？」

エヴァニー「…そうだな…。　時間は惜しいが、戦力も足りない…」

思案顔のエヴァニーに、サルティンはいとも簡単なことを提案した。

サルティン「だったら、俺が後から追いかければいいんだろ？　一緒に出たって、飛んでる俺の方がはるか先に着いちまうだけだしな」

ナディア「…サルティン。　つまりお前は、あたしに徹夜をしろと言いたい訳か」

聞いたナディアが、引きつった笑みを浮かべながら喋る。

エヴァニー「頼む、ナディア」

そんなナディアに、真剣な表情で訴えかけるエヴァニー。

視線が絡み合い…

先にそらしたのは、ナディアの方だった。

ナディア「…あいよ。　この借りは高いからね？　あたしも絶対間に合わせるから、あんたらもがんばってきな！」

エヴァニー「すまない、ナディア！」

熱のこもった目で、エヴァニーはナディアを見つめ、頭を下げた。

ナディア「っていうか、そのセリフ、サルティンが言うのが正しいんじゃないかい？　まあ、いいさ。　サルティン、あんたも手伝いな。　いてもたいして役に立たないが、それでもいないよりはマシ

だろう」

サルティン「なんだそりゃ？」

周囲を一瞬笑い声が包んだが、すぐにまた真剣な表情に戻る。

エヴァニー「じゃあ、行ってくる！　みんな、準備を急ごう」

エヴァニーは仲間たちと、トラックに分乗すると、武装したプチモビ2機を率いて戦場に向かった…。

【4】

駐屯地にたどり着いたのは、夜明け前だった。　時間からすると、完全に明るくなるまでには、あと1時間といったところか。

エヴァニー「…見える限りでは、MSは1機だけに間違いないな。　戦車は…　マゼラアタックが3両。　やはりずいぶん小規模だな」

言いながらエヴァニーは、夜間用の特殊な双眼鏡をシベリアに手渡

した。

エヴァニー「だが、こちらが劣勢には変わりない。　プチモビじゃ、戦車と真っ向勝負は無理だろう。　ましてやＭＳが動けば…。

シベリア。　何かいい手はないかな？」

エヴァニーは、もう一度シベリアの顔を見た。

シベリア「なら、こういうのはどうだ？　正面で俺たちが派手に騒ぎを起こす。　ただ騒ぎ立てるだけだ。　当然、帝国軍の注意はこちらに向くだろうが、戦ってる訳じゃないから、戦車やＭＳは動かさないはずだ」

シベリアはさらに続けた。

シベリア「その隙に、後に回り込んだ仲間が、奴らの背後を突く。　できれば戦車でも奪えれば最高だ。　あとは正面のプチモビを繰り出して挟み撃ち、どうだ？」

エヴァニー「さすがシベリアだ。　それでいこう。　正面は…」

シベリア「危険と言えば危険だからな。　俺がいく。　エヴァニーは…」

エヴァニー「いや、俺も正面だ。　ここでうまく敵を騙せなければ、作戦が駄目になるからな？」

シベリア「…分かった」

こうして作戦が決まり、後からの突撃は３０分後とされた。　プチモビは正面の岩陰に隠され、いつでも戦える体勢をとり…。

【５】

エヴァニー「帝国のバカ野郎っ！　こんな所まで来て、でかい顔してんじゃねぇぞ！　早く帰れよっ！！」

エヴァニーは酒に酔ったような大声で喚き散らし、空き缶を投げた。

帝国兵Ａ「なんだ？」

帝国兵Ｂ「酔っ払いが暴れてるらしい。　お前、追い払って来いよ

！」

帝国兵Ａ「…なんで俺が？　お前が行けよ！」

帝国軍下士官「……。」

エヴァニー「なんだ？　帝国の奴らは、夜は暖かいお布団でお休みで、寒いお外は嫌ってか？」

シベリア「そうだそうだ！　帝国軍がいたって何の役にも立たないぞ！　目障りだから帰れ！」

本当に酔っぱらっているようなエヴァニーに対して、シベリアは少しだけ顔がひきつっているが…。

とにかく2人が騒いだせいで、周囲には１０人以上の帝国兵が集まって来た。

帝国兵Ａ「目障りなのはどっちだよ、この酔っぱらいが！」

帝国兵Ｂ「さっさと家に帰れ！　殴り飛ばされんうちにな！」

そうして、騒ぎが大きくなってきた頃。　聞こえてきた戦車の重いエンジン音。　そして、キャタピラの軋み、銃声。

帝国兵Ａ「誰だっ！　勝手に戦車を動かしてる奴は！！」

ドンっ！！

振り返った帝国兵は、胸から血を流して倒れる。　そして、機銃の発射する音が続き、その場にいた帝国兵全員が、地面に崩れ落ちる。

エヴァニー「やったぞ、シベリア！　成功だ！　さすがシベリアだ」

喜色満面のエヴァニーと、照れているのか、頭をかくシベリア。

…だが。

そんな２人が、次の瞬間に目にしたのは、動き出したＭＳ、ドム・トローペンに踏み潰される戦車の姿。

続いて、左手に抱えたマシンガンが火を吹き、２機のプチモビが跡形もなく消し飛ぶ。

エヴァニー「…な、なぜだ…」

ようやく昇り始めた明るい太陽とは裏腹に、辺りには血飛沫が舞い、ドス黒く周囲を染める。

シベリア「…俺の…　ミスだ…」

ドム・トローペンが腰を低く屈めると、熱核ジェットのホバーが起動し、傍にいた生身の人間を、ある者は吸い込み、ある者は壁まで弾き飛ばした。

帝国軍下士官「こんな事だろうと思った。　さあ、あの世へ行けレジスタンス共！！」

聞こえるはずのない冷酷な叫びが、２人にははっきり聞こえた気がした…。

【６】

シベリア「…み…　んな…　みんな俺のせいだ…　うぉぉぉぉっ～！！」

その場に立ち尽くし、叫び声を上げるシベリア。　そんなシベリアの叫びも虚しく、ドム・トローペンは仲間たちを弾き飛ばし続ける。

わずかに1発、スカートにＲＰＧが着弾するが、被害は目に見えるほどのものではなかった。

しかも、残る2両のマゼラアタックが動き出し、エヴァニーとシベリアに迫る。

エヴァニー「シベリアっ！　何してるっ、逃げるんだよっ！！」

エヴァニーは茫然とするシベリアの手を無理矢理引っ張る。

帝国軍下士官「逃がすかっ！」

逃げる2人をモノアイが追い、構えられるバズーカとマゼラトップ砲。　すべてが決したと思えたその時。

？？？「…先走りやがって。　俺を待たねぇから…」

そんな時、空の雲を切り裂き現れたのは、スカイグラスパーだった。
スカイグラスパーから放たれたビーム砲がマゼラアタック2両を貫き、一瞬で燃え上がらせる。

サルティン「ヒュー！！　久し振りだぜ、こんな感覚！　エヴァニー、今のうちに！！」

スカイグラスパーが駐屯地にビームを乱射するなか、エヴァニーとシベリアはドムに弾き飛ばされ、骨が折れたり、うずくまってしまった仲間たちを支えつつ、なんとか駐屯地から転がり出た。

それを見たサルティンは、もう一度超低空で飛び、ドムと向かい合う。

サルティン「落ちろっ！」

帝国軍下士官「なめるなっ！！」

ビーム砲はドムの右腕を貫き、バズーカが大きな音を立てて落下する。　ドムの右腕は垂れ下がり、明らかに使い物にならない様子だった。

サルティン「もう1回だっ！」

サルティンの勇ましい声が、コックピットの中にこだます。

だが…

帝国軍下士官「逃さんっ！！！」

馳せ違った後、次を狙うべく、サルティンがスカイグラスパーの向きを変えようと、操縦悍を目一杯左に倒した時。

ドムは、その重い機体から考えられない軌道を描き、宙を舞っていた。　しかも、その左手に握られていたのは、マシンガンではなくヒートサーベル。

サルティン「…くそっ！！！」

スカイグラスパーは、左の翼を半分以上切り飛ばされ、たちまち高度が下がり始める。

エヴァニー「サルティンっ！！」

エヴァニーの叫びが届いた訳でもないだろうが、スカイグラスパーはそのまま駐屯地を飛び抜け、外で脱出を計る仲間たちの側に不時着する。

エヴァニー「サルティンっ！！！」

エヴァニーが駆け寄ると、サルティンは気まずそうな顔をする。
だが、サルティン自身に大きな怪我は見当たらない。

エヴァニー「サルティンバンコ！　無事かっ！　逃げるぞっ！！」

コックピットから出るサルティンに手を貸し、そう声をかけるエヴァニー。

しかし…

帝国軍下士官「逃がさんと言ったはずだ」

そこに迫るのは、さっきのドム・トローペン。　右腕は使えず、バズーカも失っているが、ＭＳとトラックでは、戦いの結果は誰にでも予想がつく。

サルティン「…お前は先に行けっ！！」

急に立ち止まり、握られたエヴァニーの手を振り払うサルティン。

サルティン「あいつを落とせなかったのは、俺のミスだ。　始末したら後を追う。　だから、先に帰ってろ！」

エヴァニー「サルティン？　何を…」

言っている。　そう言おうとしたエヴァニーの言葉は、サルティンの笑顔に遮られた。

サルティン「ここで止めなきゃ、どうせ追いつかれる。　心配するな、あんな奴は俺１人で十分。　後で必ず追いつくさ」

サルティンが親指を立てる。　そして…

サルティン「シベリアっ！　冷静なお前ならわかるだろ！　エヴァニーを頼む！！」

エヴァニー「シ、シベリアっ！　離せっ！！」

シベリアはサルティンに顔を背けたまま、エヴァニーをまだ動ける他の仲間と一緒に引きずって行く。

エヴァニー「サルティーン！！！」

悲痛な叫び。

サルティン「…わがまま言うんじゃねぇよ…」

そうわずかに呟くと、サルティンはスカイグラスパーのコックピットに戻る。

サルティン「よし！　まだ生きてるな。　これなら」

サルティンは、機体を押して向きを変える。　と言っても、わずかに上向いただけだが。

帝国軍下士官「ちっ、火器を捨てていなければ一撃なものを…。だが、レジスタンスごとき、踏み潰してくれるわ！」

そこに迫るのは、やはりドム・トローペンの巻き起こす猛烈な風と、重厚な死への響き。

サルティン「まだだっ！」

再び起動したスカイグラスパーからビームが伸び、ドムを掠める。

帝国軍下士官「…ぬっ？！　まだ…　この死に損ないがっ！！」

ドムは急停止すると、再び見た目の重々しさからは考えられない華麗なターンで、スカイグラスパーに向き直る。

帝国軍下士官「大人しく死んでいろっ！！」

サルティン「エヴァニー！！　…あとは…　頼んだぞ…」

直後、ドムは胸からビームに貫かれ、ランドセルに火が回る。　その火は瞬く間に全身に…。

…だが、勢いのついた機体は止まらず、スカイグラスパーにそのまま突っ込み、爆発した。

その光景は、昇ったばかり朝日に照らされ、近くの街からさえも、よく見えたと言う。

？？？「…これが、戦い…。　…世界では、こんな事が起きて…」

第2章　宇宙（そら）の秩序（前書き）

（それなり難しい世界設定→読まなくても平気？）

宇宙は、もともと帝国が武力で脅して奪った地域だけに、帝国に対する反発は強かった。

しかも、密閉空間のコロニーは、５年前のＮＢＣ兵器の効果を絶大なものにしており、その意味でも、宇宙は地上に倍する荒廃ぶりであったと言える。

秩序の崩壊した宇宙では、海賊が暴れ回り、生き残ったコロニーを襲う。

治安を保つべき帝国軍は、反帝国ゲリラを怖れて、ルナ２から動けない。

苦境に立たされた各コロニーでは、かつてラインザック帝に配された貴族たちが、なけなしの力を振り絞り、自らの領地と民を守っていた…。

第2章　宇宙（そら）の秩序

あたしの名前は　『マヒロ・ミズサワ』　歳は２２で、スリーサイズは秘密…

あ、そんな事はどうでもよかったんだっけ？

世界は…　お父様の帝国は…　それどころじゃないもんね。

…お父様の帝国？

ああ、まだ言ってなかったっけ？　あたし、こう見えても第３皇女、皇帝の３番目の娘なんだ。　まあ、それこそスリーサイズ以上にどうでもいいんだけれど。

第３皇女、皇族って言っても、所詮は傍流、生まれてすぐに養子に出されちゃうくらいで、跡継ぎにはお呼びでない血筋だから。

それはともかく…。

あたしは今日も、治安活動に出る予定なの。

あたしが出る事で、少しでもこのコロニー周辺が安全になるなら、それが貴族の務めってものでしょ。

マヒロ「ケイさん、お疲れさま」

あたしはブリッジに入って、そこにいた若い士官に声をかけた。

彼は　★ケイ・ユヅキ大尉★　私に仕える侍従なの。　真面目で品行方正、正義感が強くて…　おまけにルックス抜群、ケンカも強いとくれば、もうこの世にこんな男の人っていたの？　って感じじゃない？

…ただ、品行方正すぎて、主人のあたしに手を出すなんて発想が、これぽっちもないのがね…。　あたしも年頃の女のコなんだし、過ちの1つや2つ、あってもいいんじゃないかな？

？？？「…また、バカなこと考えてたでしょ」

マヒロ「バカって何よ。　ご主人様に向かって失礼ね～」

？？？「ならば、主人の教育も臣下の役目ですから」

…で、この嫌味なオバサンは、★ミサト・キリシマ中尉★　ケイさ

んと同じくあたしの侍従なの。

２４歳の女性ながらに、皇族の侍従してるぐらいだから、悔しいけど容姿端麗。　ＭＳに乗せても一流で、特に狙撃が得意。

それに何より、胸がＥもあるって言うじゃない？！

？？？「あ、お姉おはよぉ～」

少女の元気な声がブリッジに響く。

この朝からテンション高くて、なぜかアイスクリームを食べてるのが、★ミク・ミズサワ★　ミズサワの苗字からわかるように、あたしの妹なんだ。　義理だけどね。

ミク「きょうは1分遅刻っ♪　い～けないんだ」

マヒロ「いけないって言うなら、子供が軍艦に乗るのはどうなのよ？」

そ。　ミクはまだ１４歳のお子様。　学年で言えば、中学3年になったばかり。　ここにいるってことは、また学校はサボったみたいね。

ミク「先生の許可はもらってるも～ん。『ミクさんは、中学生なのにコロニーを守ってるなんて感心ですね』だって」

…そんなん、お世辞に決まってるでしょうが。

だいたい、このコロニーの領主はあたしで、あんたはその義妹。先生のクビなんか、いくらでもすげ替えられる立場なんだけれど、そういう風には考えないみたい。

ケイ「本日は予定を変更いたしまして、新しい情報の得られた地域へと向おうかと。　情報通りならば、そこに海賊の根城が」

マヒロ「任せるわ。　それから、ケイさん。　今日、合流するはずの人たちの事、知ってる？」

ケイ「霧雨侯爵家の一族と伺っておりますが」

…侯爵家か…。

あたしとは面識のない家だけど、確か結構な大貴族だった気がする。

ケイ「何にしても、実際会われてからで問題ないと思います」

マヒロ「…それもそうね…。　補給の準備だけは、しておいてあげてね？」

ケイ「かしこまりました」

この時世だから、皇族貴族と言っても、使える戦力は限られている。

ミズサワの家にしたって、１０隻の艦艇しかいなくて、しかも半分はコロニーの守りに残さざるを得ない。　それを考えると、他の貴族との共同作戦は心強かった。

何はともあれ、こんどこそ海賊を根絶やしにしてしまいたい。　宇宙の治安が崩壊してから、地道に活動を続けて、ようやくここまで来た。

最初は領地の住民からさえ、疑いの眼差しで見られたけれど、それにも耐えてきた。　帝国が宇宙でしたことを考えると、こんな海賊退治で汚名を返上できるとは思えないけれど、せめて自分の領地の人くらいは安心して暮らせるようにしたい。

それにはまず、海賊退治なのよね…。

【2】

マヒロ「バーミンガム級に座乗されるとは、数多い侯爵家の中でも、格式の高いお家の方のようですね」

貴族の家柄を、座乗艦で示すのは帝国の伝統だった。

それは、人類がみんな地球にいた時からで、子爵だから車はどうだの、伯爵になればこれくらいだの、冷静に考えてみれば、帝国もずいぶんとマニアックな風習があるものよね?

霧雨「まだ侯爵家を継いだ訳ではありませんので、この程度の艦しか自由にできませんが。

申し遅れました。　僕が霧雨侯爵家の嫡子　★雉華・霧雨★　と申します」

見た目といい、名前といい、まるで女性のようなんだけれど…。

声は男の人なのよね?

いきなり、性別間違えるなんて失礼があったらいけないと思って、こっそり訊いてみようとミサトの方を見たら、あのオバサン唇だけで

『見ればわかるでしょ?　バーカ』

とか言ってるじゃない?　主人を助けるどころか嘲笑うなんて、あのコ本当に侍従かしら?

ケイ「お噂はかねがね伺っております。　たしか、霧雨家と言えば連合時代のサイド7、帝国に属してからはレンカですが…　をご領地とされ、その威勢は宇宙でも随一とか。　その御子息が我らにご協力いただけるのは、頼もしい限りでございます」

こんな時に頼りになるのは、やっぱりケイさんだった。　相手を誉めながら、あたしに必要とする情報をくれる。　同じ侍従でも、こうまで違うものかしら。

結局会談は、貴族同士のありきたりなものになった。　礼は尽くしたけれど、お互いに腹の探り合っただけ…。

【3】

霧雨「…マリアベル。　君には彼女はどう見えた?」

僕は側近のマリアベルに声をかけた。　マリアベルは4人いる信頼できる側近の1人で、その知的な才覚を僕は買っていた。

マリアベル「…そうですね。　分かりにくい人柄、でしょうか?」

霧雨「う～ん。　分かりにくいって言うか、猫をかぶっているようにも見えたけど」

マリアベル「猫をかぶるのは、貴族にありがちですからね？　まあ、実際に戦えば、隠している物も見えてくるでしょう」

マリアベルは、様子見をするつもりのようだ。

霧雨「まあ、それでもいいか。　無能なら手を切ればいいし、腐敗した貴族の一員ならば、いずれ始末するまでさ」

？？？「…またそういった事を…。　あまりそういった発言はなされない方が…」

もう1人の側近のリバルが、おずおずと声をかける。

霧雨「相変わらずだな、リバルは。　別に聞こえてる訳でもないし、いいだろう？」

言葉ではそう言ったが、僕はリバルを信頼していた。　マリアベルのような閃きはないけれど、堅実な手腕は頼りになる。

リバル「そりゃ聞こえませんけれど」

だけど、やや弱気なところが壁に傷かな?

霧雨「とにかく、マリアベルも言うように、戦えば化けの皮なんて剥がれるさ。　剥がれた後に何が見えるか、楽しみにしておこう」

僕は、全軍に装備の再点検を命じた…。

【4】

一方、その頃…。

マヒロ「あの人たち、一癖も二癖もありそうに思えるんだけど、どう扱うのがいいかな?」

あたしの口調は、いつも通りに戻っていた。　会談は皇族として堅い口調にしなければマズいけれど、実はそんな言葉遣いが大嫌いなのよね。

ミサト「このご時世じゃ、あんなものじゃないかしら？　野心はあって当たり前だし。　その方針って言うか、狙いが分かるといいんだけれどね…」

ケイ「あくまで帝国を立てるか？　取って変わるのか？　それともそれ以上なのか？」

相変わらず、ケイさんの意見はストレートだった。　野心があると言っても、帝国の中での立身出世が夢なら、それは結果として帝国の立て直しとイコールだから、害はない。

もしかしたら、一応は皇族であるあたしを、次の皇帝に祭り上げて、自分が実権を握るつもりかも知れないけれど、それを気にする気はなかった。

要は、民衆が穏やかに、できれば豊かに暮らせるかどうかというだけで、それができるなら、誰が政治をしていようが関係ない。

ミク「ねぇねぇ、あの人たちのコロニーって、おいしいアイスクリームあるかなぁ～？」

天然系のガキンチョはきっぱり無視して、話を続ける。

マヒロ「とりあえず、海賊退治で実力を見定めながら、つかず離れずってのがいいかしら？

帝国に取って変わろうってぐらいの大物なら、簡単に尻尾は出さないだろうけれど、他の貴族の所領を掠め取って、反乱のダシにしようってくらいの小悪党なら、すぐに牙を向くかも知れないわ」

ケイ「…たぶん、それは杞憂だ」

あたしの意見はそうだったけれど、ケイさんは意外にも彼らを買ったようだった。

ミサト「大尉。　その判断の根拠は？」

ケイ「何も。　強いて言うなら、目の奥の光が違う」

理論家のミサトは納得していないようだったけれど、ケイさんの人を見る目を、あたしは信用する気になっていた。　乱れた世の中じゃ、説明できない要素が運命を左右する事もあるしね…。

【5】

帝国軍下士官「失礼します！　付近の宙域から、特殊救難信号を傍受しました。　コードレッド。　『多数の海賊機に包囲さる』です」

あたしのコロニーに出入りする船団には、一通りの訓練がしてあった。　この特殊救難信号もその1つで、優勢な海賊に遭遇した際は、下手に逆らわずに、助けを待てと言ってある。

マヒロ「もちろん最大戦速よ。　ケイさん、ミサト。　スクランブルいける？」

ケイ「当然だ」

ミサト「前哨戦ってところかしら？　任せて、お嬢」

2人がブリッジから飛び出していく。　いつもながら、頼もしい姿だ。

ミク「う～　ミクも行くぅ～」

なんかゴネてるお子様がいるけど、またまた無視。

実は、ミクは小さい頃からニュータイプの素養があるって言われてて、MSに乗せると驚くほど強い。　そのうえ頭まで良くって、趣

味とか言いながら、自分のＭＳを改造してしまったりもする。
純粋に戦力としてだけ見るなら、かなりの逸材だと思う。　思うんだけれど、なんと言うか、それ以外のことに問題がありすぎなのよね…。

ミク「行くったら行くのぉ～。　お姉のケチ。　オタンコナス」

…意味わかんないって。

マヒロ「とにかく、あんたはお留守番！　ハウス！」

あたしはミクを犬扱いすると、霧雨艦隊に通信を送った。　せっかくこの場にいるんだし、海賊の根城を相手にする前に、実力を見せてもらう絶好の機会だよね？

帝国軍下士官「了解しました。　大尉と中尉が先行すると言っていますが、許可しても構いませんか？」

マヒロ「そうして。　ここはミズサワの領地なんだし、援軍に先鋒を任せるような非礼、あたしのやり方じゃないわ」

その下士官は一旦敬礼し、機器に取りついた。　数が少なければ、ケイさんとミサトだけでも海賊風情は相手にもならない。

ただ、今回はコードレッドだし、先を越されている以上、民間船団への被害を抑えた戦い方が求められる。

そういう意味でも、霧雨家のやり口が見えるかも知れないわね…。

【6】

霧雨兵「大佐！　あちらの艦隊から、出撃要請が来ています。　どうされますか？」

通信を兵が読み上げる。

霧雨「もちろん僕が行く。　マリアベルは艦隊指揮を頼む」

マリアベル「分かりました。　では、リバルを伴うということですね？」

即座に反応が帰ってくる。　口に出したことはないけれど、僕はマリアベルのこういうところが気に入っていた。

霧雨「…止めるかと思ったけれど?」

マリアベル「たかだか海賊相手に、総大将も何もないよ、ってあたりじゃないですか?」

マリアベルは、僕の気持ちを先読みしたようなことを言った。

霧雨「そうだね。　それに総大将というなら、叔父がそうだろう?」

霧雨家は、僕の父が亡くなった時、まだ幼かった僕に代わって、叔父が継いでいた。　臆病で、好きにはなれない人柄だったが、当主は当主だった。

マリアベル「早く霧雨家を本来の姿に戻すためにも、武勲はあって邪魔にはなりません。　ですが、お気をつけて」

霧雨を早く継ぐため、活躍しろというのと、自ら出撃するのはやはり心配だという言葉。　これがよくも悪くも、今の僕の立場を表していた。

霧雨「行ってくる。　コーディネイターたるもの、こんな程度では死なないさ」

マリアベル「だからこそ、油断しない事です」

僕もマリアベルも、生まれた時に遺伝子に何らかの操作を受けたらしい。　だけど、物心ついた時には父は既に亡く、コーディネイトに反対したという母も、何も話してくれようとはしなかった。

結局、コーディネイトそのものが帝国であまりなされなくなり、母も死んだ今となっては、自分が何者であるかを知る人間はほとんどいない。

ただその繋がりで、マリアベルという有能な臣下を得たという事実があるだけだ。

霧雨「マヒロの艦隊のＭＳが先行しているようだね。　まあ、お手並み拝見といこうか」

リバル「昔のように、高性能なＭＳを乗り回している訳ではありません。　慎重に構えてください」

出撃した僕に、リバルが声をかけてきた。

慎重なのはリバルの癖だが、言っていることはその通りだった。
帝国軍が各地を破壊し尽くした結果、ＭＳを始めとする軍事技術は、１０年は逆戻りしていた。

技術者が戦乱の中で死んでしまったり、工場が破壊されたりして、高度なＭＳは作りたくても作れないのだ。　逆に、技術は維持していても、資源が足りなくて作れない場合もある。

理由はそれぞれだけど、侯爵家の次代の主である僕が、旧式量産機のゲイツに乗っているのがすべてを表していた。

霧雨「そういうマヒロの部下は、ザク３が２機に、ハイザックと後期ザクの混成部隊か。　ザク３はともかく、皇族でもお家事情は変わらないんだな」

ザク３は、帝国が荒れる前に開発した機体だから、今の宇宙なら、かなりの高性能ＭＳと言えるかも知れない。　ハイザックと後期ザクは、まあ、いないよりマシと言ったところだけれど。

リバル「みんなザクなんて、ザクが好きなんでしょうか？」

リバルはちょっと変な事を言っていた。　言われてみれば、みんなザク系統の機体なんだけれど。

霧雨「リバル。　味方の趣味より敵だ。　海賊のＭＳは何なんだい？」

リバル「はい。　ゲルググが主体だと連絡がありました。　なお、民間人に被害を出さないために、しばらく攻撃は差し控えてほしいそうです」

ゲルググなら、ゲイツでも互角以上に戦える。　機体の性能が互角なら、腕がいい方が勝つからね。

それよりも気になったのは、民の被害を気にしているところだ。甘いような気もするけれど、やはり援軍の僕が意見する事でもないので放っておく。

霧雨「…さあ、化けの皮を剥いだら何が出るか…。　ちょっと楽しみだな」

僕は１人呟いた…。

【7】

ミサト「大尉。　後続機の展開を確認しました。　いつでも仕掛けられます」

私はそう告げた。

普段、主君を『お嬢』って呼んだり、まるで家族のようなミズサワの家だけれど、それと戦場は違う。　戦場においては大尉と中尉で、上官の命は絶対だと教えられている。

ケイ「あの2機のゲルググの動きが気になる。　もう少し待て」

ミサト「…そうですね。　さっきからまったく動きません。　もしかしたら、艦に乗り移っているのかも…」

民間船に『抵抗するな』と命じているのは、お嬢なんだけれど、何もそれは諦めてのことではなかった。　ろくに抵抗しなければ、賊は気を良くして、艦ごと奪おうとする。

賊とて、積み荷を奪いに来ているのだから、爆発させても意味はない。　むしろ運ぶためには、艦ごとの方が…

なんて計算が働くのよね。

霧雨（ここで待つなんて、気長なのか、本気で民を救いたがっているのか…）

周囲がどう思うかに関係なく、私とユヅキ大尉は２０分待ち続けた。
そして、ようやく２機のゲルググが、民間船を離れた。

ケイ「艦に銃を突きつけているな。　脅して連れ去る気か。　よし、中尉。　２機とも消せ。　爆発させるなよ？」

ミサト「仲間が乗り移ってたら、銃は突きつけませんからね？　…狙撃カウント、いきます！」

私は、すぐさまビームスナイパーライフルを構えた。

本来のザク３の装備ではないけれど、私用にとお嬢が手配してくれたもので、カスタマイズした機体の性能も手伝って、初弾を外したことは数えるほどしかなかった。

ミサト「…５、４、３、２、１…　…」

ゲルググの１機が突如スパークする。　続いて２機目。

コックピットだけを狙い撃ちにしたから、機体は爆発しないで、宙

を漂うだけだ。

ケイ「全軍突撃だ！　民間船を襲う時間を与えるな！！」

【8】

狙撃が成功したのを見るや、マヒロの部隊は海賊たちの真ん中に突っ込んでいた。　すぐさま3、4機が捉えられ、直後に爆散する。

霧雨「待つと思ったら、やる時はやるね。　正直見直した」

ケイ「見直されるほど、以前に悪い印象を与えた覚えはないが？」

そんな会話をしながらも、僕は1機をライフルで、もう1機をサーベルで倒す。　所詮海賊風情だからか、腕は知れていた。

霧雨「リバル！　せっかくの獲物だ。　叔父への手土産といこう」

僕はリバルにそう命じたが、反応は違うところから返ってきた。

ケイ「このご時世、たしかにＭＳは貴重だからな。　主人に成り代わり、私からの贈り物だ。　受け取ってくれ」

直後、切り結んでいたゲルググが、突如、僕の機体に抱きついて来た。

どうやら僕が切り結んでいる隙に、背後から蹴り飛ばしたらしい。
背中のシールドが脱落して、さらに機体があらぬ方を向いている。

霧雨「…パイロットは気を失ったようだね。　味な贈り物だが、貰える物は貰っておくよ」

そんな贈り物をするくらいのワンサイドゲームだった。　撃墜されるまでもなく一目散に逃げ出す賊もいる始末で、もちろん民間船に被害など出していない。

霧雨「…見事に民を守ったようだね？　君の主人の戦い方、よく見させてもらったよ」

ミサト「形はどうあれ、民を守るためにＭＳを駆るのが、本来の帝国軍人の姿です。　それをご理解いただけたなら、今後とも良い関係をお願いできると思うのですが」

こうして、僕とマヒロの初戦は、華やかに飾られたものになった…。

第3章　運命はタロットと共に（前書き）

（難しい世界設定→飛ばし読みＯＫ）

★帝国軍傭兵部隊★

本来、帝国には存在しなかった制度である。

だが、帝国世界統一戦争の折、大武帝ラインザックは、能力のある者は身分に関わらず重用した。　それは軍にも及んでおり、従来貴族の子弟が独占していた士官にも、外部の有能な人間が多数登用された。

この傭兵部隊はその名残で、能力に秀でた者を手厚く遇するとの名目で、帝国軍の一翼を担う時もある。

ただし、大武帝亡き後は多分に形骸化しており、ただの使い捨て部隊と扱われることも少なくない…。

第3章　運命はタロットと共に

生まれながらにして、戦いを定められた人間。　そう彼は自認していた。

ある時はレジスタンスの助っ人。　ある時は帝国軍の用心棒。

その戦いに主義道義はなく、ただ金を得るためにだけ、戦いに身を投じていると言われていた。

そして今日は…

ジャンク屋「へへっ、旦那。　どいつもこいつも、指折りの名機ばかりですぜ」

ボロボロの服を着たジャンク屋が卑しく笑う。　目の前に並ぶのは、何機かのＭＳだ。

？？？「誰が指折りの名機ですか。　こんな旧式機を集めておいて！」

傭兵の１人はそう声を荒げるが…。

ジャンク屋「あんたには勧めてねぇし。　俺はゴトーの旦那に持って来たんだ。　だいたい、世界がこんなになっちまってる時に、昔

みたいな豪勢なＭＳは造れねぇ。　それよか、シンプルで実績のあるＭＳのがいいんだよ！」

整備もしやすいし、パーツも手に入りやすい。　ジャンク屋は続けて力説していた。

確かに、世界の工業地帯が軒並み荒れ果てた今、その言葉は的を得ていた。

造れる人間がいる所には工場がなく、工場がある所には材料がなく、材料がある所には造れる人間がいないという有り様。　高度なＭＳになればなるほど、開発は終わっていても造れず、仮に製造できても、日頃のメンテナンスが厄介な時代なのだ。

ゴトー「メリル。　タロットで占ってみろ」

メリル「…はい…」

メリルと呼ばれた少女は、ボソっと呟くように言うと、カードの束をシャッフルし始める。

ゴトーと呼ばれていた男は、ジャンク屋の並べたＭＳの１機に目配せしてから、２枚のカードを引いた。

ゴトー「運命の輪と魔術師か…」

メリル「…2つとも正位置です」

運命の輪のカードの正位置の意味は、転換点、幸運の到来、定められた運命。

魔術師のカードの正位置の意味は、物事の始まり、起源、創造。

???「こいつはイイ！　いま隊長が見たＭＳ…。　Ｂ３グフは、隊長が乗る運命だったんだよ！」

占いの意味を知っているのか、傭兵の１人らしい男が騒ぎ立てた。

???「待ちなさい、ジルド。　これは隊長が決める事よ。　勝手に決めないでちょうだい。

隊長、どうします？」

まるで違う静かな声で、ゴトーに語りかけるようにいう女性。　彼女も傭兵なのだろうか？

ゴトー「面白い。　乗ってやろうじゃないか。　メリルの占いは当たるからな？　ミア？」

そう言った後、ゴトーがその女性の名前を呼ぶと、ミアと呼ばれた

女性は、黙ってジャンク屋に代金を手渡した。

ジャンク屋「毎度っ！　これからもご贔屓にっ！」

また下品な笑いを浮かべ、ジャンク屋は上機嫌のようだった。

ジャンク屋「そのグフ、見た目は昔のまんまだが、足回りと出力、アンカーの電圧をいじってある特注品なんで！

どっかの下手くそじゃなくって、旦那が乗るなら、半端な新型よりも強いのは請け合いっ！！」

そう言ったジャンク屋は、最初に文句を言った傭兵を横目で見る。

？？？「…よっぽど埋められたいみたいですね？」

見られた傭兵は、拳を握りしめジャンク屋に詰め寄るが…。

ミア「ネロっ！　みっともないからやめなさい！」

そう言われて、渋々引き下がる。　このミアという女性が、隊のまとめ役なのだろう。

ジャンク屋「…そう言えば旦那？　こんな噂を知ってやすかい？
このコロニー…　まあ、バンチは違うが、そこになんでも『ガンダム』とかいう幻のＭＳが眠ってるって話だ」

ジャンク屋の声が、低く小さいものに変わった。

ジャンク屋「…だから…」

ネロ「だから何ですか？　お前の事だから、隊長に探りを入れさせて、後からＭＳのパーツでも漁ろうって魂胆でしょうが！」

仲が悪いのか、ネロはまたジャンク屋に詰め寄る。

だが…。

ゴトー「面白い事は続くな。　いいだろう、口車に乗ってやる」

傭兵達「隊長？！」

周囲の人間が一斉にゴトーを見る。

ゴトー「もしその噂が本当なら…。　仮に出任せだとしても、ガンダムの名前を出されてはな」

ガンダム。

このＭＳの名前の由来は、６０年前の帝国統一戦争にまで遡る。

当時、破竹の進撃を続ける帝国であったが、その帝国にオーストラリアに追い詰められた共和国は、同じく独立を侵された宇宙連合と協力。　帝国の主力兵器であったＭＳのザクとジン、そればかりか今後開発されるであろう新型ＭＳをも凌駕する、超高性能なＭＳの開発に着手する。

そうして開発されたＭＳは、帝国軍上陸部隊がオーストラリア沿岸に迫る間際になって、ようやく数機がロールアウト。　ろくな試験もなされないままの出撃であったにも関わらず、帝国のザクとジンを合わせて２００以上の撃墜スコアを記録したと言われる。

ジルド「つまり何か？　その大昔に開発されたＭＳが、いつの間にかコロニーに持ち込まれてるかもってか？」

周囲がまた考えるように唸る。

本当に６０年前の物だとしたら、兵器としは役に立たないかも知れない。　しかし、骨董品としてなら高く売れる可能性はある。　何

しろ伝説のガンダムなのだ。

ゴトー「だから確かめに行く。　面白くはないか？」

傭兵達の目が光った…。

第４章　奇跡の少年（前書き）

（難しい世界設定→飛ばし読みＯＫ）

宇宙歴１５０年の大乱以降のコロニーは、一部を帝国が押さえていたもの、ほとんどが独立状態になった。

帝国が直接支配しようにも、帝国軍が出撃すると、どこからともなく反帝国勢力が現れては帝国軍を攻撃するからで、それぐらい帝国はスペースノイド達から怨みを買っていた。

先に登場したミズサワ、霧雨両家のように、帝国に忠誠を誓う貴族の中には、地元での人脈を生かして、なんとか親帝国のままコロニーをまとめ上げることに成功した者もいた。

だが大半の者は、元来は帝国に属していても、先に延べた反帝国の気運を追い風にして独立するか、反帝国勢力に攻撃され、領地から叩き出されたようである。

そしてこのコロニー、サフランもまた後述のコロニーの１つで、街を自警団が辛うじて守るだけの、主不在、無法地帯のコロニーであった…。

第４章　奇跡の少年

サフラン１０。

旧連合で言うところの、サイド５の１０バンチを指すこのコロニーは、反帝国勢力を怖れた領主が逃亡したため、治安が崩壊し、いまではＭＳに乗った盗賊の巣窟と化していた。

住民が皆、盗賊に怯えるなかで、１３歳の少年

★ゲット・アルスター★

もまた、そんな街で暮らしていた。

…もちろん平和にではなく、盗賊に追われながら。

ゲット「うおおおおぉぉぉぉぉ～～」

盗賊「待ちやがれっ！　有り金、食糧、みんな寄越しなっ！！」

ゲットはグライダーボートに乗って逃げるが、それを追いかける盗賊が乗っているのはディン。

生身の人間をＭＳで追いかけ回すなど、傍目には正気の沙汰ではないが、そんな無法が罷り通るのが、このサフラン１０というコロニーの現状だった。

盗賊「殺されたくなかったら止まりやがれ！　この大盗賊コロンバ様から、逃げられると思ってんじゃねぇぞ！！」

グライダーボートは、スケボーに乗る感覚で操れる小さなモノだが、ゲットが改造したこれは、並のバイクや車では追いつけないほどのスピードが出る。

…だが、今回の相手はＭＳ、しかも飛行型のディンだった。

ゲット「やっべ。　エンジンが…」

いくら地形と小回りを味方にしてきたとは言え、ＭＳ相手に無茶なスピードを出し続けたせいだろう。　グライダーボートのエンジンが煙を吹き始めた。

ゲット「…あの建物まで行ければ、ＭＳじゃ入れないだろ」

コロンバ「もう許さねぇ！　死ねや、コラ！！」

ついにキレたのか、ゲットを実弾で攻撃した盗賊コロンバだったが、ゲットは辛うじて建物に飛び込んでかわした。

コロンバ「ちぃ…　遺跡に逃げ込みやがったか…」

コロンバはそう言ったが、実際、遺跡と言うほど、建物が古いのかどうかはわからなかった。

というのも、コロニーの管理がろくになされていないサフラン１０では、天気も昼夜も制御がろくにされておらず、辺りは砂漠化し、１日中昼間の日があったかと思えば、夜が正午まで明けない日もあるなど、もはや地球の常識が通じる世界ではなくなっていたのだ。

ゲット「しまったなぁ…。　ここから街まで歩いてじゃ…」

ゲットの表情が曇るのも仕方ない、といったところだろう。

ゲットの住む街からこの遺跡までは、グライダーボートを飛ばせば小1時間だが、歩いてとなると2、3日はかかる。　しかも、うかつに表に出たら、さっきのMSがまだいるかも知れないのだ。

ゲット「…仕方ない。　ここになんか使えるものがないか、探してみるか…」

だが、幸いにもゲットの逃げ込んだ遺跡は、外は砂だらけになっていたが、中はちゃんとした建物だった。

おそらくは、何かの工場跡、か？

ゲット「うん。　工具の類いはたくさんありそうだし、グライダーボートが直せるかも知れないぞ」

ゲットはそう呟きながら、建物の奥まで進んで行く。

ゲット「…すっげー　こんな大きな機械があるなんて、直すどころか、グライダーボートを作れるんじゃないか？　…それに、プチモビにエレカ、ＭＳまであるじゃん…

…モビルスーツ？！」

ゲットは自分の言葉を疑った。

しかし、そこにあったのは間違いなく人型の…　ＭＳだった。

ゲット「…うわっ！　マジかよ。　もしかして動いてくれね～かな？」

ゲットは、まだ世界がこんなになる前になら、ＭＳに乗ったことがあった。

もちろん大人と一緒で、だいたい操縦悍に手を添えただけなのだが、それでもその時の印象があまりに大きくて、いまの機械好きのゲッ

トがあると言ってもいい。

そんな興味が高じてか、ＭＳのマニュアルを手に入れては、読み漁った時期もある。

ゲット「…たしかコックピットはここから…　なになに…　…封印　…試作１号機…　ガンダム開発計画???

うそっ、これガンダムなのか?!」

ゲットは目を輝かせた。

それくらいガンダムの名前は、同好の仲間達にとって有名なものだったのだ。

だが、そんな夢見心地のゲットを、轟音と地響きが現実に引き戻した。

コロンバ「隠れてももう無駄だぞ!」

???「クソガキ!　出て来ね～なら、遺跡ごとテメーを潰すっ!!」

意地になったのか、さっきの盗賊が仲間を引き連れて戻って来たようだった。

【2】

コロンバ「…出てきませんね…　ガルタックのアニキ」

コロンバが連れてきた盗賊仲間は、ガルタックという名前らしい。

ガルタック「かまわねぇ。　俺たちをコケにしたヤツなんざ、遺跡ごと吹きとばしてやんぜ！」

さんざんスピーカーで罵ったにも関わらず、一向に出て来ないゲットに業を煮やして、２人組の盗賊は遺跡に銃口を向けた。

１つはディンの重突撃銃で、もう１つ…　ガルタックは、ザウートのキャノン砲だ。

ゲット「…マジに撃つ気かよ?!　おいっ！　頼むから動いてくれよっ!!」

ゲットが、ようやく入り込んだコックピットのスイッチをおぼろ気な知識でいじると、かすかに『ゴゥン』と音がして、ＭＳはその上半身を起こしたではないか。

ゲット「やった！　次はこのまま…　このまま…　止まらね～!!」

だが、そのＭＳ試作１号機ガンダム…　…ゲットは知る由もなかったが、通称ゼフィランサスは…　起き上がるだけでは止まらず、その場で立ち上がってしまう。

元々、ＭＳを立たせて作業をする施設ではなかったのだろう。　天井の高さはＭＳの背丈より低く、当然ゼフィランサスは天井を突き破ってしまう。

コロンバ「なっ、なんだ?!」

ガルタック「も、モビルスーツだとっ！！」

突然、遺跡の天井を突き破って現れたＭＳに、盗賊の２人は驚愕する。

…だが、よくよく見るとＭＳの様子がおかしい。

ゼフィランサスは立ち上がってから、今度はピクリとも動かず、その場に立ち尽くしていた。

ゲット「なんで言うことを聞かないんだっ！　突っ立ってないで、こう攻撃とかできないのかよ！　いや、この際走るだけでいいからっ！」

ゲットがコックピットで喚いてみても、ゼフィランサスが動くはずもない。　そうするうちに、盗賊たちもいまの状況に気がついた。

コロンバ「…驚かしやがって。　さては、乗ってるのはさっきのガキだな？」

ガルタック「…そうか。　ようやく乗ったはいいが、動かし方もわからねぇとはな」

盗賊たちの笑い声が辺りに響いた…。

ガルタック「残念だったな？　せっかくＭＳに乗れたのによっ！」

いまだ動かないゼフィランサスに、ザウートが砲を向け直した。

が…

コロンバ「アニキ！　ガキは後から八つ裂きにするとして、このＭＳ、頭への土産にしましょうぜ？」

動けないゲットを侮ってか、ゼフィランサスの捕獲を提案するコロンバ。

コロンバ「…実は昔、このＭＳに似たヤツで、ガンダムってめっちゃくちゃ強ええＭＳがあったらしいですぜ？　こいつがガンダムかはわからねぇが、持って帰る価値はあるんじゃないんですかい？」

げっへっへ、と卑しい笑い声が響く。

ガルタック「…そうだな。　じゃ…」

コロンバ「がってん承知…」

ゲット「何でだっ？！　あ、この光ってるボタンはどうだっ！」

そうして、ディンがゼフィランサスの腕を捕ろうとした瞬間、いままでピクリともしなかったゼフィランサスが、いきなりディンを抱え上げると、投げ飛ばした。　飛行型ＭＳとして軽く設計されたディンは、その軽さが災いして遺跡の敷地の外までも投げ飛ばされてしまう。

ガルタック「…てめ…　ガキっ！　調子に乗るんじゃねぇぞっ！！」

ゲット「動いた？　なら、こっちのボタンと、レバーならっ！」

コロンバが投げ飛ばれたのを見て、怒りが頂点に達したガルタックは、すべての火器を向けた…

…のだが。

ガルタック「い、いねぇ？　どこ行った?!」

ゲット「うぉおぉぉぉぉ〜〜〜!!」

ゲットのゼフィランサスは、ザウートの背丈のさらに上を舞っていた。　しかも、手にはいつの間にかビームサーベルが握られている。

ガルタック「うげっ！！」

ゲット「でやぁぁぁぁ～～～～～～！！！」

ゲットの気合いが乗り移ったかのように、ゼフィランサスはそのままザウートを真っ二つにする。

コロンバ「あ、アニキっ！　クソガキっ、覚えてやがれ！！」

爆発するザウートを見るや、コロンバは捨て台詞を残して逃げ去る。

ゲット「や、やった…」

ゲットは初めての勝利の味を噛み締めた…。

第5章　不死鳥と呼ばれた男たち（前書き）

（難しい世界設定→飛ばし読みＯＫ）

ＭＳのパイロットに、通り名をつける風習は意外に古い。

元来帝国では、貴族が一族郎党を率いて戦った名残が強く、近代に入ってからも、第１６師団といった数字の名称よりも、ノースイベリア軍や、ラントニック親衛隊といった、地名や人名に由来する通称を好んだ。

その傾向は、ミノフスキー粒子の散布により、戦闘が近代よりも少数同士で行われやすくなってからより強くなり、ついにはＭＳそのもの、パイロット本人に通り名がつけられる風習を生んだ。

実際、エースパイロットの乗るＭＳ１機の活躍で、戦局が覆ることはままあって、風習はついに誉まれにまで昇華される。

そんな世界では、帝国以外の勢力でも、自勢力のパイロットが帝国のエースに劣らないとアピールするため、同じように通り名がつけられることもあった。

☆不死鳥の騎士達（フェッニックスナイツ）☆

この名も、反帝国のエース2人をして、誰からともなく、讃えられるようにしてつけられた名前である…。

第5章　不死鳥と呼ばれた男たち

？？？「他愛もないっすね」

？？？「俺たちを甘く見るから、こうなるんだよ」

帝国兵「ばっ、馬鹿な！　ジムとザクごときに…」

確かにその帝国兵のＭＳは、帝国軍でも新鋭機に属するガルスＪであり、ジムやザクとは性能が隔絶している…

はずだった。

？？？「学習能力ないんじゃないの？　まあ、これから死ぬ奴に学習勧めても無駄かな？」

？？？「おい、レアルタ。　フェッニックスナイツの誇りを汚すんじゃない」

一方の男をレアルタと呼んだパイロットの横にいる、もう１人が駆るジム…

いや、ジムストライカーがビームスピアを振りかぶると、派手に２回、ガルスＪを叩き斬った。

帝国兵「ひいいぃ…　　あ、アレ？！」

だが、ガルスＪは爆発せず、腕だけがスパークしながら落下する。

レアルタ「ヴァイスさんに感謝した方がいいよ？　ヴァイスさん、戦意を失った奴は絶対に殺さないんだ」

そう言うと、そのジムとザク…　ザクもよく見れば、Ｆ２型なのだが…　は、ガルスＪに背を向けて歩き出す。

しかし。

帝国兵「な、情けをかけたつもりかよっ！　なめやがって！！」

そんな叫びを上げながら、ガルスＪは残された両肩のミサイルポッドから、２機の背中に向かってミサイルを撃ち込む。

ヴァイス「わざわざ拾った命を…」

レアルタ「無駄に捨てるなんて勿体ない」

しかし、ミサイルが着弾する時には、２機はすでにその場にいなかった。

２機がいたのは…

ガルスＪの背後。

ヴァイス「いくら俺でも、２回目はないから」

レアルタ「さよなら～」

ビームスピアとヒートホークが振り下ろされ、今度こそガルスＪは、跡形もなく吹き飛んだ。

レアルタ「ヴァイスさん。　相変わらず、お見事な腕で」

ヴァイス「レアルタも最近、腕上がってきてるぞ？」

余裕ぶった会話がなされている彼らの足元には、帝国軍のＭＳの残

骸が無数に転がっていた…。

【2】

そんな感じで、各地を渡り歩いてきた2人は、今、サフラン１０というコロニーにいた。

ここに来た理由は特にない。

ただ、帝国軍狩りを続ける2人は、帝国と繋がりのあるコロニーには滞在できない。　そのため、治安の荒れた無法コロニーにいる事が多かった。

帝国を敵にしているのだから、反帝国の人間と一緒にいてもいいはずなのだが、2人はレジスタンスと歩調を合わせる気はないらしく、度重なる勧誘から逃げるようにしていた。

レアルタ「ヴァイスさん。　このサフランってコロニー、めっちゃ無法な割には、ＭＳのパーツとか豊富ですよ？　チューンもしやすいから、俺、気に入りました」

街を1周してくるや、レアルタはそんな事を言った。　得てして荒れ果てたコロニーでは、ＭＳの整備に事欠くばかりか、食糧さえも

乏しい場合が多い。

ヴァイス「詳しい事情は知らないが、元々かなりの工業コロニーらしいからな？　新鋭ＭＳのパーツがたくさん残ってるのも、たぶんそのせいだろう」

ちなみに、彼らのＭＳ…　ジムストライカーとザクＦ２は、一見しただけでは旧式機にしか見えないが、パーツは多くの機体を繋ぎ合わせたカスタム機だった。

ジムストライカーでありながら、ジムカスタムのバックパックを背負っていたり、ザクＦ２なのに、ザクＦＺの頭部をしているのはそのためだ。

おかげで見た目から想像もつかない高性能機なのだが、あまりにも機体バランスが悪く、２人でなければ乗りこなせない機体になってしまっている。

レアルタ「ただ、賊がデカい顔してるのがどうもね…。　いっぺんシメたらダメっすかね？」

レアルタは、笑いながらそんな事を言う。

ヴァイス「…だから、フェッニックスナイツの…」

レアルタ「分かってますよ。　誇りを汚すな、でしょ？　冗談ですって。　いくら無法コロニーでも、誰彼ともなくケンカ吹っ掛けたりはしませんよ。

まあ、変なコトしてくるようなら、倍返しにしますけど」

そんないつもの会話に興じる2人に、周囲の騒がしさが伝わってきた。

レアルタ「どうやら奴ら、どっかに出かける気らしいですね？　それもかなりの数だ。　隣町でも攻めるつもりかな？」

動き出したＭＳの数は、１０機を越えていた。　賊がやんちゃをしに行く規模ではなく、街を攻めるというレアルタの予想は当たっているかも知れない。

レアルタ「どうします？　ヴァイスさん。　賊同士の縄張り争いなら知った事じゃないが、関係ない街襲うつもりなら、何か腹立つんですよね。　ここの野盗共、野盗のクセに態度デカいし」

フェッニックスナイツは、反帝国以外に主義はない方だったが、それでも武器も持たない民間人を襲った事はない。

いや、むしろ襲おうとしている連中を返り討ちにする側で、礼として貰った食糧やパーツを有効活用したりもしていた。

レアルタ「決めました。　俺、奴らの後をつけますね？　で、もし無茶やらかすようなら、正義の味方してきます」

『ハァ…』

そんなため息が聞こえて、ヴァイスが動いた。

ヴァイス「俺も行く。　何か心配になってきた」

レアルタ「あ、いま酷い事言いませんでした？　こんなジンやディンの１０機くらいじゃ、やられやしないですって」

ヴァイス「…いや、なんて言うか…。　まあ、たまには正義の味方もいいと思っただけだ」

ありありと

『また始まった。　仕方ないな』

と、ヴァイスの顔に書いてあったが、とにかくも2人は、愛機に乗

り込み出撃する事にしたようだ。

ヴァイス「気候変動のせいで、地表が砂漠化している。　足を取られないように気をつけろ」

レアルタ「了解です」

レアルタの声も、比較的真剣なものに変わっていた…。

第6章　怪盗ヤタガラス（前書き）

（難しい世界設定→飛ばし読みＯＫ）

帝国が荒廃するにつれ、治安は軒並み悪化する所が多かった。

ただ、賊の言いなりかというとそうでもなく、ＭＳやプチモビで武装して自分達の街を守ったり、賊と何らかの取引をして、自らの街を襲わないようにさせるなど、さまざまな取り組みがなされていたようである。

それは、金持ちなるほど規模も大きくなりがちで、まるで私兵集団を組織するものまでいたようだ。

だが、これはもちろん何らかの統制が行き届かない所の話で、帝国内でも治安のしっかりした地域は存在したし、帝国の宿敵である共和国でも同じだった。

そして、次第に人々は安全な日々を求めて移住するようになり、荒れた地域はさらに荒れる反面、一部の地域が繁栄する原因になったと思われる…。

第6章　怪盗ヤタガラス

深夜。

とある町の外れで、修理屋の扉をいじる人影があった…。

???「確か、今日が修理が終わる日だったな…。　ちゃんと眠りこけているし、今のうち…」

そう呟くその人影だったが、それを見咎めた者がいた。

自警団員「そこのお前っ！　そこで何をしているっ！！」

手にしたライトが照らされ、人影が露になる。　若い男だろうか？
背は高くも低くもないが、身体は引き締まっている。

自警団員「怪しい奴だな？　大人しくするんだ！」

???「あ、怪しいだなんて酷いですね～。

ただここを通りかかったら、ドアが開いてたんで、覗いて見ただけですよ。　ほら、最近物騒だし」

そう男が指差した先には、風に吹かれてバタバタ音をたてる扉が。

自警団員「なるほど、それは無用心だ…。　だが、それとこれとは…

ぐっ！！」

???「話が違う、って言いたかったんだろうけど、あいにく一緒だったりして」

自警団員が地面に崩れ落ちた。　男が後頭部を一撃し、気絶させたのだ。

???「意外といい出来じゃないか。　これなら見た目には分からないな」

意味ありげにその男が見上げたのは、ＭＳの旧ザクだった。

いくら荒れ果てた世の中でも、とっくに一線を引いた機体で、警察の治安係も乗らない。　それこそ、貧乏自警団ぐらいしか使わないシロモノだ。

？？？「悪いね。　お宝は頂いて行くよ。　睡眠薬が切れると厄介だし、手早めにっと」

言葉からすると、周りの修理工に一服盛ったらしい。　何はともあれ、その男はその旧ザクに乗り込むと、深夜の街に消えて行った。

そして修理屋のドアには、三本爪のカラスが描かれたカードが刺さっていたという…。

【2】

ウコン・ミヤイ。

かつて、そういう名前の外交官がいた。

旧宇宙連合の名前でサイド2、帝国領になってからは、ネグレストに名前を変えたが…。

そこの外交官のトップであった彼は、能力はもとより、持ち前の穏和な気質と優しさで、周囲の人望は厚かった。

だがそんな彼が、宇宙暦１５０年初頭、息子と共に地球へ降り立っていた時、悲劇は起きた。

ネグレストは、歴代の内閣が帝国寄りの姿勢を貫いており、帝国貴族を形ばかりの領主に戴いてはいたが、大半の部分で自治を許されるなど、優遇されているコロニーの１つであった。

しかしその時、乱れつつある帝国の足元を見た時のネグレスト自治軍は、ウコンの留守を狙って蜂起、帝国領主を殺害すると、一方的に独立宣言を発表したのである。

…だが、彼らは帝国を甘く見過ぎていた。

ネグレスト裏切りに、ただでさえ神経を尖らせていた帝国軍は過剰に反応、何と戦略核を用いて、ネグレスト全域を灰にしてしまったのである。

そんな故郷を、ウコンと息子のサコンは、帝国首都パンドラールの牢獄から、座して見るしか術はなかったのであった…。

結局、ウコンは牢内で悲憤のあまり倒れ、帰らぬ人となる。

息子のサコンは、帝国貴族と血縁にあった事もあり釈放されたが、すぐに行方知れずとなった…。

【3】

それから数年したヨーロッパの各地では、謎の怪盗が現れ、世を騒がせていた。

時の欧州、ことに西欧は、帝国の先代皇帝の弟にあたる、帝弟ドラグノック卿の統治下にあり、乱れる帝国の中にあって、屈指の安定した治世を保っていたからである。

そして、そんなヨーロッパの某所に、姿を消したはずの旧ザクが１機。

???「賄賂まみれの役人から、見事ブツを手に入れたようだな?」

???「ああ、楽勝だったな。　予定のダミーは仕掛けて来たから、今頃は、血眼になって港の探索じゃないか?」

２人が顔を見合せ笑い合う。

？？？「…しかしサコン、これからどうする？」

サコン「まあ、ＭＳに金塊を隠すなんて、バカもそういないだろうしな。

しばらくしたら、アジトを移そう。　ついでにＭＳも手に入ったことだし、一旗上げるのもいいか」

そう言ってから、もう一度顔を見合せる。

？？？「一旗上げるなんて言うと、レジスタンス時代を思い出すぜ。お前と最初に会ったのは…」

サコン「…カトラス。　それだけは言わない約束だったよな？　次言えば、撃つぞ？」

サコンの表情からは、いつの間にか笑みが消え、手には拳銃が握られていた。

カトラス「…悪かったよ。　ここでお前と撃ち合っても、何にもならないしな。　それよりアジトを移すって、あてがあるのか？」

向けられた銃に臆する様子もなく、カトラスは言葉を繋いだ。

サコン「まあ、な。　今回は思わぬ大金が手に入ったが、西欧は帝国の中では、かなりまともな方だ。　迂闊に動きすぎると後が怖い。どちらにしても、任せておいてくれ」

サコンはそう言いながらグラスにワインを注ぎ、カトラスもまたそれに応じた…。

第7章　血塗られた日々（前書き）

（難しい世界設定→飛ばし読みＯＫ）

悪名高い帝国軍だが、そのすべてが虐殺を好んだ殺人鬼の集まりではない。

むしろ、目の前の民を守ろうと銃を撃ち、背後の家族を案じてＭＳに乗る者が大多数であったと言ってよい。

だが、撃った敵にも家族がおり、家族を撃たれた者はさらに激昂し、手段を選ばなくなっていく。

そうした血と怨念の連鎖が、すべての悲劇の温床となっていったのだ。

ＮＢＣ兵器の使用を咎める声は強いが、帝国に反旗を翻したとあるコロニーで、ただ帝国に属するだけの領主と、その家族や使用人、およそ数百名が虐殺された事実は意外と知られていない…。

第7章　血塗られた日々

地球のとある場所。

今日もそこでは、帝国軍と反帝国レジスタンスが、血で血を洗う戦いを続けていた。

？？？「次から次へと…。　テロリストのくせにっ！」

帝国士官の怒声が響き、乗った機体…　Ｚ－Ｐｕｌｓが機体を翻す。

？？？「ラリー。　そうぼやくな。　お陰で俺達は食いっぱぐれないで済むんだ」

ラリー「アルヴィン。　生憎俺は、お前みたくシンプルにできてないんだ」

無線が飛び交い、それ以上の銃弾が飛ぶ。　だが、通常の航空機に比べて重装甲な可変ＭＳは、その程度では墜ちない。

まあ重装甲と言っても、非可変のＭＳに比べれば、ずいぶんな紙キレなのだが。

？？？「ラリー、アルヴィン。　お喋りは終わりよ。　３時方向に敵…

…珍しいわ。　奴らに可変ＭＳがいるなんて」

確かに、迫って来るのはアッシマー。　正確に言えば可変ＭＡだが、とにかくレジスタンスには珍しい航空部隊だ。

???「…全部で…　６つ。　ちょうど１人２つで割り切れるわ。いいですよね、隊長？」

その女性士官は、隣の機体をちらっと見る。

???「隊長機より、各機。　レナの言った通りでいく。　支援は私がする。　各機、個別に敵を叩け。

だが死ぬのは許さん。　ヤバくなったら、躊躇わず脱出しろ！　機体は所詮消耗品だ！」

３人「了解っ！」

返事と共に、３機のＺ－Ｐｕｌｓは前へ出る…。

【2】

そう言えば、言い遅れた。　私は

『アヴィサル・アビス・ディジョン』

帝国軍第8航空隊、通称ディジョン隊を率いる隊長で、階級は大尉だ。

しかしこの『隊のニックネームが隊長の名前そのもの』って風習も、相変わらずだな…。　副官をしていた頃は、分かりやすくて気に入っていたが、こうして隊長になってみると、どうにも…な。

まあ、名前をつけられるくらいの精鋭部隊を任された事を、今は喜んでおくか。

そう私が考えているそばから、2機目のアッシマーが煙を引いて墜ちていくのが見えた。

私は必要のないであろう支援をすべく、自らの機体を加速させる…。

【3】

そんな激戦が展開されている後方。　その小さな基地でも、これまたどこにでもありがちながら、敵の接近を警告するためのサイレンが鳴り響いていた。

オペレーター「シュバルツ中佐。　レジスタンスと思われる反応が、次々と接近して来ます！」

シュバルツ「次々と言っても、数はそれ程でもない…。　まあ、どこでもこんなものか」

どこでも、そう落ち着いた口調で言った男の名は

『カール・リヒテン・シュバルツ』

帝国軍の中佐だ。　帝国に忠誠を誓う人間として知られ、帝国が荒れ果てた今も、あくまでレジスタンスと戦う兵の指揮を執り続けている。

オペレーター「迎撃準備、まもなく完了します。

ですが中佐。　我々はいつまで、このような戦いを続けなければならないのですか？　これでは、世界は戦うためだけにあるようです…」

その兵の声は沈んでいた。

シュバルツ「…君の言いたいことは分かる。　私も同じ思いだ」

シュバルツもまた、時代を憂いているうちの1人だった。

シュバルツ「しかし、軍人は納得で動くものではない。　軍人は皇帝陛下より与えられた任務を、身命を賭して全うするのみだ…」

シュバルツの決まり文句だった。

けれど今の帝国では、次の皇帝などいつ決まるとも知れない。　第一、帝国が荒れ果てた原因が、その皇位争いを貴族や軍が煽った結果なのだが…。

シュバルツ「話は終わりだ。

まもなく敵が到達する。　迎撃態勢を緩めるな！　ただし、あくまで目的は敵の武装解除だ！」

そう言い残し、シュバルツもまた専用ＭＳで出撃する。

シュバルツ「…しかし、このままでは、いずれ帝国どころか、世界は滅びるだろう…。　世界を救う救世主でも、現れてくれれば良いのだがな…」

シュバルツの呟きは、自身のＭＳの足音にかき消された…。

【４】

レナ「隊長。　全機撃墜を確認。　後もありません」

報告が入るが、それを聞くまでもなく穏やかな空だ。

ディジョン「よし、通信可能な基地かＡＷＡＣＳ（空中管制機）は…」

ミノフスキー粒子全盛の時代だから、いつでも通信が万全とは限らない。　それを予測して連絡用の機体も準備はするが、それでもミノ粉を広域散布されると、通信途絶はよく起こる。

ＡＷＡＣＳ「そっちのミノフスキー粒子濃度は低い。　撃墜はレーダーで確認している。　相変わらずいい腕だ」

レーダーまで使えるようなら、通信は余裕だろうな。　現に感度はかなり良い。

ディジョン「追加注文はあるか？」

ＡＷＡＣＳ「残念ながら品切れなんだ」

敵さんも余力が無くなったか。

ＡＷＡＣＳ「…ただ、近くの基地が襲撃を受けている。　支援要請はないんだが、帰り道に様子を見て来てくれないか？」

ディジョン「ミノフスキー粒子は？」

ＡＷＡＣＳ「その辺りだけ濃い。　だからもしかしたら、という訳だ」

ミノフスキー粒子で、通信を途絶させておいてから攻める。　よくある手だな。

ディジョン「連絡がついたらで構わないが、補給の手配をしてくれ。　さすがに帰りに連戦となるとキツい」

ＡＷＡＣＳ「分かった。　できるだけはしてみよう。　ただ、期待

はするな？」

微妙に投げやりな管制だったが、とりあえず言われた基地に向かう…。

【5】

そしてしばらくすると、その基地が見えて来たのだが…。

ディジョン「…これは基地じゃなくって、駐屯地って言わないか？」

思わず問い質してしまった。　それくらい『基地』の規模は微妙だったのだ。

ＡＷＡＣＳ「贅沢はいかんな。　建設３日目にしては、よくできてる方だと思わないか？」

ディジョン「それじゃ基地でも駐屯地でもなく、工事現場じゃないか！」

ＡＷＡＣＳ「別に名前なんかどうでもいいだろう？　ＭＳの脚は飾りじゃないんだ」

…つまり、滑走路すらできていないんだな？

ディジョン「…了解だ。　着陸して補給後、現地の支援に当たる」

私は、口の１ミクロンぐらい手前まで来ていた文句を飲み込むと、諦めて『基地』に着陸しようとしたのだが…。

ラリー「隊長。　５時方向に機影。　地上です。　ＭＳ」

アルヴィン「ありゃ旧ザクじゃないか？　骨董品が現役なのか、ここは？」

さすがに目が良いな。

いくらゆっくり飛んでいても、普通の兵じゃ単機のＭＳなど、なかなか発見できはしない。

ディジョン「ＡＷＡＣＳ（空中管制機）！　基地の近くに旧ザクがいる。　敵か味方か分かるか？」

ＡＷＡＣＳ「敵味方識別なし、データなし、ついでに応答も…

あったな。　なになに…　志願だと？」

ディジョン「どういう事だ？」

よく分からない状況に、思わず回線に割り込む。

ＡＷＡＣＳ「基地司令に繋げと言っている。　相手を信じるなら、脱走レジスタンスか、傭兵志願あたりじゃないのか？」

まあ、ビビったゲリラが脱走なら、たまにある話だな。　で、元仲間から狙われないように、帝国に投降か？

ディジョン「信じるのか？」

ＡＷＡＣＳ「いきなり撃つ訳にもいかないだろう。

…そうだ、出迎えってのはどうだ？」

アルヴィン「は？　なんで俺達が？」

聞いていたのか、アルヴィンが素っとんきょうな叫びをあげる。

ＡＷＡＣＳ「別に、コンタクトを取れとは言わない。　上から基地まで案内して、途中で怪しい事をするようなら、ズドン。

じゃ、頼んだぞ」

ディジョン「おい、待てっ！」

面倒事を押し付けた自覚があるのか、一方的に通信を切りやがった。

レナ「…どうします？」

ラリー「やるきゃないんじゃ？」

アルヴィン「ライフルの残弾さえ…」

アルヴィンだけは、まだ物騒な事を言っていたが、妙なツアーガイドをするしかなくなったようだ…。

第8章　進撃準備（前書き）

こまか～い設定を読み込んでいただいた皆様、お疲れさまでした（笑）

世界観は最初に書かないと意味がないので、やたらくどくどした始まりになってしまいましたけれど、章の冒頭文はいつもあんな小難しいのばかりじゃなくするつもりです。

というワケで、次のクールでは、この小説の裏話とか書いていこうかと思ってます。

お楽しみに。

第8章　進撃準備

マヒロ「ミサトっち？　もうすぐ海賊の根城だけど、準備は完璧か…

…って痛い～　主人を叩くなぁ～」

ミサト「だぁ～れがミサトっちよ！　他人の呼び方も知らないお馬鹿は、主人とは認めません！」

いきなり叩かれてしまった。　相変わらず、手が出るのが早いんだから。

マヒロ「…キリシマのおばさん」

ミサト「…もう1回叩かれたいみたね？　グーで」

ミサトが変に細かいのは、侍従に来てからずっとだった。　ミサトっちって呼び方もそうで、こう呼ぶのをなぜか嫌う。

マヒロ「…その不機嫌さだと、アノ日が近いかな…」

ミサト「お嬢ぉぉぉぉぉ～～～～～」

思いっきり顔を近づけて睨まれた。　別に女同士なんだからいいと思うんだけれど、ミサトは違うらしい。

マヒロ「…で、真面目な話。　どう？」

あたしは真顔に戻る。

ミサト「…いまのところは、ね。　お嬢が自分の分を割いてくれてるから、私と大尉の機体は順調なんだけど…」

世界がこんなになってから、ＭＳの整備に極端に手間がかかるようになった。　以前なら、部品を発注するメール１本でいけたものが、まるで手に入らない。

仕方なくあたしのコロニーで自作してみたけれど、ハイザックなどのシンプルな機体はともかく、ザク３のような高度な機体のパーツの製造には限界があった。

だいたいが、あたしのコロニー

★マーガレット（連合名サイド６）★

は、元々が農業専門のコロニーだから、食糧自給率が２００％を越える一方で、軍艦やＭＳを１から組み立てたことなんか、まったくないのだった。

ミサト「…いつまでもつかわからないけれど、なんとかしてみるつもり」

諦め顔のミサト。

マヒロ「いざとなったら、あたしの専用機、バラしていいから。おんなじザク３だから、それでしばらくいけるでしょ？」

指揮官や領主が専用機を持つのも、帝国の伝統だった。　でも、実

際はそんなのより重要なことがあると、あたしは思っている。

ミサト「…相変わらず、そういう所は領主様なんだから…」

ミサトは、あたしの頭を静かに撫でた…。

【2】

霧雨「この元海賊…　ジンって名前らしいんだけど、霧雨でもらい受けていいかな？」

デッキからブリッジに戻ると、霧雨大佐からそんな通信をもらった。
なんでも、さっきの戦いでケイさんと協力して捕虜にしたらしい。

マヒロ「かまいませんわ」

うん、我ながらとっさにうまく猫をかぶれた。　心の中でガッツポーズ。

霧雨「ありがとう。　で、海賊の根城だけど、やっぱり情報通りで正しいようだ。　こちらも独自に偵察を出したんだけれど、それからも報告があった」

マヒロ「あ、それで出撃なんですけれど…」

霧雨「時間は任せるよ。　賊が逃げ出さないか心配だけれどね？」

たしかに、今までもこうして追い詰めながら、いざ攻めたらもぬけの殻だったことが何度かある。

マヒロ「…ケイさん？　どうすればいい？」

あたしは、後を振り返った。

ケイ「…作戦ならいくつかある。　1に速攻、2に伏兵、3が包囲だ」

マヒロ「一気に攻めて、それで落とせる？」

ケイさんの言う速攻は、いまからでもすぐに急行するって意味だろう。　その分、賊が逃げ遅れる可能性は高くなる。

ケイ「根城を落とすなら。　ボスを捕えるとなると、運の要素が混じる」

マヒロ「包囲にかかる時間は？」

ケイ「戦力が足らない。　増援を呼ぶ必要がある」

マーガレットを裸にはできないし…。

霧雨「僕が敵の逃げ道を塞ごう。　座標を指定してくれ」

侯爵家の後押しがあるとは言え、一軍の大佐をしているくらいだから、頭脳は鋭敏なのかも知れない。　これだけの会話で、あたしとケイさんの先を読んだみたい。

ケイ「…可能性の高い順に、Ｘ２４…」

霧雨「なるほど、暗礁宙域か…」

こうして海賊討伐は、あたしが正面から攻め、霧雨大佐が背後の逃げ道を塞ぐ作戦に決まった…。

第9章　別れは出逢いの始まり（前書き）

（裏話編）

読まれて気がついた方もいるかも知れませんが、この小説は投稿してもらった方の数だけ視点があります。

例えば、皇女マヒロはあたし（まひろっく）の分身で、そのため、書けば書くほど自分の理屈っぽさが出てきてしまい、自分で苦笑いしたものでした。

他にも、章の主人公になったり、わざわざ名前が紹介されているようなキャラは、分身の可能性が高いです。

気が向いたなら、いましゃべっているキャラが、人間が操っているのか、それとも脇役のＮＰＣなのか、考えながら読んでみると、意外に楽しいかも知れません。

第9章　別れは出逢いの始まり

カタルーナに佇む人影が1つ。

悲しげに佇み続ける影に、仲間たちはかける言葉もなかった…。

エヴァニー「……。」

エヴァニー「……。」

シベリア「…すまない」

そんなエヴァニーにようやく声をかけたシベリアは、ポツリとそう言った。

エヴァニー「…お前の…　シベリアのせいじゃない。　作戦を決めたのは俺だ。　サルティンを置き去りにしたのも…」

涙がこみ上げる。

???「ずいぶんと寂しがり屋が揃っているんだな？　お前らは！」

突然降りかかった声。

そこには、地味な格好をした少女が１人。

グランズ仲間「なんだと？　お前！！」

仲間の１人が激昂したのか、少女に詰め寄る。

グランズ仲間「俺たちは仲間を失ったんだぞ？　悲しんで何が悪いっ！！」

？？？「悲しむだけで、やり返す気はないのか？」

静かに復讐を囁く声。

シベリア「…俺たちの被害も大きい。　いま行ったところで…」

？？？「それはあっちも同じじゃないのか？　いや、むしろ、あっちの方が被害は大きいとは思わないのか？」

…しばらくの沈黙。

グランズ仲間Ａ「…そうだ。　作戦は途中までうまく行っていた」

グランズ仲間Ｂ「俺たちは行く気を失っていた。　ということは、相手も来ると思ってないんじゃないのか？」

『そうだ、行こう！』

『敵討ちだ！』

そんな声が次々と上がる。

シベリア「……。」

エヴァニー「…みんな…」

エヴァニーの目に、再び涙が溢れる。

エヴァニー「お前のおかげだ。　俺達は臆病者になるところだった。　よければ名前だけでも聞かせてほしい」

？？？「…私か？　私は　サヤリ…　『サヤリ・ミューティー』という…」

少女の声は、なぜかか細かった…。

シベリア「…いいのか？」

エヴァニー「敵を討ってやれば、サルティンもきっと喜ぶ！」

グランズのメンバーのムードは、エヴァニーの言葉によるまでもなく、大いに盛り上がっていた。

【2】

エヴァニー「サヤリの立てた作戦はこうだ。　見る限り、きのうの襲撃であっちもボロボロだ。　柵も壊れ放題だし、鉄条網もできていない。　だから、周囲から攻撃して奴らを逃がさないようにしつつ、ここ」

そうエヴァニーは力強く言う。

エヴァニー「弾薬庫を狙う。　占拠してもいいし、爆破してもいい。　どちらにしても、それでここは終わりだ」

周囲から力強い歓声が上がった。

サヤリ「大丈夫だ。　絶対うまく行く」

エヴァニー「ああ。　みんな、作戦開始だ！」

再び歓声が上がり、周囲に散って行く。

ちなみに、エヴァニー本人がその弾薬庫を狙う班に入っていた。

帝国兵「敵襲だ～！！」

サイレンが鳴り響き、バラバラと帝国兵が駆けて行く。　だが、その数は意外に少ない。

エヴァニー「…よし、行くぞ！」

砂に足を取られないように気をつけながら、駐屯地に向かってひた走る。

途中、焼けたＭＳと戦闘機らしき残骸が目に入ったが、あえて見ないことにした。

帝国兵「…こ、こっちもゲリラが…　ぐぉっ！！」

別班のエヴァニー達に最初に気がついた帝国兵は、銃撃を浴びて倒れる。

それを機に、帝国兵が集まって来るが、その数は7、８人。　やはり少ない。

エヴァニー「邪魔するなっ！！」

エヴァニーの手にした銃が火を吹き、一気に3人が倒れる。　あと、サヤリも1人倒していた。

エヴァニー「やるな？」

サヤリ「…ま、まあな」

サヤリの顔は、なぜか戸惑っていた。　自分で作戦を提案し、自らエヴァニーに同行したというのに。

エヴァニー「あと少しだ！　俺が行くっ！　援護を頼むっ！」

サヤリ「私も行くっ！！」

グランズの仲間に支援されながら、２人の突撃は開始された。

帝国兵「弾薬庫？　させるかっ！　…ぎゃっ！！」

銃声がさらに響き、帝国兵がもう２人倒れる。

だが…

サヤリ「…っつ！！」

サヤリもまた、足首を撃たれてうずくまる。

エヴァニー「サヤリっ？！」

サヤリ「バカっ！　早く行けっ！！」

けれどエヴァニーは、そんな言葉が聞こえないかのように、サヤリに肩を貸そうとする。

サヤリ「何してるっ！　2人ともやられるぞっ！！」

エヴァニー「嫌だっ！　これじゃサルティンの時と一緒じゃないかっ！！」

だが、そんな2人を周囲が待つ訳がない。

帝国兵「そこっ！　2つ！！」

銃声が連続し、2人は身を伏せたが、弾丸は飛んで来なかった。

シベリア「…無茶をする、まったく」

エヴァニー「…すまない…」

代わりに倒れていた帝国兵。　そして、シベリアの声。

エヴァニー「…だが、おかげであらかた片付いたようだ。　新しい敵が来ないうちに！」

エヴァニーは弾薬庫に走ると、用意した爆薬をセットする。

エヴァニー「…これでいい。　離れよう」

エヴァニーは再びサヤリに肩を貸すと、元来た道を引き返し始める。

まだ遠くで銃声は響いていたが、エヴァニーはほっとした顔をしていた。

エヴァニー「…ここまでくればいいだろ…。　シベリア、やってくれ」

シベリア「…ああ」

直後、駐屯地の弾薬庫が大爆発し、ものすごい炎が巻き起こった。
爆風に吹き飛ばされる帝国兵がいて、まるで紙人形のようだった。

エヴァニー「…やったな…」

サヤリ「…大成功だ」

爆風に吹き飛ばされなかった帝国兵も、うろたえたところを仲間達に追い撃たれ、次々に倒れていく。

エヴァニー「…生きてる…」

サヤリ「…当たり前だろ？」

言ったサヤリが顔をしかめる。

エヴァニー「ああ、その当たり前もサヤリのおかげだ」

サヤリ「…そんなこと…」

２人の笑い声が、砂漠の隅に響き渡った。

第１０章　邂逅（前書き）

（裏話）

そんな訳で、参加者の数だけ主人公がいる小説ですが、その本当の見せ場は、主人公同士が会った時です。

ＮＰＣならば、主人公の思い通りに動かせますが、他の方の主人公はそうはいきません。

お互いに愛着のあるキャラですから、その愛着ゆえに、キャラが妙な関係になってしまうこともしばしば。

例えば、あたしの分身マヒロは、ニュータイプの素養がありながら、大の機械音痴で、かつ運動神経０という設定になっています。

ふつう、ニュータイプのキャラはＭＳで華々しく戦いますが、マヒロはファンネルは動かせるのに、カタパルトにＭＳを乗せようとしてずっこけるという、何とも役に立たないニュータイプなのです。

仕方なく、物語が進めば進むほどＭＳに乗らず（さっきも部下にパーツ譲ってましたよね？）、政治家を志すようになっていきますが、そんなマヒロを（今はまだ出逢っていませんが）傭兵のゴトーは馬鹿にして、むしろ軽蔑してるかのよう。

そんな、キャラを介してのやり取りと設定遊び、それがこの物語の特徴の1つなんですね。

第１０章　邂逅

ゲット「みんなー！　今日から街は、俺が守るぜー！！」

街に戻ったゲットは、そう高らかに宣言したのだけれど…

ゲット「…ちぇっ、なんだよ。　車1台ぐらい、いいじゃないか」

結局相手にされず、街外れでいじけていた。

守るも何も、街に帰って早々、操縦ミスでエレカを1台踏み潰した事を考えると、追い払われなかっただけ優しい街にも思えるのだが…

ゲットにそんな自覚があろうはずもない。

ゲット「ガンダムなのに…　伝説のＭＳなのに…」

しょげかえるゲット。

…しかしその直後、そんなゲットに大きな爆発音が聞こえてきた。
街に何発も砲弾が落ち、瞬く間に燃え上がる。

そう。

ゲットの追い払った賊が、街を襲って来たのだ。

コロンバ「この街に間違いねぇ！　ファラの頭っ！！」

ファラ「ガンダムとやらはどこだい？　街を焼かれたくなかったら、とっとと出て来なっ！」

盗賊たちの攻撃は勢いを増し、悲鳴があちこちで上がる。

ゲット「俺ならここだっ！　やめろ～！！」

そんな街を守ろうと、ゲットは再び盗賊の前に立ち塞がる。

盗賊「現れやがったな？」

コロンバ「てめーは引きずり出して火あぶり、ガンダムは売り払って大儲けだっ！」

そうして、盗賊たちのＭＳがゲットのゼフィランサスの周りに集まりだした。

ゲット「いまのうちだ、みんな逃げるんだ！」

ゲットは街の人を守ろうとする。　気持ちは正義の味方だった。

…だが。

次の瞬間、ファラは街の人間を一瞥すると、吐き捨てるように言っ

た。

ファラ「邪魔っこいのがうろちょろと…。　ガンダムも出てきたことだし、もう用はない。　消えちまいなっ！」

なんと、銃口はゲットの乗るゼフィランサスではなく、街に向けられる。

ゲット「…お前らぁ～」

ゲットは、なんとか覚えた操作でビームサーベルを抜くと、ファラのシグーに斬りかかるが…。

ファラ「…知ってるよ？　あんた、ＭＳもまともに動かせないんだってねぇ？　そうそうまぐれが続くわけないだろ？」

ファラのシグーは、たった1歩下がっただけで、ゲットの斬撃をかわしてしまう。

ゲット「なんで当たらないんだっ！」

もう1度。

だが、結果は同じだった。

ファラ「情けないねぇ、ガンダムが聞いて呆れるよ。　…ほらほら、命より大切な街のみんなを守ってみせなよ？」

盗賊「ぎゃはははは」

盗賊たちの嘲り笑う声が響き、ファラばかりでなく、ディンの、ジンの７６ミリ弾までが一斉に火を吹く。　そして、街の人間が肉片に変わっていく。

ゲット「なにするんだっ！　やめろよっ！！」

ゲットは叫ぶが、帰って来たのは、盗賊たちのいやらしい笑い声だった。

コロンバ「聞こえねぇなあ？」

さらに血が舞う。

ゲット「…やめろぉぉぉ～～～！！」

ゲットの叫びはあまりに無力。

ゲット「う…　うわぁぁぁぁ～～～！！」

目の前で街の人を殺され、ゲットはわけもわからずサーベルを振り回す。

…が。

ファラ「そんなんじゃ、せっかくガンダム乗っても、宝の持ち腐れだね？」

今度は足をかけられて倒され、地面に仰向け転がされてしまう。

地面に転がされるガンダムは、あまりに惨めだった。

ファラ「…はん、もうこれでお仕舞いかい？　野郎共、殺しちまいな。　ただし、コックピットだけ狙うんだ！　機体をあんまり壊す

と、売り物にならなくなる！」

コロンバ「あいよっ！！」

そして、地面に倒されたままのゲットに、一斉に銃撃が始まる…？！

【2】

…かと思われた。

だが、いつまで経っても銃声はしない。

いや、1つだけ銃撃音はするのだが、なぜか白々しい。

よく見ると、射っているMSは仰向けで倒れており、銃弾は虚空へ向けて放たれていた。

ゲット「…な、なんだ？」

ゲットは、つい閉じてしまった目を、恐る恐る開いた。

？？？「１０対１は、仕掛けられる分にはスリルがあっていいが、見てるのは趣味に合わねぇな。　つかお前、いい加減うるせーよ」

まだ空に向かって銃を射ち続けるジンを、ザクが蹴り飛ばした。

それでやっと銃撃が止む。

盗賊「てめぇ、何もん…　ぐごっ！！」

そう凄んでザクに近づいたジンもまた、ビームスピアで叩き斬られる。

？？？「正確には、てめぇ『ら』な？」

続いて降り立つジムストライカー。

ファラ「おやおや、こんどこそ正義の味方のお出ましかい？　野郎共っ！」

向き直るシグー。　そして動き出す盗賊たち…

…だったが。

？？？「正義の味方『ごっこ』だけどね？」

崩れ落ちるジン。

？？？「いや、むしろ死神だろ？」

真っ二つになるザウート。

？？？「いや、ヴァイスさん。　俺らフェッニックスナイツなのに、死神じゃイメージ合わないですって！」

手近にいたディンが、ヒートホークの餌食になる。

ヴァイス「レアルタも、つまらないことに細かいな」
また1機バクゥが爆発する。

ゲット「す、すげぇ…」
あっという間に、6機のMSが残骸に変わった。

盗賊「…なんだと？　…あ、お頭、この肩のマーク！　こいつら、フェッニックスナイツだ！！」
盗賊の1人が叫ぶ。
たしかに、ジムストライカーとザクF2の肩には、赤い不死鳥のペイント。

ファラ「フェッニックスナイツ…。　帝国狩りが、何でこんな所に？　いや、そんなんどうでもいい！　ガンダムより、こいつら殺った方が名が売れるってモンだ！！」

残った盗賊とファラが、叫びを上げると一斉に…。

【3】

ミア「隊長。　あの街でＭＳが暴れ回っているそうです。　しかも、発端がガンダム絡みだと…」

ネロ「あの盗賊も賞金首ですし…」

ネロが、モニターの脇に標示された、リストをチェックしながら言う。

ネロ「…というか、あのジムとザク、どっかで見覚えがあるんですけど…」

しばらくネロは、首を傾げていたが…。

ネロ「…あっ！！！」

ジルド「…急にデカい声出すんじゃねぇよ」

ネロの叫び声に、ジルドが文句を言う。　しかし、ネロは気にせず続ける。

ネロ「あいつら…　フェッニックスナイツですよ！」

ミア「…フェッニックスナイツ？　あの帝国軍狩りの？」

ミアは意外そうな声を出す。

ネロ「…隊長。　これは本気でおもしろくなりそうじゃないですか？」

ミア「盗賊が賞金首、フェッニックスナイツは帝国のお尋ね者、さらにガンダムね…」

ゴトー「メリルっ！」

そう叫んだゴトーが引いたのは、愚者のカード。　正位置。

意味は、自由、型にはまらない天才。

ジルド「っしゃ！」

占いの結果から次のゴトーの命令を予想できたのだろう。　ガッツポーズをするジルド。

ゴトー「よし、俺もグフで出る。　ミアは残れ。　メリル、ザクスナイパー、ジルドとネロはザクで続け！」

傭兵たちも動き出す…。

【4】

盗賊「うおらぁぁぁ～」

掛け声だけは威勢よく飛びかかる盗賊。

レアルタ「いらっしゃ～い」

余裕で待ち構えるレアルタ。

…の、はずだったが。

ヴァイス「レアルタ、右だっ！！　避けろっ！！！」

レアルタ「いっ！？」

レアルタのザクが後ろに跳び退いた所を、一条のビームが通り過ぎる。　盗賊のディンは、巻き込まれて砕け散った。

盗賊「ビ、ビーム？！　どこだっ！　どこにいるっ！」

別の盗賊は、怯えた様子で突撃銃をやたらと射ちまくるが、襲って来たのはビームではなく、違う方向からのマシンガン。　脚に命中弾を浴びたそのジンは、反転して地面に倒れる。

？？？「はい、終わりですね」

そしてそのジンは、地面に倒れた姿勢のまま、飛んできたバズーカを食らい、木っ端微塵に吹き飛んだ。

コロンバ「…なにモンだ、俺たちを…」

…誰だと思っている。　そう言おうとした言葉は、続かなかった。

コロンバのディンは、背後からグフのヒートサーベルで上半身と下半身が別れてしまったからだ。

ファラ「…フェッニックスナイツの次は、誰だい？」

ゴトー「俺の名前より、お前の名だ。　賞金首、盗賊ファラだな？」

ファラ「いかにも、あたしがファラだが…」

さすがの貫禄か、３機に囲まれても動じないファラ。　というか、さっきまでのおちゃらけた雰囲気がきれいに消えている。

ネロ「殺して３万ギラ、生け捕りは５万ですね」

ネロが淡々と賞金額を読み上げる。

ファラ「…帝国狩りの次は、賞金稼ぎかい！　邪魔くさいねっ！！」

ファラのシグーは、ゴトーの間合いに一気に飛び込む。　さすがに速…。

…かった。

ゴトー「…だが、甘い」

馳せ違い、切り結ぶか思われたグフは寸前で身を開いてかわし、代わりにシグーに巻き付いたのはアンカー。

ファラ「…ぐっ…」

電流が流され、シグーはその場に倒れ込む。

ネロ「電流を流しただけですから、機体も高く売れそうですね」

地面に倒れ込んだシグーを、ネロのザクが軽々と担ぎ上げる。　1機のMSは、別の1機が軽々運べるほど軽くないはずだが、パワーが強化してあるのか？　それとも、ファラのシグーが軽量化されていたのか？

とにかく、その場からファラ以下、賊の全員があっという間に一掃されてしまった…。

【5】

レアルタ「…ちょいと待ちな。　さっきから聞いてれば、賞金稼ぎのようだが…」

賞金稼ぎ制度は、あまりメジャーな制度ではなかった。　それに、

賞金をかけるのは主に帝国だから、帝国に反感を持っている連中は、そもそも参加しない。

レアルタ「…稼ぐの多いに結構。　だが、この俺に一言くらいあってもいいんじゃないか？」

レアルタのザクが、言葉とは裏腹な慎重さで、シグーを担いだネロのザクに詰め寄る。

ジルド「…そうかい？　朝の挨拶が、ちょいと遅すぎたってか？」

ジルドのザクが間に割り込んだかと思うと、いきなり蹴りが飛んで来た。

レアルタのザクが飛び退く。

レアルタ「…やっぱそう来るか。　そいつが3とか5とか言ってたけど、たしか俺たちは、2桁違うしな？」

ゴトー「……。」

B3グフは動かない。

レアルタ「…そいじゃま、昼のご挨拶でいいぜ？　…お休みなさい、だっ！！」

ジルドのザクに飛びかかるレアルタだが、レアルタのヒートホークも宙を切る…　いや、連撃。

ジルド「…まだ遠いな」

レアルタ「…どうかな？」

二撃目がすっと手元で伸びた感じがして、ジルドのザクを掠めていた。　よく見ると、レアルタのザクは地面から僅かに浮いていた。

ジルド「…ドム脚のザクか…　いい趣味してるぜ」

巧妙に偽装されているからわかりにくいが、よくよく見れば、ザクにしては脚が不格好に太い。

ジルド「そんな小細工がっ！！」

レアルタ「小細工がどうしたって？」

ジルドのザクマシンガンが火を吹くが、レアルタには掠りもしない。
地面を滑るように左右にかわしてしまうのだ。

ジルド「ちょこまかと…」

レアルタ「そらこっちのセリフだ。　男なら、やっぱタイマン、肉弾戦だろ？」

次の瞬間、ジルドのザクもマシンガンを捨て、真正面に突っ込んでいた。

ヒートホーク同士がぶつかり合い、火花が散る。　轟音が響く。

1回…

2回…

3回…

ネロ「…隊長。　支援は？」

ネロのザクが僅かに動くが…。

ヴァイス「そこのザクとグフ。　お前らが動いたら、こっちも本気で殺るからな？　レアルタの顔は潰せないから、サシでやらせてるだけだ」

緊迫した空気。

そこにヒートホークの響きだけが繰り返す。

ゲット「あ、あ…」

ようやく起きたゲットのゼフィランサスだが、その場の空気に呑まれて足がすくむ。　思うように動けない。

４回…

５回目の時、片方のヒートホークが根元からポッキリ折れた。

折れたのは…

ネロ「ジルドっ！」

だが、シグーを放り出したネロは、僅か１歩で立ち止まる。

その首に突きつけられた、ビームスピア。

ヴァイス「…もう一度だけ聞くぞ？　ケンカしてんのか？　それとも、戦争やらかすつもりか？」

ヴァイスの左頬が、不自然につり上がる。　ネロの背筋に汗が流れた。

ジルド「うぉぉぉぉっ！！」

咆哮に合わせて、レアルタのザクが、後に跳ね飛ばされる。　折れなかったヒートホークで叩き斬るべく、突っ込んだレアルタを、ジルドが脚で蹴り飛ばしたのだ。

レアルタ「…やってくれるじゃねぇか。　お互い脚が自慢ってワケだ？」

そう言えば、ジルドの初撃も蹴りだった。　そして、レアルタの素早い身のこなしの秘密はドム脚。

共に簡単に見えるが、ＭＳが蹴り技を使ったり、違うＭＳの…　し

かも、オーバーパワーの脚をつけるのは、意外と難しいのだ。

ジルド「…だが悪いな？　同じ自慢でも、俺の方がスタイルはいいみたいだぜ？」

ヒートホークを失っているにも関わらず、ジルドも退く気配を見せなかった…。

【6】

ジルド「次でキメるっ！！」

そう宣言したジルドのザクが手にしたのは、クラッカー…　対装甲車両用手榴弾だった。　ＭＳといえど、至近距離で食らえば致命傷になるものだ。

レアルタ「ここまできて、また飛び道具かよ？　つか、そんなドンクサいのが当たるかよっ！」

たしかに、手で投げるだけのクラッカーは、銃に比べればあまりにもスピードが遅い。　ましてや、相手はその銃撃を軽々よけていたレアルタなのだ。

投げる隙を与えまいと、一気に間合いを詰める。

ジルド「そいつはどうかな？」

だが、ジルドのやり口は、常識を遥かに逸脱していた。

なんと、手にしていたクラッカーをその場に『落とす』と、レアルタのザクに向かって突進した。

そして、レアルタの斬撃に盾ごと左腕を持っていかれながらも、その背中を自分のいままでいた位置に突き飛ばしたのである。

当然、脚元には起爆寸前のクラッカー。

レアルタ「…っつ！！」

辺りを黒煙が包む。

【7】

ジルド「ざまぁ見やがれ…　…ん？」

しかし、そこにレアルタのザクの残骸はなかった。

そして少し離れた所に、ジムストライカーとドム脚のザク。

…周りの全ての人間が、その意味を理解した。

ゴトー「メリルっ！」

メリル「はいっ！」

すかさず2機のいる場所に、一際太いビームが掠める。　かわした所にバズーカの着弾。

そして、左斜め前に飛び込むグフ。　交差する、ヒートサーベルとビームスピア。

回避続きで無理な姿勢になっていたジムストライカーは、受けきれず片膝をつく。

ゲット「あ…　あ…　なんでだよ…」

ゲットの震える声。

グフの腕からアンカーが伸びる。

それは、ジムストライカーのスピアを確かに絡め取っていたが、ヴァイスはスピアを手離し、横っ飛びに飛んで逃げた。

ヴァイス「ちぃ…」

代わりにビームサーベルを2本持ち、2刀流の構えを見せる。

レアルタ「…さすがに隙はないかよ…」

一方で、レアルタのザクはバズーカの着弾を全部避けていたが、さっきまでと違い、横合いからのビームがあるため間合いを詰められず、撃たれっぱなしだった。

ゲット「や…　やめてくれよ…。　なんでまだ殺し合いなんか続けるんだよ…」

ゼフィランサスが1、2歩前に踏み出す。　だが、気にする者は誰もいない。

ゴトー「…自分の吐いた言葉を翻したからには、死ぬ覚悟はできているようだな？」

ヴァイス「…すまないが、俺は未練を捨てきれないクチでな？」

二度三度振り下ろされ、横薙ぎに払われるヒートサーベルを紙一重で避けながら、わずかな隙を狙ってビームサーベルで突く。

だが、当たらない。

もう一度振り下ろされたサーベルに、後に飛びずさる。

ジルド「…タイマンが聞いて呆れるぜ。　ママに頼まねぇと、自分のケツも拭けねぇガキだったとはなっ！！」

余裕でかわせそうな攻撃だったが、敢えて避けずに蹴りを受けた。

横合いからの射撃を気にして、わざと間合いを詰めたのだ。

ジルド「いまさら殺る気になっても、遅せぇよっ！」

だが、一撃したジルドはあっさり下がり、その場には代わりに、バズーカが着弾する。　とっさに下がるしかないレアルタ。

そして2人は、ついに背中合わせになって囲まれてしまった。

レアルタ「…めっずらしいね～　俺たちが、たかだか4対2で…」

ヴァイス「…悪かったな、レアルタ…。　お節介が過ぎたようだ…」

構えられるバズーカ。

そして、どこからか狙っているだろう、ビームライフル。

ゴトー「殺れ」

ゲット「やめろぉ～～～～～～～～！！！！！」

発射されるバズーカとライフルと…

一面の黒煙。

静寂。

ゲット「…もう、殺し合いなんか見たくねぇよ…」

けれど、黒煙が晴れて現れたのは、ザクとジムを庇った、ゼフィランサスの背中だった。

ゴトー「…背面装甲に直撃を受けて、無傷か…」

あくまで落ち着いたゴトー。

ゲット「…なんで戦うんだよっ？　盗賊はもういなくなって、街も…　俺がダメなせいで、ずいぶん人が死んじゃったけど…　それでも、何とかなりそうだって時に、なんで街を守ってくれたＭＳ同士が、戦ってんだよ?!」

激しく訴えかけるゲット。

ジルド「…バカか、てめぇは？　俺達は、街がどうなろうと知ったこっちゃねぇんだよ。　盗賊から守った？　アホか！　ただ賞金首刈ってやっただけだ。　あいつに賞金がかかってなかったら、街が燃えようが踏み潰されようが、知ったことじゃねぇよ！」

ゲット「…じゃ、じゃあ、そっちはどうなんだ？　やっぱ金とか関係なかったら、人がたくさん死んでも知らないってのか?!」

ゲットは、レアルタとヴァイスの方を見て言う。

レアルタ「…そう言われてもな…」

ヴァイス「…どっちかって言うと、殺す側だしな…」

…奇妙な沈黙。

ゲット「…それでいいのかよ…。　そうやって殺して殺されて…。
　そんなこと続けてりゃ、いつか平和になるのかよっ！　そのうち人が死ななくなるのかよっ！！」

ネロ「…正真正銘のバカですね…。　隊長…」

…殺れ、そういう命令を期待して、ネロはゴトーを見た。　けれど…。

ゴトー「…おもしろいことを言うじゃないか？　メリルっ！」

メリル「はいっ！」

ゴトー「…代わりに引け」

メリル「…愚者の正位置…。　さっきと同じです」

ゴトー「…型にはまらない天才か…。　…やはり、おもしろい。
引き上げだっ！」

ネロ「…えっ？」

あまりに唐突な命令に、周囲の誰もが唖然となる。

ゴトー「…聞こえなかったのか！　引き上げるぞ」

言っている側から、ゴトーのグフはバーニアを吹かし、ジャンプを繰り返しながら、あっという間に姿を消してしまう。

ネロ「…たっ、隊長、待ってください！」

慌てて後を追う、ネロとジルド。

辺りは、不気味なほど静かになった…。

第１１章　グラーフェン襲撃（前書き）

（裏話）

参加者同士の絡みについて書きましたが、そこで味な配慮をする方がたまにみえます。

たいがいの場合、みなさん共に自分のキャラには負けてほしくないですから、戦った場合には引き分けになりがちです。

ですが、そこをひねって考える一部の方は、自キャラを敢えて死亡させてしまうのです。

下手に何回も戦って生き残るより、華々しく散った方が印象に残る場合もありますし、なにより自キャラが死ぬ側ですから、相手に配慮はあまりいりません。（勝手に相手を殺しちゃうと、ケンカになりますけどね）

さんざん相手に絡んだ挙げ句に、絶妙なセリフを残して散られた日には、生き残ったキャラより主役っぽくなったりして…（笑）

もしこの先、絶妙な散り際があったなら、それこそが参加された方の渾身の場面と考えて、繰り返し読んでいたたければ幸いです。

第11章　グラーフェン襲撃

1人の少年が、城のテラスから身を乗り出していた。　白く輝くような白銀の髪を持ち、わずかに丸みを帯びた顔には、子供っぽい笑みがある。

???「エルフレア様、危のうございます」

少年が振り返ると、見慣れた制服を着た、背の高い初老の男が立っていた。

ここは東欧、ハンガリー地方の一角にある、グラーフェン城。

帝国貴族の領主が治める、古代を思わせる造りがとても美しい城。

エルフレア「ラドか」

エルフレアと呼ばれた少年は、身を翻し、テラスの上に腰かける。

ラド「…テーズ先生が探しておりましたよ。　また授業を抜け出されたのですか？」

エルフレア「今日の課題は終わったのだ。　別に良い」
ちらっと舌を出して答える。

ラド「宿題はまだなのでは？」

エルフレア「よいのだ。　なんだかこのところ、量ばかり多い。量をこなせばいいというものでもないだろう？」
うんざりとした表情を隠そうともしないエルフレアに、ラドは目を細めた。
だが、たしかに最近のエルフレアの成長はめざましく、次期領主としてふさわしくなりつつあるのも事実なのだったが。

エルフレア「…ラドにＭＳの乗り方を教わる方が、まだ面白い」
エルフレアは、ラドを期待の目で見上げた。

ラド「…ならば、エルフレア様が宿題を終えられた後に、手ほどきを致すとしましょう」

エルフレア「…む……」

エルフレアは唇を尖らせつつも、テラスから降りた…。

【2】

グラーフェン城の正門が開き、鉄骨でがっしりと組まれた橋の上を、ＭＳドートレスが歩いて行く。

その列は２０機を越えており、それがグラーフェン・メピスの動かせる兵力のほとんどだった。

エルフレア「ロンド隊長も行くの？」

エルフレアは、城内にあるＭＳハンガー前で、１人の青年に話しかけていた。

折しも、他の貴族領が反帝国レジスタンスの攻撃を受けており、そ

の救援のための援軍が各地に要請されていたのだった。

ロンド「ええ。　これだけの数を出すとなれば、私自ら赴かねば、統率に不安が残りますから。　私には、預かった兵たちを無事に帰す義務があります。　それにはやはり、自ら指揮を執るのが１番に思えるのです」

エルフレア「そうか…」

エルフレアは、この青年を尊敬していた。　ロンドには、若いにも関わらず、どこか古き良き時代の香りを感じるせいだろうか？

ロンド「…なに、逆賊ごとき、皆が協力すればすぐに退治できますよ」

寂しげな顔をするエルフレアに、青年はそう言いながら微笑んだ。

エルフレア「そうか…　そうかもね」

ようやく、少年の顔にも笑顔が戻る。

エルフレア「こんなことしかできないけれど、ロンド隊長の武運を祈ってるよ」

エルフレアはそう言って見送りの敬礼をするが、対するロンドは、僅かに驚いた表情を浮かべた。

ロンド「…敬礼は、部下が先にするものですよ。　敬意を示すためのものですから」

エルフレア「ならこれで正しい。　僕はロンド隊長を、敬意を持って見送りたいから…」

寂しげだけど、優しい微笑み。

ロンド「…わかりました。　ありがとうございます。　それでは行って参ります！」

数瞬の間をおいてから、ロンドもまたその場に直立して出立の敬礼をするが、そうしながらも、互いにちょっとだけ微笑み合う。

直後、ロンドは軍人らしく踵を返して歩み始め、エルフレアはロンドの背中が見えなくなるまで、彼とそのＭＳ隊を見送り続けた…。

【3】

だが、3日後。

グラーフェン城は、突如、帝国に逆らう勢力から襲撃を受けていた。

リーオーとエアリーズの空地が連携した攻撃に、主力が不在のグラーフェンの部隊はあまりに脆く、次々と防衛戦を突破されてしまう。

兵「バッフェル様！」

バッフェル「…敵は？」

居室に飛び込んで来た兵に、バッフェルと呼ばれた城の主は静かに問うた。

兵「…城の目前まで迫りつつあります。　ＭＳ隊は奮戦しておりますが…」

爆撃があったのか、城が揺れた。

バッフェル「…配置に戻れ」

兵「はっ！」

兵が駆け出して行く。　入れ替わりに飛び込んで来たのは…　エルフレア。

エルフレア「父上っ！　敵が来ているのですかっ？」

エルフレアの顔は青白く、声は緊迫していた。　だが、取り乱している訳ではなさそうだ。

バッフェル「…もうここは凌げまい。　お前は、ラドと共に落ち延びよ」

エルフレア「えっ？！」

驚くエルフレアの手を、いつの間にか側にいたラドが掴む。

エルフレア「…そんな…　父上は？　母上は？」

バッフェル「…古来より敵というものは、大将の首を取らねば納得せぬものだ」

だから、自分と逃げればエルフレアも危険にさらされる。　そして、多くの兵たちもまた、巻き添えにする。

聡明なエルフレアには、それがよくわかった。　わかったからこそ、叫んだ。

エルフレア「いやですっ！　私も父上と共に戦いますっ！！」

バッフェル「…よいか。　貴族には、果たさねばならぬ役目がある。

ここで逃げぬのも、その役目だ」

あくまで静かに別れを告げるバッフェル。

バッフェル「…何をしている、ラド！　早くエルフレアを連れて行かぬかっ！」

ラド「はっ！」

エルフレア「父上っ！　父上っ！」

なおも抵抗するエルフレアを、ラドは脇に抱え上げた。

そして一瞬だけ振り返ると、抱えた反対側の手で、バッフェルに敬礼をした。

バッフェル「…お前の忠義、死しても忘れぬ」

ラド「…ありがたきお言葉」

エルフレア「父上っ～　父上ぇ～」

叫びが遠ざかって行った…。

【4】

エルフレア「ラドっ！　離せっ！　命令だっ！！」

ラド「聞けぬ命令です」

１４歳の少年を抱えたまま、ラドは廊下を疾駆した。　北西…　緊急の時の脱出路のある方角だった。

兵「弟君をお連れしました」

別の兵に手を引かれた、エルフレアの弟…　ディオンが姿を見せた。

エルフレア「ディオン！」

すでに泣きべそをかいていたディオンは、兵が手を離すと、エルフレアの足にしがみついた。

ラド「…弟君もおられます。　兄君として、なすべきことをなされませ。　追手は私めが止めます」

振り返ると、そこにはすでに敵の影が迫っていた。　足音が聞こえるところをみると、すでに場内に踏み込まれているようだった。

エルフレア「…ディオン、こっちだ。　逃げるぞ！」

ディオン「父上と…　は、母上は？」

エルフレア「後で助け出す。　だから、いまは逃げるんだ！」

エルフレアはディオンの手を取った…。

【5】

エルフレア「…くっ、こっちは駄目かっ！」

だが、その脱出劇も、そうそううまくはいかなかった。

再三にわたり、外部かのＭＳの攻撃を受けていたグラーフェン城は、内部にも大きな被害を出していた。　その被害の中には脱出路も含まれており、壁が崩れて通れなくなっていたのだ。

エルフレア「…仕方ない、こっちへ」

だが、ディオンが立ち止まる。

ディオン「…そっちは…　母上が封印された魔物がいるから、近づいちゃいけないって…」

尻込みするディオンだったが、当然かまっているヒマなどない。

エルフレア「いいから入るぞっ！」

エルフレアは、唯一城の中で入ったことのない場所に足を踏み入れた…。

【6】

その道は、無限と思えるくらい長く続いていた。

いくつもの通路を越えた結果、いつしか2人は地下にいた。　途中にカードキーが必要なエレベーターが1基あったのだが、なぜか開いていたうえに、乗るとこの階まで止まらなかったのだ。

エレベーターを降りたエルフレアは、ふと小さな物音を聞いた気がした。

ディオン「あ、兄上…　あれ…」

ディオンが恐る恐る指差した先にあったのは…

人影。

男「…おやおや…　誰かと思えば、こんな所に王子様ですか？」

エルフレアを知っているのか、振り返った男はそう言った。

だが、言葉の割には落ち着きがない。　目が泳ぎ、足が小刻みに動く。　どうやら、何か作業をしていたようだ。　もしかしたら、そのせいで直前まで2人に気がつかなかったのかも知れない。

エルフレア「…貴様…　何者だ…」

エルフレアはそう問いかけたが、答えはすでに知っていた。　こんな所に1人でいて、王子様なんて皮肉な呼び方をする味方など、いようはずもないのだから。

男「…それを聞いてどうするつもりです？　これから死ぬって言うのにっ！！」

次の瞬間、男は懐に手を入れると、拳銃を取り出し撃った。

エルフレアはディオンを突き飛ばし、床に転がる。

男「ちいっ！」

男はさらに撃とうと拳銃を向け直すが、エルフレアもまた腰のホルダーに手を持っていった…。

【7】

ディオン「兄さまっ！　兄さまっ！」

ディオンの声に目を覚ました。

ふらふらしながら立ち上がる。　何がどうなったのか、よく覚えていない。

エルフレア「…ディオン、無事か…」

そう声をかけたが、ディオンは床を指差して震えていた。

そこに横たわっていたのは…

…さっきの男で…

…顔が半分無かった。

エルフレア「うっ！！　うぇぇ…」

あまりの凄惨さに、顔を背けて吐いた。

ディオン「兄さま、大丈夫？」

あまり状況がわかっていないのか、幼いディオンの方がしっかりしていた。

エルフレア「…だ、大丈夫だ…」

足取りもおぼつかず、ふらふらと歩いたエルフレアは、ふと何かに手をついた。　触った感じは、やけに冷たい。　何かの金属の塊だろうか？

エルフレア「…これはいったい…。　いや、むしろここはどこなんだ？」

そんな問いに答えたのは、またしてもディオンだった。

ディオン「…兄さま…　これ足だよ？」

エルフレア「えっ？」

なんとエルフレアが触ったたのは、巨大なＭＳの脚だったのだ。

エルフレア「…こんな所にＭＳが…」

たしかに、城の近くにはＭＳを作る工場があり、その一部は爆撃に備えて、地下にその姿を隠してはいた。

だが、こんな所に工場があるなんて、エルフレアは聞いたこともなかった。　それとも、走っているうちに、単純に迷っただけだろうか？

ディオン「…兄さま…　これ、動くのかな？　目とか光ってるし…。

動くのなら、これで父上と母上を助けられないかな…？」

エルフレア「…ぁ……」

弟の思いもしない言葉に、エルフレアはあらためて、そのＭＳを見上げた…。

第12章　ヤタガラス再び（前書き）

（裏話）

そう言えば、参加者の数だけ主人公がいる、と言いましたが、正確にはその表現は間違っています。

なぜなら、慣れてくるに従って、1人の参加者の方が、たくさんのキャラを操るようになっていったからです。　凄い方になると、敵味方に自キャラを分けて操ったうえに、お互い小説内で戦ったりしてしまうんですから、恐れ入りますよね（笑）

まあ、多数のキャラを扱うだけなら、かくいうあたしもしてたんですけれど（苦笑）

マヒロはもう自白しちゃいましたが、他にもあたしっぽいキャラを見つけたら、感想に予想を書いてもらえると嬉しいです。

ヒントは、理屈と設定大好きかな？

あと、書いてる人と小説のキャラが、同じ性別とは限りませんから、念のため…。

第１２章　ヤタガラス再び

…なんだかんだで、旧ザクを工事現…　いや、『基地』に案内し終えた私は、とりあえず補給待ちのために、ハンガーで待機していた。

というか、『ハンガー』に屋根がないかも知れないとか、『補給』に人手が山ほどいるなんて初めて知ったが。

…ええぃ、こう補給ってのは、クレーンがこうあって、カートリッジをパパッと取り替えるものじゃないのか？　それをなんでホースとハシゴ…

…いかん。

私としたことが、つい取り乱した。

とにかく、案内した旧ザクは怪しくなかったが、コックピットから出てきた男は、超がつくくらい怪しかった。

…いや、むしろ怪しいというより、常識の範囲を逸脱していた。

そいつときたら、

『オラさ雇ってほしいだべ。　この世界さ変えるにはだな…』

とまあ、聞くに耐えんド田舎訛りで、滔々と演説をぶちかましやがったからだ。

ちなみに、正しい帝国共通語に翻訳すると

『元々は畑を耕していたが、そこがたまたま戦場になった。　レジスタンスは畑を踏み潰し、仲間も巻き添えにしたが、シュバルツ中佐の部隊は、村を守ろうとしてくれた』

となり、一応恩義を感じての仕官で正しいようだ。

レナ「…でも隊長、やっぱり怪しくないですか？　あの農夫」

レナは比較的冷静な目で、物事が見れているようだった。

ディジョン「アレを怪しくないと言ったら、世界の辞書からみんな、世界の辞書からみんな、怪しいという言葉がなくなるがな」

私は苦笑いして返す。

レナ「…いえ、そういうんじゃなくって、あの農夫、訛りが酷い割には、操縦が見事でした。　なんというか、猫の皮を被ってるいるような…」

ディジョン「…工作員の可能性がある、と？」

私は即座に応じた。　たしかに、そう言われてみれば農耕にＭＳはいらない。

レナ「…なんにしても、あとはここの司令が決めることですから…。　私たちは補給が済めば出て行くわけですし…」

レナの言葉は懸念を告げながらも、別のことを考えているようにも取れ…

複雑だった。

【2】

シュバルツ「…君の世界を憂う気持ちはわかった。　私とて同じ気持ちだ」

そうシュバルツは農夫に告げていた。　だが…

シュバルツ「そうそう理想通りに、事が進まないのも事実。　帝国は腐っているが、その兵力なくして地域の安定は保てない。　ならば腐った大元を絶てと言うんだろうが、元がどれなのか、私にもわからないのだよ」

そして、さらに言葉を繋ぐ。

シュバルツ「…何人か、悪名高い作戦に携わった兵を知っている。　だが、1人は作戦前日に戦友を失い、泣いていたよ。　もう1人は、上官に言われるまま任務を遂行し…　その後、自ら命を絶った。　現実はこんなものでね…」

そこまで言うと、シュバルツは席を立ち、窓の外に目をやる。　小鳥が鳴いていて、一見しただけでは、戦争をしているようには見えない景色だった。

シュバルツ「…そしてその背後には、そんな事実を知らない奴らがいる。　ならそいつを、と言いたいところだろうが、そいつもまた、非道な作戦については、何の権限もないんだ。　むしろ、怯えて近づけなかったという表現が正しいな」

2人の間の空気が、耐えられないくらい重くなるのを感じた。

シュバルツ「…まあ、そんな小難しい話は、またの機会にするとして、君には憂国の熱意を発揮する場を与えるつもりだ。　きょうはもう下がって休みたまえ」

農夫「…あ…」

農夫は何か言いかけたが、結局何も言わず、見よう見真似な敬礼をして去った。

シュバルツ「…なぜ、私はあのようなことを…。　一介の農夫に現実の苦衷を語ってなんになるというのだ…？」

シュバルツは、ここ数年来の想いを、なぜか吐き出してしまった自分に気がつき、苦笑していた…。

【3】

そんなシュバルツの部屋に、夕刻、手紙が舞い込む。

『シュバルツ中佐殿

今夜0時、あなたの誇りを頂きに伺います。

場所は、基地の片隅にある木陰で、銀の鎧と剣を用意してお待ちしております。

なお、頂くのは貴殿の誇りであって、命ではございません。　それは確約いたします。

【4】

シュバルツは約束の時間になると、告げられた場所へと歩みを進めた。

もちろん行かなかったり、歩哨に辺りを確かめさせることはできたが、そんなことはせず…

というより、むしろ適当な口実を見つけて、その場にしばらく兵が寄り付かないようにしていた。

…たしかに銀の鎧と剣…

その木陰には、あるはずのないテーブルが置かれ、その上には銀の鎧と剣。

さらにその奥には、同じ銀の鎧を身に纏った騎士らしき影が、微動だにせず佇んでいた。

（剣で勝負を挑み、負かすことで誇りを奪うと言うつもりか…）

無言のまま、　終わると剣を抜き放ち、一声かけた。

シュバルツ「…一手、お手合わせ願いたい」

シュバルツは静かにそう告げ、いまだ身動ぎ1つしない鎧の騎士に向かって、一歩を踏み出したの…

…だったが。

シュバルツ「…くっ…」

しかし、銀の剣が襲って来たのは、正面の騎士からではなく、シュバルツの背後からだった。

静かに剣が背中に突きつけられる。

シュバルツ「…ぬ…」

ヤタガラス「…たしかに貴殿の誇り、頂きました」

高らかに告げる声。

シュバルツ「…不意討ちで、誇りを奪ったつもりか？」

ヤタガラス「いえ、そうではありません。　ですが貴殿は、鎧と剣を目にしただけで、目の前にある人形に勝負を挑もうとされた。あなたの誇りとは、それによく似たもの。　見かけに囚われて、本

質を見失われておられる。　私は手紙には、ただ銀の鎧と剣を用意してお待ち差し上げるとしか、書かなかったはずですが」

シュバルツ「…無用の長物だと言うか」

ヤタガラス「ですから、私が頂きに参りました。　それでは」

踵を返し、歩み去る後ろ姿は、あまりにも堂々としていて…。

シュバルツは唇を噛んだ。

第１３章　家出娘（前書き）

（登場するＭＳについて）

裏話に続いては、小説に登場するＭＳについて、お話ししたいと思います。

と言ってもまあ

『何でもアリのパラレルワールド』

なんですけれど。

ただし、技術力に関しては、それなりの背景を作ってあります。

あの物凄く面倒臭い設定を、見事読破された方はおわかりだと思いますが、この世界は一旦技術が００８８程度まで進みながら、世界の混乱によって００７９まで逆戻りしているワケです。

ですから、ザク３やガルスＪなんかがたまに出る反面、今はザクやグフが活躍する余地があるんですね。

と、あんまり前置きが長くなるとなんですから、続きはまた、次の章の冒頭に…。

第１３章　家出娘

一連の作戦を終え、グラノーブルに帰って来た、エヴァニーたち。

そこで、迎えた仲間がまず口にしたのは、サヤリの存在と…

…サルティンの不在だった。

リナレス「そんな…サルティンバンコさんが…。う…うぅ…。　あぁぁぁぁぁ！」

ナディア「あいつ…　勝手に死にやがって！　そんなのって酷いじゃないか！！」

悲しみくれるグランズの仲間たち。

だが、またしてもそんな悲しみを切り裂く声。

サヤリ「…仲間が死んだら、お前らも終わるのか？」

サヤリに視線が集まる。　ナディアなどは、今にも飛びかかりそうな目つきだった。

サヤリ「…犠牲となった者達は、お前らが泣きわめく事を望んでいたと思うか？　違うだろう？　死んだ者達は、お前らに前を向き生きて欲しいと願ったに決まっている。　少なくとも、私が死んだらそう思う。　お前らはこんな所で嘆いている暇はあるのか？　他にやるべき事があるんじゃないか？」

ナディア「あんたねぇ！」

ナディアはサヤリの襟首を掴むと、容赦なく捻り上げた。

…けれど、その手に横からそっと触れたのは…

…エヴァニー。

エヴァニー「…待ってくれ、ナディア。　サヤリの言っていることも一理ある。　俺達はサルティンバンコのためにも、生きなきゃいけない。　いつまでも悲しい顔してたら、サルティンも成仏できないだろ？」

ナディア「エヴァニー…。」

エヴァニー「…今日だけは、精一杯悲しんでいいんだ。　泣いていいんだ。　…でも、明日からは笑おう？」

エヴァニーの笑顔。

でも、その笑顔はどうしようもないほど哀しくて…。

ナディア「…分かったよ」

リナレス「ナディアさん…。」

その日、仲間たちの慟哭がグラノーブルを包んだ。

その慟哭の渦の中で、エヴァニーはついに仲間たちに涙を見せなかったという…。

【2】

ナディア「サルティンは死ぬ時、どんなことを考えてたのかな?」

シベリア「…さあな…」

翌日。

グラノーブルの外れに、仲間たちはいた。

エヴァニー「…サルティン…　安らかに眠ってくれ…」

作ったばかりの墓に、グランズの仲間たちが祈りを捧げる。

辺りを包む沈黙。

砂漠を駆け抜ける、わずかな風。

祈りをすませて立ち上がる一行。　そんな折、エヴァニーはサヤリに訊いた。

エヴァニー「…ところでサヤリ。　君はいったい何者なんだ？」

サヤリ「……。」

エヴァニー「…サヤリ？」

…再び、数瞬の沈黙。

サヤリ「…まあ、隠したって仕方ないしな。　正直に話すよ。　私がサヤリ・ミューティーという名前なのは本当だ。　だが私は、アラビアの一国、マリンピアの国王、シノノメ・サルバ・ドゥーティーの娘なんだ」

エヴァニー「なんだって?!」

シベリア「…やはりな…」

告白に対する、エヴァニーとシベリアの反応は正反対だった。

エヴァニー「シベリア！　知ってたのか?!」

驚きを隠せないエヴァニー。

シベリア「…知ってたというか…。　どこかで聞いた名前だったし、立ち振舞いとかもな…。　少なくとも、訳もなく砂漠を1人で旅する感じじゃないとは思ったよ」

サヤリ「…そうか…」

なぜか寂しく笑うサヤリ。

エヴァニー「とにかく、その偉い人の娘が、こんな砂漠で何してたんだ？　というか、何で俺たちと戦うなんて真似を…？」

エヴァニーの声は静かだった。　問い詰める訳でもなく、しつこく聞き出すという感じでもない。

サヤリ「…耐えられなかったんだよ。　私は。　マリンピアは小さい国だが、それでも国さ。　やろうと思えば、帝国にだって何かできるはずだろう？　現実に帝国は、レジスタンスに加担してるんじゃないかって、マリンピアにも酷い疑いをかけたりもしてきてた。　だけど父上は、何でも帝国の言いなりさ…。　何もしようとはせず、ただ、その日がよければそれでいいかのようで…」

サヤリの目は、遥か遠くを見つめるようだった…。

シベリア「…で、結局どうしたいんだ？」

シベリアが問いかける。

サヤリ「…私は…　私は何かしたいんだ。　マリンピアが動かないなら、私が動く。　そうしてこの世界が変わるなら…」

エヴァニー「…だから、俺たちレジスタンスに入りたい、と？」

サヤリ「迷惑にならないのは、さっきの戦いでわかったはずだ！　たしかにケガはしたけれど、作戦は立てたし、敵兵だって倒した。　他にも…」

サヤリは、ムキになったようにまくし立てた。

リナレス「私はっ！　…反対です…」

ナディア「…信用できない、とは言わないが…」

複雑な表情のサヤリ。

シベリア「…エヴァニーに任せるよ」

言われたエヴァニーが、はっとした表情でシベリアの顔を見る。

シベリア「…グランズのリーダーはエヴァニーだ。　みんなにいろいろな思いがあるのはわかるが、俺はエヴァニーの決定に従おうと思う」

エヴァニー「…シベリア…」

言ったシベリアが、少しだけ微笑んだのを見たエヴァニーは、サヤリの顔を正面から見据えた。

エヴァニー「俺達レジスタンスは、いつ死ぬかわからない。　危険と隣り合わせで、助けてやれるかどうかもわからない。　…だけどもし、それでサヤリがいいなら…」

サヤリ「もちろんだ！」

エヴァニーとシベリアが、もう一度顔を見合わせ微笑む。

それを見て、苦笑いするナディアと…

…ため息をつくリナレス。

エヴァニー「決まりだな。　ようこそ、大地の叫び『グランズ』へ！！」

仲間たちが見守るなか、エヴァニーとサヤリは、がっしりと熱い握手を交わしたのだった…。

第１４章　ミクとマヒロ（前書き）

（登場するＭＳについて）

続きです。

そのため、初期の主力ＭＳは００７９級でも、国がしっかりしてくると、急速に技術が回復していきます。

それからは、人によって好みが別れて、結局陣営ごとに違う作品のＭＳを使う形になりました。

そういう意味では、ＳＤガンダム、Ｇジェネレーションシリーズにも似てはいますが、それよりも大戦略の要素が強くなってしまったかも知れませんね。

第１４章　ミクとマヒロ

帝国兵「…ザクＥ型（強行偵察型）いけます」

マヒロ「気をつけてね？」

あたしは、モニター越しに声をかける。

帝国兵「ありがとうございます。　ですが、武装のないコイツじゃ、気をつけるも何も、逃げるしかできませんって」

マヒロ「じゃ、うまく逃げ帰って来て」

あたしが笑いかけると、その兵もまた笑ってくれた。

兵「それでは行ってまいります」

出撃して行く偵察ＭＳたち。

そんな風に出撃を見送るのは、あたしの日課になっていた。　それだけ戦いの日々が続いてしまった訳だけれど、それならそれで、見送りだけでもしてあげたい。

だって、あたしやミズサワの家のために、命をかけてくれてる人たちだから。

ミク「…そうそう。　見送ってる分には、立派な領主様なんだよ」

…なんかいま、余計な雑音が聞こえた気がしたけれど…。

ミク「…お姉の出撃を止め続けて、早3年。　ついに苦労の実る日が…」

…って、やっぱりコイツか。

マヒロ「…何か言いたげね？　ミク？」

あたしは、自分でもわかるくらい、強張った笑みを浮かべながら振り返る。

ミク「べっつに～？　お姉が自分のザク３で旧ザクと模擬戦して負けたとか、着艦に失敗して母艦沈めかけたことが３回あるとか、フアンネルで自分の機体撃って、撃墜判定されたことがあるなんて、一言も言ってないよぉ～？」

…生きる広告塔か、こいつは？

ミク「…あ、広めるも何も、みんな知ってるから。　ただ、気を遣って言わないだけだよぉ～」

ニュータイプの勘なのか、人の考えをちゃっかり読んでるし。　しかも調子に乗って、兵まで話を振り始める。

ミク「そこの兵士さん。　総大将が自分で出撃するのをどう思いますか？」

兵「時代遅れの考えです！　通信機器が発達した現在、総大将たるもの、後方からの指揮に専念なさるべきです！」

ミクに指名された兵士が、はきはきと答えた。　まるで、普段から練習でもしてたかのように…

…練習？？？

マヒロ「…あんたの優しさって、どうしていつもこうねじ曲がってるのかしら…？」

…あたしの口角が、不自然につり上がる。

ミク「さって、今日のアイスは何にしよっかな～っと♪」

さんざんからかうだけからかって、逃げの一手か？

マヒロ「そうはさせるかっ！」

あたしは、背後からミクに飛びかかろうとする。

しかしそれは、ブリッジに入って来たミサトに遮られ、席に連れ戻されてしまった。

ミサト「…騒がしいから来てみれば…　お嬢って、どうしていつもこうなのよ…。　兵が見てる、とかって意識はないの？」

言われて見渡すと、さっきの兵士が必死に笑いを堪えていた。

ミサト「…わかった？」

呆れ顔のミサトだったけれど、助け船は意外な所から入った。

帝国軍下士官「…お言葉ですが、中尉。『そんな総大将だから守りたくなる』って言ってる兵は、意外と多いんですよ？　同じ女性の中尉から見れば、また違って見えるのかも知れませんが」

ミサトがふっと息をつく。

ミサト「…それもまあ、大将の魅力なのかしら？　それよりも作戦だけどね…」

ようやく話題が、真面目なことに戻る。

ミサト「霧雨艦隊はもう先発してるわ。大尉もすぐに、ミクを連れて出るって。今回私は、艦の護衛ね」

作戦は決めてたけれど、具体的な割り振りはまだだったから、どうやらケイさんが決めてくれたみたい。

マヒロ「…ミクも出るの？」

ミサト「お嬢と違って、ミクは戦力になるから…。　…まあ正直に言うと、私は反対したんだけれど。　大尉が、オールレンジとか圧倒的な力の差を見せつけた方が、敵がすぐに逃げてくれるからって。　たしかに狙撃は、そういうのには不向きよね」

派手好みだしね、ミクって。

マヒロ「なら、あんまり出番はないのかな？」

私は率直に訊いてみた。

ミサト「艦砲でアジトを撃つぐらいかしら。　巨大戦艦に攻められたとなれば、迫力も違うでしょうし」

グワダン級は、数ある帝国軍艦の中でも、最も大きいのよね。

マヒロ「わかった。　じゃ、護衛はよろしくね」

あたしはミサトにそう言うと、計画に沿って艦隊を進ませることにした…。

【2】

遠くでいくつもの閃光が煌めき、たくさんのビームが筋を引くのが見える。　どうやら、本攻めが始まったらしい。

マリアベル「…来ますか？」

霧雨「…来るさ。　前の戦いでわかったけど、この宙域最大の海賊って言っても、実力はたかだか知れてる。　まともにぶつかって、マヒロには勝てないよ。　なら逃げる。　当たり前だね」

僕は悠々としていた。

リバル「…呼び捨てなんですね？」

またリバルは、違ったことを気にしているようだった。

霧雨「…余裕とは言っても、戦いの最中によそ事考えてると、死ぬよ？　それに、内親王殿下におかれましては…　とかいう時代でもないし、別にいいんじゃないかい？」

呼び方はともかく、霧雨の家をどうこうしようって考えていないのは分かってきた。　それと、欲というか、野心、野望の類いがまったく感じられない。

マリアベル「…ノズル光です。　来ました」

そんな会話もそこそこに、早くも何機ものＭＳがこちらへ来るのがわかった。

戦ってる最中に、アジトの背後に用があるはずもないから、さっそく逃げ出したんだろう。

ジン「いやぁ～　相変わらず、逃げ足が速いな～」

霧雨「元仲間が言うかい？」

僕はそう言いながらも、顔は笑っていた。　短い付き合いだが、このジンは僕らの艦隊のムードメーカーになりつつある。

霧雨「仕掛ける！　どれにボスが乗っているかわからないから、全部落とす！　生かして返すんじゃない！！」

霧雨兵「はっ！！」

言いながら、ビームライフルを向けた。　ちょっとまだ遠いけど、当てる自信はある。

霧雨「みんな行け！　突撃だ！！」

ＭＳが１機爆発したのをきっかけに、霧雨の全部隊が海賊に突っ込んで行った…。

【3】

結局、霧雨大佐の活躍が決め手になって、海賊は壊滅していた。

アジトは落ち、ＭＳは確認したものをすべて、落とすか、捕らえるかした。　別の方向に逃げた賊がいないとは言い切れないけれど、立て直すには、かなりの時間がいるはずだった。

それに、宙域最大の海賊が倒されたことを受けて、弱腰になる賊がちらほら出始めていて、あたしが接触を始めていた。　恩赦とかうまくちらつかせれば、戦わずして賊を減らせるかも知れない。

ミク「…お姉って、そゆコトしてると、なんか見違えるよね？」

…またからかいに来たのか、コイツは。

マヒロ「あ、そ」

あたしが冷たくあしらうと、別の場所からとりなされてしまった。

ミサト「…そういうんじゃなくって、純粋に褒めてるのよ？　お嬢って自覚ないかも知れないけれど、政治家に向いてるんじゃない？　ふつう22歳で、領主はできないと思うわ。　いくら、ご両親が亡くなったからって言っても…」

マヒロ「……。」

ミク「……。」

不意を突かれたので、冗談や軽口で返せなかった。　それは、ミクも同じだったらしい。

ミサト「あ、そんなつもりじゃ…　ごめんなさい…」

あたしとミクが深刻な顔をしたのを見て、ミサトは急に謝ってきた。　言ってはいけないことを言ってしまったと思ったのだろう。

マヒロ「…別に謝らなくても…。　時代が時代だもん。　テロとか暗殺なんて、珍しくないよ…」

あたしの養父母、ミズサワの両親は、帝国を狙った爆破テロで命を落としていた。　３年前の事で、それまでのあたしは、どこにでもいる普通の大学生と、ほとんど変わらない生活を送っていた。

ミズサワの両親は、あたしが皇族であるにも関わらず、最期まであたしを政治に関わらせようとしなかったのよね。　軍務なんかもっての他で、ＭＳに乗ったら、逆に怒られたこともあるくらい。

そんなあたしが、いまはこうして軍艦に乗り、領主として政務をしているんだから、皮肉と言えば、これ以上の皮肉はないのかも知れない。

ただ、もともと経済学部で、領地の統治とか、発展なんて分野には興味があったし、何より、ケイさんとミサトがいてくれた。

…それにあたしは、まだマシな方だったのよね。

あのテロの日、あたしは大学のサークル仲間と出かけていた。　ミズサワの両親は、あたしが予定があると言えば、政治絡みの招待なんか、みんな断ってくれてたから。

ただその日、偶然予定のなかったミクは…。

ケイ「…考え事の最中悪いが」

マヒロ「えっ！」

あたしははっとした。　慌てて辺りを見渡す。　いつの間にか側にいたケイさん。

マヒロ「…なに？」

ケイ「霧雨家のことだが、返礼がいるかと思ってな。　援軍に来てもらった訳だし、今後の関係も話さないといけないかも知れない」

…たしかにそうよね。

援軍は、本当なら本国に出して欲しいと頼んだものだった。　けど、ルナ2の軍はいつものようにだんまり。

代わりに名乗り出てくれたのが、霧雨大佐なのだった。

マヒロ「霧雨大佐はどう言ってるの？」

ミサト「むしろ来てほしいって。　返礼はともかく、今後の連合については、興味があるみたいだったわ」

…立場はどこも、似たり寄ったりか…。

ケイ「…で、どうする？」

マヒロ「もちろん行くわ。　詳しい予定とか、頼めるかしら？」

ケイ「わかった」

ミク「わ〜〜い、旅行だ〜」

お子様は無自覚に騒いでいたけれど、あたしは違うことを考えていた。

今は、まだミズサワと霧雨だけだけれど、こうして帝国貴族、軍、本国が手を取り合っていけば、少しずつでも世界は纏まっていくんじゃないかって…。

第１５章　封印された魔物（前書き）

（登場するＭＳについて）

続きです。

それでもやはり、問題は残ってしまいました。

理由は、最近のガンダムの技術進歩が早すぎるから（笑）

宇宙世紀では、毎年のように戦争をしながら、（戦争中の方が、技術開発は早い例が多い気がします）それでもザク（ＭＳ誕生）からサザビー（ＮＴ用ＭＳの完成形）までは、十数年の月日を要しています。

ＮＴ用ＭＳの完成を、キュベレイだとしても、約１０年です。

それが、例えばＳＥＥＤでは、ジンからストライクフリーダム（ドラグーンとか、オールレンジとか）まで５年くらいでしょうか？

しかも、終戦でザフトは混乱していたはずなのに、あっという間に、新作ＭＳを出していました。

そのため、仕方なく宇宙世紀のＭＳの開発ペースを上げています。

おかげで、ギラズールのビームを、デナン・ゾンがビームシールドで防ぐなんてシーンが出来てしまったりもした訳ですが、そこはパロディですし、そういう勢力は、キャラが技術が早く発展するような政策を実行してますから。（笑）

そのへんの辻褄合わせを、どう捉えるかが、この小説の後半の物語の楽しみ方に繋がるのですが、それは…

あと５０章は先でしょう（爆）

第１５章　封印された魔物

帰って早々、また出撃か…。

シュバルツ中佐の基地を後にし、特に何事もなく所属する基地にたどり着いた私だったが、その翌朝早朝、いきなり遠征の命令を受けていた。

レナ「お早うございます、隊長」

髪をヘアゴムでくくりながら、レナが合流。

ラリー「…どこが狙われたんです？」

ディジョン「グラーフェン・メビス。　東欧だな。　詳しくは、これからブリーフィングがある」

さらにアルヴィンも合流し、ブリーフィングルームに向かう。

ただ、結局ブリーフィングの内容はシンプルだった。

グラーフェンを襲った部隊を排除するための援軍だ。　すでに落ちていれば奪回になるが…

とにかく、援軍をシュバルツ中佐が率いるから、指揮下に入って、上空を護衛をしろという訳だ。

あの基地に援軍になるような兵力がいたかは疑問だったが、不足なら後方から回すだろうし、私が気にすることではないだろう。

レナ「…隊長。　シュバルツ中佐とは縁がありますね？」

なぜかレナは嬉しげだった。

ディジョン「何だ？　さてはシュバルツ中佐に惚れたか？」

…顔を見たくらいだったが、たしかに紳士ではあったな。

レナ「そ、そんなんじゃあらません。　わ、私は…」

そんな会話を楽しみつつも、私はＺＰｌｕｓのコックピットに入り

込む。

ディジョン「よし、神経接続開始だ」

言い忘れていたが、ディジョン連隊は

★コフィン（棺桶）システム★

という、機体と人間の神経を接続するシステムを使っていた。

脳波で操るサイコミュに似たシステムで、脳の発する電流を感知して機体を操る。　つまりは、考えるだけで機体を動かすことができるんだな。

帝国が荒れる前に開発した最新技術で、Ｚ－Ｐｕｌｓの性能も合わせると、このご時勢では、圧倒的な戦力差となることも多い。

ともあれ、無事に接続を終えた私たちは、グラーフェンに向けて飛び立ったのだった…。

【2】

そしてその頃、グラーフェン・メビス…

エルフレア「こいつ、出力が半端じゃない。　武装は乏しいのに…。
格闘戦用の機体なのか？」

その言葉は、まるで的を外れていた。

エルフレアが見つけたその機体の名前は、ガンダムＧＰ―２サイサリス。　帝国の開発した中で、唯一の核攻撃専門のＭＳだったからだ。

今は核弾頭を積んでいないため、サーベルとバルカンしか持たない、格闘戦専用ＭＳと誤認してしまったのだった。

エルフレア「ドートレスとは似ても似つかない…。　機体が…　重い…」

敵艦隊や敵基地への、単独奇襲核攻撃を想定して開発されたサイサリスは、核が装備された重い機体を高速で機動させるべく、従来の機体からは考えられない出力を誇っていた。

そのため関係者をして『オーパーツ（場違いな加工品）』と言わせたほど。　小回りこそ効かないものの、直線機動なら、どんな新鋭ＭＳにも劣ってはいなかった。

エルフレア「…でも、やるしかない！！」

エルフレアは口を結び、機器を操作する。　特性はドートレスと似ても似つかないが、操縦系統は同じ帝国製なのか、かなりの部分が共通していた。

エルフレア「そこに…　あそこ」

センサーが捉えたのは、リーオーが２機。　航空部隊はいなかった。

エルフレア「許せ…」

手始めに城門の脇にいたリーオーめがけて降下すると、ビームサーベルで斬り下げた。

兵「敵か？　なんだアレは？」

そう言いながらも、もう1機のリーオーがドーパーガンを向けるが、盾ごとサイサリスに体当たりされ、あえなく壁まで吹き飛んでいた。

そして、コックピットをサーベルで突き刺す。　戦うならば同情はしない。　ラドとロンドの教えだった。

ディオン「…兄さま…」

エルフレア「…大丈夫だから、もう少しだけ我慢するんだ」

エルフレアの膝の上に、無理矢理ベルトで止められた形の弟に、エルフレアは硬い声で言った。

エルフレアは、再度サイサリスを跳躍させて広場に向かう。　気がついたリーオーがさらに何機か集まり、射撃を浴びせてくるが、みなシールドで防いだ。

エルフレア「あぁぁぁ～～～～！！」

叫びながらリーオーの懐に飛び込み、ドーパーガンごと切り落とす。
さらに、コックピットを蹴り飛ばした。

壁まで弾け飛んだリーオーが建物を壊す。ディオンはそれで息を飲んだが、エルフレアは気がつかない。

さらにもう1機いたリーオーを、サーベルで真っ二つにした。

ディオン「…人は…　踏みつけてないよね？」

ディオンの言葉に、思わず息を飲んだ。慌てて軍用道路に戻り、モニターで周囲を確認するが、それらしき死体はなかった。

そのかわり、エルフレアの目に飛び込んできたのは、帝国兵の銃殺された死体だった。

広場の端に並べられており、その先を辿ると、まだ敵兵に捕らわれている兵士が何人か生きていた。

エルフレア「彼らを離せ！　死にたいのか！！」

スピーカー越しに怒鳴りつけ、地面をバルカンで掃射すると、敵はバラバラと逃げ出した…。

【3】

一方その頃、シュバルツ中佐の基地では…。

帝国士官「ドップの積み込みを急げっ！　ＭＳはまだかっ！」

急な出撃準備の慌ただしさの、真っ只中にあった。

レジスタンス討伐用の前線拠点、しかも建設途中だったが、直線距離では偶然、グラーフェンに最も近い位置にあった。　そのため、急遽救援の命令が下されたのだった。

シュバルツ「現在のグラーフェンの戦況は？」

シュバルツが問う。

帝国兵「…グラーフェン城まで、ほぼ制圧されたようです」

シュバルツ「わずか半日でか…。　レジスタンスにしては、なんとも鮮やかな手並みだが…」

帝国兵「…しかし、つい今しがた入った報告によりますと、１機のＭＳが果敢に反撃を続けているとのことです」

シュバルツ「…わずか１機でか…。　なかなかの手合いの者だな。…ＭＳ隊の積み込みはどうか？」

感想を口にしながらも、準備の確認に余念がない。

帝国兵「はっ！　中佐のトールギスを含め、まもなく全機の搭載が完了いたします！」

シュバルツ「わかった。　準備のできしだい、発進せよ！　昨日の者達には、可能ならば先行するよう連絡しておいてくれ」

帝国兵「了解しました！」

敬礼し、駆け去っていく帝国兵。

そして、その後すぐ、シュバルツのガウは、グラーフェン・メビス目指して動き出した…。

【4】

エルフレア「皆…」

エルフレアはコックピットを開け、兵士達に歩み寄る。

帝国兵A「エルフレア様…」

帝国兵B「…よくぞご無事で…」

涙を浮かべている兵たちの手錠を壊し、その身を解放する。

？？？「…エルフレア様…　ディオン様…」

聞き慣れた声がした。　そこには、血の滲んだ布を巻いたラドが、他の兵に支えられて立っていた。

エルフレア「ラドっ！　無事だったか！」

そう再会を喜んだエルフレアだったが、ラドはその場に崩れ落ち、涙を浮かべるだけだった。

エルフレア「ラド…？」

ラド「……。」

ラドが目線を動かした。　その先にあったのは…。

エルフレア「…う、嘘だ…　そんな…」

エルフレア「うあぁぁぁぁぁ～～～～！！」

泣き叫ぶエルフレアが見たモノ、それは、城壁から吊るされた、彼の最も敬愛した…

…父と母の亡骸。

エルフレア「うぁぁぁぁぁ～～～～！！！」

彼は、泣くためだけに、全ての力を使っていた。　地面に目を落とし、目を見開き、ただただ泣き叫び続けた。

エルフレア「嘘だ…　嘘だぁぁぁ～～～！！」

ラド「エ、エルフレア様っ！　今はお気をたしかにっ！！」

ラドの言葉も耳に届かず、兵たちに抱えられ、泣き叫ぶ少年は、まるで錯乱にしているかのようだった…。

…だが、そこに響いた戦闘ヘリと、それに続くエアリーズの轟音。

ラド「むっ、敵襲か？」

ラドが空を睨む。　帝国兵に微かに動揺が走った。

そこに立ち上がり、進み出たのは…。

ラド「…エ、エルフレア様？」

ついさっきまで泣き崩れていたとは思えない、無表情な少年。

ラド「…エルフレア様？」

エルフレア「…ラド…　ディオンを頼む」

それだけを告げると、エルフレアは再び機上の人間となった…。

第１６章　ガンダムを狙う影（前書き）

（世界情勢について）

ＭＳに続いては、いまこの帝国社会?がどうなっているかの解説です。

全世界が荒れてるのは、そろそろ当たり前になりつつありますけれど、具体的にどこがどうなっているのかを、ざっと説明していきますので、お願いしますね～

第１６章　ガンダムを狙う影

レアルタ「…しっかしまあ～　よくこんなんでガンダム乗ってたよなぁ～」

レアルタが感心、というより呆れて言う。

傭兵のゴトーが去った後、ガンダムに乗っていたのが、わずか１２歳のゲットだったのを見て驚いたヴァイスとレアルタだったが、ゲットの操縦技術を目の当たりにして、さらに驚きを隠せない様子だった。

ゲット「…だって、しょうがないじゃないか。　ＭＳを動かしたことなんてないんだから…」

ヴァイス＆レアルタ「だったら乗るなよ！」

息の合ったにツッコミを浴びたゲットは、急にシュンと小さくなる。

ヴァイス「…だがまあ、乗りたいってんなら、乗れるようになるしかないだろ？」

レアルタ「しゃーねーなー。　よしヴァイスさん。　ここは公平に、ジャンケンでいこう」

ゲット「…ジャンケン？？？」

よく状況が呑み込めていないゲットを置き去りにして、ヴァイスとレアルタはジャンケンを始めていた。

…で、ヴァイスが出したのはグーで、レアルタはチョキ。

ヴァイス「…うっし」

レアルタ「いや、やっぱこういうのは3回勝負…」

ヴァイス「男らしくね～な　負けたんだから、諦めて励めよ？　俺は機体の方をなんとかしてやるからよ」

なんだか話がついた風なヴァイスは、ゲットに向き直るとこう言った。

ヴァイス「おい…　たしか、ゲットっつったか？　ガンダム借りるぞ？」

ゲット「…は？　なんでそうなるんだよ！」

ゲットは抗議の声を上げる。

ヴァイス「…だから、乗りたいんだろ？　ガンダムに」

ゲット「そりゃ…」

2人にさんざん言われたせいか、ゲットはふだんの元気がない。

ヴァイス「…だから、ガンダム貸せ。　俺がちょいと整備してやっからよ？　で、その間にお前は、レアルタ先生にしごいてもらえ」

ゲット「マジかよ！」

レアルタに教えてもらえると知って、急に元気になるゲット。

レアルタ「…負けちまったしな…。　やってやるよ」

諦め顔なレアルタと、やる気満点のゲットは対照的だったが、とにかくゲットを一人前にするべく、２人は動き出すのだった…。

【2】

だが、そんな３人を遠くから見つめる影。

???「…あれがガンダムかよ？」

デジタル式の双眼鏡の倍率を上げる。

???「…タイプＧＰ―１…地上仕様だな…。　しかも隣ＭＳ、もしかして帝国狩りか？　ヤバいことにならねぇうちに、大佐に一発入れとくか」

帝国兵「オクサイド司令。　現地に潜入した、スパンツ中尉から連絡が入っています。　回線を回しますか？」

オクサイド「そうしてくれ」

帝国兵「はっ！」

しばらくすると、聞き慣れたスパンツの声が聞こえてきた。

スパンツ「…大佐ぁ～　見つけましたぜ、ガンダム。　間違いないっすね」

粗野な感じが、一応は士官の中尉らしくないが、オクサイドは気にしない様子で続ける。

オクサイド「…そうか。　だが、それだけではあるまい？」

含みのある言葉が続く。

スパンツ「もちろんっすよ。　ガンダムと他に2つMSがいるんすけど、ありゃフェニックスナイツ、帝国狩りの2人だ。　もしかしたらガンダムの奴、反帝国の仲間入りするつもりかも知れねぇですよ？」

オクサイド「…少し厄介なことになりそうだな」

スパンツ「…かも知れないっすね」

オクサイド「…反帝国軍がガンダムを手に入れれば、妙な勢いがつきかねん。　いまのうちに潰しておくに限るな。　スパンツ中尉は一旦戻れ。　ガンダム捕獲作戦開始する！」

オクサイドはそう宣言した。

スパンツ「…了解っす。　ところで、ユーリの嬢ちゃんはどうする

んです？　まだ連絡つかないんっすけど？」

オクサイド「…ストヴァル少尉は放っておけ。　別任務だとか言ってはいるが、好きになれん。　少尉なしでガンダムは捕獲する」

スパンツ「あいよっ！」

それで、軍用通信らしくない通信は終わった…。

【3】

レアルタ「はいはぁ～い、オニさんこちら～」

…とまあ、嫌がってた割には、なんか明るいレアルタは、ゲットが乗ったジムストライカー（＝ヴァイス専用機）を相手に、模擬戦とも呼べない模擬戦を続けていた。

ゲット「…逃げ回ってばかりじゃ、練習にならないだろ～　って、痛ってぇ～！！！」

急接近したレアルタのザクにコックピットを殴られ、シートに頭をぶつけたゲットが喚く。

レアルタ「アホか、お前は！　いまは殴っただけだが、あれで武器持ってたら、コックピット破壊で撃墜だぞ？　生意気言うヒマがあったら、機体くらいまともに動かせよ！」

ゲット「わかったよ…」

渋々とレアルタメニューをこなすゲット。

ヴァイス「うっしゃあ～！！」

そんなことをしていたら、ゲットのガンダムをいじっていたヴァイスが、大きく伸びをした。

レアルタ「ヴァイスさん、でき上がりっすか？」

ヴァイス「全部バラしたワケでもないから、まだまだやり足りないけどな？　関節のメンテと、お子様仕様のＯＳにしたくらいだ」

ゲット「お子様って…」

ヴァイス＆レアルタ「なんか間違ってるか？」

ゲット「ありがとうございました～」

またまた息のピッタリの２人に、やり込められるゲット。

ヴァイス「…だけどよ？　ゲットって、ガンダムはどこで見つけたんだ？」

ふと、ヴァイスがこんなことを聞いてきた。

ゲット「どこって、街の近くの遺跡だけど…」

ゲットはありのままを答える。

ヴァイス「レアルタ。　そこ行ってみねえか？　動けるガンダムが落ちてたくらいだから、他にもなんか拾えるかも知れねぇしな」

レアルタ「お、いい考え。　あと2機くらい、ガンダム落ちてないっすかね？」

なぜかやけに盛り上がる2人に…

ゲット「ガンダムは落とし物じゃねぇ～～～！！」

ゲットの叫びが響き渡った…。

【4】

さまざまな思惑が入り乱れるなか、ゲットがゼフィランサスを見つけた遺跡にも、新たな来訪者が…。

???「…もぬけの殻か…」

そう呟いたのは、どこかに幼さを残した少女。

???「…これで、どう？」

少女が、その場に残されていた端末のキーを、慣れた手つきで操作する。

だが、その端末には何も表示されない。

???「…ちっ…　小細工を…」

苛立ち気味に少女が端末を叩くと、画面が消えてしまう。　どうやら、完全に機能が停止してしまったらしい。

？？？「…まあいいわ。　ガンダムが何であろうと、私の敵じゃないわ。　現れたら…

…切り刻むまでよ」

少女の声は、ひんやり涼しい遺跡の中の空気よりも、もっともっと冷たかった…。

第17章　困った天才少女（前書き）

（世界情勢）

一旦は荒れ果てた世界ですが、それでも地域差はありました。

ここでは、まず宇宙から書いていきますね？

宇宙は旧宇宙連合により、月面都市と7つのサイド（コロニー群）が作られました。　それを、まるごと帝国が占領したのですが、5年前に帝国が無茶をやらかしたせいで、治安は崩壊してしまいます。

その中で比較的纏まりを維持できたのが、オードリー家（物語未登場）の月と、レンカ（サイド7→霧雨）、マーガレット（サイド6→ミズサワ）です。

これらは5年の間に、海賊に悩まされながらも、次第に治安を回復し、力をつけていきます。

その反対が、ネグレスト（サイド2）と、キッソス（サイド4）

ともに、大々的に帝国に逆らったため、5年前に戦略核攻撃を受け、完全に人が住める状態になくなりました。

人がいませんから、物語にもほとんど登場しません。

他のサフラン（サイド5）などのコロニーは、元々帝国側ながら、領主が殺されたり、逃げ出したりして、帝国の支配を抜け出した形です。

ですが、帝国がいなくなったから独立（というより放置?）されただけのコロニーですから、国としては機能していません。

物語に登場はするのですが、1つの軍や勢力として語られることは、あまりないかも知れません。

第17章　困った天才少女

海賊討伐から1週間。

補給を終えたあたしの艦隊は、針路を霧雨家の統治するコロニー『レンカ（旧連合名サイド6）』へと向けようとしていた。

マヒロ「こうして、安心してマーガレットを留守にできるなんて、何年ぶりかな～」

あたしの感慨はひとしおだった。　ここ数年来、海賊がコロニー付近で暴れまわっていて、その対応にかかりきりの日々だったから。

あたしが海賊討伐に欠かせなかった、なんてことは言うつもりはないけれど、そんなあたしでもいないよりはマシなくらい、つい最近まで治安は崩壊していた。

ミク「旅行なんて、何年ぶりかなぁ～　ワクワク」

喜ぶミクを引き連れ…

…

…

…引き連れ???

マヒロ「って、なんでまたミクが乗ってるのよ！　学校はどうしたの?!」

あたしは、中学3年生に厳しい指導を入れる…

…つもりだったのだけれど。

ケイ「……。」

ミサト「……。」

何か様子がおかしい。

ミク「あ、それならご心配なく。　おととといテストやったら、先生がこころよ～く送り出してくれたから」

そう言ってミクが差し出してきたのは、マイクロチップ。　あたしの席の端末に入れると、成績表と表示された。　どうやら、そのテスト結果らしい。

マヒロ「…なになに…　帝国語８９点、歴史１００点、地理９８点、数学１００点…」

見るからに優秀な成績が続く。

マヒロ「…なにこれ？　ほとんどの教科が１００点じゃない？」

ミクを見ると、にこにこしながら腰に手をやったりしている。　つまり、成績良好を理由に、ズル休みを許可されたんだろうか？

マヒロ「…あんたの成績が、優秀なのは知ってるけどさあ…　それでも学校は行かなきゃ…　って、物理２８点？？？」

あたしが見つけたのは、ミクが得意なはずの物理の意外な点数だった。

マヒロ「あんた、物理は得意なはずよね？　この成績はいったい…」

だけど、あたしはその時、自分が訊いてはいけないことを訊いてしまったことに、まったく気がついていなかった…。

【2】

マリアベル「…諸元入力完了しています」

霧雨「叔父への連絡は？」

マリアベル「もちろんです」

ふ～っと大きく息を吐くと、僕は席に深く腰かけた。　正直言うと、叔父に会うのは気が重い。

マリアベル「レイがうまくやってくれたようですね。　新型ＭＳの試験は、順調だったそうです」

そんな気分を察したのか、マリアベルがさっと違う話題を持ち出す。

レンカは工業が盛んで、ＭＳの製造もずっと以前から手がけていた。　資材さえあれば、ゲイツなんて旧式ＭＳに頼る理由はない。　しかし現状では、資材がないために、高性能なＭＳを造るための合金が量産できていないのだった。

リバル「霧雨様の叔父嫌いも、相変わらずですね。　悪い人だとは思えないのですけれど…」

一方で空気を読むことが苦手なリバルは、僕の気も知らずに、叔父の話題を引きずる。

霧雨「…嫌い、とは違うんだけどね…。　まあ、話題にしたくないという意味では同じなんだけど」

マリアベル「…それで、今後あちらとは、どうするつもりですか？」

マリアベルが、横を航行するグワダン級に、あらためて目線を向けていた。　つまりあちらとは、マヒロのことだ。

霧雨「…連合する分には、どちらも異存はないだろうね」

マリアベル「…その後、ですか？」

霧雨「宇宙をこんなにしたのは、帝国自身だ。　帝国の改革なくし

て、宇宙に明日はない。　その意志がマヒロにあるのかな…」

僕は目を閉じた。

マリアベル「私の個人的予測…　それも、何の根拠のないものですが…」

マリアベルが、根拠もないことを言うのはめずらしい。　そういう性格なのだ。

マリアベル「…なにか、予想以上のことがありそうで、胸騒ぎを感じますね」

僅かな憂い表情。

霧雨「マリアベルは、感受性と観察力もコーディネイトされていたね？　つまりコーディネイターの勘、かい？」

マリアベル「……。」

マリアベルは、僕の質問に沈黙と悩ましげな表情で答えた…。

【3】

ミク「…だって酷いんだよ？　こんな難しい問題出すんだもん！」

ミクはそう言うと、あたしの端末を横から操作した。　画面にはテストの詳細が表示される。

マヒロ「…なになに…　ミノフスキー粒子の特徴と、主な使い方の例をあげなさい？」

特徴は、特定の電波を妨害するとかかな？

使い方は、散布によるレーダーの妨害がまず頭に浮かぶけれど、女子中学生に書かせるなら、核融合炉による発電や、宇宙船の航行がいいかも知れない。

学校のテストで、戦争を露骨に話題にするのは、ちょっと避けたいものね？

ミク「こんなん、絶対無理だってぇ～」

だけど、ミクが見せた解答欄に書いてあったのは…。

『…ミノフスキー粒子は正負に荷電する一方、タウフォースなる斥力を生じる。　それは濃度において異なるものの、立体格子状に整列する特徴を有する。　それを特徴を詳細に述べるならば…

…β♀＆♪♂→★★★▽♂！！＞××ＡＧＤ×β…

また使い方では、ヘリウム３と重水素を燃料に、原子核融合を…

…先に述べた立方格子の…

…炉心に送り込み…

…容易に☆★α％★＆℃∀？

★☆＞♪▽☆☆★…』

マヒロ「…これなに…」

はっきり言って、目がチカチカした。　一瞬呆然としちゃったけれど、気を取り直して、ミサトに説明を求めてみる。

ミサト「…簡単に言うと、ミノフスキー物理学の特徴と、使用実例の構造原理ね。　それも、研究所レベルの」

ケイ「軍の将校でも、理解できる者の方が少ないだろう」

ミク「でしょ？　中学の問題にそんな難しいのを、しかも４０分で書けなんて、いじめとしか思えないよぉ～」

大げさに泣いて見せるミク。

でも、これってどう見ても、勝手に問題を難しくしてるだけじゃない。

あたしは派手にため息をついた。

それから、どうしても気になった事実を、ケイさんに確認してみることにした。

マヒロ「…ケイさん。　1つだけ聞いていいかな？　先生、この解答の意味、分かったと思う？」

ケイ「…こんなものがすらすら読解できたら、中学の教員には、なっていない場合が多いだろうな」

…こうして、レンカにミクが同行する事は、みんなの呆れ顔と共に正式に許可された…。

第１８章　激情のエルフレア（前書き）

（世界情勢）

続きです。

宇宙に続き地上ですが、こちらはさらに細かいので、何回かに分けて解説を。

まず名前だけ出て来ているのが、帝国の首都パンドラール。

名前は変えていますが、宇宙世紀で言う所の、チベットのラマです。

（逆襲のシャアでいきなりやられた所）

帝国の首都だけあって、いまも健在で、政治的混乱があるものの復興中です。

まもなく物語に絡んできますので、覚えておいていただけると、わかりやすいですよ～

第１８章　激情のエルフレア

エルフレア「…よくもっ！　よくも父上をっ！！　母上までもっ！！！」

エルフレアの目には、違った意味で曇りがなかった。

サイサリスを駆り、一直線に敵に向かう。　だが敵は、市街をもう制圧したと思っているのか、はたまたたった１機のエルフレア機を甘く見ているのか、銃撃こそ浴びせるものの、回避運動をせず、編隊も崩そうとはしない。

エルフレア「　…たきだ…　父上と母上の仇だっ！！」

叫んだエルフレアに呼応するように、サイサリスが射撃の隙間を縫いながら跳躍する。　空中で格闘戦を挑まれるとは思っていなかったのだろう。　編隊を組んだままのエアリーズの１機が斬り捨てられ、さらに墜落の時にヘリを巻き込んだ。

そして、ビルの…

と言っても、度重なる爆撃のせいで廃墟となっていたが…

の屋上に立ったサイサリスは、慌てて散開するヘリの1機に狙いをつけ、バルカンで墜とした。

さらに、右脇から突っ込んできたエアリーズを、ハエでも追い払うかのように、サーベルの腕だけ振って真っ二つにする。

エルフレア「…そんなものか…　そんな覚悟で父上たちを殺したのか？　…殺したんだから、殺される覚悟で来いよっ！！」

エルフレアの声が敵に届くはずはない。

だが、その場の空気は、確実にエルフレアのものだった。

ヘリが迫るが、微動だにしないサイサリス。　さらに迫ると、跳躍して盾ごとぶつかり爆発させた。　それぱかりか、その陰にいた形のべつの1機まで斬り捨てている。

そうしてビルからビルへ飛び移り、移る度に1機か2機の敵が墜ちていった。

エルフレア「…ん？」

エルフレアがモニターを覗き込む。　そこには赤い警告灯が表示され、さらに奥には3機のリーオーが映し出されていた。

どうやら脚に1発被弾したらしい。

エルフレア「…そうだ…　それくらいじゃなきゃ、やりがいがない…」

エルフレアの目に、もはや人としての情はなかった。

ビルから飛び降りると、被弾したのとは逆の脚で、そのままリーオーの頭に乗りかかるようにして、踏み潰した。

残ったリーオー2機が後ずさる。

しかし、踏み込むサイサリス。

直後、背を向け逃げ出したリーオーを、背中から切り裂いた。

敵兵「…た…助けて…」

震えた声。

エルフレア「…そう懇願した人間を、何人殺したんだ？　殺したら殺されるっ！　そんなの当たり前だろっ！！」

コックピットを一突きだった。

機体は爆発せず、サイサリスにもたれかかるが、それをエルフレアはサーベルを引き抜きざまに蹴り飛ばした。

周囲が騒がしくなる。

どこからか声が聞こえ、モニターに緑色の光が急に増えた。

ラド「…エルフレア様っ！　味方の援軍です。もう大丈夫ですから、エルフレア様は帰投してください」

エルフレア「…わかった…」

そう言いながらも、エルフレアは切ったばかりの通信パネルを拳で叩きつけていた。

エルフレア「…遅い…　みんな遅すぎる…。　援軍も…　反撃も…　みんな、遅すぎる…」

エルフレアの呟きだけが、コックピットに残った…。

【2】

可変ＭＳの機動性を生かし、本隊より少しだけ早くたどり着いたグラーフェン市街で私が見たものは、たった1機のＭＳに敗走するＭＳの群れだった。

いや、正確に言うなら、敗走より潰走が正しい。　それはまるで、1匹の肉食獣から逃げる草食獣の群れだったからだ。

ラリー「…何だこいつら…。　いったい何にやられてるんだ?」

ラリーの声が、私の感想を代弁する。

レナ「そんなことより隊長。　敵が乱れているなら、私たちだけでも何とかなります。　追撃命令を!」

…わずかな時間。

ディジョン「…よし！　各機散開して敵に当たれ。　撃破撃墜よりも、敵を追い払うように動く。　逃げ道は塞ぐなよ？　余計な被害が出る」

レナの求めに応じて、追撃の命令を出した。　命令を忠実に守り、他の3機は上空からの掃射に徹している。

だが、すでに逃げ始めている敵には、それで十分だったようだ。私たちが墜としたＭＳは5機に満たないが、敵は市街から完全に離れつつある。

シュバルツ「…見事だな。　敵の退路をあえて塞がないことで、被害を抑えたか」

追いついて来たのか、シュバルツ中佐から連絡が入る。　トールギスとガウのマーカーが、センサーの片隅で存在を主張していた。

ディジョン「…制圧したはずの市街に残っていたＭＳが思いの外手強くて、私の連隊と挟撃の形になったせいでしょう。　しかし…」

シュバルツ「挟撃の片方が、たった1機のＭＳだったということか？　いいではないか。　帝国にもまだ、気骨のある騎士がいたとい

うだけのこと。　むしろ喜ばしいことだ」

ただ、グラーフェンに突っ込んだ瞬間に、私が感じた感覚はそんな生易しい感覚ではなかった。

まあ、それをいま中佐に告げたところで、何にもなりはしないだろうが。

そして結局、グラーフェン・メビスから、敵はその日のうち排除されることになる。

シュバルツ中佐の言うように、思わぬ市街の残存戦力に、腹背を同時に攻められる形になった敵は、不利を悟るとあっさり退いて、二度とグラーフェンを伺う事はなかった。

後で知ったことだが、グラーフェンの襲撃自体が、帝国の側面を突く支作戦であって、本隊はさらに西で、別の帝国軍と、激戦を交えていたのだ…。

【3】

エルフレア「…大丈夫か？」

ラド「…ここは？」

ラドが辺りを見回すと、真新しい白いシーツと、カーテンが目に入った。

エルフレア「…市街の病院がいくつか、無傷で残っていてね。　ここはその1つだよ」

エルフレアは自分の枕元にいた。　申し訳ない気がして、起き上がろうとした途端、身体に激痛が走った。

エルフレア「急に動くな！　気を張っていたから気がついていなかったのだろうが、お前は全身傷だらけの重傷で…　3日も寝たままだったんだ」

3日もという事実に驚きながらも、ラドはエルフレアに違和感を覚えた。

ラド「…エルフレア…様？」

エルフレア「…いまはゆっくり休め」

そう言いながら立ち上がるエルフレアに、何故か不安を感じる。

ラド「エルフレア様。　バッフェル様のことは…」

エルフレア「言うな」

静かに、しかし強く言い切られた。

エルフレア「覚えている。　錯乱などはしていない」

ラド「は…　失礼いたしました」

エルフレア「ディオンにも教えた。　しばらくは、塞ぎ込むかも知

れない…」

エルフレアはラドに背を向けた。

ラド「今回のことは…」

言いながら目をつぶった。　涙がにじんでくるのがわかった。

エルフレア「…今は、シュバルツという佐官が、グラーフェンを取り仕切ってくれている」

背を向けたままのエルフレア。

ラド「…聞いたことがあります。　優秀な軍人だと…」

エルフレア「…そうか。　それは何よりかな。　民にとってはそれが…」

違和感はさらに高まった。

エルフレア「…ロンド隊長たちが戻り次第、討伐軍を組もう」

ラド「…エルフレア様？」

違和感は最高潮に達し、振り返ったエルフレアを見たラドは、その意味を理解した。

エルフレア「…今、世界が乱れているのは確かだ。　ならば…

…膿は消さねばならん」

エルフレアの目は、凍てつくまでに冷たかった。

…ラドの目からは、違う涙がこぼれた。

ラドは、グラーフェンの優しかった王子が、遥か遠くへ去ってしまったのだと、痛いほど感じていた…。

第１９章　守るべき…　もの（前書き）

（世界情勢）

続きです。

それで、帝国首都パンドラール（チベット）がなんで物語にあんまり出てこないかと言いますと、そのすぐ西のインドに『インドラ』という、反帝国の国家ができてしまい、そことの戦いで一杯一杯だからです。

ちなみに、難しい設定を覚えていらっしゃる方は、ピンと来たかも知れません。

そう。　このインドラ、帝国の皇太子を殺した仇敵国家なんですよ。

だから、非常に仲が悪い。

よって、宇宙や他の地域よりもインドラを…　と繋がって、ああなるほど（笑）

第19章　守るべき…　もの

エヴァニー「おはよう、リナレス」

リナレス「…ぉ…　おはよう…」

サヤリがグランズに加入した翌朝。　エヴァニーは、いつもと変わらない挨拶をしたが、されたリナレスはそうでもなかった。

リナレス「…ぇと…　エヴァニー？」

エヴァニー「…なに？」

そんなリナレスに、一瞬首をかしげるエヴァニー。

リナレス「…あ、あのサヤリって子、本当に大丈夫なのかな…？」

おずおずと疑問を口にする。

エヴァニー「…まあ、間違いないだろう。　シベリアに調べてもらったし、サヤリにも話を聞いたけど、マリンピアについて、言って

ることはみんな一致してた。　持ち物も調べたが、変わったところはなかったしな」

それでも、心配そうな表情を崩さないリナレス。

エヴァニー「…大丈夫だよ。　あいつはスパイなんかじゃない。もしそうだとしたら…」

リナレス「スパイだったら…？」

エヴァニー「追い出せばいいじゃないか」

リナレス「それだけ?!」

リナレスはつい声をあげてしまう。　その声が聞こえたのか、当のサヤリが姿を見せた。

サヤリ「…追い出すなんて、私も嫌われたものだ」

苦笑いするサヤリ。

サヤリ「…そちらのお嬢さん。　そんなに私が嫌いか？」

リナレス「嫌いかとかじゃなくって、信用できないだけよ！」

だんだんリナレスの語気は強くなり、険悪なムードになりかける。

エヴァニー「やめろよ、２人共…」

サヤリ「ああ、悪かった…。　それよりも、グランズの今後なんだがな…」

エヴァニーが止めに入ると、あっさり矛を納めたサヤリ。　そして、そんなエヴァニーとサヤリに、リナレスは口を尖らせるが、エヴァニーは気がつかない。

リナレス「…なによ、グランズのこれからって。　新入りのクセに偉そうに」

不機嫌なリナレス。　そして…。

ナディア「…エヴァニーにも困ったものだね」

シベリア「まだエヴァニーは若いからな？　女心とか理解するには、まだな…」

顔を見合わせる、古参の2人がいた…。

【2】

そうして、サルティンの死を乗り越え、サヤリという新たな仲間…兼、小さな爆弾を加えたグランズに、転機は訪れようとしていた。

帝国兵A「おぅ、そこの姉ちゃん。　こっちは、街を守ってやって疲れてるんだ。　ちょっとこっち来て、相手してもらおうか」

帝国兵B「そうだ。　俺達がレジスタンスと戦わなかったら、こんな街なんざ、一発で吹き飛んじまうんだぜ？　ありがたいって思うのが当たり前だろ？」

帝国兵C「…そして、感謝の気持ちは、やっぱ言葉より行動で示さねぇとなぁ…」

女「…そ、そんな困ります…」

背を向け、立ち去ろうとする女の行く先を、回り込んで塞ぐ。

帝国兵B「…堅いこと言ってをじゃねぇよ。　悪いようにはしねぇって」

さらに無理矢理、女の手を取ろうとする帝国兵の1人。　昼間から酔っているのか、顔が赤いうえに、足取りが怪しい。

女「…だ…　誰かたすけ…」

…そんな帝国兵を見つめる影。

男A「…もう限界だ。　あいつらぶっ殺してやる！」

ナイフを片手に飛び出そうとする男。

男B「気持ちはわかるが、いまは耐えろ。　今行っても殺されるだけだぞ」

もう1人の男が、羽交い締めにして押し止める。

男A「しかしっ！！」

男の激昂は収まらない。

男B「…わかった。　なら、俺のつてを当たってみよう。　窮状を訴えれば、助力してくれる仲間がいるかも知れない…　だから今は…」

拳を握り絞め、目を閉じ、顔を背ける2人。

「…許してくれ…」

そう呟いた声は、響き渡った女の悲鳴に比べて、あまりにか細かった…。

【3】

シベリア「…きょうは、知らせることが2つある」

数日後、グランズの本部にて。

家族か趣味の仲間のようで、あまりレジスタンスらしい悲壮さのないグランズだが、こうして1日1回は集まりを設けていた。

シベリア「まず1つ。　東ヨーロッパを攻めていた『クアルーン』が、グラーフェン・メビスを攻め落としたしたそうだ。　その後、帝国の援軍が来たために、仕方なく兵を退いたそうだが、グラーフェンの領主を討ち取り、大きな戦果をあげたらしい」

おお～、と大きなどよめきが上がる。　互いに顔を向き合わせ、力強く頷いている者たちまでいる。

実はグランズは、オデッサを中心とする『フロンティア・ガード』、アラビア半島の北から、最近は東欧にまで勢力を伸ばしつつある『クアルーン』、そしてインドの覇者『インドラ』と、エヴァニーの父親時代に繋がりがあったのだ。

それを知っているメンバー達にとっては、仲間が大いに頑張ったように感じられるのかも知れない。

だが…

エヴァニー「…どうしたサヤリ？」

サヤリはあまり元気がなかった。

サヤリ「…ああ…　たいしたことじゃない。　ただ、グラーフェンには昔行ったことがあってな…」

複雑な表情。

エヴァニー「…そうなのか？　だけど、グラーフェンは帝国領だから、こうなることもあるだろう。　それを承知でレジスタンスに…　グランズに入ったんだろう？」

サヤリ「ああ…　わかっている。　まあ、ちょっとした感傷さ。それも個人的な」

サヤリは寂しげに笑う。

エヴァニー「…サヤリ…　俺達の敵は帝国だ。　今後もっと辛い思いをするかも知れない。　もし駄目そうなら…」

サヤリ「しつこいぞ！　感傷は感傷で、ただそれだけさ」

サヤリは強くエヴァニーの言葉を遮った。

エヴァニー「…ならいいけど…。　無理はするなよ？」

エヴァニーはなおも気遣ったが、サヤリはもうエヴァニーの方を見ていなかった。

シベリア「それで、もう1つが…」

一段落したのを見て、シベリアは再び話し始める。

シベリア「…これも他のレジスタンス絡みなんだが、『カムラネルナ』から、協力の要請があった。　詳しい内容はだな…」

シベリアが説明したのは、同じ中東にいるレジスタンスのカムラネルナが、帝国軍の増強に苦しんでいるという情報だった。

増強だけならよくある話だが、なんでも今度来た帝国軍が、街で乱暴を働くらしいのだ。

グランズ仲間「許せねぇ！　俺達は帝国と戦っているが、街に住んでる人達は関係ない。　それを乱暴に扱うだと！」

そうだ！　と次々と帝国を非難する声が上がる。

シベリア「…帝国軍の具体的な戦力だが、カムラネルナの拠点の間近にある『カンタルダル』に基地を造り、ＭＳを3機、配備したようだ。　おおよその計算で、カムラネルナの約3倍の戦力だな」

感情的になる仲間たちとは一線を画した口調のまま、冷静に互いの

戦力差を明らかにするシベリア。

ナディア「…ＭＳが３機もか…。　まともに戦ったら、勝ち目はないね…」

ナディアがそう言い、他のメンバーも渋い表情をする。

レジスタンスの三強である、フロンティアガード、クアルーン、インドラは、自らＭＳで戦うのはもちろん、造るくらいの巨大な力を持っている。

しかし、グランズやカムラネルナなどの弱小レジスタンスにとっては、そこにいる帝国軍にＭＳが１機配備されているかいないで、自分達の生死が分かれてしまうのだ。

エヴァニー「…それでも、カムラネルナの窮地は放っておけない。街の人が乱暴されているとなれば、なおさらじゃないか！」

グランズ仲間「そうだ！　ここで屈したら、それは戦わないで帝国に負けたことになる！」

次々にエヴァニーに賛同する者が出始め、それが決め手になり、グ

ランズ挙げてのカムラネルナ救援が決まった…。

第２０章　奇妙な一等兵（前書き）

（世界情勢）

続きです。

それから、そのインドラの西にいるのが、前の章で出てきた『クアルーン』です。

位置は、アラビア半島北部から、イラク辺りで、最近は東欧（東はインドラがいるから）まで快進撃を続けています。

他には、原作ガンダムでお馴染みなオデッサ（黒海沿岸）にフロンティアガードがいて、この３つはレジスタンスの中でも、帝国と真正面からやり合える国々です。

エヴァニー率いる『グランズ』が、ＭＳ１機に苦戦しているのに対して、この国々はＭＳ師団（単位重要）を編成するぐらいで、その力の差もわかるというものですね。

第２０章　奇妙な一等兵

グラーフェン・メビスの復興は、順調に進んでいた。

援軍が早く来たこと、エルフレアの反撃が果敢だったこと。これらの要素が大きく働いて、敵は側面への奇襲を諦め、正面作戦に集中することにしたらしい。

同時に、帝国もそうせざるを得ないだけの増援を、各地から送り込み始めており、それもグラーフェンの平穏を後押ししたようだ。

そんなグラーフェン城下で、復興作業に励む旧ザクが１機。

例の農夫改め、ジャック一等兵だ。

ジャック「ほぉ～れ、瓦礫をどかすっぺよぉ～」

と、変な訛りで気合いを入れている。

シュバルツ「がんばっているな」

そんなジャックに、視察に来たシュバルツが声をかける。

ジャック「へぇ…　おら戦争はしょーずき言うとどくいずぁねぇが、こいったのは任せといてくんろ」

やはり、聞くに絶えない訛りだが、何かおかしい気もする。

シュバルツ「…そう言えば、明日は休暇願いを出していたな？　許可するぞ」

なにやら、含みのある笑みを浮かべるシュバルツ。

ジャック「あんがとごぜぇやすだ。　おら、生まれてこのかた、村を出たことがながっただけに、ちょっくら見物でもだ…」

シュバルツ「…それならば、だ…」

相変わらず妙に饒舌なジャックを、シュバルツは遮った。

シュバルツ「それならば、ヨーロッパには、ヤタガラスなる、凄腕の盗賊がおるそうだ。　出かけるならば、財布など盗られんように気をつけることだ」

ジャック「…そ、そそそっただヤツらがおるとね？　なんら、気をば張らんといかんきに？」

シュバルツの目が、一瞬光った気がした。　なぜか、慌ててタオルで額を拭うジャック。

シュバルツ「それでな、休暇にゆっくり休んだなら、また運動の相手を頼みたいのだが」

誘いの言葉。　しかし、ジャックとシュバルツが、共に身体を動かした事があっただろうか…？

ジャック「…いい…　いや、何の事です…　いんやぁぁ…　汗流すのはいいことだ」

答えるジャックの呂律が回っていない。　変に慌てていて、しどろもどろだった。

そう言えば、財布がどうとか、ヤタガラスがなんだとか言い出したあたりから、急におかしくなったようにも思える。

シュバルツ「…少しからかいすぎたか…。　ああ、なんでもない。気にせず作業を再開してくれ」

そう声をかけると、笑い顔のまま、シュバルツはその場を去った。

しかしジャックの方は、その後の作業でミスを重ねてしまい、古参兵にどやされていた…。

【2】

翌日。

まだ物々しさと、復興の賑わいが混在するグラーフェンの一角で…。

カトラス「…どうだ、首尾は？」

そこにいた2人。

彼らの話し声は聞こえても、不思議と人の気配が薄かった。

サコン「…順当なんだが、思った以上にできる人物だな」

カトラス「…ん　……。」

言葉はなかったが、カトラスの口角が僅かに動く。

サコン「…様子見は、もういいかも知れない」

カトラス「正体を明かすにふさわしい相手か。　それはそうとして、それからどうするつもりなんだ？　軍の将校に認められるのは確かに大きいだろうが、それだけで全部うまくいく訳じゃないからな？」

問いかけるカトラスだったが、答えるサコンには、策があるようだった。

サコン「…ただ取り入るだけではなく、もう1歩踏み込めれば、な。
だがそれは、相手次第になる…」

カトラス「お前にしては、珍しく遠慮がちなんだな?」

怪盗ヤタガラスにあっては、単身で敵地に軽く潜入してしまうサコンだったから、たまに慎重にすると、こんな言われ方をしてしまう。

サコン「…今、策を強行するのは避けたいだけさ。無理をすると、後々がしんどくなりかねん」

ふーっと息を吐く。

カトラス「…ま、そこは好きにしたらいいけどよ…。

ああ、そうだ! お前の叔父だが、何やらやる気のようだぞ? どうする? こっちに呼ぶのか?」

カトラスが、何かを思い出したように言い、それから、意味ありげな笑みを浮かべた。

サコン「…数えきれないぐらい世話になった。　そして何より、役に立つ。　だから、あとはカトラスの気の持ちようじゃないか？」

同じような笑みが、投げ返される。

カトラス「…おい。　全部俺に振る気かよ？」

サコン「俺は軍の中にいるからな。　いますぐに合流という訳にもいかないだろう？」

カトラス「…まあ、言われてみればたしかに…。　怪盗と言うには、顔と言うか、全身が割れているからな。　とかく目立ち過ぎるぜ」

苦笑いのカトラス。

サコン「だから任せたんだ。　後は頼む」

結局、２人の会話は、最初から最後まで含みを残していて、本人たち以外の誰にも、その意味を推し測らせなかった…。

【3】

ディジョン「…該当空域に異常なし。　これより帰投する」

管制「了解した。　もうこっちに敵は来ないだろう。　転属も近いんじゃないか？」

グラーフェンに来てからずっと、上空警戒任務を続けていたが、あの日以来、敵はぱったりと姿を見せなくなっていた。

アルヴィン「…あ～あ、きょうも殺ることなしかよ。　その転属とやらが待ち遠しいぜ」

アルヴィンは、心底退屈したように言う。　どうやら平穏を楽しむ気はないらしい。

管制「…よくわからんが、増援の一部を別の場所に移すらしいって噂は出ている。　お前らがそれに入っているか、後で確認してみる

といいだろう」

ディジョン「…耳寄りな速報に感謝する」

私はそれだけ言うと、機体を基地方面に向けた。

で、その噂の転属だが、アルヴィンがせっつくので、さっそく確認する羽目になった。

司令部が言うには、対象は我々ディジョン連隊を含む、部隊の半数ほど。　行き先は、激戦を交えている、西のユービット方面だという。

もともと敵がグラーフェンを攻めたのも、帝国の東側側面をつくためだしな。　逆をやろうという訳か。

まあ、実際に動くのは1週間ほど先になるらしいが。

アルヴィン「…まだ1週間もあるのかよ。　のんびりしてやがんな～」

早く戦いたいのか、アルヴィンだけはそんなことを言っていたが、私はそれでいいと思っていた。　現地でとはなったが、きょうレナとラリーがいないように、部下たちにも休暇を与えてやれる。

ディジョン「…アルヴィン。　1週間もあると言うが、その1週間に何もないとは限らんぞ？　特に私達は足がウリの部隊だからな。　行き掛けの駄賃、帰りがけの寄り道がとかく多い」

私は笑いながらそう言ったが、後にこの言葉はその通りになった…。

【4】

ジャック「…え、エリュフライヤーさまをお連れしましただ」

シュバルツ「ご苦労。　中にご案内せよ。　それからそなたは、こちらに控えておれ」

ジャック「了解ですだ」

妙な言葉は相変わらずだが、ジャックは街の作業が一段落すると、シュバルツの従兵に抜擢されていた。

従兵は階級が高い訳ではないが、身の回りを世話するだけに、司令官の覚えがめでたくなりやすい。　役得の多い配置なのだ。

そして、一通りジャックに命ずると、シュバルツはエルフレアに向き直った。

シュバルツ「どうぞこちらへ」

エルフレア「…いえ、私はそういう身分では…」

ドアをシュバルツ自ら開け、まるで賓客を迎えるようにエルフレアを遇したが、部屋に入ったエルフレアは、席に着かず、立ったままだった。

随分と控えめな態度にも見えるが、エルフレアはグラーフェン領主を正式に継いだ訳ではないので、無位無官の平貴族ではある。

軍の中佐であるシュバルツと比べて、身分が低いというのは、間違

いではないのだ。

シュバルツ「…そのご様子だと、すでに何か聞いておられるのか？」

シュバルツはそう小さく訊いた。

それでもエルフレアには席を勧めて、エルフレアもようやく腰を落ち着ける。

エルフレア「…ずっと悪い予感はしていました。　正式には、何も聞かされておりませんが」

エルフレアの言葉は、沈みがちだった。　目は下を向き、シュバルツを見つめようとしない。

シュバルツ「…そうですか。

先日、元老院から辞令が届きましてな。　まだしばらく、エルフレア殿に代わってグラーフェンを束ねよ、だそうです。　つまり…」

エルフレア「暗に、私が領主になるのを認めない、と言って来ていると…」

シュバルツまでも、大きく息を吐いた。

シュバルツ「…その件、私の個人的な勧めになってしまいますが、一度パンドラールに、ご自身が行かれてはどうでしょうか？　バッフェル様が亡くなられた報告など、口実はあります。　足は私が用意いたしますゆえ」

エルフレア「……。」

話題が話題なだけに、エルフレアの表情はすぐれなかった…。

【6】

3日後。

シュバルツの勧めに従い、パンドラールへ旅立つことにしたエルフ

レアは、従兵のジャックの運転するエレカに乗り、グラーフェン空港まで来ていた。　ここからパンドラールまでは、ミデア輸送機が運航されていて、その手配はシュバルツがしてくれていた。

エルフレア「…もうここでいいよ」

エレカを降りてからもずっと付いてくるジャックと、エルフレアは建物に入るところで別れると言った。

ジャック「…そうだか。　なんか貴族様…　エビフリャー様だったか？　元気がないようだが、大丈夫だか？」

エルフレア「…ぷっ…」

エルフレアはつい吹き出してしまう。

エルフレア「エビフリャーじゃなくって、エルフレアだよ。　それじゃまるで、僕が食べ物みたいじゃないか」

ジャックがあまりに変な間違い方をしたので、沈んでいたエルフレアもちょっとだけ笑っていた。

ジャック「そらまた失礼をしただ」

ジャックもまた、悪びれた様子は見せないで笑い返す。

エルフレア「…君を見てると、何だか不思議な気分になるよ。　自分の悩みとかなんて、とても小さなことに思えてきてね」

ジャック「よくわかんねぇけんど、おらが役に立ったなら、それはよがっただ」

2人とも、どこか和らいだ笑顔だった。

ラド「…エルフレア様、そろそろお時間でございます」

付き添っていたラドが、静かに時を告げる。

エルフレア「…じゃ、またね」

エルフレアの言葉に、ジャックは少し嬉しそうにした。

ジャック「…さよなら、じゃなくって、またと言ってくれるだか？」

エルフレア「ああ。　君とは何か縁がありそうな気がするよ。　できれば今度は、ちゃんとした形で話をしたいけれどね？」

ジャック「……　…そ、それもいい、だな」

少し間を置いてジャックが応えた時には、エルフレアはすでにジャックに背を向けて歩きだしていた。　それでも、一度だけ振り返ると、手を振る。

振られたジャックも、大げさに両手を振り返し…。

エルフレアはまもなく、グラーフェンを飛び去って行った…。

第２１章　新たなる宰相（前書き）

（世界情勢）

続きです。

先の冒頭文にも少し出てきましたが、レジスタンス最後の巨頭が、『フロンティア・ガード』で、勢力は宇宙世紀でいう、オデッサを中心とした資源地帯になります。

先のインドラ、クアルーン、フロンティアガードは共力関係にあって、おかげで帝国は、ユーラシア大陸のうち、インド、中東、東欧辺りまで、大きく削られてるんですね。

あと、それ以外の地方は、また次にお話しします。

第２１章　新たなる宰相

議員「…以上、皆様ご覧の通り、ザキラ・ニカイドウ議員が、ユーフォリア帝国第２１代宰相に就任することに決まりました」

議場が拍手に包まれ、１人の初老の男が、両手を振り拍手に応えた。

ザキラ「ご紹介頂いた、ザキラ・ニカイドウです。　元々粗野な軍人なうえ、恥ずかしながら、病のため長い間帝国の政に携わる機会を逸しておりましたが、これを機に大胆に帝国の改革に務め、かつての強壮なる帝国を取り戻したいと思っております。　ぜひ、皆様のお力添えをお願いいたしたい」

新宰相の口上を、またもや割れんばかりの拍手が後押しした。

ザキラ「議会要職にあっては、後ほど発表させて頂くつもりですが、まず、これなる『ジェイソン・ヤヌス』を副宰相に就けようと思います。　彼は私以上に軍功があり、現役の帝国軍少将でもあります。　帝国が乱れ、各地に賊徒のはびこる今、彼は帝国の大きな力になってくれるでしょう」

3度目となる拍手の渦に、ザキラの後に直立していた若い男が頭を下げる。

議員A「…ついに新宰相が誕生しましたな」

議員B「…レミル帝が崩御され、ロレンス第2皇子も即位されぬまま亡くなられた。　いまの帝国には、皇帝に代わる豪腕な宰相が必要でしょう」

議員C「…それには、ザキラ宰相閣下ほど適任な方はおりますまい」

拍手が収まった議員席では、早くも新宰相の話で持ちきりだった…。

【2】

所変わって…。

自らを後継と認めてもらうべく、首都パンドラールに乗り込んだエルフレアであったが…

そこでエルフレアを待っていたのは、若さを侮り、中小貴族に過ぎないエルフレアを、露骨に見下す議員たちであった。

エルフレア「なぜだっ！　なぜ私が父上の後を継いではならぬのだっ！」

エルフレアは苛立っていた。

それもそのはず、議員たちはエルフレアの話などまともに聞こうとはせず、そればかりか、バッフェルの不手際を責める始末。

当然、エルフレアの軍功など一顧だにされず、援軍の功を掠め取ったとまで言われたのだった。

ラド「……。」

エルフレアを案じ随行したラドであったが、一臣下に過ぎない彼に、なす術があろうはずもない。

エルフレア「…っく…　どうすればいいのだ、私は！！　父上と母上を守ることもできず、今また領地までも失うのか！」

嘆きのエルフレア。

だが、救いの手は思わないところからもたらされた。

???「…グラーフェン・メピスの領主、バッフェル男爵が長子、エルフレア殿とお見受けしますが」

声をかけて来たのは、まだいくらか若さを感じさせる、長身の議員。

エルフレア「はい。　たしかに私はエルフレアですが、あなたは…」

???「ああ、これは失礼を。　私、元老院で副宰相を務めております、ジェイソン・ヤヌスと申します。　とは言っても、まだ就いたばかりで、右も左もわからない若輩者なのですけれど」

役職付きの議員にしては、３０代に見えるこの男は、破格の若さだろう。　しかし対するエルフレアは、まだ１６歳の少年である。

にも関わらず、ジェイソンと名乗った議員は、極めて物腰柔らかだった。

エルフレア「…その副宰相閣下が、私になんの…」

まだ、相手の意図がよくわからないエルフレアは、やや戸惑いがちな様子。

けれどジェイソンは、そんなエルフレアに軽く微笑むと、思いもしなかったことを口にする。

エルフレア「なんですって！　グラーフェン・メビスの後継として、宰相閣下が私を推して下さっていると言うんですか！」

そう。

ジェイソンは、自分と宰相のザキラも、元老院の議決は問題があると思っていたと言い、グラーフェン領主にはエルフレア以外考えられないと告げたのであった。

降って湧いた出来事に、ただただ驚きを隠しきれないエルフレア。

驚愕して言葉もない彼に代わって、ラドが言葉を返す。

ラド「…誠に有難いお言葉なれど、なぜそこまで言って下さるのか？　一介の男爵家の後継問題など、宰相閣下が直に判断されることではありますまい」

ラドが言うように、帝国においては皇帝、摂政、宰相だけは別格の権限を持っていた。　たとえ元老院が満場一致で決めようとも、この３人のいずれか…

この場合は、宰相のザキラがＮＯと言えばＮＯなのだ。　それが、エルフレア１人のために動くなど、異例中の異例である。

ジェイソン「宰相閣下は、小さなことを小さいと疎かにしてきたからこそ、いま帝国の窮地にあるとお考えです。　どんな大きな事件も、元を正せば小さな出来事の積み重ね。　それを正さずして、帝国に未来はないというのが、宰相閣下の信念なのです」

ジェイソンの流暢な弁は続く。

ジェイソン「エルフレア殿は、父君を尊ばれ、母君を愛され、兵たちを可愛がられ、そして民を慈しまれる人柄とお聞きした。　これが本当ならば、若いというだけで後を継げぬなどというのは、間違いも間違い。　むしろ、帝国にもようやく若き新星が現れたと喜ぶべきところでありましょう」

エルフレア「くっ…」

感極まったのか、涙すら流し始めたエルフレア。　そして目を見開き、微動だにできないラド。

ジェイソン「…とにかく、エルフレア殿は一度宰相閣下にお会いになるべきです。　もちろん、私が取り次ぎますので」

そう言ったジェイソンの手を、エルフレアは涙も拭わないまま、がっしり握り締めた…。

【3】

ザキラ「何がそう愉しいのか？　イエスマン」

宰相の執務室。

部屋の主である、宰相ザキラ・ニカイドウは、先刻から小さくだか、ずっと笑い続けている、自分の片腕にそう言った。

イエスマン「…いえ、ボス。　あのエージェントJ…　いや、ジェイソン副宰相が、今頃、どんな甘言妄言嘘八百を並べてるかと思うと、こう笑いを堪えるのがもう…」

イエスマンと呼ばれた側近は、さも可笑しそうな表情のまま言う。

ザキラ「…あまり正直すぎるのもどうかな？　それに強く考えすぎると、ジェイソンにも聞こえてしまうぞ？　ただでさえ、お前の『脳量子波』は強すぎる」

言葉こそそうだったが、ザキラもにやりとした笑い浮かべていた。

ザキラ「…それはともかく、使えるのか、その小僧は？」

ザキラは顔から笑みを消し、机の上の書類をめくる。

イエスマン「そのあたりはお任せを、ボス。　人間なんて、ちょいと裏返せば…。

もっとも、僕は本人の希望を叶えてあげたいだけで、悪いことなんかするつもりはないんですけどね～」

イエスマンは笑いこそ収まったものの、まだ目を何回もまばたきさせ、明らかに浮わついた様子だった。

ザキラ「人間、素直が一番とでも言うつもりか？　それより…」

そこまで言ったザキラが、急に言葉を止める。

？？？［…すまんが緊急事態じゃ。　うちのバカ共がやらかしおって、最終試験中のエージェントEに逃げられてしもうたわ」

どこからか聞こえる声。

それは耳ではなく、頭に、脳に直接響いてくるようだ。

ザキラ［…聞こえている、エージェントM、ドクターマンソン。つまらん失態だな］

ザキラもまた、その会話に応じた。　どうやら、この場にいる全員がこの能力を持っているらしい。

イエスマン［ドクター。　失敗は困りますねぇ…　まあ、いいですよ。　僕が少し探ってみますからぁ～］

そう言うと、イエスマンは軽く目を閉じる。

イエスマン［…どこに行くのかなぁ…？］

イエスマン［…一緒に楽しいことをしようよ…］

???［…貴様らの思い通りになってたまるか…］

イエスマン［…つれないことを言わないでよ？　僕と君は同志じゃないか…］

???［笑わせるな…　貴様と同じ穴のむじななど、吐き気がする！］

イエスマン［…どうあっても帰る気はないと？］

???［愚問！！！］

イエスマン「…ボス、説得失敗しちゃいましたぁ～。脳量子波の強さからして、もうパンドラールにはいないみたいだし、追いかけて捕まるかと言うと、厳しいかも知れないですね～」

イエスマンが、やれやれと言いたげに首を振った。

ザキラ［…エージェントの人数が揃う事とディアボロ・システムが十二分に活用される事。　それなくして、私の願望成就はない。DR．マンソン。　わかっているのだろうな？］

マンソン［…申し訳ない。　エージェントの調整そのものは順調なんじゃが…。　ディアボロシステムも時間さえあればの…］

ザキラの量子波ははっきりしていたが、マンソンのそれは途切れ途切れで、発信者の気持ちが伺えた。

【4】

イエスマン「ボス？」

イエスマンは脳量子波から、言葉を使っての会話に切り替えた。

ザキラ「…何か策があるのか？」

ザキラは不快な表情ながら、静かな声で問いを発する。

イエスマン「…いえね？　今から迎えるお客さんも、おんなじEから始まる名前じゃないかなって。　もしかしたら、代わりにならないですかね？」

イエスマンがニヤリと笑う。

ザキラ「…また、つまらぬ芝居をしろと言うつもりか…？」

それを聞いたザキラが、机を指先で数回叩く。

イエスマン「ボスぅ～。　腐っても鯛って言葉をご存知です？　帝国はそれですよぉ～」

イエスマンは、この日何回目かの目配せをした。　今度は上目遣いだった。

ザキラ「…ふん。　私が芝居に飽きないうちに事を纏めておけ。
それから…

…獲物を逃がしたゴミは、処分だ」

イエスマン「イエス、ボス」

第２２章　帝国軍の少女（前書き）

（世界情勢）

続きです。

いままで紹介した地域以外は、まだ物語にはあまり出てきません。

なので、ごくごく簡単に説明だけしておきます。

まず、中国。

これは帝国の領土です。　ただ、自治区みたいな形なので、一応の自治軍や行政府はあるようです。

次に、北米。

これは、レメク家という準貴族家が治めています。　帝国寄りなので、かなり先まで帝国には逆らいません。

あと、南米とアフリカ。

これも帝国の領土です。　レジスタンスもいるにはいますが、１つ

に纏まりきれていないので、帝国に対抗できていません。
纏まる日は来るのでしょうか？

それと、マリンピア。

これはもう少し先で物語に絡んできますが、キャラの1人サヤリ（エヴァニー編ですね）の父親が治める、アラビア半島の国です。
現在のドバイがモデルで、資源よりも、工夫と世渡りで発展した国なんですが、どうも娘のサヤリは、そんな世渡りをよく思っていないみたいです。

彼女の気持ちと、国の有り様のすれ違いは、ＳＥＥＤのオーブに似た感じもしますが…。

最後に、帝国の宿敵である共和国ですが、これはまた次の冒頭で。

第２２章　帝国軍の少女

ゴトー「手抜かりはないな？」

ネロ「大丈夫です。　データを奪ってから、ウイルスを入れておきましたから。　下手に掘り出すと、掘り出したヤツがポシャるだけですよ」

ネロは自信ありげに言った。　彼はＭＳの腕もあるが、それ以上の凄腕ハッカーなのだ。

ゴトー「…ミア。　帝国は何と言ってきた？」

続けざまに問うゴトー。

ミア「…ファラの賞金と、フェニックスナイツの情報提供分は払うそうですが…」

ジルド「後は我々が任せて、指をくわえて見てろだとよっ！！」

ジルドがテーブルを拳で叩き、もの凄い音がした。

メリル「…っ　……。」

ゴトー「…ジルド、やめろ。　メリルが怖がっている」

ゴトーが言うまでもなく、メリルはゴトーの背中に隠れてしまっていた。　ただでさえ幼く見えがちなメリルだが、こうしてしまうと、もはや12歳とは信じられないくらいだ。

ジルド「…悪かったな、メリル」

吐き捨てるような語調だったが、ジルドが謝ると、メリルもかすかに頷いた。　悪い人間ではないと、知ってはいるのだ。

ミア「…それで隊長、どうしますか？　帝国が取引を断ったということは…」

ゴトー「金にならん戦いをする気はない。　メリル」

メリル「はい」

ゴトー「せっかくだ。　ガンダムと乗っているヤツの運命を引いてやろう」

ゴトーは僅かに唇の端で笑ったかと思うと、メリルが出したカードを1枚手にした。

引いたカードは、審判の正位置で、意味は復活、結果、発展となる。

ミア「ガンダムが復活して…　この先何かある…？？？」

ミアはゴトーを見る。

ゴトー「…それでいい。　どうせ金にはならんし、ガンダムに何かあるとなれば、見ている分には退屈しないだろう」

そう言うと、ゴトーは自分のソファーにどっかりと座り、足を組ん

だ。

そのソファーはかなり趣向が凝らされていて、外装は旧式に見える、このザンジバル級には似つかわしくなかった…。

【2】

とりあえず、ではあったがガンダムの整備を終え、これまた希望的観測ではあったが、操縦技術のアップしたゲットたちは…

ゼフィランサスが発見された、遺跡に立ち戻っていた。

だが、そこに待ち構えていたのは…。

レアルタ「ここか～」

まるで観光に来たようなレアルタに対して、ヴァイスは真剣な表情だ。

レアルタ「…どうしたすか、ヴァイスさん。　怖い顔して」

あくまで暢気なレアルタ。

ヴァイス「…あのなあ、レアルタ。　あの建物の入口に置いてあるモノのが見えないのか？」

レアルタ「…置いてあるモノ？　ああ、ＭＳっすね？」

まだ暢気なままのレアルタ。　ヴァイスは、思わずこめかみに手をやる。

ヴァイス「だからなぁ～　ＭＳがいたら、あれは敵かもとか、周りに2機目3機目がいないかとか、そういう事を考えないのか、お前はっ！！」

レアルタ「…あ～　なるほど」

いまさらポンと手を打つレアルタ。

ヴァイス「ゲット。　念のため聞いておくが、お前が初めて来た時、あのＭＳはなかったんだよな？」

ヴァイスは確認したが…

ゲット「…あんなＭＳいなかったし、だいいちあんなＭＳ、このコロニーで見たこともないぜ」

答えは、ヴァイスの予想通りだった。

ヴァイス「…つまり、盗賊でもない誰かが、新たにガンダムの噂を聞きつけてやって来た、ってヤツかもな…。　問題は…」

それが自分たちの敵かどうかだ、そう言いかけたヴァイスだったが…

レアルタ「…じゃ、このＭＳ、パイロットが戻らないうちに壊しときましょうよ？　なら、仮にこいつが敵だったとしても、楽勝じゃないっすか」

レアルタの考えは、想像以上に吹き飛んでいた。

ヴァイス「…フェニックスナイツの誇りを、と言おうと思ったが…　その前に、お前はバカか！　いや、バカ。　決定！」

あえなく、バカと認定されてしまったレアルタであった。

レアルタ「なんでっすかー　名案でしょ？」

あくまでレアルタには自覚がないらしい。

ヴァイス「…お前に何を言っても無駄なようだな。　ゲット、レアルタと一緒に中を見てこい。　俺はここで待機してるから、いざという時はお互いに連絡な。　幸い、ミノフスキー粒子はないも同然の濃さだから、通信は楽勝だろう」

レアルタを放置しつつ、コックピットから降りたヴァイスは、連絡の手はずを確認する。

ゲット「わかった、行って来る」

ゲットはレアルタを連れて遺跡の中を目指し、ヴァイスはＭＳに戻る。　戦いになった時に備えてか、ゼフィランサスではなく、自分のジムストライカーに乗るようだ。

ヴァイス「…嫌な予感がしなくもないが…」

ヴァイスは、あまり目立たない位置にジムを隠しつつ、周囲の警戒を始めた…。

【3】

ゲットの記憶を頼りに、先を進む2人。

ゲット「…この辺りなんだ、ガンダムがあったのは」

ゲットがそう言った所は、屋根が崩れ、少しだけ様子が変わっていた。　…というか、ゲットが変えたのだったが。

レアルタ「…たしかに、だだっ広いトコだな…。　ここでガンダムを造ったのか？」

言いながら辺りを見回した2人だったが、その時ゲットは、視線の先に1人の少女がいるのに気がついた。

お嬢様のような可愛らしいフリル付きの服を着て、顔を少し隠しているようにも見える。

ゲット「なあ、お前ここで何してんだ？」

自分と同じくらいの歳格好に親近感を持ったのか、ゲットは躊躇わずに少女に話しかけていた。

???「…私？　この遺跡を調べてたのよ。　とても神秘的なものを感じたから…」

ゲット「そうなんだ？　あ、俺はゲット・アルスターって言うんだ。　この近くに住んでて、俺の乗ってるゼフィランサスってガンダムも、ここで見つけたんだよ！」

同じ年頃の異性が相手だからでもないだろうが、ゲットは雄弁だった。

???「…ユーリ・ストヴァル。　あたしの機体はイナクトって言うの」

ゲットは会ったばかりだと言うのに、ユーリにいろいろ話していた。　ユーリはゲットの話を聞くだけで、ほとんど自分からは言葉を発しないのだが、それでもゲットはすごく嬉しそうにしていた。

そんなゲットの様子に遠慮してか、レアルタは周りを調べるばかりで、話には加わってこない。

ゲット「すっげー　ユーリもＭＳ乗れるんだ？　俺はＭＳは大好きだけど、まだ下手くそでさ～　いつか父ちゃんのようなパイロットになるのが夢なんだ！」

ユーリ「…ゲットは…　ＭＳが好きなんだ…。　私は大嫌い。　ＭＳも、パイロットも、みんないなくなっちゃえばいいのよ…」

それまでゲットの話を聞くばかりだったユーリが、そう呟くように言った。　小さな声ではあったけれど、その意志ははっきりしていた。

ゲット「……。」

意外な答えに、ゲットが話をやめた。　その時…。

轟音が響く。

いや、爆発音か？

続いて無線機からヴァイスの声。

ヴァイス「…すまんが戻ってくれ！　敵さんのお出ましだ。この数相手に、無人のガンダム守りながらは、正直キツい！」

レアルタ「わかった、ヴァイスさん！　今戻る！」

遺跡を慌てて駆け戻るゲットとレアルタ。

ゲット「な、何だあいつら？　また盗賊か？！」

そこに、ついて来たのかユーリの姿。

だが、彼女はＭＳの姿を認めると、思いもしない言葉を告げた。

ユーリ「…アレは帝国軍、あたしの所属する部隊よ。　言い忘れてたけど、あたしの部隊はガンダムの調査、回収に来てたのよ。　でも、あなたがガンダムを盗っちゃったから、攻撃されたのね。　自業自得よ」

ゲット「…?!　と、盗ったってなんだよ!　それに、あたしの部隊って…　お前、帝国軍の仲間なのか?!」

それを聞いたゲットは、掴みかかるような勢いで、ユーリの両肩に手をやる。　しかし、あくまでユーリは平然としていた。

ユーリ「…さあ…　そんなのあたしの知ったことじゃないわ。　それより、早く仲間を助けなくていいの?　やられちゃうわよ?」

ゲット「…くっ!」

ゲットは悔しそうにユーリを見たが、すぐに手を離し、ガンダムに向かって走った…。

【4】

レアルタ「ヴァイスさん、お待たせっ！」

こんな時まで明るいレアルタ。

ヴァイスは返事をしなかったが、代わりにジムストライカーの動きが変わる。　もう無人の機体を守る必要がないとあってか、少しずつ攻めに転じたようだ。

攻めてきたのは…　ジン。

ただし、ジン・ハイマニューバと呼ばれる上位機種で、信頼性と性能を両立した帝国の名機だった。　それが奇しくも、物資不足、メンテ不備が当たり前となった世の中において、真価を発揮したということになる。

ゲット「…俺もっ！！」

レアルタのザクに続いて、ゲットのゼフィランサスも起動する。
起き上がり、ビームサーベルを構えた。

スパンツ「ようやくお目覚めかっ！　ガンダムっ！！」

動き出した2機に慌てる様子はない。　周りのジンは１０機もいて、ヴァイスの善戦していたために、まだガンダムを捕獲してこそいなかったが、圧倒的に有利な状況は変わらないのだ。

???「ガンダムは捕獲だ、間違っても破壊するんじゃないよ！どのみち、射撃兵装はないはずだからねっ！」

スパンツ「了解了解、スーリスちゃんっと」

１０機のジンのうち、2機がゼフィランサスに迫る。　レアルタとヴァイスが動こうにも、それぞれ4機のジンの相手をしており、気安く動ける態勢ではなかった。

スーリス「ほらほらっ！」

スパンツと組んだスーリスのジンは、手にしたマシンガンを乱射する。　ゲットは練習の成果でそれをかわすが、それだけで手一杯。　武器がビームサーベルしかないので、近づかないと何もできないのだ。

スーリス「…くっくっく…　こうも一方的だと、つい直撃させたくなっちまうよ…。　スパンツ！　うまく捕まえなっ！」

だが、実はマシンガンは牽制に過ぎなかった。　スーリスの作戦は、マシンガンでゲットの動きを封じながら、スパンツが後から捕まえようというのだったのだ。

スパンツ「あいよっ！　大好きだぜ、ガンダムちゃん！　もう離さないからな～」

そして次の瞬間、マシンガンにばかり気を取られていたゲットは、あえなく捕まってしまったのだった。

ヴァイス「ゲットっ！！」

ゲットの危機を見て取ったヴァイスは、機体を翻し、ゼフィランスに駆け寄ろうとする。

だが、その直後に足元にマシンガンが着弾し、後に回避を余儀なくされた。

レアルタ「こいつら、うろちょろするばかりで、まともに攻めて来やがらねぇ！！」

ガンダム捕獲するため、他のジンも作戦に協力するのは、ある意味当然だった。　残りのジンは、ヴァイスとレアルタをで足止めすることに徹していて、けっして必殺の間合いに入って来ないのだった。

だから被弾もしないが、敵も倒せない。　つまり時間だけが過ぎ…

　ゲットのガンダムは完全に動きを封じられていた。

【5】

ネロ「始まったようですが…」

そんな様子を、遠くから見つめる数人の影。

ジルド「隊長があの様子じゃ、見物するだけだろ？　なら俺は、帝国に１０００ギラいくぜ？」

競る相手もいないのに、賭け金を口にするジルド。　気にしていないわけではないようだが、ゴトーに動きがないせいか、その場に立ったままだ。

そうこうしているうちに、戦況が動いた。

ネロ「…あっ！　隊長、ガンダムの奴、捕まってるみたいですよ？」

双眼鏡から目を離し、ゴトーを振り返るネロ。　ジルドは、慌てて双眼鏡を覗き込む。

ゴトー「…帝国は交渉を蹴ったし、フェニックスナイツを助けてやる義理はない…」

そう言ったゴトーは、その場に背を向けて艦に戻ろうとしたが、袖口に妙な重さを感じた。　メリルが掴まっていたのだ。

メリル「…やだ…　助けてあげてよ…」

弱々しい声だが、それでもいつもと比べると、はっきりした声だった。　それを合図にしたかのように、全員が一斉にゴトーを見た。

ゴトー「…なんだ、お前らまで…」

周囲を見渡し、どこか諦め顔のゴトー。

ゴトー「…ふん…　金にならないことばかり…。　子供に甘い奴らだ…。　いくぞっ！！」

グフが…

ザクが…

地を駆けた。

【6】

スパンツ「…なんだ？　あのＭＳは？」

ゲットのゼフィランサスを羽交い締めにしている、スパンツがそう呟いた時には、グフとザクは地を蹴り、ジンの間合いに飛び込んで来ていた。

スーリス「…くおっ！」

対応するヒマもなく、ヒートアンカーに絡め取られるスーリスのジン。　電撃が流され、機体がショートし動けなくなる。

続いて、もう1機のジンが、バズーカの着弾でバランスを崩した。

ヴァイス「…ゴトーたちが、俺達を助けるだと？」

レアルタ「よくわかんねーが、ありがたくここはもらった！！」

そのジンはビームスピアとヒートホークの両方を喰らいバラバラになる。

レアルタ「…いったいどういう風の吹き回しだ？　金の持ち合わせならないぞ？」

ジルド「泣く子と地頭には勝てねぇっつーだろ？　とにかく、今は1つ貸しだ！」

前に死闘を交えた2人が、背中を庇い合う皮肉。　だがその見返りは、ジンが2機墜ちるという形で返ってきた。

ヴァイス「…今だ！　ゲットっ！　歯を食いしばれっ！！」

突然の襲撃に、ガンダムを押さえる手が緩んだのを見逃さず、ヴァイスはスパンツのジンに体当たりする。　ジンはガンダムから引き剥がされ、遺跡に激突するほど吹き飛んだ。

スパンツ「…くっそ、何しやがるっ！　しかも傭兵風情が、何でこんな所に現れてんだよ？」

叫ぶスパンツ。

その言葉が表すように、奇襲で崩れた態勢を立て直すのは、並大抵の苦労ではなかった。　腕も盗賊とは比較にならず、性能ではゴト

ーたちやフェニックスナイツの２人を凌駕しているはずなのに、１０機のジンのうち、既に４機が撃破されてしまう劣勢ぶりだった。

ヴァイス「…ゲット、お前は下がれ！　どうやら、敵の狙いはガンダムだ。　お前は身を守ることに専念しろ！」

ヴァイスはそう言って、ゼフィランサスを庇うように立つ。

ゲット「お、俺も戦う…」

レアルタ「気持ちは嬉しいが、お子様は寝る時間だってよ！」

ヴァイスとレアルタは、再びジンの群れの中に突っ込んで行った。

後を追おうとしたゲットだったが、そんなゲットはある物に目を止める。

ゲットが目をつけた物。

それは、さっきスパンツが激突した時に崩れた壁の向こうにあった。
そう言えば、最初に遺跡に来た時、さっき遺跡に入った時も、ソレはあった気がする。

スパンツ「…ガンダムっ！　1人でこそこそ逃げようってのか？そうは…」

ゲット「逃げね～よ！　これならどうだっ！！」

スパンツ「うわっ！！！」

スパンツのジンはあわやで身をかわしたが、偶然その後にいたもう1機のジンは、直撃を浴びてしまい、一撃で吹き飛んだ。

ヴァイス「…ビームライフルか…」

レアルタ「…しかも、なんつー出力してんだよ?!」

そう。

ゲットが見つけたのは、ゼフィランサス用に開発された、高出力ビームライフル。

ガンダム専用とあってか、その出力は同時期の量産機なら、数発撃てばエネルギーが枯渇しかねないほど。　ゼフィランサスのジェネレーターに加え、ライフル自体にエネルギーパックを装着することで、ようやく実用化できたシロモノだ。

ゲット「へっへー　これなら俺でもやれるぜ！」

自信満々に宣言するゲット。

レアルタ「…間違って、俺を後から撃つなよ？」

ゲット「撃たね～よ！！」

いつものやり取りをしながらではあったが、これで形勢が完全に逆転した。　近づけばヴァイスとレアルタ、さらにゴトーたちがおり、離れればビームライフルで一方的に撃たれる。

いや、少し足を止めただけでも、致命傷を負う可能性が出てきた。

スーリス「…くっ…　動けっ！　この程度で回路が焼けつくか…。
役立たずがっ！！」

スーリスは怒りを露にしたが、電撃をまともに食らったジンは、予備回路に切り替えても、歩くのが手一杯の有り様だった。

そうしてる間にも、3機のジンが破壊される。

スパンツ「スーリスちゃん？　どうすんの？！」

帝国軍に、もはや後はなかった…。

第２３章　謀略の渦（前書き）

（世界情勢）

続きです。

最後に残ったのが、帝国の宿敵とも言うべき、ルビス共和国です。

帝国は、５０年前の戦争で共和国に勝ちはしましたが、その末期には、共和国の開発したＲＸ―７８ガンダムシリーズ数機に、ザクとジンをまとめて２００機以上もやられていて、そういう意味でも宿敵と言えます。

現在の領地はオーストラリアとニュージーランド、及び南太平洋の島々とかなり縮小されていますが、元祖ガンダムの開発国だけあって、技術力、国力は折り紙つきです。

そのため、５年前に核などの滅茶苦茶をやった帝国軍ですから、手出しできなかったほど。

いまのところは、中立となっていますが、参戦するとなれば、帝国は窮地に追い込まれるかも知れません。

あと、わかりにくいのですが、共和国はそれらの他にも、一部飛び地で領地を持っています。

それらは、５０年前に帝国が占領しきれないうちに（ガンダムを恐れて？）終戦協定を結んでしまった名残なのですが、そこでは国境紛争が起きることもあるようです。

第２３章　謀略の渦

？？？「使えそうかな？　あいつは？」

？？？「…さあ、そればかりは何とも。　…というより、ご存じではないのですか？」

？？？「…いや。　あいつは生まれてすぐに、他家に養子に出ていたしな…。　あまり帝都にも来なかったし、顔は知っていても、親しい訳では、な」

？？？「だからと言って、このような試し方は、賛成いたしかねます。　もし間違えて殺してしまっては、元も子もありますまい…」

？？？「この程度で死ぬようなら、所詮その程度だったということだ。　それに、私の見る目が確かならば、死なぬな」

？？？「…やはり、よくご存じなのではありませんか…」

？？？「…これは、顔見知りとしての判断ではなく、人物眼というやつだ。　どちらにせよ、今はまだ動けぬ。　こうした姑息な手で危機感を煽るのも、致し方あるまい」

？？？「…御意…」

【2】

マーガレットを出てから、ちょうど2日が経った時。　行程で言うと、半分を過ぎた辺りで…。

ミクが突然、こんなことを言った。

ミク「…お姉…。　さっきから何か感じない？　なんかこう、覗かれてるような…」

マヒロ「えっ？！　覗き？　痴漢？！　どこどこ？　後かな？」

…ものすごく空気が重い。

ミク「…人がめずらしく真剣に話してるのに…」

ケイ「仮に覗くとして、巡航中の宇宙戦艦の速度は、時速にして何キロぐらいだろうな？」

ミサト「というか、お嬢はブリッジで、着替えでもするつもりなの？」

…各方面から、集中攻撃を浴びてしまった。

マヒロ「…はい。　あんまり考えずに喋りました。　ごめんなさい」

こういう時は、早急に撤退するに限る。　特に、シリアスになってるミクを逆撫ですると、本気で怒られかねない。

ミク「…で、結局どうなの？　あたしの気のせいかな？」

どうやら

『同じニュータイプとして何か感じないか？』

ってことらしい。　あたしも軽く目を閉じてみたけれど…。

マヒロ「…あんまはっきりしないなぁ…。　ミクがそんなに感じないなら、大丈夫なんじゃないの？」

ミク「そうかなぁ～」

ミクはまだ首をかしげている。

ミサト「レーダーに反応はないわね。　熱源、ミノフスキー濃度なんかにも、不審な点はないわ」

ケイ「仮に襲うとしたら、この先の暗礁宙域だろうな。　艦の速度が落ちるところを狙って、な」

そして、さまざまな補足が告げられる。

あたしたち姉妹に関わって長いせいか、ニュータイプの勘とかを、この2人はけして馬鹿にしない。

ケイ「どうしても気になるというなら、暗礁宙域そのものを迂回するか？」

ミサト「…でも大尉。　それって、3日は遠回りするルートになりません？　会談の日程にも、支障があるかと」

たしかに、ニュータイプの勘が働いたから3日遅れます、じゃ相手方に説明がつかないわよね。

ケイ「…ならば、確かめてみるか？」

ケイさんは、1つの作戦を提案した…。

【3】

マリアベル「…マヒロ艦隊の1隻にトラブル発生の模様。　速度が落ちます」

霧雨「無理そうなら、引き返すように伝えてくれ。　まだ行程は、半分もあるんだしね」

ここまでが全軍への通信。　そう言ってから、通信を切る。

霧雨「…どう思う？　一瞬未確認の反応を捉えたから、念のため罠を張るっていうけれど…」

僕はマヒロの要請に従っていたけれど、その情報を信じた訳じゃなかった。　怪しい反応なんて、バーミンガムじゃ捉えていない。

たしかに僕のバーミンガムは、ＭＳ搭載用にちょっと無理して改造したから、カタログより性能が下がってはいるけれど…。

マリアベル「私はそれよりも、作戦の意図が読めませんね。　もし本当に敵に尾行されているというなら、高速で逃げるか、はっきり迎え撃つべきでは？　こんな風に、故障を装っての挟み撃ちなど、姑息です」

マヒロが提案してきたのは、マリアベルが言うように、故障を装って艦隊を2つに分け、襲われなかった方が逆を助けるという、よくわからないやり方だった。　ふつうに考えれば、戦力の分散でしかない。

霧雨「…まあ、やるといいからには、成算があるんだろう。　僕らは適当に付き合えばいいんじゃないかな？」

息を大きく吐いて、シートに身をゆだねる。　そうしていると、なんだか瞼が重くなってきた。

マリアベル「…わかりました。　通常配置のまま、対空警戒だけ呼びかけておきます」

霧雨「頼むよ…」

マリアベルの対空警戒配置の声も、その時の僕には聞こえていなかった…。

【4】

艦隊に遅れた形のムサイが、暗礁宙域を身を潜めながら、わざとゆっくり進む。

ケイ「…まだ反応はないな。　これ以上離されれば、このムサイが追いつけなくなる。　そろそろ限界か…」

そのムサイの周囲には、2機のザク3。　ユヅキ専用機と、ミクの専用機だ。

ミク「おっかしいなぁ～？　たしかに誰かに、見られてる感じがしたのになぁ…」

一口に艦隊を襲うと言っても、宇宙を高速航行中の艦隊を襲うのは容易ではない。　乗っているとあまり感じないが、その速度はマッハ3～4にもなり、追いかけるだけで精一杯になるのがふつうだ。

だから後をつけて、速度を緩めた瞬間に、抜き去るような形で襲う。

ＭＳが艦隊を襲う手立ての1つだ。　さもなければ、進路を予測して待ち伏せるしかない。

ケイ「…気にすることはない。　ニュータイプにも気のせい、勘違いは…」

そう言ったところで、ユヅキの言葉は止まった。

ケイ「…そうでもないかも知れない」

ミク「…今回はお姉の勝ちかな～　自覚ないのに、方角まで当ててるし。　変なトコ『だけ』鋭いんだよ」

2人が見つけたのは、艦隊の後を追尾する…

…小型偵察機。

ミク「ケイさん、あたしがやる！　…チョコバナナクラッシュっ！」

意味不明なネーミングながら、ミクのファンネルは確実にその小型機を捉えていた。　ビームを受け粉々になるが、派手に爆発したりはしなかった。

ケイ「…ほとんどが非金属製の、ミノフスキー粒子に頼らないステルス構造か。　これならレーダーには映らないし、大きさ的に目視は困難だな」

ミク「…こんな手の込んだマネして、覗いただけでは終わらないよね？」

ミクの表情は、ふざけている時とは比較にならないほど真剣だった。　ミクのこうした一面を知らない人が見たら、熱でもあるのかと心配しかねないぐらい。

ケイ「カメラから得た情報で何をするか、だな。　おそらく、針路、速度、編成くらいは筒抜けになったはずだ」

ユヅキの表情も厳しくなる。

ケイ「ミク、急ぐぞ」

ミク「うん」

2機のザク3は、すぐに最大加速に移った…。

【5】

帝国軍下士官「前方に反応です。　隕石か何かのようですね？　艦隊の進路をちょうど横切る形です」

宇宙空間、それも暗礁宙域の中だから、こんなことはめずらしくない。　漂っているデブリが、何かにぶつかった拍子に動き出すこともある。

ミサト「やり過ごせそうかしら？」

オペレーター「はい。　たかだか数個単位ですし、動きは速いですから、速度さえを落とせば」

ミサト「…じゃあ、そうしてくれる？」

帝国軍下士官「了解しました」

減速Ｇがかかり、艦が速度を緩めた…

…その時。

帝国軍下士官「ミノフスキー粒子、濃度が急激に上昇しますっ！
高熱源体多数急速に接近っ！！」

マヒロ「きゃっ！！」

艦が揺れる。　明らかに何かしらの攻撃を受けた衝撃だった。

ミサト「どこからっ？！」

オペレーター「わかりませんっ！　ミノフスキー粒子濃度、さらに上昇中！　攻撃はミサイルによるものと思われます。　命中弾は１つだけですが、付近のデブリを動かして…　ぐぁっ！！」

さらに艦に衝撃がはしる。　こんな暗礁宙域でミサイルを乱射するなんて、正気の沙汰じゃなかった。

デブリが壁になって、ミサイルの命中率が著しく下がるせいもあるけれど、爆発で運動エネルギーを得たデブリが、変な動き方をしてしまうから。　敵味方なく、激突しかねないのだ。

オペレーター「さらに、未確認機急速接近！　機種照合…　ズサ２、リゲルグ１です！！」

マヒロ「ＭＳ隊、発進急いで！」

オペレーター「無理ですっ！　デブリが乱れ飛んでる中で出るのは、危険すぎますっ！！」

…明らかな待ち伏せだった。

敵は、ミサイルであたしの艦を沈めようとしたんじゃない。　漂うデブリを動かして、発艦を封じるつもりなのだろう。　しかも悪いことに、艦は一旦速度を落としてしまっている。

つまり、逃げることもできない。　いや、逃がさないために、すべてが仕組まれていたのだろうか？

あたしは、鳥肌が立つのを抑えられなかった…。

【6】

マリアベル「対空警戒、なにしてたのっ！」

艦内の怒声と、急な減速G。　さらにものすごい横揺れに、僕は叩き起こされた。

霧雨「マリアベルっ！　敵はどこだっ！！」

だが次の瞬間、飛び起きた僕はそう叫んでいた。　すぐさまブリッジを出て、デッキに向かう。

リバル「危険です！　この状況で出れば、デブリにぶつかってしまいます！」

霧雨「それでも出なきゃやられる！　敵のＭＳもデブリをかいぐくって襲って来てるんだ。　敵にできて、僕にできないはずはないっ！！」

追いかけてきたリバルを置き去りにする勢いで、僕は自分のゲイツに乗り込んだ。　もちろん、ノーマルスーツなんか着ているヒマはない。

霧雨「…艦速そのまま、カタパルト圧１３％ダウン。　転舵右３点…」

僕は、計算した結果から導き出された位置を、矢継ぎ早に指示する。

これなら、計算上は艦後部に増設したカタパルトからの進路が、３．５秒はクリアになる計算だ。

霧雨「霧雨、ゲイツ出るっ！」

ミサイルの爆発で突き動かされたデブリの、わずか５メートル横を通り過ぎる。　もし少しでも触れれば、即大破するだろう。　だがやはり、そんなことに構っているヒマはないのだ。

僚艦のサラミスに、デブリがぶつかるのが見えた。　装甲を施した軍艦なら、さすがに致命傷にはならない。　しかし…

？？？「まさか、本当に来るとは。　ずいぶんと胡散臭い奴だったが…。　だが、まず１つもらったっ！！」

違う方向からリゲルグが近づき、ビームを放つ。

２発は外れ、１発はデブリ越しになったため、威力がなかった。

しかし、４発目…

帝国軍下士官「霧雨艦隊のサラミス、沈みますっ！」

爆発の閃光が、辺りを包んだ…。

第２４章　カンタルダル夜襲（前書き）

世界解説も終わったので、次は何を書きましょうか？

……

……

今回は、ゆっくりお休みにしよ（笑）

みなさんも、あんまいろいろ書かれると、うっとおしいですよね？

↑ただ著者が面倒くさがりなだけ

第２４章　カンタルダル夜襲

帝国軍基地『カンタルダル』

そこには、夜陰に紛れて布陣した、グランズとカムラネルナの合同軍がいた。

戦力は１５０名程度。　ＭＳはなく、トラックを改造した、自走砲とも呼べないような砲が１０門あるだけ。　他にもＲＰＧ（携行型対戦車ミサイル）や、対ＭＳ用地雷などは持ってはいたが、いかにもレジスタンスらしい…

貧弱な装備だった。

？？？「苦しいのは、お互い様のようだな…。　なのに、わざわざ援軍に来てもらってすまない」

カムラネルナのリーダーらしき男が頭を下げた。

エヴァニー「ムサシ。　この際、遠慮はなしにしよう。　今は、基地を落とすことだけを考えよう」

エヴァニーはカンタルダルに駆けつけてから、シベリアと一緒に街を回ってみたが、噂通りの横暴ぶりだった。

1人や2人の兵が過ちを犯す、というのならばまだしも、どうやら指揮官自らが街を食い物にしているようなのだ。　指揮官がそうなのだから、その下の兵士に規律があろうはずがない。

ムサシ「恩に着る。　しかし、帝国にはMSが3機もいるという。いくら暗闇に紛れても、厳しい戦いになるだろうな…」

ムサシと呼ばれたリーダーは厳しい顔つきだった。　しかし、目には強い決意を秘めている。

エヴァニー「…帝国を倒す。　それはもちろんやりたい。　だけどそれより前に、人としてしなければならない事があるんじゃないか？　街の人も救えないで、何が反帝国レジスタンスだ！」

2人は顔を見合わせると、強く頷いた。　続いてムサシが合図すると、何人ものレジスタンスが前に進み始める。

エヴァニー「…まずはＭＳを誘き出して、地雷で仕留める。　それからは…」

エヴァニーの顔に、一瞬躊躇いが見えた。　どう考えても戦力は足りていなかった。

ムサシ「…そこからは成り行きだ。　すまない。　もっと俺に力があれば、お前を巻き込まずに済んだかも知れないのに」

ムサシはすまなさそうに言ったが、エヴァニーは何も言わず、ただ前に向かって走り始めた…。

【2】

レナ「結局、誤報だったんですか？」

ディジョン「…何もなかったんだから、めでたしめでたし、と言い

たいところだが…。

そうはいかん！　明日から進軍だと言うのに、よりにもよって、前日の晩にスクランブルなんだ？　しかも誤報の！！」

ここはグラーフェンから、南に数百キロは離れた所だった。

場所で言うなら、私たちが最初にいた…　つまり、グラーフェンに援軍に行く前にいた基地よりも南で、レジスタンスの巣窟ではある。

だが、この辺りをＭＳや航空機が飛ぶなど稀で、ましてや有力な敵の機動部隊が進軍中など、限りなくあり得ない話なのだ。

もし本当なら、インドラが大規模に介入してきたということで、それこそ私の連隊が動いてどうなる規模の話ではない。

レナ「…日、暮れちゃいましたね」

ディジョン「…そうだな」

このままでは、明日の進軍に合流しようと思えば、睡眠時間を削るしかなくなる。

ラリー「いっそ、ここで一晩明かしたらどうですか？　基地司令も心配そうな顔してましたし、様子を見るためと言えば、上も無理に帰って来いとは言わないでしょう」

レナ「…機体の補給と、私たちの食事は手配してくれるそうです」

近くの整備兵を捕まえたのか、レナはそんなことを言ってきた。見た目はそれなり立派な基地で、常駐しているＭＳも何機かいるようだった。　つまり、整備や補給をする設備や人員は、確保されているのだ。

ディジョン「…仕方ない。　各員、まだ敵の動向がわからない以上、迂闊に基地の防備を緩めるのは危険だ。　コックピットで待機、以上だ！」

ラリー＆レナ「了解！」

…そういえばさっき、余ってる毛布があるとか言ってたな…。　あれもついでに貸してもらうことにしよう…。

【3】

射撃が始まった。　轟音が轟き、基地内にも火柱が上がる。

続いてサイレンが鳴り響き、帝国兵が姿を見せ始める。　とりあえず奇襲は成功したようだが、ＭＳはまだ姿を見せてはいない。

ムサシ「撃って撃って撃ちまくれっ！　敵をいぶり出すんだ！！」

『オー』という声が上がって、砲の動きが活発になる。

ちなみに砲は、超がつくくらいの旧式ではあったが、口径は１５５ミリあった。　ザクマシンガンが１２０ミリ、ザクキャノンなら１８０ミリだから、直撃すればＭＳにも有効な大きさだ。　つまり…。

帝国兵「ＭＳの起動を急げっ！　止まったままやられるつもりかっ！」

狙い撃ちにされてはたまらないので、慌てて反撃に出ることになる。

帝国兵「くっそ、人が気持ちよく寝てるって時に！」

カムラネルナ兵「…来ました、ＭＳですっ！」

やっと現れたＭＳは、ハイザックだった。　ふだんレジスタンス討伐に来るのは、旧式のザクやドム程度だから、そういう意味でも手強い相手だ。

ムサシ「直撃させろっ！　ＭＳといえど、直撃させればっ！！」

ムサシの叱咤半分、期待半分の声が飛ぶ。　その声が届いた訳でもないだろうが、ハイザックの肩のアーマーに、１発の砲弾が直撃する。

ムサシ「…やったか？」

しかし、ムサシの希望が叶えられることはなかった。　ハイザックの肩に装着されたアーマーは、１５５ミリ砲弾をも、軽々と弾き返してしまったのだ。

エヴァニー「まかせろっ！　サヤリ、行くぞっ！」

そんな様子を見てとってか、エヴァニーとサヤリがＲＰＧを担ぎ、駆け出して行く。

帝国兵「…暗闇に紛れてちょこまかとっ！」

ハイザックはライトを照らし、辺りのレジスタンスに対して、ザクマシンガンを乱射していた。　ライトを照らせば当然目標になるはずだが、さっきの直撃に耐えたことで、自信を持ったらしかった。

帝国兵「そこだな？　死ねっ！」

ハイザックは前方に疾駆しながら、エヴァニー達を狙う。

エヴァニー「サヤリっ！　こっちに引きつけろ!!」

エヴァニーが大声で叫ぶ。　そして、サヤリが手にしたＲＰＧでハイザックを撃つ。

帝国兵「そんな豆鉄砲が効くかよっ！」

当たったＲＰＧをものともせず、ハイザックは突進を続けた。　そしてそのまま、サヤリを踏み潰す勢いで…。

帝国兵「…馬鹿なっ！　地雷だと?!」

自分は攻撃する側だとばかり思い込んでいたハイザックは、仕掛けた対ＭＳ用の地雷の１つを、見事に踏んでいた。

脚先が失われ、バランスを崩す。　支えようとしたのか、反対の左脚をつくが、かえってそれが災いした。　勢いのついた２０トン近い重圧を支えきれず、左脚までも関節から折れてしまったのだ。

ムサシ「いまだっ！　やってしまえ！！」

動きの止まったハイザックは、もはやただの的だった。　いくら装甲が厚くても、全身に砲弾を浴び、各所で火花が散る。　最後には、半分めくれ上がったコックピットに、直接手榴弾が投げ込まれ、パイロットを絶命させた。

カムラネルナ兵「…右に回れっ！　そっちが手薄だっ！」

グランズ仲間「押せ押せっ！　いまなら行けるっ！」

レジスタンスの猛攻は止まるところを知らない。

だが、帝国軍とて退くわけにはいかないのだった。　ＭＳを持つ正

規軍相手ならいざ知らず、ふだん雑兵以下と馬鹿にしているレジスタンスに負けたとあっては、名折れというより、むしろ恥や汚名でしかない。

帝国兵「…まだだ…　まだこの程度じゃあなっ！！」

さらにＭＳを繰り出し、めったやたらに反撃してくる。　しかも悪いことに、そのハイザックの数は３機。　つまり情報より、１機多かったのだ…。

【４】

遠くで響く音…。

ディジョン「砲撃だっ！　起きろっ！」

無線で叫ぶ。　そうしながら、機体と神経回路を素早く繋いだ。

ラリー「…なんです？」

ディジョン「聞こえないか？　なら、聴音機の感度をあげてみろ！」

レナ「…敵襲のようですね？」

レナはラリーよりは反応が早かったものの…。

レナ「辛うじて聞こえるくらいですね。　かなり遠いんじゃないんですか？」

どうやら、具体的な状況までは、把握しかねているようだった。

ディジョン「いや、砲撃音が聞こえるということは、１０キロ四方のどこかだろう。　情報を仕入れてみよう」

私は通信を、軍の緊急回線に合わせてみた。　そこでは、ここから２０キロほど離れた基地が、レジスタンスの襲撃を受けて、盛んに

救援を要請していた。

ラリー「２０キロ先の音を聞き分けるなんて、隊長の耳って変じゃありません？」

ディジョン「…そんなことを言っている場合かっ！　援護要請が出ているんだ。　行くぞ！」

私はラリーを叱咤して、空へ飛び立った。　２０キロなんて、可変ＭＳにすれば目と鼻の先だ…。

第２５章　もう１人の皇女（前書き）

（皇族のお話）

さて、お休みが明けたところで（笑）、今度は登場人物の紹介をしようと思います。

その中でも、特にわかりにくいと思われてるのが、帝国の皇族の系譜（家系図）じゃないでしょうか？

というワケで、次回からはこの戦乱の元になった、皇族の家庭事情を書いていきますね？

第２５章　もう１人の皇女

帝都パンドラールへ向かって飛ぶ、１隻のガルダ級の姿があった。

その艦体は、戦闘艦にはふさわしくない白で塗られており、尾翼に描かれているのは、ユーフォリア皇家の紋章。

それはすなわち、ユーフォリア皇帝本人か、その一族の証であり、皇族が外征に及ぶ際に、その身を委ねるものに間違いはなかったが…。

だが、不審と言うか、奇妙な点もいくつかある。

これだけ荘厳な艦なのに、随行するのはファットアングル輸送機がわずかに２機。　それも、煤けて飛ぶのがやっとと思えるような機体で、まるでガルダとの釣り合いが取れていない。

ふつうなら、皇族が自ら将旗を掲げるとなれば、どんな後方であっても、数隻は戦闘艦の護衛がついているはず…？

???「メリャーナ様。　まもなく、パンドラールの管制区域に入ります。　着陸も近いと思われますので、シートベルトを…」

そう声をかけたのは、これまた一目で侍従武官とわかる、第一種軍装の女性士官。　階級は少佐だろうか？

メリャーナ「マリー。　そんなに慌てなくても、どうせ待たされるのでしょう？　着陸が決まってから席に着いても、遅くないでしょうに」

マリー「は……」

膝の上に乗せた猫を撫でながら、メリャーナと呼ばれた姫は、悟りきったような口調で言った。

だが、これも少しおかしい。

もし、この姫君が本当に皇家の人間ならば、着陸の順番待ちなどあろうはずがない。　優先で着陸どころか、その日1日、厳戒体制の空港を占有する。　それが本来の、ユーフォリア皇族の扱いなのだ。

メリャーナ「まあ、もう少しのんびり、空の旅を楽しみましょう？」

そう笑いかける姫の膝では、相変わらず愛猫が、気持ち良さそうに喉を鳴らしていた…。

【2】

メリャーナ「帝都も久しぶりね」

言葉には妙な響きがあった。　そして、無言で頭を下げる女性武官。

結局この日は、宇宙からの定期便と、インドラを空爆したという戦闘機群を優先し、小1時間待っての着陸となった。

表向きは

『巨大なガルダ級が着陸できる滑走路は限られている』

ということだったが、それにしても、随行した輸送機の方が先に着陸するのには、違和感がある。　たしかに、ファットアングルは垂直離着陸機だから、基地の隅に空きスペースがあれば、それで十分なのだが…。

メリャーナ「…そう言えばマリー？　新しい宰相が決まったって話だけど、聞いているかしら？」

メリャーナが、落ち着いた様子で侍従のマリーに問う。

マリー「はい。　ザキラ・ニカイドウ。　ここ数年で、急速に力をつけた一派ですね。　なんでも、亡くなられたロレンス皇子殿下の寵臣だったとか」

メリャーナ「…そう…」

メリャーナはまた、諦めたように笑った。

そう言えば、次の皇帝になるはずだった第2皇子が、数年前に突然奇病を発症し、意識不明のまま、去年ついに亡くなっていた。　それから1年あまり、皇帝が君臨、統治するはずのユーフォリア帝国

なのに、この姫君や、他の皇族が皇帝に就かないのはなぜなのだろう？

メリャーナ「挨拶には、出向いた方がいいわよね。　マリー。　今から伺ってもいいか、訊いてみてくれるかしら？」

だが、そう言われたマリーの表情は冴えない。　いや、むしろ何かしらの不満を抱えているように見える。

マリー「…お言葉を返すようですが、メリャーナ様。　姫様がそこまでなさる必要は…」

メリャーナ「マリー！」

マリーの言葉を、メリャーナは強い調子で遮った。　それからちらっと周囲を見渡し、誰もいないことを確認する。

メリャーナ「…姫様はやめてと言ったでしょう？　それに、マリーの言いたいことはわかります。　皇女たる私が、いかに最高権力者とはいえ、一臣下の宰相に頭を下げる必要なんてありません。　し

かし、それが今の帝国の内実なのです。　特に帝都では、迂闊なことを喋らないように。　いいわね？」

それだけ言うと、メリャーナは再び姫君らしい柔和な顔に戻り、宰相のいる行政府の方へ歩き出した…。

【3】

それから僅かの後、メリャーナは宰相の就任を祝うとして、ザキラの元を訪れていた。　ただ、マリーが言うように、これではどちらが臣下かわからない。

ザキラ「わざわざ皇女殿下にご足労を頂くなど、誠に畏れ多いことでありますな」

ザキラはそう言ったが、言葉にメリャーナを畏れたり、敬う響きはない。

それは、この新宰相が傲岸だからなのか？　それとも、父と娘ほど歳が離れた2人には、仕方のないことなのか？

メリャーナ「お気になさらなくても結構ですわ。　皇女とはいえ、一旦は他家に嫁ぎ、皇族籍を離れた身ですから。　ふつつか者の勝手な都合に、お忙しい身の宰相を付き合わせては、それこそ不敬というものです」

メリャーナはそう静かに返した。　言葉はザキラ以上に丁寧だったが、言葉には感情が込められておらず、また表情からも一切の気持ちを悟らせなかった。

そんなメリャーナを見て、ザキラは低く笑う。

ザキラ「皇女殿下もお変わりなきようで。　ところで、殿下はこれよりどうされるおつもりか？」

メリャーナ「…どうされる、とは？」

メリャーナは、オウム返しに問いを返した。

ザキラ「これは異な事を。　殿下が、輸送や慰問といった任務をこなしていただけるのは、前線で戦う兵にとって、大きな励みとなっ

ておりましょう。　ですが、そのような些事は、殿下が真になされることではありますまい。　そうお考えにはなりませんか？」

ザキラの目が、ある種の凄みを帯びた。

メリャーナ「…おっしゃる意味が、よくわかりかねますが。　ともあれ、些事を馬鹿にしては、大事をつつがなく運ぶのは、無理というもの。　ましてやこの動乱の折、前線の兵ほど辛い立場に立たされた者はいないでしょう。　彼らを気遣わずして、他に何を気遣うべきでありましょうか」

メリャーナも一歩も引かない。

言葉そのものにではなく、その裏に違う意味を込め合う。　そうしながら話す様は、まるで見えない刃を交えているかのようだった。

メリャーナ「私は皇女として、できることは身を惜しまないつもりです。　役に立てることがありましたら、遠慮なくお申し付けください」

メリャーナがそう言うと、ザキラもそれ以上は言わず、あとは形式

的な話に終始した。

どうやらその日の戦いは、何度目かの引き分けに終わったようだった…。

第２６章　２つの出逢い（前書き）

（皇族のお話）

まず、物語に出てくる皇族は、みんな大武帝ラインザックの子孫です。

ラインザックから見ると

★子★

長男　レミル（先帝＝病死）

次男　ドラグノック（西欧領主＝名前だけ登場）

長女　ミルローザ（物語未登場）

★孫★

第１皇子　ランドルフ（戦死）

第２皇子　ロレンス（奇病で病死）

第３皇子　ラングレイ（戦死）

第４皇子　レオンハルト（消息不明）

第１皇女　マリアンヌ（出産後の経過が悪く、死亡）

第２皇女　メリャーナ（帝国軍在籍）

第３皇女　マヒロ（マーガレット領主）

となります。

先帝レミルは、大変女好きであったと陰口を叩かれており、噂通り４男３女をもうけていたんですね～

まだ続きます。

第２６章　２つの出逢い

イエスマン「そう緊張されなくても、宰相も同じ人間ですからぁ～。別に捕って食べたりはしませんよぉ…　たぶん」

エルフレア「…は、はい…」

ここは、宰相専用の応接室。　さすがに警備は物々しくて、貴族の一員であるエルフレアまで、ボディチェックをしてようやく入れた。
そんな雰囲気に呑まれたのか、通された席でザキラを待つエルフレアの膝は、さっきから小刻みに震え続けていた。

ザキラ「…これはこれはエルフレア殿。　大変お待たせして申し訳ない」

しばらくして部屋に入って来たザキラは、こう大仰に言ってみせた。
宰相の貫禄か、すべてを見透したような目がとても印象的だ。

エルフレア「…あ、これっ…　…っ」

これは宰相閣下、と言おうとしたエルフレアは、ふらついて席にもたれ込んでしまっていた。　ザキラが部屋に入って来たのを見て、席から立ち上がろうとしたのだが、緊張のあまりうまく立てなかったのだ。

ザキラ「そのままで結構。　どうやら、若者を怖がらせてしまったようだ」

低く笑うザキラは、些細なことなど気にしないと言いたげな様子で、実に泰然としていた。　こうして見ると、エルフレアがずいぶんと小さく見える。

ザキラ「話は、ジェイソンから聞いている。　後継問題で、ずいぶんと元老院の古狸どもから、言いがかりをつけられたそうではないか。　若者らしい率直さや、初々しさを理解せぬ俗物どもの失礼、代わってお詫びしよう」

エルフレア「そ、そんな宰相閣下に頭を下げて頂くなど！」

ザキラが不意にエルフレアに頭を下げたので、エルフレアは慌ててこう言った。　これでは、どちらが謝っているのか分からないくら

いの取り乱しようだ。

ザキラ「それはそうと、エルフレア殿のグラーフェン後継の件だが、私個人としてはまったく異存がない。　ただ…」

ただ、の後に続く言葉を、エルフレアは震える手を必死に握り締めて待った。

ザキラ「…ただ、私がいいと言ったから後を継いだ、では、かえってエルフレア殿が、肩身が狭い思いをなされるのではないかと思うのだ…」

ザキラの目がエルフレアを見据えた。　エルフレアは額に汗を浮かべており、ザキラの目を正視できていない。

エルフレア「…は、はい」

ザキラ「そこでだ。　エルフレア殿は、領主の座は名乗りを上げる

に留められて、まずは軍人として前線に立たれてはいかがか？　古来より帝国貴族の名誉は、戦いの中での兵達の尊敬の眼差しによって支えられてきたと言ってよい。

…早い話が、戦場で武勲を挙げれば、元老院の古狸どもとて、エルフレア殿を認めざるを得まいて」

そこまで一気にまくし立てると、急に身を乗り出したザキラは、エルフレアの肩に右手を置き語りかける。

ザキラ「…そもそもこの問題は、反帝国のレジスタンス共が、お父上を手にかけたことに端を発している。　これはお父上の仇討ち、そうは考えていただけぬかな？」

ザキラがエルフレアの肩から手を離し、席にどっしりと身を委ねた時、エルフレアの震えはとまり、目は異様な輝きを帯びていた。

エルフレア「…宰相閣下のおっしゃる通りです。　このエルフレア・メビス、必ずや武勲を挙げ、力で後継ぎの座を勝ち得てみせます！」

そう力強く告げるエルフレアに、もはや迷いはないように見えた。

ザキラ「さすが若いだけあって、物事に対する熱の入れようが違う。戦果を期待していますぞ」

それだけ言うとザキラは席を立ち、部屋を後にしようとしたが、扉の前でふと立ち止まると、こんなことを言った。

ザキラ「…ああ、聞いた話ですが、エルフレア殿は大変優れたＭＳにお乗りとか。もしよかったら、そのＭＳを私に譲っていただけまいか？　もちろんこれは個人的な頼みゆえ、エルフレア殿が気が進まぬとあらば、控えさせてもらうつもりだが…」

ザキラの目が、再び強い光を帯びた…。

【2】

エルフレア「このＭＳは…　あ、この地形を利用すれば…　いやいや帝国貴族たるもの、まずは正攻法で堂々と…」

何やらぶつぶつ呟いているのは、さっきザキラと会ったばかりのエルフレア。　どうやらザキラに渡された電子ファイルを、一心不乱に見ながら歩いているようだ。

『ドンっ！！』

そんな音がするくらい、通路での出会い頭に、エルフレアは誰かにぶつかっていた。　前をまったく見ていなかったのだから、当然と言えば当然である。

エルフレア「あっ…」

マリー「無礼者っ！！」

ぶつかってもあまり状況が飲み込めず、ただ突っ立ったままのエルフレアに、侍従のマリーが厳しい声を上げた。

エルフレア「あっ、はい、ごめんなさい」

とりあえず謝りはしたが、まだ自分が誰とぶつかったのかわかっていない様子だ。

メリャーナ「…マリー。　少しぶつかったくらいで無礼者なんて、言い過ぎですよ？　いくら私が、皇女だからと言っても…」

当のメリャーナに、まったく気にした様子はない。　さっさと自分で立ち上がり、服の汚れをはたいていた。

エルフレア「えっ！　皇女殿下ですか？　これは大変な失礼…」

と言ったまま、なぜか固まるエルフレア。

メリャーナ「…私の顔に、何かついていまして？」

怪訝な顔のメリャーナ。

エルフレア「…い、いえ、皇女殿下があまりにお美しいので、つい…」

マリー「貴様、メリャーナ様に無礼を働いただけでは収まらず、不埒な言葉を囁くとはっ！！」

マリーが、侍従の証である長剣に手をかける。　けれど、その手を抑えたのもメリャーナだった。

メリャーナ「…だから、やり過ぎだと言っているではありませんか。女性に饒舌なのは、若者の特権でしてよ？」

メリャーナはくすっと笑う。

その笑顔に、見惚れているのがまるわかりのエルフレアと、憮然としたマリー。

メリャーナ「…まあ、ここでお会いしたのも何かの縁。　また機会がありましたら、お話でもいたしましょう。　では…」

メリャーナは微笑みながら告げると、その場を歩み去った。

そしてその後ろ姿を、エルフレアはずっと見送っていた…。

【3】

明後日。

2つの出逢いの余韻を引きずったまま、早くもエルフレアはパンドラールから飛び立とうとしていた。

そして、艦上の人となったエルフレアは、まさに有頂天であった。

というのも、ザキラは出陣にあたり、エルフレアのためにと、エンドラ級巡洋艦と、その搭載ＭＳを丸ごと用意したのである。　エンドラ級は、宇宙と地上の両方を航行できる、帝国軍の万能巡洋艦だ

った。　能力が際立って高いという訳ではないが、少なくともエルフレアにとっては、乗ったこともない大きな軍艦を任されたことになる。

そして、それ以上にエルフレアを舞い上がらせていたことがあった。

エルフレアは、あの日出逢ったメリャーナの面影がどうしても忘れられず、出立の挨拶を表向きの理由として、メリャーナに私信を送っていた。

さすがのエルフレアも返信など期待しておらず、せめて名前だけでも覚えてもらえたら、ぐらいの気持ちであったのに、なんとメリャーナはエルフレアに対して、直筆の書簡で返礼をしてきたのだった。

エルフレア「メリャーナ様…」

その書簡を何度も読み返し、大事そうに抱えるエルフレア。　わか

りやす過ぎる主の恋を温かく見守るラドだったが、その笑みは、次のエルフレアの言葉で凍てつくことになる。

エルフレア「…ああ。　そうだ、ラド。　グラーフェンに着いたら、GP―2をパンドラールに送る手配をしてくれ」

ラド「…エ、エルフレア様、いまなんと?!」

驚きを隠せないラド。

エルフレア「そんなに驚くことかな?　あの機体を宰相閣下が是非にと言うので、献上することにした。　急ぎ送らねば」

対するエルフレアは、ラドの反応が理解できないらしく、目を丸くしている。

ラド「…しかし、エルフレア様。　あの機体は、お父上の形見であらせられますぞ？」

慌てて諫言してみるも…。

エルフレア「…妙なことを言うな？　形見も何も、父上が生きておられる間に、私はあの機体を見たことはなかった。　父上が乗られていたＭＳというならばいざ知らず、見知らぬＭＳを形見と言われてもな？」

ラド「ですが、あの機体はバッフェル様が…　いやそもそも危険…」

エルフレア「…ラド。　いい加減にしないか。　あのＭＳが核攻撃を前提に開発されたガンダムなことくらい、私も調べた。　だが、グラーフェンにあった機体は核弾頭を装備してはいなかったし、たとえ装備していたにしても、もう宰相閣下に約束してしまったからな。　いまさら渡せません、ではメビス家の面目が立たん」

ラド「なれどっ！　…いや、もしかしてこの艦とＭＳ群は、その代わり…。　エルフレア様は、お父上のＭＳを取引の具に差し出され

たのか！」

息を荒くして、エルフレアに詰め寄るラド。　だがエルフレアは、ラドの真意を理解できていないようだ。　むしろあまりにラドが執拗なので、不快な表情すら見せ始めた。

エルフレア「ラド！　宰相閣下に対して、取引とは何たる言い草だ。　これは次代領主たる私の決めたことだ。　それとも何か？　ラドは私に、領主の座にも就かず、ガンダム1機抱いて、路頭に迷えとでも言うつもりか！！」

その顔は、かつて温厚で情に満ち溢れた少年とはあまりにかけ離れた、ラドが見たこともない暴君のそれだった。

ラド「……。　…言葉が過ぎました。　お許しください」

詫びた言葉も、いままでエルフレアに言ったことのない、他人行儀なものになった。

エルフレア「わかればよい。　たしかに申し付けたからな」

そう憤然と言い放ったエルフレアは、せっかくの気分を害されたとばかり、その場から去った。

それからエルフレアは、ザキラから与えられた自分専用ＭＳの調整することに没頭し、ついにグラーフェンに着くまで、ラドや周りの者たちに、笑顔を見せることはなかったのだった…。

第２７章　裁きの鉄槌（前書き）

（皇族のお話）

続きです。

たくさんの子どもをもうけた前の皇帝（レミル）でしたが、その事実と皇帝としての能力の不足が、戦乱の元になっていきます。

ただ、１０数年前までは、誰もが後継ぎは長男のランドルフと思っていましたから、そのままであれば、後継ぎ争いまでは起こらなかったでしょう。

ですが難しい設定（笑）にあったように、長男と三男が相次いで戦死してしまいます。

その後釜をめぐり、貴族たちは派閥争いを激化させます。

次男のロレンス皇子は、物語に出てきたザキラを味方につけると、長女（マリアンヌと、次女（メリヤーナ）に適当な婚礼話を押し付け、皇族家から追い出してしまいます。

ちなみに、この時三女のマヒロが争いに巻き込まれなかったのは、マヒロの母が低い身分だったからで…。

ぶっちゃけマヒロは、レミルが部屋の掃除をしていた侍女を襲って（苦笑）できちゃった子だったので、誰からも皇女らしい扱いをされていなかったせいなんですよ（笑）

そうして残されたのは、４男のレオンハルト皇子だけになったのですが…。

続きます。

第２７章　裁きの鉄槌

迫る３機のハイザック。

その地響きに、誰もが逃げ出したくなる。

…勇気を振り絞る。

ムサイ「ここで諦めたらみんなおしまいだ！　エヴァニー、先に行くぞ！」

ＲＰＧを抱えて突出するムサシ。

帝国兵「雑兵共が、うろちょろと…。　死ね、死ねぇ～！！」

乱射されるマシンガンを、超人的な反射神経で避けたムサシは、ハイザックの死角に入り込む。　そして抱えたＲＰＧでハイザックの関節を撃ち抜き、前のめりに倒す。

さらに、その隣のハイザックのモノアイに、放たれていた砲弾の１発が命中し、そのハイザックは視界を大幅に失った。

…だが、そこまでで『奇跡』は終わった。

残る1機のハイザックが、ムサシのいた辺りを掃射すると、数えきれないほどの血と肉片が散らばった。

さらに、狂奔した帝国兵は、自軍の基地内であるにも関わらず、次々と重火器を使い始め、その勢いに押されるがままになるレジスタンス。

ムサシ「まだだ…　あと1機…」

足に銃弾を受けたのか、足を引きずりながらも、新しい砲弾をセットし、射点につこうとする。

帝国軍司令官「…ゴミクズめっ！！」

しかし、その猶予はついに与えられることはなかった。

エヴァニー「ムサシっ～～～～！！！」

その絶叫に刹那、笑ったように見えたムサシ。　だが、その上にハイザックの足は掲げられ…

…下ろされた。

ふと見渡せば、辺りにいたのはエヴァニー、サヤリと…　１０人ほどの手負いの仲間たち。

基地に突入した１００人ほどの仲間が、その数にまで減っていた…。

【2】

ディジョン「…なんだ、この異様な光景は…」

私が救援に来た基地で目にしたのは、既に半死半生の体で武器を担ぎ、闇雲に撃つだけのゲリラ共の姿だった。

たしかに士気が高く、帝国軍相手となれば無茶をやりかねないのがレジスタンスではあるが、その有り様は、それを割り引いても十分常軌を逸していた。

ラリー「隊長っ！　ＲＰＧっ！」

私は地上から放たれたそれを、機体をロールさせて回避する。　空を飛ぶ可変ＭＳに、無誘導兵器ごときが当たるものではない。

ディジョン「…攻撃開始だ。　ビームの出力は絞っておけよ！」

それでも私は、ゲリラ共にどどめを刺すべく攻撃を指示し、自分でも機体をダイブさせる。

私の射撃はゲリラのトラックらしきものに命中し、2台を一気に横転させた。　レナたちも1台ずつ破壊したようだ。　それで砲撃がかなり下火になった。

それでも反撃を続けようとする奴らがいたが、見せつけるようにビームの威嚇射撃をすると…

ディジョン「もう良いだろう。　諦めろ！」

そう、私は叫んでいた。　何故か…。

【3】

エヴァニー「ムサシ…　ムサシぃ～！！」

その叫びに応える者はすでに無かった。　代わりに振り注がれた、ビームの輝き。

ディジョン「…勝負はついたはずだ。　武器を捨てれば、これ以上の危害は加えないっ！」

だが、それに従うレジスタンスはいなかった。　むしろ、返って来たのは罵声。

カムラネルナ兵「勝負だと？　ふざけんなっ！　誰のせいでこんな事になってると思ってやがるんだっ！　この基地の奴らは、街を漁って女をさらい、逆らった男は皆殺し！　これが帝国軍のやり方かっ！！　てめーらの欲望のために、殺された人間の恨み、思い知れよっ！！！」

私が聴音の感度を上げて、なんとか聞き取ったのはそれだけだった。

そして、その直後に耳をつんざいたのは、爆発音。　私のＭＳの足下で、さっきのゲリラが自爆したのだ。

…だが、そんなもので、機体に傷がつくはずもない。

ディジョン「…やめないか…」

再び言いかけた私を遮ったのは、レジスタンスの罵声ではなく、爆発でもなく、1機のハイザックから聞こえた忌々しい雑言だった。

帝国軍司令官「はぁ？　聞こえんなぁ～？　強い奴が弱い奴らを支配するのに、何の遠慮がいると言うんだ？　貴様らは弱い。我々は強い。　だから街も女も、すべて我々のものだ！　文句があるなら、その豆鉄砲で街から追い出してみたらどうだ？　ほれほれ？」

しかも、勝利を確信したのか、その雑言に同調したかのように笑っている兵もある。　この様子だけ見る限り、ゲリラ共も言うことは…。

ディジョン「……。」

私は、ライフルを構えた。

…放たれたビームと…　砕け散った…

…ハイザック。

エヴァニー「…なっ！！」

レナ「隊長…」

ディジョン「…こいつらのしてきたであろうこと、これで済むとは思わない。　だが、この場はこれで収めてくれないか？」

分かりにくいが、そのＭＳは頭を下げているようにも見えた。

エヴァニー「……。」

周囲を沈黙が支配する。

ディジョン「…まだ足りないか」

再びビームがほとばしり、今度は基地を焼く。　燃え盛る火の音だけが騒がしい。

シベリア「…ここは退こう…」

エヴァニーの肩に手をかけたのは、シベリア。

エヴァニー「シベリアっ！　おま…」

『お前はそれでいいのか？』

そう言いかけたエヴァニーが見たのは、肩と左足に銃弾を受け、全身の服がズタズタになっていたシベリアと、それ以上の傷で、足を引きずって歩くのが精一杯の仲間たちの姿だった。

シベリア「……。」

黙って首を振るシベリア。

ディジョン「頼む」

再び、声。

サヤリ「……。」

エヴァニー「……。」

無言で武器を投げ捨てる。　近くにいた仲間に肩を貸す。

そして、レジスタンスたちはよろめきよろめき、基地を後にして行った。

レナ「…これで…　よかったのですか？」

ディジョン「…腐った枝は、存在するだけで害悪だ」

そしてＺ－Ｐｕｌｓもまた基地を飛び去り、その場には、焼けた『基地跡』と、幾多の亡骸だけが残った…。

第２８章　宿命の始まり（前書き）

（皇族の話）

続きです。

ここで１つ、不審な点が浮上します。

前の皇帝には7人もの子どもがいながら、３０歳前後の若さで、次々と3人が亡くなっています。　戦死や出産後の経過と理由はさまざまですが、いくらなんでも、数年の間に、こんなに死ぬものでしょうか？（戦死と言っても、シャアみたく最前線でバンバン戦ったりしませんし。護衛も厳重です）

そこに疑いを持ったのが４男のレオンハルト皇子。

わずか１５歳にして、この事実に疑いを抱くや、なんと兄（ただし、異母兄）のロレンス皇子ごと、ザキラを暗殺しようとしたと言われています。

ただ、若さゆえの杜撰さが出たのか、計画は事前に露見してしまい、皇子でありながら反逆者として国外へ逃亡せざるを得なくなったのですが…。

第２８章　宿命の始まり

ゲット「さあ、追い詰めたぞ？　降参するなら、今のうちだからな！」

新しい、しかも強力無比な武器を手に入れたゲットは、自信たっぷりに宣言した。　ふだんなら、こうしたセリフはレアルタあたりが言いそうなものだが、今回は苦笑いする役目だ。

スーリス「降伏だと？　ド素人のクセに偉そうな！」

言い返したスーリスだが、彼女とて軍人である。　己の置かれた戦況がわからないほど馬鹿ではない。　半身不随のジン・ハイマニューバを何とか動かし、巧みに隙を伺う。　その時だった…。

突然、ゲットの前に現れた灰色のＡＥＵイナクト。

ユーリ「スーリス中尉。　ずいぶんなやられようね？　援護が必要なんじゃない？」

ユーリは、余裕そうな声で回線を繋いできた。

スーリス「援護だと？　その前に貴様、任務を放り出して、どこで油を売っていた！」

ユーリ「そんなこと、あなたが知る必要のないことよ。　それより、援護はいるの？　いらないの？　早く撤退しないと、全滅しちゃうんじゃなくって？」

スーリスから見て年下、というよりクソガキに等しいユーリに撤退の手助けをすると言われ、スーリスは眉間に皺を寄せ、ユーリの乗るイナクトを睨みつけた。

しかし、繰り返すがスーリスとて帝国軍の士官。　馬鹿ではないのだ。

スーリス「…そこまで言うなら、あとは貴様に任せてやる。　スパンツ、撤退だ！」

スパンツ「あ、あれ？　スーリスちゃん？！」

撤退を宣言するや、すぐさま機体を翻したスーリスを、スパンツは置いていかれるのは御免とばかりに追いすがった。

ゲット「…逃がすかよっ！！」

ゲットは逃げるジンにビームライフルを向けるが、それはイナクトの斬撃によって、中止を余儀なくされる。

ユーリ「ゲット？　あたしを前にして、他のＭＳを相手にしようなんて、ずいぶんと余裕ね？　けど…

…そんな余裕、いつまで持っていられるかしらっ？」

イナクトは、もう一度プラズマソードを振りかぶった…。

【2】

不意に始まった戦いは、その激しさを増す。

その中でゲットは、プラズマソードを右へ左へ避けていた。　レアルタの教えが活きたのか、動きの無駄が減っている。

ただ、そうしながらもゲットは、イナクトに乗る相手のことを思い浮かべた。

ユーリ「…素人の割にはなかなかやるじゃない。　まあ、ガンダムに乗ってちゃ当然の結果かしら。　そのくらい強くなくちゃ、欲しがる価値もないけどねっ！」

通信回線越しに、ユーリが声をかけてくる。

ゲット「ぐっ…　どういうつもりだユーリ！　何でガンダムを欲しがるんだよ?!」

ユーリ「あなたに教える必要があるの？　ザコのあなたに!!」

イナクトは、ゼフィランサスにさらなる攻撃をしかける。　ゼフィランサスも応戦するが、だんだん実力の差が出て、ユーリの方が有利な態勢になる。

ゲット「速いし、強い…！　女の子なのにあんな……」

イナクトの動きは、例えるなら凶暴な猛獣のそれだった。　決定的に無駄が少なく、何より躊躇いがない。　見かけや言葉以上に、冷静に操っているようだ。

ゲット「じゃあ、これならどうだっ！」

ゲットは後ろに跳んで距離を取ると、ビームライフルを連射した。
　けれど、イナクトはそれを紙一重で避けてしまう。

ゲット「なんで当たらないんだ？　…って、やべ！　エネルギー切れ？！」

ゼフィランサスのビームライフルが、エネルギー切れを起こす。
手に入れたのが嬉しくて、短時間に射ちすぎたせいだ。

ユーリ「やっぱり素人ね。　エネルギー配分もできないんて」

ユーリは、すかさずゼフィランサスに突っ込むと、ゲットが狼狽え、動きが鈍った隙を突いて、シールドを持った手を斬り飛ばす。

それに怯んだゲットを脅すかのように、こう言った。

ユーリ「…さあ…　そのガンダムを渡して。　命が惜しかったらね…」

【3】

そんな様子に周囲は色めき立つが、足に根が生えたように、その場から動こうとしなかった人間が1人…　いや、2人か？

ゴトー「ここで助ければ、あいつは一生半人前だろうな」

ヴァイス「だが…」

レアルタ「ヴァイスさんには悪いが、今回は傭兵に賛成だな。　あの2人、逢って間もないけど、因縁抱えちゃったみたいでさ。　昔の俺みたいで、なんかこう、拳でしか語り合えない不器用さを感じるんだよね」

そんな大人の思惑に関係なく、ゲットはまだ諦めてはいなかった。

ゲット「やなこったね！」

ゼフィランサスは、頭部のバルカンを射つ。　至近距離にいたのが災いして、イナクトは命中弾を受けてしまい、ユーリは思わず跳びずさった。

ユーリ「…そう。　ならガンダムと一緒に死ぬといいわ…」

ユーリは、イナクトを一気にゼフィランサスの間合いに入れる。

ユーリ「…ゲット、さよ…」

ゲット「…俺は…　負けね～！！！」

…さよなら、そう言ってゼフィランサスに止めを刺すはずだったその剣は、その数メートル手前で止まっていた。

ユーリ「…この嫌な感じ…　頭が…　痛い…　いや、違…　はっ！　しまった！！」

ゲット「でやぁぁぁ～～～！！」

ユーリの躊躇は、時間にしたら数秒の間に過ぎなかったはずだった。
しかし、その数歩、数秒は、イナクトの数メートル先のゼフィランサスにとって、絶好のチャンスに他ならなかった。

ユーリが気がついた時には、残る片腕に持ったサーベルが降り下ろされる最中で、どうしようもなかった。

ユーリ「くっ！」

それでも、イナクトはなんとか機体をひねり、致命傷を避ける。

ゲット「どうだぁ！」

イナクトの右腕を破壊して、意気高々なゲット。

ユーリ「…ふん。　それで勝ったつもりなのね、笑わせてくれるわ」

ゲット「何っ！」

ユーリ「でも、きょうはこれくらいにしておいてあげる。　素人相手なんて、つまらないもの」

口ではそう言ったが、ユーリの表情からは、余裕さが消えたままだ

った。　さっきの不快感がまだ新しい。

ユーリ「じゃ、また会いましょ」

それだけ言うと、ユーリのイナクトは、ゲットのゼフィランサスに背を向ける。

ゲット「待てよっ！　逃げるつもりかっ！」

ユーリ「…逃げる？　おもしろい冗談ね。　でも、心配しなくても、あたしとあなたはまた戦うことになるわ。　…それが、そのガンダムを手にしたあなたの運命なの。　わかったら、その時までにせいぜい腕を磨いておいてね？」

ゲット「ユーリ…」

飛び去るイナクトを、ゲットは結局、追いかけようとはしなかった。

その背中が視界から消えるまで、ただ見つめ続ける。

ユーリ「…それにしても、このあたしが気圧されるなんて、あのゲットっていうヤツ…　もしかして、ニュータイプ？　それとも、イノベイダー？　どちらにしても気に入らないわ…」

こうしてユーリは、一旦ゲットの前から姿を消した。

しかし、ゲット・アルスターとユーリ・ストヴァル。　この2人の因縁は、まだ始まったばかりなのだった…。

第２９章　海賊の意地（前書き）

（皇族の話）

続きです。

結局、命からがら逃亡したレオンハルト皇子でしたが、その疑惑は、意外な形で立証されてしまいます。

政敵をすべて葬り去ったはずのロレンス第２皇子でしたが、彼はその後まもなくして原因不明の奇病に倒れ、意識不明となってしまうのです。

ただ生きているだけの皇子が政務を執れるはずもなく、そのすべてを代行したのがザキラ。　しかも、皇子が５年にも渡る闘病生活を経て帰らぬ人になるや、帝国の最高権力者たる、宰相に就任するのでした（この辺りから物語に出てきます）

相変わらずマヒロは蚊帳の外ですが、唯一残されたメリャーナは、偶然？　結婚した有力貴族の夫を戦乱で失ってしまいます。

子どももいなかったため、彼女は皇族（帝国軍）へと復帰するのですが、こんな帝国に疑惑を持つなという方が無理でしょう。

物語のメリャーナが、ザキラとああいう関係なのは、そういう背景があるからなのです。

ただ、ザキラが何を考えているのかは、今の時点ではまるでわかっていません。　皇子皇女近辺の相次ぐ死にしても、ザキラが関わったという証拠は、何1つ出てきていないのです。

その秘密が明らかになるのは…

もっと先ですから、ちゃんと読み進めてくださいね（笑）

（皇族の話、終了）

第２９章　海賊の意地

あたしの艦は、何回もデブリにぶつかりながらも、辛うじて致命的な被害は受けないでいた。

グワダン級は、小回りとはまるで縁がない巨大な艦体をしていたけれど、対空砲火は強力で、装甲も厚かった。　本来は、皇帝が宇宙軍全体を指揮するために設計された艦だから。

？？？「デカブツが…。　たしか一番デカいのは殺るなと言われたが、かまうものか！」

サラミスとムサイを１隻ずつ沈めた敵は、あたしのグワダンに殺到する構えを見せた。　あたし達の艦隊は５隻から３隻に減っていたが、敵は３機のままだ。　やはりＭＳの護衛のない艦隊は、極端に脆い。

？？？「落ちろよ、デカいのっ！」

リゲルグがビームライフルを射つが、それは艦を掠めるだけに終わる。　そういえば、サラミスを沈めた時にも、あまりライフルの命中率は良くなかった。

待ち伏せなどの策略は得意でも、ＭＳの操縦や攻撃そのものは、さほど得意ではないのかも知れない。

???「くそっ！　このＭＳ、速いのはいいが、癖が掴みきれん！　お前らっ！！」

２機のズサが突撃を敢行する。　なかなかうまく攻撃できないリゲルグに代わり、ミサイルの数で命中率を補うつもりらしい。

しかし直後、１機のズサが、高速で接近して来たゲイツに斬りつけられるのが見えた。

霧雨「手間をかけさせてくれるよっ！　しかも僕の大事な艦を、沈めてくれるとはねっ！！」

そのズサは、あくまで艦を攻撃しようとするけれど、ついにゲイツに捕まり、両断された。

霧雨「次はあっちか！」

霧雨のゲイツは、飛び交うデブリをものともせず、もう1機のズサに迫ろうとするが、そのズサは、霧雨が攻撃するよりも早く爆発していた。

その側には、1機のゲルググ。

ジン「姉御っ！　置いてけぼりは酷いっすよ。　俺も戦いますって！」

援軍に来たのは、霧雨が最初の海賊との戦いで捕まえて、その後自分の軍に編入したジンだった。

霧雨「…姉御って、僕は男だって言ってるだろう？」

ジン「いや、姉御って強いけど、顔は可愛らしいから、つい」

霧雨「…また姉御って…。　でも、こんなデブリの雨の中、よく来たっ！」

ジン「赤いＭＳなんかに乗りやがって。　目立ちすぎなんだよっ！」

霧雨のゲイツより、ジンのゲルググの方が前へ出た。　そのゲルググにリゲルグは突っ込み、ビームサーベルとビームなぎなたが斬り結ばれた。

？？？「…　…ん？」

ジン「なかなかやんじゃねぇか！」

続いてジンが繰り出した二撃目を避けると、リゲルグはサーベルを振る代わりに、ゲルググの腕を取り、接触回線を無理矢理繋げてきた。

？？？「…その声、そのゲルググ…。　てめぇ、ジンだなっ？　どこでおっ死んだかと思ってたら…。　帝国の奴らと馴れ合って、何してやがる！」

ジン「…お、そ、その声は、副頭領ぉ…　いや、ガンス？！」

ジンも気がついたのか、会話に応ずる。　しかし、何か様子がおかしい。

ガンス「…どうりでアジトがバレたり、逃げたお頭が待ち伏せされたりする訳だ…。　ジン！　てめぇ、仲間を売りやがったな！！」

そう言いながら、リゲルグはビームサーベルをゲルググの首に添えるように持つ。　その光景は、まるでこれから人の首を刎ねるかのようだ。

ジン「…違うっ！　俺は…」

ガンス「…じゃ、なんで討伐軍気取りなんだ？　これで仲間を売ってねえって言って、信じるバカがいるかよっ！！」

ジン「ひいっ！！」

リゲルグは突きつけていたサーベルで、ゲルググの頭をはねようするが、ジンはかろうじて掴まれた手を振り払い自由になる。

霧雨「ジンっ！　離れろっ！」

霧雨がそんな様子を見て取ったのか、ライフルでリゲルグを牽制する。　それで何とか2機が離れた。

霧雨「…どういうことだ、ジン？」

ジン「…姉御…。　あいつは俺が元いた…　姉御たちが潰した海賊の、副頭領してたガンスっつって…」

霧雨「つまり、潰されたのを逆恨みして、僕たちを待ち伏せてたっ

て事か。　ご苦労様なことだね！」

ガンス「…お前がジンの新しいご主人様かよ？　悪いが、そいつは返してもらうぜ？　うちらの決まりじゃな、裏切り者は釜茹でか、火あぶりにすることになってるんでなっ！！」

リゲルグは、さらにジンのゲルググ執拗にを狙う。

ジン「ま、待て、ガンス！　話せばわかるっ！」

ガンス「聞き耳持たんっ！　そんなにお喋りがしたいなら、地獄の閻魔大王とでも喋ってろ！！」

一度は離れた距離を、ガンスのリゲルグは急速に詰める。　霧雨のゲイツには目もくれず、あくまでジンだけを執拗に追いかける。

ガンス「…ちょこまかちょこまかと！　そう言えばてめぇは、昔から負けそうになると、急にビビって逃げ腰になってたよなぁ？　ＭＳ乗ったまんま、小便チビったのはいつだったか？」

そんなことを言いながらも、ガンスはビームライフルを構える。
突進しながらではあるが、放たれたビームは、ゲルググを幾度とな

く掠めて…。

ジン「ひいいいぃぃ…」

遂に直撃した。　しかし、なんとか盾が間に合ったらしく、機体は爆発しなかった。

霧雨「…お前なぁ…」

ガンス「ジンの野郎を殺した後で、ゆっくり相手をしてやる！　邪魔すんじゃねぇっ！！」

ジン「…あ、姉御助けてっ！！！」

３つの声が絡み合う。

ただしその中で、一番動きが速かったのはリゲルグだった。

ジン「…あの世に逝ったら、お頭によろしくな？」

わずか数１０メートルの距離。　コックピットに真っ直ぐ向けられたビームライフル。

そして…　…　…。

？？？「ちょっと待ったー！！　トリプルオレンジシャーベットアタック！！！」

意味不明な少女の叫び声が、回線に割り込む。　そして、爆発するリゲルグのビームライフル。

さらに…

？？？「敵の策略にまんまと嵌まるとは、油断にも程があるぞ！誰のせいでこうなったか、分かっているのか！　中尉っ！！」

続く叫び声と共に、今度はリゲルグが肩のバインダーと左足を撃ち抜かれる。　しかも、その一撃でバランスを失ったリゲルグは、近くを乱れ飛んでいたデブリの１つにぶつかり、さらにダメージを負う。

ミク「お待たせ～。　可愛すぎる正義の味方、ミクちゃん登場！これでもうチェックメイトだよっ！」

ダメージを受けたばかりではなく、リゲルグの周りは、ファンネルに取り囲まれていた…。

【2】

ガンス「また、余計なのが来やがったか！　正義の味方だと？　笑わせんじゃねぇ！！」

ミク「…そう？　じゃ、愛の戦士でもいいや」

ガンス「……。」

あまりにも話が噛み合わないので、ガンスの方が黙ってしまった。

シリアスになったかと思えば、突然元に戻る。　それがミクという子なのよね。

そして、そのどちらでももの凄く強い。　現実に、遥か彼方からにも関わらず、リゲルグのビームライフルだけを、ファンネルで撃ち抜いている。

ミク「…どっちにしてもおじさん、もう後がないよ？　コックピット以外、全部ブチ抜くのは面倒くさいから、降伏してくれると助かるんだけど」

可愛らしい声で、少女にはあり得なさそうなことを言うミク。

ガンス「…コックピットを外そうってのか？　愛の戦士だけに、優しいんだなクソガキがっ！？」

顔をひきつらせながら、ガンスが叫ぶ。

だけど…。

ミク「…そんなワケないじゃん？　おじさんを捕まえて、まだ海賊の残党がいるかとか、聞き出したいことが山ほどあるからに決まってるし。　あ、拷問の担当はケイさんだから安心してね？」

何が安心なんだか、さっぱりわからない。　とにかく、とんだ愛の戦士であることだけは、ガンスも理解したようだ。

ガンス「…言っただろうがっ！　俺達に裏切りって言葉はねぇっ！　どこぞやの臆病者と一緒にするなっ！！」

リゲルグは、ミクとファンネルを全部無視して、なおもジンのゲルググに斬りかかる。

ミク「あっ！　もう手間…」

霧雨「大丈夫」

ミクはファンネルでリゲルグを追おうてしたが、その必要はなかった。　ゲルググに突っかかる遥か手前で、リゲルグはサーベルを持った手を、霧雨のゲイツに斬り飛ばされていたからだ。

霧雨「これで武器もなし、だ」

ミクのザク3に代わり、今度は霧雨のゲイツが機体を寄せた。

ガンス「…揃いも揃ってうざってぇ！　てめぇらの思い通りになぶり殺しになんか、されてたまるかよっ！！！」

リゲルグは、残ったスラスターを全開に吹かすと、またしてもゲルググ…

…いや、ゲルググの脇をすり抜けて、霧雨の旗艦バーミンガムへと突っ込んで行く。

ミク「あいつ、艦をっ！」

ケイ「…いや、もう奴に攻撃手段はない。　離れていろ。　巻き添えを食うぞ」

バーミンガムの主砲が、対空レーザー砲が、次々に放たれ始める。

ガンス「…お頭、待たせたな…。　あんた、あんな顔しといて、けっこうな寂しがり屋だったし…。

いま逝ってやるよ…」

バーミンガムの主砲がリゲルグを揺さぶる。対空レーザー砲はリゲルグの装甲を1枚ずつ剥ぎ取り、機体を溶かしていく。

それでも進むのを止めないリゲルグ。

ケイ「…海賊らしくない、壮絶な最期だ。　ミク、よく見ておけ。
あれも1つの人間の生き様だ」

ミク「……。」

ガンス「…それからな、ジン！　てめぇの裏切りは死んでも許さね

ぇっ！　裏切り者には死の制裁をっ！！　地獄の底で首を長くして待っててやるぜっ！！！

…うおおおおおおおおおおおおっ～～～～～～～～～～～～～～～～！！！！！！」

ガンスが断末魔の叫びを上げた時、リゲルグは粉々に砕け散り、その残骸すら、主砲の直撃で完全に蒸発した。

だが、彼の断末魔だけは、聞いた者の耳にいつまでも響き続けていた…。

第３０章　懐刀（前書き）

（お葬式？）

ミク「惜しい人を亡くしたよね～」

マヒロ「…ちょいキャラの割には、なんかかっこよく死んでるしね～」

ガンス「…悪かったな、ちょいキャラで」

ミク「うわっ、生き返った?!」

ガンス「…生き返ったっつーか、この冒頭文はなんでもアリらしいからな？　ネタばらしに来てやったぜ」

ケイ「…物語の先を喋るのは困る」

ガンス「ちっ！　じゃあ今回のシリーズは、登場人物の能力特集号だぜ！」

…後に続く…　らしい（笑）

第３０章　懐刀

～インドラ首都・デリー～

？？？「では、サンサレア殿、マンネ。　頼みます」

そう改まったもの言いをする人物に、サンサレアと呼ばれた女性は、軽く微笑み返しながら言った。

サンサレア「ダイン殿。　いまさら、そう改まったことをされなくても」

ダイン「…そう言われる、とは思いました。　ですが私は、身分を盾に『行け』などとは命じたくないのですよ。　同じくヒンドゥーの神を信じ、悪逆の帝国に裁きを下さんとする者同士ですから」

サンサレアの言葉に、ダインもまた微笑みながら返した。

インドラ軍の総大将にして、インドラという国の求心力そのものある、７代目『楽園の剣』当人であるにも関わらず、こういった言葉遣いをするのが、ダインという人間なのだった。

ダイン「私にもっと周囲を纏める力があれば、こんな一部隊ではなく、しかるべき大軍を率いていただくのですが…」

そう言ったダインの顔は、どこかに諦めと寂しさが感じられた。

サンサレア「ダイン殿ともあろうお方が、随分と無茶を言われるのですね。　いくら同じ反帝国の同胞とはいえ、援軍は援軍。　自らの国の備えを疎かにする規模の軍を、送れるはずがないでしょう」

インドラが、苦境に立たされつつあったクアルーンの援軍に送ろうとしている部隊は、ガウ9隻からなる機動部隊だった。　機動部隊と言うと、かなり有力な戦力に聞こえるが、搭載するＭＳは３０機に満たない。　数百機単位で戦っている戦場に、２７機率いて援軍に来ました、と言わなければならないサンサレアの立場を、ダインは気遣っているのだろうか？

サンサレア「しかし、ラピスラズリが…。　あの子たちがいます」

サンサレアは力強く言い切った。

ダイン「ラピスラズリは…。　たしかに戦力にはなります。　ですが、我らの神がお赦しになるようなものでは…」

どうやら、精鋭部隊『ラピスラズリ』には、人道的な問題があるらしかった。

古今、この類いの問題は多い。

サンサレア「ラピスラズリは、ダイン殿が楽園の剣を襲名される前に造られたモノ。　ダイン殿が気に病むことはないでしょう。　それを言われるならば、私の方がよほど、神に顔向けできないはずです」

サンサレアは、軽く息を吐いた。

マンネ「…お言葉を返すようですが、ダイン。　彼らを元に戻すことはできないのです。　ならば、彼らの望むままに戦わせ、せめてインドラの英雄と成すのが、我々にできる最善だと思います」

そう言ったのは大尉の階級章をつけた男だった。　話の感じからすると、彼がマンネ大尉だろう。

そんなマンネに、これまたため息をつくダイン。

ダイン「…ところでサンサレア殿は、ウィナスを伴われないのですか？」

言いづらいことを避けたのか、ダインは話題を変えた。

サンサレア「…ウィナスはまだ、才気に走るところがあります。あの子の才覚は知っていますが…　いえ、知っているからこそ、この度の援軍には伴わないことにしました」

ダイン「…自尊心が強過ぎますか？」

ダインの直な返しに、サンサレアは苦笑いする。

サンサレア「あの子も、ダイン殿のような謙虚さがあれば、もっと才覚を発揮する地位にも推してあげられるのですけれど…。　ですから、せめてダイン殿の側に置いて、国を束ねる人間の有り様というものを、教えてあげて頂けると助かります」

そう言うサンサレアの姿は、まるで我が子を気遣う母のようだった。

ダイン「承知しました。　それでは、まだまだ話は尽きませんが、いつまでもこうしている訳には参りませんので…。

…帝国に、天空神の裁きを」

サンサレア&マンネ「帝国に天空神の裁きを」

ダインに続いてに、サンサレアとマンネも祈りを捧げる。

サンサレア「…では行って参ります。　いろいろと楽園の剣も多忙でしょうが、ダイン殿もご自身の身体を大切にしてください」

そう言ったサンサレアに続いて、マンネもまた踵を返し、2人はガウのデッキに消えて行った…。

【2】

そんな頃、帝国軍もまた刻一刻とユービットの包囲を狭めつつあった…。

シュバルツ「おそらく明日の軍議で、進軍先が決まるだろう。ジャックは市街戦と原野戦、どちらが得手かな？」

シュバルツは、従兵のジャックにごく自然に訊く。

ジャック「そうですだな…　おらはどっちかつーと市街…　いやいやいや、おらはやっぱ田舎の出だから、原野戦かや？」

答えたジャックを、おかしそうに見るシュバルツ。

ジャック「中佐？　おら、なんか変なことばいっただか？」

きょとんとした顔のジャック。

シュバルツ「…変と言えば、変だらけではないか？　だいたい、いつまで農夫でいるつもりなのだ？　ヤタガラス？」

ジャック「ギクギクギクっ！」

シュバルツ「面白いから黙って見ていたが、そろそろ戦も近い。役に立ってもらう日も近いだろう」

そう言ったシュバルツは、ジャックに銀の剣を放り投げてきた。

シュバルツ「それに、戦に行くというのに、誇りを他人に預けたままでは、な。　そろそろ返してもらえないかな？」

悪戯染みた笑いを浮かべるシュバルツ。

ジャック「…そ、そっただこと…

…

…

…いつから気がつかれていたんですか？」

ジャックは、急に言葉遣いとイントネーションが変わった。

シュバルツ「…最初から、かな？　一介の農夫風情ではない、とは感じていた。　ヤタガラスと結びついたのは、グラーフェンの頃だが」

ジャック「かないませんね…」

ジャックは大きく息を吐く。

ジャック「…おっしゃる通りです。　私の本当の名前は、サコン・ミヤイ。　出身は旧サイド2こと、ネグレストです」

観念したのか、本名を明かし始めた、ジャックならぬ、サコン。

ちなみに、旧サイド2『ネグレスト』と言えば、たしか5年前の大乱の時、帝国が戦略核で…。

シュバルツ「…そうか…。　帝国に反逆した、ネグレストの生き残りか…。　ならば身分を伏せねば、帝国軍には近づけなかっただろう。　だが、私は出自で人を選ぶ気はない。　能力さえあれば、な…」

シュバルツはそう言うと、自分もまた銀の剣を手にした…。

【3】

シュバルツ「…奇策だけではなく、真っ正面からの受けもこれほどとはな」

シュバルツの息は上がっていた。　まあそれは、ジャック改め、サコンも同じなのだが。　2人は先の話の後、互いに銀の装具を纏い、剣で小1時間も語り合っていたのだ。

サコン「…シュバルツ中佐こそ。　帝国には、軍の力を自らの力と勘違いした、愚昧な輩しか残っていないと思った時期もありましたが、なかなかどうして、人材は埋もれておいでだ」

息を荒くしたまま、サコンは何度目かの突きを繰り出すが、それもやはりシュバルツには当たらない。

シュバルツ「…かつての帝国であれば、私など足元にも及ばぬ将軍が、それこそ空の星の数ほどいたものよ。　だがいつの頃からか軍は荒み、心ある将の多くは軍を去ってしまった…」

言葉と共に突いた剣を、サコンは避けなかった。　そしてその突きは、サコンの喉元で止まる。

シュバルツ「…ほう…　胆も座っているのか。　気に入った。私の誇りを、いましばらく預けておくにふさわしい人間のようだ」

そう言うと、シュバルツは銀の剣を鞘に納め、サコンに渡した。

シュバルツ「…いましばらくは、ジャックのままでいるといい。現地徴用兵とするのは容易いが、それではサコンの能力を発揮できまい。　まずは、ユービットで功を上げることかな？　そして機が来たら、以前より密かに私の片腕をしていたと説明しよう。　それで、帝国軍の要職への道も拓けてくるはずだ」

シュバルツの言葉に、サコンは黙って頭を下げた。

【4】

その日の夕刻、早くもサコンとなったジャックと、シュバルツを訪ねて来た者がいた。

？？？「…あんたがシュバルツ中佐か？　一応うちのボスの配下、カトラスだ。　若僧のサコン共々、よろしく頼む」

カトラスと名乗った男は、トラックの窓から顔出したままの姿勢で言った。　明らかに一軍の司令官に対する態度ではなかったが、シュバルツに気にする様子はなかった。

サコン「でま、積み荷をだばな…　おっと、積み荷ですが、いくらかまともな戦力になるＭＳを用意しておきましたので」

口調がジャックとごちゃ混ぜになりながら、サコンが示したのは『ガンダムＭＫ－２』だった。

シュバルツ「…まさか、ガンダムを出してくるとはな…」

感心したようなシュバルツ。

カトラス「…まあ、手に入るパーツで、かなり強引に復元したシロモノだが、カタログ通りのスペックには達しているはずだ…」

カトラスはそう言ったが、何か表情が怪しい気もする。

サコン「…なにか問題があるのか？」

カトラス「…いや、ないぜ？　『ガンダムに』問題は何もない」

サコンの耳には、ガンダムを不自然に強調したように聞こえた。

サコン「…機体以外に問題があるんだな？」

言ったサコンに、カトラスは黙ったまま後のもう1台のトラックを振り向き、指を指した。

そこには、やたら笑顔で可愛らしく手を振る、壮年の筋肉質の男が。

サコン「……。」

カトラス「な？　問題アリ、だろ？」

無言で頷くサコンと、よく意味がわかっていないシュバルツ。

サコン「…あ、あのまあ、クセは強いヤタガラスですが、役には立ちますので、手足としてお使いいただけると幸いです…」

なぜか顔をひきつらせながら、サコンはその壮年の男…　グリフィンとカトラスをシュバルツに紹介する。

こうして、普段はジャックとしてシュバルツの側に仕えながら、実はヤタガラス隊のボスであるという、サコンの二重生活は始まった。

そして、そんな懐刀を擁したシュバルツもまた、ユービットやそれ

以降の戦いを経るなかで、その運命を変えていくことになる…。

第３１章　内通疑惑（前書き）

（ニュータイプについて…　座談会？）

ミク「はぁ～い。　みんなご存じ、マヒロ編のホントの主人公、ミクちゃんで～す」

ガンス「そのアシスタント、ガンスだぜっ！　夜露死苦！」

マヒロ「うぅ…　主人公はあたしなのに…。　だいたい夜露死苦なんて、ネタが古すぎるし…」

ミク「なんでもアリな座談会だから、お姉はスパッと無視して、今回は人の能力、ニュータイプ編だよ♪」

ガンス「ニュータイプっつや～、あのファンネルとかって、ちびっこいのを使う奴らだろ？　あれ、マジうぜえよな？」

ミク「本来のニュータイプ論は、宇宙世紀のガンダムシリーズを見

てもらうとして…。　この物語だと、あたしにお姉とか、他にも何人か出てくるよ？」

ゲット「その数だけ、あのちびっこいのが飛び回るのかよ」

ミク「…この物語だと、あんまニュータイプ同士の共感は出てこないしなぁ…。

…って言うか、大人の都合で、ニュータイプじゃなくっても、離れたトコにいる人の会話が聞こえちゃうし」

ガンス「だよな～。　俺もリゲルグから、全世界に死に様の生中継しちまったけど、あんなんふつうは聞こえねぇって」

マヒロ「…つまり、ニュータイプには、あんまり意味はないってコト？」

ミク「だね～　ファンネルの使い手、ぐらいの理解でいいかも。ただ…」

マヒロ「ただ？」

ミク「この物語最大のネタキャラ、お姉の最高の見せ場だから、その点は要チェックだよ」

マヒロ「ネタキャラ…」

ミク「だってさぁ～？　ガンダムの常識だと、ニュータイプ＝トップエースじゃない？　なのにお姉ってば、相手の先を読んだはいいけど、近くのデブリを見落としてぶつかるし、ファンネル動かしたはいいけど、ビームを自分に当てて自爆するんだよぉ～」

ガンス「…そらすげぇな。　まさに、人類の革新だな…」

ミク「でしょでしょ？　だから、ニュータイプには要注目なんだって」

マヒロ「…

…

…

…ニュータイプが機械音痴で悪いって、誰が決めたのよぉ～！！！」

第３１章　内通疑惑

ユービットへ、エルフレアらの帝国軍が出撃していってから数日後。
メリャーナは、ザキラから軍本営に呼ばれていた。

ザキラ「…わざわざ殿下をお呼び立てしたのは、他でもないのだが…」

ザキラは、相変わらずの口調で言う。

ザキラ「…率直にお訊きしたい。　殿下の目から見て、いまの帝国軍はどう見えますかな？」

メリャーナ「また難しい問いかけをされますのね？　それは、どういった意味においてでしょうか？」

メリャーナもまた、変わらぬ構えでザキラに対した。

ザキラ「…わかりにくい質問でしたかな？　聡明な殿下のこと、あ

まり煩雑な言葉は余計かと思いましたのでな…」

メリャーナの後で、マリーが唇を噛む。　メリャーナを侮辱されたと思ったのだろう。

メリャーナ「はっきり申し上げますが、宰相の問いには、答えが多すぎますわ。　私はともかく、宰相は多忙な身。　そのような回りくどい言い方はされず、そのものをはっきりお命じください。　前にも申し上げましたが、私は帝国のためなら、身を惜しむ気はありませんわ」

『宰相の』や『ザキラの』とは言わず、帝国のためとメリャーナは言った。　それに込めた意味に、ザキラは気がついたのか、どうか。

ザキラ「…そう言われては致し方ありますまい。　中東にある、カンタルダル基地をご存じか?」

メリャーナ「名前だけですが。　クアルーンが精強を誇る昨今では、アラビア半島の半分は、帝国領と言っても、実情は反帝国レジスタンスの巣窟です。　そんな中での、数少ない拠点の１つ…　ではありませんか?」

名前だけ、そう言った割には、メリャーナの基地に対する知識は、はっきりしていた。

ザキラ「そこまでご存じなら、話は早い。　そのカンタルダル基地が、先日壊滅いたしました」

メリャーナ「その後釜に行けばよろしいのですか？」

さらりと言ったメリャーナを、ザキラは軽く手で制する。

ザキラ「…最後までお聞き頂きたい。　その基地を攻めたのは、弱小レジスタンスの１つなのだが、そのレジスタンスに帝国軍の一部隊が、内通しているとの訴えがありましてな…」

ザキラの眼が、怪しく光った。

メリャーナ「…なるほど。　帝国軍に身を置きながら、レジスタンスに味方する者がいたならば、それは一大事でしょう。　しかしそれならば、訴えがあった者をパンドラールに召還し、取り調べればよいのではありませんか？」

メリャーナの指摘は当然だった。　訴えがあったら、訴えられた本人を調べる。　ごくごく常識的な考えだ。

ザキラ「…それで済むならば、わざわざ殿下をお呼び立てなどいたしません。　私は今回の一件は、実は根が深いのではないかと思っておりましてな」

メリャーナ「…他にも、裏切り者がいるとおっしゃりたい？」

刹那、考えるような仕草をしたメリャーナが、ザキラの先を読む。

ザキラ「…いるかも知れないし、いないかも知れない。　だから殿下をお呼びした。　兵たちにに信望のある殿下ならば、こうした繊細な問題を、荒立てずに解決できると思いましてな」

ザキラはニヤリと笑ったように見えた。

メリャーナ「…わかりました。　さっそく調査に向かいますわ」

メリャーナは、それだけ言って席を立つ。

ザキラ「調査に当たる部隊と、情報をジェイソンに用意させます。
しばしお待ちを…」

だが、そう言いかけたザキラを、メリャーナは遮った。

メリャーナ「宰相？　事を荒立てたくないならば、そのような配慮は無用ですわ。　人数が増えれば、どうしても騒ぎになります。この調査は私の手勢だけで行いますから、どうぞお気遣いなく」

メリャーナは微かに笑う。

ザキラ「…それならば、殿下のお言葉に甘えさせて頂こう。　その内通したとされる者の名は、ディジョンという。　今はユービットの戦線に、大尉として従軍しておるはずだが…」

メリャーナ「ディジョン大尉、ですね？　一月ほどお待ちいただければ、内通の実態、つまびらかにしてご覧にいれますわ」

メリャーナは自信ありげに告げると、今度こそ部屋を出て行った…。

【2】

そんなやり取りがあってから、わずか1日。　つまり翌日には、メリャーナは既に空を飛んでいた。

マリー「…これほど急がれるとは…。　メリャーナ様は、それほど帝都がお嫌いになられましたか？」

マリーがそんな事を訊いてきた。

出発を急いだのだから、当然マリーも段取りを急がざるを得なかったのだろう。　僅かに疲れた表情をしている。

メリャーナ「…帝都は今でも、嫌いではありませんよ？　私が嫌いなのは…」

言わなくてもわかっているでしょう？　メリャーナの顔は、雄弁に語っていた。

メリャーナ「…ワグナー？」

そんな表情を見せていたメリャーナだったが、一転して優しい声で何かを呼んだ。

ワグナー「フニャ…」

すると、部屋の隅で寝ていた猫が、眠そうな目でメリャーナを見る。だが見ただけで、また眠ってしまった。

メリャーナ「ワグナーも、もう歳かしら？」

メリャーナは、ちょっとだけ寂しそうに笑う。

マリー「ワグナーを献上されたのは、メリャーナ様が9つの時ですから…。　もう15歳です。　猫としては、かなり長生きですけれど…」

メリャーナ「最近は、あんまり元気もないわね。　そう言えば、ワグナーが仔猫の頃は、まだ父上もご健在でしたし…。　そもそも、帝国がまだ元気だったものね」

メリャーナが遠くを見るような目をした。

たしかに15年前と言えば、先帝レミルが生きているだけでなく、名宰相と言われたユギンが帝国の舵を取っていた時代で、こんな荒んだ帝国など、夢想だにできなかった頃のことだ。

メリャーナ「…ワグナーにはもう、あの頃みたいな帝国を、見せてあげられそうもないわね…。　本当なら、ガルダで世界を連れ回すのも、酷な歳なんでしょうけれど…」

マリー「ならば、ワグナーのためにも、帝国を多少なりとも正さねば…」

メリャーナ「裏切り者が出るほど、帝国が堕落していないことを祈るわ」

そう言っている間も、メリャーナ専用のガルダは飛び続けていた…。

【3】

その後しばらくして、メリャーナのガルダは、アラビア半島の南西部にある、ラシード基地でその羽根を休めていた。

ユービットでの調査を命じられたメリャーナだったが、内通があったとされた地域の調査を重く見て、ディジョン本人に対する聞き取りよりも、現地…　カンタルダル基地跡を目指すことにしたのだった。

マリー「メリャーナ様、よろしいのですか？　ＭＳにも乗られず、レジスタンスの巣窟と言われる街に降りるなど…」

マリーの心配はもっともではある。　仮にも皇女であるメリャーナを捕らえれば、人質としてかなり価値があると言わざるを得ない。

メリャーナ「…マリーの心配はわかるけれど、ＭＳに乗ったままでは、街の実情は見えてきませんよ？　大丈夫。　皇女の証になるような物は、何も持って来ていませんから」

メリャーナとマリーは、とある富豪の娘の世界見聞の旅、と名乗ることにしていた。

それに、ＭＳには乗らないとは言っても、車で移動する訳だし、わずか２名ながら、変装した近衛兵が護衛にもつく。

マリー「いまさら、メリャーナ様が引き返して頂けるとは思っておりません。　ですが、細心のご注意を…」

メリャーナ「細心の注意をというなら、『メリャーナ様』をやめた方がいいんじゃないかしら？」

メリャーナは、マリーに茶目っぽく言い返した。

マリー「あ、そ、それはさすがに…」

なぜか慌てるマリー。

メリャーナ「…マリーには、そういう器用さはないものね。　だから富豪の娘って設定なのよ。　マリーが使用人役なら、私を様づけで呼んでも、別に変じゃないわ」

マリー「……。」

すべてメリャーナの予想通りだったことを恥じてか、マリーは黙ってしまった。

メリャーナ「それはともかく、まずはカンタルダル基地を調べましょう。　それから、付近の街で話を聞いてみるわ。　些細な噂話が、思わない重要な情報に化けることもあるものよ」

メリャーナの言葉に、マリーは真剣な眼差しに戻っていた…。

第３２章　目覚め（前書き）

（さらに座談会は…？　イノベイダー編）

ミク「またまたミクちゃん登場だよぉ～」

ガンス「アシスタントのガンスも健在だぜ。　困蛮派（こんばんは）」

ミク「…で、ニュータイプに続いては、イノベイダー編いくよ？」

ガンス「イノベイダーは、たしか００に出てきたヤツらだよな～」

ミク「だね？　漢字で書くと、革新者ってなるらしいけど、ニュータイプと違って詳しいＷｉｋｉがない！　ってがお姉が嘆いてたよ？」

マヒロ「イノベイダーとインベーダーって、どうちがうの～？？？」

ガンス「最近のガンダムにはついて行けてね～って、もっぱらの評判なんだぜ？」

ミク「で、編集者（＝マヒロが兼務）の事情はともかく、この物語だと、純粋イノベイダーって明言されてる人物はいないかなぁ～？　ザキラの仲間たちが脳量子波を使ってるから、イノベイダーなんじゃないか？　ってことにはなるんだろうけれど、これもエージェントって呼ばれてるだけだし」

ガンス「エージェント＝イノベイダーじゃねぇのか？」

ミク「エージェントには、イノベイダー以外も含まれてるからね～　どっちかって言うと、エージェントはザキラの私兵って意味の方が強いし」

ガンス「…それはそうと…　ここだけの話、この物語がものすっげぇひねくれてるって噂を聞いたんだがよ…」

ケイ「…物語の先を喋るなと言ったはずだ」

ガンス「…いいじゃねぇかよ。　番組に次回予告はつきものだろ？」

ミク「…しょうがないなぁ…。　傍目に見ると、イノベイダーとイノベイドとしか思えないキャラは出てくるんだけど、どうやって生み出されたかは、パロディー化されてるんだよね？　しかも、この物語のイノベイダーもどきって、たいてい★悪人★だし」

ガンス「なんだよ、それ。　革新者がグレちまってるのかよ？！」

ケイ「グレただけなら、戻る可能性は十分にある。　確信犯だ」

ガンス「ますますヤバい世界だな、おい！　そんなんで世界は滅亡しないのかよ？」

ケイ「それが知りたければ…」

ミク「この先も読んでね？」

ガンス「…締めがうめぇ…」

第３２章　目覚め

ユーリが去った後、ゲット達は３度目となる遺跡探索をしていた。

ちなみに傭兵たちはと言うと、散らばった残骸を収集しては、ゼフィランサスとは関係なさそうなパーツを運び出していた。　助けてもらった礼に、ガンダムに関係ない物はすべて差し出すという条件で、ヴァイスが話をつけたらしかった。

レアルタ「おっ、ガンダムの腕発見」

こうして見ると、予備パーツもかなりの数になりそうだった。　もしかしたら、ここでゼフィランサスは造られたのだろうか？

ゲット「なんだこっちは…？」

そんな中で、ゲットはさらに下に続く階段を見つけていた。　上にガンダムがあるくらいだから、下には何があるのかと、俄然期待は高まる。

ゴトー「さらに地下室か…　よし、メリル」

メリル「…どうぞ」

その様子を見ていたのか、ゴトーはメリルの出したカードを引く。
引いたカードは運命の輪。

ゴトー「転換点、幸運の到来、定められた運命の意味だな…。メリルのタロット占いは１００％当たるからなぁ…」

ゴトーは、なにやらほくそ笑むが…。

レアルタ「…腕は確かなのに、案外とチンケな趣味してたんだな？　１００％当たるって、そりゃそうだろうよ。占いなんざ、思い方１つだからな？　地下室でゲットが犬のウンコ踏んだって、それが運命だったって言えば当たりだからな？」

ジルド「てめぇ、隊長をバカにすんのかよっ！」

軽口を叩くレアルタに、ジルドはバタフライナイフを突きつけるが、レアルタに怯む様子はない。　むしろ仲間のミアとネロが、ジルドを止めに入る。

ゴトー「…無理をしてまで、信じてもらう必要はない。　それより、地下に行かなくていいのか？」

そんなことをしている間にも、ゲットは地下室へと降りてしまっていた。　地下にもＭＳがないかと期待されたが、地下室はそんな広さではなく、ちょっとした部屋が１つあるだけだった。

ゲット「…なんだ…　何もないのか…。　ん、なんだこのボールは？

…うわっ！！」

？？？「ハロ、メザメタ！メザメタ！」

突如としてそのボールのようなモノは、機械特有の声でしゃべり始

めたのだった…。

【2】

ゲット「…う、動いた?!　何だコレ?!」

ゲットが驚くのも無理はない。　そのボール状のモノは、喋っただけでなく、辺りを跳びはね始めたのだから。

ハロ「オマエ、ダレダ?　ダレダ?」

ゲット「オレハ…　ゲットダゲットダ」

つられたのか、ゲットまで変な口調になっている。

ハロ「ゲット、ゲット。　ハロ、ゲット、トモダチ!」

ゲット「友達…　そうだよ!　俺とハロは今日から友達だよ!」

いきなりできた友達だったが、ゲットはしていたことも忘れてはしゃいでいた。

…だが、そうしているうちに、ゲットはハロのいた部屋に、カプセルのような物があるのに気がつく。　大きさは、人が1人横になれるくらいだ。

ゲット「こっちは何だ…？？？

…って、コレ人が入ってる?!　やべっ！　早く出してあげねーと!!」

ゲットは、慌ててカプセルに手を伸ばす。　操作はいたってシンプルで、ゲットがボタンを押すとカプセルが開き、裸の少女がゲットの足元に転がった…。

【3】

ゴトー「…どうしたメリル？」

地下に興味がないのか、さっきからその場を動いていなかったゴトーの袖を、メリルが引いた。

メリル「…目覚めた…」

そう告げるメリルは、ゲットの入って行った地下を、ずっと見つめていた。

そして当のゲットは、転がった少女がピクリとも動かないので、訳がわからず、パニックになっていた。

ゲット「…ど、どうすりゃいいんだ…？　えと、お前…　しっかりしろよ！」

呼びかけにも反応しない少女は、ゲットやユーリ、メリルと同じくらいの歳に見えた。

ハロ「フレーネ！　フレーネ！」

ゲット「フレーネ…？　コイツの名前か？　ってか、何でハロが知ってるんだよ？　あ、そんなことより、早くみんなの所に運ばねぇと」

ゲットは、まるで氷のように冷たい少女の身体を背負うと、急いで地上へと引き返したのだった…。

【4】

結局ゲットは、ハロがフレーネと呼んだ少女を、ゴトー達の母艦であるザンジバルに運んでいた。　ヴァイスとレアルタは移動手段くらいはあったが、母艦らしい母艦を持っていなかったせいだ。

それに、このザンジバルは見かけは古いが、中は新鋭艦に劣らない設備があった。　問題と言えば、艦を動かすだけの規定人数に、人が足りていないことぐらいだろう。

その判断は正しかったらしい。　しばらくすると、フレーネは無事に目を覚ました。

ゲット「おっ、気がついたか？　大丈夫かよ？」

ハロ「フレーネ、メザメタ！　メザメタ！」

ゲットとハロが揃って声をかける。

フレーネ「…　…きみ…　…誰？」

ゲット「俺？　俺はゲット・アルスター。　この近くに住んでるんだ」

ハロ「ゲット！　ハロ、トモダチ！　ゲット、ハロ、トモダチ！」

フレーネ「…君がゲット…　そうなんだ…」

フレーネの言葉は、少しおかしかった。　まるで、名前だけは知っていた人間と、ようやく会えたかのような言葉遣い。

ゲット「俺のこと…　知ってるのか？」

不思議そうにするゲット。

フレーネ「…ゼフィーから聞いたの。　君がゼフィーの新しい友達ね？」

ゲット「ゼフィーって、あのゼフィランサスってガンダムのことか？　お前、ガンダムと話せるのかよ？　いや、それよりも何で冷凍睡眠なんか…」

ゲットはフレーネに、立て続けに質問したが、フレーネは辛そうに頭に手をやる。

フレーネ「…だめ…。　わからない…　覚えてないの…」

ゲット「覚えてない?!」

フレーネ「思い出せないの…。　いま分かるのは、私の名前がフレーネってことと、ハロとゼフィーが友達ってことぐらい…」

ゲット「…そっか…」

フレーネは、いわゆる記憶喪失のようだった。　その顔は不安に沈んでいて、ゲットはそんな彼女を心配そうに見つめていた…。

【5】

ゴトー「おう。　ようやくお目覚めになったか」

ザンジバルの医務室に、ゴトーが入って来た。　ちなみにメリルは、いつものようにゴトーにぴったりくっついている。

メリル「…力を感じる…」

ゴトー「…そうなのか？」

メリルはするりとゴトーから離れて、フレーネの寝ているベットに歩み寄る。　ふだん、ゴトー以外とは接しようとしないメリルにしては、かなり珍しいことだった。

フレーネ「…あの…　私に何か…」

フレーネを見つめるメリルに、逆にフレーネの方が聞いた。

メリルはその言葉に応える代わりに、腰のホルダーからタロットを取り出すと、フレーネに選ばせる。　そのカード戻し…

…と何かの手順を経て、最後には伏せられた3枚のカードが残った。

メリル「好きな向きにめくってみて…」

フレーネが言われるままにカードをめくると、魔術師、運命の輪、死神のカードが出た。

順番に、物事の始まり、創造。　転換点、幸運の到来、定められた運命。　終末、破滅、離散、死の予兆。

…そういった意味になる。

メリル「…結果はこうなったけど、貴女とゲット君なら、きっと運命を変えられるから…」

そう言うと、メリルはカードを片付けて、ゴトーの側に戻った。

ゴトー「…なるほどな…。　嬢ちゃん。　俺達はこんな傭兵だが、みんなお前の味方だ。　心配する事はない。　不安になことがあったら、何でも言ってくれ」

ゴトーは、珍しく気遣いの言葉をかける。

それだけ、このフレーネという少女は、ゲットだけでなく、周りの大人を気にさせる何かを、持っていたのだ…。

【6】

フレーネ「…運命を変える…？　私と…　ゲットが…」

ゴトーとメリルは部屋を出て行ったが、フレーネはメリルの言った言葉を、噛み締めるように呟いていた。

ゲット「…なんかよくわかんねーけど、俺はやってみるよ。　前から思ってたけど、世界がこのまんまでいいのかなって。　だったら、

運命でも世界でも、変えてやろうじゃんかよ。　そんでフレーネも護る」

ゲットはフレーネを優しく見つめる。

フレーネ「…あたしを…　護る…？」

ゲット「だってさ、俺とフレーネは友達じゃん？　俺は友達を大切にする主義なんだよ！」

ハロ「トモダチ、トモダチ！　ゲット、フレーネ、トモダチ、トモダチ！」

騒ぐハロと、少しだけの沈黙。

フレーネ「わかった…。　なら私にもお手伝いさせて？　私も…自分の記憶を探したいから…。　それに友達を…　ゲットを助けたいから」

ゲット「フレーネ、任せとけ！　俺と一緒に記憶を見つけよう！」

ゲットは、ニカっとした笑顔をフレーネに見せる。　その笑顔に安心したのか、フレーネもまた、嬉しそうな微笑みを返した…。

第３３章　知略とガンダム（前書き）

（まだ座談会は続いていた…　コーディネイター編）

ミク「二度あることわぁ…

ガンス「三度ある！　てめぇらお待ちかねの座談会、今回はコーディネイター編だぜ！」

ミク「あらためまして、こんばんわ。　この小説の真の主人公、ミクちゃんだよぉ～」

ガンス「海賊改め、アシスタントのガンスだぜ、恨蛮覇（こんばんは）」

ミク「で、さっそくコーディネイターについてなんだケドぉ…。
　これは元々、ガンダムＳＥＥＤの世界に出てきた人たちだね～」

ガンス「遺伝子いじって、生まれつきすげぇ奴らなんだろ？　何かずるくね～か？」

ミク「人間をコーディネイトすることが、いいとか悪いとかは原作に任せてぇ…。　この物語に出て来てるコーディネイターさんは、霧ちゃんとマリちゃんだね♪」

霧雨＆マリアベル「ちょっと変な名前で呼ば…」

ガンス「はいはいはい。　そんな細け～こと言いに来たなら、帰った帰った」

ミク「で、コーディネイターの人はいるんだけど、あんまり帝国じゃ、コーディネイトは流行らなかったって設定なんだよね」

ガンス「それまた何でだ？」

ミク「…難しいケド、コーディネイトが研究されたのは2、３０年前。　でもその時の帝国は、ちょうど全盛期だったからぁ…」

ガンス「…別にいらなかったってワケか」

ミク「…まあ、そういう後付けになったみたい」

ガンス「後付け？」

ミク「そ。　ガンダム名物、後付け設定。　大人の事情？　そんなんだから、今回はこの辺でぇ～」

ガンス「…結局、コミュにＳＥＥＤファンが少なかっただけだろ？」

ミク「それを言っちゃダメだってぇ～」

第３３章　知略とガンダム

ユービットでの、帝国と反帝国レジスタンスの決戦。

その口火は、銃弾でもビームでもなく、全世界に向けた演説によって切られた。

『我々はイシュラムの神に仕える者、クアルーンである。　…いま、イシュラムの神はお怒りである。

なぜかっ？

それは、帝国が神を冒涜した行いを重ねているからである。

思い出すがいい！　長年に渡り、帝国が世界に何をしたか、何をもたらしたかを！

帝国は己に従わぬ者、楯突く者をすべて悪と唱え、裁くとしているが、そのような思い上がりを神がお赦しになろうはずはない！

我々の聖戦には、インドラ、フロンティア・ガードの方々も協力を

惜しまぬと言ってくれておられる。　それはすなわち、この世におられるすべての神々が、帝国の悪逆に怒りをたぎらせておられることを意味する！

そして、我は告げる。

世界に神々は数多おられるが、帝国に相応しい神は、だた1つしかおらぬと。

それは死神であると！！

悪逆傲慢な帝国に裁きの鉄槌が下され、死神によってその身が喰らい尽くされる日まで、我々はたとえ死すとも、戦いをやめることはないであろう！！！』

【2】

エルフレア「…まさか死神とはね…。　たけど、奴らは父上と母上の仇。　死神は奴らにこそ相応しいさ」

ロンド「……。」

放送を聞いて呟いたエルフレアに、かつての優しい王子の面影は、微塵もなかった。

パンドラールから北回りでグラーフェン入りしたエルフレアは、そこで出征中の国内を任せると言ってラドを残し、代わりに帰参していたロンドを副官として伴っていた。　ラドから話は聞いていたが、このエルフレアの変わりぶりに、ロンドは最初、面食らっていた。

エルフレア「ロンド隊長？　ユービット戦線には、いつ頃着けそうかな？　早く着いて、宰相閣下のご期待にお応えしなければ」

ただ、より戦場に近い立場のロンドには、その変化は悪いものばかりとも思えなかった。　ラドはただ嘆くばかりだったが、良くも悪くも戦う男になったとも思えたのだ。

ロンド「…我々は後詰めですから、さほど急ぐ必要はないのではありませんか？　軍議にも、出ろとは言われておりませんし」

エルフレアが率いているのは、ザキラから任されたエンドラの他は、

各地から抽出した一軍で、数もあまり多くなく、とりたて精鋭でもなかった。

だからこそ司令部は、エルフレアに後詰めの遊軍を命じてきていたのだが…。

エルフレア「ロンド隊長の言うことが、正しいのはわかっているよ。それでも、私は功を上げたいんだ。それにはまず、予定よりも早く着くことなんだ」

ロンド「…そうですね…。それならば、少し近道をするルートがなくはありません」

一瞬、ロンドは苦笑いをしたようにも見えたが、すぐに真顔に戻ると、地図を指差した。

ロンド「…我々はこう…　味方が制空権を握る地域を通って、ユービットを目指していますが…。　…ここ、この空域を突破できれば、数時間は時間が縮められます」

エルフレア「さすがロンド隊長だ。　そのルートで行こう！」

エルフレアは顔を輝かせる。

ロンド「しかし、そこは味方の制空権がまだ曖昧な地域です。　よろしいのですか？」

エルフレア「構わないさ。　どうせ戦いに来たんだ。　それが少しくらい早くなっても、要は敵を倒せばいいんだろう？」

エルフレアの言葉に、今度こそロンドは苦笑いを浮かべた…。

【3】

帝国兵「レーダーに敵感っ！」

近道をしたエルフレアだったが、ロンドが危惧した通り、敵の警戒網に引っ掛かってしまっていた。

ロンド「エルフレア様。　我が艦隊には、航空戦力があまりおりません。　ミノフスキー粒子を濃く散布して引き返せば、敵が我々を

見失うことも…」

可能性だけをロンドは告げたが、その顔は明らかにそうするべきだと言っていた。　巡洋艦のエンドラはまだしも、連れているミデア輸送機では、航空戦は戦えないからだ。

エルフレア「やっぱり、ロンド隊長の言うことはもっともだよ。だけど、それじゃ敵につけ込まれる。　空で戦えないなら、地上に降りればいいじゃないか」

なんとエルフレアが代わりに提案したのは、ユービット攻略の一翼、サンザメヤ郊外への緊急降下だった。

ロンド「しかしそれでは、司令部の命令に反することになりませんか？」

エルフレア「いや、現にこうして襲われつつあるんだし、部隊を守るためには仕方ないさ。　仮に逃げても、足は敵の方が速いんだ。　もし敵を誤魔化せなかったら、今より不利な状況で戦うことになる。　それよりは降下した方が、かえって安全なはずだ」

エルフレアはそう言った。

その口調は柔らかいし、判断も冷静。　だが、このやり取りでロン

ドは

『エルフレア様は、小さな暴君に成り下がられた』

とラドが言った意味を理解した。

エルフレアは自分が招いた結果を省みず、さらに強硬に我が意を貫こうとしている。　早い話が、自分の望まない話を聞く気がないのだ。

ロンド「安全に降下できる地形となると、ここから3キロほど進んだ所に、小さな平原があるはずです」

諦めたのか、ロンドは降下に反対しなかった。

エルフレア「わかった。　それから、降下の成功失敗に関わらず、艦隊はそのままユービットを目指させよう」

エレフルアは、さらなる決断を下す。

ロンド「…ですがそれでは、以降の我々の足がありませんが…」

エルフレア「歩けばいい。　付近の味方まで、約１００キロ。　十分にＭＳの行動範囲だ。　いたずらに艦隊を危険に晒す訳にはいかないよ。　私が敵を引き付けるから、ロンド隊長は降下の指揮を」

ロンド「…はっ…」

しかし小さな暴君は、同時にとても勇敢でもあった…。

【５】

帝国兵「ＭＳ隊降下開始！　敵機触接まで１分っ！」

この場所のミノフスキー粒子が薄かったのが、エルフレアに味方していた。　レーダーを使い、敵機の動きに合わせた対処ができたからだ。

エルフレア「エンドラも急速後退だ。　あとは私がなんとかするから」

自らの旗艦にも後退を命じ、エルフレアは自らのＭＳを起動させる。

その機体は…

…漆黒に塗られたガンダムX。　通称ブラックエックスだ。

そのコックピットに座りながら、エルフレアはBXと出逢った日を思い出す…。

DR.マンソン「…いいかの？　このMSは本来、ニュータイプ専用に造られておる。　したがって、ニュータイプ以外の人間が性能を限界まで発揮するのは、できない相談のはずじゃが…。

儂に不可能はないっ！　儂が開発した

『ディアボロ・システム』

を使えばな。　精神回路をつかって、操縦者の脳と機体を、直接繋ぐ。　あとは、パイロットの精神さえしっかりしておれば、ニュータイプすらできない制御が可能になるのじゃ」

エルフレア「…私に、そんなシステムが使えるのでしょうか？」

ＤＲ．マンソン「…使えんかも知れん、そんな弱音なんぞ聞く耳持たんわ。　使えなければ死ぬだけじゃ。　ふつうのＭＳならば、レバーを動かせば、子供でも歩かすぐらいはできよう。　じゃがコイツは、精神の未熟な穀潰しなんぞ乗せるようには出来とらん。　お前の精神がレベル以下なら、ＭＳの指１本すら動かせずに的になるか、システムに精神を食われて発狂するかじゃ。　怖じ気づくなら今のうちじゃぞ？」

エルフレア「私なら…　…　…できる」

自己暗示をかけるように呟く。

エルフレア「サテライトキャノンは、月の施設が修復されていないから、まだ使えないらしいけど…」

言いながら、エルフレアがイメージを送り込むと、それに応えるか

のように、ＢＸはわずかな起動音を発した。

エルフレア「…これで、機体の出力を犠牲にすれば、ビームランチャーくらいの威力は出せるはずだ…。　よし。　エルフレア、ガンダムＢＸ（ブラックエックス）出るっ！！」

漆黒の機体が、エンドラから大空へ飛び出した…。

【6】

サンザメヤ。

農地に囲まれた中規模の街だが、ＭＳも通行できる大型道路がある、それなりの交通の要所ではあった。

現在、街の中心にある市庁舎は、帝国軍の臨時司令部として使われていた。　サンザメヤの位置からすると、ユービット包囲の左翼軍（東側担当）の司令部だろうか？

???「後詰めの部隊が襲われただと？」

司令官であるガンド大佐は、通信兵を睨んだ。

帝国兵「はい。　連絡によりますと、サンザメヤから東、約１００キロの地点で敵に捕捉されたため、緊急に降下したと…」

ガンド「くそっ！　いまいましい逆賊どもめっ！」

ガンドは、顔を赤くしてわめく。　大佐の階級にまで登るからには、無能ではない。　ただプライドが高く、貴族らしい自意識過剰さが、自分の才能の発揮を邪魔してしまうタイプだった。

通信兵「…それで、空（から）の艦隊を退避させるから、こちらで一時引き取って欲しいと…」

ガンド「適当な後方輸送にでも使っておけ」

通信兵「それと…」

ガンド「まだあるのかっ！」

ガンドは通信兵を怒鳴りつくてしまう。　萎縮したのか、通信兵は小さくなっていた。

ガンド「…早く言え。　私は忙しいのだ」

その様子を見て取ったのか、ガンドはいくらか声のトーンを落とした。　こんなやり取りはいつものことで、本来は周りが見えない人間ではないのだ。

通信兵「…シュバルツ中佐が、市街戦に策があると…。　部隊を独自に動かしたいそうです」

ガンド「…軍議で出た、秘策とやらの準備ができたのか？　かまわん、許可しろ。　シュバルツの本隊は使わないのだろう？」

通信兵「あくまで、一部隊による敵の撹乱だそうです」

そこまで言うと、ガンドは通信兵を追い払うような仕草をする。

用件は終わっていたのだろう、通信兵も敬礼をして部屋を出て行っ

た。

ガンド「市街戦ということは、ユービットにたどり着いてから決戦になるという読みか？　なるほど、そういう見方もあるな…」

ガンドは、何やら悩ましげな様子で地図に目をやっていた…。

【7】

ユービット。

クアルーンは、その中心部を制圧すると、元領主邸に総司令部を置いた。　そこには、クアルーンの指導者『ハヴィニー』の姿も見える。　指導者自らが率いるくらい、クアルーンはこの戦いを重く見ていたのだ。

ハヴィニー「これで、全世界の信者達が立ち上がるであろう」

自信に満ちた言葉は、宗教的指導者らしい威厳に満ちていた。　たしかに、放送でレジスタンスの士気はいやがうえにも上がっていた。

ハヴィニー「そう言えば、インドラからの友人たちは、無事に着いたのか？」

士官「…しかし、３０機足らずの小勢です」

鷹揚なハヴィニーに対して、答えた士官は不快な面持ちをしていた。

ハヴィニー「…いかんな」

士官「やはりそう思われますか。　この程度の支援しか寄越さぬとは、インドラも我等を…」

ハヴィニー「違う！　遠くからの友人の来訪を、そのような目で見てはいかんと言ったのだ。　これは、信じる神を越えた聖戦への偉大なる一歩。　兵の数など問題ではないのだ」

士官「…はあ…」

まだ演説の興奮が冷めていないのか、ハヴィニーはその士官に心の有り様を説いてみせた。

そこへ、慌てた様子の兵士が飛び込んで来る。

兵「大変です！　サンザメヤの東より、敵の空挺ＭＳ部隊が侵入しました。　幸い迎撃に成功したため、敵は目標の遥か手前で降下したようですが…」

士官「何？　敵は我等の退路を絶つつもりか！」

士官が顔を赤くする。

兵「それから、同じくサンザメヤ方面なのですが、敵からＭＳを奪ったというレジスタンスがいるようです。　現在追撃を受けているそうですが…」

ハヴィニー「おお、さっそく我が訴えに心を動かされた者が馳せ参じたか。　なんとしても我が方に迎え入れよ。　ここで友人を死なせては、我らの信義が口先だけの偽りになってしまおう」

兵「はっ！」

士官は、まだ戦況を考えて苦悶の顔つきをしていたが、ハヴィニーは新たな賛同者に気を良くしていた。

いい悪いは別にして、これがクアルーンという勢力の日常なのだった…。

【8】

グリフィン「見よ！　我輩のガンダムＭＫ－２があれば、敵のＭＳなど恐れるに足らん！」

帝国兵Ａ「これがガンダムかぁ～」

帝国兵Ｂ「俺も初めて見たぜ」

駐屯地でやたら自慢気なのは、サコンの部下兼叔父と紹介された、グリフィンだった。　ガンダム見たさに集まる帝国兵に、なにやら

自慢話をしているようだ。

もっとも集まった兵たちは、ガンダムそのものか、その兵装だけを見ていて、グリフィンの話など聞いていないのだが。

帝国兵Ａ「さすがガンダム、重武装なんだな…。　バズーカが２丁に、ハイパーハンマー、ビームサーベル…。　盾がないのは、やっぱり『攻撃は当たらねばよいのだよ』とかいうことなのか？」

帝国兵Ｂ「これだけ重い装備で動くってのが、まずすげぇよ。　やっぱ『これはエネルギーゲインが５倍もある！』とかだったりするのか？　いやＭＫ－２だから、２をかけて１０倍あるとか？」

この時代、ガンダムを見たことのある兵は、あまり多くはなかった。

目の前のガンダムＭＫ－２にしても、本来はビームライフルとシールドを装備する、ガンダムにしては、特徴のない類いに属するガンダムである。

それを、グリフィンがそれを勝手に改造しただけなのだが、ガンダムを見たことのない兵たちは、重武装の武闘派ガンダムのことだと、見事に勘違いしてしまっていた。

ジャック「中佐ぁ～　例の作戦だがな、いまディジョンの大尉に、追撃をかけてもらっとるとこだべさ。　うまくいきゃ～　これで足がかりができるべさ」

そんな喧騒の外で、ジャックに化けたサコンは、シュバルツに何やら囁いていた。

シュバルツ「…そうか。　明後日には、ユービットの包囲陣が敷かれる。　おそらく敵は、街を盾に決戦を挑んで来るだろう」

ジャック「だべな。　数はこっちがあちらさんの倍だ。　だんが、地形を利用して戦えばなんとかなるかも知んねーもんな」

シュバルツ「敵も、退けぬ所まで来てしまったしな。　ここで決戦を避けて退けば、所詮レジスタンスは帝国に勝てない、などと言われかねない。　だからこその先の放送であり、この頃の活発な動きなのだろう…」

ジャック「そっただ時だけに、つけ込む隙ができるべな。　元々が

劣勢で、気持ちだけで支えてるような局面だかんな…」

シュバルツ「…故に、その気持ちを攻める、か」

シュバルツは感心しているようだが、別段驚いた様子はない。むしろ『そう来たか』と言いたげな表情だ。

ジャック「…んだ。そう言えば、エリュフリア様はどうしただ？」

ジャックは、不意に話題を変えた。

シュバルツ「ん？　エルフレア殿なら後詰だ。ただ、サンザメヤのずいぶん手前で敵と戦闘に入ったと報告があったが。詳細はまだ届いていないな…」

ジャック「…中佐？　いま、サンザメヤの手前で、と言うただか？」

ジャックの目が光った気がした。

シュバルツ「正確に言うと、サンザメヤの東、１００キロの地点だな。　ユービットからはかなり離れた場所で、どうして敵が神経質になるのか、よく分からぬが…」

シュバルツは、いまさらクアルーンが激しく迎撃してきたことに、納得がいっていないようだった。　すでに帝国軍とクアルーン軍では、戦力に2倍近い開きがあるので、決戦に臨むつもりなら、後詰めのエルフレアを襲うより、戦力を温存する場面だからだ。

ジャック「はーん。　おら、読めただ。　今度の戦いは帝国が勝つだよ」

ジャックはいきなり断言した。

シュバルツ「大きく出たな？　その根拠を聞こうか？」

ジャック「エルフュレヤ様の迎撃された場所だ。　ユービット包囲にはまるで関係にゃーように見えるぎゃ、よくよく見ると、もしこのまんま艦隊が南にば進んだ場合、敵の退路を絶つ形になるべな」

シュバルツが地図を見る。

シュバルツ「…だが、エルフレア殿の任務は後詰め。　退路を絶つなどという作戦は聞いておらぬ」

ジャック「聞いてねぇだろうな？　たぶんエルフレアン様も、そんなつもりでここを飛んだ訳じゃねぇべ。　だが、負けた後の事が気になる敵は、今のうちに退路を塞がれちゃーマズいってんで、必死に阻止しただ。　つまり敵は、負けるかも知れねーって、もう考えちまってるだよ」

シュバルツ「……。」

シュバルツは自らの参謀のに先見に、今更ながら慄然とした…。

【9】

ディジョン「おい、起きろ寝坊助」

隣で寝ているレナを揺り起こす。

レナ「…あ、出撃ですか？」

ディジョン「『例の』スクランブルだ。　ゲリラがＭＳを1機奪って逃げた。　急げ！　ラリーとアルヴィンはもう出ているぞ！」

だが、レナもさすがは歴戦のパイロットだ。　目覚めてしまえば、機体に乗り込むまで１０分を切っていた。

ディジョン「わかっているとは思うが、『例の』スクランブルだ」

私は『例の』を繰り返した。

レナ「了解です」

レナは笑顔で返す。

アルヴィン「ほらほら、速く逃げねぇと、本気で殺っちまうぞ？」

その頃、先を行った2機は、リーオーと銃火を交えていた。　圧倒的なスピードの違いを生かして、2機のＺ－Ｐｕｌｓは、代わる代わるリーオーにビームを浴びせている。

だが、リーオーも負けてはいない。　木やちょっとした地形の凹みに身を隠しながら、ドーパーガンで盛んに反撃してくる。　たまにＺ－Ｐｕｌｓを至近弾が掠めることがあり、今もまた…。

アルヴィン「…でっ！　今のマジに殺る気だっただろ？　避けなきゃ当たってる！」

ラリー「そのぐらいの方が、信憑性があるからな…」

アルヴィン「い～や、あれはやり過ぎだ。　つーわけでやり返す！」

ラリー「おい…」

ラリーが止めるのも聞かず、アルヴィンは機体を地面すれすれまで急降下させると、大胆にビームの狙いをつけた。

アルヴィンが狙った先。　それは…。

カトラス「バカか、あいつは！　ＭＳの股の間ブチ抜くなんて、正気の沙汰じゃねぇ！　つか、機体は無事でも、何かこう冷や汗が出るだろうが！！」

ディジョン「やってるな…。　『敵は』見えたか？」

私もリーオーに何発かビームを浴びせながら、比較的冷静なラリーの方に聞いた。　アルヴィンも別に失敗はしていないが、なにやら楽しみ過ぎている。

ラリー「まだですね…。　もうあちらさんにも、伝わってるはずなんですが」

レナ「隊長っ！　7時方向です。　戦闘機…3、4…　7っ！！」

左後方についていたレナが、警戒を呼び掛ける。　言う通り、セイバーフィッシュの編隊が急速に接近するのが見えた。　その下には砂煙。　確認はできないが、たぶんＭＳのドムだろう。

ディジョン「各機、空対空戦闘に備えろ！　ミノフスキー粒子は濃い。　誘導兵器は心配するな！」

了解、と無線機に応答があり、3機ともセイバーフィッシュを指向する。　セイバーフィッシュはすぐに2機が墜ちていったが、代わりに攻撃の手の緩んだリーオーは、その隙に敵のＭＳと合流できたようだ。

ディジョン「そう簡単にはいかせんっ！」

私はそれを見て、地上を掃射する。　見事に、リーオーの隣のドムが1機爆発するが、かなり猛烈に反撃されてしまった。

その様子からするに、あちらさんもかなり熱が入っているらしい。
　いい傾向だ。

それから私が目を上に目をやると、3機目のセイバーフィッシュが爆発するのが見えた。　一般的な制空戦闘機としてはセイバーフィッシュは優秀だか、さすがにＺ－Ｐｕｌｓとでは、ワンサイドゲームになりすぎるようだ。

ましてや、『私の』連隊だからな?

ディジョン「頃合いか…　今日は、あちらさんに華を持たせないとな…」

不意に、私の機体から黒煙が吹き始める。　ガクガクと機体が揺れ、バランスを崩しそうになる。

ディジョン「…どうやら被弾したらしい。　これ以上の追撃は厳し

い。　撤退する！」

私が機体を翻すと、他の3機もそれに続く。　任務を達したと思ったのだろう。　敵も深追いしては来なかった…。

第３４章　ザキラのエージェント（前書き）

（懲りない座談会。　ナチュラル、オールドタイプ編？）

ガンス「おい嬢ちゃん。　今日のアイスは、ストロベリーとレアチーズのどっちにする？」

ミク「もち両方♪　カップでお願い♪♪」

ガンス「欲張りだな～　さすがニュータイプ」

ミク「いやぁ～　やっぱアイス食べないと実力出ないし♪」

マヒロ「こらぁ～　そこの２人！　真面目に仕事しろ～！！」

ミク「あ、お姉もアイス食べる？」

マヒロ「じゃなくって、今回の解説はどうしたのよ！」

ミク「…いや、最近難しい解説ばっかだから、読者のみんなも疲れてるかと思って」

ガンス「だよなぁ～　だいたい、ナチュラルやオールドタイプの解説しろったって、早い話が一般人のことだろ？」

ミク「何にも、喋ることなんかないし。　しいて言うなら、この物語だと基本みんなナチュラルで、特別な解説のないキャラはオールドタイプだよ、ってぐらいだよね」

ガンス「そだな。　じゃ、解説も終わったし、次に備えて休養しようぜ？　実は最近ハマってるゲームがあってよ…」

ミク「いちおう、ガンちゃんってば死んでるんだから、あんまそういうのは…」

マヒロ「…行っちゃった…。　って、これでいいの？　このコーナー？？？」

第３４章　ザキラのエージェント

ユービットの北北東。

そこに『サークレット基地』が新たに設置された。　ユービット攻略の真正面の担当であると同時に、この戦いの総司令部となる。

その指揮官には、欧州軍からではなく、本国…　パンドラールからの援軍を率いて来ていた者が当てられた。

???「この戦いの副司令をする『キュウマ・オオタ大佐』だオタ。　オタQって呼んでくれていいオタ。　それよか、おにゃのこ（女の子）はいないのかオタ？」

全身ずんぐりとした、メガネの男が言う。　見た目と口調が軍人らしくなく…

というより、西暦の頃にいたという『オタク』そっくりだ。　とても副司令をやる人物には見えない。

???「オタQ。　初対面なのに失礼ですよ。　ましてここは軍議の席。　ちょっとは場をわきまえなさい」

そうオタQをたしなめたのは、子どものように小さい男だった。ただ、口調はしっかりしていて、小さくても、オタQよりは頼りになりそうだ。

???「…そうそう、申し遅れました。　私、この度の総司令官を拝命しました『エージェントP』と申します。　階級は准将です。　もちろん本名はありますが、プロバネフ・ヨハネス…　とやたら難しいうえに長ったらしいので、気軽に『Pちゃん』と呼んじゃってくださいね？　私は、ニックネームで呼ばれる方が好きですから」

任官の挨拶が、まるで学校の自己紹介のようになったが、この2人がユービット攻略の頭脳になるであろう事に、変わりはない。

欧州軍中佐「…エージェントと言えば、先年新設された議会直属の？」

欧州軍少佐「らしいな…。　なんでも宰相の肝入りらしいが、あんなデブとガキに務まるのか？」

末席では、2人のことが話題になっているようだった。　それをオタQは睨めつけていたが、Pちゃんの方は気にしてもいないようだ

った。

Pちゃん「…はいはい、みなさ～ん。　私語はそれくらいにして頂いて、軍議を始めましょう」

これまた、学校の授業でも始めるかのようにPちゃんは言い、この日の軍議は始まった…。

【2】

…ここは何処だかわからない…。

崖の上？　ざっと数十人の人だかりと…　男が1人。

？？？「…俺は帝国と戦ってるうちに、帝国の人間に不覚にも心を動かされた…。　だからリーダー失格だ。　…そして俺は、あいつらについて行く。　反帝国レジスタンス、『ヘル』は…　…解散だ」

???「馬鹿野郎！　そんなの聞いてないよ！　親の仇取るためにも、一緒に帝国を倒そうって決めたじゃねーか！！」

???「…ああ。　だが今回、帝国だけを倒すつもりが、あの外交官まで…。　それは漢（おとこ）として、滅ぼし難い罪だ。　助けに来た、筋肉質の帝国軍人への借りも返したい。　それに、あいつらといると落ち着くんだ…」

???「…ああ、そうかい！　でも、あたいは解散なんか認めないね！　腰抜けなんかいなくなって、せいせいするよ！　ヘルがヘルじゃなくなっても、あたいは帝国と戦い続けるんだ。　あばよっ！」

???「…シャム…」

その男は、去り行く女の背中を見ながら呟いた…。

???「…もしもし…　お休みのところ申し訳ないんですが…」

ハッ、と声が漏れて立ち上がると、そこはホテルのロビーだった。
どうやら夢を見ていたらしい。

クアルーン兵「お待たせしました。　大元帥がお会いになられるそうです」

カトラス「…大元帥？」

カトラスは眉をひそめた。　その様子に、その兵は言い方を変えようとする。

兵「…その呼び方は、馴染みがありませんか？　軍ではそうも呼ばれておりますので…。　ハヴィニー師…」

カトラス「いや、そうじゃなくって、御大将自ら俺に会うというのか？」

兵「ええ。　初めての方にはよく言われますが、そういう分け隔てのないお人柄なのです」

カトラス「そうか」

納得したのか、カトラスが落ち着いた表情に戻る。

兵「…という訳ですので、申し訳ありませんが、武器の類いは預からせて頂きます。　またＭＳも…。　ああ、大丈夫です。　戦いの時には、何かしらＭＳをお渡しできるはずですから。　たしかＭＳ搭乗を希望されてましたよね？」

カトラス「…無理言って悪いな。　最近足腰が弱ってて、自分で歩くのがしんどいんだ」

カトラスがそう言って笑うと、その兵もつられたように笑った…。

【3】

ハヴィニー「おお、よく来てくれた」

そう言って、クアルーンの指導者ハヴィニーは、カトラスを迎えた。
　言葉だけでも十分大げさだが、顔が十年来の親友でも迎えたかのように綻んでいた。

周りの兵は、さすがに警戒に余念がないが、ハヴィニーに自身にその自覚はまるでなさそうだ。

ハヴィニー「反帝国レジスタンス『ヘル』出だそうだな？　ヘルの名は耳にしたことがある。　大変勇猛なレジスタンスだそうだな？　最近はどうしているのだ？」

カトラス「…まあ、そのですね…」

カトラスが言いにくそうにしていると、ハヴィニーの隣の士官が何やら耳打ちした。

ハヴィニー「…つまらぬことを聞いてしまったようだ。　我が訴えに応えて、こうして馳せ参じてくれたからには、出自や経歴などどうでもよい。　さっそくだが、イシュラムの神の尖兵となってはもらえまいか？」

カトラスが黙って頷くと、ハヴィニーはさらに機嫌を良くした。

ハヴィニー「そうかそうか。　詳しいことは、ここにいる者たちに聞くとよい。　またいつでも難儀を抱えたならば…」

だが、ハヴィニーの言葉は、また士官の耳打ちで止められた。

ハヴィニー「…こうして戦うとなると、いろいろ不自由が多くていかん。　司令部には近づけるな、だそうだ。　悪く思うな？　帝国が非道な暗殺などしかけてはこぬかと、この者たちなりに気遣ってくれているだ。　そなたとも、この戦いに勝った暁には、堅苦しいことを抜きにしたいものだが…」

カトラスは表情を変えていないのに、ハヴィニーだけは、とてもすまなさそうな顔をしていた。

士官「…お前には、インドラ軍と共に、ユービットの東側の防御に当たってもらう。　たぶん、明日中にも敵は大規模な攻勢をかけてくるだろう。

…そうだ、インドラのマンネ大尉も紹介しておこう。　同じ方面を守ることになるのだからな」

ハヴィニーと違い、クアルーン軍の士官は、至って常識的だった。

まあ、軍人が常識的ということは、偉そうという事とイコールなのだが、この際それは置いておく。

マンネ「…インドラから来ている、大尉のマンネだ。　よろしく頼む」

そう名乗った男は、なぜか後に数人の少年と少女を連れていた…。

【4】

サコン「…潜入には成功したようだな？」

その夜、ユービットの市街の某所にて。

カトラス「…しかし、俺が潜入するためにあんな大芝居を打ったのに、お前は、お前は、あっさりすり抜けて来やがる…。　怪盗ヤタガラスのリーダー・潜入のサコンの腕は、いまだ衰えず…　だな？」

サコン「身1つ忍び込ませるのと、軍に入り込み信用されるのは違うさ」

サコンは夜になると、クアルーンの警戒網を巧みにすり抜け、こうしてユービットの街中にまで入り込んでいた。

サコン「…それはともかく、段取りはどうだ?」

カトラス「司令部や弾薬庫なんかの位置は、みんな分かったぜ?それよか、あの指導者さんはどうすんだよ? なんつーか、あまりに無防備過ぎて、狙うのに気が引ける」

カトラスはどこか、やりにくそうな表情を浮かべていた。

サコン「どうするかまでは、成り行きだが… カトラスの好きにしていいんじゃないか? 俺としては、声紋のデータがあれば、何とかできると思っている」

そう言うと、サコンはカトラスからマイクロチップを受け取った。

カトラス「…で、決行は？　いつにするんだ？」

サコン「迷ったが、３日後にしたい。　１日か２日は、カトラスが真面目に戦う姿を見せたほうがいい。　あとは、適当な時を見計らって、グリフィンの叔父貴を捕虜として送り込む」

カトラス「…俺が捕らえて、献上すればいいのか？」

サコン「乗機がガンダムだからな？　カトラスの名前を売るのにいいだろう。　決行の時に必要な装備は、ガンダムＭＫ－２に付けておく」

カトラス「その叔父が撃墜されて、道具が届かなかった時には？」

サコン「叔父貴に限って、そんなヘマはやらかさないと思うが、その時は作戦を練り直す。　少なくともカトラスは、ガンダムと互角以上に渡り合ったエースになっている。　違った展開にも持っていけるだろう」

それだけ言うと、サコンは闇の中に消えた。

こうして策謀が巡らされる中、戦いの火蓋は切って落とされたのである…。

【5】

オタQ「そぉ～れ、攻めろオタ。　攻めろオタ」

もはや指揮と言うより、奇声に近い声をあげながら、全軍を叱咤するオタQこと、キュウマ・オオタ副司令。

本格的なユービット市街戦1日目となったこの日は、まずディジョン大尉のＺ－Ｐｕｌｓなどの可変ＭＳと、ドップに護衛されたルッグンが、上空からミノフスキー粒子を散布することから始まった。

こうすることで、敵からの誘導兵器を封じることができるからだ。

ミノフスキー粒子を散布すればレーダーが使えなくなるが、元々レーダーでは、市街に潜む敵を発見する事はできない。

それから約半日、今度はドダイ重爆撃機をはじめとする部隊が、激しい空爆を行った。　敵も猛烈に反撃してきたが、結局最後には数が物を言ったのか、いつの間にかユービット上空からは敵機が姿を消してしまい、地上は爆煙に包まれた。

Pちゃん「…とは言っても、どうせ防空壕ぐらいは掘ってあるんでしょうから…。　結局は、ＭＳによる市街戦でしょうね」

やはりオタＱとは違い、Ｐちゃんは冷静だった。

そのＰちゃんの指示だろうか、しばらくすると砲撃戦仕様のＭＳが前に出て、盛んに砲弾の雨を街に浴びせ始めた。　だが、街からの反撃はなく、遠目に見ると、街はもう陥落したかのようにさえ見える。

オタＱ「…もういいオタ？　ＭＳ隊、突撃オタぁ～」

その様子に、オタＱは待ちきれないとばかり、自身のＭＳ…

漆黒に塗装されたガンダムレオパルド、通称★ＢＬ（ブラックレオパルド）★を前に出したのだが…。

ドガンっ！！

と乾いた音が響き、いきなりＢＬは転倒していた。　よく見ると装甲に焦げ目と凹みがあり、どうやら敵の砲撃が命中したのが分かった。

重装甲なためか、それとも不発弾だったのか、機体に大した損傷はなかった。　だが、そのあまりの不恰好さに、味方からも失笑を買ってしまっている。

Ｐちゃん「…オタＱ、何やってるんですか？」

同じエージェントのＰちゃんまで、不思議な顔をしている。　それもそのはず、ただでさえ重武装なガンダムレオパルドに、さらに武装を上乗せしたＢＬは、一旦倒れてしまうと、自分では起き上がれなかったのだ。

オタQ「見てないで助けろオタぁ～」

Pちゃん「…世話が焼けますね…。　だから足はやめて、キャタピラにしろと言ったのに…」

BLを助け起こしたのは、Pちゃんの専用機で、漆黒のガンダムエアマスター、通称★BAM（ブラックエアマスター）★だ。

並べて見ると、いかにも帝国軍らしい威容を誇示する、黒いガンダム2機なのだったが、それもすべてオタQのせいで台無し。

勢いづいたクアルーン軍は、猛烈な応射を始めてしまい、帝国軍のMSは盾に隠れるだけで精一杯。　その場から一歩も進めなくなってしまった。

Pちゃん「…なんてことしてくれたんですか…。　これでは、攻略が半日は遅れてしまいますよ」

オタQ「知らないオタ！　ボクのせいじゃないオタ！」

…確かに。

ミノフスキー粒子下での、無誘導砲弾の命中率はかなり低い。　し

かも初弾命中ともなれば、それは神業を通り越して、ただの運。
狙ってできることではない。

だが、オタQが言うと、違った感じがするのはなぜだろう…？

Pちゃん「仕方ありません。　このまま力攻めを続ければ、ザキラ様からお預かりした軍を、たくさん傷つけてしまいます。　正面は牽制だけにしておいて、側面を狙いましょう。　たしか、左翼のガント大佐の指揮下の部隊が、敵を掻き乱す作戦を練っているんでしたね…」

Pちゃんは、あっさり作戦を変える気らしい。　やはりザキラの肝入りだけあって、その見識は優れているようだ。

…同じ立場のはずのオタQもそうかと訊かれれば、答に窮するところではあったが…。

第35章　迫撃　ラピスラズリ（前書き）

（終わったと見せかけて、座談会は続く…　強化人間編）

ミク「ふっふっふ…。　今回は真面目に、冒頭文はあたしが占拠した！」

ガンス「もちろん、アシスタントの俺もいるぜ～」

ミク「というワケで、いくよ座談会、強化人間編っ！」

ガンス「あらためて、困煮血破（こんにちは）。　で、さっそくだが、強化人間ってのはだな～　薬物投与や洗脳教育なんかで、戦闘能力を高めた人間の総称なんだぜ！」

ミク「おぉ～　なんか知的解説が飛び出したよ？」

ガンス「俺だって、やればこんなモンよ。　それはともかく、強化人間も物語に出てくるのか？」

ミク「心配しなくても、パクり大好きなこの物語は、原作をとことんまでに悪用…。　じゃなくって、有効利用するからね～」

ガンス「で、誰がいるんだ？」

ミク「…あ、まだ誰もいないけど」

ガンス「（ガクっ）　…じゃ、いま話しても仕方ね～じゃね～か」

ミク「そうでもないよ？

『強化人間のキャラは出てきてないケド、存在はほのめかされてる』から」

ガンス「おっ！　編集者名物『あらかじめ伏線』ってヤツだな？そう言やぁ、何かチーム名だけ出てきてたのがあったなぁ～」

ミク「でしょぉ～。　あの国のあの人達、もう少しで活躍の予感?!」

ガンス「果たして、強化人間特有の悲劇が、この物語でも語られるのかっ?」

ミク「ニュータイプと強化人間は、恋をするのか、しないのかっ?」

ミク「それは見ての…」

ガンス「お楽しみだぜっ!!（決まった…）」

ミク「…じゃ、今回のカンニングペーパー回収しま～す」

ガンス「おう、助かったぜ」

第３５章　迫撃　ラピスラズリ

エルフレア「…いい加減しつこいんだよ！　消えろぉ～！！」

叫びと共に放たれた、サテライトキャノン。　月のマイクロウェーブを使わず、機体のジェネレーターの出力だけで放たれたそれは、元来の１／１０の威力もなかった。

それでも、キャノンの洗礼をモロに浴びたそのガウは、胴体を２つに切断され、そのまま地上に墜ちていった。

エルフレア「…さすがにやり過ぎたか…」

呟くエルフレアのＢＸは、パネルをいくつも赤く明滅させていた。
　連戦に次ぐ連戦をした後で、さらにサテライトキャノンまで撃ってしまったため、オーバーヒートを起こしてしまったのだ。

しかし…。

帝国兵Ａ「すざまじい一撃…。　さすがはエルフレア少佐です！」

帝国兵Ｂ「このような勇姿を見れるとは、自分、少佐の部隊に配属されて幸せです！」

その一撃が、部隊を救ったのも確かな事実だった。

実は降下してからというもの、エルフレアの部隊は激しい攻撃に晒されていた。

最初はミデアを狙ってきたのだと、誰もが思った。　地上に降りたＭＳを倒すのはそう簡単ではないが、ミデアごと落とせば楽に倒せる。

だからこそ、エルフレアは緊急降下の作戦を立てた。　地上に降りたＭＳが反撃すれば、敵も諦めるに違いないと思って…。

ところが案に相違して、攻撃は激しさを増す一方だった。　セイバーフィッシュがコアブースターになり、さらにはアッシマーが来て、ガウ編隊に絨毯爆撃までされた。

とてもではないが、たった２０機程度のＭＳに対する扱いではなかった。

エルフレア「…なんでなんだ、ロンド隊長？　いくら私が活躍しすぎたからって、こうもムキにならなくって…」

活躍しすぎと結論づけるあたり、最近のエルフレアの独善さがよく出ていた。　もっとも、ガウ１隻撃墜、ＭＳと戦闘機を合計で１４機撃墜は、れっきとしたトップエースではある。

ロンド「…理由はともかく、これ以上の戦闘が無理なことだけは確かです。　本隊に救援を求めるしかありません」

エルフレア「…くっ…　そうしてくれ…」

エルフレアは、今まで拒み続けていた本隊への救援要請を、ようやく発したのだった…。

【2】

？？？「あ～　もう退屈でヤってらんないっ！」

苛立った声を出したその少女は、コックピットからワイヤーでするすると滑り降りると、おもむろにベルトを緩めた。　軽く膝を曲げるようにして立つと、激しめの音をたてながら、薄黄色い液体が放物線を描き始める。

???「あ～っ！　トゥーエってば、女のコなのに立ちションなんかしちゃって大胆～」

それを見た仲間とおぼしき少女が、矯声をあげる。

トゥーエ「ん…　だってさぁ～。　きょうこそ殺らしてくれるって言うから期待してたのに、ＭＳなんかぜんぜっん来ないんだもん。　砲撃とか爆撃なんか、もう飽きた～」

???「…たしかにね～。　ＭＳに乗ったはいいけど、こんなホラ穴に入ってるだけなら意味ないよね～」

同意するように、もう1人の少女も応える。　髪型は違うが、双子なのかよく似た顔をしている。

それからも2人は、愚にもつかないことをまくし立てていたが、そうしているうちに砲声が止み、上空から敵機の姿が消えた。　よく

見ると、辺りはすっかり暗くなっていた。

トゥーエ「帰ろ帰ろぉ～」

もう敵は来ないと思ったのか、勝手に戦闘配備を解くトゥーエ。
だが、もう1人の少女にそれを止める様子はない。　むしろ後をついて来ていた。

???「トゥーエ待ってよ～」

トゥーエ「エイス～　早く来ないと置いてくよ～ん」

【3】

トゥーエ「なになに？　何か楽しい話？」

???「し～～～」

1人の少女が、静かにというゼスチャーをした。

戻った建物で、先に帰って来ていたらしい４人の仲間たちを見つけると、エイスとトゥーエはその輪の中に潜り込む。　どうやら、扉の先の話を盗み聞きしているらしい。

「…だと？　１０機のＭ…　がやられ…のか？！」

「は…　ガウも１隻……ろし…強…で…までは…」

話の内容を理解したのか、１人の少年がガッツポーズをする。　その隣の少年もやたら期待気な表情だが、なぜか周りの仲間たちと顔が瓜二つだ。

？？？「みんな聞いたか？　こいつは殺るっきゃないだろ？」

６人の仲間たちは、互いにそっくりな顔を寄せ集め、瞳を輝かせて

いた…。

【4】

???「ねぇねぇ、おばさ～ん。　何か困ってることあるでしょ？」

少年たちは盗み聞きを終えると、浮かれた表情のままで、ある人物の元を訪れていた。　その人物の階級章は…　少将のようだ。

サンサレア「…困ったこと？　あなたたちの素行の悪さとかかしら？」

だが、サンサレアは軽く首をかしげながら、そう言っただけだった。

???「だぁ～！　知っててトボけてんじゃね～よ！　知ってんだよ！　サンザメヤとかいうトコで、ものすっげえ強ええヤツとドンパチ殺ってんだろ？」

少年が詰め寄ると、サンサレアではなく、近くにいたマンネが煩わ

しげに言った。

マンネ「…フィフス。　俺たちが倒してやる。　だから出撃させろ、そう言いに来たのか？」

フィフス「さすがおっさん。　話が早…」

マンネ「許可できんな」

話が早い、と嬉しそうな顔で言おうとしたフィフスは、言い終わる前にその言葉の先を禁止されてしまっていた。

フィフス「おっさん！　なんでだよ！　苦戦してんだろ？　で、ついでに回す兵力なくって困ってんだろ？　みんな知ってんだよ！」

なおもフィフスは掛け合うが、マンネは眉すら動かさない。

マンネ「…どうせ説明など聞く気はないだろうが、一応言っておく。

まず、インドラに出撃要請は来ていない。　さらに、どうせ今日は退屈だったと言うつもりだろうが、明日が退屈な保証はない。

街が敵に囲まれている以上、永遠に敵が来ないなどということはない。　分かったらさっさと持ち場に戻れ！」

一気にまくし立てるマンネに、本気で嫌そうな表情のフィフスだったが、次に言おうとした言葉は、別の少年に遮られてしまった。

???「少将、大尉。　余計なことを言って申し訳ありませんでした。　みんな戻るぞ」

フィフス「…ちょ、アイン！　何1人だけイイ子してんだよ…」

不平そうな仲間たちを引き連れ、部屋を出て行ったアイン…　だったが。

エイス「アインってば、おばさんとおっさんに媚びなんか売っちゃって～」

本当は媚びとは違うのだが、とにかくエイスは口を尖らせていた。

だが、そんな言葉にアインはむしろにんまりして応える。

アイン「じゃ～ん。　これな～んだ？」

アインが見せびらかしたのは、１枚の紙。　その紙の下の方には、サンサレアのサインらしきものが書いてあった。

トゥーエ「…命令書？」

アイン「それにこうすると、どうなると思う？」

アインはおかしくて仕方ないという表情をしながら、その紙に

『サンザメヤ東方面への緊急支援任務を命ず』

と書いた。

トゥーエ「…あ、アインあったまいい～」

トゥーエは、アインの悪知恵に心底感心したように言う。

アイン「だろ？　これで堂々と出撃できるって」

アインは周りを見渡し、また楽しげな表情を浮かべた。　そして仲間たちも、同じような顔をしていた…。

【5】

クアルーン兵「…そんな任務、聞いていませんが？」

エイス「聞いてる訳ないじゃん？　いま出されたばっかの、しかも極秘任務だもん」

その後6人は、自分たちのMSをこっそり持ち出し、ユービット郊外にある飛行場へと来ていた。　滑走路は穴を埋める作業に大わらわだが、巧みに隠された機体は、意外に多くが生き残っていた。

アイン「…という訳なんで頼みますよ。　緊急任務だから、先を急いでいるんです」

アインがさも困ったような口調で言う。　命令書の筆跡がそっくりなばかりか、６人…　特にアインの演技は完璧だった。

クアルーン兵「…わかりました。　ですが、いま動かせるのは、ファットアングル１機しかいません。　他は、明日早朝の出撃がありますし…」

アイン「ありがとうございます！　みんなもお礼を」

口々に仲間たちは礼の言葉を口にする。　その表情は、嬉しくてたまらないといった様子で一杯だった。

クアルーン兵「…ですが、ファットアングルに積めるのは、ＭＳ４機までですよ？　他は諦めていただかないと…」

6人が、互いの顔を見つめ合った…。

【6】

エイス「ざんね～ん。　ノンとスリスも来れればよかったのに～」

結局、ファットアングルに乗れたのは、くじ引きで勝ったアインとフィフス、トゥーエとエイスの男女2人ずつだった。

MSで言うと、アインとトゥーエがゲルググFs型（海兵隊指揮官仕様）、フィフスとエイスがドワッジ改だ。

乗れなかった2人、特にスリスは心底悔しそうにしていたが、エイスが『お土産狩ってくるから』と言うと、不承不承引き下がった。

アイン「思ったより手間どったけど、これなら夜明け前には着けそうだね」

その言葉通り、ミノフスキー粒子の濃い空域を、しかも低空を飛ん

だせいもあってか、時間はかかってしまった。　ただその代わり、ファットアングルは誰にも見つかることなく、目的の空域に達しつつあった。

アイン「ありがとうございました。　あとは、ここで待っていていただければ結構です」

最後まで演技をすると決め込んだのか、アインは年格好に似合わない丁寧さで、ファットアングルの兵に告げ、地上に降ろしてもらう。

アイン「じゃあ、みんな行こうか。　情報が確かなら、ここから１０キロも離れていないはずだ。　むしろ、相手も気がついているんじゃないかな？」

エイス「あたしは、奇襲より強襲の方が好きだからいい～」

トゥーエ「え～　エイス趣味悪いよぉ～。　やっぱこう寝込みをドッカンといった方が、おもしろいってぇ～」

話からして、やはりどこか違うセンスをしている４人だったが、操る機体に無駄な動きはない。　むしろその動きは、どんな優れたＡ

Ｉかと思うぐらい正確だった。

トゥーエ「見えたっ！　寝込みも～らいっ！！」

フィフス「トゥーエ、抜け駆けする気かっ！」

エイス「あぁ～　２人ともずる～い！」

口々に場の状況というか、空気をまるで無視した声をあげながら、恐ろしい速さで射撃ポイントにつく。

アイン「じゃ、殺っちゃおうよ。　僕たちの…　ラピスラズリの名前、しっかり覚えて死んでもらっちゃおうねっ！」

３人「オッケー！」

【7】

帝国兵「音紋ありっ！　ＭＳ４、１時方向…　…ぐあっ！！」

報告に来た兵が、いきなり紙切れのように吹き飛んだ。　見ると地平線の彼方から、ＭＳとおぼしき４つのシルエットがこちらに迫って来るのが見えた。

いや、すでに発砲炎がいくつも煌めいており、数秒後にはドートレスが１機、立ち上がりすらしないまま鉄屑に変わった。

エルフレア「敵襲？　こんな時にっ！」

エルフレアの叫びも無理はない。　昨日の戦いの後で要請した補給は、まだ受けていなかった。　エルフレアの部隊は、弾薬、推進剤ともに底をついていて、とても戦える状態ではなかったのだ。

フィフス「だらしないなあ…。　もうすぐ朝ですよっと」

フィフスのドワッジ改のバズーカが、またドートレスを捉える。
やはりそれは、機体を起動させる間もなく砕け散る。

エイス「みなさんおはようございま～す。　そんでもって永遠にお休みなさいっ！！」

ラピスラズリの仲間たちが、その声をあげるたびに、どこかで爆発音が響き、火柱が上がる。　まだ明るくなりきっていないというのに、その命中率は驚愕の数字を弾き出していた。

エルフレア「…なんだ奴らは…。　くそっ、ＢＸさえまともなら…」

エルフレアがコックピットで呻く。　ＢＸはオーバーヒートこそ直ったものの、ジェネレーターが無理の余波で、出力の安定を欠いていたのだ。　ビーム兵装だから弾切れはないが、この状態で無理に使えば危険が伴う。

エルフレア「私も出るっ！　ロンド隊長…」

ロンド「ここは私が引き受けます！　エルフレア様はお逃げください」

だが、エルフレアの言葉は、ロンドの強い一言でかき消された。
ＢＸの前に、ロンドのドートレス・ネオが現れる。

エルフレア「…みんなを見捨てて、私に…　また私に、逃げろと言うのか？」

エルフレアの脳裏に、グラーフェンの景色が蘇る。　そして、別れを告げた父の決意に満ちた表情も…。

エルフレア「…もう…　もうたくさんだ…」

ロンド「…それでも、逃げるべき時はあります！　ここは大人しく言うことを聞いてくださいっ！」

ロンドの叫びが、エルフレアの頭にこだました…。

【8】

ろくに寝る間もないままの出撃になった。　何でも孤立した部隊がいるとかで、救援要請が入ったらしい。　つまり、その救援艦隊の護衛が任務だ。

ディジョン「…眠い」

そりゃ、丸3日寝ないで戦ったとか、そんな経験がない訳じゃない。　だが、できるのとやりたいのはまるで違う。　そんなハードな任務なんざ、クソ食らえだ。

ディジョン「…おい、レナ？」

レナ「ｚｚｚ…」

レシーバーから聞こえるのは、気持ち良さそうな寝息だった。　というか、寝てるクセに機体の安定を保つなんて、器用すぎるぞ。

ディジョン「進路上はクリア…」

ミノフスキー粒子がやたらと濃いので、目が頼りだった。　まあ、孤立した部隊がいるんだから、隠れるために撒いたんだろうな。

ラリー「暗くて見辛いですね？　いや、明けてきましたか？」

目標は東側だから、進行方向に朝日を見る形になる。　一瞬、その明るさに目を奪われかけたその時、背筋に悪寒が走った。

ディジョン「各機散開だっ！　ミデアは下がれっ！！」

【9】

トゥーエ「あ、あっち…。　飛んで火に入る七面鳥っ♪」

トゥーエのゲルググは、目の前のドートレスを蹴り倒すと、その上に脚を乗せ、ものの数秒で射撃姿勢を取る。

狙いは、遥か地平線の辺りに見えたばかりの…。

帝国兵「えっ？　後退ですか？　何も見え…」

見えません、そう言おうと思ったのだろう。　いや、実際に見えていなかったのかも知れない。

だが次の瞬間、そのミデアのみならず、両隣も合わせた3機が火だるまになっていた。

アルヴィン「…地平線ギリギリから、ピンポイントで当ててきやがっただと?!」

アルヴィンの驚きも無理はない。

確かにビーム兵器の射程は、カタログ上は無限大だ。　ただ、それは届くというだけで、常識で考えれば、米粒ほどにも見えない敵に当てるのは不可能なハズだ。

ディジョン「…いくらミデアが鈍重ったってな…。　悪い意味で常識が通じない敵だ！　機体より命を大切にしろよ！」

私はいつもより強い調子で人命重視を説くと、機体を超低空までダイブさせる。

フィフス「トゥーエだけずるいな～　おかげで、獲物が逃げちゃったじゃないか～」

一瞬のことではあったが、ミデアを3機も一気に撃墜された相手は、その高度を一気に下げていた。　こうされてしまうと、いくら彼らの射撃の腕が確かでも、地形に隠れてしまい狙えない。

アイン「それより、こっちの方が面白いと思うけど？」

エイス「マジ？　アレ、ガンダムじゃない？！」

違う2人が目をつけたのは、隠れていても一際目立つ、漆黒のガンダム。　エルフレアのＢＸだった。　2人は目を輝かせると、左右から同時にＢＸに接近する。

ロンド「…エルフレア様っ！　ええぃ、聞き分けの悪いっ！！」

ロンドは、ＢＸをいきなり突き飛ばして攻撃を回避させると、自身はアインのゲルググＦｓと鍔競り合いを演じる。

エイス「アイン～　そのコの相手はお願いね～。　あたしはガンダムも～らいっと♪」

エイスのドワッジ改のバズーカが、ほとんど零距離でＢＸを捉える。

そして、もの凄い爆音と煙が辺りを覆った。

エイス「やった♪　直撃っ♪♪」

獲物の破壊を確信したのか、思わずはしゃぐエイス。

…だが、煙が晴れて現れたのは、手にシールドを展開したＢＸの姿だった。

その姿は、真っ黒い装甲が白っぽく汚れ、表面がかすかに熱でこ

ぼこになっていたが、とても零距離でバズーカの直撃を受けたようには見えない。

エルフレア「…間に合ったのか？　それにしても動きが鈍い…」

エイス「うそ！？　あのタイミングでシールドが間に合う？！　つか、なんてガタイしてくれちゃってるワケ？！」

本来の状態のＢＸをよく知るエルフレアは、憤懣やる方ない顔をしていたが、その速さですら、エイスを驚かすには十分すぎたようだ。

トゥーエ「エイスってば、腕が鈍ったんじゃな～い？　というワケで、今度もあたしの大戦果ぁ～」

横槍を入れるべく、トゥーエのゲルググは、エイスのドワッジ改の横をすり抜けた。　そして、右手に握ったビームサーベルをＢＸの胸に突き立てようとする。

だが、そのサーベルとＢＸの間を、ビームが通り抜けた。

アルヴィン「…てめぇだな？　俺に恥かかせやがったのは！」

アルヴィンの射撃が、トゥーエのゲルググを幾度も掠める。　しかし、それでは埒があかないと思ったのか、ＭＳ形態になり、トゥーエに斬りつけた。

トゥーエ「…そんなの、あんたの護り方がヘタなだけでしょ？　ってか、せっかくのガンダム狩りを邪魔しないでよね～」

射撃だけではなく、アルヴィンの斬撃も軽々避けるトゥーエ。　だが、ふとＺ－Ｐｕｌｓを物珍しげに見つめると、こう呟いた。

トゥーエ「…あれ？　ちょっと変だけど、コレもガンダムっぽいかも」

確かにＺガンダムの準量産型であるＺ－Ｐｕｌｓは、ガンダムと言えなくもない。

トゥーエ「いい！　あたしこれにするっ♪」

買い物でもするように言ったトゥーエは、ビームサーベルでアルヴィンに応じ始める。　２機の間で幾度も閃光が散った。

エイス「じゃ、今度こそ…」

レナ「残念ながら、まだいますよ？」

再びＢＸを狙おうとしたエイスを遮ったのは、レナ。　さらに向こうでは、フィフスのドワッジ改とラリーのＺ－Ｐｕｌｓが、激しい銃撃戦を繰り広げていた。

アイン「…みんなガンダムにありついたのに、なんで僕だけこんなのが相手なの～」

不満そうに言うアインは、ロンドのドートレス・ネオを押しまくっていた。　所々にロンドの技量が光ってはいるのだが、アインもまた、一般常識を越え過ぎているのだ。

ディジョン「…そうか。　なら私が相手をしてやろう」

聞こえた瞬間、アインのゲルググの盾が吹き飛んだ。　ビームスマートガンが、最大出力で直撃したのだ。

アイン「危ないなっ！　でも僕もガンダム見っけ！　こいつはもういらないや」

アインはおもちゃでも捨てるように言うと、ドートレスの右脚先を切り捨てる。　そして、崩れるドートレスには興味を示さず、ディジョンのＺ－Ｐｕｌｓに向き直る。

アイン「ガンダムガンダム～」

本当に楽しそうだった。

もし今、彼らのコックピットを覗ける者がいたら、きっとその心からの笑顔が、逆に恐ろしかったに違いない…。

【10】

４対４の激闘は続いていた。

Ｚ－Ｐｕｌｓは、ゲルググやドワッジ改に、１０年近い技術的アドバンテージがあるはずだったが、ラピスラズリは、それをまったく感じさせなかった。

ましてや、屈指の精鋭ディジョン連隊が、極秘の★棺桶（コフィン）システム★をフル活用しているというのに、である。

トゥーエ「…いい…　この感じ…　…ヤバい、あたし感じてきちゃったかも」

アイン「…ほどほどにしといてね？」

何やら卑猥路線ギリギリなコトを口走るトゥーエ。　ただ、さすがのラピスラズリでも、そこまで変なテンションをしているのは、彼女だけのようだが。

ロンド「エルフレア様、今のうちです」

エルフレア「…あ、ああ…」

ディジョン「さっさと退けっ！　誰のために来たと思っているんだ！」

苦戦しているせいか、柄にもなく怒鳴ってしまった。　それぐらい、目の前の奴らは化け物だったということだ。

アルヴィン「…うろちょろと…　速すぎんだろ！」

ラリー「…この動き…　本気でドムか？」

レナ「…乗ってるのって、私達と同じ人間よね？」

トゥーエ「あんたが遅いだけでしょ？」

フィフス「ちょっとはイジったけど」

エイス「たぶん、違うと思うよ？」

何故か、叫びには返事が返ってきた。

奴らはこの戦いの最中で、敵の使ってる回線探して、合わせてる余裕があったってのか？　それとも、偶然の一致か？

【11】

？？？「…見つけたわよ？　勝手に出てっていけない子たちね！すぐ帰ってらっしゃい！！」

だが不意に、その回線に女の声が割り込んできた。　まるで子どもを叱るようなことを言っている。

トゥーエ「げっ！」

フィフス「バレた？」

エイス「うっそー」

…しかも、なにやら動揺しているようだ。　一斉に動きが止まってしまう。

アイン「…サンサレア様？　もうすぐお土産にガンダム持って帰るから、もうちょっとだけ…」

サンサレア「様なんかつけても駄目よっ！　いますぐに帰ってらっしゃい！！」

よくわからないが、雷が落ちたようだ。

その会話はあまりにも戦場に似合っていなさすぎて、何の事を言っているのか、さっぱりわからない。

だが、化け物共が攻撃してこない以上、しばらく黙って様子を見ることにする。

フィフス「ケチくせーこと言ってんじゃね～よ！　敵と戦ってやってんだし、細かいことは言いっこなしにしようぜ？」

エイス「そうだよ～　あと5分だけぇ～」

口々に不平を唱えている。

サンサレア「…そう…」

アイン「やった！」

許しが出たと思ったのか、そのうちの1人が歓声を上げたが…。

サンサレア「…そんなに言うことを聞けないって言うなら、あなたたちはもう、ウチの子じゃありません！」

フィフス「…は？」

呆然とした声に追い討ちをかける、野太い男の声。

マンネ「…聞こえなかったのか？　お前たちは軍から追放だ。　よって乗せるＭＳはないし、二度と出撃することもない。　以上だ！」

ますます意味がわからん。

しかし、ここは触らぬ神に祟りなしだ。

エイス「…

…えと…

…あの…

…あたし1抜けたっ！」

1機のドワッジ改が、その場でくるりと背を向けると、全力で走り去って行く。　そのあまりの無防備さに、逆に攻撃するのを躊躇ってしまった。

トゥーエ「え、エイス?!　あたしも帰るっ！」

今度はゲルググだ。

フィフス「…これって…」

アイン「…決まりだな…」

フィフス「3抜けたっ！」

アイン「同じく4っ！！」

また2機が脱兎のごとく逃げ出す。　理由は皆目見当がつかないが、とにかく化け物を深追いしなければならない理由はない。

レナ「…なんだったんでしょね、あのコたち…」

ディジョン「わからん…。　だが、手強い奴らだった。　次に会うときは、もっと厳しい戦いを覚悟しなくては…」

ちなみに、私が彼ら…

インドラの誇る、強化クローン人間部隊『ラピスラズリ』

について知ったのは、それからしばらくしてからだった…。

第３６章　尾行（前書き）

（こんどは何だ…？）

ミク「ｚｚｚ…」

ガンス「…もう食えねぇ…」

オタＱ「…よしよし。　一服盛った成果は抜群オタ。　ぐっすり眠ってるオタ」

Ｐちゃん「上出来です。　これでここは、私たちが占領しました」

オタＱ「…でも、こんなトコ占領してどうするオタ？」

Ｐちゃん「それは、なんでもアリな冒頭文を使って、私たちの偉大な主人、ザキラ様を讃えるとともに、エージェントの恐ろしさを世に伝えるのです！！」

オタQ「いい考えオタ、頭いいオタぁ～」

…というワケで、次回からはオタQとPちゃんによる、ザキラ&エージェントコーナーが始まる予感?!

第３６章　尾行

ユービットで激戦が交わされる中、ディジョンの調査を命じられたメリャーナは、事件のあったと言われる、カンタルダル基地跡を訪れていた…。

マリー「ざっと調べた限りでは、訴えは矛盾していません。　高出力のビームによると思われる、攻撃の痕跡もありました。　こんな出力のビーム兵器を持つレジスタンスは、まずいません」

基地跡は、そのまま放置されている訳ではなかった。

仮にも帝国領ではあるから、兵士の遺体は収容されるし、ＭＳの残骸などは片付けられる。　ただ、基地として復旧させるのを諦めたというだけだ。

メリャーナ「みたいね。　でもそれだけじゃ、わざわざ来たかいはないわ。　マリーから見て、裏切りはあったと思えるだけの何かは見つかった？」

メリャーナはマリーをちらっと見ながら言う。

マリー「…それですが、私は現状にそもそも納得できていません。
もし裏切りをさせるだけの手立てがあるのなら、この基地をレジスタンスが占領していないのがおかしいですよ。　わざわざ内応までさせて得た基地を、そう簡単に壊してしまうでしょうか？　これではまるで…」

メリャーナ「誤射か、第3勢力による破壊、よね。　言いたいことはわかるわ」

メリャーナはマリーの先を読んだ…

と言うより、同意見のようだった。

メリャーナ「となると、あいつが根が深いって言ったのが、当たってる可能性も出てきたわね…。　ねえ、マリー？　この時点で、だけど、マリーが考える最善と最悪のシナリオは何かしら？」

メリャーナは、考え込むような表情だ。

マリー「最善…　というより楽観的なケースは、援軍が来た時には、

すでに基地が陥落していた、ということでしょう。　援軍とすれば、そのまま基地を渡すよりは、壊した方がマシです。　しかしその際に、帝国兵が残っているのに気がつかなかった。　もしくは、敗残兵の命より、レジスタンス討伐を優先した…」

メリャーナ「楽観的と言う割には、ずいぶん非情なのね？」

マリー「…し、失礼いたしました」

メリャーナは苦笑いしているが、マリーは本気で恐縮している。

マリー「それで、最悪の事態ですが…」

マリーは、瞳に一種の凄みを帯びさせると、メリャーナに何かを囁く。

メリャーナ「…う～ん。　最悪のケースは、一旦保留にしましょう。　いまある判断材料だけじゃ、憶測とも呼べない妄想だわ」

マリーの口にした悲観的な意見を、そう言って保留にしたメリャーナは、その足で近くの街に降りることにしたようだった。　マリー

はまだ心配していたが、メリャーナにそんな様子はない。

そして、そんな2人を窺う影。

カムラネムラ仲間「…あいつら、いったい何を嗅ぎ回っているんだ？」

グランズ仲間「とりあえず、街に戻ろう。　もし、俺たちのアジトを探ろうってのなら、みんなにも知らせないといけない」

【2】

エヴァニー「…俺たちのことを、嗅ぎ回っている奴らがいる？」

グランズ仲間「そうだ。　少し後をつけてみたが、カンタルダルの基地を調べていたようだったし、帝国の奴らに違いない！」

その仲間は、拳を握り締めた。

そう言えば、グランズはあの戦いの後、傷ついた仲間たちを引き連れて街に戻ると、街の人々の大歓声で迎えられた。　遠目にも基地が燃えているのが見えたようで、街が帝国兵の暴虐から解き放たれたことを確信したのだろう。

その後は、基地あった所に何回か帝国軍が来たりもしたが、結局長く留まることはなく、街に帝国兵が入って来ることもなかった。おかげで街は平穏そのものだ。

シベリア「…このところ、帝国は妙におとなしかったからな？　やり方を変えた可能性はあるだろう」

ナディア「それって、今までみたいに基地を作ったりするんじゃなくって、あたしたちのことを調べて、踏み込むとかして来るって意味かい？」

2人は難しい顔つきになった。

たしかにあの戦いで帝国軍はいなくなったし、グランズとカムラネムラは一躍有名になった。　けれど、それはみんな、基地をエヴァ

ニー達が落としたと思っているからだ。

街の人々は、あの晩に起こったことを誰も知らない。

だから、街の人は浮かれていても、エヴァニー達は警戒を強めていたのだ。　戦いで多くの仲間たちが死んでいて、その数を大きく減らしていたせいもある。

エヴァニー「…そうだな…。　街に入って来るようなら、注意が必要かも知れないな…」

エヴァニーも厳しい表情なっていた…。

【3】

メリャーナ「歩いたらお腹が減ったわ。　マリー、何か食べて行きましょう？」

マリー「食糧ならば、車にありますが…」

メリャーナ「…マリー。　そんなんじゃ、わざわざ現地まで来た意味がないって、言わなかったかしら？」

メリャーナはそう言ってマリーを連れ回したが、その様子はどう見ても観光客のそれだった。　皇女の自覚はもとより、調査のことすら頭にないかのように振る舞っている。

メリャーナ「ここ、いい匂いがするわ」

そんなことを言いながら、メリャーナは1つの店に入った。　しかしそこで、メリャーナは何か驚いたような目をして、後のマリーを振り返った。

マリー「…メリャーナ様。　どうかされましたか？」

そんなメリャーナを見て、逆にマリーの方が怪訝な顔をする。

メリャーナ「…私の記憶が確かなら、だけど。　あのテーブルにいる女の子、似てないかしら？」

マリー「…たしかに似ていますね…」

マリーにも、メリャーナの言わんとすることがわかったらしい。

マリー「…お忍びとか、お好きなんでしょうか？」

メリャーナ「お忍び好きなんて、いい子に育ったわね」

メリャーナは目を輝かせていた。　ちなみに、メリャーナがお忍び好きなのは、この状況からして言うまでもあるまい。

こうして、メリャーナはスタスタとその女の子がいるテーブルに近づいて行ってしまったのだった…。

【4】

メリャーナ「…ここ、相席をお願いしてよろしいかしら？」

メリャーナが声をかけると、そのテーブルの賑やかな雰囲気が一変して、会話がふつりと途切れてしまった。　そこにいた何人かがメリャーナを見たが、一様に歓迎していない様子だった。

ナディア「相席って、他の席がいくらでも空いてるじゃないか」

ナディアの言うことはもっともだった。　席はむしろ、埋まっている方が少ない。

メリャーナ「でも私、その子の隣がいいんだけど？」

メリャーナはサヤリを見て言う。

サヤリ「…　…ぇ…」

そう言われて始めて、メリャーナの顔を見たサヤリの顔は、なぜか微妙に強張っていた。

メリャーナ「間違ってたら悪いんだけど、あなたサヤリちゃんよね？」

サヤリ「……。」

メリャーナはサヤリを名指する。　だがサヤリは黙ったまま目を泳がせ、ついに下を向いてしまった。

エヴァニー「そうなのか？　サヤリ？」

サヤリ「…ま、まあ会ったことはある…」

エヴァニーに言われて、初めて口を開くサヤリ。　エヴァニーは意外なそうな顔をしたが、だからといって特別どうといった感じはない。　逆にサヤリは、不自然さの塊だ。

メリャーナ「…あははは…　そういう反応されちゃうか～。　まあ、一緒に遊んだって言っても、あれからずいぶん経っちゃってるしね。　それからも何回か会ってるけど、じっくりお話しする時間はなかったし…」

メリャーナは、ちょっとだけ寂しげな表情を覗かせる。

ナディア「このコはふだんから、あんまり話さない方だからね。気を悪くしたならすまないが」

そんな空気を気遣ってか、ナディアが代わりにメリャーナに応ずる。
メリャーナは、そんなナディアに笑顔を返した。

メリャーナ「いえ、こちらこそいきなりでしたし。　それにサヤリちゃんとは、８歳も歳が離れてますから。　私としては遊んであげてるつもりでも、かえって迷惑とかだったのかも知れませんね」

ナディア「そうかも、って言っちゃうと、さすがに失礼か。　まあ、あたしなんかとしちゃあ、そういう自分の知らない世界に連れてってくれる、兄貴とかは大好きだったけどな～」

メリャーナ「あら？　あなたはお兄さんがいらしたの？　うちも兄がたくさんいましてね…」

初対面にも関わらず、ナディアはメリャーナと打ち解けたようだった。　話題はいつの間にかサヤリとまったく関係ないことになっていたが、それでも楽しそうに話し続けていた。

ナディア「…ああ、いけない。　つい、全然関係ない話で引き留めちゃったよ。　その格好からすると、旅行かなんかでこの街に？」

メリャーナ「ええ。　まだもう少しいるつもりなので。　ナディアさんとは、お酒でもご一緒したくなりました」

結局その場は、メリャーナとナディアが親しくなっただけで、サヤリとメリャーナに接点は生まれなかった…。

【5】

ナディア「悪い奴には見えなかったけどなぁ～」

メリャーナ達が帰った後、その場にいた仲間たちは、メリャーナ達の話題で持ちきりになった。　ちなみに、当のサヤリ自身は

『きょうは気分が悪い』

と言って席を外してしまい、シベリアも朝からどこかへ出掛けていて不在だった。

グランズ仲間「…あいつに間違いない。　基地を調べてた奴らだ」

仲間の1人が険しい表情をする。

ナディア「…でも、帝国兵がサヤリの知り合いなのか？　エヴァニー。　サヤリはメリャーナを知ってるって言ったんだろ？」

エヴァニー「…それなんだが、なぜか詳しいことを話そうとしないんだ。　朝は元気だったのに、急に気分が悪いって…」

エヴァニーは、純粋にサヤリのことが気がかりなようだった。　一方でナディアは、サヤリがそういう反応を示したことが気になるらしい。

カムラネムラ仲間「今、あいつの後を仲間が尾行している。　何かあれば連絡があるだろう」

どうやら警戒心を募らせた仲間が何人か、積極的な行動に出たらしい。

ナディア「いきなり後をつけるのかい？　私はそういうの、賛成しないけどね？　面識はできたんだし、もう少しじっくり話してみれ

ばいいんじゃないのか？　それにもし帝国の回し者なら、サヤリのことなんか口にしないで、さっさとエヴァニーを射つとか、帰って仲間を呼んで来るとかするだろう。　それがあたしと雑談なんて…」

エヴァニーは難しい顔をしている。　警戒はしているようだが、どうしたらいいのか、わからないのかも知れない。　参謀格のシベリアがいないのが、少し残念なところだ。

エヴァニー「…まあ、このままでいいだろう。　尾行して、それで帝国と関係ないことが分かれば、それはそれでいいんだし。　それより、ちょっとサヤリの様子を見てくる」

そう言って、エヴァニーが席を立ってしまった。

ナディア「…やれやれ…。　リナリスがシベリアと一緒に出かけてよかったよ…」

そんなリーダーと、仲間内の複雑な人間模様を知るナディアは、呆れた笑いを浮かべたが、それでも目には真剣な色を残したままだった…。

【6】

近衛兵「メリャーナ様」

運転手に扮した兵が声をかけてきた。　その声は厳しい。

メリャーナ「気がついているわよ。　尾行されてるわね？」

マリー「撒きますか？　潰しますか？」

マリーは即座に言ったが、メリャーナは苦笑いをしていた。

メリャーナ「つけられてるのって、さっきの店からでしょ？　だとしたら、サヤリちゃん絡みよね？」

マリー「サヤリ姫の護衛でしょうか？」

メリャーナ「…マリー。　同じ立場のあなたとしてはどう？　お忍びの先で、護衛する人物が偶然知り合いに出会ったとしたら？」

メリャーナは、少し間を置いてからマリーに訊いた。　マリーも少しだけ考えてから口を開いた。

マリー「尾行は…　たぶんしませんね。　私ならば、偶然の出会いを装った襲撃をむしろ警戒します。　もしくは、知り合い本人が暗殺者ではないかと疑いますね」

マリーの答えは、ふつうの人間には理解できないことだった。　だが、帝国内での政争をよく知る彼女からすれば、ごくごくふつうのことだったはずだ。

現実に、メリャーナは母が違うとはいえ、兄の第2皇子から強引に婚礼話を押し付けられたし、実の弟であるレオン皇子は、その異母兄を暗殺しようとして、逆に追われる身になったと言われていた。

メリャーナ「マリーは、相変わらず厳しいのね」

知り合いすら信用しないかのような発言をしたマリーに、メリャーナは苦笑いを浮かべる。

マリー「…市中での、常識には当てはまらない事を申し上げているとは思います。　ですが、一国の要人の護衛となると、どこの国でもそういうものではないでしょうか？」

メリャーナ「…そうね…」

その言葉を、メリャーナはあえて否定しなかった。

けれど内心では、近年の帝国ではそれは間違っていなくても、他の平穏な国ならば、そんなでもないかもと思っていたが。

メリャーナ「…とりあえず、こちらから先に何かをするのは止めておきなさい。　下手なことをしてマリンピアと何かあれば、思わない火種を作りかねないのよ？」

マリー「わかりました」

マリーが頭を下げる。

こうしてメリャーナは、自身が尾行されているのを知りながら、あえて動きを見せないことにしたのだった…。

【7】

ホテル…

まあ、メリャーナが皇女として泊まるには、およそあり得ない規模の、ではあったが、そこに戻ったメリャーナは、部屋に籠り、一心に画面に向かっていた。

ちなみに、マリーは尾行が気になるのか、部屋に入ってからも直立したままだった。

メリャーナ「…ねぇ、マリー。　これ見てくれるかしら？　面白いことがわかったわよ？」

メリャーナが示したのは、帝国の諜報機関のデータバンクだった。
　メリャーナクラスの要人でないと、アクセスが許可されない極秘

サイトだ。

メリャーナ「…これ…　巧みに隠してはいるらしいけど、マリンピアのサヤリ姫って、一月前くらいから行方不明らしいじゃない」

メリャーナはその美しい瞳を、興味津々な眼差しに変える。　その様子は、何か子どもが新しい遊びを見つけたかのようだ。

マリー「それですか。　具体的な情報を掴んだようですね？　ということは、お忍びではなく、出奔か誘拐なんですね」

マリーはあっさりそう言った。　護衛に余念のない彼女のことだから、メリャーナが訪れる辺りの政治情勢などは、ある程度事前に調べていたのだろう。

メリャーナ「…あの様子で誘拐はないでしょ？　マリンピアで何かあったのね。　ま、それを言ったら、帝国も他人の家のことは言えないか」

…コト。

なにか、物音がしたような気がしたが、マリーは動かなかった。メリャーナが怪訝な顔をしただけだ。

メリャーナ「それでなんだけど、帝国が外務から会談を申し込んだらしいわ。　もちろん断られてるけど」

メリャーナ「で、帝国の議会はね…」

カタン…。

また、何か物音がした気がする。　マリーは動かなかったが、メリャーナはくすくす笑い出した。

メリャーナ「いや、ここはいっそ帝国軍の全力をあげて攻めちゃうべきでしょ！　ＭＳ１万機ぐらい使ってさ！！」

何を思ったか、メリャーナは突然そんなことを大声で言った。

そしてその瞬間、マリーが突然ドアを引く。　すると、引かれたドアと一緒に男が１人部屋に倒れこんで来た。

メリャーナ「…もう…。　聞き耳って、どれだけ古くさいことをしてくれるのかしら？　もっとこう、盗聴機くらい用意できない？」

？？？「くそっ！」

腰に手を当てて男を見下すメリャーナに、転がり込んできた男は、

露骨に舌打ちすると、扉に向かって駆け出す。

…だが…。

男「ぐおっ！」

男は部屋にもう一度転がっていた。　マリーが足をかけて転ばせたのだ。

男「…く…　て、帝国の犬め！　また街を食い物にしに来たかっ！！」

男は、ずるずると尻をついたまま下がるが、それでもマリーとメリャーナを振り返って、怒りを隠せない様子で言った。

メリャーナ「犬って…。　帝国もずいぶん嫌われちゃったものね」

メリャーナが否定しなかったことで、男はさらに怒りを募らせたようだ。

男「やはりお前ら帝国軍の…　帝国軍は街から出て行けっ！！！」

男は懐に手をやった。

マリー「無礼者っ！！」

しかし、男の取り出した拳銃は、メリャーナに向けられた瞬間に宙に舞っていた。　マリーが男の手を蹴り上げたのだ。

男「ひっ！」

しかも、マリーの攻めはそれで終わらなかった。

男の手を蹴り上げた右足を下ろさないまま、左足だけで一歩飛んで間合いを詰め、そのまま身体をひねって、男の額と胸にソバットを連撃で叩き込んだのだ。

メリャーナ「あ～あ～。　手加減しろって、いつもあんなに言っているのに…」

当然の結末か、男は卒倒していた。

マリー「いえ、男ですから、多少顔を傷つけても問題ないでしょう。骨もたぶん折れてはおりません」

けれど、マリーは平然としていた。　どうやら、これでも手加減は十分にされているらしい。

メリャーナ「…まったくマリーも変わらないわね…。

って、あら？　この男、たしか…」

卒倒した男の顔を見つめたメリャーナが、違う意味で声を上げていた…。

第３７章　謀略の余韻（前書き）

（エージェントのお話コーナーは始まるのか？）

Ｐちゃん「小説をお読みの皆様」

オタＱ「なんでもアリの冒てゅぉ…　ぐひゅ」

Ｐちゃん「…オタＱ…。　本編の時といい、あなたはいったい何やってるんですか？　『なんでもアリのぼうと』９文字しか無事に発音できてないじゃないですか！」

オタＱ「ボクは喋るのとか苦手オタぁ～」

Ｐ「苦手って、あなたが『他人の役に立つことで』得意なことなんか、何もないじゃないですか！」

オタＱ「そんなことないオタぁ～！　ガンプラ作りは得意だし、ＭＡＤでセリフの吹き替えもしてるし、アニメ映像の合成とか、再生数も３位だし、ＭＳに張るおにゃのこの画像シールも作れるオタ！」

Pちゃん「……

……

……

…だから最初に『他人の役に立つこと』って言ってるじゃないですかっ！　１００歩譲って役に立ってるとしても、文章しかないこの小説で、どうやって作ったガンプラや映像、音楽を読者の方にお見せするんですか！！」

オタＱ「…そ、それは文章をよぉ～く読んだ後に、こう目を閉じると、瞼の裏側に浮かんでくるオタ？」

Ｐちゃん「…あらかじめ言っておきますが、エージェントは互いに脳量子波で交信できますから、私に目を閉じさせておいて逃げようとしても無駄ですよ？　ましてや私の『Ｐ』の称号は、名前もそうですが、パーフェクトのＰです！　あなたの悪知恵なんか、とっくの昔にお見通しですからっ！」

オタＱ「ひっ…　ゆるしてオタ～」

オタQ「もうしないオタぁ～」

オタQ「まじめにレジスタンス殺すオタぁぁぁ～」

Pちゃん「…このように一部例外はいますが、エージェントは大変高い能力を持っているのです。　次回からは、その秘密に迫っていきますから、楽しみにしていてくださいね」

オタQ「…楽しみにしててくださいオタ…

…バタ」

第３７章　謀略の余韻

思いもしなかった、海賊の仇討ちに遭ってしまったあたしの艦隊だったけれど、なんとか無事に、霧雨家の治めるコロニー『レンカ』（旧宇宙連合名サイド７）にたどり着いていた。

ミサト「…申し訳ありませんでした…」

マヒロ「…ごめんなさい…」

ただし、艦隊には何もなかったけど、艦内にはありまくりだった。

その１つが、ミク主催？　の反省会だ。

ケイ「戦闘配備が甘い。　哨戒ＭＳ、直掩ＭＳも出さず、そのうえ迂闊に艦速を落とすなど、状況を舐めていたとしか思えないな」

ミク「ニュータイプのクセに、自分の直感無視してなにやってるのかなぁ？　せっかく宇宙での生活に適応したって、頭の中が甘ったるいまんまじゃ、何の役にも立たないじゃない！」

戦闘結果からして、あたしとミサトがこうしてブリッジで正座させられてることに、文句は言えなかった。　油断してたのはみんな同

じにしても、少なくとも霧雨大佐は、あのデブリが乱れ飛ぶ中、部下を連れて発艦したばかりか、敵のＭＳを撃墜していたから。

あたしとミサトは、艦で震えていたと揶揄されても、文句の言える立場じゃない。

ケイ「過ちを悔やむ、それは当然だ。　だがそれだけでは先はない。中尉。　どうしてこんな襲撃が起こり得たか、考えを聞こうか？」

ケイさんの声は厳しい。　普段も甘いことは言わない人ではあるけれど、それを上回る厳しい口調だった。

ミサト「…先に海賊を滅ぼしたことの逆恨みです。　生き残っていた仲間がまだおり、待ち伏せしたんだと思います。　もしかして、あの霧雨に寝返ったという元海賊が手引きを…」

ケイ「中尉っ！！！　お前と言う人間は、どこまで認識が甘ければ気が済むのだ！！　あの状況を見て、どこからその手前勝手な考えが涌いて出るのか、正直理解に苦しむ」

ケイさんに一喝され、ミサトは涙を浮かべていた。

マヒロ「…ど、どういうこと…？」

泣いてるミサトに代わって、あたしがケイさんに訊いた。

ケイ「…まず、海賊の乗っていたＭＳ。　あれが、リゲルグとズサだったのはわかりますか？」

マヒロ「うん…」

ケイ「この時代、あんな高性能ＭＳを、どうやって海賊が用意できたか…。　ミズサワの家がザク３の交換パーツに窮し、霧雨家では、総大将がゲイツに乗っている時代に？」

マヒロ「…あ…」

ケイ「さらに、海賊残党らしからぬ待ち伏せの策。　私は黒幕の存在を疑っています」

ミク「つまり、海賊に高性能ＭＳと作戦を与えて、『さあ仇を討て』って唆した奴がいるってコトだね…」

…想像すらしていなかった。

つまりこれは、海賊の仇討ちに見せかけた、奇襲攻撃ということだろうか？

マヒロ「…でもそれって、どこの誰が？　反帝国のレジスタンス？」

ケイ「…ない、とは言えませんが…　その可能性は低いかと。　すでに帝国に敵対しているなら、わざわざ海賊を唆さなくても、自分達でＭＳに乗ればいい。　まったくの想像ですが、まだ自分達では手出しがしにくい奴らの仕業の可能性があります」

ケイさんの顔つきは、いつになく厳しい。　普段より丁寧になった言葉が、それに迫力を添えていた。

ミク「ケイさん。　中立国が、裏から手を回してるってコトはあるかなぁ…？」

ミクはケイさんと同じで、超がつくくらいのシリアスモードだ。

ケイ「…しかし宇宙の国々は、５年前に帝国が、全部滅ぼしてしまっている。　もしかしたら、帝国内部の仕業かもな…」

ここだけ、ケイさんの声のトーンが下がっていた。　ケイさんにしても、自信はないのかも知れない。

マヒロ「…なにそれ…」

ミク「…つまり、まずミズサワと霧雨の要人を暗殺して、パニクったところを、領地守るフリして占領する…」

ミク「…それで機を見て独立、かなぁ…？」

気の遠くなるような考えだった。　けれど、不可能かと言えばそうでもない。

あの5年前、帝国から独立しようとしたコロニーは確かにあって、それらは核で、コロニーごと消されていた。

でもその事実が、実は鎮圧に手間取った証拠だった。　核を使うぐらいしか、帝国が反乱に対処する方法を持ち合わせていなかったのよね…。

【2】

そんな難問に頭を悩ませながらも、翌日あたしは、霧雨の当主、霧雨侯爵との会談に臨んでいた。

霧雨侯爵「この度はよく来られた。　ゆっくりされていかれるとよい」

マヒロ「ありがとうございます」

そんな型通りの挨拶で始まった会談だったが、その内容は、すぐにお互いのコロニーの苦衷を語り合うことになっていた。

マヒロ「たしかレンカは、工業コロニーだと記憶いたしております。失礼ですが、食糧が不足しておいでではないのでしょうか？」

霧雨侯爵「…うむ。　時代が時代なら、優れたＭＳや艦船を、多く世に送り出せるはずなのだがな…」

ここに来るまでに見たけれど、コロニーの危機ぶりは簡単に見て取れた。

原因は、帝国が各コロニーの産業を１つに絞る政策をとっていたせいだ。　理由は簡単で、１ヵ所集中した方が効率がいいから。

だがその政策は、帝国が乱れた今、裏目に出ていた。　本来ならば高性能なＭＳを産み出すレンカの工場群は、資源が足らないために十分に稼働させることができず、しかもその日の腹を満たすため、本来得意でない農業すら、せざるを得ないでいたのよね。

マヒロ「…今さら、にはなるでしょうけれど、食糧はマーガレットにお任せ頂いて結構ですわ。　宙域最大の海賊が討伐され、少しず

つですが、治安は回復しつつあります。　まだ被害は出るでしょうが、それもレンカのＭＳが増産できれば」

よく知られていることだけど、マーガレットの食糧自給率は２００％超。　レンカをまるごと養って、なおかつ、あたしたちが餓えることはないのよね。

霧雨侯爵「お言葉はありがたく頂戴しておこう。　実はそれだけで解決する問題でもないのだが…。　まあ、それはレイ大尉から説明してもらうとしよう」

霧雨侯爵が後を振り返ると、直立していた士官が１人にこやかに挨拶をしてきた。

レイ「レイ・ロイフィールドと申します。　さっそくですが、レンカをご案内させて頂きたく思います」

それからあたしとミクは、レンカの中、特にＭＳなどを造る工場区画を案内してもらうことになった。

ちなみにケイさんは、侯爵と食糧輸送について具体的な方策を話し合ってくれていて、ミサトは先の失態の責任を取る形で、艦に留め置かれてた。

ミク「レイちゃん？　ちょっと手を貸してもらってもいいかな？」

レイ「ちゃんづけですか？　なんか自分が可愛らしくなった気がして、照れ臭いですね」

ミクのちゃんづけは、いつものことだった。　言葉遣いが変なのは、もうミクの特徴そのものと言ってもいい。　しかも、握手なんか求めている。

レイ「…これは…」

ミク「やっぱりね。　ＭＳは何に乗ってるの？」

レイ「かつては、キュベレイの量産型なんかに乗ったこともありましたが…。　いまでは、メビウス・ゼロぐらいしか…」

ＭＳの名前を聞いて、あたしは驚いた。

マヒロ「…キュベレイ、ですか？　ということはレイさんも…」

このコロニーに入る時に感じてはいたけれど、まさか目の前の人がその当人だったなんて。

レイ「はい。　ニュータイプらしくないニュータイプ、とよく言われます。　性格なんでしょうけれど、実は人前に出るのが苦手だったりもしまして」

苦笑いを浮かべていた。　たしかにニュータイプだからと言って、積極的に他人と交流したがる人ばかりとは限らない。

レイ「…ニュータイプのご姉妹ですか。　なんか羨ましい気もします。　レンカでは、ニュータイプは私だけなものですから」

そんな意外な出逢いを果たしつつも、目的の工場に入る。　そこでは、霧雨大佐が、なにやら悩ましげな様子で指示を飛ばしていた。

霧雨「…ああ、マヒロか。　どうだい？　レンカは？」

名前で呼ばれた。

苦戦を経験したせいか、遠慮がなくなってきたように感じる。　そしてそれを、あたしは好ましく思い始めていた。

マヒロ「…そう…ね…。　さすがなんだけど…」

霧雨「遠慮なんかしなくていいよ。　資源が足らないから、工場はあっても動かせない。　やっと手に入った物資も、質が悪いから、高性能なＭＳは作れない。　無理に作っても、この有り様だ」

そう言った霧雨が見た先にあったＭＳ。

ミク「…これ…　デナン・ゾン？」

霧雨「…まさか、デナン・ゾンを知ってるとはね。　帝国の最盛期でも、設計図止まりだったＭＳなのに」

霧雨大佐は、心底驚いた表情をしていた。　けれどその後は、少し嬉しそうな顔になる。

霧雨「もう1機は、火器運用試験型ゲイツ改。　どっちもレイが試作したＭＳさ。　もっとも、仮の姿だけどね？」

仮の姿、あたしには意味がわからなかった。　可変ＭＳか何かなのだろうか？

ミク「…問題は出力？　それとも、重量過大かな？」

レイ「両方ですね。　その2つが解決しないことには、ビームシールドもＰＳ装甲も、稼働時間が短すぎて…」

あたしを置き去りにしたまま、3人は難しい話をしていた。

霧雨「…しかし、叔父上の守り好きにも困ったものだ。　どうせなら、ハイメガ粒子砲を積んだＭＳとか、圧倒的な機動性の可変機とか開発すればいいのに」

苦笑いを浮かべたのは、霧雨大佐。　どうも守るより、攻めたいタイプの人らしい。

レイ「…何を重視するかはともかく、解決策は１つしかありません。　軽量頑丈な合金です。　それがなければ、今以上のＭＳは、絵に書いた餅でしかありません」

具体的な内容は、まるでちんぷんかんぷんだったけれど、結局は資源の不足という話になるらしい。

つまりはいつもの事で、あたしと霧雨大佐の軍が強くなるためには、もう１つ、資源を豊富に産出する相手との協力関係がいるということだった。

霧雨「…念のために訊いてみるけれど、マヒロの知り合いか何かに、レアアースがたくさん採れる領地を治めてる人はいないかな？」

明らかに駄目もと、よね？

マヒロ「…まあ、レアアースはもちろん、ＭＳだって自由自在に造れる国を知ってはいるけど？」

レイ「本当ですか？！」

霧雨「…さすがマヒ…　いや、待てよ？　それってもしかして、当たり前すぎる冗談かい？」

マヒロ「わかってもらえた？」

レイ「？？？」

初対面のレイ大尉だけが、わからないといった顔をしている。

霧雨「…知り合いも何も、帝国本国がまともなら、戦争自体、する必要がなくなるじゃないか…」

忘れられがちだけど、あたしは一応、帝国の皇女でもあるのよね…。

【3】

外遊にしては、長い滞在になった。　その間あたしは問題の資源を求めて、いくつかの貴族家と話をしてみた。

けれど、2つを除いて色好い返事はなし。　自家の分だけで手一杯と言われるか、法外な値段を要求されるかだった。

手一杯は仕方ないにしても、この乱れた帝国を前にして、協力する前にむしり取ろうとするのには呆れた。　いや、貴族がこうなったから、帝国が乱れたのかも知れない。

マヒロ「ケイさん、ミサト。　例の2つとは交渉よろしくね?」

あたしが2人に頼んだのは、資源を融通してもいいと言った、例外の2つ。

ミサト「…具体的な話はまだ厳しいかもね？　月の貴族家とミズサワの家って、仲が良くなかったし」

ケイ「こちらは交渉もなにもない。　完全な成果主義だ」

ただその2つは、今までと態度をがらりと変えていたのが気になった。

月貴族とは、ミサトが言ったように仲が悪い。　今までなしのつぶてだったのに、なぜここに来て、急に話をする気になったのだろう？

そして、ケイさんが成果主義と言ったのは、帝国本国だった。　最近、新しい宰相が就任したとは聞いていたけれど、そのザキラって宰相の方針らしく、レジスタンス討伐に戦功のあった貴族家には、望む物を何でも与えると言っていた。

この態度からすれば、公正さを伺わせるものの、帝国に逆らう者は許す気のない、強硬な政策を好む人なのだろう。

マヒロ「…だけど、いくら物資のためでも、地球にまで軍を送る余裕は…。　本国は当てにできないかぁ…」

結局、問題解決は遠い星の彼方ってこと？

ミク「…お姉。　そう悲観しない。　こうしてレイちゃんが来てくれてるワケだし」

レイ「私にできる範囲なら、ぜひお手伝いしてこいとの霧雨様の指示ですので」

そうだった。

霧雨大佐は、マーガレットからの食糧供給の代わりに、レイ大尉のマーガレット訪問を手配してくれた。　優秀なテストパイロット兼、ＭＳ技術者でもある大尉の協力があれば、マーガレットでも優れたＭＳや艦が作れるようになるかも知れない。

今は、それに期待することにしよう…。

第３８章　記憶を探して（前書き）

（エージェントの恐ろしさは、果たして伝わるのか…？！）

Ｐちゃん「オタＱ…。　今度こそいいですね？　次にろくでもないことをやらかしたら、ザキラ様にすべてを申し上げ、御裁下を仰ぎますからね？」

オタＱ「はふっ！　災禍は嫌オタ！！」

Ｐちゃん「言ってる側から、なに誤変換をやらかしてるんですかっ！　…ま、あなたにとっての意味は、たいして変わらないみたいですけどね…」

オタＱ「ザキラ様、許してオタぁ～」

Ｐちゃん「このようにエージェントは、ザキラ様に絶対の忠誠を誓っていると同時に、ザキラ様に厳しく統括されているのです」

オタＱ「ザキラ様は、エージェントのボス兼、最強の『エージェン

トZ』なのオタ…。　逆らっても、誰も勝てないオタよ…」

Pちゃん「と言いますと、いくら強くても、所詮『戦いは数だよ』みたいなことを考えてる人もいると思うんですが…」

オタQ「それには、ボクとエージェントM『DR.マンソン』が開発した『ディアボロ・システム』があるオタ。　あのシステムを使えば、1機のMSが10機や20機のMSを倒すのも簡単オタ」

Pちゃん「そうなんです。　その『ディアボロシステム』については、次回に詳しく説明しますので、お楽しみに」

Pちゃん「…ところで、ディアボロシステムって、オタQも開発に携わってたんですか?」

オタQ「えっへん。　そうオタ。　ボクもやればできるオタ」

Pちゃん「…そうですか…。

…でもふと思ったんですが、その開発、オタQが担当した場所はどの部分なんですか？」

オタQ「…あ…　その…　ボク、急に用事を思い出したオタよ～」

Pちゃん「やっぱりそういうことですかっ！」

オタQ「システムの接続待ちの画像が、可愛いおにゃのこだと、
戦う時のテンションが上がるのオタぁ～～～～～」

第３８章　記憶を探して

その頃宇宙では、ゼフィランサスが敵機に追われていた。

というのも、ゲットはフレーネの記憶を探すため、ヴァイスやゴトーたちと別れ、地球を目指しサフラン１０コロニーを後にしたからだ。

フレーネ「あの青い星を見ていると、なぜだかわからないけれど、とても懐かしくて、泣きそうになるの」

この一言だけを理由に、まるで買い出しにでも行くように、ふらりと地球を目指したゲット。　その暴挙に、ヴァイスやレアルタ、ゴトーたちが気がついた時は、すでに手遅れだった。

ＭＳが単機で宇宙を浮遊するなど珍しい光景なうえ、しかもガンダムタイプという事もあって、宇宙海賊の格好の的となってしまっていたのだ。

ゲット「コロニーじゃ盗賊に追いかけられて、宇宙に出たかと思え

ば、今度は海賊なんて、どんだけついてねーんだよ?!」

フレーネ「そういうのって、一難去ってまた一難って言うんだよね。」

ゲット「他人事みたいに言うな、フレーネェェェ!!　俺たち追われてるんだよォォォー!!」

何も状況が分かってなさそうな顔で言うフレーネに、ゲットは慌ててツッコむ。

しかも、ゲットたちにとって、さらなる不幸というか、当たり前の事実が待ち受けていたのだ。

ガンダム1号機は、地上装備のゼフィランサスの他に、フルバーニアンと呼ばれる宇宙用に装備を換装することができるのだが、そんなパーツを持っているどころか、存在すら知らなかったゲットは、宇宙でまともにゼフィランサスを操れず、手足をばたつかせ、見事に溺れていたのだった。

ゲット「くっそぉ〜、こんなことになるなら、みんなの話を聞けば良かった…。　ハロ、敵の数は?」

ハロ「テキ、3キ!3キ!」

ゲット「3機か…　…あれ？」

…その時、海賊の機体が1機爆発した。　残った海賊が慌ててゲットたちとは違う方向にライフルを乱射し始める。

ゲット「な、何だ？！」

フレーネ「あの機体…　私たちを助けようとしてる…」

ゲット「え？　じゃあ味方なのか？」

そんな事を考えてる間に、追っていた海賊は、そのストライクダガーによって全滅した。　そして、ゼフィランサスに通信が入る。

？？？「おい、そこのガンダム。　海賊相手に逃げてるなんて、テメーとんだ腰抜けだな？　つか、まともに機体を操れてねぇぞ？　素人か？」

ゲット「俺は腰抜けでも、素人でもねぇぇ！　…今日はちょっと、調子が悪いだけだ」

フルバーニアンに換装していないゼフィランサスに、宇宙空間で調子がよい日があるのかはかなり疑問だったが、何も知らないゲットは、とにかくそう強がって答えていた。

???「その声…　もしかして、ガキかテメー？　何でガキがガンダムなんかに？　まあいい、ついて来い。　俺の艦に案内する」

そう言うと、ダガーはゼフィランサスを牽引するように、どこかへと向かった…。

【2】

ダガーに連れられたゲットたちは、ザンジバル級に着艦する。

ダガーのパイロットは、ゲットにコクピットから降りて待てと言ったので、ゲットとフレーネは言われた通りにし、パイロットが降りて来るのを待っていた。

ゲット「なあフレーネ、俺たち何されんのかな…」

フレーネ「何って、何で？」

ゲット「…フレーネって、変なとこだけ緊張感ないんだな…」

そんなことを話していると、ゲットの足元に銃弾が穿たれる。　発砲された先に目をやると、ダガーのパイロットが降りてきていた。

？？？「今のは威嚇だ。安心しろ、別にテメーらを殺す気はねえ」

そして、そのパイロットは銃を構えたまま、ゲットたちの目の前まで近づいて来る。

???「…やっぱガキか…。　ったく、テメーがガンダムなんかに乗ってやがるから、目ざとい海賊が動き出しやがったじゃね～か。　しかも下手に助けちまったから、今度はこっちが追われる身だぜ…」

そのパイロットは、さも忌々しげに語り続ける…

と、思ったのだが…。

【3】

ヴァイス「…はあ!?　ゲットが地球目指して飛んでった、だと?!」

さすがのヴァイスも、レアルタが駆け込んで来た時には、口にしていたコーヒーを吹き出すくらい驚いていた。

ゲットが思いついたら止まらない性格なのは知っていたが、いくらなんでも、ほとんど発作的に地球行きを決めるなんて、思ってもみなかったのだ。

だいたいが、ＭＳが単独で大気圏降下をするなど、ふつうに考えられることではなかった。　バリュートシステムが開発されてから、たしかにどんなＭＳでも、燃え尽きることなく地球往還ができるようにはなった。

だがそれでも

『地球とコロニーは遠い』

これが、スペースノイドの常識である。

ヴァイス「追いかけよう。　ゼフィランサスは地上戦仕様だ。　遺跡で見つけたバリュートで降下はできても、宇宙でまともに動けるはずが…」

そう言いかけたヴァイスの言葉が止まる。

レアルタ「…そうしたいのはやまやまなんだが、生憎、俺も立場はおんなじなんだよ…。　ドム足じゃ、宇宙に出たら溺れちまう…」

そうなのだった。

コロニーからコロニーを渡り歩いてきたレアルタのザクは、高機動を確保するため、ドムの脚部に無理して交換されていた。　だから、宇宙では泳げないザクなのだ。

ヴァイス「…くそっ！」

八方塞がりな状況に、ヴァイスは苛立ちを隠せない。

レアルタ「…ヴァイスさん…。　…俺を置いて行ってもいいんだぜ？　ヴァイスさんのジム・ストライカーは、まだ宙間装備つけたままんまだったはず。　あれなら…」

ヴァイス「レアルタっ！　俺を、相方置き去りにする薄情者にしたいのか、お前はっ！！」

レアルタ「……。」

沈黙が周囲を取り巻く。

ヴァイス「…ゴトーたちは何と言ってる？　あいつらの艦はザンジバルだろ…？」

レアルタ「…やるだけのことはしてみる、とは言ってた。　奴らも前の戦いで帝国軍と正面からやっちまったから、事情は複雑らしい」

たかだかＭＳの行動適正。

それがゲットとフェニックス・ナイツの２人を、こうも冷たく引き裂くことになろうとは。

そしてその別れは…。

【４】

ゴトー「なに？！　ゲットがガンダム持って、地球に行っただと？　アイツは馬鹿か！？」

レアルタからその知らせ受けた時、冷静なはずのゴトーもまた、ヴァイスと同じ反応をしていた。

ゴトー「位置は？　ザンジバルで追いかけられそうか？」

ネロ「…反応が消えてしまって、何処に居るのか見当も付きません。腕は直しましたが、まだガンダムには宇宙仕様に換装されていないはずです。　流されて、どこかに行ってしまったのでは…」

暗い空気が辺りを漂う。

そんな中、いつも通りメリルがゴトーの袖を引っ張る。　それに気づいたゴトーは、おもむろにカードを引いた。

ゴトー「…塔のカードの逆位置…。　トラブルに巻き込まれたのかもな…」

ジルド「俺たちも行きましょうぜ、地球に！」

ジルドは、ネロよりは諦めが悪いようだった。

ミア「遺跡で発掘した分、それを売って手に入れた分とで、十分に地球へ行くだけの食糧と物資は確保できています。　どうされますか？」

ゴトーがメリルを見る。　メリルの表情は、誰もが予想した通りだった。

ゴトー「地球へ向かえ！　それから、ミノフスキーは絶対に撒くな！　レーダー、熱源、目視、どうやってでもいいから、必ずガンダムを見つけ出せ！」

ジルド＆ネロ＆ミア「了解っ！！」

ゴトーたちのザンジバルは、こうしてサフラン１０から地球へ向かうことになった。

それこそ目を、皿のようにしながら…。

【5】

？？？「…そこでだ。　助けた礼に、そのガンダムを渡してもらおうか！」

いきなり話は、思わぬ方向へ豹変していた。

ゲット「ガンダム渡せだぁ？　って言うか、お前誰だよ？」

？？？「俺は傭兵だ！　『スティヴ・ボーン』っつーんだよ。『鉄の骨（アイアン・ボーン）』って聞いたら知らねー奴はいねーだろ！」

ゲット「…ア、アイアン・ボーン？！　あ、アンタがあの？？　うっそだぁー！！」

たしかにアイアンボーンと言えば、宇宙では名の知れた存在であった。

腕利きの傭兵であり、ふだんは獲物を狩るはずの海賊が、姿を見たら逆に逃げ出すのだと噂されるほど。

帝国軍狩りがフェニックス・ナイツとするなら、海賊狩りとでも言ったらいいのだろうか？

スティヴ「嘘じゃねえ！！　ちゃんと機体もグレーにしてるだろ！　グレーはアイアン・ボーンのパーソナルカラーで有名だろうが！」

ゲット「いやでも、何かあんたイメージと全然違うぞ？　有名なエースなら、もうちょっと他人に優しくするモンじゃないか？　それが逆にガンダム寄越せなんて、海賊よりタチが悪いじゃねーか！」

スティヴ「…このガキ…　パイロットにあらぬ幻想抱いてんじゃねえ！　少なからず、パイロットはとんがってるモンだっつーの！！　しかも、俺を海賊以下だとぉ～？」

ゲット「言われて怒るってことは、当たってんじゃねぇかよ！」

キョトンとするフレーネをよそに、ゲットとスティヴはまるで子供のように喧嘩を始めた。　緊迫した雰囲気は、いつの間にか解けて

いた。

???「…ったく、うるさいねぇスティヴ…。　あたしはうるさいのは嫌いなんだ。　あんまりギャーギャーやんないで欲しいな。そこの坊ちゃんもな！」

そうしていたら、ゲットとスティヴの喧嘩に、1人の女性が割り込んできた。

ゲット「なんだよ、アンタ！　邪魔すんなよ！」

スティヴ「そうだ！　コイツは1発殴っとかないと気がすまねぇ！！」

なぜか意見が一致する。

喧嘩をしてたかと思えば、思わないところで気が合う2人だった。

???「わかったから、そこまでそこまでー。

…そこまでにしてくれないと、ちょっと困っちまうからね？」

その女性が『笑顔で』取り出したのは、人の腕ぐらいの長さはありそうなショットガンだった。　そしてその銃口が、代わる代わるスティヴとゲットに向けられる。

２人は無言で両手を上げた。

？？？「…さて、冗談はともかくだね。　まずは謝らせてもらうよ。　アタシのダチが、変な意地張っちまったみたいでさ」

いつの間にかショットガンは消えていて、代わりに柔らかい声で謝られたゲット。

ゲット「ううん。　こんなヤツでも、助けてもらったのは感謝してるよ！　それに、艦にまで乗っけてくれるなんてさ！　あ、俺、ゲット・アルスター！　よろしく！！」

フレーネ「フレーネ・エルセーヌ・リドルです」

ハロ「ハロ！　ハロ！　ゲット、フレーネ、トモダチ！」

口々に自己紹介をする2人と1個。

？？？「へー　面白い連中だね？　アタシはリンダ・クレシス。行商人さ。　まあ、訳アリの物を売ったり、運び屋やったりもしてるけどね？」

それに応えて、リンダも自己紹介をする。

フレーネ「なんか不思議な人…」

ゲット「いや、お前が言うことかそれ？」

すかさず、ゲットはツッコミを入れた。　そんな2人に笑いながら、リンダは訊く。

リンダ「それよか、アンタたち何してたんだ？　ＭＳだけで宇宙を

行くなんて、ある意味無謀な挑戦だよ？」

ゲット「地球に行きたいんだ！　フレーネ、記憶がなくって…。地球に行ったら、何か手がかりが掴めると思って…」

スティヴ「記憶探しの旅ってか？　ならＭＳに乗る必要もねーだろ？」

スティヴもまた、ゲットに当たり前のツッコミを入れるが…。

リンダ「よし、じゃあアタシたちと一緒に行くかい？」

意外にも、リンダはゲットに協力的だった。

スティヴ「っておい！　こんな、訳の分かんねえ奴らを連れてくってのかよ？！」

リンダ「いいじゃないか。　旅は道連れって言うしね。　アタシはうるさいのは嫌いだが、にぎやかなのは好きなのさ」

ゲット「ほんとかよ?!　ありがとう!!」

トントン拍子に話は進んで、彼らを乗せたザンジバル級「リメンバーズ」は地球に向けて針路を取るのだった…。

【6】

ユーリ「…動いた。　地球に行くのね、ゲット・アルスター。　それに…　一緒にいる新しい感覚。　誰?」

ユーリはナスカ級の中から、無限に広がる宇宙を見つめていた。
そして、そんなことを呟くと、すっとブリッジへと向かう。

ユーリ「…地球近辺に不審な機影は?」

オペレーター「たまに海賊らしきＭＳが行動していましたが…。
あとはザンジバル級が1隻います。　ルートからすれば地球へと向かっているのではないかと」

ユーリが撤退した後、オクサイド艦隊はルナ２からの補給を受け取るため、一旦旧サイド５、サフランの宙域を離れていた。

ガンダム捕獲に失敗した時に多くのジンを失い、戦力の立て直しが必要になったからだ。

そして補給が終わった今、サフラン１０からの航路に、網を張っていたというわけだ。

彼らにとって、ガンダムがサフラン１０にあるうちはたいして脅威ではないが、別の場所…

特に、帝国と敵対している地域に持ち込まれる事は、あまり歓迎できない事態になる可能性があった。

ユーリ「…そのザンジバル級に、ガンダム１号機がいるわ。　オクサイド中佐、艦を出して」

ユーリは静かに、だが強い調子でオクサイドに告げた。

オクサイド「ふふ…。　言われずとも。　本国からの命令で、君を地球まで送り届けろと言われているのでね？　ガンダムの捕獲は、言うにも及ぶまい」

ユーリ「だったら、さっさと出しなさい」

こうしてナスカ級と、増援に来たムサイ2隻は、地球に向けて発進した。

その任務は、ユーリの移送及び、ガンダム1号機の捕獲だった…。

第３９章　ヤタガラス　闇夜に翔ぶ（前書き）

（ディアボロ・システムの解説…？）

Ｐ「はい、皆様。　今回の冒頭文では、エージェントの強さの秘密『ディアボロ・システム』の謎に迫っていきたいと思います」

オタＱ「待ってましたオタ～」

Ｐちゃん「そこで今回は、システムを開発した当人である…」

オタＱ「エージェントＭこと、ＤＲ．マンソンに来てもらってるオタよぉ～」

ＤＲ．マンソン「呼んだかの？　儂が開発者のＤＲ．マンソンじゃ」

オタＱ「パチパチパチオタぁ～」

Ｐちゃん「ところで、ドクター。　このシステム使うと、何でＭＳ

が強くなるんですか？」

ＤＲ．マンソン「いい質問じゃ。　まず、ディアボロシステムじゃが、これは簡単に言うと、パイロットの精神と機体を、直接結びつけてしまうものじゃ」

Ｐちゃん「本編にも出てきてましたよね？　サイコミュみたいなものですか？」

ＤＲ．マンソン「ちょっと違うが、まあ似ているの。　あんな感じで『考えるだけでＭＳが動く』んじゃ」

Ｐちゃん「たしかにそれなら、レバーを動かしたりしませんから、タイムラグが減りますよね？」

ＤＲ．マンソン「しかも、ＭＳが得た情報は、自動的にパイロットにフィードバックされる。　例えばメインカメラが敵のＭＳを見つけたら、モニターなんか見んでも、自然に頭に浮かぶんじゃ」

Ｐちゃん「ますます凄いですね～」

DR．マンソン「さらに、システムはこれで終わりではない！　これからも物語の進展に合わせて、システムも進化されていくんじゃ！！」

オタQ「…むふふふ…。　この機能を使えば、おにゃのこのスカートの中が、こう頭の中にリアルに…

…はぅっ！？」

Pちゃん「…オタQ。　あなた、また何をやってるんですか？」

オタQ「そ、それはオタ…」

DR.マンソン「…心配せんでええぞ？　ディアボロシステムは生きておるからの？　軟弱な精神や、腐った根性の持ち主のアクセスは受けつけん。　いや、逆に精神を食われて、発狂するかも知れんの…」

オタQ「オ…　オタぁ…？？？！」

（さて、オタQの運命はいかに→笑）

第３９章　ヤタガラス　闇夜に翔ぶ

ユービットへの猛攻は続いていた。

オタＱ「食らえオタ！　食らえオタぁ～！！」

初日についた勢い、クアルーン軍の意気の高さは健在であったが、それはかえって、帝国軍総司令Ｐちゃんの思惑に嵌まる結果になる。

こうして、副司令オタＱ率いる、重装部隊が正面を激しく攻め立てる間に、左翼軍と右翼軍が一気に市街へと雪崩れ込むべく、進軍を始めたのだ。

オタＱ「いくオタぁ～！　ＢＬ全弾一斉発射（ブラックレオパルド）オタよぉ～」

両腕はもとより、肩と膝、さらにオタＱ独自に増設した背中の垂直発射式ランチャーまでも同時に使う。　辺りを発砲煙が覆い、ＢＬの姿が見えなくなる。

そして、街の防御線の一角が激しい爆発に襲われた。　火柱が上がり、さらに何かに誘爆したのか、次々に爆発が起こる。

Pちゃん「やるじゃないですか、オタQ！　これなら正面が陽動なんて、誰も思いませんよ。　むしろ、このまま正面を攻めたくなっちゃうくらいです！」

そのあまりの威力に、冷静なPちゃんすら、やや興奮気味だったのだ…　が…。

Pちゃん「…前言撤回です。　みなさん、私は右翼に増援に行きますから、残りの方は、左翼の後詰めをしてあげてください」

帝国軍士官「はっ！」

動き出す帝国軍部隊。

しかし、Pちゃんがなぜ急に冷めてしまったのだろうか？　それは、周囲の煙が晴れると明らかになった。

オタQ「…え…　えと…。　誰か起こしてほしいオタ？」

そう。

ＢＬは自身の全弾発射の発射反動を抑えきれず、また仰向けに倒れていたのだった。

Ｐちゃん「私は何も見えません！　聞こえません！　ＢＡＭ（ブラックエアマスター）の調子が悪いんですかねぇ！！　戦いが終わったら、ＤＲ．マンソンに修理をお願いしなければ！」

はっきり『無線とスピーカーで叫びながら』その場を後にするＰちゃん。

帝国軍士官「…ぷ…　よし、左翼へ急げ！　今が好機だ…。　…くくっ…」

他の部隊も続々移動を開始する。

オタQ「ちょ、ちょっと待ってオタ？　誰か戻って来てオタぁぁ～～～！！」

オタQの絶叫だけが、ユービット正面に残った…。

【2】

サコン「叔父貴、準備はいいですか？」

グリフィン「任せておけ！　我輩に不可能はない。必要な物もみな装着した。後はうまく捕まるだけだな」

サコン「期待してますよ？」

そんな言葉に見送られ、グリフィンのガンダムＭＫ－２は、ずしっと前に踏み出した。

その勇姿に、帝国兵が歓声を上げる。

それもそのはずで、ＭＳ同士の初戦闘となった昨日、グリフィンは敵のＭＳ６機を大破させていたのだ。　その活躍により、わずか１日して、部隊屈指のエースとしての信頼を築き上げていたのだ。

帝国兵「今日は昨日と違い、進める所まで進んで大丈夫だそうです。　正面の部隊が、後詰めに来てくれるそうですから」

グリフィン「おう」

ガンダムＭＫ－２が走り出す。　敵の砲撃は、味方が攻め立てたせいで、ずいぶん静かになりつつある。

それに、敵としても白兵戦を望んでいるのかも知れない。

グリフィン「がっはっは！　そのようなヤワな装甲では、我輩の一撃は止められまい！」

ガンダムＭＫ－２はバズーカを一切使わず、いきなりハンマーをドムに叩きつけた。　重装甲ははずのドムの上半身が、いきなりスク

ラップ同然になる。

クアルーン兵「また来たぞ！　ハンマーの化け物だ！」

クアルーン軍に、かすかな動揺が走る。

カトラス「…あいつか？　今どき流行んねぇ、ハンマー使いってのは？」

クアルーン兵「頼みます！　昨日は６機もやられてるんです！」

カトラス「俺は８機だ。　２機も多いぜっ！」

８機を倒し、同じくクアルーンのエースとなっていたカトラス。
そのリーオーが、ドーパーガンを放つ。　しかし、ガンダムＭＫ－２はそれをやすやすと避けてしまう。

グリフィン「お前がクアルーンのエースか？　ずいぶんとひょろっちいＭＳに乗っているのだな？」

カトラス「ＭＳは機動性だって、どっかの有名人が言ってた気がするぜっ？」

更なる連射がガンダムＭＫ－２を襲う。　だが、それをすべてかわしきったグリフィンは、一気に間合いを詰めて来た。

グリフィン「男ならば、やはり身体で語り合わねばっ！」

カトラス「悪いが、そっちの趣味はないっ！」

しかし、ここではＭＳの性能差がものを言った。　ハンマーの切っ先にわずかに触れたドーパーガンがへしゃげ、使い物にならなくなる。

カトラス「といったあたりで…」

グリフィン「…そろそろ本番に行くとしよう！」ガンダムＭＫ－２が、大袈裟にハンマーを振り回し勢いをつける。

カトラス「…間違えんなよ？」

初撃はリーオーの頭上をかすめた。　さらにもう一撃が来るが、リーオーをそれをしゃがんでやり過ごす。

連撃が次は下。　飛んでかわすリーオー。　そして、その着地点を狙ったであろう一撃も、バーニアを使ってタイミングをずらして避ける。

息もつかせず左、右。　もう一度繰り返すが当たらない。

グリフィン「なかなかやるではないか？　だが、この一撃はどうか？」

ガンダムＭＫ－２が思いっきりハンマーを振りかぶると、一気に叩き潰すべく放つ。

しかし、リーオーは紙一重で後に飛んでかわし…。

カトラス「…あいよっ！」

ハンマーが地面にめり込んだ隙の逃さず、ガンダムＭＫ－２に肩から突っ込んだ。　食らったガンダムＭＫ－２は、仰向けに倒れる。

カトラス「お見事、ってか？」

リーオーはガンダムＭＫ－２のコックピットに向けて、ビームサーベルを突きつけていた。

カトラス「…出てこいよ？　降参すんなら、命だけは助けてやるぜ？　うちの神様は優しいからな？」

グリフィン「…やむを得まい。　軍の期待に添えなくてすまぬ…」

帝国兵「ガ、ガンダムがやられた！」

ジャック「ここは一時体勢を立て直すだべよ～」

やや優勢に見えた帝国軍だが、ガンダムＭＫ－２がやられたのを見て、狼狽えたように退いて行く。

カトラス「…楽勝だな？」

グリフィン「上上下下左右左右…」

カトラス「バックダッシュのＢに、アタックのＡ、ってな？」

ほぼ無傷のまま、ガンダムＭＫ－２とグリフィンは、クアルーン軍に捕らえられてしまう。　その立役者カトラスも、退いていく帝国軍を見てか、意気揚々とユービットに帰還した…。

【3】

その日はクアルーン軍が押されたものの、ガンダム撃墜で乱れた帝国を、最後に押し返して夜を迎えていた。

そして夜を迎えると、帝国軍は同士討ちを警戒してか、進軍を止めるのが日常になっていた。

ハヴィニー「よくやってくれた！　そなたならばやってくれると、信じておったぞ！」

なんとなく聞き慣れてきた大げさな口調で、カトラスを迎えたハヴィニー。

クアルーン士官「大元帥は褒美に何でも取らす、と言っておいでだ。ありのままを申し上げるとよい」

カトラス（手間が省けたぜ）
なにやらニヤリとした笑みを浮かべたカトラス。

カトラス「じゃあ、遠慮なく言わせてもらうぜ。　あのガンダムをくれ！」

ハヴィニー「そうかそうか。　望み通り、ガンダムを与えて取らす。ガンダムに乗り、さらなる働きをしてくれい」

一礼すると、カトラスはその場から足早に去った。

【4】

そして…。

グリフィン「どこへ連れて行く気だ？」

クアルーン兵「捕虜は収容所に決まってるだろうが！　黙って歩けっ！」

一方グリフィンは、手錠をかけられ、収容所へと入れられようとしていた。　鍵を開けた兵は、そこへグリフィンを放り込もうとする。

だが…。

グリフィン「案内ご苦労！　では、そろそろ我輩も仕事をせねばっ！！」

言ったグリフィンがやおら力を入れると、なんと手錠の鎖が、まるで糸か何かのように切れてしまったではないか！

クアルーン兵「貴様っ！　化け物かっ！？　…ぐはっ！！」

そして、増援を呼ぶヒマも与えず、腹に一撃を見舞って倒す。

グリフィン「がっはっは！　こんなチャチな鎖で、我輩の鋼鉄の身

体を抑えることはできん！」

こうしてグリフィンは、いともあっさりと自由の身を得る。

グリフィン「さて、予定では弾薬庫を爆破し、敵を混乱させるとなっていたが…」

歩きながら呟くグリフィンが目を止めたのは、衛兵の部屋だった。

そこには、いくつもの鍵が掛けられていて、何人かの衛兵の話し声がした。

しかし、これでも怪盗ヤタガラスの一員のグリフィン。　気づかれずに通り過ぎるだけなら、簡単なことだが…。

【5】

グリフィン「ぬぉぉぉ～～～ん！！」

グリフィンの気合いの一声が響き、抱え上げたクアルーン兵の身体が宙を舞う。　投げ飛ばされた兵はもちろん、同僚を投げつけられた兵もまた、どこかを強打したらしく、気を失っていた。

グリフィン「他愛もない！」

グリフィンの周囲には7、8人のクアルーン兵が倒れていた。

そう。　グリフィンは部屋の前を黙って通り過ぎず、逆に押し入ったのだった。

不意を衝かれた兵は、それこそあっという間に制圧されてしまった。

グリフィン「どうせなら、騒ぎは大きい方がよかろう。　これだな？　牢の鍵は」

グリフィンは衛兵から、ありったけの鍵と武器をぶん盗り、一番近い牢へ向かう。

グリフィン「助けに来たぞ！」

そう言って、鍵を手にするグリフィン。　しかし、ここで思わぬ事態が発生した。

ありったけの鍵と武器を持って来てしまったため、どれがどこの鍵なのか、この収容所に不慣れなグリフィンには、分からなくなってしまったのだ。

帝国兵Ａ「…ここは、南棟の１Ｆ　Ｂ―１５番だ」

囚われている捕虜が必死に教えようとするが、見つからない。

帝国兵Ｂ「何しに来たんだよ？　いったい」

そう言われてしまっては、グリフィンも立場がない。

グリフィン「…こうなってはやむを得ん。　少し下がっておれ。

…ていやぁぁぁあ～～～！！」

またもやグリフィンの怪力が炸裂し、扉の鍵は壊されていた。

帝国兵Ｂ「…あんた、せっかく鍵を奪った意味がねぇし…」

捕虜はあ然としていたが、とにかく解き放たれたのは間違いない。

帝国兵Ａ「よし、指示をくれ。　恥ずかしい話だが、捕まって長いからな。　大概の事は案内できる。　助けてもらった礼に、何でもしよう」

グリフィン「そうか。　では、他の部屋の捕虜を開放してくれ。手空きの者は武器を取るのだ！」

帝国兵達「おう！」

囚われていたとはいえ、訓練された兵である。　グリフィンの指示に従い、次々と仲間を開放し、駆けつけて来る敵兵を倒していった。

そして、次第に騒ぎは大きくなり、ついには異変を知らせるサイレンが、ユービット中に鳴り響く。

カトラス「始まったな？　じゃ、俺も仕事をするとするか！」

カトラスは周囲に誰もいないのを確認すると、ガンダムＭＫ－２のバズーカを、空に向けて放った。　ユービットの上空に、緑色の光が煌めき、それを合図に多数の砲声が聞こえだし、またたくさんのノズル光がユービットを目指し始める。

カトラス「…あとは司令部だな？」

そして、ガンダムＭＫ－２もまた動き始めて…。

【6】

帝国兵Ｂ「まずいな。　奴さんＭＳまで出して来やがった」

言葉通り、収容所に迫って来るリーオーが１機。

衛兵はもちろん、騒ぎを聞きつけて駆けつけて来たクアルーン兵をも倒していた帝国兵達だったが、さすがに重火器は持っておらず、ＭＳ相手には歯が立たない…

…はずだった。

グリフィン「このワイヤーを、そこの柱にくくり付けよ。　もう片側を皆で持つのだ！」

どこで見つけたのか、グリフィンが取り出したのは、車やＭＳを牽引するための鋼鉄製のワイヤーロープだった。

クアルーン兵「そうそう黙って逃がす訳にはいかない！」

生真面目な兵なのか、それとも注意不足なのか、収容所に向かって一直線に進むリーオー。

その掲げた脚に…。

グリフィン「皆、いまだっ！」

ワイヤーロープが触れた。

脚元など、まるで見ていなかったのだろう。　リーオーの動きが一瞬止まった。

グリフィン「はいやぁぁぁぁぁぁぁ～～～～～～～～！！！！！！」

共にワイヤーを引く帝国兵たちが驚くくらいの大声を上げ、渾身の力を込めるグリフィン。　すると何としたことか、張ったワイヤー

に脚を取られ、リーオーが前のめりに倒れてしまったではないか！

帝国兵Ｂ「…マジかよ…。　あのオッサン、人間じゃねぇ…」

帝国兵Ａ「…と、とにかくあのリーオーを奪うぞ！」

呆気に取られながらも、コックピットを強制開放し、中のクアルーン兵を撃ち殺す。

これで戦況は一気に逆転した。　ＭＳを得た帝国兵達は、それで周囲のクアルーン兵を蹂躙しだしたのだ…。

【7】

インドラ兵「一大事ですっ！　敵が夜襲をっ！！」

1人の兵が部屋へ駆け込む。

マンネ「…何をそう慌てている？　夜襲など、めずらしいことでもあるまい。　決められた通りに…」

だが、マンネの言葉の終わりを待たずに、兵はまくし立てる。

インドラ兵「それが、敵の工作員が潜伏していたようで、クアルーンは大混乱を起こしているんです！　このままでは、防衛線が内から崩れますっ！！」

サンサレア「…やけに騒々しいと思ったら、そういう訳だったのね。ラピスラズリはどうしてますか？」

こんな中でも、努めて冷静であろうとするサンサレア。

マンネ「…無断出撃から連れ戻すのに、手間取りましたので…。出撃していない2人も含めて、まだ空港にいるかと」

マンネは苦々しげだったが、サンサレアはむしろ手を打っていた。

サンサレア「そのまま、ラピスラズリに空港を守らせておきなさい！　大尉と私は司令部に行きます。　敵の策略に落ちた以上、もう

ユービットは保ちません。　ハヴィニー元帥を保護し、空路ユービットを脱出します！！」

インドラ兵「はっ！」

サンサレアとマンネは、隣の区画にある司令部へとひた走る。　付き従うのは、わずかに2機のドワッジのみ。　マンネとサンサレアは、正式な護衛を用意する時間を惜しんだのだ。

しかし、そうしているうちにも、夜の暗闇が次第に炎で明るくなっていく…。

【8】

カトラス「どけっ！」

ガンダムＭＫ－２が道を駈ける。

途中で幾度か『味方』を足蹴にしたが、構わない。　どうせ、あと数分後に『敵』になるのだから。

カトラス「大元帥はどこだっ！」

クアルーン兵「あなたですか？　よい所へ！」

リーオーに乗ったクアルーン兵が、道を開ける。　先に８機を倒し、ガンダムをも捕らえたカトラスは、クアルーンの英雄になりつつあった。

ハヴィニー「どうしたことじゃ！？　いったい、何がどうなっておるのか？！」

そこへ駆けつけたのは、２台の車と、ＭＳが３機。

車にはサンサレアとマンネの姿が見え、ＭＳはドワッジが２機。

一方のガンダムＭＫ－２は、カトラスの乗機だ。

カトラス「元帥のおっさん！　敵がそこまで来てる！　早くＭＳに乗ってくれ！！」

カトラスが、スピーカーの最大音量で叫ぶ。

マンネ「貴様は誰か！」

マンネが怒号を上げる。

カトラス「そんなん構ってる場合なのかよ！　大将やられたら、ゲームオーバーだろうが！　だからせめて、元帥のおっさんだけでも逃がすんだよ！！」

ガンダムＭＫ－２が手を伸ばし、地面に手を広げた。

ハヴィニー「…そのガンダム、来てくれたか！　すまぬ、我が信仰が足らぬばかりに…」

ハヴィニーはそう言いながら、その手に乗る。

サンサレア「いけません、大元帥！　そのＭＳはっ！！」

それを見たサンサレアは、車から飛び降り、そう声を発した。

ハヴィニー「何を言っているのだ、サンサレア殿？　この者は…」

カトラス「…悪りぃな、おっさん！！！」

ほんの僅かな差と、ハヴィニーがカトラスを信じた気持ち。　後から見たら、それが運命の別れ道だった。

カトラスのガンダムＭＫ－２は、ハヴィニーを右手に握ると、反対側の左手でグレネードを投げる。

それは数秒後炸裂し、物凄い光と大音響を発した。　スタングレネードだ。

マンネ「くっ…」

急に真昼になったかのような光に眩惑され、視界が奪われる。　そこに倒れて来るのは、２機のドワッジ。

1機のドワッジは胸を突かれ、もう1機は背後から一刀の下に斬られていた。　ジェネレーターに被害が及んだらしく、1機のドワッジが爆発し、もう1機にも火が回る。

マンネは爆風に吹き飛ばされ、地面に転がった。

マンネ「…まさか、奴が工作員だったと言うのか…？　サンサレア様はそれを…？！

…はっ！　サンサレア様は？！」

マンネが辺りを見回すと、自分と同じように弾き飛ばされた兵が3名。　呻いているくらいだから、息はあるようだ。

しかし、マンネが次に見たものは、その場から飛び去るガンダムMK－2と、横転し、ぐちゃぐちゃにひしゃげてしまった、もう1台の…

サンサレアの乗って来た車だった。

マンネ「サンサレア様っ！！」

マンネは駆け寄る。　横転するほど吹き飛んだ車は、建物の壁にぶつかり、原型を留めていなかった。

マンネ「なんということだ…」

その車を覗き込んだマンネは、すでに肉塊としか言いようのない物体を2つ目にする。　だがそれは、2つともインドラの兵卒の軍服を着ていた。

マンネ「…もしや！」

微かな期待。

しかし、それは叶えられることはなかった。　次にマンネが見たのは、地面に倒れ、頭から血を流し、腕があらぬ方向へ曲がったサンサレアの姿だったからだ。

サンサレア「…　…ネ…か…」

弱々しく口を開く。

マンネ「サンサレア様！　いま衛生兵を！」

しかしサンサレアは首を振り、代わりに右手で何かを渡そうとする。

落ちかけたそれを、マンネは慌てて受け止めた。

それは携帯端末だった。

画面には何も映っていなかったが、Ｆの部分だけが、意味ありげに血で塗り潰されていた。

マンネ「…これは…。　プランＦですか？　プランＦを実行せよと？！」

マンネの問いにサンサレアは微かに頷き、その直後にドス黒い血を吐いた。

マンネ「たしかに…　たしかに承りました！　サンサレア様っ！！」

急激に彼女の身体から生気が抜け、瞳孔が開いていくのがわかった。

サンサレア「…　わ…　た…しの可愛…い…　子…　供…　…ち…　…　…ウィナ　…ス…　…カノ…ン…」

…呟くのは、死を目前にしても、忘れられない人の名か？

不意に、パチパチと音を立てていた炎が勢いを増した。　その炎に、敬愛した上官の亡骸もまた飲み込まれてゆく。

インドラ兵「…ここは…　き、危険です」

苦しそうに息をつきながらも、１人の兵がマンネを呼ぶ。

マンネ「撤退だ！　全軍に…」

インドラ兵「…撤退命令なら、すでに出されております。　ハヴィニー元帥の名で、先ほどから放送が…」

マンネの言葉は遮られた。

その意味を理解したマンネは、呆然とし、それから笑い出す。

マンネ「…連れ去られた元帥が、そのような放送をなされるはずがない…。　すでにそこまで、手を回していたのか…」

マンネは呟き、インドラ派遣軍に対して、プランＦ実行が下令された…。

【9】

ハヴィニー「わ、我を…。　我をどうするつもりなのか…」

囚われの身となったハヴィニーは、気の毒なくらい震えていた。
膝の動きが止まらず、手が小刻みに揺れ続ける。　それこそ、小便でも漏らしかねないほどに怯えていた。

そこに、高々と演説をしたであろう姿の面影は、微塵もなかった。

ハヴィニー「…そなたが…。　まさかそなたが裏切るとは…」

カトラス「…裏切ったんじゃない。　俺は最初から敵だったんだ。
ガンダムが攻めて来た時だって、端から俺が勝つと決まってた。
当たり前だ。　ガンダムのパイロットと俺は、仲間だったんだからな」

ハヴィニーの身体から力が抜ける。　震えが止まったが、それはもう震える力さえ残っていないように見えた。

ハヴィニー「…我は…　謀られたのか…」

カトラス「そういうことになるな…」

だが、カトラスはこんな事をしてしまっている自分に、どこか違和感を覚えていた。

敵の総大将である。　捕らえたなら、帝国軍に引き渡せばそれで終わり。　いや、大金星だろう。

なのに、こうしてユービットの郊外まで連れて来て、話までしている。

ハヴィニー「…そうか…。　全て我の不明ゆえか…」

ハヴィニーは腰でも抜けたように、その場に崩れ落ちる。　目はあらぬ方向を見つめ、顔にはすでに生気がなかった。

カトラス「…死ぬのが怖いか？」

また違和感がした。　なぜ自分は、こんな事を訊いているのだろう？

ハヴィニー「…死が怖くない人間などおろうか。　神を信じれば、死など怖くないと説いてきた。　だがそれは違う。　神を信じてでもおらねば、死の恐怖に押し潰されそうだったからよ…」

思った。

この元帥…

いや、この神の使いは、ただの臆病な人間だったのだと。

衣を引き剥がされ、祭壇から滑り落ちた身には、おそらく何も残ってはいないのだろう。

カトラス「…世話になった。　お前を騙すのが役目だから、俺にお前を助けることはできない。　だがせめて、お前は死んでも神の使いでいてくれ。　もしかしたら、それで救われる人間がいるかも知れない」

カトラスは、ハヴィニーの携えた宝剣を、その胸に突き立てた。

そしてその柄を、ハヴィニー自身に握らせた…。

第４０章　想いの形（前書き）

（オタQの運命は…？　続き）

DR．マンソン「さあ、システムに繋いでしまえい！」

オタQ「オタオタぁ～」

『ディアボロシステム。　正常に接続を完了しました』

オタQ「ふにゃ？」

Pちゃん「…ド、ドクター。　これは一体…」

DR．マンソン「…お、おかしいの…。

『ディアボロシステムは、人間の強いマイナス感情に反応して、精神とリンクする』

はずなんじゃが…」

Pちゃん「…どういう事ですか？」

DR．マンソン「怒りや憎しみ、そういった人間が普段発揮してはいけないとされとる感情、それを秘めとらん人間は、システムは使えんのじゃ」

Pちゃん「はぁ…」

DR．マンソン「例えばお主！　いい歳をしておるのに、背がずいぶんと低いの？　その姿、はっきり言うて好きか？　いままでの人生で言われたことはないか？　『チビのくせに偉そうに』　などと？」

Pちゃん「…や、やめてください…　ドクター…」

『対象者とのシステムリンクを発動します』

DR．マンソン「…ほらの？　負の感情が高まった人間の脳は、一種の興奮状態にある。　その状態にあるからこそ、システムから強制的に送り込まれる、膨大な量の情報をイメージできるのじゃ。のんびり落ち着いておっては、とてもでないが脳が保たんわ」

Pちゃん「そうだったんですか…。　…じゃ、オタQはなんで平気なんでしょう？」

DR．マンソン「それなんじゃが…」

オタQ「おにゃのこを、ボクのものにするオタぁ～　でもって、あ～んなトコやこ～んトコを、おさわりしちゃうオタオタぁ～！」

Pちゃん「…ドクター。　たしか、強すぎる欲望も負の感情ですよね？」

ＤＲ．マンソン「嫉妬心、虚栄心、劣等感、差別心…。　本能的な欲求不満もまあ、負の感情と言えなくはないが…」

オタＱ「πタッチパワー！！」

Ｐちゃん「…これって許されると思います？」

ＤＲ．マンソン「儂に訊くな！　とにかく　『システムが使えなければ、エージェントはできん』　だが逆は知らん！　あとは、ザキラ様に言え！」

Ｐちゃん「…要は強ければいいんですが、なんだかなぁ…」

（ちゃんちゃん）

第４０章　想いの形

マリー「間違いありませんね。　反帝国レジスタンス『カムラネルナ』の副リーダー、ベンケイです」

マリーは卒倒させた男を縛り上げると、その顔を見て言った。

メリャーナ「だとするとマリー。　サヤリちゃんはやっぱり誘拐？　マリンピアって、帝国に従ってる国だから…」

マリー「それならば、問題は分かりやすいと思いますが…」

メリャーナ「…マリーの悪い予感が当たっちゃったのかな…」

メリャーナは、マリーがカンタルダル基地で告げた、最悪のシナリオを思い出す。

マリーが基地で口にした最悪のシナリオとは、反帝国レジスタンスを、他の国が煽っているのではないかということだった。

もしその予想が正しければ、マリンピアは表向き帝国に従う裏で、反帝国レジスタンスや一部の帝国軍人を操っている事になる。

マリー「ただ、１つだけ奇妙な点が残ります。　なぜサヤリ姫、なんでしょうか？」

マリーは眉をしかめた。

メリャーナ「…どういう意味かしら？」

マリー「マリンピアが帝国に楯突くだけなら、何もサヤリ姫が国を出る必要はありません。　適当な人間を使者に送ればいいのです。　仮にサヤリ姫が赴く必要があったとしても、用件を伝えたなら帰国しますよ」

使者は手を携えるために来るのだから、同盟というか、共闘の約束が得られたなら帰る。

当たり前過ぎることだった。

古代の戦国時代ではないのだ。　連絡には、暗号通信を使えばいい。

メリャーナ「…とすると、マリンピアの国は関係なくて、サヤリちゃんがレジスタンスを支援してるの？」

マリー「どうでしょうか…？　支援と言っても、サヤリ姫とディジョン大尉に親交があり、２人が今の帝国をよく思っていないだけなのかも知れないのですよ？」

帝国が宇宙で核を使うのと前後して、多くの穏健派と呼ばれる帝国軍人が、実際に職を辞していた。

派閥対立と言えばそれまでだが、所属する軍が自分の理想と矛盾するのを悟り、全てを諦めてしまったのだ。

そんな帝国軍だったから、密かに内通を決め込む軍人がいないとは言い切れない。そんな帝国軍だったから、密かに内通を決め込む軍人がいないとは言い切れない。

事情を知る２人は、深刻に考え込んでしまう。

メリャーナ「…いいわ。　裏がどうこう悩ましい時は、かえって真

正面から行くといいものよ」

メリャーナは強くそう言った。

マリー「…いかがなされるおつもりですか？」

メリャーナ「マリー。　マリンピアに言ってやって。　サヤリ姫を見かけたんだけど、本人か？　って。　それから、サヤリちゃんには明日、直接に会いに行きましょう」

マリー「…は…」

マリーは、メリャーナのあまりの大胆さに、驚きを隠しきれていなかった…。

【2】

～アラビア半島　帝国の属国1つ　マリンピア～

？？？「シノノメ様っ！　一大事でございますっ！！」

息を切らして駆け込んで来たのは、マリンピアにいる者なら誰でも知っている、重臣のマンダラだった。　あまりに急いだせいか、完全に息が上がっていて、近くにいた兵が背中をさすっている。

シノノメ「…どうしたマンダラ？　まだ日も昇っておらぬと言うに」

この国の主『サルバ・ドゥーティー・シノノメ』は、駆け込む…と言うか、ほとんど飛び込んで来た重臣にそう言った。　どうやら起きてはいたようだが、その姿はまだベットの中にあった。

マンダラ「…それが一大事なのです！」

シノノメ「一大事なのは分かった。　その大事の内容を言わぬか」

完全に慌てふためいていて、マンダラはまともな説明ができていない。

マンダラ「…そ、それがその…。　帝国のメリャーナ殿下から私信が参りまして…」

シノノメ「…帝国からの便りごときに、何を慌てているのか？　ましてや皇女殿下とはいえ、私信ではないか。　どうせいつもの…」

時候の挨拶か何かであろう？　そう言おうとした。

…が…

シノノメ「違うのです！　メリャーナ殿下がアラビア半島を巡察中、反帝国レジスタンスと酒を酌み交わす、サヤリ姫を見かけたと！」

シノノメ「馬鹿な！　なぜふらりと王宮を抜け出したサヤリが、反帝国レジスタンスなどと一緒にいるのだ?!」

マンダラ「わかりません！　とにかく、メリャーナ殿下の私信の一節に、そう書いてあるだけなのです！」

シノノメの顔色が、急に青くなっていくのが分かった。　遂には手までが震え始める。

シノノメ「…それで、メリャーナ殿下には何と？」

マンダラ「ご安心ください。　世には似た人間が3人おるらしいなどと申して、はぐらかしておきました。　しかし、この事が殿下のみならず、帝国議会にでも知れたなら…」

当然、マリンピアは反帝国に与したとして、咎められるだろう。
下手をすれば、帝国との戦争になりかねない。

シノノメ「…やむを得ぬ。　多少の手荒な真似は致し方あるまい。
大事にならぬうちに、サヤリを国に連れ戻せ！」

マンダラ「直ちにっ！」

マリンピアから、反帝国レジスタンス討伐に協力すると称した軍が出たのは、それから僅か1時間後だった…。

【3】

メリャーナ「…私は信用してたんだけどな…。　これは一体、どういうつもりだったのかしら？」

朝も早いうちから、街に押しかけたメリャーナは、通りかがったエヴァニーらを捕まえ、こう問い詰めていた。

リナリス「…そんなの知らないわよ！　あんたたち帝国の人間なんでしょ？　だったら命を狙われたって、自業自得じゃない！」

リナリスが叫ぶ。　そうしながら、リナリスはベンケイの縄を解いてあげていた。

メリャーナ「…帝国がいいとか悪いとか、そんなことをここで議論する気はないわ。　あなたたちが、グランズとカムラネルナっていう、反帝国レジスタンスの集まりなのも、もう知ってる。　だけど、それだからって言って、別に武器持って押しかけた訳でもない、私たちまで襲うんだ？」

メリャーナは一旦言葉を区切る。

メリャーナ「たしかに私は、帝国の人間よ。　しかも皇女だわ。
でもだからこそ、私はそう名乗らずに、ただナディアと話したし、
サヤリちゃんとお話ししようとしたのよ？」

リナリス「そんなの信じられないわ！　どうせ後から帝国軍が来て、
また街を荒らしていくに決まってるんだから！！」

リナリスは、ただ感情的になって叫んでいた。

マリー「…あなたでは話になりません。　リーダーを出しなさい」

冷たく言ったマリーに、エヴァニーがマリーを睨みつけながら、１
歩前に進み出る。

マリー「私たちが討伐に来たのなら、その男を解放したりなどしま
せん。　本国に送って公開処刑にしますし、あなた方にも会いには
来ず、それこそ軍で鎮圧しますよ」

エヴァニー「……。」

マリー「ですがメリャーナ様は、帝国と反帝国の立場はともかく、知己としての感情を重くみられた」

メリャーナ「…早い話、あなたたちは帝国って国と戦争しているのか…。　それとも帝国の人間を、誰彼構わずに皆殺しにしたいのか？　って聞きに来たのよ」

メリャーナの目は、ふだんの彼女からは想像もできないくらい冷たく、しかしとても澄んでいた。

ナディア「…あんたの…　メリャーナの言いたいことはわかるよ…。　でも、あたしたちはあまりに無力なんだ…。　正々堂々ルールを決めてやりあったら、帝国になんか、絶対勝てるわけないんだよ…」

黙るエヴァニーに代わって応えたナディアの口調は、ただ悲痛だった。

シベリア「…それにな、街に先に手を出したのは帝国軍なんだ。それが全体から見れば、一部の兵士の暴走だったのは分かる。　現実に、俺らがやられそうになった時、俺たちに味方してくれた帝国

軍人だっていたしな…」

シベリアもまた、うつ向きながら話し続ける。

シベリア「…だが、殺された人や、その家族はどうすればいい？
街には俺たちがいたが、特別親しかった訳じゃない。　下手すると、
この街が帝国についても、別に構わないって思ってたかも知れない
のに…。　ただ殺されるしかなかったんだぞ？」

マリー「…だからと言ってっ！」

メリャーナ「マリー！！！」

なおも食い下がろうとするマリーを、メリャーナは厳しく止めた。

メリャーナ「…帝国軍があなたたちにしたこと、帝国の皇女として、
謝らせてもらうわ。　こんなことで済むとは思わないけれど、それ
でもこれが人としての礼儀ですから」

メリャーナが頭を下げ、マリーもそれに倣う。　周囲に重苦しい空気が流れた。

メリャーナ「…私はもう帰らせてもらうし、二度とこの街には来ないわ…。　でも、最後に1つだけ聞かせてもらっていい？　サヤリちゃんって、あなたの何なの？」

メリャーナの目がエヴァニーを見据えた。

エヴァニー「何って…」

メリャーナ「私が言えた立場じゃないのは知ってるわ。　でも彼女もまた、マリンピアの王女なのよ？　彼女を巻き込む事は、マリンピアという国を、マリンピアに住む人たちを巻き込む事。　それを、あなたとサヤリちゃんは理解しているのかしら？」

エヴァニー「そんな事、お前に言われる筋合いはないっ！！」

エヴァニーはメリャーナに掴みかかろうとし、シベリアに止められた。

メリャーナ「私は、私なりに一国の姫をしてきたつもり。　だから、言うことは言ったわ。　後は、あなたとサヤリちゃんが決めることよ…」

そこまで言ったメリャーナは、くるりと背を向け、それ以上何も告げずに去って行った…。

【4】

『ミャアァァ～～～ン』

ガルダに帰って来たメリャーナを、そんな甘えた声で迎えたのは、彼女の愛猫ワグナー。

メリャーナ「あら？　お留守番ご苦労さまだったわね、ワグナー」
喉を鳴らし盛んにすりよる姿は、彼女でなくても目を細めたくなる。

マリー「…メリャーナ様。　あれでよろしかったのですか？」

メリャーナ「今日は元気なのね、ワグナー。　暖かいからかしら？」
マリーはそうメリャーナに訊いたが、メリャーナはそれには応えなかった。

マリー「メリャーナ様！」

いたたまれなくなったのか、珍しく主人に対して強い声を出したマリー。

メリャーナ「…ユービットが陥落したわ…。　指導者のハヴィニー

は、自害したそうね…」

ようやく応えたメリャーナは、まるで関係なさそうな話を始める。

マリー「…聞き及んでおります」

マリーの声は強いまま。

メリャーナ「…ユービットで負けて仕切り直し、そんな決着にはならないわ。　決戦に負けて、しかもカリスマを失ったクアルーンは、瓦解寸前よ。　第一、帝国が追撃の手を緩めるはずがないわ」

マリー「そう思います」

メリャーナ「今までのアラビア半島は、帝国領と言っても、クアルーンに蓋をされていたようなものよ。　アラビア半島に来るには、インドのはるか南の海を迂回しなければならなかった。　だからこそ、レジスタンスは存在し得たのよ？」

メリャーナはそこまで言って、ようやくワグナーからマリーに目を向け替えた。

マリー「…まさか、マリンピアが潰されると？」

マリーが驚きの声を上げる。

メリャーナ「アラビア半島を押さえれば、オデッサのフロンティア・ガードと、インドの雄、インドラを完全に分断できるわ。　そのアラビア半島にある国が、態度が曖昧だったり、付け入る隙を見せてたらどうなると思う？」

マリー「だからと言って…」

メリャーナ「あいつは…　ザキラは、そこまでやりかねない人間よ」

メリャーナの声は厳しく、愛猫はそんな主人の変貌に首を傾げる。

マリー「…そのために、わざわざマリンピアに知らせを？」

マリーの顔色がどんどん蒼くなっていく。

メリャーナ「…今なら、今ならまだ間に合うわ。　連れ戻せば証拠は残らない。　逆にサヤリちゃんに覚悟があるなら、クアルーンの敗残兵を吸収して、一大勢力を築くこともできる…」

メリャーナが口にしたのは、マリンピアの運命の分岐点そのものだった。

マリー「…しかし、サヤリ姫にそんな腹積もりがあるとは思えません！　まだ１６歳の子供なんですよ？　そのような、野心に満ちた暴挙など…」

メリャーナ「レオンが、ロレンス兄上とザキラを暗殺しようとした時、あの子は１５だったはずよ？」

レオン。

レオンハルト第４皇子のことで、マリアンヌ、メリャーナと同じ母を持つ姉弟。

彼は、今も帝国から反逆者として追われ、行方知れずのままだった。

マリー「…レオン皇子とサヤリ姫は違います！　あの方のようなことが、サヤリ姫にできるとは到底…」

メリャーナ「…それなら、おとなしく連れ戻されればいいのよ。私たちが喋らなければ、サヤリちゃんが反帝国レジスタンスと一緒にいた事なんて、知らぬ存ぜぬで押し通せるじゃない？」

マリー「…事が…　大きすぎます…」

メリャーナ「象に蟻の気持ちは分からないわ。　分かった気になっても、それはどこか違うものよ。　国の主に、街の住民なんてできはしないのよ…」

諦めたような、悟ったような声。

マリー「…そこまでお考えになられて、にも関わらずあえて、あのような事を言われたのですか…」

マリーの肩から、力が一気に抜けたのが見てとれた。

メリャーナ「小さい頃のサヤリちゃんは、それは可愛かったわ。ふだんは気が強いのに、転んだりするとすぐ泣いちゃってね…」

メリャーナの目が、優しく遠くを見つめるような目に変わる。

メリャーナ「…でも、転んで泣いたら助けてもらえる時代は終わってしまったのよ。　転んだら、踏みつけられる前に、自分で立ち上がらなければいけないのだけれど…」

マリー「……。」

しかしその優しい目は、すぐに陰りを帯びてしまった…。

【5】

サヤリ「…エヴァニー…　…私…　私はっ…」

押しかけて来たメリャーナが帰った後、その様子を見ていたのか、サヤリは衝撃を受けたようだった。　優しい言葉をかけるエヴァニーの胸に抱かれ、ただただ泣き続ける。

リナレス「……。」

そんな重い空気を、ようやく振り払うように口を開いたらのはナディアだった。

ナディア「人の気持ちも考えない、酷いヤツだとは思ったよ…　メリャーナはさ。　だけど、言ってることは当たってる。　サヤリは嫌かも知れないけど、サヤリが王女であることって、そう簡単には辞められないんじゃないのかな？」

ナディアの声もまた重い。

シベリア「…1つだけ聞いてもいいか？　マリンピアにいる、サヤ

リ以外の王族って、誰だ？」

涙を拭いながら、サヤリは首を振る。

ナディア「…一人娘ってヤツか…」

シベリア「…なら、そう簡単に諦めてはくれないだろうな…」

シベリアは軽く首を振る。

エヴァニー「どういうことだ？」

ナディア「誰でも我が子は可愛いし、いつまでも手元に置いておきたいものなのさ。　ましてやたった1人の女の子ならね…」

シベリア「…しかも、王国の後継ぎがいないとなれば、その国は続かない。　もちろん共和国みたいに、選挙で大統領を決めてる国もある。　だがそれは、昨日決めて今日できることじゃない。　なら、サヤリを連れ戻した方が、手っ取り早いってことになる」

シベリアの話を聞いたサヤリは、膝が震え始める。　もはや、怯え

た小鹿か何かのようだ。

リナレス「…だったら国に帰ればいいじゃない！　国に帰って、MSや食糧をあたしたちに送ってくれれば。　それであたしたちは強くなれるし、サヤリだって、立派に世の中を変えたことになるわ！」

リナレスの言葉には、わずかに嫉妬が入り交じって、正論が無謀に傾いていた。

サヤリ「…それができれば…。　それができれば苦労はしないっ！　だが、父上は…　父上はっ！！」

サヤリは強く言い放ったが、その言葉は哀しい恨み事以外の何物でもなかった…。

【6】

マンダラ「…帝国から、越境討伐の許可が出ました。　部隊はすで

に、国境を越えてカンタルダル周辺へ向かっております」

マンダラの声は沈んでいた。

彼は、マリンピア随一の重臣であると同時に、長くサヤリの側役をしていた。　穿った見方をすれば、そうして王と親しくなることで出世した人物なのだ。

シノノメ「…メリャーナ殿下以外に、サヤリの事を気取られた様子は？」

マンダラ「今のところは。　折りが良いのか悪いのか、ユービットで反帝国の一翼、クアルーンが大敗を喫しました。　恩賞を目当てに、追撃を志願する貴族や自治国が殺到しているようで、大して気にもされなかったと感じました」

シノノメ「…そうか…」

言ったシノノメは、玉座に力なくもたれかかる。

シノノメ「儂は、娘の育て方を間違えたのであろうか？　歳を取ってからようやくできた子ゆえ、それはそれはサヤリは可愛かった。目の辺りなど、亡き后にそっくりであるしな…」

シノノメは、まるでサヤリがそこにいるかのように手を伸ばす。そしてその顔は、国王でもなんでもない、ただの年老いた父親のそれだった。

マンダラ「……。」

シノノメ「…だが、いつの頃からか、サヤリは儂に反発するようになった。　儂が厳しく躾過ぎたのに、嫌気が差したのかも知れん。　わかってはいた。　しかし、儂の後を継ぐからには、世に出しても何ら恥じることのない、立派な女王になって貰いたかった。　ただそれだけであった…」

マンダラ「…それを仰せになるならば、幼少のみぎりよりお仕えした、私の責任でございます」

マンダラは、絞り出すように言葉を発していた。

シノノメ「此度のこととて…」

マンダラ「承知しております。　サヤリ姫が王宮を出られた時、厳しく追っ手をかけられなかった。　そればかりか、国境の検問に、黙って見過ごせとまで仰せになられました」

シノノメ「…しかし、結局こうして力づくで連れ戻す羽目になった。　我が身の不明よ。　こんな事になるならば、帝国が勧めたように、早々と養子を迎え、楽隠居をすべきであったわ…。　５０を過ぎて子など持つと、ろくなことはない…

うっ…？！」

そこまで吐くように言ったシノノメが、急に胸を押さえる。

マンダラ「シノノメ様！　いま侍医をお呼びいたします！」

シノノメ「…大事ない…。　年甲斐もなく、興奮し過ぎただけよ…。　少し休めば、大事ない…」

シノノメの言葉には力がなく、息だけが荒々しかった…。

【7】

エヴァニー「泣くなサヤリ…」

優しくサヤリに囁くエヴァニー。

話が終わった後も、怯えたように泣き続けるサヤリを、エヴァニーは自分の部屋のベットに座らせ、震える身体を抱き寄せていた。
ふだんは強気のサヤリが怯える姿をみると、守ってやりたいと思う気持ちが強くなる。

サヤリ「…怖い…。　父上はきっと私を連れ戻しに…」

エヴァニー「俺が守ってやるさ。　それで駄目なら、俺と一緒に逃げよう？　広い世界で、たった2人の人間が、そう簡単に見つかるはずはないさ…」

言ったエヴァニーは、サヤリの顔を真っ直ぐに見つめた。

黙って目を閉じるサヤリ。

エヴァニーも目を閉じ、２人は唇を重ねた。

シベリア「エヴァニーっ！！」

そんな甘い空気を、時代が容赦なく引き裂く。

シベリア「…すまん。　しかし、そんなことを言っているヒマはない！　ユービットで、クアルーンが帝国に惨敗した。　指導者のハヴィニー師は、自身の最期を悟り、自害なされたそうだ…」

シベリアの顔が蒼い。　エヴァニーの顔色もまた、変わり始める。

シベリア「…帝国はすでに追撃を始めてる。　近くでも、帝国のＭ

Sを見たという情報があった」

エヴァニー「しかし、ユービットは遥か遠くだろう?!」

エヴァニーは、驚いたように声を上げる。

シベリア「クアルーンは指導者を失って、統制が取れていない。それを見た帝国や、帝国に味方する勢力が、反帝国の残党を根こそぎ狩っているんだ！　見てくれっ！！」

シベリアが差し出した紙に書いてあったのは、エヴァニーとシベリア、それからベンケイの写真だった。　合成なのか、細かい所々が違ってはいるが、総じて見ればよく似ている。

そしてその脇には　『賞金5万ギラ』　の文字が。

エヴァニー「そんな馬鹿なっ！！」

シベリア「俺だって信じたくはないさ！　でもこうして手配が回っている以上、街でのんびりとはしていられない。　逃げるにしろ、

戦うにしろ、リーダーのエヴァニーがいなくちゃ話にならない。
すぐに来てくれ！」

エヴァニー「分かった」

エヴァニーが立ち上がる。

その時エヴァニーは、サヤリを振り替えって迷いの表情を見せたが、
すぐにまた苦悶の表情に変わると、そのまま部屋を駆け出して行った…。

第４１章　戦いの残り火（前書き）

（エージェント編　続き）

オタＱ「もっともっと、エージェントの謎を解き明かしていくオタよぉ～」

Ｐちゃん「…存在そのものが、エージェントの七不思議の１つである、あなたが言いますか？」

オタＱ「オタ？」

Ｐちゃん「…まあ、いいです。　それで

『ディアボロシステムを使いこなす、ザキラ様の忠実な僕（しもべ）がエージェント』

というところまでは、いきましたね？」

オタQ「そうだったオタ？」

Pちゃん「…いきましたね？」

オタQ「いった気がするオタ…」

Pちゃん「それで、そのエージェントは何人いるのかというのが、今回のお話です」

オタQ「知ってるオタ～

『エージェントはアルファベットの数だけいる』

から、全部で２０人オタ」

Pちゃん「…オタQ…　あなたって人は…」

DR．マンソン〔あっとるぞ？〕

オタQ「オ、オタ？　何か声が聞こえたオタ」

DR．マンソン〔アホか！　脳量子波じゃ。　エージェントはみな脳量子波が使えるのを忘れたか！〕

Pちゃん〔そうでしたね。　それで、ドクター。　エージェントって20人しかいないんですか？〕

DR．マンソン〔たしかに、お主が言ったように、アルファベットの数だけを目指してはみたんじゃが、そううまくいかんでの。　調整の途中で死んでしもうたりする者もおったし…〕

Pちゃん〔そう言えば、かなり前の本編で、ドクターも1人のエージェントに逃げられてましたよね？〕

オタQ〔それでザキラ様に怒られてたオタぁ～〕

DR．マンソン〔ええぃ、うるさいわっ！　とにかく、現在いるエージェントは、ザキラ様を含めて20人。　しかも、調整に手間取っている者もおるから、まだ物語に出てこない者も多いんじゃ〕

Pちゃん〔今いる人物の調整に手間取るぐらいですから、死んでも簡単には補充できなさそうですね？〕

DR．マンソン〔最後は本人の適性じゃがの？〕

オタQ〔それを引っくるめて　『大人の都合』　って言うオタ〕

Pちゃん「…オタQっ！　今日は珍しくまともに働いていると思ったら、最後の最後で言ってはいけないことを！　しない予定でしたが、やっぱりお仕置きですっ！！」

オタQ「なんでそうなるオタ？　逃げるオタ～」

Pちゃん「待ちなさいっ！」

DR．マンソン〔…とにかく…。　強いエージェントは、物語の見せ場そのものゆえ、要チェックじゃぞ？　もしかしたら、思わぬ事をエージェントがしでかしたり、思わぬ人物がエージェントに抜擢されたりするかものぉ…〕

（つづく？）

第４１章　戦いの残り火

『よくも私の彼を殺してっ！』

『なによ偉そうにっ！　神の使いって、何様のつもりよっ！！』

罵声が投げ掛けられ、石が飛ぶ。

ここは、帝都パンドラールの広場。　その一角では、捕縛され帝都に連れてこられた、クアルーンなどに属していた反帝国主義者達が、柱に縛り付けられ、衆目に晒されていた。

いわゆる公開処刑というやつで、見守る帝国兵は、市民が石を投げるのを止めない。　むしろ、一緒になって石を投げたそうにしていたり、薄ら笑っている者がほとんどだ。

というのも、帝国兵は程度こそさまざまだが、戦友が反帝国の者に傷つけられ、恨みを抱いている者が多い。

市民にしても、家族に帝国軍に関わる人間がいれば同様であるし、そうでなくても、テロなどに気を尖らせている者が多いのだった。

イエスマン「いやぁ～　いい光景ですねぇ～。　こう憎しみと蔑みが入り乱れてるのって、何回見ても飽きませんね」

イエスマンは、残虐なはずの光景に、違った意味で目を細めていた。

ザキラ「…まあ、お前ほどではないが、な？」

応じたザキラも、まんざらではないようだ。

イエスマン「ところで、ボス。　まずはクアルーン壊滅、おめでとうございま～す」

ザキラ〔ふむ。　さすがは万能タイプのエージェントP。　MSで戦うだけでなく、軍の指揮までこなすとは、期待通りの働きだ〕

Pちゃん〔ありがとうございます〕

DR．マンソン〔調整した儂も、鼻が高いて〕

ザキラの脳量子波に、その場にいないPちゃんとDR．マンソンが即座に応じる。

イエスマン「それにしても人間ってヤツは、なんでこうも簡単に憎しみを前に出せますかねぇ～？　一歩間違えば、自分が晒されていたかも知れないってのに」

ザキラ「無惨な事実に直面する1秒前まで、その事実を信じないのが人間という生き物だ。　いや、晒されてなお、今の光景が夢と思おうとしている者もいるのではないか？」

まるで自身が人間でないかのように、見下した言葉をザキラは吐く。

イエスマン「こんなセレモニー、いつまで続ける気です？」

ニヤリと笑いながら、イエスマンが言う。　止めろという意味で言っていないのは、表情からして明らかだった。

ザキラ「発案したお前が言うか？　まあ、世界から争いが絶えてし

まっては、私の利用価値がなくなってしまうからな？　それには、帝国が強大を誇りつつも、世界は乱れていた方が都合がよい。　人の憎しみはそれを煽りこそすれ、邪魔はしまい」

イエスマン「またまた滅多なことを…」

『言うものではない』とは、きっと繋がらないのだろう。　イエスマンの顔は、笑ったままだからだ。

イエスマン「しかし、争いを続けると言うならば、勝ち過ぎでは？」

イエスマンの顔から、不意に笑みが消える。

ザキラ「…この程度の勝ちでは、大勢に影響はない。　しかし、予想外の勝ちではあった。　調子に乗った敵を軽く叩き、押し戻す。　そのはずであった…」

イエスマン「東欧の僻地にいた、シュバルツという中佐の軍が、敵中深く食い込んだようですね？」

ザキラ〔内応か？〕

Pちゃん〔潜入工作、埋伏の毒と聞いております〕

再び脳量子波で、必要な情報を得るザキラ。

イエスマン「帝国にも、まだ有能な将が埋もれていたんですねぇ…」

ザキラ〔私に靡かぬか？〕

Pちゃん〔折りを見て、パンドラールに行かせますか？〕

ザキラ〔いや、お前の直属にと話を向けよ。　政治が絡むと、逃げ腰になる軍人は意外に多い〕

Pちゃん〔かしこまりました〕

脳量子波で命じる。

イエスマン「…お気に入りで？」

イエスマンは意外そうな顔をする。

ザキラ「いや？　どう扱うにしても、近くに置いた方が手間が省ける。　ただ、それだけのことだ」

イエスマン「例のグラーフェンの小僧っ子と同じですか…」

ザキラ「まあ、そうかな？　小僧の方よりは、手を焼くかも知れんが…」

イエスマン「かもですね…。　ディアボロに気に入られてますからね、あの小僧は…」

2人の低い笑いは、防弾防音のガラスに隔てられ、衛兵にすら聞こえることはなかった…。

【2】

シュバルツ「見事な策だったな」

シュバルツは、そう言ってサコンを称賛した。　と言っても、軍の中では従兵ジャックなのだが。

ジャック「ありがとうごぜぇやすだ」

演技でしているはずの奇妙な訛りが、意外に似合ってるように感じるから不思議だ。

シュバルツ「いま、全軍が追撃に熱中している。　ユービットに参戦した部隊はもちろんだが、元来のクアルーンの勢力圏までも、指導者を失い、混迷していると聞く。　まさに、読み通りの大勝利となったな」

シュバルツも、少しだけ興奮しているようにも見える。　そう言えば、ジャックことサコンは、策を呈示したのみならず、開戦前にクアルーンの敗北を予言していた。

ジャック「…勝って兜の緒を絞めろ、ったぁ言うきに。　油断する

と、思わねぇ所で足さすくわれるっぺさ」

だが、ジャックは慎重な構えを崩さない。

シュバルツ「そう言うから、私は追撃に参加せず、こうしてサンザメヤに戻っているのではないか。　サンザメヤは、これから南東に追撃するための補給拠点になる。　追撃を止めようと思えば、追撃する軍を叩くより、その補給線を脅かす方が早いからな？」

サコンを使いこなしただけあって、相変わらずシュバルツは卓見で、しかも部下の言葉に素直に耳を傾ける器量を持っていた。

ジャック「…しかし、それにしちゃー部隊が少ないような気がするべなよ？」

シュバルツ「…仕方あるまい。　直属の部隊以外は、みな追撃に差し出せとの命だしな。　まあ、ディジョン連隊と、エルフルア殿もおるゆえ、数は少なくても精鋭ではあろう」

2人が苦笑いを浮かべる。

その理由は、この精鋭と呼ばれた留守部隊の内訳にあった。

エルフルア隊は、ラピスラズリとの激戦を経てほぼ壊滅しており、ディジョン連隊はその救援、ヤタガラス隊はユービットへの工作で、疲労が心配されたのだ。

損耗した部隊が休息ついでに拠点を守り、鋭気に溢れた部隊が追撃をする。　これが、ガント大佐の作戦らしかった。

ジャック「まあ、効率的ちゃー効率的なんだべが…」

わずかにジャックは眉をしかめた。

シュバルツ「それよりも、サークレットに共に行かぬか？　実は、総司令官直々に出頭要請が来ていてな？」

不意にシュバルツは話題を変えた。

ジャック「追撃の手順なんら、決まってるだが？」

怪訝そうなジャック。

シュバルツ「違うらしい。　どうも、先の策略の論功行賞だと、もっぱらの噂だ。　そこで、お前を伴おうと思ってな。　前にも言ったが、功を認められれば、ジャックなどをせずともよくなる。　私の感触では、尉官くらいまでなら、推せる気がするのだがな？」

ジャック「追撃し始めた矢先に、もう褒美だっぺ？」

シュバルツ「一見すると変なようだが、実は昔からの帝国のやり方でな。　戦いが終結してしまう前に、わざと戦で戦功のあった者を賞するのだ。　そうすることで、以降の戦いで功を上げたらこうもなれるぞ、と餌をぶら下げているのだ」

今回の場合は、敵中深く忍び込み、さらに大将を自害に追い込んだとされているヤタガラス隊は、まさに一番手柄であった。

ここで、ヤタガラスに多くの褒賞が与えられれば、追撃するに当たって、目の色が変わる者もいるだろう。

というより…。

ジャック「ガント大佐が、率先して目の色を変えてるっぺなよ？」

シュバルツ「…私の直属の上官ということで、いくらかの褒賞にはありつけるはずなのだがな？　意外にも、強欲な御仁なのかも知れん」

シュバルツはそう言って笑った。

その表情からして、本気は半分もないのかも知れない。　ガント大佐はどちらかと言えば、褒賞よりは軍人、貴族としての名誉に目がないタイプだからだ。

シュバルツ「…それで話は戻るが、サークレットに行くか？　呼ばれているのは私だから、行きたくないと言うなら、それでも構わないがな？　本人を伴った方が、推薦しやすいというだけなのだ」

シュバルツは、ジャックの答えを待っているようだった…。

【3】

白いガルダが飛んで行く。　その周囲には、多数のドップが護衛についている。

メリャーナが目指していたのは、サンザメヤだった。　ユービットの戦いが決着がついたとは言え、それでも敵襲の危険がある地域だ。

ふだんは、皇女らしからぬ扱いを受けることの多いメリャーナであるが、さすがに前日まで激戦を交えていた地域に行くとあっては、護衛を回してもらえたようだ。

マリー「表向きの理由は、慰問にしておきました。　勝利の直後ですし、筋は通っているでしょう」

メリャーナ「そうね」

サヤリとエヴァニーにかなり厳しい言葉を吐いたメリャーナだったが、その雰囲気は消え失せ、いつもの彼女に戻っていた。

マリー「ですが1つだけ、よろしいですか？」

メリャーナ「最近のマリーは、1つが多いのね？」

マリー「…も、申し訳ありません…」

慌てるマリーに、メリャーナが笑いかける。　当たり前だが、そんな言葉遣い1つを咎めるメリャーナではない。

それをマリーも分かってはいるのだろうが、つい主人にはそうしてしまう。

メリャーナ「…で、その1つだけど、マリーが考えそうな事は…」

メリャーナは、そう言って考える仕草をする。

メリャーナ「…そうね…。

1、前線だから気をつけろ。

2、サヤリちゃんは本当に大丈夫なのか？

3、ディジョン大尉が裏切ってるとは思えない。

4、クアルーンは今後どうなるんでしょうか？

ってあたりじゃない？」

言ったメリャーナがマリーを見ると、感心した顔をしていた。　いや、感心というより、疑問の方が似合うかも知れない。

メリャーナ「何を驚いているのかしら？　マリーとは、かれこれ１５年近く一緒にいるじゃない。　分からない方がむしろ変よ」

マリー「…は、はい…」

皇族に侍従武官が付くのは、１５歳からになる。

ただし、マリーは父親がメリャーナの側役…　つまり教育係をしていたために、それ以前からメリャーナを知っていた。　だから、侍従歴は９年でも、会ってからという意味なら、１５年を越えているはずだった。

メリャーナ「で、何番だったのかしら…？」

メリャーナは、マリーの目を覗き込んだ…。

【4】

???「おっさん早くしろよぉ～」

車が、速度を落とさずにガウの後部スロープを駆け上がる。

インドラ兵「緊急時ですから、アプローチコール、その他は省略はします！　ガウ、離陸滑走開始っ！！」

すぐに加速Gがかかり、マンネは車のシートに押し付けられる。
人間が搭乗席に着かないままの発進など、本来は危険な行為だろうが、敵弾が次々に着弾する中では、そんなセオリーなで守っている隙などない。

???「お帰り大尉。　オバサンは残念だったね～」

特に感情のこもっていない声で、マンネを出迎えたのは、またもや同じような顔の少女だった。　髪型だけ違い、顔が酷似しているということは、彼女もまたラピスラズリの一員なのだろう。

マンネ「ノンか。　他の奴らはどうした？」

マンネは、ガウが急上昇を終えるのを待って、搭乗席へと上がる。
　ノンと呼ばれた少女もそれに続いた。

ノン「あたしと、アイン、フィフスとエリスは乗ってるよ？　じゃんけんで負けたトゥーエとスリスは、ギリギリまで護衛してたからドダイ」

ノンが窓の外を指さす。

つまり、ガウが離陸を終えるまで滑走路を守るために戦い、ドダイでなんとか追いかけて来たという訳なのだろう。

ノン「…で、オバサン死んじゃったし、どーすんの？」

また、あまり感情を感じさせない声。

マンネ「…お前らはいいな。　悲しみとか、絶望なんて感情がない」

マンネが言う。　それは、ラピスラズリが強化の過程で、喜怒哀楽の怒と哀を失ったことを言っているようだった。

ノン「…失礼しちゃうな～　ピンと来ないだけで、知識としては持ってるよ。　負けて人がたくさん死んじゃった時は、泣けばいいんだよね？」

そんな知識を語られても、仕方なかった。　ただ、そんなラピスラズリ達の言葉が、下手な同情よりはマシに感じてしまった自分を、マンネは自分で笑った。

マンネ「…心配しなくても、戦わせてやる。　派手に負けたからな？　戦わないと帰れそうもない」

どこで聞いていたのか、ノン以外のラピスラズリ達の喜ぶ声がした…。

第４２章　戦いの気運（前書き）

（続いたみたい→笑）

Ｐちゃん「さて、どっかのおバカさんはきっと忘れてると思いますが

★エージェントとは何か？

★ディアボロ・システムについて

★エージェントの人数

についてお送りしてきました。　なので今回は、エージェントの乗っているＭＳについて、お伝えしようと思いま～す」

オタＱ「むぐぅ～。　むぐヲダ」

Ｐちゃん「さっそくですが

『エージェントになった人』

『なれそうかな？』

って期待されてる人物には、ザキラ様から、特別にＭＳが与えられます」

オタＱ「むっぐっぐ、むぎょむタ～」

Ｐちゃん「それらは、エージェントを威容を示すため、漆黒、真っ黒に塗られていまして…

【Ｂ（ブラック）＋　元々のＭＳの名前（の一部）】

で呼ばれます。　私の機体がＢＡＭ（ブラックエアマスター）と呼ばれるのは

『エージェント専用仕様のガンダムエアマスター』

って意味なんですね」

オタＱ「むぐに～。　むぐむぐむぐたぁ～」

Pちゃん「もちろん、この黒いMSたちには、前に紹介した、ディアボロシステムが積まれていますから、原型機よりも強くなっていますよ？」

オタQ「む～～～んむたぁ～～～」

Pちゃん「ですから、エージェントはとてつもなく強いんです。おわかりいただけたでしょうか？」

オタQ「むオタぁぁぁぁ～！　ぷはぁ～　口にガムテープ張るなんて、酷いオタよ～」

Pちゃん「…前回、あなたが余計なことをしゃべった罰です！　まあ、でもお陰様で、今回はスムーズに解説が終わりましたから、よかったです。

さっ、帰りましょうか」

オタQ「…か、帰っちゃうオタ？　ボクの出番はないオタ？？？」

Pちゃん「ありません（断言）」

オタQ「そんなのないオタよぉ～～」

（無事終了？）

第４２章　戦いの気運

霧雨「さて、マヒロは帰ったね？」

マリアベル「帰ってほしかったんですか？」

マリアベルが訊いてくる。　訊いてはくるけど、答えは知っているように見える。

霧雨「…どうだろうね？　いればいたなり、いなければいないなりの動きをするまでさ」

マリアベル「それで、どこを攻められますか？」

霧雨（…やっぱり知っていて、言っているか）

そう思って少し笑ったら、怪訝な顔をされてしまった。　さすがに出撃するっていうのに、笑うのは不謹慎かな？

霧雨「…マヒロはああ言ったけど、霧雨は違うよ。　そんなに戦えと言うなら、戦ってやろうじゃないか」

僕が言ったのは、本国が戦う意志のある者にしか、色好い顔をしない事だった。　それでマヒロはしょげてたけど、それは艦隊を1つ、数にして10隻…　いや、前の戦いで1隻沈んだから9隻か…　しか持っていないマヒロだから。

霧雨家には、質を問わないという条件はつくけれど、50隻以上の艦を動員できるだけの力が、既にある。

マリアベル「いい口実ができましたね」

こう見えて、マリアベルは意外と好戦的なんだよな。

霧雨「…じゃあどこへ行くべきか、マリアベルの判断を聞きたいな？」

あえてそう言ってみた。　選択肢は限られていたけれど。

マリアベル「サフランは嫌いですか？」

霧雨「サイド5かい？　フェッニックス・ナイツの目撃情報、ガンダムを捕獲しようとした艦隊の敗北。　おもしろいね。　レンカか

らも比較的近い」

マリアベル「問題は、侯爵を繰り出しての総力戦にするか、霧雨様単独の討伐戦になされるかです」

マリアベルの敬語は少しおかしい。　まぎれもなく総大将の叔父を、『侯爵』と敬称こそつけているけれど、『繰り出す』なんて、まるで物扱いだ。

まあ結局のところ、マリアベルは『僕に仕えて』くれてるんだよな。

霧雨「…嫌がるかな？」

マリアベル「断らせないだけの理由は、考えてあります」

霧雨「なら、適当に頼むよ」

僕はそう言って、僕だけの忠臣にすべてを任せた…。

【2】

レアルタ「…行っちまったな…」

ヴァイス「そうだな…」

ずっと2人で行動してきた。

それまでも世話になった人はいるし、よくしてくれた勢力もいる。

反帝国だから、腕が立つから、それ以外の理由で面倒をみてくれた人間は、実は結構な数になる。

けれど…。

レアルタ「突然すぎんだよ…」

微かに心がささくれ立つ。

ヴァイス「…だけどな…。　俺は1つ思ってることがあるんだよ…」

レアルタ「ヴァイスさんもか…？」

しばしの沈黙。

ヴァイス「あいつ絶対、こんな別れ方するつもりじゃなかったぜ？」

レアルタ「やっぱりそうっすよね？　1週間ぐらいして　『ただいま～』　とか言って、帰って来るつもりだったって、絶対」

顔を見合わせ、呆れたように笑い合った。

ヴァイス「しかし、マジにどうすんだよ？　お前が地球に行きたいってんなら、リックドムの脚くらい買ってやるぜ？」

いきなりは無理でも、時間さえあれば、ゲットを追って地球へ行く方法は、少なくなかった。

帝国狩りのフェッニックス・ナイツとして何かやれば、リックドムの脚どころか、宙地両用のＭＳぐらい、何機でも買えると思えた。

上手くやれば、母艦すら買えるかも知れない。

そこまでしなくても、密航したり、運び屋に頼るという手もある。

レアルタ「だけど愛着あんだよな、あいつにはよ」

？？？「愛着は当然ですが、やはりエースは優れたＭＳに乗るべきです」

ヴァイス「つってもなぁ…。　つぎはぎだが、俺らのＭＳ、けっこうな性能だぜ？」

？？？「それでも、世代の差はいかんともし難いでしょう。　最近の帝国は、５年前ほど荒れてはおりませんよ？」

ヴァイス「…それは感じてたが…」

…何かがおかしい。

レアルタ「…って、お前誰だよっ！　いつの間に、どっから来たっ！？」

？？？「私は依頼屋。　いるのは1分ほど前から。　入って来たのは、もちろん入口から堂々と、です」

事もなげに言う男は、何故か存在感がほとんどなかった。

レアルタ「じ、地雷屋だぁ～？！」

依頼屋「…それではただの危ない人か、西暦の某ヒーローアニメですよ」

博識なのか、生真面目なのか、しっかり間違いにツッコミが入る。

ヴァイス「というか、依頼屋なんて、今時珍しい家業してんな？
１０年前とかなら、聞いたことはあるが…」

レアルタ「ちょ、ちょい待った、ヴァイスさん。　依頼屋さんって何屋さん？？？」

どうやら、レアルタは依頼屋を知らないらしい。

ヴァイス「…依頼屋って言うのはだな、身分や素性を明かせない依頼主に代わって、仕事を俺らに持ち込む、仲介業みたいなもんさ」

依頼屋「もっと詳しく説明しますと、例えば帝国貴族が、同じ帝国関係者を恨んでるとします。　そのまま殺したら、ただの殺人です」

ヴァイス＆レアルタ「ふむふむ」

依頼屋「ですからそんな場合、決まった場所…　例えば花瓶の下に、とかにでも殺したい相手の名前を書いた紙を挟んでおくとかするんです。　後は私どもが名前を見て、殺し屋の手配から、報酬の支払いまで一切を行います。　つまり、殺したい人間と、殺された人間の接点は限りなく0な訳で、はっきり言えば警察泣かせですよ」

ヴァイス「…という事で、仕事依頼か？　俺たちは帝国以外には手を出さない。　殺す殺さないは、こっちに任せる。　それが最低条件だ」

ヴァイスの表情は、久し振りに冷たさを帯びていた。　ゲットには見せたことのない顔だ。

レアルタ「…受けるつもりか？　ヴァイスさん」

ヴァイス「もちろん聞いてから決める。　地球へ行くにしろ、行かないにしろ、俺たちが帝国狩りなのは変わらないだろ？　はぱっと仕事して稼ぐつもりなら、こういう訳アリ仕事は、報酬高いからな？」

依頼屋「…それは、遠回しに報酬を上げろと言われていますか？　まあいいです。　襲う対象は、帝国軍霧雨家の艦隊。　生死はお任せしますが、少なくとも旗艦ができそうな大型艦3隻以上の撃沈。　MSに関しては、撃破数分を報酬に上乗せはしますが、別に撃破

しなくても構いません」

レアルタ「…大型艦３隻とは、大きく出やがったな…」

レアルタは、目を丸くしている。

ヴァイス「…報酬は？」

ヴァイスは既に仕事人の顔だ。

依頼屋「事前に新型ＭＳ２機と、チューニング費用。　成功報酬で１０００万ギラです」

ヴァイス＆レアルタ「マジかよ？！」

２人の驚きは無理もない。　ＭＳ１機は、どんな旧式でも１０万ギラはする。　しかも、成功したら１０００万の上乗せである。

１０００万ギラは、だいたい…　さっき話に出た西暦で例えるなら、１０億円くらいの価値はある

ヴァイス「確認する。　殺しじゃなくって、沈めるだけだな？」

依頼屋「依頼内容に間違いはありません」

レアルタさん「沈めたらたくさん死ぬのに、殺しじゃないって…」

レアルタの疑問はもっともだが…。

ヴァイス「レアルタ？　しばらく狩ってないから、フェッニックスナイツの誇りを忘れたか？　俺らは戦う意思のあるヤツしか狩らない。　戦艦乗ってバンバン射ってくるのは、充分意思アリだろうが。殺しの依頼だと、沈めた後に脱出艇まで殺れって意味になる。　下手をすれば、ノーマルスーツ狩りだぞ？」

レアルタ「うっわ～　後味悪っ！」

レアルタが身震いする。

依頼屋「…受けて頂けると思ってよろしいですか？　他にも回らなければならない所があるので、返事はすぐ頂けると有り難いですね」

そんな2人の会話に感触を得たのか、依頼屋は話を進めようとする。

ヴァイス「事前のＭＳに、選択肢はあるのか？」

依頼屋「後で専属のジャンク屋をやります。　気に入られなければ、そこまでなら断って頂いて結構です。　受け取った後に断るのは、一切認めません。　当たり前ですが」

ヴァイスはそれを全部聞いてから、わかったという仕草をする。

それを見て、依頼屋の姿は消えた。　来た時同様いつの間にか。

ヴァイス「…予定外の小学校をしてたが、所詮俺たちは帝国狩りだ。

…それに、これだけの金が手に入れば、何をするにしても役に立つだろうな？」

その言葉には、ゲットを追いかけたり、ゲットを陰ながら支援する…
そういう意味も、きっと含まれているのだろう。　何はともあれ、
依頼屋の言ったジャンク屋が来たのは、それから僅か1時間後のこ
とだった…。

【3】

行きとはうって変わった順調さで、マーガレットに帰って来ていた
あたしは、さっそくレイ大尉とマーガレットの工場…

ええ、きっと工場に含まれるはず…

の場所を視察していた。

レイ「…帝国の産業集中政策って、ここまで徹底していたんですね
…」

苦笑いするあたしとミク、呆然とするレイ大尉。

それもそのはずで、この時点でマーガレットは、ＭＳを全工程通して作った経験は、ゼロ。　そう１機もなし。

今までは、帝国本国で作ったＭＳを修理するだけで精一杯。　修理用のパーツすら造る技術がなくて、送ってもらうか、買っていたぐらいだった。

マヒロ「…農業用の機械なら、たくさん作ってるんですけれど…」

なんの弁解にもならないことを言ってみた。　というか、言わないと場が保たない気がした。

レイ「いえ、工業設備があるなら、まだ工夫の余地はあります。作業用ＭＳを作った経験のある方と、戦闘用のＭＳを修理した経験のある方を集めていただけますか？　もちろん、責任者の方だけで結構です」

大尉の言う通りにする。

ただ、これだって１ヶ所に集まる程度なのだ。　同じことをレンカでやったら、それこそ何万人集まるかわかったものじゃない。

ミク「…しばらく任せておこうよ」

ミクは、そう言ってあたしを誘った。　時間がかかるのを、ミクなりに察して気を遣ったようだ。

最近は、本当にシリアスモードが多いミクだった。

マヒロ「…そうね」

あたしは、ミクの言葉に従うことにした。　ＭＳについてなら、あたしより遥かに詳しいミクが言うのだ。　あたしがいて役に立つ場面なはずがない。

レイ「…この工程は、こうすれば今までの経験を活かせますよ」

レイ「…そこはですね？　こうしてみたらどうでしょう？」

レイ「…そこはこうしましょう。　本来のやり方とは違いますが、その方がみなさんがやりやすいのでは？」

こうして始まったレイ大尉の熱心な指導は、連日夜遅くまで続いていた…。

第４３章　さようなら　リナレス（前書き）

（まだ、続く…？？？）

オタＱ「こ、今回は、ボクも出番を作るオタ！　エージェントはオタねぇ…」

『萌えあがれ～♪　萌えあがれ～♪』

オタＱ「…むにゅ？　電話みたいオタよ？　もしもし？」

Ｐちゃん「あ、オタＱですか？　エージェントのコーナー、前回で全部終了ですよ？　と言うか、そろそろ睡眠薬が切れる頃なので、スタジオにいるなら気をつけてくださいね？　じゃ」

オタＱ「…お、オタ？？？」

ミク「よくも眠らせてくれたなキック～」

オタＱ「い、痛いオタぁ～！」

ミク「アイスに睡眠薬盛るなんて、酷いことするなぁ～！　深く寝すぎて、ガンちゃんが成仏しちゃったじゃない！」

オタＱ「そんなの知らないオタぁ～！　死んだ人間出すのが悪いオタぁ～～」

ミク「問答無用っ！！」

オタＱ「なんで、ボクだけこんな目に遭うオタぁ～」

オタQ「そこ、キャラとか言わないオタよぉ～」

オタQ「ネタキャラがいないと、盛り上がらないオタオタぁ～～～～」

？？？「ふっ、やってるな？」

？？？「今のうちですね？」

（その隙に、コーナーに忍び寄る、怪しい影が２つ…？？？）

第４３章　さようなら　リナレス

街の外れの外れにある、とある建物。

エヴァニーを中心に、５、６０名ほど。　それが、今グランズとカムラネルナにいる人間の全部だった。

シベリア「…状況は、いま説明した通りだ。　帝国は勝った勢いに任せて、クアルーンと関係ないレジスタンスまで狩る気だ。　奴らは、帝国に反する勢力を根絶やしにするつもりらしい」

シベリアの言った通りだった。　クアルーン相手に大勝利を上げた帝国軍は…

…いやそれだけでなく、その勝利を見た帝国ゆかりの諸勢力までもが、急に反帝国レジスタンスを追いかけ始めていた。

クアルーンは、ユービット戦前には、イラクとアラビア半島の北を根拠地としながら、遥か東欧辺りにまで勢力を拡げていた。

それらの広大な土地は現在、指導者を失って大混乱しており…　言わば据え膳だと、彼らの目には映ったのだろう。

欲望と、他人に遅れるなという気運。　さらに、今までレジスタンスに抱いていた負の感情が混じり合い、各地で血が流れていた。

エヴァニー「そこでだ。　俺たちは、街を出ることにした」

『街を守るんじゃないのかよ?』　そんな声がどこかで囁かれた。

エヴァニー「さっきシベリアが言ったように、帝国の目当ては、反帝国の人間たちだ。　俺たちが下手に街にいれば、街が戦場になってしまう」

エヴァニーも辛そうな表情をしていた。　エヴァニーとて、苦渋の決断なのだろう。

グランズ仲間「わかった。　じゃあ、どこでた…」

『戦うんだ?』　と言いかけた矢先、またエヴァニーが口を開いた。

エヴァニー「お前はたしか、まだグランズに入って日が浅かったよな？」

グランズ仲間「…お、おう…？」

言葉の意味が分からず、その仲間は戸惑っている。

エヴァニー「勝手を言って悪いが、グランズを抜けてくれ」

グランズ仲間「はぁ？！　なんだそりゃ？」

仲間の声を皮切りに、辺りが騒然とし出した。

エヴァニー「こいつだけじゃない。　まだ仲間に加わったばかり者たちは、すぐに抜けてほしい」

ざわめきがさらに広がる。

ナディア「…これを見てくれ。　帝国の奴らは、どっから手に入れたかはわからないけど、あたしらの手配書を回してる。　だけど、まだ加わって日が浅いヤツは、顔が割れてない。　今抜ければ、追われなくて済む。　だから…」

グランズ仲間「何言ってんだよ！　まだ何にもしてねぇけど、俺たちは仲間なんだろ？　仲間を…」

エヴァニー「…迷惑なんだよ…」

エヴァニーの言葉に、ざわついていた空気が、一瞬で凍りつく。言葉を発していた仲間が、まじまじとエヴァニーを見る。

エヴァニー「俺たちは、真正面からじゃ帝国に対抗できない。　だから、帝国が血眼になって追ってる時に人数が多ければ、逆に目につく。　だから…

…迷惑なんだ…」

言ったエヴァニーは下を向き、拳を握り締め、全身を震わせていた。

グランズ仲間「……。」

仲間の肩を、ナディアが軽く叩く。　その仲間は、力なくその場にへたり落ちた。

シベリア「他にも、つてのあるヤツや、いままで後方支援を主にしてたヤツは残れ。　仮に見つかっても、主要なメンバーと一緒にいなければ、そこまで大罪には問われないだろう」

誰もが顔を見合わせた。　しかし、相談して何とかなる問題ではない。

ある者は押し黙ったまま、またある者はテーブルを蹴り飛ばし…。

しかし、結局は背を向け、アジトを出て行くしかなかった。

【2】

エヴァニー「…それからリナレス。　お前もだ」

くるりと後を振り返ったエヴァニーは、グランズ結成以来、ずっと行動を共にしていたはずのリナレスにまで声をかけていた。

リナレス「…っ！！」

晴天の霹靂（へきれき）のような言葉に、リナレスは目を異様なほど見開いている。

ナディア「…リナレス。　あんたは、あたしより早くグランズにいた。　最古参と言っても差し支えないだろう」

ナディアの言葉に、シベリアがさらに言葉を繋ぐ。

シベリア「…だがリナレスは、今まで帝国兵を射ったことがなかったはずだ。　グラノーブルの出身だし、脅されて仕方なくやってたと言えば、いくら帝国でも…」

リナレス「バカにしないでよっ！！」

リナレスは、シベリアの差し出した手を振り払う。

リナレス「…あたしは…　あたしはずっとエヴァニーと一緒にいたんだよ？　そのあたしに、どうしていまさら残れなんて言えるわけ？！」

リナレスは涙を浮かべながら、しかしエヴァニーを見据えていた。

エヴァニー「リナレスの気持ちは、わかっているつもりだ…。　だけど残ってくれ。　シベリアも言ったけど、リナレスは帝国兵を殺したりしてないし、昔帝国にいた、ナディアやシベリアとも違う…」

リナレス「違う？　違うから、仲間はずれにするんだ？　あたしを

置いてどっかに行っちゃうんだ？」

リナレスの目からは、止めどなく涙が流れ落ちていた。　それでも、ただ悲しみに暮れようとはしないで、怒りを周囲にぶつけ続ける。

リナレス「帝国兵を殺してないからなんなの？　あたしは帝国を誰よりも恨んでるし、誰よりもグランズを愛してる！　どんなピンチになったって、グランズを抜けたりなんかしないっ！！」

リナレスは叫び、それでも足りないのか、さらに言い募る。

リナレス「…わかった…。　エヴァニーってば、あのサヤリって子のこと好きになったんでしょ？　だから、昔からいるあたしがジャマになったんだ…。　そうなんでしょっ！！」

エヴァニー「リナレス…」

叫ぶリナレスに、エヴァニーが何かを言おうとした瞬間『ガシャーン』と物が落ちる音がした。

音がした方を見ると、そこにはいつからいたのか、そのサヤリの姿があった。

サヤリ「……。」

呆然とするサヤリ。　しかし、そんなサヤリにまで、感情の高ぶったリナレスは容赦がない。

リナレス「思えば、あんたが来てからよ！　あたしはエヴァニーと、ずっと仲良くやってきてた！　あんたが来てから、みんなおかしくなりだした…。

そうだ？　手配って、あんたが帝国にチクったんじゃないの？　そうじゃなきゃ、急にこんな事が起こるはずない！　そうよ、みんなあんたのせ…」

パシーン。

そんな音が響き、一気に場が静かになった。

リナレスに向かって踏み出したのは、エヴァニーではなく…

ナディアだった…。

リナレス「…ぶった…。　あたしをぶった…。　…パパにだってぶたれた事ないのにっ！！」

パシーーーン。

響きがもう1回。　リナレスは信じられないという顔のまま固まる。

ナディア「リナレスっ！　あんたがそんなに分からず屋だったなんて、見損なったよ！　あんた、エヴァニーの気持ちを踏みにじる気かいっ！！」

もう耐えきれないといった表情で、ナディアはリナレスを叱りつける。

ナディア「あんたがエヴァニーを好きなことぐらい、みんな知ってたよ！　でも、知ってるからこそ、あんたに無事でいて欲しいと願う気持ちが、分からないのかいっ！！」

リナレス「わかんないっ！　そんなのわかりたくないっ！！　あたしは、死んでもいいの…。

ただ一緒にいられれば…。

エヴァニーといられれば、それだけで幸せなの…。　なのに…　なんで、みんなしてジャマするの…？」

リナレスの言葉には、すでに怒りの色はなかった。　その場に立ち竦み、ただ涙を流し続ける。

エヴァニー「リナリス…」

エヴァニーが沈痛な面持ちで、リナリスに一歩を踏み出す。

リナリス「…来ないでよ…」

しかし、リナリスはエヴァニーを拒むように、一歩下がる。

リナリス「…エヴァニー。　ずっとずっと好きだった…。

今でも、好き。

なのに、なんでエヴァニーは、あたしを追い出そうとするの？　あたしは、自分が無事でも意味ないの…。

エヴァニー…。

…なんで、一緒に死んでくれって言ってくれなかったの…？　あたしはそれだけで…。　そう言ってくれるだけでよかったのにっ！！！」

背を向け駆け出すリナリス。　その手に、エヴァニーの手が一瞬触れた。

サヤリ「エヴァニーっ！！」

サヤリの叫びに、エヴァニーの手が止まる。　リナリスの手は、エヴァニーに掴まれることなく、アジトを駆け出して行く。

サヤリ「エヴァニー！　私を1人にするつもりなのかっ！」

サヤリが叫ぶ。　エヴァニーの足の動きも鈍くなる。

サヤリ「私を…　私を好いていてくれるなら…」

サヤリの声が、エヴァニーの肩には重い…。

【3】

…ところが。

数秒後、辺りに1発の銃声が響く。

そして、リナリスが飛び出して行ったばかりの扉から、部屋に舞い戻った…

『もと、リナリスだった物』

エヴァニー「リナリスっ！！！」

胸から血を流し、信じられないと言いたげな表情。

抱き上げるエヴァニー。

見慣れた顔をして…。

まだ変わらない温もりで…。

涙すら乾かないその瞳…。

しかしそれは、やはり物だった。

？？？「お前らだな？　姫様を誘拐したと言うのは！　姫様を返せっ！！」

声の主に目をやると、それはサンドイエローが入り混じった、特徴的な砂漠迷彩の軍服。

サヤリ「マ、マリンピア軍…」

サヤリが怯えた様子で呟き、何歩か後ずさる。

マリンピア下士官「おおっ！　サヤリ様、ご無事で何よりです。今お助けしますので、しばらくのご辛抱を」

続いて、何人もの兵士たちをかき分け現れた、見るからに屈強な男。
その大きな顔が、わざとらしい笑顔に満たされていた。

グランズ仲間「てめぇらっ！　誰が誘拐だと？　俺たちは帝国兵は殺っても、誘拐なんざ…」

掴みかかりそうな勢いで、その下士官に向かった仲間。　だが…

パンっ！

また乾いた音が響き、その仲間が床に倒れる。

下士官「馬鹿者っ！　さっきの娘といい、誰が発砲を許可したかっ！　サヤリ様に当たりでもしたら、どうするつもりだっ！！」

粗暴な仕草で、発砲した兵を殴り付けるその下士官。

下士官「…これはとんだご無礼を。　なに、これはちょっとした手違いです。　サヤリ様が怖がられる必要は、何１つありません」

下士官の顔は引きつっていて、もはや笑顔とも呼べないシロモノだった。

だがそれでも腕を横に開いて、サヤリに害を加える意思がないとアピールする。

サヤリ「わ、私は帰らないぞ…」

サヤリは、また何歩か下がる。　グランズ、カムラネルナの仲間たちも、兵達が入って来た扉と、反対の方向に集まる。

反対方向には、巧み隠された裏口があり、また、武器が隠してある。
　当然、仲間たちはそれを知っているのだ。

下士官「誘拐でないのは分かりました。　ならば、尚の事お戻りください。　サヤリ様がお戻りになれば、その者達とて…」

たどたどしく、しかしその下士官なりに必死なのだろう。　懸命に作った笑みを浮かべ、サヤリに向かって1歩1歩近づいて行く。

サヤリ「い…　いやだ…」

サヤリがさらに下がる。

下士官「我が儘をおっしゃらないでください。　お父上様が、サヤリ様を首を長くしてお待ちなのです」

サヤリ「私は…　絶対に帰らないっっ！！」

部屋の裏口から、外へ駆け出すサヤリ。

下士官「ぬっ！　あんな所に逃げ道があったとは…　はっ！！」

パパパパーン

乾いた銃声が、さっきとは違う方向からした。

仲間の1人が、武器を手にしたのだった。　先頭にいた下士官が、何発もの銃弾を浴びて即死する。

それを皮切りに、仲間たちと兵の銃撃戦が始まった。　指揮官を失ったマリンピア軍は、遮二無二銃を射ちまくる。

銃弾は部屋中を飛び交い、互いを血で染め合う。　銃弾を遮るような物は、厚手のテーブルぐらいしかないのだ。

シベリア「エヴァニー、こっちへ！　みんなもだ！　ここで戦っても埒が明かないっ！　脱出するぞ!!」

シベリアも、銃を射ちながら叫ぶ。

エヴァニー「けど、リナリスがまだっ!!」

シベリア「諦めろっ！　もう死んでいるっ！　手榴弾をっ！」

言いながら、手榴弾に手を掛けるシベリア。　エヴァニーはその手に…

シベリア「エヴァニーっ！！！」

…手を伸ばせなかった。

マリンピア軍「ひっ！　手榴弾だっ！！」

慌てて部屋から逃げるマリンピア兵。　反対側からは仲間たちが。

爆発音が辺りにこだまし、逃げ遅れたマリンピア兵が部屋の壁まで吹き飛ぶ。

シベリア「今だっ！　みんな逃げるぞっ！　エヴァニーも来いっ！！」

まだ、呆けたようになっているエヴァニーを無理矢理引っ張り、シベリアは扉から外へ走り出した。

グランズ仲間「どけっ！」

外から見張る役目だったのだろう。　しかしその兵は、銃をエヴァニーたちに向ける間もなく、額に銃弾を浴びて倒れる。

シベリア「エヴァニー、こっちだ！」

マリンピア兵「ぐあっ！」

追って来た兵が、また1人倒れた。

グランズ仲間「てめぇら、よくもリナレスをっ！！」

追いすがる兵が一気に3人。　さらに手榴弾の爆発。

しばらくして、エヴァニーが気がついた時には、辺りはひっそり静

まり返っていた。

血の臭いだけが濃い…。

第４４章　大気圏突入（前書き）

（キャラ交代の予感…？！）

ミク「ガンちゃんの仇ぃ～！」

オタＱ「仇って、もう死んでたオタよぉ～」

？？？「レナ。　不毛な争いに気を取られている隙に、放送を第２スタジオに切り替えてしまえ！」

レナ「はい、ディジョン隊長！」

ディジョン「あ～あ～　マイクテスト、テスト。　よい調子だ」

レナ「やりましたね」

ディジョン「なにやら、定番ネタとなりつつある座談会解説だが、第3幕を始める前に、言っておくことがある。　それは…

『この座談会形式の解説を考えたのは、私だ！』

という事だ。　念のためにもう一度言う。

『まひろっくなる編集者と、その分身キャラのミクがネタをパクっただけで、この座談会の元祖は…

わ・た・し・だ！！！』

以上」

レナ「盗作はいけませんよね～」

ディジョン「まあ、同じコミュの仲間だからな？　使うのは別に構わん。　しかし、言うべきことは言っておくべきだろう」

レナ「さすが隊長。　心が広いですね～」

ディジョン「それはさておき、第3幕で解説するジャンルを決めねばな…」

レナ「何にしましょう？」

ディジョン「本来私が、この解説を始めたのは、わかりにくい専門用語を解説するためだったのだが…。

例えば…

CAP…コンバット・エリア・パトロールの略。　敵機襲来に備えたパトロール。

（原作よりコピペ）

などと言っても、わからないと思ってな」

レナ「…そうですね」

ディジョン「しかし、それら難しい用語は、その難しさゆえ、この編集版ではみんなカットされてしまって解説する必要がない…」

レナ「…どうしたんですか？　隊長」

ディジョン「…それだ！　原作から見てカットされたり、変更せざるを得なかったところを、簡単にだが紹介することにしよう！」

レナ「おもしろいかもですね？　というわけで、次回からは、原作を織り混ぜたお話をしていかますので…」

ディジョン「期待してろよっ！」

（続く）

第４４章　大気圏突入

ゲットたちを乗せて地球へ向かう、ザンジバル級『リメンバーズ』

ゲット「うおぉぉぉ～　すっげ～！　地球ってあんなに青いんだ～！！」

間近に迫った地球の青さ。　初めて見るその光景に、ゲットは感動の叫びを上げていた。

リンダ「キレイだろ？　青いトコが全部海、それ以外の色してるトコが陸だよ」

リンダも、そんなゲットに目を細める。

ゲット「なあフレーネ。　何か思い出せそうか？」

フレーネ「ううん…。　でも綺麗ね…」

あまり感情が顔に出ないフレーネも、この時ばかりは、地球の壮観さに見とれているようだった。　ゲットはそんなフレーネの顔を見

て、少しだけ嬉しい気持ちになった。

しかし…。

その感動を打ち消すかのように、警報が鳴る。

ゲット「何？　どうしたんだ？！」

フレーネ「来る…。　何かイヤな感じのものが…。　怖い…」

突然フレーネは怯え始めた。

リンダ「お嬢ちゃんの予感的中だね。　反応はナスカとムサイ、こっちに向かって来てるよ！」

スティヴ「ご立派に隊列組んでるってこたぁ、たぶん帝国軍だな。
俺が出る！　リンダはガキたちのお守りを頼むぜ！」

いつ着たのか、早々とノーマルスーツを着込んだスティヴが、ブリッジを飛び出そうとする。

ゲット「待てよ！　俺だって…」

スティヴ「お前は残ってろ！　あんな動きじゃ、大気圏の近くじゃ戦えねぇ。　それにな？　帝国だろうとなんだろうと、アイアンボーンはケンカ吹っ掛けられて、黙ってるほどチキンじゃねぇんだ。
わかったら、おとなしく俺の戦いを見てろ！」

ゲット「…でも…」

まだ言い澱むゲットの裾を、誰かが掴む。　見るとフレーネが首を横に振っていた。

ゲット「わかったよ。　お前の戦い方、勉強させてもらうからな？」

スティヴ「最初から、素直にそうすりゃいいんだよ」

スティヴは、にこやかな笑顔を向けると、そのままブリッジを後にする。

そしてリメンバーズから、グレーのストライクダガーが飛び出した…。

【2】

オペレーター「中佐！　ザンジバル級から、ＭＳが出て来ました！」

スティヴの出撃は、早速敵の知るところとなる。

オクサイド「出てきたな。よし、各艦に通達しろ。　ＭＳ隊発進、ガンダム１号機が出たら、すぐに捕獲作業に移れとな」

オクサイドの命令は、実に常識的だった。

まさか、ゲットが地上装備のまま宇宙で溺れ、命拾いをしたなど知る由もない。　ただガンダムがコロニーを出た、ザンジバルに乗った、そういう断片的な情報で追撃しているだけなのだ。

だが結果として、オクサイドは甘かったと言わざるを得ない。

オペレーター「中佐っ！！　後続のムサイが1隻…　沈みますっ！
この反応は…　例の傭兵ですっ！！」

【3】

時は一瞬だけ遡る。

オクサイドの艦隊が、リメンバーズに向けて威嚇の発砲を始めた時、その光は、目を皿のようにしていたゴトーたちにも、しっかり映っていた。

ゲットを拾ったばかりのリンダは、ガンダムがそこまで敵を招き寄せる存在だと、思っていなかった。

追撃するオクサイドは、奇襲より確実な発見を重視しており…

ゴトーたちは知っての通りである。

誰もが、互いの思惑でミノフスキー粒子を撒かなかった偶然が、広い宇宙で三者を一ヶ所に集めたのだ。

ゴトー「金にならない…」

そうゴトーは言いながら、周りを見渡してみる。　当然、最近よく見る表情が待っていた。

そしてゴトーも、最初から笑っていた。　この展開を予想して、わざと言ったのだろうか？

ゴトー「ネロ、お前のザクを借りるぞっ！」

宇宙では、自分のグフが使えない。　そのためゴトーはネロのザクに乗るようだ。　そしてもう1機、ジルドのザクも続いた。

さらに、ミアとネロが指揮しての艦砲射撃が始まり…　その射撃が、ムサイを撃沈に至らしめた訳だ。

こうしてゲットを追うオクサイドが、またゴトーに背後を取られるという、地球を正面にしての、一直線な戦場が創出された。

オクサイド「やってくれる…　帝国に楯突く傭兵は、ガンダムの味方というわけか。　だが、狙いはガンダムに絞れ！　傭兵の相手は、ガンダムを捕獲した後だ！」

ナスカとムサイから、ジンが次々と発艦して行った…。

【4】

…のだが。

スティヴ「おあいにく様だなっ？」

ストライクダガーは、ナスカ級から発進したＭＳの攻撃を、ひらりひらりと避けてしまう。　もちろん艦砲射撃など、捕捉すらさせない。

そうしながらも、ビームライフルを1機のザクに直撃させる。

スティヴ「まず1つ…。　いや、2つ目っ！」

馳せ違いざまに斬りかかってきた、ジンの重斬刀を機体を軽くひねってかわす。　いわゆるＡＭＢＡＣ機動というヤツで、推進剤を使わないばかりか、隙が少ない。

そうして得た時間で、自分に斬りかかったジンの背中を的確に射ち抜く。

スティヴ「なんだ。　帝国軍っつっても、こんなものか？」

言っている側から、3機目のジンが頭部を撃ち抜かれる。

オクサイド「何をしているっ！　このままでは奴らに降下を許してしまうぞっ！」

そんなスティヴに、オクサイドは苛立って怒鳴るが、それでどうな

るものでもなかった。

オクサイドは、戦力そのものは補充を受けていたが、代わりに部隊の中核であった、スーリスとスパンツを降ろしてきてしまっていた。
そのせいか、部隊の動きにまとまりがなかった。

ジンも、改良機のハイマニューバではなく、通常のもの。

全ては帝国本国の命令だったから、別にオクサイドの落ち度ではなかったが、それらの要素を考えなかった指揮は、オクサイドの判断ミスだろう。

そのうえ後続のムサイは、ＭＳを発艦させきる前にゴトーたち…

指揮をしたのは、ネロとミアだが…

に遠距離からあっという間に沈められており、数の優位もその差を縮められてしまった。

そのうえ、泣き面に蜂とばかりに迫ったゴトーのザクが、残り少なくなったジンを真っ二つにしたのが目に入った。

その動きは、オクサイドの率いる軍とはまるで異なっていた。

歴戦の傭兵の腕の前に、戦局は早くも、オクサイドの完敗、ワンサイドゲームの様相を呈し始める。

ユーリ「…ガンダムの顔すら拝めないなんて、ずいぶんな負けようね？　いい加減諦めて、降下に集中してくれないかしら？」

そんな焦りを見透かしたように、降下ポッド内のユーリから通信を入れられてしまった。

オクサイド「……。」

ユーリ「あたしの降下を優先しなさい。　どのみちガンダムは、ここでは奪えないわ。　どうしてもって言うなら、自分も降下するしかないんじゃない？」

ユーリの、優越感が滲み出ているセリフ回しは続いた。　これではもはや、どちらが上官か分からない。

中佐で、艦隊司令なのがオクサイド。　直属の部下でこそないが、ユーリは少尉で、１パイロットに過ぎないはずなのだが…。

ユーリ「優柔不断な男は、見ていて腹が立つわね」

大して苛立ってもいない口調で、達観したように言われては、オクサイドの立場はなかった。　もう敗戦を認めるしかない。

オクサイド「くっ…　やむを得ん。　作戦を変更する。　私のＭＳを降下ポッドに搬入させろ。　降下開始後、全艦隊撤退だ！」

帝国兵「はっ！」

そうしたやり取りの間にも、ゴトーたちはまたジンを１機粉々にしていた。　そのうえ、もう１隻残ったムサイのブリッジに『着艦』し、その正面の窓を叩き割る。

コムサイの分離は間に合ったようだが、そのムサイは戦闘機能を失ってしまった。

オクサイド「……。」

ユーリ「……。」

もはや、オクサイドとユーリに交わす言葉はなかったようだ。　オクサイドが降下ポッドに乗り移ったのを機に、帝国軍は全艦隊…といっても、無事だったのはナスカ1隻なのだが…　を離脱させる。

ゲット「強いな…　あいつ…」

リンダ「まあね。　アイアンボーンの名前は、伊達じゃないってコトさ。　それよかスティヴ、もう時間だよ？」

リンダが呼びかける。

スティヴ「この調子なら、バリュートを使うまでもなかったな。艦に戻る。　収容してくれ」

リンダ「あいよっ！」

事もなげに言うが、もう機体は赤くなり始めていた。　そんな中での着艦アプローチを、いとも簡単にこなす。

これだけでも、オクサイドの兵との、技量差が分かろうというものだ。

ゴトー「濃いグレーのストライクダガー…　あのマーク…

なるほどな。　アイアンボーンだったという訳か。　つまり、最初から無用な助太刀だったか」

リメンバーズに戻るスティヴを見たゴトーは、そんな風に呟く。

同じ傭兵同士、面識はあるのかも知れない。

そして、ゴトーとジルドは機体も翻す。

ネロ「…帝国軍が撤退に移りました。　また、降下ポッドも降下しています。　追撃は…」

艦に戻るなり、ネロはそんなことを聞いてきた。

ゴトー「それこそ金にならん。　それより、あのザンジバルの降下ルートを辿れ。　同じ場所に降下する」

ミア「了解しました」

なぜか、少しだけメリルが嬉しそうにしていた。

ゴトー「降下し終わったら、アイアンボーンに連絡してみろ。　帝国軍が追っている。　ならばあの艦に、ガンダムも小僧も乗っているはずだ」

ゴトーがメリルの頭を撫でる。

ネロ「…ガンダムの反応は、再び捉えていますよ。　あのザンジバルに乗せてあるのは、間違いありません…」

なにはともあれ、鮮やかに帝国、オクサイドの襲撃を退けたリメンバーズは、地球へとその艦体を降下させて行ったのだった…。

第４５章　サンザメヤに吹く風（前書き）

（原作との違い）

レナ「隊長、始めましょう」

ディジョン「よし、『元祖』座談会解説、原作紹介編だ」

ディジョン「さっそくだがな、表紙や前文で書いている通り、この小説は本来、コミュのトピを使って書かれたものだ」

レナ「誰かが、『君はザクで出撃したまえ』　とコメをしたとすると…」

ディジョン「参加者の誰かが、『わかりました。では、★★さんも伴います』　みたいに返すようなのから始まったのだ」

レナ「…随分、味気なかったんですね？」

ディジョン「まあ、実際こんな単純な時期は、すぐに終わってしま

ったから、割愛する。　とにかく、そんな持ち込みトピを、この編集者が変に煽ったものだから、人数は減ったが、やたら複雑な盛り上がり方をしてしまった」

レナ「設定とか、マニアックすぎますよ…」

ディジョン「…それは、あまり私も言えた立場ではないのだが…。とにかく、まずは原作の紹介だ。　先の大気圏突入の所をコピペするとしよう」

（原作）

スティヴはリメンバーズに迫る敵機を次々と落としていた。

スティヴ「大気圏突入戦にはタイムリミットがある…。　できるだけ早めに戻らねーとな。　あの反応…　あの戦い方、奴か？」

ムサイを潰すザクＦＺ。　スティヴはその戦い方から、★★★（＝ＨＮ）が乗っていると認識した。

ディジョン「こんな感じだ」

レナ「そんなに変わらない気もしますが、戦闘シーンが味気ないですか？」

ディジョン「やはり、コメをする人間によって、癖があってな…。
偶然だが、この投稿者は、シンプル派だったようだ」

レナ「それを、編集版ではボリュームアップしたと…」

ディジョン「最初は、編集者もそれくらいで済ませるつもりだったらしいが、途中からヤバいことに気がついたらしくてな…。

この編集版は

『まったくの別作品』

になってしまったんだ」

レナ「そうなんですね…。　あ、隊長、時間です」

ディジョン「では、続きは次の冒頭文でな」

（続く）

第45章　サンザメヤに吹く風

ジャック「いんや、オラはいいだ。　代わりちゃーなんだが、グリフィンの叔父貴を連れてってほしいだよ。　いざちゅー時の護衛にもなるだしな」

ジャックに扮したサコンは、そう言って自らの代わりを推薦した。

シュバルツ「そうか。　そう言うなら仕方なかろう。　それはそうと…」

ジャック「なんだか?」

シュバルツは少し改まった風になる。

シュバルツ「たぶん入れ違いになるが、サンザメヤにメリャーナ皇女殿下がおみえになるらしい。　兵達の慰問だそうだ」

ジャック「皇女殿下がだか?」

シュバルツ「ああ。　世が世ならば、女帝陛下になっておられてもおかしくない方だ。　そなたも、『サコンとして』　お会いしておくといい」

シュバルツが、一瞬ニヤリとした笑みを浮かべた気がする。

シュバルツ「そのような風体では、お目に止まるものも止まるまい。
…たいそうお美しい方だぞ？」

やはり、笑み。

ジャック…いやサコンは、自分がからかわれていることに気がついた。

サコン「何をおっしゃるかと思えば…」

カトラス「そんなに美人なのか？」

サコン「カトラスっ？」

いきなり、話に割り込んできたカトラス。

そう言えば、ユービットの計略の実行部隊として、ヤタガラス隊は一躍有名になっていた。　階級はまだ兵卒のままだが、誰もそんな扱いはして来なくなった。　そのせいか、司令部にもこうして堂々

と入れる身分になっていたのだ。

シュバルツ「私が保証しよう。　私も若ければ、身分違いの浮いた話をしたくなるかも知れないくらいだ」

サコン「やめてくださいよ…」

ちょっとだけ、戸惑った表情。

カトラス「なら、俺がヤタガラス代表として、挨拶をしておいてやる」

サコン「おいっ、カトラス?!」

こんな時には頼りになると言うか、どんな時でも遠慮という言葉がないカトラスだった。

シュバルツ「まあ、ほどほどにな。　護衛の武官に、無礼討ちにされては元も子もない」

最後まで笑いながら、シュバルツは司令部を出て行き、そのままグリフィンと共に機上の人となった…。

【2】

エルフレア「なんだって?!　このサンザメヤに、メリャーナ様がおみえになるっ!?」

ロンドは、いつもの軍の予定というか、動きを上申しただけだった。

ただ、

『メリャーナ殿下が慰問のため、１１時に着陸予定です』

とだけ。

しかし、それを聞いたエルフレアは、いきなり叫ぶわ、部屋をうろうろし出すわ、さらには自分に権限のないはずの、護衛ＭＳの配置まで心配する始末。

そのうえ、突然自分の部隊のＭＳを綺麗に磨き上げろと言ってみたり、それに対して『時間がない』と言ったロンドを怒鳴りつけたり…

とにかく、落ち着きの欠片もなかった。

ロンド「エルフレア様。　いくら勝ったとはいえ、ここはまだ戦場です。　そのように改まられず、戦う者たちの精悍さこそお見せするべきではありませんか？」

エルフレア「そ、そうかな？」

『小さな暴君』と側役のラドに言われてしまったエルフレアだったが、ロンドは主人の心の有り様が、この時１つに繋がった。

エルフレア豹変の原因は、メリャーナだったのだ。

メリャーナは皇女であるから、中小貴族のエルフレアには、気軽に会うこともできない。　そこへ降って湧いた今回の出征話と、宰相に見込まれたという話。

宰相に見込まれて出世すれば、軍人としても貴族としても、メリャーナの目に止まる機会が増えるだろう。　それに、若さくる焦りが重なって…。

ロンド「あのような被害を被りはしましたが、部隊の再編成は完全に終わっております。　ちょうど再編成が終わったばかりですから、新しい機体も多く、見映えもよいことでしょう」

エルフレア「そうかな？　そうかな？」

部隊が再編成を迫られるくらいの被害を受けるなど、軍人として名誉でもなんでもなかった。　たが、いまのエルフレアには、そんな当たり前の事実すら見えていない。

そんな盲目な愛を抱く主を、ロンドは心の中で、小さな暴君とは、別の呼び名に置き換えようと決めた…。

【3】

マリー「メリャーナ様。　まもなく、サンザメヤに着陸いたします」

マリーが報告に来る。　報告されるまでもなく、ガルダ降下を始めているのに、メリャーナは気がついていた。

メリャーナ「ワグナーもいい子にしていてね？」

慣れているのか、ワグナーはメリャーナの膝を離れると、自らゲージの中に収まる。

メリャーナ「ディジョン大尉は、サンザメヤにいるのよね？」

マリー「はい。　予定はさりげなく、しかし確実に合わせてありますから。　まあ、結論は…」

メリャーナ「出てるも同然だけどね…」

メリャーナは、エヴァニーたちの言葉を信じる気になっていた。

メリャーナ「…でも、それはそれで別問題なのよね…」

マリー「はい…」

当たり前だが、督戦隊や憲兵みたいな権限を、ディジョン大尉は有していない。　ふつうに報告してしまっては、最悪、殺人罪で極刑だった。

だからと言って、乱暴をした帝国軍を赦す気がメリャーナになかった。

メリャーナ「難しいところよね…。　真実を告げても極刑、告げなくても極刑だからね…」

当たり前だが、内応は反乱罪で極刑である。　つまり、真実がどこにあろうと、ディジョン大尉の罪状だけが一致してしまっていたのだ。

マリー「何か手がありますか？」

メリャーナ「そうねぇ…」

残念ながら、秘策は2人ともにないようだった。

近衛兵「殿下、ベルトをお忘れです」

メリャーナ「あ、ごめんなさいね」

つい、そんなことまで忘れてしまうくらい、メリャーナは考え込んでしまっていた。　それでもガルダは、待つことなくサンザメヤに到着してしまう。

ガルダの無事な着陸を確認したのか、周囲にいたドップのほとんどが引き上げていく。

追撃のため拡張中のようだが、今のサンザメヤには、多数の機体が着陸できる設備が、まだなかったからだ…。

【4】

???「将軍～。　そんな勝手なことをされると、僕は困っちゃうんですがねぇ～」

将軍「何を言うかっ！　貴様らの魂胆は見え透いておるわっ！　帝国軍を私物化し、世界の覇権を己が手に握ろうと言うのであろうっ！！」

？？？「…そう言われるが、何か証拠はおありなのですかな？

…と言うか、証拠があったとして、それが何か問題ですかな？　帝国は半世紀に渡り、全世界を支配してきた。　私はそれを取り戻そうとしているだけで…」

？？？「早い話が、そういうのを派閥抗争って言うんですよぉ～。　破れた側は、おとなしく退場すればいいんですって。　将軍も、もう少し諦めが早ければ、ふつうに予備役の将軍やって、年金くらいにはありつけたのにぃ…」

将軍「そうはいくか！　この事実が公になれば、貴様の権力基盤は求心力を…

…なっ、なにをするっ！！」

？？？「後の始末は任せてもらってよいのか？」

？？？「構いませんよ、ドクター。　ただし、表に出せる死因を作っていただかないといけませんがね？」

？？？「分かっておるわ。　まあ、儂も研究が忙しいからの？　あまりの忙しさに、研究に不備があるかも知れん。

例えば、３日後に飛ぶ将軍を乗せて飛ぶミデアなど怪しい。　新型エンジンを積んだ機体じゃが、まさか将軍の搭乗された時に限って…　の？」

？？？「ああ、怖い怖い。　だから僕は飛行機が嫌いなんですよ」

将軍「は、離せっ！　私を誰だと…」

？？？「時代に乗り遅れた、愚か者の言葉に耳を傾けるほど、私は暇ではありませんからな？　それでは将軍、ご機嫌よう」

将軍「き、貴様ぁ～！！！」

【5】

レナ「隊長。　気になる事があるんですが…」

レナが心配顔でやってきた。　元々楽観的な性格はしていないが、こういう心配顔もめずらしい。

ディジョン「どうした?」

レナ「…ええ…。　昨日から、リトバルスキー将軍との連絡がつかないんです」

ディジョン「…将軍が不在なら、副官か秘書にでも事づてを頼めばいいだろう?」

私は、なぜそんなことをレナが言いに来たのか、分からなかった。

レナ「…それがですね…。　将軍は、軍の総司令部に行くと言ったきり、帰らないんだそうです。

それも、副官や秘書などの、身辺にいる人間からの情報ではありません。　将軍宅の掃除婦が、偶然将軍の電話の内容を聞いていたというだけで、将軍と近い人間、全ての行方がわかりません」

ディジョン「なんだと?!」

私は立ち上がった。　猛烈に嫌な予感がする。

レナ「最近、パンドラールで水面下の争いが激しくなっているという噂があります。　もしかしたら、それに巻き込まれたのでは…」

レナは、心配を通り越して、不安な表情だ。

ディジョン「たしか将軍は、正義感の強い性格だったな?」

レナ「正義感が強くて、勇敢、さらに一言多い性格です」

ディジョン「悟られたか…」

レナ「…どうでしょうか…」

考えても仕方ないことだと分かってはいるが、それでも考え込んでしまう。

帝国兵「…ディジョン大尉はご在室でしょうか？」

そんな事を話していると、兵が私を呼びに来た。

ディジョン「なんだ？」

帝国兵「はい。　メリャーナ殿下が、ぜひ大尉にお会いしたいそうです。　なんでも、先の戦いに関して、詳しく話を聞きたいそうです」

（こんな時にか…）

そう思ったが、相手が皇女殿下では断れない。

ディジョン「ただいまお伺いする、そうお伝えてしてくれ」

帝国兵「はっ！」

兵が歩み去って行く足音がした…。

【6】

武勇伝を聞きたい、そう言って呼び出した割には、メリャーナはその話を一切しなかった。　聞くのは今までの経歴とか、親しい人間は誰かなどといった、関係なさそうな事ばかり。

メリャーナ「…ところで、大尉。　大尉は他の部隊に属する兵卒が、乱暴を働いたのを見たならば、どう処置を下されますか？」

聞いてすぐにピンと来た。

カンタルダルの事を言っている。　さすがに、いきなり粛清するのはやり過ぎたか。

ディジョン「…その時の状況にもよるでしょうし、即答はできかねる難問ですね…」

まずは、はぐらかしてみる。

メリャーナ「では、条件を言わせて頂きますわ。　場所は帝国の占領地。　対象は基地近くの街の住民。　ただし、反帝国主義者をかくまっている可能性のある街です」

そのまんま、カンタルダルだな…。

ディジョン「反帝国主義者は関係ないな。　相手が誰であろうと暴行は罪で、れっきとした触法行為だ。　憲兵に逮捕させ、軍法で裁くべきだろう」

メリャーナ「ところが、肝心の憲兵に動きがありません」

ディジョン「知らせればいい」

メリャーナ「しかし、憲兵や指揮官まで、街に手出しをしておりました」

ディジョン「ならば、本国に上申すれば？」

メリャーナ「あいにく大尉は、暴行の証拠を持っておりません」

ディジョン「…そうではないかもな？」

後を振り返り、レナに耳打ちする。　レナは『それ』を持って来ていたらしく、すぐに声が流れ始める。

『…ふざけんなっ！　誰のせいでこんな事になってると思ってやが

るんだっ！

この基地の奴らは、街を漁って女をさらい、逆らった男は皆殺し！
　これが帝国軍のやり方かっ！！

てめーらの欲望のために、殺された人間の恨み、思い知れよっ！！！』

爆発音を挟み…

『…はぁ？　聞こえんなぁ～？　強い奴が弱い奴らを支配するのに、何の遠慮がいると言うんだ？　貴様らは弱い。我々は強い。

だから街も女も、すべて我々のものだ！　文句があるなら、その豆鉄砲で街から追い出してみたらどうだ？　ほれほれ？』

レナがスイッチを切ると、部屋に静けさが戻った。

メリャーナ「…やっぱり、そういう訳でしたか…」

メリャーナはため息をつく。

ディジョン「…私はエリートコースから外れた人間だ。　貴族の出でもないし、軍の士官学校に若くして入った訳でもない。　士官学校では、１０も年下の同級生がいたこともある…」

ディジョンが語り始めた。

その話はディジョンの生まれから、軍に入るきっかけ、それからの経歴へと続いた。

簡単に纏めると、ディジョンは、いまは退役している古参の将軍に見出だされて軍に入った。　だから、軍そのものがどうこうというより、その将軍の意志を立派に引き継ぎたい、そういうことらしい。

そう言えば、メリャーナが見るに、ディジョンは２０後半から３０前半ぐらいに見えるが、階級は大尉だ。　それも順調に出世したのではなく、軍功で特進して大尉になって、まだ間もないという。

帝国では、大貴族の師弟であれば、２０で少佐の人間もいる。

ディジョン「あえて名前は出さないが、厳しい方であった。　兵の風紀1つとっても、部隊の隅々にまで目を光らせていると常に感じていた。　街に手を出すなどもっての他だった」

その将軍を、真似たということなのだろうか？　それとも、何か別の意志が働いているのか？

メリャーナ「大尉の…」

言いたいことはわかります、そう繋ごうとした言葉は、駆け込んで来た従兵に遮られた。

ジャック「あんらお姫様、お取り込み中ちょっくらすまねぇべ。敵襲だべさ。　敵の機動部隊が迫ってるべなよ。

しっかも折りが悪いこってに、視察中のガント大佐が、戦死したらしいちゅう情報まであるだ。

悪りぃけっど、戦うなり逃げるなり、早く準備せんと、ヤバいかも知んね」

ジャックが、早口で状況を説明する。

ディジョン「殿下、話はまた今度にしよう。　ヤタガラス、他の奴らはどうしてる？」

素早い問いかけだった。

サコン「えがんとね…

…ああ、面倒くさい！

ディジョン大尉の隊の２人は、先に行くって言ってました！　後は、エルフレア少佐と大尉たちぐらいです！

ですけどね、基地のＭＳが全部合わせても、３、４０機ぐらいしかいないんですよ！」

緊急時のせいか、ジャックは訛りをやめて、サコンに戻ってしまっていた。

ディジョン「分かった、私も出る。　レナ、行くぞ！」

ディジョンとレナが駆け出して行く。

その場に残ったのは、メリャーナとマリーとサコン。

サコン「…という訳なんですが、退避壕にご案内した方がいいですか？」

サコンは、自身の急な変わりぶりに目を丸くている2人に言った。

メリャーナ「おもしろい方なのね？」

サコン「…まあ、いろいろと訳ありでしてね？」

目が合う。

メリャーナ「その訳は、いつか聞かせて頂くとして…。　基地が人

手不足なんですってね？」

メリャーナもまた、微妙に口調が違う。

サコン「ＭＳに乗る気ですか？」

その問いに、メリャーナはマリーへの言葉で答えた。

メリャーナ「マリー、私のＭＳの手配して！」

マリー「お逃げくださいと言って、聞いて頂けるとは思っておりません」

マリーは、すでに何かを命じ始めていた。　そして、メリャーナと共に駆け出して行く。

カトラス「サコン、ここにいたかっ！」

そして反対側からは、カトラスの声と足音。

サコン「俺たちも出よう！」

そう叫んで、共に駆け出した…

…まではよかったが。

帝国兵「…それが、出られるＭＳはみな出払っていて、残ってないんですよ」

カトラス「マジかよ！？」

そうなのだ。

ただでさえ少ない防衛部隊なのだから、ＭＳに余裕などあるはずがなかった。

しかし、そうこうしてるうちにも、上空をガウが飛び、爆弾が落ち始めた。

サコン「この際、動けるならなんでもいいんですよ！　何かあるでしょう！」

専用機のない２人の、悲しい事実だった。　カトラスもユービットではガンダムＭＫ－２に乗ったが、それはグリフィンに返してしまっていた。

帝国兵「…まあ、そこまでおっしゃるなら…」

その帝国兵は、ハンガーの奥のＭＳを指差した…。

第４６章　再来のラピスラズリ（前書き）

（原作との違い編）

レナ「隊長、始めましょう」

ディジョン「それで、原作とこの小説は、まるで別のモノになってしまったと、そこまでは言ったと思うが…」

レナ「はい。　…ですが隊長。　具体的にどう違うんですか？」

ディジョン「まずは矛盾と、設定ミスの修正だな。　誰もが好きなガンダムシリーズがあると思うが、全部を見ているかと言われると、そうでもないんじゃないのか？」

レナ「そうかも知れませんね？」

ディジョン「だからつい間違えてしまい、書き直す必要が出てきた場所が多かった」

レナ「例えばどのあたりですか？」

ディジョン「…そうだな…。　まず傭兵のゴトーだが、あいつらは最初コロニーにいるな？」

レナ「今は地球に行きましたけどね」

ディジョン「コロニーにいたというのに、原作での奴らの母艦はガウだった」

レナ「えっと…」

ディジョン「コロニーは空気と重力があるから、ガウも飛べるって言ったら、１年戦争〇タクから、総ツッコミを食らうぞ！」

レナ「飛べないってほどじゃなくないです？」

ディジョン「まあな。　だが、自由自在に飛ぶって訳にはいかんだろう。

コロニーは中心部は無重力だし、第一、航空機のスピードからすれば、コロニーは非常に狭い。　調子に乗って行き過ぎれば、外壁に激突してスクラップだ」

レナ「ああ～」

ディジョン「だから、今回の編集版ではザンジバルが母艦で、しかも戦闘には参加していない。　弾の飛んで来ない所で、待機していたんだ」

レナ「それなら矛盾しませんね。　戦闘が終わったら呼び寄せて、補給なり修理をすればいいんですから」

ディジョン「主にそういう細かい所を直した。　これは編集者の性格でもあるし、二次創作作品を公開する上での、原作に対する礼儀だと私は思っている」

レナ「立派な配慮だと思います。　さすが隊長！」

ディジョン「…と言いつつ、この編集作業に私は、あまり参加していないんだがな…」

（えっ？　っていうか、続く）

第４６章　再来のラピスラズリ

サコン＆カトラス「…こ、このＭＳは…」

２人が絶句する。

それもそのはずで、無理を言った２人に示されたＭＳ、なんとそれは…

…作業用ザクとザクタンクだった。

帝国兵「こんなので出ようなんて、あなた方も物好きですね？」

感心したように言われた。

カトラス「いや、違うだろ！　こういう時はふつう

『完成率は８０％なんですが…』

とか

『今まで誰も乗りこなしたことがないＭＳなんですよ?!』

ってなるだろ？　お約束で！」

帝国兵「…はい？　何の約束だか知りませんが、私は最初からないって言ったじゃないですか。　それより、乗るんですか？　乗らないんですか？」

カトラス「…サコン。　やっぱ俺、帰ろうかな…」

サコン「…俺もその方がいいと思う…」

整備兵に無理を言った手前、やっぱり止めますとは言えず、仕方なく出撃した２人だったが、今、自分達の若さゆえの過ちを、多分に

後悔している最中だった。

カトラス「決めたぜ！　俺は…」

そうカトラスが言いかけた矢先。

『基地の西ゲートを、敵ＭＳが突破っ！　敵ＭＳはドムタイプとゲルググタイプの各３機っ！　恐ろしく速い…　ぐあっ！！　ザザー』

入った無線は、その機体が撃破されたのか、沈黙してしまった。

サコン「…今の通信、敵は西ゲートって言わなかったか？」

カトラス「…聞こえた。　と言うかここは…」

猛烈に嫌な予感が２人を襲う。

…いや、予感に頼るまでもなく、ここは西ハンガーだった。ゲートからは、歩いても１０分かからない近さ。

そして迫る６機のＭＳ…。

カトラス＆サコン「マジかよ?!」

フィフス「やっほ～～～!!」

フルスロットルで突っ込んで来る、ドワッジ改。

ノン「３、４、５、６っと」

エイス「ノンってばマメだね～」

しっかり、直撃させた数を数えているらしいノン。

何の悪夢か、西ゲートを襲撃して来たのは、インドラ最強の部隊、『ラピスラズリ』だった。

エイス「あ、逃げ遅れた工事のオジサン見っけ♪」

ドワッジ改がバズーカを構える。

アイン「やめとけよ。　弾がなくなったら遊べないだろ？」

そう言ったアインのゲルググが軽くジャンプすると、落下の勢いをつけて、サコンを蹴り飛ばす。

哀れ、軽々と吹き飛び、ハンガーの壁にめり込む作業ザク。

エイス「そっか。　じゃ、オジサンお疲れ様♪」

今度は、ザクタンクの後に回り込んだドワッジ改が、器用にザクタンクを横倒しにする。

ノン「はい、7。　2人とも早くしないと、時間まであと15分し

かないよ？」

アイン＆エイス「は～～い」

突風のように、ラピスラズリは過ぎ去った。

そして残されたのは、頭からハンガーの壁にめり込んだ作業ザクと、横倒しになって動けなくなったザクタンク。

サコン「…これは、助かったって言うのか？」

なんとか自力で、壁から抜け出すサコン。

カトラス「…どうだろうな？

というか、ヤタガラスって、もっと華々しい活躍をする部隊に出世した気がしたんだが、俺の勘違いだったらしい」

サコンの作業ザクに、なんとか起こしてもらうザクタンク。　幸いにも、２人にたいしたケガはなく、機体も無事らしかった。

カトラス「俺たちは、お呼びでなかったらしいな…」

そう言ってコックピットを開くカトラスだったが、なぜかサコンが動かないのに気がつく。

カトラス「どうした？　やっぱ機体がポシャったか？」

サコン「…いや。　アレ、使えないかと思ってな…」

サコンは、吹き飛んだ倉庫の一角を見つめていた…。

【2】

上空を舞う、ガウの編隊。

それらは一度目の爆撃を終え、二度目の爆撃コースに入ろうとしていた。

マンネ「さすがサンサレア様。　こうまで敵の虚を突けるとは」

マンネは、亡き上官の知略に、正直驚いていた。　ユービット陥落に対しての切り札『プランF』とは、敵の追撃を誘い、その補給線が延びきった瞬間、補給基地を襲撃するというものだった。

実行当初、被害覚悟の強襲作戦だと、マンネは考えていた。　しかしそれは、帝国の傲りの隙を突き、大規模な奇襲となる。

油断がなければ、いくらミノフスキー粒子でレーダーが無効化できるとはいえ、敵中突破の襲撃など、そうそううまくいくはずないのだが…。

インドラ兵「あと3分で、爆撃2回目に入ります。　ラピスラズリの回収はどこで行いますか？」

プランには、サンザメヤ郊外の小さな空港を一時的に占拠する案と、高速道路に強行着陸する案が併記されていた。　また最悪の場合は、ＭＳを捨て、ガウにつんだ連絡機でパイロットだけを回収する手筈だ。

マンネ「まずは、時間通りにラピスラズリが基地を離脱できるかだ。
その状況を見てから判断する」

インドラ兵「はっ！」

ざっと見る限りでは、既に基地は燃え盛り、大きな被害を受けているようだった。　補給線の遮断が狙いであるから、補給物資のありそうな所を、集中的に狙ったせいもある。

インドラ兵「爆撃コース侵入まで、あと1分！」

マンネ「あいつらも知っているとは思うが、もう一度徹底させろ！
爆撃終了後、１０分を過ぎたら置いて行くとな！　あと１５分だ！！」

インドラ「了解しました！」

ガウが再び、爆弾倉を開いた…。

【3】

プランFを基地側視点で眺めると、それは運の悪さも大きく作用していた。

基地周辺の視察に出ていたガント大佐が敵と遭遇し、真っ先に戦死してしまう。　そのために、指揮系統がかなり混乱していたのだ。

しかも悪いことは重なるもので、副司令格のシュバルツが不在である。

命令がないも同然のところへ、元々の基地の手薄さが加わり、西ゲートはラピスラズリに軽々と突破されてしまう。　同時に南の部隊は、ガウの攻撃を受け、阻止するどころか、大きな被害を受けていた。

追撃のために、飛行型や可変型のＭＳが出払っていたため、空を飛ぶガウ相手に、不利な戦いを強いられたせいだ。

ラリー「アルヴィン！　敵のガウは何機だ？」

アルヴィン「1機落として、あと8機！　奴らまた引き返してくるぜ！」

そして唯一の例外、Ｚ－Ｐｕｌｓに乗るディジョン隊ではあったが、その力をもってしても、たった2機では、ガウの編隊は阻止できないでいた。　ガウとて丸裸ではなく、戦闘機が護衛しているのだ。

そこに、ようやくディジョンとレナが加勢する。

ディジョン「…待たせたな2人とも！　3時方向より突っ込み編隊を乱す！　それから…」

指示を出した。　だが…。

アイン「『それから』じゃなくって、『その前に』じゃない？」

トゥーエ「また会ったね♪　ガンダムもどきさんたちっ♪」

ガウを迎撃しようとしたディジョンを、ラピスラズリが出迎える。

ご丁寧に、またもや回線を合わせて挨拶までしてきた。

アルヴィン「またお前らかよ！　つか、前より多くねぇか？」

ノン「初めまして～。　前は、他のコたちがお世話になったそうで」

スリス「苦戦したんだって？　あんたたち、強いの？」

前回、輸送の都合でいなかった2人も加えて、ラピスラズリは6人の豪華メンバーだった…。

【4】

4対4で押されたのに、今度は4対6かよ！

正直、自信なんて欠片もない。

エイス「1番、エイス、いきま～す！」

軽く前のめりになり、熱核ホバーの驚異的スピードで近づく、エイスのドワッジ改。

彼女はヒートサーベルを大きく横薙ぎにして、アルヴィンのバックジャンプを誘う。　その思惑通りに、後へ逃れるアルヴィン。　たしかにヒートサーベルだけを見れば、理想の回避動作だったのだ。

しかし、その着地点を読み、バズーカを浴びせるフィフス。　攻撃は回避したものの、至近弾の爆風でよろめいてしまうアルヴィン。

アルヴィン「つっ！！」

フィフス「本気出せばこんなものだよね？」

撃墜を確信したふうのフィフス。　なぜなら体勢を崩したアルヴィンを、アインがライフルで狙って…

…いなかった。

アインのゲルググが構えていたのは、ビームライフルではなくてシールド。

メリャーナ「人手不足みたいですので、私もお手伝いいたしますわ」

アイン「…邪魔されたし…。　たしか前も、こんな役だったよね？　日頃の行いが悪いのかな？」

メリャーナの機体は、白地に金色の装飾を施したRジャジャ。　そのビームライフルが、アインの攻撃を妨げたのだった。

マリー「メリャーナ様！　あまり突出されませぬように」

その側にピタリと張りつくのは、マリーのガズエル。

エルフレア「メリャーナ様は、私がお護りいたします」

反対側には、いつの間にかBX（ブラックエックス）。　メリャーナとは正反対の漆黒が映える。

ノン「あと１３分２０秒だね…。　みんな、なんとかなりそう？」

ノンは、自分のドワッジ改を少し前に出す。

その手に持つのは、ラテーケンバズーカではなく、かなり大型のビームバズーカだ。　外部ジェネレーター式なのか、大柄で取り回しはしづらそうだが、その威力は基地の惨状を見れば簡単にわかった。

エイス「う～ん、１人１機はキツいかもね～？　みんなで殺る？」

スリス「付き合ってもいいけど…」

ドワッジ改同士、ゲルググＦｓ同士がひとまとまりになった…。

第４７章　壊滅のサンザメヤ（前書き）

（原作との違い…

…のはずだったけど）

ディジョン「レナ！　やはり手強いな…」

レナ「はい…。

と言いたいところなんですが、隊長。　ここ、冒頭文です。

どうやら、章が変わったようですね？」

ディジョン「そうなのか？　だが、ここは後から読む読者に配慮して、次の章に行くぞ！」

レナ「なるほど。　戦いを読み進める間に、余計なコーナーがあると、興が削がれますからね」

（1回休みらしい。　続いて本編をお楽しみ下さい）

第４７章　壊滅のサンザメヤ

ガウの編隊が、再びサンザメヤを狙う。

基地からもミサイルが放たれるが、最大濃度のミノフスキー粒子、フレアやＥＣＭなどの妨害にあって、ガウまで到達できない。　稀にあっても、ガウの機関砲がそれを撃ち落としてしまう。

それどころか、防空設備自体が、ガウのビーム砲で返り討ちに遭う。

ラリー「くそっ！」

そんな惨状にいたたまれなくなったのか、ラリーのＺ－Ｐｕｌｓが変型し、ガウの編隊に向かおうとする。

トゥーエ「あたしを無視するなんて酷いなぁ～」

アイン「まずは、僕らと遊んでくれなきゃ」

しかし、２機の射撃がそれを許さない。　そればかりか、同じくゲルググに乗るスリスが、ディジョンやメリャーナたちを飛び越え、

ラリーを斬りつける。

ラリー「ガキのくせにっ！」

スリス「子どもは遊んでくれないと、スネちゃうんだよ？」

サーベルの応酬が始まる。

その背後をレナが攻めようとするが、スリスはそれを見透かしたかのようにサーベルを後にも一閃させ、レナの動きを牽制する。

そこへ、トゥーエとアインが同時にレナに斬りかかり、無理な横っ飛びで回避せざるを得なくなった。

ディジョン「レナっ！」

ノン「他の人を気にしてると、自分が死んじゃうよ？」

援護に向かおうとしたディジョンたちを、ノンがビームバズーカで撃つ。　辺り一帯を薙ぎ払うかのような一撃に、すべてのＭＳがバ

ラバラに回避しなくてはならなかった。

エイス「ん～。　迷ったけど、やっぱりあたしは黒いのがいいかな？　あたし、黒好きだし」

散った中から、ＢＸを狙うエイスの攻撃。

しかしそれは、軽々避けられたばかりか、バスターライフルで反撃されてしまう。　しかもエルフレアは、重いバズーカを持つノンにまで銃口を向け、至近弾を与えていた。

エルフレア「…メリャーナ様に手出しをする奴は、私がみんな倒してみせるっ！」

マリー「ちょっと、あなたねぇ…」

メリャーナ「あはははは…」

メリャーナ本人に苦笑されながらも、エルフレアの動きは、整備が完璧なＢＸに支えられ、一際輝いていた。

ディジョン「…この前とは、まるで別モノだな…」

エルフレア「あの時のＢＸと一緒にされてもねっ！」

たしかに前回は、度重なる波状攻撃の後、補給もしないままの戦いだった。　それにエルフレアは言わなかったが、ディアボロシステムは、本人の精神を酷使するので、長期戦を戦うには辛いという一面もあるのだ。

エルフレア「だから、メリャーナ様に近づくなって言ってるだろっ！」

メリャーナ「えと…」

フィフス「近づいて来たの、そっちじゃん！」

エルフレアは、メリャーナの方から斬りかかったフィフスにまで、横槍を入れていた。

アルヴィン「…愛は偉大だな～」

マリー「…何ともお答えいたしかねます」

違った意味で、エルフレアに圧倒される者もいるようだが、それにしても、エルフレアが活躍しているのは間違いない。

エルフレア「…そこ。　どかないと死ぬよ！」

エルフレアのサテライトキャノンは、ディジョンと空中戦を交えて

いたスリスまでも撃つ。

スリス「おっと！」

横からの鋭い一撃ながら、スリスはそれをかわした。

スリスは。

ただし、その遥か先を飛んでいたガウが火を吹く。

本来の威力には遠く及ばないとはいえ、ガウくらい軽く落とせるのは、前の戦いでも証明済みだった。

スリス「…マジありえないから。　バカにして～」

スリスはディジョンから、エルフレアに目標を変える。　しかしエルフレアは、スリスの攻撃を避けながら、またノンを撃っていた。

ノン「浮気する男は嫌われるよ？」

エルフレア「何を言う！　私はメリャーナ様一筋だ！！」

メリャーナ「…だから、こんな所でさあ…」

メリャーナはエルフレアを支援はするものの、顔はかなり困惑している。

一方で相手を失ったディジョンは、トゥーエをマリーと共に攻め立てていた。

エイス「ノン！　あんな変なのに付き合ってたら、時間がいくらあっても足らないよ？」

ノン「あと１０分ないからね。　みんな、奥の手いこう」

呼び掛けに応じて、ラピスラズリたちの動きが変わる。

まずは、薙ぎ払うようなビームバズーカ。　派手な攻撃だが、逃げ遅れたＭＳはいない。

しかし、そこからが違った。

アイン「そこの白いのっ！」

トゥーエ「目立つから」

スリス「最初に」

フィフス「狩っちゃう？」

エイス「あたしは黒いのが好みだしね」

ラピスラズリは、他のＭＳに一切構わず、メリャーナだけに一斉に銃口を向ける。

マリー＆エルフレア「メリャーナ様っ！！」

必死にメリャーナを庇おうとする２機。

ラピスラズリ「…と思ったでしょ？」

しかしメリャーナに一斉射撃が放たれることはなく、銃口は、庇うために飛び込んだマリーに向けられる。

ノン「エイスっ！　必殺技の名前っ！」

エイス「…え？！　急に言う？？？　…今は６人だから、六獄滅殺陣…とか？！」

意味はよくわからないが、銃口はガズエルを確実に捉えていた。

ラピスラズリ６機からの一斉射撃を全部避けられるはずもなく、全身に被弾し、後に吹き飛ばされてしまう。

ノン「あれ？　死んでないや？」

ガズエルは両手を失い大破したものの、爆発はしていなかった。

スリス「エイスが一瞬遅れたからだよぉ～」

エイス「だって、ノンが急に名前なんて言うからぁ～」

攻撃を終えたラピスラズリは、ディジョンたちの反撃を軽々と避けながら、再び一ヵ所に集まった。

ただ、結果には不満なようだ。

ノン「あと8分。　次はエイスも外さないでね？　もちろん他のみんなも」

フィフス「了解っ」

また一斉に動くラピスラズリ。　今度狙われたのは、アルヴィンのようだが…。

【2】

アルヴィン「ちくしょっ！」

吹き飛んだのは、そのままアルヴィンだった。　さらに厳しさを増した攻撃に、アルヴィンは脱出するだけで手一杯。

周りが援護しようにも、自分が代わりに狙われるかもと思うと、どうしても動きが鈍ってしまう。

ノン「…目標、変えてくると思ったでしょ？」

どうやらラピスラズリの本領は、瞬間的な意思疎通にあるようだった。

トゥーエ「もっと激しくイクよ～。　六国滅亡陣っ！」

三度目の必殺技は、微妙に名前が違った。

まあ、どうせ彼らのことだから、名前も役割も、その場のノリとフィーリングなのだろうが、それが逆に動きを読ませない。

結局、その攻撃で致命傷になった機体はなかったが、ラリー、レナ、ディジョンが1発ずつ直撃を受ける。　今度は集中すると見せかけて、各機がそれぞれ別のＭＳを狙ったのだった。

トゥーエ「ごめんね～。　あたしって優柔不断だから♪」

わざとらしく、そんな事を言うトゥーエ。

メリャーナ「…変幻自在ってことかしら？」

ノン「…せっかくだから、種明かししておくと、私たちはみんな、クローンなんだよね。　だから、ふだんはふざけてても、最後の最後には心が通じ合う、みたいな？」

トゥーエ「え～　ノンってば何か難しいこと言ってる～」

エイス「別にそんなこと考えてないしぃ～」

…あまり、仲間たちの賛同は得られなかったようだが、そんな会話の間に、４回目となる必殺技の準備は整ったらしい。

そうはさせまいと、皆さっきからライフルで牽制しているのだが、一向に効果は上がっていない。

ノン「あ、もう5分切ってる。　もう４回目始めま～す」

ラピスラズリが一斉に狙いを…

【3】

エルフレア「なら、こっちから行ったらどうなんだっ！」

狙いを定めるられる前に、先に単機で突っ込んだエルフレアのＢＸ。

まずは、アインのビームを盾で受けて防ぎ、サーベルを抜く。　そしてそのアインではなく、比較的動きの重いノンを狙った。

ノン「…さすがに、このコ持ったまんまじゃ、接近戦は無理かな」

ノンは、バズーカから手を離して回避に移る。　バズーカが両断された。

アイン「置いてかないでよ～

…ってあれ？」

振り向いて攻撃しようとするアインを振り切り、フィフスにショルダーバルカンを放つＢＸ。　被弾を嫌ったのか、ドワッジが下がる。

トゥーエ「…なかなかいい調子じゃん？」

スリス「でも、それぐらいにしとかない？」

だが、そんな勢いに任せて突き進むＢＸに、２機のゲルググが、左右からぴったり同じタイミングで、ライフルを射ってきた。　どちらも避けられなかったエルフレアは、左をシールドで防いだものの、右に直撃を受けてしまう。

アイン「だから、僕の相手もしてって」

さらに、その背中をアインに蹴り飛ばされ…。

ノン「ようこそ」

よろめいて、ふらふら2、3歩前に出たところを、副武装の９０ミリマシンガン２丁に持ち変えたノンが、蜂の巣にする勢いで撃ちまくった。

ノン「…残り２分３８秒。　死んだかな？」

ノンが射撃をやめる。　それまでにかかった時間、わずかに３０秒ちょっと。　他のＭＳが援護するヒマもなかった。

ラリー「……。」

レナ「……。」

ガズエル、Ｚ－Ｐｕｌｓに続き、ＢＸまでもが一瞬でやられたことに、絶句する２人。

ＢＸは全身に直撃を浴びていて、ズタズタになっていた。　ただし、まだ倒れてだけはいない。

エイス「あ、そいつすっごい堅いから、止めはきちんと刺さないとダメだよ？」

前の戦いでＢＸを知るエイスは、そう言うと一気に間合いを詰める…。

【４】

霞む意識。

エルフレア「…私は…　こんな所で…

…ち、父上…　母…う…え…

…メリャーナ様っ！！」

神経を機体に繋ぐディアボロシステムでは、機体のダメージが、ともすればパイロットの精神に影響を与えてしまう事がある。　わずかに残った意識の中で、必死に何かを叫んだエルフレア。

だが、何を叫んでみても、ＭＳ戦には何の意味もない…

…と思われたが。

？？？「…助ケがイルノカ？

変な声が聞こえた気がした。　そして、背筋に悪寒が走る。

その直後に、エルフレアの脳裏に浮かんだのは…

男「…それを聞いてどうするつもりです？　これから死ぬって言うのにっ！！」

懐に手を入れると、拳銃を取り出す…

どこかで見た男。

殺気?!

エルフレア「右後ろかっ?!」

思わず、振り向いただけのような気がした。　しかしＢＸは、右後に脚を蹴り出していた。　エイスのドワッジが、蹴られてよろめく。

エイス「まだ動けるの？　っていうか、あたしの動きを読んだ?!」

…さらに、背筋に冷たい感じ。

次に見えたのは、城壁から吊るされた、彼の最も敬愛した…

いや、吊し上げようとする誰か…。

エルフレア「やめろっ～～～！！！！」

その手を止めさせるべく、エルフレアは手を伸ばしたつもりだった。

しかし、実際に飛びかかったのは、エルフレア本人ではなくＢＸで…

サーベルを振りかぶっていた、ドワッジの腹部。　ちょうどコックピットの位置に、左手のシールドが突き立っていた。

フィフス「…っ？！」

あまりの衝撃に装甲板が凹み、シートをエアバックが包み込む。

しかし、それでも衝撃を吸収しきれず、フィフスは一瞬、意識が飛んだ。

ディジョン「レナっ！！」

その一瞬に反応できたＭＳが２機。

レナのＺ－Ｐｕｌｓが、ビームでドワッジの左脚を撃ち抜く。　熱核ホバーが片方だけ機能を失い、しかも操縦者の意思がなかったドワッジは、その場でぐるぐる回りだしてしまう。

ノン「フィフスっ！」

ディジョン「もらった！！」

フィフス「……っ？！！」

フィフスが立ち直るまでに要した時間は、わずかに７秒。　けれどその７秒が経った時、彼のドワッジ改は、ディジョンのＺ－Ｐｕｌｓのビームサーベルに、上半身をざっくり斬られていた。

アイン「おい、フィフス！？」

スリス「フィフスっ？！」

呼びかける仲間たちに言葉は返らず、すぐに機体は吹き飛んでしまった…。

【5】

メリャーナ「落としたの？」

そう言いながらも、メリャーナはビームライフルでラピスラズリを撃っていた。　驚異的な粘りと、装甲の堅さを見せたＢＸだったが、傍目にはどう見ても無事には見えない。

すぐに助けなければ。

トゥーエ「フィフスが殺られた？！」

同じく信じられないと言った言葉を吐きながら、メリャーナに応射するトゥーエ。　そうしながらラピスラズリは、一旦ＢＸから離れる。

アイン「まさか、僕たちを倒すなんてね…。　でもあいつは！」

ゲルググが、ライフルを再び構えたが…。

マンネ「時間だ、戻れ！」

怒声。

ノン「えっ？」

ノンが機体の時計を見ると、カウントは赤い数字になり、逆に２１、２２と増えていっていた。　つまり、予定の時間過ぎていたのだ。

アイン「おっさん！　また邪魔すんのかよ！　こっちはフィフスが

殺られたんだぞ！」

『怒』の感情が欠落しているはずのラピスラズリにしては、珍しく語気が強い。

マンネ「それでも、時間は時間だ！　基地の外を見ろ！！」

基地の外を眺めるラピスラズリ。

すると基地の北の方から、白いガルダが悠々と迫り、何かを落としているのが見えた。　かなり遠いからわかりにくいが、人型をしているような物もあり、空挺ＭＳ部隊に見えなくもなかった。

さらに基地の西では、もうもうと砂煙が上がっており、その先頭にザクタンクの姿が見えた。　こちらは、戦車部隊なのだろうか？

ノン「…敵の援軍が来てるから、帰ろうって？」

マンネ「お前らは、インドラの秘密そのものなのだぞ！　基地の壊滅という目的を達した今、余計な損耗は避けねばならんのだ！」

しばらくの沈黙の後、ため息が５つ。

アイン「ここで文句言うと、本気で置き去りにされそうだね…」

スリス「雑魚たくさん相手にしても、つまんないし…」

トゥーエ＆エイス「じゃ、あたしたちは帰るから。　今回は勝ちを譲ってあげる～」

また、それが当たり前かのように、無防備にその場を後にするラピスラズリ。

だがやはり、追撃する余力はないのだったが…。

【6】

ラピスラズリが引き上げた後、とりあえず全員がメリャーナのガル

ダに集まっていた。

負傷者は治療の必要があったが、基地はまだ激しく燃え続けていたうえに、市街地の病院にも、延焼の恐れから入れなかったためだ。

ガルダは大きいだけあって、かなり高い母艦機能を持っている。

エルフレア&マリー「…申し訳ございません…」

その病室のベッドに寝かされていたのは、共に乗機をボロボロにされたエルフレアとマリー。

幸い、コックピットをやられた訳ではなかったので、比較的軽傷で済んではいたが、それでも全治に数週間はかかると、軍医には言われていた。

メリャーナ「たしかに、ラピスラズリの1機を撃墜したのは、ディジョン大尉ですけれど、これは全員の連携で上げた戦果ですわ。相手も連携したけれど、こちらも連携が良かったから、被害が少なくて済んだのです」

マリーとエルフレアを心配そうに見ていたメリャーナが、後をちらっと見る。

そこにいたのは、サコンとカトラスだった。

メリャーナ「あなた方の策がなければ、被害はもっと拡大していたでしょう。　偽兵援軍の計、お見事でした」

そう。

基地の外から迫ったという援軍は、この2人が作り出した、幻の援軍だったのだ。

カトラスは、ザクタンクでワイヤーを通したドラム缶を引きずり、サコンは、空からＭＳに見えそうな物ををつけた、パラシュートを投げ落としたのだ。

分かってしまえば何でもない事だったが、そんな奇策が効を奏する事もある。

サコン「…力で駄目なら、頭で勝負ですよ」

言ったサコンと、カトラスが顔を見合わせる。

本当なら胸を張るところだろうが、ラピスラズリに相手にもされなかったせいもあり、心境は複雑なようだ。

メリャーナ「とりあえず、ガルダでこのままサークレットへ行きましょう。　私たちがこれ以上サンザメヤにいても、できることはありませんから」

飛び立ったガルダの下で、本当の援軍が、ようやく復旧作業を始める…。

第４８章　人材（前書き）

（原作との違い編）

レナ「隊長。　戦いも一段落したところで、解説を再開しましょう」

ディジョン「そうだな。　では次は、変わってしまった世界観だ」

レナ「…世界観まで変えたんですね。　この小説、元々は　『ターンＡに近い』　って思ってましたが…」

ディジョン「黒歴史とあるからな？　だが、この編集版小説は、どちらかと言えば

『Ｘに似ている』

な。　かつて戦争があって、世界が荒れたところから始まったしな」

レナ「…でも、ターンA風から、X風に変えたのはどうしてなんですか？

ディジョン「これも、物語の整合性を作るためだ。　編集前のトピ版では、ある参加者はわざわざ内政キャラを作り、MSを開発させたが、その側で別の参加者は、ピンチになるたびにMSを遺跡から発掘して強くなった。

どうやって強くなるかは勝手だが、発掘側がやり過ぎると、それは卑怯だという声が出る。　そしてトピでは、現実にそうなってしまった」

レナ「…やらかしちゃいましたね～」

ディジョン「それにだな？　発掘したMSがすぐに動けて、しかも強いなんてのは、機械の構造を熟知すればするほど、あり得ないことなんだ。

鉄は錆びるし、埃は付着する。　核融合炉が動力源のMSを、長年放置するなど問題外だ」

レナ「出ましたね。　編集者名物、妙なこだわり」

ディジョン「細かすぎるのもどうかと思うが、代わりに矛盾は減っているはずだ。

だからもし、まだ矛盾があったら容赦なく書き込んでくれ。　そこはキッチリと…」

ディジョン「…こいつに責任を取らせるからな」

マヒロ「…は？　なんであたしが？？？」

レナ「だってマヒロさんって、編集者の作ったキャラですよね？」

ディジョン「つまり連帯責任だ」

マヒロ「あ～　そうなるんだ…」

レナ「がんばってくださいね。　じゃ私たちは、次の解説のリハーサルに入りましょう」

（続く）

第４８章　人材

？？？「陛下。　なぜ、あの２人なのでございますか？」

？？？「何となくだが、資質を感じるから、かな？」

？？？「…資質、でございますか？」

？？？「そうだ。　…それはともかく、あいつの手足になる者が必要だ。　それができれば、あいつは飛躍できよう」

？？？「臣下くらい、すでに抱えていると思いますが？」

？？？「…人数や質を、どうこう言いたいのではないのだ。　起爆剤とでも言おうか」

？？？「…なるほど。　しかし、片や帝国狩り、片や帝国屈指の大貴族でございますぞ？」

？？？「私が見る限り、帝国狩りが帝国狩っているのは、成り行きだな。　そして大貴族は、大貴族であるがゆえに、今の帝国に不満を抱えているように見える」

???「…ほう」

???「どちらか片方でも、腹心として取り込めればな…。　ただ帝国に骨も髄も捧げたい、という者が仕えても邪魔なだけだ。　かと言って、帝国の破壊を目論む者が臣下になっても、現実にそれはできまい」

???「…内部改革をさせるおつもで？」

???「それが理想だが、無理だと私は見ている。　奴らは甘くない。　おそらくは、少々手荒な改革になるだろう」

???「お見事な分析でございます。　あの時の陛下に、その謙虚さがあれば、事はここまで大きくならなかったでしょうに」

???「主に皮肉を言うとは、いい度胸だ」

???「歳ですかな？　最近は、つい遠慮というものを、つい忘れてしまうことが多くなりました…」

？？？「…まあよい。　とにかく奴を2階に上げ、梯子を外してしまえ。　それで我らも動きやすくなるし、今の反帝国レジスタンスとは違った気風が、世界に生まれよう。

今のレジスタンスは、帝国憎しで動いている。　それではいくら血を流しても、帝国に取って変わり、世界を治める事は叶うまい」

？？？「承知いたしました。　細かな段取りを練り上げます」

？？？「頼んだぞ」

？？？「御意」

【2】

レアルタ「…マジで？！　ヴァイスさん、この仕事やりましょうよ！」

レアルタは興奮しているようだった。　原因は…　目の前のＭＳか。

ヴァイス「しかし、ジム３にリックディアスとは、ずいぶん気前がいい雇い主だな？」

レアルタ「そうだよな。　いったい誰なんだ？」

レアルタは率直に疑問に思ったようだが、その疑問に答えは返って来なかった。

ジャンク屋「訳アリの依頼に、そんなん聞くだけ野暮だぜ、旦那方。だいたい、教えようにもあっしが知らねえっての」

レアルタ「…そんなもんか…」

ジャンク屋「そんなもんだぜ。　だから殺し屋が撃ち落とされようが、捕まって拷問されようが、秘密はバレねぇってワケさ」

ヴァイス「…俺たちは殺し屋じゃない」

ヴァイスが、そんな言葉を吐く。

ジャンク屋「それこそ知らねぇ…　つか、興味ねぇよ。艦でもＭＳでも、落ちれば人は死ぬ。　コックピットを狙わなければ、なんていう甘いことほざく馬鹿がたまにいるが、ＭＳはそれ自体が弾薬庫で、発電所で、おまけに放射能施設なんだぜ？最近は脱出ポッドの性能がよくなったが、それでも落とされれば半分は死ぬ。　それが、機械のプロから見た現実だ」

何か含むところがあるのか、滔々とジャンク屋は語った。

ヴァイス「…信じるものは、人それぞれさ。　一緒なのは、俺に関わるような人間は、絶対天国に行けないことぐらいだな」

ジャンク屋「違げぇねぇ」

ジャンク屋だけが、笑い声を上げる。

ジャンク屋「とにかく渡したぜ。　ジム３に特注のビームスピア、

サーベル2本。　リックディアスは脚部推力強化。　契約は果たしたからな？　これから逃げた、止めたは死刑だぜ？」

ジャンク屋は、ヴァイスとレアルタ交互に眺める。

ヴァイス「分かってる。　大型艦3隻だったな。　きっちり契約は果たすさ」

ジャンク屋「期待してるぜ」

ジャンク屋は、自分が依頼主でもないのに、そんなことを言った…。

【3】

ミク「ただいま～」

侍女「お帰りなさいませ」

そんなふつうのようで、ふつうじゃないやり取りが聞こえた。

マーガレットに帰って来てから、ミクはずっと学校に通っていた。

ミクが1週間以上も学校をサボらないのは、かなり珍しい。

ミク「お姉いる？」

そんなことを思っていたら、本人が部屋にやって来た。　貴族なら、たとえ姉妹でも会う時は使者を介せ、みたいなことを言う家もあるらしいけれど、ミズサワ家にそういうものはなかった。

マヒロ「鍵はかかってないから」

おまけに、衛兵までいなかったりする。　不用心とよく言われるが、これまた気にしたことはない。

ミク「やっ！　お姉ただいま」

やけに元気がいい。　と言うか、シリアスモードが終わったと言うべきかな？

マヒロ「おかえり。　おやつのアイスなら、用意してくれてるんじゃない？」

ミクがアイスに目がないのは、小さい頃からだった。『お腹を壊す』と止められていた時期もあったけれど、当主があたしになってからは好きにさせていた。見た目より全て意味でヤワじゃないのが、ミクというコなのだ。

ミク「アイスは食べるよ？　それよりも、嬉しい知らせと、まあまあな知らせと、つまんないの知らせがあるんだケド？」

マヒロ「なにそれ？　でも、昨日までの報告なら受けてるわよ？」

当たり前だが、すべての情報は、当主であるあたしに知らせが来る。

ミク「だって、最新情報だもん」

それを知らせたくて来たってことね。そのあたり、ミクもまだ子どもだと思う。

マヒロ「何かな？」

あたしは、執務の手を止めて振り返る。

ミク「まず、嬉しい知らせから♪　マキュベリーアイスが、期間限定の新商品発売するんだって！」

…本気で嬉しそうよね。

ミク「それから、まあまあの。　マーガレット初のＭＳが完成したよ！」

レイ大尉が来てくれて１０日ちょっとだから、かなり早いペースじゃないのかな？　詳しく話を聞くと、旧式のハイザックらしいけれど、ＭＳには間違いはない。

こうして慣れていけば、マーガレットでＭＳが大量生産できる日が来るかも知れない。

ミク「最後は、つまんない…　って言うか、当たり前なお知らせだよ」

逆に気になる。　ミクが楽しそうにしていないところを見ると、悪い知らせなのかも知れない。

マヒロ「…何があったの？」

ミク「それがね…。　本国の大学と、士官学校の卒業準拠の資格もらった」

マヒロ「…そっか。　ミクもついに卒業…

…

…

…は？

大学と士官学校？？？」

ミク「うん。　通信で前からやってたの。　準拠だから、軍に実際に任官したかったら、半年間の実務訓練受けなきゃだけど」

マヒロ「…あの…　ミクさ～ん。　たしか、帝国の大学も士官学校も、ふつう２２歳で卒業だった気がするんですけど～」

帝国も、そのあたりは旧世紀から変わらない。

小学校６年、中学３年、高校３年、大学４年だ。　帝国特有なのは、大学の代わりに、軍の士官学校に行く人がいるくらい。

ミク「…知ってるよ？」

逆に不思議そうな顔をされた。

マヒロ「じゃ、なんで…」

そこまで言って、思い出した。　帝国の学校では、飛び級と併学が全面的に許可されているんだった。　つまり、優秀な生徒は、いくらでも先に進めるシステムになっている。

ミク「…あたしが中学で飛び級しないの、不思議に思わなかった？」

マヒロ「そういうことか…」

つまりミクは、中学を飛び級するより、簡単な授業の合間を利用して、士官学校と大学の勉強をしていたってことか。

しかも、それを当たり前の知らせと…。

マヒロ「新作アイス、いくらでも買ってきていいから」

あたしは、領主専用のブラックカードを渡した。　利用額無限大の最強のカード。　その気になれば、アイスを売っている店をも買えてしまうカードだ。

受け取り、喜んで街に駆け出して行くミクを、あたしは笑顔半分、ため息半分で見送った…。

【4】

結局、渋る叔父をマリアベルが焚き付けて、ようやく出撃の段取りとなった。

僕が指揮する先鋒と、叔父の本隊。　先鋒はバーミンガムを旗艦に、サラミスばかり。　本隊は、ラーカイラム級『キリサメ』を旗艦にして、護衛はマゼランが多い。

総勢は４０隻くらいで、サイド１つ制圧するには、ほどほどの戦力だ。　国家としてまとまっているならともかく、ただ賊の巣窟になっているだけのコロニーなのだ。

霧雨「マリアベル。　敵の戦力は？」

マリアベル「艦は何隻かいるようですが、前に出てくる様子はありません。

ただし、コロニーを帝国が治める事を嫌った反帝国勢力と、今まで通りの無法を好む賊徒が連合したようです。　ＭＳが５０機を越えて、かなりの数に膨れ上がっています」

…これが、宇宙の現状だった。

治安が崩壊しているコロニーでも、帝国に頼る気がまるでない。帝国に支配されるくらいなら、賊の方がマシと考えて、こうして連合までする。

霧雨「賊に纏まりは？　フェニックスナイツが全軍を指揮するようなら、作戦を立て直さないといけないかも知れない」

ない。　断言したくなるくらいのことを、あえて口にしてみた。

フェニックスナイツは、帝国狩りとして猛威を振るっていたけれど、徒党を組んだことは、数えるくらいしか確認されていない。　理由はわからないが、賊に堕ちるつもりはない、と言っているようにも

見える。

マリアベル「ご懸念には及びません。　そればかりか、賊徒同士のまとまりも怪しいぐらいです。　ただの烏合の衆です」

マリアベルは、自分でＭＳに乗ることは少ないし、あっても支援が中心だった。　どちらかと言えば、彼女の本分は分析や作戦の立案にある。　操縦や指揮は、コーディネイターと言っても、いわゆる人並み、だ。

霧雨「…まずは、リバルに突っかけさせるんだ。　適当な頃合いで、不利を装って退く。　追ってきたところを艦砲で叩いて、最後に僕が崩すよ」

マリアベル「上策です」

マリアベルは、手短に僕の作戦に賛同した…。

【5】

ミサト「お嬢？　援軍…　というか、共同軍は出さないことにしたの？」

執務が一段落したあたしは、今度は軍の司令部で、ミサトと話していた。

ミクは、自分のＭＳに関しては熱心だし、頼めば何でもしてくれるけれど、必要のない時は呼ばないことが多かった。

あと、ケイさんは偶然新兵の訓練に出ていて、レイ大尉は相変わらず技術的なことをしていた。

マヒロ「特に要請はなかったし、必要だとも思えないからね。　さすがに何もしないと礼儀を欠くから、補給ぐらいはうちでするけど」

それも、補給がいるような長期戦になればね？

ＭＳこそ同じくらいいるけど、艦では霧雨大佐の圧倒的優位。　何より、兵の質が違いすぎるはずだった。

ミサト「でしょうね。　あと、勝った後の祝賀使を決めておかないと」

マヒロ「それは、あたしが自分で行くつもり。　賊の押さえてたコロニーとはいえ、サイド１つとなれば、領地は倍になるわけでしょ？　大勝利じゃない？」

ミサト「領地が倍は確かだけれど、荒れた領地を立て直すのに、どれだけかかることやら…」

それも確かだった。　領地を得れば、すぐに国力が上がったのは、遥か旧世紀の、そのまた遥か前のこと。　高度な文明が発達した現代では、未整備の領地は重荷でしかない。

ケイ「…また２人して、甘い考えをしているな？」

声のした方を見ると、ケイさんだった。　ノーマルスーツ姿のままだから、訓練が終わったばかりなのだろう。

マヒロ「…甘いかな？」

ケイ「サフラン１０に、ガンダムの回収に向かった部隊が、敵対勢力に破れたのを聞いていないのか？　フェニックスナイツが絡んで、

ややこしい事になったらしい」

フェニックスナイツ…。　帝国軍だけを狩るという傭兵よね…。

ミサト「…ですが大尉？　フェニックスナイツは、２人組の傭兵ですよね？　いくら精鋭でも、２機で４０隻は倒せないのではないのですか？」

ケイ「…中尉。　前の戦訓がまったく生きていないな。　２機のエースだから、２０機ほどには相当する。　２０機なら４０隻は大丈夫。　どうせそんな考えなのだろうが、それではいつか自分が死ぬか、主君を殺すぞ」

ケイさんは、寂しそうに首を振って見せる。

ケイ「主はともかく、軍人の武官がこれでは、先が思いやられる」

マヒロ「…そこまで言う？」

あたしが、ケイさんに強いことを言ったためしは、ほとんどない。
だけどさすがに、ミサトが可哀想だと思ったから抗議してみた。

ケイ「本国もそう言っているようなものだ。　今年の昇進だが、中尉は見送りだそうだ。　私は少佐に昇進するが」

嬉しそうな顔１つしないで言われると、さっきの言葉に説得力が出てきた。　自分の昇進より、ミサトの昇進が遅い、つまり評価を差し引かれるようなことをしているのを、ケイさんは気にしていたのだ。

ミサト「…そうですか…」

ミサトは落ち込んだようだ。

階級に歳は関係ないけれど、それでも昇進につまづくのは、どこかに問題があるという見方もできる。

ミサトの実家は、なんのコネにもならないような零細貴族だけれど、それを考えても、２５で中尉なのはスピード出世とは言えない。

帝国貴族の子弟は、３０ぐらいまでに佐官になって箔をつけ、領国

で親の後を継ぐ。　それがエリートコースだと言われていた。
コネの違いもあるだろうが、霧雨の階級は…　大佐である。

ケイ「私なら、ギリギリまで敵を引き寄せ、コロニーを背にする。
　領地を獲得するのが目的だから、コロニーを背にされたら、艦砲が使えない。

あとはＭＳ戦だが、これまた乱戦に持ち込みつつ、精鋭で大将を討つかな？　大将がＭＳで出てくるとは限らないが、もし来たなら好機だ。

討たないまでも窮地に追い込む事ができれば、以後、霧雨に従う者は減るだろう。　敵の殲滅だけが勝ちではないのだ。　戦いの質をよく見極めろ」

ケイさんの言っている事はは、たぶん正しい。　そしてあたしたちは、そんな発想を持てなかった訳で…。

マヒロ「人材不足でごめんなさい」

とりあえず、謝っておいた…。

第４９章　闘いに沸く街（前書き）

（原作との違い編）

ディジョン「よし、レナ。　今回も解説を始めるぞ」

レナ「はい、隊長」

ディジョン「次に変わったのは、勢力の有り様だな。　長くなるといけないので、箇条書きで紹介する」

★帝国本国★

悪の帝国から強権国家に

★マヒロ・霧雨勢力★

霧雨を最初から強くした

★メリャーナ軍★

登場時期を早めた

★ザキラ★（エージェント）

登場時期を大幅に早めて、魔法禁止

★ゴトー傭兵団★

最初から帝国に従順ではなくなった

★フェニックス・ナイツ★

メンバー削減

★スティヴ傭兵団★

戦う傭兵から、腕利きの運び屋風に

★ゲット★

ストーリーはかなり変わったが、キャラに変化はなし

★ラピスラズリ★（インドラ）

人数削減（１５→１０）

★ディジョン隊★

メンバー削減

★クアルーン★

インドラから切り離して、独自の勢力に

★フロンティアガード★

登場キャラシフト

★エルフレア★（グラーフェン）

名前以外、まったくの別人、別勢力

★その他諸勢力★

出番の大幅増加

ディジョン「こんな感じだな」

レナ「うちの隊も含めて、ずいぶんキャラが削られてますよね」

ディジョン「これは好みにも左右されるが、セリフが一言しかないキャラに、名前をつけるかどうかだ。
編集前はつけていたが、今回は名前なしになったり、存在そのものが消されていたりする」

レナ「名前があったらマズいんですか？」

ディジョン「1キャラ1キャラが濃い方が、記憶に残るだろ」

レナ「なるほど…」

ディジョン「勢力も、より主義主張を分かりやすくしたぞ？　帝国

はその最たる例で、手段を選ばないものの、世界を治める大国と表現されるようになった」

レナ「絶対善と絶対悪が存在しないのが、ガンダムの歴史でもありますしね」

レナ「ところで隊長。　ザキラの魔法禁止ってなんですか？」

ディジョン「…アレか？　あれはトピでも一瞬でボツになった設定だから、気にするな」

レナ「気にするなって言われると、余計に気になります」

ディジョン「そうか…。　では発表するが、クレームが怖いので、私が帰った遥か下に書く。　レナも帰る事を強く勧める」

レナ「わかりました…。　ではみなさん、下まで見るかどうかは、お任せという事で」

ディジョン「またな！」

（続く？）

（先）

（さらに先）

（もうすぐ）

★トピ版トンデモ設定★

エージェントは、ザキラの魔法に守られていて、乗っているＭＳごと破壊されない限り、何をされても死なない。

第４９章　闘いに沸く街

管制官「ザンジバル級リメンバーズ、来訪を歓迎する。…それとおまけの１隻。　許可するから、適当に降りとけ」

リメンバーズとゴトーのザンジバルは、宇宙港に着陸していた。しかし、この扱いの違いは何なのだろう？

リンダ「ここが中国、ＭＳファイトで賑わう国だよ」

ゲット「すげー賑やかな街だな～」

ゲットは早くも、街の賑わい、そしてその街中を闊歩するＭＳ群に興味津々だった。

ＭＳファイトとは、中国の準国技で、文字通りＭＳ同士を戦わせて勝ち負けを競うスポーツだった。　独自のルールやランクがあり、それに応じて賞金やＭＳが与えられたりもする。　人殺しの道具のはずのＭＳも、ここでは立派なスポーツマシンだった。

リンダ「…どっかの頭に血が昇ったお馬鹿さんも、命が惜しかった

ら、大人しくしとくんだね。　宇宙でどんだけ名前が売れてても、ここじゃそんなん関係なしさ。

だいたい、ガンダムって名前のつくＭＳだけでも、２、３０機はいるんだ。　グフでやんちゃなんかした日には、あっという間に焼き入れられて終わりさ」

ゴトー「ふん…」

ゴトーは、不快さ丸出しな顔つきをしていた。

というのも、中国の入国に当たっての手続きの煩雑さにキレたゴトーは、いきなり管制官と無線ごしに言い争いを始めてしまい、慌てて仲裁に入ったリンダによって、ようやく事なきを得ていたのだ。

スティヴ「…変わったな、ゴトーも。　昔は、ＭＳに乗ってない時は、冷たい感じがしたもんだがな？　それがいつの間にやら、ただの瞬間湯沸し器だ」

スティヴがゴトーに呆れて言う。

ゴトー「…余計なお世話だ」

リンダ「とにかく、そのお嬢ちゃんの記憶を探すにも、拠点になる場所がいるだろう？　帝国軍が勝手にしてるとはいえ、追われてる身には違いないからね？　帝国の領地のど真ん中を、突っ切る訳にはいかないよ」

言葉はくだけているリンダだったが、この場では誰よりも、物事の先を考えているようだった。

ところで、帝国の属国の１つである中国が、ＭＳファイトに熱心なのには、実は理由があった。

属国…

つまり中国は、帝国に仕える国であるから、帝国の命令は聞かなくてはならない。

だが、ただ帝国の言いなりになるのは面白くない。　かと言って、軍備をあからさまに増強すれば、それはただの反逆行為だ。

そこで中国政府が考えたのは、ＭＳでの戦いをスポーツにしてしまうことだった。　スポーツであるから、いくらＭＳがいても、それは帝国に対する反逆ではないと言い逃れができる。

しかし、ファイト用に改良を重ねたＭＳと、鍛えられたパイロット達は相当な戦力であり、もし裏切られたなら、かなり手痛い事になる。　だから、ファイトが盛んになればなるほど、中国は帝国と、対等に近い立場になれたのだ。

それに、ファイトは賭け事でもあり、観光の目玉でもあった。　だから、やればやるほど中国はもちろん、帝国までも経済的に豊かになれる。

そんな一風変わった国に、ゲットたちは来ていたのだ。

ゲット「フレーネ。　何か感じるか？」

ゲットは、リメンバーズがドックに入るのを見届けると、フレーネと街に出ることにしたようだ。

フレーネ「…何か違う。　でも、ここのＭＳは好き」

フレーネは微笑んでいた。

中国にＭＳは溢れているが、ファイト用の機体が多いせいか、殺伐

とはしていない。　その感じを気に入ったのかも知れなかった。

リンダ「地球に着いたからって、いきなり記憶が戻りました、なんて都合良くはいかないさ。　ここは、初めの一歩だからね？」

リンダもフレーネに微笑む。

中国でなら、ＭＳや戦艦に乗っていても、大きな問題にはならないから、地球で活動するうえで拠点にできる。　ＭＳの整備や修理には事欠かないし、そればかりか、ＭＳが街で普通に売られていたりまでする。

スティヴ「リンダ、しばらく街にいるんだろ？　なら、ちょっくらヤボ用してくるわ」

不意に、そんな事を言い出したスティヴ。

リンダ「…ファイトに出るのかい？　あんたのＭＳなら、さっきファイト用のチェック頼んどいたから、武器さえ持ち換えれば、すぐにでも出れるはずだよ？」

スティヴ「おっ、気が利くな」

どうやらスティヴは、ファイトに参加するつもりらしい。　そしてリンダも、そうなる事を予想していたようだ。

少し大袈裟かも知れないが、阿吽（あうん）の呼吸と言える。

ゲット「スティヴが出るのかよ?!」

その話を聞いていたのか、ゲットは声を上げた。

リンダ「スティヴはたまに中国に来ちゃあ、ファイトマネーでＭＳ買ったりしてるよ?　たまにしか来ないから、実力の割にランクは低いけど、そこそこ活躍はしてるね」

スティヴ「アイアンボーンなめんなって」

上機嫌なスティヴは、ゲットの頭をぐしゃぐしゃにかき回したりしている。　もしかしたら、殺し合いではなく、純粋に戦いを楽しめるファイトが好きなのかも知れない。

ゲット「…じゃ、俺も出てみて～な」

ゲットは、そう元気よく言ったのだが…。

ファイター「そこのお坊っちゃん？　もしかして、ファイトに出るん気かよ？　ここはてめぇみたいなガキはお呼びじゃないんだよ？　ガキはクソして寝な！」

いきなり横槍が入った。

ゲット「…むっ…」

スティヴ「…てめぇ」

ゲットは言われてムっとした顔になったが、それ以上に腹を立てたらしいスティヴ。　暴言を吐いて絡むそいつに、一歩を踏み出した。

リンダ「やめときな。　変にもめ事起こすと、ファイター資格剥奪されちまうよ。　だいたい、昼間っから酒に酔ってるような奴が、強いファイターな訳ないだろう？」

しかしスティヴは、リンダの皮肉たっぷりの言葉に、手を出すのを止めたようだ。

ファイター「俺が弱いだと？！」

リンダ「…じゃ、ランクとハンデを言ってみなよ。　さぞかし優秀な成績なんだろうね？」

リンダの冷静な反応に、そのファイターの顔色が変わる。

ファイター「…ラ、ランクなんか関係ねぇだろ！　勝負は時の運だ！！」

急に矛先が鈍る。

リンダ「昼間っから酒飲んだくれてる暇があったら、ファイトに出たらどうなんだい？　そんなんだから、ランクがいつまで経っても上がんないんだろ？　ルーキー５の陳…」

ファイター「き、今日はこのくらいで勘弁してやらぁ！」

逃げ去って行った。　どうやら、威勢がいいのは口だけのファイターだったようだ。

ゲット「なんだったんだ、あいつ？

…ところでさぁ、今言ってたランクって何だよ？　出るにしても、難しいのはちょっとな…」

ゲットは頭を掻く。　その困惑の表情に、リンダはさっきとは違った優しい笑みを見せた。

リンダ「ランクってのは、どんな相手と戦って、勝ったか負けたかで付けられるものだよ。　下からビギナー、ルーキー、ベテラン、エース、マスター、キングス…　で、一番上がエンペラー。　その中でも、1～7がある。　まあ、難しく考えなくても、強い奴に勝てば上がるってだけさ。　ちなみにさっきの奴は、ルーキー。下から2番目のランクだね」

ゲット「ぷっ。　下から2番目で、あんな偉そうなのかよ」

リンダ「上がれないから、ヤケ酒なんだろ？」

3人で笑う。

スティヴ「…で、出た事のある俺はいいとして、ゲットはどうするんだよ？　登録しなきゃ出られないだろ？」

リンダ「そう言うだろうと思ったから、もう手は打ってある。　ガンダムもファイト用に調整を頼んであるし、書類は出しておいた。　だから、あとはゲットを連れて、本部に顔出すだけでいいはずだよ」

リンダがゲットに向かって親指を立てる。

ゲット「…ってことは、俺も出れるんだよな？　やっるぜ～」

フレーネ「よかったね、ゲット」

ハロ「ゲットヨカッタ！　ゲットヨカッタ！」

初めてのファイトに、俄然やる気のゲットと、その嬉しそうな様子を見て、思わず笑みがこぼれるリメンバーズのメンバー。

こうして記憶探しの傍ら、ゲットは中国でＭＳファイトに参加することになったのだった…。

【2】

そうしてゲットたちがファイトに燃える一方で、ゴトーたちは街をぶらついていた。　ヴァイスたちに頼まれたゲットの事は、スティヴやリンダがいたために、手を出す必要がなかったからだ。

ゲットとフレーネとの再会を、メリルはとても喜んだが、満足気なのはメリルだけだった。

ジルド「暇だぜぇ～」

そんな思わぬ余暇を、ネロはパーツの購入、ミアはザンジバルをメンテナンスと有効活用していたが、ジルドはただ暇を持て余していた。　そしてゴトーもまた、特に楽しげな様子ではない。

ジルド「隊長。　ガキのおもりしねぇなら、俺達はさっさとどっか行っちまおうぜ？　地球でも、探せば雇ってくれる奴くらいいるだろうし」

ゴトー「……。」

しかし、肝心のゴトーは何か考え込んでいるのか、黙ったままだった。　そう言えば地球に来てから、ゴトーは急に黙ったり、怒り出したりと、感情の起伏が激しい気がする。

ジルド「なあ、隊長ぉ…」

？？？「あいや、そこの道行くご両人っ！」

いきなり声をかけられた。

ゴトー「…ふんっ……」

しかしゴトーは、顔を一瞬向けただけで、また歩き出してしまう。

？？？「…ちょ、ちょっと待つあるよ！　いきなり無視は酷いある」

その男が、すがるようにしてゴトーに歩み寄る。

ゴトー「俺はお前に用はない」

？？？「用事があるの私の方。　だから私、声かけた。　あなたちょっと冷たすぎる。　私に何か、恨みでもあるのか？」

男は、かなり訛りの激しい帝国語で話し続ける。　訛りからして、中国出身の人間らしかった。

ジルド「…で、用事とやらは何なんだ？」

取りつく島もないゴトーに代わり、ジルドが呆れ気味ながら話に応じた。

???「用事、他でもない。　あなたたち、ＭＳ乗りと見た。　だから、ＭＳファイト出ないか？」

ゴトー「…間に合ってる」

また歩き出そうとするゴトー。

???「いやいやいやいや。　話は、最後まで聞いてほしいある。　お願いあるよ」

今度は、実際に袖を掴まれてしまった。　メリルがしがみつくと可愛い袖だが、中年の小太りのオヤジがしがみついても、ただ腹しか立たない。

ジルド「わ～ったよ、オッサン。　話ぐらいは聞いてやるから」

そのせいか、ゴトーは鬱陶しそうにしていたが、あまりのしつこさに、ジルドが逆にゴトーを説得して、とりあえず話だけは聞く事になった…。

【3】

ジルド「…つまり、お前はファイトに出ていたが、騙し討ちにあって、二度とMSに乗れなくなるケガをしちまったっと。　だから、恨みを晴らして欲しいってんだな？」

ジルドがその男を見ると、確かに義足ではあった。

元ファイター「勝敗は時の運ある。　ふつうに負けたなら、そこまで拘ったりしないある。　しかしあいつは、相手の弱点ばかり攻めて、しかも平気で相手が怪我してしまうような攻撃をするある」

ファイトのルールでは、隠し兵装も届け出さえすれば、許可はされる。　届け出の内容は、対戦相手には教えられることはない。　そういった意外性もまた、駆け引きのうちとされているのだ。

ただし、相手を死に至らしめたり、至らしめる可能性の高いと判断される攻撃をした者だけは、失格、酷い時にはファイター資格が剥奪される。

つまり、この男は生きているから、その対戦相手は、露骨な反則をしたのでもない限り、おそらく何の処罰もされてはいないはずだ。

元ファイター「自分が負けた事は、恨まないある。　ただ、あいつ

のあんなやり口を許せない。　だから、あいつを負かせるファイターを探してたある」

男は、テーブルに頭をこすりつけるくらい、頭を下げていた。

ジルド「…隊長、どうします？」

ジルドがゴトーの顔を見る。

ゴトー「…その相手とやらを教えろ」

ゴトーは低く、呟くように言った…。

【4】

実況「レェェェディーーース　アンド　ジェントルマンッッッ！！！　ようこそ、中国６千年の伝統が息づく闘技、ＭＳファイトへっ！！」

大歓声が上がる。　実況もそれを煽りに煽る。

実況「ただ今から、皆様にご覧頂く闘技の選手と、ＭＳを紹介いたぁしまぁぁ～っす！！

まず青コーナー、ついにこの男が帰って来たぁぁぁ～～～

宇宙を我が物顔で闊歩する海賊共が、名前を聞いただけで、血相変えて逃げると言われた男っ！　獲物を狩る海賊を狩る、いわば宇宙の闘いの連鎖の頂点を極めた１人っ！！

そのグレーのストライクダガーを、傷つけることができる者は、果たしているかっ？

その名もアイアン・ボーン…

スティィィィーーーーーィヴっ！！！」

さらなる歓声が上がり、ゲットが目を丸くする。

ゲット「…す、すっげー　スティヴってこんな有名人だったんだ…」

リンダ「スティヴはエースランクの3、さっきの三下なんかとは、格が違うからね？　中国に住んでファイトに専念すれば、もっと上も狙えるって、実際勧誘されたらしいよ？」

そして片やフレーネは、あまりの賑わいように、目を白黒させていた。

実況「…対する赤コーナーわぁぁぁ？

2本の長槍に貫けない敵はいないっ！　そのレンジを活かした攻撃には、マスタークラスですら、嫌う者がいると専らの噂だぞっ！！

中華の誇りと、西洋の騎士の魂が融合したＭＳ、緑のガスアルを駆る男っ！！

その名も、中華のロングランスナイトっっ

劉～～～～子鷹っっっ！！！」

いやが上にも盛り上がる。

実況「…そして注目の最終オッズわぁ…

アイアンボーン・スティヴ2．1っ！

そして、ロングランスナイト・劉子鷹が2．4だっ！！

これは、両者拮抗した名勝負が期待できそうだっ！」

実況「そしていつものように、闘技中の皆様の安全は…　アリュミューレ・リュミエール、カモンっ！！！」

客席のガラスと闘技場の間に、きらきら光る膜が形成される。

フレーネ「綺麗…」

その膜の輝きに、心を奪われたかのようなフレーネ。　しかし次の瞬間、いきなり闘技場にいたレフリーＭＳが、観客席にビームライフルを向けて…

放った。

フレーネ「…きゃっ！」

フレーネは小さく悲鳴を上げたが、客席にビームが届くことはなく、リンダもまた笑っていただけだった。

実況「またの名を、光波防御帯とも言う、この共和国製秘密のバリアが、皆様の身を流れ弾から確実にお守りいたしますので、どうぞ心ゆくまで、ＭＳファイトをお楽しみくださっっっいっ！！」

ゲット「…何から何まですげ～な。　無敵のバリアまであんのかよ…」

リンダ「あたしもよく分からないけどさ？　こうやってバリアを張ることで、より近い位置で観戦ができるようになってるんだ。　な

んでもこのバリアは、帝国ですら持っていないって話でね」

フレーネ「…頼もしい。　今度からはゲットじゃなくって、バリアに守ってもらおうかな？」

ゲット「お、おい、フレーネ？！」

珍しくおかしそうに冗談を言うフレーネ。　表情はとても楽しそうだ。

実況「…それでは、準備も整いましたところでぇぇぇぇ～～～～～～

ＭＳファイーーーットオオオオッッ

レェディィィィーーーーーーーー…

スティヴ&劉「ゴーーーーーッッッ！！！！！」

第５０章　逃避行（前書き）

（原作との違い編）

レナ「みなさん、今回もトピ原作版との変更点を、隊長ともにお伝えしていきます」

ディジョン「前回までは主に　『修正された』　ところを紹介していたが、今回は逆に　『強調された』　ところを紹介する」

レナ「強調も、変更に違いはありませんからね」

ディジョン「しかし、全部紹介していてはキリがない。　そこで、代表者を3人呼んでみた」

マヒロ「あ、あたし？」

サコン「俺か？」

イエスマン「呼ばれちゃいましたぁ～」

レナ「みなさんようこそ。　で、さっそく変更点ですが…」

ディジョン「マヒロは『ヘタレっぷり』　サコンは『頭の良さ』
イエスマンは『意地の悪さ』　がそれぞれ強調されたぞ。　新しい
エピソードなんかも加わり、かなり豪勢になっている」

イエスマン「それは嬉しいですね～」

レナ「…隊長。　より意地悪にされて、喜んでいる方がいますが…」

ディジョン「そんなに悪い事ではないと、私は思うぞ？　特徴ある
キャラは、目立つからな？」

イエスマン「僕はトピの頃から、悪知恵豊富な悪役キャラですから
ぁ～。　ボス（＝ザキラ）の悪事の半分は、僕の作戦なんで～す」

サコン「それに対抗する意味で、俺は恩恵を被ったんだな？」

ディジョン「そうだ。　敵味方の軍師が知略を競うのは、ＭＳ戦と
は違った魅力がある。　これは小説だから、戦いの描写は、どうし
てもアニメ動画に及ばないからな」

レナ「で、残るマヒロさんの、ヘタレっぷりってのは何ですか？」

マヒロ「ヘタレゆ～な～」

ディジョン「ＭＳの操縦が、どうしようもなく下手クソなところだな。　ザク３で旧ザクと戦って負けたり、着艦に失敗して母艦を３回沈めかけたり、ファンネルで自機を撃ち抜くなんて、なかなかできる芸当じゃないぞ？

しかも、人類の革新と言われたニュータイプがだ」

マヒロ「ニュータイプにだって、機械オンチはいるかも知れないでしょ～！！」

ディジョン「これも、編集者流のネタだ。　誰もが当たり前に思っている事を、あえて覆す。　ニュータイプのパイロットは、ふつうエースパイロットだろ？」

レナ「ですね」

ディジョン「それをより強調して、笑いを取ろうとした。　原作でもヘタレだったが、真っ直ぐ飛ぶぐらいはしていた。　それすら今回はできなくなった。　さっきの3つのネタも、今回新たに作られたものだ」

マヒロ「ぶ～」

サコン「ちなみに、そのきっかけを作ったのが、実は俺の生みの親だったりもする訳だが、それはまたいつか話そう」

レナ「こんな訳で、今回の小説は描写が濃くなっています。　ちょっとやり過ぎって思われるかも知れませんが、大目に見てあげてくださいね」

ディジョン「ではまたな！」

（続く）

第５０章　逃避行

その頃、苦難の逃避行は、まだ始まったばかりだった。

マリンピア軍を退けてはみたものの、それで何かが好転する訳もなく、エヴァニーたちは、住み慣れたグラノーブルすら離れる事を余儀なくされる。

ベンケイ「…エヴァニー。　こんな事を言ってすまないが、あてはあるのか？」

ムサシの死んだ後、カムラネルナを纏め、そのままグランズと合流していたベンケイも、さすがに疲れた表情だった。

エヴァニー「あてと言うには、いかにも心細いとは思うが、俺はフロンティア・ガードに行こうと思っている」

フロンティアガード。

先に帝国と一戦交えたクアルーン、インドラと並ぶ、反帝国レジスタンスの旗頭の一国である。　黒海沿岸やオデッサの資源地帯を領し、クアルーンが敗北した今も、帝国と互角に渡り合い続けていた。

ベンケイ「たしかにフロンティアガードなら、同じ反帝国レジスタンスの俺たちを拒まないだろう」

エヴァニー「フロンティアガードには、父さんが生きていた頃の知り合いもいる。　必ず力になってくれるだろう…　だが」

ナディア「…どうやってオデッサまで行くか、だね…」

いくらフロンティアガードが帝国と互角と言っても、エヴァニーたちのいるアラビア半島に、援軍を出すだけの力はない。　仮にあったとしても、グランズなどの小さなレジスタンスをみな助けていたら、キリがないだろう。

シベリア「…ルートは、大まかに分けて2つだ。　このまま北上して最短ルートを辿るか、紅海を渡ってアフリカに入り、それから北に進路を変えるかだ」

なので、エヴァニーたちがオデッサまで行くしかない。　そのルートを2つ、シベリアが提案する。

ナディア「当たり前だけど、最短ルートはクアルーンの領地を通る。
クアルーンが健在な時なら、安全で近かったが、今は帝国軍がうじゃうじゃいるだろうね…」

ベンケイ「かと言って、アフリカが絶対に安全と言えば、そうでもないしな。　大軍がいないだけで、帝国の領地には間違いない。
それに何より、遠回りだ」

他の2人も、そう言ってからエヴァニーを見た。　結局、どちらにも短所長所があり、危険も皆無ではない。

つまりはルートは、リーダーのエヴァニーの考え1つなのだ…。

【2】

王宮を、重い空気が包み込んでいた。

理由は…

サヤリがマリンピアに戻ることを拒み、なおも反帝国レジスタンスと逃げ続けていること…。

シノノメ「…そこまで儂は、人の親である資格がないのか…」

サヤリが連れ戻されることを拒んだ挙げ句、銃撃戦にまで及んでしまった事実は、シノノメの心を深く深くえぐっていた。

報告を受けた時、シノノメは顔面を蒼白にして卒倒してしまい、それ以来、マンダラ以外の誰も、側に近づけさせない日々が多くなっていた。

マンダラ「…そう悲観なされることはございません。兵の話を聞いた限りでは、レジスタンスのアジトに踏み込んだ際、手違いでレジスタンスの仲間数人を射殺してしまったとの事。いわば、互いのすれ違いが原因で、けしてサヤリ様ご自身が抵抗した訳では…」

シノノメ「しかし、サヤリが戻ることを嫌がり、レジスタンスがそれを手助けするのでは、結局、同じではないか！　レジスタンスとの間に、恨みのような感情が生じているならば、尚の事ややこしい」

マンダラ「……。」

事は、サヤリが戻る戻らない、という次元を越え始めていた。

こうなってしまったからには、そのレジスタンスを、本気で討伐せねばならないかも知れない。

以前にシノノメは、軍を使えとは言った。　しかしその意味は、兵で囲んで説得する、悪くてもサヤリを拘束して連れ戻す、それぐらいの意味であったはずだ。

レジスタンスを皆殺しにし、その屍の中からサヤリを引っ張り出すのとでは、訳も規模も違いすぎる。

しかも、最悪の事態が起こり…

サヤリが銃を手にしたりしたならば、シノノメは実の娘を殺せと命じねばならなくなるかも知れないのだ…。

マンダラ「…シノノメ様。　事ここに至っては、予め帝国に対して、一手打っておくのが良策やも知れませぬ」

マンダラは、絞り出すような声で言った。　良策と言葉では言っているが、顔がそんなもの良策でも何でもないと否定していた。

シノノメ「…帝国にか…。　して、いかがするつもりか？　変に事が公になれば、マリンピアが帝国に反したとして、討伐されてしまいかねぬ…」

シノノメの顔色は、悪いままである。

マンダラ「帝国に、我が国の窮状を訴えるのです。　サヤリ様が拐(かどわ)かされた、と…」

苦い表情のまま押し出された声は、声色までもが苦しみを感じさせる。

シノノメ「しかし、サヤリは自分の意思で逃げているのだぞ？！　どだいが帝国がそのようなっ…　グホっゴホっ…」

シノノメが激しく咳き込み、マンダラはその背中をさする。　表情はかなり苦しそうだったが、シノノメは手で、大した事ではないと

訴えた。

マンダラ「…このような心苦しいことを、申し上げざるを得ない私をお許し下さい。　しかし、今後の事を考えますと、もしもの際、マリンピアの国、サヤリ様に危害が及ばぬようにだけは…」

シノノメ「…あくまで、サヤリは拐かし…　レジスタンスに騙されていることにな…」

王女がレジスタンスに騙されて連れ去られるなど、国の恥以外の何物でもない。　サヤリ自身もそうだが、それ以上に王であり、親であるシノノメの権威は地に落ちるだろう。

だが、そういう事にしてしまえば、『騙されたサヤリ』が何をしようと、『マリンピアの国が反逆した』とは言われなくなる。

そしてそれは、『反逆者サヤリの首を差し出せ』と、『帝国から命じられる』という事態を回避する事にも繋がる。

シノノメ「…私の外聞など、サヤリの命と…　マリンピアの国と比べたなら、鳥の羽根より軽いわ。　よい。　帝国に、サヤリの一件をよろしく頼むと伝えよ。

いかに帝国と言えど、平伏している国の王女ごと、レジスタンスを撃ったりはしまいて…」

力なく、項垂れたシノノメ。

そうやって事態は、サヤリ本人や、エヴァニーの気持ちなどお構い無しに、周囲に波紋を広げていくのだった…。

【3】

エヴァニー「…最短距離を行きたい。　その気持ちは強いが」

『が』だけが、エヴァニーの言葉の中で、強い響きを持っていた気がする。　つまりエヴァニーは、一旦アフリカに渡る、迂回案を採用するつもりでいるのだ。

シベリア「俺も実は、迂回に賛成なんだ。　遠回りと言っても、ずっと砂漠を歩く訳じゃない。　車を手に入れられるかも知れないし、旅人か何かに化けて、船か何かに乗ってもいい」

ナディア「船に乗れるのかい？　手配書が回っているだろうしね」

ナディアが、心配事を口にする。

シベリア「検問や何やらはあるだろうが、変装とかで乗り切るか、荷物にでも紛れて、密航してしまおう。　日頃安全な地域だからこそ、逆に付け入る隙があると思う」

エヴァニー「シベリアが言う通りだろう。　手配書が回っていると言っても、せいぜい合成写真や似顔絵程度で、大した手掛かりにはならないんじゃないか？」

実際に行ってみないと分からない事ではあったが、可能性はあった。

…そして結果を言うならば、シベリアの読みは的中した。

アラビア半島の中部こそ、各所の検問を密かに抜ける必要があったが、南に行くに従って警戒は疎かになり、アフリカ行きの船などは、切符を買えば堂々と乗れたぐらいだった。　念のためにと変装したのが、馬鹿らしく思えたほど。

サヤリ「…ここまで来れば、マリンピア軍も追っては来ないよな…？」

エヴァニー「言っただろ？　守れないまでも、逃げればいいって。　たった2人の人間が逃げ切れないほど、世界は狭くない。　俺はサヤリに、もっと広い世界を見せてやりたい」

船上で微笑み合い、口づけを交わすエヴァニーとサヤリ。

だったが…。

ナディア「…仲の良いところに悪いが、もう少し状況を考えてほしいね」

咳払いをし、苦言を呈するナディア。　言われて初めて気がついたのか、急に顔を赤くして離れるエヴァニーとサヤリ。

エヴァニー「…す、すまない…」

たどたどしい口調で詫びるエヴァニー。

ナディア「違う！　『すまない』じゃなく『ごめんなさい』とか言えないのか？　今のエヴァニーの姿で『すまない』とか低い声で言われても、怪しいだけだぞ！」

…サヤリは、すごく似合っているからいいが…」

エヴァニー&サヤリ「…あ…　そっちか…」

どうやら、エヴァニーとサヤリは違う事に文句を言われたのだと、勘違いしていたらしい。

よくよく思い出してみれば、船に乗る時の変装で、エヴァニーは小柄な身体を活かして中性的に変装し、サヤリはまだ幼さの残る少年に扮した…

…気がする。

幼さを残す少年2人が、白昼堂々熱愛を演じたりしたら、違った意味で目立ってしまいかねない。

サヤリ「というか、なんで私が男にならないといけなかったんだよ！」

ナディア「声が大きい！

…まあ、なんて言うか、エヴァニーはまだ髭もあんまり生えていないし、サヤリもらしい体型をしていないからな？」

言われたサヤリの顔がさらに赤くなり、左手で自分の胸を触ったりしている。　つまりが、誤魔化す必要がないほどのサイズで、乗船の時、誰にも怪しまれなかったのだ。

サヤリ「わ、私が幼児体型だと言いたいのか？」

どうやら、普段から気にしていたらしい。

一方でエヴァニーは、似合っていると言われなかったことに、むしろ胸を撫で下ろす。

エヴァニー「そんなサヤリちゃんも、可愛いと思うよ？」

サヤリ「エヴァニーまで、うるさいなっ！」

そんなエヴァニーは、本気でフォローを入れたようだが、サヤリはそうは受け取らなかったらしい。　せっかくらしい声色にしたのに、逆に怒鳴られてしまった。

ナディア「とにかく、船から降りたら、また違う変装にしてやる。
だからもうしばらく、その格好と、格好に似合った立ち振舞いでいてくれ…」

余談だが、その2人の姿をベンケイが内緒で写真に納めていた。
しかし、後で2人に見つかり、次は彼が似合わない変装をする羽目になったという…。

第５１章　皇女の苦悩（前書き）

（原作との違い編）

ディジョン「解説もずいぶん、板についてきたと思わないか？」

レナ「はい、隊長。　解説している私が言うのもなんですが、トピ原作との違いが分かりやすく纏められていると思います」

ディジョン「…と纏めておいてなんだが、この『小説家になろう』版は、実はガンダム・ユーフォリアの２回目の焼き直しなんだ」

レナ「初めてじゃないんですね？」

ディジョン「まあな。　まずこの小説は、ｍｉｘｉのトピで参加者による書き込みを重ねる形で作られた。　これが私たちが言っている『トピ版原作』　だ」

レナ「内容がかなり変わったのは、今までに解説してきました」

ディジョン「それとの間に、実は『携帯小説版　ガンダム・ユーフォリア』が存在する。携帯小説とは、ｍｉｘｉのアプリの事を指す」

レナ「…隊長、大変です！　この携帯小説版、ゴールデンウィーク前の時点で１１５章まで書いてありますよ?!」

ディジョン「だろうな。あっちがメインで、こっちはコピペ。展開は常にあちらが先を行くのは、やむを得まい」

レナ「…コピペして、２つのサイトに投稿してるんですか?」

ディジョン「それはいろいろと事情があるんだが、大きい物は２つある。それは

『携帯小説版はＰＣから見れない』

『さらに、管理会社が放置プレイ』

で、そのために、閲覧拡大とデータ保護を狙った編集者が、こちらにも載せ始めたようだ」

マヒロ「…だってあっち、データの保存が怪しいって噂が流れたんだも～ん。　この小説消えたら、あたし泣くよ？」

レナ「力作なのは確かですから、気持ちは分かります。　ＰＣに拡大したのも、半分くらいがＰＣ読者な事を見れば、成功のうちに入るんじゃないでしょうか？」

ディジョン「結局、データ消失の噂は、噂のままだったんだがな。　しかし、これを機に、ちょっとだけ手直しもされてはいる」

レナ「改行と、言葉遣いがほとんどですけどね」

ディジョン「とにかく、この『小説家になろう版』がガンダム・ユーフォリアの決定版なのは間違いない。　だから、ここを読み進めれば、他のサイトを気にする必要はないぞ」

レナ「分かりました。

…でも、ちょっとだけ…

えっ?!　そんな事が隊長の身にっ!!」

ディジョン「おい、レナっ!　ネタばらしは禁止だ!」

（続く）

第５１章　皇女の苦悩

その頃、サークレット基地に、オクサイドとユーリが降り立っていた。

本来、オクサイドに地球降下の予定はなかったが、先の失敗を取り返すべく、大気圏に突入してからもリメンバーズの後をつけ、機会を伺い続けた。

しかし、それを悟ったリンダが中国の領空に入ったため、独断でのガンダム追撃を諦めざるを得なくなっていたのだった。

そんなオクサイドを出迎えるシュバルツ。

オクサイド「宰相閣下の命により、新たにユービット防衛軍の指揮を執ることになった」

シュバルツ「着任ご苦労、オクサイド中佐」

互いに敬礼するシュバルツとオクサイド。　だが、ユーリはそんな２人には興味を示さず、黙ってその場を去って行った。

シュバルツ「しかしこの辺りも、随分賑やかになったものだ。　良くも悪くも、次から次へと帝国に人間が集まってくる。　せめて今この基地にいる者たちだけでも、思いは同じだと良いのだが」

確かにクアルーンに勝った途端、帝国に人は集まりだした。　良くも悪くも。

オクサイド「相変わらずだな、シュバルツ。　未だそんな幻想にすがっていたのか。　所詮、世の中は力だ。　今、帝国に人が集まるのも、帝国が勝ったからではないか。　しばらく会わぬうちに、呆けてしまったのか？」

辛辣な言葉が、シュバルツを襲う。

シュバルツ「…私はいつ何時でも、帝国軍人としての誇りは持っているつもりだ。　お前のように、力さえあれば理想は後からついて来るなどと、軽々しく考えていないだけだ」

オクサイド「ふっ…　言うだけなら容易い。　まあ、せいぜい貴様の裁量を見せて頂くとしよう」

オクサイドは身を翻してその場を去る。

帝国士官「お2人とも、相変わらずですなあ」

過去の事情を知っているのか、1人の士官が嘆息する。

シュバルツ「見苦しいところを見せてしまったな…」

シュバルツも嘆息する。

実は、シュバルツとオクサイドは士官学校での同期だが、2人の意見は対立する事が多かった。

そして任官した後も、オクサイドがユーリと行動を共にしたり、政治的な動きを辞さず、結果、艦隊を任されたりしているのに対して、シュバルツは階級こそ同じだが、つい先頃までは、僻地の基地司令をしていたのは、記憶に新しい…。

【2】

Pちゃん「後任の司令も着任したことですし、私は殿下と共に、一旦パンドラールに戻りますから」

オクサイド「後は万事、お任せ下さい」

オクサイドが、威勢のいい声と共に敬礼をする。

ユーリ「…任せろね…。　ガンダム捕獲に2回も失敗して、しかもまんまと中国に逃げ込まれたくせに、よく言うわよね」

オクサイド「……。」

わずかにオクサイドの表情が歪む。

Pちゃん「ユーリ。　あなたの正式なエージェント就任は、パンドラールに着いてからなのですから、今は礼儀をわきまえなさい。それに、ザキラ様の威を借りて、猛々しく振る舞うだけでは、一人前のエージェントとは言えませんから」

Pちゃんが厳しい言葉を吐く。

ザキラの肝いりとして、いろんな意味で常識が通じないエージェントだったが、Pちゃんだけは、そういったことが少ないようにも感じる。　噂では、他のエージェントの教育も担当しているらしいと言うが…。

ユーリ「ふん…」

しかしユーリは、不快感を露にして、そっぽを向いてしまっただけだった。

Pちゃん「とにかく、オクサイド中佐がユービット方面を固める間に、私たちはパンドラールで軍を再編成をします。　損傷したMSも少なくないですし、追撃をしようにも、サンザメヤに蓄えていた補給物資が、みんな焼けてしまいましたからね？」

サンザメヤに集められていた物資は、いざ失ってみると、帝国にとって大きな痛手になっていた。

クアルーン軍残党を追うために必要な推進剤も、撃つために必要な弾薬も、みな焼けてしまい、極めて身動きが取りづらくなってしまったのだ。

シュバルツ「P准将、1つよろしいか？」

そんなPちゃんに、シュバルツが声をかけた。

Pちゃん「呼び方は、Pちゃんで結構ですよ？　それはともかく、何でしょうか？　シュバルツ中佐」

シュバルツ「余計な口出しをするようですが、ガント大佐の後任…　サンザメヤの防衛軍司令は、誰になるのかと思いましてな」

シュバルツの言葉に、Pちゃんとオクサイドの眉が少しだけ動いた。

オクサイド「シュバルツ、やはり貴様呆けたか？　サンザメヤはすでに壊滅し、後任も何もなかろうが！」

オクサイドがシュバルツに食ってかかる。

シュバルツ「私が呆けていたとしても、お前ほどではないようだな？　確かにサンザメヤ基地は壊滅したが、街はまだ健在だし、やられたからこそ後始末も必要だ。　ただ兵を置き『適当にやっておけ』では話にならん」

オクサイド「…そのような…」

盲点を突かれたのか、オクサイドは即答できなかった。

Pちゃん「シュバルツ中佐。　言いたい事は分かりましたが、それをどうしたいのですか？　私は、ガント大佐の後任とは告げてはいませんが、オクサイド中佐がこの地域一帯を管轄する以上、それにサンザメヤも含むのが当然の成り行きです。　そうは思いませんか？」

Pちゃんは、ともすればオクサイドをフォローしたようにも聞こえる事を言う。　そして事実、ユービット『方面軍』の後任という言葉を使っていた。

シュバルツ「…正直に言わせてもらって、まだいくらか懸念材料もありましてな…。　サンザメヤに、私が残っては不都合でしょうか？」

オクサイド「貴様、私に全域の管轄は無理と言うか！」

弁護されて強気になったのか、オクサイドはまた、シュバルツに食いついた。

Pちゃん「…さまざまな情勢を踏まえた上で、私は後任を選んだつもりです。　それに、シュバルツ中佐。　中佐がサンザメヤに残りたいと言う事はつまり、先に私が中佐にお話しした、私の下で働くという話が、不服だと言っているようにも聞こえるんですが？」

次にPちゃんが、シュバルツを見据える。　その目は、小柄なPちゃんの姿には似合わない、厳しいものだった。

シュバルツ「…言葉に深い意味はありません。　元々、P准将とガント大佐が2人で指揮なされていた地域ゆえ、くまなく気を配るのには、1人では手が足りぬかもと、心配しただけです。　それと…」

シュバルツは、言葉に一旦間を置く。

シュバルツ「…それと、P准将に頂いたお話ですが、ユービットでの潜入、サンザメヤでの偽兵、それはすべて私の部下の策なのです。

私はそれを追認したに過ぎません」

つまりシュバルツは、自分ではなく、ヤタガラスの3人を引き上げろと、暗に言っているのだろうか？

Pちゃん〔…ザキラ様？〕

ザキラ〔好きにさせよ。　その部下とやらを見てやるのも面白かろう〕

Pちゃん〔畏まりました〕

瞬時に、脳量子波でザキラの指示を仰ぐPちゃん。　当たり前だが、その会話は他の人間には聞こえていない。

Pちゃん「…自分の代わりに、部下を出世させようというのですか。
　一応、良い心がけだとは言っておきましょう。　では、シュバルツ中佐とオクサイド中佐で、この地域を二分しなさい。　分け方は任せます。　それから、シュバルツ中佐の部下は、全員少尉に任官、パンドラールに伴うものとします。　これでよろしいですね？」

再び、Pちゃんがシュバルツを見据える。

シュバルツ「私の我が儘を聞いて頂き、申し訳ない」

オクサイド「……。」

Pちゃん「殿下。　お聞きの通りになりました。　予定より人数が増えましたので、後送に殿下のガルダもお借りすることになりますが、構いませんか？」

ここにきて初めて、Pちゃんがメリャーナに声を掛ける。

メリャーナ「私のガルダで、ヤタガラス隊も運べばよろしいのですね？　幸いガルダの大きさならば、まだ十分に余裕がありますから、お引き受けできますわ」

Pちゃん「お願いできますか？　何分、輸送機1つとっても、余裕がありませんので」

余裕がない原因。　これもやはりサンザメヤ…　ラピスラズリなのだったが。

輸送機は、パンドラールと各部隊の間を、今も昼夜兼行で往復している最中だったのだ。　繰り返すが、今の帝国軍には、あらゆる物資が不足していた。

Pちゃん「それでは、準備ができしだい出立しますから、お願い致します」

こうしてヤタガラス隊は、シュバルツの推挙と輸送の事情という偶然から、メリャーナと出逢ったのだった。

そしてこの出逢いは後に、ただの都合では終わらないものへと続いていく…。

【3】

その頃、そんな原因を作ったラピスラズリとマンネは、インドラへ

と帰還していた。

ダイン「…サンサレア少将が亡くなられたか…」

報告は聞いているはずだったが、マンネと帰還したマンネと顔を合わせると、ダインは改めてそんなことを言った。

マンネ「しかし、プランFの成功により、多くのクアルーン兵をインドラに収容できたと聞きました。　サンサレア様の知略は、死してなお、敵を震え上がらせたと言っていいと思います」

ダイン「遥か昔の伝記に、死してから敵軍の追撃を止めた偉大な軍師の記述があったらしいが、まさかサンサレア少将が、それを再現なさることになろうとは…　皮肉、かな？」

ダインの表情は暗い。

全体の情勢としては、クアルーンが大敗し、レジスタンスは多くの土地を失っていた。　代わりにインドラは、指導者を失ったクアルーンの残兵を吸収し、インドラ単体としての勢力は、むしろ拡大していた。

それを喜ばないのが、ダインという指導者なのだ。

エイス「また、つまんない話ばっか～。　退屈だから、もう行っていいよね？」

マンネは何も答えず、ただ手で彼らを追い払う仕草をする。　歓声を上げ、ラピスラズリたちは駆け去って行った。

ダイン「当たり前だが、変わらないな。　ラピスラズリも」

ダインがさらに息を吐く。

たしか、ダインがインドラの指導者たる『楽園の剣』を襲名して、最初に決めたのが、それまでに１０人産み出されていた、ラピスラズリ計画…　強化クローン人間兵士育成計画の中止だったはずだ。

マンネ「しかしプランＦは、ラピスラズリだからこそできた芸当です。　私はそういった意味では、ラピスラズリに感謝しているのですが」

ダインとマンネのラピスラズリに対する考え方は、必ずしも一致していないようだった。

ダイン「…人道上の是非。　それを誰よりも感じていたからこそ、サンサレア少将はラピスラズリを、まるで我が子のように可愛がられたのだと思う。　そんな配慮を、私はできそうもないと思うだけだ…」

ダインが思うのは、今は亡きインドラ随一の知将のことか、それとも…。

【4】

トゥーエ「たっだいま～」

行動の自由を得た5人が帰りの挨拶を告げたのは、またしても髪型の違う、同じ顔だった。

？？？「おかえり～」

？？？「お土産は？」

期待の言葉を口にしながら、寄って来た４人。

ノン「ちゃんと４人分あるから。　黒いガンダムの戦闘データでしょ？　可変のガンダムもどきのもあるし、あとは敵の基地からもらって来た機材がいくつか、ハンガーにあるよ」

歓声が上がる。

戦争に行って来た風じゃないことが異様なのか、それとも、その土産の品が異様なのか…？

？？？「あ、ところでフィフスがいないけど、どっかでお留守番？」

４人のうちの１人が、フィフスの不在に気がついた。

アイン「フィフスのやつ、死んじゃったよ」

？？？「そっか。　ラピスラズリも残り９人かぁ～。　もう友達が生まれることはないから、増える事はないしね」

そんな会話が、淡々とした口調で交わされるのも、やはりラピスラズリならでは。

悲しみとは無縁な戦闘人形になるべくして生まれ、途中まではそう育て上げられた。

???「でも、フィフスを殺っちまうくらいなんだから、倒した奴は強かったんだよな？　どんな奴だった？」

ノン「…一言で言うと『しぶとい』のかな？」

???「へ～。　ノンにそう言わせるんだから、期待できるかも。次そいつらと会ったら、俺が一番手で行くよ」

???「ちょっとセブンス？　今から抜け駆け宣言？」

同じ顔だが、少し声が細い。　こちらは少女タイプのラピスラズリのようだ。

セブンス「じゃ、特別にフォルナも混ぜてあげる」

？？？「フォルナだけかよ！」

セブンス「仕方ないなぁ…。　ナイルとシクスも…　みんなで殺ろう？」

エイス「そっちは任せたぁ～。　あたしは黒いの一筋だから」

スリス「そう言えば、最近エイスって、ずいぶん黒いガンダムにこだわるよね？　なんで？」

ノン「年頃の女のコに、野暮なこと言わないの」

トゥーエ「えっ？　エイスってそんなんだったの？！」

何かが3人集まればかしましい、とはたまに言うが、9人も集まっているのだから、やむを得ないと言うべきなのか？

その話の内容も含めて、ラピスラズリは、今日もラピスラズリらしく元気なのだった…。

【5】

ダイン「今しばらくは、大きく動くより、クアルーンにいた者たちの再編成だろう。　旧クアルーン領に手を広げたがっている者たちもいるが、勢いに乗る帝国を相手にするのは避けたい」

ダインは、慎重な方策に出る気のようだった。

マンネ「それがいいかも知れません。　サンサレア様がご健在ならば、こう我々が驚くような策を思いつかれたかも知れ…」

???「マンネっ！！」

マンネの言いかけた言葉を遮ったのは、若い男の怒声だった。

???「マンネっ！　貴様っ、義母上が討ち死にされたというのに、よくものうのうと帰って来れたものだなっ！」

その若い男…　軍服を来ているから、インドラ軍の士官なのではあろうが…　は、いきなりマンネに手をかけると、その襟首を締め上げた。

マンネ「ウ、ウィナス…」

マンネが苦しそうに呻く。

ウィナス「全ては貴様の怠慢が原因だろうが！　義母上の策は完璧だった！　なのに貴様が…」

ダイン「…やめろ、ウィナス」

落ち着いた声でダインが止める。　だが、ウィナスの激昂は収まらない。

ウィナス「もし私が側にいたならば、義母上を死なせることもなく、戦いにも勝っていたはずだ！　それを貴様がっ！」

マンネ「…ク、グ…」

ウィナスはさらに力を込めた。　マンネの顔が赤黒くなる。

ウィナス「…ぐうっ！」

ダイン「…私はやめろと言ったはずだ」

急にウィナスの顔が苦しく歪む。　ダインがウィナスの腹部に、痛烈な一撃を浴びせたのだ。

ダイン「他人のせいにするな。　そもそも、なぜサンサレア少将がお前を連れて行かず、私に預けたのか、もう一度深く考えてみる必要がありそうだな」

ダインの落ち着いた声。　確かにサンサレアは、出立の前に…。

ダイン「マンネ。　行こうか」

そしてダインは、それ以上ウィナスに構うことなく、マンネと共にその場を後にするのだった…。

【6】

そうした経緯で、メリャーナの専用ガルダには、ヤタガラスの3人の姿があった。

そしてその横には、何隻かのエンドラやサダラーン。　さらには、ディジョン隊のＺ－Ｐｕｌｓが飛ぶ。　主要な軍だけとは言え、一軍の司令部が移動するとなると、やはりある程度の規模にはなるようだ。

メリャーナ「お話を聞く機会ができましたわね？　と言っても、もう従兵さんはお止めになられたみたいですけれど」

サコン「さすがに、少尉があの訛りと容姿では、かえって不自然です。　それに、シュバルツ中佐がああ言ってくれたお陰で、出身とかは気にしなくてよくなりましたし」

メリャーナ「帝国もずいぶん様変わりしてしまいましたけれど、能力のある者を抜擢する体質だけは、変わっていなかったようですね」

メリャーナが、かすかにため息をつく。

だが、そんな話の流れに、やや落ち着かない様子な人間が1人。

グリフィン「…その抜擢の話なんだがな…。　我輩、断ることはできないだろうか？」

グリフィンが口にしたのは、意外にも消極的な発言だった。

サコン「叔父貴。　いったいどうしたって言うんです？　叔父貴が仮にも貴族…」

そこまで言いかけたサコンは、急にしまったという顔をする。　メリャーナは、怪訝な顔でサコンを見る。

グリフィン「そういう意味ではなくってだな…。　あのエージェントとかいう連中から、妙な感触を感じていてな…。　危険な香りと言ってよいのか…」

グリフィンは、自分の感覚をうまく言葉にできないようだった。

と、そんな話をした途端、メリャーナの表情が変わっていた。

メリャーナ「…さすがに、シュバルツ中佐が抜擢するだけの事はありますのね。　彼らは、表向き帝国軍の士官に就いてはいますが、実際はザキラ…　帝国の宰相の私兵です。　詳しい経緯をお話しした方がよろしいですか？」

メリャーナの目が光り、ヤタガラスの３人は息を呑みつつも、深く頷くのだった…。

【7】

サコン「そんな事があったんですか…」

カトラス「何とも胡散臭い国だな、帝国ってやつも」

メリャーナが皇族の不可解な死など、数々の疑惑を口にすると、ヤタガラスの３人は一様に難しい顔になっていた。

メリャーナ「ただ1つ、言っておかなければいけません。　今お話しした事は、みんな私の推測なのです。　奴らは、尻尾を掴まれるような証拠を何1つ残していません」

サコン「…つまり打つ手なし、ですか？」

サコンの問いかけに、メリャーナは苦々しげな表情になりながらも、頷いた。

メリャーナ「そうですね…。　レオン…　私の弟のように、思い切った行動に出れば別でしょうけれど…」

カトラス「つか、１５歳で兄貴とその片腕を暗殺しようとするなんて、ずいぶんな皇子様だよな？」

弟である第４皇子レオンハルトによる暗殺未遂事件も、メリャーナは3人に語っていた。　ただ、いくら疑惑の相手とはいえ、１５歳の人間が暗殺を企てた事に、カトラスは呆れているようだったが。

メリャーナ「そうするより他ないと、弟なりに思い詰めたのだと思っています。　権力欲は強い子でしたし、人を人とも思わないところもありましたが、頭は悪くない子でしたから」

…沈黙。

グリフィン「…ならばやはり、我輩は一緒におらぬ方がよかろう。帝国軍内部に深入りせず、力を蓄える役目の者がいてもよいはずだ」

グリフィンは、余計に腹を決めたようだった。

サコン「力を蓄えると言っても、方法はあるんですか？」

グリフィン「心配するな。　実は、そこであのガンダムＭＫ－２も手に入れたのだ。　力さえあれば、金とＭＳがいくらでも手に入る」

サコン「…そんな都合のいい場所が？」

サコンも知らなかったのか、かすかに驚いている。

グリフィン「心配するなと言っているだろうが。　だから、お前とカトラスは、帝国の中を探るがいい。　それが終わるまでには、お前たちの力になれるようになっておく」

ようやく見せたグリフィンの笑みに、微かに場が和んだ。

カトラス「ま、おっさんが汗臭いのはしょっちゅうだが、嘘臭い、胡散臭いことはあんまりないからな？」

カトラスの言葉に、今度は『ガッハッハ』とグリフィンが大声で笑った。

メリャーナ「…申し訳ありません。　変な話をしてしまっただけでなく、まるで私の味方になれと求めてしまったようで…」

サコン「構いませんよ。　帝国がこのままでいいとは、元から思っていませんでしたから。　それから、ミヤイ少尉では他人行儀ですから、これからはファーストネームで呼んでください。　私なら、サコンです」

メリャーナ「分かりました」

メリャーナの顔が、少しだけ明るくなった…。

第５２章　霧雨の中の不死鳥（前書き）

（キャラチェンジか？）

レナ「隊長、次の解説ですが…」

ディジョン「それなんだがな、レナ」

レナ「はい」

ディジョン「私はそろそろ、潮時だと思っている。　前に解説していた２組がどうなったか、覚えているか？」

レナ「…えっと確か…　睡眠薬で眠らされて、次は目覚めた後に虐められてました」

ディジョン「そうならないうちに、私はこの場を明け渡すつもりだ。　３６計逃げるが勝ちというヤツだ」

レナ「…ですけど隊長。　このコーナー、勝手にやめちゃっていいんですか？」

ディジョン「それは、次回からの出演者を呼べばいいだけの話じゃないか。　レナ。　これを見て、適当に電話してみろ」

レナ「…適当にってコレ、タ○ンページですよね？　宇宙歴にもあったんですね、タウン○ージ」

ディジョン「細かい事はいい。　どうせネタなんだ」

レナ「そうですね。　じゃあさっそく、どこでも迅速に派遣がウリらしい、ゴトー商会ってのにかけてみましょう」

レナ「えっと番号は…

０１２０…」

ディジョン「フリーダイヤルか?!　意外とサービスは良かったんだな」

レナ「５１０　８９１９（ゴトーはやくいく）　です」

ディジョン「しかも覚えやすいな?!

…というか、当たり前だが、この電話番号は宇宙歴のものだから『西暦に生きている諸君は絶対にかけるな』よ?」

レナ「…あ、繋がりました。　もしもし…」

???「お電話ありがとうございます。　ＭＳからＭＡまで、お困りの敵機がありましたら…」

（続く?）

第５２章　霧雨の中の不死鳥

１０機のゲイツと、同じく１０機のシグーが、５０機を越えるＭＳの群れに突っ込んで行く。

すぐに激しい戦闘が始まり、ビームが伸び、曳光弾が光の尾を引く。

最初に直撃を受けたのはザクで、次がジン、リックドム。　数は多いものの、賊のＭＳに纏まりはない。　ただし、一度に複数のＭＳを相手にするのはやはり厳しいのか、４番目に落ちたＭＳはシグーだった。　脱出ポッドが打ち出され、機体は砕ける。

全体像として見るなら、ゲイツとシグーが押されている。　ただし、落ちていく数はザクやジン…　賊のＭＳの方が多いようだった。

霧雨「始まったね。　リバルはうまくやっているようだ」

圧倒的に不利なのは計算づくだった。　敵は数こそ多いが、纏まりはない。　だから…。

帝国兵「…味方機撃墜、ゲイツ１、シグー３です。　撤退に移りました」

まったく落とされないと、それはそれで怪しまれる。　だから、何機かの犠牲は仕方ない。

しかし、犠牲が大きくならないうちに退く。

霧雨「…マリアベル。　砲の照準を合わせて。　迎角１５。、左に３。修正。　どうせ全機落とすなんて無理だから、怖がらせて乱せればいい。　そこを僕が狩る」

霧雨は、コーディネイターらしい素早い計算で砲の照準を告げると、ブリッジを離れ、自分のゲイツに乗り込んだ。

そんなやり取りをしているうちに、先に出撃した味方のＭＳが、さも慌てたかの様子で、逃げ戻って来始める。

マリアベル「照準修正は完璧です。　射撃命令を」

霧雨「３０秒後に、リバルの部隊を散開させるんだ。　それから艦砲を１２０秒。　それまでに、僕が敵の側面に回っておくよ」

ゲイツが何機か、艦隊から発進して行く。　先頭のゲイツは、カラーリングの違う、霧雨専用機だった。

ジン「俺が行くまで、いいコにして待ってろよ?」

霧雨「…ジン…。　戦う前から調子に乗りすぎだよ…」

霧雨は苦笑いしながらも、気持ちは同じだった。　簡単に逃げられては、かえって敵を倒せない…。

【2】

そんな様子を眺める、紅いＭＳが2機。

ヴァイス「…数はいるから、ちょっとは役に立つかと思ったら、やっぱりだったか…」

ヴァイスが諦めたように言う。

戦いが始まるに当たって、一応味方だと、顔通しはしておいた。
だが大半の賊は、ＭＳの数が予想以上に集まったことに気を良くして、ヴァイスとレアルタに見向きもせず、話も聞かなかった。

レアルタ「でも、ヴァイスさん？　あいつら結構がんばってますよ？」

レアルタは、霧雨のＭＳが逃げ帰る様子を見て言う。

ヴァイス「あれは誘いの罠だ。　見ろ。　敵は撤退しているはずなのに、傷ついた機体がやけに少ない。　しかも、隊列が乱れていないだろ？」

レアルタ「そんなもんですか？」

ヴァイス「そんなもんなんだよ。　追いかけた奴らは、半分も帰って来れれば御の字だろうな」

ヴァイスは、完全に諦めてしまったようだ。　無線で呼び掛けるなどの手段もあるはずだが、何もしようとしていない。

レアルタ「じゃ、俺が助けて来ます。　フェニックスナイツって、ナイトの複数形だから『ナイツ』なんですよね？　ナイトなら、弱い奴らは助けないと」

ヴァイス「…って、おいレアルタ？！」

ヴァイスが止める隙もなく、レアルタのリックディアスは飛び出して行ってしまった…。

【3】

レアルタ「あ～　やってるやってる」

レアルタが霧雨の艦隊を見つけた頃、艦隊からは激しい艦砲射撃が浴びせられていた。　１０隻を越える艦から砲撃はさすがに壮観で、

レアルタの周囲もメガ粒子砲が幾条も掠めていった。

レアルタ「こんなん、当たる当たらないは、運なのになぁ～。ビビってないで、突っ込むか、逃げるかすればいいのに」

レアルタはあっけらかんと言ったが、ふだんは住民をいたぶるだけの賊達には、そんな度胸はなかったらしい。　迫り来るメガ粒子の光に臆し、見るも無残な乱れようだった。

レアルタ「…しゃあねえなぁ…。

レアルタのリックディアスは、クレイバズーカを構えた…。

【4】

盛んに射撃を続ける艦隊。　敵はそれだけで圧倒され、まるでだらしがなかった。

ジン「げひゃひゃひゃ。　あいつらビビってんぜ」

霧雨「まあ、この調子ならもらったね。　射撃終了まで、あと４０秒もある」

ジンの言葉に頼るまでもなく、霧雨は余裕に満ちていた。　４０秒もあれば、側面に到達し、艦砲射撃終了と同時に敵に斬り込めるからだ。

レアルタ「…目標は…　適当でいいか。　同じ格好のヤツばっかだしな」

紅いリックディアスが、バズーカを3発放つ。　バズーカはビームと違うから、着弾までに時間がかかる。

…そして数秒後。

1隻のサラミスの側面に、爆発が起こった。

レアルタ「あら？　これだけか？」

レアルタはそんな風に言った。　たしかに命中はしたが、これだけではサラミスは沈みそうにない。

…と思った瞬間、サラミスに次なる爆発が起こり、主砲が1基吹き飛ぶのが見えた。　しかも何かに誘爆したらしく、爆発が続いて起こる。

レアルタ「やった！　やっぱ俺って天才だ」

自身の射撃の腕に、酔いしれるレアルタ。　しばらくして、そのサラミスはついに大爆発を起こして沈み、そうしてできた隙間から、何機ものＭＳが逃げ去って行くのが見えた。

レアルタ「そこから突っ込もうって奴はいないのかよ！　まあ1隻沈めたし、今日の騎士様は終わりにすっかな…　っつわっ！！」

レアルタが驚きの叫びを上げる。　呑気に構えていたレアルタだっ

たが、そこに1機のゲイツが斬り込んで来ていたのだ。

霧雨「…この距離から艦を沈めるなんて、さすがフェニックスナイツだね？　でも、そんなことしてくれたからには、報いは受けてもらうよ？　ジンっ！　お前は賊をっ！」

ジン「了解だぜっ、姉御っ！」

霧雨は賊の追撃をジンに任せて、自分はレアルタに激しく斬りかかって来た。　1回、2回とサーベルが宙を切る。

レアルタ「危なね～な～！　艦1隻くらいで、ケチケチすんなよっ！」

レアルタもサーベルを抜き、霧雨に応じる。　腕は互角に近いようで、互いに相手の強さを知る。

レアルタ「そんじゃま、こいつはどう？」

霧雨「温いね」

5回目鍔迫り合いの後、レアルタはビームピストルを使った。　ラ

イフルと違い、小さめのビームピストルは、細かい動作にもよく馴染んだ。

しかし、そんな奇襲にも霧雨は動じない。　ビームはあわや、の所を掠めていたにも関わらず、だ。

霧雨「…小細工なんかしてないで、本気でおいでよ」

ピストルの手を掴み、接触回線でレアルタを挑発する霧雨。

レアルタ「…そ。　じゃ、リクエストに…」

ヴァイス「…待て、レアルタっ！！」

ビームが何発も飛来し、２機が飛び退く形で離れる。

ヴァイス「熱くなるな、レアルタっ！　周りをよく見ろ！　囲まれてるぞ！！」

霧雨「意外と冷静だね？」

その通りだった。

霧雨とレアルタが戦っている間に、賊たちはみな逃げるか倒されるかしてしまい、余力のできた形の霧雨のＭＳ隊は、レアルタを遠巻きに包囲しつつあったのだ。

レアルタ「…ってめ…　人に本気出せっつっといて、自分は手加減かよ！」

霧雨「手加減って言うか、殺したくなかっただけかな？　フェニックスナイツほどの有名人ともなれば、戦死より公開処刑だろ？」

レアルタ「やれるもんならっ…」

ヴァイス「だから、わざとらしい挑発に乗るなって」

ジム３が、実際にリックディアスに手を添えて止める。

ヴァイス「…あんたが指揮官のようだな？　レアルタを手玉に取るあたり、さすがだと言っておく。　だが、ここは退かせてもらうぜ？　わざわざ他所様の土俵で、不利な戦いをする気はないんだ。レアルタっ！　ついて来いっ！！」

ヴァイスは、一気に霧雨に向かう…　と見せかけて、その隣にいたゲイツをビームスピアで突くと、その隙間から包囲網を破った。

霧雨「逃がさないよっ！」

ヴァイス「やめとけ！　あんたは腕に自信があるんだろうが、部下は違うだろう？　死人が増えるだけだぞ！」

言葉通り、さらに追いすがろうとした霧雨隊のゲイツが、３機ともはじき飛ばされる。　みな致命傷にはなっていないが、時間稼ぎもできていない。

霧雨「…いいよ。　また会う時を楽しみにしている」

霧雨は、追撃を中止させた…。

【5】

ヴァイス「熱くなりすぎなんだよ、お前はっ！」

レアルタ「すんませ～ん」

無事にコロニーに引き返せた2人だったが、当然の成り行きで、レアルタはヴァイスのお説教を受けるハメになっていた。

ヴァイス「だいたい、今回の俺達の依頼は、大型艦3隻なんだぞ？　敵の大将斬っても、しょうがないだろ」

レアルタ「…だってさぁ～　つか、大将倒せば艦なんて後から…」

ヴァイス「…あのなあ、レアルタ…。　あいつが総大将とは限らないだろうが。　前線に出てくるからには、腕に覚えのある部隊指揮官程度だろう。　それにもし総大将だったとして、敵が負けたっつって逃げ出したら、どうやって依頼果たすんだよ？」

レアルタ「…あ、そっか」

思わずこめかみに手を当てるヴァイス。

ヴァイス「…レアルタ。　今回はフェニックスナイツとしての意地とか、そういうのは1回休みだ。　依頼で金を稼いで、ゲットを追いかける。　お前も、やりたいことはそれなんだろ？」

レアルタ「うい～　つか、ヴァイスさん。　いま『お前も』、『も』って言いましたよね？」

レアルタは急に元気な声を出す。

ヴァイス「…まあ、世の中先立つ物がないとな…。　なんだかんだで、帝国の金は使える。　地球に行けばなおさらだろ」

ヴァイスはレアルタの夢を砕かなかった。　というより、同じ気持ちを持っていたようだった。

レアルタ「じゃ、パパッと艦を沈めちゃいましょうよ？

…ところでサラミスって、大型艦に入ります？」

どこまでも調子のいいレアルタだった。

ちなみにヴァイスの見解では、サラミスは大型艦に含まないとのことだったので、この時点でのフェニックスナイツの戦果は、まだ０のままだった…。

【6】

霧雨「さすがはフェニックスナイツかな？」

マリアベル「霧雨様が敵を誉めるぐらいですから、相当な手練れなんですね？」

霧雨は艦に戻ると、マリアベルとリバルを呼び、今後の作戦を練っていた。

霧雨「リバルとマリアベルは、フェニックスナイツに会っても、仕掛けずに下がれ。　奴らの相手は、僕がする」

それは遠回しに、マリアベルとリバルではフェニックスナイツに敵わないと言っているのか？

マリアベル「分りました。　とりあえず、落とした賊ですが、２０機になっていません。　サラミスが沈んだ時に、かなりの数が逃げてしまったので」

リバル「それが、フェニックスナイツの狙いだったんでしょうか？」

霧雨「…たぶんね。　所詮、賊の集まりだから、指揮を執ると言っても、帝国軍のようにはいかない。　だからフェニックスナイツも、賊の先頭に立って突撃なんて真似ができないんだろう。　そんなことをしても、賊は不利になったら、味方を棄てて逃げるから」

マリアベル「持久戦になりますか？」

マリアベルが問いかける。

霧雨「初戦の罠が破られた。　だから仕方ないのかな？　落としたのが２０機じゃ、敵はまだまだ残っている。　迂闊に敵の懐に飛び

込むには危険だからね？　叔父の本隊が着くのを待って、気長に攻めよう」

マリアベル「霧雨様さえいれば、奴らなど…」

霧雨「マリアベルの気持ちは嬉しいけど、霧雨の兵を粗末にはできないよ」

マリアベル「…はい…」

マリアベルは慎重な作戦が嫌いなのか、あまり明るい表情をしていなかった。　一方でリバルは、ほっとした表情のようにも見える。

リバル「しばらくは偵察機と組み合わせて、出てきた賊だけを狙います。　それでいいですか？」

霧雨「うん。　本隊が着いたら、また考えよう」

こうして、戦局は一旦の落ち着きを見せたのだった…。

第５３章　研究所（表）（前書き）

（新コーナー開始か？）

ジルド「どこだっ？！　どんな攻撃も効かない、巨大ＭＡってのは！」

…

…

ネロ「…ジルド。　騙されたんじゃないんですか？　そんな巨大ＭＡが、なんで室内にいるんですか…」

ジルド「でもよぉ…　電話で言われた住所は、ここに間違いないぜ

？」

ネロ「いたずら電話でしょう。　からかわれたんですよ」

ジルド「なんだ、つまんね～」

メリル「…はい、お手紙」

ミア「どうやら書き置きのようね」

ジルド「なんだなんだ？

『拝啓　傭兵の諸君。

電話の内容は出任せだが、仕事の依頼は本当だ。

この冒頭文をしばらくの間、盛り上げてもらいたい。

…ただし、報酬はボランティアでな』

だとよ」

ネロ「…これも依頼に入るんでしょうか？」

ミア「隊長に聞いてみましょう。　隊長？」

（ゴトーの答えで、コーナーが決まるのか？！）

第５３章　研究所（表）

帝国の首都、パンドラール。

そこでメリャーナは、クアルーンに勝ったと、熱狂する市民に出迎えられていた。　メリャーナがにこやかに手を振ると、大歓声が巻き起こり、一部には駆け寄ろうとして、警官隊に制止される男までいた。

イエスマン「…なんと言うか、人気ですねぇ～。　あの方も」

ザキラ「偉い皇帝が世界を支配し、自分達の暮らしは良くなる。そんな単純な夢物語が、愚か者は好きなのだよ」

イエスマン「ついでに、綺麗なお姫様ですからね？」

ザキラ「…そのついでがなければ、もう少しやりようはあるのだがな…。　だが、いかに隠れ蓑とはいえ、あまり粗相に扱って、破れてしまっては面倒だ」

イエスマン「ボスも、最近はよくお分かりのようで」

ザキラ「…今でもたまに、ラインザックにつけられた傷が疼く時がある。　だからこそ、私は帝国をこのままにはしておかぬ。　そのためなら、お前の言葉にも耳を傾けよう」

イエスマンがニヤリと笑ったように見えた。

イエスマン「…しかし、激情のあまり、本気で臣下に斬りつける皇帝ですかぁ～？」

ザキラ「そういう奴だったのだ。　紛れもない暴君。　ただ、妙に知恵が回った」

ザキラが、かすかに背中を気にする。　そこにあったのは、若き日に自らの主に追い回された挙げ句、斬りつけられた時の傷…。

イエスマン「…とりあえず、いくつかおもしろそうな材料もたまっていますから、お姫さまを苛めてみますか？」

ザキラ「…いや、それよりもエージェントの増強が先だ。　この人数では、いかにも足らん」

イエスマン「ドクター？　ボスはこう言ってますけどぉ～？」

DR．マンソン「心配せんでよい。　Eの時のような失態はせぬわ。すぐにでも使えるのが、何人かおるでの？」

脳量子波が飛び交う。

ザキラ「Wはどうだ？」

DR．マンソン「…あ、あやつを使うのか？　しかしあいつは、戦い始めたが最後、敵も味方も分からなくなるような、ただの戦闘マシーンなんじゃが…」

イエスマン「…ドクター。　何を野暮な事を言ってるんですかぁ～？　敵味方が分からないなら、両方が敵の戦場に送っちゃえばいいだけじゃないですかぁ～」

イエスマンは、奇妙な言葉を発信しつつ、ほくそ笑んでいた…。

【2】

丸1日かけての戦勝パレードを終えたメリャーナは、少し疲れた表情でサコンたちの前にいた。

側にはようやくと言うか、無理矢理退院したマリーが直立している。

カトラス「すっごい人気なんだな、お姫様って」

マリー「貴様、メリャーナ様に何という言葉をっ！」

カトラスの砕けた態度に、マリーだけがピリピリしていた。ヤタガラスとの経緯は知っているはずだが、それでもそんな事を言ってしまうのは、彼女らしいと言えば、彼女らしかった。

メリャーナ「マリー。そんな堅苦しい事を言わないで頂戴。ようやく見つけた、私たちの同志なんだから」

メリャーナはため息をつきながら、マリーを宥めた。

マリー「はっ…」

サコン「しかし、これであの宰相と、メリャーナ様の関係が少しは理解できましたよ。　国民に人気があるから、手を出しにくいんですね？」

メリャーナ「…私なりの戦い方なのよ…。　幸か不幸か私は女だし、まあ、利用できるものは利用しないとね…」

メリャーナから、自らの作戦を誇っているような感じはまるでしなかった。　その様子は謙虚というより、作戦そのものを評価していないように見える。

メリャーナ「それに、手を出せないのはお互い様かしら。　これ以上何かをしようとしたら、力の裏付けがいるけれど、私には軍事的にも、政治的にも、そんな力なんてないのよ…」

メリャーナはまた沈み込んでしまう。

サコン「軍事的な力なら、時間がかかりますよね？　しかも大事になる。　なら、政治的に追い落とすのが早道かも知れません」

マリー「奴の身辺は、私なりには探った。　やたらと警戒が厳しいうえに、そういった材料は…」

マリーはそう言ったが…。

カトラス「まあ、ダメ元でやってみるだけさ。　軍人と盗賊じゃ、物の見方も違うからな？」

サコン「敵を知り、己を知れば何とやら、ですよ。　改めて探っても損はないでしょう」

サコンはそう言って微笑んだが、マリーは難しい顔をしたままだった…。

【3】

ザキラ「殿下。　この度は私の頼みを快く聞いて頂いたばかりか、敵の精鋭部隊を退けるご活躍をなされたとか。　まことに、頭の下がる思いとはこの事ですな」

ザキラの言葉が、言葉通りでないのはいつもの事だった。　一言で言うなら、殴勲無礼というやつだ。

ただ、ディジョン隊の赦免という意味では、目的は達していたから、悪い流れではなかった。

『メリャーナ殿下を命懸けで護った事実と、ラピスラズリの1機を落とした功績で　『誤射』　は不問に伏す』

と、査問会はたった1回で結審した。　つまり体よく誤魔化したのだが。

メリャーナ「…いえ、私の方こそ、お願いをお聞き届け頂いて感謝しておりますわ。　ヤタガラスは私の直臣として、存分に才を発揮させます」

メリャーナがした願い、それは1つではなかった。

ディジョンの無罪放免の他にも、ヤタガラスをメリャーナ直属の臣下とすること。　さらには、それら部隊のための戦力を提供する事…。

メリャーナ「宰相も、エージェントなる直臣を、多数抱えておいで

でしたよね？　私も、それにあやかりたいと思いまして」

わざとらしい言葉と笑み。　ザキラとメリャーナの戦いは、今日も続いているようだった。

ザキラ「その戦力ですが、ちょうど新型ＭＳが何機かロールアウトしておりましてな。　よろしかったら、直にご覧になられてはどうですかな？　精鋭部隊ともなれば、ハイザックやガルスＪでは、寂しいと言わざるを得ますまい」

メリャーナ「ＭＳの性能が、戦力の決定的な差だとは思いませんが、名のある武人は刀を選ぶとも申しますからね。　お言葉に甘えさせて頂きますわ」

メリャーナは、意外にもザキラの提案に乗った。　そうするのは、メリャーナにしては異例だ。

ザキラ「そうですか。　ならば『私の研究所』をご覧にかけよう。　殿下にお見せするには、いかにもすす汚れたさもしい場所だが、そこは耐えて頂きたい」

豪快に笑うザキラ。

そして、いくつかの他愛もない言葉を交わした後、メリャーナたちはザキラの言う『研究所』を訪れるのであった…。

【4】

研究所。

それは軍の施設が集まる区画の中でも、より一層奥まったところにあった。　いくつかの建物があったが、それらのうちの1つにメリャーナは案内されていた。

周囲には多数のMSが並べられており、さすがは研究所と言ったところか。　しかも、ザキラの意向が働いているのだろう。　単に量産を目指す機体は少なく、高性能を追求したMSが多い。

実は、ザキラが『私の研究所』と称したのも理由があって、量産性に拘らないMS開発は、ザキラが宰相になる以前から、強力に推進してきた政策なのだ。

ジェイソン「ザキラ様…　いえ、宰相閣下から、殿下が心からご満足なされるまでご見学頂け、と申しつかっております。　ご覧に入れるのは、ＭＳでよろしかったですか？」

ザキラに代わって、なのだろうか？　メリャーナの案内をしたのは、副宰相のジェイソンだった。　メリャーナも前から知っている顔で、ザキラと違い、物腰はいつも丁寧な印象を受けていた。

メリャーナ「はい。　ラピスラズリに対抗できるだけの機体が欲しいのです」

本来の目的は違ったが、とりあえず誰もが納得しそうな事を口にしておいた。

ジェイソン「旧式のはずのゲルググやドワッジで、あのＢＸ（ブラックＸ）を大破させたそうですね？」

おかげでエルフレアは、まだ病院で臥せっているはずだった。　同じ撃墜判定だったが、マリーに比べて怪我が重かったのだ。

ジェイソン「こちらなどいかがでしょうか？」

ジェイソンが示したのは、ギラドーガだった。

メリャーナ「ギラドーガですか…。　もう本格的に量産されますの？」

メリャーナは、やや不満げな表情だ。

ジェイソン「まさか！　ただの量産機をお勧めしたのでは、こちらにご足労頂いた意味がありません。　これは先行量産型を、指揮官用に改装した機体です。　量産機の１１０％の推力がありますし、ジェネレーター出力は１１８％です」

メリャーナ「ですが、量産機と同じシルエットでは、何かこうインパクトに欠けませんか？　ギラドーガが、現在の主力機ハイザック、ガルスＪに勝る機体なのは承知しておりますが…」

そう言われたジェイソンは、少し悩む仕草をしたが、はたと手を打つと、違ったＭＳを指し示した。　水色のボディカラーが鮮やかな機体だ。

ジェイソン「ゼク・アイン。　ギラドーガと量産を争って敗れた機体ですが、スペックでは劣っておりません。　むしろ武装変更など

による拡張性は、ギラドーガより優れているかと」

ジェイソンは、そう言ってゼク・アインを紹介した。　ゼクの方が好きなのか、いくらか言葉に勢いがあるように感じられなくもない。

メリャーナ「…どうでしょう」

ここで始めて、メリャーナは後を振り返った。　後にいたのは、機体を失ったか、初めから専用機を持っていないメンバーなので、マリー、サコン、カトラス、アルヴィンだ。

グリフィンは、昇進を丁重に断り、予備役に引いたという事になっていた。

マリー「私は、機体を選ぶ気はありません。　メリャーナ様の侍従として、相応しいＭＳであれば…」

どこまでも控え目なマリー。

サコン「私も、機体を選ぶ気はありませんが…」

カトラス「俺は気に入ったぜ！　こいつって、後からいろいろ付けられんだろ？」

ジェイソン「…は、はい。　主にミサイルなどですが、手持ち武装に限らない機体ですから…」

ジェイソンは、思った以上に乗り気のカトラスに、いくらか押され気味だ。

そうして、ゼクでも悪くないというムードになりかけたのだが、そんなムードに不満そうな人間が約1名いた。

アルヴィン「…俺はなぁ…。　こいつも飛べるのは分かるんだけどよ、やっぱ可変型がいいんだよな…。　ここに可変ＭＳはないのかよ…

…あっ！！」

突然アルヴィンが走り出す。

ジェイソン「あ、そっちはいけませ…　いや、違います！」

駆け出したアルヴィンが、角を曲がった先で見つけたのは、いま訓練から戻って来たばかりなのか、まだ冷却も終わっていないＭＳだった。

漆黒のボディと、ひときわ長いビームライフル？　が特徴の機体だ。

ジェイソン「…ちょっとあなた！　勝手に行動してもらっては困りますよ！　いくら殿下のお連れの方とは言え、こちらにも機密ってものがですね…」

アルヴィン「俺の目はごまかせないぜ！　こいつ、可変ＭＳだよな？　それも、かなりの高性能なＭＳと見た！」

アルヴィンは、完全にジェイソンの話を聞いてはいなかった。

ジェイソン「他人の話を聞きなさい！　この機体は、あなたなどに乗りこなせるものでは…」

ジェイソンがそう言って、アルヴィンの肩に手をかける。　細身の割にはかなり強い力だったが、アルヴィンが立ち止まったのは、違った理由だった。

???「…ジャマだ、クズ」

そのMSから降りて来たパイロットが、アルヴィンを避けようともせず、傲岸なりで通り過ぎたのだ。

アルヴィン「…てめ…」

アルヴィンはそんな態度に怒りを露にするが、それを一喝したのはジェイソンの方だった。

ジェイソン「いい加減にしなさい！　こちらにも都合があると言っているじゃないですか！　あちこち走り回った挙げ句、他の人間にケンカを売る気ですか！　彼は中佐扱いですし、私だって少将なんですよ？　これ以上無茶な真似をするなら、軍法会議にかけてもいいんですからね？」

メリャーナ「申し訳ありません。　後で厳しく言っておきますので…」

追いついたメリャーナが、アルヴィンの代わりに詫びる。　言葉が柔らかいジェイソンが相手のせいか、メリャーナもザキラの時のような棘々しい言葉を使わなかった。

ジェイソン「…殿下のお連れの方じゃなかったら、即刻処罰ものですが…。　以後、頼みますよ？」

ジェイソンはメリャーナに謝られたので、ようやく矛を収めたようだった。

と、そんな騒ぎを聞きつけてか、駆け寄って来た白衣姿の老人が１人。

？？？「おぉ、ジェイソン、よい所に。　ウインドはこっちに来なんだかの？」

ジェイソン「…ドクター？　そんなに慌ててどうしました？　彼なら今、その先の方へ行きましたけれど…」

ドクターと呼ばれた白衣姿の老人は、息を切らしてジェイソンに問いかけていた。　ジェイソンは答えながらも、怪訝な表情をしてい

る。

DR．マンソン「どうしたもこうしたもないわ！　あやつ、また演習中に他のエージェントを殺しおった。　ただでさえエージェントの調整は難儀だと言うに…。

こら！　何をぼさっとしておる！　早くウインドを追いかけぬか！！」

帝国兵「はっ！！」

老人について来ていた兵が怒鳴られ、泡を食った様子で走り出した…。

【5】

思わぬ一悶着を経たが、カトラスがゼクアイン、アルヴィンがZ2（ゼッツー）を乗機にすることが決まった。

残るは、サコンとマリーだったが…。

メリャーナ「…副宰相？　お恥ずかしい話なんですけれど、お手洗いはどちらにありますかしら？」

メリャーナが、少し遠慮したように言う。

ジェイソン「あ、これは気が利きませんでした。　今ご案内を…」

メリャーナ「いえ、わざわざ副宰相にお願いしなくても大丈夫ですわ」

メリャーナは、ちょうど近くにいた兵士に声をかけ、それからなぜかカトラスを振り返る。

マリー「メリャーナ様。　お伴いたし…」

カトラス「あ、悪ぃ！　俺もちょっと冷えたらしい。　お前とサコンは、その間にゆっくりＭＳを選んどけよ。　後で後悔しないように、じ～っくりとな？」

マリーの言葉を遮り、しかも変な言葉遣いをするカトラス。

マリー「お前…　ってあなた？」

サコン「じゃあ、そうさせてもらう。　このＭＳの変型方法ですけどね…」

ジェイソン「あ、バウですか？　それはですね、下半身を分離することで、重量の軽減を計っているのですよ。　で、そちらのはですね…」

そしてサコンは、急にジェイソンを質問攻めにしだした…。

【６】

メリャーナ「…こちらかしら？　あら？　男性用しかありませんの？」

帝国兵「あ、女性の方は反対側に」

兵士が歩いて行き、女性トイレを案内する。

メリャーナ「それと、帰り道に迷うといけませんので、ここで待っていて頂けるかしら？　皇女がこんな事を言うと見損なわれるかも知れませんけれど、私、地図は向きを変えないと読めないタイプでして」

帝国兵「承知しました」

帝国兵はくすりと笑い、メリャーナは少し照れた様子でトイレの扉を開けて…。

メリャーナ「…お待たせしましたわ」

カトラス「女ってのは大変だな？　俺はもう簡単に終わってるぜ？」

メリャーナ「私も、殿方のようにできましたら、戦場でも楽なんでしょうけれど。　…あ、これは私としたことが、はしたないことを…」

そう言ったメリャーナは、カトラスを見て、ウインクをしたように見えた…。

第５４章　デビュー（前書き）

（どうなるのか？）

ネロ「隊長～。　始めなくていいんですか？」

ゴトー「うるさいな…。　こんなお遊びに興味はないんだ…」

（えっ？！　これで終わり？？？）

第５４章　デビュー

実況「勝者ぁ～　スティィィ～～ヴ！！」

レフリーＭＳが、スティヴのストライクダガーの腕を持ち上げる。

だが、何故か歓声はまばら？

ハロ「スティヴ、カッタ！　スティヴ、カッタ！」

スティヴ「やったぜ、５連勝！」

ゲット「すげぇな、スティヴ！」

盛り上がる２人と１個だったが、しかし、リンダは拳を握り締めていた。

リンダ「…スティ～～ヴ～～。　あんたってヤツは、本気で見損なったよ」

ゲット「…どうしたんだよ？　５連勝だぜ？　凄くないのか？？？」

ゲットには、リンダの様子の意味がまるで分かっていないようだ。

リンダ「同じランクの劉に負けたのは、まあいいさ。　だが、それからはなんだ？　相手はみんな格下ばっか。　オッズは全部1．1倍っ！　勝利欲しさに、低ランクファイター狩りするとはねっ！！」

ゲット「狩り？」

リンダ「そうさ。　前に説明しただろ？　一番最初に戦った劉子鷹は、スティヴと同じエース。　だから、けっこういい勝負だったよね？　だけどあとの5人は遥か格下。　ただの弱い者いじめだよ！」

リンダの怒りは、収まる様子がない。

フレーネ「…いじめはよくないかも…」

ハロ「イジメヨクナイ！」

そう言ったフレーネは、リンダに頭をなでられて、どこか嬉しげだ。

一方、捲し立てられたスティヴは…。

スティヴ「しゃ～ね～だろ！　次負けたら、ランク下がっちまうんだから…」

リンダ「うるさい！　男なら、堂々と強いヤツとタイマン張りな！」

リンダはスティヴの胸元を掴まえ、ぐらぐらと揺する。

スティヴ「すんませんでしたぁ～」

あまりの気迫に、ついに白旗を上げるスティヴ。

リンダ「…分かればいいんだよ。　あんたも真面目にやれば、あれくらいは目指せると思うんだけどねぇ…」

リンダが目をやった闘技場では、次のファイトが行われ、Ｓ（スペリオル）ガンダムが、ガンダムシュビーゲル相手に優位な戦いを進めて、大いに観客席を沸かせていた…。

【2】

そして翌々日。

今度は、ゲットがファイトデビューする日を迎え、一同は朝から観客席に顔を揃えていた。

実況「皆様本日わぁ～　朝早くからＭＳファイトにお越し下さいましてぇ～　まぁことぉ～にありがとうございまぁ～す！！」

朝から聞くには、いくらか耳障りだったが、いつもの名？　調子で実況が始まる。

実況「本日はビギナークラスっ！　それも、本日デビュー戦を迎える、若き新星たちのファイトを中心に、皆様を興奮の坩堝（るつぼ）へと誘いたいと思ってぇ～　おりますっ！！」

実況「本日第１戦わぁ…　おっと、これは珍しい。　ビギナークラ

スではあまり見られない、ガンダムタイプ同士の戦いです！

青コーナーぁ～

父は現役キングスクラスのファイター、母は一時マスタークラスに在籍したこともあるという、ファイター会のサラブレッド！

戦いの血は、若き身体に脈々と受け継がれているぞっ！

ガンダムエクシア

トルディ・ローレシアっ！！！

そして、対する赤コーナー！

こちらは…　おっと、大会本部から連絡がありました…。

なんということでしょう！

赤コーナー、ＧＰ－０１ゼフィランサスに乗るゲット・アルスターですが、年齢１２歳６ヶ月と１７日は、ＭＳファイト史上、最年少のチャレンジだそうですっ！

ということは、勝てば歴代で最も若き獅子の子として、永遠にその名を歴史に刻むことになりますっ！

改めて紹介いたしましょう。

サラブレッドを倒す、若き獅子となるっ！

ガンダムＧＰ―０１、ゼフィランサスっ！　ゲット・アルスターとは俺のことだぁ～！！！」

続いてオッズなどが紹介されていくが、やはり大方の予想は、トルディ有利に傾いていた。

リンダ「…そうでもないかもね？　あのガンダムエクシア、親父の乗ってる機体のレプリカって噂だからね？　カタログスペック通りの性能があるとは限らないよ？」

リンダが握っているのは、ゲットに賭けたファイトチケットだった。

スティヴ「勝ち負けはともかく、腕を磨くにはいい機会だろ」

フレーネ「ゲットがんばれ～」

そしてあとの2人は、賭け事よりも、純粋にゲットを見守る気のようだった。

実況「それでは、本日も熱い闘いを期待いたしましょうっ！！

ＭＳファイーーットオォォッッ

レェディィィィーーーーーー…

トルディ&ゲット&ハロ「ゴーーーーーーッッッ！！！！！」

【3】

ゲット「ライフルのエネルギーは節約しないとな…」

ハロ「セツヤク！セツヤク！」

前の戦いの教訓を生かして、いきなりライフルを連射したりはせず、じりじりと前に進むゲット。

トルディ「えっと…。　まずは射撃からかな…」

お互いに、どこかたどたどしい感じがある。

トルディはデビュー戦に向けて、さまざまの練習を積んでいたが、いくら厳しくても、それはやっぱり練習に過ぎなかった。

他方のゲットは、下手をすれば死ぬかも知れないなかで戦って来た経験と、レアルタ、スティヴの教えがありはしたものの、ＭＳに乗ってからの年月が、決定的に足りていなかった。

トルディ「当たれっ！」

ゲット「うわわっ！」

ハロ「アタッタゾ、ナニシテル！」

練習の成果なのか、トルディの狙いは正確で、ゼフィランサスの左脇腹にビームが当たり、赤いランプが点灯する。

実況「トルディの先制攻撃が、クリーンヒットを記録しましたっ！　なお、皆様ご存じかとは思いますが、このファイトはビギナークラスですので、命中ポイントを加算することで勝ちが決まります！　実際に機体を破壊できるだけの出力、炸薬量の武器は用いられておりません！」

真剣なファイトと言えど、低いクラスには、スポーツとしての配慮もなされているようだった。

ゲット「やったな～」

ゲットはフットレバーを踏み込み、接近戦に持ち込む構えだ。　だが、踏み込む前にライフルを、近づくまでにバルカンを牽制に使っていて、ずいぶんと戦い慣れてはきたようだ。

スティヴ「まだ無駄弾が多いな」

スティヴは渋い顔をしたが、牽制はそれなりに効果を発揮して、ゲットはうまく間合いを詰めた。　そしてサーベルが、エクシアの頭部を掠めた。

実況「おっと?!　ゲット・アルスター、いきなり頭を狙って来たか?」

観客席が軽く沸く。

それもそのはずで、ＭＳファイトでは、頭部を破壊されたら、それで負けが決まってしまうのだ。

トルディ「…いきなり頭なんかやられちゃったら、パパに怒られちゃうよぉ～」

ボソっとトルディが呟く。

ファイト中の発言にしては、どう見ても微妙な言葉だったが、ゲットには聞こえていないはずなので、よしとしておく。

そして言葉はともかく、回避は的確だったし、一旦反撃に転ずるや、トルディは次々とポイントを稼いでいった。

ライフルが3発、サーベルが一振りと、流れ弾ながらバルカンが一斉射。　実際に機体が壊れないのでわかりにくいが、もし実戦なら、けっこう惨めな姿になっているかも知れなかった。

ゲット「…こういう細かいのは苦手なんだよな～。　よっし、思い切っていってみっか！」

ゲットは後に下がってシールドを構え直すと、そのままスロットル全開で、真っ直ぐエクシアに突っ込む。

トルディ「す、すごい勢いだよ…」

シールドをかざしているから、当たっても判定にはならないのだが、ついライフルを射ってしまう。　実戦なら、被弾したシールドが破壊されるかも知れないが、今はそうなる事もない。

ゲット「…3、2、1…　いっけぇぇぇぇ～～～～！！！」

フレーネ「…ゼフィー…　本気…」

ゼフィランサスは、エクシアの２０メートルほど手前で、急に横滑りを始めた。　ゲットが機体を後ろ向きに近いくらいの、横に向きを変えたのだ。

だが、今までの勢いがあるため、ゼフィランサスは真横に進まず、斜め前に滑るように進み続け、エクシアの背後を取った。

ゲット「…げっ！　気持ち悪りぃ…」

あまりのＧにゲットは気持ちが悪くなり、手も震えてしまう。　何とかライフルを構えたが、照準は定まらない。

ハロ「ゲット、シッカリシロ、シッカリシロ！」

ハロの声で、ゲットは何とか自分のするべき事を思い出し、トリガー引いた。　すると、何か手応えがあった気がした。

実況「おおっとぉ～！　クリティカルヒィーーーット!!!　ゲットの攻撃が、なんとトルディの背後を捉えましたっ！　一気に背後に回り込む素早い機動に、さすがのエクシアもついていけなかったか?!」

観客席は大いに沸いた。

【4】

そして、見事な攻撃を見せたゲットだったが、その後なぜか動きがなかった。

それもそのはずで…。

ゲット「うげぇぇぇおおお～～～」

ハロ「ゲット、キタネェゾ！キタネェゾ！」

…コックピットで吐いていた。

せめてもの救いは、バイザーを開けるのが間に合ったのと、積み込んだ荷物に偶然、ビニール袋が入っていたことだった。

コックピットには、余計な荷物など積み込まないのがふつうなのだが、余計な物が地味に役に立った。

ハロ「ゲット、ナサケネェナ！ナサケネェナ！」

ゲット「…ハロ…　しょうがねぇだろ…」

さっきの元気を、あっさり失ってしまったゲット。

トルディ「…まずいよ…　まずい…。　こんなんじゃ家に帰ったらパパが…。　いや、ママが家に上げてくれないかも…」

一方のサラブレッドには、サラブレッドの悩みがあったらしい。

ゲットとは違った意味で、顔が青ざめている。

そういう意味でも、たしかに攻撃はクリティカルヒットだった。

トルディ「…こ、こうなったらやるしかないっ！　ト、トランザムだ…　トランザムいくぞっ！」

主として家庭の事情に、ではあるが、追い詰められたトルディは、奥の手を出すことにしたらしい。　赤い粒子が辺りを覆いだす。

ハロ「ゲット！　クルゾ！ヤベェゾ！！」

ハロが警告を発する。

ゲット「…えっ？」

ハロに言われるままにした回避行動。　まだ気分がすぐれず、ろくにモニターを見てもいなかったが、機体が何かに揺り動かされた感覚はあった。

実況「つ、ついに…　ついについについについにぃ～　伝家の宝刀を抜いてしまったガンダムエクシアっ!!　トランザムだ!　トランザムを使ってきたぞ!!」

トルディ「…よく避けれたね…。　でも、もう手加減はしないんだからねっ!」

今までが手加減だったのかは怪しかったが、それでもエクシアの機体性能が大幅に上がったことに違いはなかった…。

【5】

グリフィン「ぐがぉぉぉ～」

車掌「…お客さん、終点ですよ？」

グリフィン「ぐひゅるるぅぅぅ～」

車掌「お客さんってば！　終点です！　中国のファイトスタジアム！　降りるんでしょ！！」

グリフィン「…ぐぬ？」

身体を揺すられ、ようやく目を覚ましたグリフィン。

車掌「ぐぬ？　じゃありませんよ。　お客さんとお客さんのＭＳ降ろさないと、折り返し運転ができないじゃないですか！」

グリフィン「…ああ、これは我輩としたことが済まぬ済まぬ」

詫びたグリフィンは、ピシャピシャと自分の頬を叩くと貨物車に向かう。　そこでガンダムＭＫ－２に乗り込むと、さすがに手早い操縦で、ＭＳを貨物車から降ろした。

グリフィン「うぬぬ～～！　久しぶりだな、中国も。　いや、まだ1年は経っていなかったか？」

グリフィンの記憶は曖昧のようだったが、サコンがシュバルツに仕える前。　まだ怪盗ヤタガラスを本業にしていた頃に、グリフィンはここで、ファイターとしての日々を送っていた事があった。

最初の頃は、ＭＳの修理費用で資金を食い潰す事もあったが、いつからかそんなこともなくなり、ついにはガンダムを買えるまでになった。

そう。

このガンダムＭＫ－２も、中国で買い集めたパーツで組み上げたＭＳなのだった。

グリフィン「まずは、ＭＳをファイト仕様に戻さねばな」

呟いたグリフィンは、コックピットから降りると、近くの整備屋に顔を出す。

整備屋「おお、あんたか。　どうした？　金に困って、ファイトマネーをあてに舞い戻ったか？」

グリフィンと親しいのか、その整備屋は相好を崩した。　白髪の目立つ、初老の職人だ。

グリフィン「今回は金よりＭＳかな？　最近こっちはどうだ？」

整備屋「ぼちぼちかな？　しかし、ＭＳの質は上がってきとるぞ。すぐに偉そうな顔をするのが気に食わんが、帝国が勝つと景気はよくなる。　ＭＳも高性能なのが復活してきとるし、ちらほら新型も出とるよ」

グリフィン「よし、ならば何機か持って帰るとするか！」

グリフィンは、やる気をみなぎらせているようだった…。

【6】

ハロ「ゲット、ミギダ！」

ハロ「ゲット、ヒダリ！ヒダリ！」

ハロ「ウシロトベ！ウシロトベ！」

ゲット「…ハロ…　すげぇな、お前…」

トルディ「…この…　ちょこまかと…」

息もつかせぬ、エクシアのトランザム。

だが、回避困難なはずのその攻撃を、ハロは的確な指示でゲットに回避させていた。

ゲット「なんであんなのが見えるんだよ？」

ハロ「ハロエライカ？　ハロエライカ？　モットイエ、モットイエ！」

今までゲットは気がついていなかったが、フレーネと一緒に眠って

いたこのボール状のマシンは、ＭＳの操縦をサポートする機能が搭載されていた。　それはゼフィランサスの優れたセンサーと綿密なリンクをし…

早い話が、ゲットに使いこなせていなかった、ゼフィランサスの性能をすべて発揮させていたのだった。

トルディ「…ムカつく奴だなぁ…　このっ！！」

ハロ「マエダ！　ビームウテ！」

ゲット「えっ？！」

ゲットの反応が遅れた。　ライフルを扱うはずだった右腕が跳ね上げられる。

実況「クゥゥゥリティカルヒィーーーットッッッ！！！！！！」

レフリー「右腕、破壊判定！！」

実況「おっとこれわぁ～　大ピィィーーンチ！！　クリティカルヒットに加えて、右腕破壊判定でっす！　以後ゲット機は、右腕の使用が禁じられますっっ！！」

ゲットは、実際の戦闘なら、右腕が切断されていたであろうダメージを受けたと判定されたのだ。　レフリーＭＳが駆け寄り、トルディとゲットを引き離すと、ゼフィランサスの右手を封印してしまう。

トルディ「…早くしてよ…　ああ、もうじれったい！」

トルディが苛立つ理由。　それは、知る人なら当然知っている、トランザムのタイムリミットだった。

ゲットの目がついていかなかったために、回避指示をハロに頼った結果、逆に機体の回避率は上がってしまい、時間ばかりが過ぎていたのだ。

しかも、リンダが予想した通り、トルディの乗るガンダムエクシア『レプリカ』は、ＧＮ粒子の生産がかなり少なめで、トランザムの時間制限が、本来の１／４しかなかったのだ。

トルディ「もう時間がないのに…。　ええぃ、壊れたって、壊したって知るもんかっ！！！」

トルディには、もはや容赦も余裕もなかった。　勢いそのままに、猛然と突撃をかける。

ゲット「ハロ！　次はどっちだ？」

ハロ「…タブン、ミギ？」

ゲット「…えっ？　たぶん？？？　…だあぁぁぁ～～～～っ！！！」

実況「おおっとぉぉぉっっ～～！！　見事なフェイント…　いや、先読み攻撃でしょうかっ！　トルディのクリーンヒットですっ！！」

ゲット「ハロっ！　どうなってんだよ！！」

ハロ「アマエンナ！アマエンナ！」

…言われてしまった。

確かに、サポートマシンをフルに活用するのも、ＭＳを操る実力の１つではある。　しかし活用するのと、任せて何も考えないのとは違う。

機械は機械の優れた所が、人間には人間の向いた所があるから、こんな人型の戦闘兵器が闊歩する時代になっても、コックピットをなかなか無人にはできないのだ。

ゲット「…わかったぜ、ハロ。　次はちゃんとやる！」

ハロ「ソノイキ、ソノイキ！」

ゼフィランサスが、左手だけながらも、サーベルを構え直す。　シールドが持てないので、さっきみたいな一撃を食らえば、いつ負けを宣言されてもおかしくはない。

トルディ「…まだ粘るのか…。　いい加減に落ちてよっ！！」

実況「ガンダムエクシア、再度突っ込んだぁぁ～！！　次は右か？　それとも左か？　これを食らえば最後の一撃になりそうだっ！！　ゲット・アルスター、この攻撃を見切ることが、果たしてできるのかっ！！！」

トルディ「てやゃぁぁぁぁぁ～～～～～あっっ！！！！！」

振りかぶられたＧＮソード。

ハロ「ケンハミギテ！ケンハミギテ！」

ゲット「…そっか。　あの剣、右手専用なんだな？　なら、こうしたらどうなんだぁぁぁぁぁ～～～～～！！！！！！」

エクシアとゼフィランサスが、機体を交錯させた…。

【7】

GNソードが…

…ゼフィランサスの肩に食い込んでいた。　ゲットのゼフィランサスが、ガクッと膝を着く。

実況「勝負ありっ！！　勝者トルデ…」

観客席に歓声が起こりかけた、その時…

実況「…いえ、この試合は審議ですっ！　大会本部から待ったがかかりましたっ！！　いったい、どうしたというのでしょう?!」

トルディ「…やった…　今のはやっただろ…。　…ん?　おかし

いな、画像が乱れてるぞ？　　メインカメラの故障かな？？？」

実況「審議の内容が届きましたっ！　ただいま、大会本部よりお知らせがありますっ！！」

本部放送「…観戦中の皆様にお知らせいたします。　まず、青コーナーガンダムエクシアの頭部をご覧ください」

観客が一斉にエクシアを見て…

どよめいた。　なんとエクシアの頭には、ビームサーベルの柄が刺さっていたのだ。

本部放送「赤コーナー、ゼフィランサスの機能停止に伴い、現在の状態ではビームサーベルの刀身が消滅しておりますが、両機が交錯した際には、ビームサーベルは有効に機能していたのが、記録映像で確認されております」

会場のモニターに、その瞬間の映像が流される。　かなり分かりにくいが、スローで流されたその映像では…

ゲットの繰り出した突きが、たしかにエクシアの頭部を捉えていた！

本部放送「…大会ルールにおきましては、頭部の破壊、切断をもって敗北としております。　この場合、頭部は完全に破壊されておりませんが、それはビギナークラスの出力制限と、ゼフィランサスが機能を停止した事が原因であります。

従いまして、本来ならば頭部を破壊するだけの威力を、ゼフィランサスのサーベルが持っていたとみなしっ！」

実況「ゼフィランサス、ゲット・アルスターの逆転勝利を宣言いたしまぁぁぁ～～～～すっ！！！」

レフリーＭＳが高々と、ゼフィランサスの左手を持ち上げる。　観客席が、ビギナークラスにそぐわないぐらい沸いた。

ゲット「…あ、当たってたのか？？？」

ハロ「マグレ、マグレ！」

ゲット「…まぐれかよ…。　ははは…」

？？？「…あなた？」

？？？「偶然の命中と言う者もいよう。　だが、ファイトにおいて…。　いや、たとえ実戦でも、諦めない心が、思いもしない奇跡を呼び込むことはあるものだ」

？？？「あの子は、技で勝って、心で負けたんですね？」

？？？「そういうことかな。　…ん？」

グリフィン「なんだ？　もう終わってしまったのか？　せっかく我輩も見に来たというのに」

？？？「一足遅かったな？　貴様のことだ。　列車で寝過ごしてでもいたのではないか？」

（ギクっ！！）

グリフィン「…い、いや、ちょっと気になるＭＳがあってな。　見ているうちに、つい時間を忘れてしまっただけよ」

？？？「そうなんですか？　グリフィン殿のお眼鏡に叶うＭＳが、そうそうあるとも思えませんが？」

？？？「そうか！　もしかして、貴様の惚れたＭＳとは、范の親父が最近手に入れたという『アレ』か？　『アレ』ならば、貴様の好みに合いそうだな」

（…アレとは何なのだ？　しかし、ここは話を合わせるしかないか…）

グリフィン「ほ、欲しいのは山々だが、先立つ物もないし、結局遠くから眺めるだけで、諦めたのだが…」

???「何だ、そんなことか！　負けはしたが、息子が良き試合をし、良き友を見つけた記念すべき日だ」

闘技場を見ると、悔し泣きをするトルディに、ニカッとした笑みを浮かべたゲットが握手を求めていた。

顔は笑っていたが、その笑みに嫌味は微塵もなかった。　むしろ、何か宝物でも見つけたような表情で、それを見たトルディが、２つ３つ、言葉を交わしていた。

???「まるで関係はないかも知れんが、儂も友のために尽くしてみたい気分でな！」

その男が豪快に笑った。

グリフィン「…出世払いしかできんぞ？」

？？？「貴様はいずれ、頂点に立つ男だ。　中国の、などではない。世界のだ。　だから、金は必ず返ってくる」

グリフィン「夫婦揃って物好きだな？　赤の他人のために、ここまでするか？」

？？？「中国は、恩義を忘れぬ国です。　小さな恩ではあっても、恩は恩。　主人はもとより、我ら一党の力が必要な時は、いつでもお申し出くださいましね？」

その白髪の混じった婦人の笑みは、グリフィンの心を久しぶりに捉えた。

グリフィン「ならば、遠慮なく言葉に甘えさせてもらうとしよう。　その代わり、今日は息子も巻き込んで、盛大に飲もうではないか！　もちろん我が輩の奢りでだ！」

？？？「…まさかとは思うが、トルディがまだ、未成年な事を忘れてはいまいな？」

グリフィン「そうだったか？」

グリフィンの笑いがこだます。　そしてその勢いそのままに、その夜の宴会（＝グリフィンのみ、馬鹿騒ぎ）は盛り上がったという…。

第５５章　勝負師（ギャンブラー）（前書き）

（先が見えないぞ？）

ネロ「…あ、あのですね～」

ジルド「隊長、ついに帰っちまったぜ？　どうすんだよ！」

メリル「…じゃ、占ってみる…。

…悪魔の正位置。

…塔の逆位置。

…後の２枚は…　本編で…」

ジルド「…本編でって、そんなのアリかよ?!　つか、メリル?
それ、何を占ったんだ?」

メリル「…あの人の…　次の運命」

ネロ「えっと、意味を説明しますと…
悪魔の正位置で、邪心、束縛、堕落。　塔の逆位置で、必要とされる破壊です」

ジルド「…つまり隊長は、邪心を抱いて、何かを破壊するが、それは実は必要なことで…」

ネロ「でも、隊長に限って邪心なんか持ちますか?!　これは、悪い心を持った誰かが、何かを破壊するけれど、それは結果として隊長のためになるって意味じゃ…?」

ジルド「いや、もしかしたら、悪魔は束縛かも知れないな!　隊長が捕まっちまうのか?!」

ネロ「でも捕まるって誰に?　いまは中国にいますから、帝国もよほどのことをしないと、踏み込んでは来ないでしょうし…」

ジルド「いやそもそも、次の章じゃ中国にいないかも…」

ネロ「そんなこと言ったら、キリがないですよ！　…そうだ、メリル本人に聞けばいいんです」

ジルド「お～い、メリル？　あれ？　いないぞ？」

ミク「よし、メリちゃんよくやった。　ご褒美にアイスあげる」

メリル「…おいしい…。　でもちょっと冷たい…」

マヒロ「いいわ。　この調子で、物語のあらすじを占わせて、読者の期待を煽るのよ！」

ミク「あいさ～」

メリル「…次回予告？」

（続くのかな？）

第５５章　勝負師（ギャンブラー）

ゲットが、劇的な初勝利を飾った日。　街の一角で…。

元ファイター「これ、私の使ってた機体。　イフリートという。古い機体だが、我が家に伝わる由緒正しいＭＳ。　まだ会って間もないが、友情の証。　ぜひ、これに乗って戦ってほしい」

ジルド「うぉっ！　ＭＳくれるのかよ！　なんて気前のいい」

ジルドは、違ったところで機嫌を良くしていた。

元ファイター「…あげる…。　ま、いいか。　勝ったらそのＭＳはやる。　友情の証」

元ファイターの言葉には、何故か勢いがなかった。

ジルド「…何だ？　くれるつもりじゃなかったのかよぉ～」

元ファイター「…違う。　ＭＳあげる、惜しい訳じゃない。
私、今まであいつに勝てそうなファイター、何人もスカウトした。
　でもみんな帰って来なかった。　現役時代に使ってたＭＳ、これで最後。　これあげたらもうない。　金も…　ない。　…だから…
　田舎帰ること決めてる。
あなた勝っても負けても、これで最後」

つまりこの男は、自らを卑怯な技で倒したというファイターに復讐する、ただそれだけのために、現役時代のＭＳなど、すべての私財を他のファイターに提供してしまって、もう何も残ってないと言うのだろうか？

ジルド「…う…　そうだったのか…。　い、いい話だぜ…。　そんな奴、うちの隊長がボッコスカにやっつけてやっからよ！　なっ、隊長っ！」

ゴトー「…ああ…」

感極まったのか、ジルドは男泣きしている。　ゴトーの反応は…
よく分からない。

元ファイター「とりあえず、あなた試合出る。　あいつはランク高いから、すぐには挑戦受けないかも知れない。　でも、何連勝かすれば、必ず興味持つはず。　なぜならあいつ、新人がデカイ顔するの嫌い」

こうして、Ｂ３グフからイフリートに乗り替えたゴトーは、その日以来、怒涛の５連勝を飾る。

クラスは一気にベテランまで上がり、ついに決戦の日が訪れた…。

【2】

実況「あぁぁ～～～おぉコーーーナーーーー！！！

長年の雌伏の時を経て、驚異の快進撃は始まった！！

現在、ＭＳファイト史上、最多に並ぶ２６連勝記録保持者！　そして今日勝てば、記録更新はもちろん、キングスクラスへの昇格が決定いたしますっ！！！

見た目はザクだが、ザクじゃない！　全身に隠された秘密の武器を見た者は、恐怖のあまり、ひきつり、脅え、泣き叫ぶっ！

見た目に騙されるなっ！

変幻自在の魔術師ぃ～

周ぅぅぅ～～～～王惇～～～～！！！！」

紹介されたザクが、その手を高々と上げると、観客席から絶叫とも言えるくらいの叫びが起こった。

それは、身体のいたる所にクラッカーを装着しているぐらいで、あとはただのザクと変わらない。　少なくとも、凄い連勝記録を作れる機体には見えない。

実況「続いて、あぁぁぁかコーーーーーナーーーーーー！！！

連勝は、連勝中の俺が止める！

現れたのは、わずか1週間前。　宇宙にいたと言うが、その経歴、実力の全てを黙して語らぬ、寡黙の戦士!!

イフリートを駆るその腕に、経験や常識は通じないぞっ!!

謎の傭兵、ゴトぉぉぉーーーーー!!!」

名前がコールされたが、観客席は静まり返ったままだった。

表示されているオッズは、周1．2倍、ゴトー280倍だった。

ただ、単純に勝つ方を予想する単勝ですら、このオッズである。

観客A「周のヤツ、記録かかってるからって、安全策に走りやがったぜ?」

観客B「格下狩って、記録だけ作ろうってのかよ!　つまんねぇな」

口の悪い観客がぼやく。

観客A「でもよぉ…。　つまんねぇっつう割には、お前いくら買ったんだよ？」

観客B「周に1万ギラ？　5分以内だ」

観客A「同じかよ！　俺も1万、パーフェクトだ！」

観客たちが話しているのは、ファイトチケットの種類だった。つまり、周が5分以内や無傷で勝つと予想されている訳で…。

早い話、ゴトーは観客にまで相手にされていなかった。

実況「それでは、我々も熱い闘いを期待しながらぁ～～～！！

ＭＳファイトォォォ～～～～

レディッ！！

周「ゴーーーーーッッッ！！！！！」

【3】

最初に仕掛けのは、周のザクだった。　手当たり次第にクラッカーを投げまくる。

実況「出たっ！　周王惇、必殺の目眩ましだっ！　煙で辺りを覆い、相手の目を奪ってから必殺の一撃を加えるっ！

これが、周の勝利の方程式なのですっ！！

この煙には、ミノフスキーその他、さまざまな粒子が混ぜ合わされていると言われ、カメラだけでなく、各種センサーもダメにしてし

まいますっ！

そのため、１つだけ最大の欠点があるっ！！」

実況が一息置いた。

実況「それは、カメラ中継ができないことだっ！！　全ての機器ををジャミングしてしまうため、相手ＭＳから見えないのはいいが、我々からも戦っている姿が見えないっ！！

周、頼むっ！！

お前も少しは、ファンサービスというものを考えてくれっ！」

観客席が爆笑の渦に包まれる。　両機の姿が見えないので、もはや実況のトークショーを見ているに等しい。

フレーネ「…煙ばっかり…」

ハロ「ミエナイ、ミエナイ！」

リンダ「まあ、いつもの作戦らしいからね？　というか、ゴトーも無謀な挑戦をしたもんだ」

挑戦は、互いの合意さえあれば成立する。

この場合、ゴトーは遥か格上のファイターと戦うため、その分勝った時のファイトマネーは増額される。　それは、周にとっては逆になるが、代わりに戦い自体は楽になる。

要は捉え方1つなのだ。

スティヴ「欲の皮突っ張って、無謀な事しでかそうってんだろ？　連勝したからって、いい気になってるんだぜ？」

スティヴは、ゴトーのことを悪く言っていた。　そんなスティヴに、空き缶が飛んで来て当たった。

スティヴ「痛ってぇ～なぁ～。　誰だよっ！」

ジルド「隊長を悪く言うんじゃねぇっ！！」

どうやらそれは、話を聞いていたジルドの仕業のようだったが…。

実況「煙が一瞬晴れますっ！　おおっと?！　ちらっと見えたのはイフリートだが、肩のアーマーが外れているぞ？　開始わずか１分ですが、ゴトーが不利な状況に立たされているのかっ?！」

しかし、ここでまたスモークが追加されたらしく、再び闘技場を煙が覆ってしまう。

ジルド「何も知らねぇクセに、勝手なこと言ってんじゃねぇよ！隊長はだなぁ…」

ジルドは、涙ながらに語り出す。

試合が見えないせいもあってか、リンダやスティヴ、ゲット…　ネロやミアに、メリルまで話に聞き入っている。

ゲット「やっぱあいつ、すげぇイイ奴だったんだ…。　俺、心の底から応援するぜっ！」

ゲットが、大声でゴトーに声援を浴びせ始める。

リンダ「…やれやれ…。　ゲットも随分、ゴトーに肩入れするじゃないか」

そんなゲットを見たリンダは、少しだけ目を細め、微笑みを浮かべる。

ジルド「だろ？　いい話だろ？」

いい話、で周囲が纏まりかけた、その時…。

ネロ「…ジルドには悪いんですけど、その話、何か臭いませんか？」

突然の異議を掲げたのは、熱い傭兵の中では、クールな部類に属す

るネロだった。

ジルド「あぁ、ネロとミアは、そん時いなかったもんな。　たしかに義足の男が、こう隊長にすがらんばかりにな…。　あのイフリートってＭＳも、そいつからもらったんだぜ？」

ジルドは、ネロが話について来れていないのだと思ったらしく、また詳しく説明しだす。

…だが。

ネロ「やっぱり分かりません。　大会のルールからする限り、卑怯な手はともかく、相手に怪我をさせても、いい事は１つもないんですよ？

それに、ＭＳの脚を狙うなら簡単ですが、パイロットの足を狙うことって、できます？　コックピットへの意図的な攻撃は、反則なんですよね？」

ジルド「…いや、狙った訳じゃないけど、卑怯な攻撃をだな…」

ネロ「狙ってないなら、卑怯とは言いませんよね？　しかも、卑怯

な攻撃をするって、それでパイロットが怪我するのとは、何も関係なくないですか？」

言われてみるともっともな言葉は、周囲の者たちに波紋を広げた始める。

リンダ「出来すぎた話、そうかもね？

憎いからＭＳ譲るって、何機もＭＳを持ってるファイターはそんなにいないし、あったって譲るかい？　ＭＳ１機売れば、どんな旧式だって数年は暮らせる。

自分のＭＳを買う金がなくって、レンタルで出てるファイターだっているのにさ？」

ジルド「…そ、そりゃ、それだけ憎かったんだよ！」

ジルドはなおも主張するが、ネロは何やら小型のＰＣを操作していた。

ネロ「…やっぱりです…。　この周王惇ってファイター、デビュー

から10年も登録しているのに、ずっと鳴かず飛ばずですよ。　なのに、この半年で26連勝、まるで別人のような変わりっぷりです！」

ミア「…まさか、隊長とジルド、担がれたんじゃない？」

ジルド「…そんな馬鹿な…？」

ジルドの顔から、血の気が引いていく。

ネロ「その義足の男と会った場所、イフリートがあった場所を教えてください。　少し調べてみます！」

ジルド「…あ、ああ…」

ジルドは呆然としながらも、ネロに場所を告げる。　ネロが駆け出して行った。

メリル「…誰か、代わりに引いて…」

そんな様子を見ていたのか、メリルはカード2枚引くように求めた。
1枚目のカードは…

正位置の死神。　意味は言うまでもない不吉なカードだ。

メリル「…もう1枚…」

メリルが自身でカードをめくる。　現れたのは…

…運命の輪、逆位置。

ミア「…停止、損失の後に、誤算か不運…。　どう見ても、明るい結果じゃないわよね…」

一同の顔がさらに青くなった時、観客席が沸いた。

また、僅かに覗いたイフリートは…

左脚を失い、地面に半ば這いつくばっていた…。

【4】

実況「ようやく煙が晴れましたっ！

おおっとぉ～！　このわずかな時間のうちに、イフリートは地面に倒れていますっっ！！

今時計が止められ、レフリーがゴトーに降参するかどうか、問いかけていますが…」

ゴトー「…うるさい」

レフリー「無茶だ！　君はよく戦った！」

ゴトー「うるさいと言っているっ！！！」

ゴトーの怒声が、レフリーの付けたマイクを通じて、観客席にまで聞こえてきた。

ミア「た、隊長っ！　もう止めてくださいっ！　これだけやれば十分ですっ！！」

ミアが叫ぶ。　しかし、その声がゴトーに届くはずもない。

実況「この有り様になっても、まだ諦めない気か、ゴトー！！　皆様、この不屈の闘志こそ、真のファイターの証でありますっ！！！」

実況の声は高らかだったが、その言葉は、すでに敗者の健闘を讃えるかのような響きを帯びていた。

そして、闘技場を再び煙が包み込む。

実況「…おそらく、次の一撃で勝負は決するものと思われます。それでは、ファイト…

再開ですっっっ！！！！！」

ガキーーーーーン！！！！！

再開のコールの直後、激しい金属音が、周囲の観客の耳に飛び込んで来た。　あまりの異音に、耳を塞ぐ客さえもいるほど、大きくて、耳障りな音だった。

実況「…勝負がついたようです。　今、時計が止められました。４分５３秒６８。　レフリーの確認がありましたので長く感じましたが、ファイト時間そのものは、５分以内の決着となりました…」

そうしている間に、少しずつ煙が晴れていく。　しかし、特殊な煙なせいか、その流れは極端に遅い。

実況「お知らせいたします。　センサーが辛うじて捉えた反応により、ＭＳは稼働を停止している事が確認されております。　ルールでは、明らかに決着がついた後の攻撃は反則となりますから、おそらく、どちらか１機が完全に破壊され、それを見たもう１機が、自ら動きを止めたのだと思われます…」

１分１秒が長かく感じる。

しかし、その重苦しい空気の中、ようやく煙が晴れた。

そこから現れたのは、直立不動のザクと、這いつくばったままのイフリート…

その様子に間違いはなかった…

…が！！

実況「勝者っ！！　ゴトーーーーーですっ！！！」

コールされたのは、立っているザクではなく、ゴトーのイフリートだった。

周「…ば、馬鹿な…　ヒート剣を投げる、だと…」

ザクがゆっくり傾き、音をたてて倒れる。　その胸には、深い傷跡が２つ。

突き刺さりはしなかったようだが、それは紛れもなく、イフリートのヒート剣が、激しく当たった跡だった。

ゴトー「うまく細工したつもりだったんだろうが、剣にまで細工しなかったのは、失敗だったな？」

ゴトーは誰にも聞こえない声で、しかし、確かに勝因を語っていた…。

【5】

元ファイター「…あわわ…　ヤバいあるよ…。　急いで逃げなきゃマズいある」

そして、血相を変えて荷物を纏めるその男…。

…しかし。

ジルド「おっさん。　よっくも一杯食わせてくれたな？」

指をバキボキ鳴らすジルドと、その後に無言で仁王立ちしているゴトー。

元ファイター「…あわわわ…　ち、違うある。　これは何かの間違いあるよ！　そ、そう、あの周という卑怯者に脅されて仕方なく…」

見苦しい言い訳。

ネロ「無駄ですよ。　あなたが隊長に渡したイフリートの戦闘データ、それとあなたのＰＣも。　みんな入り込んで、解析させてもらいました。　手の込んだ細工でしたね。　あれなら簡単には分かりませんよ」

相手を褒めているネロ。

だが褒めるだけの余裕があるという事は、全部お見通しだと言っているのと同じ意味な訳で…。

中国警官隊「周王惇の弟、周王淵だな？　詐欺罪及び、不正ファイト防止法違反で逮捕するっ！！」

警官隊が飛び掛かり、あっという間にその男は取り押さえられてしまったのだった…。

【6】

ゲット「なんだよ～。　ジルドは騙されてたのかよ～」

ゲットが言い、周りも同意したように笑う。

ネロ「途中で見抜いた隊長はともかく、最後まで騙されてジルドは、これを教訓にした方がいいですね」

ゴトーは、周と対戦が始まったあたりで、罠に気がついたらしい。
その時にファイトを中断もできたはずだったが、あえてそれをしなかったようだ。

ジルド「いや、隊長だって、最初は信じたんだし…」

ゴトー「今回も、メリルのタロットは当たったってことでいいだろ？　誤算。　奴らにとって、大きな誤算だったな」

メリルは頭を撫でられ、嬉しそうに微笑んでいた。

ゲット「…でも、八百長じゃあな」

ゲットはポケットに手を入れると、近くにあったゴミ箱に、取り出したチケットを丸めて捨てた。

リンダ「ま、観客はもちろん、大会本部まで騙されてたんだから仕方ないさ。　周に賭けた奴は、今頃みんな泣いてるよ。　ゲットも残念だったね」

はずれチケットが溢れ返るゴミ箱を見てから、リンダはゲットにそう声をかけたのだが…。

ゲット「…周って…　あのイカサマしてたヤツか？　俺が買ったのは、ゴトーのチケットだけど？」

リンダ「なんだって？　ゲット！　あんた今捨てたの、まさかゴトーのチケットなのかい？！」

ゲットが頷くと、リンダはいきなり血相を変えて、ゴミ箱を漁り始める。　そうしてどうやら、目当ての物を見つけたらしい。

リンダ「あんた、何当たったファイトチケット捨ててるのさ！」

リンダは必死の形相だ。

ネロ「当たってるですか？　だって不正試合だったんですよね？」

リンダ「…いや、そりゃ不正した側が勝っても、そのチケットは無効だけど、今回はされた側のゴトーが勝っちゃってるから…。　試合は有効だし、チケットも当たりになるんだよ」

リンダは、ゲットの捨てたチケットを、綺麗にシワを伸ばしてゲットに返す。

ミア「そうなんですか？　私も隊長のなら買ってますけれど…」ネロ「俺もですよ？」

ジルド「隊長が出るってのに、買わない訳ないだろうが！」

口を揃えた3人に、リンダは目を見開いていて…。

リンダ「…あんたら一体、どう考えたらこんなオッズのチケット買えるんだい？！」

ジルド「なんで、って言われてもなぁ…」

ミア「応援ですか…？」

ネロ「隊長の実力考えれば、そこまで損な投資じゃありませんよ？」

リンダが3人の配当を計算してみると、それは合計で１０万ギラにもなった。　１ギラは、西暦で言うと１００円ぐらいだから、約１千万円だ。

あまりの配当に、リンダは思わず頭を押さえる。

ジルド「けどよ？　俺らも買ったけど、ゲットも買ってたんだろ？　そっちも大金は手に入ったじゃねぇか」

ジルドはそう言って、ゲットの頭を小突く。

ゲット「そりゃ当たったかも知れないけどさ？　俺は、そんなに金持ってなかったし。　１ギラしか買ってないから」

ゲットが、さっきのチケットを取り出す。　たしかに額面は１ギラだった。

リンダ「でもまあ、大当たりに違いは…

…は

…は

…は

…はぁぁぁぁ～～～～？？？

なんだ、このチケットはっ！！！」

またまたリンダ大声を上げ、全員が耳を押さえる。

ゴトー「…うるさいぞ…」

リンダ「うるさいもへったくれもあるかいっ！

ゲットの買ってたチケット、５ＫＯチケットじゃないかっ！！　５分以内に相手をＫＯした時だけが当たりの、大配当狙いのチケット

だよっ！！」

一同が意味を理解し、ネロがＰＣを叩く。

ネロ「隊長の試合時間は5分以内ですから、当たってます。　オッズは、３４万９５６０倍ですね…」

ゲット「それ、すげぇのか？　俺は、スティヴと同じ種類のにしただけだし…」

全員「なんだって？？！！」

続いて、一気に注目の人となったスティヴ。

リンダ「…ス、スティヴ…　あんた、５ＫＯ買ったのかい？」

スティヴ「あ、ああ…」

ゲット「いくら？」

スティヴ「…有り金…　全部？」

ジルド「マジかよ、アイアンボーン！」

ミア「凄すぎますね…」

ネロ「計算の桁が足らないかも…」

ゲット「さすがスティヴだぜ！」

ゴトー「…やりすぎだ…」

フレーネ「よくわからないけれど、凄いんですよね？」

ハロ「スティヴ、スゲー！　スティヴ、スゲー」

リンダ「スティヴ…。　あたし、あんたの勇気と男気に惚れちまいそうだよ！　なんて男、さすが天下のアイアンボーンだ！！」

リンダが肩をバシバシ叩き、全員が口々にスティヴを褒め称える。

…が、なぜかスティヴはそそくさと、その場を逃げ出そうとしていた。

リンダ「…ちょっとスティヴ。　あんた一体、どこ行く気だい？　まさかさっさと換金して、1人でそのまま逃げようってんじゃないだろうね？」

リンダに捕まったスティヴの顔は、やけに蒼白だった。

スティヴ「…い、いや、そのな…。　俺は確かに、有り金全部、5KO買ったぜ？」

ゲット「何言ってんだよ？　すっげー金になるんだろ？　大金持ちなんだろ？？？」

スティヴ「…だから違うんだよ…。　5KO、有り金全部…

…周に賭けたんだ…」

ゲット「……。」

フレーネ「……。」

ジルド「……。」

ネロ「……。」

ミア「……。」

メリル「……。」

ハロ「……。」

リンダ「…　…　…こ、こここここの……

大馬鹿野郎ぅぅぅぅ～～～～！！！」

リンダは、さっきまで感激ムードもどこへやら、頭から角を生やしていそうな勢いだった。

スティヴ「いや、だって、イカサマとか関係なしに、あのオッズでふつうゴトーは買わないだろ？　あんな大穴くるなんて、１０年に一度あるかないか…」

リンダ「問答無用っっ！！！」

スティヴ「ぎゃゃあぁぁぁぁ～～～！！！」

こうしてゲットは、最年少勝利記録に加え、ＭＳファイト史上、最高の配当を当てた人物として、中国ＭＳファイト歴に名を残した。

そして、一方のスティヴはと言うと、リンダの怒りＭＡＸアッパーカットがクリティカルヒットし、１時間卒倒。

しかも、以降３日３晩リメンバーズに入れて貰えず、さりとてホテルに泊まる金もなく、寒空の下で野宿する羽目に陥ったという…。

第５６章　研究所（裏）（前書き）

（メリルのタロットコーナー）

ミク「ミュージックスタートっ！」

チャラララララ～ン

メリル「…それ、マジックの音楽…」

マヒロ「あ、間違えたわっ！　ミク、トラック５よ！！」

ミク「あいな～」

♪♪♪

マヒロ「よっし、ミク。　それ面白そうだわ。
…じゃ、メリルちゃん。　このくじを引いて、出た人の運命を占ってあげて？」

メリル「…わかった…。　この人は次の章で…」

…隠者の正位置。

…愚者の逆位置。

…死神の逆位置。

ミク「意味はね～

隠者の正位置　＝　探索、思慮深さ

愚者の逆位置　＝　軽率、愚考

死神の逆位置　＝　死から再生、やり直し

ってなるんだよ？」

マヒロ「メリャーナに限って思慮深さなんてないから、これは探索かしら？　探索したけど、それは軽率で、結果やり直し。ざまー見ろってことね」

メリル「…それ…　占いの趣旨が違ってる…」

ミク「…ああ、まだ本編だと出会ってないから、メリちゃんは知らないと思うんだけど…。

お姉って、兄弟姉妹と仲悪いから。　お姉だけ生まれの身分が低い（＝侍女の子）からって、見下されてたって思ってるみたいでさ」

メリル「…悪意に解釈すれば、どんな占いだって不運になる…」

ミク「ま、別に誰のことだが明かしてもいないんだし、本編をお楽しみにってコトで♪」

（続く？）

第５６章　研究所（裏）

研究所を後にし、メリャーナのガルダにＭＳを運び込む一行。

結局マリーとサコンは、乗機を可変ＭＳのバウに決めていた。　可変ＭＳの機動性と、バウのユニークな構造にサコンが興味を持ったからだが、バウの見栄えの良さがメリャーナにふさわしいと、マリーが感じたためでもあった。

カトラス「さて、ＭＳも貰ったことだし、次は本業に精を出すかな？」

カトラスは、何やらほくそ笑んでいる。

サコン「…うまくいったのか？」

カトラス「それなりにな」

メリャーナ「さすが怪盗さんですのね」

マリー「…？？？？」

3人は顔を見合わせ満足気だが、どうやらマリーだけが、話についてこれていないらしい。

メリャーナ「駄目ねぇ…。　まあ、マリーにそういう発想はないものね。　さっき、私がお手洗いに立ったじゃない？」

メリャーナが状況を説明する。

カトラス「その時、ばっちり盗ってきたってワケよ」

続いてカトラスが、自慢気にガッツポーズをして見せた。

マリー「…さっき…　…メリャーナ様が…　お手洗い？」

サコン「どこまで『とれ』た？」

カトラス「期待していいぜ？」

マリー「…とる…　取る…　獲る…　撮る?!?　まさかっ!!」

サコン「ばっちりだな。　兵士の哨戒ルートに、交代時間、人数。
これで研究所の大まかな構造が分かるし、警備の隙を突ける」

カトラス「だろ?　あのトイレの近くに、兵士の待機場所があってな。　そっから頂いてきた」

顔を見合わせた2人に、メリャーナまで得意顔だった。　実行したのはカトラスだが、発案したのはメリャーナだと言っていい。　その思い付きを、自画自賛しているのか?

サコン「…ところで、マリーさん。いま、『まさか』と言われましたか?」

カトラス「事前の情報は多い方がいいからな。　心当たりがあったなら、何でも話してくれ」

サコンとカトラスの視線がマリーに集まる。　が、肝心のマリーの顔は、ヤケに赤い。

マリー「…あ、そ、その情報というほどのものでは…」

言い澱むマリー。　そしてなぜか笑い出すメリャーナ。

サコン&カトラス「…？？？」

メリャーナ「よく考えたら、私やマリーの知っている程度の情報では、お役に立てそうもありませんでしたわ。　そうよね？　マリー？」

マリー「…は、はい…」

～その日のマリーの回訓録より～

『早計は厳に戒めるべし。　口は災いの門』

【2】

ジェイソン「ザキラ様。　ご命令通り、適当なＭＳを与え、便宜を計っておきました」

ザキラ「ご苦労」

ジェイソンの報告を、ザキラはいつもと変わらぬ尊大な態度で聞いていた。

ジェイソン「しかし、今まで戦う力を与えようとされませんでしたのに、今になってなぜ…」

ちなみに、ＭＳを与えたのは、研究所に招いたメンバーだけではなかった。　どこにでもいそうな帝国兵ではあるが、それなりの数をＭＳ付きで、メリャーナの軍に加える予定になっている。

イエスマン「いい物を手に入れたら、見せびらかしたくなるのが、人間って生き物なんですよぉ～」

ザキラ「あのヤタガラスなる者共、まだ隠した爪を見せてはおるまい。　どの程度の爪を隠しているか、見てみたくなった」

ジェイソン「そのためにあえて？」

ジェイソンは驚いて…　というより、警戒しているようだった。

一方でザキラにそんな様子は微塵もなく、イエスマンは、逆に何かを楽しんでいるような目をしていた。

ザキラ「エージェントJ、ジェイソン・ヤヌス。　何をそんなに危ぶんでいるのだ？　あの姫が何かを為す。　それは確かに、一時の痛手になるやも知れぬ。　しかし、後々の事を考えれば、手を打つのは、むしろ遅すぎたのではないのか？」

ジェイソン「…は…」

ジェイソンが頭を下げる。

イエスマン「エージェントJは、あのお姫様を懐柔したがってましたからねぇ…。　結局、お飾りの皇帝になってくれるほど、素直じゃなかったワケですけどぉ～？」

ジェイソンは頭を上げない。　それは、言われたことが図星だからなのか？

ザキラ「…とにかく、お前は奴らに次の命令を伝えよ。　兵を与えた以上、表立っては断れまい。　そこで尻尾を出すかどうかは、奴ら次第ではあるがな」

ジェイソンは、ようやく頭を上げると、何も言わないまま、ザキラの居室を出て行った。

イエスマン「…ところでボス。　Wの一件は、僕の好きにしちゃっていいんですよねぇ～？」

イエスマンが、何かを期待したような目つきになる。　いい歳をした男がそんな目をすると、不気味に見えそうなものだが、この男の場合、少し違った印象を受ける。

ザキラ〔エージェントM、DR．マンソン。　用意は万端なのか？〕

同じ帝都の中にいるのだから、脳量子波に頼らずともいいはずだったが、ザキラは電話などではなく、量子波を使うことが多かった。

DR．マンソン〔打ち上げ、ウイングガンダムの準備はの。　黒くも塗ったし、ディアボロも積んだ。　じゃが、本当によいのですか？　今の調整レベルでは、戦い始めたら、目標は設定できんも同然…〕

イエスマン〔構わないって言ってるじゃないですか？　それにドクター。　Wに敵味方を教える必要なんてないんですよ。　ボスの予定じゃ、あいつの本業は処分屋なんですから〕

イエスマンはくすくす笑っている。　脳量子波が聞こえない者が見たら、異様な光景に見えたに違いない。

ザキラ〔好きにさせよ。　戦いの始まりと終わりだけ理解できればよい〕

DR．マンソン〔…それで構わないならば…。　それで指示は、ザキラ様が量子波で出されるのかの？〕

イエスマン〔ああ。　それは考えていませんでしたねぇ～。　パンドラールからでもスイッチは動かますけど、細かい事は分かりにくいですもんねぇ～〕

イエスマンは、今さらそんな事を言っていた。

ザキラ〔Xを使え。　Xならば、Wを制御もできよう〕

ザキラは事もなげに命じる。

DR．マンソン〔問題児に問題児をくっつけたら、補い合うより足を引っ張り合うと思いますがの。　ま、ご命令とあらば〕

DR．マンソンは、すべてを投げ出したかのように言い、それで脳

量子波の会話は終わった。

そして、その日の夕刻。　ルナ２へ向かうと称した臨時便が、パンドラールから打ち上げられた…。

【3】

夜を迎えたパンドラール。　その闇に動く影が…　３つ?!

ディジョン「面白い事を考えてるそうじゃないか?」

研究所へ潜入しようとしたサコンとカトラスの前に現れたのは、ディジョンだった。

カトラス「どーせ、アルヴィンの野郎が余計な事まで喋ったんだろうが、遊びじゃねぇんだよ」

カトラスは、ふだんの彼からは想像しにくい、真剣な眼差しでディ

ジョンを睨む。

ディジョン「ふざけてこんなマネができるか。　見つかりゃ軍法会議、下手すりゃその場で銃殺だろ?」

サコン「…立場は違っても、狙いは同じってことですか?」

サコンの問い掛けに、ディジョンは無言で、人差し指を突き立てた。

サコン「…この指とーまれって…　止まるか?」

顔見合わせる2人。

カトラス「…しゃ～ない。　止まってやるか」

ディジョン「よし。　商談成立だ」

ディジョンは笑い、こうして怪盗ヤタガラスは3人に戻った。

【4】

カトラス「…お休みなさいっと」

カトラスが、衛兵にスプレーを吹きかける。　衛兵はそのまま崩れ落ちた。

カトラス「それじゃ、ここはサコンの出番ってことで」

サコン「了解っ」

サコンが入って行ったのは、何台もＰＣが置かれている部屋だった。
　入って1分足らずで、サコンが親指を立てて見せる。　いつものことながら、ヤタガラス特製、ロック解除プログロムの効果はてきめんだった。

サコン「…エージェントのリスト、教育プログロム。　専用ＭＳのデータまである。　これがメリャーナ様の求めるものかどうかは分

からないが、少なくとも相手の戦力を知る手がかりにはなる」

サコンは満足気に言う。

ディジョン「…なんだ。　こうも簡単にいくものなのか？」

いくらか期待が外れたような顔をしているのは、怪盗ヤタガラス（臨時要員）のディジョンだ。

カトラス「アホか！　そんなん俺たちだからに決まってんだろ！」

小声ながら、しっかりツッコミを入れるカトラス。

カトラス「…でもまあ、退屈だってなら、別の場所をご案内するか…」

カトラスは、製作した地図データを探り直す。

サコン「大丈夫か？」

カトラス「大丈夫だろ？　ここ以外に、お宝がありそうな場所もあるしな？」

痕跡が残らず、重要性の高い情報がありそうな場所を、サコンたちは選んで潜入していた。　衛兵の配置や交代の時間から、手薄な時間は限られていたからだ。

しかし、潜入が予定より手際よく進んだため、時間は余り気味だった。

サコン「カトラスが言うなら止めないが、まだ俺はここを離れられないぜ？」

サコンはちょっとだけ渋い顔だ。　予定外の人員の分散は、計画の失敗に繋がる可能性もある。

カトラス「いけるだろ？　無理をする気はないし、もし時間が過ぎたら、お前だけで脱出しても構わない」

それだけ言うと、カトラスはディジョンを連れ、部屋を出て行った。

サコン「…大丈夫か…？　ん？　これもついでに頂いておくか」

心配を隠しきれないサコン。しかし彼にもやる事は多く、それ以上にカトラスを信頼していた…。

【5】

カトラス「…たいしたお宝じゃなかったな」

意気込んでみたカトラスだったが、あの部屋以上の収穫にはありつけないでいた。

手に入ったのは、ＭＳの開発データや運用実績、今後の量産計画などで、反帝国のレジスタンスならばともかく、一応は帝国に属するヤタガラスには、特別意味もない情報ばかりだった。

カトラス「やっぱ帰るか。　いいコは早くお家に帰りましょうってな」

そう言ってカトラスはディジョンを促したが、ディジョンは、建物の構造図を一心に見つめていた。

カトラス「どうした？　もしかして、地図が読めないタイプだとか言うなよ？」

カトラスはおどけ口調。

ディジョン「…いや、この部屋のこの配置、どう見てもおかしくないか？　棚の位置が違うし、窓の配置がおかしい…」

カトラス「そんなん誤差だろ？　それか、模様替えでもしたんじゃないか？」

ディジョン「…いや、ふつう模様替えで、部屋の壁の位置って変わるか？」

【6】

ディジョン「棚が動くなんて、ずいぶん古典的だな？」

ディジョンの勘は当たり、その部屋からは、別の場所へと繋がっているようだった。　普段使われている形跡はなく、昔掘られた防空用のシェルターか、避難路のように思えた。

棚で塞いだというより、いざという時のために造ったものの、必要とされないので忘れ去られていた、という感じが強い。

カトラス「大当たりと見せかけて、赤玉は5等のテッシュでしたってパターンだな。　このまま外へ出ておしまいと見た」

そう言うカトラスは…

カトラス「痛って」

ディジョンの背中にぶつかっていた。

ディジョン「違うな。　このカードリーダーは生きてる。　避難経路に、セキュリティシステムなんかつけないだろ」

確かに、空襲警報のなる最中、１人ずつ指紋認証しながら避難するバカはいない。

カトラス「つまり何か？　昔からあったシェルターを、使われてないから再利用ってワケか」

ディジョン「経済的な隠れ家だ」

拳を突き出し、合わせる。

カトラス「よっしゃ、任せろ！」

一番最初の部屋と同じ手口で、ロックを解除する。　怪盗ヤタガラスにとって、たいがいのロックは意味をなさない。

ディジョン「餅は餅屋とはこの事だな」

ディジョンが感心した声を上げ、通路から先に入り込む。　それほどは広くない空間のようで、扉は１０ほどしかなかった。

さっそくいくつかの部屋を調べてみると、機器室だったり、薬品庫だったりした。　怪しい雰囲気は全開で『胡散臭い』という言葉がよく似合いそうだ。

ディジョン「軍の研究施設で、こういう秘密の場所って事は、細菌兵器とか、生物兵器の開発じゃないか？　微かに変な匂いがするし、何より人の気配が一切しない」

カトラス「…あんた、すげぇかも知れないぜ。　もしヤバイ兵器を作ってたなら、十分なスキャンダルだろ」

核や毒ガスを乱用したこともある帝国軍だが、だからこそ、その存在に世界はナイーブだった。

また帝国が同じ暴挙をするかも知れないとなれば、反感を持つ国は多いはずで、それを計画した人間を追い落とす材料にもできる。

だが、ここはその程度の場所ではないと、４つ目の部屋が予想を覆す。

ディジョン「あり得ねぇ…」

カトラス「なんだよ…　コレは…」

大抵のことは見慣れてるはずの2人が、揃って口を押さえていた。
その吐き気を催すような光景。

それは、保存液で満たされた容器に収まった…

…おぞましい数の人間の脳…

カトラス「…こ、こいつは…　ヤバすぎる…」

カトラスの膝が笑っている。　そして後ずさったカトラスの手が、
何かのスイッチに触れた！

ガシャーーーーーン！！！！！

ガラスが割れる音がした。

流れる水の音。　そして…

『グガァァーーーーオ！！』

上げられた、咆哮、足音。

カトラスの背後に立っていたのは、人の形をした…

しかし、人ではない何か！！

ディジョン「危ねぇっ！！！」

ディジョンがカトラスの手を引く。　その生物？　の腕が空を切った。

カトラス「何のバイオハザードだよ、これはっ？！」

ディジョン「…バイオハザード？」

カトラス「西暦大好きのダチが持ってたゲームに、こんな化け物が襲って来るのがあったんだよっ…

…って、そんな説明してる場合じゃねえしっ！！」

再び降り下ろされる腕。

カトラスは身をかわしたが、ディジョンは…

ディジョン「ぐぉっ！！」

避けきれず、咄嗟に防いだ腕の服が裂け、さらに血がしたたり落ちていた。

カトラス「てめっっ！！」

銃声とドスッ、という命中音がし、生物…　いや、化け物がよろめく。　しかし、2発も銃弾を受けたにも関わらず、化け物は倒れすらしなかった。

カトラス「マジかよ？　まんま、タイラントじゃねぇかよっ！　誰だ、こんなの再現した奴はっ！！」

『グゴガァァァァ～～～！！』

また咆哮を上げる化け物に、2人は必死の形相で逃げ出した。

【7】

とにかく逃げた。

彼らは、自分達の置かれた状況をも忘れて、灯りのついていた部屋に飛び込む。

カトラス「だ、大丈夫か？」

ディジョン「骨は折れてはいない。　外傷だけだ」

化け物は恐るべき力だった。

カトラス「…追ってきてるか？」

ディジョン「わからん」

その場の気配を探るのも忘れ、へたり込んだ2人。

???「…誰じゃ、こんな夜更けに？」

そんな2人を咎める声。

忍び込んでいるのであるから、見つかるのは致命的であるはずだったが、今の彼らは、それどころではなかった。

『グガァァァオオオーーーー！！！！！』

もう一度、叫び声。

そして、扉を殴りつけるような音。

カトラス「き、来やがった！」

顔をひきつらせる2人だったが…。

？？？「何じゃ、失敗作を解き放ってしもうたのか。　面倒くさい事をしおってからに…」

だが、その老人…

白衣姿の人物は、煩わしそうな表情こそ見せたものの、大して驚きもせず…

扉を開け放っていた！

カトラス「何すんだよ、あんたっ！

…って、えぇ？！」

驚きを通り越して、呆然とするカトラス。

それもそのはずで、あれだけ暴れていた化け物が、その老人に何かを撃ち込まれた途端、その場に崩れ落ちたのだから。

???「誰かこやつを連れ戻…　いや、処分しておけい！」

???「はっ！」

どこにいたのか、数名の兵士が駆け寄ると、その化け物に何かした後、タンカのような物に乗せて運び出して行った。

???「さて、お主らもさっさと持ち場に戻…

…ん？　お主ら、見慣れん顔をしておるな？」

カトラス「あ、それはそのだな…」

さっきまでとは違った意味で、後ずさるカトラス。

ディジョン「逃げるぞっ！」

？？？「ここを見られたからには、生かして帰す訳にはゆかぬて…」

【8】

カトラス「は、離せっ！！」

カトラスとディジョンは、化け物からは逃れたものの、帝国軍のものによく似た軍服を着る士官と兵士達に捕らわれ、その身の自由を奪われていた。

？？？「…どうじゃった？」

帝国士官?「実験室、薬剤庫などに侵入した形跡はありましたが、特に何かを持ち出した痕跡はありません」

???「どこかの国の諜報部員じゃろうか?」

帝国士官?「…そこまではさすがに分かりません」

眉をひそめる。

???「まあよいわ。　拷問して吐かせるのも面倒じゃ。　こやつらも実験台にしてしまえい」

帝国士官?「分かりました。　1本だけですが、ちょうどアンプルを持っております」

その男が懐の箱から、注射器を取り出した。　大事な物なのか、何重にも封がしてあった。

ドクター「1本だけか…」

それを受け取ると、その老人はカトラスとディジョンを交互に眺め

る。

ドクター「ん？　お主、あの失敗作に傷をつけられたのか？」

ディジョン「だからどうしたっ！」

ディジョンが老人を怒鳴りつける。　手足を動かしもがくが、はめられた手錠が外れるはずもない。

？？？「そうか。　ならばこやつはいずれ…。　もう1人の方にアンプルを打っておけい」

帝国士官？「かしこまりました」

それだけ言うと、そのドクターは、既に2人に背を向けていた。

注射器は、カトラスの抵抗も虚しく、腕に注射されてしまう。　打たれたカトラスは絶叫し、その後気を失ったように見えた。

ディジョン「お、おいっ！　カトラスっ！　お前らっ、カトラスに何をっ！！」

帝国士官？「…心配せんでも、いずれお前も仲間になる」

鼻で笑うその士官。

帝国士官？「さて、発症するまでどうしていてもら…

…なんだとっ！！　ぐぉっっ！！！」

一瞬の出来事だった。

気を失ったように見えたカトラスは、押さえていた兵士2人を弾き飛ばし、さらにその士官にまで、強烈な一撃を入れたのだ。

はめていたはずの手錠の鎖は、何故か千切れていた。

？？？「どうしたのじゃっ？

…っ！？　そなた何故動けるっ？　発症するには早過ぎ…」

カトラス「発症？　なんだそりゃ？　あんまうるせぇと潰すぞ、コラっ！」

その士官をもう一撃し、しかも手近な机を軽々と蹴り上げる。　乗っていた物が床に散らかり、老人は思わず身を縮み込ませた。

カトラス？「あばよっ！」

叫んだカトラス？は、何とディジョンを抱え上げ、一目散に走り出す。　その怪力と足の速さは、ディジョンを唖然とさせるほどだった…。

【9】

何もかもが、さっぱり分からないことだらけだった。

けして小柄ではないディジョンを担いで、兵士の追撃を悠々と振り切ったカトラスは、研究所を脱出するや倒れてしまい、今度は3日3晩昏睡してしまう。

しかも、あの夜の記憶を一切無くしていた。

他方、『いずれ～』と言われたディジョンには何もなく、遅効性の毒かと血液を調べたが、これまた異常は何もなかった。

メリャーナ「当たり前ですが、秘密の研究所があるなんて話は、聞いた事がありません」

サコン「2人を信じない訳じゃないが、証拠がなくては、告発には使えないですね。　もう1回行こうにも、それだけ騒ぎになったなら厳しいでしょうし」

無我夢中の連続で、写真も物証も、持って帰って来てはいなかった。

　むしろ落としたり、捕えられた時に奪われた物があったくらいで、こちらの身元が割れる方が心配された。

サコン「しかし、騒ぎは一切周囲に伝わっていません。　何かしらの機密なことは、間違いんでしょうけれど」

メリャーナやサコンは

『人間の脳』

『失敗作』

『注射』

の要素から

『非人道的な、強化人間作成実験だったのではないか？』

と推定していた。

怪物は、投薬の副作用で人格が崩壊した人間で、カトラスが急に怪力になったり、記憶をなくしたのは、

『打たれた薬の作用が、たまたま早く強く出てしまったから』

との推測だった。

マリー「そう言えば、ラピスラズリも強化人間との情報ですが」

ディジョン「証拠はないが、奴らのリーダーらしき女が言っていた。『あたしたちは強化クローンだから』ってな。覚えてないか？」

激戦の最中だったから、記憶は曖昧だったが、これは戦闘記録を再生すればわかるだろう。

メリャーナ「非人道的な実験は好みませんし、うまく利用すれば、追い落としの役には立ちます。

けれど、しばらくは目立った動きは控えましょう。

私たちの仕業と知られたら、何をされるか分かりません。今はそれを警戒しなくては…」

結局、それが原因かは分からないが、しばらくしてメリャーナたちとディジョン隊には、別々の任務が与えられ、パンドラールを離れざるを得なくなる。

そうしてこの一件は、謎のまま探る術を失ったのだった…。

第57章　悲劇の予兆（前書き）

（タロットコーナーは続く？）

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪～

？？？「次の章での、運命を占ってもらえると聞いて来たんですが…」

（プライバシー保護のため、声と話し言葉は変えてあります）

メリル「…そこに座って…」

？？？「はい」

ミク「何かメリちゃん、ノってきたよね？」

マヒロ「本編で、出番が少ないのが悩みらしいから、巻き返しを計ってるんじゃない？」

メリル「…そちらの方、お静かに…」

ミク&マヒロ「は、はい、すいません！」

メリル「じゃあ、あらためて…」

…恋人の正位置」

???「…と、いう事は、私は恋人とうまくいくんですね？　よかった～」

メリル「…油断はできない。　次に出たカードは、あなたを誘う可能性を秘める。

…もしあなたが、どちらか片方しか助けられないとなった時、取るのは恋人？　それとも友人？　強く念じてから引いてみて」

？？？「…そ、それは…」

メリル「これはあくまで可能性。　勇気を出して、引いて」

？？？「…はい」

メリル「審判の逆位置。　再起不能、後悔。　判断は裏目に出ることもあります。　決断を下す際は、くれぐれも慎重に…」

？？？「……。」

（続く？）

第５７章　悲劇の予兆

エヴァニーたちの逃避行も、既に１ヶ月を越えていた。

マリンピア軍との戦い、さらにリナレスの非業の死と、一時はどうなるものかと思われた。

しかし、そんな状況の中で、あえて先を急がない迂回路を選択したのが効を奏してか、無事アフリカを抜け、さらに地中海、エーゲ海をも渡り、ついに黒海西岸にまでと到達していた。

今現在、フロンティアガードの勢力圏は、黒海、それもオデッサを中心とする北側である。　つい先頃までは、黒海を挟んで、北はフロンティアガード、南はクアルーンだったのだが、この頃には、南側が帝国の激しい攻撃を受けている最中で、クアルーンの領地は縮小の一途を辿っていた。

そんな中、フロンティアガードの治める地域まで、残すところ１００キロほどとなっていたエヴァニーたち…。

シベリア「ついにここまで来たな」

シベリアの感慨も無理はない。

すべてを承知の上で選んだ遠回りの道とは言え、その距離は長かった。　比較的安全な所が多かったものの、追われるエヴァニーたちが、完全に気を許せる場所がなかったせいもあるだろう。

ナディア「あと…」

エヴァニー「僅か。　だが、避けては通れない場所だからな…」

帝国に敵対する国へ行こうとする以上、どんなに迂回しても、その境には警戒厳重な地域はあり、それを越えなければならなかった。

だがエヴァニーたちは、その境を目の前にしながら、１週間も足止めを食っていたのだった…。

シベリア「まるで隙がない…」

原因は、この地に根を下ろしつつあった、シュバルツ中佐の軍にあった。　彼の軍は規律が行き届き、カンタルダルのような乱暴狼藉とは縁がなかった。　しかし代わりに、どこにも隙が見出だせず、迂闊に動けないでいる。

交戦国との国境、しかも帝国に追われる彼らであるから、パスポートを見せれば通れるなどと言う事は、当たり前だがない。　つまり密かに抜けるしかないのだが、その隙がないのだ。

ベンケイ「ここまで来たんだ！　強行突破はできないのか！」

ベンケイは、いくらか苛立った口調で言う。　だが、みな彼を責めずに顔を伏せた。　気持ちは同じだったからだ。

エヴァニー「ベンケイの気持ちはよく分かる。　だが、ここまで来たからこそ、俺はみんな揃ってオデッサに着きたい」

決意を秘めた顔だった。　少なくとも、帝国に追われ、逃げ場をなくした敗残レジスタンスの顔ではなかった。

シベリア「…国境線…　それも交戦国との国境線となれば、帝国兵がいるだけじゃない。　地雷や鉄条網、塹壕なんかがあるし、迂闊に近づけば、敵と間違われて、フロンティアガードに射たれるかも知れない」

ただ救いがない訳でもない。

それは、シュバルツの軍は、街狩りのような真似をしないことだった。　治安を維持するために巡回する部隊はいるが、別にエヴァニーたちを探したりはしているようには見えなかった。　あくまで、街の警備をする部隊らしい。

エヴァニー「あと1週間だけ待とう。　それで駄目なら、別の場所を探すか…　思い切って、黒海を渡ってしまおうかと思っている」

シベリア「その手があったか！」

シベリアがはたと膝を打つ。

エヴァニーが言ったのは、警戒厳重な陸地を避け、またしても水の上を行こうというものだった。　陸地の移動できる場所は、どうしても道が中心になるが、水上ならば船さえあれば何とでもなる。

ナディア「釣り用か、レジャー用のボートなら、この街でも売っているのを見たよ！　エンジンのついた物でも、そんなに高くはなかったはずだ！」

計画は具体性を帯び始めた。　その準備は、エヴァニーの言った1週間もあれば、十分に整うはずだったのだが…。

【2】

帝国軍は、順調に進撃を続けていた。

ラピスラズリの襲撃によって、追撃の時期を失したものの、帝国軍が勝ったのに変わりはなかった。　クアルーンの領地だった所は次々と帝国の手に落ち、それに伴いシュバルツもまた、サンザメヤから黒海へ西岸へと、その司令部を移していた。

だがその司令部の一室で、シュバルツは不機嫌そうに眉をしかめている。

シュバルツ「…1つ聞きたい。

なぜ、今フロンティアガードを攻める必要がある？　クアルーンが帝国から掠め取った領地を奪回するのは当然であるし、現にそうしてきた。　だが、新たにフロンティアガードと事構えろなどという命令など、届いてはいないはずだ！」

聞くと言いながら、シュバルツの言葉は、最早質問ではなかった。

それもそのはずで、オクサイドは、本国からの命令を待たずに、フロンティアガードを攻めると言い、シュバルツにも軍を出すように求めて来たのだから。

オクサイド「違うな、シュバルツ。　本国からの命令は、反帝国勢力の討伐だったはずだ。　クアルーンも反帝国だったが、フロンティアガードとて、れっきとした反帝国ではないか？　従ってフロンティアガードと戦うのは、命令違反にはならない」

しかし、オクサイドも一歩も退かない。

オクサイド「帝国が勝ち、勢いに乗っている今だからこそ、大規模な討伐をする好機なのではないのか？

…それと、ここだけの話だが、帝都に帰した部隊の再編成が終わったらしい。　まもなく、新たにフロンティアガード討伐軍が編成されるという。　次の戦いに備えて、今のうちに地ならしをしておくべきだとは思わないか？」

オクサイドはシュバルツを覗き込むように見た。　口元に笑みを浮かべたその顔は、どことなく勘に触る。

シュバルツ「なにが地ならしだっ！　今のお前は、顕示欲の塊に過

ぎぬ！　己を高く売り、あわよくば侵攻軍司令の座を射止めたいだけであろうが！　私は、お前の欲のために軍は出せんっ！！」

シュバルツが一喝し、両手を机につき、勢いよく立ち上がる。

オクサイド「…そうか。　ならば、攻めるのは私の軍だけにして、貴様には守りを任せるとしよう。　それならば、たとえ私が負けても大丈夫だろう？」

おそらく、最初からそう言うつもりだったのだろう。　オクサイドはわざとらしくそう言うと、シュバルツの答えも聞かないまま、部屋を出て行った。

シュバルツ「…くっ…」

そして、苦虫を噛み殺したような顔をするシュバルツ。　互いにけして無能ではなかったが、どこまでも水と油な2人なのであった…。

【3】

帝国軍士官「…シュバルツ中佐。　1つ気になることがあるんですが…」

そう言って来たのは、ヤタガラスの3人を帝都に送り出した後に、側に置くようになった士官の1人だった。

ヤタガラス…　特にサコンの存在があったせいか、知略というものを重視してしまうシュバルツだった。

とはいえ、この士官が類い稀なる鬼才の持ち主かと言うと、実はそうでもなかった。　ただ、シュバルツに対しても堂々と意見を言う。

シュバルツ「…どうした？」

帝国軍士官「いえ、街で手配中の人物を見かけたという兵がおりまして。　私も確かめて参りましたが、似ていない事もありません」

報告に来る前に裏付けを取る。　そういった慎重なところも、シュバルツが気に入った要素であった。

シュバルツ「クアルーンが壊滅寸前になっていることで、拠点を捨て、身を隠すレジスタンスは多いと聞く。　とはいえ、1人のために街を騒がせたくはないな」

これが、シュバルツのやり方だった。

街に駐屯する兵を極力減らすことで、街の住民が帝国に反感を持たないようにする。　街そのものを守るなら、別に街の中に軍を入れなくても、近くに駐屯するだけで事足りる。

兵は、粗末な駐屯地暮らしを嫌がるかも知れないが、そんなものは耐えて当然とシュバルツは考えていた。

帝国軍士官「ただのレジスタンス風情なら、私もそう思います。しかし、それでは済みそうにない人物でして…」

その士官は、シュバルツに耳打ちをした。　聞いたシュバルツは悩ましげな表情を浮かべる。

シュバルツ「…見間違いではないのか？」

帝国軍士官「そうおっしゃられても困ります。　私も面識がある訳ではないのですから。　ただ、手配書に似ていないこともない、というだけなのです」

言われたシュバルツは、さらに悩ましげな顔になってしまった。

帝国軍士官「判断がつきかねるのでしたら、政治は本国に任せられてはどうですか？　我々は、彼らを見失わなければ、それでいいでしょう」

いつもの事だが、ズバリ直球の意見を具申された。

シュバルツ「…それが上策か。　その者たちは当面、監視のみに留めよ」

シュバルツは、消極的かと悩みながらではあったが、結局そう命を下した…。

【4】

～アラビア半島南東部　マリンピア～

メリャーナが玉座の前に立つと、シノノメは自ら玉座を降りて平伏した。

メリャーナ「…シノノメ殿下…」

Pちゃん「せっかくのご厚意ですから、玉座へお掛けになられては？」

メリャーナが、驚いた様子で後を振り返る。　そこにはいたのは、ザキラの命でメリャーナ随行していたエージェントP、Pちゃんだった。

Pちゃん「譲ると言っている物を断っては、かえって失礼に当たります。　そうですよね？　シノノメ殿下？」

シノノメ「……。」

シノノメは何も言わず、額を床につけた。

メリャーナ「…分かりました」

メリャーナは、それ以上抵抗はせずに玉座に座り、Pちゃんもまた、その横に立った。

シノノメ「この度は我が才が及ばず、殿下にご足労をお掛けするなど、このシノノメ、罪万死に値いたします」

シノノメは、床に額を擦り付けたまま語る。　それを見つめるマリンピアの臣下たちもそれに倣うが、ほとんどの者が、肩を震わせていた。　どこからか、すすり泣きまでも聞こえる。

一国の王が、自国の玉座を明け渡し平伏するなど、それぐらいの屈辱なのだ。

Pちゃん「事のあらましは聞いておりますし、既に殿下にも申し上げてあります。　サヤリ姫が、反帝国レジスタンスに拐(かどわ)かされ、連れ去られたそうですね？」

シノノメ「……。」

シノノメは言葉を発せず、そうする事で、間違いがないと告げていた。

シノノメ「全ては、私が国王として至らぬ証拠。私はいかなる罪をも受ける覚悟はできております。　なれど、殿下におかれましては、何とぞ憐愍（れんびん）を賜り、我が娘の身をお助け頂きますよう、伏して、伏してお願い申し上げまる次第でございます」

シノノメの態度に、Pちゃんは薄ら笑いすら浮かべていたが、メリャーナは沈痛な表情をしていた。

そして内心、メリャーナは自分の甘さを悔いていた…。

【5】

メリャーナ「マリンピアをどうするつもりなのですか？」

王宮を出ると、メリャーナはPちゃんに強く訊いた。

Pちゃん「どうするとは、殿下も変なことをおっしゃいますね？
我々はただ、シノノメがお願いがあると言うので、聞きに来ただけでしょう？　それをどうするかは、今から決めるのですが？」

Pちゃんは不思議そうな顔をして見せたが、メリャーナはさらに語気を強めた。

メリャーナ「ただ頼み事を聞くならば、わざわざ私がマリンピアを訪れる必要はなかったはずです。　皇女たる私が足を運んだ。　それによって、帝国がマリンピアに何かを為すつもりであると受け取る者は多いでしょう。　シノノメ殿下もそう思ったからこそ、あのような事をなされたのではありませんか？」

Pちゃん「…そこまで殿下がおっしゃるならば、属国の王が主君の一族にひれ伏すのは当然、などと逃げるのはよしましょう」

言葉を切り、息を吸い込む。　そして、僅かに表情が変わる。

その顔は、ザキラの傲岸不遜さを思わせる顔で、どちらかと言えば礼儀を知っていた、今までのPちゃんとは一線を画していた。

Pちゃん「マリンピアの…　シノノメの真意を見極めたかったのですよ。　今サヤリ姫は、黒海沿岸の街にいます。　これが何を意味するか、お分かりになりますね？」

Pちゃんの言葉に、メリャーナは愕然とした。　目の前のこの小男は、なぜサヤリの居場所を知っているのか？

とはいえ、今はその理由を訊いている場合ではなかった。

メリャーナ「…つまり宰相閣下は、マリンピアがフロンティアガードと手を結ぶために、サヤリ姫を使者に出したと考えていると？」

メリャーナは眉をしかめた。　そしてもう一度、己の甘さを悔いた。

Pちゃん「あのシュバルツという佐官、確かに有能ですね。　街で姫を見つけるや、表向き手出しをせず、監視のみ強めると言ってき

ました。　高度に政治的な問題だと察知したのでしょう。　オクサイドなどより、よほど使えるかも知れません」

Pちゃんは悠々と語り続ける。　それは

『サヤリの命はどうにでもできるぞ』

そう言っているようにも聞こえた。

Pちゃん「話を戻しましょう。　殿下にわざわざマリンピアに来て頂いた理由を、教えて差し上げますよ。　殿下には、これからクアルーンの本拠に攻め込んで頂きます」

ユービット、東欧南部まで攻め込み、結果大敗を喫したクアルーンだったが、その本拠はイラン、イラク辺りだった。　大元帥のハヴィニーが、イスラム教の指導者だったのも、その土地柄による。

Pちゃん「そこまで言えば、もうお分かりですよね？」

Pちゃんは、鋭い目つきでメリャーナを見る。　その目つきは、この小男にとっての主君ザキラとまったく同じで、皇女に対する畏敬の念は何も感じられなかった。

メリャーナ「もしマリンピアが裏切れば、侵攻軍は挟み撃ちに遭うかも知れない。　だから、今のうちに不安要素を潰せと？」

Pちゃん「その通りです」

道理ではあった。

今から攻めるのは、指導者が死んだとは言え、敵の本拠地である。
懸念材料は、１つでも少なくしておきたいのが普通だ。

Pちゃん「マリンピアの裏切りを防ぎつつ、それでもシノノメに強い態度に出たくないとおっしゃるなら、方法は１つしかありません。
即刻現地に出向き、姫の身柄を確保するのですよ。

サヤリ姫がフロンティアガードに行っていないとなれば、アラビア小国風情、あとは殿下のお好きになされて構いません」

メリャーナ「……。」

メリャーナに、既に発すべき言葉はなかった。

『あの時なぜ、私は首に縄をつけてでも、サヤリを引き戻さなかったのだろう？』

後悔だけが頭を支配する。

そして、そんなメリャーナを、Pちゃんは非情な笑みすら浮かべながら、見つめ続けていた…。

【6】

ナディア「なんだって、このタイミングでっ！」

ナディアが、珍しく苛ついてテーブルを叩く。

原因は、帝国のオクサイド中佐率いる軍が、フロンティアガードを攻めるために、大規模な通行制限をすると言い出した事だった。

今までシュバルツの軍は、フロンティアガードから攻撃された時は反撃したが、自分から積極的に侵攻しようとはしなかった。　その

ため、街は意外に平穏だったし、移動に対する制限もなかった。

エヴァニー「…シベリア。　何でオクサイドの軍は、そんな事を…」

シベリア「帝国兵が動く邪魔になるからだろう。　噂では、シュバルツがフロンティアガードを攻めないのが気に入らなくて、当てつけで攻めるのだとも言うが…」

同僚のシュバルツが攻めないから、代わって自分が攻めてやろうという訳なのか？

シベリア「街の近くには、もうオクサイドの部隊が駐留を始めている。　このままでは、帝国軍が勝つにしても負けるにしても、当分動けなくなるぞ」

昨晩から夜間外出禁止令が出されるなど、シベリアの言葉は現実のものとなりつつあった。

エヴァニー「急ごう。　今夜、黒海を渡る」

エヴァニーが決意を固める。

ナディア「…船は何とかするよ…。　あとは、見つからないようにできればね…」

ナディアは、少し不安な表情をしていた。

カムラネルナ仲間「大丈夫なのか？　船で見つかれば、陸地と違って逃げ場はないんだぞ？」

エヴァニー「危険は今までも潜り抜けて来た。　だから、きっと今度も潜り抜けられるさ。　なっ！」

不安を口にした数人の仲間たちを、エヴァニーは励まして回る。

サヤリ「…エヴァニー…」

そしてサヤリ。

彼女の反応は少し分かりにくかったが、慌てたり、苛ついたりはしていなかった。　エヴァニーを信じて任せる、そんな感じだろうか？

エヴァニー「サヤリ、あとちょっとだ。　あとちょっとで、帝国からも、マリンピアからも追われない地に行ける…」

エヴァニーがサヤリを見つめ、サヤリもまた、エヴァニーを熱っぽい視線で見つめていた…。

【7】

夕方までに、全員が街を抜け出す。　辺りが夕闇に包まれるのを待って、黒海に漕ぎ出した。

漁船の半分以下の、小さいボートが3艘。　黒海を縦断するには、いかにも心細い装備になってしまっていた。

ナディア「…すまない、エヴァニー」

日程的に無理を言ったのが原因で、ナディアのせいではなかった。
しかし、仲間たちを前に、ナディアは沈痛な表情をしていた…。

帝国軍士官「申し訳ありませんっ！」

陽がすっかり暮れた頃、そう言って駆け込んで来たのは、シュバルツの新しい片腕だった。　血相を変えていて、それだけでただならない事態なのが察せられる。

帝国軍士官「申し訳ありません。　例のマークしていた者たちを、見失いました。　今、使える兵はすべて使って探していますが、もう街にはいないようです…」

息を切らし、目は血走って、それでもただ詫び続ける自らの片腕に、シュバルツは真剣な眼差しで応じた。

この場で不手際を責めても、何にもならないと知っていたからだ。
かと言って慰めを口にしても、責任感の強いこの男は、かえって気に病むばかりだろう。

シュバルツ「犯した失敗の責任は、後で取れ。　それよりも、今はあの者たちがどこへ行ったかだ」

帝国軍士官「それが、皆目見当がつかないのです。　街はもちろん、すべての検問にも通達は出してありますが、未だそれらしき一団を

見た者はおりません」

シュバルツ「…あの者たちは、たしか２０数名ほどだったな…」

目立つというほどの人数ではない。　しかし、見落とすほどの人数でもない。　バラバラに散って逃げたのか？

シュバルツ「あの者たちが、最近何をしていたか分かるか？」

唐突な質問に、士官は驚いた顔になる。

帝国軍士官「は？　何をしていた、と言われましても…。　ほとんどは街におりましたし、馴染みの酒場があったのと、その酒の肴にと、魚を釣りに行く者がいたくらい…

…まさかっ？！」

言った士官も気がついたようだ。

シュバルツ「それは釣りをしていたのではないっ！　あの者たちは、黒海を渡航する気だっ！！」

シュバルツは、動ける哨戒艇とヘリの全てに出動を命じた…。

【8】

帝国兵に見つからず、沖まで漕ぎ出した。

…つもりだった。

しかし、しばらくすると、哨戒艇と思われる船が盛んに行き来し始めた。

空にはヘリも飛んでいて、一見してもの物々しい雰囲気なのがわかる。

エヴァニー「海の上も、こんなに警戒は厳しいのか…」

エヴァニーはそう言ったが、有力な海軍を持つ訳でもないフロンティアガードに対して、普段からこんな警戒がなされている訳ではなかった。

原因はエヴァニーたち…

もっと端的に言えば、サヤリの動きを察したシュバルツが、緊急に手配したからなのだが、当人達はそう思っていないようだった。

シベリア「エンジンを止めろっ！　音で見つかる！」

シベリアの指示で、何回もエンジンを止めた。　おかげで見つかりはしなかったが、遅々として進めない。

ナディア「…見つからない事を祈るしかないのか…」

ナディアが別の船で呟く。

そう言えば、３艘の船では、エヴァニーとサヤリとシベリアがそのうちの１艘、ナディア、ベンケイがそれぞれ別の船という風に分乗

していた。

何故そうしたかと言えば、操船経験があるのが、帝国時代に一通りの教育を受けたシベリアとナディアを除けば、ベンケイしかいなかったからだ。　元来彼らは、砂漠のレジスタンスだから仕方がない。

カムラネルナ仲間「…も、もう駄目だ…。　見つかってみんな殺されるんだ…」

ベンケイ「気をしっかり持て！　闇夜にこんな小さな船が、そうそう見つかるものか！」

漆黒の闇。

見えるのは、哨戒艇かヘリのつけるサーチライトだけ。

しかし、その光がいつ自分達を照らすかと、彼らの神経は緊迫に緊迫を重ね、みるみるすり減っていく…。

第５８章　別離（わかれ）（前書き）

（あれ…？　ガムテープ？？？）

メリル「ん～んん～！！」

ミク「ここで、本当なら冒頭文を始めるトコだケド」

マヒロ「いま本編が佳境だから、引き続きエヴァニー編をお楽しみください」

メリル「んんん～！！」

（どうやら、今回はお休みらしい）

第５８章　別離（わかれ）

３時間半。

それは、長いと一言で言い表すのが憚られるぐらい、長い長い時間だった…。

帝国軍士官「まだ見つからんのかっ！」

普段は冷静なこの男も、この長さを前にしては、冷静ではいられなかったようだ。

帝国軍士官「…も、申し訳ありません…」

だが、怒鳴ったところでどうにもならないことに気がつき、シュバルツと兵に詫びる。

帝国兵「准尉はまだお若いですからね。　こういう時は、焦ったら負けなんです」

ヘリの操縦をしていた兵が、そう返してきた。　ヘルメットでよく

分からないが、熟練した兵なのだろう。

帝国軍士官「また1つ勉強になった。　音紋、サーモスコープはどうか？」

目で見えないならば機械でと、反応を確認するように告げてみた。

帝国兵「それでこそ指揮官です。　残念な事に、反応はないんですけれど。　エンジンを切って、漕いでいるのかも知れません。人の体温を捉えたいところですが、捜索範囲が広すぎます。　全ての哨戒艇に、装備が行き届いている訳でもありませんし」

帝国軍士官「吊光弾は…　外せば、かえって影を作るか…」

帝国兵「その通りです。　だから、根気なんですよ」

兵に励まされる。　それにプライドは傷つかず、かえって心強く思えた…。

【2】

エヴァニー「しつっこい奴らだ…」

シベリア「ヘリの燃料はいつか尽きる。　だいたい、今まで見つからなかった。　小さな船を見つけるのは、それだけ難しいって証拠だ」

エヴァニーは耐えていた。

シベリアは、経験から腹をくくっていた。　ナディアもベンケイも、たぶん同じだっただろう。

だが…。

カムラネルナ仲間「…だ、駄目だ…　見つかる…。　いや、帝国の奴ら、もう俺たちを見つけてるのに、遊んでやがるんだ…」

目が虚ろだった。

手が震え、唇が戦慄いていた。

すでに正気を失いつつあったその仲間に、同じ船のベンケイや、別の仲間たちは気がつかなかった。　誰もが、自分が耐えるだけで精一杯だったのだ。

そこに上がった叫び声と、発煙筒。

カムラネルナ仲間「こ、ここだ～！　助けてくれ～！　こ、降伏するから命だけはっ！！」

帝国兵「中佐っ、准尉っ！！　2時方向に光っ！　急行しますから、掴まっててくださいっ！」

ヘリが一気に増速する。　無線が飛び交い、哨戒艇もまた慌ただしく動き始める。

シュバルツ「何の反応か？」

帝国兵「分かりませんっ！　ですが、人為的なものだと思います」

言っている側から、目指す方向に昼間のような明かりが出現する。

別のヘリが吊光弾を投下したのだ。

【3】

ベンケイ「何をするんだっ！」

ベンケイは、大声を上げ発煙筒を振る仲間を怒鳴りつけた。

カムラネルナ仲間「逃げ切れっこない。　だったら…　今降伏すれば、命は助けてもらえる知れない…。

そうだ…　お前らは賞金首だったよな？

俺は賞金を貰って、一生遊んで暮らすんだ…。　俺はもう逃げるのは嫌だ！　暗いのは嫌なんだっ！！」

医学的に言えば、暗所恐怖症に、戦闘神経症を合わせたようなものだろうか？

とにかく彼は、逃げ続けた日々、慣れない海、暗闇…
それらのストレスに耐えきれず…

…潰れた。

カムラネルナ仲間C「やめろっ！　あと少しじゃないかっ！」
ベンケイ「取り押さえろっ！　今ならまだ間に…」
間に合う。

そんな希望は、無惨に打ち砕かれた。　辺りを眩い光が包み込む。

カムラネルナ仲間「よく来てくれたっ！　ここだっ！　助けてくれっ！！」

彼にはもう、敵味方すら理解できなくなっていた。

ベンケイ「狂ったかっ！」

まだ手を振り続ける彼を、ベンケイが殴りつける。　しかし、そこに響いた銃声。

カムラネルナ仲間「やったな？　なら、俺も遠慮しないぞ？　お前らを殺してでも、俺は助かるんだ！！」

ベンケイ「し、正気に戻れ…」

カムラネルナ仲間「俺は助かるんだよっ！！」

撃たれた肩口を押さえ、それでも何とか説得しようとするベンケイだったが、その声は彼に届かない。

さらに銃を乱射され…

そのうちの1発が、ついにベンケイの胸を貫いた。

グランズ仲間「あいつ、仲間を射ちやがった！」

別の船からも銃弾が飛ぶ。　その銃弾は、狂った彼を見事に捉えていた。

しかし…。

カムラネルナ仲間B「ちょっとパニックになっただけだろ？　なのに殺すか?!　そうか、分かったぞ。　カムラネルナを売って、グランズは助かる気だな?」

射たれた船も、射った船に射ち返す。

疑心暗鬼。

最初に錯乱したのが、偶然彼だっただけで、他の仲間たちも限界だったのだ。　それは一旦堰を切るや、誰にも止められなくなる。

ただ、自分に銃を向ける相手を…　別の船を射つだけ。

エヴァニーが…

シベリアが…

ナディアがいくら叫んでも、彼らの耳には届かない。

さっきまで仲間だった者たちが、互いに血を流し合う。　そこはもう、人の世ではなかった…。

【4】

帝国兵「敵の銃撃ですっ！　…いや、違いますっ！　奴ら、味方を射ってやがる!!」

この事態には、熟練したこの兵ですら驚きを隠せないでいた。

帝国軍士官「どういう事だ?　一体、何がどうなっている?!」

帝国兵「知りませんよ、そんなのっ！　ただ1つ言える事はですね…」

シュバルツ「このままでは、方法はどうあれ姫が死ぬな」

そう。

帝国軍にとっても、サヤリが巻き込まれて死ぬのは、危惧すべき事態だったのだ。

帝国軍士官「中佐っ！　発砲許可をっ！　このままじゃ彼らは、お互いに潰し合って、みんな死んでしまいますっ！」

シュバルツ「だからと言って、どこかを撃てば騒ぎが収まるというものでは…」

頭に血が昇ってくるのが分かる。　しかしここで冷静にならなくては、事態の打開は図れない。

シュバルツ「…収まる…　収める…。　確かこのヘリは、ロケット

弾を積んでいたなっ？」

何か思いついたのか、シュバルツは叫んだ。

帝国兵「まさか船ごと沈める気ですか？！　それこそ、ターゲットもへったくれも…」

シュバルツ「そうではない！　狙いは外すのだ。　爆風でなぎ倒せないか？」

つまり、わざと直撃させずに、爆風による被害を狙おうと言うのか？

帝国兵「なるほど！　ではロケットより、アスロックをお勧めします。　対水中ＭＳ用のが２本！　船に近い水中で自爆させれば、派手な大波と水柱が作れますよ！」

ヘリが機首を船に向けた…。

【５】

エヴァニー「みんな止めてくれっ！」

シベリア「伏せてろ、エヴァニー！　お前まで射たれるぞっ！！
…っ！！」

銃弾が飛び交う中、なおも呼び掛け続けるエヴァニーを、シベリアは無理矢理押さえ込む。　彼らをしても、仲間の暴走は止められない。

サヤリ「……エ…　ニー…」

ましてや、サヤリごときになす術があろうはずもない。　ただ震え、泣き、しがみつくだけで精一杯。

帝国兵「アスロックいきますっ！　うまくいってくれよ…　発射っ！！」

ヘリからアスロックが撃ち出される。

シベリア「帝国の奴らまで攻撃を…　…ミサイルだとっ?!　船ごと沈める気かっ！

しかしその攻撃は逸れ、水柱を上げただけ…。

シベリア「…外した???

…違う！　伏せろっ！　遅発信管だっ!!」

シベリアが叫んだ瞬間、もの凄い水中爆発が起きた。　着水とは比較ならないくらいの大きな水柱が立ち上り、大波が襲う。　そのうえ噴き上げられた水が、滝のような豪雨となって降り注いだ…。

【6】

全てが収まった時、3艘のうちの1艘はひっくり返っており、もう

2艘もまた、水に打たれて戦うどころではなかった。　それどころか、水に流され、船から弾き出された者も少なくない。

そこへ近づく、帝国の哨戒艇。

帝国兵B「大人しくしろっ！　人質を解放して投降すれば、命だけは助けてやる！　繰り返す！　人質を解放して投降せよ！！」

大音量で叫びまくる。

エヴァニー「帝国の奴ら、何を言っている？　だいたいミサイルを射っておきながら、今さら助けるなんて言って、誰が信じるかっ！！」

エヴァニーは、怒り心頭といった感じだった。　さっきまでの同士討ちの悲劇も忘れて…

いや、同士討ちまでも帝国のせいであるかのように喚き立てる。

帝国の毒ガス攻撃で、両親を殺されたエヴァニーにとって、帝国はどこまでも憎むべき敵だったのだろうか？

それとも、完全に追い詰められたエヴァニーには、すべてを帝国のせいにして、叫ぶより他になかったのか…？

【7】

しかし、エヴァニーの思いと今の状況は、まるで関係がない。

元々22人しかいないところに加え、錯乱した彼が1人、彼の手にかかったベンケイ。　さらに、同士討ちで5人が失われた。

ようやく残った15人も、さっきの奔流で8人が流され水の上に…

…いない。

帝国兵C「大人しくしろと言っているっ！　暴れるようなら射つぞ！」

水に落ちたところを次々に、帝国兵に絡め取られてしまっていた。

ついに、残るはエヴァニー、サヤリ、シベリア、ナディアと別の3人。　合計7人だけになってしまったのだ。

帝国兵Ｂ「いい加減諦めて、人質を離せ！」

エヴァニー「人質だと？　何を寝ぼけたことをっ！」

帝国兵Ｂ「しらばっくれる気か？　落ちた奴らに女はいなかった！　まだ船にいるんだろう？　出せっ！」

話が噛み合っていない。

しかし、お互いに話し合って溝を埋められる状況ではなく、特にエヴァニーには、話を聞く気がまるでない。

シベリア「…女　…人質…　そうかっ！」

シベリアが何かに気がつく。　彼は顔をしかめながらも、銃を手にする。

シベリア「そんなに人質が返して欲しいかっ！　なら、今捕えた仲

間を全員解放しろっ！」

何とシベリアは、エヴァニーの足にしがみついていたサヤリを引き剥がすと、その頭に銃を突きつけたのだ。

エヴァニー「シベリアっ?!　一体何を?　サヤリっ!!」

突然のシベリアの行動に、エヴァニーはパニックになる。　サヤリに手を伸ばすが、シベリアはそんなエヴァニーにまで銃を向けた。

エヴァニーが、驚愕の表情で1、2歩下がる。

シベリア「どうするっ?　仲間を離さなければ、サヤリ姫は死ぬ！　マリンピアの姫がむざむざ殺されたとあれば、帝国もまずいんじゃないのか?」

わずか5メートル。　それだけ先の帝国兵の顔が歪む。

帝国軍士官「ついに正体を現したか？　甘い言葉で誘っても、結局最後はこれかっ！」

兵から無線を聞き、ヘリのドアを叩く。

帝国兵「…どうしますか？　ヘリから狙撃も可能ですが？」

熟練兵は、あくまでシュバルツの答えを待つ。

エヴァニー「シベリアっ！　お前まで裏切るのかっ！」

サヤリを人質に取り、帝国を脅すことは、エヴァニーにとって大迷惑なハッタリではあっても、けして裏切りではない。　なぜならシベリアの要求は、仲間の解放だからだ。

しかし、エヴァニーはサヤリを囚われたことで逆上していて、シベリアの意図が理解できない。

シベリア「どうしたっ！　仲間を離さないなら、姫が死ぬぞっ！！」

シベリアはサヤリに銃を突きつけ、エヴァニーが動くと、そちらにも銃を向けた。　これではどちらが敵なのか、まるで分からない。

帝国兵「中佐っ！　指示をっ！」

帝国兵が再びシュバルツを見る。

シュバルツ「仲間を解放してやれ」

帝国兵C「は、はっ！」

シベリア「ナディアっ！」

シベリアが呼ぶ間でもなく、ナディアは帝国軍の哨戒艇に船を寄せた。　かなり窮屈だが、皮肉にも仲間が減ったせいで、何とか全員が乗り込めたようだ。

ナディア「シベリアっ！　次はどうする？」

ナディアが聞いてくる。

シベリア「…くぅ…　…エヴァニーを頼むっ！　お、俺はこいつとここに残る！！」

シベリアが、サヤリの頭を銃口で押さえた。　サヤリはもう、気でも失いそうなぐらいの真っ青な顔だった。

ナディア「一緒に来ないつもりか？　ってシベリア！　あんた…」

ナディアに向き直ったシベリアを見て、ナディアは息を呑んだ。その脇腹と左胸に、明らかに銃創とわかる傷があり、大量の血が流れ出していたのだ。

シベリア「…はぁ…　は…　俺はどのみち持たな…い。　こいつも一緒に連れて行ってやり…たいが、さっきみたいに…　舟ごとひっくり返されたら…終わりだ…。

だから、俺だけが残…る…。　俺がサヤリを人質にする限り、帝国

はみんなを…追え…い…」

シベリアの息が荒くなる。　暗いからよく見えないが、足元がふらついているようにも見えた。

エヴァニー「俺は認めないぞっ！　サヤリっ！！」

サヤリ「エヴァニー！」

恋する2人が呼び合う。

しかし、それを引き裂いているのは、仇敵の帝国ではなく、親友のはずのシベリア。

ナディア「エヴァニー、こっちへ来なっ！」

エヴァニー「ナディアまで邪魔をするのか？！　俺はサヤリとっ！」

エヴァニーが激昂した瞬間、シベリアが膝をついた。　血を大量に失ったせいで、もう立っていられないのか？

エヴァニー「サヤリ、今行くっ！！」

ナディア「…許せ、エヴァニーっ！！！」

ナディアは、寄せていた舳先からエヴァニーの船に飛び移ると、いきなりエヴァニーの後頭部を銃床で殴った。

崩れ落ちるエヴァニー。

シベリア「…ナディア…」

シベリアの足元には、血の水溜まりができていた。　辛うじて残る意識で、サヤリの首を抑え、床に這いつくばらせている。

シベリア「もう行けっ！　エヴァニーを生か…せ。　帝国の…らも、サ…リは殺せないはず…だ。　生きて…さえ…れば…　ぐほっ！！」

シベリアが血を吐いた。　だが、手の力だけは緩めない。

ナディア「…シベリア…。　あんたには苦労ばかりかけた気がするよ…。　こんな最期もあんたらしいって言えば、喜んでくれるかい？」

ひしひしと死の影が迫るのがわかったから、ナディアはシベリアから目を逸らさなかった。　涙をこらえ、ただ面影を目に焼き付けるかのように。

シベリア「行けっ！　帝国兵共っ！　１ミリでも船を動かしたら、サヤリ姫の命はないぞっ！！」

シベリアは、最後の力を振り絞るかのように気勢を上げる。

サヤリ「エヴァニー…　エヴァニー…　いやだ…　エヴァニー」

泣き続けるサヤリを省みず、ナディアは気を失ったエヴァニーを、仲間に渡した。　そして自分も船に戻る。

ナディア「…シベリア…。　行くよっ！！」

ナディアの船が走り去って行く。　しかし、シベリアがサヤリに銃

を突きつけているせいか、帝国兵に動きはなかった。

サヤリ「エ、エヴァニー…　エヴァニー…」

無惨に引き裂かれた恋人を想い、サヤリはただ泣き続けた。

そして、ナディアの船が見えなくなり、音も聞こえなくなり、さらに時間が経った…。

【8】

シベリア「…指揮…官は、誰だ…」

蒼いを通り越して、土色になった顔をしたシベリアが、辛うじて言葉を繋いだ。

帝国兵「外部スピーカーに切り替えました。　そのままお話になれます」

ヘリの音がいかにも邪魔だったが、哨戒艇を中継して、何とか会話が成立した。

シュバルツ「私がそうだ」

シュバルツが応じる。

シベリア「…仲間をあえて逃…してくれた事、礼を言わ…てもら…う。　姫が人質じゃな…って…　気づ…いてた…じゃないの…か…？」

シュバルツ「どうだろうな？」

シベリア「…まあ、いいさ…。　どちら…　しろ、姫を…　サヤリを…　傷つける意思はな…い…」

シベリアが銃を投げ捨てる。

それを見た帝国兵たちが船に飛び乗り、サヤリを保護する。　そしてシベリアを取り囲んだ。

シベリア「…もう少し…　俺に力…があれば、な…。　こ…なつまらな…策なんか、しなく…よかったのに…」

シベリアは、帝国兵が触れた訳でもないのに、船の上で倒れていた。

シュバルツ「その男を艇に運び入れよ！　自ら銃を捨て、人質を解放した。　これは投降だ。　捕虜として適切に対応せよ！」

帝国兵C「了解しました！」

帝国兵が、かすかに動くだけとなってしまったシベリアを移送する。
だがもう虫の息で、かろうじて呟くのは、己の非力を悔いる言葉と、誰かへの詫びの言葉だけ…。

帝国軍士官「…何と言いますか、また1つ勉強になりました。　敵の策は、見破り裏をかくものだとばかり思っていました」

シュバルツの片腕は、そう静かに呟いた。

シュバルツ「…策云々というなら、私は甘いだけだ。　そして私は、人であることを捨ててまで、戦う事はできないようだな…」

シュバルツは、自らの判断をこう断じた…。

【9】

急を聞いたメリャーナが、黒海沿岸の地に着いたのは、それからわずか1時間後だった。

メリャーナはシュバルツの頼みを聞き、ガルダにシベリアを収容した。　皇族仕様のメリャーナのガルダは、大病院に匹敵するぐらいの医療設備を備えているのだ。

シュバルツ「殿下。　お礼申し上げます。　ただのレジスタンスの男1人。　そのまま死なせても、大過ないような者のために…」

シュバルツはメリャーナに告げる。

メリャーナ「いえ。　中佐の気持ちは分かりますわ。

この男、そんな状況であったにも関わらず、ただ己の非力を責め、回悔の言葉のみを呟き続けたそうですね？　自分が全てを背負い、立派に仲間を逃がしたにも関わらず、なおも悔いているばかり…」

メリャーナも沈痛な表情をしていた。

メリャーナ「助かる、などと安易なことを言える容態ではありません。　しかしもし助かったならば、その悔いをいくらかでも晴らしてあげたいものですわ」

己の非力さゆえに起きた悲劇だと、この男はまだ思っているのか？

もしそうであるなら、違うと言ってやりたい。　１人の人間の力では、できる事など知れている。　仮にこの男が皇帝であったとしても、できない事は世に溢れている。

メリャーナ「…ところで中佐。　サヤリ姫はどうしていますか？」

気になったのか、メリャーナがシュバルツに尋ねた。

シュバルツ「泣いて暴れるので、鎮静剤を打って眠らせました。何と言うか、王と臣下が逆だと言ったなら、不遜に当たりますかな？」

シュバルツはそんな風に言った。　目の前でシベリアの意地を見たシュバルツにとって、泣いてばかりのサヤリは、将来の王には相応しくないと思えたのだろうか？

メリャーナ「こうなった原因の半分は、私にあります。　とは言え、サヤリ姫には、国に帰って頂くしかないでしょう。　手配をお願いしてよろしいですか？」

シュバルツ「お会いになられぬおつもりですか？　姫と殿下は旧知の間柄とお聞きしましたが…」

意外だったのか、シュバルツは微かに驚いた表情をしていた。

メリャーナ「旧知というほどではありません。　それに今会えば、また何か言ってしまいそうですし」

沈んだ表情のメリャーナに配慮してか、結局シュバルツは兵に、サヤリの移送の手配だけを命じた…。

第59章　戦いたくないレジスタンス（前書き）

（ガムテープは剥がしてもらえたらしい）

メリル「……」

ミク「メリちゃ～ん、機嫌直してよぉ～。　ほら、アイスあげる」

メリル「…いらない」

マヒロ「さっきのはしょうがないじゃない。　だって、本編の雰囲気邪魔すると、読者の方に悪いし…」

ジルド「あっ！　こんな所にいやがった！」

ネロ「いくら編集者の分身だからって、横暴はいけませんねっ！」

マヒロ「横暴って、どっかの隊長さんが、コーナーやる気ないからでしょ？　占いだって、1回都合で無理矢理中止したけど、それなりうまくいってたんだから！」

ミク「…お姉セリフ長い…」

ジルド「子供のメリルを焚き付けて、その気にさせただけだろうが！」

マヒロ「その子供の出番削ったのは誰よ！　しかもトピ原作じゃ、メリルちゃんって途中から出てこなくなるじゃない！　死んじゃった訳でもないのに！　キャラ作ったら、最後まで責任持ちなさいよ！」

ネロ「うっ！　それはですね…」

ミク「…文句多いしぃ…」

マヒロ「ほら！　メリルちゃん。　こんなヤツといるより、うちにくれば出番が増えるわよっ！　あたしがちゃんとしたキャラに書き直してあげる！！」

ジルド「違うっ！　メリルはうちの隊のマスコットキャラなんだっ！！」

メリル「…痛いよ…」

ミク「って、お、お姉？　そんなに引っ張ったらメリちゃんが…」

ネロ「ジルド！　メリルが泣いてるじゃないですかっ！」

（どうなってしまうのか…？）

第59章　戦いたくないレジスタンス

???「……てくださいよ。　…ぇ、起きましょうって」

揺すられて、ようやく目を覚ましたらしい男。　だが、まだ視線が定まっていない。

???「…あん？」

???「…ったくもう、評議。　開会5分前まで寝てるなんて、一体どういう神経してるんですか？」

ぶつくさと文句を言うのは、評議と呼ばれた男の秘書か、側近みたいに見えるが…。

???「…　…誰？」

???「駄目だこりゃ」

盛大なため息をつく。

???「あのですね～。　いくら寝ぼけてたって、１０年も一緒にいる人間を忘れますか？　ふつう」

頭の痛そうな表情。

???「…いや、いくら俺でも、ベンを忘れたりしないって。　じゃなくって、さっき言った評議って誰だ？　今日は、誰かお偉いさんが視察に来る日だったか？」

ベン「…はぁ…」

駄目だとばかり首を振る。

ベン「評議ってのは、中央評議会議員の略で、各分野で特別に功績のあった人間が抜擢される職です。　で、評議がみんなで話し合って、我々フロンティアガードの政策を決めるんじゃないんですか。

ちなみに、茄子笛の兄貴も立派に評議の１人ですよっ！」

当たり前の事だった。　それに評議会議員であれば、『××評議』や『～～議員』という敬称で呼ばれる事もあるだろう。

まあ、そこで茄子笛が寝惚けていたために、話は大幅に逸れてしまったが。

茄子笛「…そうだっけか？」

ベン「兄貴に敬称なんて使ったのが、そもそもの間違いでしたよっと。　っつても、粗雑な言葉を使うと、他の連中がうるさいんだよなぁ…」

さっきまでとは違った意味で、悩ましげな顔。

茄子笛「そうなのか？」

ベン「そうなんです！　俺だって、タメ口で呼び合ってる方が気楽なんですけどね？　そんなん言ったって始まらないでしょうが。

ジムキャノンで、帝国のＭＳを１０機もぶっ飛ばしてから、兄貴はフロンティアガードでも、一目置かれてるんだから…」

どうやら茄子笛が評議入りした理由は、戦功によるものらしい。

こんな感じで、フロンティアガードでは、各分野の代表が集まり、

話し合いで政策を決めていた。　同じ反帝国レジスタンスでも、『楽園の剣』が全てを決めるインドラとは、政治システムが違っていて…。

【2】

???「よう、茄子笛評議殿っ」

おどけた様子で、茄子笛の肩を叩いた男がいた。　隣の席に座ったその顔を見て、茄子笛が表情を緩める。

茄子笛「ああ、ミケさん。　おはようございます」

ミケ?「ミケさん…か…。　議場じゃ、ミケルフォード評議の方がいい気がしないか?」

呼ばれたその男は、自分の呼ばれ方について、クレームをつけたのだろうか?

茄子笛「…そう呼んで欲しいんですか？」

茄子笛は、急にキョトンとした表情になった。

ミケル「いいや、全然。　周りに合わせてるだけだ。　あの年寄り共に目をつけられると、いろいろとややこしいからな」

形式にこだわり、とかく口やかましいのは、フロンティアガードの特徴なのだろうか？　まあ、歳と共に変に口数が増えた人間は、どこにでもいるが。

ベン「それもありますけど、いっつも言葉が率直過ぎるから、お二人は煙たがられるんですよ。　年寄りなんて言ってみても、昔からオデッサにいる有力者なんだから仕方ないでしょう？　彼らが鉱山開発に精を出したから、今のオデッサがあるんでしょうし」

ミケル「そうだな。　そして、その鉱山から得た金を、全部帝国に持っていかれそうになったから、反乱を起こした、と。　そういう意味じゃ、可愛らしいところもある連中だな」

そう言って笑う。

この言葉からする限りでは、フロンティアガードが帝国に反旗を翻した理由は、インドラやクアルーンとは、やや趣を異にするようだ。

茄子笛「…そうだったんですか？」

ミケル「茄子は、その頃は知らなかったか？　…その頃はだな…」

そうミケルが言いかけた時、髪がずいぶんと薄くなってしまった背広姿の男が壇上に上がった。　それを見たミケルは、話をやめ、席を立つ。

どうやら、今日の評議会が始まるらしい…。

【3】

茄子笛もその日の評議に参加したが、特に意見は発しなかった。

評議では、帝国のオクサイド率いる部隊の動きが活発だとか、別の地域で活動していたレジスタンスが保護を求めて来ただとか、それなり重要なことが話されていたようだったが…。

茄子笛「やっぱ俺には、背広よりこっちの方がいいな～」

評議会が終わった途端、ものの数分で背広を脱ぎ捨てた茄子笛は、パイロットスーツに袖を通していた。

ミケル「ま、茄子に背広が似合わんのは分かるがな。　実際に戦ってた奴が評議に参加するのは、実状を知らせるという意味で、有意義だと思うぞ？」

茄子笛「ですかね～？　つか、ミケさんはもうＭＳに乗らないんですか？」

ミケル「…まぁ、な。　評議の仕事の方が忙しい。　それに真面目にやってみると、案外面白いんだ」

茄子笛「そうなんですか？　だけど、ミケさん程の腕があるのに勿体ない」

２人の会話を総合すると、このミケルフォードなる評議も、かつては腕のいいＭＳパイロットだったようだ。　しかし、現在は管理部

門に専念しているのか？

ベン「茄子の兄貴。　訓練の準備はできてるそうです」

そんな話をしていた2人に、ベンが部隊の状況を伝えに来る。　それを聞いた茄子笛は、随分使い込んだ風のジムキャノンに向かう。

ミケル「…まだ、ジムキャノンなんかに乗ってたのか？　最近は帝国も、いいMSに乗るようになってるぞ？　さすがにキツいだろう」

その年期が入った機体を、ミケルが見咎めた。

茄子笛「こいつには愛着ありますし、少しくらい壊しても、修理が楽ですから。　実戦になったら、その時考えますよ」

しかし茄子笛は、実にあっけらかんとしていた。

ミケル「なってから考えるなんて、呑気な事を…。　せっかく評議

会に出れるんだから、いいＭＳを回してくれって頼んだり、開発に力を入れるように、議案を出したりしろよ」

茄子笛「そんなことしていいんですか？」

そう言った茄子笛を、ミケルは笑うと言うより、呆れて見ていた。

ミケル「…だから、いろんな意見が出せるのが、フロンティアガードのいい所だとは思わないのか？

そりゃ意見が対立すれば面倒だろうが、意外と聞く耳は持ってる奴らは多い。　いい加減、自警団の隊長は卒業しろよ」

茄子笛「分かりました。　訓練が終わったら考えます！」

結局、終わってから、始まってから、そんな風なってからしか物事を考えない茄子笛なのだった…。

【4】

そんな感じで、茄子笛が訓練にしか熱心でない頃、ミケルは他の評議たちと個別に会合を持っていた。

評議Ａ「帝国のオクサイドは、本気で我々を攻める気だろうか？」

ミケル「本気も本気でしょう。　むしろ、オクサイドは先陣で、本隊は後から来ると考えた方が自然ですね」

評議達「……。」

黙ってしまった。　顔しかめているところをみると、少なくとも戦争をしたがってるようには見えない。

評議Ｂ「適当な条件で和睦はできないものか？　我々は別に　『帝国の存在を認めない』　などと言っている訳ではない。　鉱山開発の労苦に適切に報いてくれさえすれば、皇帝に頭ぐらい下げてやるのだが」

評議Ａ「無理であろうな。　帝国は最近、昔の力を取り戻しつつあ

る。　全世界で反乱が頻発し、なりふり構わずそれらを潰さねば、帝国自身が生き残れなかった5年前とは違う。　現に、クアルーンも討たれてしまったではないか」

評議B「だからこそ、今のうちに和睦なのだ」

利益で動くところが、フロンティアガードにはあるのかも知れない。

それに、フロンティア『ガード』と銘打つように、彼らは積極的に帝国領に攻め入ったことが、ほとんどなかった。　そんな事をしなくても、オデッサ鉱山の産出する資源を取引するだけで、十分に豊かな生活が送れるのだ。

ミケル「肝心な事をお忘れです。　オデッサの産出する資源の大半は、軍事用にこそ高い価値を持ちます。　それを、帝国に反する勢力に提供してきたからこそ、今の豊かさがあるのですし、逆に言うなら、帝国の苦戦があったのです。

十数年前、帝国の税金が高いとか安いとか言っていた時代とは、すべてが変わってしまっているのですよ?」

オデッサの反乱の理由、つまりフロンティアガードの誕生の理由は、

当時のオデッサの領主が、この地に苛酷な税を課したことにあった。話し合いに応じようとせず、本国に直訴しようとした者を、その領主は捕え、裁判にもかけずに処刑した。　その無法についに領民は怒り…。

つまり、ふつうの人間として扱えと主張したに過ぎなかったはずだった。

…しかし時代は、そんなオデッサの領民たちに、皮肉にも、世界を左右するだけ力を与えてしまったのだ…。

第６０章　流刑地の野望（前書き）

（両側から手を引かれ、ちょっと可哀想なメリル…）

ミク「こ、このままじゃメリちゃんが…　誰か～！」

？？？「まかせて！」

？？？「子供をいじめるなんて、許さない！」

？？？「天空神に代わっておしおきよっ！！」

？？？「正義の味方、インドラ戦隊ラピスラズリ参上っ！！！」

ジルド「……。」

ネロ「……。」

ミク「よっ！　待ってました！」

マヒロ「…え、えと…　ラピスラズリって、こういうキャラ設定だっけ…？？？」

エイス「そこのおばさ～ん。　細かい事言わな～い」

トゥーエ「口うるさくなるのって、歳取った証拠だよ？」

マヒロ「お、おばさん？　あのねぇ、あたしはまだ２２なんだけど！」

――――――越えられない壁――――――

エイス「ラピスラズリって、１５だけど？」

ノン「あたしは試作品だから、１６だけどね」

メリル「…私は１２…」

ミク「そしてあたしも１５なのだ！」

――――――越えられない壁――――――

マヒロ&ジルド&ネロ「…失礼しました～」

フィフス「それじゃあらためて、ラピスラズリで～す」

フォルナ「あ、フィフスお帰り」

アイン「ここに来れば、フィフスに会えるって言うから来たんだけ

ど、ホントに生き返るんだね」

ミク「うん。　この冒頭文って、次元と生死を超越した世界だから」

ノン「たまには、そういう理屈が通じないのも面白いかも」

エイス「ノンってば、いっつも理屈っぽいもんね～」

セブンス「でもここ、話題を自分達で考えなきゃいけないんだろ？
何か考えあんの？」

エイス「そんなんさぁ～」

セブンス以外「その場のノリでぉＫ！」

セブンス「そうだな！」

（いいのか?!）

第６０章　流刑地の野望

（かなり久し振りの、やたら細かい基本設定。　飛ばし読み可です）

月。

人類が地球以外で、初めて降り立った星。　その開発史は、西暦末期にまで遡るとされる。

詳しくは話が長くなるので割愛するが、帝国が世界の全土を我が物にしようとするまでは、月は宇宙連合の元で、それなりの繁栄を築いていた。

そんな月が大きな転機を迎えたのは、今から６０年近く前のことだった。

当時、ザクとジンが次々と製造される有り様に、帝国の野心を感じ取った連合政府は、画期的な新技術による戦争の抑止を模索。　結果、月の資源を用いたルナチタニウム合金、いわゆるガンダリウム合金の開発に成功する。

この画期的な合金は、帝国のあらゆる装甲材より堅牢かつ軽量で、

当時の帝国の保有するＭＳ用兵器では、まるで歯が立たないという驚異的な物であった。

そしてガンダリウム合金は、連合と同じく、帝国の野心を警戒し始めた共和国に提供され、開戦にこそ間に合わなかったものの、ＲＸ－７８ガンダムの活躍という形で、戦争末期の様相を劇的に変化させたのだった…。

戦争終結後、帝国もまたガンダリウム合金に注目。　後れ馳せながらも、独自に精製方法を発見したのだが、そこからが本当に月の運命を左右してしまった。

戦後の帝国は、新たに得た領地の産業を１つだけに絞り込む。

旧サイド６のマーガレットが食糧、旧サイド７のレンカが製造業のみを産業としたように、月は、ただひたすら資源を採掘するだけの日々を強制された。

結果、街には出稼ぎの鉱夫だけが溢れる、歪な様相になってしまう。

さらに時が流れ、帝国からも戦乱の気運が去り、軍事費が削減されるようになると、帝国は安い人手を求めて、罪を犯した者を鉱山で

強制労働させるようになる。

そんな月が健全に繁栄するはずもなく、いつしか月は流刑の代名詞となり、そこに貴族が領地を与えられる事もまた、左遷と同じ意味を持つようになってしまったのだった…。

【2】

？？？「伯爵。　主からの伝言でございます。　今しばらくは、本国の機嫌を取って欲しいとのこと」

伯爵と呼ばれた女性は、よく見れば、月きっての有力貴族オードリー伯爵ではないか。

そして彼女が話しているのは、３０前後の男だろうか？　浅黒い肌が目につく。

オードリー「そなたもご苦労なことだの。　まあ、皇子がそうおっしゃる…」

？？？「ゴホンっ！」

急に咳払いをしたその男。

オードリー「…相変わらず、細かいことにまで気が回るわ。　とにかく、ブレンド予備役少佐がそこまで頼むと言うなら、聞いてやらぬでもないぞ」

急にオードリーの言葉がぞんざいになったように感じたのは、気のせいだろうか？

？？？「具体的に本国は…　というよりザキラは、何をせよと言ってきているのでございましょうか？」

オードリー「ガンダリウムを増産したいのであろう。　資源の産出を増やせとな。　あとは、マイクロウェーブの送信を再開させよ、と。　いまさらマイクロウェーブなど送って、何がしたいのか分からぬが」

オードリー伯爵が言ったマイクロウェーブとは、月から照射を行う、一種のエネルギー供給手段である。

発電その他に利用可能な技術として、本来は平和利用を目的に開発されたものだが、帝国は5年前の争乱の時に、それを砲撃用に流用

しようと画策したのだ。

実際、一部のコロニーの破壊に使用されたとも、試射のみで終わったとも言われ、詳細ははっきりしない。

しかし、マイクロウェーブの利用には、送信基地や中継衛星などに膨大な維持コストがかかるため、最近は朽ち果てるに任されていたのだが…。

???「改めて、マイクロウェーブの軍事利用を企んでいるらしいですな？　詳しい内容は、まだ掴めておりませんが…」

オードリー「ならば、ザキラを困らせてやろうかの。　工事はわざと遅らせ、中継衛星も出し渋るとしよう」

どうやらこのオードリー伯爵は、本国の政策というより、ザキラ個人に含むところがあるらしい。

???「そうおっしゃるだろうと思いました。　ですが、そこはあえて、マイクロウェーブ基地を最優先で建造して頂けませんか？」

淡々と男は言ったが、その割には眼光が鋭い気がした。

オードリー「…ほう。　そなたがそう言うからには、少佐に何か策があるようじゃの？　よい。　希望は叶えてやろう」

？？？「有り難き幸せ。

しかし、ザキラも無茶を言いますなぁ…。　急かしても、そうそう工期が短くなるでもありますまいに。　むしろ突貫工事となれば、いざという時に不具合が起こるやも知れず…」

また、男の目が光った。　それにオードリーも気がついたらしい。

オードリー「…そういう事か。　そなたと話しておると、頭を使わねばならぬので疲れるわ。　歳で呆けたなどと、言ってはおれぬ」

低く笑ったオードリー。　見かけはけして若くないが、少なくともその知性に衰えは見られない。

？？？「伯爵はまだお若くあられます。　呆けているなどとは、とてもとても」

オードリー「誉め言葉と受け取っておこう。　しかし、私が変わらぬと言うなら、そなたの口も同じだの？　少佐か私が相手でなくば、その首、とうに飛んでおるわ」

オードリーはそう言って笑った。　この男の口調、はっきり言って嫌味にしか聞こえない時がある。

オードリー「それはともかく、そなた帰りの足はあるのか？　月へ来たからには、密航などでは帰せぬ。　地球への資源輸送の艦隊に便乗したらどうか？　何なら司令をしても構わぬぞ？」

どうやら、思いつきで司令に推すぐらい、オードリーはこの男を買っているらしい。

？？？「せっかくのご厚意ですが、それも遠慮せざるを得ません。　実は、次の居候がすでに決まっておりまして」

居候の意味がよく分からないが、とにかくこの男は、別の場所に赴く仕事を与えられているようだった。

オードリー「そうか。　しかしそうなれば、また顔を変えるのであろう？　たまには、覚える方の身になってもらえると助かるのだがの」

顔を変えて居候？？？

？？？「それには及びません。　今回は、そこまでの必要はなさそうですので。　主はともかく、私共は誰1人、面識もない家でございますゆえ…」

オードリー「ふむ。　とにかく、身体は大切にな？　暗殺からせっかく逃れても、病に倒れたのでは意味がない」

オードリーの言葉に、その男は黙って頭を下げただけだった…。

【3】

男が辞去すると、オードリーは建艦用のドックを訪れていた。　世界では活気のない方に属する月だが、ここだけは随分と賑わっていた。

帝国軍技師「これは伯爵。　視察、お疲れ様でございます」

オードリーの姿を認めた技師が、恭しく挨拶をしてくる。

オードリー「ふむ。　して、どうじゃの？　まもなく完成とは聞いているが」

帝国軍技師「はい。　あと一月もあれば、公試に入れます。　しかし、本国もついに月の技術を認める気になりましたか。　新造巡洋艦４隻の建造とは」

その技師は、どこか誇らしげだった。　口振りからして、発注された艦艇の建造責任者なのだろう。

オードリー「…何を寝惚けたことを言っておる。　この艦は、本国の命で造らせておる訳ではない。　本国の艦ならば、サダラーンや

エンドラになりそうなものであろうが、そんな艦、設計図すら寄越さぬわ」

オードリーは、あっさりそう言ってのけた。　確かに建造中の艦は、アーガマ級に見える。

だがそれならば、一体誰が造らせているの艦なのだろうか？

帝国軍技師「そうなんですか？　しかし、伯爵はすでに座乗艦をお持ちですし、どこかに売られるので？

…まさか、反帝国のインドラなんかに、艦を売るなんて言い出しませんよね？」

自分が造ってる艦のことだけに、技師の関心は強いようだ。

オードリー「そなたは思い込みが激しい上に、口が軽いからな。教えてやらん。

しかし、本国に期待するのだけは止めておけ。　私は宰相のザキラという男をよく知っているが、月をより悲惨な地にはしても、繁栄させたりはしない男だ」

ピシャリと言い切るその口調には、無性に重みを感じられる。　その重みを言葉で表すならば、宿怨という言葉が相応しい。

帝国軍技師「…よく知る、ですか…。　まさか伯爵は、その昔ザキラ宰相と付き合ってでもおられた…

ひいっ！！！」

そう言いかけた技師の顔が、急に青くなる。　そこに注がれていた、負の感情に凝り固まった視線。

帝国軍技師「…ま、まあ、冗談はさておきまして、次はＭＳの開発状況です。　先に先行量産機をお渡ししたジム３、リックディアスですが、まもなく量産に入れます。　また…」

以降もオードリーは熱心に視察を続けたが、目は技師を睨んだままで、技師は口は災いの門だと、思い知る羽目になった…。

第６１章　恩義の為に（前書き）

（ラピスラズリは、何をしでかすのか…？）

セブンス「毎度おなじみ、インドラ最強にして　★世界でも最強の★　ラピスラズリだよ～。　で、そのラピスラズリが、冒頭文でお伝えするのはね～」

フォルナ「勢力ごとの、ＭＳの開発状況です。　じゃ、さっそく現地を呼んでみましょう。　マーガレットのエイス特派員～」

マヒロ「と、特派員って?!　しかも、あたしのコロニーだし」

エイス「はい、マーガレットに来てるエイスだよ～。　さっそく、マーガレットの開発状況をインタビューしてみちゃうから」

？？？「…どうも」

（プライバシー保護のため、音声と口調は変えてあります）

エイス「ちらっと見たんだけど、今造っているのはハイザックばかりじゃない？　もしかしてこのコロニー、弱い？」

マヒロ「…よ、弱いって失礼…」

エイス「おばさんには聞いてないから。　で、ぶっちゃけどうなの？」

???「そうですね～。　本編でもありましたけど、５０年間ずっと、食糧しか作ってこなかったコロニーですから。　最近、他から技術士官をお招きして、何とかハイザックを造れるようになったばかりなんですよ」

エイス「そんなんで、これから戦えるの？　あっさり負けちゃうんじゃない？」

???「それは大丈夫だと思います。　さっきも言いましたけど、技術士官の方からいろいろ教わりましたから。　それに、ハイザックはあくまで練習台で、さらなる新型ＭＳを開発するため、日々努力を重ねてるんです」

エイス「なるほどね。　おばさんは口うるさいだけでも、工場の人

たちは頼りになりそう、と」

マヒロ「なんだその結論は～！　だいたい、開発費承認したのはあたしだ～」

エイス「だから、おばさんは黙ってて。　つまり、これからマーガレットは力をつけそうだから、いじめるなら今のうちってことかな？　以上、マヒロ（おばさん）陣営のマーガレットからでした～」

（続く…　はず）

第６１章　恩義の為に

霧雨「これだけ艦隊が揃うと、力が全てって気になるよね？　５年前、反乱に手を焼いた帝国軍が、狂気に走った気持ちも分かるね」

そんな物騒な事を呟いてしまう霧雨。　旧式艦が多いとはいえ、５０隻もの艦隊が揃えば、そんな気にもなるのか？

ちなみに、５年前の帝国軍宇宙艦隊は、３００隻を越えていた。

霧雨侯爵「…また、無用に激しい事を考えておるようだな？　戦などせずとも、恩徳を施せば世界は治まる。　何故に帝国には、戦いを好む者が多いのか？」

その言葉は、遠回しに強硬策に出た霧雨大佐を非難しているのだろうか？

霧雨「そう言っても、強硬策は本国の方針ですから。　お嫌ならば、ザキラという男に代わって、宰相にお成りになってはいかがです？　推薦しないでもありませんよ？」

言葉は丁寧だが、主張を聞き入れる気がないのは明らかだった。

下手をすれば、霧雨が率先して反対票を入れかねない。

人としての仲の良し悪しはともかく、２人意見が一致した事は、今までほとんどなかった…。

【２】

ヴァイス「まあ、派手に揃ったもんだな？」

そんな艦隊の様子を密かに伺うのは、やはりこの男たち。　そして、その紅いＭＳの後に付く、数機のザクとリックドム。

海賊「な、なあ…。　あんたら前の戦いで、帝国の艦沈めて、大将とも互角にやり合ったそうじゃないか。　俺達の新しいボスになってくれよ？」

おどおどしながらも、２人にまとわりつく。

どうやら、ボスが戦死してバラバラになりかけていたところに、フェニックスナイツの戦いぶりを見せられて、惚れ込んだらしい。
これほど極端ではなくても、２人の指示に従うと言ってきた賊は少なくなかった。

レアルタ「そうかそうか。　だが、フェニックスナイツに入るのには、まだまだ力不足だな。　とりあえず、サーベル素振り千回。あ、お前はヒートホークなのか？」

面倒見がいいのか、調子がいいのか、やたらご機嫌なレアルタがいた。　彼は、頭数が揃えば依頼が果たしやすくなると言い、慕って来た賊の何人かを可愛がっていた。

ヴァイス「…レアルタもよくやるな？」

所詮、不利になったから頼って来ただけ。　賊達の態度をそう断じていたヴァイスは、呆れた顔でレアルタを見ていた。

しかし…。

レアルタ「おっと。　それをヴァイスさんが言う？　３年前、賊だった俺の性根叩き直して、フェニックスナイツに入れてまでくれたヴァイスさんが？」

レアルタは、そう言って笑う。　それは現フェニックスナイツが誕生したきっかけなのか？

ヴァイス「あれは依頼だったって、何度も言ってるだろ？」

レアルタ「お？　しらばっくれる気？　それとも、照れてます？　村の依頼は賊討伐で、それも皆殺しだったんでしょ？」

ヴァイス「…知ってたのか…」

レアルタの言う3年前。

ヴァイスは別の仲間と組み、やはり帝国軍相手に戦っていた。　しかしその仲間は、帝国軍との戦いでの傷が原因で死んでしまう。

腕の立つ仲間を失い、帝国軍と正面切っての戦うのが難しくなったその時、たまたま近くの村から、賊討伐の依頼があった。　ヴァイスは、食い扶持稼ぎ程度の気持ちで依頼を受け、その賊の集団は壊滅した。

村を荒らされた恨みからか、村人は生き残ったレアルタを殺すよう

求めた。

けれどヴァイスは、自暴自棄になっていたレアルタを殴り飛ばし、さらに自分が面倒を見るからと、裏で村人に土下座までしていた…。

レアルタ「…って、ちょっと前に会った時、村長が教えてくれたぜ？」

あっけらかんと言うレアルタ。

ヴァイス「…あの村長、ほとほと口が軽いな」

ヴァイスは渋い顔だ。

レアルタ「それだけでもないかもよ？　村長、俺にこう言ってくれたよ。

『立派な男の顔になったな』

って。　あん時、ヴァイスさんの頼み聞いてよかったともな。　いい話じゃねぇか」

自分の過去を、勝手にいい話と締めくくるレアルタ。　まあ彼的には、自分を改心させてくれたヴァイスを、讃えているつもりなのだろうが。

ヴァイス「好きにしろ。　だが1つだけ言っておく。　仲間が増えても、フェニックスナイターズはなしだ。　この上なくダサい」

レアルタ「了解っ」

ヴァイスは、レアルタが自分の真似をして、賊の面倒をみるのを認めたようだった…。

【3】

帝国兵「霧雨艦隊、視認しました」

マヒロ「航行補給の準備をお願い」

帝国兵「了解しました」

戦況は、ケイさんの予想通りになっていた。　霧雨大佐は初戦に策を練ったみたいだけれど、それがうまくいかなかったら、すぐに作戦を変更して、長期戦の構えに移っていた。

つまり、楽勝かつ早期決着とタカをくくっていたのは、あたしとミサトだけだった訳で、軍略に関して大した才能がないと、バレてしまった事になる。

ミク「普通こういうのって、岡目八目とか言わない？　それがお姉ってば、当事者より気楽なんだもん」

そして、こういう事をしでかした時は、決まってミクにいびられるというオチ。

ちなみに、ミクはミサトを絶対にいびらないので、あたしだけが攻撃を受ける。　ミクなりに遠慮しているらしいけど、なら、遠慮されないあたしの立場はどうなるのよ！

ケイ「補給中の強襲を警戒しろ。　直掩ＭＳを出せ」

帝国兵「はっ！」

そして万全の態勢を敷くケイさん。　艦隊から、何機ものハイザックが飛び立って行く。

レイ「ついにと言うか、やっとと言うか、自前のＭＳ隊を編成された感想はいかがですか？」

そうだった。

このハイザックはみんな、マーガレットで製造された機体なのよね。
　２ヶ月にも渡ったレイ大尉の指導が実って、まだペースはゆっくりなものの、ＭＳが造れるようになった。

新型ＭＳはまだ先になりそうだけれど、それが実現する日もきっと来る。　そんな期待をあたしに持たせるのに、十分なだけの技術が、マーガレットには根付きつつあった。

マヒロ「これもみんな、レイ大尉のお力添えがあったからです」

レイ「そんな事はないですよ」

少し照れた表情のレイ大尉。

ミク「そんなコトあるって。　みんなレイちゃんのおかげ。　だから、お礼にお姉のザク3あげるね？」

マヒロ「そうです。　ぜひあたしのザク3を…

…

…

…って、えぇ～～～～？！」

つい、あたしは絶叫してしまう。

マヒロ「ちょ、ちょっとミクっ！　なに勝手に、あたしの専用ＭＳをプレゼントしようとしてるわけ？！」

ミク「だって、いらないじゃん」

『いらない』

たった４文字で言い切られた。　理由すらなし。

ミク「レイちゃんがＮＴ専用ＭＳに乗れば、戦力になるし、研究素材としても、すごく役に立つと思うよ？」

言ってる事は間違っていない。

ＮＴ専用ＭＳは数が少ないから、あまり目にする機会はない。　量産型キュベレイに乗ったというレイ大尉も、よくよく話を聞いてみると、数回乗った経験があるくらいで、専用機として支給されていた訳ではなかった。

レイ「…そ、それはありがたいお話ですが、さすがに…」

ただ、常識人のレイ大尉は、かなり対応に困っている。　ＭＳはふつうに考えて、『あげる』『ありがとう』で済む品物ではない。

ミク「だから、『いらない』物だし。　サイコミュって帝国内でも機密扱いだから、なかなか触らせてもらえないでしょ？　本国には、お姉が隕石に突っ込んで自爆したって言っとくから、遠慮しなくていいよ？」

何が遠慮しなくていいのか、まるで意味が分からない。

マヒロ「そんなにあげたいんだったら、あんたのをあげればいいじゃない！」

あたしは抗議してみたんだけど…。

ミク「あ、それ無理。　だってあたしのあげちゃったら、ミズサワの戦力がダウンしちゃうし。　それに、本国に損耗理由を説明できないから」

自分を戦力と言い切ったわね？

マヒロ「だいたい、あたしだと理由が自爆でＯＫって…」

ミク「今までにした、お姉の自爆回数と状況、全部暗記してるケド、発表してもいい？」

マヒロ「…げっ！」

まさに死の宣告。　天才の記憶力が、この時ほど悪魔に思えたことはない。

マヒロ「持ってけドロボー！！！」

レイ「あ、ありがとうございます…」

思いっきりドン引きしている大尉に、ザク３を押しつけるみたいに

なった。　しかもあたしは、本国に偽の始末書を書く羽目に。
唯一の救いは、レンカで研究素材としても使われる事になったあたしのザク３が、新型ＭＳの開発に大いに役に経ったらしいこと…。

【４】

ミクの横暴が炸裂している間にも、航行補給は順調に進んでいた。
ただし５０隻補給ともなると、やはり時間はかかる。

ケイ「今のうちに、専用ザクごとあちらの母艦に戻っておくといい」

レイ「そうですね。　その方が手間が省けますよね」

今回、レイ大尉があたしの艦隊に乗っていたのは、霧雨大佐の所に帰参させるためだった。　レイ大尉がいてくれれば、あたしは心強いけれど、元々大尉は、霧雨大佐の側近なのよね。

レイ「いろいろお名残惜しいですけれど、もう行きますね？　ザク、

本当にありがとうございます」

マヒロ「あんなやり取りで驚いてしまったと思いますが、大尉に専用ＭＳを差し上げるのが、惜しい訳ではありませんから。　それぐらい、大尉はミズサワに貢献したのですよ」

あたしはそう言って微笑んで見せた。　その微笑みは嘘じゃなかった。

レイ「それでは、またどこかでお会いしましょう。　その時は、マーガレットで造ったＭＳに乗って来てくださいね？」

レイ大尉の専用ザク３（元はあたしの）がカタパルトから飛び出して行く。　戦場で使う事はほとんどなかったとは言え、いざなくなってみると寂しい気もする。

ケイ「…相変わらず、よくできた姉妹だ」

ミサト「ほんとお嬢って、物に執着しないわよね？　口ではいろいろ言うけど、結局最後はこうなるんだから」

侍従の２人は言った。

けれどあたしは、相変わらずとか、結局どうなるのとか、そんなのどうでもよかった。　ただ、あげるべき時には物を惜しまないようにと、ミズサワの母に言われた事を思い出しただけ。

マヒロ「さってと、補給はまたまだ時間がかかるのよね？」

ザクを見送ったあたしは、ケイさんを振り返る。

ケイ「早くて1日だな」

マヒロ「その間に、襲撃ってあると思う？」

ケイさんが警戒しているようだから、参考に聞いてみた。

ケイ「補給に齟齬を来せば、侵攻そのものが難しくなる。　また、補給作業に気を取られ、何かの隙ができる可能性もある。　相手に艦隊を正面から撃退する力がない以上、少しでも弱い所を狙ってくるだろうな」

ケイさんの分析に、油断はない…。

【5】

???「あっらま～　いっぱいいるザンすね？」

???「いつになったら殺していい？」

???「まだザンす。　あっしがイイって言うまでは、食べちゃダメザンす」

???「フン…」

やけに陽気な男と、どこかで見たような、冷たい目をした男。　ここは、どこかの暗礁宙域のようだが…？

ザキラ〔エージェントX。　首尾はどうか〕

遥か地球から、脳量子波が届く。

キサナドゥ〔順調ザンすよ？　ですがボス？　ミーは戦っちゃイケないってのが、気に入らないでっす〕

陽気な男…　エージェントXキサナドゥの方は、ちょっとだけ不機嫌なようだ。

ザキラ〔…今回は事故だ。　お前は、Wの宇宙戦闘試験を行っていたが、試験中暴走し、敵味方関係なく攻撃を始めてしまった。　ただの事故なのだ〕

キサナドゥ〔了解ザンス。　ボスも悪いコザンすね～〕

それだけ言って、脳量子波通信は途絶えた…。

【6】

ジェイソン「ザキラ様」

何かを言おうとするジェイソンだったが…。

イエスマン「おっとストーップ。　その先は言わない方がいいと思いますよぉ～？」

だがイエスマンが、先手を打って言葉を封じた。

ザキラ「今日の議会、まさか聞いていなかったのか？　あの霧雨という大佐、裏で独自に新型ＭＳを開発しておるらしい。　議会の許可も得ず、勝手に軍備を拡張するのはけしからん。

そんな不逞の輩には、天罰が当たっても仕方がないとは思わぬか？」

ザキラがニヤリと笑った。

周囲…　ことに本国の理解を得ないまま、私兵を増やすのは懸念材料だし、程度によっては違法だ。

だがそれは、帝国内での法律と礼儀の話であって、天罰とは何の関係もない。　つまりザキラは、天罰と称して、これまた勝手に制裁をくわえる気なのだ。

ジェイソン「…は……」

主人に引き返す気がない悟ったジェイソンは、この日結局、それ以上の進言をしなかった…。

【7】

補給を始めて、6時間余りが経過した。

その間は、ミズサワと霧雨が交替で直掩を担当した。　艦隊は補給を終わった艦から隊列を組み直しているけれど、基本的には身動きが取れない。

霧雨「補給中の警戒が半分で済むだけでも、随分楽になるね」

あたしの艦に立ち寄った霧雨大佐は、そんな事を言った。　あたしにしたら羨ましい大艦隊だけれど、維持するには別の苦労があるのだろう。

マヒロ「そう言ってもらえると嬉しいですね。　攻略の方はどうですか？」

霧雨「まあまあ、かな？　被害覚悟で突っ込めば、半日で制圧できると思うけれど、こんな所で霧雨の兵を失いたくないしね」

霧雨の兵、そういう言い方が少し引っ掛かった。

たとえミズサワであれ、霧雨であれ、兵はみな帝国本国から配属されるのが建前だ。

ただし貴族によっては、そんなランダムに近い配属を嫌い、本国に細かい文句をつけたり、領地でかなり大規模に、志願兵を募集する家もあると聞いている。

霧雨家がそういう家だったかどうか、あたしは知らなかったけれど……。

帝国軍下士官「お話し中ですが、反応ですっ！　艦隊正面に１００

機を越えるＭＳっ！」

警報が鳴り響き、ブリッジ…　いや、艦全体が慌ただしくなる。

マヒロ「１００機以上もいるの？！」

霧雨「どうせ、ダミーも含んでるんだろう？　割合は分かるかい？」

即座に応じた霧雨大佐は、それは敵の欺瞞と断じたらしい。　やはりあたしは、少し置き去りにされている。

帝国軍下士官「半分以上はダミーだと思いますよ？　ミノフスキーをわざと撒かずに、反応だけを増やしていると思われます」

霧雨「…そう。　話はここまでのようだね。　マヒロ、下のカタパルトを借りるよ？」

マヒロ「…え、ぁ…　ど、どうぞ」

さりげなく呼び捨てにされた。　緊急時にそんな事を気にしてしまうあたしは、やっぱり弛んでるのよね？

マヒロ「補給作業中止よ。　それから、援護のできる位置に艦隊を移動させて！」

帝国軍下士官「了解ですっ！」

あたしは気持ちを切り替えると、まずそんな命令を下した…。

【8】

ヴァイス「ミイラ取りがミイラになっちまわないように、気を引き締めていかないとな…」

ヴァイスが呟く。

帝国の大軍は見慣れている彼だったが、５０隻以上の艦隊を相手にする事は稀のようだ。　返り討ちに遭うかも知れない強敵だと、ミイラに例えて嘆息する。

海賊「…で、兄貴？　次はどうするんですかい？」

訊いてきたのは、レアルタが面倒をみていた海賊のうちの1人だった。　彼らのうちの半分をレアルタが直接率いて、残りはヴァイスの近くに置いた。

特に気に入ったとか選んだ訳ではなく、乗っていたＭＳの機種で分けただけだ。

ヴァイス「派手に暴れて敵さんを呼ぶ。　だが、ヤバそうになったら逃げる。　それだけだ」

海賊「そんなんでいいんですかい？」

あまりに単純な作戦だったので、さすがの海賊も意外そうな顔をしていた。

ヴァイス「隙を見て、反対側からレアルタが突っ込むさ。　それに第一、お前らに複雑な作戦やれって言っても、どうせできないだろうが」

海賊「あっちゃー。　バレてやしたか」

自分達を悪く言われて、笑える神経を疑いたくはなるが、そういう細かいところを気にしないのも、寛容のうちかも知れない。

それに、無理な事は無理と割り切る判断力。　海賊風情ではあったが、ヴァイスとレアルタが、マシな方だと判断した理由だった。

ヴァイス「…大型艦か…。　マゼランも戦艦には違わないが…」

ヴァイスはその海賊たちを率いて、ダミー群の中から辺りを探った。
　率いている以外にもＭＳの機影は見えるが、それ以上近づいて来る気はないらしい。

勝ち馬に乗れれば良し、駄目なら逃げる構えの連中で、そんな風見鶏を、ヴァイスは端から相手にしていなかった。

海賊「兄貴？　どうせなら、あのバカデカいのにしやしょうぜ？」

そう言われた先を見ると、一際大きな戦艦が、こちらに向かって来るのが見えた。　グワダン級であり、確かにその大きさは遠くからもよく目立った。

ヴァイス「あのなぁ…。　ちょっとは自分の腕前と相談してから、物を言えよ」

だがそれを無謀と断じたヴァイスは、眉間に皺を寄せる。

海賊「いや、下手くそは下手くそなりに、頑張って支援するから。
　でも、突っ込むのは兄貴な？」

笑顔で言われた。　実力に聡過ぎるのも、別の意味で問題があるようだ。

ヴァイス「…お前なあ…。　と言いたいところだが、まあいいか。
　フェニックスナイツの恐ろしさ、見せてやるよ」

海賊「よっ！　さすが漢だねぇ！」

海賊が軽口を叩く中、ヴァイスが信号弾を上げる。　煌々と輝くそれを背に、急造部隊は攻撃を開始した…。

第６２章　イノセント・システム（前書き）

（ラピスラズリの解説？　は続く）

セブンス「インドラでナンバーワン。　ついでに　★世界でも人気ナンバーワン★　のラピスラズリで～す」

フォルナ「今回も、勢力の秘密を暴露してしまいますよ。　それでは現地のナイル特派員～」

ナイル「やっと出番かよ？　じゃ、さくっと秘密を暴いてやるぜ。　まずはこの写真を見るんだ」

セブンス「…何か、小さくて見えづらいよ？」

ナイル「…実は、この霧雨のレンカはな～　何か秘密を隠してるって噂だ。　さすがの俺でも、ここまで近づくだけで精一杯だったん

だ。　だが…」

フォルナ「何かしら？」

ナイル「俺の目は欺けないぜ。　このＭＳ、他のＭＳに比べて随分小さいし、なんか光る盾を持ってるようだ。　こっちのは、大きさはふつうなんだが、何かスイッチを入れると、灰色の機体がヤケにカラフルになりやがる」

セブンス「お、ナイル、スクープだな？　つまり霧雨は、新型ＭＳを着々と開発してるんだな？　艦はどうだ？」

ナイル「そっちもバッチリだぜ。　こりゃ間違いなく新型戦艦だ。帝国も持ってない艦を、独自に造っているらしい」

フォルナ「霧雨は帝国の貴族なのに、帝国軍にないはずのＭＳや艦を造っている…。　これは面白いわよね」

（ラピスラズリの暴露は続く…）

第６２章　イノセント・システム

グリフィン「ふぬっ！　せい！　せいっ！」

何やら激しい息遣いが聞こえるのは、ＭＳファイター達が身体を鍛えるためのジムからだ。

機械であるＭＳに乗るために、体力は関係ないと思われがちだが、実際は動きに伴うＧや、被弾や転倒の際に衝撃から身体を守るため、他の兵科と同じくらいのトレーニングは当たり前だった。

もっとも、グリフィンのトレーニングメニューを覗いて見ると、片手腕立て１００×１０（左右）とか、腹筋２００×２０とか、スクワット３０００回／１日など、驚異的な数字が並んでおり、彼が最早人間を辞め、化け物に転職したのがよく分かるが…。

范「やってるな？　そして相変わらず、脳味噌まで筋肉で出来ているようだな。　上等上等」

上等と言いながら、けして褒めているようには聞こえない。　ただし、言われたグリフィンはいたって上機嫌だ。

グリフィン「ローレシアの親父殿が言っていた。　今度の機体は、ＭＴ（モビルトーレスシステム）搭載機らしいな？　ならば、身体は鍛えておいた方がよかろう。

明日からはメニューを2倍に増やそうかと、迷っておったところだ」

ＭＴシステムとは、パイロットの動かした動きそのままに、ＭＳを動かすシステムのことだ。　このシステムは、ＭＳを自在に動かせる反面、パイロット自身の肉体面を酷使するため、帝国軍では不採用となっていたが、どうやら中国では違うらしかった。

范「ああ、ボルトガンダムのことか。　代金は預かってるから、次のファイトから使ってもらって構わんぞ？」

グリフィン「済まぬな。　出世払いなどで」

范「それは俺には関係ないな。　俺は、ちゃんとローレシアの旦那から金を貰っている」

どうやらこれが、昔グリフィンが恩義を施したという、ローレシア夫妻の恩返しのようだった。　新型ＭＦ１機分、おそらくは何百万ギラもするだろう代金を、出世払いでポンと貸すあたり、よほどグリフィンに感謝していたのだろう。

グリフィン「本当に、あの親父殿の豪気さには恐れいる。　ところで…」

グリフィンは訓練の手を止めると、范に1冊のファイルを見せた。

グリフィン「我輩の次の対戦相手だが、聞いた事のない名前なのだが…。　多くのファイターにＭＳを売ってるお前なら、何か知っておるかと思ってな？」

事前に情報収集など、肉体派のグリフィンには似合わないと思われがちだが、こう見えて、彼も怪盗ヤタガラスの一員。　サコンほどではないだろうが、知略や情報戦も意外に巧みなのだ。

ただし、作戦立案がやや自分本位で、

『ここには警備兵が３０人詰めているが、躍り込んで殴れば突破可能だ』

などと作戦を立て、０．５秒でサコンに却下されたことがあるとかないとか…。

范「お前のような奴には、天敵かも知れんぞ？　そいつは、帝国軍の予備役少佐らしい。　活躍し始めたのはお前がヨーロッパに行ってからだが、俺が見る限りじゃ、かなりの曲者だな」

強いと言わず、范はその対戦相手を曲者と言った。　その真意は何なのだろう？

范「そいつの対戦成績を見てみろ。　３５戦して２２勝、１３引き分けだ」

グリフィン「…1回も負けておらんのか？　予備役だけに、手堅さの光る老練な相手のようだな」

ふつう予備役と言えば、ある程度の歳になるか、現場でミスをやらかした者が飛ばされることが多い。　いわゆる現役引退であり、それだけにグリフィンは、老練な士官を想像したのだが…。

范「老練？　とんでもない！　そいつはいつも濃いサングラスをかけているから分かりにくいが、たぶん３０にはなっていない。　しかも２２勝の半分くらいは、開始5分以内の圧勝劇だ。　まるで手堅くなんかないぞ！」

対戦の何割かを、５分で決めてしまう実力の持ち主。　しかし一旦相手が強いと知るや、思い切って勝ちを諦め、引き分けに持ち込む、ずる賢さを持ち合わせていることになる。

范がこのブレンドをして、強いと言わずに、曲者と言った理由も分かる気がする。

グリフィン「それは油断できぬ相手だな。　よし、では今日からさっそくメニューを3倍にして、万全を期すとしよう！」

彼なりに意気込んでいるようだが、やはりその考えは理解できない。

范「…まったく、何でそういう結論になるのか分からんが、まあいいか。　ボルトガンダムは、徹底的に脳筋仕様にしておいてやる」

とにもかくにも、決戦の日は近い…。

【2】

先の不正ファイト事件で、まさかの勝利を飾ったゴトー。

彼らは、ファイトマネーと大穴チケットの配当金、さらに中国政府からの報労金を貰って、一躍大金持ちになっていた。　そんな傭兵団が、旧式のグフやザクを愛用していると知るや、そこにたくさんの商人たちが押し掛けていた。

商人Ａ「おっと、旦那方。　たしかにグフやザクは名機だが、そろ

そろ買い替えの時期だとは思わないかい？」

商人Ｂ「性能がいいＭＳは、やっぱ乗り手を選ぶぜ？　うちのＭＳたちは、あんたらにこそふさわしい」

商人Ｃ「うちのＭＳはお買い得！　今なら2割…　いや、3割引きでいいあるよ！」

商魂逞しいのは、中国の伝統なのだろうか？　頼みもしないのに押し掛けた連中は、盛んに自分の扱うＭＳを喧伝し始める。

ゴトー「…うるさいから、放り出せ」

そんな喧騒さに、早くもゴトーは苛ついていた。

ミア「ですが隊長。　傭兵稼業を続けるなら、高性能なＭＳはあっても困りませんよ？　まさか、大金が手に入ったから　『この金で一生遊んで暮らすんだ』　なんて言い出しませんよね？」

命懸けの傭兵稼業は金になるとは言え、今回ほどの大金は、なかなかお目にかかれない金額ではあった。　ゴトーが志の低い男であれば、安穏な日々を求めてもおかしくはない。

ゴトー「馬鹿な事を言うな。　とりあえず、俺はイフリートを直し

て乗るからいい。　お前らは好きなＭＳを買え」

そして商人と話したくないからでもあるまいが、ゴトーは自らの乗機をイフリートと決めているようだ。　細工づくめのイフリートだったが、それを外した今では、普通の白兵戦向きのＭＳに戻っている。

ジルド「マジかよ、隊長？　やっほー！！」

それを聞いたジルドは、歓声をあげる。　すぐに商人たちがジルドを取り囲んだ。

そして他の３人も…。

ネロ「このボルノークサマーンは偵察ＭＳですから、なかなか買い手が付かないんじゃないんですか？」

ミア「私は、隊長の支援さえできれば…。　メリルはメガライダーにするの？」

選び方はそれぞれながら、次々と新しいＭＳを決めていく…。

【3】

ＭＳ選びの結果、ゴトーはイフリート。

ジルドは百式。

ネロはボルノークサマーン。

ミアはガンダムＭＫ－２。

メリルはメガライダー。

と、それぞれ新しい機体に乗り替える事になった。　メリルの乗機がＭＳではなくなるなど、今までの役割分担が、よりはっきりした形だ。

ジルド「この黄金の輝きは、俺様にぴったりだろ～」

金色は、初期の耐ビームコーティングの色なのだが、たぶんそれとは違った意味で、百式を選んだジルドは満足気だ。　しかも、何に使うつもりなのか、セットでメガバズーカランチャーまで買っていた。

ネロ「…ジルド。　いくら隊長がいいって言ったからって、無駄遣

いが過ぎませんか？」

自分の特性を活かすべく、売れ残りのボルノークサマーンを安く買っていたネロは、渋い顔だ。

ミア「文句を言う気はないけれど、いま手元にあるお金だけじゃ足らないわ。　銀行にお金を準備してもらわないと…」

同じく、悩ましげな表情のミア。　巨額のファイトマネーゆえ、いきなり全額を現金でもらった訳ではなかったのだ。

しかもジルドは、振り込みや分割払いにすればいいものを

『男は現金ナマ一括だぜ！』

と、余計な大見得まで切ってしまっていた。

メリル「…ジルド…。　女教皇の逆位置…」

頼まれもしないのに、タロットを引くメリル。　意味は残酷と身勝手だから、ほぼ当たっているというオチ。

ジルド「だぁ～！　うるせぇよ！！　隊長は何でもいいって言ったんだから、何でもいいんだよ！　文句があんなら、自分でもすっげぇＭＳ買えばいいだろ！」

ジルドは意地になったらしく、絶対に百式を買う構えだ。

諦めたのか、ミアはエレカをザンジバルから降ろし、メリルと一緒に銀行に向かうようだ。　メリルはゴトーと一緒にいたそうだったが、肝心のゴトーは、イフリートの調整で忙しそうにしていた。

ネロ「…隊長が、自分はイフリートで我慢して予算を割いてくれたのに、それでも足らないなんて…」

ネロは嘆くが…。

ゴトー「ネロ。　イフリートはそんな理由で乗る訳じゃない。　それよりも、ちょっと来れるか？」

ゴトーは、イフリートで我慢した訳ではないと語り、用があるのか、ネロを呼んだ…。

【4】

イフリートの機体の修復は、完全に終わっていた。

それはイフリートに、ゴトーのB3グフのパーツがかなりの数、流用できたためだ。　それだけに、細かなチューニングがしやすく、原型機よりも性能が向上している。　つまり用事は、修理の問題ではないのだろう。

ネロ「…なんです、隊長？」

呼ばれたネロが、ゴトーの操作していたPCを覗き込む。

ゴトー「こいつ積んでる　『イノセントシステム』　ってヤツなんだが、どんなのか知っているか？」

ゴトーがネロに示したのは、このイフリートが積んでいたプログラムの一種のようだった。

ネロ「ロックされていますね？　パスワードは分からないんですか？」

ゴトー「それどころか、誰が何のために積んだシステムなのかも分からない。　あの男から聞き出せないかとも思ったが、あいつ自身が知らなかった」

つまり、不正ファイトに使われるための物でもないようだ。　というか、ずっとロックされたままで起動した形跡がない。

ネロ「分かりました。　少し待ってください」

その言葉通り、しばらくすると画面にＯＫのサインが出る。　どうやらネロは、持ち前のハッキングで、そのロックを解除できたようだったのだが…。

ネロ「…駄目ですね。　ロックの解除はしましたが、実際に発動させるには、もう１つ、特殊なキーがいるみたいです。　たぶん、起動すればＭＳの稼働限界、ギリギリの性能を引き出すシステムだと思うんですが…」

ジルド「そんなシステムあるのかよ?!」

話に割り込むジルド。　百式の時でもわかるように、ＭＳの性能などの話には興味があるようだ。

ネロ「…あくまで、たぶんですけどね…。　自律プログラムと密接にリンクしてますし、強制的にリミッターを解除する、別のシステムにも似ています。　同じイフリートを母体にした、イフリート改に近いですね」

ゴトー「ＥＸＡＭシステムの改良型か?」

さすがに歴戦のゴトーだけあって、そういった知識はあるらしい。

ちなみにＥＸＡＭシステムとは、耐ニュータイプ戦闘用に開発されたシステムで、ニュータイプ並の桁外れた動きを可能にするというシステムだった。　ただし、実戦に投入された事はなかったはずだが…。

ゴトー「これは、ますます面白くなりそうだ」

ゴトーは、そう言って笑みを浮かべた。

金のため金のためと口では言うゴトーだが、実際には違うことに興味を示すことが多い。　傭兵たちの間では、ごく当たり前のことだ。

ネロ「時間はかかると思いますが、強制解除プログラムを組んでみます。　何か、システムに関わる情報があれば、助かるんですけどね…」

他人を助ける事はあっても、あまり助けを求めないタイプなネロにしては、珍しい部類の発言だ。

ゴトー「情報だと？」

ネロ「はい。　そもそも使われている言語が、帝国語じゃないんですよ。　共和国やインドラの言葉も試しましたが、それとも違うようです。　下手をすると、もっと昔の言葉かも知れません」

さらに悩ましげな表情を浮かべる。　もの静かではあるが、すべてを計算づく、かつ自信に満ちた態度行うことの多い彼が、行き詰まりを露呈するのはかなり稀だ。

ジルド「けどよ？　昔っつったって、ＭＳが開発されたのは５、６０年前だろ？　イフリートならたしか…　って、とにかくＭＳのない昔によ、ＭＳに乗せるための物がある訳ねぇだろう？」

ジルドの指摘は一理ある。

ネロ「そうでもないですよ？　プログラム自体はＭＳ開発以前から存在していて、それを流用した可能性もあります。　あとは、極秘のプログラムを守るために、わざと昔の言葉を使ったのかも知れません」

ジルド「なんだそりゃ？」

ゴトー「……。」

ジルドは訳がわからないといった顔つきで、他方ゴトーは、何やら考え込んでいるようだったが…。

ゴトー「ネロ。　時間の空いた時でいい。　解析を続けてくれ。俺は俺で調べてみることにする」

ネロ「はい、隊長」

ゴトーはやはり、システムへの興味を捨てきれなかったようだ。
そしてネロもまた、新しい仕事を快諾する。

こうして謎のプログラム『イノセントシステム』は、謎のまま存在し続けることになった。

ネロは、データの複製や機体からの分離も試みたようだったが、分からない部分が多すぎたし、プログラムが自動で消去されてしまうのを警戒して、結局イフリートに積んだままになった…。

第６３章　銀行強盗（前書き）

（暴露はまだ続いていた…？）

セブンス「また会ったね？　インドラで１番カッコイイ！」

フォルナ「＆可愛らしい」

２人「もちろん　★世界でも最強にカッコ可愛い★　ラピスラズリで～す」

フォルナ「今回もさっそく秘密をバラしてしまいますね！　現地のシクス特派員～」

シクス「はい、シクスで～す。　今、私は月に来ています。　ここでは、帝国本国の助けがもらえないので、とっても困っているらしいんだけれど…？」

オードリー「ああ、声は変えんでよいからの？　この際バシっと言ってらんといかんわ」

シクス「は、はい…」

オードリー「本編にもあったがの、月は長年、巨大な刑務所扱いされておったのじゃ。　それはもう酷い有り様での」

シクス「そうなんだ…」

オードリー「じゃから、私が月に左遷された貴族を代表して、独自のＭＳを作れるまでに発展させたのよ。　だから、月で造られているＭＳや艦船は、本国にはない型式が多い。　なにせザキラの奴と来たら、あれこれ理由をつけては、新型の設計図を寄越しおらんからの」

シクス「頑張ったんですね…」

オードリー「そう言うてくれるか？　ならば、特別に造っておるＭＳと艦を見せてやろう。

まず艦じゃが、本編で出てきたアーガマ級に加えて、アイリッシュ級も持っておる。　さらに近々、ネェルアーガマ級も造りたいと計画しておる」

オードリー「次にＭＳじゃが、ジム３とリックディアスがもう完成しておる。　さらに新型のＭＳまでには、まだ時間がかかるであろうが、開発の手を緩める気はないぞ」

シクス「でも、勝手に軍備を増強して、本国は怒らないんですか？」

オードリー「それか。　私はどっかのコーディネイターの若造とは違うわ。　本国の元老院には袖の下を贈ってあるから、そこらは大目に見るであろう。

何より、私には強い後ろ楯がおるからの！　それでは、私の活躍をその目に焼き付けておくがよいわ！」

シクス「は、はい。　以上、月からお伝えしました～」

シクス「うぅ…。　おばさんばっかりで、あたしが目立ってないよぉ～」

（続く）

第６３章　銀行強盗

？？？「俺の右手は光って猛る。　貴様を潰せと煌めき咆える…。

必殺っっっっ！！

シャイニングフィンガァァーーー！！！

ゆけぇぇぇぇ～～～～～い！！！！！」

相手ファイター「ぬおぉぉぉ～～！！」

シャイニングフィンガーをモロに食らった相手ＭＳは、頭部が吹き飛び、誰の目にもわかる形で勝利が決まる。

というより、頭部をわざと狙ったという感じで、間違えてコックピットを直撃すれば、相手ファイターごと消し飛ばしてしまいかねない一撃だった。

実況「もはや、お伝えするまでもないでしょっっうっ！

勝者はリョーマ・サオトメ！　エンペラークラスの名に恥じない圧勝でしたっ！！！」

戦いの終わりを告げるゴングが鳴り響き、レフリーＭＳが、シャイニングガンダムの右手を高らかに掲げさせる…。

観客が熱狂の渦にある中、次のファイトに出場予定のグリフィンは、ボルトガンダムの最後の調整に余念がなかった。

そして対戦相手は、例のブレンド・エスプレッソ。　ＭＳはＳ（スペリオル）ガンダムだ。

グリフィン「貴殿が、対戦相手のブレンド殿か。　よろしく頼む」

グリフィンは、濃いサングラスをかけた若い男に声をかけてみた。

ブレンド「どちらかが死ぬという訳でもないしな。　まあ、気楽にいこう」

そう返したブレンドの声は、とても落ち着いていた。

しかし開口一番に、互いに死なないと口にするあたり、どこか異様ではある。　もしかしたら予備役に退く前に、生死が紙一重の激しい戦いを切り抜けた経験があるのか？

ブレンド「…と思ったが、その前に余興をやるそうだ。　私はこういった事も嫌いではないが、お前も出るか？」

何を言っているのかと思ったが、よく見るとブレンドの左耳には、何かイヤホンらしき物が付けられていた。

そして、ブレンドの言葉を裏付けるように、場内に放送が流れ出す。

本部放送「ＭＳファイト、参加者全員に通達するっ！　こちらは大会本部である！　たった今、シセン銀行が強盗に襲われたとの一報があった。

繰り返す！　ＭＳによる銀行強盗事件が発生したっ！

闘技場にいるファイターは直ちに出撃し、警察に協力、速やかに罪人共を鎮圧せよ！！　なお…」

さらに放送は続いていたが、すでにブレンドはその場にいなかった。
　情報はそれで十分と考えたらしく、Ｓガンダムを起動させると、闘技場を飛び出して行ってしまったのだ。

グリフィン「さすがは分離可変型ＭＳ。　いきなり飛んで行くとはな！

…と、感心しておる場合ではないか。　我輩も急がねば！」

グリフィンのボルトガンダムや、他のファイターのＭＳも後に続く。
　よく聞いてはいなかったが、強盗を捕えた者には、政府から報労金が出るらしい。　だから、目の色を変えているファイターもいる。

グリフィン「シセン銀行の場所は…。　ＭＳで金庫ごと持ち去ろうとするなぞ、盗賊として美しくないな！」

とかく忘れられがちだが、グリフィンもまた、立派な怪盗ヤタガラスの一員である。

その彼には、力に任せて奪う事を選んだ犯人たちが、酷く安易に思

えたらしい。　怒りを露にしながら、銀行を目指して駆け出して行く…。

【2】

ブレンド「…賊は…　8機か。　賊にしては、数を集めた方だな」

Sガンダムを分離させたまま、早くもシセン銀行上空に達したブレンド。　いきなり急降下すると、外を見張っていたらしいドムに、ビームを直撃させる。　しかも、コックピットを的確に撃ち抜いていたので、周囲への被害はなかった。

強盗A「ひっ！　警察…　いや、いきなり空軍が来やがった！」

Sガンダムは、分離させれば2機の戦闘機としても運用できるから、空軍が来たと間違えられても不思議ではない。

強盗ボス「慌てんじゃねぇ！　計画通り、人質を取るんだよっ！　わざわざ昼間に来た意味がねぇだろうが！！」

ボスの言葉からする限り、どうやら強盗が人通りの激しい時間を選んだのは、計算づくだったらしい。

そして強盗は、銀行に来ていた客を人質にすべく、小学生くらいの子供を連れた女性客の手を掴むや…

…逆に捻り上げられていた。

さらに、顎下に肱打ちを入れられ、近くにいた仲間も、股間を蹴られてうずくまる。

強盗B「何しやがる！」

ミア「それはこっちのセリフだわ！　いきなり銀行にMSなんか乗りつけて、何のつもりよ！」

強盗にとって、予想外の不幸な出来事だった。　人質に取ろうとした女性客は、よく見れば、たまたま銀行に来ていた傭兵団のミアだったのだ。

女性ながらに、傭兵の一角を形成するミアである。　並みの強盗ごときが、到底敵う相手ではない。

強盗ボス「だがなぁ～？　そこの気の強いね～ちゃん！　つまらねぇことしくさるのも、ここまでなんだよっ！！」

メリル「……う…　…」

ミアの動きが止まる。

なんと強盗のボスは、ミアが戦っている隙に、メリルを捕まえ、その頭に銃を突きつけていたのだ。

ミア「ひ、卑怯な…」

強盗C「はん？　卑怯って誰のことかなぁ？」

ミアに股間を蹴られた強盗が、その仕返しとばかりに、ミアの頬を殴りつけ、さらに腹部にも一撃を見舞う。

ミア「…くぅっ…」

まともにやり合えば、負けるはずのない相手なのだろうが、メリルを人質に取られた今、ミアは強盗達にされるがままだ。

強盗ボス「他の奴等もよく見やがれ！　ガキを殺されたくなかったら、大人しくしなっ！！」

強盗の叫び声が響き、周囲に駆けつけ始めていた警官隊や、ファイター達のＭＳの動きが止まる。

ブレンド「…人質か…。　残るは６機。　安全を確保して戦える数でないな」

警察の通信を傍受していたブレンドも、事態を知るや、Ｓガンダムを合体させて地上に降ろす。　別のドムを倒した他のファイターも、やむを得ず銀行から離れた。

強盗ボス「よし！　今のうちに、金庫をかっさらえ！！」

ボスの檄が飛ぶと、強盗達は、アッグのドリルで地面を掘り始めた。
地下にある金庫を掘り出し、丸ごと持ち去る気らしい。

ブレンド「賊ながら、ＭＳの特性をよく理解しているな…」

ブレンドは感心しているような、考えているような風だったが、その間にも着々と作業は進む。　けして短い時間ではなかったが、メリルが人質に取られているから、みな動きが取れないのだ。

しかも悪い事に賊のボスは、自分のドワッジの手でメリルを掴み、ＭＳの胸の高さまで持ち上げてしまった。　これでは、握り潰された場合はもちろん、何らかの方法でドワッジを破壊した場合も、メリルが巻き添えになってしまう可能性が高くなった…。

【3】

ジルド「隊長っ！　いるかっ！！」

大声を上げて飛び込んで来たジルド。

ネロ「…何ですか？　騒がしいですね」

ゴトーとネロは、ずっとイノセントシステムを解析する作業を続けているようだった。

ジルド「騒がしいのは当たり前だぜ！　緊急事態なんだよ！！」

ジルドはそう言うや、部屋のＴＶをつけた。　そこに映し出されたのは、掘り出し作業を続ける強盗達の姿と…

…人質にされたメリルの姿！！

ゴトー「メリルっ！！！」

今度は、ゴトーが血相を変える番だった。

大きな音を立て…　いや、もはやテーブルを叩き割りかねないほどの勢いで手をつくと、すぐさまイフリートに乗り込む。

ゴトー「ネロっ！　ジルドも行くぞっ！　場所はどこだっ？」

ジルド「ば、場所？　た、たしかシセン銀行だって…」

それだけ聞くと、ゴトーのイフリートは道を駆け出して行ってしまう。

その様子は常軌を逸したもので、駆け込んだジルドの方が、逆に呆気に取られてしまうほどだった。

何しろ、メンテのために繋いでいたケーブルや固定用のワイヤーを全部、外さずに叩き切ってしまうほどだったのだから。

ネロ「ジルドも行きますよっ！　百式も動けるんでしょう？」

ジルド「あ、ああ…」

ボルノークサマーンも後を追う。　しかしジルドは、ゴトーの様子に圧倒されたのか、百式に乗り込むまでにしばしの時間を要した…。

【4】

銀行襲撃から、３０分ほど経った。

２つあった金庫は掘り出され、強盗達のエアリーズの背中に載せられているところだった。　どうやら、金庫担いだまま、空を飛んで逃げる気らしい。

時間が経ったせいで、周囲の交通は遮断され、メリル以外の客は避難を終えていた。　ミアは避難させようとした警官に抵抗したが、生身でＭＳに抗する方法があるはずもなく、避難指示に従う他なかった。

ゴトー「メリルっ！！！」

イフリートで駆け付けたゴトーが、メリルを見つけ呼び掛ける。

メリル「…　…　ッ……！」

メリルもまた叫ぶが、辺りの喧騒さにかき消されて聞こえない。

強盗ボス「はっは～　そのイフリートっ！　てめぇ、このガキの知り合いらしいなっ！　こいつを助けてほしいかっ？」

メリルを心配して、外部スピーカーで叫んだのを聞かれたのだろう。
強盗ボスのドワッジから、同じくスピーカーで叫び声が上がる。

ゴトー「てめぇ！　メリルに手を出したら許さねぇ！　バラバラに切り刻んで、鮫のエサにしてやるっ！！」

強盗ボス「そいつはたまんねぇなぁ？　だが、それ以上1歩でも近づいてみろ？　このガキ握り潰すぞっ！！」

メリルを人質に取られているのだから、いくら叫ぼうと、無駄な足掻きだった。　むしろ、ボスはそんなゴトーをからかっているように見えなくもない。

ブレンド「そこのイフリート。　叫んでも問題は解決せん。　知り合いならばなおさら、人質のため冷静になれ」

ブレンドのSガンダムが、イフリートに接触回線で話し掛けるが…。

ゴトー「黙れっ！！！」

ゴトーはブレンドの言葉を聞く気もないようだ。　周りに聞こえてしまう外部スピーカー回線のままで、ブレンドを怒鳴りつける。

ブレンド「…こいつは戦力にならんな。　ボルノークサマーンと、ボルトガンダム…」

ブレンドは、後ろに下がるふりをしながら、今度はネロとグリフィンに回線を繋いだ…。

【5】

警官隊に代わり、中国軍のユニオンフラッグが集結していた。　さらに１０機近いのファイターＭＳがおり、数だけ見れば、全部で６機の強盗達にとても勝ち目はない。

しかし彼らの手には、切り札のメリルがいた。

ゴトー「てめぇら…」

ゴトーがいくら怒りをたぎらせても、眼力でＭＳを破壊する事はできない。　そしてついに、金庫をエアリーズに載せ終えたらしい強盗達は、さらなる行動に出る。

強盗ボス「道を空けろっ！　ガキを殺されたくなければなっ！！」

ドワッジが胸どころか頭の上にまで、メリルを掴んだ腕を掲げる。

中国軍のユニオンフラッグが、道を空けた。

ブレンド「それでも、いい具合に目立ってくれてはいるな。

ボルノークサマーン。　ドワッジまでの腕…　いや、肘までの精確な距離が知りたい。　測れるか？」

ネロ「…何をする気ですか？　まあ、測るぐらいなら…。
距離が１３３メートル。　高さは地上から２６メートル。　誤差はセンチ単位ですね」

ブレンドの要求に、とりあえず応じるネロ。　偵察用ＭＳだけあって、そのセンサー精度は群を抜いていた。

ブレンド「では、奴らの動きを封じるぞ。　ボルトガンダム。　貴様は縛る趣味か、縛られる趣味はあるか？」

妙な聞き方をするブレンド。　しかし、意味はグリフィンに通じたらしい。

グリフィン「どちらかと言えば、鎖は断ち切るか、引き千切るクチだがな？　とにかく、動きを封じればよいのだな？」

ブレンド「そうだ。　引き倒してしまっては、人質に危険を及ぼす。　ついでに、奴らを刺激しない程度に、気を引いてもらえると助かる」

ゴトー「この野郎っ！」

まだ動けないゴトーを尻目に、金庫を担いだエアリーズが、宙に浮き始めた。

強盗ボス「じゃあな、あばよっ！　…な、なんだ？」

グリフィン「…お、おおっと、我輩としたことが、足の上にハンマーを落としてしまった！　これは痛いっ！」

グリフィンがそう『外部スピーカーで』呻く。地響きに、強盗たちが一瞬動きを止め、そちらに視線が集中した…。

…その直後、何もないはずの場所から、ビームが放たれた。

ゴトー「ビームだとっ！　誰だっ！！」

強盗ボス「何っ？！」

２人が続けざまに叫ぶ。

そして、不意を突かれたボスは対応できず、放たれた２本のビームに、ドワッジの肘関節を両側から捉えられ、焼き切られてしまう！

その発射地点をよく見ると、そこにあったのはインコムか？！

ブレンド「…現在高度っ、落下まで推定時間！　受け止める際のショックを最大限緩和っ！　バーニアの噴射による被害範囲を計算っ！！」

ＭＳの操作をオートにし、ブレンドはただ要求項目だけをＳガンダムに打ち込み続ける。　Ｓガンダムはスマートガンを捨て、前方に飛び出した。

ゴトー「メリルっ！　今…」

ブレンド「計算のジャマだっ！　不確定要素を作るなっ！！」

同じく、切り離されたドワッジの腕に飛びつこうとしたイフリートを、何とブレンドは、追い抜きざまに横へと突き飛ばしてしまう。

そうしながらも、見事に空中で切り離されたドワッジの腕ごと、メ

リルを両手で丁寧にキャッチしていた。

ブレンド「人質は確保したっ！！」

ブレンドが叫ぶ。

強盗ボス「てんめぇ！！」

グリフィン「では、巻き込まない程度になっ！」

Sガンダムの機体、ギリギリの所を鎖が伸びる。

先のハンマーを外してあるので、ドワッジの機体は潰れたりせず、絡め取られただけだ。　爆発もしなければ、倒れて震動が起きた訳でもない。

しかしドワッジの自由だけは、確実に奪っていた。

ブレンド「やるな！　注文以上の出来だ。　ん？」

強盗E「こんのやろ～！！」

しかしまだ、強盗全てを鎮圧した訳ではなかった。　ドムが1機、

Sガンダムにマシンガンを向けた。

ブレンド「弾片、空薬莢すら、生身には堪えるからな」

そんなドムに、Sガンダムは片腕を向ける。　何か白い物が、ドムの手とマシンガンに、ねっとりと張り付いた。

他のファイター「トリモチか！　お前、宇宙にいた事が多いのか？」

そんなことを言いながらも、ファイターたち…

いや、軍のユニオンフラッグまでもが、一斉に強盗達に飛びかかっていた。

動きを封じられた2機はもちろん、重い金庫を背負うエアリーズ、ドリルしか持たないアッグに、抵抗の手段はほとんどなかった。

ちなみにトリモチは、本来、宇宙空間での空気漏れを応急で塞ぐため装備だが、機体に張り付けば、MSは相当動きづらくなる。　マシンガンなどは、正常に動かなくなるため、射てなくなるのだ。

ブレンド「急造とは思えない連携だったな。　これは、あまり敵に回したくない相手と当たってしまったようだ」

グリフィンをそう持ち上げつつ、ブレンドは無事保護したメリルを、軍のユニオンフラッグに引き渡す。　メリルは、用意されていた救急車に乗せられ、近くの病院に搬送されるようだ。

ブレンド「さて、めでたく人質強盗も解決した。　諸君の協力に感謝…」

ゴトー「誰がめでたくだっ!!」

纏まろうとしていた状況に、ただ1人待ったをかけたのは、先にブレンドに突き飛ばされたゴトーだった。

そのイフリートは、たくさんのガラス片やら、コンクリート片にまみれていた。　どうやら突き飛ばされた勢いで、隣の高層ビルに突っ込んでしまったらしい。

ブレンド「なんだ、まだいたのか？　人質は病院に搬送されるようだぞ。　行ってやらなくていいのか？」

ブレンドの言葉に邪気はない。　たぶん、心の底からそう思ってい

るのだろう。

…だが…。

ゴトー「あのやり方は何だっ！　メリルにもしもの事があったら、どうするつもりだっ！！」

イフリートが、Sガンダムの肩に手をかける。　その様子は、どう見てもメリルの無事を共に喜んでいるようには見えない…。

【6】

メリル「…パパ…」

恐怖がまだ消えないのか、メリルはゴトーから離れようとしない。

しかも、言葉遣いがいつもと違うような…？

けれど、重い空気の原因はメリルではなかった。

ゴトーは、現場でブレンドのSガンダムに掴みかかったばかりでなく、それ以降も執拗に付き纏い、ブレンドを解放しようとしないのだ。

ブレンド「…貴様もしつこいな。　人質の少女もこうしてすぐに退院できた訳だし、民間人への被害も最小限。　何が問題なんだ？　まさか貴様が、銀行の再建の心配をするとは思えんしな」

事実、メリルは検査こそしたものの、擦り傷以外何も負ってはいなかった。　ＰＴＳＤとは診断されたが、それはあの状況では仕方あるまい。

ゴトー「貴様っ！　自分が何をしたか、まだ分かっていないようだなっ！」

『また』大声を上げる。

こんな有り様に、最初は警察も熱心に仲裁をしてくれたが、ついに呆れて帰ってしまったくらいだった。　だから今は、当人たちを除けば、傭兵の３人とグリフィンしかこの場にはいない。

ブレンド「これで説明は5回目だが、一応言っておく。　さっきの救出は、奇跡で無傷だった訳ではない。　私が無傷である確率が最も高い方法を選んで実行し、事実そうなったに過ぎない」

ゴトー「確率の問題かっ！！」

どう見ても、納得したようには見えないゴトー。　確かにブレンドの説明は、感情を逆撫でするような言い方ではあるが…。

ブレンド「…やはりそう来るか。　ならば、少し本質を語ってやるとしよう」

ブレンドは、睨めつけるゴトーにまるで臆する風もなく、大胆に語り始めた…。

【7】

ブレンド「くだらん予想だが…。　もしかして貴様、その少女に何かしら負い目があるのではないか？」

ゴトー「なっ！」

ゴトーはブレンドに掴みかかろうとし、グリフィンに止められる。

ブレンド「だからこそ、私が少女を助けたのでは、貴様にとって都合が悪かったのだろう？　初めはただプライドが高いだけかとも思ったが、それにしてはしつこすぎるからな。

それも、貴様の心の内の負い目を晴らすためには、見事少女を助けたという、勲功が必要だったと解釈すれば納得がいく」

聞いたゴトーが暴れる。

抑えているのが怪力のグリフィンでなければ、とうに弾き飛ばされているだろう。

ブレンド「もし違うと言うならば、なぜ素直に少女の無事だけを喜べない？　誰が助けようと、少女は無事だったのだ。ふつうならば、少女を抱き締め、泣く場面ではないのか？」

言ったブレンドの顔は、嫌味っぽくは見えなかった。むしろ眉をひそめ、やれやれとでも言いたげな顔つきだ。

ブレンド「だが、１つだけ慰めておいてやる。　私も己の心に曇りがあったなら、それを他人にぶつけてしまうだろうな。

そこが私は、男の限界だと思っている。　女ならば己の心がどうあれ、まず子供を想う気がするな…」

それだけ言うと、ブレンドはゴトーに背を向けた。

そして何も言わないまま、ただ歩みを進める。

ゴトー「くっ！！」

さすがにゴトーは、ブレンドを追いかけはしなかった。　足元のメリルが、泣きながら首を振っている。

グリフィン「…あやつは、物事の本質を語り過ぎている。　だから、殴りたくなる気持ちはよく分かる。　だが今は、殴るより抱きしめてやる時であろう？　それだけは同感だな」

言ったグリフィンが、メリルに手を伸ばす。　だが、メリルは余計に泣き出してしまった。

グリフィン「なんと！　我輩の抱擁は要らぬのか！」

わざとらしい言葉遣いだったが、本気でしょげかえっているように見えなくもない。

グリフィン「…ではな。　娘を大切にしてやるのだぞ」

グリフィンも少し寂しそうな顔をして、その場を歩み去って行く。

その場が急に静寂に包まれた。

ジルド「隊長。　俺もあのブレンドってヤツは、殴るべきだったと思うぜ。　だけどよ、その前に聞かせて欲しいんだ。　隊長が、そんなにメリルにこだわる訳をよ…」

僅かな間の後、一連のゴトーを不審に思ったからでもあるまいが、ジルドがそんな問いかけを発した。

しかし聞かれたゴトーは、彼らしくなく、目線を下に逸らした…。

第６４章　メリル（前書き）

（あれ？　誰もいないけど…　置き手紙？？？）

セブンス（書）「インドラ一　★世界でも一番気が利くラピスラズリ★　は本編の邪魔はしないんだよ」

マヒロ「…よく分かってるじゃない…」

（本編が佳境の時は、冒頭文はお休みにする決まりになりつつある…？？？）

第６４章　メリル

ソファーにゴトーが座る。

ジルドや他の２人もそうするが、メリルだけは、泣き疲れて眠ってしまっていた。

…と言うより、メリルが眠るのを待っていた、と言う方が正しいようにも思える。

ゴトー「あれはもう、１０年以上も前のことだ。　あの時も俺は、今と同じように傭兵をしていた…」

ゴトーの話によると、その頃の傭兵団には、ネロもミアも、もちろんジルドも…　まだいなかったらしい。

当時、名宰相と言われたユギンが死んだせいで、帝国に対する反乱が各地で起きるようになっていた。　そのせいか、傭兵を必要とする勢力も多かったらしい。

ゴトー「その時、俺と組んでいたのが、マリアだった…」

マリアは、ゴトーのよきパートナーであると同時に、最愛の人であったと告げる。

ゴトー「だがある日、マリアは帝国軍に連れ去られてしまったんだ。俺は、八方を手を尽くして探した。

もちろん1人でじゃない。　当時の傭兵仲間たちも協力してくれたし、他にも手伝ってくれた人間は数え切れない。　中には、帝国軍の将軍がいたくらいだからな？」

ジルド「帝国軍に連れ去られたのに、帝国の将軍が探したのか？」

ジルドが呻く。　たしかにふつうに聞く限りでは、矛盾した内容だった。

ゴトー「その時の俺は知らなかったが、それくらい厄介な出来事に、マリアは巻き込まれていたんだ」

ゴトーらしくない、酷く深刻な表情。

ミア「マリアさんって、優秀なニュータイプだったんですよね？」

話を聞いたことがあるのか、ミアが一言付け加える。

ゴトー「そうだ。　そして奴等の狙いは、表の世界では存在しないはずの、ＮＴを材料にした人間兵器の開発だったんだ。　俺が３年の月日を費やして、ようやくマリアを発見した時には、マリアはもう、人間として生きられる状態じゃなかった…」

告げられた真実は、あまりにも悲しかった。

ゴトー「…俺は…。　俺は、この手でマリアを射った。　研究所の、しかもカプセルの中から出られすらしない状態で、マリアが生き続けたいと願っているとは、俺にはどうしても思えなかったからだ」

引き裂かれた最愛の人間を、自らの手で葬り去らざるを得なかったゴトーの心中は、いかばかりであったのだろうか？

ゴトー「俺は、マリアをそんな風にした連中を許すつもりがなかった。　だから、研究に関わった人間を皆殺しにして、研究所も叩き

壊そうとした」

ジルド「……ッ…。」

ジルドが生唾を飲み込む。　その音が、やけに大きく感じた。

ゴトー「…だがそんな時に、俺は1人の女の赤ん坊を見つけた。
研究所にいた奴を締め上げたら、その赤ん坊が、生体兵器そのものだと言いやがった…。

NTの血を引いた子供を、兵器として物心つく前から戦いを教え込む。　そのために何かしていたし、これからもするつもりだったらしい。

まあ、それが何だったのかは知らん。　なぜなら、聞き出す前に、俺がそいつを殺してしまったからな」

諦めたような笑み。

笑うと言うより、もうそれしかする事がないと言えそうな雰囲気。

ジルド「…もしかして、その時の赤ん坊が…」

ゴトー「メリルだ」

告げられた秘密。　それはあまりに…。

ゴトー「おかしいと思わなかったか？　ジルドが俺の傭兵団に入った時、メリルはまだ9歳だった。　にも関わらず、ふつうにＭＳを動かしていただろう？」

ジルド「……っ！」

ジルドが息を飲んだ。

ミア「私の時は3歳でしたが、どんなに泣いていても、ＭＳに乗せると笑ってくれましたね。　あんな巨大な機械を見たら、ふつうの子供は泣きますよ」

ゴトー「俺にもよく分からんが、知り合いの医者に見せたら、強烈な掘り込み教育がされていると言われた。　なんでも、メリルの目には、ＭＳが母親に見えるらしい」

ジルド「そんな馬鹿な…」

絶句するジルド。

いや、ジルドでなくとも、ふつうの人間にはまともに聞いてはいられない話だった。

ゴトー「ここまで言えば、もう分かっていると思うが、メリルは俺の実の子じゃない。　そればかりか、マリアがふつうに身籠った子供ですらない。

だが俺は、メリルをマリアの子供としか思ったことはないし、マリアもまた、メリルを自分の娘だと思っていたはずだ…。

だからメリルは、誰が何と言おうと俺の娘だし、そう思って育ててきた…　…だが…」

ゴトーのあまりにも哀しい顔。

ゴトー「…メリルは、ＭＳに乗った時しか笑わなかったんだ…。俺にはメリルを、ＭＳに頼らないで、満たしてやることはできなかったんだ…」

ネロ「それで、メリルをＭＳに？　私はてっきり、メリルがパイロットとして優秀だからなのだと…」

ゴトー「それもある。　だが、メリルをＭＳに乗せた本当の訳は、『俺が』メリルの泣き顔を見たくなかったかだ。　泣きじゃくるメリルにせがまれ、ＭＳの動かし方を教えた。

結局俺は、研究所にいた奴等と、同じ事をしてしまったんだ…」

ゴトーは恥じるように俯いた。　それが彼が、メリルを抱き締められない理由なのだろうか？

ゴトー「…俺は、メリルを生体兵器として育ててしまった…。　泣き止むから、笑ってくれるからと、理由をつけてはＭＳに乗せ、メリルを人殺しにしてしまった…」

ゴトーの目から、一筋の涙が零れ落ちる…。

ジルド「だ、だけどよ？　俺が見る限りじゃ、メリルはそんなに、ＭＳに乗りたがってるようには見えないぜ？　メリルっつったら、まずタロットだろ？」

ジルドの言葉に、まずミアが目線を悲しげに足元に向けた。

ミア「あのタロットは、マリアさんの形見なのよ…。

私が隊長に初めて会った頃、隊長はメリルに、女の子らしい物は何でも買ってあげていたわ。　人形、可愛い洋服、絵本に楽器…　けれどメリルは…」

ゴトー「そんな物には、まるで見向きもしてくれなかった。　そんな日々が何年も続いて、俺はすべてを諦めかけていた…。

今でも忘れもしない。　あの日、どこからかマリアの形見のタロットを持ち出して来たメリルは、すごく楽しそうに笑っていた。　意味も分からないはずのカードを、何回もめくっては伏せ、めくっては伏せて…。

そう。　メリルを人間にしたのは俺じゃない。　マリアの…　死んでもなお、自分の娘を想う、マリアの気持ちなんだよ…」

ゴトーはそう自分を恥じて、話を締めくくったのか…。

【2】

ゴトー「これが、俺とマリアと…　メリルにまつわることの全てで、ジルド流に言うなら、こだわる理由だ」

おそらくゴトーにとって、メリルとは『こだわる』などという言葉では表せないぐらいの存在なことは間違いない。

たがゴトーは、メリルに何もしてやれなかったと思っている…。

ジルド「…隊長。　つまんねぇ事聞いて悪かったな…。　だが、1つだけ言わせてもらっていいか？」

ジルドは、思い切ったように口を開いた。

ジルド「…俺は…。　隊長やマリアさん、メリルのようなことは何もない。　家に帰りゃお袋がいて、夜になれば親父が帰って来る。　飯にも不自由したことはないし、問題っつう問題はなかったんだろうな…」

ジルドは代わりとばかりに、自分の生い立ちを語り出す。

ジルド「そんな当たり前の幸せが、今にして思えば、何が不満だったんだろうな？　ただ刺激が欲しくて家を飛び出した。

…俺は今でも、傭兵になったことは後悔してない。　だが、あの時黙って家を出ずに、お袋と親父に、せめて気の効いた一言ぐらい言ってやれなかったかとは思ってるよ…」

ジルドが目を伏せた。

その仕草を意味するものは、もしかして…？

ジルド「俺の場合はよ、悪いのはみんな俺さ。　だから、俺が何て言われようと仕方ねぇ…。　だがメリルは…」

ジルド「だが、メリルはよぉ…」

言葉に詰まったのか、ジルドは同じ言葉を繰り返す。

ジルド「ああ、俺は頭が悪いから、言葉が出てこねえよ！　隊長っ！　世の中には、産んだかも知れねぇけど、親として最低の奴はいくらでもいやがる！　逆に俺みたいに、最低のガキだってな！

それに比べりゃ、隊長もメリルも、すっげぇ立派な親子じゃねぇかよ！　肩肘張ってねぇで、抱き締めたら何かマズいことでもあるのかよ？　頭撫でてやるだけじゃなくってよ、もっとこう、全身で受けとめてやっちゃマズい理由でもあるのかよ？」

ジルドもまた、自分の気持ちをうまく制御できなくなったのか、声を荒立てながらも、目は潤んでいた…。

【3】

ミア「私が隊長と初めて会ってから、もうすいぶん経ちますよね…。隊長はその間に、メリルに

『パパだよ』

って言ってあげたこと、あるんですか？」

ミアの口調は沈んでいた。　それが既に、問いの答えを告げていた。

ネロ「私が思うに、ですが、子供ってもっと単純な生き物だと思います。　血とかＤＮＡとか、生まれた経緯とか…。　難しいことなんて、勝手に大人が考えているだけなんだと思いますよ？

メリルはＭＳが母親なのかも知れませんが、それなら隊長は父親。
　きっとそう思っていますよ」

ジルドやミアだけでなく、ネロまでもが、ゴトーの顔をじっと見つめた。

ゴトー「…お前ら…」

ゴトーの呻きとも呟きとも取れる声が、波紋のように辺りに広がる。

メリル「…ん…　…パ…　どこ…」

その時、メリルが微かに呟いた。

起きているのか、寝言なのかもわからないくらい朧気ながら、手をかざし、ゴトーの姿を探し求めているのか？

ゴトー「……。」

ゴトー「……。」

ゴトー「……。」

ゴトー「…メリル…。　パパはここにいるから…　ずっと一緒だから…　安心しておやすみ」

メリル「うん。　ありが…う、…パパ…」

メリルが、再び寝息をたて始める。　気を使ったのか、ジルドたちは物音1つたてずに、席を立った。

そしてゴトーは、そのままずっと、メリルの寝顔を見つめ続けていた。

ゴトーを知る者ならば、彼に何があったのかと思ってしまうであろうぐらい、優しい表情で…。

第６５章　親しき仲には策謀あり？（前書き）

（佳境は終わったから再開）

セブンス「１回休んでリフレッシュ♪」

フォルナ「今回も、インドラ一明るく朗らか　★もちろん世界でも一番明るい少年少女★　ラピスラズリです」

セブンス「で、今回なんだが…」

フォルナ「今回はインドラのレポートなので、特派員はいません。だって、私たちの国ですから」

セブンス「それでさっそく、インドラのＭＳなんだけど…」

フォルナ「私が言うのもなんですけど、あんまり強くないかな？だって、ドムやドワッジ、ゲルググ、ギャン…　みんな帝国が昔使ってたＭＳばかりだもん」

セブンス「インドラって、地味に貧乏で遅れてるからな。　ＭＳも凄いのは造れないし、ぶっちゃけ、質より量ってか？」

フォルナ「…何かきっかけがあれば、もっと強くなれるはずなんですけどね？　それなり資源も採れますし、特に人の数には困ってませんから」

セブンス「…ただ、今思ったんだけど、インドラはこれじゃないとマズ気がしてきたな」

フォルナ「…なんで？」

セブンス「だってな？　インドラがいいＭＳを造れたら、僕たちラピスラズリも、いいＭＳに乗っちゃう訳だ」

フォルナ「ふんふん」

セブンス「つまり、あっという間にインドラが勝っちゃって、物語が終わっちゃうだろ？」

フォルナ「…あ、そうか。　ハンデだったのね」

（結論はそれでいいの？！）

第６５章　親しき仲には策謀あり？

空を舞う白いガルダ。

しかしその一室で、心配そうな表情のメリャーナが佇む…。

軍医「…どちらも、死んではおらんよ。　とりあえずはな」

ベットに横たわっているのは、先の脱出劇で１人犠牲になった、シベリアだった。

被害という意味なら、他にも死んだレジスタンスはいただろうし、恋人と引き裂かれた形になった、エヴァニーとサヤリもそうだと言える。　だが、その中でもシベリアの意地は、極めて印象的であったと言っていい。

メリャーナ「…そういう容態なのは承知しております。　それを前提に、少しでも助かる可能性が高い方法を…」

軍医「姫殿下の無理には、幼少のみぎりより、ずいぶん付き合わされたがの。　今回ばかりは、慰めることもできん。　この男が今後どうなるかと聞かれれば、このまま植物状態を続け、いつか死ぬ。　現代医学で考えれば、そう結論せざるを得ないのじゃからな」

白髪ばかりになった軍医は、そう言って重苦しい表情をした。　歳で最前線の軍務を退いてはいたものの、代わりに豊富な経験を持つこの軍医をしても、シベリアの容態はまるで好転していなかった。

酷い出血性ショックに加え、銃弾の当たり所が悪く、しかも弾片が体内に残っていて、はっきり言って、即死していないのが既に奇跡だったのだ。

メリャーナ「……。」

そして、メリャーナが沈痛な表情をする理由は、もう1つあった。

軍医「…儂の専門は獣医学ではないが、それでも厳しいのが分かるような病状じゃな。　他人…　こやつの場合、猫じゃが…　のことは言えんが、歳をとれば、生き物はみな死ぬようにできておる。姫殿下には申し訳ないが、安楽死を勧めるしかないわ」

メリャーナ「……っ！」

メリャーナが口をハンカチで押さえる。　目は、今にも涙が溢れそうだった。

マリー「ワグナーは、メリャーナ様の幼少の頃からの愛猫です。何とかならないのですか？」

マリーがメリャーナの代わりに言うが、軍医は静かに首を降った。

軍医「…15歳なんじゃろ？　猫にしては、天寿を全うした方じゃよ…」

もう死んでしまったような言い方をしたのがまずかったのか、メリャーナは部屋を駆け出して行ってしまった…。

【2】

窓の外を、無言で眺め続けるメリャーナ。　その表情は、シベリアの時とは違い、ただ悲しみに沈むだけだった。

それでも、黒海に駆けつけたあの日の夜。　ガルダに帰ってきたメリャーナが、泡を吹いて突っ伏していたワグナーを見つけた時より、かなり落ち着いた方なのだ…。

カトラス「行けっ、王子様っ！」

パンドラールの秘密研究所で、怪しげな薬を打たれたというカトラスだったが、記憶を失っていた事以外に、変わったところはなかった。　そしてこういきなり、サコンの背中を押してみたりもする。

サコン「カ、カトラス？！」

メリャーナ「…何かご用ですか？」

カトラスの声が聞こえていなかったのか、メリャーナは突き飛ばされたサコンに、こんな事を言ったりした。

サコン「え、えとですね…。　…あの猫をお飼いになられて、長いんですか？」

かける言葉に窮したサコンは、とっさにそんな事を口にしていた。

メリャーナ「…ええ…。　ワグナーは私の9歳の誕生日に、ある貴族の方から献上して頂いた猫でして…」

サコン「…猫を献上ですか？」

意外な答えだった。　少なくともサコンは、生き物を贈ろうと思ったことはない。

メリャーナ「『皇女殿下ほどの御身分になられると、気安く人を呼んだり、街へ出掛けたりもできず、淋しい時もおありでしょう』なんて言われた方がいましてね。　そんな心配などなされなくても、優秀な兄たちがいましたから、私はそれほど束縛される身ではなかったのですけれど…」

メリャーナが9歳の時なら、皇子と皇女がみな生きていた頃だ。兄3人に姉1人。　これだけの人間がいて、後継がどうのという話には、ふつうはならない。

サコン「けっこう気ままでいらした…　いや、その言い方はまずかったかな？」

すぐにサコンは、自分の言葉のまずさに気がついたが、メリャーナ

はその言葉を聞いて、逆に微かな笑みを覗かせた。

メリャーナ「気ままと言うと、すぐマヒロの話になりがちですが、私だって好きでこうしているのではないのですよ？」

そう言ったメリャーナの顔から、悲しみは消えていなかったけれど、それでも気が紛れるかと、サコンは話を続けた。

サコン「そのマヒロって方は、どんな方なんですか？」

言ったサコンに、メリャーナは意外そうな顔をする。

メリャーナ「サコンはたしか、宇宙の出身でしたよね？　表敬訪問で来ませんでしたか？　グワダン級に座乗した、濃い茶色の髪をした子です」

覚えがあるような、ないような気がした。　サコンは、ネグレストでは外交官…　高級官僚の息子だから、謁見を許されない身分ではない。

サコン「え、ええと…」

メリャーナ「悩むようなら、たぶん会っていないんですね。一度会ったら、忘れられないタイプの子ですから」

サコン「はい？」

メリャーナの言葉に、サコンは一瞬、ポカンとした顔になってしまう。

サコン「会ったら忘れないと言うからには、一目でわかるような特徴をお持ちなんですか？　それとも他に…」

メリャーナ「そうね…」

少し悩んだようなメリャーナの顔から、いつの間にか悲しみが消えていて、悪戯っぽい笑みを浮かべていたように見えたのは、気のせいだろうか？

メリャーナ「…一度会ったら忘れられないくらい、美人なのかもね？」

カトラス「じゃあ会っていても、今は上書きされてるから、思い出すのは無理だな。　そうだろ？　サコンっ！」

サコン「ええ…　…えぇっ？！」

突然、話に割り込んで来たカトラスに、サコンが目を白黒させる。
さすが怪盗ヤタガラスの一員だけあって、気配を消して近づくのが巧い。

メリャーナ「へぇ…　上書きですか。　つまり今のサコンには、世界で誰より美しいと感じるような、お相手がいるんですね。　盗賊だけに、女の心を盗むのもお上手なのかしら？」

サコン「あ、そ、それはですね…」

何故かしどろもどろになる。

そんなサコンは、一言文句をいってやろうとカトラスを探したが、これまた本領を発揮して、僅かな間に姿を消してしまっていた…。

【3】

結局メリャーナは、シベリアの後送を手配し、同時にワグナーを看取る覚悟を固めたようだった。　こうなると、とかく尾を引きがちな男に対して、女性は強い気がする。

マリー「帝都には、私の部下だと言って送ることにします。　そのままレジスタンスとして送っても、十分な治療を施されるとは思えませんから…」

マリーは、ちょっとだけ苦い表情をしていた。

メリャーナ「かも知れないわ。　最近の帝国は、レジスタンスに対してやたら感情的だし。　昔なら、恩義を施したように見せかけて、逆に利用しかねなかったもの」

言葉は利用と言ったが、メリャーナは、あまり悪意を込めた言い方をしていなかった。

サコン「…帝国得意の切り崩しですか？」

メリャーナ「ふふ。　切り崩された側の感想を聞いてみるのも、面白いかも」

言葉には、当事者しかわからない含みがあった。

６０年程前の帝国統一戦争で、サイド２ネグレストは、開戦早々に宇宙連合から帝国へと鞍替えをして、戦後、見事に自治権を勝ち取っていたからだった。

他にも、サイド６マーガレットは、戦争半ばで宇宙連合を離脱し、それなりの立場を得た。　逆に、最期まで抵抗したサイド７レンカは、関係者がみな逮捕されてしまい、領主に赤の他人の霧雨家を迎えざるを得なくなった。

ただし肝心のネグレストは、６０年の間に、機を見る目を失っていたらしい。　５年前にその逆をやろうとして、世界に存在しない国になってしまったのだ…。

サコン「…その事は、聞かないで頂けると助かります。　しかし、かつての教訓を活かそうとは思ってはいますけれど？」

メリャーナ「そうこなくてはね？　今度はどんな知略を授けてくれるのかしら？」

メリャーナの言葉が、そのまま真意だった訳ではあるまい。　しかし、そうおどけるメリャーナ姿が、気を許した人間にしか見せない１コマなことも間違いではない。

サコン「宰相は…　ザキラは、何が一番都合が良くて、何が一番都合が悪いのか、考えてみればいいんだと思いますね。

それには、相手の立場に立って考えることです。　いつの時代も、他人の気持ちを推し測れなくては」

そんな語り口調に、メリャーナがくすりと笑う。　相手を欺く策を考えるのに、相手の立場に立つとは、まるで見当違いの言い方に聞こえたからだろう。

サコン「仮に帝国が、華々しく勝ったとします。　連戦連勝で、世界を再び統一したと」

そんなメリャーナに構わず、サコンは語り始める。

サコン「そうした場合、ザキラと皇女であるメリャーナ様は、共に歴史に名を残す英雄ということになります。

しかし、それは国民の目線であって、ザキラにしてみれば、メリャーナ様を排除する機会を失います。　戦後もまた、影での主導権争いが続くだけです」

サコンは一旦言葉を切る。

サコン「逆に、帝国が負け続けたらどうか？　滅んでしまえばもちろん、あまりに酷い状況になれば、無能と言われて失脚しかねません。　つまり、勝っても負けても、実はザキラにとって都合が悪いんですよ」

マリー「…では、引き分けた場合は？」

勝ち負けが駄目ならと、当然の質問が入る。

サコン「引き分けと言うより、今のまま戦い続けるのが、一番無難です。　戦う場がある限り、ザキラは必要とされるでしょうし、適当な理由をつけてはメリャーナ様を戦場に赴かせ…　その戦死を狙う事ができます」

メリャーナ「私が戦死ね…」

複雑な表情で笑うメリャーナ。

ちなみにメリャーナは、サンザメヤでラピスラズリに襲われていたから、あながちあり得ない話でもなかったのだ。

サコン「ですから、ザキラにとっての最高のシナリオは、国民に人気の高いメリャーナ様が戦死し、その恨みを晴らすべく戦ったザキラが勝ち、ただ1人、生きた英雄になる…。　といった感じじゃないでしょうか？」

マリー「ここ最近のメリャーナ様のお立場を考えれば、それを狙われていたフシはありますが…」

納得できる話も、実際に言われるとショックではある。

メリャーナ「けれど、そこまで読んでいるからには、ザキラが一番都合が悪い時も考えてあるのよね？」

しかし、そこでめげないのがメリャーナの個性でもあった。　悲痛な話を聞き、かえって期待を高めているようだ。

サコン「都合が悪いのは、メリャーナ様が帝国以外で力を持つことです。　帝国内で力を持つ事も不味いことですが、それは潰せない事はない。　ですが、メリャーナ様が帝国とは関係ない所で持った力は、ザキラにはどうしようもない…」

サコンの策は、ついにその全貌を現す…。

【4】

サコン「具体的に言います」

サコンは短く言葉を切るや、メリャーナを真っ直ぐに見据えた。

サコン「旧クアルーンを平定します。　ただし、いくばくかの不安を残したままで。　また、フロンティアガードをあえて打倒せず、和睦する。

これでメリャーナ様を動かしにくくなります。　メリャーナ様だから維持できる土地、そうできれば理想ですね」

これが完全勝利ならば、先にサコンが言ったように、メリャーナが帝都に呼び戻され、暗闘が続くだけ。

けれど、呼び戻したらその土地を失いました、となれば、『ザキラだけ』の負けだ。

『せっかくメリャーナ様は勝ったのに、ザキラが後任を誤り、勝ちをふいにした。　そのままメリャーナ様に任せておけばよかったものを』

と、当然口しがない者たちは言うだろう。

サコン「ザキラのエージェントを、研究所で手に入れたリストを元に調べました。　みな戦う力は、どんな軍の歴戦のエースも敵わない…　はっきり言えば、人間の域を越えていましたよ。

けれど、内政統治のできる人間が決定的に足りていない。　例外は、エージェントのJ、あのジェイソンと、同じくY、イエスマンですが、あの2人を割けば、今度はパンドラールが政治的に手薄になってしまいます。

つまりどちらを選ぶにしても、リスクが極めて高い。　ならば、メリャーナ様を領主として留任させる方が、まだましなのです」

メリャーナ「そして、領主でいる間に、その土地で力を増せと言うのね？」

メリャーナは、その先を考え始めているようだった。　シュバルツもそうだったが、1を聞いて、2も3も悟る人間は、話していて心地良い。

サコン「それからは成り行きになりますが、シュバルツ中佐が留任し続けてもらえれば、いくらか助けは期待できますね。　あとは、インドラには手出しをせず、ザキラにすべてを押し付けてやりましょう。　他にはマリンピアを…」

詳細な策はまだ続いていたが、すでに骨幹は決まったも同然だった。

こうして、人気という片側の翼しか持たなかった姫君は、力というもう片方の翼を手にすべく、動き出し始めたのだ…。

第６６章　不死鳥と共に翔べ（前書き）

（今回の紹介は…？）

セブンス「すでに定着、紹介コーナーだよ」

フォルナ「今回もインドラで１番仲良し、もちろん　★世界でも一番のチームワークを誇る★　ラピスラズリがお伝えしますね～」

セブンス「それじゃ、共和国に行ってるノン特派員～」

係員「…お客様、１６歳からは大人料金になりますので、２０ギラ頂きます」

ノン「え～　聞いてないよ～。　こんな事なら、顔は同じなんだし、別のコってことにすればよかった～」

係員「…不正入場は困ります」

ノン「しょうがないなぁ…。　フォルナ？　これ、インドラ軍の経

費で落としといてね？」

フォルナ「いいけど…。　でも、何で工場見学なんかしてるの？」

ノン「だって、わざわざ潜り込まなくても、この国はＭＳ工場が一般公開されてるんだもん」

係員「はい。　軍備は皆様の税金で整えている訳ですから、ある程度自由にご覧頂けるようにしています。　また、いざという時に共和国は大丈夫なんだと、国民の皆様にご安心して頂く目的もありますね」

セブンス「…ずいぶん開放的だね？」

ノン「民主主義の国だからかな？　とりあえずこれが…」

係員「ストライクガンダムに、メリクリウスとヴァリエイトでございます。　詳しくは申し上げられませんが、ストライクガンダムは新世代のガンダムとして、あらゆる場面に対応できる能力を備えています。

また、メリクリウスは防御面で、ヴァリエイトは攻撃面で、従来機を圧倒する能力を備えております」

ノン「はい質問で～す。　この３機は全部、どちらかと言えば、エース仕様の機体ですよね？　量産されているＭＳは何なんですか？」

係員「はい。　国民の方にすでに親しまれているのが、こちらのストライクダガーになります。　このＭＳでも、帝国のハイザックやガルスＪに対抗できますが、さらに高性能なＭＳとして、１０５ダガーや、ロングダガーなども開発しました。　帝国の量産ＭＳにも、決して劣っておりませんので、共和国は安泰ですよ」

ノン「…共和国は凄いＭＳを持ってるから、帝国も気安く手を出せない、と…。　分かりました。　ありがとうございました～」

（なんて平和的な紹介なんだ）

第６６章　不死鳥と共に翔べ

煌めく信号弾の光。

それをじっと見つめているのは、もう１機の紅いＭＳ…　リックディアス。

レアルタ「合図だ…。　お前ら、覚悟はいいか？」

レアルタの前に並ぶのは、８機のＭＳ。　ゲルググＢ型とザク２のＲ―２型。　どちらもたいして新型ではないが、高機動がウリの機体だ。

海賊Ａ「…マジ…　なんだよな？　この数で何十隻もいる真っ只中に、飛び込んで行こうなんてよ…」

レアルタ「何だ？　ビビったのか？　お前ら、大事なモンが２つもついてんだろうが！」

レアルタはそんな風にからかうが…。

女海賊「残念だけどそれ、セクハラだよ？　それにあたしは、そんな邪魔くさいモンぶら下げてないしね」

レアルタ「ああ、問題ない。　代わりに、胸にでっかいモノが２つついてるだろ？」

女海賊「…おいおい…。　２つついてりゃ、何でもいいのかい？　まあ、いいさ。　野郎共、ここまで来たら逃げようたって無駄さ。　あの世に逝くか、一旗揚げるか、２つに１つだ。　気合い入れていくよっ！！」

海賊たち「おうっ、姉貴っ！」

女海賊「つ～訳で、あとは指揮官殿の説明だけだよ？」

その女海賊は、レアルタの役目をきれいに奪い去り、海賊たちに檄を飛ばした。　苦笑いするレアルタ。

レアルタ「作戦なんて立派なモノはねぇさ。　機体がバラバラになる一歩手前のスピードで、あちらさんの艦隊を飛び抜けるだけだ。　とにかく脚を止めるな！　ビビって止まれば、確実に死ぬ。　反対に死ななきゃ、適当に射ったって、１隻くらいは沈むさ。　何せ、

ど真ん中だからな？」

女海賊「みんな、盾は持ったね？　頭固めたら、あとはあたしとレアルタの尻だけ見つめてな！」

全てのＭＳが、固定装備に関わらず、盾を2枚装備していた。それで持ちきれなくなる武装は外して、頭から砲撃の網に突っ込む構えなのだ。

海賊Ｂ「悪いけど、俺にゃ男のケツ追っかけ回す趣味はねぇ。姉貴のケツは一級品だが、デカすぎて前が見えねぇしな？」

レアルタ「そんだけ軽口叩く元気がありゃ、大丈夫だ。よし、行くか！」

装備も性能も十分とは言えない。訓練だって足りていない。

しかし、やる気だけはある9機のＭＳは、一丸となり、艦隊に向けてただひたすら、スピードだけを上げ始めた…。

【2】

その頃、霧雨、マヒロ艦隊正面にて…。

霧雨「また会ったね、フェニックスナイツ。　ん？　今度はジム３の方か」

ヴァイス「ああ。　レアルタはヤボ用でな？　もうすぐ来るから、心配するな」

互いに周りのＭＳに構わず、再び対峙する両エース。

ケイ「…あいつが帝国狩りか…」

ミサト「スピアをメイン兵装にした、接近戦重視の機体ですね。私の狙撃なら、比較的優位に戦えるんじゃないんでしょうか？」

そして、少し離れた位置から、隙を窺うようにも見える２機。

ケイ「そう思うか？　ならば射ってみればいい」

ユヅキはそんな事を言った。

ミサト「はい…。　この距離なら、一撃とは言いませんが…」

ビームスナイパーライフルを照準する、特別仕様のザク3。　そして放たれるビーム。

ヴァイス「真正面からじゃ敵わないとみて、不意討ちか？　いや、俺も高く買われたもんだな？」

機体の中心を正直に狙ったと思われる一撃は、なぜか狙いを逸れていた。

しかし、コックピットの中を覗いたなら、ヴァイスが細かくフットペダルを踏み直しているのが分かったはずだ。

つまり、どんな時でも機体を小刻みに動かし、狙いを定めさせないようにしているのだった。　しかもそれを、ほとんど無意識のうちにやっている。

霧雨「…余計な事を…。　そこのマヒロの武官っ！　つまらない横槍入れると、君から射つよ？　どうせ当たらないんだから、大人しくマヒロの艦を守ってることだね！」

攻撃が当たらなかったばかりか、逆に味方から怒られてしまった。

ケイ「だから言った。　中尉の腕は確かだが、それは常識の範囲においてに限定される。　中尉は私と模擬戦をすれば、3回に1回ぐらいは優位に戦いを進めるが、ミクとやったらどうだ？」

ミサト「…それは…」

口ごもる。

それもそのはずで、何十回も模擬戦はしていたが、1回しか勝った事がなかった。

ちなみに、ケイとミクでは5分5分だから、計算は合わない。　単純な腕の話ではなく、ミサトが常識から外れたタイプを苦手にしているのだ…。

ケイ「申し訳ない、大佐。　邪魔者は引っ込んでいるから、心置きなく決着をつけてくれ」

ユヅキはそう言うと、ミサトを連れて艦隊へと向かう。

霧雨「つまんない邪魔して悪かったね？　じゃ、始めようか？」

ジン「おうよ！　俺と姉御が組めば、向かうところ敵は…」

霧雨「ジンもだよ。　死にたくないなら、間に入らないようにね？」

霧雨は、ユヅキたちのみならず、自分の直属の部下まで遠ざけるつもりらしい。

ジン「姉御、そりゃないって！」

霧雨「ジンは雑魚を片づけてくれ。　こいつとは、１対１でやってみたい」

改めて、一騎討ちを申し込む霧雨。　言われたジンが、渋々下がる。

ヴァイス「そりゃ構わねぇけど、指揮官が艦隊放り出して、俺と一騎討ちなんかしてて平気なのかよ？」

ヴァイスは、からかうようなセリフを吐いた。

霧雨「もう1人が、後から来るって言ったよね？　だから君を、僕だけで止めるのさ。　残りの総力上げれば、艦隊の被害を最小限にできるだろ？」

ヴァイス「猪突猛進に見えるのも、実は計算づくって訳か…。　帝国の奴にしちゃ、場数踏んでる方だな？」

ヴァイスは、いくらか霧雨を見直したようだった。

ヴァイスが立てたのは、正面から陽動と、背後からの高速突撃による挟撃だから、ふつうに考えれば、戦力は分散しなければ防げない。
　しかし霧雨は、ヴァイスを1人で止めることにより、他の備えを厚くしようと企んだ。

ヴァイスが感心する訳ではある。

ヴァイス「…だけど、止めきれなかったら意味がないぜ？」

ヴァイスは小手調べなのか、まずビームライフルで一撃を加える。

霧雨「心配には及ばないよ。　たぶん、君の期待には応えられるはずだから」

かわしながら、反撃したライフルは、初撃からジム３の肩を捉えていた。　かすっただけながら、装甲が熱で少し溶ける。

ヴァイス「そう言えば、レアルタと互角以上だったのを忘れていた。　久々に楽しめそうだ」

霧雨「楽しいか…。　狩りのし過ぎで、狩られる立場の恐怖を忘れてるんじゃないかな？　それを思い出させてあげるよっ！」

ゲイツがもう一度照準を合わせる…。

【3】

ミサト「少佐。　あれでよろしかったんですか？」

艦隊の守備に徹するユヅキに、ミサトそう言った。

確かに霧雨は、ヴァイス相手に一歩も引かない戦いを続けていたし、ユヅキとミサトが、ヴァイスに構わなかったおかげで、正面の敵は早くも逃げ腰だ。　言っている側から、1機のリックドムが四散する。

ユヅキ「…フェニックスナイツが1機しかいない。　中尉はどこから来ると思う？」

ミサト「お2人とも、それを考えていたのですか？」

言葉からする限り、ミサトはその事に頭が回っていなかったようだ。

ケイ「中尉。　そろそろ一狙撃手は卒業してはどうだ？　大局を見、先を読む。　何より自分ではなく、部下が戦果を上げたことを誇ってもいい歳だ」

ミサト「…はい…」

ミサトが沈んだ声を出す。　このところ、ミサトはこんな事が多い。

ケイ「どこから来るか、網を張ってみるといい。　一隊を任せる」

それだけ言うと、ユヅキは自らも部隊を率いてどこかへ行ってしまった…。

【4】

海賊C「マジにありえねぇスピードだな、姉貴っ！」

声が微かに震えている。

それもそのはずで、通常のMSの速度の3倍にも達しようかという速さなのだ。

レアルタ「赤いMSが3倍の速度って、どっかの映画かなんかで見た気がする。　カッコイイだろ？」

女海賊「映画の影響で、機体が分解しかねないスピード出す気になるなんて、あんたもずいぶん狂ってるね？」

レアルタ「急減速しなきゃ大丈夫だ。　宇宙空間には、制限速度はないからな？　自分の限界が最高速度だ」

レアルタは珍しく、科学的な分析をしてみせた。

確かに、重力や空気抵抗のない宇宙空間においては、加速に時間さえかければ、ザクでも凄いスピードは出せる。

ただし、上げた速度を制御する方法が少なくなるし、障害物を避けられずに、自爆する可能性が爆発的に高くなる。　だから、誰もやらないだけの話なのだ。

レアルタ「このまま艦隊に突っ込む。　ぶつからないようにだけ気をつけてろ！　」

遠くに光、そう思って艦隊の兵が警報を発した時には、リックディアスはそのサラミスの横を通過していた…。

【5】

警戒の一番外側、ピケットのサラミスを、もの凄いスピードでやり過ごしたレアルタたち。

ここまで来ると、さすがに見つからないという訳にはいかないが、飛んでくる砲火は、みなレアルタたちの後を射っていた。　あまりのスピードに、照準が追いついていないのだ。

女海賊「…これがあんたの狙いかい…」

レアルタ「常識外れのことやると、けっこう面白いもんだろ？」

メガ粒子砲の光が、まるで流星のようだ。　当たれば即死の一撃なのに、何故だがとても綺麗に見えた。

レアルタ「盾を構えろ！　そろそろ来るぞ！」

レアルタがそう言った数秒後、メガ粒子の光が止み、代わりに四方八方からの火線が出迎える。

主砲による阻止に失敗した艦隊が、弾幕による迎撃に切り替えたのだ。　それは、味方撃ちを恐れて、気軽に主砲を射てないくらい、艦隊に近づいたせいでもある。

海賊Ｄ「盾なんかで防ぎきれるのかよ…？」

さすがにこの弾丸の雨の中では、訓練の不足した海賊たちは震えていた。

だが、レアルタは黙ってそのまま突入を続ける。　両手に追加された盾が、雨のような機関砲弾を受けて揺れていた。

帝国兵「落ちろっ！　落ちろぉ～！！」

そして、必死なのは艦隊側も同じだった。　内懐に飛び込まれた艦隊は脆い。　今のうちに落とさないと、自分たちの艦が沈む番なのだ。

リバル「阻止火線、左舷迎角１８。！」

濃密な火線が集中したゲルググの１機が、あっという間に吹き飛ぶ。

海賊Ａ「や、やっぱ駄目だ…　俺は降りるっ！」

レアルタ「バ、バカ野郎っ！」

その光景に臆したのか、海賊の１機が盾を放り出し背中を向けようとする。

しかし、そのザクは急に減速したため、減速Ｇに耐えきれず、片脚が股関節から脱落してしまう。　さらにそれでバランスを崩した機体が、制御不能なまでにぐるぐる回り出す。

そんな敵に、護衛のＭＳが情けをかけてくれるはずもなく、哀れザクは、３機のゲイツにめった射ちにされて、この世から消え失せた…。

【６】

だが残る７機は、すでに艦隊の目前にいた。　マゼランの緑の艦体が、モニター一杯に広がる。

レアルタ「照準にこだわるな！　ここまで来れば、射てば当たる！　信じて射ち続けろ！！」

海賊Ｅ「も、もう破れかぶれだ！　うわぁぁぁ～～！！」

そのザクは、肩の盾が既に吹き飛び、右手に持ったゲルググ盾も穴だらけだったが、何とかザクマシンガンを手にした。

レアルタに言われた通り、脚を止めずに、無我夢中で引き金を引く。

霧雨兵Ａ「ち、近いっ！　近過ぎるっ！！」

マゼランの兵の方が恐怖に駆られるぐらい、接近したそのザク。

その射撃は、ほぼ全弾がその艦体に吸い込まれていく。

ザクマシンガンだから轟沈とはいかなかったが、致命傷なのは一目で分かった。

海賊Ｆ、Ｇ「ここまで来て、サラミスなんか土産に帰れるかよっ！」

レアルタ「あっ！」

マゼランが沈む横で、サラミスも爆発する。

しかしその海賊達は、沈めたのがサラミスだったのが不満らしい。
マゼランを沈めた海賊のように退避には入らず、再び攻撃しようと速度を落とす。

霧雨兵D「来るなぁ～！　来るなぁ～！！」

狙われた艦の霧雨兵は、叫び声を上げる。

ミサト「あそこ…　あの速度なら…」

それを発見したザク3。

ミサトの腕ならば、照準はすぐに合わせられる。　しかしその時、ミサトの脳裏をユヅキの言葉がよぎった。

『部下が戦果を上げたことを誇ってもいい歳だ』

ミサト「右翼、さらなる敵に備えてっ！　左翼の…　あなたとあなたはザクを、他はゲルググを狙って！　私が援護しますっ！」

ザク3がライフルを連射する。　いつもの精密な狙撃ではないから、

命中弾はない。　けれど…。

帝国兵Ａ「もらったぁ～！」

帝国兵Ｂ「これなら当たるっ！」

ハイザックの攻撃が、それぞれに敵を捉えていた。　ザクとゲルグは落ち、狙われた艦は守られた。

帝国兵Ｂ「中尉っ！　やりましたっ！」

おそらく2機を自分で射っても、落とすことはできたはずだ。　しかしミサトは、ユヅキの言った言葉の意味がわかったような気がした。

レアルタ「…欲張るからだ…」

爆発した2機を横目に見て、レアルタが苦々しげに呟く。

しかしその横では、別のマゼランが何発も被弾しているのが見えた。
逆に敵のＭＳにやられたゲルググもいたが、それを含めても、撃墜ＭＳ５機に対して、戦艦２、巡洋艦１の撃沈なら、悪い戦果ではない。　そもそも、９機対数十隻なのだ。

女海賊「まだ離脱してないのは、あたしとあんただけだよ？　どいつを殺るのかまだ決まらないのかい？」

依然、攻撃アプローチをせずにいるレアルタを追う女海賊。　どうやら、あくまでレアルタと行動を共にする気らしい。　サラミスの横を通り過ぎたが、見向きもしていない。

レアルタ「俺は端から、デカブツがノルマなんでね？　あの白いのがいいか…」

レアルタが目をつけたのは、なんと霧雨の座乗艦、バーミンガムだった。

女海賊「輪形陣の真ん中じゃないか！　あんた、他人を欲張り呼ばわりしたくせに、自分も欲の皮が突っ張ってるね？」

レアルタ「俺だって、事情がなけりゃ、こんな無茶はしねぇよ…。
とある事情で、金がいるんだ」

レアルタがボソリと呟く。

女海賊「…そこまでして、どうして金が欲しいのか気になるね…。
いいよ、あたしも付き合ってやる。その代わり、生きて戻れたら…」

女海賊もまた、何かを呟きかけるが…。

女海賊「…いや、今はあいつを沈めることだけに集中しよう。もう速度の優位がなくなりかけてる。少しでも躊躇えば、ＭＳ隊に追いつかれちまう…」

レアルタ「…そうだな」

リックディアスとゲルググが、バーミンガムに殺到する…。

【7】

霧雨兵「防御砲火が当たりませんっ！　動きが速過ぎますっ！」

マリアベル「ＭＳ隊はどうしたの！」

霧雨兵「それなりに命中弾は出ていますよ！　それでもここまで強引に迫られては、対応しきれないんです！！」

霧雨の艦隊のＭＳとて、奮闘はしていた。

しかし、レアルタたちが脚を止めないために、攻撃は正面の盾にしか当たっていないのだ。　仮に追い撃ちをしたとしても、追い撃ちの命中率は低く、しかも味方の艦を射ってしまう怖れもある…。

マリアベル「私のゲイツを準備して！」

霧雨兵「少佐が出られるんですか？」

兵が驚いた声を出す。　マリアベルが自ら最前線に立つのは、それぐらい珍しかった。

マリアベル「たとえ誰でも、いないよりはマシでしょう？　出られる予備機はみんな出して！」

数は僅かだったが、最後の防衛線が急造された。　そこへ突っ込んで来る、リックディアスとゲルググ。

レアルタ「6機か…。　こんな時じゃなければ、一捻りなのによ…」

両手に盾を装備して防御を固めた分、リックディアスの場合、重くて威力のあるクレイバズーカを置いてきてしまっていた。

代わりにビームピストルを射ってはみたが、ゲイツの盾を貫通できない。　逆に傷ついた盾に直撃を受けてしまい、盾ばかりか、機体までも損傷を被ってしまう。

今までは、その盾のお陰でここまで到達できたとはいえ、こうなってみると、いかにも歯がゆい。

レアルタ「くそっ！　射撃が駄目なら斬り裂くまでだ！　お前は艦を殺れ！」

レアルタがサーベルを抜き放ち、盾もピストルも捨てる。　艦をサーベルだけで攻撃するのは、かなり困難なことだから、彼女にバーミンガムを任せて、自分はＭＳに専念すると、態度で示したのだ。

女海賊「…あんた…　わかった任せなっ！」

その期待に応えるべく、女海賊のゲルググが機体を横にロールさせ、防御砲火をやり過ごす。　それからロケットランチャーを3発射ち、うち1発を当てるが…。

女海賊「…さすが巨大戦艦…。　こんなんじゃ、ビクともしないのかい！」

冷静にバーミンガムが巨大戦艦かと言われると、疑問は残る。　それでもマゼランよりは大きかったし、何より激しい対空レーザー砲の豪雨が、彼女にバーミンガムを、より巨大に見せていた。

霧雨兵「ゲルググがバーミンガムにっ！」

レアルタ「邪魔してやるなよっ！！」

ゲルググを横合いから射とうしたゲイツが、リックディアスに斬り下げられる。　さらに1、2機と斬りつけられ、ゲイツは自分達を

守るだけで精一杯になってしまう。

レアルタ「うぉぉぉぉ～！！」

霧雨兵「か、怪物かっ？！」

マリアベル「ゲイツとリックディアスに、そこまでの性能差はないはず…

…きゃっ！！」

サーベルを振り回すレアルタに、どのゲイツも触れることすらできなかった。　1機1機止めを刺していないから、動ける機体はまだ多いものの、全てのゲイツが手やカメラ、脚などを斬り飛ばされ、戦力にならなくなっていく。

それまでにかかった時間、たった17秒。　十分、化け物である。

女海賊「…あいつ…。　あたしも負けてらんない…　ここで落とさなきゃ、あいつに顔向けできないっ！」

さらに2発。　1発はたいした被害になっていないが、もう1発が艦体中央に吸い込まれた。　爆発が起こり、対空レーザー砲に隙間

ができる。　砲座が被弾したのだろう。

女海賊「今だ…　あ、あたしはっ！！」

その隙間に、ゲルググは突っ込んだ。

まるで着艦でもしようとしているのかと思えるぐらいに、ゲルググとバーミンガムが接近する。　残りのロケットランチャーが、すべてバーミンガムに命中した。

女海賊「まだ沈まないってのかい？　いい加減落ちろっ！！！」

霧雨兵「うぁぁぁっ！　き、霧雨大佐っ！！　助けて…」

攻撃が的確だったとは、お世辞にも言えまい。　命中したとは言え、射撃は中枢部を捉えてはいなかった。　これがレアルタならば、装甲の薄い部分を狙い、射撃だけで艦を沈めたはずだ。

しかしここは、彼女の意地が技量を押し退けた。

止めとばかりに抜き放ったビームなぎなたが、腕ごとブリッジを直撃する。　ゲルググも反動で吹き飛ばされたが、バーミンガムもまた、ブリッジが圧壊した。

そして、多数被弾した状態でのそれは、撃沈とイコールだったようだ。　消火の指揮を失ったバーミンガムは、被害箇所が拡大し、いくつも艦内で爆発が起こり始める。

女海賊「や、やったのか…？」

片腕のちぎれたゲルググが佇む。

レアルタ「お見事、って抱き締めたいとこだが、敵さんのど真ん中なのを忘れるなよ？　退くぞっ！」

女海賊「あ、ああ…」

自らの手に残る余韻に呆然としながらも、彼女は全力で退避を始めた…。

第67章　3枚目のエース（前書き）

（まだ紹介は終わらない…）

セブンス「やっほー。　じゃ、始めよっか」

フォルナ「インドラ一、そして　★世界でも一番流行に敏感な★ラピスラズリがお伝えする、ＭＳ開発暴露コーナー」

セブンス「今回はマリンピアに行ってる、アイン特派員～」

アイン「アインで～す。　いま僕は、マリンピアの地下工場に潜入…」

工員「そこの新入りバイトっ！　何をぶつくさ言っておるかっ！口を動かす暇があったら、手を動かせっ！」

アイン「はいはい…」

工員「返事は1回っ！　たるんでいては、新型ＭＳムラサメの生産

が遅くなるではないかっ！」

アイン「分かりましたっ！　しかし、従来のＭＳではなく、これは新型のパーツなのでありますかっ？」

工員「その意気だ！　今、マリンピアは帝国の味方だが、ＭＳがなくては足元を見られるかも知れん。

だから、従来のＭ１アストレイを増産するだけではなく、こうして新型のムラサメも造っているのだ！　お前らが頑張れば、それだけマリンピアも強くなれる。　誇りに思うことだ！」

アイン「はいっ！」

アイン「…って訳で、マリンピアは小さい国だけど、Ｍ１アストレイとムラサメを独自に配備しようって、頑張ってるみたいだね」

セブンス「…なるほどな…。　つかアインって、相変わらず、変わり身早いよな？」

アイン「サブリーダーとして、お堅いノンをサポートしなきゃいけないしね？　あ、またさっきの工員が見回りに来たから、通信切るよ。

以上、マリンピアの地下工場からお伝えしました～」

（ちゃっかり暴露終了）

第67章　3枚目のエース

眼下を大河が悠々と流れる。　遠くに見える山々は、頂上が白い物に覆われていた。

ゲット「うっひゃ～。　でっかい川だな？　山ってこんなに高いのかよ？！」

フレーネ「やっぱり地球は、こうでなくっちゃ」

コロニー生まれのために、見るものすべてが珍しいゲット。　フレーネの記憶探しに来ているのに、これではただの観光客だ。

リンダ「…お嬢ちゃん、また意味ありげなこと言ったね？　やっぱアースノイドなのは、間違いないのかな…」

フレーネ「…え？」

フレーネの言葉を聞き咎めたリンダに、当のフレーネの方が首を傾げている。

リンダ「いや、今　『やっぱり地球はこうでなくっちゃ』　って言ったろ？　地球に来た事がなけりゃ、やっぱりはおかしいだろ？」

ゲット「そっか…」

リンダ「何も起きてないようでいて、実は少しずつ、手がかりは増えてきてるのさ。

慌てて思い出す必要もないなら、ゆったり地球旅行としゃれこむのもいいんじゃないかい？　そのための金は、ゲットが十分過ぎるほど稼いでくれたしね？」

リンダが言っているのは、ゴトーの不正ファイトの大穴チケットを、ゲットが当ててしまったことだった。

その配当金は、すかんぴんになったスティヴの穴を埋めたばかりか、ＭＳをストライクダガーから、ロングダガーに乗り換えさせ、さらにこうして中国旅行をできるだけの、まさに莫大な金額であった。

リンダ「…という訳だから、スティヴ。　毎日恒例の、ゲット先生へのお礼はいったのかい？」

スティヴ「…うぅ…。　ゲット先生ありがとうございました～」

ちなみに、ゲットの金がなければ、あわやストライクダガーを質入れする寸前だったスティヴは、リンダとゲットに頭が上がらない日々を送っていた。

ゲット「つか、さすがにもういいって。　なんかこう、スティヴがそんなだと、逆に調子が狂うし…」

スティヴ「そうか？　やっぱ、ゲットはいい奴だよなっ！」

いきなり復活し、ゲットの肩をバシバシ叩くスティヴ。　そんなスティヴに、フレーネはおかしそうに笑う。

そしてゲットも、フレーネに負けないくらいの笑顔を見せていた。

アナウンス「当機はまもなく、上海空港に着陸いたします。　皆様、シートベルトをご着用下さい。　パンドラール、ニホン、レメクアメリカ…　各『帝国国内線』についての乗り換えは、着陸後にご案内させて頂きます…」

ゲット「…あれ…国内線？」

案内放送にゲットは怪訝な顔をしたが、中国が帝国首都パンドラールや、ニホン、その他の帝国領とを結ぶ便を、国内線と称するのは、中国なりの気の遣い方だった。

あくまで中国は帝国の属国、同じ帝国の国内ですよと振る舞って見せる。　面従腹背と言うほど酷くはないが、自国の利益のためには、そういう配慮のできる国なのだ。

リンダ「そろそろ、頼んでたリメンバーズのオーバーホールも終わってるだろう。　次はどこに行ったものかね？」

リンダがそんな事を呟く。

やはり巡洋艦1隻を丸ごと整備するとなると、時間がかかるものらしい。　もっとも、その都合の関係でこうして旅行をしていた訳なのだが。

スティヴ「フレーネの嬢ちゃんが、行きたいとこに行ってやればいいんじゃないのか？　どうせ手がかりは『地球』しかないんだろ？」

フレーネ「地球…　古代…　…扉…」

またフレーネが、不思議なフレーズを口にした。　全員が首を傾げている。

ゲット「…古代って、どんぐらい昔のことなんだ?」

フレーネ「…ううん…」

フレーネは首を振った。　どうやらそれ以上は思いつかないらしい。

リンダ「…困ったねぇ…。それだけじゃ、何の手がかりにもならないよ」

リンダは困った様子だが…。

スティヴ「古代がいつかはわかんなくてもよ?　単純に、昔の建物が残ってる場所に行けばいいんじゃないか?

例えばアメリカなんかは、６０年前の統一戦争の時に、帝国が共和国の建物をみんなぶっ壊しちまってるから、行っても意味ないだろ」

ゲット「そうか！　スティヴって、見かけによらず頭よかったんだな～」

スティヴ「まあな～」

照れ笑いするスティヴ。

よくよく聞くと、褒められているかどうか怪しいのだが、当スティヴが気にしていないので、そのままにしておく。

リンダ「それだと、南北アメリカ以外にも、クアルーンは今、ドンパチやってる真っ最中だから、期待できないね。　あとは…」

そうした流れで、目的地の絞り込みが始まり…。

【2】

☆インド☆

西暦からの遺跡は多い。　インドラが強いから、帝国が最近攻め入った事はない。

（空爆だけ→リンダ）

☆ヨーロッパ☆

西欧を中心に西暦の頃から帝国領だから、昔からの建物なんかは多い。（リンダ）

だけど遠い。（スティヴ）

☆ロシア☆

ヨーロッパと事情は変わらない。（リンダ）

これからの季節は、めっちゃ寒いから行きたくない。（スティヴ）

☆マリンピア（アラビア半島）☆

反帝国レジスタンスが多くて、帝国が討伐に乗り出しつつある。

危険。（リンダ）

☆ニホン☆

事情は知らない（リンダ）　近いから、簡単には行ける。

☆東南アジア☆

それどこ？（スティヴ）

同じく事情に詳しくない（リンダ）

☆アフリカ☆

聞く話だと、西暦のさらに前の時からの遺跡なんかが残っているらしい。（リンダ）

ヨーロッパ以上に遠いから面倒。（スティヴ→やる気あるの？→フレーネ）

☆オーストラリア☆

先の統一戦争で荒れはした。　ただし、アメリカほどではない。

今から夏でバカンスができる。　水着美女を見に行こう。（スティヴ→制裁決定→リンダ）

整備の終わっていたリメンバーズに戻るや、ホワイトボードに書き出しての、目的地選定が始まった。

リンダがいろいろな場所に詳しかったため、かなり絞り込みははかどったが、それでもすべての地域を知っている訳ではなかった。

フレーネ「…みんなも知らない所に行くのは…　不安…」

フレーネが呟く。　記憶探しはしたいが、さりとて、事情がよく分からない国に行くのは心細いらしい。

ゲット「そっか。　なら、ニホンや東南アジアは後回しだな。　危険って書いてある所も」

スティヴ「あと、真面目に冬のロシアは止めとけ。　死ぬ。　マジで死ぬ」

スティヴはなぜか、死ぬを乱発した。

ゲット「そりゃ、冬はどこでも寒いだろ？」

ゲットはそう言ったが…。

スティヴ「いいや。　お前はまだ、地球を甘く見てる。　ましてや北国の代表、ロシアだぞ？」

寒いのが苦手なのか、スティヴは必死だった…。

【3】

フレーネ「え、えと…」

困った顔のフレーネ。　そして数秒後…。

スパコーーーーン！！

と快音？が響き、スティヴがうずくまる。

スティヴ「何すんだよっ、リンダ！」

スティヴは抗議するが…。

リンダ「それはこっちの台詞だよっ！　あんた、年頃の女の子の前で、なに下ネタを披露してんのさっ！！」

リンダは戸惑うフレーネに代わって、スティヴに怒りをぶつける。

しかし、なぜこんな展開になったかと言うと、それはやはり、スティヴの自業自得なのだった。

ロシア冬の厳しさの話も、最初はＭＳの冬季装備が不十分だとか、乗組員のコートが足らないという、いたってまともな内容だった。

しかし、ゲットの

『そんなに寒いって、いまいちピンと来ないんだけどよ…』

という素朴な疑問から、スティヴの話は脱線を始める。

バナナで釘が打てるだの、鼻水が凍るだの、意味や出所が分からない話をまくし立て始め、ついには立ちションで氷柱が作れると言い出し…

リンダに見事に殴られてしまった訳だ。

リンダ「スティヴが上品だと思ったことは一度もないけど、ここまでデリカシーのない奴だとは、さすがに思ってなかったよ！　また、リメンバーズが放り出されたいらしいね？」

スティヴ「げっ！」

前の破産事件で、現実に放り出されたスティヴであった。　しかもその時から一月を経て、さらに秋は深まっている。　ロシアほどではないにしても、中国北部の晩秋に野宿は…。

…あえて口にする必要はないだろう。

リンダ「だったら、もっと話題を選ぶことだね。　勝手にリメンバーズを、男子校にしないでくれるかい？」

ひきつった笑みが、真面目に怖いリンダ。

ゲット「…ま、まあ、ロシアが寒さがヤバいのは分かったからよ？　暖かい所に行こう」

何とか場を収めようとする、いたいげな少年もいたが…。

スティヴ「だよなっ？　よし、夏の南半球、共和国の水着美女を…

…グボハッ！！！！！」

…ついに、懲りないスティヴには、リンダの本気鉄拳が炸裂。

結局、次の行き先は諸種の事情を踏まえ、インドラに決まったようだった…。

第６８章　秒読みの開戦（前書き）

（依然暴露中？）

セブンス「…今回は暴露じゃなくて、解説なんだけどね？」

フォルナ「でも、インドラ一話題が豊富　★むしろ世界の話題の中心の★　ラピスラズリに不可能はありません。　さっそく担当の…」

フィフス「生き返ったフィフスだよ。　今回紹介するのは、ＭＳを自分たちで造ってない人たちのことだよ」

セブンス「そか。　で、自分たちで造ってなくて、どうやってＭＳを手に入れるんだ？」

フィフス「お店で買う」

セブンス「…へぇ～～～」

フォルナ「…ふ～～～ん」

フィフス「…ちょ、本気にしてないだろ？　でもこの世界じゃ、ＭＳは民間にも普及してるって事になってるんだよ！」

フォルナ「でもフィフス。　一般の人がＭＳ乗って、何かいい事あるの？」

フィフス「いい事かは分からないけど、工事したり、消防車代わりに使ったり、警察にもＭＳがいるって設定なんだ」

セブンス「怪しい設定だよね…。　誰がそんなの考えたんだよ？」

フィフス「こいつ！」

マヒロ「ども～。　編集者の分身で～す」

フィフス「この設定無理あるって言われたんだけど、そこんトコどうなの？」

マヒロ「…だって、一部のトピ原作の参加者さんたちが、傭兵とか独立部隊が『異様に』好きでさぁ～。

工場ない、基地もない、倉庫もなくって、母艦も怪しい…。　なら、街に行ったらガソリンスタンドならぬ、推進剤スタンドがあって、核融合炉のメンテができる世界でした、って設定にしないと、物語が始められないじゃん」

フォルナ「…インドラみたいに、国を設定してないから、仕方ないんですね…」

マヒロ「でも、古いＭＳや量産機は市場に流通してるけど、新しいＭＳや試作ＭＳは、物語の中でも高価だったり、イベントじゃないと手に入らないようにしてあるから大丈夫」

フィフス「陣営で言うと、ゴトー、スティヴ、フェニックスナイツ、最初の頃のヤタガラス（今は帝国）とか…。　たいていは小規模な人たちだね」

セブンス「って事はさ？　新聞広告に

『今月はネモが安い』

とか載ってたり、エコＭＳ減税とかあったりする世界なのか？」

マヒロ「…さすがに、そこまでは設定してないけど…」

（なんとなく終了）

第６８章　秒読みの開戦

評議Ａ「…帝国のオクサイド軍が、数日のうちにも、国境を越えて来るかも知れぬという…」

評議Ｂ「我々から帝国を攻めた事など、ただの一度もないというのに…」

議場で頭を抱えているのは、フロンティアガードの評議員たちであった。

帝国に反旗を翻しているはずの彼らが、なぜこうも弱気かと言えば、フロンティアガードの評議員は、元々鉱山開発会社の人間が多く、軍事はもちろん、政治にも素人に過ぎなかったからだ。

過酷な税をむしり取られるのに嫌気がさしたり、労働者がこき使われるを見かねて立ち上がっただけで、最初から将来の展望など考えていなかったのだ。

その怠惰を責めるのは簡単だろうが、その日を生きるのに必死だった彼らを、誰が無能と罵る資格があるのか？

ミケル「今更頭を抱えて、どうなると言われるのです？　ここは戦

うしかないでしょう。　我々が立った経緯はともかく、反帝国…特に、先に敗れたクアルーンに物資を提供した時から、我々は帝国の敵なのですから」

ミケルが説いているのは、至極正論だった。　自国の敵を支援している国があったら、その国をよく思うはずなどない。

評議C「ミケルフォード評議。　みな、分かってはいるのだ。　しかし、いざとなっても肝が座らぬのは、その人間の資質とも言うべきもので、責めてどうなるものでもない」

1人の老練そうな評議が、そう頼りない評議たちを擁護した。

評議C「やはり此度の戦いの指揮、ミケルフォード評議に執ってもらいたく思う。　戦わねばならない以上、素人の我々よりは、自警団の出の評議が指揮した方が、いくらかでもましに戦えよう」

自らを素人と言ってはいるものの、この評議は覚悟を決めているようだった。　その証拠に、目がミケルをしっかり見据えて動かない。

ミケル「…私が嫌と言う訳ではないのですが、指揮は茄子笛という評議に執らせてみたいと思います」

ミケルはここで、自らを慕う茄子笛を抜擢する気なのか？

評議Ｃ「…たっての推薦と言われるなら、反対はせぬ。　だが、何故に？」

ミケル「実を言えば私は、正面切って帝国と戦うのが遅過ぎたと思っております。　そもそも5年前に、帝国に反した者同士が緊密に連携していたならば、帝国に代わる世界が作れたのではないかと思っています」

ミケルは、自説を滔々と論じる。

その内容はつまり、5年前の大乱の際に、帝国に反した諸国が各個撃破された事の批判だ。　あの時帝国は、核に毒ガスと人道を一切無視した殲滅戦を行ったが、全ての勢力が1日にして滅ぼされた訳ではない。

とあるコロニーが核で焼かれたら、別のレジスタンスが新しい反乱を起こすといった具合で、世界全土がバラバラに蜂起した。

そしてその時、フロンティアガードはＮＢＣ兵器を怖れて、表立った軍事行動を起こさなかった。

評議C「しかし、昔の事をどうこう言っても仕方あるまい。　現に帝国は存在し、攻めても来るのであろうからな？」

ミケル「私も今更、そうは申し上げません。　私が申し上げたいのは、ただ攻める守るの話ではなく、今後どうしたいかを考えながら戦うべきだという事です。　ですから、ここでオクサイドを叩くのは、あくまで我々の実力を示すためとし、帝国と和議を結ぶことを狙いとします」

ミケルの意見に周囲がどよめく。

ミケル「戦ってから和議とは、とお思いの方もいらっしゃると思います。

しかし今の帝国は、レジスタンスなど一捻りだと思っている節があります。　したがって和議を結ぶには、どうしても我々が困難な相手だと思わせる必要があります。　それゆえに、です」

評議D「そう話がうまくいくかな？　仮に我々が勝てたとして、人

間は失敗し恥をかいたなら、逆に意地になる。　意地になれば、話も聞かずまた攻めてくるだろう！」

声高に言った1人の評議。

それを聞いた他の評議たちからも

『やはり和議など虫が良かったか』

と諦めの声が聞こえた。

ミケル「それも、たぶん真実なんだろうと思います。　ですが、そうだとしたら尚の事、今度が最後のチャンスになると思っています」

評議C「…ほう」

老練な評議は、ミケルに厳しい目を向けた。

ミケル「今回はオクサイドと戦います。　だから、勝って勢いに乗るのも、負けて意地になるのもオクサイドです。　しかし偶然にも、オクサイドを止められる人間が、近くに来ているではありませんか」

周囲が急に静かになった。

そしての静寂を破ったのは、またも老練な評議の一言であった。

評議C「…なるほど、軍人の考えかな？　私はにわかに信じられぬ」

内容を見透したのか、そんな事を言う。　ただ、そんな顔をしているのは、その評議だけだ。

ミケル「…ご推察、畏れ入ります。　先の話にも関わりますが、茄子笛評議に指揮を任せるのは、私が交渉に赴くため。

すなわち、今クアルーン討伐に来ている、メリャーナ皇女に会って来たいと思っています。　皇女であれば、一指揮官に過ぎないオクサイドを、抑えることもできましょう。

何とぞ、賛成して頂きたい…」

ミケルは自分がメリャーナと直談判に及ぶと言い、評議たちに賛同を求めた…。

【2】

平和な時ならば、騒音公害だと言われるだろう音が響いていた。

ここはオデッサからそう遠くない場所で、なだらかな丘陵地帯だ。

そこでは今日も、茄子笛が部隊の砲撃訓練にいそしんでいた。

???「ジムキャノンでこの命中率、あんた並みの腕じゃないね?」

1人の女が、そう言って目を丸くした。

茄子笛「そうだと思うだろ?」

しかし、なぜか茄子笛は自らの腕を誇らず、次にベン、そのまた次に別の…　といった具合に、全員に射撃をさせて見せた。

そして驚くべき事に、そのほとんどが豆粒にしか見えない先の標的を、きっちり捉えていた。

？？？「ふぇぇ～。　ますますやるじゃないか？　フロンティアガードにも大した精鋭部隊がいるもんだね」

感心しきりの女に、茄子笛は苦笑いだった。　そればかりか頭を掻いていて、何か言いたげにも見えた。

ベン「違うんすよ、ナディアさん。　これ、うちらの腕がいいんじゃなくって、茄子の兄貴の観測データと、オデッサで造る砲の精度がいいんですって。　ぶっちゃけちまうと、この予測値打ち込めば、誰でも当たるんすよ」

女性を、ベンはナディアと呼んだ。

よく見れば彼女は、エヴァニーと共にフロンティアガードに身を寄せて来た、ナディア・メリルランチその人だった。

ナディア「…そうなのかい？」

茄子笛「…まあ、な。　俺は砲撃の名手ってみんな誤解してるが、

実はこうして、戦う前に弾道から風の具合とか、下調べしてるだけなんだよ。

昔からこういうタイプでさ。　遠足じゃ、前もって行く場所のこと本で読んどいて、知らない奴らに自慢してたな」

ナディア「あははは。　種も仕掛けも用意してあるんだね？　ま、あたしはそっちの方が気に入ったけど。

半分ぐらいの兵は、敵を倒せば自分の実力で、失敗したら機械のせいにする。　でも本当に見所のある兵は、出撃前にメンテに付き合ったり、帰って来て真っ直ぐに、整備の奴らに礼を言うもんさ。

…あ、それぐらい、段取りは重要なんだ、って言いたかったんだけど、これじゃあたしの整備に礼を言え、って風にしか聞こえないか」

ナディアは、うまく話がまとまらなかったので、少し恥ずかしそうにしていた。

ベン「謙遜しなくても、ナディアさんの腕は確かですよ。　俺も兵役行った事ありますけど、ナディアさんみたいな整備兵は、なかなかいなかったです」

ベンとナディアは、会って間もないのに、ずいぶんと仲良く見えた。

茄子笛「ついにベンにも春が来たか…」

意味ありげに、うんうん頷く茄子笛。

ベン「…春？　兄貴、何言ってるんですか？　もうすぐ秋も終わるってのに…」

茄子笛「いや、こっちの話だ。　それより、今度の戦いなんだが、ナディアさん。　グランズは参加できそうですか？　あ、その前に、リーダーに挨拶がまだだったか」

めずらしく、評議らしいことを言い出す茄子笛。

ナディア「…あ、あ…　それなんだが、グランズは逃げて来る時に、帝国に手酷くやられちまってね…。　リーダーは…　ちょっと…」

ナディアは言い澱む。

茄子笛「…死んだとか？　そうなら、悪い事を…」

ナディア「い、いや、死んだ訳じゃないんだが…」

ナディアの表情は暗い。　それを慰めようと思ったのか、ベンはやたらと明るく振舞いだす。

ベン「傷が重いなら、ゆっくり休んでもらってください。　それよりも、俺はナディアさんが整備してくれるようになってから、機体の動きが良くなってもう…」

ナディアが沈めば沈んだだけ、ベンが明るく振る舞って励ます。
その必死さが、何故だか滑稽に見えた。

茄子笛「……。」

茄子笛「…じゃ、ＭＳはあたしが整備するから、代わりにあたしの身体の方を整備してほしいの…」

ベン「な、なななんて事を言うんですか、ナディアさん！　お、おおお俺でよよよ…

…

…

…からかいましたね、兄貴？」

茄子笛「いや、ふつう気がつくだろ、すぐ」

茄子笛は笑うと言うより、むしろやや引き気味。

そしてナディアはと言うと、もう2人の側にはおらず、他の自警団メンバーと話し込んでいた。

ベン「…茄子の兄貴が、そうやって人の心を弄ぶ人だとは知りませんでした。　もういいです」

あれだけ緩んでいた口調が、評議会のお堅い口調に戻っていた。
そして完全に怒ったのか、ベンはすたすたとどこかに行ってしまった…。

【3】

一方、着々と侵攻の準備を整えるオクサイド軍では…。

スーリス「やれやれ。　せっかくあんたとの腐れ縁も切れたと思ってたのに、これだよ…」

スパンツ「そりゃないぜ、スーリスちゃ～ん。　縁を切るなんて冷たいこと言わないで、仲良くやろうぜ？」

サフラン１０でのゼフィランサスの捕獲に失敗し、その責任を取らされる形で閑職に飛ばされた2人だったが、ほとぼりが冷めたのか、こうしてまた前線に立つことになったのだった。

スパンツ「…つか、腐れ縁ってんなら、オクサイドの奴とのはどうなのよ？」

スパンツは、そんな話題をスーリスに振った。

スーリス「はっきり言っちまうと、あたしは嫌いだね。　戦いに勝って出世したのなら文句は言わないが、上に取り入って出世する男は、あたしのタイプじゃない」

オクサイドを、そんな風に斬り捨ててみたスーリス。　そう言えば以前から、2人の仲が良いとか、互いを尊敬しているなんて話は聞かない。

スーリス「あんな男の事はいいんだよ。　それよかあんた、自分の仕事はしてきたんだろうね？」

スパンツ「任せてよ、スーリスちゃ～ん。　しっかりオデッサまで、ツーリングしてきたって。　で、何が知りたいの？」

相変わらず、隠密偵察には自信ありげなスパンツだった。　どちらかと言えば彼の得意分野は、ＭＳよりバイクで、戦闘より偵察なのだった。

スーリス「洗いざらい吐きな」

スパンツ「スーリスちゃんも欲張りだなぁ～」

そう前置きしたスパンツだったが、次々に調べた情報を口にする。

それは、ＭＳのおおよその数から、機種、練度、さらには街での兵士の様子から、全体の雰囲気にまで渡っており、かなり詳しい情報と言えた。

スーリス「…そうか。　奴らは待ち伏せをね…。　そいつにかからなけゃ、オデッサは陥ちるんだね？」

スーリスはニヤリと笑う。

スパンツ「スーリスちゃ～ん。　そんなに簡単にはいかないって。

敵も動くし、だいいちオクサイドの中佐が俺の情報信じてくんなきゃ、何もなりゃしないんだよ？」

まったくと言いたげなスパンツだったが、自分の情報を評価してくれたスーリスに、悪い感情は持たなかったようだった…。

【4】

オクサイド「説明は以上だ。　何か質問はあるか？」

軍議の席で、オクサイドはこう自分の話を締め括った。

ただし、軍議とは言っても、オクサイドが一方的に喋っているだけである。　部下も意見を言わないし、言っても分かりにくかった所を聞き直すぐらい。　実はそれが、オクサイドのいつものやり方なのだ。

スーリス「中佐。　あたしらは聞く事はないけど、中佐があたしらに聞きたい事はないのかい？」

スーリスは、意味ありげな言葉遣いをした。　その意図に、オクサ

イドも気がついたらしい。

オクサイド「スパンツの情報なら、今回はいらん。
ユービットを任されて以来、オデッサの偵察を怠った事はない。
昨日もルッグンを飛ばしたが、さしたる変化はなかった。
数はそれなりいるようだが、ジムキャノンやジムスナイパーなどの、旧式の遠距離戦のＭＳばかりだ。　懐に飛び込めば、ガルスＪの敵ではない」

スーリスはよく思っていないようだったが、オクサイドとて無能ではない。　偵察に怠りはなく、しかも分析に、さほど大きな間違いはなかった。

スパンツ「あ、それなんだが…」

スーリス「いや、つまらないお節介をして済まなかったな。　我々は命令通り、遊軍として動くことにする」

スパンツが何か言おうとしたように思えたが、スーリスはそれを遮ってしまった。

オクサイド「それでいい。　ガルスＪは陸戦用で、どちらかと言えば重厚なタイプだ。　ジン・ハイマニューバとは、機動力が釣り合うまい」

やはり、物は見えているようだった。　ガルスＪは量産機ながら、攻撃力でジンを凌駕していた。

しかし、ジンハイマニューバは、機動力でガルスＪに勝っていた。
　両機をごちゃ混ぜに配備しては、互いの長所が生きない。

スーリス「あたしとしちゃあ、気の合った奴らとだけで動けるって意味で、ありがたいけどね？」

オクサイド「活躍の場はないだろうがな？」

言ったオクサイドは、そのまま部屋を後にするようだ。

そんな２人の様子を、スパンツだけがやれやれと言いたげな顔つきで見つめていた…。

第６９章　帰りたい過去（前書き）

（今回はどこだろう？）

セブンス「はいはい、みなさ～ん」

フォルナ「インドラ一才能に溢れた、★もちろんその才能は世界でも随一★なラピスラズリがお伝えする、ＭＳ紹介コーナー。今回は…」

スリス「フロンティアガードに来てる、スリスで～す。さっそく紹介を始めるね？」

セブンス「お、スリス、時事ネタだな？」

スリス「任せてよ！　でフロンティアガードなんだけど、こうＭＳを造るでっかい工場が…

…ないね」

フォルナ「あら？　でも、たしか事前の報告書には、ガンキャノンやジムスナイパーの生産が得意って…？」

スリス「だって見当たらないものは、見当たらないんだし…。あれあれ？」

スリス「すいませ～ん。　それってジムのパーツですよね？　トラックに積んで、どこに持って行くんですか？

もしかして、秘密の工場があるとか？」

？？？「秘密の工場？　かもな？　ＭＳはそこで造っとるし」

（↑プライバシー保護のため、音声と口調は変えてあります）

スリス「やっぱり。　で、そこではたくさんのＭＳが…」

？？？「そうじゃな。　ワシとスミスじいさんがな、こうトンテンカンと…」

スリス「…いや、おじさん。　嘘言っちゃダメでしょ。　ＭＳってのは、工場でこうガーっとやって、ゴーって運んで、バシっと組み立てる物じゃ…」

？？？「そんな魂のないＭＳは認めん！　ＭＳは手作りに限る」

スリス「限るのは勝手だけどさ？　こんなんでＭＳをどのぐらい造れるの？」

？？？「スミスじいさんはすごいぞ？　月にＭＳを６機も造りおった」

スリス「……。」

？？？「そうかそうか。　凄すぎて声も出んか」

スリス「…まあ、それでいいよ…。　じゃ、オデッサからでした～」

セブンス「…ねぇ、フォルナ？　インドラって、月にＭＳ何機ぐらい造れるの？」

フォルナ「詳しくは知らないけど、確実に二桁は違うと思うよ？」

セブンス「だよね～」

（フロンティアガードは、ＭＳの生産体制に不備があるようだ）

第６９章　帰りたい過去

～マリンピア王宮にて～

マンダラ「シノノメ様…」

シノノメ「……。」

シノノメはずっと塞ぎ込んでいた。　理由は…　１つしかないだろう。

シノノメ「サヤリはまだ、部屋から出ても来ぬか」

マンダラ「はい…」

エヴァニーと引き割かれ、マリンピアに連れ戻されたサヤリだったが、その心は深く傷ついていた。

国王にして、父のシノノメも塞ぎ込んでいたが、サヤリはそれ以上で、マリンピアに帰ってからずっと、部屋を１歩も出ないのだ。

王女の部屋であるから、部屋の中と言っても、庶民の家ほどもあり、メイドも付いていた。　だから、生きるのに窮する事はないだろうが、そのメイドたちが怖がるぐらい、サヤリは何も喋らず、何もしようとしないのだという。

シノノメ「…やはり私は、人の親になるべきではなかった…。　私の子でなければ、サヤリはもっと自由に羽ばたけたものを…」

王女が、窮屈な身分なのは否定できまい。

しかし大半の貴族達は、それは仕方ないものと、割り切った日々を過ごしているはずだった。　そもそも、メリャーナがマリンピアとは比較にならない大国、帝国の皇女に生まれているが、境遇に不満を持っているという話は聞かない。

マンダラ「私が、折りを見て話してみます。　もうしばらくだけご猶予を…」

マンダラが、か細い声でそう言った。　猶予と言ってはいるが、時間をかけたら見通しが立つ訳ではないのは、その表情からして明らかだが。

シノノメ「ふぅ…　頼む。

サヤリに儂が恨まれても構わぬ。　蔑まれても構わぬ。　あの子が、心安らかに過ごしていけるようにな…。

もし難しいならば言え。　その時はマリンピアの領地、すべて帝国に返上しよう…」

マンダラ「そ、それは！」

マンダラが驚いて当然の事を、シノノメは口にしていた。

シノノメ「サヤリの幸せが、王女である限り叶わぬものならば、解き放ってやるしかあるまい。　マリンピアの民も、望まぬ女王に統治されては、かえって不幸になるだけであろう…」

シノノメはそれだけ言うと、メイドから一包の薬を受け取り、喉に流し込んだ。

顔色も優れてはいなかったが、その原因が病なのか、サヤリなのかは、シノノメのみが知るところである…。

【2】

ナディア「エヴァニー。　長いこと空けて悪かったね…。　今何か作るからさ？」

ナディアは家に戻ると、何の気なしにそう言った。

フロンティアガードに来たグランズだったが、その待遇は悪くなかった。　エヴァニーにはこうして住まいも貸し与えられたし、他の仲間達も、元からフロンティアガードにいた者たちと、別け隔てなく扱われているという。

それはナディア自身が証明していて、整備の腕を買われた彼女は、朝昼夜の3食全部を、ＭＳのハンガーで食べねばならないほどの忙しさ。

後で知った事だが、フロンティアガードは反乱を起こして長いものの、激戦を戦ってきた訳ではなかったため、グランズのメンバーの実戦経験が貴重視されたのだった。

ナディア「なんだエヴァニー。　まだ怒っているのか？
殴ったのは悪かったし、サヤリと引き離したのはすまないと思っているさ。　でも生きてさえいれば、また会えることもあるだろう？」

エヴァニー「…ァ……ハ…。」

エヴァニーはナディアの顔を見ず、テーブルに突っ伏していた。
何かハアハアという息遣いが聞こえるから、眠っている訳ではないようだ。

ナディア「どうしたんだい？　まさか、風邪でもひいたんじゃないだろうね？　顔を貸してみな…

…

…

…な、なんだこりゃっ！！！」

エヴァニーの顔を覗き込んだナディアは、驚いて叫んだ。

無理もなかった。　なぜなら、ナディアがその時見たのは…

エヴァニー「…リ、リナレス…　おかえり…　き、今日は遅かったんだ…ね？」

蒼白い顔をし、間違えるはずのないナディアの顔を見間違えた。

いや、死んだはずのリナレスの名前を呼んだのか？

エヴァニー「リナレス…　僕を1人にしないでよ…。　そうだ、今晩一緒にご飯でも食べないか？　きょうは父さんも家にいるし、何より母さんの料理は…」

あり得ないはずのことを呟くエヴァニー。

何故なら、エヴァニーの両親はすでに6年も前に亡くなっていたからだ。

そもそも、両親を帝国が毒ガスで惨たらしく殺された事をきっかけにして、エヴァニーはレジスタンス活動を始めたはずだ。

エヴァニー「あ…。　もしかして、学校でルフィアと話してたのを怒ってるのか？　あれはただ、ルフィアが分からないトコがあるって言うから…」

ナディア「こ、これは一体…」

意味不明な事を、1人話し続けるエヴァニー。

その内容は、エヴァニーが子供の頃の事のようだったが、思い出話をしている訳ではないようだ。　何故なら、エヴァニーの話には何

の脈絡もなかったし、何より目が…

…腐った魚のような目をしてしたのだ。

ナディア「エヴァニーっ！　一体どうしたっ！　正気に戻れっ！！」

ナディアはエヴァニーの頬を張り飛ばしたが、エヴァニーからまともな反応が返ってくる事はなかった。

そればかりか、ナディアとリナレスの区別がつかないのか、リナレスにしきりに詫び続けている。

ナディア「…な、なんてこった…」

あまりの光景に、後ずさるナディア。

パリンっ！

その足が、何かを踏んだ。

ナディアが見ると、それは小さな瓶のようで、かすかに液体のような物が残っていた。　それはまるで、注射の薬を入れておくような…。

ナディア「エヴァニーっ！　あんたまさかっ！！」

エヴァニー「リナレス～　そんな所を触ったら、くすぐったいよぉ～」

そんなエヴァニーの服を、ナディアは隅々まで探る。　そして見つけた、さっき踏んだのと同じような小瓶。

その小瓶を、ナディアは帝国軍の頃に見た記憶があった。

ナディア「エヴァニーっ！　あんたって奴は！　いくら辛いからって、リターナなんか使う馬鹿がいるかっ！！」

リターナ。

宇宙歴の時代になっても、麻薬はまだ撲滅しきれていなかった。
いやむしろ、死の恐怖に怯えた新兵や、明日をも知れない暮らしをする者には、麻薬に手を出す者も少なくなく…　リターナもその1つだった。

打った人間は、自分の望む過去に帰れると言われ、それ故についた名前がリターナ。

ただし一度打ったが最期。

極めて依存性が強く、薬が切れたなら、現実世界の全てが、己にとって陰惨に見えてしまう。

そして、それに耐えきれなくなった者は、その苦しみから逃げ出したいあまり、自ら命を絶ってしまうという、恐怖の合成麻薬である…。

【4】

エヴァニー「今行くから、リナレス…。　父さん…　母さん…　愛してるよ…」

エヴァニーは、寝てまでも過去に帰っているようだった。

一度手を染めた人間を、死ぬまで離さない。　その執拗なまでの効果の長さもまた、リターナの魔力なのだ。

ベン「…しかし、こうまでして帰りたい過去って、あるものなんですね…」

ベンの哀しげに言うが、さりとて納得はしていないようだった。

ところで、なぜここにベンがいるのだろう？　その鍵は、実はナディアが握っていた。

エヴァニーが、リターナに手を染めていたのが分かったあの日以来、ナディアは毎日のように通っていた、フロンティアガードの自警団にも顔を出さなくなった。

もちろんその理由は、エヴァニーの看病をするためだ。

なにしろ、リターナが切れたエヴァニーの苦しみ様は尋常ではなかった。　あまりの苦しさのせいか、見境なく暴れ散らす事もしばしば。

しかも、誰も見ていないとなるや、どこからかリターナを持ち出して来ては使ってしまうため、ナディアには気の休まる暇すらなかった。

そして今日、たまたまナディアを見かけたベンが、彼女の疲れた顔を心配し、しつこく問い質した。

ナディアが何も喋ろうとしなかったため、ベンは止める彼女を振り切って家へ押し掛け…

エヴァニーを見つけた。

全てを悟ったベンは、兄貴分の茄子笛とミケルの力を借り、鎮静剤を打ち、何とか暴れるエヴァニーを寝かしつけたのだ。

茄子笛「…しかし聞けば、１０やそこらでこいつは、両親や知り合いをみんな殺されちまったんですってね…」

ナディアは、一通りの事情を3人に説明していた。

エヴァニーの両親が、帝国の毒ガスに殺されたこと、さらには今ま

での戦いと、先の戦いに、サヤリとの関係…。

その波瀾の人生を前に、3人はエヴァニーを責めなかった。

しかし、だからといってエヴァニーに差し伸べてやれる手があるはずはなく、こうして薬で寝かし付け、寝顔を見守るしかないのだった…。

第７０章　それぞれの忠義（前書き）

（次はどこかな？）

エイス「今回は、中国のＭＳの紹介なんだ～。
担当はあたし。　インドラ一、世界一愛に生きてるラピスラズリ…
★その中でも断トツでトップの★　エイスがお伝えしま～す」

セブンス「ちょっ、エイス？！　最初のセリフは俺の担当…」
フォルナ「…わ、私、愛に生きてる覚えは…」

エイス「それじゃさっそく、あたしの潜入のＶＴＲどうぞ～」

エイス（ＶＴＲ）「はい、今回は中国に来てるエイスだよ～。　さっそく中国のＭＳなんだけど、中国軍はユニオンフラッグを使ってるみたいだね～。　でも、機種はこれだけ。　何か悲しくない？」

？？？「こら～　中国をそれだけで締めくくるでない。　軍はあくまで軍。　他国で言わば量産機じゃ。　それよりも、中国と言えばファイターじゃろが」
（↑プライバシー保護のため、音声と口調は変えてあります）

エイス「そなの？　そう言えばあっちのステージで、変な赤い粉が飛び散ってるね？」

？？？「ステージ…？　変な赤い粉…？

違うぞ！　あれは神聖なる闘技場で、舞っているのはＧＮ粒子！　太陽炉やトランザムを知らんのか！」

エイス「ぜんぜ～ん。　だってあたし、田舎臭いの興味ないし～」

？？？「インドラの小娘にに、田舎呼ばわりされたくはないわ！

とにかく、帝国も諦めた太陽炉を運用し、研究を続けているのは中国だけなんじゃ！　他にもＭＴシステムとか、いろいろ帝国がモノにできなかったシステムを、中国は完成させたのじゃ！」

エイス「ふ～ん。　それって強いの？」

？？？「バカかお前は！　トランザムのスピードについて来られるMSなど、世界におらぬわ！　MTも、その精密な動きとパイロットの実力を余すところなく性能に反映させる、驚異のシステムなんじゃ！」

エイス「はいはい。　中国はすごいすごい」

？？？「なんじゃ、そのやる気のない…」

エイス「はい、時間が来たからここまで～。　中国に行ってもモテモテのエイスでした～」

セブンス「エイス、目立ち過ぎ…」

フォルナ「その割に、真面目に仕事してないし…」

（それでも、続いてしまうと思われる）

第７０章　それぞれの忠義

パンドラールで、いつものように脳量子波が飛び交う。

ＤＲ．マンソン〔ザキラ様。　お待たせしてしもうたの。　御命令のエージェントの増強、第四陣が完了したぞ？

今回の奴らは、特殊技能に重きを置いておる。　一体一体の戦闘力では、先のＷやＸはもちろん、Ｐなどにも及ばぬが、こやつらしかできぬ技能を持たせてある〕

イエスマン〔ドクター。　一陣は無能揃い。　二陣は脱走者を出して、三陣は制御不能なんですから、そろそろ成功作を出していただかないとぉ…〕

イエスマンが、ザキラの言葉を待たずして、ＤＲ．マンソンの過去を責める。　相変わらず、この男はこういった事を言っている時には、実に楽しそうな顔をする。

ＤＲ．マンソン〔お主が言うでないわ！　一陣は試作じゃと、最初から言うておいたであろう！　二陣にしても、Ｅを逃がしたのは確かにミスじゃが、Ｐは予想以上の出来であったし、三陣が言うことを聞かぬのは、そもそもまだ完成しておらんのを、お主が勝手に使っただけじゃろうが！〕

言葉からすると、完成したエージェントも、調整された時期によって、さまざまなタイプがあるらしい。　そして、イエスマンとマンソンは、その使い方で対立しているようにも聞こえる。

ザキラ〔…つまらぬ言い争いをしている暇はない。　私は過去は問わぬ。

ただし、代わりに何かを為せれば、だ。　一陣が力足りぬと言うなら、補う手段を考えよ。　Eを逃がしたならば、それに勝るエージェントを作れ。

WとXは…　能力自体は高いからな。　私が面倒を見ぬでもない〕

DR．マンソン〔さすがザキラ様じゃ。　どこぞやの嫌味な男とは、器の大きさが違うわ〕

脳量子波ゆえ、いまマンソンがどんな表情をしているのかはわからないが、おそらくは、厳しくもすべてを許容するかのような態度に、感銘を受けているのだろう。

イエスマン〔ボスもそゆトコ、甘いですね～〕

苦笑いなのか、一風変わった笑みを浮かべるイエスマン。

DR.マンソン「ふん。　甘くしてもらっとるのは、お主も同じではないのか？　調整も済まぬままWを使った割には、宇宙は静かなままのようじゃが？」

宇宙は静か。　そんな訳はなかった。

今までの海賊討伐はともかく、今起こっているのは、サイド1つが丸ごと帝国の手に戻るかどうかの戦いなのだ。

戦っているのも、帝国でも屈指の有力貴族たる霧雨と、養子に出されたとは言え、仮にも皇女のマヒロである。

元老院の口の悪い者に言わせれば、

『霧雨の小倅は、傍流の皇女をかつぎ上げ、宇宙を我が物にする気だ』

となるくらいなのだから。

イエスマン「まだまだ、お楽しみはこれからですよぉ～」

止めはこの『これから』発言。

ただ、エージェント達の会話は、規模小さく見積もっているだけでもないようにも感じる。　もしかしたら、何か別の基準でもあるのだろうか？

ジェイソン「…どちらにしても、後始末は私に押し付ける気なのでしょう？　これで何回目なんですか…」

話に参加せず、ただ聞いていただけのジェイソンだったが、結末を予測できたのか、こうぼやいた。

イエスマン「何を言ってるんです？　それがあなたの存在価値じゃないですか？」

ジェイソン「謝るのが、私の存在価値ですって？！」

その言葉には、さすがのジェイソンも怒りを露にした。

ザキラ〔エージェントＪ。　イエスマンの口の悪さは、今に始まった訳でもあるまい。

それにお前たち3人にだけは、私に意見するのを許している。　その事実こそが、私がお前たちに下したものの全てだ〕

そう言えば、同じエージェントのＰなども、どちらかと言えば弁が立つ方である。

しかし、彼がザキラに直接何かを進言した事はないし、ましてや拒否などしていない。

つまり、ザキラの言葉をそのまま受け取るならば、同じエージェントでも、イエスマン、ＤＲ．マンソン、ジェイソンだけは、一段高く見ているという事になる…。

【2】

イエスマン「さて、ボス。　さっきの話にちらっと出てきましたが、いなくなっちゃった人の代わりに、あの小僧を使ってみようかと思いましてぇ～」

言われてさっそくなのかどうなのか、次なる策をザキラに言上するイエスマンである。

ちなみに、離れた場所にいる、ＤＲ．マンソンとジェイソンに聞かせる気はないのか、会話は脳量子波ではなく、普通の言葉が使われていた。

ザキラ「予定通りの事だ。　好きにせよ。　ディアボロで気が狂う事も無かったようだしな。　目論見が当たって嬉しかろう」

ディアボロシステムを使いこなすのは、容易な事ではない。　はっきり言って、精神的に負担が大きすぎるのだ。

だから、使える人間を発掘した事は、イエスマンにとっての功績になったとも言える。

イエスマン「ありがとうございま～す。
ですがね、ボス。　せっかくだから、もう一捻りしたくなりましてぇ～」

ザキラ「…狸共の戯れ事を、真に受けた振りをせよ、か？」

イエスマン「はぁ～い～」

ザキラはエージェントのボスでもあったが、れっきとした帝国の宰相であった。

それも権勢において、皇女のメリャーナすら押し退けつつある今、間違いなく帝国ＮＯ．１の存在であった。

それだけに、讒言甘言の類いを言いに来る者は少なくない。　そんな戯れ言など、普段のザキラならば、相手にもしないのだが…。

ザキラ「いいだろう。　たしか命令違反と、メリャーナを危機に晒した事だったか？　私が適当に突き放す。　うまく拾え」

イエスマン「またまたお手数をおかけします、ボス」

それだけ言うと、イエスマンは何も言わなくなった。

それからザキラは、宰相室の電話を使い、何やら話をしているようだった。　すぐ脳量子波を用いるザキラが電話をかけるのだから、相手がエージェントでないことは明らかだ。

そしてザキラが電話を切ってしばらくすると、宰相室の衛兵が、ザキラに誰かの来訪を告げた…。

【3】

ザキラ「まあ、楽にされよ」

そう声をかけた相手、つまり部屋に呼ばれたのは、案の定エルフレアだった。

先のラピスラズリとの戦いで傷を負い、しかも乗機のＢＸ（ブラックエックス）な大破してしまったため、治療と修理、リハビリを行う間、パンドラールに

滞在していたのだ。

エルフレア「火急のお呼びと聞き、取るものも取り合えず参上致しました。　それでご用件は…」

エルフレアの声は、ややどぎまぎしていたが、特に変わった所はなかった。　姿も別段変わった所はなく、傷は完全に癒えたようだった。

ザキラ「まずは、エルフレア殿の快癒を祝っておこう」

エルフレア「ありがとうございます」

ザキラの言葉に、エルフレアは素直に礼を言った。

ザキラ「しかし、今日はエルフレア殿に伝えねばならぬことがある」

エルフレアが息を呑む。　どうやら、ただならぬ雰囲気に気がついたらしい。

ザキラ「傷が悪化してはいかんと思い、今まで伝えるのを待っていたが、そろそろいいかな？
先のグラーフェンの後継に、私がエルフレア殿を推す話だが…

…済まぬが、なかったことにしてもらえまいか？」

エルフレア「なっ、何故でございますか？　宰相閣下！？」

エルフレアにとっては、晴天の霹靂だったのかも知れない。予想を越える事態に、エルフレアの顔が真っ青になる。

ザキラ「それはエルフレア殿ご自身が、一番ご存じではないのか？
私は、戦果を以て後継を掴み取れと言ったはずだ。

しかしエルフレア殿は、先の戦いで何をなされた？　命令違反の飛行ルートを飛んで、不要な戦いを起こし、結果、味方の足を引っ張

った。

託した部隊は全滅寸前。

さらには、自分のＭＳを大破させられ、皇女殿下をお守りしたのは、エルフレア殿ではなく、ディジョンという大尉だったと聞いたが…？」

エルフレアの顔が、さらに青くなっていく。

もう1ヶ月以上も前のことにはなるが、それらは確かに事実だったからだ…。

エルフレア「し、しかしそれは…」

ザキラ「見苦しい！　ラピスラズリとかいう、敵の精鋭のせいにされる気か？　それとも、わずかな数のＭＳや艦を葬ったことで、戦果を上げたとでも言うつもりか！！」

何とか弁明をしようとするエルフレアを、ザキラは一喝してしまう。

たしかに、エルフレアは戦果を上げてはいたが、それはみな、個人技に頼ったものだった。　指揮官として何か優れたものを見せたかと言えば、そうでないのは明らかだった。

ザキラ「エルフレア殿が掴み取ろうとしたのは、グラーフェンの領主、つまりは人の上に立つ身分であろう？

にも関わらず、先の戦いぶりは何か！　目の前の敵ばかり見て、まるで大局が見えておらぬ。　これでは、一兵卒の戦い方ではないか！

そんな人間を、私は領主になど推せぬ。　もし領国に一大事があったならば、何十万何百万の命が、危機に晒されるのだ。　そのような領主を推していたとなれば、私にとっても名折れ以外の何物でもない！」

エルフレア「……。」

その場に崩れ落ちるエルフレア。　しかし今日のザキラには、まるで情け容赦がなかった。

ザキラ「…もう、お会いする事もないであろう。　精々、健やかな余生を送られるとよい」

17歳になったばかりのエルフレアに、余生を送れとまで言うザキラに、取り付く島があるはずもなかった。　崩れ落ちたエルフレアを見すらせず、そのまま部屋を出て行ってしまう。

エルフレア「…な、なぜ…　うぅ…」

エルフレアは、そこがザキラの居室であることも忘れて、泣き崩れた。

その様子はあまりに見るに耐えないもので、やがて声が枯れ、涙が枯れても、その場から動くこともできず…。

【4】

だが、そんなエルフレアに、部屋の隅から声をかけた者がいた。

イエスマン「エルフレアさんでしたっけ?

ボス…　いやいや、宰相閣下も酷いですよねぇ…。　まだ若いエルフレアさんを、こんなにも苛めるなんて…」

その声は、この男にしてはかなり珍しく、慈愛の響きが込もっていた。

そして、声をかけて来たイエスマンを、赤い眼で見上げるエルフレア。

ザキラに直接会っているエルフレアだから、イエスマンがザキラの側近な事は、当然知っている。

エルフレア「…慰めの言葉なら、結構です。　私は宰相閣下のお言葉をはき違え、蛮勇に走ってしまった。　言われてみれば当然です。　いくら個人の技量に秀でても、それで国は治まりません。　私には、領主になる資格などないのです…」

そんな風に嘆くエルフレアを、イエスマンはまた暫く眺めていた。

しかし、エルフレアが一通り嘆ききると、こんなことを言った。

イエスマン「エルフレアさんは、正直ですよねぇ…。　若者らしく率直で、裏表がなさすぎるんですよぉ…」

エルフレアの顔が、またくしゃくしゃになる。　慰めどころか、傷口に塩を塗られたように感じたのかも知れない。

イエスマン「おおっと。　そんな目で見ちゃ嫌ですよぉ～。　僕は僕なりに、エルフレアさんを助けたいって思ってるんですから」

エルフレア「…はい…」

エルフレアはもう泣いてはいなかったが、立ち直った風には見えなかった。　それでも、イエスマンの話を一応は聞く気はあるようだ。

イエスマン「よぉ～く深～く考えてくださいよ?　エルフレアさんは、グラーフェンを継げず、他人に渡すのが我慢ならなかったんですよねぇ?」

エルフレア「……。」

エルフレアは口で言葉を発しなかったが、顔は何を今更と、ちゃんと喋っていた。

イエスマン「確かに、何処の馬の骨ともわからない他人に領主の座を取られたら、悲しいで～す。　僕だって泣いちゃうかも知れません」

エルフレア「……。」

イエスマン「でも残念ながら、『エルフレアさんには』軍人として見所はあっても、領主には向いていなかった…」

エルフレア「もう結構です！」

傷を抉(えぐ)られているだけだと感じたのだろう。　エルフレアは、貴族として最後の意地を振り絞り、その場に背を向けるが…。

イエスマン「おっと、ストーップ！　そんなんだから、宰相閣下に怒られちゃうですよ。　話は最後まで聞いてくださ～い。

グラーフェンを他人に渡さない方法なら、まだ残っているじゃないですか。　兄が駄目なら、弟が継ぐ。

エルフレアさんには、ディオンって弟さんがいましたよね？」

その場を去りかけたエルフレアが急に立ち止まり、イエスマンに向き直る。

思わぬ話の展開に、エルフレアは全身から、さっきまでとは違った雰囲気を醸し出し始めていた…。

【5】

イエスマン「…その弟さん、僕が領主に推してあげましょうか？」

エルフレア「は、はいっ！　い、いやしかし、ディオンはまだ幼く…」

降って湧いた話に、思わず飛び付きかけるエルフレア。

イエスマン「ええ。　だから、弟さんが大きくなるまでは、代官を立てればいいでしょ？　臣下の中に1人や2人くらいは、そんな逸材がいるでしょぉ～」

エルフレアの脳裏に、ラドとロンドの顔が浮かんだ。

そして現実にラドは、エルフレアが出征していた間、見事にグラーフェンを取り仕切っていた。

エルフレア「…しかし、そんな事ができるんですか？　私はどうしようもない失態を…」

エルフレアは、沈んだ声を出した。　よほどさっきの叱責が堪えていたのだろう。

イエスマン「はぁ～い。　いくら僕が宰相閣下一の側近でもね？　代価もなしに、無茶なお願いはできませ～ん」

おどけた態度で言うイエスマン。　しかしエルフレアは、その中のフレーズを聞き逃さなかったようだ。

エルフレア「代価とおっしゃいましたか？　私にできる事なら、何でも致します。

どうか、グラーフェンを…　ディオンを、良しなにお取り計らい下さいっ！！」

土下座し、額を床に擦り付けるエルフレア。　そんなエルフレアに、イエスマンは満足そうにこう言った。

イエスマン「…エルフレアさんは、一兵士としてなら大変優秀なんですよぉ～。

そのエルフレアさんが、ボスのために全てを捨てて戦ってくれるなら…。　ちょうどエージェントが、足らなくて困ってたところでしてぇ…」

【4】

一方、その頃。

帝都の研究所に、残る2人の側近の姿があった。

DR．マンソン「あの男の増長ぶり、最近目に余るおるわ！」

憤然と言うマンソンが、誰の事を言っているのかは、言わずとも明らかだろう。

ジェイソン「確かに、真っ先にザキラ様の復帰をお助けしたのは我々で、あの男が側近となってから、まだ１０年も経っていないのは事実ですが…」

DR．マンソン「前は、皇太子ランドルフの近くにおったとか？今後ザキラ様が力を持つと見て、乗り換えただけであろう。

あのような変節漢に、なぜ古参の儂が舐められねばならんのじゃ！」

格好だけからすれば、マンソンはけっこうな歳…　ザキラよりも歳上に見える。　イエスマンがザキラと同じくらいやや下で、ジェイソンだけがかなり若く、３０代のはずだ。

ジェイソン「…私は、亡き父とザキラ様が、旧知であった故にお仕えした身ですから…」

自分だけが若いからか、それとも性格なのか、ジェイソンは控えめだった。　しかし、そんな態度が逆にマンソンに火をつけてしまったらしい。

ＤＲ．マンソン「親や歳など関係ないわ！　要は長年、ザキラ様を支えたのが誰だったかという話じゃ。

苦しい時をお支えしてこそ、真の主従というものであろうが！」

言葉は怒りに満ちていたが、その意味は分かりやすかった。　今のように、ザキラが帝国で重きをなすようになる前からの臣下が、このＤＲ．マンソンとジェイソン親子の３人で、イエスマンは、後から来たの新参者に過ぎないと言いたいのだろう。

DR. マンソン「しかも、儂のエージェント達とディアボロプランを、勝手に弄りおってからに…。　ここまでたどり着くのに、何十年かかったと思っておるのか！」

マンソンの怒りは一向に収まる気配がなかったが、それではどうにもならないと思ったのか、ジェイソンは静かにこう言った。

ジェイソン「…ですがドクター。　そんな過去に囚われないのも、ザキラ様の良い所なのでは？　我々も過去に縛られていては、余計にあの男を増長させるだけです…」

ジェイソンは、そうマンソンを宥めてみる。

DR. マンソン「お主も、そういう所には欲がないの！」

マンソンは、さらに怒りを募らせるかに思えたが…。

DR. マンソン「…しかし、お主の言うことも一理ある。　とすれば、こちらも何か手を打たねばならぬが…」

おもむろに、何か考えを巡らせ始めるマンソン。　怒ってはいたが、ジェイソンの忠告は聞き入れたらしい。

ジェイソン「今ザキラ様は、エージェントに関心を向けておいでです」

DR．マンソン「そうじゃな…。　ならばやはり、こちらも良き手駒を作るしかあるまいて」

その言葉からすると、イエスマンがエルフレアを弄んでいるように、2人もまた、誰かを見つけようと言うのだろうか？

ジェイソン「エージェントに適する人間は、タイプにもよりますが、かなり貴重なのでしょう？　そうやすやすと見つかるのですか？」

ジェイソンは、当然の懸念を口にする。

DR．マンソン「そんな事か。　探す必要などないわ。

エージェントになるには…　と言うか、ディアボロをより使いこな

すには、負の感情が昂れば良い。　ならば、昂らせるまで」

ジェイソン「…なんと…」

ジェイソンはやや驚いた様子だったが、そんなことを意にも介しないで、マンソンは告げる。

DR．マンソン「エージェントUを使う。　傭兵風情に敗れ、ゼフィランサスの強奪に失敗したクズじゃが、精神に脆い所がある。揺さぶってやれば、大化けするやも知れん」

ジェイソン「揺さぶりですか？　ドクターには、良い考えがあるようですね？」

ジェイソンもまた、マンソンの策が気になってきたようだ。

DR．マンソン「あ奴、孤児院の出だったはずじゃ。　肉親すら知らぬ身の上じゃが、同じ境遇の孤児共を、変に大事にしておった」

ジェイソン「…人質に取る？」

そして、少しだけ先を読むジェイソン。

ＤＲ．マンソン「卑怯な手は嫌いか？」

ジェイソン「いいえ？　弱点は持つ方が悪いのです。突かれたくないなら、隠せばいい。

そうしない、そうできないのは、無能だからです」

あっさり言い切ったジェイソンに、マンソンは満足気に頷く。

ＤＲ．マンソン「ならば、人質は任せたわ。手が足りねば、ＰとＱを使え。儂はちとＭＳをな…」

謀議は纏まったようで、さらなる動きがパンドラールに生まれる…。

第７１章　黒き死の風（前書き）

（また始まる…）

セブンス「やっぱり最初は決めないと」

フォルナ「今回も紹介コーナー始めま～す。　担当は…」

トゥーエ「インドラで一番セクシー、　★それは世界でも同じ★なラピスラズリで～す」

セブンス「ちょと、トゥーエ？！　セクシーって、ラピスラズリの半分は男なんだけど？」

トゥーエ「いいじゃん？　セクシーな男。　こう、鍛えられた筋肉がちらっと見え隠れして、さらに鎖骨とかがや～ん」

フォルナ「…エイスとトゥーエって、ラピスラズリの中でも、かな

り独特なキャラしてない？」

セブンス「俺も前から思ってた」

トゥーエ「そんなにホメちゃダメだよ～。

ってか、本題イクからね？　今回は帝国のＭＳ紹介を、なんと３回に渡ってお伝えしちゃうんだから」

フォルナ「…微妙に、変換間違ってない？」

セブンス「つか、３部作って勝手に決めてる…」

トゥーエ「だって、帝国は広いから、１回じゃ伝えきれないんだもん」

セブンス「…まあ、たしかに」

トゥーエ「という訳で、今あたしがいるのは、な～んか見覚えのあ

る気がする研究所で～す。　ここでは、本編であったように、新型ＭＳの運用試験がされてるみたいだよ？」

セブンス「…で、どんなＭＳがいるの？」

トゥーエ「う～ん。　たくさんあるのは、ハイザックとガルスＪみたいだけど、新型って感じはしないな～。

あ、それよりこっちのが強そうじゃない？　えっとすいませ～ん。
　このＭＳってなんて名前ですか～？」

帝国兵「…ああこれか？　これは、帝国軍がこれから量産する、ギラドーガというＭＳで…

…じゃなくって、貴様は誰だ！　どこから入った！」

トゥーエ「…そんな堅苦しいことといいじゃ～ん。　あ・な・た・に、逢いに来たのぉ～」

帝国兵「…ゴクリ…」

（帝国兵を誘惑しつつ、トゥーエの暴走は続く…？）

第７１章　黒き死の風

大混乱の霧雨艦隊を、楽しそうに見物する者が１人…。

彼が乗るのは、艦艇とも呼べないようなシャトルで、その横に、積まれていたとおぼしきＭＳが１機。

まだ何機か積んでいるのかも知れないが、このシャトルでは、ＭＳ１０機はとても運べまい。

Ｗ「いい加減にしろ」

シャトルのコックピットに、その１機のＭＳ…　漆黒のウイングガンダムが、バスターライフルを突きつける。

Ｘ「…Ｗさんも、気が短いザンスねぇ～？　ボスの言いつけを守ってくれないと、ミーが君を殺さなきゃいけなくなるザンスよ？」

戦闘力が皆無のシャトルに乗っているのに、その男は全然動揺していなかった。　その様子はまるで、もし本当に撃たれても、自分は死なないと信じているかのようにすら見える。

X「しっかし、待った甲斐はあったんじゃないザンスかぁ～？　どうやら大事な艦がやられちゃったみたいザンス。　パニックになってマスから、楽しみ易いと思っちゃうザンスよ？」

W「どうでもいい。　さっさと殺らせろ」

X「しょうがないですねぇ…」

言ったXが、通信機に向かう。

X「え～　緊急事態、緊急事態ザンス！　実験中のＭＳが、暴走してしまったザンす。　敵味方の区別もできない、ものすっごい危ない奴なんザンス～。　早く逃げないと死んじゃいますよぉ～」

一方的にまくし立てる。

霧雨兵「…なに？　どういうことだ？！　貴官の所属と名前を…」

X「緊急だから、もう話してる余裕はないザンス～」

しかも、相手の質問には答えず、通信を切ってしまう。

X「さあ、段取りは整ったザンスよ？　逝ってらっしゃいザンス」

W「……。」

無言のまま、Wはバスターライフルを構え、放つ。　戦いの始まりを告げる狼煙にしては、凄まじすぎる光が、霧雨の艦隊に向かって伸びていく。

X「あ～あ～。　射っちゃったザンス～。　3回しか射てないのにぃ～」

W「…うるさい」

グチグチ言うXを、さも鬱陶しげにあしらうと、Wは機体を変型させ、一気に加速させる。

漆黒のウイングガンダム…　BW（ブラックウイング）は、あっという間に漆黒の宇宙（そら）に消えた…。

【2】

霧雨士官「一体何だと言うんだ？　実験機の暴走だと？」

霧雨兵「そう言うだけ言って、通信が切れてしまいましたから…。どこの誰が、誰に宛てた通信なのかも分かりません」

その頃、Xの通信を傍受した、霧雨艦隊のサラミスは困惑していた。

当たり前の話で、Xはただ緊急だとか、危険だとか言うばかりで、具体的なことは何1つ喋っていないからだ。

霧雨士官「悪戯じゃないのか？」

士官は眉をひそめる。

霧雨兵「ですが、帝国の軍用回線ですよ？　そう簡単には侵入…」

『できるはずがないのでは？』

そう言おうとした言葉は、艦の横を物凄いビームが通り過ぎたことで、中断されてしまった。

霧雨士官「なんだっ？！　敵の砲撃かっ？」

士官が慌てた声を出す。　それくらいのビームだったのだ。　直撃していたなら、今頃…。

霧雨兵「…中尉…。　あれ見て下さい…」

言われた先を見た全員が絶句した。

そこに見えたのは、外装がドロドロに溶けた、マゼラン。

この艦と同じく、そのマゼランにもビームは命中していないはずだ。

つまり、側を通っただけで戦艦の装甲を溶かすだけの出力があったことになる。

霧雨兵「…戦艦のマゼランであれですよ？　このサラミスだったら…」

背筋が寒くなる。　語らなくても分かる事態を想像して、誰もが言葉を失ってしまう。

霧雨士官「…はっ！　い、いかん。　こうしている場合ではない！　隣のマゼランに、救助がいるかどうか聞け！　それから、本隊に緊急通信だ。

『我、正体不明の敵から攻撃を受く。　実験中のＭＳの暴走との情報もあるが、詳細は確認できず。　我が艦の現在位置…』

通信内容を手早く口述し、通信兵もまた、それを全艦隊に向かって発信しかけた。

しかしその通信は、全文を送信し終わる前に、突如途切れてしまう。

その理由は、通信のキーを叩きながらふと前を見た兵が、ある物に

由来していた。

…それは、いつの間にかそのサラミスの甲板上に立っていた1機の黒いＭＳで…。

【3】

霧雨「正体不明の敵襲だって?!」

飛び交う通信を裏付けるように、霧雨の艦隊の何隻かが、光球に変わってしまうのが見えた。　離れた位置なので、詳しい様子までは分からないが、何らかの攻撃を受けているのは確かだ。

霧雨「まだ、そんなＭＳを隠していたのかっ！」

霧雨のサーベルがジム3を掠める。　霧雨は襲撃を、フェニックスナイツの差し金と思ったらしいが、案に相違して、ヴァイスはそれを否定した。

ヴァイス「おいっ！　何でもかんでも俺らのせいにするな！　あんたの艦を沈めたのはレアルタだろうが、これは違う！！」

霧雨「言い訳をっ！」

ヴァイス「敵に言い訳する必要があるのかよっ！」

もはや誰もが、訳もわからず戦っていた。　レーダーの効かないミノフスキー粒子下でも、敵味方くらい分かる。　しかし今は、敵がどんな存在なのかも分からないのだ…。

【4】

一方、海賊の駆逐を終えたマヒロの艦隊では…。

帝国兵「…所属不明機…　いえ、このコードは帝国軍機ですっ！帝国のＭＳが、帝国の艦隊を攻撃していますっ！」

マヒロ「何?!　一体どういう…」

マヒロは叫ぶが、当然答えは誰も知らない。

ミク「お姉っ！　そういう時にこそ、自分の…　ニュータイプの勘を信じるんだってば！　あの敵意と殺気の塊が、どう考えたら味方なワケ？」

ミクに言われて、はっとした表情のマヒロ。　せっかくニュータイプなのに、自分の直感を信じないのが悪い癖だと、以前からミクは感じていたらしい。

ミクに言わせるとマヒロは、　『無自覚ニュータイプ』　という事になるらしい。

ミク「あたしがザクで出るからっ！　ケイさんとミサトっちを呼び戻して…　それからお姉は、艦隊連れて逃げるっ！！」

マヒロ「う、うん…」

血相を変えたミクを見て、マヒロは大人しく、この優秀な妹に従うと決めたようだった。　マヒロ艦隊は纏まり、戦場を離脱しようと後退を始める。

ミク「…この殺気…。　頭の奥に釘でも打つような…。　なんて危険な感じ…」

ミクの直感は、さらなる艦艇の爆発で、勘違いではない事が確認されてしまった…。

【5】

さらにその騒動は、すでに撤退に移っていたレアルタたちにも伝わっていた。

女海賊「…何だありゃ？　まだ戦ってる奴がいるのか？」

彼女の疑問は当然だ。　艦隊を攻撃したと言っても、2人のように艦隊のど真ん中まで突っ込んだ海賊はいない。

時間的にも撤退を終えた頃だし、第一、引き返してもう1回攻撃する余裕なんて、あるはずがないのだ。

レアルタ「…方向は…。　ヴァイスさんのいるはずの辺りだな…。
気になるぜ」

リックディアスが一旦止まり、進路を変えようとする。

女海賊「レアルタ？　あんた、そんな傷だらけの機体で、戦場に戻ろうってのかい？」

レアルタ「…何か、悪い予感がすんだよ」

彼女の制止に従わず、リックディアスは向きを変えた。　しかし、その後にゲルググもまた付き従う。

レアルタ「…お、お前こそ、片腕もげてるんだから、大人しく退けよ！」

レアルタは驚いたように言った。　どうやら彼女がそういう行動に

出るとは、予想していなかったらしい。

女海賊「やだね。　あたしはあんたについて行くって言ったろ？
それと、いい加減『お前』はやめてくれないかな？　ああして、２人で仕事もしたんだしな？」

言われて初めて、レアルタは彼女の名前を覚えていなかった事に気がついた。

女海賊「…しょうがないねぇ…。　イリアだよ」

『一番最初に名乗ったんじゃないか？』とは思ったけれど、彼女…イリアは再び自己紹介をした。

レアルタ「いい名前だな？」

イリア「カッコイイから、海賊向きだってよく言われるね」

そう笑いながらも、リックディアスとゲルググは方向を変え、加速を始める。

すれ違う艦は2人を見て弾丸をばら撒くが、その有り様はさっきまでとは違っていた。　統制がまるで取れておらず…。

と言うより、これでは得体の知れない怪物にでも襲われて、逃げ惑っているかのよう取り乱しようだった。

レアルタ「…こんな事が…。　早くヴァイスさんを見つけないと…どこにいる？」

レアルタは自分より、ヴァイスのことを気にかけていた…。

【6】

W「脆い。　脆過ぎる…」

沈んだ艦は、何隻目になったのか？
たった1機のＢＷに、霧雨の艦隊はいいように弄ばれていた。

霧雨士官「そこのＭＳっ！　貴機は味方を射っている！　貴機が攻撃しているのは味方だ…

ぐあぁぁぁっっっ！！！」

次に目をつけられた艦は、いまだ状況を理解しきれていないのか、敵味方識別を盛んに点灯させていた。

しかし、そんなものをＷが気にするはずもなく、ブリッジに飛び移られ、サーベルでめった斬りにされて沈んでいく。

Ｗ「…ここなら、いい花火が見えそうだ」

そう呟くＷは、バスターライフルを構える。

霧雨兵Ａ「貴様っ！　何を考えているっ！」

W「…消えろ、ゴミクズ」

BWを見つけ、1機のシグーがライフルを連射する。　しかし、そのシグーは…

霧雨兵A「よ、避けもしないつ…　ぎゃあああぁっっ！！」

バスターライフルが、ライフル弾、シグー、さらにその後方の艦が10隻ほど…　それらすべてを、文字通り『蒸発』させる。

それはかりか、艦隊を貫いたそれはコロニーにまで達し、その外壁に巨大な穴を空けてしまうほどの威力だった。

霧雨兵B「ば、化け物っ！」

霧雨兵C「お、おい、お前、敵前逃亡は極刑…　ひうわっ！」

あまりの実力差に、逃げ出した兵もいる。

しかし、この2人は運が悪かった。　2機のゲイツはWに見つかってしまい、それぞれ背中と胴体を斬られて、乗機ごと真っ二つになる。

そしてその背後では、コロニーに空いた穴から、おびただしい数のデブリ…

…小さくてよく見えないが、おそらくは人間も含まれる…

が、暗い宇宙に吸い出される。

その横では、傾いているサラミスが1隻。　コロニーの外壁の残骸を避けきれず、突き刺さってしまったらしい。　とてもではないが、コロニー住民を救助できる有り様ではない。

W「…ゴミには、宇宙の暗闇がお似合いだ…」

再び呟くWの前に、悲劇は止まるところを知らない…。

【7】

霧雨侯爵「…馬鹿な…。　コロニーに穴を空けるほどの威力を持つビームを、ＭＳが…」

そう絶句するのも無理はなかった。

コロニーの外壁は、少々の隕石が当たったくらいでは、壊れないように造られている。　撃ち抜こうと思えば、戦艦クラスの主砲でも、一撃では厳しいだろう。

レイ「侯爵！　この感覚は危険過ぎます。　すぐに艦隊を退かせて下さいっ！」

ミクやマヒロと同様、ニュータイプのレイには、何か感じるものがあったのだろう。　普段の穏和な彼からは想像もつかない声と顔つきで、危険を告げる。

霧雨侯爵「駄目だ！　今退けば、薙華が死ぬ！　あれだけを残して、儂だけ逃げる訳にはゆかぬ！」

ところが案に相違して、霧雨侯爵は撤退を拒否した。

霧雨大佐とは、始終意見が対立していて、会えば言い争いになるか、はたまた歯牙にもかけない態度をとられてしまう侯爵だったが、意

外にも叔父らしき感情を持っていたのか？

レイ「ですがっ！」

リバル「なら、私とレイで出ます！　侯爵は艦隊の指揮を執って頂けませんか？」

また、意外な言葉が飛び出した。　どちらかと言うなら普段は慎重…　下手をすれば、臆病と言われてしまう事すらあるリバルが、自ら前に出ると告げる。

霧雨侯爵「…分かった。　薙華もよい臣下を持ったな…」

マヒロが渡したザク３に乗ったレイと、専用のゲイツに搭乗したリバルが、揃ってサフランに向けて飛ぶ。　入れ替わるように、霧雨艦隊の主力は後に下がり始める。

そして、レイとリバルが中核となり、バラバラに乱れていた霧雨のＭＳ隊は、ようやく纏まりを見せ始めたようだ。

リバル「大佐の捜索と、味方の救助を優先しましょう。　敵の正体と実力がわからない以上、安易に仕掛けるより、まず被害を抑えることですよ！」

リバルが近くにいたマゼランに飛び移り、接触回線で指示を伝える。
大まかな意味での撤退信号は出されていたが、割り出した敵の位置と状況を知らせて、より安全と思われる針路を伝えたのだ…。

第７２章　レアルタ永遠（とわ）に…（前書き）

（三部作２回目のはずだったけど…）

トゥーエ「…本編が盛り上がってるみたいだから、あたしたちも盛り上がらない？」

帝国兵「…い、いや、私は勤務中…　そ、そもそもだな…」

トゥーエ「…そういう堅いところも、おじ様らしくていいな…」

マヒロ「え、な、何？　何が起こってるの？？？」

セブンス「ああ見えて、トゥーエは頭悪くないからね～。　トゥーエなりに本編に気を遣って、休むつもりなんじゃない？」

フォルナ「…という訳で、引き続き宇宙の戦いをお楽しみください

ね？」

（そういう事らしい）

第７２章　レアルタ永遠（とわ）に…

ヴァイス「…いい加減、人の話を聞けよっ！　帝国狩りが、コロニー本体なんか攻撃するかよっ！　だいたいあんなＭＳ持ってたら、最初からこんな危ない真似なんかしないっ！」

霧雨のゲイツの腕を、無理矢理ヴァイスが抑える。ジム３の肩にビームサーベルが触れたが、ヴァイスは構わなかった。

霧雨「…本気で知らないのか？」

まだそんな事を言っている霧雨。

ヴァイス「あんた、頭がいいようで悪いな！　俺と戦ってる暇があったら、艦隊を助けるか、撤退命令でも出したらどうだ！　指揮官なんだろっ！！」

ヴァイスは、敵であるはずの霧雨を叱咤した。

霧雨「…くそっ！　お前との勝負は一旦預けるっ！」

口調からも憤懣が滲み出ていたが、そんな個人的感情に構っていられる状況ではなかった。

むしろこの停戦ですら、遅きに失しているかも知れない。霧雨が呼び掛けてみても、自分の率いていた艦隊からは、まともな返事は返って来なかったのだ。

せめてもの救いは、霧雨侯爵とマヒロが、自分で率いていた艦隊の離脱に成功したらしい事だけ。

そんな状況に顔を蒼くしつつある霧雨のゲイツから、ヴァイスのジム3は離れなかった。

ヴァイス「…どうせ目障りだとか言うだろうが、お前に付いていかせてもらうぜ？　こっちは艦隊持ってる訳じゃないんでね、情報源が限られてる。　まあその分、守るべきものも少ないんだが…」

霧雨「コロニーを壊すような奴が許せないって言うなら、今この瞬間に殺すのだけは、止めておいてあげてもいいよ」

霧雨は、ヴァイスにぞんざいな言葉を吐いたが、それでも2機は戦うのを止め、連携するようだ。

コロニーすら破壊する敵を前にしては、帝国も帝国狩りも、関係なくなるのは仕方ないだろう。　暗闇の宇宙に生まれ、外壁一枚壊れれば死んでしまうスペースノイドにとって、コロニーそのものは大事にしなければという感情がある。

霧雨「…こっちだ。　さっきのビームの射線から計算すると、コロニーを射った奴は、その辺りにいる…」

冷静に戻りさえすれば、霧雨の計算は冴えていた…。

【2】

ついに、残された艦は２０隻ほどになってしまっていた。

マヒロ艦隊と、霧雨侯爵の艦隊が無事に撤退したことを考えても、艦隊は半分に減ってしまったことになる。

そして、それらまでも容赦なく、バスターライフルの射界に入れるW。

W「…宇宙（そら）の塵になれ…」

言うまでもなく、最期の一撃だろう。　これを浴びれば、コロニーも艦隊も、確実に崩壊するはずだ。

しかし、そんなBWの近くを通りかかったMSが2機。

レアルタ「…あの野郎…。　あの野郎だな？　コロニーに穴なんか空けやがったのは！」

イリア「レ、レアルタどこへっ？！」

BWを見つけるや、急に針路を変えるリックディアス。　あまりに

急だったので、イリアのゲルググは置いていかれかけ、慌ててレアルタを呼び止めた。

イリア「どうしたってんだ、レアルタ？　さっきからあんた、ちょっとおかしくないかい？」

レアルタの行動を、イリアは理解できていなかった。

確かにコロニーに穴を空けた事で、多くの人間が死んだことは想像できる。　しかし彼女は、どちらかといえばコロニー住民を苦しめる立場の海賊だったし、レアルタにしても、正義の味方ではないというのが、彼女の認識だったからだ。

しかしレアルタは、僅かに脚を緩めたものの、依然としてＢＷを指向したまま、こう言った。

レアルタ「…気がついたんだよ。　あの穴の空いたコロニー、よく見れば、ダチの生まれ故郷じゃねぇか…。

いくらダチでも、他人の故郷なんか関係ないかも知れない。　今さら何かしても、空いた穴は塞がらない。

だけどよ？　こんな事しやがった奴を、１発殴ってやらないと気がすまねぇんだよっ！！」

よく見れば、穴の空いたコロニーは『サフラン１０』…。

ゲット・アルスターの出身コロニーだったのだ…。

【３】

そんなやり取りを経て、リックディアスはＢＷを斬りつけた。　先の艦隊戦のせいで、ビームサーベルしか武装がないのだ。

Ｗ「…ゴミが、邪魔する気か？」

レアルタ「コロニーにはなっ！　人が住んでるんだぞっ！　帝国のコロニーじゃなくっても、人は生きてるんだぞっ！！」

Ｗ「ゴミが生きて、何の役に立つ？」

僅かに言葉を交わしてはみたが、最初から議論にもならなかった。

Wには、たとえ戦ってもコロニーに被害を及ぼさないという、スペースノイド同士の常識も、そうあって欲しいという願いも通じていなかった。

と言うか、こんな惨状を作り出したこいつに、果たして人間の常識が通じるのか？

リックディアスのサーベルが何度も振り下ろされるが、それはすべて受け止められてしまう。　避けるという手段を取らないのが、Wらしいと言えば、Wらしい。

W「…消えろ…」

イリア「お前がなっ！」

始めてサーベルを避け、その隙に零距離で射とうとしたバスターライフルは、別の射撃に妨げられた。　飛来するライフル弾を、後に下がってかわすBW。

レアルタ「イリア？　お前、予備のライフルなんか持ってたのかよ？」

レアルタは言った。　イリアのゲルググもまた、先の戦いでロケットランチャーを使い果たし、なぎなたをも失っていたと思っていたのだ。

イリア「あたしが、そんな用意周到な訳ないだろ？　今そこで拾っただけさ。　手癖が悪いのは、山賊海賊の特権なもんでね」

よく見れば、ゲルググが使っていたのは、ジンやシグーが持っている、７６ミリ重突撃銃だった。

イリア「ちなみに、あんたの分もくすねてある」

ゲルググが、同じくシグー仕様の重斬刀を投げて寄越した。

軽く受け取る、リックディアス。　片手にビームサーベル、もう片手に重斬刀では、かなり異様な出で立ちだが、武装が増えたのは悪い事ではないだろう。

レアルタ「サンキュー。　これでいくらかマシに戦えそうだ」

リックディアスがサーベルを振るい、避けたＢＷに重斬刀を叩きつける。

ウインド「…それがどうした？」

しかし、だからと言って、ＢＷを落とせた訳ではもちろんない。

受け止めるだけから、回避を交えた動きにこそ変わったが、２機相手でも、Ｗには余裕があるように見えた。

イリアの射撃をすいすい避けるばかりか、レアルタが必殺の間合いに入るのを許さない。　先の重斬刀の一撃も、かすり傷すらつけてはいなかった。

Ｗ「…ゴミ風情では、俺に触れることなどできん」

余裕な態度は、自信ゆえか？

W「…クズに受けきれるか？」

不意に、ＢＷが反撃に転ずる。　イリアの放つライフル弾をまたもや軽くかわし、自分から間合いを詰めた。

援護しようとレアルタが重斬刀を振るうが、紙一重でかわされてしまう。

さらにビームサーベルを使い、鍔迫り合いに持ち込もうともしたが、Ｗはサーベル同士の戦いに拘らず、リックディアスを軽く蹴り飛ばし、追撃にバルカンの掃射を入れた。

レアルタ「くそっ！」

Ｗの巧みな攻勢に、レアルタは被弾してしまい、機体各所で火花が散った。

イリア「何で当たらないんだ！」

彼女は、Wの動きに驚くと同時に、自分の腕のなさを恨んだ。
自分にもっと技量があれば、レアルタを苦戦させずに済む。　いや、そもそも先の戦いで、レアルタをこんなに傷だらけにせず済んだかも知れないのだ。

W「…二度も言わせるな。　ゴミが俺を傷つける事などできん」
そう言ったWは、今度はイリアのゲルググに近づき、極端に大きくサーベルを一閃させる。

イリア「いくらあたしでもっ！」
イリアはその一撃をかわした。　しかし…。

イリア「なっ、消えた?!」
彼女は次の瞬間、ＢＷを見失っていた。

レアルタ「イリアっ！　横にいるっ！！」

ＢＷは、消え去った訳でなかった。

大振りな攻撃を仕掛けたのは、当てるためではなく、その勢いで機体の姿勢を変えるためだったようだ。　ＡＭＢＡＣ機動の一種ではあるが、それをカモフラージュするため、サーベルを使ったのだ。

かなりの手練れでも、ここまで凝ったことをする人間は、そうはいない。

イリア「ひっ！！！」

イリアは恐怖に駆られ、ライフルを乱射したが、Ｗは冷酷なまでに冷静だった。

ゲルググはライフルを乱射していたから、不用意に近づけば命中したかも知れない。

けれどＷは、わざと一呼吸置き、イリアの動きを完全に見極めてから次の攻撃に移った。

結果、彼女は突撃銃の銃身を握られ、おまけに凄いパワーでねじ曲げられてしまう。

W「…悪あがきだったな…」

冷たく笑ったWは、こんどこそビームサーベルを手にし、ゲルググを一刀両断すべく、振り下ろす…。

【4】

レアルタ「…間に合えっ！！」

そんなゲルググを守るべく、必死に重斬刀を伸ばすレアルタ。　その刀身が、ＢＷのサーベルを確かに遮った…

…が！

W「…それがどうした？」

とっさのことだったため、ビームサーベルではなく、重斬刀で斬り結ばなければならなかったのが、致命的だった。　一瞬はサーベルを受け止められたものの、その熱量に耐えきれず、重斬刀はドロドロ溶け始めてしまう。

レアルタ「マジか？！」

W「…ふん…」

鼻で笑ったWが、サーベルを一旦引き、再び振り下ろすと、重斬刀は絶ち斬られてしまう。

ゲルググこそ守れたものの、2機はほとんど丸腰の状態に逆戻りさせられてしまった。

イリア「…すまない、レアルタ。　あたしにあんたと同じくらいの腕があれば…」

リックディアスに身を寄せたゲルググから、イリアがすまなさそうに語りかける。

レアルタ「…やめてくれよ。　そんなにエースが一杯いたら、俺が目立てなくなっちまうだろ？」

顔がややひきつってはいたが、それでもレアルタは、イリアを不安にさせないように軽口を叩いた。

W「…念仏は終わったか？」

圧倒的な力の差のせいか、Wは2人の会話を遮らなかった。　むしろ2人を追い込んで、楽しんでいそうなくらいだ。

W「…だが、ゴミにかまっているのも飽きた」

冷たく言い放ったWが、今度は真正面から、無造作にバルカンを掃射しながら近づく。　馬鹿正直なバルカンが、歴戦のレアルタには、陽動に過ぎないとすぐに分かった。

けれど…。

コンソールパネルに目を落とす。

赤く光っている所ばかりで、それぐらいリックディアスはボロボロだった。　まともなのは、右脚と両腕ぐらいだ。　つまりこの状態では、たかがバルカンと侮ると、思わぬ大怪我をしかねないのだ。

レアルタ「…避ければ…。　…それはかえって危ないか…」

バルカン自体を避けるのは簡単だ。　だが、それが相手の狙いなのだから、そうすれば余計に危ない。

レアルタ「今無事なのは、腕くらい…　腕?!」

何かを思いついたらしく、レアルタはバルカンの弾を左腕で庇いつつ、逆にＢＷに突っ込んだ。

レアルタ「肉を斬らせてなんとやらだっ！！」

その目論みは当たり、左腕はやられたが、機体はあまり損傷しなかった。　未だサーベルを構えていないＢＷに対して、サーベルを振り上げる。

レアルタ「一気に決めてやるっ！」

Ｗ「…ゴミの浅知恵だったな？」

だが直後、リックディアスが何かにぶつかったような衝撃を受けた。
　そればかりか、グイグイ後に押し下げられてしまう。

ＢＷが、盾越しにリックディアスを押しているのだ。

レアルタ「そんなのアリかよ?!　…うおぉっっ!!」

傷ついたリックディアスは、ただでさえ推力の強いＢＷに押し切られ、近くにあったデブリに背中から突っ込まされる。　正面からはＢＷが押していたから、挟まれた形になり、機体が悲鳴を上げた。

W「…ゴミにしては、頑張った方だったな?」

コックピットに衝撃を受け、レアルタはヘルメット越しではあるが、頭を強く打ちつけていた。　機体も背中のスラスターノズルが損傷し、極端に動きが鈍る。

そして、静かに振り上げられるビームサーベル。

W「…終わりだ」

何の躊躇いもなく、Wはサーベルを振り下ろした…。

【5】

霧雨「戦闘らしき反応がある？　こっちか？」

だいたいの場所は推定できていたものの、多くの艦が沈められデブリと化したこの宙域で、ＭＳ同士の戦いを見つけるのは、意外に手間取る。

しかも悪い事に、レアルタたちは射撃兵装をあまり用いることなく戦っていたため、反応が小さくなりがちだった。

霧雨「仲間がいるんだろ？　通信はできないのか？」

霧雨はヴァイスにそう言ってみる。　霧雨の艦隊はようやく、辺りから姿を消しつつあった。

ヴァイス「艦隊を攻撃した後は、無理せずに下がっているだろう。
仮に残っていたとして、このミノフスキー濃度で応答が期待できるかは…」

言いかけたヴァイスの声が止まる。

霧雨「どうしたんだ？　いや、反応が近い…。　左下にＭＳか…？」

ヴァイス「まさかっ？！」

ヴァイスは目を疑った。

しかし、見間違いでなければ、確かに紅い影がよぎったように見えた。　霧雨はＭＳと言ったが、ヴァイスの目には、それが紅い事は分かっても、ＭＳなのかどうかは判別できなかったが。

ヴァイス「悪いが契約解除だ！　急用ができたっ！」

ヴァイスはジム3を急旋回させ、さっき紅い影がよぎったと思った

方に機体を向ける。

霧雨「付き合ってやるよ。　もし戦ってのがもう1人の方なら、借りがたくさんあるからね？　僕の手で落とす前に、別の奴にやられちゃ、都合が悪い」

霧雨のゲイツもまた、一瞬見えた影を追う…。

ミク「…この辺り、強い想いが2つ…。　ううん、もっと。　それに、何かを反応がある。　まだ生きて、まだ戦ってるんだ。　急がなきゃ！」

ミクのザク3もまた、ニュータイプ独特の感覚と、微かな機器の反応を頼りに、辺りに近づきつつあった…。

【6】

機体はまったく動かせず、助かる要素は1つもなかった。　脱出しようにも、コックピットの前後を塞がれていては、それもできない。

レアルタ「…南無三…」

さすがのレアルタも、最期を覚悟した。

W「…なっ?!　ゴミの分際で俺の…　ええいっ！　邪魔だっ！！」

しかし、振って来たのはサーベルではなく、らしくなく取り乱すWの怒声だった。　レアルタが機体を動かしてみると、押さえる力が弱まっていて、脱出に成功した。

そして、もっとよく見てみると、BWの右腕…　サーベルを持っ

た側の手に、ゲルググがしがみついているのが見えた！

レアルタ「イリアっ！」

イリア「あたしを甘く見るからだよ！　レアルタ、殺れっ！！」

レアルタ「…お、おうっ！」

リックディアスが僅かに下がる。　続けて、ＢＷのコックピットめがけて、渾身の力を振り絞り、サーベルを突き出した。

まさに逆転の勝利である…。

…と思った矢先！！

W「ふざけるなっ！！！」

怒りを爆発させたWに応じるかのように、ＢＷは驚異的な力を発揮して見せた。

ＢＷは、ゲルググを背負い投げでもするかのように前に振り回し、リックディアスの攻撃への盾にしてしまった。

つまり、レアルタが突き刺していたのは、イリアのゲルググ。

レアルタ「…バ、バカなっ！　イリアぁ～！！！」

W「ゴミはゴミらしく死んでいろっ！！」

一瞬の躊躇もなかった。　ＢＷはサーベルで２機を斬り払った。

１回ではない。　３回、４回、５回…。

あえて致命傷を与える場所を避け、手や脚、頭に至るまですべてをバラバラに切り刻む。　それでも足らないとばかりに、バスターラ

イフルまで突きつけた。

レアルタ「…イリア…。　変な事に巻き込んじまって悪かったな…。
俺さえいなけりゃ…」

イリア「いや、あたしはあんたに逢えてよかったよ…。　忘れてた
感情も取り戻せたしね…。

…レアルタ…　す…き…」

煌めいた閃光。

そして全てが蒸発して消えた…。

第７３章　二代目エージェントＥ（前書き）

（再開？）

トゥーエ「今回は、おじ様が帝国のＭＳについてお話してくれるんだって」

帝国兵「ト、トゥーエちゃんのためなら、おじさん一肌脱いじゃうからね？」

セブンス「…いつもと違う始まり方だけど、ここ、冒頭文に間違いないから～」

フォルナ「…どうやら、トゥーエがやらかしてくれちゃったみたいで～。　とにかく、ＭＳ紹介はするから…」

トゥーエ「ねぇ、おじ様？　次の帝国の主力ＭＳが、次がギラドーガなのは分かったけど、他にもいろいろ出てくるよね～？　なんでなの～？」

帝国兵「そ、それはだね。　帝国はお金持ちだから、ＭＳの開発費もたくさんあるんだ。　だから何種類も試作して、その中で一番優秀なのを採用するんだよ。　ギラドーガだって、バウやゼクアインに勝って、制式採用されたんだ」

トゥーエ「ふ～ん。　でも、バウやゼクアインなんかも優秀なＭＳだよね？」

帝国兵「そうだね？　だからそういうＭＳは、指揮官用や特殊部隊用にするんだ。　欲しがる貴族に、あげちゃったこともあったかな？」

マヒロ「ザク３ってカッコイイよね～。　性能は高いし、改造して使っちゃえ」

帝国兵「…って、７、８年くらい前に言ってた皇族がいたような気がするな。　ガルスＪが量産される時の事だね」

トゥーエ（…そう設定して、辻褄を合わせてるんだ…）

帝国兵「…あれ？　トゥーエちゃん？」

トゥーエ「はいはい、聞いてるよ～。　おじ様、あと黒いＭＳがたまに出てくるけど、あれは？」

帝国兵「あれかぁ～。　Ｂ何とか（ブラック何とかガンダム）って出てくる奴だよね？

あれは宰相閣下が、エージェントたちのために、ＤＲ．マンソンって研究者に開発させたＭＳなんだ。　性能は高いし、凄い秘密があるらしいんだけど、誰もそれを知らないんだよ…」

トゥーエ「おじ様も知らないんだ？」

帝国兵「…うん…」

トゥーエ「（口調が変わって）じゃ、話はここまでね。

あ、あたし次の仕事ができたから。　バイバイ、おじさん」

帝国兵「えっ？　あれ？　トゥーエちゃ～ん？！」

（手のひらを返したトゥーエは、次回何をするのか…）

第７３章　二代目エージェントＥ

インドラ空爆作戦の、ブリーフィングが行われていた。　それ自体は普段通りで、取り立てて変わった所はない。

何故、私がそんな事を気にするかと言うと、私が皇女のメリャーナ：　様をつけるべきなのか？　と関わった一件、あの研究所での怪物騒ぎがあったからだ。

私はあの一件が何かに影響すると見ていたが、案に相違して、今までは何も変化をもたらしてはいなかった。

レナ「…表沙汰にできないのは、それが極秘な証拠だと思います」

レナは私の思案顔を読んでは、たまにこういう事を言ったりする。

ちなみに、あの１件はレナだけに伝えてあって、ラリーとアルヴィンには知らせていない。　余計な事を知れば、変に巻き込みかねないからな？

？？？「…そこでだ、大尉。　貴官にその直掩を頼みたいが、どう

か？」

ディジョン「護るだけなら、成功率は高いはずです。　それ以上の話は、軍機でしょうか？」

…私を甘く見てもらっては困るな。　余所事を考えていても、ブリーフィングの内容は把握している。

今、声を掛けて来たのが、インドラ方面の一軍の作戦指揮を執っているルムメニゲ中将で、内容は奇襲部隊の上空を護る任務だ。

ただし、奇襲部隊の編成が伝えられていなかったから、それは全軍に通達しない機密事項、いわゆる軍機なのかと聞き返したのだ。

ルムメニゲ「そう解釈して貰えると助かる。　実は、詳細は私も知らされていなくてな。

ただ、奇襲作戦があると知っていた方が全軍の励みになる考えて、エッフェンベルグ閣下から、特別に知らせて頂いただけなのだ」

エッフェンベルグとは帝国軍の大将で、形の上では、帝都付近の軍を束ねる総司令官である。

ただ、インドラはかつて、帝国の皇太子を殺害した国家であり、いろいろと因縁が深い。　それため政治の都合が強く意識された作戦も多く、総司令官が全てを自由にできていないのが現状ではあったが。

今回もそんな感じなのだろうか？

ディジョン「敵を欺くにはまず味方から、とも言います。　そんなものでしょう」

私の言葉に、中将が満足そうに頷く。

ルムメニゲ「ならば大尉は、今より私の指揮下を離れ、総司令部直属となる。　既に出頭命令が出ているから、すぐに出頭してもらいたい」

ディジョン「了解しました」

すぐにと言うことは、ブリーフィングを中座するのかと思い、やや躊躇していたら、ブリーフィングの方が解散になった。

どうやら、空爆にはいつもと変えず、奇襲部隊だけを追加する作戦案らしい。

大規模に増強すれば、敵もそれを察知し備えるからな？　いい作戦かも知れない…。

【2】

レナ「…ついに来ましたね？　最前線で、私たちを試す気でしょうか？」

廊下に出ると、レナがそんな事を言う。　さっきの命令にそんな受け取り方もあるのかと、言われてから思った。

ディジョン「だが中将は、『絶対に私に行かせる』という雰囲気ではなかったが…」

レナ「逆じゃないでしょうか？　インドラ方面のうち、３個師団を統括するルムメニゲ中将ですら、詳しくは知らされない内容…。だからこそ、と思うんです」

…正直、レナの方が私の立場を気にかけてくれているようだった。
　本人以上にその人物に関して、気が回る人間が側にいてくれるというのは、確かに心強い。

私がリトバルスキー将軍ら…　今の政治からすれば、非主流派の将軍たちと強い関係を持ちながら、粛正も左遷もされず、前線で活躍できるのは、レナの気配りのお陰なのかも知れない。

ディジョン「レナの配慮には、いつもながら頭が下がる。　すまないな、気を遣わせてしまって」

レナ「…え、えと、いいんですよ、隊長っ！　私と隊長の仲じゃないですか?!」

急に顔が赤くなり、言葉遣いや呂律が怪しくなる。　なんだかよく分からない反応だが、きっと褒められて照れているのだろう。

ディジョン「ともあれ、詳しい内容を総司令部で聞いてからだな。　もし、レナが言うような意図が隠されているならば、断るのは危険だ。　戦意と戦果で、疑いを晴らすしかないだろう」

レナ「はい、隊長。　帝国軍を昔のように立て直すと言っても、それ相応の地位に立たないといけませんし、戦果も上げなければ、部下も付いて来ないでしょう…」

レナは、私の志を代わりに語っていた…。

【3】

上空を何機もアッシマーが通り過ぎて行き、後にコアブースターとセイバーフィッシュが続く。

いつもと変わらない風景で、帝国、インドラ、どちらからともなく言い始めた『定期便』　インドラ空爆の迎撃に出た部隊が帰還して来たのだ。

マンネ「被害状況はどうか？」

マンネもいつもと同様に訊く。

インドラ兵「はっ！　市街地への爆撃は最小限に食い止めましたし、防空訓練の成果が出て、市民の死傷者は０です。　軍の方は、敵の

撃墜１６、撃破がその倍ほど。　被害はアッシマーが９、戦闘機隊が３０です」

１００機単位での応酬だから、どうしても数は多くなる。

しかしこの空爆で、市民に大きな犠牲が出たり、軍が大打撃を被ったことはなかった。　むしろ、帝国の方が押されている場合もあるくらいで、インドラ蜂起からの約１０年で、帝国がインドラに深く侵攻できたことは１度もない。

ウィナス「無能な誰かと違い、私の考えた防衛配置は完璧だ。　たとえ帝国が今の倍の戦力を投入してきたとしても、十分撃退できる」

マンネ「それは頼もしいな」

マンネの言葉には、不快感がありありと出ていた。

ユービットで義理の母でもあるサンサレア少将を失って以来、ウィナスはマンネに、殊更突っかかるようになった。

それでなくとも、ウィナスは人当たりの良い性格ではなかったから、当然の成り行きか、２人の仲は猿と犬がなんとやらなのだ。

ウィナス「帝国の空爆は、規模こそ大きくても、本気で何かをしようとしている気配がない。　ヒマラヤ越えなど、とうの昔に諦めているに決まっている」

ウィナスの強気な態度は続いた。

この男は、インドラ随一の知将であったサンサレア少将の養子だけあって、知略はかなりのものがあった。　ただし、サンサレア少将と違って、その才気をすぐ鼻にかける。

ダイン「…ヒマラヤは諦めた。　それは間違っていないかも知れない。

ならば、帝国がどういう手に出てくるのかという点についても、叡智を披露してはどうかな？」

やり取りを聞いていたのか、部屋に入って来るなり、ダインがウィナスに言った。

インドラの指導者である『楽園の剣』として、あらゆる配慮を巡らせるダインだが、ウィナスには厳しい言葉をかけることが多かった。

ウィナス「それは私の権限外でしょう？　今の私は、空爆に対する対処しか命じられておりません」

なぜか口を尖らせるウィナス。

ダイン「それならば、権限を与えてやろう。　今からウィナスは、マンネと同じく私直属の作戦参謀だ。　階級も同じ大尉。　これでいいか？」

事も無げに、ウィナスを昇進させてしまうダイン。　こんな圧倒的権力を楽園の剣1人が握るのが、インドラが帝国に反乱を起こす前からの習わしだった。

ウィナス「…では、私の意見を申し上げましょう」

散々勿体ぶってから、ウィナスは語り出した。

やはりこの男は、口では権限がないと言いながら、そう本気で言った訳ではなかったようだ。

ウィナス「互いにヒマラヤを挟んで、要塞が完成してしまっています。　地上からそれを突破したいでしょうが、無理をすれば被害が大きくなる。　しかし、空爆だけでは効果が薄い」

そこでウィナスが間を置いた。　そうしたのは、聞き手に配慮した可能性も十分にあるのに、なぜかこの男がこうすると、もったいぶっているように聞こえる。

ウィナス「ですから、私ならば正面は牽制に止めつつ、別の方面から一軍を送り込みますね。　そうしてインドラを挟み撃ちにする。　挟撃するだけの兵力的余裕が、帝国軍にはあるでしょうから」

正面を攻めて落とせないなら、側面や背後に回る。　よくある戦術ではある。

マンネ「…そこまで帝国が悠長かな？　それに第一、別方面とはどこの事を言っている？」マンネは、相手がウィナスだからでもあるまいが、その見解に食いついた。

ウィナス「それは大っぴらに語れる事ではないな。　敵に備えるという事は、言い替えれば、敵の裏を掻く事なのだから」

マンネ「言うだけ言って、実は予見できないだけではないのか？」

ウィナス「マンネ、貴様っ！　今の言葉、訂正してもらおう！！」

そして論議は、具体性も何もないまま、ただのケンカ騒ぎへと落ちて行く。

ウィナス「説明されねば、まるきり何も分からない人間が馬鹿なだけだ！　それでも貴様、誇り高きインドラの将か！」

罵ったウィナスに、マンネは目を剥き、ついに席から立ち上がる。

ダイン「…2人の意見は分かった。　何とも稚拙で不甲斐ないが、側方背後に気をつけよと言うのだな？」

ここまで聞いてから、ようやく声を発したダイン。　インドラを率いる彼には、2人の確執をどう捉えたのだろうか？

ダイン「場所はいい。　それよりも、力を入れるべきを言え。　今なら聞いてやる」

ウィナス「ＭＳ師団を！」

ダインに、再び己の見解をぶつけるウィナス。　おそらくは、それが彼の結論だったのだろう。

マンネ「増強しろと言うのは容易い。　だが、どうやって？　インドラ軍は精強で数も少なくないが、技術では帝国に遠く及ばない。　現実問題、主力は帝国では前線に出ても来ない、旧式ＭＳをやり繰りするしかないのだぞ！」

またもや意見が食い違う2人。　こうして見ると、わざとそうしているかのようにすら見えるから不思議だ。

ダイン「それについては、私が打てる範囲内で手を打ってある。　それをどう活かすか、もう少し考えを深めて貰えると有り難いな？」

ダインはそう静かに告げた。

こうして見ると、補佐すべき2人の頼りなさが浮き彫りになってしまう。　それをダインは責めないが、本来ならば2人の上に、インドラ最強の知将がいたはずで…。

【4】

アイン「新型くれるって聞いたから、急いで来たよ～」

ダインの告げた『打ってあった』一手。　それらは今、基地に並び…？

ナイル「でもおっさん、今あんの、ザクとグフとドムとゲルググだよな？　今までと変わってないじゃんかよ？」

確かに目の前に並んでいるのは、ザク、グフ、ドム、ゲルググが2機ずつだ。

ウィナス「これは…」

ノン「似てるようで、随分違うね？　だいたい、ザクがビームマシンガン持ってるし」

ただウィナスと、理屈屋のノンはすぐに気がついたようだ。　並べられたＭＳ群は、姿こそそっくりだが、けして旧来の機体と同じで

はなかった。

ダイン「RF（リファイン）と言うのは知っているか？」

ウィナス「するとこれは、姿が似ているだけで、中身はまるで別物…」

瞬時に答えるウィナス。　やはりこの男は、性格はともかく、鋭さは相当なものだ。

セブンス「つまり、性能も上がってるんだよね？」

ダイン「１５０％ほどだな」

ラピスラズリ「おお～」

ラピスラズリ全員から歓声が上がる。　こういった事には、興味があるらしい。

マンネ「ですが、ダイン。　現在のラピスラズリは９人ですが、全

部で8機しかありませんね？」

ウィナス「…これで全部なんですよね…？」

マンネの言葉をウィナスが遮る。　そして、頷くダイン。

どうやら今回ばかりは、ウィナスの勝ちだったようだ。

ウィナス「そんな事だろう思いました。　ラピスラズリを全員集めた意味は、このＲＦ機を専用機にさせるため…。　しかし、全員分すらないとは…」

ダイン「残念ながら、先にマンネが言った通りなのだ。　インドラの開発技術は、リファインしたＭＳを少数送り出すだけで手一杯でな。

結局、みなラピスラズリの頼みなのだから、皮肉なものだ…」

マンネ「…ダイン…」

マンネが低く呟く。

ラピスラズリの人道的な問題を、誰より気にしているのがダイン本人だと、よく知っているからこその言葉だった…。

【5】

？？？「…詳細も知らせずに、任務につけてしまってすまないな」

勧められた席についた私とレナに、大将の階級章をつけた男が、そう詫びた。　言葉は交わしたことはなかったが、おそらくはインドラ方面軍総司令、エッフェンベルグ大将その人だろう。

ディジョン「軍機とは、そういうものだと思っています。　護衛の対象が秘匿されていても、別段不思議にも思いません」

実際そうだった。

護衛部隊が護衛対象を知らず、輸送する兵が何を運んでいるか知らない。　軍に長年いれば、そういった事も少なくない。

エッフェンベルグ「そこまで秘密にはしないが。　とりあえず、奇襲に当たる部隊との顔合わせだけはしておいて欲しい」

エッフェンベルグが従兵に声をかけると、別室から6人の士官が部屋に入って来た。

レナ「…あっ…」

そのメンバーを見たレナが、声を洩らした。　私もそうだったが、その中に知った顔があったからだろう。

エッフェンベルグ「紹介しておこう。　右から順に、アッシュ大尉、バーストン大尉、、チャーリー大尉、フォーリュン少佐、ユーリ中尉、エルフレア中佐だ」

アッシュ「エージェントA、アッシュだ。　護衛なんかいらねぇが、どうしてもって言うならついて来てもいいぜ？」

バーストン「エージェントB、バーストンだ。　ま、海だか空だかで落とされちまったら嫌だからな？　現地まで、安全運転で頼むぜ」

チャーリー「エージェントC、チャーリー。　俺を護衛できるなんて、ありがたく思え」

フォーリュン「エージェントF、フォーリュンです。　ザキラ様のため、今回の作戦はぜひとも成功させたいと思っています。　よろしくご協力を」

ユーリ「エージェントU、ユーリ・ストヴァルよ」

エルフレア「エルフレア・メビ…　いや、エージェントEです。よろしく…」

それぞれに、極めて特徴的な自己紹介がなされた。

エッフェンベルグ「通常、彼らの行動はすべて、宰相閣下の命令の下に行われるが、今回はその作戦上、最低限の指揮統率権を私に貸して頂けるそうだ。　そのつもりでいてほしい」

エッフェンベルグの言葉が締めとなり、その日は顔合わせだけで解散となった…。

【6】

アルヴィン「…あいつ、何か悪い物でも食ったんじゃないか？」

顔合わせの翌日から、私たちディジョン連隊と、何度かエージェント達の合同訓練が行われた。

ただ、合同訓練と言っても、彼らが実際に戦っているところは見せられず、潜水艦への積み込み訓練をしたり、出撃時の手順を打ち合わせしたぐらいだったが。

そして、そこで僅かに覗かせたエルフレアの変わりっぷりに、アルヴィンがこう呟いたという訳で、それぐらいエルフレアは別人だった。

ラリー「最初会った時や、サンザメヤの戦いとでは、雰囲気からして違いますよね？　というか彼、エージェントだったんですか？」

レナ「少なくとも、前に会った時はエージェントだとは、一言も言いませんでしたよね？　それからエージェントになったとしても、別に不思議じゃないですけど、エージェントになると、人が変わる

ものなんでしょうか？」

ディジョン「私に聞かれても困る。　本人に聞いたらどうだ？」

私はそう言ったが、とても聞ける雰囲気ではなかった。　だいたいエージェントたちは、訓練の時しか、私たちの前に姿を現さないのだ。

アルヴィン「それはそうとして、エージェントって奴は、黒いガンダムタイプに乗るのが決まりなのか？」

同じく、私が知るはずもなかった。　しかし、先の戦いで見せたＢ（ブラック）Ｘ（エックス）…　エルフレアの機体が６機に増えたと考えれば、相当な戦力にはなるとは思う。

ラリー「ザキラとかいう、宰相直属の部隊らしいですから、単純に黒が好きで、統一したいだけなんじゃないでしょうか？　物語でも、赤備えとか、黒騎士団とか出てきますし」

アルヴィン「そんなもんか？　趣味なら口出ししても仕方ないか…」

話題は次第にエルフレアから逸れ、他愛もない話になっていった。
面識がある、共に戦ったなどと言っても、エルフレアと私たちが、個人的に親しい訳ではないのだ。

ディジョン「とにかく、与えられた任務は完遂するのが、ディジョン連隊だ。護衛対象は関係ない」

私は再び、マッドアングラー級への着艦訓練を再開した…。

第７４章　打算と友情（前書き）

（ついに3回目…）

セブンス「で、言いくるめたおじさんをすっぽかして、どっかに行っちゃったトゥーエだけど…」

帝国兵「トゥーエちゃ～～ん。　そっちは危ないから帰っておいでぇ～～」

フォルナ「未練たらたらのおじさんは置いといて、今回も紹介コーナーは続くらしいよ？」

トゥーエ「やっぱり、あの黒いガンダムタイプが気になるじゃない？　何だか次のインドラ編で、攻めて来そうな気がするし～」

セブンス「意外に本編読んでるんだ…」

フォルナ「トゥーエって、女のコとしての恥じらいはないけど、頭はいいんだって。　ちなみに、ラピスラズリは全員、怖れるとか、

悲しいとかいう感情がないのは、本編で何回か出てきた通りだから」

トゥーエ「危ない事をやるから楽しいんじゃない？　で、ここが黒いガンダムを造ってる所みたいだけど～」

？？？「1機で戦略を覆すぐらいでなくては、エージェントを乗せる意味がないわ！　例のバズーカとキャノンの再生産はまだできんのか！」

トゥーエ「…何か秘密の凄い武器を造ってる気がするよ～。　もうちょっと近づいてみるね？」

？？？「ドクター。　これ以上の強化は、発射した機体をも巻き込みかねません！　やはり原作程度の威力の方が…」

？？？「うるさいわ！　それでは意味がないのじゃ」

？？？「…分かりましたよ…」

トゥーエ（ちょっと?!　インドラ消えたら、あたしの出番がなくなるじゃん！）

??「それでよい。　これでインドラなど軽く一捻り…　誰じゃ！　そこにおるのはっ！！」

トゥーエ「やばっ！　見つかった?!」

??「捕えよ！　秘密を聞かれたからには、絶対に生かして返すな！！」

トゥーエ「きゃ〜〜〜〜!!!」

（果たして、トゥーエはどうなってしまうのか…）

第７４章　打算と友情

片脚が、膝関節からポッキリ折れてしまっているボルトガンダム。

一方で、鎖に絡め取られ、身動きを封じられたＳガンダム。

実況「判定をもぉぉぉ～～～～し上げまっす！！！

ご覧の通り、両者とも行動不能ですが、頭部に対するダメージがありません！　したがってこのファイト、引き分けとみなしますっっ！！」

観客Ａ「やると思ったぜ、あの負けず嫌いはよ」

観客Ｂ「ここまで期待に沿ってくれる奴も珍しいぜ。　どっちかが勝つより、引き分けのチケットが売れるって、どんだけだよ」

観客席が不思議にざわめく。

ブレンド「さて、機体も無事だったことだし、次なるファイトに精を出すとするかな？」

だがそんな反応を他所に、１人満足げなブレンド。

グリフィン「まさかとは思ったが、狙っていたのか？　曲者ファイターと呼ばれていたのを、今思い出した」

そして、呆れと笑いが半々のグリフィン。

彼らは、銀行強盗の一件で延期になったファイトを戦ったのだが、多くの観客が予想したように、引き分けにもつれ込んでしまっていた。

振り回されるハンマーの軌道を読んでかわし、さらに破壊するという離れ業を見せたブレンド。　それを、接近戦と鎖を使った変幻自在の攻撃を使い分け、形勢を逆転するグリフィン。

しかし結局は、限界寸前の機動の隙をブレンドに突かれ、こうして引き分けた。

グリフィン「けして逃げ腰ではなかった。　にも関わらず、不思議と引き分けていた。　まったく変わった奴だ」

ブレンド「誉め言葉は、ありがたく受け取っておこう」

グリフィン「これで誉められていると思えるのだな？」

ブレンド「死中に活を得るともいうだろう？　相手に決定打を与えさせなければ、必ず次はある。　生きていさえすればな」

軽く笑って見せるブレンド。　果敢に戦ったはずなのに、言葉では命が大事などと語る。　グリフィンならずとも、不思議な気持ちにさせられる男であろう。

グリフィン「まあ、それもよいか。　次は我が輩が勝たせてもらう」

ブレンド「生憎だが、私の辞書には『引き分け』も『撤退』も『転進』も載っているが、実は『敗北』と『玉砕』は載っていないのだ」

ブレンドはそう言って、再び破顔する。

それからも2人は、他愛もない言葉を交わしては、笑ったり、頷き合ったりしていた。　その様子だけならば、もう会って何年も経つ、古き友のようにすら見えたほどだ。

片や、趣味が筋トレで、脳まで筋肉質という噂の巨漢、グリフィン。

だが、もう片方のブレンドは、それなりに長身でこそあるものの、サングラスがよく似合う、細身の二枚目男子。

とある話によれば、親友になるには、互いが共通点が多いか、はたまた真逆なタイプだと良いと言う。　その話が本当なら、この２人は十分に親友たりえる間柄だと言えよう…。

【2】

？？？「陛下っ！　一大事にございます！！」

だが、そんな２人の和やかムードは、駆け込んで来た人物に遮られた。　見た目は５０を過ぎている。　白髪の割に豊富な髪が特徴な、初老の男だった。

グリフィン「…陛下…？？」

ブレンド「どうした、モカ」

グリフィンは、モカがブレンドを陛下と呼んだ事に怪訝な表情を浮かべたが、当のブレンドは、笑みこそ消えたものの、ずいぶん堂々としていた。

ちなみに、『陛下』というのは最高級の尊称で、こう呼ばれるのは、皇帝の位に就いた人間だけである。

だから、メリャーナやマヒロは皇女『殿下』であるし、マリンピア『国王』のシノノメも同じ。　宰相のザキラならば、どんなに権力を握ろうと臣下であるから、宰相『閣下』が尊称になる。

モカ「宇宙に動きがありました。　ある意味、先手を打たれたようなものでございます」

モカは表情を歪める。　その顔は悔しそうでもあり、腹を立てているようでもあった。

ブレンド「そなたが謀られるとは、珍しいな。　何があった？」

ブレンドはその事実が気になるのか、微かに身を乗り出したようにも見える。　しかしモカは、ブレンドの横にいたグリフィンを見咎めたようだった。

モカ「…陛下。　申し訳ございません、お人払いを…」

どうやら話は、グリフィンに聞かせたくない内容のようだった…。

ブレンド「……。」

モカ「陛下！」

それでも、すぐにはグリフィンを追い払おうとしなかったブレンドに、モカは再び険しい声を出す。

ブレンド「…だ、そうだ。　私は構わぬと言いたいが、聞いてしまうと、たぶんろくな事が起こらぬ。　それでも聞いていくか？」

そう言うブレンドの真意を、グリフィンは測かりかねたが、ともあれ部屋を出て行く事にしたようだ。

ブレンド「…そこまでの大事か？　奴らが動いたのか？」

グリフィンが出て行くと、ブレンドは態度を改め、そうモカに訊く。

モカ「陛下のお察しの通りにございます。　駒と結んだ霧雨が、艦隊の半数近くを失っております」

ブレンド「ほう。　しかし、霧雨も一応は帝国の貴族であろう？　どんな奇策を使った？」

２人が話しているのは、先の宇宙の事件…。　実験中のＭＳと戦闘システムが暴走し、サフラン１０と霧雨艦隊を襲ったことなのだろうか？

モカ「実験中と称した機体を暴走させ、霧雨を牽制した模様です」

渋い顔のモカ。

ブレンド「…そう来たか。　しかし、それは悪手だな。　証拠は固

めてあるか？」

だが、ブレンドにショックを受けた様子はなかった。

モカ「はっ。　かの機体を出撃させた時の様子を、張り付いていたコロンビアが、バロールで押さえました」

ブレンド「バロールか。　あんな骨董品の無人カメラで時代が動くとは、何の皮肉かな？」

2人の言うバロールとは、宇宙における高度な索敵用に開発された、一種の偵察機である。

小型で発見されにくく、カメラ精度もかなり高い。　おかげで、開発からかなり経った今でも一線で通用する能力はあるが、いかんせん偵察ＭＳ以下の戦闘力であり、使い勝手はあまり良くない。　そのくせ、コストはかなり高い部類に属するのだ。

ブレンド「その映像、ブラックに渡してやれ。　よき手土産になろう」

ブレンドは、さらに目を光らせたように見え、そんなブレンドにモカは頭を下げる。

モカ「…御意…」

ブレンド「それと、私も動いてみたいが。　月への道筋はつけられるか？」

それを確認してから、ブレンドはさらなる動きをモカに命じる。

モカ「はっ。　多少の危険は伴いますが、宇宙は再び乱れております。　そう簡単に気取られることはありますまい」

ブレンド「中国のファイトは趣味としては楽しめるが、やはり私には為さねばならぬことがあるようだ。

では、映像の件は任せる。　私は、友に別れを告げて来よう」

そう言ったブレンドの顔には、どこかさっきまでとは違った…

威厳のようなものが漂っていた。

【3】

ブレンド「先の再戦の件だかな、当分叶わぬことになりそうだ」

そしてブレンドは、まだ近くで別のファイターたちと話していたグリフィンを見つけると、こう告げた。

どうやら、わざわざグリフィンを探したらしい。

グリフィン「人それぞれ事情はある。　だからそれも仕方あるまい。帝国軍に召集でもされたか？」

グリフィンは何気なくそう言った。　ファイターの経歴欄に、ブレンドが帝国軍予備役少佐と書いていたから言っただけで、大して意味があった訳ではない。

ブレンド「似たようなものかな？　私も多く草鞋を履いている。お前が、ファイターとヤタガラスを掛け持ちしているのと同じだ」

グリフィン「何故それを知っているっ？」

声を上げたグリフィン。　そして『しまった』と言いたげな表情になるブレンド。

そう。

グリフィンはブレンドに、自分が怪盗ヤタガラスの一員だとは、話してなどいなかったのだ。　ファイターの経歴欄にも、もちろん書いていない。

ブレンド「…私としたことが、つまらぬ下手を打ったか。

仕方あるまい。　ここで誤魔化せば、余計な疑念を持たせるだろう。

だから、私の草鞋の１つを教えておく。　私は帝国軍予備役少佐と称して、とある諜報機関を率いている。

お前と懇意になるべく振る舞ったのも、最初はユービットのヤタガラスだと知ったからだった。　付き合いを持てれば、情報網として活用できると思ったからな？」

それはつまり、グリフィンにファイトを申し込んだこと、その後の

銀行強盗退治や、今の友人としての付き合いも、計算づくだったという意味なのか…？

ブレンド「…だが、それは止めた。　さすがヤタガラスと言うべきか、お前は情報端末風情で終わる器ではなかった。

だからまずは、戦友としての関係を築く所から、私は始めたつもりだ」

言葉はそれを否定していた。　しかしその言葉を、どう受け取るべきなのか？

グリフィン「それは、弁解になっていそうで、なっておらぬぞ？　手段を改めても、結局は我輩を利用しようとしたと聞こえる」

グリフィンは怒ってはいなかった。　むしろ、ブレンドを諭しているようにも見える。

ブレンド「人は利用するものだ。　ただ、利用されて損をしたと思

わせなければよい。　そうは思わぬか？」

ブレンドが語るのは、まるで主君が臣下に語る理屈である。

グリフィン「損得で動かぬ人間がいることを、お主ほどの人物が知らぬとは思えぬがな。

まあいい。　お主は言葉に語弊があるが、悪い人間ではない。　我輩に、ブレンドという友は確かにおると言っておこう」

ブレンド「配慮には、率直に礼を言わせてもらう。　では、またどこかでな」

ブレンドは右手を差し出し、2人はがっしりと握手を交わした。
長く力強い握手ではあったが、一旦手を離すと、ブレンドは一度も振り返ることなく歩み去って行った。

グリフィン「…頭から足先まで、とにかく変わった男よ。

しかし、我輩がヤタガラスであることだけでなく、ユービットでの

あらましを、みな知っている風だった。　しかも陛下と呼ばれて…。
まだ何かを隠しているようだが、面白い人間であることに変わりはないな」

言ったグリフィンの脳裏に、不思議とサコンとメリャーナの顔が浮かんだ。

そう言えば自分が中国にいるのも、サコンため、その主メリャーナのためである。　裏で何かを求め、表では違った動きをする。　どこかヤタガラスに近い匂いがしないでもない。

グリフィン「よし、我輩もこうはしておれぬ。　手早く稼いで、可愛い甥っ子にお年玉を用意せねば…」

この日から、グリフィンは7連勝を重ね、末席ながらもキングスクラスのファイターとなる。

そんなグリフィンが、中国で顔が売れる存在になるまで、たいした時間はかからなかった…。

第７５章　幕われる主（前書き）

（捕まってしまったトゥーエの運命は…？）

セブンス「…どうしよう、大変だ。　トゥーエが…」

フォルナ「緊急事態ですが、まだ繋がっているようなので、放送はこのまま続けますね」…

トゥーエ「離せぇ～！　おやぢ、おっさん、このバカアホトンマぁ～」

帝国兵「こ、こら暴れるな！　痛っ！　ド、ドクター、こいつはどうするんですか？」

ＤＲ．マンソン「そうじゃな…。　本編前にネタを知られたからには、いっそ消す…」

マヒロ「はいはいはいはい、ストーップ！！」

帝国兵「なんだ、お前は！　ここは貴様のようなバカそうな奴の来る所じゃ…」

マヒロ「あ、今あたしに失礼なこと言ったな？　あなた、今後本編で出番なしね」

帝国兵「マジか？　ただでさえ俺は、名前なしのちょいキャラなのに！　つか、そんな横暴は許されな…」

マヒロ「ま～だ、編集者に逆らうとどうなるか、分かってないみたいね？

ドクター？　トゥーエちゃんの代わりに、こいつ消しちゃって。トゥーエちゃん消しちゃうと、本編に影響が出ちゃうから」

ＤＲ．マンソン「…仕方ないのぉ…。　誰かこいつを連れて行けい」

帝国軍下士官「了解しました」

帝国兵「…そ、そんなドクター！　何でこんな奴の言うことを…」

マヒロ「分かってるわよね？

原作じゃ後半だけしか出て来なかったザキラを最初から出して、さらにちょいキャラだったドクターを、メインキャラに出世させたげたんだから…。

セリフなんか、１００倍以上よ？」

DR.マンソン「…分かっておるわ。　すべては、ザキラ様のためじゃからな。　トゥーエとやらも解放すればいいんじゃろ？」

トゥーエ「やったー！　権力の横暴最高ぉ～」

DR.マンソン「この娘のせいで、バレてしまったネタは諦めよう。
しかし、こうして出てきたからには…」

マヒロ「いいわよ。　次までに相方を見つけて、冒頭文仕切る準備

しといてね」

（という訳で、再びキャラ交替になったようだ）

第７５章　慕われる主

あたしはため息をついた。　その原因は、すべて例の暴走事件だった。

ミサト「…駄目ね…。　今まで協力的だった人々までが、みんな手の平を返したような態度よ。　そりゃコロニー破壊して、民間人の死者が数万人も出れば、当たり前なんだけれどね…」

暴走事件は、ただの事故などでは終わってはいなかった。

霧雨大佐の艦隊が、軍事的な被害を被っただけならともかく、コロニー『サフラン１０』を壊してしまったことが決定的だった。　サフラン１０は、さっきミサトが言ったように、分かっているだけで死者数万人、さらに行方不明者多数を出す、大被害を被っていた。

その実態が伝わるや、今まで帝国に味方していた勢力までもが、完全に帝国…

つまりあたしと霧雨大佐に、冷たい態度を取るようになった。

考えてみれば、帝国は5年前にもコロニーをいくつも破壊して、何億人単位で虐殺とも呼べる事をしている。　だから、またかと人々が思ったのも無理もない。

殺された人々にとっては、原因は事故でした、なんて説明は何の意味もなくて、

『事故だと言うならば、最高責任者の宰相を銃殺刑にせよ！』

と息巻いた人々が、むしろ正しいと思えた。

しかもその混乱に乗じて、元々帝国に反していた勢力は結集を始めるわ、一時期鳴りを潜めていた海賊まで暴れ出すわで、宇宙の治安は完全に崩壊していた。

そして、あたしの膝元のマーガレットで、帝国の横暴を責めるデモまで起きていては、事態はもはや、末期症状以外の何とも言い様がない。

マヒロ「…ミサト。　どんなに困難でも、絶対に力で押さえちゃだめよ？　ケイさんには、当分の間、訓練も止めるように伝えて」

今は、小さな誤解ですら、致命傷になりかねないと思ったからだ。

例えば、ＭＳが訓練に出ただけで、どこかを攻める準備をしていると噂され、それが別のコロニーを破壊するらしいという噂に繋がって…

といった具合に、だ…。

【2】

そんな散々な状況の中で、不思議な事が起こった。

1人の男が、あたしに仕官を申し出て来たのだ。　今の状況なら、帝国から抜けたいと言う人は多いだろうけれど、好んで入りたいという人間はいないはずなのに。

???「この度は、皇女殿下のご尊顔を拝する機会を頂けました事、この　『ブラック・キリマンジャロ』　心より御礼申し上げ奉る次第でございます」

そう言って平伏する男は、言葉は極端に丁寧なのに、臆する態度は微塵もなかった。　むしろ丁寧な言葉の裏側に、何か隠しているかのように感じたのは、最近あたしが疲れているせいなのかしら？

マヒロ「侍従から、一通りの話は聞いております。　予備役ながら、帝国軍の籍も持っているようですね。　ですから、仕官を希望するのは自然な事ですが…。

何故この時期に、私に、なのですか？」

ブラック「困難な時に仕えてこそ、有り難がられ、重きをなせるというものでございますから」

マヒロ「…っ！！」

予想以上の大胆さに、あたしは驚きを隠せなかった。

こいつはあたしが困っているのを見通し、その上で仕官をするつもりなのだ。　そして、己の才でこの窮地からあたしを救い、英雄になる気でいる。

マヒロ「…本気で、そのような事ができると思っているのですか？」

あたしは疑問を口にして、牽制してみたつもりだったけれど…。

ブラック「殿下が私の策を用いて頂けたなら、との前提で話を進めております」

動じないどころか、あたしの器量を試すような事まで言われてしまった。

ミサト「あなたねぇ…。　これから仕えようっていう相手に、失礼が過ぎるんじゃない！」

あまりの態度に、ミサトまでもが怒り出す。　けれど…。

マヒロ「…ミサト、いいわ。　そこまで言うなら、その力、見せてもらおうじゃない」

あたしは、この男を用いると決めた。　売られた喧嘩を買ったみたいな心境ではあったけれど、この男に本当にそんな才があるなら、すがりたいと思ったのも事実だったし…。

【3】

騒乱に巻き込まれたという意味では、霧雨も同じ…　いや、それ以上だった。

敵と戦って戦死したならばともかく、仮にも味方である本国に撃たれたのだから、兵達はかなり動揺していた。　とてもではないが、原因が実験機の暴走であると言って、納まる雰囲気ではなかったのだ。

霧雨「マリアベル。　本国は何だって？」

当然の成り行きで、僕は本国の責任を追及する使者を派遣していた。

しかし、本国が送って来たのは、実に適当な謝罪の書簡と、形式的

な詫びの言葉を吐く使者だけ。　マヒロと2人で接見はしたけれど、怒りが抑え切れずに、使者を怒鳴りつけて叩き出していた。

マリアベル「次は、ジェイソンなる副宰相を寄越すそうです」

事実のみを、淡々と告げるマリアベル。

霧雨「ようやく本国も、少しはマシなことをする気になったか」

一応そうは言ったけど、怒りを鎮める気は毛頭なかった。

何故なら、宇宙のあらゆる場所で、帝国は疑いの目で見られる存在になっていたからだ。　それは5年前にそっくりで、本国の対応もまた、5年前と同じだった。

自分たちが原因を作ったくせに、完全に見て見ぬふりを決め込み、直轄のはずのルナ2の軍を動かそうとしない。

今までの平穏は、何年もの歳月をかけて、霧雨が味方になってくれそうな人間を説得して回って、何とか作り上げたものだ。　そのうえで、海賊などの民に仇をなす者たちだけを慎重に選んで討伐し、ようやく宇宙にも再興の兆しが見えかけていた矢先である。

それが、一瞬にして壊された。

マリアベル「お気持ちは…」

霧雨「何も言わないでくれ。　関係ないはずのマリアベルまで、怒鳴りつけてしまいそうだ」

慰めの言葉を発しかけたマリアベルを、僕は遮った。　理由は言った通りで、この事件に何の責任もないはずの彼女にまで、不快な思いをさせたくなかったからだ。

マリアベル「…霧雨様…」

そんな僕を、マリアベルは沈痛な表情で見つめる。

霧雨「それよりもマリアベル。　あのキサナドゥと名乗った男と、フェニックスナイツの片割れはどう見えた？」

マリアベルに八つ当たりしてしまわないうちに、意識して話題を変えた。

マリアベル「帝国狩り…　ヴァイスというそうですが、あの者は意気消沈しているようではありました。　そのまま引き渡せとのご命令でしたので、今頃はマーガレットに着いているはずです」

あの後ヴァイスは、一旦は僕と共闘してしまったため、帝国の暴虐に怒り狂ったコロニーには、戻れなくなってしまった。

とは言っても、仲間が霧雨の艦を沈めてもいて、軍に馴染めるはずもなかった。

そんなヴァイスに手を差し伸べたのが、マヒロだった。

僕は、自分と互角に渡り合った人間を戦いの決着もつけないままに殺したくはなかったから、渡りに舟と、マヒロに預ける事にしていたのだ。

マリアベル「一方、キサナドゥの方ですが、ザキラのエージェントであるという事以外、何１つ分かりませんでした」

キサナドゥという男は、エージェントのうち、Ｘという位置にいるらしい。　ただそれは、本人が名乗った事だから、新たに調べて判明した事は何もない。

マリアベル「暴走したＭＳを、力でねじ伏せました。　ただならぬ機体を操り、しかもかなりの実力を秘めているのは、間違いないのでしょうが…」

暴走したとされるＢＷ（ブラックウインド）は、フェニックスナイツの仲間を討った後も、さらに暴れ続けていた。

そこに僕とヴァイスは駆けつけると、取り押さえるどころか、本気

で殺すつもりで戦った。　それでも苦戦した相手だったのに、同じく漆黒のターンXで現れた奴は、簡単に取り押さえて見せたのだ。

霧雨「…全てが謎か…。　本国は何かを隠しているな…。

暴走が本当に事故ならば、あの黒い2機は、いずれ帝国軍の中核になるはずなんだけど…」

マリアベル「そうなる気がしません。　計算に基づかない、ただの想像ですが…」

得意な計算に頼らない予想は、いくらか不安でもある。　しかしこの時ばかりは、僕は不思議と、直感が当たりそうな気がしていた…。

【4】

そんな憂鬱な状況が、1週間も続いた。

時間が経ったからといって、何かが解決する訳もなかったけれど、打てる手は打ち、それからあたしは、本国の使者を迎えるためにマーガレットを離れた。

こんな状態のマーガレットを離れるのは、いかにも不安だったけれど、そこはケイさんとミサトに任せるしかない。　だって、こんなマーガレットに使者を入れた日には、暴動の１つも起こりかねないから。

マヒロ「侍従が２人ともおりませんから、ブラック少佐にも、働いてもらわねばなりません」

先に召し抱えたブラックは、最初から少佐待遇を要求してきた。それはかなりの要求に思えたけれど、試しにさせてみた艦隊の指揮にそつはなくって、口だけではないのは伺えた。

ＭＳにはまったく乗れないらしいけれど、人間の得手不得手はどうしようもないしね。

マヒロ「…そろそろ、心を開いて頂ける気になったかしら？」

ヴァイス「……。」

そして新顔と言うか、引き取った人物がもう１人。　ただし、あたしが霧雨大佐から身柄を譲り受けてからも、このヴァイスは黙りを決め込んでいた。

マーガレットを離れる前に、ケイさんが少し話したらしいけれど、

様子を見ようと言っただけだった。

それは、こうして伴う分には、危険がないという判断ではある。皇族を護るのが本業の侍従であるから、あたしに危害を及ぼすかもと思ったならば、絶対に自由の身にはしておかないはずよね？

マヒロ「仲間の方の戦死を、ただ嘆いている訳ではなさそうですね？　何か思うところがおありなのでしょうか？」

丁寧な口調を崩さないのは、まだあたしが心を許していない時の、癖のようなものだった。　危険がないとは言っても、それが即、この人間が信頼できる事にはない。

だから、あたしはもう少し見守る気でいたんだけれど、事態は意外な動きを見せてしまう。

ブラック「…くく…。　こやつは、気がついてしまったのですよ。仲間をあっさり討たれた。　仇を討ちたくとも、霧雨と組んでも敵わず、しかもさらなる強敵を見てしまった。　臆するのも無理はありませんな」

まるで馬鹿にするような事を、ブラックが言い放ったのだ。

ヴァイス「…なんだと？」
激昂し、ブラックの胸倉を掴み上げるヴァイス。
周囲は騒然となったけれど、あたしは止めなかった。　そうしてしまった自分に嫌悪感は持ったけれど、この2人が今後頼りになるかを見極めるのに、いい機会だと考える自分を、抑えることができなかったのよね。

ブラック「臆したという言葉が気に入らないならば、見切りをつけたと言い換えてやっても構わない。
お前は見た目によらず、頭脳において、ただの賊とは一線を画しているからな。　てっきり己との実力の差から、仇討ちの無謀さを理解していると思ったのだが？
頭が悪ければ、見境もなく戦い続け、今頃はもう死んでいる」

ブラックの言葉は嫌味には違いないが、ただ罵っている訳でもないようだ。

ブラック「だいたい、ここに…　殿下の軍にいるのが、何よりの証拠。　混乱し、怒り狂うだけのコロニーに戻っても先は見えている。
かといって霧雨に留まれば、多くの味方を殺した奴の仲間だから、命が危ない。

だから、直に戦っていない殿下が誘うと、二つ返事で応じた。　図星だろう？」

ヴァイス「勝手に言っていろっ！」

まだ怒った表情のままではあったが、ヴァイスはブラックの胸倉から手を離した。　ブラックの言葉が、的中していたのだろうか？

マヒロ「…つかぬことを伺います。　ヴァイスさん、あなたが帝国を狩る理由は何ですか？　それが誰かへの怨恨ならば、私たちとは永遠に相容れません」

あたしは努めて冷静に、そんな事を訊いてみた。

ヴァイス「…恨んでいたらどうする？　殺して晒すか？」

怒りの矛先が、あたしに向くような事を言ってみる。　もちろん、その後の決め台詞は用意した上で。

マヒロ「解き放って差し上げます。　人が何に生きるかは、その人間によりけりです。　だからあなたが、恨みに生きると言うならば、私はそれを止める言葉を持ち合わせておりません。

そして私は、例え誰かに恨みを買おうとも、マーガレットの人々に、安寧をもたらすために戦っております。

感謝なんておこがましい。　気がついてもらえなくて、当然。　それでも私は、ミズサワの民に、繁栄を享受してもらいたいのです」

あたしは彼の目を見据えて、告げた。　言っているうちに、考えていたのとは違う言葉になっていたけれど…。

【5】

我ながら見事な弁舌だった…　はずよね？

だけどあたしは、こいつの存在をすっかり忘れていた。

ミク「うんうん。　久しぶりに、お姉の青臭い理想論を聞いたよ。
まったく可愛いんだからぁ～」

マヒロ「か、可愛いって…」

大人しくしてるから、空気を読んでくれてるんだ、なんて思ったあたしが馬鹿だった。　弁舌の腰を、見事に、綺麗に、ざっくりと折られた。

ミク「いい歳して、恥ずかしげもなく語るなんて、さすがお姉。尊敬してイイ？」

絶対、尊敬なんてする気はないな。　顔がそう言っている。

マヒロ「いい歳って、１５のガキが言うなぁ～！！」

ミク「そのガキに、青臭いって言われるなぁ～」

ヴァイス「……。」

マヒロ「他人に理想も語れずに、一国の主なんてできないじゃん！」

ミク「語るなら、ちょっとは内容を吟味しようね？」

ヴァイス「……。」

マヒロ「このぉぉぉ～～」

ミク「なんだ？　やるのか？　やるのか？」

あたしにとっての不幸は、この場にミサトがいなかったことだ。
ミサトがいれば、うまいこと間を取り持ってくれただろうから。

まあ、取り持ってくれなくても、こんなやり取りは日常茶飯事で、
別に何かが起こる訳じゃない。

…ただし、このやり取りを見ると、半分の人はあっけに取られる。
そして、残り半分の人間は…。

ヴァイス「…　…ぷくくくくっ！　ダメだ、降参だ。　もう限界っ！　ヤバすぎるっ！」

そう、笑い転げてしまうのだ。

ヴァイス「あんたら、面白すぎるぜ。　貴族ってヤツは、もっとお高くとまって、つっけんどんなもんだろ、普通はよ？」

狩る立場の人間に、貴族を語られちゃうし。

ミク「それがどうした。　天下のミズサワに、つまんない常識は必要ないのだっ！」

しかも、誰かさんは開き直ってるし。

マヒロ「あ～　もう好きにしなさいよ。　泣いても笑っても、これがミズサワの実態なんだから。　愛想尽かしたなら、サヨナラ。誰か、彼のＭＳを用意してあげて」

あたしは、ヤケ気味にそう言った…。

【6】

帝国軍下士官「了解です」

何故か頬を緩ませたオペレーターの下士官が、兵に何かを命じようとした時、ヴァイスは思いもしないことを言った。

ヴァイス「いいぜ？　あんたになら、仕えてやっても」

マヒロ「うそ?!」

つい、本音が出てしまった。

ヴァイス「ウソって、あんたが誘ったんだろうが」

マヒロ「…そうだっけ?」

ヴァイス&ミク「ダメだ、こりゃ」

2人の声が重なった。　そして呆れムードも、最高潮に。

ヴァイス「確かに、仕えろとは言ってないけどな?　自分の理想を説くからには、俺に考え方を変えて欲しかったんだろ?　それは帝国狩りを止めて、味方になれって事で…

つまり、仕えろって言ったようなもんじゃないか?」

ブラック「…と申しますか、殿下。　この男を臣下に加える目的もなしに、霧雨から引き取られたのではございませんよね?」

マヒロ「…え、えと…」

話の展開は理想的なはずなのに、流れが急すぎて、言葉が繋がらない。

ミク「こんな頼りないコだから、放っておくと心配になるっしょ？」

その隙に、変な風に結論づけられてしまった。　しかも、周りは思いっきり納得ムード。

そのムードは、ついに外野まで飛び火してしまい…。

帝国軍下士官「差し出がましいようですが、アンケート結果によりますと、殿下のチャームポイントは、

★3位★

巧みな言葉と、ミスマッチなノリ

★2位★

出来のいい妹と、不出来な姉を思わせる姉妹萌え

★1位★

MSに乗せただけで笑いが取れる、天然(ボケ)ニュータイプっぷりになってますね」

マヒロ「一体、何のアンケートよ…。　っていうか、いつ誰がそんな物を…」

言いかけたあたしの目に飛び込んで来たのは、ものすっごくにこやかに微笑むミクの顔。

そうよね。　こいつぐらいしか、軍でこんな馬鹿なアンケートを取ろうってヤツはいない。

マヒロ「……。」

ヴァイス「和気あいあいとした、家庭的な軍だな？　ますます気に入ったぜ」

こうして、あたしの人生における秘話が増えた代わりに、軍は貴重なエースパイロットを獲得したのだった…。

第７６章　記憶の手がかり（前書き）

（またキャラが替わって…）

ＤＲ．マンソン「ジェイソン、始めるぞ」

ジェイソン「はい、ドクター。
…と言いたいところなんですけれど、こんな場所を借りて、一体何をするんですか？」

ＤＲ．マンソン「ふむ…。　それじゃがの、儂の本分と言えば何じゃ？」

ジェイソン「ドクターの、ですか？　ドクターと言えば、開発…発明ですよね？　高性能なＭＳを開発して、それを有効に使ってきたからこそ、いまの我々がある訳で…」

ＤＲ．マンソン「そこでじゃ！　今回はこんな物を発明してみたんじゃ！」

ジェイソン「おおっ…

…ってドクター。　これ、どう見ても扱うアニメを間違えてると思うんですけれど。　これはそのまんま『スカ○ター』では？　この小説、ガンダムの二次小説ですよ？？？」

DR．マンソン「頭の堅いお主のことじゃ。　そう言うと思ったわ。　しかしお主、この小説のキャラで、誰が一番強かったり、頭が良かったりするか、把握しておるのか？」

ジェイソン「そ、それは…。　確かに、いま1つ分かりませんね…」

DR．マンソン「そこで、こいつの出番という訳よ。　この儂特製ス○ウターを使えば、小説に出てくるキャラの能力が分かってしまうのじゃ」

ジェイソン「なるほど…。　その項目は…

★操縦能力★（ＭＳを扱う上手さ、強さ）

★統率力★（ＭＳ部隊を率いる上手さ、強さ）

★知力★（作戦を考えたり、騙されにくくなる力）

★政治力★（国を作る力、政治的な支持を得る力）

★魅力★（他人を惹き付ける力）

の５つですか。　ドラゴ○ボールより、なんか歴史ゲームみたいですね。

あ、ＭＳに乗って戦う小説だけに、武力や戦闘力じゃなくって、操縦力になってるんですね」

ＤＲ．マンソン「そこらへんのアレンジは任せておけ。　それではさっそく、次回からキャラの有能無能を暴いていくから、覚悟しておくのじゃ！」

（次回を乞うご期待…　なのか？）

第７６章　記憶の手がかり

中国を離れ、南の海を西へと飛ぶ艦が２隻。　ゴトーたち傭兵団のザンジバルと、ゲットたちの乗るリメンバーズだ。

ゲット「…しっかし、そのイノサイトなんとかって機械を、フレーネが知ってるなんてな～」

フレーネ「イノセント・システム…。　イノセントは、母なる力。父なる力と合わされば、全てを救う光になる…」

ゲットの間違いをさりげなく訂正しながら、フレーネはゴトーたちに告げた言葉を繰り返した。

スティヴ「ま、あいつらも行くあてがなかったみたいだし、ちょうどいいんじゃねぇか？

とにかく、お嬢ちゃんの取り戻したい記憶の中に、そのインベーダーシステムとかがあるってこったろ？」

フレーネ「…だから、イノセントシステム…」

よほど覚えにくいのか、イノセントシステムを正しく言えない2人であった。　スティヴに至っては、イとシステムしか合っていない。

リンダ「とりあえず、もうすぐインドラに着くよ。　ゲットのファイト友達の親御さんが、中国政府の要人で助かったよ。　おかげですんなり事が進むからね？」

ゼフィランサスを持ち出して、かつ帝国軍を撃ち破ったゲットたちが、どれくらい真剣に帝国に追われているのかは、よく分からなかった。

だから、帝都パンドラールの近くを飛ばずに、海からインドラを目指した一行なのだったが、不用意に近付けば、今度はインドラに攻撃されてしまう。

そこで、ファイトでゲットの友達になったという、トルディの両親に仲介を頼んだのだった。　中国政府の要人の紹介となれば、やはりインドラの対応も違ったらしく、いきなり首都の空港に着陸許可が出ていた。

ゲット「トルディとしばらく会えないのが、ちょっと寂しい気もすっけど、フレーネの記憶を見つけてやらないとな！」

地球に来て、初めてできた友達だから、離れ離れになるのは少し寂しいようだった。

平和な時代なら、電話やメールでやり取りできるだろうが、戦争中ではそうもいかない…。

【2】

インドラの首都デリー。

着くとさっそく、ゲット、フレーネ、メリルに、保護者役のミアが付いて、図書館に出掛けていた。

これはリンダの発案で、遺跡などへ直接行くだけではなくて、本などで調べて分かる事もあるだろうという考えだった。

しかし、この発案には別の意味もあった。

スティヴ「…マジなのかよ…。　ゲットのコロニーが、帝国にぶっ壊されたってのは…」

それは、入手したばかりのこの事実を、ゲットに知られたくなかったからだ。

ゴトー「間違いない。　インドラはずっと帝国と戦ってるからな？　雇われてる傭兵仲間もいるし、俺自身、インドラで帝国とやり合ったこともある」

それを頼りにすれば、情報を入手しやすく、精度にも自信があるのだろう。

ネロ「…ただ、よく分からない事もあるんです」

こう疑問を口にしたのは、傭兵団きっての情報通のネロだった。

ネロ「元々サフランは、帝国貴族の霧雨が攻めていました。　しかし、攻めたと言っても、サフランは領主の逃げたコロニーですから、たいした戦力があった訳じゃありません。　コロニーを巻き込むだけの激戦に、なったとは思えないんです」

ジルド「だけどよ？　帝国の連中、わざとコロニーを破壊したんじゃないのか？　従わないとこうするぞ、ってな見せしめでよ…」

ジルドはそんな風に言ったものの…。

ネロ「コロニーが破壊されたのは、霧雨が負けて逃げている最中にですよ？」

ジルド「負けた腹いせに、コロニーを潰そうとしたとか？」

リンダ「コロニーを破壊するだけの余力があれば、逃げないだろうね？　流れ弾や気紛れの一撃なんかで、コロニーは壊れないよ」

コロニーの外壁の厚さは様々だが、数メートル級は当たり前である。

常識で考える限り

『偶然壊れちゃいました』

などという事は発生し得ない。

ならば、霧雨の艦隊が計画的にやったかと言うと、違った事で辻褄が合わなくなる。

スティヴ「俺も、地球と宇宙をさんざん行き来してるが、霧雨がコロニーを壊したがるとは思えないがなぁ…？

霧雨は海賊退治にも熱心で、帝国の中じゃ、かなりまともな方って評判だったぜ？」

とかく強調されがちな帝国の横暴だが、帝国に住んでいる人間全員が、みな暴虐な人間な訳はなかった。

今回の霧雨に限らず、帝国の中にもいろいろな考えの人間がいた。

誰もが改めて言ったりはしないが、それはごくごく当たり前の事なのだ…。

スティヴ「それよりもだ。問題はゲットに、コロニーが壊れちまったって教えるかどうかだろ？　ちなみに、俺は教えるのには反対だけどな」

そうなのだった。

彼らにとっての問題は、コロニーの破壊よりも、どうやってこの事実をゲットに伝えるか…　もしくは、隠すかという事だった。

リンダ「あたしは、隠し事をするのはどうかと思うけどね？　あの子は、見た目によらず強いと思うよ？」

スティヴ「い～や、俺は反対だ。　親戚が病気で死んだとか、隣のおばさんが交通事故に遭った、なんてのとは訳が違うぜ。だいたい、どうしてコロニーが壊されて、今どうなってるかも分からないうちに

『生まれ故郷が無くなったぞ』

ってだけ教えても、ゲットを不安にするだけだろ？」

2人の意見は対立した。

共にゲットの事を案じて、それが故に違う結論になったようだ。

ネロ「確かに、一口に壊れたと言っても、一瞬で消滅したのでなければ、相当数の生存者はいるでしょう。　しばらく待てば、他にも分かってくる事はあるかと思います」

ネロは持ち前の情報力からか、そんな事を言う。

ジルド「俺は、隠し事をしてたってことを、知られた時がヤバイと思うぜ？　あの年頃のガキってのは、子供扱いされるのが、無性に腹が立つもんだからよ？」

一方のジルドは、自分の経験からか、感情への配慮を優先すべきという意見らしい。

ゴトー「…どっちにしても、ゲットを引き取ったのはお前らだ。俺たちはどんな協力もするが、最後の決断は自分でするべきだ。メリルがもしそうなら、俺はそうする」

メリルの生まれた経緯を皆に語ってから、ゴトーはやはり人が変わったようであった。　父親として、今までも腹をくくってはいたのだろうが、それとは違った一面を見せることが出てきた。

リンダ「…そうだねぇ…。　スティヴの言うことも一理あるし、教えてあげようにも、あたしらもよく分かってないんじゃね…。

ゴトー、あんたらでもう少し詳しく調べられないかい？　代わりに、

イノセントシステムについて分かったら、何でも教えるからさ？」

ゴトー「かまわない」

こうして、インドラに留まる間の調べ物は、２つに増えたようだ…。

【3】

そんな大人たちの思惑を知る由もないゲット…　さらに、フレーネとメリル。

付き添いのミアは、事件のあらましを知っていたが、当然ゲットに話したりはしていなかった。　そればかりか、図書館にそれらしい資料がないかと、眺めて回る用意周到さだった。

ちなみにミアが見る限り、宇宙の事件は一切報道されていないようだった。　もしかしたら、インドラ政府が情報統制をしているのかも知れない。

それはともかく、肝心のゲットの探し物は…。

ゲット「…ねぇなぁ…。　イノセントシステムって何なんだ？」

職員「…図書館では、お静かに」

ゲット「ご、ごめんなさい…」

大声で呟いたため、注意されてしまっていた。　しかし、呟きたくなるぐらい、手がかりは何もなかったのだった。

ゲット「記憶喪失も、ワケ分かんねぇ事ばっか書いてあるしよ…」

こちらは、本そのものがない訳ではなかった。

図書館には、相当詳しい医学書まであって、記憶喪失の原因や治療法、過去の事例が事細かに書かれていたのだが、あまりに難解過ぎて、とてもではないが、ゲットに理解できる内容ではなかったのだ。

ミア「そんなに慌てなくてもいいんじゃない？　フレーネちゃんと

メリルは、あっちで楽しそうに本を読んでるわよ？」

見かねたのか、ミアがゲットに宥めの声をかける。

その言葉通り、フレーネは1冊の物語に熱心に見入っていて、一方のメリルは、何冊もの図鑑を読み漁っていた。

ゲット「ちぇっ、何だよ～。　フレーネの奴、気楽だなぁ…」

自分が、フレーネのために必死になっているという自負があるせいか、ゲットは少し口を尖らせている。

フレーネ「…ゲット？　この物語、とっても面白いよ？」

フレーネは、そんなゲットに本を勧める。

ゲット「物語より、俺はアニメの方が好きなんだよなぁ…。　こう、ヒーローのＭＳが、敵をばったばったと倒していくようなやつ」

趣味が子供っぽいと言いたくなるが、ゲットは平和時代ならば、まだ小学６年生なのだから仕方ないと言うべきなのか？

ところで、そんなゲットを見て、ちょっとだけ可笑しそうに笑った

フレーネが見ていた物語とは…？

フレーネ「えっとね…。　ユニコーンが滅びかけた世界を救うために、冒険をするお話だよ？」

ゲット「…ユニコーン？　ユニコーンって、馬の事だろ？　人間の物語じゃないのかよ」

空想上の馬が主役の物語は、いかにも女の子好みの物語だと思ったのか、ゲットは覗き込みかけた顔を引っ込めてしまった。　馬がＭＳに乗るはずもないから、ゲットが興味が持てないのも、無理はないのか？

けれど…。

メリル「あったよ？

『開発年代不明のＭＳが発掘される。　名前はユニコーンガンダム。
模造した機体を、共和国博物館欧州分館に展示』

5年前の記事だね？」

メリルが記事を読み上げると、失われかけていたゲットの興味が、俄然燃え上がった。

ゲット「なんだよっ？！　ユニコーンって、馬じゃなくってＭＳなのかっ？！」

職員「図書館ではくれぐれもお静かに！」

ゲット「あ…」

フレーネ「何度もすいません」

職員「…まったくもう…」

つい叫んでしまい、きっちり注意されてしまうゲット。　しかも、フレーネが気を遣って代わりに謝っている。

ゲット「…つか、ユニコーンって、ガンダムなのかよ？」

声は小さくになったが、それでもゲットの興味の炎は消えていなかった。

フレーネ「ただ、同じ名前なだけ…。　だけど、どこかで聞いた事がある気がして…」

こういった感じは、フレーネがたまに使う言い回しで、たいていは失われた記憶に関係がある。

つまり、ユニコーンというフレーズが、フレーネの記憶に関わっている可能性があるということなのか？

フレーネ「それでね、ゲット。　この物語のユニコーン…　…こっちはＭＳじゃないんだけど…　が世界を救うってお話も、やっぱり何だか懐かしいの」

ゲット「…フレーネが懐かしがる、ユニコーンの物語？」

メリル「それと同じ名前のガンダムが発掘されて…」

顔を合わせる3人。

ゲット「やっぱ、もっと調べてみたいよな?」

続いて3人は、強く頷いていた…。

第７７章　ユニコーン（前書き）

（測定スタート）

ＤＲ．マンソン「ジェイソン、準備はよいか？」

ジェイソン「まず、誰を測りましょう？」

ＤＲ．マンソン「決まっておる。　我らが主、ザキラ様の偉大さを、世に知らしめるのじゃ！」

ジェイソン「なるほど！　ではザキラ様、失礼致します」

ザキラ「うむ」

★ザキラ・ニカイドウ★

操縦９９　統率９３　知力８７　政治８１　魅力６８

ＤＲ．マンソン「さすがはザキラ様。　操縦が９９もある上に、他

もかなり高い数字を出されたわ！」

ジェイソン「これだけの器量の持ち主に仕えられて、幸せです。本編ではまだ戦っていませんが、最強のエージェントZだけあって、かなりお強いようです」

DR．マンソン「次じゃが、ジェイソン。　お主も測ってやろう」

ジェイソン「わ、私ですか？」

★ジェイソン・ヤヌス★

操縦８８　統率８５　知力８２　政治８９　魅力７７

DR．マンソン「う～む。　お主もなかなかやるの…」

ジェイソン「無能ではなくて安心しました。　これならザキラ様をお支えできそうです。　では、ドクターも…」

★DR．マンソン★

操縦７０　統率４０　知力９６　政治６８　魅力４２

ジェイソン「…偏ってませんか？」

ＤＲ．マンソン「ふん。　儂は開発をするための頭があれば、他には何もいらんのじゃ！」

ジェイソン「確かに、得意分野が優れていれば、他は目を瞑るぐらいで丁度いいのかも知れませんね」

ＤＲ．マンソン「…それで最後じゃが、あ奴を覗いてやろうではないか？」

ジェイソン「…例のあいつですか…」

★イエスマン★

操縦１４　統率２８　知力９７　政治９２　魅力１９

ＤＲ．マンソン「な、何じゃ？　この極端さは?！　と言うか、知

力が儂より高いのかっ？！」

ジェイソン「…ま、まあ、ドクター。　数字はあくまで目安ですから。　1や2くらいなら、状況で簡単に逆転しますし…ねぇ？」

DR．マンソン「むう…。　まあ、よいわ。　とにかくこれを参考に、次からは他のの奴らも測ってやるゆえ、楽しみにしておけい！」

（続く）

第77章　ユニコーン

その後も、図書館にある限りの本を読み漁った3人。　けれど、閉館時間になってしまったため、やむなく引き揚げることになった。

ゲット「…もう少しで、何か掴めそうなんだけどなぁ～」

調べ物は、順調なようで順調でなかった。

ユニコーンガンダムが、どこで、どんな経緯で発掘されたのかは分かったのだが、実際にどんなＭＳなのかは、軍の極秘指定のため、ゲットたちには見ることが許されなかったのだ。

ゲット「インドラもケチくさいよな？　ちょっとくらい見せてくれても…」

インドラはもしかしたら、情報を国家が管理しているタイプの国なのだろうか？

ともあれ、口を尖らせながら、後のフレーネの方を向きながら歩いていたゲット。　つまり後歩きだから、前はまるで見ていない。

？？？「いてっ！！」

ゲット「あっ！」

そんな風だったから、誰かにぶつかってしまったようだ。　ぶつかった少年が持っていたとおぼしき、服やアクセサリーが辺りに散らばる。

ゲット「やべっ！　ごめんな」

？？？「ごめんで済んだら、インドラ軍も帝国軍はいらないんだよ！」

謝ったものの、変な言いがかりをつけられてしまったゲット。

ゲット「ぶつかったのは悪かったけどよ？　そんな言い方しなくたっていいじゃんかよ…」

シクス「そうだよナイル？　大人気ないよ？」

エイス「心の狭い男は好みじゃな～い」

相手のグループからも、絡んだ少年を責める声が上がった。　どうやら文句を言いたいのは、その少年１人だけらしい。

ナイル「うっせー。　お前らがこんなに荷物持たせるから、避けられなかったんだぞ！」

フォルナ「そんな事より、落ちた物拾わないと、通行の邪魔だよ？　あ、ありがとうございます」

少年は、仲間とおぼしき少女たちにまで文句を言ったが、少女たちはナイルの落とした物を拾ったミアやフレーネ、メリルに礼を言っていた。

エイス「はい、ナイル。　まだ先は長いんだから～」

そして少女の１人が、再び荷物を全部少年に押し付けるようとするが…。

ナイル「なんで俺ばっかりなんだよ？　お前らが買ったんだから、自分で持てよ」

シクス「だってナイル、男の子だし」

荷物は少女たちの物で、少年は荷物持ちを無理矢理やらされているのだろうか？

とそこで、何かを思いついた顔になるナイル。

ナイル「…そうだ、お前！　ぶつかったんだから、詫びの印に、お前が持てよ！」

ゲット「はぁ？　何でそうなんだ…　…げっ」

抵抗する間もなく、山のような荷物を持たされてしまうゲット。

ゲット「…重めぇ…」

ミア「面白い子たちね？　ぶつかったのはともかく、重そうだから手伝ってあげてもいいわよ？」

そんなやり取りを見ていたミアが、しょうがないといった笑いを浮かべながら、荷物をひょいひょいと取り上げる。　傭兵のミアにしたら、これぐらいの荷物を持つのは何ともないらしい。

ミア「年頃の女の子だから、やっぱりオシャレはしたいわよね？付き合う彼氏さんも大変よね」

ミアは、ナイルが3人の少女の誰かの彼氏だと思ったらしく、そんな風に言う。

ナイル「…ちげーよ。　俺らは兄弟みたいなもんさ。　ほら、顔がおんなじだろ？」

ミア「あら？」

ゲット「ってよく見れば…。　四つ子かお前ら？　珍しいな～」

そんなことを言いながら、しげしげと4人を眺めるゲット。

ナイル「じろじろ見るんじゃね～よ。　男に見つめられる趣味はね～」

エイス「そう？　あたしは、男に見つめられると燃えるけどなぁ？」

ナイル「…エイスとトゥーエは、特別だからな…」

エイス「あ。　トゥーエと一緒にしないでくれる？」

ゲットにとっては、よく分からない話がされたりもしていたが、ミアと少女たちは気が合ったのか、楽しそうに何かを話していた。
フレーネは控えめながら、少しだけ話に参加する。

他方メリルは、ゴトーの代わりなのか、ミアの後に隠れてしまい、ほとんど何も話してはいなかった。

ナイル「…ここでいいぜ」

軍の基地の近くに来た時、ナイルがそう言ってミアから荷物受け取

る。　ミアたちの泊まっているホテルにも近い所だ。

ミア「家族の方が、基地で働いてるのかしら？」

ふつうに考えれば、軍の基地に子供が近づく理由はないはずだから、ミアがそう考えるのも無理はない。

ナイル「姉ちゃんの勘って、外れてばっかだよな？　軍にいるのは、家族じゃなくって俺たちみんなだよ」

フォルナ「そうなんですよ。　荷物ありがとうございました」

駆け出して行く少女たちと、よたよた歩いて行く少年。　その姿を見送るゲットに、ある考えが浮かんだ…。

【2】

翌日。

昨日の基地の前で、何かを頼み込んでいるのは、ゲットだった。

ゲット「なぁ、頼むよ。　昨日会ったばかりだけど…。　子供が遊びに来るぐらい、いいだろ？」

自分が子供である事を利用するつもりなのか、ゲットはそんな言い方をしていた。

インドラ兵Ａ「お前、嘘ついてるんじゃないか？」

ゲット「いや、マジだって。　名前だって知ってるぜ？　ナイルと…　エイ…なんとかっての！」

インドラ兵Ｂ「…確か、ラピスラズリの名前は公表されてなかったよな？」

インドラ兵Ａ「…ああ。　一応確認を取った方がよくないか？」

そんな、ひそひそ話が交わされる中…。

ゲット「あっ！　お前昨日のっ！」

インドラ兵Ｂ「おいこらっ！　待てっ！」

ゲットは何かを見つけたらしく、兵士の間をすり抜けて行ってしまう。

ゲット「なあ、お前。　顔が同じだから誰かまでは分かんないけど、昨日、俺と会ってるよな？　もう、こいつらがしつこくって…」

ゲットが見つけたのは、確かに昨日見た４人に瓜二つな顔だった。

駆け寄り、声をかける。

インドラ兵Ｂ「失礼します。　えっと、この髪型は…」

ゲットが駆け寄った少女に、追いかけて来た兵士が話し掛ける。

トゥーエ「…まだ覚えられないんだ？」

軽くため息をつく。　どうやら兵士にも見分けはつかないらしい。

トゥーエ「…つか、昨日？　…ふ～ん…。

…あ～　そうそう。　街で友達になった子」

妙に間が開いた喋り方だったが、その少女はゲットと友達だと話した。

インドラ兵B「そうですか、失礼しました。　では、入場許可証を出しておきます」

それを聞いた兵士は、態度をころっと改めると、ゲットに何かカードのような物を渡し、足早にゲートへ戻って行く。

ゲット「ありがとな。　で、さっそくだけど…」

トゥーエ「そう。　さっそくだけど、あんた誰?」

ゲット「はぁ??」

思いもしないその少女の言葉に、ゲットは目を白黒させた…。

【3】

ゲット「誰って、さっき友達だって言ったじゃんかよ?!」

驚いたゲットは、少女に詰め寄るが…。

トゥーエ「だってそう言わなきゃ、基地に入れなかったでしょ?」

どうやら、機転で話を合わせてくれただけらしい。

ゲット「なんだよ…。　しっかし、ホントにそっくりなんだけどなぁ…。　昨日の4人もそうだったけど…」

トゥーエ「昨日の4人ね?　って事は、フォルナか、シクスか、エイス、ナイルの誰かだよね〜?」

ゲット「そうだそうだ。　ナイルって奴が俺に絡んで来て、酷い目にあったんだぜ?　あと、エイス…　なら知ってる」

ゲットは、何とか思い出しながら喋っていた。

トゥーエ「ふ～ん。　ナイルってそゆトコあるしね。　つか、エイスは覚えてるんだ？」

少女は何か面白い事でもあったのか、楽しそうにし始めた。

ゲット「ああ。　他の奴は、名前を言わなかったしな」

話がよく分かっていない風のゲット。　ただ少女は、そんな事に構う様子はない。

トゥーエ「よしっ！　今日は退屈しないで済みそう」

少女はそう呟くと、懐から通信端末を取り出し、誰かに連絡を取り始めた。

？？？「あ、トゥーエ？　何？」

トゥーエ「うん。　今、ゲートでエイスの彼氏拾ったんだけど」

？？？「うそっ？！」

叫び声と同時に通信は切れた。　そしてしばらくすると…。

【4】

ノン「この子が、エイスが街でたらし込んだって子？」

スリス「エイスって、ガキが趣味だったのか？」

シクス「…ユービットで殺り合ったっていう、噂の彼氏さんとは別れたの？」

トゥーエ「あれはコックピット越しの、叶わぬ愛でしょ」

ゲット「…え、ちょ、ちょっと…」

集まった8つもの同じ顔に圧倒されて、たじたじのゲット。

それぞれ髪型は違うものの、悪い事に全員が同じ軍服を着ているため、まったく見分けがつかない。

昨日は『スカートだから女の子だ』ぐらいの見分けはついたのだが、インドラの軍服は男女共通のデザインで、気をつけていないと、性の区別すらつかなくなりそうになる。

そのうえ…。

エイス「他人(ひと)の彼氏を勝手に作るな～！！」

外部スピーカーで叫びながら、猛スピードで突っ込んで来たＲＦドム。　その勢いに、ゲットは思わず飛び退いたが、８人は涼しい顔をしていた。

エイス「誰が誰の彼氏だって？　あたしは男はきっちり選ぶ…

…あれ、あんた昨日のお子様？　あたしに惚れて、わざわざ会いに来たの？？？」

モノアイが動く。　そうすると、エイスは声のトーンが急に下がった。　ドムを止めて、慣れた動作でコックピットから降りて来る。

トゥーエ「そうそう。　あたしをエイスと間違えて、こう甘〜い愛の告白と抱擁を…」

ゲット「そんなもんしてね…　ぐ」

そう言ったが、トゥーエはそれを一顧だにせず、ゲットを勝手に抱き寄せる。　顔がトゥーエの胸に埋もれ、ゲットは真っ赤になった。

エイス「トゥーエが欲しいならあげるよ？　あたしは、頼りないお子様はパスだし」

トゥーエ「あたしもいらないけどね。　ただ暇潰しに、この子をおかずにしただけだもん」

抱かれたかと思えば、あっさり放り出されてしまうゲット。

ゲット「さっきから、滅茶苦茶言ってんじゃね～よ！　俺は聞きたい事があって来ただけ…」

ラピスラズリ「でも、庇わなかったら、きっと捕まってたよね？」

ゲット「…ありがとうございました～」

ラピスラズリ全員の、息の揃ったツッコミに、たじたじのゲット。

それからというもの、数時間もの間、ゲットは延々とおもちゃにされ続けた。　逆らおうにも1対9、やがて反抗する気力も尽き果て、真っ白に燃え尽きてしまうゲット…。

ノン「…そろそろいいかな？　君、何か聞きたい事があるんだよね？」

しかし、その労苦？は報われる時がやって来る。

ノンの問いに、ゲットはかろうじて残っていた気力を振り絞り…。

【5】

ゲット「すげ～！　お前らって、偉い奴だったんだな？」

アイン「ラピスラズリは、高級士官扱いになってるからね？　もっとも、こんなの使ってるのは、ノンだけだけど」

ノンを始め、ラピスラズリたちに付き添われて来たのは、昨日の図書館だった。　そうすると、昨日読ませてもらえなかった本はもちろん、存在を知らなかったデータベースにまで、自由にアクセスできたのだ。

ノン「どう？　知りたい事、分かった？」

画面に本にと、夢中になっているゲットに語りかけるノン。

ゲット「本当にすっげぇよ。　これがユニコーンガンダムの写真か？　マジに強そうだよな～。　じゃ、これは…」

ゲットがさらなるデータを見ようとすると、アクセス禁止の赤い文字が表示されてしまう。

ゲット「またロック？　なあ、解除してくれよ？」

ノン「はいは～い」

ノンが持っていたカードをリーダーに通すが、警告音と共にアクセスを拒否されてしまう。

ゲット「なんだよ～。　見れないのかよ～」

ノン「おっかしいなぁ？　セキュリティは…　と…。　レベル４かぁ…」

ノンがちょっと困った顔をする。

ゲット「ダメなのか？」

しばらくの沈黙。

ノン「レベル４は、他の人に見せちゃいけないんだよね…」

ゲット「そこを何とか頼むよ！！」

諦めきれないゲットは、ノンはじめ、ラピスラズリたちに強い言葉で頼み込む。

アイン「でも、おっさんにバレるとマズくない？」

エイス「あ、アインってば、おっさんが恐いんだ？」

振り向いたアインを、口を尖らせながら見るエイス。

しかしアインは、それほど困った顔をしていなかった。　むしろ、悪戯っ子のような目つきをしている。

アイン「怖いって言うか…。　危ない橋を渡るからには、それなりの見返りがないと、って思わない？」

エイス「あ、なるほど！」

ゲット「…えっ？！」

ラピスラズリたちの、期待に満ちた視線が、ゲットに突き刺さる。

ラピスラズリ「という訳だから、そういう事でいいよね？」

ゲット「う…　うん？」

勢いを押されて、よく事情も呑み込めないままに頷くゲット。

ノン「じゃ、今日はお友達の所に泊まるって、お家の人に電話しといてね？」

促されるままに、受話器を取らされ…。

リンダ「…分かった。　友達は大事にしなよ？」

ハロ「ゲット！　オトマリ！オトマリ！」

電話から聞こえた、リンダとハロの声が途切れると、急に背後の気配に感じた、何か猛獣が獲物を狙うような気配。

ゲット「…こ、これもフレーネの記憶のため…」

次の日の昼過ぎになって、ようやくリメンバーズに帰って来たゲット。

目の下にくっきりとクマを作り、げっそりとした表情をしていたが、代わりにユニコーンガンダムについて、フレーネとメリルが驚くぐらいの知識を詰め込んでいた…。

第７８章　湧兵の計（前書き）

（測定２回目）

ＤＲ．マンソン「ジェイソン。　次は…」

マヒロ「はいはいは～い。　次はあたしっ！」

ＤＲ．マンソン「ぬっ！　出おったな？」

マヒロ「人を、お化けか何かみたいに言わないでくれる？　それより、あたしの有能さを…」

ミク「…お姉…。　わざわざ恥を晒さなくっても…」

ジェイソン「ですよね～。　本編を読む限り、あなたの結果は見えてますよ？」

マヒロ「うっさい！　ごちゃごちゃ言わないで、早く発表しなさい！」

DR．マンソン「…我が儘な娘じゃな…。　ほれ」

★マヒロ・ミズサワ★

操縦２　統率４８　知力７９　政治１００　魅力９１

ミク「ぷっ…」

ジェイソン「操縦２！　２って何ですか？　そこいらの一般市民が、プチモビに乗った方が強いんじゃないんですか？」

マヒロ「な！　こ、これは何かの間違いよ～！　そうだ、スカウ○ーの故障よ～！！」

３人「いや、かなり正確な数値でしょ」

DR．マンソン「…というかお主、政治力が１００もあるのか？　戦わせるとからきしじゃが、政治には凄腕だったとは。　人は見かけによらんな」

ジェイソン「まあ確かに。　あと妹の方は…」

ミク「あたしは強いよ？」

★ミク・ミズサワ★

操縦９０　統率５３　知力９３　政治５１　魅力８２

ＤＲ．マンソン「ぬぅ…」

ジェイソン「有能ですが、得手不得手ははっきりしてますね。　あとこの国のキャラは…」

★ケイ・ユヅキ★

操縦８４　統率９２　知力８０　政治５０　魅力７６

★ミサト・キリシマ★

操縦７８　統率７４　知力４６　政治７１　魅力７５

ＤＲ．マンソン「新しく入った奴もじゃ」

★ブラック・キリマンジャロ★

操縦２３　統率６８　知力９４　政治８８　魅力５２

★ヴァイス★

操縦９１　統率６０　知力７１　政治１５　魅力８０

ＤＲ．マンソン「地味に有能な奴らじゃな？」

ジェイソン「そうかも知れませんね。　それぞれ弱点もありますが、嵌まると強いかも知れないので、要注意な勢力でしょうか？」

（続く）

第７８章　湧兵の計

宇宙で事が起き、インドラでも事態が胎動する中、予定調和的に事が進むのは、メリャーナ率いるクアルーン平定軍であった。

彼女らの軍は、最高指導者がすでに亡く、すでに崩壊を始めていた各地を平らげつつあった。

マリー「バクダッドは抵抗が激しいので、包囲するに留めました。他にも、テヘランなど大都市では、軒並み侵攻が遅れていますが…」

メリャーナ「遅れているのではありません。　被害を抑えるため、自重しているのです。　帝国は既に、ユービットで勝った身です。勝ちを焦っていらないの被害を出す事のないよう、全軍に徹底するのですよ」

マリー「かしこまりました。　メリャーナ様が兵達の身を案じていると知れば、軍の士気も向上することでしょう」

背を向け、歩み去って行くマリー。

その背中を見送るメリャーナだったが、本気でそう言っている訳ではなかった。　全ては、サコンの戦略に基づいて動いているのだ。

苦戦して兵を損耗することは、メリャーナの声望に傷がつく。　逆に、こうして兵を案ずるフリをすれば、慕う兵が増える。

メリャーナはもう、クアルーン残党以外の者と戦っていた。

サコン「窮鼠猫を噛むとも言いますからね？　メリャーナ様の慎重さは、必ず良い方向に働きますよ」

サコンもまた、そんな言葉をかける。　こうしているのは、周りの目を気にしているからだった。

エージェントPとQは、ザキラの別命があるとメリャーナの側を離れたが、代わりに帝国軍の将校が、多数派遣されていた。　その全員にザキラの息がかかっているとは言わないが、1人や2人はそういった人間が混じっているはずだ。

メリャーナ「…猫と言えば、ワグナーの容態が気になります。　無理に連れて来てしまったけれど、この暑いアラビアの風は、あの子のためにならないかも…」

メリャーナはそんな言い方をしたが、実際ついて来る事に執着したのは、ワグナーの方だった。　何かを察したらしく、ある日、ガルダを降りようとしたメリャーナの裾に爪を立て、離れようとしなかったのだという。

メリャーナ「こんなワガママを言う子じゃないはずなんだけれど…」

皇女が飼っている猫だから、一緒に行けない所は多い。　たとえゲージに入れたとしても、貴族との晩餐や戦場の視察に、猫のいる場所などあろうはずがない。

それをワグナーも覚えていて、メリャーナがドレスや軍服を着ると、一声鳴いて留守番をかって出る事が多かったらしい。

サコン「猫なりに、何かを感じたんですかね？」

そして実は、メリャーナのガルダは翌日から後方の輸送に回し、メリャーナは地上に司令部を置く事が決まっていた。　だからワグナーがガルダに残っていれば、メリャーナとしばらく会えなくなっていただろう。

メリャーナ「それは、私としばらく会えない事でしょうか？　それとも…

…死期かしら？」

メリャーナが顔を暗くする。

１５歳の猫だから、長生きした方なのは分かっている。　一度泡を吹いて以来、体調も良くはない。　それでも、子供の頃から愛猫である。

サコン「どうでしょうか？　まあ、私にできる事は、せめてワグナーが安心して逝けるよう、それまでにメリャーナ様の国をお作りする事だけですね。

メリャーナ様が安心なされれば、ワグナーもまた安らかに眠る事ができるでしょう」

メリャーナ「…サコンも、上手い事を言うのね…」

寂しげに笑ったメリャーナだったが、その目の光は強く、微塵も霞んでいなかった…。

【2】

サコン「ところでメリャーナ様。　ザキラのエージェントについてですが…」

サコンが研究所から持ち出したデータは、詳しく解析が終わっていた。　また、それを軸に引き続き探りを入れたが、調べれば調べるほど、特に軍事面でのエージェントの強さは際立っていた。

そして…。

メリャーナ「…宇宙での一件。　裏でエージェント…　つまり、ザキラが糸を引いていたというのは、間違いないのですか？」

サコン「暴走が、故意か真実かは掴めませんでした。　しかし、エージェントが動いたのは間違いありませんね」

サコンは不確定情報を廃したが、メリャーナはすでに結論を得ていたように見えた。

メリャーナ「故意でしょう。　わざわざ戦場に近い宙域で実験などしなくても、ルナ2でいくらでもできるはずですから。　やはりサコンの読み通り、ザキラはどこまでも、帝国を自らの欲望の出汁（だし）にする気ですね…」

サコンは、クアルーン平定に取りかかる前に、ザキラは帝国を強大

にするフリをしながら、結局、己だけが権勢を握るために、立ち振る舞っていると予見した。

それは、メリャーナに対して注意を促すためのものだったが、図らずも宇宙で証明されてしまったことになる。

サフラン平定戦で、霧雨とマヒロが鮮やかに勝てば、宇宙に新しい政敵が生まれる。　だからそれを、事前に潰した。

メリャーナ「急ぎましょう。　いくら帝国が強大とは言っても、こうも不毛な戦いの日々を送り続ければ、国は疲弊して…」

近衛兵「失礼します。　ファツーリ大尉が見えられました」

そこまで言った時、ドアをノックする音が聞こえた。

メリャーナ「…少々お待ちを…。　…はい、お入り下さい」

メリャーナは一呼吸置いてから、その士官を招き入れた。

ロメオ「失礼致します。　バルカン半島に展開する、オクサイド中佐より連絡が参りました。　明朝、フロンティアガードに対し、戦端を開くそうです」

メリャーナ「…分かりました」

一礼をし、士官が部屋を出て行くのを確認してから、メリャーナは大きくため息を吐いた。

メリャーナ「間に合いませんでしたか…。　これでオクサイド中佐が勝てば、サコンの策略も画餅となってしまいます。　侵攻を止めようにも、オクサイド中佐は私の管轄下にはありませんし…」

フロンティアガードを生かしたまま利用するのがサコンの策である以上、オクサイドがそれを討ってしまうのは都合が悪い。　今のメリャーナにとって、ザキラのエージェントと多少なりとも関わりのあるオクサイドは、味方であって味方でないのだ。

サコン「そう嘆かないことです。　戦いとは、二手先、三手先を考

えて行うもの。　策はまだあります」

まだ、と気になる語句はついたものの、サコンの知略が冴え渡る瞬間が、また見られるのか…？

【3】

メリャーナは、沈んだ表情で書類にサインをする。

メリャーナ「…全部、サコンの思う通りになさい。　その代わり、しばらく私を1人にしてもらえますか？」

言われたサコンが、暗い表情で部屋を出る。

その足で、サコンは司令部を離れ、近くの空き地に繰り出した。別に目的はなかったが、何となく気分が塞ぎ込んでいたからだ。

と、そんなサコンに降りかかった声。

サコン「…マリーさ…　いや、マリー少佐殿」

元気のない声で、相手の名前を呼ぶサコン。

マリー「階級はいりません。　敬称も適当にして下さい」

サコン「…そうなんですか？」

マリー「私は、メリャーナ様の侍従ですからね？　メリャーナ様が偉いだけで、私が偉い訳ではありません」

虎の威を借りる気はないという事だろうか？　しかしマリーは、なぜ突然こんな話をする気になったのか？

マリー「私と同格の扱いをされて、サコンの気分が晴れるとは思いませんが…。　ともあれ、メリャーナ様にあの顔をさせるとは、サコンも一人前になったと思っただけで」

サコン「…一人前、ですか…」

マリーの意図が、今1つ分かっていない感じのサコン。　顔も声も沈んだままだ。

マリー「あの後、思い出した事があって、メリャーナ様と話をして来ました。　サコンはもういなかったから、入れ違いになったんでしょうね？」

マリー「そうしたら、メリャーナ様の表情が、急に変わっておいでしたので、何かあったと思いまして。

詳しくは聞いていませんが、また策を進言したようですね？　それも、メリャーナ様にあの顔をさせる…　一見すると、不興を買った気持ちになる策を…」

マリーは、メリャーナの顔から、すべてを悟ったようだった。　サコンには分からなかった、メリャーナの心の内を語る。

マリー「心配しなくても大丈夫です。　メリャーナ様があの顔をな

される時は、頭ではお分かりなのに、感情が処理しきれずに困っておられる時。　別に、サコンに含むものがある訳ではないですから…」

サコンの表情が、少しだけ解れる。　どうやらマリーは、メリャーナに仕えて浅いサコンを気遣って、わざわざ話をしに来たようだった…。

【4】

サコンがメリャーナに示した策は、暗闘、政争の類いに疲れているメリャーナには、喜ばれるものではなかったはずだ。

サコン「要は、オクサイドが苦戦すれば良いわけで。　ですから、援軍と称してカトラスを送り込みます」

ヤタガラスを詳しく知る者ならば、今さら解説はいらないだろう。

先のユービットにおいて、カトラスはクアルーンに潜入し、見事総大将を討ち取っていた。　公式には自害とあるが、明らかに謀殺である。

つまり、何かに化けて潜入するのが、カトラスの得意技みたいなも

のなのだ。

マリー「しかしカトラスは今、バグダッドでは？　代わりを出す余裕はありませんよね？」

バグダッドを、たいした被害もなく包囲できたのは、これまたカトラスの暗躍があったからだった。

包囲そのものは、本国の派遣した将が指揮を執ったけれど、その将が軍を動かした時には、すでに残党はバグダッドに逃げ込むしか道がなくなっていた。

カトラスが既に内部に潜入し、撹乱工作を終えていたからだ。

サコン「包囲は続けます。　ただし、帝国軍がではなく、マリンピア軍がです」

マリーの表情が、微かに変化する。

マリー「…マリンピアを引き込みますか…。　メリャーナ様が、あの顔をなされる訳です」

マリーは策に関心すると同時に、メリャーナの苦悩の根源を理解したようだった。

サコン「マリンピアには、サヤリ姫救出の件で貸しがあります。心の内面はどうあれ、たいした怪我もなく姫がマリンピアに帰れたのは、シュバルツ中佐の機転のお陰と聞きました。

つまりそれは、帝国の貸しのようなものです。　その帝国軍を率いるメリャーナ様が出兵しろと言えば、断る事はできません。

そしてマリンピアが動けば、他のアラビア諸国も、こぞって参戦するでしょう」

アラビア半島では、クアルーン崩壊以来、恩賞目当てのレジスタンス狩り、残党狩りが続いていた。

そこにマリンピアが、本格的な派兵に名乗りを上げれば、バスに乗り遅れるなというムードになるだろう。　そうすればアラビア半島諸国が次々に参戦し、バグダッドを包囲するための軍ぐらいは集まる。

あとは、恩賞でもちらつかせて、適当に戦わせておけばいい…。

第７９章　終焉のグランズ（前書き）

（測定３回目）

ＤＲ．マンソン「次々に能力を暴いてやるぞ？

…ん？　誰じゃ、こんな所に生ゴミを出しおったのは？　今日は、燃えないゴミの日ではないのか？」

マヒロ「…う…。　２…　操縦能力が２…」

ジェイソン「よっぽど、前回の結果が効いたんでしょうね？　ＭＳに乗れないはずのキャラより、１０以上も低いんですから」

ＤＲ．マンソン「ふん。　そのまま、明日の燃えるゴミの日まで置いておけい。　儂らは次に行くぞ！」

ジェイソン「次は、ザキラ様の宿敵、メリャーナ軍です」

★メリャーナ★

操縦８１　統率９０　知力８２　政治７８　魅力９９

DR．マンソン「ぐぬぅっ！　どっかの生ゴミと違って、弱点がないではないか！　だいたい、魅力が９９じゃと?!」

ジェイソン「長年ザキラ様の目の上の瘤だっただけに、能力は高いですね…。　部下はどうでしょうか？」

★マリー★

操縦８６　統率７９　知力８０　政治７４　魅力７９

★サコン・ミヤイ★

操縦７０　統率７４　知力１００　政治７３　魅力７６

ジェイソン「…悪い予感はしましたが…」

DR．マンソン「知力１００とは何じゃ？　こやつは、某歴史小説

の地面に臥せった龍か？」

ジェイソン「本編であの発言ですから、軍師キャラなことは予想していましたが、まさかのＭＡＸ数値ですか…」

ＤＲ．マンソン「ええぃ、嘆いておっても始まらぬわ！　全貌を明らかにし、ザキラ様に全てをお伝えするのじゃ！！」

★カトラス★

操縦７９　統率７５　知力８５　政治４４　魅力６８

★グリフィン★

操縦９５　統率８２　知力７０　政治３８　魅力７５

★シュバルツ★

操縦８０　統率８０　知力７４　政治２０　魅力８１

ジェイソン「能力が高い上に、みんな頭がいいですね…」

DR.マンソン「…エージェントは、知能は強化しておらぬぞ…。
そうじゃ、たしかあやつは、知力97だったの！　きっといい勝負になるであろう！」

ジェイソン「ドクター？　それはまさか、あいつに全てを押し付けるって意味…　あ、どこへ行くんですか～」

（続く…　よね？）

第７９章　終焉のグランズ

続々と越境する、オクサイド率いる帝国軍。　その威容は、フロンティアガードを圧倒していた。

主力部隊だけで、フロンティアガードの全軍に匹敵し、全体では、倍とまでは言わないが、ざっと３～５割はオクサイド軍が多い。

そのうえ、フロンティアガードの大半はジムやジムキャノンに過ぎず、有力な新型機がいても、その数はまばらなのだから、印象の差はいかんともし難いだろう。

スーリス「オクサイドのおっさんにしては、満を持した方だねぇ？　まあ、お手並み拝見といくか」

スパンツ「拝見するのもいいけどさぁ～？　あんまりのんびりしてると、スーリスちゃんの出番がなくなっちゃうよ？」

スーリスは遊軍として、ある程度の数を任されていたが、オクサイドがそれを当てにしている様子がなかった。　遊軍というより予備軍扱いで、おそらく自分だけで勝つ気でいるのだろう。

スーリス「そこが、あのおっさんの悪い癖なんだよ。　灰汁（あく）の強い

顔してるくせに、戦い方は素直なんだよねぇ…。

正面から馬鹿正直に攻めて、勝った負けたは時の運。　なんちゃってね？」

おどけた風に言うスーリス。

しかしその指摘は、あながち外れてはいないかも知れない。　オクサイドが、応変の機略を駆使したとか、千変万化の奇策が得意だという噂は、少なくとも帝国軍内にはない。

スパンツ「だからって、負けるの待つのも、意地が悪いと思うよ？　相手が待ち伏せしてることは知ってるんだしさぁ～。

前もって側面からちょっかい出してやれば、オクサイドの旦那の軍が楽できるんじゃない？」

スーリス「残念だけど、あたしはそんな命令聞いてないねぇ？　命令もないのに突出して、全力でこっちが叩かれたら堪らないよ」

どうやらスーリスは、命令がないことを盾に、あくまでオクサイドを助ける気がないようだった。

これを薄情と見るか、冷静と見るかは意見が別れるところか？　先

にスパンツの助力を断ったのは、他ならないオクサイド自身なのだから。

そして、オクサイド軍本隊はフロンティアガードを圧倒していても、スーリスの任された遊軍は、その１／１０ほどしかいない…。

【2】

トーチカに身を潜めた砲撃用ＭＳに、戦車や野砲。　全軍の配備が終わるのは、今夜半までかかりそうだったが、それが揃えば、フロンティアガードの全軍が集結したことになる。

この辺りは、旧国名で呼ぶならば、ルーマニアの東で、領地のほとんどが平原のフロンティアガードの中では、比較的川や湖が多く、進軍を阻む地形がある所だ。

フロンティアガード軍は、他の守りを捨てて、この地に全てを賭けていた。　幸い、ロシアの帝国軍と、トルコを制したシュバルツの軍に、大きな動きがなかったからである。

ミケル「…茄子…。　見た事もない大軍なんて言うが、いざ見るとなったら、案外簡単なもんなんだな…」

ミケルの声は、少しだけ震えていた。

茄子笛「ミケさん、もう行ってください。　さもないと、もっと大事な所にたどり着けなくなりますよ？」

ミケルの大事。

それは、茄子笛がこのオクサイドに勝ったことを土産物に、メリャーナと直談判に及ぶことだった。

実は、フロンティアガードここに全力を傾注したのも、次に戦う気がないからだった。　オクサイドを破り、何としても和議を結ぶ。

一月の間に、ミケルはフロンティアガード首脳部全員と話をし、その方針を認めさせていた。

茄子笛「やっぱ、ミケさんには敵いませんよ…。　１万機のＭＳを、たった１人で止めようってんすから」

ミケル「さすがに、メリャーナ軍1万機なんてのは嘘っぱちだろ？　昔から戦争なんてそんなもんだ。　5万の軍を10万って言って出陣して、しかも実際戦うのは、前に出てきた3万、なんてな？」

変わらずひきつった表情の割には、ミケルは冷静さを失ってはいないようだった。

茄子笛「そんなもんすか？　とにかく、オクサイドは俺が命に替えても止めます。　だからミケさんは…」

ミケル「簡単に命に替えるなんて言うな。　命を守るために軍はある。　捨てるためにあるんじゃない。　少なくとも、フロンティアガードではそうだ」

ミケルは、急に茄子笛の言葉を遮り、強く言い聞かせるように言った。

茄子笛「ミケさん…」

2人は互いを見つめ合い、強く頷いた。

そして茄子笛は、自らのMSに乗り込み、ミケルは機上の人となった…。

【3】

グランズ仲間A「…俺は行くぜ？　ナディア、今まで世話になったな」

それだけ言って、部屋を出て行ってしまった仲間の1人。　その背中に手を伸ばしかけて、しかし結局、見送るしかないナディア。

その理由は、ナディアの後で呆けた表情をし、意味の分からない言葉を呟き続けるエヴァニーだろう。　その目は大きく窪んだように見え、肌も蒼白くくすんでいた。

もちろん、麻薬リターナのもたらしたものである。

グランズ仲間B「…なあ、ナディア。　もう、いいんじゃないか？　エヴァニーを自由にしてやれよ」

淡々と、しかし深刻そうな表情で語るのは、先に出て行った仲間同様、苦難の逃避行を潜り抜けた、グランズ最期の仲間の1人である。

ナディア「…自由にって、あんた何を…」

グランズ仲間C「…俺達は、今までエヴァニーに頼り過ぎてたんじゃないか？　って事さ。　俺達が周りにいる限り、エヴァニーはグランズのリーダーを続けなけりゃならない。　エヴァニーが望んでいるかも訊かないまま、俺達はエヴァニーにグランズのリーダーである事を、無理強いしてたんじゃないのか？」

言い終わると、微かにため息をつくその仲間。　ナディアはその顔を見て、吐きかけた言葉を引っ込めた。

グランズ仲間B「自分で言うのも何だが、グランズはよく戦ったと思うよ。　MSもないのに、バカデカい帝国相手に、意地を見せられたんじゃないか？

幸い今、俺達はここにいる。　もうエヴァニーに頼らなくても、戦える」

彼らの言うところは、グランズを抜け、フロンティアガードの一員

として戦うということなのだろう。

グランズ仲間C「じゃあな、ナディア。　それと、これは俺からの最後の土産だ」

無造作にテーブルに置かれた、小瓶を詰め込んだ透明なプラスチックの箱。　それを見たエヴァニーが、突如として立ち上がり、その箱を胸に抱く。

ナディア「…あんたっ！　何て事をするんだ！！」

驚いたナディアが箱をエヴァニーから取り上げ、目はまるで鬼の形相で、その仲間を睨めつけた。

無理もなかった。

それは、ナディアが憎んで止まない、リターナそのものだったのだから。

ナディア「…まさかとは思うけど、、今までもあんた達がっ！！」

睨めつけただけでは収まらず、ナディアはその仲間の腕を掴み、強く握った。

女性とはいえ、長年整備に、レジスタンス活動にと飛び回って来た彼女である。　その力に、腕を握られた仲間は苦痛の表情を浮かべ、やがて耐えられなくなったのか、ナディアの手を振り払った。

グランズ仲間C「…勘違いすんなよ？　リターナは、エヴァニーが自分で手を出したんだ。　俺達がそのことを知ったのも、つい最近だ。

何故なら、お前が何もかも抱え込んで、話そうとしなかったからな？」

仲間のナディアへの口調が、途端に険しくなった。　さっきまでのエヴァニーを案ずる話しぶりが、いつの間にかナディアをお前呼ばわりする、乱暴なものに変わってしまっている。

グランズ仲間B「…こいつなりに、エヴァニーを心配してたんだぜ？　なのにナディアは、俺達に何も話そうとはしてくれなかった。

俺達だって、リターナがどのくらい恐ろしい物かは知ってるし、その看病となれば、ナディアが辛かったのも分かる。　だけど、じゃあなんで、俺達を呼んでくれなかったんだ？

シベリアもそうだったな。

１人で全部抱え込んで、１人で逝った。　それは、仲間を想う気持ちからだとは思う。　思うが、それじゃ仲間でいる…　俺達がグランズでいる理由が、なくなっちまうんだよ…」

その言葉に、怒りや不満の響きはなかった。　込められていたのは、むしろ寂しさとやりきれなさで、それが彼らがグランズを抜ける本当の理由なのだろうか？

ナディア「…別にあたしは、あんたたちを頼りにしてなかった訳じゃなくって…」

ナディアの顔に、さっきまでの怒りはもうなかった。　ともすれば、泣き出してしまいそうな悲しみが満ちている。

グランズ仲間Ｂ「今さら、だ。　俺は、この一月でＭＳの操縦を覚えたんだ。　まだ前線で戦うには程遠いが、後方で陣地を作るぐら

いはできる。

俺もこいつも、頑張ってるんだぜ？　じゃなきゃ、リターナを買う金なんてある訳ないだろ？」

もう1人を指して言った言葉。　その言葉が正しいと証明するかのように、かつての仲間たちの身体は、逃避行の時に比べて、頑健になって見えた。

グランズ仲間C「…俺達はたぶん死ぬ。　誰も言わないが、攻めて来てるオクサイドの軍は、フロンティアガードの倍だって噂だ。それだけじゃない。　もう少しすれば、皇女のメリャーナが、1万機のMSを率いて来るなんて話まであるくらいだ…」

そこまで言った仲間が、一旦大きく息を継いだ。

グランズ仲間C「だが、それでも俺は戦うぜ？　俺は、帝国が支配する世界に生きるくらいなら、死んだ方がマシだからだ。

だがな…　エヴァニーが過去にすがって、全てを忘れたいと望むなら、それもいいと思うんだ。　どうせ死ぬなら、苦しんで死ぬより、楽に逝きたいだろ？　ただ俺は、昔から格好をつけたがる性分だから、こうしちまうだけさ…」

逃避行に加わったメンバーは、多かれ少なかれ帝国に顔が売れている。　帝国から見れば、重要手配者たちだ。　降伏など許されるはずもなく、捕まれば公開処刑は間違いない。

加えてエヴァニーは、サヤリと引き裂かれ、親友のはずのシベリアの判断を理解できないまま、身体だけ落ち延びた形であった。

その絶望の淵に、リターナのもたらす甘い過去への誘いは、いったいどう映ったのか…？

グランズ仲間Ｂ「…ナディア。　あまりエヴァニーを追い詰めてやるな。　エヴァニーはまだ、１６だったんじゃないか？　１６の子供に、あれは駄目、これは駄目、立派なリーダーでいなさいって言っても、どっか無理があったんだろ。

それはもちろん、俺達の責任でもあるんだが、だからこそ、そろそろエヴァニーを楽にしてやってもよくはないか？」

ナディア「…あんたら…」

悲しげに呟くナディアの身体から、みるみる力が抜け落ちていく。

そして、ナディアが床に落とした箱に、一目散に飛び付くエヴァニー。

それを止める気力が、ナディアにはもう残されていなかった。

グランズ仲間C「…じゃあな、エヴァニー。

お前が、親父さんたちの生きてる頃にいるって事は、俺はまだ、片目を失う前のイケメンなはずだ。　いい男の頃の俺だけが記憶に残ってるってのも、あながち悪くはないかもな？」

屈指の古参だったその仲間は、そう言ってエヴァニーを、じっと慈愛の表情で見つめて…

そしてその日から後、二度と姿を見せることはなかった…。

第８０章　王として、父として…（前書き）

（４回目）

ＤＲ．マンソン「さて…」

ジェイソン「ドクター。　前回急に帰っちゃうから、コーナーが終わっちゃうのかと思って、心配しましたよ～」

ＤＲ．マンソン「何を寝ぼけたことを！　儂は、あやつに仕事を回してやっただけじゃ」

ジェイソン「…本当に回したんですね…」

ＤＲ．マンソン「あやつは気に入らんが、ザキラ様のためとなれば別じゃ。　Ｄもつけてやったし、そのうちメリャーナは…」

ジェイソン「おおっ、Ｄを使うんですか?!　　…と本編の秘密を洩らしてしまわないうちに、測定を」

ＤＲ．マンソン「そうじゃな。　今回は、ゴトーの傭兵団じゃ」

★ゴトー★

操縦９８　統率８１　知力１９　政治５　魅力８３

★ジルド★

操縦９２　統率４９　知力１１　政治３　魅力７８

★ネロ★

操縦７９　統率６８　知力８７　政治３６　魅力６２

★ミア★

操縦８６　統率７０　知力６３　政治６０　魅力７３

★メリル★（覚醒前）

操縦８１　統率５　知力６４　政治１４　魅力７５

ジェイソン「…どこからコメントしていいか、もの凄く迷うんですけれど…」

DR.マンソン「傭兵じゃから、政治はいらんじゃろ？　あと、操縦はさすがに高いの。　知力は…　そこが弱点じゃな」

ジェイソン「ドクターの知力は９６ですからね？　もう余裕で騙し放題ですね」

DR.マンソン「世の中、力だけが全てでないことを教えてやるわ！　それから、一緒におる奴のはこれじゃ」

★ゲット・アルスター★（覚醒前）

操縦７７　統率５０　知力４２　政治７　魅力９０

★スティヴ★

操縦９０　統率６７　知力５７　政治５０　魅力７２

★リンダ★

操縦６６　統率７８　知力７４　政治７１　魅力７５

ジェイソン「そう言えばドクター？　メリルとゲットについている、（覚醒前）ってのは何なんですか？」

ＤＲ．マンソン「それか？　それは物語が進むと分かるかも知れんの？　まあ、数値が★★★★★★★んじゃがな～」

ジェイソン「え、えぇ？！　…と言ったところで…」

（続く）

第８０章　王として、父として…

郊外に集結したＭＳ、Ｍ１アストレイの姿は、帝国軍のそれに勝るとも劣らなかった。　そればかりか、シノノメの周囲を固める親衛隊には、さらに新型のムラサメの機影までである。

はっきり言うと、帝国の属国でここまでの力を持つ国は稀だ。　それらは全て、国王たるシノノメの政策の成果に他ならない。

シノノメ「ではサヤリ、行ってくる」

サヤリ「……。」

シノノメはそう告げたが、ようやく姿を見せたサヤリは、武運を祈る言葉も、無事を願う言葉もかけず、ただ苦しげに目を伏せただけだった。

シノノメ「……。　…マンダラ、出陣じゃ！」

そんなサヤリを、シノノメは一瞬悲しそうな目で見たが、全てを振り払うかのように言葉を発し、その場を後にする。

マンダラ「…シノノメ様…。　帝国の求めを断れとは申し上げません。　しかし、親征などされずとも、部下に任せればよろしいのでは？　いえ、今からでも私だけで…」

出発して間もないというのに、マンダラはそんな言葉をかけてきた。

理由は、シノノメの病を案じたからだろう。

シノノメ「…ふぅ…　はぁ…」

サヤリの前では抑えていたが、シノノメの息は荒い。

マンダラ「何故、病をおしてまで、帝国に肩入れなされますのか？　此度の戦はただの後詰め。　シノノメ様が、ご親政までなされる義理はないのでは…？」

シノノメの病は、ゆっくりとだが、確実に悪化していた。

医者の見立てでは、すぐに入院して最善の措置を施せば、簡単ではないものの、治療はできるというものだった。　しかし、シノノメは今までも、医者の強い勧めを断って政務を優先することが多かったし、さらにこうして自ら軍を率いたりまでする。

シノノメ「…あの子の…。　サヤリのために、道を拓いてやらねばならぬ。　メリャーナ殿下に…　直に皇女殿下にお会いして、サヤリの後々の事、くれぐれもお頼みしておかなければ…」

シノノメは荒い息のまま、己が本心を語っていた。

マンダラ「…しかしっ！」

見かねてか、マンダラは語気を強くする。

ちなみに、シノノメが病であることは、医者と侍女を除けば、マンダラしか知らない。　サヤリにすらその事実は伏せられ、努めて壮健を装おっていた。

マンダラ「…しかし、これではあまりに…」

シノノメ「…無茶と言うか？

だがな、マンダラ。　お前は見なかったか？　先にマリンピアに皇女殿下が訪れた時、殿下の隣におった小男の顔を」

マンダラ「小男…　でございますか？」

マンダラは記憶を手繰る。

先にとは、サヤリがまだ、反帝国レジスタンスと行動を共にしている時の事だろうか？　確かその時、シノノメはメリャーナに玉座を明け渡し…。

マンダラ「…っ！！」

シノノメ「思い出したようだな？　あの男、私が玉座を降り平伏するのを、まるで喜ぶかのような顔で眺めておった。後で聞いた話だが、あれがザキラとかいう宰相の側に仕える者の1人らしい」

マンダラ「…は…」

シノノメ「臣下は、主を映す鏡のようなもの。あやつが不遜なのは、宰相が…　帝国本国が、マリンピアを軽んじておる証拠じゃ。

しかし、皇女殿下は違った。　玉座を降りた私を、自分が何か悪い事でもしたかのように見ておられた。　だからこそ、殿下にお頼みせねばならぬのだ…」

つまりシノノメは、ザキラの冷淡さを見抜いて、危険視したということか？　冷淡、それすなわち、些細な口実をつけて、マリンピア

に難癖をつける可能性を示す。

そう言えば、一時グラーフェンの後継が問題になったエルフレアも、サヤリと同じ１６であったか…？

マンダラ「…そ、それは分かります…。　しかし今、シノノメ様に何かあった暁には…」

逆にマンダラの方が、悲壮感を漂わせている。

シノノメ「…マンダラ…。　気持ちは有り難いがな、人をそう簡単に殺すでない。　医者の見立てが確かならば、薬はまだ、幾ばくかの効果があるはずではないか…。　ほれ、ちょうど薬の効き目が切れる時間になったに過ぎぬ」

シノノメはそう言って笑ったが、その顔の歪みは、完全には消せていなかった…。

【2】

サコンの意図は当たった。

送られたメリャーナの書簡が巧みだった事もあり、僅かな時間でバクダッドは、アラビア半島諸国の軍に包囲を任せられるようになる。

そしてその中でも、国王のシノノメが自ら軍を率いたマリンピア軍は、その精強さを周囲に見せつける。　バクダットへの行き掛けの駄賃とばかり、南の要地バスラを、たった2日で抜いてしまったのだ。

メリャーナ「シノノメ殿下。　こたびの参陣、大変嬉しく思います。　お会いする度に、無理ばかり言って心苦しいのですけれど…」

着陣の挨拶に来たシノノメを、出迎えたメリャーナの言葉の歯切れは悪かった。　さらに、目線も宙を泳ぐ事が多く、そんなメリャーナを見たシノノメは、自分の人を見る目が、まだ確かだった事を感じていた。

シノノメ「皇女殿下におかれましては、我がマリンピアを頼りにして頂き、むしろ喜ばしい限りでございます。　先には、我が一族の

恥を晒したにも関わらず、このような機会を設けて頂きましたこと、厚く御礼申し上げる次第でございます」

メリャーナ「恥などと！　あれは私の…」

続いて、ありがちなやり取りに織り混ぜられた言葉にまで、敏感に反応するメリャーナだった。

シノノメ「…その一族でございますが…」

挨拶の口上を述べる時、ずっとメリャーナを真っ直ぐに見上げていたシノノメが、かすかに目線を伏せたように見えた。

メリャーナ「サコン。　申し訳ありませんが、外して貰えますか？」

シノノメの意図を察したのだろう。　メリャーナは、自らの知嚢と頼りにするようになっていたサコンまでも、部屋の外へ出ていくように求める。

サコンは、周囲を固めていた兵をすべて下がらせ、自身もまた、カトラスと共にメリャーナの側を離れた。　メリャーナの傍らに残ったのは、侍従のマリーただ1人…。

【3】

メリャーナ「サヤリちゃん、元気にしてるかしら？」

シノノメ「…くぅ…」

誰もいなくなるや、メリャーナは皇族らしい言葉遣いを止め、サヤリを案ずる言葉を口にした。

そしてシノノメは、メリャーナが娘を気にかけていた事実に、思わず声を詰まらせる。

シノノメ「…娘が反帝国のレジスタンスに拐かされるなど、マリンピアにとって、取り潰されて当然の失態。　にも関わらず、お咎めがないばかりか、その身を案じて下さいますのか？」

メリャーナ「咎めと言うならば、サヤリちゃんを止められなかったのは、私の責ですわ…。

シノノメ殿下には、詳しくお話していませんでしたね…？　私、実

は、まだサヤリちゃんがアラビア半島にいる時に、会って話をしているんです」

メリャーナが告げたのは、覚悟を決めたシノノメすら驚かす事実。

シノノメ「で、ではまさか、殿下はサヤリが…　我が娘が、誘拐などではなく、自らの意志でレジスタンスに随身していると知りながら、あえて何も言われませなんだと?!」

メリャーナ「…そうなりますね…。　この際ですから、私の知る全てを、殿下にお話ししておくべきかも知れません…」

そうしてメリャーナは、自らの知る事をシノノメに語る。　もちろんそれには、サヤリとエヴァニーとの関係までも含まれいた。

シノノメ「…そうでしたか…。　私は、なぜサヤリがこうも執拗に逃げるのかと、心のどこかで測りかねておりました。　ですからそれは、私が娘に口うるさくしてばかりいる事に嫌気がさしたのだと、勝手に答えを出しておりましたが、まさかそのような…」

シノノメは驚き、しかしどこか納得したようでもあった。

シノノメ「…私は、国王、父親のみならず、人として失格なようですな…。　王として後継を育てられず、父として娘に好く思われなかった。　そればかりか、他人の想いに気づかず、踏みにじってしまった…」

シノノメはそう慨嘆し、大きく息を吐いた。

サヤリを…

娘を『他人』とまで言ったシノノメの顔は、冷たいどころか、熱い涙が流れ落ち始める。

メリャーナ「…シノノメ殿下…」

そんなシノノメを見て、さらに苦しそうな表情をするメリャーナ。

シノノメ「無理を承知で申し上げます！　私が亡き後、マリンピアは皇女殿下にお任せできませぬか？」

数瞬の後、何かを決めたように、シノノメは切り出した。

メリャーナ「え、ええ…　マリンピアのことならば、もちろんよしなに…」

シノノメの真意を理解できなかったのか、メリャーナは戸惑いながら言う。

シノノメ「そうではなくっ！！　…う　…けほっ　げほっ！」

メリャーナ「殿下っ！　マリーっ！！」

急に咳き込んだシノノメを見て、マリーに周りの者を呼ばせかけたメリャーナ。　だがシノノメは、必死の形相で首を振り、それを遮った。

シノノメ「そういう意味ではございません。　マリンピアは私の代で終わりにし、サヤリを…　娘を、王女という呪縛から解き放ってやりたいのです」

メリャーナ「…えっ？！」

思いもよらなかった言葉。

シノノメ「…私も国王で、代々続くマリンピア王家の血を継ぐ者。
先代よりマリンピアを繁栄させ、次代にそれを託すのが己が使命と思って、努めて参りました…。　しかし」

シノノメ「わ、私は、先にも申し上げたように、あらゆる意味で、その継承につまづきました。　かくなる上は血などに拘らず、マリンピア、サヤリ、それぞれがより良き行く末を迎えられるように、配慮するが最期の務め…」

シノノメは、荒い息を押し隠すのも止め、熱っぽく語り続けた。

メリャーナ「…最期などと…。　ま、まさか殿下、すでに…？」

メリャーナはその様子と気迫から、真実を察したようだ。

シノノメ「御心配には及びません。　何も、今日明日の命という訳ではございません。　それは、バスラで十分、お目にかけられたと思っておったのですがな…？」

メリャーナ「…は、はい…。　マリンピア軍の…　殿下の勇壮なる様、このメリャーナ、確かに伝え聞いております」

シノノメのその哀しいまでの言葉は、メリャーナの心を強く揺り動かし、彼女の頬を熱い涙が伝い始める。

シノノメ「娘に望まぬ道を押しつけるのは、、私も人の親として、忍び難き事でございます。

しかし、残念ながら私も国の主。冥土にて、我が民が苦しむ姿を見たくはございません。　故にマリンピアを、殿下御自身に治めて頂きたいのです。

もちろん、このような大それた願い、易々と叶うとは思っておりません。　ですから、先のバスラであり、此度の参陣なのでございます…　…くぅ…」

涙を流しながら、雄壮に、だが苦しそうに、そして何より純粋に、国と娘の行く末だけを案ずる姿。

メリャーナ「殿下の願い、このメリャーナ、確かにお聞きいたしました。　ですが、それはまだ時期尚早というもの。

…まだしばらく働いて頂き…。

そうですね。　帝国が再び世界に安寧をもたらした時にでも、もう一度そのお話を聞かせて頂けますか？」

メリャーナも涙を隠そうとはしなかったが、この場で願いを叶えたならば、シノノメが思いを遂げてしまう気がして、ついそんな事を口走ってしまう。

シノノメ「…はは…。　これはまた、殿下もお気の長い…」

シノノメは、少しだけ笑みを覗かせた。　そして今度は、メリャーナがマンダラを呼ぶのを断らなかった。

マンダラ「……。」

入って来たマンダラは、シノノメの表情から悟ったのだろう。　静かにメリャーナに膝まづき拝礼すると、何も言わないまま、シノノ

メと退出して行った。

【4】

マリー「メリャーナ様？」

シノノメが退出した後も、その場に立ち尽くすメリャーナを心配してか、マリーが声をかける。

メリャーナ「…渡りに舟と言うべきなのかも知れません。　けれど、黙って渡るほど、私は器用に生きられないのですよ。　何としても、サヤリちゃんを…。　いえ、サヤリ姫を、マリンピアの立派な主に」

純粋にサコンの策だけを見るならば、マリンピアを託されたのは、まさに好機だった。　メリャーナの直轄が領土返上の条件ならば、それを取り上げることは、いかにザキラと言えどできないはずだ。

しかしメリャーナは、シノノメが心の奥底では、サヤリが女王となったマリンピアが、繁栄するのを望んでいると察した。

マリー「メリャーナ様に、近道はお似合いになりません」

そんなメリャーナを、マリーは温かくも、決意を新たにした目で見つめる。

メリャーナ「マリーには、また苦労をかけてしまうけれどね？」

そしてメリャーナもまた、マリーに微笑みを返し、心を固めたのであった…。

第81章　マヒロ　VS　ジェイソン（前書き）

（5回目）

ジェイソン「ドクター！　私のMSを用意して下さい。　ちょっと1人、殺したい人間ができました」

DR．マンソン「…な、何じゃジェイソン。　藪から棒に？」

ジェイソン「いや、本編ですよ。　何ですか、この態度は！　親に孝せず、さりとてそれに替わる志もなく…。　こんな奴は、今すぐ死ぬべきです！」

DR．マンソン「…本編…。　それはマズイじゃろ？　第一お主は、この章で宇宙に行かねばならんから、そんな暇はないぞ？」

ジェイソン「そうなんですか？　というかあの娘、何とかなりませんか？」

DR．マンソン「そう言われてものぅ…。

そうか。　ヤヌス家は名家でありながら、家を傾けてまで、ザキラ様に奉公したんじゃったな…」

ジェイソン「そうです。　家を潰すというならば、相応の覚悟と志があってしかるべき。　にも関わらず、この小娘は父親の気持ちも知らず、己の我儘のためだけに…」

DR．マンソン「ま、まぁ穏やかに、な？　とにかく、そやつらの能力でも見てやろうではないか？」

★シノノメ★

操縦６０　統率７５　知力６６　政治７７　魅力６２

★サヤリ★（覚醒前）

操縦５１　統率２０　知力３５　政治４０　魅力４２

ジェイソン「ざまぁ見ろ、な能力ですね！」

ＤＲ．マンソン「…今はの。　こやつも覚醒キャラじゃからな」

ジェイソン「いいですよ？　覚醒する前に、私が殺してあげますから」

ＤＲ．マンソン「いや、それはマズイ…。　他の奴等にいくぞ！」

★エヴァニー・ア・ヴェンジャー★（覚醒前＆リターナ使用前）

操縦１１　統率８１　知力４６　政治２０　魅力９３

★シベリア★（覚醒前）

操縦５８　統率７０　知力７４　政治６３　魅力５５

★ナディア★

操縦６５　統率６８　知力６１　政治４８　魅力７０

ＤＲ．マンソン「物語を賑わしてはおるが、成長する前は、こんな

ものじゃろう」

ジェイソン「ですね。　それでは私は、その前に小娘を…」

DR．マンソン「だから、お主は宇宙へ行けい！」

（続く）

第８１章　マヒロ　ＶＳ　ジェイソン

接近する艦隊。

それはグワンバン級を先頭に、一糸乱れぬ縦一列の陣形を敷いていた。

霧雨「…奴ら、宇宙をナメてるのか？　それとも、自分達のしたことの意味が理解できない馬鹿なのか？」

その威容を、苛立たしげに斬って捨てたのは、先の自称暴走事件で、率いていた艦隊の半分、２０隻以上を一挙に失っていた霧雨だ。

彼がこう言うのは、宇宙の治安の現状を鑑みているからだ。　コロニー『サフラン１０』を破壊して以来、帝国軍の人気は再び地に墜ち、スペースノイドたちの恨みを、一身に受けていた。

それを十分知っているから、彼らの艦隊は不意の襲撃に備えて、旗艦を中心に護衛艦が周りを固め、さらにその外側をＭＳ部隊が警戒していた。

そんな彼の目から見れば、今の宇宙でＭＳも出さず、堂々と一列に並ぶなんて、自殺志願者の集団にしか見えないのだろう。

マヒロ「霧雨大佐？　地球の人間はもちろん、ルナ2だって本国の直轄だから…。　目は宇宙に向いていないのよ。　出世にも関係ないしね？」

霧雨とはまた違った切り口で相手の考えを推察してみせたのは、何だかんだでその霧雨と組んで半年以上の、一応皇女のマヒロである。

霧雨「…そうなのかい？」

聞いた霧雨が、意外そうな顔になる。

マヒロ「…これは、身内の手の内、教えちゃう事になるんだけどね？　ルナ2軍と宇宙の貴族、仲良くなり過ぎると困るのよね。

だって、手と手を取り合って反乱起こされたら、それだけで宇宙対地球の戦争が始まっちゃうから。　だからかつては、わざとそうしていたのよ。

さらに婚姻や養子を駆使して、宇宙の貴族自体もコントロールしようとしてた…」

マヒロが話すのは、まるで中世期の戦国武将の話のようだが…。

マヒロ「うちの狡猾なお祖父さんはね、歴史マニアなところがあったの。　変に昔の教訓生かすから」

マヒロには、祖父は父方と母方、さらにミズサワ家絡みの４人がいたが、話の流れからして、誰を指しているかはすぐに分かる。約６０年前に帝国を世界の覇者に押し上げた、大武帝ラインザックだ。

これが、武力で全世界を切り取るなどという暴挙をしながらも、帝国に繁栄をもたらした、あの知的暴君の巧みさだった…。

霧雨「でも、そんな事言ってられるのも、平和な時代だけのはずだろ？　５年前だって、核を使うだけ使って、後始末は僕らに押し付けて…。　関心ないのもいい加減にしないと、本気で殺すよ？」

たぶん冗談なのだろうが、顔は笑っていなかった。　それぐらい、霧雨は本国の対応が不満なのだろう。

マヒロ「とにかく、会談をしてからよ。　副宰相ともなれば権限はあるはずだから、私たちの話に耳を傾けてくれれば…」

【2】

そんな会話が交わされた１０分ほど後。

会談場所に決まっていたマヒロの旗艦スピッツに、副宰相ジェイソンの姿があった。　たくさんの護衛で物々しくなるかとも思っていたが、意外にもジェイソンは、自身を含めて、黒いＭＳ３機だけで身軽に乗り込んで来た。

ジェイソンは人並みの身丈だが、随伴の２人は子供を思わせる小男と肥満体で、変にジェイソンの端正さが目立った。

特に肥満体の方は何か気だるそうにしており、空調の効いた艦内でも汗をかいていた。　一方、小男の方は、常に周囲に気を配っているようで、隙がない。

ジェイソン「これは皇女殿下。　御健勝そうで何よりでございます」

マヒロ「お久しぶりですわ、ジェイソン准将。　この頃は、副宰相も兼任なされているとか。　ご活躍は、宇宙の僻地にいても聞こえて来ますわ」

こんな言葉は、貴族同士のもったいぶった挨拶に過ぎないのだけれど、挨拶もしないのは、いくらなんでもマナー違反。　だからあた

しは、適当な言葉を繋いでおいた。

マヒロ「それでこちらが、霧雨大佐です。　霧雨侯爵家の跡取りで、自家の艦隊ではありますが、艦隊の総司令をしておられる方ですわ」

ジェイソン「これはこれは。　霧雨殿は本国でも、若き俊才と専らの噂ですよ？

…しかし、霧雨は当主ではなく、代理なんですか？　私はつい、霧雨侯爵が列席されるものだとばかり」

途端に、霧雨が眉を潜めたのが分かった。　それを見たジェイソンの口元が、僅かに緩んだように見えなくもない。

マヒロ「副宰相ともあろうお方が、何を異なことを仰いますの？　副宰相自身『副』、宰相の二番手ではありませんか。　格はむしろ丁度いいと言うべきであって、皇族の出で、ミズサワ当主の私が出しゃばってしまったことの方が、むしろ場違いなのですよ」

あたしは霧雨大佐の代わりに、こう切り返していた。

副宰相になったせいでもないだろうけれど、数年前に会った時とは、

印象が違っていた。　まさか初対面の霧雨大佐に、堂々と揺さぶりをかけてくるなんて…。

【3】

…あたしの嫌な予感は、こういう時に限って当たる。

霧雨大佐はジェイソンに、たびたび揚げ足を取られ、苛立ちだけを増していた。　残念だけれど、貴族の形式ばった言葉のやり取りの中から、自分の利益になる言質を引き出すような真似が、大佐にはできそうもない。

霧雨「だから、それで事件の責任を取ったつもりなのか！」

ジェイソン「はい。　むしろ私には、大佐がお怒りになる理由が分かりかねますが。

私は、被害を及ぼしてしまった霧雨家への代艦の提供と、戦死した帝国兵の二階級特進をお約束しました。　暴走はあくまで事故なのですから、これ以上何をしろと言いたいのですか？」

ジェイソンは、またもや口元が笑ったように見えた。　霧雨大佐は

気がついていないようだけれど、もしかしたらジェイソンは、わざと大佐を怒らせて、何かを狙っているのかも知れない。

マヒロ「横から失礼いたしますわ。　副宰相。　私が思うに、霧雨大佐の不満も当然かと。　これでは話になりません」

霧雨「…マヒロ…」

同調してくれるのかと思ったらしく、霧雨大佐はあたしの顔を頼もしい目つきで見てくれる。

ジェイソン「これは、皇女殿下までそのような…」

わざとらしく、そんな事を言うジェイソン。

だけど、霧雨大佐と同じように、口八丁で誤魔化せると思っているのなら、政治家としてのあたしを、こいつは甘く見ている。　あたしをバカにする事に関しては天才的なミクですら、あたしの政治交渉にだけは、文句をつけた事はほとんどないのだから。

マヒロ「まず被害艦の賠償は、建造資源と資金の提供という形で、

すぐに行って下さい。　いつか代艦を造って渡すでは、宇宙の統治に責任は持てませんわ。

それから、コロニー『サフラン１０』を破壊した件ですけれど…」

ここからが本題だった。

今まで黙って聞いていた限りでは、霧雨大佐はジェイソンに、いいようにあしらわれ続けていたのだけれど…。

ジェイソン「サフランは、霧雨が攻めていた地域。　すなわち敵地です。　敵地に対する賠償を求めるなど、殿下もお戯れを…」

マヒロ「戯れではありませんわ？」

あたしは一気に攻める事にした。　ジェイソンの言葉を切り、畳み掛ける。

マヒロ「私は別に、敵地のサフランを元に戻せなどとは申しておりません。

しかし、コロニーが壊れた影響で宇宙の治安は悪化し、ミズサワ、霧雨共に、防衛警察の費用はうなぎ登りですわ。　流れ出た難民も多数おり、受け入れるにせよ、追い返すにせよ、これまた費用があ

りません。

…副宰相はまさか、他人の邸宅の隣で工事をしておきながら、耳栓を買う費用もお出しにならないおつもりなのですか？」

あたしの例え話に、ジェイソンの雄弁だった口が止まった。　その瞬間、あたしは勝ちを確信した。

マヒロ「よろしいですね？　６０日以内に、これらの費用全額を用立てること。　さもなければ、本国は責任を取る気がないと見なして、こちらにも考えがありますから」

ジェイソン「…ぐ…」

怒りに腹わたが煮えくりかえった表情のジェイソン。　それでもあたしは容赦しなかった。

マヒロ「ヴァイス少尉。　副宰相かお帰りだそうです。　出口をご案内して差し上げて？」

急に口調を柔らかにして言う。　これが止め。

だけどこのジェイソン、予想以上に諦めが悪い男のようだった。

ジェイソン「…そう言えば皇女殿下。　このヴァイスなる男、賞金首のフェニックス・ナイツの者では？　殿下は逆賊を匿い、本国に二心でもおありなのですかな？」

帰り際、そんな皮肉を言う。

頭はいいのに、性格が才能を邪魔しているタイプなのかも知れない。
　その程度の皮肉に応ずる答えを、あたしが用意していないはずもないのに。

マヒロ「二心などとは、滅相もありませんわ。　ただ、かつての反逆者が忠誠を誓うほどの人徳を、ようやく私も備えられたということでしょう。

祖父のラインザック帝は、逃げる敵の背中すら容赦なく射たせたそうですが、ひと度彼らが振り返ってひれ伏したなら、喜んでその手を取ったとか。私も偉大なる皇帝の孫として、常々見習いたいと思っておりましたの」

言われたジェイソンは、黙って部屋から出て行った…。

【4】

霧雨「マヒロがあそこまで言うなんて。　見ていてすっきりしたよ！」

霧雨は、ひとしきり笑い続けていた。　自分が言いくるめられたのが、よほど気に触っていたのだろう。

マヒロ「これで、あたしの役目は終わりかな？　大佐。　あたしはちょっと政務が立て込んでるから…」

霧雨「そうなのかい？　わざわざ悪かったね」

霧雨は、意外そうな顔をしたけれど、それでもそう言うと、自身のゲイツで自らの艦隊に戻って行った。

マヒロ「…ブラック少佐。　あれでよろしいのかしら？」

あたしは、ちょっとだけ丁寧に声をかけた。

ブラック「完璧な仕事をして頂きました。　これで殿下の…　マーガレットの未来も安泰かと」

マヒロ「何が安泰なものですか。　私と本国との仲を裂こうとしている立場の人間が、よく言います」

ブラック「先に離婚届を持ち出したのは、あちらでございましょう？」

2人の会話の意味は、会談前に遡らなければわからないわよね？

ジェイソンとの会談に臨む前日の夜、ブラック少佐は単身、あたしの私室に来ていた。　何をしに来たかと言えば

『主からの手土産』

と告げて、一編の映像をあたしに見せたのだ。

その映像には、暴走したはずのＭＳが、たいした混乱もなくシャトルから出撃する光景が記録されており、かつ、かなり断片的ながら、会話も収録していた。

つまり、ブラック少佐は

『暴走事件は事故ではなく、仕組まれた罠である』

と密告しに来たのだ。

あたしは、それを聞いた上で会談に臨んでいて、だからこそ態度が強硬だったとも言えた。

マヒロ「…離婚届ねぇ…」

ブラック「左様でございます。　本国は、宇宙を顧みる気がないばかりか、繁栄しないよう邪魔をする気なのです。

となれば、こちらとしてもするべき事をしなければならないのでは…？」

ブラック少佐は、そう囁く。

この男が、仕官すると言いながら、あたしを煽るために近づいて来たのは明白だった。　ただ、煽る目的がまだ分からなくて、しかも告げている内容が真実にも思えて、あたしは迷っていた。

マヒロ「…まだ少佐の事を、全部信じてはおりません。　この賠償を本国が速やかに行ったなら、私はあくまで本国を立てます」

当たり前でしょ？　そのために私はミズサワ家に、養女として送り込まれたのだから。

けれど肝心の本国が、何を考えているのか、分からなくなりつつあったのも事実なんだけど。

ブラック「そんな事は絶対にない、と断言しておきますよ。　私は主とここ何年か、世界の各地に赴きましたが、ザキラはただ、世界を壊して遊んでいるだけです。　帝国は、そのためのオモチャにすぎませんな」

マヒロ「……。」

よく分からなかった。　少なくとも表向きでは、現宰相は強硬派ながら、そんな滅茶苦茶な事をしているようには見えない。

ブラック「自分の狙いをあっさり語る人間ほど、私は信用できると思っています。　取り繕っている人間ほど、いざという時には裏切るものです」

マヒロ「つまり少佐は、私のために働くのは、それが偶然自分の主人の利益になるからなだけ。　そうさらけ出しているから、信用できると言いたいのですか？」

あたしは皮肉ってみたけれど…。

ブラック「なるほど。　そう返して頂けるとは。　はい、それでよろしいと思いますよ？」

あっさり笑顔で肯定されてしまった。

笑い顔までも、どこか胡散臭い感じもするけれど、あたしはどうやら、この男と本国、どちらを信じるべきなのか、分岐点に立たされているようなのだ。

ブラック「繰り返し申し上げますが、私共と密約を結んで頂けるならば、けして悪いようには致しません。　マーガレットに不足している物全て、我々が裏から調達して差し上げましょう」

裏からとか密約とか、堂々と言うのもどうかと思うけれど、魅力のない話ではなかった。

しかし提供を受ければ、確実に本国との仲は険悪になる。　と言うか、それ自体が反逆行為すれすれの、いかがわしい行動だ。

マヒロ「…とにかく、賠償の回答が先です。　本国に僅かでも誠意が残っているのなら、満額とは言いませんが、いくらの支払いはあるでしょう…」

ちなみに、結論から言ってしまうと、本国からは結局、1ギラ、釘の1本たりとも、送られては来なかったのだけれど…。

第８２章　嘘つきな援軍（前書き）

（６回目）

ジェイソン「…あ、ああ、あの生意気な小娘がぁ～！！」

ＤＲ．マンソン「いいようにあしらわれおって…」

マヒロ「だって、あたしの政治力は１００だけど、そいつ８９じゃない？　その差１１じゃ、勝負は見えてるわよ」

ジェイソン「また涌いて出ましたね?！　操縦がたった2しかないくせにっ！」

マヒロ「そんなに操縦したいなら、会議室でＭＳを乗り回してたら？　あっかんべ～」

ＤＲ．マンソン「…レベルがどっちもどっちな気がしてきたわ。まあ、儂はいらん事にかかずり合わずに、仕事をするかの…。

その小娘の仲間、霧雨家のキャラの能力じゃ」

★霧雨・薙華★（種割れ前）

操縦９２　統率８１　知力７６　政治６８　魅力７２

ＤＲ．マンソン「軍人で政治力６８なら低くはないが、ジェイソンとでは２１差か。　口で負けるのも仕方ないかの？」

ジェイソン「あの口だけ娘が…。

と、ドクター。　この種割れってのは、ＳＥＥＤの原作にあったアレですよね？」

ＤＲ．マンソン「あのパリーンとなるヤツじゃな？　こやつも、能力値が上がるキャラの１人みたいじゃな」

ジェイソン「操縦９２がさらに上がるんですから、手強くなりますね。　会談にはいませんでしたけど、他のキャラも見てみましょうか？」

★マリアベル★

操縦６２　統率６６　知力８６　政治７３　魅力５８

★リバル★

操縦７８　統率７９　知力７２　政治７５　魅力６７

★レイ★

操縦８７　統率６４　知力６９　政治７０　魅力７９

★霧雨侯爵★

操縦３８　統率７３　知力６６　政治６８　魅力６１

★ジン★

操縦６０　統率２５　知力２０　政治１４　魅力６０

ジェイソン「…あんまり、ぱっとしたキャラがいませんね？　海賊上がりのジンはもちろん、他のキャラも、能力値９０越えは誰もいません」

ＤＲ．マンソン「８０越えですら、参謀格のマリアベルの知力と、ニュータイプのレイの操縦だけじゃしな？」

ジェイソン「弱いようにも見えますが…」

ＤＲ．マンソン「無能ではないし、手堅いと言うべきかもな？」

（続く）

第８２章　嘘つきな援軍

部隊の進軍は、早いはずだった。

帝国兵Ａ「何故だっ！　何故、この距離で当たるっ？！」

帝国兵Ｂ「何のトリック使ったら、命中率が６０％にもなるんだよっ？！」

しかし、大都市ブタペストを軽々と奪り、１日に１００キロも進んだ一昨日は、すでに過去の栄光だった。　オクサイド軍がドナウ川に近づくや、彼らは一向に川を越えられず、被害は増す一方になってしまう。

帝国軍参謀「オクサイド中佐！　一旦、軍をお退き下さい。　完全に待ち伏せされています！」

オクサイド「ならんっ！　今退けば、敵にいらぬ勢いをつける。被害が大きいと言えど、全体から見れば僅かな数だ！」

普段は、オクサイドの言うがままの参謀達が意見するくらい、戦況は思わしくなかった。　ただし、オクサイドが強がっているように、次々と撃破され、潰走しているという訳でもなかった。

軍がある地点に達すると、常識を越えた精度で砲撃を受ける。　しかし、軍が少しでも下がれば、ピタリと砲撃は止んだ。

オクサイド「敵の砲撃の狙いは、部隊の破壊ではなく、進軍の阻止だ。　奴らに時間を与えれば、余計に被害が出る。　何としてもドナウを渡れ！」

参謀「り、了解…」

オクサイドの指示の元、帝国軍は新たな戦術に出る。　敵の空軍が弱小と見て、ドダイ2などに載せたＭＳで、敵の砲撃陣地に強襲をかけたのだ。　もちろん、空からの接近に合わせて、地上からは砲撃で支援がなされる。

帝国兵Ｃ「…見つけたぞ！　落ちろよっ！」

陣地に隠れていたジムキャノンが1機、上空からのビームの射撃で吹き飛ぶ。　さらに、防盾程度しか持たない旧式野砲が、たちまち破壊されていく。

帝国兵Ｃ「ざまあ見ろっ！　よし、ここは俺が掃討する。　お前ら

は…」

ガルスJの1機がドダイを降り、砲撃陣地の占領に向かう。　同じようにして、5つか6つの陣地が帝国軍の手に落ちた…。

【2】

ベン「あっちゃー。　思い切りますね、敵さんも」

奪われてしまった陣地群を見て、ベンが額に手を当てる。　1本取られたと言いたげだが、逆に言えば、おどけて見せる余裕があるらしかった。

茄子笛「3日は持たせるつもりだったからな？　でも、余計な被害出すよりはいいだろ」

ベン「ラジャーっす。　つか、もう撤退は終わってますよ？」

茄子笛「お、準備がいいな？」

陣地を獲って、好機とみたのだろう。　陣地を逆に利用して砲撃を防ぎ、帝国軍は第二陣を渡河させつつあった。

橋は当然壊してあるが、ＭＳの戦術機動性を活かし、中洲や浅瀬づたいにジャンプして進軍する。　そのまま、一気に対岸を押さえる気なのか？

茄子笛「おっし。　派手にいくぞー。　ベン、スイッチオンだ！」

ベン「うっす！」

そんなやり取りが交わされた、僅か３秒後。　帝国軍が占領したはずの陣地に、突如轟音が響く。　地面が崩れ、ガルスＪが何機も脚を取られてひっくり返る。

茄子笛「鉱夫のおっさん、いい仕事するぜ」

ベン「ひっくり返ってる奴は放っとけ！　助けに来る奴らを射つんだ！」

砲撃が勢いを増した。　そればかりか、今まで何もなかったように見えた所から、砲弾が飛び始める。　あらかじめ陣地には爆薬がセットされていたようだ。　つまり囮である。

帝国兵Ａ「今助けるっ！」

帝国兵Ｂ「すまない…　あっ！！」

救助に向かったＭＳの方が、先に倒れてしまった。　次に来たＭＳも同じ。

５機目がやられた時、彼は自分は助かったのではなく、生かされているのだと気がついた。

？？？「…足引っ張る必要もないぐらい、最初から負けてんじゃねぇか？　ここはノーサイド。　仕切り直しで１日潰すか」

苦戦する帝国軍の頭上が、灰色の煙で覆われ始める。　敵にもそれは行われていたが、主に味方の所を狙ったようだ。

？？？「ＭＳを救う余裕はねぇ。　悪いが身１つで逃げてくれ」

帝国兵Ｂ「どこの部隊だ？　悔しいが、いい機転なんだろうな…」

帝国兵は、各地でガルスＪを乗り捨てる。　増援に来たとおぼしき軍は、兵だけを救い、撤退に移った…。

【3】

オクサイド「誰が撤退命令なぞ出したかっ！！」

帝国軍がドナウ渡河を諦め、元いた岸に引き返したのを見て、オクサイドは怒りを爆発させた。　たしかにオクサイドは、撤退命令など出してはいなかった。

帝国軍参謀A「し、しかし中佐。　あそこで退かなければ、被害はさらに拡大し…」

喋っていた参謀が黙り込む。　その参謀を、オクサイドが物凄い形相で睨めつけていたのだ。

？？？「相談もなしに、勝手にやっちまった事は謝るがな？　見切り所は間違えてないつもりだぜ？」

オクサイドは、煙幕で自軍の被害を食い止めた、援軍の指揮官にまで食ってかかる。　よく見ればそれは、軍服を戦場らしからぬ端正さで着こなしたカトラスだった。

カトラス「こっちも、総大将に仕事しろって言われてるんだ。　不満があるなら、大将に言ってくれ。　繰り返すが、間違った用兵を

していない自信はある」

オクサイド「正しかろうが間違っていようが、貴様のしたことは、ただの越権行為だ！」

話は平行線だった。

今更言ってみても、帝国軍は撤退してしまったのだから、手遅れのはずなのだが…。　オクサイドは、そう思ってはいないのか？

帝国軍参謀Ｂ「ま、まあ中佐。　指揮権云々よりも、ここは被害を抑えられたことでよしとすべきです。　ＭＳがあれば、再度攻める機会は…」

間に入ろうとした別の参謀もまた、オクサイドの強烈な睨み攻撃に遭って沈黙する。　それを見たカトラスは、こんな事を提案した。

カトラス「そこまで言うなら、明後日、俺が先頭で渡ってやるよ。　それで俺が、邪魔者じゃないことがわかるはずだ」

オクサイド「…明後日、だと？」

オクサイドはそれすら不満なのか、カトラスも睨みつけていた。

カトラス「まだ俺のゼク・アイン隊は、全部着いてないんでね？　だいたい、１回崩れた軍がもう１回攻めるってんだから、丸１日でも短すぎるくらいだぜ？」

食えない笑みを浮かべるカトラス。

オクサイドは納得してはいないようだったが、周りの取りなしもあり、その場は何とか収まった…。

【４】

メリャーナの元に、軍使来訪の知らせが届いたのは、カトラスがオクサイドに絡まれてから、しばらくしてからだった。

メリャーナ「使者ですか？　何の目的でしょうね？」

メリャーナは、そう言って傍らのサコンとマリーを振り返る。　サコンの計略が当たって、中東諸国の軍が参陣してから、ほんの少しではあるが、メリャーナたちの多忙な日々は和らぎを見せていた。

サコン「降伏するなら、オクサイドに使者を出すでしょう。　別の用件でしょうか？」

マリー「それを予想して、事前に策を練るのが軍師の役目でしょう？」

メリャーナ「マリーったら」

さらりとサコンにツッコミを入れたマリーに、メリャーナが相好を崩す。　何だかんだで、打ち解けつつあるこの3人だった。

サコン「…そうですねぇ…。　フロンティアガードが、どれくらい帝国の内情を知っているかだと思うんですけれど」

サコンは、それが全ての分岐点のような言い方をした。

メリャーナ「仮に正確に知っていたとしたなら、どうなるのかしら？」

サコン「間を割くでしょうね。　ザキラに近いオクサイドと、皇女のメリャーナ様。　2人が対立すれば、何をするにしても有利になります」

マリー「…レジスタンスが、そんな壮大な策を練るもの？」

メリャーナ「残念だけど、今回ばかりはサコンも、深読みのし過ぎだと思うけれど…」

あまり支持は得られなかったようだ。　ともあれ、サコンは使者を呼びつけるのではなく、出迎えて誠意を示すべきとメリャーナに提案する。

同意したメリャーナは、マリーとサコンのバウ部隊に護衛されて北へ向かった。　こういうフットワークの良さは、メリャーナの特技も言えるだろう。

メリャーナ「あの方のようですね？」

『方』づけで呼ぶメリャーナ。　自分が皇女で、相手がレジスタンスの一使者であっても、こう言った物言いをするのも、彼女の日常であり、同時に人気の理由であった。

何はともあれ、オクサイドが再度の攻勢を開始する頃、メリャーナはフロンティアガードとの会合を始める…。

【5】

ロメオ「また何で、他人の軍の先鋒を？」

一応、カトラスの上官のロメオは、そう言って苦笑いをしていた。
ただぱっと見、上官には見えない。

サコンは、帝国本国の派遣した将に、ザキラの息がかかっていないかと警戒していたが、カトラスはその上を行っていた。『メリャーナの』味方になりそうな何人かと、こうして親しくしていたのだ。

カトラス「成り行きってヤツさ。俺たちは、ある程度勝って、でも攻めきれずに、オクサイドに援軍を求める」

ロメオ「勝たないんですか？」

カトラス「おいおい。他人の軍って言ったばかりだろ？　俺が全部持ってったら悪いとは思わないのか？」

ただし、オクサイドに華を持たせるなどというのは、真っ赤な出任せ。　サコンの立てた策略は、オクサイドの足を引っ張る事だったからだ。

けれど真実は、オクサイドはもちろん、ロメオにも知られても問題がある。　カトラスは親交を結んだくせに、肝心な所は誤魔化している。　たいした二枚舌だ。

ロメオ「優しいんですね？」

カトラス「保身が巧いと言ってもらおうか」

笑い合う。　どちらかと言えば素直なタイプらしく、ロメオはカトラスを疑ってはいないようだ。

スーリス「…あんたかい？　オクサイドの旦那に、やっかい仕事志願したっていう、奇特な援軍の大将は？」

そんなカトラスに話しかけて来たのは、遊軍を務めているスーリス中尉だった。

カトラス「つか、俺は部下で、指揮官はこっちなんだがな？」

ロメオ「しかし、部下が総大将の肝いりなんで、神棚に上げられて、拝まれるのが仕事の指揮官ですけどね」

さらに冗談っぽく返す。　こうして見ると、ロメオもカトラスの口八丁に好きで乗っているようにも見えてくる。

スパンツ「何だか、らしくねぇ援軍だな～。　スーリスちゃんは、オクサイドのおっさんが嫌いだから、ほどほどにしか働かないけど、ほどほどになら働いてやらない事もないぜ？　こちとら、便利屋遊軍だからな？」

それから少し言葉を交わしたが、スーリスはともかく、スパンツはカトラスを悪く言わなかった。

スパンツ「あんたら気に入ったぜ。　ぶっちゃけ、オクサイドの中佐といるより面白そうだ。　知りたい事があったら、何でも言ってくれよ」

そんなカトラスを、スパンツの方も気に入ったようだ。　得意の情報工作でカトラスに肩入れしてもいいと告げる…。

【6】

カトラス「さって、どうすっかなぁ～？」

カトラスとしては、悩みどころではあった。

先陣を志願した手前、まともに進軍して見せないといけない。しかし、順調にオクサイドを勝たせてしまっては、サコンの策略は成功しない。

現時点でカトラスが引き延ばしたのは、介入した初日と、準備を理由にして戦っていない昨日、約1日半だけである。

ロメオ「敵の砲撃が、極めて正確な理由が分かれば、対策の立てようがあるんですけれどね…」

サコンの策を知らないロメオは、カトラスが違ったことで悩んでいると思っているようだった。　確かに、この状況での一番の障害は、砲撃が極めてよく当たる事だ。

カトラス「…砲撃な…。　よし、敵の出方を見てやるか」

カトラスはそう言うと、自分のゼク・アインを起動させた。

ロメオ「…どうするつもりです？」

カトラス「いやな、俺が敵を引っ掻き回してみる。　ロメオは、スパンツのおっさんに頼んで、敵の様子を探ってもらってくれ」

ロメオ「それは構いませんが…。　その探り、まさか単機とか言いませんよね？」

当然ロメオは止める。　単機で、万全の態勢で待ち伏せしている敵陣を抜けるはずはない。

カトラス「誰も、敵を倒しに行くなんて言ってないぜ？　ちょっと砲撃が当たりやすい秘密を炙り出しに行くだけだ。　それにこういうのは、言い出した奴が自分でやらないとな？」

単機であることを、否定しなかったカトラス。

カトラス（で、俺が踊ってる間は、オクサイド軍は釘付けになる。　いくらよく当たるっつっても、逃げ回るだけのＭＳに、そこまで当たりはしないだろ）

そしてカトラスは、やはり別の狙いは隠したまま、果敢な振りをする。　ロメオはそれを本気だと思って、心配そうな表情だ。

カトラス「まずいか？」

ロメオ「当たり前です！」

真意を知らないロメオからすれば、当然の感想だろう。

カトラス「じゃ、こうしよう。　まずロメオが砲撃の届かないギリギリの場所で待機する。　これで、いざという時に逃げ込む場所ができる訳だ」

さらにカトラスは、何機かの部隊を率いる事、スーリスの遊軍に側面を突くふりをしてもらう事の他、オクサイド中佐の軍に支援砲撃を頼むなどと言い出した。　これで全体としては、威力偵察に近い作戦になった。

ロメオ「まあ、それなら…」

まだロメオは心配そうな顔をしていたが、反対するほどの無謀な作戦ではなくなった事で、不承不承ながら認める返事をする。

カトラス「じゃ、頼むぜ?」

スパンツ「あいよ!」

内容を伝達されたスパンツも、同じように作戦を承諾する…。

【7】

カトラスのゼクアインの後には、同じく数機のゼクが付く。　それが合計で5隊。　代わる代わる、敵陣に寄っては離れる。

さらに、上流を渡河するのは、スーリス率いる遊軍で、こちらはジン・ハイマニューバが2、30機ほどはいる。

そして、後方からの牽制の砲弾も飛んでいるし、ドダイに乗ったガルスJがわざとらしく空を飛んでみたりする。

結局カトラスの提案は、地味に大規模なものになってしまっていた。

カトラス「…ま、しゃあねぇか」

大袈裟になってしまった作戦に、カトラスは苦笑いした。　敵の内部に潜入工作をかけるのを得意とするカトラスにとって、ＭＳの装甲に守られ、いざという時に逃げ込む味方がいる作戦など、たいした危険には映らないのかも知れなかった。

そして、その余裕を証明するかのように、カトラスの部隊は、あれほど命中していた砲弾をことごとく外させていた。

スパンツ「ありゃま～。　やるじゃねぇの？　あの兄ちゃん」

その様子を、バイクから双眼鏡で覗くスパンツ。　こちらも見つかれば無事では済まない立場だが、見つからない自信があるのか、カトラス同様、泰然としている。

スパンツ「つかこの様子だと、敵さんは『ＭＳを狙って射ってねぇ』な。　待ち伏せて、ついで事前に何か仕込んだんだな？」

情報収集には自信があるスパンツらしく、茄子笛の作戦の一端を早くも見抜いてしまった。　それを伝達されたカトラスが、さらにデタラメな動きを始めると、ついに砲弾は見当違いの場所にばかり穴を掘り始めてしまう…。

【8】

ベン「…やり方、変えて来ましたね？」

そして、そんなやり口に真っ先に反応したのは、ベンと茄子笛だった。　彼らはもちろん、自分たちの実力を知っているから、手の内を知られる事に危機感を持っていた。

茄子笛「ぶっちゃけ、大軍が一斉に攻めて来た時のための訓練しかしてないもんな」

帝国軍みたいに、猛訓練を何年も繰り返したでもないフロンティアガードが、驚異的な命中率を叩き出せているトリックは、あらかじめ調べてあるデータによるものなのだ。

天気予報でも、ここ数日は強風もなく、湿度やら何やら、理想的な環境が整っていた。　だから、砲弾は思った所に極めて正確に落ちたが、それは相手がゆっくり堂々と攻めてくれないと出来ない戦術なのだ。

ベン「俺が行きましょうか？　見た感じ、敵は先頭の奴を軸に動いてますから、あいつさえ止めれば、静かになるんじゃないんですかね？」

ベンがいう『あの先頭の』とは、もちろんカトラスのゼクアインだった。

側面に回った軍は隙を伺ってはいるものの、一気に攻めては来る気はないようだ。　支援砲撃もあるが、大した事はない。

茄子笛「…なんだかなぁ…。　敵も、それを狙ってる気がするんだよなぁ…」

茄子笛が苦い表情になる。

茄子笛「こっちを誘い出して、乱戦に持ち込む。　そうすりゃ、お互い味方を巻き込んでまでは射てないから、結局引き算で、最後は帝国が残るみたいにな…」

堅牢さから来る安心感に守られながらも、茄子笛たちは、違う焦燥感と戦っていた。

ベン「でも、このままだと手の内バレちゃうでしょ。　そしたら、ここを大きく迂回されちゃって…」

限られた場所でしか実力を発揮できない軍と分かれば、その場所から引き剥がす。　ごくごく当たり前の戦略だった。

茄子笛「気をつけろよ？　あと、失敗したらすぐに下がれ」

ベン「兄貴も心配症っすよね」

ベンは、そんな茄子笛の慎重過ぎる態度を、呆れたように笑った…。

【9】

カトラス（動かない、か…。　ま、気安く動いてもらって、決着ついちまうのが、一番マズいんだけどな？）

舌でも出しそうな顔をしながら、カトラスはゼクを左右に操り続ける。

一昨日見た光景では、次々に砲弾が直撃していたが、今はそこまで

の圧力を感じない。　全ての砲がカトラスだけを狙っている訳ではないことを考えても、命中率はかなり低い。

カトラス「何となく見えてきたな。　今日はこれまでにしよう。こんだけ飛び回ったから、さすがに推進剤が底を尽き始めてる！」

ロメオ「わかりました。　支援しますから、上手いこと引き揚げてください」

カトラス「おうよっ！」

互いの意思を確認し合うと、カトラスら帝国軍は撤退に移る。

互いに再び攻め寄せる気配を見せたりしながら、撤退は慎重に行われる。　結局、この日の帝国軍の撃墜は０、損傷も僅か。

カトラス（いけるな。　このネタで明日明後日くらいは粘れそうだぜ）

最後に、カトラスのゼクが、対岸に向けて飛翔に移ろうとした時…。

ベン「もう帰っちゃうの？　でもまあ、こっちのが狙いやすいんだけどね」

どこからか放たれた砲弾が、カトラスのゼクを直撃した。　推進力を失い、地面に叩きつけられた機体。

すぐに爆発はしなかったが、深い傷なのは見てすぐに分かった…。

第８３章　インドラ海軍の落日（前書き）

（７回目）

ジェイソン「早いもので、測定も７回目になるそうです」

ＤＲ．マンソン「…らしいの？　まだ測定していない軍は、どこじゃったかな？」

ジェイソン「いくつかありますが、今回はフロンティアガードを測ってみましょう」

ＤＲ．マンソン「ふむ。　本編では、待ち伏せに自爆と、なかなか知的な戦術を駆使しておったの。　ついでにその相手、オクサイド陣営も一気にいくぞ！」

★茄子笛★

操縦７３　統率７５　知力７８　政治３７　魅力７６

★ミケルフォード★

操縦７３　統率７９　知力７５　政治８６　魅力８１

★ベン★

操縦７５　統率６７　知力７０　政治６０　魅力６８

★オクサイド★

操縦７５　統率６６　知力５５　政治７４　魅力４２

★スーリス★

操縦７９　統率７１　知力６４　政治４１　魅力５３

★スパンツ★

操縦５９　統率５０　知力６８　政治５８　魅力６１

ジェイソン「レジスタンスにしては、かなり知力が高いんじゃないんですか？　個人技に頼る人間が多いのに」

DR．マンソン「力が全てだと思っとらんのは、儂としては好感が持てるがの。　脳筋連中とは、話すと疲れるわ」

ジェイソン「あははは…。　なんとなく分かります、それ。　とにかく、操縦よりも統率、統率よりも知力な陣営ですから、知力がそう高くないオクサイド中佐は、苦戦してしまうかもしれませんね？」

DR．マンソン「ま、やむを得まいの。　あと最後に、ちらっと登場しておる、こやつを測っておくぞ？」

★ロメオ・ファツーリ★

操縦６２　統率５４　知力８２　政治５３　魅力６９

ジェイソン「あれ？　知力が今回紹介した中では、１番高いじゃないですか？　本編では、あんまり作戦を立てたりはしていませんでしたが…」

DR．マンソン「こやつ、医療関係者らしいぞ？　軍医の端くれみたいなもんじゃから、頭は良い。　だが、策略で相手を騙すようなことには、慣れておらんのじゃ」

ジェイソン「なるほど。数値が高ければ、何でもできるという訳でもないんですね…」

（続く）

第８３章　インドラ海軍の落日

月貴族兵「マイクロウェーブ、送信目標確認しました。　送信開始まで３、２、１…」

ここは月の実験施設の１つで、マイクロウェーブを専門に扱う研究施設だ。　今、月では修復されたばかりのマイクロウェーブ送信設備の最終テストが行われていた。

月貴族兵「送信出力、問題ありません。　トラブルも確認されませんでした」

オードリー「上々のようじゃな。　テスト終了じゃ」

月貴族兵「はっ！」

技術者達の努力と、オードリーの優遇政策のおかげで、マイクロウェーブ送信は、十分実用に耐えるシステムとなっていた。　中継衛星が少ないから、いつでもとはいかないが、少なくとも、月が目視できる範囲では問題なく運用できそうだ。

月貴族兵「本国から祝電が届いておりますが…」

オードリー「私はいらん。　お前にくれてやる」

月貴族兵「はぁ？」

言葉をかけて来た兵が戸惑うような対応をしつつ、オードリーはその場を後にした。

何を隠そうこのオードリーは、ザキラ嫌いで有名なのだ。　従って、本国の宰相をザキラが務める今、本国に対して極めて淡白。

『坊主憎けりゃ、袈裟まで憎い』

というやつで、このマイクロウェーブ実験にしても、『オードリー本人は』やる気の欠片もなかったのだ…。

商人？「へそくりを頂戴しに参りました」

そんなオードリーに、やけににこやかに笑いかける、１人の商人風の男。　どうやら実験が終わるのを待ち受けていたらしい。

オードリー「そなたがあまりに遅い故、予定の倍量用意できてしまったわ。　好きなだけ持って行くとよい」

『へそくり』という例えだけで、要件の全てを察したらしいオード

リーは、渡す物資の書いてあるとおぼしきリストを、無造作に男に手渡す。。

商人?「ありがとうございます。　しかし、これだけの裏物資をよくもまあ。　伯爵は、貴族よりも商人が向いておいでなのでは?」

商人風の男は、用意された物を確認しながら、上機嫌で語る。

オードリー「どちらでもよいわ。　私はただ、ザキラを困る顔を見たいだけよ」

聞いた男の笑いが、微妙に変化した。

商人?「…相変わらずですなぁ…。　とにかく、ルナチタニウム以下、物資はお預かりしました。　ご協力に感謝致します」

オードリー「気にするな。　それから、少佐にはくれぐれもよろしくの?」

男は頷き、すぐに船団を率いて出港して行った…。

【2】

みっちりと訓練を積まされた。　ただ、その価値はあったし、必要性も認めざるを得ない。

マッドアングラー級は、本来は水陸両用ＭＳのための母艦だ。　だから、陸上ＭＳを載せて上陸作戦を行うには、パイロットに熟練が要求されてしまう。

ディジョン「浮上から全機発艦まで2分以内。　みんなよく頑張った」

レナ「ありがとうございます、隊長」

レナが代表して礼を言う。　その顔は、どこか誇らしげにも見える。

ラリー「ところで隊長。　今回の作戦ですけど、参加するのは１０人のはずですよね？　人間よりＭＳの方が多いんですが…」

ラリーが疑問を口にする。

このマットアングラー級は改良型らしく、初期型より多い１０機を搭載できるようだ。　だから1隻だけでも足りるはずだが、２隻引

き連れていく予定になっていた。

それがラリーの言った分で、私も詳しくは知らないが、マグアナックとかいうＭＳを積むようだ。

アルヴィン「途中まで一緒に運ぶだけじゃねぇのか？」

その可能性はある。　予備機や、作戦成功後に陸揚げするＭＳなのかも知れない。　ただ、身軽さと隠密行動を主眼に置く作戦で、そんな事をするのだろうか？

アッシュ「それは俺のビットＭＳだ。　触んなよ？　汚れると動きが鈍る」

乱暴に言い放ったのは、いつの間にか近くに来ていた、エージェントの１人だった。

フォーリュン「アッシュ。　共に作戦をする方々に失礼ではないですか！　申し訳ありません、ディジョン大尉。　悪気があって言っている訳ではないのです。　ビットＭＳは遠隔操作をするため、通常のＭＳより、かなりナイーブなものですから」

アッシュ「そういう事だ。　俺の活躍を期待していろ」

よく分からないが、そのビットＭＳとかいうのも、最新兵器の一種なのだろう。　遠隔操作というからには、新型の無線誘導兵器なのか？

宰相肝いりのエージェントだけに、惜しみなく新兵器が投入されるな…。

ディジョン「機密だらけで不安な所もあるだろうが、それも考慮した上での抜擢だと思う。　それに、あっちがビットなら、こっちはコフィンだ。　にわか出の新兵器に遅れを取るなよ？」

頼もしい返事が聞こえた。

そしてその日のうちに、私達は軍港を後にしたのだった…。

【３】

敵地とは思えない静けさ。

私達は、インドラの警戒網をすり抜け、海岸にさほど遠くない海域に到達していた。　途中で発見された時のプランはいくつも用意してあったが、それらはすべて無駄になっていた。

このままなら、まもなく目標のマドラス基地に接近できる。　マドラスはインドラ最大の海軍基地で、ここを攻撃されることは、そのままインドラ海軍の壊滅を意味した。

ディジョン「ミノフスキー粒子は濃いままだ。　上空に敵影もない」

敵の哨戒圏内に入ってから、私たちは哨戒機と思われる航空機を何機か落としていた。　いくら有力なＭＳを積んでいても、潜水艦は潜水艦で、航空攻撃に対しては無力なのだ。

ラリー「そろそろですね。　残るマドラスまでの僅かな距離、彼らの護衛を完遂できればいいんですよね？」

たったこれだけのＭＳで奇襲して、基地を１つ壊滅させるというのも信じがたい話だったが、それが作戦なのだから仕方がない。　とにかく、私たちは彼らの頭上を護るだけなのだ。

ディジョン「マッドアングラーに浮上信号だ。　さすがに、これ以

上は近づけないだろう」

レーダーは効かなくても、妨害されていることは掴んでいるはずだ。
今頃は敵襲に備えて、スクランブルがかけられているかも知れない。

エージェント機の中には、飛行戦闘を不得手とする機種もある。
それらを無事に上陸させるまで、気は抜けないな…。

【4】

エルフレア「…いい月だ…」

一応の空中戦能力を保持するせいか、ＢＸ（ブラックエックス）を駆るエルフレアは、いくらか余裕の表情を見せていた。　逆にバーストンなどは、機体が重いＢＨＡ（ブラックヘビーアームズ）なせいか、落ち着かない顔をしていた。

ユーリ「最初の一撃はもらうわよ？」

いきなりバズーカ撃つ気なのか、ＢＳ（ブラックサイサリス）のユーリはバレルのチェックを始めていた。　訓練中に一度だけ見た時にはイナクトに乗っていたが、乗り換えたらしい。

エルフレア「そのＭＳは、私の父上の形見らしいからな。　大事に使え！」

ユーリ「知らないわ。　ＭＳもパイロットも、所詮は消耗品じゃない。　使われるだけ使われて、いずれ消される運命なのよ」

唯物論者なのか、悲観的な事を語るユーリ。

しかし彼女のＢＳは、そんな言葉とは裏腹に、驚異的な加速力で視界から消えて行く。

インドラ兵「敵襲っ！」

そして１０分程後。

事前の発見こそできなかったものの、それからのインドラ軍の行動は早かった。　すぐさま、小型艦艇が戦闘態勢に入り、アッシマーも何機か緊急発進する。

エルフレア「ここで手間取れば、他の４人の上陸に影響する。　一気に決めるぞ！」

ユーリ「あたしに指図しないでくれる？　けど、言われなくてもっ！」

飛び交い始めた対空砲火をものともせず、ユーリのＢＳ（ブラックサイサリス）が艦隊上空を駆け抜ける。　それに、何機かのアッシマーが食い下がるのが見えた。

ユーリ「…邪魔しないで」

そのアッシマーが２機、瞬時に火だるまになる。　アッシマーを倒したのは、ユーリのＢＳではなく、エルフレアのＢＸ（ブラックエックス）のようだった。

エルフレア「ディアボロ…　私に力を貸せっ！」

エルフレアの頭に、いつかの時と似た光景が浮かぶ。

父の吊し上げられる姿、撃たれた母が力尽き崩れ落ちる姿。　見てもいないはずなのに、あたかも目の前で起きた事のように、それはエルフレアの頭を支配しようとする。

この現象が何を示すのかはよく分からないが、ディアボロシステムは、神経と機体を密接に繋ぐから、負荷に耐えきれず、発狂する可能性も十分にあるらしい。

打開するには、強い意思…　それも『負の感情』を持つ事が有効らしいが…。

そうしている間にも、ＢＸは機敏に動き続け、アッシマーがまた吹き飛んだ。　さらにエルフレアは、まるで網の目を潜るように対空砲火の隙間を抜い、真下にいた艦のブリッジを、ビームサーベルで薙ぎ払う。

インドラ兵「たった１機のＭＳにっ！」

狼狽えるインドラ軍を尻目に、エルフレアは軽空母らしき艦に舞い降りる。　そしてＢＸは、邪魔だとばかり、その空母に搭載されていたヘリを１機、海に蹴り落とした。

エルフレア「今、仲間ごと射てば、私を落とせるぞ…？」

インドラ兵「く、来るなっ！！」

ヘリの発進を諦め、パイロットがコックピットを飛び出す。　その後では、恐怖に顔をひきつらせた兵士が、次々と海に飛び込んでいた。

ユーリ「…偉そうに…。　弟1人守るために、ザキラに魂まで売った分際で…」

ユーリの脳裏にも、悪夢は浮かんでいるのだろうか？　しかし、少なくとも彼女の顔には、そういった動揺はまるで見られない。

戦艦らしき大型艦が、主砲を旋回させる。　その動きはＭＳの…特に、この漆黒の2機の動きに比べると、あまりに鈍く、重く見えた。

ユーリ「時代遅れの遺物ね…。　あの貴族のガキと一緒…」

そう言えば、エルフレアは１６歳。　ユーリも同じくらいか？　エージェントに歳など関係ないのだろうが、不思議と2人は意識し合っているようにも見える。

戦艦の主砲が、よくやく火を吹いた。　当たれば、ＭＳごときは跡形も残らないのであろうが、水柱の上がった場所に、ＢＳはもういなかった。

エルフレア「…時間切れだ。　みんな死ね。　グラーフェンの兵達

のように」

空母の飛行甲板から、ビームによる射撃が始まる。

人間の常識に従い、味方の艦ごとエルフレアを倒す決断ができなかった彼らは、急所を次々にに撃ち抜かれ、爆発を起こし沈んでいく。

ユーリ「チャージ開始。　避けないと、あなたごと消すわよ？」

一方、戦艦の射撃を悠々と避けたユーリは、いつの間にか艦隊の遥か上空にいた。　インドラ軍はそれを見失ったのか、エルフレアにばかり目がいっているのか、彼女を弾幕に捉えようとはしていない。

エルフレア「私に遠慮する必要はない。　まだその機体は、核は積んでいないんだろう？　いくら大出力でも、ビームの1本や2本に巻き込まれるほど、ＢＸは鈍くはない」

ユーリ「…そう。　じゃ、遠慮しないわ」

盾の裏から取り出した砲身が、ＢＳに接続される。　本来は、戦術核発射用のバズーカだが、改造されたＢＳのそれは、大出力ビームバズーカとしても運用できるのだ。

ユーリ「…さよなら」

迸る閃光は辺りの海をなぞり、その先々で多くの火の玉を生み出した。　その強烈な光には、強固なはずの戦艦の装甲すら役には立たず、空母などは、真っ二つにへし折れてしまっていた…。

【5】

バーストン「あいよっと！」

ＢＨＡ（ブラックヘビーアームズ）から、雨のように弾丸が降り注ぎ、基地が燃え上がる。

チャーリー「ちょろいな」

こちらは、ＢＶ（ブラックヴァーサゴ）に乗るチャーリー。　彼のＭＳも、ユーリの一撃で大混乱に陥った艦隊を、端から沈めて回っていた。

フォーリュン「あなたたちは…。　ここでの殊勲は、真っ先に敵艦隊に斬り込んだエルフレア殿と、ユーリ殿のはず。　いくら沈めた艦が多くても、より危険を冒した人間こそ、賞賛されるべき…」

アッシュ「フォーリュンは、相変わらずやかましいな？」

そして、ＢＳＲ（ブラックサンドロック）と、ビットＭＳマグアナックを操るアッシュ。　彼は、特技を最大限に活かし、こうして自分が話している間にも、ビットＭＳに攻撃を続けさせていた。

チャーリー「俺は、あんなにわかエージェントは認めてないからな？」

また1隻、インドラ軍の艦が吹き飛ぶ。

エルフレアとユーリをよく思っていないらしいチャーリーだったが、この場では次々と戦果を挙げていた。

バーストン「俺は、細かい事にはこだわらねぇよ？　ただ、あいつらが先に突っ込んで、俺らが残りを殺るって作戦なんだから、偉いとかそんなんは関係ないだろ？」

可変ＭＳのディジョン隊が上空を護り、機動性に優る2人が敵の備えを崩す。　止めは、攻撃力に秀で、手数が多い４人で。確かに妥当な作戦であり、作戦通りなのだから、そこに上下はないというバーストンの言葉は、その通りではあった。

バーストン「それに、フォーリュン流に言い直すとだな。

『ザキラ様に戦果を献上できたのなら、誰が手を下したものでも、たいして違いはない』

ってことになるんじゃないか？」

フォーリュン「…それはそうですが…」

常日頃から口にする、ザキラへの忠誠の言葉を奪われて、フォーリュンは困った顔になってしまう。

こんな感じで、必ずしも一枚岩ではないエージェント達だったが、その部隊としての実力は並の軍の比ではなく、インド洋はこの日以降、帝国の物になってしまうのだった…。

第８４章　決戦！　傭兵　ＶＳ　エージェント（前書き）

（８回目）

ＤＲ．マンソン「やったぞ。　さすがは儂の調整したエージェントたちじゃ」

ジェイソン「ですね。　ところで今回は、そんな彼らに光を当てて、我々の強さを印象付けようと思うんですが？」

ＤＲ．マンソン「それはいいの。　さっそくゆくぞ！」

★アッシュ（Ａ）★

操縦８２　統率８６　知力２１　政治１８　魅力２９

★バーストン（Ｂ）★

操縦８８　統率５７　知力５６　政治１　魅力８２

★チャーリー（Ｃ）★（覚醒前）

操縦９１　統率１０　知力６　政治７　魅力３４

★エルフレア（Ｅ）★（覚醒前）

操縦９２　統率６８　知力４９　政治５８　魅力７７

★フォーリュン（Ｆ）★

操縦８６　統率７４　知力５０　政治２４　魅力７０

★ユーリ・ストヴァル（Ｕ）★（覚醒前）

操縦９４　統率２１　知力７７　政治１０　魅力６５

★Ｐちゃん（Ｐ）★

操縦９０　統率９０　知力８２　政治７４　魅力２８

★オタＱ（Ｑ）★

操縦８８　統率６５　知力７　政治２３　魅力６０

★ウインド（Ｗ）★（覚醒前）

操縦９８　統率４　知力７５　政治０　魅力１

★キサナドゥ（Ｘ）★

操縦１００　統率２５　知力８１　政治４０　魅力５

ジェイソン「…えと…　さ、さすがインドラ海軍を葬っただけありますね？」

ＤＲ．マンソン「…じゃろ？」

ジェイソン「ＷやＸは、さらにその上をいっていますし…」

ＤＲ．マンソン「じ、じゃろ？　この操縦技術を前にすれば、弱点の１つや２つ…」

ジェイソン「…というか、長所以外が酷すぎますよ、彼ら。　どっかの軍師が分析していましたが、彼らに内政やらせるなら、執務室に私の愛犬を繋いでおいた方が、まだマシな気がします」

DR．マンソン「そこまで言うか？　まあ、お主の政治８９と比べればの…」

ジェイソン「えぇ。　お陰さまで、私の机の上はいつも書類が山積みで…」

DR．マンソン「お主の操縦８８が活用される日は、当分来なさそうじゃな…」

（続く）

第８４章　決戦！　傭兵　ＶＳ　エージェント

ネロ「隊長。　ちょっと騒がしい事になっているようですよ？」

唐突にそう言ったのは、専用のヘッドセットをつけたネロだった。

余談だが、彼のヘッドセットは常時装着していても気にならないような小型軽量かつ、骨伝導を用いるものだ。　そのため、どんな爆音が響く中でもクリアな音声を聞き取れる。

ゴトー「儲け話か？」

騒がしいと言われて、儲け話と解いたゴトーは、さすがにネロと付き合いが長いというべきか？

ミア「押し売りをするつもりなの？」

ジルド「出撃なんだよな？」

ちなみに、ミアもネロの言わんとした事を察したらしい。　一方でジルドは、状況をいま１つ呑み込めていないようだ。

ネロ「マドラスが帝国に襲われたようで、救援を求める通信が飛び

交っています。　ここからだと多分、インドラの援軍より先に着けますね」

マドラスは、インドラの重要な軍港だから、普通に考えれば救援軍が出されるだろう。

その時に、インドラ軍にくっついて参戦しただけか、先に行って戦っていたかで、同じ傭兵でも立場は大きく違ってくる。　それがミアの言う『押し売り』であり、インドラ軍より先に駆けつけてやったんだから、報酬をはずめと交渉することを指す。

ジルド「けどよ、勝手に戦っちまって大丈夫なのか？　後から『契約した覚えはない』とか言われたら、一銭にもならないだろ？」

ジルドの心配も正論ではある。　ゴトーはこの時点では、インドラに傭兵として認められてはいたが、傭兵達にマドラスへの出兵要請は出ていなかった。

ゴトー「そこは、ネロの交渉を信じてやれ。　それに遺跡調査だけじゃ、勘が鈍るだろう？」

ゲットたちと行動を共にしているため、どうしても最前線とは縁が遠くなりがちだった。　ゴトーほどの傭兵ともなれば、そう簡単に腕は落ちないだろうし、金にも困りはしないだろうが、戦わない日々は退屈に感じてしまうのかも知れない。

ゴトー「それから、アイアンボーンも誘ってやれ。　たしか近くにいたはずだ」

近くで別の遺跡の調査をしているはずの、スティヴの名前が出る。

ゴトーほどガツガツした印象のないスティヴだが、ゴトーは彼の腕を買っているようだ…。

【2】

スティヴ「ゴトーが俺にお鉢を回すなんて、どういう風の吹き回しだ？」

そう不思議そうに首を傾げるのは、ゴトー　…直接話したのはネロだったが…　から通信を受けたスティヴ。　彼はそう言いながらも、ノーマルスーツに着替え始める。

ゲット「うぅ～ん。　なんだスティヴ、こんな夜更けにどこ行くんだ？」

一方で、お子様全開のゲット。　起きては来たものの、眠い目をこ

すっていた。

リンダ「ゲットはゆっくり寝てていいよ。　ゴトーからの誘いとはいえ、傭兵の稼ぎ話だからね？　ゲットが戦う理由にはならないさ」

リンダは、そんなゲットを寝かしつけようとする。　確かにマドラスに援軍に出る事で、フレーネの記憶が戻るとは思えない。

ゲット「…いゃ、俺も行く…。　街が襲われてるんだろ…？　こうしてる間にも人が死んでるかも知れないし、インドラじゃ俺とたいして歳も変わらない奴らが、ＭＳの訓練もさせられてた…。　だから、俺も…　むにゃ…」

ラピスラズリを、ふつうの少年少女と思っているゲットは、そんな事を言って意気込む。　しかし、肝心の瞼は重いままらしい。

スティヴ「…ダメだこりゃ」

ハロ「ゲットダメ！　ゲットダメ！」

スティヴは、そんなゲットの様子を見ると、くるりと背を向けた。

ゲット「スティヴっ！　俺だってなぁ…」

ハロ「ゲットヤレル！　ゲットヤレル！」

意味もなく騒ぎ回るハロの声で、多少目が覚めたようだが、ゲットの声は依然頼りない。　そんなゲットを見て、リンダはこう提案した。

リンダ「スティヴが出ちまったら、リメンバーズを護るＭＳがいなくなる。　ゲットは、ガンダムに乗って待機していてくれよ。　だから、もし敵がリメンバーズを狙って来るようなら、守りを頼むよ」

ゲット「守るだけかよ？　でも、それもそうだし…。　スティヴ、危なくなったら呼べよ？」

スティヴ「わ～ったわ～った」

そんなやり取りを経て、スティヴは暗闇の空へ飛び出して行った。

そして、ゲットは…

ゲット「安心しろ…。　リメンバーズは俺が守…　ぐぅ…」

見事に、自分の夢の世界を守っていた…。

【3】

トゥーエ「夜更けに大胆なんだから～」

相変わらず言葉の意味が紛らわしい、ラピスラズリのトゥーエ。

彼女たちを載せたガウは、大慌てで基地を離陸すると、一路マドラスを目指していた。

彼女と同じガウに乗るのは、同じくラピスラズリが誤解される素にして、ＲＦドムを駆るエイスと…

乗機がドワッジ改のままのシクスだった。

エイス「シクス～。　新型が間に合わなかったのはおっさんが悪いんだし、基地に残ってもよかったんだよ？」

そう言えば、ＲＦＭＳ（リファイン）は８機しか準備できず、ラピスラズリ全員に行き渡らなかったのだった。

バランスの取れたＲＦザクに、ノンとアイン。
接近戦用のＲＦグフを、セブンスとナイル。
機動力のＲＦドムは、スリスとエイス。
万能タイプのＲＦゲルググを、トゥーエとフォルナ。
こう分け合っていたが、当然1機足らないので、シクスが割を食ったらしい。
シクス「ＭＳは譲ったけれど、あたしだって戦いたいし…。　それに、乗り慣れてるＭＳだから、意外とみんなより活躍しちゃうかも」
控えめなシクスは、戦いを望みながらも、仲間たちへの遠慮が働いたらしい。　とは言え、そんな気弱そうな見た目に騙された帝国のエース達が、何人彼女に命の灯火を消されたことか。
エイス「まあ、シクスだから心配はしてないけど？」
トゥーエ「奥手そうに見えて、実はとっても激しいんだよね～　シクスは」
今回、普通に仲間を評価したのはエイス。　トゥーエも、意味は同

じなのだろうけれど、聞く人間にやましい心があった場合、意味の解釈を間違えてしまいそうではある。

シクス「ちょっと、トゥーエちゃん？　あたしが変な子みたいに言わないでよ！」

さすがに、大人しいシクスも聞き咎めたのか？

トゥーエ「だって、前に戦ったの帝国軍の人。　零距離からバズーカで、３発も射ったよね？　その前の日には、サーベルで迫った相手に、大胆にタックルしちゃうし…」

シクス「あ、あれは、どっちも相手が強くて、サーベルに持ち換える隙がなかったからで…」

恥じらいの表情と矯声が、実に年頃の女の子らしかった。　会話の内容さえよく聞かなければ、だが…。

【４】

攻勢防御という言葉があるが、少々古いだろうか？

何を言いたいかと言えば、私たちは近づく敵を攻撃することで、逆に母艦を護っていたということだ。　もし母艦が沈められてしまうと、可変型の私達はともかく、エージェント達は帰りの足を失ってしまう。

レナ「6時方向に駆逐艦1。　フリゲート2」

アルヴィン「任せとけ！」

ただし、ここらを通る艦が有力な敵艦隊かというと、それは違った。
今見つけて…　アルヴィンが沈めた艦も、みんなマドラスから脱出した艦ばかり。

つまり、エージェント達の攻撃に晒されて、慌てて逃げて来た艦だから、私たちを見れば、違う方向に逃げ出した。　統制が取れていないし、おそらく戦うつもりもないのだろう。

ディジョン「ラリー、今度は8時だ！　頭を抑えろ。　私が行く！」

ラリー「了解です」

ラリーがビームを放つと、その艦はすぐに左右に蛇行し、狙いを外しにかかる。　そればかりか、対空レーザー砲らしきものを浴びせてきた。

どうやら小型ではあるが、インドラ海軍の新鋭艦らしい。

ディジョン「…単艦でなければ、強敵だったのだろうな…」

私がラリーと反対、艦尾から接近する。　ちょうどその方向は砲がなく、反撃に隙があったからだ。　気がついた敵は、艦の向きを変えようとするが、もう遅い。

私のＺ－ＰｕｌｓがＭＳ形態に変型して、ビームサーベルを突き付けた。　細かく動いている艦の動きに合わせるのは至難の技だったが、そこは神経接続のコフィンシステム、見事私の意思通りの動きをして見せた。

ディジョン「抵抗をやめれば、この艦は沈めない。　直ちに停止し、一切の戦闘行動を中止せよ！　繰り返す…」

自画自賛するようだが、私が艦の動きを完全に見切っていたのに、あえて撃沈しなかった大胆さは、逆に敵を震え上がらせたらしい。

軍旗が降ろされ、降伏に応じる。

ディジョン「これで少し休めるな？」

レナ「そんな事のために、艦を拿捕したんですか？」

艦尾に設けられたヘリ甲板らしきスペースに『着艦』した私を、近くに来たレナが、少しだけ呆れた表情で見ていた…。

【5】

マドラスと艦隊の命運は、もはや風前の灯火だった。　辺りは夜だというのに、燃え盛る炎のせいで、昼間のように明るい。

エルフレア「これでは、キャノンを温存した意味がない。　どこか近くに、戦略目標になるような場所は…」

エルフレアは、早々とマドラスに見切りをつける気のようだ。

マドラスは完全に壊滅してはいないし、小型の艦艇なら、まだ抵抗を続けている艦もいた。　けれどエルフレアは、完璧を期すより、アバウトでもより多くの被害をインドラ軍に与えたいらしい。

チャーリー「だったら、いい事教えてやるよ？　こっから真っ直ぐ西へ行けば、ベンガルールってデカい街がある。　陸軍と空軍の拠点もあってな…。　どうだ？　楽しそうだろ？」

意外にも、エルフレアに情報を提供したのは、あまり彼を良くは思っていなさそうなチャーリーであった。

フォーリュン「チャーリーっ！　そうやって、また煽る！　私たちへの命令は、海軍の壊滅と、基地の破壊だったはず…」

チャーリー「だが、余力のある時の別行動は、禁止されちゃあいないよな？」

フォーリュン「しかしまだ…」

チャーリー「残りは、優しい俺様が殺ってやるっつってんだよ。行きたいって奴を、無理に止めてもなあ？」

チャーリーはやはり、親切でエルフレアに助言したのではなかったようだ。　ただ行動自体は、エルフレア本人の希望ではある。

ユーリ「面白そうじゃない？　ここは好意に甘えることにするわ」

フォーリュン「なっ！」

そしてそして、そんな身勝手&険悪ムードを、宥めるどころか、率先して身を投じるユーリ。　こうなってはもはや、フォーリュンがいくら理を説いても、無駄な足掻きだった。

アッシュ「始まったな？　で、俺はどっちにするかだが…。　ビット引き連れて長旅ってのも、地味に面倒くせぇしな…」

バーストン「俺はこんな機体だからな？　ほいほい母艦離れて、弾切れ起こしましたってのは勘弁だぜ」

フォーリュン「…わ、私は…」

結局、陥落寸前のマドラスを目の前にして、エージェント達は分裂して…

いや、新たなる戦果を求めて、別れて進撃することになった…。

【6】

ユーリ「そのキャノン、月が出てないと使えないんですってね？」

共にベンガルールを目指すことになった2人だったが、出発してしばらくすると、ユーリがそんなことを訊いてきた。

エルフレア「…あ、ああ…。　サテライトキャノンは、月からのマイクロウェーブが動力源なんだけど、それを中継する衛星の配備が、追いついてなくってね…。　けど、代わりにエネルギーは無限だし、威力も相当なものになるはずだよ」

エルフレアは、懇切丁寧に説明する。

本人は気がついていないかも知れないが、戦っていない時のエルフレアは、どこか柔らかくて、温和な貴公子の名残がある。

ユーリ「そう。　なら、朝までに決めないとね？　まあ、あたしには関係ないけど」

今日は満月なので、日の入りぐらいに月が出て、日の出の頃には沈んでしまう。　今は日付が変わる頃だから、あと5、6時間ぐらいがタイムリミットだ。

エルフレア「…けど、その心配はいらなくなったみたいだ。　奴等もなかなか気が短い。　そんなに死に急がなくてもいいのにさ？」

ディアボロシステムに繋いだ神経回路が、接近する敵の気配を、直接脳に伝える。　再び戦闘を意識したエルフレアは、やはり自覚はないまま言葉遣いが変わり、目が少しつり上がっていた。

ユーリ「……に、魂を売っ…、そ…なに楽しいかしら…？」

ユーリの微かな呟き。

エルフレア「…何か言ったか？」

ユーリ「いいえ、別に？　違う方向からも、接近しているのがいるわね？　別れて叩いてもいいけれど、そうするとキャノンは使いにくいかしら？」

冷めた声のユーリ。

やはり彼女からは、エルフレアのようやオーラは漂っては来ない。
それはユーリが冷静なのか？　それとも別の何かなのか？

ユーリ「とりあえず、ご挨拶ぐらいはしておこうかしら？」

今日2回目となる、ビームバズーカのチャージを始めるユーリ。

まさかいきなり、母艦を沈めるつもりなのか…？

【7】

ネロ「接近する敵影、2っ！　隊長、発進をっ！」

同様に、接近に気がついたネロが発進を促す。　やはり彼は、母艦指揮に専念するようだ。

ゴトー「アンティライズまでオールクリアだ！　ゴトー、イフリート出るぞっ！！」

ジルド「左弦カタパルト、百式、ジルド、続くっ！！」

暗闇にすぐ紛れた、ゴトーのイフリート。　一方のジルドは、百式の金色が闇夜でもよく映えた。

ネロ「発艦シークエンス！　援護射撃３０秒！　味方の弾に当たら

ないでくださいよ？」

ミア「馬鹿言わないでよ！　ガンダムＭＫ－２、ミア、出ますっ！！」

ジョークに、真剣な怒声が返って来た。　そして、幾重ものメガ粒子砲が伸びていくのと同時に、ミアが飛び出して行った。

メリル「…私も出るよ…」

最後の発艦は、メリルのメガライダーだ。

ネロ「メガライダーの近接戦闘力は、はっきり言って、ザク１スナイパー以下です。　分かってると思いますが、もしメリルが落ちたら、隊長が二度と立ち直れなくなりますから気をつけて…」

ゴトー「ネロっ！　留守番だからと、今日のお前は喋りすぎだ！…っ！！　左旋回、急速降下しろっ！！」

ゴトーが通信でネロを叱りつけ、合わせて回避を命じる。

ネロ「こちらでも捉えています。　心配いりません！」

しかし、ザンジバルは既に針路を変え始めていた。　その脇をビームが掠める。

ネロ「接近限界ですね。　メリル、発進急いで下さい！」

メリル「分かった…」

ザンジバルが、再び艦体を水平にしたタイミングを狙って、メガライダーが発進する。　艦の機動性では、敵の攻撃を避ける限界点と見たのか、ネロはそれを見届けた後、ザンジバルを退避針路に入れる。

ユーリ「…かわしたの？　やるわね」

バズーカのバレルを盾に収納しながら、ユーリが不敵に笑う。

エルフレア「援軍第二波が着くまで、まだ少し間がある…。　それまでに何機か殺っておくぞ！」

ユーリ「残念だけど、私、他人の指図は受けない主義なの」

ユーリの言葉は冷ややかだったが、それとは裏腹にＢＳは前へと進み出る。

メリル「そこっ！」

ユーリ「いい支援ね。　並の機体なら、落ちてるかもね？」

元来、重い核弾頭を抱えて、敵中突破するのが任務のサイサリスは、メリルの支援攻撃を軽々と回避できてしまうほどの圧倒的推力を秘めていた。　しかもこのＢＳ（ブラックサイサリス）は、さらにパワーが強化されているのだ。

ユーリ「そんなローパワーで、私を受け止められると思えるのね？」

そしてユーリは、離れたメリルではなく、近くのガンダムＭＫ－２にサーベルを叩きつけていた。　力任せの斬撃をミアは見切って受け止めたのだが、機体のパワーはＢＳが上回っていたようだ。

ミア「きゃっ…　だけど！」

ミアは、それでも何とか体勢を保ち、ライフルで反撃する。　ビームが頭部を僅かに溶かす。

ジルド「パワーはすげぇが…　お前、雑なんだよっ！」

続いて、ジルドの百式が背後から斬りつける。　これもバックパックを掠め、あわやの一撃になる。

ユーリ「説教臭いことをぬけぬけと…。　うざったい！！」

叫んだユーリの気合いが乗り移ったかのように、ＢＳが一気に地を蹴った。　それを反射的に追った百式に、バルカンが直撃する。

ジルド「こんな豆鉄砲…」

ユーリ「雑なのは、あんたも同じなのよっ！！」

バルカンの直撃で勢いが鈍った百式に、ユーリは逆噴射をかけて、踏みつけるように上に乗る。

ジルド「どんだけ荒っぽいんだよ…　…ぐおっ！！」

そしてその体勢のまま落下させ、地面とＢＳで百式をサンドイッチ状態にしてしまう。　これはまるで、西暦の某アニメにあった『地獄の断頭台』ではないか。　激突の衝撃に加えて、ＢＳの全重量を頸部と頭部でモロに受け止める形になった百式は、首が無惨に折れ曲がり、シートに叩きつけられたジルドが呻き声を上げる。

百式は、機体が爆発したりはしなかったが、メインカメラをやられ、せっかくの全天周囲モニターも半死半生、視界は極めて限られたものになってしまう。

ジルド「…てめぇ、やりやがったな！」

メリル「ジルド、援護する…。　一旦退いて」

再びメリルが射撃を浴びせたため、ジルドは止めを逃れたが、戦闘力は大幅にダウンしてしまったようだ。

エルフレア「なかなかやる仲間を連れている。　３対１で、エージェントとこれだけ殺り合えるなんてね…。　けど、君はどうかなっ？」

ゴトー「先輩には敬語を使えと、教わらなかったのか？」

互いに疑問形の言葉を投げ合いながら、しかし機体は激しく火花を

散らす。　高出力のビームサーベルと斬り結ぶのを危険と見てか、ゴトーはサーベル同士で斬り結ばせず、ＢＸの手首を押し上げるようにして攻撃を凌いだ。

ゴトー「もう一度言う。　戦場の経験を甘く見れるほど、貴様の腕は卓越してはいないっ！！」

ゴトーの一撃が、ＢＸの盾を激しく揺さぶるが…。

エルフレア「ヒート兵器じゃ、この程度かな？」

ゴトー「だが、直撃には違いない。　それが、俺と貴様の実力の差じゃないのか？」

盾がミシミシと軋んだが、割れてまではいなかった。

そしてゴトーは、再び疑問形でエルフレアを挑発する。　もしかしたら、こうした言葉も戦術なのだろうか？

エルフレア「言うだけなら、誰でもできるっ！」

ゴトー「その言葉、貴様にそっくり返すっ！！」

さらなる斬撃の応酬。

イフリートが白兵戦用の機体だから、ゴトーはどうしても接近戦を挑まざるを得ない。　他方ＢＸのエルフレアは、離れてもシールドバスターライフルがあるはずだが、サーベルでしか攻撃していない。

ゴトー「実弾とヒートだけ。　もし当たっても、即、致命にならない武器相手は、気楽でいいだろう？」

振りかぶられたヒート剣。　しかし振り降ろされた時には、ＢＸはもう右に飛んでいた。

エルフレア「私が避けられないとでも？」

ゴトー「俊敏な『機体』でもあったな。　回避運動も楽か？」

エルフレア「言葉遊びをっ！！」

間合いは一旦離れたのに、ＢＸがスラスターを全開に吹かし、イフリートに突貫する。

そして、ＢＸのサーベルがイフリートの肩口を掠めた。　続いて、脇腹。　そして遂に、頭から真っ二つに…

…と思った一撃を、ゴトーは頭部のバルカン砲で、極めて正確に撃ち抜いていた。

バルカンでＢＸが落ちるはずもないが、サーベルを握っていた手を射たれ、サーベルを取り落としてしまっう。

ゴトー「やはり貴様では、俺の相手にはなれんようだな？　幸い、機体の性能差がある。　今のうちに退けば、俺は追いつけないだろう」

主導権を握るゴトーは、息は荒いが、どこか余裕があった。

ユーリ「１対１で、なに無様な真似してるわけ？　もうすぐ…いや、もっと厄介な事になったわ。　みんなあんたのせいよ！」

ユーリに罵声を浴びせられたエルフレアが、ディスプレイを見てみると、そこには接近する幾多の機影が映っていた…。

【８】

エルフレア「時間を取られすぎた?!　だが、ならば尚の事…」

ゴトー「着く前に俺を、か?　それができるなら、もう決着はついていたはずだ」

ゴトーの言葉の正しさは、今までと、これからの戦況で立証されてしまう。

BXが、取り落としたサーベルを反対の左手で拾って、そのまま横に薙ぎ払ったが、ゴトーは後に飛んでかわしてしまう。

エルフレア「まだだっ!」

1本では不足と判断したのか、右手にもサーベルを握り、二刀流になるBX。　しかし、さっきのバルカンが効いているのか、右手はマニピュレーター…　人間で言えば、中指と薬指が折れ、サーベルをしっかり握れていなかった。

ゴトー「…やめておけ。　最後の忠告だ」

ゴトーはエルフレアに、吐き捨てるように言った。

エルフレア「私に後退はないっ！」

ＢＸの斬撃は、たしかにそれまでより速く正確になっていた。しかし、正面から斬りかかってくることが分かっているなら、対処のしようはいくらでもある。

イフリートは、機体を左に開いて、最初の攻撃を避けた。それはエルフレアも予想していたらしく、次の一撃のモーションに入っていた…　が！！

ゴトー「…止めておけと言った」

次の一撃が到達するより先に、ゴトーはヒートサーベルの『柄』で、ＢＸの胸を突く。　些細な攻撃だったが、思い切った横払いの体勢に入っていたＢＸは、バランスを崩し、やむを得ず左脚を後についた。　その格好は、右脚だけ半端に踏み出したのと同じ。

ゴトー「…ふっ！」

その右脚を、ヒートサーベルで思い切り払い除ける。　脚までガンダリウム合金製のＢＸだから、脚が切断されることはなかったが、片脚を払われ、無様に尻餅をつく。

そして、それを見下ろすイフリート。

ゴトー「終わりにするか？　続けるか？」

エルフレア「お前の決定権など認めないっ！！」

手だけで突いたビームサーベル。　それはイフリートの腹部の…
５０センチほど横を通り過ぎるだけで終わった。

そしてイフリートは、ヒートサーベルを逆手に持ち替え、ＢＸに突き立てるべく、その切っ先を真下に…。

第８５章　月の悪魔（前書き）

（何か予想通り？）

ジェイソン「本編が盛り上がっているから、今回は測定を休めだそうです」

ＤＲ．マンソン「…どうせノリだけで書きおって、都合のいい切り目が作れなかったんじゃろ？（知力９６）」

ジェイソン「そんな辺りでしょうね（知力８２」）

マヒロ「…ギクっ…。（予想的中→知力７９）」

（続く）

第８５章　月の悪魔

ユーリ「あの馬鹿…」

見かねたのか、ユーリが機体の向きを変えようとする。　しかしその行く手を、連射されたビームが遮った。

メリル「…パパの邪魔はさせない」

ユーリ「そうね。　結局、私には関係ない事かもね？」

冷めた口調に戻ったユーリは、あっさり救援を諦めたようだ。　冷たいようだが、位置や距離を考えると、正しい判断かも知れない。

ゴトー「ならば落ちろ…　っつ！！」

けれど、サーベルがＢＸに突き立てられることはなく、イフリートは後に飛び退く。

ゴトー「誰だ…」

フォーリュン「やはり2機では無茶だ！　チャーリーの口車などに乗せられて！」

そこにいたのは、シェンロンガンダムを改造し、黒く塗ったＭＳ…。
フォーリュンのＢＳＲ（ブラックシェンロン）だった。

ドラゴンファングをかわすため、ゴトーは攻撃を諦めざるを得なかったようだ。

ゴトー「仲間か？　正義の味方は、いいタイミングで現れるな？」

フォーリュン「たいした損傷ではないようだな…。　安心したぞ」

フォーリュンは、エルフレアと真逆の態度だった。　すなわち、ゴトーの挑発に乗らない…。　と言うか、まるでゴトーとの会話に応じない。

ジルド「今さら仲間を呼んでも無駄なんだよっ！」

ユーリ「首のへし折れた奴の言うセリフかしら？」

カメラの視界を半分失いながらも、センサーで補い、戦い続けてい

たジルド。

しかしそれも限界が来たのか、サーベルを空振りしたところをユーリに蹴り飛ばされる。　おかげで2、３０メートルほども吹き飛ばされたうえ、関節が正しくない方向に曲がってしまっていた。

ミア「ジルドっ！」

それを見て取ったミアが、ライフルで百式の手前を掃射した。　ユーリが後に下がり、フォーリュン、エルフレアと合流した形になる。

それを見たゴトーも、ジルドを下がらせ、自身もエージェント達から少し距離をおく。

ゴトー「互いに新手が来たようだな。　仕切り直せば、もう少し楽しめるか…？」

ゴトーはそんな期待とも、挑発とも取れる言葉を投げ掛ける。

そしてその背後では、ドム系ＭＳが巻き上げる、特有の砂埃が見えた。　戦っている場所とＭＳの機種からして、インドラの派遣した援軍だろう。

その数、およそ３０機。

エルフレア「これで勝ったと思っているのか？　だいたいさっきにしても…」

ユーリ「馬鹿は、本気で1回死んで来なさい！」

負け惜しみを口にするエルフレアのＢＸを、突如ＢＳが殴った。
それも、パイロットが最も衝撃を受けるだろう、コックピット真後から。

エルフレアの顔が、作動したエアバックに埋まる。

フォーリュン「…っ！！」

エルフレア「なっ！

いや、…馬鹿…？　そうだよね…。　自分の仕事もしないで、私は一体何をしていたんだ？」

けれどエルフレアは、怒るよりも自嘲の笑いを上げた。

ユーリ「ようやく、沸騰してた脳味噌が冷めたみたいね。ところであんた、あいつら全部纏めて…　そうね、２０秒だけきっちり止められる？」

ユーリ次に、フォーリュンに語りかけた…。

【2】

スティヴ「遅くなったな！　途中でこいつらと会ったんで、案内してやってたんだ」

インドラ軍士官「こいつらか？　たった数機でマドラスを殺り、さらに進撃しているという奴は。　どうにもそうは見えんが…」

スティヴは、状況を通信でゴトーに知らせてきた。　どうやら援軍の到着が早かったのも、スティヴの配慮のおかげらしい。

インドラ軍士官「しかも、今いるのは3機だけか？　これでは勝負にならんな」

ゴトー「…油断…」

大敵、と繋がるはずだったのか？　それとも、油断は禁物？

とにかく、その手の言葉がかけられるよりも速く、ユーリとフォーリュンが動く。

ドラゴンファングが再びゴトーを襲ったように見えたが、実際狙われたのは、その背後のドワッジだった。　油断の言葉を吐いた、張本人の機体である。

インドラ軍士官「なっ、速い？！」

フォーリュン「まず、大将首はもらった！」

ＢＳＲが、ドワッジの頭部を捻り潰す。　その勢いに押され、ドワッジはそのまま仰向けに倒れ込んでしまう。

フォーリュン「次っ！」

ビームグレイブ。　ミアは攻撃を寸前で避けたように見えたが、その横のドワッジが倒れていた。

そして、真っ正面から飛び込んだフォーリュンとは違い、上空に飛び上がったユーリ。

ユーリ「バズーカもいいけど、こっちも試しておきたいところね？」

ＢＳの背中に装備されていた、ＭＬＲＳ（ミドルレンジロケットシステム）と呼ばれる、射ちっ放しのロケット弾を使う。

本来は、核やビームバズーカとは混合積載しない設計だが、これまたエージェント仕様のブラックシリーズ特有の改造だ。　エージェント仕様機は、エージェント１人で、多数の敵を同時に相手にするという設計思想で、徹底的に強化されている。

スティヴ「無誘導のロケットなんかが、そう簡単に当たるかっての！」

射たれたロケットは１２発にもなったが、命中弾は０。　傭兵たちほど凄腕ではないインドラ軍も、ドム系ＭＳの機動力を活かして、素早く回避していた。

ただ派手な爆風と火柱が『ゴトーたちを取り囲むように』上がっただけである。

ミア「今度は…」

エルフレア「私の番だ！」

偶然、ミアとエルフレアの声が被った。　そして、戦場の後で、不自然に動きを止めたＢＸ。

エルフレア「マイクロウェーブ、来いっ！」

２０秒。　そうユーリが言った理由はこれだった。　それだけの時間があれば、ＢＸ（ブラックエックス）は月からのマイクロウェーブを受信し、サテライトキャノンを発射するための準備が整う。

エルフレア「言うまでもないけど…。　月は出てるよね？」

【３】

ゲット「…んぐ…」

一方こちらは、夢世界の守護者ゲット。　彼は、座り心地のいいゼフィランサスのシートで、気持ち良さそうに寝息を立てていたが…。

フレーネ「…こ、この感じ…。　憎しみの渦…」

背筋に凍るような冷たさを感じて、靴も履かないで部屋を飛び出したフレーネ。

リンダ「どうしたんだい、フレーネ。　そんなに怖い顔をして？　悪い夢でも…」

フレーネ「悪夢はこれからっ！！　ゲットは？！」

そんなフレーネに驚いたリンダだったが、指は反射的にゲットが待機しているハンガーを指差していた。

フレーネ「大変…　ゲット…」

裸足のままで駆けるフレーネ。　そんなフレーネを、リメンバーズの乗組員たちが呆然と見送る。

フレーネ「ゲットっ！　見えた？　感じた？　止めなきゃ…」

ようやく、ゼフィランサスのコックピットまでたどり着いたフレーネ。　彼女の呼び掛けに、ゲットは目を覚ます。

ゲット「どうした、フレーネ？」

フレーネ「ゲットは感じない？　月の悪魔が、攻めて来るの…！！」

ゲット「何だ、月の悪魔って…」

そう言ったゲットの手が、フレーネの腕に触れた。　その瞬間、ゲットの中に広がった宇宙…　無重力の中にいるような浮遊感。　そして、背筋が凍るような悪寒。

ゲット「フレーネ？！　下がっててくれ！　俺が行くよ」

フレーネ「ゲット…　ゼフィー…　お願い…」

フレーネが離れたのを見ると、ゲットは発艦手順もそこそこに、飛び出して行く。　彼は、とりあえず無線でスティヴを呼び出す。

スティヴ「ゲットか？　来なくても平気だぜ？　こんなんで、俺は落ち…」

ゲット「違うんだよっ！！　…月から悪魔が…　じゃなくって！とにかく危ねぇから逃げろっ！！！」

言ってる事は、まるで意味が通じていなかった。

それでもスティヴが回避に移ったのは、避けろと言われたら素直に身体が反応する、いわば傭兵の条件反射のようなものだった。　仲間からの警告のおかげで、自分では気がついていなかった危機を逃れた経験は、歴戦のパイロットなら、一度や二度はあるものだ。

【4】

『月は出てるよね？』

確認するまでもなく、月は…　綺麗過ぎた。　そして、そこに一筋の光が走り、ＢＸが不気味に煌めいた。

エルフレア「いくんだっ！！」

エルフレアの叫びがこだました数秒後…。

輝いた光の奔流。

それは、辺り一帯を全て呑み込んだように見えた。

現実には、味方のユーリとフォーリュン。　ついでにそのフォーリュンと斬り結んでいたミア、先の一撃で戦場から退場させられていたジルド、最初から遠距離支援しかしていないメリル。　彼らのように、さまざまな理由と偶然から、呑み込まれなかった者もいた。

スティヴ「マジかよっ！」

ただし、それ以外の人間は…。

ゲットの言葉で、考えなしに身を退いたスティヴですら、機体表面が焦げ、衝撃波で3回転半しながら吹き飛ばされ、地面にめり込んでしまう。

そして、それ以上の悲劇が、中心部にいたインドラの援軍を襲った。
　彼らは指揮官が倒された事と、ロケット弾を避けて中央に固まった事で、足が一瞬止まっていた。

これが致命的で、彼らは再び動く脚どころか、存在全てが光の渦に消えてしまい、二度と現れなかった。

ユーリ「やるじゃない」

サテライトキャノンの圏外に退避していたユーリが、機体を着地させる。

ミア「なんてこと…。　っ、隊長は?!」

ゴトーの不在に気がついたミアは、フォーリュンにまるっきり背を向けた。

フォーリュン「…これが、月の力か…」

しかしフォーリュンは、彼女を後から攻撃しなかった。　それは、ミアに温情をかけたのか?　それともサテライトキャノンの威力に驚嘆して、我を忘れてしまったのか?

エルフレア「…やった…。　くくくくく…　ふはははははっ…!!」

そして、エルフレアの上げる笑い声が、月の綺麗な夜に、酷く不気味に響いていた…。

第８６章　陥計のイエスマン（前書き）

（９回目）

ジェイソン「あぁっ！　いい所で終わってしまいました！　せっかく１人、邪魔なのが死んだところを見れそうだったのに！」

ＤＲ．マンソン「死んだ？　ああ、傭兵の親玉か。　Ｅを言葉攻めにしたり、なかなか頑張っておったの」

ジェイソン「あ、でもあいつは、たしか知力が低いキャラでは…？」

ＤＲ．マンソン「測っておいてなんじゃが、数字に表れない力もあるでな。　こういった奴らは、戦略政略には疎いが、戦いの勘や、小手先の戦術には秀でているものじゃ」

ジェイソン「なるほど…。　では逆に、エージェントと行動を共にしている彼らは、どうなんでしょうか？」

ＤＲ．マンソン「あやつらは、意外との…」

★ディジョン★（覚醒前）

操縦８９　統率９６　知力７２　政治７５　魅力８０

★レナ★

操縦８１　統率８４　知力７８　政治８１　魅力８１

★アルヴィン★

操縦８５　統率５２　知力３９　政治５４　魅力６７

★ラリー★

操縦８４　統率６９　知力６０　政治６８　魅力６２

ＤＲ．マンソン「やはりの」

ジェイソン「政治力が高いですね？　政治家でもないのに…」

ＤＲ．マンソン「こやつらは、古参の将軍たちに可愛がられておったキャラじゃ。　馬鹿ならば、ザキラ様に早々と殺されておろう」

ジェイソン「けれど、いつの間にかエージェントと行動を共にしていますね？　ザキラ様と保守派の将軍たちであれば、政敵以外の何者でもないんですが」

DR．マンソン「それが、世渡りの上手さじゃな。　つまりこやつらの政治力は、自らが政治を行う力ではなく、時の流れを見抜き、我慢強く耐える力と言えるな。　政策立案が得意なお主とは、少し性質が違うんじゃ」

ジェイソン「そうなんですね。　確かに彼ら、皇女のメリャーナとも知り合いでしたし…」

DR．マンソン「世渡りの上手い者を侮ると、いざという時に痛い目を見るぞ？

…もっとも、こやつの身体は、既に爆弾を抱えておるようじゃから、政治的な立ち回りなぞ、すぐにいらなくなるがな…？」

ジェイソン「えぇ？！」

DR．マンソン「覚えておらぬか？　こやつが儂の研究所に潜り込

んだ時のことを…」

（妙な謎かけをしながら、続く…）

第８６章　陥計のイエスマン

イエスマン「ボス、おめでとうございまぁ～す」

本人的には違うのだろうが、その笑みが気持ち悪く見えてしまうのは、ザキラの側近イエスマン。

ザキラ「程良いところであろうな。　インドラ海軍の実態は、張り子の虎。　宇宙戦艦が大気圏内を飛ぶのが当たり前になった時代、海に浮かぶだけのガラクタに、存在価値などない」

この時点では、インドラ海軍の壊滅は報告されていたが、まだベンガルール進撃…

つまり、エルフレアやユーリ、フォーリュンがゴトーの傭兵団と戦っている事は、ザキラにまで報告が上がっていなかった。

イエスマン「けれど、それに気がついていない能無しとっては、ボスの大勝利な訳でしてぇ～」

ザキラ「これでまたしばらく、私は有能な宰相という事だ」

ザキラが低く笑う。

だが目は鋭く、その年齢に似合わぬ剛健な肉体もあってか、雰囲気

を一切和ませない。

DR.マンソン「ザキラ様、よろしいですかの？」

そんなザキラに、脳量子波が舞い込む。　相変わらず、量子波を好むザキラであった。

ザキラ「エージェントMか。　此度のエージェント共の働き、誉めてやろう」

DR.マンソン「ありがたいお言葉…　なんじゃがの…？　それより気になることがありましての…」

DR.マンソンの量子波には、勢いがなかった。

ザキラ「ディジョンとかいう大尉か？　もう二月になろうかと言うのに、何も変化がないようだな？」

DR.マンソン「それゆえエージェントと行動を共にさせれば、何か変化があるやも知れぬと考えたのじゃが…。　儂の失策であった

かの…」

イエスマン「だから先に謝っておこうっていうんですかぁ～？　ドクターも弱気ですねぇ～？」

量子波に割り込んだらイエスマン。　ＭＳに乗らず、部隊も率いないのに、この男がエージェントを名乗る理由は、脳量子波にあるとも言うが…？

ＤＲ．マンソン「…お主には言うておらんわ。　ザキラ様、やはり失敗作に外傷を負わされた程度で、感染したと決めてかかったのは、早計であったかの…」

話の内容は、ＤＲ．マンソンの研究内容を理解していない者には、まるで分からない内容だった。　研究所では確かに、カトラスとディジョンが騒動を起こした事があったが…。

イエスマン「ドクター？　それを言うなら、メリャーナの所で泳がせてるもう1人も同じじゃないですか？　でも、感染したからって、すぐ化け物になっちゃう人間じゃ、役に立たないんでしたよね？」

ＤＲ．マンソン「お主っ！　何でそれを？！」

ＤＲ．マンソンは脳量子波で叫びを上げた。　聞いていた者の頭に、

電撃が走るくらいに。

ザキラ〔…エージェントM。　量子波で叫ぶな。　頭に響く〕

DR．マンソン〔も、申し訳ない…〕

主人に叱責され、萎縮してしまったマンソン。

ザキラ〔真偽は不明だが、とある文献によると、細胞に冒されながら、精神力で死ぬまで自我を保ち続けた格闘家もいたそうではないか。　もしかしたら、とは期待せぬか？〕

DR．マンソン〔…お言葉を返すようですがの…。　儂に、そのような大それた考えはできぬようじゃ。　人間には操れぬ物ゆえ、感染させた人間の脳を取り出して利用する。　それがそもそも、ディアボロ・システムの始まりじゃからの…〕

やはり研究の内容についての話は、予備知識のない者には、想像の外の産物でしかないようだ。　ただこれで、研究所に生身の人間の脳が並べられていた理由だけは分かりそうだった。

イエスマン「でも、やっぱりここは、明るい未来を夢見ないと。伝説でしかない人間が、もしかしたら、2人も誕生するかも知れないんでしょぉ～？」

DR．マンソン「そこで、実は感染しておらんのではないかと、不安にならんのが理解できんわ。　感染に失敗しておれば、何も起こらん。　一生、この先、ずっと。　当然じゃ」

同じザキラの懐刀でありながら、楽天家のイエスマンと、悲観しがちなマンソン。　もしかしたら、この2人が不仲な理由は、そんなところにもあるのかも知れない。

ザキラ「様子を見るのに、さしたる手間はかからん。　それに、もし妙な事になるようならば、Dを使って消せばよいだけではないか？　Dは使える。　先週にも、私につまらぬ意見をした者を始末させたところだ」

DR．マンソン「Dが傑作と言って頂けるのは、望外の喜び…　なんじゃが…」

結局、話が終わるまで、マンソンの弱気な態度が変わることはなかった…。

【2】

ザキラ「それはそうとして、こちらも報告を聞かせてもらうとするかな？　エージェントJ」

量子波を打ち切ったザキラは、うなだれていたジェイソンに声をかけた。

イエスマン「無駄ですよ、ボスぅ～。　エージェントJさんったら、あのおまけ皇女に、いいように言いくるめられて来ちゃったんですからぁ～。　まともな報告が、できるはずもありませ～ん」

イエスマンは、いつもの嫌味っぽい口調で、おどけて見せた。　ジェイソンはそれを、物凄い形相で睨みつける。

ザキラ「イエスマン。　そして、エージェントJ。　勘違いするな？　私は何も、宇宙に波風立てず事を納めよ、などと命じた覚えはない。　むしろ、手際よく波風を立てる方法こそ進言せよ。　戦いによって得られるものこそが、今の私にとって不可欠なものだ」

ザキラはあっさりそう言った。

つまり狙いは分からないものの、この戦争をただふつうに勝って、終わらせる気はないらしい。　とはいえ、まさか負けたい訳でもなかろうが…？

ジェイソン「では、事実だけ申し上げます。　あのマヒロとか言う皇女もどき、霧雨と共謀しているのは確実かと思われます。　むしろ、大貴族の子弟に過ぎない霧雨を、そのままにしておかない可能性を秘めております。　両者を裂いておかねば、後々の禍根となりましょう」

ジェイソンが報告したのは、事件の賠償を求める彼らの態度が強硬だ、というような事ではなかった。　それ以上の何かを、ジェイソンは見て来て、かつ、これから為そうとしているのか？

ザキラ「…なるほどな…。　Dを使う、という手もあるが…」

イエスマン「恐れ入りますが、ボスぅ～。　それは時期尚早ですよぉ～。　奴らに逆賊の汚名を着せないうちに殺しちゃうと、思わない火の粉が飛んでくるかも知れないで～す。

それに、うまく殺しちゃったら、それはコロニーの領主のクビをすげ替えるだけになっちゃって、何にも面白い事は起こりませ～ん」

珍しく、イエスマンがザキラの発案に異を唱えた。　しかし、より危ない事を提案したようにも思えるのだが…。

イエスマン「このまま煽ってやれば、奴らは必ず尻尾を出しますよぉ～。　霧雨なんて小者はともかく、皇女様が当事者なことが重要なんですって。　皇族が、仲良し貴族さんを抑えきれずに大騒動。　面白くなりそうじゃないですかぁ～？」

まさかイエスマンは、マヒロと霧雨を煽り、帝国本国と真っ向から対立させようと言うのか？　その意図は、またしてもよくわからないが、皇族がもめ事に巻き込まれれば、帝国が天地をひっくり返したような大騒ぎになるだろう。

そして、ザキラのラインザック嫌い、皇族嫌いは、知る人ぞ知る真実な訳で…。

ジェイソン「私は反対です。　帝国がある程度纏まっているからこそ、今の力があるのです。　分裂してしまえば、敵を倒すのに遠慮はいらなくはなりますが…」

口を開いたジェイソンは、悩んだ声ながら、自分の意見をはっきりと述べた。

つまり、またしてもこの2人は対立したということになる。

ザキラ「どちらも魅力的な案ではあるな？　敵を消すのに、相争わせるか？　それとも、気がついていない振りをしてやるか…？　実に迷う」

迷うと言いながら、ザキラの頬は緩んでいた。　一種異様な光景なのは、まず間違いあるまい。

キサナドゥ「今度は裏口からじゃなくて、玄関から遊びに行っていいんザンすか？」

話を聞いていたのか、いきなり声をかけてきたのは、その宇宙での事件の実行犯の片割れ、エージェントXこと、キサナドゥだった。

ちなみに、宰相の部屋に入るというのに、ノックもなければ、従兵の案内もなかった。

イエスマン「あら、Xさんお帰りなさい。　でも、横から話に割り込むのは、ボスに失礼ですよぉ～？」

キサナドゥ「ただいまの挨拶もしに来ない、Wさんよりは礼儀正しいつもりザンスけどね？　と言うか、次のオモチャをねだりに来ち

やったんザンス」

しゃべり方といい、例えの内容といい、特徴のあり過ぎる2人だった。

しかも、片やザキラの知恵袋、片や同じくザキラの暗部の統率者…。

その存在感は、口にしたら怒るだろうが、副宰相のジェイソンより際立っていた。

ザキラ「宇宙はしばらく様子見でよい。　それよりも私は、地上で何か起こると思うのだがな？」

ザキラが声をかけ、宇宙の話は沙汰止みになった。　結局、宇宙の情勢は相手次第になりそうだ。

イエスマン「地上、って言いますと、やっぱりオデッサですかぁ～？　そう言えばオクサイドさん、勝手に攻めちゃってますよね～？」

その通りで、オデッサ侵攻はオクサイドの独断だった。　ただし、元の命令が『反帝国レジスタンスに属する者の討伐』だから、命令違反とまでは言えない気もするが。

ジェイソン「メリャーナが、オクサイドに援軍を出したと言います。2人の仲が親睦になったなら、それなりの脅威にはなるでしょう」

イエスマン「無っ理ですね～。　オクサイドはボスに取り入って、出世する気満々ですよぉ～。　今や、ただの名誉職の皇女に、尻尾なんか振りませんって」

イエスマンは、ジェイソンの懸念を思い切り否定した。

ただ、否定するのはともかく、言い方に問題がありそうだった。

案の定、ジェイソンの表情は不快そうだ。

ジェイソン「私も、そのような事があるとは思っておりません！　ただ、常識に囚われないで、危険の可能性を挙げたまで！」

やはり怒っていたのだろう。　ジェイソンの口調は、妙に強かった。

キサナドゥ「で、ボス？　それをオモチャにしようってんなら、ミーよりDさんが向いてるって気がするザンす。　したがってミーは、冬休みを取らせてもらうザンす」

言って、くるりと背を向けてしまうキサナドゥ。

ザキラ「…襲撃よりも、暗殺にしろと言うか？」

キサナドゥ「イエ～ス。　あっちは、敵と味方が互角なんザンしょ？　しかも宇宙と違って、地上は服を着ないでも平気ですからぁ～？　夜這いが痴話喧嘩に発展して、朝にはバッサリ、なんてことが起こっても、全然不思議じゃないで～す」

十分不思議…　というか、あり得ないと思うのだが。

とにかく、言いたいことだけ言うと、キサナドゥは手をひらひらとさせながら、部屋を出て行ってしまった。

ザキラ「まったく勝手な奴だ。　まあ、こちらも急ぐ必要はないがな」

ザキラの低い呟きだけが、妙に静かになった部屋に響いた気がした…。

【3】

そして翌日。

帝都最大、つまりは帝国内で最も大きく、最高の医療設備を持つ、帝国軍立パンドラール総合病院。　そこにザキラの姿があった。

ザキラ「そなたの身を尽くしての功績、このザキラ、死すとも忘れぬ」

帝国士官「……。」

ザキラが手を握った士官は、言葉を発しないのではなかった。　すでに手遅れの重傷で、意識がないのだ。　周りにはすすり泣く家族の姿がある。

ザキラ「軍務である。　したがって、傷つき倒れる人間がいるのは仕方あるまい。　しかし、仕方ないで終わらせられるほど、私は薄情には徹しきれぬようだ」

そう呟くように言ったザキラは、家族にある物を手渡した。

よく見るとそれは、真新しい勲章と二階級特進を伝える書状で、つまりザキラは、この士官に自ら勲章を贈り、昇進を伝えるために来たというのか？

家族「…宰相閣下の恩義、生涯忘れません」

涙ながらに語るのは、その士官の子だろうか？　まだ２０になるかならないくらいの若い息子だ。

ザキラ「いや、忘れて頂いて結構。　これはルーベル中佐の戦功に対して送った物。　むしろ、中佐をこうしてしまった罪は、私にあると言ってもよい」

それだけ言うと、ザキラは病室を出て行った。　出て行く時に、振り返り敬礼をするなど、最高の礼を尽くした態度は、普段のザキラからは想像もできない。

イエスマン「ボスも、相変わらずお好きですねぇ～」

そんな主人を、まるで揶揄したかのように扱うのは、不謹慎が生きて歩いているかのような、イエスマンであった。

どうやら部屋から少し離れた場所で、ザキラを待っていたらしい。

ザキラ「黙れ、イエスマン」

静かに、しかしイエスマンを一喝してしまうザキラ。　やはり、いつもザキラではない。

ただし、イエスマンに気にする様子はないのだが。

ザキラ「…それよりも、だ。　お前が見せたいという人間は、どこにいる？」

イエスマン「はぁ～い、こちらで～す」

イエスマンが案内した病室。　それは、重症患者だけがいるはずのこの病棟の、３Ｆの一室にいた。

ザキラ「…メルフォードフ大尉…。　この者がどうした？」

ザキラは首を傾げる。　目の前にいるのは、先と同じく重傷の患者ではあるが…。

イエスマン「いえね？　ボスはお見舞いがお好きだから、ご案内をと思いましてぇ～」

ザキラ「嘘をつくな、イエスマン。　私が見舞う患者は、みな子なり親族なりが有力者で、押さえておけば何かの役に立つ人間だからだと、気づいていないお前ではなかろう？」

周りには誰もいないと思ってか、先ほどとは違い、ザキラはあっさり本心を吐露していた。　早い話が、病院訪問も政治的パフォーマンスだと自白した訳だ。

イエスマン「これは失礼を～。

で、この人ですがね？　メルフォードフなんて名前は、真っ赤な嘘。
　反帝国レジスタンスのサブリーダーしてた人で～す」

イエスマンは、どこで調べたのか、目の前の患者の偽名を暴いた。

ザキラ「レジスタンスを治療するなど、もっての他。　まさか、そんなつまらぬ事を言う気ではないだろうな？」

ザキラは、かすかに眉を潜める。

イエスマン「もちろんで～す。　こいつを入院させたのは、皇女さんですよ？」

ザキラ「…弱いな。　メリャーナがレジスタンスを匿っていたとしても、人違いだと押し通せば、それ以上の不祥事にはならぬ。　お前にしては、つまらぬ献策だ」

ザキラは、興味を失ったように部屋を出ようとする。

イエスマン「…ところがね、ボスぅ～。　こいつの身体に、ＤＧ細胞が入ってたりしたらどうしましょう？」

イエスマンの言葉にザキラは、突如驚いた表情を見せる。

イエスマン「ドクターに聞いたんですけど、半死の人間でも、適性さえあればあの細胞は活動できるそうですね？　むしろ、新たな宿主を殺すまいと、必死に治しちゃうとか。　この人、３日前まで酸素マスクすら取れなかったんですよぉ～？」

ザキラ「……。」

目の前の男は意識こそないが、穏やかな表情だった。　それが３日前まで、植物状態だったと言うのか？

イエスマン「まだ分かりませんけどね？　意識が戻ったら、実はただの化け物でした、なんて例もあるそうですから。　でも、元がレジスタンスですし、遊ぶには丁度良くないですかぁ～？」

主人のザキラですら、驚くような事を、笑いながら勝手にやってしまうのが、このイエスマンという男だった。

そのイエスマンを、ザキラは複雑な表情で見つめていた…。

第８７章　炸裂ガイアクラッシャー（前書き）

（１０回目）

ＤＲ．マンソン「測定シリーズも、今回で遂に１０回目だとな？」

ジェイソン「おおっ！　それで、記念の今回は…」

ＤＲ．マンソン「地味なのに、有能なキャラ特集じゃ！」

ジェイソン「…はぁ。　地味で有能ですか？」

ＤＲ．マンソン「地味で無能なら、紹介する必要がないからの？
では、いくぞ！」

★ダイン★（インドラ）

操縦９４　統率９５　知力８１　政治７７　魅力９７

★マンネ★（同上）

操縦６７　統率７５　知力７６　政治８３　魅力６８

★ウィナス★（同上）

操縦５４　統率４３　知力９２　政治５８　魅力２７

★サンサレア★（同上→死亡）

操縦４６　統率７０　知力９７　政治８５　魅力８８

★ドラグノック★（先代皇帝弟→本編未登場）

操縦５８　統率８１　知力７４　政治９３　魅力７７

★エッフェンベルグ★（インドラ方面軍総司令官）

操縦７４　統率１００　知力９５　政治６８　魅力８０

★ルムメニゲ★（インドラ方面軍師団長）

操縦７６　統率９３　知力８４　政治８５　魅力７８

★オードリー★（月の貴族の代表）

操縦２３　統率６１　知力８３　政治９１　魅力５６

★ブレンド★（正体不明）

操縦９２　統率９８　知力９１　政治９０　魅力８７

★リョーマ★（エンペラークラスファイター）

操縦９９　統率４５　知力５０　政治２　魅力７６

ジェイソン「…な、なんですか、この９０代のオンパレードは？？？」

ＤＲ．マンソン「だから言ったじゃろ？　有能なキャラ特集じゃと。本編で活躍しておるキャラだけが、有能な訳ではない。

むしろドラグノックなどは、その典型的な例じゃ。　西欧は反乱1つ起こらんゆえ、本編を書こうにも話題がないんじゃ」

ジェイソン「第★★章　平和な西欧　『西ヨーロッパでは、ドラグノック卿の優れた手腕のため、今日も1日平穏だった』　じゃ、書いても面白くないですからね…」

DR．マンソン「逆に言えば、こ奴らが本格的に動く時には、物語もまた…　かも知れんぞ？」

（続く）

第87章　炸裂ガイアクラッシャー

所変わって、中国のファイトスタジアム。

ここでは今日も、ＭＳが街を闊歩しているのに、市民は平和に暮らすという、独特な日々が続いていた。

？？？「ちょっと…。　もう少し優しく使ってあげてよね！　傷だらけじゃない…」

整備士にしては若い女性が、愚痴っぽく言う。　言われているのは、中国では知らない者はいない、エンペラークラスのファイター、リョーマだった。

リョーマ「うっせ～ぞ、ミレイ！　傷は戦う男の勲章だ。　傷がつけばつくほど、男としての格が上がるんだよ！」

リョーマは、ＴＶを見ながら怒鳴る。

その言葉が正しいかどうかはともかく、エンペラークラスともなれば、無傷の決着など望めないのも事実ではあった。　たまに申し込まれる格上挑戦（リョーマから見れば格下）を除けば、実力は伯仲し過ぎている。

ミレイ「はいはい…。　って、何見てるの？　あ、次の対戦相手？」

声をかけられたリョーマは振り返ったが、何か企み顔をしていた。

リョーマ「いつも通り、挑戦状を叩きつけてやるのさ」

ミレイ「普段から、そんな事しか考えてないのね。　その割に遅刻するわ、ファイトの日を勘違いしてすっぽかすわで、大会本部も頭を悩ませているらしいわよ？」

もしかしてこのリョーマというファイター、強いが天然なのだろうか？

リョーマ「細かい事はいいんだよ！　俺は強い奴と…　強者と死闘するのが生き甲斐なんだ！　本部？　興行？　知るか！　整備が終わったんなら、さっさと退きやがれ！！」

ミレイを押し退け、シャイニングガンダムに乗り込むリョーマ。

だが、その姿は灰色のジャケットにTシャツ、赤いマフラーにジーンズと、まるで普段着だった。

ミレイ「またそんなの作って…。　シャイニングガンダムはＭＦなんだから、ファイティングスーツ着ればいいのに…」

リョーマ「余計なお世話だ！　あんな身体にピッタリのスーツなんざ、趣味が悪すぎなんだよ！　変態かっつーの！！」

ちなみに、この服にもＭＴシステムは組み込んであるらしく、シャイニングガンダムは、ふつうにリョーマの動きをトレースしていた。

もしかしたらリョーマは、意外にオシャレなところがあるのだろうか…？

【2】

リョーマ「今度は俺が相手だ！　お前にＭＳファイトを申し込むっ！！」

いつものお約束で、空からシャイニングガンダムが降り立つ。　観客は沸くが、こんな真似をやらかすのは、実はリョーマぐらいだったりする。

そりゃあ、ビギナークラスや幽霊ファイターを合わせれば、１万人近いファイターが登録するＭＳファイトで、いちいちこんな申し込みをしていては、時間がいくらあっても足りない。

グリフィン「貴様まさか、あのリョーマ・サオトメか?!　エンペラークラスでも、屈指の強さを誇るという!?」

グリフィンも応えるが、やや芝居がかっているように見えるのは気のせいか?　ともあれファイトルールでは、ファイター本人同士の合意があれば、ファイトは成立する。

すぐに申請がなされ、その日の最終ファイトに

『シャイニングガンダム　ＶＳ　ボルトガンダム』

の対戦が組まれた。　コンサートのアンコールではないが、実は本部や観客も、飛び入りがある事が前提で動いているのだ…。

【3】

そして、その日のナイターファイト。　スタジアムには夜に入って、観客は帰るどころか、その数を増やしていた。

ナイターは昼間とは違った趣があるので、それを好むファンもいる。　そして、唐突なファイトは荒れる要素が多いと、これまた狙うファンもいるらしい。

まあ、そういった個人的な趣味は、ファイトそのものには関係しないので、以後一切割愛するが。

実況「お待たせいたしましたあぁぁぁ～～～～！！

本日のメインにして、最終ファイトッッ！　エンペラークラスと、キングスクラスの、剛腕対決だっ！！！」

いつもの調子で実況が始まり、観客席から歓声が飛ぶ。

実況「さっそくファイターの紹介と参りましょおぉぉぉ～！！

赤コーナー…

最強との呼び声もあるエンペラーが君臨して、早3年っ！！　その剛腕に砕かれた相手は、もはや数えきれませんっ！！

一撃必殺のシャイニングフィンガーは、どんな星より強く光り輝きますっ！！！

リョーマ・サオトメ、シャイニングガンダムっっ！！！！」

シャイニングガンダムが手を掲げると、歓声は天を突かんばかり、

沸きに沸いた。

実況「続っきましてぇぇ～～っっっ！！

青コーナーは、そのエンペラーの指名を果敢に受け止めた男っ！！
鉄球肉弾の嵐が、ついに皇帝をも捉えるかっ？！

身体が、筋肉とファイター魂だけでできているという、噂のボルトガンダム使い…　グリフィン・バインダーっ！！！」

リョーマの時に劣らない声援が、再び観客席から上がる。　キングスクラスに昇格した今、グリフィンも十分中国を代表するファイターなのだ。

実況「そして言うまでもなくっっ！！」

実況が手を挙げると、ゆらめく光が観客席と闘技場の間に幕となって現れた。

実況「無敵のバリアー『アリュミューレ・リュミエール』は今宵も健在ですっ！　皆様、いま1歩闘技場にお寄り頂きまして、より間近でファイターたちの激闘をお楽しみくださいっ！！！」

稼働には、専用の発電所が丸ごと一ヶ所必要とも言われるが、代わりに鉄壁無双のバリアが張り巡らされ、準備は整った。

実況「それでは参りましょう…　ＭＳファイトォォォォォッッッッッ…」

リョーマ「レディー…

リョーマ&グリフィン「ゴーーーッッ！！！」

気合いの入ったコールと同時に、２機はいきなりスラスターを全開に吹かし、拳と拳をぶつからせ合う。　距離を取る瞬間もあるが、それは勢いをつけるためで、すぐにまたぶつかり合うのだ。

リョーマ「ハンマーを使わず、拳で俺と撃ち合うなんざ、見上げた根性だ！」

グリフィンは、距離を取ってのグラビトンハンマーという戦術を採用しなかったようだ。　そんなグリフィンにリョーマは感心したが、さりとて攻めの手が止まるはずもなく、猛ラッシュが始まった。

それは、何発かがボルトガンダムのボディに入るものの、決定打にならない。　グリフィンは、ただ打たれるだけではなく、打撃の力をうまく受け流しているようだ。

グリフィン「やるな、素早いっ！」

リョーマ「お前もなっ！　だが、こうしていても埒はあかないっ！！」

グリフィン＆リョーマ「…ならばっ！！」

互いの思惑が一致したのか、拳をただぶつけるだけでなく、機体全体を使っての肉弾戦に発展する。

次の瞬間、ボルトガンダムとシャイニングガンダムはガッチリ組み合っていた。

ギリギリと音を立てそうな緊迫した空気が流れるが、どうやら単純なパワーだけなら、ボルトガンダムの方が上らしい。　シャイニングガンダムの関節が軋む。

リョーマ「…へへっ…。　なかなかやるな？　だが俺は、まどろっこしいのが嫌いでね…。　こいつを受けてみろっ！！」

さっと後に飛び退くシャイニングガンダム。　フェイスカバーとアームカバーが展開し、右腕が光に包まれる。

実況「出ました出ました、伝家の宝刀。　リョーマの必殺技、光の拳ぃ…」

リョーマ「俺の拳は煌めき猛る　貴様を潰せと光って唸る…

必殺、シャイニングゥゥゥ…　フィンガァァァァッーーー！！！！」

グリフィン「あの光る手かっ！！　ぬぅぅっっ！！！」

ボルトガンダムを真っ向から砕く勢いで、シャイニングフィンガーを放つリョーマ。　グリフィンは半歩回避しかけたが、そこで踏み留まった。

グリフィン「避けきれぬっ！　凌ぐしか手はないかっ？！」

1秒にも満たない時間だったが、反射的に回避を迎撃に切り替えたグリフィン。　ボルトガンダムを退かせず、逆にリョーマに向かって踏み出させた。

リョーマ「正面から受け止めるつもりか？　勇気だけは認めてやるぜっ！！」

シャイニングフィンガーを受け止めたファイターは、いまだかつていなかった。

エンペラークラスのファイター達の間では、シャイニングフィンガーを撃たせないことが、唯一、リョーマに勝つための戦術とされていたのだが…。

グリフィン「ぬおぉぉぉぉぉぉ～！！！」

グリフィンの絶倫の気合が炸裂する。　なぜか右手が、焼けるように熱い。

リョーマ「馬鹿なっ！！！」

実況「なんとしたことだっ！！　リョーマ最強不敗の必殺技、シャイニングフィンガーを受け流したっ！！

右手は流石に大ダメージを負ってしまったようですが…。　これは歴史的快挙と言えましょうっっっ！！！」

観客席が大いに沸いた。

そして、そんなボルトガンダムを、信じられないといった面持ちで見つめるリョーマ。

グリフィン「くぅぅぅ……」

右手に焼いた鉄を押し当てたかのような、痛みと焼けつく熱さが広がる。

ＭＦは、よりファイターと一体化した動きを求めたゆえに、機体と運動、触覚の両神経が繋がった状態にある。　だから、機体を破壊されてしまうと、安全装置が働くまでの間、自分の身体がダメージを負ったかのように感じる…

…のとは、違うようだ。

グリフィンの右手が、何故か金色に輝いているように見える。　まさか、自分の肉体から技を繰り出した訳でもあるまいし、ファイトスーツの故障だろうか？

グリフィン「や、焼けるように熱い…。　我輩は一体どうしてしまったのだ?!」

リョーマ「二度もまぐれはないっ！　絶対にこいつで決めるっ！！
　シャイニングフィンガーァァァ～～！！！」

そんなグリフィンをよそに、攻めを緩める気のないらしいリョーマ

は、シャイニングフィンガーを、なんと連続で繰り出す。

実況「これでもはや万事休すかっ?!　何とかリョーマのシャイニングフィンガーを凌いだグリフィンですが、いまだ動けないっ!!

それでも容赦をしないリョーマは、まさに兎を駆るにも全力を尽くす獅子のようっ!!」

2発目のシャイニングフィンガーが、再びその猛威を振るうかと思われた時、突如グリフィンが叫んだ!

グリフィン「ぜえぇぇぇぇぇぇぇえいぃぃやぁぁぁぁ〜〜〜〜〜〜!!!!!!!」

ボルトガンダムがシャイニング…

いや、シャイニングガンダムではなく、その手前の地面に拳を叩きつける。　それで傷ついていた右腕は完全に折れ、機体全部が軋んだ。

…だが次の瞬間、地面が隆起し、シャイニングガンダムを下から襲う。

リョーマ「なにっ?!　いまさら止められんっ!!　土くれごと、お前を砕いてやるっ!!!」

遮二無二技を放つ、シャイニングガンダム。　反撃こそしたものの、その場を1歩も動けていないボルトガンダム。

両機の決着は…???

【4】

実況「引き分けですっ!!　エンペラーリョーマと、引き分けるファイターが、また1人現れましたっ!!!」

結局、ボルトガンダムは遥か彼方まで吹き飛ばされ大破。　グリフィンもまた、気を失って病院に担ぎ込まれる羽目になった。

しかし、地面を隆起させての攻撃はシャイニングガンダムを捉えていて、頭部をきっちり破壊していた。

だから、シャイニングガンダムの頭部破壊と、ボルトガンダムの行動不能なまでの損傷が相撃ちと見なされて…。

結局、引き分けとなった。

リョーマ「…同じファイトで、2回も撃ったことなんてなかったのにな…」

必死だったのはリョーマも同じだったらしく、今更のように右手を動かしてみたりする。

ミレイ「…凄いね…。　リョーマの技を…」

ちなみに、リョーマは不敗という訳ではなかった。　同じエンペラーと当たれば、互角の相手はいる。

だが、そのすべてがシャイニングフィンガーを放つタイミングを封じられての負けだった。

つまり、必殺技と真っ向勝負をして、彼を倒したファイターは、今まで1人もいなかったのだ。

リョーマ「ミレイ。　あのボルトガンダム、直してやってくれ」

突然、そんな事を口にしたリョーマ。

ミレイ「は？　あんなのどうやって…。　造り直した方が早いくらい…」

リョーマ「じゃ、造り直してやってくれ。　頼む」

さらりと無茶を言うリョーマ。

ミレイ「…まったくもう…。　徹夜すると、お肌に悪いのにな…」

だが、口を尖らせてはいるものの、どうやらやる気のミレイだった。

リョーマと付き合いが長い彼女は、リョーマが言い出したら聞かない所、認めた相手には、とことんまでに肩入れする性格を知り尽くしていた。

相手のＭＦまで修理などすれば、ファイトマネーから足が出るだろうに、気にする素振りすらない。

リョーマ「地面に気を叩き込んだのだろうが、それであんな技を編み出せるものか…。　それに、あいつの拳には、熱く込み上げるものを感じた。　まさか明鏡止水を…？」

リョーマは1人佇む。

脳裏に浮かんだのは、病院に搬送される時のグリフィン。　倒れても、なお誇るかのような笑みを浮かべていた、あの濃い顔だ。

リョーマ「決めたっ！」

ミレイ「決めたって…　何を？」

叫んだリョーマを、不思議そうに見たミレイ。

リョーマ「あいつの必殺技だ。　ガイアクラッシャー。　いい名前だろ？」

無敵のはずのシャイニングフィンガーに、真っ向から向かってきたグリフィンに敬意を表してか、まだ無名だったグリフィンの必殺技

を、リョーマはこう命名したのだった…。

第８８章　和平への道（前書き）

（１１回目）

ＤＲ．マンソン「この測定、どうやら冒頭文シリーズで最多連続記録を更新したらしいぞ？」

ジェイソン「これも、ドクターの先見の明があってこそですね。キャラ紹介が全部終わらなければ、終われない…」

？？？「そうだ～！　僕らの紹介をする前に止めるな～！」

？？？「つか、地味キャラのおっさんより紹介が遅いって、どういうことなんだよっ！」

ＤＲ．マンソン「…そろそろ来るとは思っておったが…。　お前らは、前の冒頭文をやっておったろうが…」

アイン「毎回出てたの、セブンスとフォルナだけだし」

ジェイソン「ご心配なく。　どうせみんな同じ顔ですから、読者も区別ついてないですって」

スリス「…顔って、これ『小説』だから。　だいたいこの編集者、美術で2以上取ったことないから、絵なんか描かせたら、大変な事に…」

マヒロ「…ギクっ…」

ジェイソン「知ってますよ?（ニヤリ）

それはともかく、測定はしてあげますから、今回はこれで満足しなさい」

★アイン★

操縦９５　統率７１　知力６９　政治１０　魅力６０

★スリス★

操縦９４　統率６８　知力６６　政治１０　魅力６０

★フィフス★（死亡）

操縦９３　統率６８　知力６７　政治１０　魅力６３

★セブンス★

操縦９５　統率６９　知力６８　政治１０　魅力６４

★ナイル★

操縦９６　統率６５　知力６３　政治８　魅力５９

ＤＲ．マンソン「ずいぶん似通った能力じゃな。　さすがは、クローンと言ったところか」

スリス「えへん」

ジェイソン「…そこ、威張る所なんですか？」

ＤＲ．マンソン「儂的には違うと思うが、ただ操縦９５は、エージェントでも敵う者は少ないからの…」

ジェイソン「苦戦必至、ですか…」

ＤＲ．マンソン「こやつらの能力を見る限り、インドラはそう簡単には崩壊せんし、帝国と１０年も戦い続けておるのは、伊達ではないということじゃな…」

（続く）

第８８章　和平への道

メリャーナ「…まさか、狙った訳じゃないわよね？」

頭を抱えているのは、これからフロンティアガードとの交渉に臨むはずの、メリャーナだった。

使者が一体どんな用で来訪したのか、一時は議論にもなった。けれど、それとなく探ってみれば、どうも停戦を求めてきたようだ。

つまり、サコンの策に相手の方から食いついて来た事になる。

メリャーナ「いいタイミング、のはずなんだけれど…」

サコン「はい。　どこまでも厄介な事をしてくれる宰相です」

それにも関わらず、メリャーナが悩んでいる原因は、ついさっき飛び込んで来た、帝国軍がインドラ海軍を壊滅させたとの知らせだった。

しかもザキラは、ご丁寧にもその戦闘の様子を全軍に放送してしまったため、一兵卒に至るまで、その勝利を知る事になった。

マリー「兵達は、変に意気軒昂です。　メリャーナ様を慕う直属の

兵はともかく、本国から伴った兵は、完全に勝った気で…。　交渉で弱腰と思われたならば、最悪の事態に発展しかねません」

最悪の事態。　それは暴動の類いだ。

1人1人の兵が、いきなりそこまでするとは思えないが、誰か中核になる者がいれば、不穏な事が起きないとは言い切れない。

そして、そんな事態に発展すれば、メリャーナの権威は地に墜ち、ザキラにメリャーナ排除の格好の口実を与えてしまうだろう。

マリー「ここは、交渉を蹴るべきだと思います。　帝国は勝っているのだから、停戦は必要ないと告げるのは、ある意味では当然の事です。

サコンの策が当たれば、オクサイドはカトラスに邪魔されて、勝利を逃すんですよね？　交渉は、それからでも遅くないでは…？」

今は勝っているから停戦しないと突っぱねる。　だが、オクサイドが負けたから交渉のテーブルに着く。　フロンティアガードは、しめたと思うかも知れない。

メリャーナ「…サコンには悪いけれど、それがいいかしら…」

そうメリャーナが言って、サコンを見た時、近衛兵が駆け込んで来た。　血相を変えているのは、何かの緊急事態だろうか？

近衛兵「大変です！　援軍に赴いたカトラス少尉のＭＳが、敵に撃墜されたとの事。　敵弾はコックピットを直撃したようで、少尉は重傷との報告が…」

メリャーナとサコンの顔色が変わった…。

【2】

メリャーナ専用のガルダの謁見室。

そこでは、フロンティアガードの使者、ミケルが膝まづいていた。
　その正面段上にメリャーナ、その脇に侍従のマリーがおり、サコンは階下の真ん中辺り。　他に並んでいるのは、みな帝国本国から派遣されて来た、将官や佐官達であった。

帝国の皇族が他国の使者を迎えるには、まあ妥当な構えではあるが、ここが最前線の基地であることを考えると、ややわざとらしい印象もある。

ミケル（仰々しく迎えて、帝国の威勢を示すつもりか？　帝国はインドラに大勝したらしいという話だし、条件は釣り上げられるかも知れないな…）

ミケルは、そんな読みでいた。

ただ彼にとってインドラの敗北は、必ずしもマイナス材料ではなかった。　インドラが、完全に息の根を止められてしまえば別だが、1回大敗を喫したと言っても、まだインドラは戦い続けている。仮にこのまま負け続けたにしても、平定するには、あと1年や2年はかかるだろう。

とすれば、『より難敵であるフロンティアガード』とは停戦し、インドラに全力を傾注するという選択肢もある。　ただこれは、茄子笛が見事勝てば、の話になるが。

マリー「フロンティアガード大使、ミケルフォード。　面を上げよ」

マリーが声をかけ、それにミケルも従う。

ミケル（フロンティアガード大使、と来たか。　もしかしたらフロンティアガードを、国として扱う腹積もりか…？）

ミケルの思案顔を見たサコンは、己の策が無事に第1歩を踏み出した事を悟った。

その策とは、開口一番からフロンティアガードを対等な国として扱い、誠意を示すというのが彼が急遽考えた策であった。

そうしなければならなくなったのは、もちろんカトラスが負傷したことで、元々の策が遂行不可能になったと判断したからだ。　オクサイドがあっさり勝ってしまう可能性を考えると、下手に交渉を先伸ばしにはできない。

サコン（…メリャーナ様の存在を際立たせることができれば、なおいいんだが…）

そうサコンは思ったが、急なことでもあり、考えは纏まっていなかった。

ミケル「フロンティアガード領オデッサより参りました、ミケルフォードと申します。　この度は皇女殿下にお目通りをお許し頂き、感謝の言葉もございません」

ミケルの口上は極端に丁寧だった。

ただその中で　『フロンティアガード領オデッサ』　と、独立した国の使者であると、遠回しに主張していた。

その意図をメリャーナは、水面下のせめぎ合いと受け取ったが、威並ぶ士官達はそうではないようだ。

ミケル「此度参りましたのは、我が国と停戦して頂きたいがため。我が方は元来、戦いを望んではおりません…」

帝国軍将軍「ふん！　何を言うかと思えば、馬鹿馬鹿しい。帝国に弓引く反乱軍の分際で、国だ、停戦だなどと！」

1人の将軍が、いきなりミケルを嘲笑うかのように言い放った。他の士官達も同感なようで、頷いていたり、笑っている者が少なくない。

しかし、そんな空気を切り裂いた声。

マリー「無礼者っ！！　貴様、メリャーナ様のお言葉を待たずして、使者に口を利くなど、横暴無礼も甚だしいっ！」

侍従のマリーだった。

彼女は、自分と比べたら、遥かに高位のはずの将軍を一喝したばかりか、侍従の証である長剣を握り、階を降りたのである。

将軍「何だと？　たかだか少佐の身で…」

マリー「愚か者がっ！　私の階級の問題ではない！　貴様がした事は、皇女たるメリャーナ様を蔑ろにする行いだと、まだ気がつかぬのか！

そのような無知蒙昧な輩は、誇り高き帝国軍の将に相応しくない。
この場で処断してくれる！」

実際に、剣を抜き放つマリー。

メリャーナ「……。」

焦った将軍は周りを見渡すが、メリャーナはただ黙って目を閉じていた。　そればかりか、さっきまで同調していたはずの者達が、みな視線を逸らしていた。

確かに、将軍のした事は、マリーの言う通りなのである。　フロンティアガードが独立した国であるかどうかはともかく、主人より先に謁見を受ける者と口を利かないのが、作法として当たり前。

平民に例えれば、訪ねて来た友人を隣の家の住人が先に出迎えたようなもので、もはや失礼と言うより、非常識な行為そのものだったのだ。

帝国軍将軍「う…」

自分の置かれた立場をようやく理解した将軍の額に、玉のような汗が浮き出て始める。　だがそんな将軍を見ても、マリーはまるで鉄仮面でも被ったかのように、表情を微動だにさせていない。

1歩、また1歩とマリーが近づき、長剣を握り直した時、その横に進み出て、膝まづいた男が1人。

サコン「メリャーナ様に申し上げます。　この者の礼を知らぬ振る舞い、お怒りはごもっともにございましょう。

なれど、ここは謁見の場。　他国の使者に帝国の恥を晒すは、本末転倒と愚考する次第にございます」

サコンは、そう言って頭を深く下げた。

その声は凛としていて、目は真っ直ぐメリャーナを見上げていた。

他方の将軍は、自分が撒いた種であるにも関わらず、狼狽え、冷や汗を流すばかりであった。

メリャーナ「……。」

マリー「少尉！　無礼者を庇い立てするは同罪。　並んで首を差し出す覚悟があっての諫言か！」

依然、黙ったままのメリャーナの代わりに、マリーがサコンを責める。　だがサコンは言葉を発せず、代わりに首をやや前に差し出した。

マリー「よい覚悟だ！」

マリーが長剣を振り上げ、振り降ろす…。

【3】

が、剣はサコンの首の直前で止まっていた。

メリャーナ「お待ちなさい、マリー。　分かりました、ミヤイ少尉。

確かに他国の使者に血を見せるなど、帝国の恥に他なりません。
この場は少尉に免じて、矛を納めることにします」

その言葉を聞くや、マリーは何事もなかったかのように長剣を納め、メリャーナの側に戻った。

サコンも厳しい表情をしたままながら、列に戻る。　ただ、肝心の将軍だけは、腰が抜けたかのように座り込み、まともに動けない様子だった。

メリャーナ「お恥ずかしい所をお見せしました。　一時の勝ちに驕り、当然尽くすべき礼を忘れるなど、軍人と言うより、人間としてあるまじき事。　我が臣がこのような醜態を晒してしまった事、できることでしたら、お忘れ頂きたく思いますわ」

代わりに、非礼を詫びるメリャーナ。

そんな紆余曲折を経たものの、彼ら3人の態度は、ミケルの脳裏に深く焼き付いた…。

【4】

サコン「お2人の演技は超一流でしたよ。　分かってはいても、内心震えていました」

ほっとした表情で語るのは、会見を終えたサコンだった。　騒動になりかけた会見も、それ以降は大した事件もなく終わっていた。

メリャーナ「演技ねぇ…」

マリー「はい」

だが、メリャーナは何故か微笑んでいた。　そしてそれ以上に、マリーがやたらとにこにこ笑っていた。

はっきり言って、この2人の様子はおかしい。

サコン「…まさか、本気だったとか言いませんよね？」

それを察したのか、サコンがおずおずと訊く。

マリー「私個人としては冗談は嫌いではありませんが、侍従として、未だかつて嘘偽りを述べた事はありません。　私がいい加減であれ

ば、それはメリャーナ様の尊厳に関わりますから」

サコン「…えぇと…。　つまりその言葉の意味する所はですね…」

サコンは、己の聡明さを恨んだ。　さっきの光景をつい思い出してしまい、膝が震えてくる。

メリャーナ「あらサコン？　寒いんですか？　震えていますよ。…それとも、私がマリーに声を掛けなければ、本当に首が飛んでいたかも知れないと、今頃気がつきましたか？」

サコンは、この2人を甘く見ていた自分を呪った。

メリャーナ「まあ、止めに入ったのがサコンでなくても、ああするしかないところではありましたが。　斬ってしまっては、いくら何でもやり過ぎです。　本国に…　ザキラに、変に疑われかねませんしね」

メリャーナの言葉に、マリーが黙って頭を下げる。

サコン「心臓に悪すぎますって…。　それより、これからどうされるおつもりですか？　和議は承知したとは言え、具体的な条件は、まだ決まってはいません」

サコンの言葉通りだった。

あのドタバタ劇に目が向いている間に、メリャーナはミケルに

『願いは聞き届けましょう』

と返答をしていた。　つまり、大筋でなら、停戦の意思はあると伝えたのだ。

マリー「それは、軍師の役目でしょう？　私は、侍従としての務めを果たしたのですから、サコンも自分の役目を果たしては？」

笑顔のままのマリーが、かえって怖かった。　そしてサコンは、己の双肩にメリャーナの将来がかかっていると知り、違った意味で膝が震え始めるのを感じた…。

【5】

翌日を待たずして、サコンとミケルの条件交渉は始まった。

ここでは、先の騒動が良い方に働いた。　ミケルはサコンを、信用のおける人物だと思ってくれたようだったからだ。　命を賭けてでも信念を曲げないのは、信用できる人間と言って差し支えない。

…まあ実のところ、諫めたサコンにはその気はなく、勝手に計画された茶番だと思い込んでいたのは、おそらく極秘事項であるので、ここではあえて述べない。

ミケル「おっしゃりたい事は、だいたい分かりました」

サコンはミケルに、メリャーナの置かれた状況を、包み隠さず話していた。　エージェントの事など、分かりにくいであろう事は省かれていたが、それでもかなり大胆な暴露ではあった。

ミケル「派閥争いは、どの国にも付き物です。　フロンティアガードにしても、意見を異にする者は多いですよ。　帝国ほど大きくないから、目立たないだけです」

サコン「…そうなんですか？」

ミケル「意外でしたか？　まあ帝国の軍人には、反帝国のレジスタンスが、帝国兵を殺すことを生き甲斐にしている狂信者の集団だと、勝手に思っている人間もたくさんおいでのようですが」

ミケルはそう言って笑った。　諦めたような笑い方で、それが、感情的にこじれてしまった現状を、物語っているようにも思えた。

サコン「お互い、相手を誤解したまま戦っているという訳ですか。
　なんだか、寂しい話ですね」

サコンも複雑な笑みを浮かべる。

サコン「…しかし、彼らの心情を無視した和議は結べません。　いくらそれが最善の方法だとしても、人の心は、そう簡単に割り切れるものではありませんから」

ミケル「それは、最大限配慮させて頂くつもりです。　『帝国軍、何程のことやある』　と言いたい所ですが、国力が違い過ぎます。
　帝国が今の3倍の犠牲を払う覚悟で戦ったならば、フロンティアガードはオデッサ鉱山を枕に、みな討ち死にするしか道はないでし

ょう。

ですから、呑むべきを呑んで助かるならば、それはむしろ有り難いとも言える訳ですよ」

その言葉からして、やはりミケルは卓見であり…　下手をすれば、政治に関しては、サコンを凌駕していると言えるかも知れなかった。

何しろ、サコンが考えた末に口にしたメリャーナ側の条件。　それをミケルは

『この程度でいいとは、ずいぶん無欲なんですね』

と、平然と言ったのだ。

ミケル「軍備制限、納税、領地の割譲…。　ありがちだと思います。しかし、こう今1つインパクトに欠けますよね。

こんな事は、あなただから申し上げるんですが…。　もっと欲張れる所もあるのに、もしかしてお気づきではないのですか？」

自分達に提示される条件は、当然緩い方がいいに決まっている。
にも関わらず、ミケルは自らの首を絞めるような事を言っているように聞こえる。

サコン「…私としては、それなりの条件にしたつもりだったんですけれど」

ミケル「ええ。　ですから、ありがちと申し上げました。　けれど、言い方1つで違ってくる事はあるんですよ。
例えばこの停戦という言葉を、降伏と書き換えたらどうでしょうね？」

サコンは、ミケルの言葉に目を見張った。　この男は、相手が停戦でいいと言っているのに、わざわざ地に平伏すると言うのか？

ミケル「この手の交渉事というものは、実利を取るか、名分を押さえるかだと思うんですよ。

元々、フロンティアガードが蜂起した理由は、帝国領主の重税と横暴にありました。　他のレジスタンスと違って、我々は帝国を殺したいほど恨んではいないんです。　だから、名前が停戦でも降伏でも、そんなに差はありません。

でも、帝国にとっては…　違うんじゃないでしょうか？」

サコン「…それは…」

間違いなく、違った。

たいして戦わずして、フロンティアガードを　『降伏に追い込んだ』
　となれば、ザキラはともかく、今引き連れている兵や士官達は、
言葉に騙されてくれるはずだ。

ミケル「…降伏。　その方がいいみたいですね？」

サコン「恩に着ます」

頭を下げたサコンに、ミケルは笑いかける。

ミケル「何も私は、フロンティアガードに損をさせる気はありませんから、それだけは思い違いをしないで下さい。　むしろ、譲れる所は譲って、恩を売っているだけかも知れませんよ？」

ミケルはそう言ったが、サコンはもう一度、黙って頭を下げた…。

第８９章　奇跡の生還？（前書き）

（１２回目）

ＤＲ．マンソン「今回は残り半分じゃな」

ジェイソン「ラピスラズリ女性陣のみなさんです」

エイス「やっほ～」

フォルナ「よろしくお願いしま～す」

ジェイソン「さっそく測定しますが…。

…トゥーエさん。　測るのに、セクシーなポーズはいりませんよ…」

★ノン★

操縦９２　統率７５　知力７５　政治４５　魅力６９

★トゥーエ★

操縦９５　統率５４　知力７４　政治２１　魅力８０

★フォルナ★

操縦９１　統率６８　知力７０　政治３４　魅力６８

★シクス★

操縦９４　統率６１　知力６６　政治２４　魅力６７

★エイス★

操縦９３　統率６７　知力６９　政治１９　魅力７０

ジェイソン「同じクローンでも、男性陣よりばらつきがありますよね？」

ノン「うん。　女の子って、男の子に比べると、環境に合わせて変わるからね？」

DR．マンソン「…女は変わる…。　昔はあんなでは…」

ジェイソン「どうしました、ドクター？　顔色が良くないようですが？」

エイス「ピンと来たよ！　おじさんって、奥さんとうまくいってないんでしょ」

DR．マンソン「お、お主、なんでそれをっ！　…しまった!!」

トゥーエ「あ～あ。　エイスのかまかけに、あっさりひっかかっちゃうなんて～」

シクス「口は禍の門ですね」

ジェイソン「…ドクター。　知力６９のキャラに騙されちゃ駄目じゃないですか…。　知力９６が泣きますよ？」

DR．マンソン「うるさいわ！　数値には表れない、得手不得手もあるんじゃ」

ジェイソン「それは何となくわかりますが…。　しかしドクター。研究に没頭しすぎなんじゃないですか？　家庭サービスを怠るから、奥様がお怒りになるんですよ」

エイス「でも、実際は逆だったりして～。　家庭サービスをしないんじゃなくって、奥さんが怖いから、家に帰れないんでしょ？」

DR．マンソン「…う…」

ジェイソン「そう言えば、昨日も研究所に泊まって…。　そうだったんですか…」

（周りに憐れな目で見られて、コーナーはどうなってしまうのか…？）

第８９章　奇跡の生還？

大破したゼク・アイン。

手足や頭部などの目立った所は無事なものの、運悪く装甲の薄い部分を砲弾が直撃したのか、全く動かない。

通信などの、あらゆる呼び掛けにも反応がなかった。　それはつまり、通信機が完全に壊れているか、カトラスが応答できないくらい重傷だという事だ。

すぐさま、ロメオら他のゼク部隊が、カトラス機を救出すべく動く。

帝国軍の窮地を察したのか、砲弾の雨は激しくなり、損傷するＭＳも出たが、何とか機体ごと、カトラスを味方陣地に連れ帰ることができた。

ロメオ「軍医長！　状況から見て、傷は重いと思います！　緊急手術の用意をお願いします！」

ロメオは、必死の形相でオクサイド軍の軍医に訴えた。　援軍ではあるが、部隊の実質的な指揮官が負傷したとなれば、それは一大事だった。

軍医長「しかしこんな最前線に、そこまでの設備はないぞ！　都市に後送するか、本陣のダブデに運べれば、手術設備もあるんだが…」

険しい表情で説明されてしまった。　しかし、ここが敵の砲弾すら届く最前線な事を考えると、設備がないのは、むしろ当然でもある。

軍医長「搬送用のヘリなら、すぐに用意できる。　あとは、運べるだけの傷かどうかだ」

あまりの重傷であれば、ヘリに乗せるのすら危うい事もある。　それに最悪の場合、手遅れという事態もあり得た。　パイロットの生命反応は消えていなかったが、それはただ、カトラスが絶命していない事の証明でしかない。

衛生兵「コックピットに直撃を受けています。　通常の方法では、解放できません。　装甲を焼き切り、無理矢理救出するしか…」

ゼク・アインは、コックピット周りの装甲が強化されている。　だから、こうして直撃を受けても希望が持てる訳だが、いくら装甲を強化しても、それは絶対に無敵とイコールにはならない。

ロメオ「私がサーベルでやります。　下がっていて下さい！」

ロメオが自分のゼクに乗り込み、慎重にサーベルをあてがう。　ビームサーベルは、出力を最低に絞っても、生身の人間を簡単に蒸発させるだけの出力がある。　操作に間違いがないようにしなければならないが、カトラスの事を考えると、そのための時間が、苛々するぐらい遅く感じる。

衛生兵「大尉っ！　ＯＫですっ！　これだけ隙間があれば…」

ロメオが機体を降り、カトラス機に駆け寄った。　衛生兵が緊張した面持ちで見守るなか、切り裂かれた隙間は広げられ…。

【2】

カトラス？「うぃ～　参った参った。　派手にやられちまったぜ。　機体は動かないわ、コックピットは開かないわで、真面目に死ぬかと思ったぜ」

…逆の意味で、空気が凍りついた。

衛生兵「…緊急の患者と聞きましたが…」

ロメオ「…そのはずだったんですが…」

その場に集まった者たちは、誰しも目を丸くしていた。

それはそうであろう。　カトラス機のコックピットは原型を留めておらず、装甲板はめくれ上がり、機体のそこかしこが焼け焦げて、黒くなっていた。

下手をすれば、機体が誘爆していてもおかしくない損傷で、誰もがカトラスは重傷だと思い込んでいたのだ。

カトラス?「どした?　眺めてないで、早く助けろよ。　こっちはずっと閉じ込められてて、窮屈だわ、腹は減るわで、散々だったんだぜ?」

ロメオ「…ぁ、は、はい…」

まだ呆然としていたロメオだったが、ようやく我に帰り、手を差し出す。　その手を掴んで這い上がったカトラスは、重傷どころか、いつもより力が強いように感じるほど壮健だった。

軍医長「そんな馬鹿な！　この損傷で、無事でいられるはずがない！」

カトラス？「んなこと言われても、無事だったんだからしょうがねぇだろうがよ？　それとも、俺に死んでほしい理由でもあんのか？」

軍医長「…い、いや、そういう意味では…。　しかし…」

医学の常識を越えた生還に、その軍医もまた、驚きを隠せていなかった。

カトラス？「ま、運が良かったんだよ。　こうして元気で、別に痛い所もな…　…なくはないか」

痛みに顔をしかめた、という風ではなかった。　軽く足首を挫いたかのように、カトラスは左足首を気にしただけだ。

軍医長「お前っ！　その足を見せてみろっ！！」

だが、それを見た軍医は、カトラスの足に飛びついた。　みるみる

顔が青ざめていく。

ロメオ「どうしました？　何かまだ傷が…」

軍医「大尉。　お前は医療経験もあると言ったな？　これを見て分からないか？」

その軍医は意味深な発言をし、さらにカトラスをまじまじと見据える…。

【3】

カトラス？「遠慮させてもらうぜ。　こんな程度で、手術なんて必要ね～ぜ」

カトラスはそう言ったが、軍医はかなりしつこかった。

軍医長「こんな程度かどうか決めるのは、医者の仕事だ。　お前は、黙って寝てればいいんだよ」

ロメオ「カトラスさん。　骨が変型してるんです。　皮膚も変な風

になっていますし、このまま放っておいたら、今は痛くなくても、激しい運動はできなくなるかも知れないんですよ？」

医療関係者の２人が口を揃えては、カトラスも聞かざるを得なかった。　軍医の許可がなければ、出撃はおろか、陣地内を自由に歩く事も許されないのだから。

カトラス？「けどよ？　全身麻酔なんて、どんだけ大袈裟…」

やむ無く手術に応じたカトラスだったが、後送までは拒否したため、最低限の治療になりそうだった。　それでも、搬送用ヘリの緊急医療パックを使えば、１、２時間の麻酔治療ぐらいはできる。

ロメオ「まあそこは、骨安めとでも思ってください」

そう言ってカトラスに麻酔を施したロメオは、軍医と共に治療に当たるようだ。　大手術ならば多人数でのサポートがいるところだが、カトラスがこんな調子なせいもあってか、衛生兵もつかず、ヘリの中には２人だけしかいない。

軍医長「麻酔は効いたようだな？　で、さっそくだが…」

麻酔でカトラスの意識が飛んだのを確認してから、軍医は足首…
…ではなく、太股の傷と、身体の皮膚を指差した。

ロメオ「…確かに、おかしい点がありますね？
これではまるで、全身が焼け爛れたのを、皮膚を移植して治療したようにも見えます。　太股にも、大腿動脈を損傷していてもおかしくない場所に傷跡が…」

緑の手術着で全身を覆ったロメオが、軍医の意図を言葉にする。
ゼク・アインに命中した砲弾は、発火性の強い物だったらしく、機体も部分的に焼けていた。　コックピット火が及ばずとも、蒸し焼きの原理で、内部が高温になった可能性はある。

軍医長「念のため聞いておくが、こいつがかつて大怪我か大火傷をしていて、これがその治療痕だという事はないな？」

ロメオ「そんな話は聞いていません。　他人の身体を見つめる趣味はありませんので自信はありませんが、１週間くらい前にシャワーで一緒になった時には、こんな傷跡はありませんでした」

２人は、そう言ってカトラスの傷の不可思議さを確認し合う。

軍医長「…分からん…。　これは明らかに、人間の回復能力を超越している。　こちらの骨にしてもそうだ。　一度折れた骨が、自然に結合した時にそっくりではないか…」

足首を指して、軍医は息を吐く。

軍医長「長く前線にいれば、奇跡としか思えない症例もある。　銃弾が頭を貫通しながら、死ぬどころか軽傷だった兵もいたな。　だがこいつの状況は、それらとも決定的に違っている…」

ロメオ「謎だらけですね…」

言いながらも、とりあえず2人はカトラスの足首の骨を削り、ギブスで固定した。　骨そのものは結合しているから、1週間もかからず違和感はなくなるはずだ。

一方で皮膚の方は、不格好であるものの完治と呼べる状態で、手出しをする必要はなかった。

軍医長「話は変わるが、ロメオ大尉。　常に医療に従事していない

割には、腕は立つな。　どうだ、私の部隊に来ないか？　敵を傷つける者は多いが、味方を治す者は意外に少ない。

私の元で経験を積め。　大尉の腕があれば、一軍の軍医長も目指せるぞ？」

ロメオ「そうですね。　考えておきます」

ロメオは、まんざらでもないといった表情だった。

医大を出てから、紆余曲折を経て今がある。　医者となるべく教育は受けたが、医療一筋では来れなかった。　そんな自分を、最前線の軍医が評価してくれたのは、素直に嬉しかった。

軍医長「麻酔の量は絞ってあるから、３０分もすれば目覚めるだろう。　実際、局部でもできた手術を、いろいろ調べたいから、無理に全身でやったに過ぎないしな」

血がついた手術着を慎重に脱ぎ捨てながら、その軍医は笑った。

当たり前だが、最前線でも感染予防の処置はなされる。　これだけの兵がいれば、個々人がどんな感染症を持っているやも知れず、それを医者伝えに部隊に広めない事は、軍ではかなりの注意事項だった。

衛生兵「終了ですか？」

軍医長「ああ。　大した事はなかった。　いつものように処理を頼む」

衛生兵「本当ですね。　ガーゼ数枚分の出血とは、手術の必要すらなかったんじゃないんですか？」

言葉をかけられた衛生兵が、ビニール手袋だけ嵌めて、さっさと後片付けをしていく。　謎を残したままではあったが、カトラスの命は救われた…？

【4】

カトラス「い、痛てぇ～　マジに死ぬ～」

だが、麻酔が醒めたカトラスは、さっきまでまでの強気と壮健さはどこかへ忘れて来たように、痛みに悲鳴を上げ…。

カトラス「…つか、何で俺はこんなケガしてんだよ…。　たしか俺

は…？」

…しかも、負傷前後の記憶を全部無くしていた。

軍医長「一時的な興奮で、痛みを感じていなかっただけか？　しかも記憶まで失うとは、やはりショックは大きかったという事か？」

そんなカトラスの急変に、慌てて呼ばれたさっきの軍医は、そう断を下した。

軍医長「だがこれで、こいつが人間な事は分かった。　傷は治っていたとはいえ、あんなつぎはぎの皮膚と、骨が異形に結合するくらいの、自然治癒に毛の生えたような治し方では、痛くない方がおかしかったからな？　しかし…」

ロメオ「なぜ治ったのかは、謎のままですね。　カトラスさんの周りだけ、時間が早く進んだようです」

医学に詳しい2人にすれば、カトラスの傷跡は、お世辞にも見事な治療とは言えないシロモノだった。

人間は放っておいても、かなりの傷は癒える。　骨が折れたって結合するし、臓器が機能を失ったなら、他の臓器が代わりに機能を果

たしたりもする。

だが、それでは元通りにはならない。　傷が変な形に結合してしまうと、それ自体が後遺症になる事もあるのだ。

軍医長「…で、どうする？　後送されて、惨めな姿を晒すのは嫌だったんだよな？」

カトラス「誰だ！　そんなケチ臭い事を言った奴は！　ケガすりゃ治療すんのが当たり前だろ？　入院でも何でもいいから、この痛みを何とかしてくれ！」

軍医長「誰だって、お前なぁ…」

呆れた様子で軍医が鎮静剤を打ち、カトラスは後方の野戦病院に入院する事になった…。

【5】

…ところで。

オクサイド軍では、その晩、1人の兵が発狂したらしい。

その兵は、衛生兵一筋の経歴で、大雑把な反面、快活豪気で、戦闘の恐怖による神経症などとは、縁もゆかりもなさそうな男だった。

だが、夜に突如として叫び声を上げるなど、理解不能な行動をとり、同僚の兵達にまで襲いかかったそうだ。

同僚の兵によると

『目が血走っていた』

『いきなり噛みつこうとしたので、慌てて銃床で突き飛ばした。まるで野犬のようだった』

『こちらの呼び掛けに反応しないと言うより、言葉を理解していないようだった』

と、驚きの反応が寄せられた。

結局、制止も聞かず、さらなる危険行為に走る気配があったので、その場で銃殺される事件に発展してしまう。

しかも、銃弾がその男の脳天を跡形もなく吹き飛ばすまで、驚異的な生命力を見せたという。

この事件は、その奇怪さからすぐに噂になり、想像以上の騒ぎになった。

このためオクサイド軍司令部では

『軍内にて負傷した際に、何らかの原因で、狂犬病ウイルスに感染した兵がいる』

と発表し、その兵と接触のあった人間、及び希望する者には、ワクチンの接種を行わざるを得なくなる。

そのため、せっかくオデッサに迫りながら、オクサイド軍の進撃には、大幅な遅れが発生してしまった。

…しかし、後に帝都に提出された報告書には

『患者から狂犬病ウイルスは検出されなかった』

と明記されており、これらの情報は、意図的に操作されていたらしい事が判明している。

そして、真実を記載した報告書は、未だ見つかっていない…。

第９０章　死闘　ラピスラズリ　ｖｓ　エージェント（前書き）

（チェンジ？）

ジェイソン「私の記憶が確かならば、既出のメインキャラ、全員紹介が終わったようですよ？　最長のシリーズでしたが、こうしてみると、短く感じますね～」

ＤＲ．マンソン「…あぁ…　フィリア…」

エイス「あ～あ。　奥さんの昔の写真なんか持ち出しちゃって、これは重症だね～」

ジェイソン「原因作ったあなたが言いますか？　まあ、結局はドクターの問題なんですが…」

エイス「そ、そ。男と女は、難しいのよ」

ジェイソン「ところで、変に達観しちゃってますけど、ドクターの傷心が癒えるまで、代わりの司会を探さないといけないんですよ」

エイス「そうでしょ？　だから、こうして来てるワケ」

ジェイソン「…はあ。　またラピスラズリですか？　何か、登場回数多いですね～」

エイス「いいの！　本編だと、言うほど出番ないんだから！　まったく」

ジェイソン「インドラ自体、たしかに目立たない感じはありますよね？　今回はエージェントと戦ってますけど、本格的な戦闘はサンザメヤ以来…　３０章以上経ってますね」

エイス「だから、冒頭文で代わりに目立つの！」

ジェイソン「予定通りいきますか？　と言うか、今度は何をやるんですか？」

エイス「そりゃ、あたしがここにいるからには、得意の恋バナを…」

ジェイソン「…まさか、相方にトゥーエさんを呼びませんよね？」

エイス「マズい？」

ジェイソン「…いや、あの方は語弊がありすぎると言うか、放送禁止用語スレスレと言うか…」

エイス「あ～　なるほど。　女の子同士で話してる分には、下ネタも楽しいんだけどね～。　やっぱここは、恥じらいのあるシクス呼んどくかな、無難に」

ジェイソン「そうしてもらえると、こちらとしては安心できますね」

（で、交代になったようだ）

第９０章　死闘　ラピスラズリ　ｖｓ　エージェント

残存艦は全て沈むか、逃げ散るかした。　降伏させるとは考えないのがエージェント流らしい。

おかげで、稀代の虐殺者の片棒を担がされる羽目になったようだな…。

レナ「…ブリーフィングの写真と、同じ場所とは思えませんよね…」

アルヴィン「…ここまでやるかって、俺でも思うぜ…」

反撃の脅威が去ったと判断し、私は母艦と鹵獲した軽巡洋艦をマドラスに近づけた。　補給をするためだったが、ご丁寧にもエージェント達は、その巡洋艦までも沈めてしまった。

これには、さすがの私も呆れた。　相手は戦意を失い、命令に従う存在だというのに。　彼らには、戦時国際法とかいう認識が皆無なようだ。

ただし、正確に言ってしまうと

『帝国は、インドラを独立国として認めていない』

だから、インドラなど反帝国勢力のレジスタンス行為は、戦争ではなく、帝国内部の反乱罪や殺人罪に当たるという主張になるのだが

…。

ディジョン「各機、上空警戒を怠るな？　どんな奴らであろうと、任務は任務だ。　文句は基地に帰ってから、いくらでも聞いてやるし…。　むしろ、私が率先して言う！」

我ながら妙な宣言をしつつも、接近する敵機に備えた。

今は補給半ばといった辺りで、一番エージェント機は身動きが取りづらい。　そのくせ、マドラス襲撃から数時間が過ぎていて、予測では援軍が到達する時間帯に入る。

ラリー「ミノフスキー粒子濃度が、再び上昇しています！　反応は確認できませんが、敵機来襲の可能性がありますっ！」

敵の援軍が粒子を撒いて、接近を悟られないようにしているのだろう。

火災のせいで風が乱れてはいるが、風はおおよそ北からだった。ミノフスキー粒子が、風に流されているとすれば、撒いた奴ら…つまり敵の援軍は、北から来るということになる。

ディジョン「私がレナと行く！　ラリーとアルヴィンは、捕捉に失敗した時に備えて、第二線を張れ。　もちろん、エージェントの補給は中断だ！」

3人「了解っ！」

レナ、ラリー、アルヴィンの反応はさすがに良かった。

しかし、ふと見てみると、母艦の退避とエージェント機の補給作業中止が徹底されていなかった。　あいつら、敵地で慢心してるんじゃないだろうな…？

【2】

ノン「まもなく当機は、マドラス上空へ到着いたします。　みなさま、パラシュートと…　武器の準備はできてるよね？」

どちらかと言うと、理知的で常識の通じるはずのノンの目が光った。

こういう場面では、彼女もしっかりラピスラズリなのだ。

ナイル「完璧だぜ、任せなっ！」

スリス「ノンがめずらしくノッてるよ？　ちなみに、こっちも準備は万端さ」

接近するのは、ラピスラズリ愛用のガウ3機。　だからと言って、特別仕様でも何でもないただのガウなのだが、とにかく死んでしまったフィフスを除く、ラピスラズリ9人が勢揃いしていた。

フォルナ「これでフィフスがいればな～」

シクス「うん。　だけど、過ぎたことより、今から殺る事に集中しないと」

重い話題すらも、明るく前向きに語る。　ノン以外の他の8人も、やっぱりラピスラズリだった。

ノン「それじゃ、みんな行く…　あれ？　トゥーエは？？？」

ついさっき、全機がそれぞれガウの降下ハッチに集合したはずなのに、ノンの戦況監視用モニターは、トゥーエのＲＦゲルググをロストしていた。

トゥーエ「上だよ、真上。　待ちきれないから、先にご挨拶をしようと思って」

何とトゥーエは、ガウの翼の上に乗っかってしまっていた。　まさか、そこから狙撃しようと言うのか？

インドラ兵「やめてくださいよっ！　そんな事したら、機体の安定が保てませんっ！」

シクス「揺れ…　きゃっ…」

トゥーエ「下手くそっ！　揺らしたら射てないでしょ？」

いきなりのドタバタ劇を繰り広げるトゥーエと、それに巻き込まれたシクス、エイス、他十数名のインドラ兵達。

フォルナ「ノン？　この調子じゃ、ダイブのカウントとか意味ないと思うから、私、先に降ろしてもらうね？」

ノン「もう、フォルナまで…」

バラバラになりつつも、降下を開始し始めたラピスラズリ。　そして、そんな彼らを迎え撃つのは…。

レナ「隊長っ！　１１時方向にガウ３っ！　ＭＳが降下中です！！」

ディジョン「私も捉えているっ！　叩き落とすぞ！」

可変ＭＳは、こういった時には心強い。　スラスターを後部に集中しているだけあって、ガウとの距離がみるみる縮まる。

トゥーエ「あ～も～　揺らすなっ！　役立たずっ！　ボケ！　ナスっ！」

手前勝手な暴言を吐きつつも、トゥーエは迫るＺ－Ｐｕｌｓを射つ。

ディジョン「正確な射撃だな。　しかし、ガウの上部にメガ粒子砲？　改造機か？」

至近弾になった。　艦にしては正確な射撃だと思い、私はガウの射

手を誉めかけたのだが…。

レナ「いえ、隊長。　ガウの上にＭＳがいるんですよ」

…何だと?!

敵は、空気抵抗とか、機体バランスとか考えた事がないのか?
鈍足に見えても、ガウは旅客機を越える速度で飛んでいる。　無茶な機動をすれば、ガウごと墜落しかねない。

レナ「隊長!　先に頂きます」

インドラ兵「敵機がもうこんな所まで…。　うわあぁぁ〜〜〜!!」

そんな無理がたたってか、そのガウはレナに捕捉されて、あっさり火だるまになる。　だが、上に乗っていたＭＳは、我関せずといった感じで、さっさと降下に移っていた。

フォルナ「トゥーエちゃんも駄目駄目だなぁ…。　降りながらでも、

狙撃はできるのに…」

フォルナのＲＦゲルググが、降下中だというのにライフルを構える。

フォルナ「降下速度計算、照準に自動リンク。　空気抵抗、機体の揺れの想定範囲は、と…。　ノンちゃん、これで計算合ってるかな？」

自信がなかったのか、話をノンに振るフォルナ。

ノン「大丈夫だよ。　射っちゃって」

フォルナ「だよね？　『下手な鉄砲、数射ちゃ当たる』って言うし」

着地を待たずしての６連射。　そして、上がる水柱が２本…。

【３】

フォルナ「狙撃成功っ♪」

無邪気に喜ぶフォルナだが、やった事は常識を逸脱していた。　パ

ラシュートでの降下中に、浮上中の潜水艦を狙撃して、命中率が３３．３％だと…？！

レナ「こんな非常識な狙撃するなんて…。　ですけど、隊長。　私、ちょっと心当たりがあるんですよ？」

ディジョン「レナもか？　奇遇だな？　私もだ」

以前、地平線に見えたばかりのミデアを狙撃された記憶。　そして、ここはインドラの勢力圏真っ只中という事実。

これらの要素を加味するとだな…。

アイン「ねぇ、ノン。　あいつらじゃない？　フィフス殺った、サンザメヤの時の…」

エイス「あ、ガンダムもどき！」

どうやら相手も気がついたらしい。

特に私は、機体が変わってないしな？　Ｚ－Ｐｕｌｓは、帝国でも限定的にしか生産されていないから、そうそう見かける存在でもない。

フォルナ「…え？　フィフスの仇？」

サンザメヤに参戦していなかったフォルナ、それとシクス、セブンス、ナイルは、ディジョン隊との戦いは初めてになる。

ナイル「よっしゃ！　なら派手に仇討ちといこうぜ！」

着地したＲＦグフが、ビームライフルを射ち上げる。　素早く連射する割に、やはり照準がやたらと正確だ。

ディジョン「グフがビームライフルを？　エースだけに、変なカスタム機に乗っているな」

変と形容したが、それはあくまで

グフ　＝　地上白兵戦用ＭＳ

という先入観からだ。

グフの形をしているからといって、ビームを射ったり、宇宙に出て

はいけないという決まりはない。　帝国もザクによく似たザク３を開発したが、本家のザクとは違った、量産に向かないエース仕様の機体だった。

レナ「相手は…　９機。　腕は確かで、ＭＳも改良型となれば、かなりの強敵ですね」

ディジョン「ああ。　一旦退いて、ラリーとアルヴィンと合流する。　あと、エージェント共も巻き込め！　上陸してからの戦闘は、本来なら奴らの仕事だ！」

ビームスマートガンで牽制しつつ、一旦退避針路を取る。

スリス「あっ！　逃げちゃうよ？」

ノン「誘ってるんでしょ？　招待してくれてるんだから、ここは丁重にお供しないとね」

さすがに、空を飛ぶ可変ＭＳに追いついては来なかったが、こちらを見失ってはいないようだ…。

【４】

チャーリー「俺様に敵う奴なんざっ！」

セブンス「死んじゃったフィフスもだから、１０人。　ついでに、ダインのおじさんもいい線行くから、１１人？」

バーストン「…案外、たくさんいるじゃねぇかよ…」

『敵う奴なんざいねぇ』と言いたかったのだろうが、その言葉は、敵に否定され、味方からはツッコミを浴びてしまう。　またしても、敵の通信回線に乱入してくる彼らだった。

そして、自信満々の態度だけをそのままに、セブンスと互角以下の戦いしかできていないチャーリー。

バーストン「寄るなっ！　アッシュ！　ビットで壁を作ってくれ！」

アッシュ「俺の貸しは高いぞ？」

それよりも、１機のマグアナックを早々に落とされつつも、連携を密にしているアッシュとバーストンの方が善戦していた。　補給をギリギリまで粘ったかいがあったのか、ＢＨＡ（ブラックヘビーアームズ）は惜しげもなく弾幕を張り、既に何回か直撃を出していた。

ノン「ピンチヒッターのお知らせです。　セブンスに代わりまして、ノ～ン！」

手が空いたのか、セブンスと斬り結ぶチャーリーを、横からノンがいきなり蹴り飛ばした。　こういった瞬間的な連携は、やはり巧い。

セブンス「横取りはズルいよ？　ノン」

ノン「そこは、リーダー特権発動で。　代わりにこっちのあげるから」

さらに、偶然近くに寄って来ていたマグアナックの1機を、セブンスの方に押しやる。　サーベルを抜いたらマグアナックは、押したノンには構わず、セブンスに正面から斬りかかり、即座に落とされた。

チャーリー「横槍入れようなんざ、舐めたマネしやがって！」

ノン「期待通りのタイプだね？　そういう、勝手に物事決めつけてる人って、あたし実は嫌いなんだ？」

理知的なノンは、チャーリーのような粗暴なタイプとは、合わないらしい。　その割に口調があっけらかんとしているのは、ラピスラ

ズリたちが、『悲しみ』とか『怒り』といった、感情を調整されてしまっているからだろうか？

チャーリー「グチグチうぜぇっ！」

ノン「頭が悪いから、お話しながらじゃ戦えない？」

チャーリーのクローの軌道を、ノンはあっさり見切った。　そして、かわしながらビームマシンガンで反撃する…。

【5】

アイン「お久さ～。　元気にしてた？」

一方で、私の相手をしているのはアイン。　レナがトゥーエで、アルヴィンとラリーは2機で、スリス、ナイルのコンビと戦っていた。

ちなみに、なぜ相手の名前を知っているかと言えば、わざわざ自己紹介をしてきたからだ。　この場違い感が最初は不気味だったが、最近慣れてきたようで、逆に怖い。

ディジョン「こっちは4対4なのに、エージェント達は12…　1対5か？　ずいぶん優遇されてるな？」

つい、話しかけてしまった。　やはり慣れは怖い。

アイン「あの黒いのはそこそこやるけど、周りにくっついているのはおまけでしょ？　それよりは、あんたたちと殺り合った方が楽しいから」

マグアナックは眼中になし、か。　早々と自動兵器の性能を見抜いたらしいな。

ディジョン「そりゃ、高い評価をすまないな」

やはり、かなりのカスタム機らしい。　目の前のザクは、ビームマシンガンは射つは、ビームサーベルを振るうわで、とてもじゃないがザクではなかった。

これならば、帝国のザク3とでも互角に渡り合えそうなぐらいだ。
私たちとの比較で言うと、攻撃力が互角、防御でＺ－Ｐｌｓが劣り、機動性で勝るといったところか？

ディジョン「今回は、あの何とかっていう陣形は使わないのか？」

挑発してみる。

アイン「あ、その手があったか！」

…まさかと思うが、単純に忘れていたのか？　一瞬慣れたかと思ったが、やはりこいつらを理解することはできそうにない。

アイン「じゃ、期待に応えてコンビネーションでいくよ～。　はい、ナイル名前っ！」

またしても名前を考えながら、急とは思えない連携を見せる４人。

ナイル「ふっ、食らえっ！　ナイル様とその下僕たちの一斉攻撃…」

トゥーエ「ダサいから却下！」

スリス「トゥーエに賛成～」

アイン「３対１で、ナイルの命名は否決されました」

訳が分からないことを言っているんだが、そのクセ、動きが速くて無駄がないのが厄介だ。

前衛のグフは、もうサーベルに持ち換えていたし、ザク、ゲルググは、射撃で盛んに足を止めようとしていて、さらにドムが、ランチャーで必殺の一撃を狙っている…。

【6】

ノン「まさか、これでおしまいじゃないよね？」

ノンのＲＦザクは、チャーリーのＢＶ（ブラックヴァーサゴ）の相手をしながら、マグアナックの動きを妨害していた。　こうすることで、アッシュの負担が増し、戦っている他の仲間たちが楽になる。

何だかんだで、リーダーらしい所もあるようだ。

チャーリー「てめ…。　俺様よりビットとお遊びかよっ！」

ノン「あれ？　ご不満？」

チャーリーに向き直ったノンは、ビームマシンガンを連射する。

命中率に劣り、威力も小さいが、速射性能に優れるだけに、全弾回避するのはなかなかしんどいようだ。

ノン「そして、秘密兵器のプレゼントっ！」

そんな中でノンが使ったのは、ビームマシンガンの下に付随しているグレネードランチャーだった。『スポン』と間の抜けた音がして、弾丸が飛んでいくが、ビームに慣れた目には、それがあまりに遅く見える。

チャーリー「こんなもんで…。　馬鹿にしてんのかっ！！」

弾速の遅いグレネードを、ＢＶは回避するというより、すれ違う勢いで突っ込んだ。　大抵のグレネードは触発式か時差式だから、身をかわしつつ前に出てしまえば、爆風による被害すら受けない。

ノン「期待通りに引っかかってくれるよね」

だが、紙一重で避けたはずのグレネードが、『カチン』とこれまた妙な音を立てて、機体に張り付いてしまうではないか！

チャーリー「何だこりゃ?!」

ノン「馬鹿にしたんじゃなくって、馬鹿だって判明しちゃった?」

直後、グレネードが大爆発を起こし、ＢＶの肩のアーマーが吹き飛ぶ。　しかも爆風で機体のバランスを崩したＢＶは、左膝を地面についた。

ノン「磁石って知ってる?」

つまりこのグレネードは、磁気式吸着グレネードだったのだ。　命中すればもちろん、近寄ると金属に吸い付き、爆発する。

シクス「そんな頭の悪い方は、乗ってるＭＳの頭もいらないんじゃないですか?」

そして、隙を見逃さない厳しさも、ラピスラズリの特徴。　いつの間にか背後に迫ったシクスのドワッジ改が、間髪入れずに、ＢＶの頭部を斬り捨ててしまった…。

【7】

バーストン「何やってる！　チャーリー！」

弾幕が違う方向から襲った。

ノンのＲＦザクはそれをかわしたが、シクスは脚に直撃を受けてしまう。　これは反撃が巧みだったのか、それともＲＦザクとドワッジ改の性能の差か？

チャーリー「余計なお世話だっ！」

バーストン「意地張ってないで、俺たちと一緒に戦えよ！」

よく考えてみれば、アッシュとバーストン、さらにビットＭＳ、ディジョン隊、ラピスラズリ。　みな、全員一緒にではなくても、何らかの連携を行っていた。

だがチャーリーだけは、最初から1人だけで戦っていて、仲間と協力しようとしていない。

アッシュ「放っとけ、バーストン！　チャーリーはいつもそうなんだよ！　それより、ビットを特攻させる！　その隙に仕留めろ！」

数を減らしたマグアナックだったが、急に動きが統一されると、一気に突撃を始める。　闇雲な突撃にも見えるが、多数のＭＳが一斉

に飛び掛かって来ると、さすがに対応に苦慮する。

セブンス「まず1機っ！　…ちょっとっ？！」

セブンスは1機のマグアナックを突き刺して仕留めるが、機体の爆発に巻き込まれてしまい、しばらく行動の自由を失った。

エイス「捨て身って、流行らないし～」

落ち着いてビームランチャーを射ったエイスは、2機のマグアナックを仕留めたが、ビームランチャーはこれ以上の連射ができなかった。

ノン「マシンガンの弱点、よく知ってるじゃない…」

一撃の威力に欠けるビームマシンガンを持つノンは、被害お構いなしの特攻には無力で、命中はしても、撃墜機はなし。

フォルナ「シクスっ！」

シクス「フォルナちゃん！！」

残ったマグアナックは5機。　それらが一斉に、シクスを襲う。

機体が無傷のフォルナより、傷ついたシクスのドワッジ改を組み易いと見たのか？

シクス「バズーカじゃ間に合わないっ！」

1機バズーカで下半身を吹き飛ばしたものの、大振りなバズーカではそれが限界だった。　ヒートサーベルに持ち換え、1機を斬り結んだけれど、まだ3機残っていて…。

フォルナ「シクス危ないっ！！！」

シクス「…っ！！」

シクスは斬り結んでいたから、背後ががら空きだった。　そこに飛び込んだマグアナックを2機、何とかフォルナが真っ二つにする。

シクス「フォルナちゃん…」

アッシュ「甘めぇよっ！！」

残る1機をフォルナが斬ろうとした瞬間、突如機体の脚が払われ、フォルナのＲＦゲルググは地面に倒れ込んでしまう。

脚を払ったのは、何とさっきシクスが下半身を吹き飛ばした、機体の残骸だった。

アッシュ「残念だったな？　ビットは、コアかジェネレーター殺らねぇと、スクラップになったって動けんだよっ！！」

ＢＳＤ自身の射撃が、地面にへばりついたＲＦゲルググを捉えた。
（ブラックサンドロック）

さらに残った1機のマグアナックが、サーベルをゲルググに突き立てる。

シクス「フォルナちゃん…　フォルナちゃん…！！」

ようやく、斬り結んだマグアナックを腰で両断したシクス。　だが、コックピットの位置にコアはなかったはらしく、マグアナックのの上半身が、倒れながらもドワッジのサーベルの腕を斬り落としてしまう。

アッシュ「バーストンっ！　ビットごと殺れっ！！」

バーストン「お、おうっ！！」

ＢＨＡ（ブラックヘビーアームズ）の一斉射撃が、サーベルを突き刺したマグアナックごと、その辺りの地面を吹き飛ばす。　爆風が、近くのドワッジまでも揺さぶった。

チャーリー「止めだっ！！！」

ノンを振り切り、チャーリーがさらなる攻撃を仕掛ける。

バーストンの攻撃を受けて、フォルナが生きていたかは分からない。
　ＲＦゲルググは、その時点で完全に焼け焦げていたからだ。

けれどチャーリーの一撃は、脱出や、撃ち漏らしといった、僅かな希望をも砕いてしまった。

チャーリー「くははははっ！　ざまぁねぇな！！」

真っ黒に焼けて、ぐしゃぐしゃに潰れたゲルググのコックピットを、
チャーリーは何度も何度も、ビームサーベルで突き刺し続けた…。

第９１章　デビル降臨（前書き）

（始ま…　らない？）

シクス「私のためにフォルナちゃんが…」

フォルナ「ま、仕方ないかな～」

エイス「だよね～。　ってか、フォルナおかえり～」

フィフス「もう1人いるよ～」

エイス「あ、フィフスもいた」

フィフス「『も』って失礼だな～」

エイス「だって、フィフスが死んだのはかなり前だから、みんな忘れてるって」

シクス「…何気に酷いよ、エイスちゃん…」

フォルナ「そうだよ～。　ラピスラズリが仲間の死に冷たいって、抗議のハガキが2枚も届いてるって噂が」

エイス「…2枚って…　多いの？　って言うか、噂？？？」

フィフス「少ないと思うし、たぶんそれ、編集者の妄想だと思うよ？それよりも、ラピスラズリの設定を理解してない人が、まだいたんだ？」

シクス「改めて説明しますね？　ラピスラズリは、とあるエースパイロットのクローンとして誕生しました」

フォルナ「それを、非人間的な教育を施して育てる、『予定』でした。　実際、5、6年は施されたんだけどね？」

フィフス「そこでインドラのリーダー、楽園の剣が変わっちゃったんだよね。　今の楽園の剣は、あのダインっておじさん」

エイス「おじさんは、途中でラピスラズリ計画を中止しちゃった。だから、あたしたちも１０人で打ち止め～」

シクス「私たちの教育方針も変わって、できるだけふつうの子供として教育されるようになって…」

フォルナ「名残が、操縦技術（クローン）と感情欠落（幼児教育）に残ってるんです」

エイス「でもさぁ～。　嬉しい楽しいは感じて、悲しいとか怒りを感じないって、実はすごくイイ人生なんじゃない？」

フィフス「かもね？　怒りったり悲しんでも、何もいい事は起こらないから」

フォルナ「でも、仲間意識は強いですよ？　死んだ私が言うのもなんだけど、シクスがピンチだから、助けようとしたんだし」

エイス「まとめると、

ピンチ　↓　助けなきゃ　↓　でも死んだ　↓　次がんばろう

な集団？」

フィフス「冷静に纏められると、どんだけ前向きなんだって感じだけどね～」

（次こそは…？）

第９１章　デビル降臨

ジルド「消えち…　まった…？！」

ミア「…そんな…。　隊長？」

スティヴ「…マジかよ…。　なんつー威力…」

ゲット「ま、間に合わなかった…　のか？」

メリル「…や、やだ…　パパ…。　…パパぁ～～！！！」

ミアのガンダムＭＫ－２が、駆けつけた先で立ち尽くし、メリルのメガライダーは、何回も超低空を飛び回る。　泣き叫ぶメリルの声が、心に酷く痛い。

エルフレア「私を見くびるからだ…。　と、当然の報いを受けたまでだ…」

エルフレアは低く呟く。　その声は、妙に震えていて、目線は定ま

らない。

いや、震えているのは身体全部だった。　あまりの威力に、自ら恐怖したのか？　それとも別の理由からか？

ユーリ「あ～ら。　どっかで見た機体、聞いた声だと思えば、ゲットじゃない？　逃げろとか叫んだみたいだけど、間に合わなかったのかしら？　残念だったわね」

ようやく飛来したゼフィランサスに、ユーリが回線を繋ぐ。　彼女がゲットと会うのは、今は無きサフラン１０以来となる。

ゲット「その声、お前ユーリかっ！　お前か！　こんな無茶苦茶しやがったのは！」

怒りを露にするゲット。

ユーリ「残念だけど、したのはこいつよ？　あたしが殺ってもよかったんだけど、そこは成り行きかしら？」

エルフレアのＢＸを少しだけ前に突き飛ばしながら、ユーリは不敵に笑う。　怒ったゲットを見ても、怯むどころか、楽しんでいるよ

うですらある。

ゲット「でも、お前の仲間なんだな？　こんなにたくさん…」

ゲット「多いも少ないも、関係ないわ。　数で言うなら、私なんて可愛いものよ？　Ｗってエージェントなんか、コロニーに穴開けて、中を滅茶苦茶にしちゃったんだから」

ゲット「コロニーに穴…？」

告げられた事の大きさに、呆然とするゲット。

ユーリ「あら、知らなかった？　そっか。『サフラン１０が消えた』のに、あんたがここにいるって事は、その時コロニーを留守にしてたって事だもんね。　運がよかったわね～」

滔々と語るユーリ。

それは、エージェントＵたる彼女にとって、当たり前の事実だったのだが…。

ゲット「何だって？　サフラン１０が消えたって、どういう事だよっ？！」

ユーリ「ふんっ！　今の私たちにはね、傭兵の頭も、３０機のＭＳも。　コロニーだって消せるって事に決まってるわよっ！

世の中からみんな消えてなくなれば、戦わなくていい平和な世の中になるでしょっ！！」

ＢＳが不意に跳躍し、ゼフィランサスをタックルで弾き飛ばした…。

【2】

…景色が白い。

まるで、ものすごく濃い霧の中に放り出されたようだ。

ゴトー「…ここは…　どこだ？　俺は射たれて…。　死んだのか？」

声だけが響いた気がした。　それが、酷く虚しさを感じさせる。

ゴトー「マリアとの約束も守れず…。　メリルも残したまま、俺は死んだというのか？　くそっ！！」

ただ白いだけの空間に、無性に腹が立った。

いや。　腹が立つのは、何もできずに死んだ自分自身にか？

？？？『あなたは死んでなどいませんよ…』

不意にした声。　だがその声は、どこからどうして聞こえるのか、まるで分からなかった。

ゴトー「誰だっ！」

ゴトーは怒りの口調のまま、その声の主を詰るように言った。

？？？『私ですか？　私は　『イノセント・マザー』　滅び逝く世界を救うため、母なる白き光として創られた存在…』

ゴトー「…イノセント…？　母なる光…？」

ゴトーの記憶のフレーズに、何故か合致する言葉のピースがあった。
だが、それが何だったのか、すぐには思い出せない。

イノセントマザー『私は遥か昔、誤った方向に進化し過ぎた文明がもたらした災厄を避けるため、最期の望みを託され生まれました。
結局、その時代の文明は、自らもたらした災厄を避けることができず、滅んでしまったのですが…』

ゴトー「滅んだ、だと…？」

マザー『そうです。　あなたは、今まで人類が大した災難もなく、順調に文明を発展させてきたと思っていたのですか？』

ゴトー「……。」

唐突な問いかけに、答に窮するゴトー。

マザー『どちらでもよい事でしたね。　『私たち』は、文明が滅んだ後の世界で幾ばくかの役に立てばと、その時代の人間達によって、地中深く封印されました。

ですがこの世界では、救うための力は生かされず、破壊する力だけが勢いを増しているようです。

このままでは、世界は再び文明を失い、闇に閉ざされてしまうでしょう。　だから私は目覚めたのです…』

ゴトーの戸惑いに構うことなく、イノセントマザーと名乗った声は、次々と信じられない事を告白し続けた…。

【3】

不意に攻撃を受け、地面に叩きつけられてしまったゼフィランサス。
　大柄な機体を圧倒的パワーで振り回すＢＳ（ブラックサイサリス）は、核がなくても、十分に凶悪過ぎるＭＳだった。

ゲット「何だよ、それっ！　俺の知らない所で、どうしてそんな事になってんだよっ?!」

ユーリ「知らない方が、間抜けなんじゃないの？　もう1ヵ月も前の出来事よ？」

動揺しているのか、未だろくに反撃できないゲットを、今度は蹴り飛ばすユーリ。　サーベルやバルカンを使わないのは、遊んでいるのか？

ゲット「俺の知らないうちに、おばちゃんも、街のみんなも死んだって言うのかよ～！！」

ユーリ「心配しなくていいわよ！　あんたもすぐに死ぬんだからっ！！」

スティヴ「戦いの途中に、何やってる！！」

ようやく抜かれたサーベルの一撃の先に、ゼフィランサスはいなかった。　スティヴのロングダガーが抱くようにして、ゲットを助けたのだ。

スティヴ「考え事してぇなら下がれ！　ここは俺が引き受ける」

1歩前に踏み出すロングダガー。

ユーリ「邪魔しないでくれる？　せっかく久しぶりに会った『友達』と再会を懐かしんでるのにっ！」

もう一度降り降ろされたサーベルを受け止め、逆にＢＳの脚を払うスティヴ。　しかしＢＳは、ホバー移動に転じてその攻撃を外す。

ゲット「スティヴっ！　今の話は…？」

戸惑いながらも、ユーリが避けた先を、ゼフィランサスがライフルを放つ。　しかし、ゲットは手が震えて目が潤み、まるで見当違いの場所を射っていた。

ユーリ「ショックで腑抜けちゃった？　可愛いわねぇ」

言葉とは裏腹な強烈な一撃が、ゼフィランサスを掠めた。

その思い切りのよい突撃は、スティヴの横からの支援がなければ、一撃で勝負が決まってしまいそうなほどだった…。

【４】

ゴトー「思い出したぞ！　ゲットの見つけた、あの嬢ちゃんが言ってたのが、そんな言葉だったな？

そしてイノセントってのは、こいつ…　イフリートに積まれているシステムの名だな？」

混乱しかかっていた頭を整理し、言葉を１つ１つ、記憶と繋げていくゴトー。

マザー『その通りです。　ＭＳに載せられたのは偶然なのですが、私たちの存在を知るための手がかりは、各地に遺(のこ)されたと言います。
　世界を救う力も、発見されなければ意味がありませんから。

ですが、少しだけ間に合わなかったのかも知れません…』

見えない存在なので、イノセントマザーが何を感じているのか分からない。　だが、マザーに表情があるならば、きっと悲しげな顔をしているのだろうと、ゴトーは思った。

ゴトー「今からでも遅くない。　お前の…　イノセントシステムの使い方を教えろ」

ゴトーは信じられない話を信じたのか、さらに踏み込んだ発言をす

る。

マザー『…残念ですが、私だけでは世界を救う力にはなれません。私の力…　あなた流に言うと、イノセントシステムですが、これは本来、人間を滅ぼすべく暴走を始めた　『アルテミットガンダム』の抑えるために創られたもの。

単独では、世界は元より、人間1人救う事もできるかどうか…』

また寂しそうな声がした。

イノセントマザーというからには、この存在は女性を模しているのか？　たとえ模されただけでも、今のゴトーは、女性を泣かせる存在が酷く腹立たしかった。

マザー『ですが、こうして正しき心の持ち主に会えたのも、何かの縁でしょう。　もしあなたが本当に私を感じ、使いこなせる存在ならば、いつの日か世界を救って下さい。

とりあえず、今の私にはこれぐらいしかできませんけれど…』

不意に物凄い重圧を感じた。　それは、ＭＳを限界まで加速させた時のＧによく似ていた…。

【5】

ゴトー「俺は一体…？」

意識から白い霧が晴れた時、ゴトーは崖の上にいた。

いや正確には、崖の上で倒れているイフリートのコックピットの中だった。　そして眼下では、ＢＳと２機のＭＳが激しい戦いを演じていて…。

ゴトー「エネルギーゲインが増えている？　いや、リミッターが解除されたのか？」

イフリートは、何故か性能が向上していた。　もしかしたら、これがイノセントマザーの言った　『これぐらい』　なのだろうか？

マザー『ＭＳはこの時代の物のようですが、ＯＳを私の創られた時代の物とリンクさせました。　稼働時間は短くなりますが、限界値

が上がっているはずです』

また声がした。

マザー『私はいつもここにいます。　聞きたい事があったら、聞きに来なさい。　正しい心を持つ…

いえ、そんな大袈裟なものではないかも知れません。　少しだけ、世界があげる悲鳴に、素直に耳を傾けさえすれば…。

あなたか、それともこの時代の誰かが、いつの日か私を使いこなしてくれると信じています。　そして、世界の崩壊を食い止めて下さい』

その言葉を最後に、イノセントマザーの声も、不思議な存在感も消えた。

その場に残ったのは、あれだけネロが稼働させようとして果たせなかった、イノセントシステムが発動したイフリートだけ…。

【6】

ユーリ「仲間におんぶに抱っこな所は、あの頃と同じなのね？　みっともないから、今すぐ殺してあげるっ！」

スティヴ「ゲットっ！！」

ユーリ「何度も同じ手は食わないわっ！！」

横合いの一撃を綺麗にかわし、さらにバルカンを撃ち込んだユーリ。
それでスティヴの動きを封じてから、真正面からゲットに斬りかかった。

振り降ろされたサーベルが、同じくビームサーベルを構えるゼフィランサスを…。

捉えず、ＢＳの手首とビームサーベルが宙を舞っていた。

ユーリ「…また邪魔者？」

冷たい怒りを露にするユーリ。

ゴトー「悪いな。　そいつを殺されると、顔向けできなくなる人間がいるんでな？」

イフリート。

崖から飛び降りざまに、ＢＳの手首をピンポイントで斬り捨てたのか？　目にも止まらない速さと、正確な動きだった。

エルフルア「生きていた？！　まさか、サテライトキャノンを避けていたと言うつもりか？　ふざけるなっ！！」

メリル「…パパ…　よかった…」

対称的な感情を爆発させる２人。

ゴトー「メリル。　もう大丈夫だ。　だから、少し下がっていろ」

メリル「…分かった。　パパ」

ゴトーは、メリルに優しい言葉をかけると、数歩前に踏み出し、応えるようにＢＸも前に出る。

エルフルア「せっかく、君を狙って射ってあげたんだけどなぁ？」

コックピットでエルフルアは、殺気としか呼べないオーラを放ち始める。

フォーリュン「…エルフルア…　殿…？」

あまりの凄みに、仲間のフォーリュンすらも、表情を強張らせる。

ゴトー「凶悪な気配がするな？　この雰囲気、まさかお前は世界を滅ぼそうとしているという奴に、関係があるのか？」

エルフルア「訳の分からない事を。

初めて君を見た時からそうだったけれど、今はさらに感じる。　私は君が、どうしようもなく嫌いだとっ！！」

一気に突っ込んだＢＸの動きは、さらに鋭さを増していた。　最初ゴトーに圧倒されたエルフルアとは、まるで次元が違う。

しかも、その攻撃はあらゆる意味で容赦がなかった。　具体的には、前にユーリのＢＳがいるのに、ライフルの射線を外そうとしていない。

ゴトー「味方ごととはな。　しかし、見えるっ！」

そして、その速撃を完璧に避けきってしまうイフリート。　その動きもまた、常識を超越しかかっていた。

どこまでがゴトーの実力で、どこからがイノセントの力なのかは分からないが、とにかく2人の動きは、桁が外れていた。

フォーリュン「…これはいったい…」

ユーリ「知らないわ。　でも、近くにいると、巻き添えを食うんじゃない？」

軽く身をかわし、呆れたように背を向けるＢＳ。

ゲット「待て、ユーリっ！　話はまだ終わってない！」
その背中に手を伸ばすゲット。

ユーリ「私の話は終わったんだけど？　それよりも、逃げなくていいのかしら？」

ゲット「逃げる？　うわっ！」
ゲットの前から、ＢＸが突っ込んで来た。

ゲットはサーベルを構えたが、ゼフィランサスは、まるでそこらに転がっている邪魔な石ころのように、無造作に払い除けられただけ。
にも関わらず、そのあまりの速さに、ゲットは反撃はおろか、反応することすらできず、半回転して地面に突っ伏してしまう。

ユーリ「いい気味ね。　場違いな三文役者は、お呼びじゃないって」
馬鹿にしたように笑われるゲット。　だがゼフィランサスは、地に伏したまま動かない。

ユーリ「気でも失った？　情けない奴」

【7】

誰かの声が、すごく遠くでした気がする。

けれど、辺りは真っ暗で何も見えない。　前後左右どころか、上下の感覚も無くしそうな闇で…。　光の差さない宇宙空間が、ちょうどこんな感じだ。

そして、辺りは酷く寒くて、動いてでもいないと凍えてしまいそうなのに、身体をどうやって動かせばいいのかも分からない。

ゲット「…どこだ…　ここは…？」

応える者はない。

ゲット「何で俺はこんな所に…？　たしか俺はユーリと…」

そこまでゲットが呟いた時、不意に何かが光った気がした。

ゲット「誰かいるのか？　いるなら何か…？」

…温かい飲み物。

…温かく包んでくれる服。

さすがに、辺りを暖かくする暖房器具なんかはないだろうな…。

などと、ゲットが思いながら光った方に目をやると…？

【8】

ユーリ「サフランで感じた感覚は、気のせいだったようね。　せっかくだから、止めぐらい刺しておこうかしら？」

ユーリのＢＳは、ゼフィランサスの頭に脚をかけた。

普段なら、ビームサーベルを抜いてバッサリやれば済むところだが、

さっきイフリートに右手を斬られてしまったため、それができない。
だから、まずはＭＳの重要データなどが搭載されていることの多い、頭部から順にスクラップにするつもりなのか？

スティヴ「ゲット！　にゃろっ！！」

ミア「ゲット君っ！！」

フォーリュン「そうはさせないっ！」

助けようとしたガンダムＭＫ－２とロングダガーが、ＢＳＲ（ブラックシェンロン）に阻まれる。　ミアは攻撃をかわしたが、スティヴはドラゴンハングに捕まってしまい、機体がミシミシと悲鳴を上げ始める。

ユーリ「あら？　もしかして惜しい所だったのかしら？　でも残念
…　…うっ！！」

けれど、止めを刺すはずのＢＳの脚は、ピクリとも動いておらず…。

【9】

ゴトー「うぉぉぉ～っっ！！」

エルフレア「はぁぁ～～！！」

絶倫の気合いが交錯し、ビームが飛び、サーベルが舞う。　それは時に地上で、時に空中でと、目まぐるしく位置を変えた。

そして動きは目にも止まらぬスピードなのに、存在感だけは2人共、目を閉じていても感じるほど強烈だった。

さらに、機体が勢いを増す。

そんな速さなのに、ゴトーは自在にイフリートを操り、ＢＸの脇へ脇へと回り込むように動く。　正面からぶつかり合えば、ビームサーベルとヒートサーベルの差で、サーベルごと斬られてしまうのを考えた上での戦術なのか？

一方のエルフレアは、自身の搦め手に巧みに入り込もうとするイフリートより速く動き、スピードどパワーで圧倒しようとする。

ＢＸとイフリートの性能ででは、イノセントの教化にも関わらず、ＢＸがイフリートの上を行っていた。

それでも、互角に近い感じで戦えているのは、ゴトー自身が言った

ように、パイロットとしての腕前が、エルフレアよりゴトーに分があるからだろうか？

？？？「…ククク…。　ソウダ、ヤレ…。　いのせんとナド、コノ世に必要デハナイ…」

何か声が聞こえた気もしたが、２人に構っているヒマはなかったようだ。

ＢＸが、ゴトーのサーベルを盾で受け、代わりにサーベルで腰のスカート部分を斬る。　それを狙った訳ではなく、股下から一刀の元に切り上げようとしたのだろうが、イフリートの動きが的確で、致命の一撃にさせなかったのだ。

エルフレア「まだだっ！　絶対に殺してやるっ！！」

叫びながら、エルフレアは戦っていた。　気合は見せるものの、特別大した言葉をしていないゴトーとは、こんな時でまで好対象だった。

???「…人間を恨メ、憎メ…。　ソレデコソ世界は…。

…ン？　新シイ客か？　私ノ力に惹カレ、哀レナ羊が迷イ込ンダカ？　モウ1つはアノ娘ダナ？」

また声がした気がしたが、やはりゴトーとエルフレアに、声に耳を傾ける隙はなかった…。

【10】

…辺りが急に暗くなる。

その光景に、ユーリは覚えがあった。

ユーリ「…ちっ、またか…。　いい加減にしてほしいわっ！」

吐き捨てるように喋るユーリ。

？？？「…何故、ソウ邪険にスル？　貴様がぱいろっとＭＳを嫌ッテイル事は、知ッテイル。　人間を嫌ウ。　ソレは正シイ…。

地球に害を為スノハ、人類ソノモノ…。

サア、私の尖兵トナリ、地球を救ウノダ…」

ユーリ「うるさいっ！　私は誰の指図も受けないっ！！」

ユーリは背筋の寒くなる感じを必死に堪え、その誘いを蹴った。

？？？「…ソウカ…。　ナラバオ前には、モウ少シ考エル時間をヤロウ。　代ワリに、コノ坊主に働イテ貰ウ事ニスル…」

ユーリ「…っ？！　ゲットっ？！」

姿は見えなかった。

なのに何故か、ユーリはその名前を叫んでいた。

？？？「知リ合イカ？　ナラバ教エテオイテヤロウ。　コイツにも高イ素質がアル。　今ハ無垢ナ子供デモ、子供の本質は残酷ダ…。　素直ナ真ッ直グナ目デ、躊躇イモ無ク人を殺セル…」

おぞましいまでの感覚。　逆らいたいのに、全身に力を入れていないと、気持ちが萎えてしまいそうになる。

？？？「気は変ワラヌカ？　知リ合イ共々、私の理想ノタメニ…」

【11】

？？？「だめっ！　そんな世界、理想でも何でもないっ！！」

辺りが急に明るく照らされた気がした。

？？？「…チッ…。　邪魔ガ入ッタカ。　ダガ覚エテイルガイイ。私は往生際ガ悪イノダ…。　ククク…」

言葉は突然途絶え、不思議と悪寒は消えていた。

ゲット「…フレーネ…　か？」

フレーネ「うん。　ゲットは私を守るって言ってくれたから…。
私だってゲットを守ってあげる」

ユーリ「…何だ、今のは…？　デビルと…　誰だ？」

辺りを見回したが、何も起きてはいなかった。

ＢＳは、ゼフィランサスの頭に脚をかけたままであり、ゴトーはエルフレアと、ミアとスティヴはフォーリュンと、変わらずに激闘を交えていたし…。

ユーリ「気が変わったわ、ゲット。　あんたの命、もうしばらく預けておいてあげる」

脚を離し、ゼフィランサスに背を向けたＢＳ。　その様子に、フォーリュンとミア、スティヴのコンビが戦いを止める。

フォーリュン「少しだけ動きが鈍ったようだったが…。　無事なのか？」

仲間を純粋に案じたらしいフォーリュン。　彼女はどうやら、あの光景を見なかったらしい。

ユーリ「ちょっとやられ過ぎたかもね？　私は退かせてもらうわ」

スティヴ「余裕かましやがって…」

苛立たしげにスティヴは身構えたが、攻撃はして来なかった。

自身もサテライトキャノンを紙一重で避けた身でもあり、損傷は軽くない。　相討ち覚悟の決戦は、見た目は格好良くても、生き残ってこその傭兵にとっては、してはならない事の１つだった。

ミアも同じなのか、隙は作らないものの、ゼフィランサスに機体を寄せ、戦うというより、ゲットを守る構えだった。

フォーリュン「しかし退くと言っても、エルフレア殿がまだ戦っている」

ユーリ「幸か不幸か、時間切れよ。　いくらエージェント仕様のブラックシリーズでも、あんな無茶やらかせば、機体が保たないわ」

その言葉を裏付けるかのように、未だぶつかり合いを続けるＢＸとイフリートは、互いに白煙を吐き始めていた。

傷は性能に劣るイフリートに多いものの、あまりの機動にＭＳがついていけず、ＢＸもまた、脚のスラスターで火花が散っている。

フォーリュン「確かに不味いな。　敵地では、ろくに修理もできない」

フォーリュンの心配そうな声。

ユーリ「あんた？　その機体は、火炎放射ができたわよね？　あいつら、まとめて燃やしちゃってくれない？」

悪い冗談を言っているようにも聞こえたが、ユーリの目は笑っていなかった。

フォーリュン「乱暴だな？」

ユーリ「私に考えがあるの」

そこまで言ってから、ユーリはようやく表情を崩した。　しかし、にこやかと言うにはほど遠く、むしろ不敵な微笑みだったが。

フォーリュン「そうだな…。　いらぬ犠牲は、ザキラ様も望まれまい。　エージェントと傭兵風情が、相討ちになっている場合でもない」

悩んだ表情を、決意を固めたそれに変えたフォーリュン。

ミア＆スティヴ「……。」

ミアとスティヴが動かないのを確めてから、彼女は動いた。　ＢＸとイフリートのぶつかり合うであろう地点を予測し、その横合いから間合いを一気に詰める。

そして次の瞬間、ぶつかり合う2機が、まとめて火炎に包み込まれた。　本来ならＭＳは、少しくらい炎に触れただけでは、致命的な損傷を受けたりはしないのだが…。

エルフレア「…くっ！！」

ゴトー「ちぃっ…」

どうやら、限界ギリギリまで熱くなっていたのが不味かったらしい。ＢＸは脚のスラスターが火を吹き、各部の潤滑系オイルが燃え始めてしまう。

イフリートも、背中のランドセルがスパークし始め、さらに頭部のバルカンポッドが高熱のせいで誘爆し、弾けた。

ユーリ「馬鹿と何かは使いよう、かしら？」

ＢＳは膝を着き、動きを止めてしまったＢＸに機体を寄せると、盾から白い煙を噴き出させた。　核発射時に使うはずの液体窒素を、ＢＸの冷却に流用したらしい。

おかげでスラスターと駆動系は壊滅したものの、装甲温度だけは下がり、誘爆の危険は回避された。

ミア「隊長っ！」

メリル「パパっ！」

こちらも何とかイフリートを冷やそうとするが、予備の冷却剤だけでは足りず、イフリートは立っているだけで精一杯。

メインの推力を失ったばかりか、頭部も見た目より大きな損傷を受けてしまったらしい。

ユーリ「じゃあね？　続きはまた今度。　私のいない所で、勝手にやってくれるかしら？」

鼻で笑ったようなユーリ。　彼女は、完全に動けなくなったＢＸの脇に、ＢＳの肩を入れる。

エルフレア「離せっ！　私はまだっ！」

フォーリュン「エルフレア殿。　気持ちは分かるが、今は退く時…」

ユーリ「行くわよ！」

叫ぶエルフレアを、完全に無視していた。

フォーリュンは、表情こそすまなさそうだったが、同じくＢＸを離そうとはしない。

そして、傭兵たちが複雑な顔つきで見送る中、２人のエージェントは、ＢＸをその場から運び去った…。

第９２章　裏切りと忠誠（前書き）

（まだ始まらない？）

エイス「あたしたちの解説で１回使っちゃったけど、ホントは恋バナするはずだった、冒頭文だよ～」

シクス「いろんな意味で目立ち過ぎのトゥーエちゃんに代わって、大人の事情で抜擢されたシクスです。　よろしくお願いします」

シクス「…で、さっそくなんだけどエイスちゃん。　この小説に、恋なんか書いてあったかな？」

エイス「それ本気で言ってる？　本当に分かってないなら、シクスが鈍感すぎなんだよ～。　そんなんじゃ、将来苦労するよ？」

シクス「…将来って、戦闘人形のラピスラズリに、将来なんてあるのかなぁ？　とにかく、クローンでも恋はできるって設定だから、小説的には問題ないらしいんだけれど…」

エイス「そそ。　ラピスラズリは、恋の喜び、ときめきは感じるのに、失恋しても悲しみは感じないんだ～。　なんて便利な身体！」

シクス「…それはそれで、つまらないような…。
ってエイスちゃん、また話題が逸れてるよ？　他人の恋を語るコーナーなんでしょ？」

エイス「あ、そうだった。　で、この小説だと、まだハッピーになっちゃったカップルはいませ～ん」

シクス「いないの？」

エイス「だって、物語序盤からラブラブだと、終盤あたりに倦怠期が来そうじゃない？」

シクス「…ガンダム小説で倦怠期って、生々しすぎるから…」

エイス「とにかく、そんなまだ本心を語ってないキャラに…」

シクス「キャラに？」

エイス「この『ウソ発見機』を使って、恋する相手を暴いちゃお～」

シクス「お～！

…って、ウソ発見機？　あの全部『いいえ』で答えて、嘘だと『ピー』って鳴るやつ？？？」

エイス「だよ。　これで、バシバシ物語の恋愛事情を暴くからね～」

シクス「だけど、また設定解説が長引いちゃったから、次の冒頭文から、なんだけど。　楽しみにしてた子はごめんね～」

（次こそ、恋バナが始まる…？）

第９２章　裏切りと忠誠

ジェイソンとの会談から、およそ一月が過ぎた。　正確には３８日のはずだけど。

マヒロ「はぁ～～～～」

盛大にため息をついてみた。

ブラック「ですから、賠償など無理だと申し上げたではありませんか。　と申しますか、事件の黒幕がザキラ本人なのですから、その償いなどするはずがありません」

マヒロ「…分かっております。　ですから少佐の意見具申は、みな聞いたではありませんか」

言葉が堅いのは、あたしがまだブラック少佐の事を、心の底から信用してはいないからだった。　ザキラの敵と明言する以上、本国のスパイではなさそうだけれど、肝心の主とやらの名前は、どうあっても教えてくれない。

ブラック「そうでしたな。　戦力の拡充は、この一月のうちに随分

と進みました。　これも殿下が、私の言葉に耳を傾けて頂いた故」

この一月でした事は、意外に多い。　軍事面だけでも、ＭＳの開発や、艦艇の建造に着手していた。　去年の今頃は、まだＭＳを造ったこともなかったのに、僅かな年月で随分と戦うコロニーになってしまった。

ヴァイス「お～い、姫さんいるか～？」

マヒロ「いるわよ？」

ヴァイス「そか。　なら、失礼させてもらうぞ」

入って来たのは、ヴァイス少尉だった。　ただ少尉とは身分だけで、部下もつけてはいない。　まあ、客将みたいなものかな？

ブラック「…随分と馴染んできたようですな？」

ヴァイス「馴染み過ぎて、気にいらないか？」

手元に置いてみて、初めて分かったのだけれど、このヴァイスという人間は、見た目によらず知能派だった。　もちろん、破天荒な天才の誰かさんと、策謀の塊のような少佐には及ぶべくもないのだけ

れど、打てば響くところがある。

ヴァイス「命令通り、海賊と反帝国の連中とは、話をつけておいたぜ？　手始めだから、前から顔を知ってる奴らだけなんだけどよ？」

皮肉にさらりと反撃しつつ、ヴァイスは肝心の要件を切り出した。

マヒロ「それで十分よ。　つい最近までは戦ってたんだし、急に味方しろって言ってもね…。　恩赦はしたけど、政治的に必要だからしただけで、あつらのしてきた事を認めるつもりはないし」

さらっと、厳しい事を言っちゃったかな？　でもシビアな所は、シビアにしておかないとね？

ヴァイス「別にそれでいいんじゃないか？　奴らにも事情はあるだろうが、そんなんは誰でも同じさ」

ところで、私が誰を恩赦したかと言えば、今までに捕えた海賊と、反帝国主義者達だった。

つまりはあたしの仇敵な訳だけど、そんな真似を始めた理由は、昨今の本国に対する保険と未来予測から。　解放する前に

『討伐は本国の命令だった』

事を強調して

『ミズサワ、霧雨両家に対して反抗せず、命令に従う気があるならば、以前の罪は不問に伏す』

とした。　つまり、そいつらを密かに抱き込もうと企んで、ヴァイス少尉に話をさせたのだ。

ブラック「賊徒を泳がせたくらいで、戦力になりますかな？」

マヒロ「食卓に蝿がたかれば、晩餐が台無しになる事もあるでしょう？」

またしても、かなり冷たい発言だったかも知れない。

けれど、長年海賊に苦しめられた立場からすれば、これくらい言ってもまだ言い足りないくらい。　ミズサワの養父母も爆弾テロで失っていたし、許されるなら、恩赦より死刑を執行したいのが本音。

ただし、そのミズサワの養母（はは）には

『貴族たるもの、清濁合わせ呑むくらいの度量が無くてどうしますか』

と言われて育った。

もし養母なら、自分を殺した相手も赦すかどうかを考えた末、きっと赦すに違いないと考えて恩赦を決めたのだ。

ヴァイス「…ま、宇宙の事情は俺も知ってるからな。俺は姫さんの艦隊を襲ったことはないが、ずいぶん物騒なことをしてた奴も多い。それでも、ってんだから、あんたはすげぇよ」

長年、帝国狩りのフェニックスナイツと呼ばれてきただけあって、説明しなくても事情は知ってくれているようだった。そもそも一月前までは、あたしとも敵同士だったんだしね…。

【2】

ミク「そ～いうブッ飛んだところが、お姉の魅力なんだな～」

…出た。

あたしがブッ飛んでるなら、飛ぶのを通り越して、遥か宇宙の彼方を浮かんでいそうな奴が…。

マヒロ「そりゃど～も。　あんたも正式に軍に入る気なら、少しは落ち着きでも身に付けたらどうかしら？」

帝国本国…　地球の北半球では、一番寒い季節になり、マーガレットの中学でも、３年生は受験のシーズンだった。　普通の中学生なら、進学先を軍附属の学校にするか、一般校にするか悩む時期なのに、こいつはこうしてふらふらしている訳で…。

ミク「落ち着き？　それって、新発売のキャラメルチョコミントよりおいしい？」

落ち着く気はゼロ、と…。

ただ、それが一番ミクらしいんだけれど。　ミクが、いきなりケイさんみたいな寡黙になっちゃったら、たぶんマーガレット中の医者を集めて、診察させると思う。

ミサト「やってるわね？　でも最近、ミクは腕を上げたからね…。
もう私じゃ、訓練つけてもらう立場よ。　少佐だって気を抜けないって」

ケイ「オールレンジを使われると、正直厳しいな」

ヴァイス「最初はぶったまげたがな～。　まさか、１５の嬢ちゃんと互角なんてよ」

ミク「撃墜女王に、あたしはなるっ！」

…何か、また変な影響を受けた気がする。

ミクって頭がいいから、ちょっと読んだ古文書なんかも、ほいほい暗記しちゃうのよね。　特に西暦にハマってるって噂だけど、本当なのかな？

マヒロ「残念だけど、戦争しなきゃいけない時代だからね…。　無理矢理徴兵するくらいなら、ミクを戦わせといた方が、別の意味で平和なのかも」

帝国本国では徴兵制が敷かれていたけど、マーガレットでは、養父母の時から志願兵制だった。　望まない人を戦わせたくないとの気持ちからだったそうだが、その方がいいと、ケイさんが言ったという話も聞く。

ＭＳが主戦力なご時世だから、闇雲に多数の兵を抱えるより、やる気のある人間を精鋭に育てた方がいいらしい。

そしてミクは、認めたくないけど、精鋭中の精鋭なのよね…。

ケイ「ただ人口の関係で、どうしても兵士の数は頭打ちになる。それに士気が高いとは言っても、実戦は対海賊戦だけだからな。実戦経験は足りていない」

帝国本国も反帝国のレジスタンスも、互いに戦いの日々を経て、戦い慣れした兵が多かった。

マヒロ「それは仕方ないわよ。　それに、代わりに打てる手があれば、打てる限り打つから。　そ…」

ミク「『そ』うしないと、あたしの存在価値がなくなっちゃうしぃ～」

あたしは、無言でミクの頭をひっぱたいていた…。

【3】

…さて。

そんなふざけた時間は、もうおしまい。　これからは仕事の時間よ。

ブラック「ところで、もう7回にもなりますな？　私が物資を提供するのは、殿下のためと申し上げたはずでございますが？」

ブラック少佐の声は厳しかった。　それはそうだろう。　あたしは、少佐がどこからか仕入れてくる軍需物資のほとんどを、霧雨大佐にタダで譲っていたのだ。

マヒロ「…いいのです。　どんなにマーガレットが強くなったとしても、所詮は一農業コロニーですから。　霧雨家と共にでなければ、本国と違った道を歩むなど、できようはずもありません」

ブラック「……。」

黙ってしまった。

けれど、不機嫌そうな顔はしても、物資の提供そのものを止めないのは、あたしの選択が間違ってはいないと、少佐も分かっているからだろう。

事実、物資を手に入れた霧雨大佐は狂喜し、高性能ＭＳの量産、艦艇の増強、さらには宇宙要塞『サーライト』の建設と、急ピッチで軍拡を進めていた。

マヒロ「言い訳にはならないかも知れませんが、新型ＭＳの設計図も貰いましたし。　この『デナン・ゾン』ならば、本国が量産している、ギラ・ドーガに勝るとも劣らず、かつ小型ですから、資源も少なくて済みます」

デナン・ゾンは、もともとレンカで開発が頓挫していたＭＳだった。
　それを物資と引き換えにする形で、設計図を譲ってもらった。

かなり高度な機体だから、量産できるのは当分先になるだろうけれど、実は今、その開発計画をミクが推進していた。　普段はあんなだが、頼りにする時にはちゃんと頼りにしている。　それが、あたしたち姉妹が昔からしてきた事なのよね。

ブラック「…ただし、１つだけ申し上げておきます。　私は、あの霧雨という男を信じておりません。　それだけは覚えておいて頂けると助かります」

キッパリ言い切ると、ブラック少佐は、スタスタとその場を歩み去っていってしまった。

十人十色とはよく言ったもので、あたしの周りはみんな、考え方の違う人間ばかりだった。　だけど、それをあたしが纏めなければ、マーガレットの将来…

ひいては、宇宙の繁栄はないのよね…。

【4】

???「どうだ？　私の『姉君』は？」

ブラック「何と申しましょうか…。　面白い方ではございますな」

???「そうか。　しかし、お前が他人を誉めるとは珍しいな？」

ブラック「誉めたつもりはございませんが？」

???「いや、皮肉屋のお前が面白いと言うのは、　十分な誉め言葉だ。

だいたい、私の目論みを2つとも果たしてのけたではないか。　運も味方したとは言え、生粋の帝国貴族と反帝国の強者を、共に自陣営に引きずり込んだ。　常識で考えたなら、どちらか一方としか組

めぬ」

ブラック「…左様ではございますが…。　あの霧雨なる男も、帝国狩りの下郎も、私は好きになれません」

???「覚えておこう。　しかし、お前の色眼鏡に叶う人材など、そうそうはおらぬ」

ブラック「『色眼鏡』とは、陛下も変わらず手厳しい…」

???「半分は戯れだ、気にするな。　それよりも…」

ブラック「ザキラが何かいたしましたか？　インドラ攻めは、こちらでも聞き及んでおります」

???「…今1つ分からぬのだ。　エージェントが各地で暴れ回っている。　これまでは、身辺を息のかかった者で固めている、ぐらいに思っていたのだがな…」

ブラック「非道な暗殺や謀略が、得意なのでございましょう？」

???「どうも、それだけではない気がする。　それに、暗殺や謀略を非道と思えるほど、甘い道は歩んで来なかった」

ブラック「…では…？」

???「グアテマラに探らせたら、『ディアボロ』という語句が出てきた。　奴らのＭＳに使うシステムらしい」

ブラック「古今よりＭＳの戦闘プログラムは、機体性能に匹敵する重要事項ですからな。　たしか統一戦争の折、共和国のＲＸ－７８は、教育型コンピューターを、帝国に１０年は先駆けて搭載していたとか？」

???「その程度の事では、済まぬ気がするのだ。　まあ、当面はグアテマラに任せるしかないのだが…」

【５】

ヴァイス「…レアルタ…。　まさか、お前が先に逝っちまうなんてな…」

呟くヴァイスがテーブルに立てたのは、レアルタが生きている時に撮った、数少ない写真だった。　その前にグラスを置き、ブランデーを注ぐ。

ヴァイス「俺が人助けなんて、どだい無理だったってことか…。生かしたはずが、たった3年で止めを刺しちまったんだもんな…」

山賊だったレアルタを生かすだけなら、方法はいくらでもあった。　フェニックスナイツとして連れ歩かず、堅気に戻していれば、今でも普通に街で暮らしていただろう。

ヴァイス「…お前はこれで、幸せだったのか…？」

その言葉に、答える者など…。

？？？「幸せかは知らないケド、満足はしてたと思うよ？」

…いた。

聞き覚えのある声だか、いつもの浮いた感じは綺麗に消えている。

ヴァイス「…嬢ちゃんか。　そんな事を俺に言えるのは、嬢ちゃんしかいねぇもんな？」

レアルタがWに殺された日、Wと直接刃を交えたヴァイスと霧雨を除けば、その場に駆けつけた唯一の生き残りが、ミクだったからだ。

ただでさえ混乱していた中だから、レアルタの事など覚えていない者ばかりだったし、だいたい近くにいた者はほとんど、戦いに巻き込まれて死んでいた。

ヴァイス「根拠は、ニュータイプの勘か？」

ミク「違うよ。　ずいぶん時間がかかっちゃったけど、『あの腕』が何だったかわかったんだ」

ミクが言い、ヴァイスがミクを見る。

ミクが言った『あの腕』とは、現場に残っていた、たった1つの、レアルタの遺品とも言うべき存在。　レアルタのリックディアスは、全身を高出力のビームで焼かれ、ほぼ完全に消失していたのだが、唯一腕だけが宙を漂っていた。

そしてそれは、他のＭＳとがっしり手を繋いでいたのだ。

ミク「機種がゲルググなのは、言うまでもないと思うんだけど…」

ミク「霧ちゃんのバーミンガムに突っ込んだゲルググと、特徴が一致したよ。　乗り手は、イリアっていう女海賊だね」

ミクの言葉に、ヴァイスは黙って耳を傾ける。

ミク「そのイリちゃんだけど、どうもレアちゃんとイイ仲だったみたいだね？」

ヴァイス「おいおい。　いくら何でも、腕を調べてそんな事は分からないだろ…」

いきなりそんな話をされ、ヴァイスはつい苦笑いをしてしまう。

ミク「ちっちっちっ。　まだまだ甘いな、ヴァイス君！」

ヴァイス「……。」

また何かの真似をしたようだが、ヴァイスには分からなかったらしい。　意味を測りかね、困惑の表情になる。

ミク「そのイリちゃんと組んでた海賊の1人が生き残ってたから、話を聞いて来たんだよ。　それと艦隊の傍受記録。　決め手は、ニュータイプじゃなくって、女の勘♪」

ミクは自分の調べに自信があるようだった。　腰に手を当てて、何だか得意そうにしている。

ヴァイス「よく組んでた海賊が見つかったな？　誰がいたかぐらいは知ってたが、あの戦いで全部、バラバラになっちまったし…。それに、何でそこまで熱心に調べたんだよ？」

そう言ってからヴァイスは、ある人物を思い浮かべてしまい、ハッとした。

ミク「『親友の死に様ぐらい、知っときたいものでしょ？』　って言ってたけど、万に１つ生きてるかも、って希望を捨てきれなかったんだと思うよ？　他人に肩入れし出すと、際限なくなるから、お姉は」

戦闘中の行方不明など、誰もが戦死としか考えない。　ましてや宇宙空間では、仮に脱出していたとしても、救助されなければ確実に死ぬ。

つまり確率で考えれば、そんな消息調査などやるだけ無駄なのだ。
それでもマヒロは、一月もの間、ミクに調査をさせたというのか？

ヴァイス「…にゃろう…。

盛大に葬式やってくれたかと思ったら、裏じゃそんな探偵をやらせてたなんてな…。　調べた嬢ちゃんが嬢ちゃんなら、調べさせた姫さんも姫さんだぜ…」

ヴァイスはもう、呆れたように笑っていた。　ただ、目が不思議と赤い。

ミク「それがお姉だから。　人の心を揺さぶる事をしておいて、自分じゃ何もしてないつもりなんだよ」

ヴァイス「言えてるかもな?

…しゃあねぇ…。　一生忠誠誓ってやるって、伝えといてくれ」

ミク「あいさ〜」

ミクは、ヴァイスの呟きに可愛い敬礼で応えた…。

第９３章　自称皇帝（前書き）

（やっと恋バナ）

シクス「前振り長くてごめんなさ～い」

エイス「今回は、恋バナするよ～」

シクス「で、エイスちゃん。　誰の恋愛事情を暴くの？」

エイス「え～と、まずは…」

マヒロ「あたしの出番よね」

エイス「誰・に・し・よ・うかな…っと…」

マヒロ「コラコラ！　編集者を無視すんな！」

エイス「え～。　だってオバサンの恋愛なんか、誰も知りたくないって」

マヒロ「またおばさん言った！　あたしは２２歳のギャルキャラなのっ！」

シクス「２２歳って、ギャルなのかな？」

エイス「かなり微妙だけど、本題始めないと読者の方に悪いから」

シクス「じゃ、嘘発見機つけますね？　で、全部の質問に『いいえ』って答えて下さい」

エイス「第１問。　オバサンに好きな人はいる…」

マヒロ「はいっっ！！」

シクス「…ち、ちょっと、質問にはいいえって答えてって…」

マヒロ「やだ！　好きなものは好きなんだもん。　だいたい暴くんだから、自白したって問題ないわよね？」

シクス「…すごい理屈…」

エイス「…ノンの理屈が可愛く見える所が凄いかも。でも、そっちがその気なら、こっちも負けないよ？　ラピスラズリなめんな、コラ！」

シクス「え、エイスちゃん、キャラ変わってる…」

エイス「オバサンは片想いで、しかも脈はまったくない！」

マヒロ「…い、いいえ！」

『ピーーーっ！！』

シクス「…針が振り切れたけど…」

エイス「読み通りっ♪　じゃ、次…。

オバサンの恋してる相手は、寡黙で侍従で7年も一緒にいるけど、キスもHもしたことはないっ！！」

ケイ「……。」

マヒロ「…いいえ…」

『ピーーーー…　ドカーーン！！」

シクス「…爆発しちゃった…」

エイス「勝った！」

マヒロ「待てコラ！　コーナーの趣旨が違うわよ！　甘く切ない話で、読者を惹き付ける予定じゃ…」

エイス「あたしは、売られたケンカは買う主義なのっ！！」

（これでも続くの…？）

第９３章　自称皇帝

大気圏を離脱し、地球を後にした数隻のシャトル。　いかにも民間機といった出で立ちだ。

この船団は、中国と月を結ぶ定期便で、帝国領同士を結ぶありふれた民間路線の１つだった。　ただし、近頃の治安悪化を考慮してか、宇宙ではムサイが１隻護衛につくようではあるが。

ところで、普段ならば宇宙空間に出るとすぐ、増速がかけられる。　先を急ぐせいもあるし、シャトルの安全のためでもある。　いくらＭＳといえど、巡航速度に達した艦は、極めて襲いにくいのだ。

だが、その日は様相が違っていて、いつまで経ってもシャトルは加速することはなく、ノロノロと進み続けるだけだった。

船長「ご乗船の皆様にご案内いたします。　当船団に、反帝国主義者が潜伏中との情報が入りました。　そのため、帝国軍霧雨艦隊による緊急臨検を行います。　よろしくご協力下さい」

案内放送に、周囲がざわめき出す。　ただ、驚いているというのではなく、『またか』　『鬱陶しい』　などといった声が大半だった。

反帝国勢力が世界各地で跳梁するようになってから、こうしたあぶり出しは、珍しい事ではなかったのだ。　乗客にとっては、自分の

乗る船が遅れるので、迷惑だと感じているだけなのだろう。

船長「左舷より接近するマゼランとサラミスが、その霧雨家の艦隊であります。　臨検のため、当船団は一旦この場に停船いたします。

…あ～　あと1つ。　反帝国主義者諸君。

本当にいるなら、余計な事を考えずに出て来い。　君らが何をしてきたかに私は興味がないが、船団の到着時刻には大きな関心を抱いている」

船長のジョークに、笑い声がちらほらと聞こえて、場の空気が一気に和んだ。　悪くなった船内の雰囲気を気にして、わざと言ったのだろうか？　だとすれば、随分と熟練した船長だ…。

【2】

マリアベル「臨検を始めます。　着席したまま、シートベルトは外さないように。

…かかれ！」

霧雨兵「はっ！」

しかし結論から言うと、臨検自体はスムーズに進み過ぎた。それもそのはず、探していた反帝国主義者とやらが、乗船していなかったのだから。

霧雨兵Ａ「ちっ…。　本国の情報なんか当てにならんな…。　またガセか！」

どうやら、霧雨側もやりたくてやっているのではないようだ。だいたい『また』というからには、今回だけではなく、今までも誤った情報に振り回されていたのかも知れない。

霧雨兵Ｂ「あと少しだ、ぼやくなよ…。

…ん？　お前、どこかで見た顔だな？」

同僚を宥めつつ、忠実に職務を遂行する兵士の１人が、ふとその足を止めた。

ブレンド「どうかしたか？　見た顔と言ったが、私はお前と知り合った覚えはないのだが？」

声をかけられたのは、あのSガンダムの主、ブレンド・エスプレッソその人だった。

霧雨兵B「もちろんそういう意味ではない。　手配書に載っていたという意味だ！」

周囲が騒然となり、すぐさま何人もの霧雨兵がブレンドを取り囲む。
だが、肝心のブレンドには、慌てた様子が微塵もなかった。

ブレンド「…そうなのか？　しかし、私はこう見えて、れっきとした帝国軍関係者なのだがな？　一応、子爵の爵位を持ってもいる」

モカ「大尉とその部下風情が、無礼であろう！　職務遂行、大いに結構。　だが、顔が似ているというだけでこの扱い、貴族相手に礼を失しておると思わんかっ！」

隣の席に座っていたモカが、霧雨兵を怒鳴りつける。　その兵は露骨に不快な表情をしたため、さらなる揉め事になりかけてしまう。

マリアベル「部下が礼を失したようで、申し訳ありません。　しかし、臨検は本国の命令にて、例外は認められません。　何卒ご理解を」

そんな状況を危惧したのか、マリアベルが間に入る。　しかし彼女は、兵の態度を詫びはしたが、追及の手を緩める気はないようだった。

ブレンド「話を戻そう。　本国の命ならば、私としても協力しない訳にもいかないしな。

だが、私に似ていると言うのは、どんな美男子なのかな？」

冗談すら交えながら、ブレンドは話していた。　この緊迫した空気の中、人間、ここまで落ち着いていられるものなのだろうか？

霧雨兵Ｂ「これだ！　先代皇帝陛下の第４皇子、レオンハルト！　皇族でありながら、兄皇子を暗殺し、国を乗っ取ろうとした、稀代の反逆者だっ！！」

しかし、霧雨兵が突きつけた手配書の顔は、随分と幼く見えた。

ブレンド「またまた私も若く見られたものだな？　これによると、手配者は１５歳とある。　いくら何でも歳が離れすぎであろう。私は２１だ」

ブレンドは笑って言う。

マリアベル「いいえ。　手配がなされたのは、６年前です。　つまり、今現在のレオンハルトは、２１歳になっているはずです」

ブレンド「なるほど一致するな」

さらなる余裕。　まあ、２１歳というだけなら、偶然の一致はあり得ない事でもない。

マリアベル「それだけではありません。　ＣＧで予想構成したものですが、２１歳のレオンハルトは、このような顔だと思われます」

示された予想データは、雰囲気がブレンドに似てはいた。　ただ、データの目が二重なのに対して、ブレンドは一重だったし、他にも傷や顎の角張り具合、髪の色など、細かい違いはかなり多かった。

ブレンド「反逆者を検挙したいのは分かるが、この程度で似ていると言われてもな…。　とは言えその様子では、大人しく私を解放する気はないようだし、どうしたものかな？」

苦笑いを浮かべるブレンド。　確かにこのままでは、船団の到着時刻は遅れる一方だろう。

ブレンド「…そうだ。　私が船を降りよう」

はたと手を打つブレンド。

霧雨兵Ｂ「は？　貴様、この宇宙で船を降りるとは、気でも狂ったか？」

怪訝を通り越して、馬鹿にした表情を浮かべる霧雨兵。　その態度に、モカは再び怒鳴り声をあげかけたが、ブレンドがそれを制した。

ブレンド「先にも言ったが、私はこれでも子爵だからな。　専用ＭＳを持っていて、丁度シャトルに積んでいる。　つまり、後で船団を追いかける足はあるわけだ。　ついて来い」

ブレンドは、許しも得ていないのにシートベルトを外すと、慣れた動作で天井を蹴り、船倉へと降りて行った…。

【3】

霧雨兵B「これが貴様のMSか？　だが、MSには触るなよ！」

ブレンド「当然だ。　Sガンダムは、Zタイプの中でも最高峰に位置するMS。　まともに起動させては、この程度の艦隊など、数分で潰してしまうからな？」

ブレンドの言葉には、皮肉が混じり始める。　マリアベルは態度を変えていないが、近くにいる霧雨兵は、みな嫌悪感を露にしていた。

船長「本当にいいのか？　後で追いつくと言ってもだな…」

ブレンド「私は構わない。　これ以上、他の乗客に迷惑はかけらまい」

船長はすまなさそうにしてはいたが、MSを降ろす作業には手慣れていた。

マリアベル「とりあえず、ＭＳは我が軍の兵が…」

モカ「それはできぬ。　このＳガンダムは、それ自体、１機しか存在せぬ機密の塊。　月の伯爵の許可なくして、余人に触らせることは叶わぬ」

ブレンド「…という事だ。　予備役少佐対大尉でなく、伯爵家対侯爵家の話にしたいなら、月に連絡を取ってもらっても、私は構わないがな？」

霧雨兵Ｃ「貴様っ！　取り調べを受ける身分で偉そうにっ！」

霧雨の兵が１人、ブレンドの胸ぐらを掴んだ…

…かと思ったら、逆に関節をきめられていた。　そうしておいてから、おどけたように両手を上げるブレンド。

ブレンド「言ったはずだ。　私は軍人だと。　今は予備役でも、戦いの勘は鈍らせてはいない」

それで周囲のムードはさらに険悪になったが、マリアベルは、ブレンドの要求を呑むことにしたらしい。　やはり、貴族家同士の話にすると、事が大きくなり過ぎるからか？

とにかく、Ｓガンダムは2機のゲイツに腕を取られて運ばれるが、結局コックピットに誰も乗る事はなかった。　他には、長距離偵察型のジンが、モカのメタスを運んでいる。

マリアベル「ここからは、私だけで取り調べを行います。　あなた達は本隊に合流しなさい」

マリアベルは、ブレンド一行がたった5人しかいないのを見てか、臨検に当たった艦隊を帰すようだ。

船団も臨検艦隊も去った後、そこに残ったのは、1隻のマゼランと霧雨のＭＳが４機に、Ｓガンダムとメタス…。

【4】

マリアベル「さて、何から聞かせてもらいましょうか？」

尋問にあたるマリアベルは、相変わらず厳しい口調だった。

ブレンドは椅子こそ与えられたものの、ブリッジに近い一室に閉じ込められてしまう。　また、モカと3人の部下には、隣の部屋で監視の兵がついていた。

ただし、ブレンドの身分に配慮したのだろう。　5人全員手錠はされなかったし、部屋に外から鍵をかけたりもしていないかったが。

ブレンド「話せる事は何でも話すぞ？　その内容を信じるかどうかは、そちらの勝手だがな？」

やはり言葉は皮肉っぽかったが、それはもしかして、ブレンドなりに何かを主張しているのだろうか？　ただ嫌味を言っていると言うには、ブレンドは怒った様子もないし、不快そうな感情を露にしてもいない。

マリアベル「…ならば遠慮なく…」

マリアベルが聞いてきたのは、最初は姓名、出身、経歴などありきたりな事だったが、次第に突っ込んだ内容になっていく。

マリアベル「この戦乱の世に、専用ＭＳまで下賜されながら、仕官

もせぬとはどういう考えか？」

ブレンド「予備役少佐だから、仕官していないのは事実だが…。働いていないという意味ならば、少し違う。　中国からの船団に乗っていたから分かると思うが、私は中国にいた。そこでＭＳファイトを通じて人脈を築き、伯爵のために情報を集めていたのだ」

マリアベル「密偵だと言いたいのか？」

マリアベルが眉を潜める。　それはそうだろう。　普通、自分から名乗る密偵などいない。

ブレンド「聞いたのはそちらではないか？　密偵である事は確かに秘密だが、反逆者と間違われて釈明もせず、結果、味方に処刑されては堪らんからな？」

ブレンドはマリアベル…　霧雨家を味方と言った。　それは同じ帝国貴族同士という意味では、その通りだと言える。

だが帝国では、貴族家同士が密偵を送り合ったりするのが日常だった。　えげつない事ではあるが、他家の弱味を握れたならば、政治闘争で有利になる…。

マリアベル「残念だが、密偵などと名乗られても、信用はできないな」

ブレンド「そうか。　ならばどうする？　私を拘束するか？」

マリアベル「臨検は本国の命令で、手配したのも本国だ。　本国に送還するから、釈明ならばそこでしろ」

ブレンド「…それでは手間がかかるな。　やむを得まいか…」

何故かそんな事を口にしたブレンドは、何気ない仕草で、机の上に置いていたサングラスをかける。

そうしておいてから、はめていた腕時計から、紐のような物を引き抜いた。

マリアベル「……？」

そんなブレンドを、マリアベルが怪訝そうに覗き込んだ…

…その時！！

腕時計は、物凄く眩い光と、キーンという特有な音を発する。

霧雨兵「…くっ…　フラッシュグレネード…」

ブレンド「ご名答」

当のブレンドは、腕時計から顔を背け、右耳を左手で塞いでいた。

そして、正解を言い当てた霧雨兵には、正解の景品ではなく、ブレンドの鳩尾（みぞおち）への一撃が贈られる。　さらに他の3人の兵もまた、強烈な一撃を食らい倒されてしまった。

マリアベル「…貴様っ！」

マリアベルは眩んだ目に構わず、懐から銃を取り出したが、手首をブレンドの手刀に打たれ、銃を落としてしまう。

霧雨兵Ｄ「…何事ですかっ…　ぐはっ！」

霧雨兵Ｅ「うわっ！」

霧雨兵Ｆ「ぎゃっ！！」

同時に、部屋の外にいた霧雨兵が駆け込んで来たが、彼らはブレンドの銃撃に倒れてしまった。　ブレンドが、マリアベルの落とした銃を奪ったのだ。

そして、隣の部屋でも同じ事態が起きていた。　霧雨兵は全員、ブレンドの部下に不意を突かれ、２分かからず沈黙。

そればかりか、ブレンドたちは余勢を駆って、事態を把握しきれないブリッジに乗り込み、占領してしまったのだ。

マリアベル「…貴様ら、やはり反逆者だったのか…」

憎々しげに見上げるマリアベルは、手を後で縛られ、こめかみに銃

を突きつけられていた。　指揮官自らが人質にされてしまっては、倒されなかった霧雨兵達も手が出せない。

ブレンド「さあ、どうだろうな？」

そう言うブレンドは、まだ余裕の表情をしていたが…。

【5】

霧雨下士官「そうはいくかっ！」

艦内の異常に気がついた2機のゲイツが、Sガンダムから手を放し、代わりに艦のブリッジに銃口を向けていた。

霧雨下士官「そう易々と、思い通りになると思うなっ！！」

モカ「愚か者がっ！　ここで手荒な真似をすれば、今ブリッジにいる人間は、味方までも確実に命を落とし、艦は沈む。　それでも射つと言うかっ！」

けれど、モカの言葉が真実だった。　その代償は余りに大きい。

霧雨下士官「…し、しかし、我々は命を惜しんではいない！　それは、マリアベル大尉とて同じはず…」

…緊迫した空気が漂う。

だが、その空気を打破したのは、またしてもブレンドだった。

ブレンド「とりあえず、ハイジャックに遭った時は、犯人の要求を聞いてはどうだ？　要求が些細なものならば、叶えてやってやり過ごすのも手ではないのか？」

ブレンドはついに、自分をハイジャック犯と称し始める。

霧雨下士官「要求だと？　ふざける…」

マリアベル「聞かせてもらおうか」

兵は叫びかけたが、それを遮ったのは、指揮官のマリアベルだった。

ブレンド「いい判断だ。　要求を聞いてから蹴っても、別に遅くはない。　要求を叶える振りをして、援軍を待つという手にも繋がるしな？」

マリアベル「……。」

満足気に言うブレンド。　その全てを見透かしたような言葉に、マリアベルは不愉快そうに黙り込む。

ブレンド「私の要求は、月へ無事にたどり着く事だ。　すなわち、我々のＭＳを返して貰えるならば、これ以上は何もしないと誓おう」

マリアベル「何だと？！」

突拍子もない要求に、マリアベルは驚いた。

ハイジャックに成功した犯人が　『帰るから元々持っていた物を返せ』　と言ったのだから、当然だろう。　これでは泥棒が金庫を開けながら、中の金を取らずに帰るに等しい異常事態だ。

モカ「しかし陛下。　２機で５人は、かなり窮屈です。　運べなくはありませんが、もう少し欲張ってもよろしいのではございませんか？」

ただしそれには、冷静意見具申が入ったようだったが。

ブレンド「…ふむ。　それもそうか。　スペリオルの第2コックピットを使ってもあと2人…。　ならば長距離偵察型のジン、あれをもらおう。　旧式ＭＳ1機ぐらいならば、些細な要求うちに入るだろう」

ブレンドは、改めてマリアベルに目をやった。

マリアベル「…要求を…」

【6】

マリアベル「…の…」

『呑もう』と言うつもりだったのか？　それとも、『呑む事はできない』だったのか？

しかし、それは既にどちらでもよくなってしまった。　何故なら、艦を外から狙うはずの2機のゲイツが、2機ともトリモチに絡め取られ、身動きできなくなってしまったのだから。

霧雨兵「…な、何だこれはっ！？」

狼狽える。

ブレンド「ブリッジにばかり注意を向け、私のＭＳを放り出してしまったのは、失策だったな？　私の機体はガンダムの１つ。　ＲＸ－７８以来の、自律操縦機能は健在なのだ」

そう。

ゲイツが、Ｓガンダムから手を離したのを見て、ブレンドはその２機を逆に倒すことを思いつき、即座に実行したのだった。

そしてゲイツが攻撃能力を失った事は、自爆覚悟の最後の手段まで、奪われてしまった事を意味した。　残るジンは、非武装の長距離偵察型。　たとえパイロットが乗っていなくても、Ｓガンダムに敵う機体ではない。

つまり、マリアベルの回答を待つ振りをして、ブレンドはまたしても彼女を罠に嵌めたのだ…。

マリアベル「…この艦の生殺与奪は、すでに私の手にはない。　貴様を誠意を信じるしかないとは、霧雨にとって最悪の屈辱だ」

マリアベルは、自分にとってではなく、霧雨にとってと言った。
それが霧雨大佐に絶大な忠誠を誓う、彼女の本音だったのかも知れない。

ブレンド「沈着な指揮、冷静な判断。　指揮官として一流の素質がある。　だが、惜しいことに、修羅場をくぐり足りていないようだ。
そもそも、私たち5人を甘く見て、艦隊の大半を帰してしまったことから、お前の負け戦は始まっていた」

マリアベルに、まるで教官のような事を言うをブレンド。　だが油断はしてはいないようで、彼女を人質に取ったままだ。

そしてブレンドたちは、ものの数分でノーマルスーツに身を包み、エアロックに出た。　霧雨兵が後を追うが、当然手出しはできない。

モカ「その偵察ジンのパイロット、降りよ」

長距離偵察型のジンを手早く部下に与え、モカはメタスに乗り込む。
もう1人の部下はSガンダムだから、あとはブレンドだけだ。

ブレンド「覚えておくがいい。　戦いとは、二手先、三手先を考えて行うものだ。　戦術教本をいくら読んでも、本当の戦いはできない」

マリアベルを離し、コックピットに乗り込もうとするブレンド。

だが、その手をマリアベルが取った。

マリアベル「…1つだけ聞かせてほしい。　貴様は本当にレオンハルトなのか？」

ヘルメットは張りつけるようにし、接触回線で語りかける。　それをブレンドは振り払わなかった。

ブレンド「…だとしたら、どうする？」

マリアベル「何も起こらない。　本国に、取り逃がした賊の事を伝えても仕方ないだろう。　ただ…」

マリアベルは少しだけ躊躇いを見せたが、それでも語るのは止めなかった。

マリアベル「…ただ、貴様がレオンハルト…　時代が時代なら、霧雨様をも平伏させる男であったなら、こうしていいようにあしらわれた、言い訳ぐらいにはなると思っただけだ」

言ったマリアベルは、自嘲の笑みを浮かべたようにも見えた。

ブレンド「ならば名乗ってやろう。　私がユーフォリア帝国第４８代皇帝レミルが一子、レオンハルトである。　そして、４９代皇帝になる男だ！」

高らかな宣言をマリアベルの脳裏に残し、ブレンドはその場を去った…。

2015

第９４章　暴走する…　ナニカ（前書き）

（２回目）

シクス「ああいう、逞しい男の人って良いなぁ…」

エイス「えぇ～。　あたしは自信過剰な男はパス～」

インドラ兵「…あの…」

シクス「でもでも…」

エイス「やっぱり男も可愛い方がいいって」

インドラ兵「すいませ～ん！　もう本番始まってますっ！　赤ランプ見てくださいよっ！！」

エイス「あっ…」

シクス「ごめんなさ～い」

インドラ兵「頼みますね？　嘘発見器は直しておきましたから。あとこちらが、今回のゲストのマリアベルさん。　じゃ、リテイクいきますから」

エイス「小説冒頭文、恋バナにようこそ～」

シクス「今回は、本編に出てきた、マリアベルさんに来てもらってます」

エイス「それじゃ、こんな質問から」

シクス「前の章の、自称次代皇帝ことブレンドさん。　ああいうヤリ手の男の人には、正直惹かれる」

マリアベル「いいえ」

『ピ…』

シクス「あれ？　あんまり反応ないよ？」

エイス「ほら～。　今時、カッコつけた男は嫌われるんだって」

マリアベル「実力のある人を、純粋に凄いと感じますが…。　それと恋は違います」

エイス「じゃ、第2問。　敬愛する主君とは、プライベートでも結ばれたい」

マリアベル「…いいえ」

『ピピ…』

エイス「あれあれ？　これも反応が小さいや」

マリアベル「上官と部下の、一線を踏み外してはいけません。　私は霧雨様を尊敬していますが、やはりそれと恋は別ですから」

シクス「…何か盛り上がらないね」

マリアベル「人の恋愛感情を、ネタにしないで下さい。　それでは、私はこれで…」

エイス「ちょっと待ったぁたぁ～～！！

第3問っ！　でも、ダメ元の恋もアリだと思う！！

マリアベル「い、いいぇ…」

『ピピピピピピピピ……』

シクス「反応した?!」

エイス「だよね～　やっぱりサプライズを期待しちゃう生き物なんだよ、女の子って」

マリアベル「わ、私は霧雨様をそんな目で見ては…」

（続く）

第９４章　暴走する…　ナニカ

吹く風が、やけに生々しく感じた。　燃え盛る炎の色が、何故か目に焼き付いた。

そして、耳には…

チャーリー「くははははっ！　ざまぁねぇな！！」

チャーリーの死者を罵る声。　もちろんこんな物が、耳に心地良いはずもない。

シクス「…フォルナちゃん…」

セブンス「あ～あ。　またメンバー減っちゃったよ」

エイス「ノン～。　こっからどうすんの…

あれ？　ノンがいないよ？」

エイスが辺りを見回すが、ラピスラズリのリーダーである、ノンのＲＦザクの姿がなかった。

エイス「えっと、熱源が移動してて…。　…上から…　急降下」

ドガンっ！！！

と物凄い音がして、チャーリーのＢＶ（ブラックヴァーサゴ）が吹き飛んだ。　しかもよく見ると、ＢＶは左手がなく、胸部にざっくり、大きな傷がついていた。

ノン「…フォルナに汚い手で触らないでくれる？」

ＢＶが手を失ったり、吹き飛んだ理由は、もちろん彼女だった。

急降下しながら左肩から斬り下げ、返しがてらに斬り上げ、脚で蹴り飛ばし…。　さらに、ビームマシンガンき持ち替えて、追い撃ちをかける。　あっという間にＢＶは、見るも無惨な有り様になってしまった。

シクス「…ノンちゃんの雰囲気が変わっちゃった…」

エイス「あ～。　もしかしてアニメによくある、マジギレっての？」

セブンス「知ってるぜ。　こう髪が金色に光って、『クリリンのこ

とか～！』とかって叫ぶヤツだろ？」

ラピスラズリは幼児時代、意図的に戦闘に不都合な感情を抑え込むべく、人格を調整をされていた。　その余波のせいで、それから１０年近くを経た今でも、怒りや悲しみといった感情が欠落していると言われていた。

まあ、彼らも１５年の人生を経験してきた訳だから、そういった感情が『存在する』ことは知っていた。

だがそれは、後から何の実感もなく取り入れた知識だったから、セブンスの発言ではないが、かなりあやふやな理解しかできていないらしい。

ノン「もう１回言うよ？　友達に汚い手で触るな、ボケがっ！」

らしくない罵声が、ノンの異常を物語る。　フィフスが死んだ時には、どうだっただろう？

バーストン「あいつらのリーダー、キレたみたいだぞ？」

その様子は、アッシュとバーストンにも筒抜けのようだった。　通信回線をエージェント達に繋いだまま喋っているのだから、当然なのだが。

チャーリー「…てめ」

ノン「五月蝿い」

ＢＶが、残された左手のクローをＲＦザクに向ける。　しかしノンは、一撃目を横に避け、二撃目でその腕を、脇に抱えるように捕えてしまう。　いくらＢＶが大ダメージを受けているとはいえ、複雑なクローの軌道を、こうも簡単に見切れるものなのか？

ノン「フォルナ。　今すぐ、こいつもそっちに逝かせるからね？」

チャーリー「ひいっ！！」

クローを掴まれているため、ＢＶは退がるに退がれない。　さらに１歩、ＲＦザクが無造作に間合いを詰めた。

バーストン「チャーリー！！　アッシュ！　とにかく援護するぞ…」

エイス「おっとストーップ。　せっかく面白いトコなんだから、邪魔はしちゃダメだよ～」

ガトリングを構えたＢＨＡ（ブラックベビーアームズ）の背後に、いつの間にかビームランチャーが照準される。　このままガトリングを射てば、無防備な背後を

ランチャーが直撃するだろう。

そしてあと1人、アッシュの前にはセブンス。

セブンス「シクスは退いとけ。　これ以上人数減ると、またおっさんが小言を言いそうだからな？　で、あんたの相手は、この俺がしてやるよ」

シクスは複雑な表情をしていたが、脚部に直撃を受けている。　セブンスがもう一言つけ加えると、やむなくといった感じながら、機体を翻した。

アッシュ「…そうかい…。　だが、たった1人俺をで止めるつもりか？」

自信ありげに言ったアッシュが、どんな凄い攻撃を見せるのかと、さすがのセブンスも身構えた。

…けれど。

アッシュ「俺はもう1機殺ったからな？　ビットも使い切っちまったし、今日のところは、これで勘弁してやるぜ！」

ショーテルを振りかざし、セブンスのＲＦグフを派手に斬りつけたかと思ったら、ＢＳＲ（ブラックサンドロック）はそのまま反対側へ通り過ぎ、さらに加速していた。

つまり、逃げ出したのだ…。

【2】

セブンス「あ～あ。　行っちゃった」

バーストン「…あいつ…。　やりやがった…」

それを、全員が呆然と見送った。　三十六計逃げるが勝ちとは言うが、アッシュの逃亡は、それくらい鮮やかで唐突だった。

退いたという意味では、シクスもアッシュも変わらないが、一方は傷つき、仲間に案じられての撤退。　他方のアッシュは、自身は大した損傷もないのに、危機の仲間を見捨てて逃亡したのである。

エイス「仕方ないなぁ…。　じゃ、代わりにあんた殺っとく事にするね？」

バーストン「もしかしてとは思ったが、やっぱそうなるのか？！」

ビームランチャーを避ける。

バーストンもエージェントの一翼、それぐらいはたいした事ではなかったが、エイスと真っ向から殺り合いながら、他人を助ける余裕はなかった。

その上、手の空いた形のセブンスがいる。

チャーリー「…ひ…。　ひいぃ…　いいのか？　これ以上近づけば、俺は貴様を巻き込んで自爆してや…」

ノン「言いたい事はそれだけ？」

さらに一歩踏み出したノンが、サーベルを振り上げる。

チャーリーは肝心な事を知らなかった。　自分が今相手にしているのは、インドラの誇る、戦闘人形ラピスラズリ。　恐怖をまったく感じない存在であり、しかも今のノンは、変にテンションが上がってしまっている。

チャーリー「…た、助け…　何でもする…」

そして、相手が弱いと見ればつけあがり、強ければ怯える。　その醜いまでの素直さが、チャーリーの持ち味だった。

彼は膝を振るわせ、蒼白になり、股間を濡らすべきでない液体で濡らしながら、必死に哀願した。

だが乗機のＢＶは、片腕を掴まれ、反対の腕は斬り捨てられていた。
　さらに頭部が吹き飛び、胸部にも大きな傷、もはやＲＦザクに抗する力はなかった。

しかも損傷のせいか、必死に操作しても、脱出システムが正常に作動しない。

???「…面白イ事にナッテイルナ？　蔑ミ、侮リ、増長スル。ダガ、一度危機に瀕シタナラバ、怯エ、戦慄（わなな）キ、泣キ叫ブ…」

ノン「さよなら」

チャーリーには、言葉の意味が分からなかった。

だが、２つの声が確かに聞こえた。　彼にとっては、天使と悪魔の声だった。

???「…サア、私の尖兵にナレ。　私に従ウナラバ、ソノ命、私が守ッテヤロウ…」

さらなる声。　甘い囁き。

チャーリー「だ、誰でも何でもいいっ！　助けてくれっ！　お、俺はまだ死にたくない！！」

チャーリーがすがったのは、天使だったのか？　それとも…。

ノン「消えて」

直後、振り下ろされたサーベル…。

【3】

…だが、避けられるはずもないそれを、ＢＶはＲＦザクの手を掴んで止めていた。

ノン「…？？？」

ノンがモニターを覗く。　掴んだ腕を、振り払われた訳ではなかった。

エイス「隠し腕？　ずいぶんと変わったＭＳだよね？」

セブンス「そうだな」

隠し腕、予備腕を持つ機体はレアだが、いない訳でもなかった。

武装を手持ちするＭＳにとって、腕の損傷は致命的だから、予備を搭載しようとする発想は当然出てくる。　隠し腕は、その予備を文字通り隠しておくもので、いざという時に使い、相手の不意を突く機能だ。

ノン「往生際が悪いよ」

？？？「…私はドレダケの時を経テモ、マタ蘇ル。　地球を救ウタメ、何度デモ…」

ノン「…誰？」

ノンが疑問を投げ掛けながらも、反射的に飛び退く。　今までＲＦザクがいた空間を、ビームサーベルが切り裂いた。

セブンス「ノンっ、気をつけろ！　そいつは殺られたフリをしてるだけだっ！」

チャーリー「ＢＶに、こんな機能が隠されていたのか…？」

しかし隠し腕といい、直後の反撃といい、チャーリーの様子がおかしかった。

彼の性格からすれば、たとえ演技でも、惨めな姿を晒したりはしないだろう。　仮にしたとしても、騙された相手を嘲笑うのが、チャーリーという男だった。

これではまるで、本人すら聞かされていない機能が、勝手に発動したかのようだ。

？？？「ドウシタ？　力はヤッタノダ。　サア、殺セ、叫べ。　地球を害スルゴミ虫ドモを、排除スルノダ…」

次にノンを襲ったクローの動きは、さっきまでとは比較にならないぐらい鋭かった。

バーストン「…い、一体何が起こってるんだ？」

セブンスとエイスが、ＢＶに気を取られいたのと同様、バーストンもまた、チャーリーの異変を理解できてはいなかった。

バーストン「だけどよ、とにかくよくやったぜ、チャーリ…」

理解はしていなかったが、ノンが攻め手を緩めた隙に、バーストンはＢＶに機体を寄せる。　アッシュが逃げてしまった今、戦うチャーリーを支援できるのは自分しかいないと、常識で判断したのだ。

そして彼は、チャーリーを労おうと、軽い気持ちでＢＶの肩に手を掛けたのだが…。

？？？「オ前もドウダ？　コイツは私の軍門に下ッタ。　私に従エバ、オ前にも力を与エヨウ…」

その瞬間、不意にバーストンの脳裏に、かつて失った不良仲間達が浮かんだ。　その笑顔に彼は微笑みを浮かべかけたが、直後、その仲間達の顔が人ではないものに変じてしまい、呻き声を上げ始める。

バーストン「お前ら…。　はっ…　やめ…　…うげぇ～」

その戦慄の光景に、バーストンは突然の吐き気に襲われ、為す術もなく、コックピットで吐いた。

？？？「…ツマラン…。　少シ触ッタダケデコノ有リ様カ」

バーストン「…げほ…。　幻覚が見えるなんざ、俺はどうしちまったんだ…？」

ＢＶからＢＨＡが手を離すと、途端に光景は消滅し、吐き気が楽になった。

バーストン「ディアボロ・システムが反応している…？　故障…なのか?!」

吐き気が収まった彼が気づいた異変は、それだった。

神経をダイレクトに繋ぐディアボロ・システムでは、機械が異変を起こせば、それがパイロットにも連鎖してしまう。彼もブラックシリーズを与えられた直後は、神経でダイレクトに機体を操る感覚に慣れきれず、ＤＲ．マンソンにさんざん罵られたものだ。

バーストン「…オーバーロードしてやがる…」

もしそんなシステムが、過剰に働けばどうなるのか？

チャーリーは次第にノンを圧倒し始め、セブンスやエイスも加勢せざるを得なくなるが、彼はその有利な戦況を、どうしても好ましいものだと感じられなかった…。

第９５章　不可思議な…　力？（前書き）

（よくあるパターン）

シクス「今回は恋バナ３回目のはずなんだけど、エイスちゃんが本編で忙しいから、お休みする事にしたんだ。　みんなごめんね～」

フィフス「だったら、出番のない俺たちだけでやればいいと思うんだけど？」

フォルナ「フィフスと私は死んじゃってるし、シクスも撤退したんだよね？　時間はたっぷり…」

シクス「時間はあっても、恋バナはエイスちゃんぐらいしかできないでしょ？　それとも、トゥーエちゃんとか呼ぶ？」

マヒロ「こらこらこら～！　この小説を１８禁にするつもりかぁ～！！　ただでさえ、最近読者が伸び悩んでるのにっ！」

フィフス「伸び悩んでるのは、おばさんの文章力がないからだろ？」

マヒロ「言ったわね？　あんたの出番は金輪際なしだあ～」

シクス「金輪際なしって、フィフス、もう死んでるよ？」

マヒロ「うっ。　じゃ、じゃあ回想シーンからカットっ！」

フォルナ「そこまでするの…。　というか、みっともない…」

シクス「だよね～」

フィフス「同じく～」

マヒロ「も～！　誰よ！　こんな変に連携のいいキャラ考えたのはっ！」

（グダグダのまま、本編だけは進む…）

第９５章　不可思議な…　力？

チャーリー「くくく…　すげぇぜ…。　見えるっ！　聞こえるっ！　遅せぇよっ！！」

吐き気に見舞われ、戸惑うバーストンとは違い、チャーリーは絶好調だった。　頭に流れ込む情報が、驚くほど鮮明かつ迅速で、ラピスラズリたちの動きが手に取るように分かるのだ。

チャーリー「ゴミ虫が！　左っ！　右っ！　それで背後を取ったつもりかっ？」

ラピスラズリ得意の包囲陣が、５秒保たずに破られた。　機体と状況に違いはあるものの、精鋭のディジョン隊が互角にしか戦えなかったそれを、１対３でである。

ノン「何あいつ」

セブンス「マジありえねぇ…」

エイス「１対１で負けた事ないのに、何で３対１でフルボッコなワケ？」

年端もいかない頃からＭＳに乗せられ、帝国のエースパイロットの多くが、彼らに傷すらつけれず倒れていった。

そのラピスラズリを3人同時に相手にして圧倒するなど、一体チャーリーの身に何が起こったというのか？

セブンス「…つか、おかしいぜ？　動きもそうだが、あいつの機体、ノンがぶっ壊したはずだろ？　腕は隠しだとしても、他んトコもポシャってたはずだ」

セブンスがクローをかわしながら、ＢＶの状態に疑問を持つ。　たしかにＢＶは、一度は撃墜寸前にまで追い詰められたはずだ。

ノン「だね。　確かに斬ったはずなのに、勝手に塞いじゃってる」

ＲＦザクがビームを受け、装甲に剥がれる。　ただ、狙いは正確だったとは言い難く、３発も命中したのに、どれも致命傷になる場所ではなかった。

エイス「ノ～ン。　らしくない事ばっか言うから、どうかしちゃったかって、心配したんだよ～」

ノン「…そか…。

ごめんね？　あいつ見てると、身体が熱くなっちゃうの。　戦いを楽しむのはよくあるけど、こういうのは初めて」

数瞬だけ考えるようにした後、ようやくノンが彼女らしさを取り戻す。　チャーリーに圧倒されたことで、かえって頭が冷えたのだろうか？　まだノンの息は荒かったが、口調だけは元に戻っていた…。

【2】

アイン「ちょっとお兄さん、ストーップ！」

ディジョン「なにっ！！」

言われて攻撃を止めてしまった自分に気がつき、苦々しい気分になる。　敵が待ってほしくなるような戦況は、私たちにとってはチャンスの証だというのに、どれだけこいつらのペースに嵌められているというのだ？

ナイル「…どした、アイン？」

怪訝そうなナイル。

撃墜機こそないが、ディジョン隊とラピスラズリ４人の戦いは、少しだけラピスラズリが押していた。　その中でもナイルは、一度も被弾していない。

アイン「フォルナが落ちた。　シクスもやられたらしい…。　ノンたちと合流するよ？」

トゥーエ「ええ～。　ちょうど感じてきたトコなのにぃ～」

戦いの最中に、一体何を感じていたのかは知らないが、不満タラタラなトゥーエだった。

アルヴィン「なら、絶対行かせね～よっ！」

Ｚ２（ゼッツー）が集まった３機に向かって、ライフルを連射する。
　会話に気を取られていたのか、初めてナイルが攻撃を避けきれず、盾でビームを受けた。

ナイル「お前なぁ、しつけーんだよっ！」

ＲＦグフがアルヴィン、ラリー、私と、それぞれに連撃を見舞う。
　いずれも攻撃が浅いから避けるのは簡単だったが、その隙に他の

3機が纏まってしまった。

アイン「いいよ、ナイルっ！　その調子っ！」

続いて、アインが斬り込むかに見せかけて、直前で反転する。　追いかけようとしたアルヴィンを、トゥーエのライフルが封じた。

ディジョン「アルヴィン、ラリー、レナ。　深追いするな！　合流してから殺っても遅くはない！」

奴らの会話を辿る限り、ラピスラズリは2機減ったはずだ。

だが代わりに、こちらは11機も識別信号が減っていた。　これでは6対7で、数の優位が失われてしまった事になる。　こいつらの実力とここが敵地である事を考えると、そろそろ引き際かも知れない。

私は殺ると言いながらも、あまり距離を詰めずに、ラピスラズリたちを追う事にした…。

【3】

ラピスラズリの化け物っぷりは、3回の戦いで分かっているつもりだ。　それが今、7対1で戦っている。

私たちを捨てて駆けつけた4機が、すぐさまビームを直撃させる。

彼らにしては牽制のつもりかも知れないが、狙いがやたらと正確で、少しでも回避に迷うと、すぐに落とされてしまうレベルだ。　今回命中したのは3発、ふつうのMSなら、十分撃破だが…。

チャーリー「くけけけけ…。　この程度かよっ！」

ろくに避けてもいないのに、強気に叫ぶチャーリー。　言葉は頼もしいと言うより狂気染みていて、聞き苦しいことこの上ない。

そして私は、事態を掴みかねていた。

ラピスラズリは紛れもない敵だから、彼らが苦戦しているのは良い事のはずだ。　けれど、この光景の異様さは一体なんだ？

スリス「…次は右っ！　　…と見せかけて、左…　じゃなくって正面っ！」

こういうフェイントも、彼らの得意技だったな？　BV（ブラックヴァーサゴ）も例に漏れ

ず、引っ掛かって斬られたうえに、背後からアインにビームマシンガンの掃射を浴びる。

普通ならこれで1回死亡だ。

チャーリー「…はん？　何かしたか？　背中が痒いぜっ！」

正面のスリスを無視して、背後のＲＦザクをクローが襲う。　だが間合いがいい加減で、攻撃は空を切る。

その隙にビームが機体を貫き、これで2回死亡のはず。　けれどＢＶは動き続ける。

スリス「おかしいって、こいつ！」

正面に居残っていたスリスが、再び接近してサーベルを振るう。

それだけでなく、同じＲＦドムのエイスが、一直線に突っ込んで機体を袈裟(けさ)懸けに斬り下ろした。

もちろん撃墜クラスの強烈な一撃で、これでこいつは、一体何回目の死亡通知だ？

だが…。

チャーリー「無駄無駄無駄無駄無駄ぁ～！！！」

爆発する気配など微塵も見せずに、下がろうとしていたエイスをクローで反撃してしまったのだ。

エイス「うっそ！　聞いてないって！」

RFドムがクローを避けきれず、ガッチリ肩口を掴まれてしまう。
エイスはそれを咄嗟にサーベルで斬り払ったのだが、なんと

『斬り払われた手先が、生えてきた』

のである。

セブンス「…もしかしてって思ってたけど、こいつ、隠し腕とかいうレベルじゃないよ…」

ナイル「俺たち以外にも、化け物っているんだな？」

呑気に聞こえるのは、ラピスラズリたちの腕が常識外れであり、かつ戦いに不利益な感情…　この場合は、驚きや恐怖を感じないからだろう。

普通の人間なら、ＭＳから勝手に手が生えて襲ってきたら、腰を抜かして卒倒する。

トゥーエ「やだ～。　キモい～」

気持ち悪いって感情は感じるのか…。

などと、感心している場合ではなかった。　言っている側から、トゥーエのＲＦゲルググが被弾し、左脚の上部に大きな溝ができる。

トゥーエ「あたし、お化けと付き合う趣味はないからっ！」

それだけで、あっさり機体を捨てて脱出したトゥーエ。

『早過ぎるだろ！』　と内心ツッコミを入れたが、次の瞬間、ゲルググはＢＶに両断されていた。　さっき逃げなきゃ死んでた訳で、トゥーエはこんな時まで実力を発揮した事になる。

エイス「ねぇ、お兄さんも手伝ってよぉ～」

敵のはずなのに、なぜか馴れ馴れしげに密着するエイス。　これがＭＳの機体越しでなければ、至福の時であったかも知れないが、今はただ動きにくいだけだ。

ディジョン「離せ！　鬱陶しい！」

レナ「いきなり隊長に抱きつくなんて、何て大胆な！」

…なんだか、意味がよく分からない会話が混じった気がしたが、ともかくレナがＲＦドムを引き剥がす。

仕方なく？　エイスはビームランチャーでＢＶの胸部装甲を撃ち抜いて見せたが、その穴はすぐに塞がってしまった。

エイス「ＭＳって、いつからあんな便利になったんだっけ？」

…知るかそんな事。　というか、私を勝手に巻き込まないでもらいたいのだが…。

ディジョン「説明しろ！　一体何がどう転んだら、ＭＳが化けて出るんだっ！」

バーストン「俺に怒鳴るなよ。　見て分からねぇもんは、聞いても分からねぇよ…」

私は、なんとか事態を把握しようと、同じくエージェントのバーストンを詰問してみた。　だが、こいつもよく事情を理解していなかっただけでなく…。

【４】

…何と、近づいた私たちまでもが、無差別に攻撃され始めてしまった。　エージェント達は残忍な事も平気でやる奴らだったが、味方まで攻撃するような狂犬ではなかったはずだ。

…たぶん。

バーストン「分かってんのは、俺たちのＭＳが積んでるディアボロってシステムが、暴走しちまってるらしいって事だけだ」

…つまり、見た物みんなが敵って訳か？　大したシステムだな、オイ。

アルヴィン「帰ろうぜ。　あんな馬鹿、放っとけばいいんだよっ！」

言ったアルヴィンが、ビームをかわした。　射ったのはそのＢＶ…　チャーリーで、流れ弾ではないのは、誰の目にも明らかな射ち方だった。

バーストン「待ってくれよ！　チャーリーは態度デカいし、生意気だし、口は悪いし、いいトコなんて１つもない奴だが、それでも俺たちの仲間なんだよ！

ちょっとシステムが暴走しちまったぐらいで、見捨てんのかよ？！　薄情すぎんだろ、それは！」

弁護にも何にもなっていない言葉だったが、それだけに信用はできた。　チャーリーはクズでも、バーストンは仲間思いなんだろうな。

ディジョン「…生死の責任は取れん。　それでいいなら折れてやる」

バーストン「あ…　あぁ…。　すまない」

バーストンは完全に意気消沈していた。　仲間がこんな有り様になってしまったのでは、無理もない事だろうな。

…しかし現実問題として、コイツをどうするべきかは難問だった。
ラピスラズリと相討ちになってくれればしめたものだが、ラピスラズリが勝って、ＢＶを奪われでもした日には、目も当てられない。

第一、こう無差別に攻撃されては、退くに退けないのか…？

【5】

エルフレア「1人で歩けるっ！」

ＢＸは、スラスターがみな焼け焦げて機能を失ってはいたが、歩くくらいはできた。　背中のバックパックもまだ生きているから、エルフレアの言葉は嘘ではない。

ユーリ「そう？　でも、また暴走されちゃたまらないわ」

だがユーリは、そう言ってＢＸを離そうとはしなかった。　ユーリがそうするので、フォーリュンもそれに倣う。

フォーリュン「…ユーリ殿。　１つだけ訊いていいか？　…その…暴走についてだ」

遠慮がちながら、フォーリュンが訊いてくる。　ＢＸの回収は、彼女の協力があってこそだったが、彼女は詳しい事情を聞かされた訳ではなかった。　疑問も当然だろう。

ユーリ「…騙されてるわよ、私たちはね」

フォーリュン「どういう事だ？」

ユーリ「ディアボロ・システムよ。　こいつ、機体と神経を直接繋いで、ニュータイプ以上の反応をできるようにするシステムだって、あの科学者は言ってたけれど…」

ユーリが言う科学者とは、おそらくＤＲ．マンソンのことだろう。

つまりユーリは、マンソンがシステムについて、エージェントに偽の情報を与えていると疑っているらしい。

フォーリュン「ドクター…。　いや、ザキラ様に限って、我々エージェントに嘘をおっしゃるとは思えないのだが…」

その言葉は、フォーリュンらしいと言うべきか。

ユーリ「そう。　ま、誰が誰を信じようと、私には関係ないわ。私はたとえ相手が神でも、疑う時は疑うわよ？」

フォーリュン「……。」

おそらく、常日頃からザキラへの忠誠の言葉を口にするフォーリュンにとって、ユーリの言葉は受け入れ難かったに違いない。

だが、彼女はユーリに何も言わなかったし、言えなかった。　うまく表現できないが、ユーリの言葉には不可解な重みがあり、気軽に否定していいと、どうしても思えなかったせいだ。

フォーリュン「それはともかく、もうすぐ夜が明ける。　予定とはずいぶん違ってしまったが、そろそろ撤退を考えないといけないと思うのだが…」

元々の作戦案では、黎明時に潜水艦に戻り、回収される手筈になっていた。　また、戻るのに不都合が生じた場合、セイロン島沖には

帝国軍の艦隊、マドラスの北側には回収用のミデアを派遣する事になっていた。

今のユーリたちの状態ならば、何とか母艦までたどり着けないことはない。　海軍は壊滅していたから、しばらくの制海権は帝国にある。

ユーリ「面倒な事は任せるわ。　私はこいつの世話で疲れたの」

エルフレア「世話者で悪かったな？　だが、あのまま戦っていれば、私は必ず勝っていた！」

腹を立てたのか、エルフレアは語気を強めて反論する。

ユーリ「でしょうね。　けどそれって、あんたが本当に望んだ事なの？」

案に相違して、ユーリはエルフレアの勝ちを否定しなかった。　たしかに機体ダメージでは、ゴトーのイフリートよりＢＸの方が、マシではあった。

ただ、『望んだ事か？』とはどういう意味なのだろうか？

ユーリ「あんたも、ほとほとめでたいわね？　デビルにあれだけいいようにされて、まだ懲りないわけ？」

エルフレア&フォーリュン「デビル？」

怪訝そうな声が重なった。

ユーリ「さっき言わなかったかしら？　ディアボロ・システムは、ただの戦闘システムなんかじゃないわよ？

『それ自体に意思があって、扱う人間を逆に操ろうとしているかのよう…』

まあデビルってのは、私が勝手につけた名前なんだけど？」

ユーリは驚くべき事を、いともあっさり言ってのけた。

エルフレア「意思？　ディアボロに意思があるってどういう事なんだ？！」

ユーリ「デビルとお喋りしたり、映画を見たりしなかったかしら？　地球がどうだの、世界を守るだなんだと、まったくよく喋るシステムよね？　しかも、他人の記憶を勝手に弄んでくれるし？」

エルフレア「…あれが…？　システムの意思だと言うのか…？」

ユーリの言葉に、エルフレアは顔を強張らせていたが、それはどこか納得したような表情にも見えた…。

【6】

？？？「…怯エロ…。　泣ケ…。　地球を支配シテイルツモリダロウが、ソンナモノ、私は認メナイ…」

…そう言えば、もう1つ。

さっきから、幻聴が聞こえるんだが。　戦闘神経症の患者は、訳の分からない物を見た、聞いたと叫ぶ奴らが多いが、私も遂に、そいつらの仲間入りか？

まあ、こんな化け物を相手にすれば、精神が崩壊してもおかしくはないか…。

ディジョン「おいっ！　何か手はないのか？　お前の仲間なんだろっ？」

無理を言ってしまったと、言ってから気がついた。　仲間がどうとかいうレベルならば、味方を射ったりはしないものだ。

バーストン「ダメなんだよ。　俺の機体は重火力仕様だから、小細工とかには向かねぇし…。　それに、近づくとシステムが共鳴しちまうらしくて、幻覚が見えるんだ…」

また1つ事実が浮かんだ。　あいつが幻覚を見てるなら、私の幻聴もそのせいじゃないかって事だ。

バーストン「それでもまあ、何もしないっつう訳にもいかないか…」

私に向けられた攻撃を、ＢＨＡが身を盾にしてかばってくれた。

バーストン「げ…。　…やっぱそうなるんだな…　うげぉぉぉ…」

だがＢＶに触るや、バーストンの動きが止まってしまう。　そして、実に聞きたくない音声が通信に入り込む。

???「私の力を受ケ入レル器もナイクセニ、シャシャリ出ルナ」

…ところでこの幻聴、幻聴のクセに雄弁だな?

何と言うか、誰かと無理矢理会話させられている気になる。

ディジョン「レナ、ラリー、アルヴィン！　敵との間合いに気をつけろ！　あまり近づき過ぎると、コフィン（棺桶）システムに影響するようだ」

私は警告を発したのだが…。

ラリー「影響って、そんな攻撃もしてくるんですか?」

…意味がよく分からない。

ディジョン「幻聴が聞こえるんだ。　エージェントの奴は、幻覚が見えると言っている」

レナ「私はそんなことは何も…」

何だと？　もしかしてそんな事なっているのは、私とエージェントだけなのか？

仮にそうだとして、その事実が意味するものは…

何だ？

【7】

チャーリー「ふはははは…。　俺は無敵だ！　俺は世界を救う救世主なんだ！」

ディジョン「アホらしい」

馬鹿馬鹿しくなってきた。　ビームを滅茶苦茶にぶっ放して、世界

が救えるなら誰も苦労なんてするものか。　力を否定するつもりはないが、力はちゃんとした理想があってこそ、役に立つものなんだよ。

暴れるだけなら、糞ガキ…　いや、躾をしてない犬以下だな。

チャーリー「みんな死ねっ！」

ノン「死ねって言われてもねぇ…。　なんかイラつくし」

スリス「フォルナの仇も討ってあげないといけないし～」

言いながら、２機は正面から突っ込むと見せかけて、左右に別れてＢＶの両足を同時に叩き斬る。　ＢＶが脚先を失い、前のめりに倒れる。

ＲＦザクとＲＦドム、機種も違うのに、見事な連携を見せるのは、さすがラピスラズリと言ったあたりか。

そして、倒れたＢＶにアインがビームマシンガン、エイスがビームランチャーで追い撃ちをかける。　さらに、倒れたままのＢＶをセブンスとナイルがビームサーベルでこれでもかというぐらいに斬り刻む。

バーストン「…や、やめろ～。　やめてくれ～！！」

いたたまれなくなったのか、バーストンはラピスラズリたちを射つ。

ノン「…エイスと仲良くしてたみたいだけど、私はそうじゃないよ？　邪魔するなら、そっちから殺してもいいんだからね？」

さっきの連撃から間もないというのに、すぐに私とバーストンに向き直っているのは、リーダーのノン。　言葉はやや鋭い。

ディジョン「止めてやれ。　化け物として生き恥を晒させるのが本当の友情か、考えろ」

私はＢＨＡに手をかけた。　射撃が止み、ラピスラズリたちは様子を伺っているようだった。

エイス「みんな止めようよぉ～。　化け物討伐優先、イイ男は大切に～」

間を取り持ってくれるのは嬉しいが、理由がいま１つ釈然としない。

そもそもエイスに、私は素顔を見せていない気がするのだが…？

アイン「ケンカ反対に1票！　そいつらは悪い人たちじゃないから。…特にノリが」

ノリなのか？！　大事なのはそれか？！

私は、４対４の戦いの時、妙に楽しそうにしていたアインを思い出して、気が重くなった。

スリス「さすがに化け物でも、あれだけ殺れば大丈夫でしょ？　…でも、念のため♪」

ビームランチャーが3発追加される。　倒れていたＢＶが、威力で地面を転がった。

それから数分が経ったが、ＢＶはまだ立ち上がらない。　誰もが安心した表情を浮かべた、その時…。

チャーリー？「…ぉ、お、俺様は最…強で…　俺は救世主様なんだよっ！！！」

叫び声をあげ、立ち上がる。　その姿は確かにＢＶだったが、言っている言葉が、チャーリーの気が触れてしまったであろう事を物語っていた。

バーストン「…チャーリー…」

チャーリー？「シャァァアアッ！！！」

立ち竦むバーストンを、元エージェントの化け物が襲った。　あまりの事に、バーストンは動けない。

ディジョン「馬鹿野郎っ！　死ぬ気かっ！！」

レナ「隊長っ、無茶ですっ！！！」

つい、反射的に動いてしまった。　正直言うと、これで私は死んだと思っていた。

…だが…。

エイス「あ…。　お兄さんすご～い」

誉められるぐらい、私のサーベルは化け物のどでっ腹に食い込んでいた。　そして、何故だか化け物がまったく動かない。

???「…死ンダカ？　狂ッタカ？　ヒ弱ナ奴メ。　セッカク私が、力を貸シテヤットイウノニ、不甲斐ナイ…」

…また幻聴が聞こえた気がした。　ただ、こんな化け物を相手にした後だと、幻聴幻覚ごときじゃ驚かないがな？

???「…ヤハリ、コノ程度デハ、物足リヌ…

…ン？　コヤツ、身体の中ニ…？」

幻聴だけじゃない。　頭痛までし始めたか…。

？？？「ソウカ。　ナラバ最初カラコチラニスレバ良カッタノデハナイカ…」

ディジョン「……？？？」

ついに、視界が完全にブラックアウトしやがった。　そして、身体がヤケに寒々しくなり…。

第９６章　オデッサ入城（前書き）

（３回目）

エイス「…この小説、もうガンダムじゃなくない？」

シクス「あ～。　手を生やしたりしちゃったもんね…」

マヒロ「ちっちっちっ！　原作ガンダムでも、一作品だけそんなのがあったのを忘れたかっ！」

エイス「知らな～い。　つか、その頃あたし生まれてないし～」

シクス「１５歳だもんね～。　ラピスラズリ」

マヒロ「変な所に、年齢設定持ち込むなっ！　どうせあたしはオバサンよ！　だから若い奴が働け！　冒頭文を進めなさい！」

シクス「…開き直ってる…」

エイス「みっともな～い。　でも、仕事はするかぁ…。　シクス、今回のゲストは誰？」

シクス「今回のゲストは、前の本編で出てきてもらった、レナさんだって」

レナ「よろしくお願いします」

エイス「…もうウソ発見器いらないじゃん？」

シクス「本文で、ヤキモチ妬いてたもんね～。　さすがに私でもわかったよ」

レナ「……。」

エイス「もう1発で決めよっかな？　大好きな人は常に身近にいる？」

レナ「いいえ…」

『ピピピピピピピピーーーー！』

エイス「やっぱり」

シクス「末長くお幸せにね～」

マヒロ「残念だけど、そうは問屋が卸さないわ。　恋に悲劇は付き物なのよっ！」

エイス「ちょっとぉ～　自分がモテないからって、他人の恋をジャマする気？」

マヒロ「え…　邪魔って、ここからはトピ原作のディジョン編に似せて書いたし…」

シクス「そこを変えて、ハッピーにしてあげてよ！」

マヒロ「ハッピーにするって、そのイベントがないと、物語が進まないんだもん」

エイス「都合のいいトコだけ変えるクセに、こういうトコはそのまんまなんて、やっぱ横暴だぁ～」

シクス「他人を恋路を邪魔する人は、ドムに踏まれて死んじゃえ～！」

マヒロ「…ちょ、そこ馬だから！　馬に蹴られても死ぬかは分からないけど、ドムは確実に死ぬからっ！」

レナ「あの…」

シクス「エイスちゃん、殺っちゃえ」

マヒロ「きゃ～～～～！！」

（またしてもグダグダで終了）

第９６章　オデッサ入城

帝国軍の進軍は遅れ、フロンティアガードの降伏はオクサイドに妨害されずに済んでいた。

カトラスは負傷しても、自分の策は律儀に実行したのだろう。　聞いた話では、オクサイドの軍営で狂犬病の感染者が出て、味方の帝国兵を襲う騒ぎになったのだという。　カトラスがどうやってその兵士役を操ったのは分からないが、思い切った芝居をしたものだとサコンは思った。

サコン「オクサイド軍に圧迫され、背後からメリャーナ様の軍が迫り、腹背に敵を受ける不利を悟っての降伏…。　見た目はそんなところですね」

あり得ない話ではなかった。

オクサイド軍だけで互角。　メリャーナの指揮下の全軍を合わせると、帝国軍はフロンティアガードの４倍にもなった。　軍の実態がメリャーナの手足と呼ぶにはほど遠かったとしても、表向き、降伏する理由にはなる。

ロメオ「…ですが、オクサイド中佐がメリャーナ様をよく思っていないという噂があります。　降伏条約の会合に呼ばれもしなかった不満を、あからさまに口にしているようです」

噂に頼らずとも、サコンがすでに掴んでいた情報だったし、予想済みの事態だった。　いわゆる『想定の範囲内』というやつだ。

マリー「メリャーナ様の名代として、私が赴けばよろしいですか？」

メリャーナ「そうしてもらえるかしら？　帝国十字勲章の授与と、大佐への昇進はすぐにでもできるわ。　男爵の爵位と領地の方は、まだ時間がかかるでしょうけれど」

それに対しての策は、何とも簡単なものだった。

あくまでフロンティアガードの降伏は、オクサイドの活躍があったからとして、皇女の権限で勲章を与えたうえ、大佐に昇進させるよう本国に推薦したのだ。

さらに貴族の爵位と領地を与え、オデッサから遠くへ追い払う。領地をどこにするかは議会…　ザキラの意向が強く関わって来るが、メリャーナとしてはロシアを推すつもりだった。

サコン「オクサイド中佐…　いえ、オクサイド大佐の出世に目がない性格が、役に立ちましたね。　ところで、オデッサにはいつ入られますか？」

降伏したフロンティアガードに、勝った帝国軍が進駐するのは当たり前だった。

ただ、そこは巧みに偽装されていて、オデッサに進駐する軍の数は極力少なく、率いる将も、メリャーナ直属の人間だけに絞り込む事にしていた。　降伏に見せかけた和議、それがサコンとミケルの約束だったから…。

【2】

オデッサまでの道のり。

戦闘中の行軍なら3日で十分な道のりを、1週間かけて進んだ。急ぎたい気持ちはあったが、焦れば怪しまれる。

一方のメリャーナといえば、実に泰然としたもので、どこからどう見ても勝者の姫君にしか見えなかった。　こういった時には、場数の差が直に出る。

マリー「オクサイド大佐の件、行って参りました。　着いた時は出迎えもなかったのに、帰りはＭＳによる護衛までしてもらいました。　まったく分かりやすい人です」

マリーは呆れているのだろうか？　メリャーナへの忠義に一切の見返りを求めないマリーは、地位への執着をまったく持っていない。

メリャーナ「いいではないですか。　人間誰しも欲しい物はあります。　それに自分の価値観で貴賤をつけてみても、意味のないことです」

こういう考え方は、生まれながらに人の上に立つことを定められた、メリャーナらしいと言えるのかも知れない。　さまざまな性格の臣下を抱えるだけに、１人１人の価値観に口出しなどしない。

メリャーナ「それで、サコンの欲しい物は何なのかしら？」

悪戯っぽい目つき。　ただのお姫様のままでいないのもまた、メリャーナの一面ではある。

サコン「そ、それはメリャーナ様…

…のためになれるならば、何もいりませんよ」

つい、あらぬことを口走りそうになり、サコンは内心慌てて取り繕った。　マリーは僅かに首を傾げたけれど、メリャーナはそうは思わなかったようだ。

メリャーナ「マリーといい、サコンといい、私は臣下に恵まれたようですね。
それはともかく、フロンティアガードをこれからどう扱いましょうか？」

サコン「表向きの領主には、グリフィンの叔父貴を推したいと思います。　顔はあんなですが、不思議と人に慕われるので」

グリフィンからは、連絡が来ていた。　中国での段取りに目処がついたから、一度合流したらどうかという提案である。

中国からオデッサまで、急げば数日。　サコンは、久しぶりに会う叔父の濃い顔を思い出してしまい、少し苦笑いを浮かべていた…。

【3】

そして遂にメリャーナは、フロンティアガードの中心地、オデッサへと乗り込んだ。

供回りのＭＳは、僅かに十数機。　この無警戒と言えるまでの身軽さが、サコンとミケル…　ひいては、メリャーナとフロンティアガードとの信義の架け橋だった。

ミケル「サコンさんと皇女殿下のご配慮、たしかに見届けました。
やはりあなた方は、信用に値する方々のようです」

フロンティアガードの実力をもってすれば、帝国軍全ては無理でも、これくらいのＭＳは軽く殲滅できる。　ミケルの目には、それが自分達を信じてくれた証に映ったらしい。　声をほんの僅かながら、上ずらせていた。

メリャーナ「ミケルフォード殿。　こちらが領主を務める、グリフィン少尉です」

グリフィン「領主と言っても、実際は人質なのであろう？　我輩の命などでよければ、いくらでも預けるぞ？」

紹介されたグリフィンは、そう言って豪快に笑っていた。　落ち着いた感じのサコンやメリャーナとは、一線を画したタイプに見えるが、裏表がある人物ではないとミケルは判断した。

ミケル「実は領主が人質だと、察して頂けるとは。　説明するのに、どう言っていいか迷っていたものですから」

これまた、体裁を取り繕うためのミケルの裏技だった。

表向きは、メリャーナの信頼する臣下がフロンティアガード統治のために赴任するのだが、裏を返せばそれは、メリャーナが約束を破れば領主…　グリフィンの命はないという脅しなのだ。

事実、オデッサでグリフィンが率いる軍はほとんどなく、その周りをのフロンティアガードの自警団が固める事になっている。

メリャーナ「正式な文書への調印が済み次第、私の軍はクリミア半島、セヴァストポリに移ります。

…ただ1つだけ、お願いを申し上げてもよろしいかしら?」

皇女のメリャーナが『申し上げる』と言ったことに、微かにミケルは反応した。　もしかしたら、聞き入れられない難問かも知れないと思ったのだ。

メリャーナ「大した事ではありません。　会いたい人物がいるだけです。　1、2ヶ月ほど前までは、オデッサにいたはずなのですが…」

メリャーナが、遠慮がちに口にした名前…。

【4】

エヴァニー「…か、母さん、お帰り。　この人は母さんのお友達？」

メリャーナ「……。」

あまりの惨状に、メリャーナは絶句してしまった。　リターナを数ヶ月に渡って服用したエヴァニーは、訪ねて来たメリャーナの供をしていたマリーを　『母さん』　と呼んだのだ。

マリー「……。」

エヴァニー「…どうして黙ってるの？　そっか、母さん疲れてるんだね？　父さんも最近忙しいらしいし、帝国軍も大変なんだぁ…」

エヴァニーは１６歳だから、２８歳のマリーの息子というのは無理がある。　ただし、エヴァニーの世界が子供の頃に戻っているならば、２８の母親は変というほどではない。

ちなみにエヴァニーの本当の両親も、共に帝国軍の士官だった。メリャーナが調べたところによると、２人ともマリーと同じ少佐であり、若いうちからエリートコースを歩んでいたようだ。

エヴァニー「寂しいけど、我慢するよ。　父さんも母さんも、世界を平和にするために戦ってるんだもんね」

だがエヴァニーの両親は、次第に反帝国レジスタンスの討伐軍を率いるようになっていく。

最初は忠実に任務をこなしていたようだが、現地の実情を知るにつけ、帝国軍のあり方に疑問を持つようになったのだろう。　直属の上官と、かなり激しいやり取りをしたという記録が残っていた。

エヴァニー「そうだ。　僕、母さんの肩を揉んであげるよ！　肩、こってるでしょ？」

言葉には屈託がまるでなく、それなのに暗く濁った目をしたエヴァニーは、マリーの肩に手をかけた…。

マリー「痴(し)れ者がっ！！」

掛けられた手を振り払い、強烈な膝がエヴァニーの腹部を捉えた。
　エヴァニーが涙を流しながら崩れ落ちる。

エヴァニー「…母さん？　なんで？」

マリー「貴様、あれだけ強がっておきながら、その始末がこれかっ！　母さんだと？　ふざけるなっ！　貴様ごときが息子などと、私

を侮るなっ！！」

さらに手刀が入った時、ベンとナディアがマリーに組み付いて、止めた。

それでもマリーは力を緩めなかったが、メリャーナが涙を浮かべて首を振るのを見て、ようやく身体から力を抜いた…。

【5】

結局エヴァニーは、メリャーナが引き取ることになった。

実はフロンティアガードとしても、元グランズのリーダーであるエヴァニーが、リターナに溺れているなど、自警団の士気的に問題があり、持て余していたのだ。

そして何より、メリャーナが彼らに責任を感じていた。

メリャーナ「……。」

そんなメリャーナは、専用ガルダに戻ってからも、苦しそうな表情

を崩せないでいた。

それを見て、マリーはまたエヴァニーの襟首を掴んだが、それで事態がどうにかなる訳もなく、医務室のベットに寝かされただけ。

ロメオ「軍医殿？　リターナの毒性を中和する薬は、何種類かあったはずですよね？」

医療知識をカトラスの1件でも高く評価されたロメオが、メリャーナの信頼する軍医に声をかけた。

軍医「よく知っておるの。　じゃが、こうまで短期間に大量摂取した例はまずない。　リターナはその毒性自体もさることながら、体内残存性こそが厄介なんじゃ」

軍医の話によると、かつて治療した人間の中には、リターナの服用を止めて半年も経ってから、服用時と同じ反応が出た患者もいたらしい。

ちなみにその患者は、半年もの間治療の苦痛に耐えてきたのに、その思いつきのような快楽に毒され…　逃げ出し…　再びリターナを使い…

結局死んだという。

軍医「こやつの身体は、リターナで満たされたも同じよ。　今さら服用を止めさせたくらいでは、良くなる見込みはたたん。　中和薬の効果はあるじゃろうが、下手に投薬を為せば、煮えたぎった油に冷水を掛けるも同然じゃて」

そんな事をすれば逆に燃え上がる。　事態を悪化させかねないと、軍医は言いたいらしかった。

ナディア「正気に戻る時はあるんです！　そんな時は、立派なリーダーのままで…。　私の事もちゃんと判ってくれて…」

そこまで言うのが精一杯だったのか、ナディアは泣きながら座り込んでしまう。

軍医「先にも言うたがの？　リターナの毒性にはかなり持続性がある。　だから、一時の良化に油断すると、とんでもない事になるんじゃ。　気長に付き合っていく事を勧めるがの」

軍医の声はあくまで冷静で、それがナディアにはどうしようもなく辛かった…。

第９７章　失踪（前書き）

（４回目）

エイス「このシリーズ、微妙ぉ～」

シクス「あはは…。　エイスちゃんってば、思い切り良すぎなんだもん。　もっと奥ゆかしくしてみない？」

エイス「…あたし、そういうの苦手なんだよね～。　でも、シクスが言うなら…」

シクス「じゃ、ゲスト呼ぶよ？　今回はメリャーナ皇女殿下です」

メリャーナ「よろしくお願いいたしますわ」

エイス「おおっ、何か見るからに奥ゆかしい気品が！」

シクス「え、エイスちゃん！　相手がじゃなくって、エイスちゃんが奥ゆかしくするの！」

エイス「…そ、そだっけ？　じ、じゃぁ…　う、ウソ発見器をつ、つけさせていたどぁ…　頂きますね？」

メリャーナ「はい」

シクス「それで、質問にはみんな『いいえ』と答えてください」

エイス「それでは始めみゃ…す」

シクス「今現在、心を寄せている方はいますか？」

メリャーナ「いいえ」

『ピピ…』

シクス「ちょっとだけ反応が…」

メリャーナ「私、以前に一度結婚しておりまして。　政略結婚と言われれば、その通りなのですが、そんな私を亡き夫は慈しんでくれました。　それは男女の愛とは違うのかも知れませんけれど、感謝と敬意の念は、今も持ち続けておりますわ」

シクス「…い、いいお話だよぉ…」

エイス「ちょ、ちょいシクス?!　何かあたしだけ浮いちゃってるような…」

シクス（だから、今回はそういう路線なんだから！）

エイス（わ、わかった…）

エイス「…で、ですぐゃ、なきゅ…　亡くなられた方なんですよね?

そこで二問目。　すぐに新しい恋をしてみたいですか?」

メリャーナ「いいえ」

『ピピピ…』

シクス「さっきよりは強い反応…」

メリャーナ「私も女として、そういった感情が芽生えるかも知れませんね？　けれど皇女の立場は、それを許さない事もありますし、何より恋はしたいからするものではなく、自然に芽生えるものですわ」

シクス「なんかうまくいってる～」

エイス「けど、ページが足らないっ！　延長しよっ！」

（延長戦突入）

第９７章　失踪

インド洋に浮かぶマッドアングラー級。　ラピスラズリの狙撃を逃れた1隻だ。

そこにはＢＸ以下、ゴトーたち傭兵と引き分けた3人のエージェントと…　アッシュがいた。

ユーリ「…で、仲間見捨てて帰って来たの？　あんた馬鹿？」

アッシュ「なんだと？！　てめぇに言われる筋合いは…」

ジェイソン〔では、私が言って差し上げます。　エージェントＡ！　敵前逃亡など、ザキラ様の名を汚す振る舞いです！　帰ったらそれなりの仕置きをしますから、覚悟しておきなさい！〕

アッシュ「うげ…」

脳量子波で叱責されてしまうアッシュ。　他から受ける影響が皆無とは言えないし、使える人間が限られてはいるものの、今回、脳量子波はインド洋にまで明瞭に届いていた。

ジェイソン〔それに比べてユーリは偉いですよ？　私との約束を、見事に果たしたのですから…〕

ユーリ〔よかったわね〕

一方で、高い評価を受けるユーリ。　ただ2人の間には、微妙な空気が流れている。

ジェイソン〔そう突っかからない事です。『あの子たち』は、私が責任を持って預かってますから…。　昨日も軍の学校に元気に通って、美味しいディナーを食べてましたよ?〕

ユーリ〔軍の学校ですって?!〕

冷静なはずの彼女が、驚く。

ジェイソン〔勘違いしてもらっては困りますね。　帝国に住む子供が、どれだけ軍附属の学校に通っていると思ってるんです?　ただ、それだけの話ですよ〕

ユーリはまだ憮然としていたが、ジェイソンの言葉は、間違いではない。

帝国では、軍が子供の教育に熱心だった。　授業料は全額免除されるし、しかも将来軍での出世に有利という噂で、目指す人間はかなり多かった。　そうすることで、有能な人材を確保しようとしているのだ。

ジェイソン〔孤児だった時、あの子達は何を食べていたんですか？
　毎日食事がおいしいと、おかわりばかりしていますよ〕

ユーリ〔…それは分かったわ。　だけどまだ、私に隠している事があるんじゃない？〕

子供の話題には、不承不承ながら納得したらしいユーリだったが、まだ問い詰めたい事があるらしい。

ジェイソン〔隠している事ですか？〕

ジェイソンは、オウム返しに質問を返す。

ユーリ〔そうよ。　ディアボロ・システムの秘密、いい加減にしゃべったらどうなの？　こっちは1人、変に突っ走ったのが出て、いい迷惑だわ〕

エルフレア「……。」

変と言われ、ムスっとするエルフレア。　ただ、ザキラの側近ジェイソンとの会話なので、割り込んだりはしないようだ。

ジェイソン〔ディアボロ・システムが、脳を含む全神経と信号を共用するのは、最初からでしょう？　訓練中に発狂した人間だっていますし、何を今さら〕

ユーリ〔そのディアボロって、いつからお喋りが趣味になったのかしら？　故障って言ってしらばっくれても、今日は許さないわよ？〕

一方、ジェイソン相手でも、慎むことを知らないユーリ。彼女は量子波で矢継ぎ早に送り、ジェイソンに不信感を叩きつけた。

ジェイソン〔…お喋り？　意味が分かりません〕

だがジェイソンは、まったく訳が分からないと言いたげな量子波を返してきた。

ユーリ〔とぼけて誤魔化す気？　前から薄々は感じてたけど、頭の中に直接話しかけてくる奴がいるのよ！　あの人格は誰で、何のためにそんな手の込んだ真似をしているの？　洗いざらい吐きなさい！〕

ジェイソン〔…ですから、一体何の話ですか？　ディアボロが喋る？　ユーリ、あなたもシステムの負荷に耐えきれず、頭がおかしく

なりましたか？」

ユーリ「…もう、いいわ…」

ユーリは何かを諦めたように、ため息をついた。

ジェイソン「とにかく、全員戻り次第撤収しなさい。　今回の働きはザキラ様もお喜びです。　エージェントA以外の者には、相応の褒美を下さるようですよ」

脳量子波は途絶えた。

結局、ユーリの疑念はかえって深まったようで、通信前より難しい表情をしていた…。

【2】

脳量子波の通信から1時間ほど後。　マッドアングラーに、残ったメンバーが帰還して来た。

フォーリュン「ＢＶ（ブラックヴァーサゴ）の姿がない…。　Ｚ－Ｐｕｌｓも1機足らないな。　撃墜2。　挙げた戦果は大きいが、被害なしとはいかないか…」

フォーリュンが深いため息をつく。　戦友を失うのは、比較的堅いイメージのある彼女にとって、辛い事のようだ。

バーストン「機体は失ったが、チャーリーは連れて帰ってるぜ。…まあ、その、なんだ…。　復帰は厳しいかも知れないんだがよ…」

フォーリュン「…命があるだけ、よしとすべきなんだろう。　では…」

レナ「……。」

ラリー「……。」

アルヴィン「……。」

その場を支配する、重い沈黙。

フォーリュン「隊の長を失ったのは、ショックだろうな。　だが、沈んでばかりいても始まらない。　ここは気持ちを切り替えて…」

レナ「隊長は…　死んでなんかいませんっ！！！」

レナが突然あげた叫び声。

フォーリュン「…戦死…　ではないのか？」

先に述べたように、ディジョンのＺ－Ｐｕｌｓは、マッドアングラーに戻ってはいなかった。　だからフォーリュンが、ディジョンが戦死したのだと考えても、やむを得ない状況だったのだが…。

バーストン「その場を見ていないフォーリュンに言っても、信じられないかも知れない…。　いや、信じられる奴の方が少ないぜ。それでも聞くか？」

バーストンの言い方は、かなりおかしな感じだった。

フォーリュン「…そう…　だな。　仲間に何があったかくらい、最低限知っておきたい」

戸惑いがちながら、ハッキリとした意思を返すフォーリュン。

バーストン「じゃあ、聞かせる。　俺はギャグとかお笑いは好きだが、仲間を騙したり、からかったりするのは嫌いだからな？」

信じられない話だが、真実だと言いたいのだろう。　そう前置きをしてから、バーストンは静かに語り始めた…。

【3】

突き刺したビームサーベルを抜きもしないまま、Ｚ－Ｐｕｌｓは動きを止めていた。

訓練ならば、サーベルでの攻撃をした後は、すぐに身を退けと教わる。　ビームライフルとは違い、射程が短いかわりに威力が高いサーベルは、致命傷になりやすい。　倒した敵の爆発に、自分が巻き込まれないようにするためだ。

しかし、１分経ってもＢＶもＺ－Ｐｕｌｓも、まるで動かなかったという。

フォーリュン「相討ちか？」

バーストン「相討ちも、めずらしいっちゃあそうだが…。　まあ、聞いてくれ」

化け物と化したＢＶ相手だったから、近寄るのが躊躇われたが、ディジョンを放ってもおけない。　機体が動かない、気を失っているとかならば、助け出さなければならないし、最悪死んでいても、化け物を倒した殊勲者の遺体だ。　回収して花ぐらい手向けたい。

そう思ったバーストンが一歩踏み出すと、それがきっかけになったのか、レナ、ラリー、アルヴィンが一斉にＺ－Ｐｕｌｓに取りついたという。

ＢＶは引き剥がされ、この時チャーリーは助け出された。

フォーリュン「そうだ。　聞き忘れていたが、チャーリーの容態はどうなんだ？　応急処置は終わっているのか？」

バーストン「身体に傷はねぇよ。　イカれちまったのは、頭の方だ」

フォーリュン「…頭？」

バーストン「後でチャーリーに会えば分かるぜ。　とにかくチャーリーは、ディアボロシステムに殺されたようなモンさ…」

ＢＶが再び動き出さないか、バーストンとラピスラズリたちはまず

気にしたらしい。　チャーリーは機外に出したと言っても、もはや常識が通じる相手じゃなかったからで、だからディジョンを隊の３人に任せて、ＢＶを壊すことにした。

ラピスラズリとは敵のはずだったが、化け物を前にすれば、多少なりとも関係は変わる。　それにＢＶを処分することは、帝国にとっても機密保持になる。

こうしておおよその利害は一致し、ＢＶは跡形も残さないくらい斬り刻まれ、吹き飛ばされたのだが、その時異変は起こった…。

バーストン「いきなり、あいつが叫んだんだ」

フォーリュン「ディジョン大尉は、生きていたのか?!」

生きている。

それ自体に間違いはない。　だがその様子はあまりに変わり果て、喋る事からして、意味が分からかったというのだ。

バーストン「…そうだ。　あの有り様は、ＢＶから降ろす前のチャーリーそっくりだった」

フォーリュン「チャーリーも気が変に?」

バーストン「ああ。　俺が救世主だの、最強の力を手に入れただの、訳の分かんねぇ事ばかりを戦いながら叫んでた気がする。　それとあんまし違わない状態に、あいつはなっちまったんだよ」

訓練で知る限りではあるが、ディジョンと言えば

『熱く自分の信念を貫く男』

に見えた。　しかしけして、無理や無茶をするタイプではない。特に部下を案じるあたりは、一流の指揮官の片鱗すら感じたほどだ。

バーストン「それがいきなり

『私は為すべき事を思い出した！　今まで私は、全うするべき使命すら忘れて生きていたというのか！』

なんて叫べば、誰だって驚くさ」

レナ「…あんな隊長、見た事ないです…」

思い出したのか、レナは泣きじゃくっていた。

バーストン「で、いきなりあいつのＺ－Ｐｕｌｓが起動してだな、飛んで行っちまったって寸法だ。　どうだ？　信じる方がおかしくねぇか？」確かにあり得ない事ずくめだった。

ＢＶの暴走に始まり、チャーリーの変化、さらにはそのチャーリーが乗り移ったかのようなディジョンの失踪…。

【４】

ユーリ「そうでもないかもね？」

全員が、ギヨっとした表情で見る。　そう言ったのはユーリか？

ユーリ「あんたとあんたには、さっき話したでしょ？　ディアボロ・システム…　デビルに意思があるって話」

そう言えばユーリは、撤退中にそれらしき話をしていたし、先にもジェイソンを問い詰めていた。

エルフレア「…そういう結末もあるのか…」

そして呟いたのは、そのユーリに変だの、操られているだの、さんざんに言われてしまったエルフレアだった。

そんな様子を見て取ったのか、ユーリは話をエルフレアに振る。

アルヴィン「お前、何か知ってんのかよ！」

ラリー「教えて下さい！　いったい、隊長に何があったって言うんですっ！」

レナはまだ泣いていたが、他の2人はエルフレアに向き直った。

ラリーなどは、言葉こそ丁寧にしていたが、いまにも掴みかかりそうな勢いである。

エルフレア「…わ、私が見たのは、グラーフェンでの事だ…。　起こった事実そっくりだったが、微妙に違うような気もする。　自分の思い出したくない、嫌な記憶だけを繋ぎ合わせたようで…。

それと私に、『戦え』『倒せ』とけしかける声がした」

エルフレアの話だと、それはＢＸに乗って、ディアボロ・システムを使っている時にしか起こらないことだという。　それも、戦闘が

激しくなればなるほど、強くなる傾向があるらしい。

エルフレア「私は、システムに神経を繋いでいるから、昂った気持ちがそうさせるものだと、勝手に思っていた。

私は正直な話、父上や母上、グラーフェンの兵たちを殺した奴らが憎い。　奴らクアルーンが国を失おうとも、地の果てまでも追いかけて、皆殺しにしてやりたいと今でも思っている。　それに味方したインドラも含めて、だ」

バーストン「チャーリーも、そんなとこがあったかも知れねぇな。　あいつがひねくれたのも、たぶんどっか心の隅に、暗い過去を抱えてたからだと思う。　見返したい奴がいると、話してたような記憶がある」

共通する恨み、過去への拘り。

フォーリュン「ディジョン大尉にも、恨みを抱く相手が？」

レナ「隊長に限ってそんな事っ！」

ディジョンを信じたいのか、泣きながらレナが抗議の叫びをあげる。

だがそれは、本人しか知らない事であった。　ディジョンは、派閥的に言えば非主流派であり、冷遇されてきた。　恩義ある将軍達の

理想を取り戻そうにも、今の帝国軍は、それを拒むかのような方向に変わり続けていたのだ。

フォーリュン「…しかし、1つだけ疑問が残るな？　エルフレア殿もチャーリーも、エージェント専用のブラックシリーズ…　ディアボロ・システムを積んだＭＳに乗っている。　大尉はエージェントではないから、違うのでは…？」

ユーリの言うように、原因がディアボロ・システムなら、それを積んでいないＺ－Ｐｌｓに乗るディジョンが、突如失踪した理由にはならない。

レナ「…理由になるかは分かりません。　けれど私たちのＭＳも、神経接続を用いていますから、それがもし何らかの作用をしたのだとすれば…」

ついでレナは、ディジョンがパンドラールの怪しげな研究所に忍び込んで以来、『変な幻聴が聞こえる』と語っていた事を話す。

ユーリ「ほら、やっぱり何か隠してるのよ」

状況証拠と言うにも弱く、第一、ディジョンとチャーリーの身に何が起きたのか、何の説明にもなってはいなかったが…。

とにかく、システムの秘密とそれにまつわる陰謀の臭いに、彼らは大なり小なり巻き込まれて行くのだった…。

第９８章　宇宙要塞サーライト（前書き）

（延長戦中）

エイス「恋バナ、メリャーナ編続いてま～す」

シクス「という訳で、次の質問を」

エイス「将来人生を共にする男…　性は、知的な方が…　いいですか？」

メリャーナ「いいえ」

『ピピピピピピ…』

エイス「あっ！　けっこうイイ反応っ」

シクス「エイスちゃん！　おしとやかに！」

エイス「…っ…　反応しましたね？　聡明なやつ…　方が好みなんですか？」

メリャーナ「その前に、こちらからお聞きしてもよろしいですか？　なぜ、私が知的な殿方が好みかという質問を？」

エイス「そりゃあ、あんたのトコの人から頼まれ…」　シクス「わーわーわーわー聞こえない～！！！！！」

エイス「ちょ、シクス何すんの？」

シクス「エイスちゃん。　依頼の秘密は厳守だし、言葉も元に戻ってるよ～」

エイス「だってぇ～。　そもそもこのコーナーの趣旨、暴露だしぃ～」

シクス「だからって、まだ本編で告白もしてない恋を、バラしちゃ

マズいって！」

メリャーナ「へ～。　そういう事なのね。　つまり、私の陣営の誰かが主君である私に、忠誠心とは違った感情を抱きつつあるのね…」

シクス「ちょっと、皇女殿下？　口調変わってますけど？？？」

メリャーナ「だって、こんな面白いお話だもの。　ただ質問されるだけじゃ物足りないと思いますわ～」

エイス「よく分かってるじゃん！　恋バナはやっぱり、女のコの大好物だよねっ♪」

シクス「あ～。　せっかく延長したのに、またグダグダな予感～。　もうここで、読者の皆さんにはお別れしておきます。　さよ～なら～」

メリャーナ「うちの軍ってことは…。　シュバルツ中佐とグリフィン少尉は、もう結婚してますし…」

エイス「サコン、カトラス、ロメオ…。　意外と、味方になったば

かりのフロンティアガードの誰かとか？」

メリャーナ「焦らしますのね？」

エイス「そりゃもう。　と見せかけて、実は一番身近にいる人が…」

メリャーナ「えっ？！　それは、もしかしてガールズラブ…？」

（はい、グダグダ）

第９８章　宇宙要塞サーライト

物資を運ぶ艦が行き交い、建設用ＭＳが忙(せわ)しなく動く。　中には本来、第一線で戦うはずのゲイツの姿まであり、作業が急ピッチで進められている事が分かる。

霧雨「レイ。　サーライトの完成まで、あとどれぐらいかかりそうかな？」

建設されているのは、宇宙要塞サーライト。　宇宙屈指の大貴族霧雨家が、そのプライドにかけて始めた壮大な計画だった。

レイ「霧雨様も、気が早いですね。　いくらマヒロ殿下が物資を融通してくれたとはいえ、宇宙要塞を丸ごと１つですから…。　普通なら１年はかかります」

霧雨「半年で完成させてよ」

無茶を言う。

だが霧雨は、まるで誕生日かクリスマスでも楽しみにしている子供のような表情をしていた。　つまり本気なのだ。

リバル「サーライトが出来上がれば、レンカの防衛は確かな物になります。　仮に本国と戦うにしても、ルナ2からの軍は、レンカ攻めの際に、サーライトに横腹を晒さなければならなくなりますから」

リバルが物騒なことを喋る。　だが霧雨は、聞き咎める様子もない。

レイ「…お言葉ですが、霧雨様…。　私は、サーライトができたとして、軽々しく戦う気にならない方がいいと思います。　あくまでサーライトは抑止力とすべきであって、戦力にするべきではありません」

意見が割れた。

霧雨「もちろんそうさ。　だけどマヒロが要求した賠償を、まだ1ギラも払ってないのは誰かなあ？　あれで、霧雨の兵もずいぶん死んだ。　あれがあったから、サーライトが必要になったのさ」

本国への要塞建設の名目は、失った艦隊の穴埋めと届け出てあった。　実際、30隻近い艦を失っていたから、それぐらいしないとレンカを守れないと言って、押し切ったのだ。

レイ「侯爵が、頭を抱えておいででしたよ？　『このままでは、せっかく纏まりつつあった宇宙がまた荒れる』とお嘆きでした」

霧雨「でも、先に乱したのは誰か、考えなくても分かるだろう？」

霧雨は、側近の心配を省みもしなかった…。

【2】

霧雨侯爵「…最近の薙華には困ったものだ」

そう呟くのは、一応の霧雨の当主、霧雨侯爵その人である。

ただ当主とは言うものの、嫡流の薙華が成長してからというもの、彼の立場は微妙だった。

叔父。　言葉で言えばそうなるが、先代の異腹の弟であり、生まれもたいした身分ではない。　薙華が幼かったから後を継いだだけで、誰もが彼をただの中継ぎと見ていた。

それだけでも十分なお飾り当主なのに、奥手で慎重な性格。　前に出るのを好む薙華に比べると、余りに目立たない人となりであった。

霧雨侯爵「あやつも、あの一件で考え方を変えるかとも思ったが、

かえって凝り固まってしまったしな…」

あの一件とは、実験機の暴走事件である。

それに対する償いがない事に、レンカの誰もが不平を感じていた。

それ自体は仕方ないにしても、薙華はその動きを煽っている感があるのだ。　このままでは本国と争いになると、侯爵は心を痛めていた。

マリアベル「侯爵。　こちらの書類に認可をお願いします」

淡白な声だった。

自分が大貴族霧雨家の当主として、繋ぎ以上の期待をされていないことは、彼自身が一番よく知っていたけれど、このマリアベルは特に酷い。　書類を示しても、内容が何であるかすら説明しない。

当主の印がどうしても必要だから持ってきているだけで、必要なければ薙華に決済を仰ぐ。

以前に一度決済を断ったら、次の日に違う表紙をつけてまた持って来た。　もちろん内容は同じままで。

霧雨侯爵「…もう傷はよいのか？　何でも、第４皇子レオンハルトを名乗る人物と、一戦交えたそうではないか？」

マリアベル「傷は完治しております。　それと、賊を皇子と認めるかのような発言は慎んで下さい」

キッパリ言い切る。

薙華もそうだが、マリアベルもその側近だけあって、プライドが高い。　自分が認める人間ならいざ知らず、お飾り当主などに払う敬意はないらしい。

霧雨侯爵「…そうか…」

結局この日も、全ての書類の決済を強制された形になった。　新型ＭＳの量産など、いたずらに本国を刺激するだけだと思ったが、お飾りの彼に止める術はなかった…。

【3】

イエスマン「んっふっふ～」

鼻唄混じりでご機嫌なのは、ザキラの側近筆頭を自認するイエスマンだった。　研究一筋のＤＲ．マンソン、どちらと言えば押しが弱いジェイソンより、頭１つ抜け出た印象は確かにある。

ザキラ「何か良い事でもあったか？　イエスマン」

訊いたのは、主君のザキラだった。　ジェイソンを伴って、議会に出て来たところ…　つまり、宰相としての表の仕事を終えたばかりのようだ。

イエスマン「いえね、ボス。　前に言いませんでしたか？　宇宙をもっと面白おかしくするってお話」

ザキラ「霧雨なる若造か。　最近では要塞なども造り、いい気になっているらしいな？」

サーライト建設の実状など、ザキラには筒抜けだった。　邪魔しようと思えば簡単だったが、わざと押しきられた振りをして建設を認めた。

イエスマン「はぁ～い、ボス。　あちらさんも殺る気なようですね～。　どうやって打ち砕いてあげましょうか？」

そう言えば以前、彼らを挑発するのを提案したのも、イエスマンだった。　今の所、ザキラの判断で様子を見ているが、そろそろ待ちきれなくなったのだろうか？

ザキラ「…そうだな？　若僧1人どうとでもなるが、要塞ができてしまえばそれなりの準備が要る。　面倒になる前に潰すか…？」

唇の下に指を持っていき、やや考えるザキラ。

ジェイソン「その件、私にお任せいただけないでしょうか？」

イエスマン「エージェントJ？」

ザキラの後に控えていたジェイソンが、突然積極的な発言をした。
彼がこんな態度に出るのは珍しい。　イエスマンが驚いている。

イエスマン「どういう風の吹き回しですかぁ～？　さては…」

ジェイソン「さても何もありませんよ！　私は今でも、不用意な強硬策には反対です！　ですが、ザキラ様のたってのお望みとあれば、如何なる難事も必ずや成し遂げてご覧に入れましょう！」

勘繰ろうとしたイエスマンを一蹴し、強気を貫いたジェイソン。
そんなジェイソンに、ザキラは満足そうに頬を緩めた…。

【4】

らしからぬ強気を貫いたジェイソンは、その足で同じくザキラの重鎮である、DR．マンソンの元を訪れていた。

ジェイソン「ドクター。　派手に事を起こします。　使えるエージェントを何人か手配して下さい！」

研究所の一室に入るなり、そう声をあげる。

DR．マンソン「何じゃ？　お主らしくなく、妙に意気込んでおるの？」

イエスマンと違い、ジェイソンと親しいマンソンにも、そんな彼の姿は意外だったらしい。　目を細めて、ジェイソンの方を見ている。

ジェイソン「ザキラ様のご希望を叶えて差し上げたいだけですよ。それでですね、情報戦に長けたエージェントはいませんか？　敵の

内情を暴いて晒す必要があるんです」

ＤＲ．マンソン「戦闘部隊ではないのか？　まあよいか。　ならばＨとＩを使え。　今呼び戻す…」

何かをするべく、席を立ちかけたマンソンだったが…。

？？？「…親父。　もう帰って来ている」

？？？「しっかりお土産も狩って来たよ～」

？？？「うっ…　ぐっ…」

そう言って部屋に入って来た２人は、縄で縛りあげた男を１人連れていた。　どうでもいいが、縛り方が亀甲縛りなのは何故だろう？

ＤＲ．マンソン「早かったの、エージェントＨ、Ｉ。　そいつが、ザキラ様の周りを嗅ぎ回っていた鼠か？」

？？？「うっう～！！」

口に物を噛まされているので、縛られた男の叫びは言葉にならない。
　ちなみに、噛まされている物が、これまた何故かひょうたんの形をしているのだが、たぶん話の主題には関係ないので、見なかった事にしておく。

???「ちょっと～。　そのアルファベット呼び、嫌いだって言ったはずだけどな～？　ちゃんと僕にはイドゥン、兄さんにはハイドって名前があるんだから、そう呼んでよね？」

顔はさほど似ていないが、気の合った感じが特徴的なエージェントだった。　さっきから饒舌なのがイドゥン、もう片方がハイドのようだ。

DR.マンソン「細かい事をいちいちと…。　それより、そ奴は何か吐いたか？」

マンソンは抗議には耳も貸さず、さっさと本題を切り出す。

イドゥン「な～んにも。　だいたいさぁ、敵地に潜入してる諜報員が、そんなに口軽いワケないじゃん？」

ハイド「コードネームが『グアテマラ』という事ぐらいだな。　他にも、コーヒーの銘柄をコードネームにしている奴がいたが、皆同じだった。　仕方ないから、殺して埋めてきてやった」

イドゥン「そうそう、兄さんったら、すっごい律儀なんだよ～。埋めた後に、しっかり花なんか供えちゃってさ。　可哀想って思うなら、殺すなっての」

楽しげに喋り続けるイドゥンだったが…。

ジェイソン「ゴ、ゴホン！」

咳払いでジェイソンに注目が集まる。

イドゥン「…わざとらしいよ？　そんなに蚊帳の外が嫌だった？」

ハイド「イドゥン、それぐらいにしておけ。　で、親父。　新しい任務なんだろう？　何を探ってくればいい？」

やや強面だが、任務には忠実らしく、ハイドはジェイソンとマンソンに向き直った。

ジェイソン「霧雨を知っていますか？」

イドゥン「知ってるよぉ～。　宇宙でサーライトなんて要塞造って、いい気になってる人でしょ？　新型ＭＳも量産しちゃって、殺る気満点って感じ？」

嵐のように喋りまくるが、新型ＭＳの情報はジェイソンも初耳だった。　現地に行ってもいないのに、情報を得る術があるというのか？

ＤＲ．マンソン「…内容はともかく、本気で煩すぎるわ。で、ジェイソン。　こんな奴らじゃが、役に立ちそうかの？」

渋い表情のまま、マンソンはジェイソンを見る。

ジェイソン「素晴らしいですよ！　もう少し固めてやれば、霧雨を逆賊として討伐してやれます」

マンソンとは違い、ジェイソンは満足気に2人を見ていた。　実務的なジェイソンには、彼らが情報の下地を持っていた事が魅力的に映ったらしい。

ハイド「了解した。　だが、調査後の討伐は他のエージェントに殺らせてくれ。　必要とあればＭＳに乗りはするが、それは本来、私たちの任務ではない」

それだけ言うと気配が消えた。　同様に、あれだけかしましくしていたイドゥンも、気づかないうちに姿を消していた…。

【5】

DR．マンソン「何じゃ。　自分では戦わんのか…」

面倒臭さそうにするマンソンだったが…。

ジェイソン「彼らは彼らなりに、仕事に拘りがあるのでしょう。それに戦うエージェントならば、他にもいます」

2人を気に入ったらしく、ジェイソンは2人を弁護した。

DR．マンソン「確かにの。　インドラから戻ったメンバー使えば良いか。

…エージェントAとか？」

ジェイソン「絶対にお断りします！」

力一杯拒絶するジェイソン。

DR．マンソン「…冗談じゃ。　Uがおるじゃろ。

そう言えば、BS用の核弾頭（ブラックサイサリス）を確保できたぞ。　原型機の核よりも強力な物じゃ」

核を使えば、威力は通常のMSの攻撃とは比較にならない。　要塞が溶けてなくなったりはしないだろうが、致命的な被害を与えられるはずだ。

ジェイソン「ユーリですか…。　ドクター。　BSを違うエージェントに使わせる訳にはいかないんですか？」

ジェイソンは眉をしかめていた。

DR．マンソン「どうした？　Uの活躍を、お主も喜んでおったばかりではないか。　まさか今さら、人質は卑怯などとは言い出さんだろうな？」

ユーリの唯一の気がかりである孤児達は、ジェイソンの監視下にあ

った。　今は何も特別な事はしていないが、ユーリが命令に逆らえば、子供は当然殺される運命にある。

ジェイソン「違いますよ。　私もユーリは使えると思っていたんですが、少し当てが外れたようでして。　ディアボロ・システムが人間と会話するなどと、寝惚けた事を言い出してですね…」

DR．マンソン「何じゃと?!　ディアボロが喋ったと言いおったのか!?!?」

ジェイソン「…え、ええ…」

マンソンのあまりの驚きように、呆気に取られてしまうジェイソン。

ジェイソン「ドクター?　なぜそんなに驚くんです?　ドクター?」

その理由を、彼はマンソンに尋ねたが、マンソンは一心不乱に何かを始めてしまい、ついに答が得られる事はなかった…。

第９９章　謎計のカトラス（前書き）

（５回目のはず…？）

マリー「誰がガールズラブですかっ！！」

エイス＆シクス「ひゃうぅぁぁあ～！！」

メリャーナ「…マ、マリー？　ちょっと落ち着いて…」

マリー「これが落ち着いていられますかっ！　メリャーナ様の侍従となって１０年…。

いいえ、側役だった父と共に、ご幼少のメリャーナ様にお仕えさせて頂いた時期も含めれば、１５年以上ですっ！　その忠義を、女性同士の禁断の愛と思われていたとはっ！！

…私…　私、メリャーナ様にかような誤解を受けて、生き恥を晒せるほど、強くはありません。　それでは御免っ！！」

エイス「ちょ、ちょっと待ったぁ～！

文章長っ…　じゃなくって、死人も生き返るこの冒頭文で、逆に死んじゃマズいから！」

シクス「だいたいこの冒頭文って、小説だけじゃ飽きちゃう人向けの、コメディタイムだしっ！！」

メリャーナ「…

メリャーナ「…

メリャーナ「…マリーは違ったのね…？」

マリー「…は？」

シクス「ちょ、皇女殿下？　何を…」

メリャーナ（小声）「任せてって」

メリャーナ「マリーは、男の人を本気で好きになった事って、あるのかしら？」

マリー「いいえ…」

シクス「ウソ発見器、無反応で～す」

メリャーナ「私もそう。　私も紹介されるのは、皇女としてふさわしいお相手の方ばかり。　いい人もたくさんみえたけど、そこに本当の愛はないわ。

だからマリーとなら…　って気持ち、少しはあったのよ？　マリーにはなかった？　まったく？」

マリー「申し訳ありません！　そこまでご配慮できず」

エイス「答えがいいえじゃないケド、反応はないよ～」

メリャーナ「そんな気持ちを抱いた事もあるマリーだから、女としても幸せになってほしいのよ。

マリー。　今、気になる人はいるの？」

マリー「いいえ…」

シクス「反応な～し」

メリャーナ「武術はマリーができるから、相手の方は弱くてもいいのよね？　聡明で、容貌に秀でた方がいいのかしら？」

マリー「い、いいえ…。　どうせなら、私を負かすくらいの…」

エイス「反応皆無っと」

メリャーナ「分かったわ！　マリーの好みと傾向！　当てはまる方は、私宛にメールをここまで…」

マリー「はい？　なんでそんな話に？？」

メリャーナ「だってここ、恋愛事情を暴く冒頭文よ？　マリーも出ちゃったからには、暴露されないといけないのよ」

シクス「殿下、さすがの名演技～」

エイス「ホントに凄かったよ～」

マリー「…メ、メリャーナ様っ！　私を騙したんですか？！」

メリャーナ「まだまだマリーも甘いわね」

シクス「という訳で、今回の恋愛暴露、　ゲストは侍従のマリーさんでした～」

メリャーナ「それではみなさん、失礼いたしますわっ！」

マリー「メ、メリャーナ様ぁ～～～！！」

（メリャーナ大活躍。　続く、たぶん）

第９９章　謎計のカトラス

カトラス「よう！　悪りぃなサコン。　俺とした事が、つまんねぇミスしちまって」

オデッサに入城を果たした翌々日、カトラスは病院を退院した。
そしてその足で、オデッサ近郊にあるメリャーナの軍の司令部に来ていた。

サコン「ミス？　ケガの事なら、失敗でも何でもない。　カトラスにもしもの事がなくて良かった。

それにしても、入院していても策を成功させるなんて、さすがカトラスだな」

サコンはそう言って肩を叩いたが、何故かカトラスの方は怪訝な表情だ。

カトラス「策って、俺は何もしてないぜ？」

サコン「はぁ？　オクサイド軍で狂犬病患者が暴れただろう？　他の兵士も感染したかも知れないって、大騒動になったらしいぞ？」

もったいぶっているのかと思って、サコンは少し大袈裟に言ってみ

たが…。

カトラス「…それがよ…。　被弾した後から半日ばかり、記憶がないんだ。　ロメオの話だと、ふつうに歩いて喋ってたようなんだが…」

サコン「何だそれは？　じゃ、噂もその間に広めたのか？」

カトラス「…解からねぇよ。　記憶がねぇんだから。　ただの偶然じゃねぇのか？」

カトラスはあっけらかんとしていた。　少なくとも、もったいぶっているようには見えない。

サコン「…偶然なあ…。　運も実力のうちとは言うが、だとしたらカトラスの実力は、歴史に残る英雄級だな…」

サコンはそう言って、困惑した表情を浮かべた。

それはそうだろう。　自分が必死になって考えた策が、偶然成就したと言われたのだから。

カトラス「まあ、いいって事…。　よぉ、ロメオっ！」

話の途中だったが、カトラスはロメオを見つけると駆け出して行ってしまう。

サコンの聞いた話だと、カトラスの治療をしたのは、オクサイド軍の軍医とロメオの2人らしい。

ロメオ「カトラスさん？　やっと退院ですか」

ただ、サコンが気になったことが1つ。　普通なら、退院した仲間を迎えるのには、『もういいんですか？』とか、『早かったですね？』と言いそうなものだ。

なのにロメオは、『やっと』と言った。　サコンが知る限り、ロメオは冷めた性格ではなかったはずだが…。

カトラス「何だ？　あんま嬉しそうじゃないな？」

サコンの感じた雰囲気は、間違っていなかったらしい。　カトラスも口を尖らせている。

ロメオ「同僚としては嬉しいですけどね？　カトラスさんは謎の塊なんですよ。　常識が通じないって言うか…」

サコン「そうだろう？　こいつときたら、俺の言った作戦をだな…」

カトラス「おい、サコンっ！」

つい口が滑りそうになり、カトラスに咎められた。

オクサイド軍をカトラスが妨害しようとした事は、メリャーナなどの一部の人間しか知らない。　だから成功した後でも、ロメオに話す訳にはいかないのだ。

ロメオ「作戦…？　ああ、カトラスさんが被弾して、先鋒をふいにしちゃった事ですか。　代わりに、オクサイド大佐は本国から大層なお誉めにあずかったそうで、大きな魚を逃しましたよね」

…いい具合に、ロメオは勘違いをしてくれたようだ。　オクサイドの出世も、実はサコンの作戦のうちなのだが、一般の士官達の認識は、こんな感じなのかも知れない。

カトラス「つか、ずっと言ってるけどな。　他人を謎、謎って、失礼な奴だったんだな、お前」

ロメオは、何回かカトラスの見舞いに行っていたから、その度に言っていたのだろうか？

ちなみにサコンとメリャーナは、軍務が多忙だったために、ついに見舞いには行けず仕舞いだった。

ロメオ「これを謎って言わないで、何が謎なんですか？　全身傷跡だらけ。　シートは血まみれだったのに、意識を失うどころか、腹が減ったとか言ってましたし」

サコン「あはははは…」

もしかしたら、カトラスは頭を打ったショックで、人格でも変わったんじゃないかと思った。　それか、血を見て興奮していたとか？

だが次の言葉は、サコンをそんなお気楽な世界から、一気に現世へ引き戻した。

ロメオ「…あんな状態じゃ、ふつうの人間なら

『3回は死んでますよ』

奇跡というより、化け物ですね…」

【2】

言ったロメオの顔は真剣だった。　冗談でオーバーな表現をしている感じはしない。

カトラス「3回死ぬってなぁ、ロメオ？」

ロメオ「それぐらい、カトラスさんは医者の常識を、打ち砕いちゃったんですよ。　今も実は、化けて出てるんじゃないでしょうね？」

言うだけじゃなく、足を触ったりまでしている。　あまりのロメオの反応に、サコンの頭にも疑問が沸き上がる。

サコン「…そんなにカトラスの傷は重かったのか？」

ロメオ「重かったのも事実ですけど、それだけなら驚きませんよ。　カトラスさんの場合、

『救出した時には、傷が治っちゃってた』

んです。　カトラスさんって、応急医療の知識なんかありましたか？」

ある訳がなかった。

医学知識のあるロメオが驚くくらいだから、それなり高度な治療をしてあったのだろう。　ヤタガラス時代に傷を負い、応急処置をした経験はあるが、医者を驚かすレベルな筈もない。

だいたいその場で治療したなら、『治り』はしないし、『塞がり』もしないだろう。　せいぜい血が止まるぐらいのはずだ。

サコン「…そんな事が起こり得るのか？」

ロメオ「常識では起こりません。　だから謎なんです」

キッパリ言い切られた。　カトラス本人にならともかく、サコンにまで言うからには、そこまでの事態なのだろう。

カトラス「まあ、いいじゃないか！　謎の変死体があがったならともかく、謎で無事だったんだからよ。　結果オーライ、この話もおしまいだ！」

結局、謎のはずの本人が、謎を一番気にしていないという奇妙な関係のまま、話はうやむやになってしまった。　確かに理由がどうであれ、仲間が無事ならそれでいいのだが…。

【3】

カトラス「ところでサコン。　俺の次の出番は決めてくれたか？　退院もしたし、化け物っぷりじゃなくって、違う事で目立たねぇとな？」

そう言えば、そんなメールが来ていた。　痛みさえ引けば、すぐに出撃できるとか何とか。謎に気を取られて、サコンはつい、話をするのを忘れていた。

サコン「そう言ってもだな？　オデッサに入ったばかりで、軍は大きく動かせない。

…だいたい、メリャーナ様がな…」

カトラス「メリャーナの姫様が？」

カトラスの顔には　『どうかしたのか？』　と書かれている。

だが、正直な話をしてしまうと、サコンにもどうしてメリャーナがあそこまで沈むのか、分からないでいた。

愛猫のワグナーの死期が、さし迫っていることが原因かとも思ったが、実際メリャーナと話してみると、それまでに戦いが落ち着いたと、ほっとした顔をしていたくらいだった。

いくら司令部のゲージの中にいたとはいえ、病気の年老いた猫には過酷な環境だった。　疲労から死期が早まったり、下手をすれば戦闘に巻き込まれて、というシュチュエーションだったないとは言えない場所にいたのだから。

つまり、原因は他にある。

サコン「『昔、面倒を見た王女の彼氏が麻薬中毒で、何かしらの責任を感じておられるのでは？』という者もいた」

近衛兵からの又聞き情報を、そのまま喋る。　その話を、サコンはいま1つ信用していなかったが、意外にもそれを裏付けた人物がいた。

ロメオ「…麻薬中毒…。　リターナの事ですよね？　あれ程の症状

なら、心配ですよね…」

そう言えばロメオは、ガルダの軍医も交えて、メリャーナと何かを話していた。　あれはこの話だったのか？

カトラス「ヤク中かよ。　リターナっつうと、合成麻薬だったか？　過去を思い出して、快楽に浸るヤクだったかな…？　どっかの軍が、安楽死に使ってた記憶もあるな」

麻薬に関してはまったく無知なサコンに比べて、カトラスはそっち方面の知識もあるようだった。　まさか、やった事があるとか…な？

カトラス「…サコン。　今、俺が謎の生還遂げたのは、ヤクのせいかも？　とか疑っただろ？」

サコン「ギクっ！　い、いゃ、そ、そそそんな失礼な事は考えてないぞ！！」

慌てて否定する。

サコン「と、とにかくだな、その原因を取り除きたいんだ！　主君の力になるのが配下の務めなら、これも立派な務めだろう！」

そうしておいてから、やたら務めを強調して誤魔化す。

カトラス「…まあ、いいか。

で、ヤクから足洗わせるなら、まず医者に話を聞かねぇとな？　ロメオ、なんかこういい薬はないのか？　ヤクの毒を綺麗さっぱり洗い流すようなのは…」

矛先はサコンを逸れ、またロメオに振り直される。

だが『それは無茶だろ』とサコンは思った。　麻薬なんて物は、人間が宇宙に上がる遥か前からあって、どんな時代でも、一定の割合の人間を蝕んできた。　いくら知識がないと言っても、そんな便利な薬がないことぐらい…。

ロメオ「中和薬は何種類かありますけど」

サコン「あるのかよ！」

案に相違し過ぎて、つい突っ込んでしまった。

ロメオ「はい。　でも、あの人はリターナの使用量が常軌を逸していましたから。　だから、一般的な治療では効果が見込めないんです。　かと言って強い処方は、負担が大き過ぎますし…」

サコン「やっぱりか…」

ただ、あるというだけだったみたいだ。

リスクの高過ぎる事は、策にしても何にしても、するべきじゃない。
　1%に賭けるのはドラマの主人公の役目で、軍師や医者がするべき事ではないだろう。

ところが、カトラスはこの事実に食いついた。

カトラス「でもよ？　負担って言うけど、実際どうなるんだ？　やっぱ全身から血を吹き出して、ぶっ倒れたりとかすんのか？」

ロメオ「…カトラスさん…。　変なアニメの見すぎです。　リターナも医学的には、他の麻薬と大差はありません。　強い処方をしたからといって、血を吹いたりなんかはしませんけれど…」

サコン「けれど？」

ロメオは、明らかに困惑にしていた。

ロメオ「リターナを使う人間は、現実に絶望しやすい、心が弱い人間が多いんです。　無理矢理引き戻してしまうと、治る前に自殺してしまうケースが、極端に多くて…」

そもそもが現実に耐えきれないから、麻薬に手を出すのだ。　現実の辛さを無理矢理思い出させれば、死に逃げ道を求めるという話も頷けた。

カトラス「情けねぇなぁ～　そこんトコ、気合いと根性で乗りきれよ～」

…ずいぶんな言い種だろう。　便利な薬の次は、根性論を語るカトラスだった。

しかし次の瞬間、カトラスは思いもしなかった事を言い出す。

カトラス「つか、気合いと根性が備われば、薬そのものはあるんだよな？　そいつの根性を呼び覚ますネタ、何かないのか？」

第１００章　計略の翼（前書き）

（６回目）

エイス「毎回ドタバタしてる、今回のシリーズだけどぉ～」

シクス「今回は、前回大活躍のメリャーナ殿下を解説者に迎えて、ちょっと雰囲気変えてみま～す」

メリャーナ「よろしくお願いしますね」

シクス「さっそくゲストの方をお呼びしましょう。　傭兵アイアンボーンを陰から支える、リンダさんで～す」

リンダ「呼ばれたから来ちまったけど、一体、何をしようってんだい？」

エイス「あ、すっごく簡単だから。　このウソ発見器つけて、質問にみんな『いいえ』って答えるだけ」

リンダ「ふ～ん」

シクス「じゃ、第1問。　恋は長年かけて育むものだ」

リンダ「いいえ」

『ピピピ…』

エイス「大した事ないね？」

リンダ「あんたらさぁ～　もしかして、あたしとスティヴの仲を疑ってるのかい？」

シクス＆エイス「ギクっ！」

メリャーナ「やはり、長い間変わらない関係が続いてしまうと、それを崩すのは難しいですか？」

リンダ「そんな感じかねぇ…。　スティヴはいいヤツだし面白いけど、今さら恋って言われてもさ…」

エイス「続いて、第2問。　年頃の少年少女が一緒にいると、自然いいムードになったりすることがある？」

リンダ「いいえ？」

『ピピピ…』

シクス「また同じくらいだね」

リンダ「つかあんたら、質問の裏が分かりやすすぎるよ。　早い話が、ゲットとフレーネちゃんの関係が知りたいんだろ？」

エイス＆シクス「うひぁぁぁぁあ！」

メリャーナ「私的にも、あの2人が恋仲に落ちるには、まだ足らない物が多い気がしますわ。　片やまだ12歳の少年、もう片方の子も、まだ記憶を取り戻してないのでしたわね？」

リンダ「そうさ。　だから、困難を乗り越えた恋愛が起こるとして

も、まだ先じゃないかい？

それよか、ゲットが意識してそうな子なら、他にもいるじゃないか」

エイス&シクス「えっ？　誰？？？」

リンダ「だから次は、この子を呼んでだね…」

（期待を持たせて、次回に…）

第１００章　計略の翼

メリャーナの専用ガルダはオデッサを発ち、一路何処かへと飛んでいた。

ナディア「エヴァニー。　気分はどうだい？　痛い所はないかい？」

ガルダに収容されたエヴァニーに、ナディアは付き添っていた。
帝国との戦いが終わり、フロンティアガードのＭＳ整備も減ったために、オデッサを離れる事にしたのだ。

ナディア「エヴァニー…。　あれは川かな？　思い出すねぇ。　ナイル川を下って逃げた日もあったね…」

辛い逃避行を共にしたグランズの仲間とも、エヴァニーが麻薬に溺れて以来、一切の音信がなくなっていた。

オクサイド軍との戦いに参加したのは知っている。　まだ生き残っている仲間もいるはずだが、会いに来た仲間は誰もいなかった。

近衛兵「失礼します。　食事と薬です。　…失礼しました」

客として迎えられたナディアと、エヴァニーの待遇はかなり良かった。　食事はグランズにいた頃からは想像もつかないような物ばかりで、そんな物を食べて戦う帝国軍に、最初は怒りを覚えた。

けれどよく考えれば、今はその帝国軍に世話になっている身なのだ。

ナディア「…エヴァニー…。　口を開けて。　嫌がらずに飲んでおくれよ…」

薬は、食前と食後に分けて2種類。　ただし、飲んでも大した効果はなかった。

帝国兵が話していたのを聞いたけれど、どうやら気休めの弱い薬らしい。　強い薬を使うと、エヴァニーの身体と精神が耐えきれないらしいのだ。

ナディア「あたしの知ってるエヴァニーなら、どんな痛みや苦しみにだって耐えてくれただろうに…。　グランズの頃のエヴァニーなら、きっと…

あっ！！」

機体が旋回したのか、急に揺れた。

帝国兵「敵襲っ！　対空砲火だっ！」

帝国士官「落ち着いて対処しろ！　どうせ苦し紛れの嫌がらせだ！」

周囲が慌ただしくはなったが、それほど弾は飛んで来なかった。

そう言えばグランズにいた頃、嫌がらせのように、帝国の輸送機を射っていた仲間がいた。　それと同じだろうか？

ナディア「大丈夫だったかい？　今、拭いてあげるから…」

こぼしてしまった水を拭こうと、ナディアはハンカチを取り出したのだが…。

エヴァニー「ナディア、いいよ。　それくらい自分でやれる」

さっとハンカチを奪い取り、服にかかった水を拭いてしまうエヴァニー。

ナディア「…あ、ああ…。　って、エヴァニー！　今あんた何って

言った?!」

エヴァニー「何か変な事を言ったか？　自分で拭くって言っただけだろ？　どうして驚くんだよ?」

ナディア「そうじゃなくって、あたしの名前さ!」

エヴァニー「名前って…。　ナディアはナディアだろ？　間違える訳…　おいっ?」

ナディア「良かった…。　正気に戻ってくれたんだね…」

目を丸くするエヴァニーに構わず、ナディアはエヴァニーに抱きついて泣き出した。

今までも会話に応じる事はあったが、大概はナディアをリナレスと、マリーを母さんと呼んだ。　つまり記憶が曖昧で、目の前の人物がよく分かっていないのだ。

ナディア「そうだ！　先生にこの事を…」

【2】

軍医「まあ、そんな事は珍しくもないわ」

だが、意気込んで呼んではみたものの、軍医の反応は極めて冷たかった。

しかも…。

エヴァニー「…リナ…レス～？　腕を上げたね～。　とってもおいしいよぉ～」

軍医を呼ぶ数分の間に、エヴァニーの正気はどこかへ吹き飛んでしまっていた。

リナレスを懐かしがり、ナディアにその影を無理矢理重ねる。　けれどその割には、リナレスの手料理の味も覚えてはおらず、帝国軍の食事との区別すらつかない。

軍医「リターナは思い出すようでいて、ただ人を狂わせるだけじゃ。　たまに正気に戻ったかに見えても、そんな物はただのまやかしじゃて」

冷淡な言葉を吐くと、軍医はさっさと部屋を出て行ってしまう。

ナディア「…何で…？　何であたしたちが…。

いや、あたしはどう言われたっていいんだよ。　エヴァニー、あんたさえちゃんとしてくれてたら…。

それともそんな期待が、あんたには重荷だったってのかい…」

泣きじゃくるナディアを、エヴァニーは焦点の定まらない目のままで慰めていた。　リナレスと呼びながら…。

【3】

メリャーナは、このガルダで各地を飛び回っているようだった。比較的近い場所が多いのか、飛んでいる時間は短いのだが、どこかに着陸すると、数時間は戻って来ない。

最初に着いた場所で、迎えた貴族風の男と抱き合っていたから、親しい人間と再会を懐かしんでいるのかと思った。　しかし、４番目に降り立った所で、メリャーナがイスラムの古い風習に乗っとり、目以外の顔をみんな黒い布で覆った出で立ちだったのを見て、ナデ

ィアは自分の間違いを悟った。

メリャーナは、したくて抱き合ったのでもなければ、黒い服に身を包んだのでもないのだろう。　訪ねる相手の風習に、自分の方が合わせているのだ。

そう気がついた矢先の5番目の外遊先で、メリャーナは迎えた男の頬に口づけをしていた。

これが、カンタルダルで会った時にメリャーナが言った

『私は皇女として生きてきた』

ことなのだと分かり、ナディアは複雑な心境になった。

近衛兵A「厄介者のくせに、飯だけはたらふく食うんだな？　しかもこのメニューは、殿下と御客人しか召し上がらないコースだろう？」

近衛兵B「迂闊な事を言うな。　誰かに聞かれたらどうするんだ」

近衛兵A「大丈夫だろ？　殿下も少佐も、あと1、2時間はお戻りにならないさ。　お2人以外は、皆そう思っている」

こんな話し声がした直後に、その日のディナーが出された。　言葉通りの豪華なメニューだったが、本来これを食べられるのがメリャ

ーナだけだと思うと、料理の味がしなかった。

それなのにエヴァニーは、これを母さんの味と言って平らげた。

ついそれを問い詰めたが、期待した反応は返ってくるはずもなく、

『リナレスの料理の方が、本当は好きなんだけどね』

と違った慰め方をされてしまった。

ナディアは今まで、帝国軍を抜け、グランズに参加したことを後悔した事は一度もなかった。　命が危ない日々は当たり前、食事だって粗末な物を嫌だと思ったことはない。

けれど、リーダーと慕ってきたエヴァニーの醜態を見るにつけ、オデッサで抜けて行った仲間たちの気持ちが身に染みて、その晩1人で泣き明かした…。

【4】

マリー「ようやくですね」

マリーが軽く息を吐いた。　メリャーナの訪問全てに同行しているせいか、やや疲れの色が見える。

カトラス「まだるっこしいぜ…。　何でこう、メインデッシュだけ

ささっと、って訳にいかねぇかなぁ～」

カトラスまでも、もどかしそうにしていた。

サコン「同感と言いたいが、それは無理なのがメリャーナ様の立場なんだよ。　1つの国だけ行ったとなると、変に勘ぐられるかも知れない」

すでに7ヵ国を訪問していたメリャーナだったが、それらの国を訪ねたのは、真の目的ではなかった。

ただサコンが言うように、皇女のメリャーナが直に訪問するには、それなりの理由がいる。　ある国だけを特別に扱えば、変な疑惑を持たれるかも知れないのだ。

マリー「これでも絞り込んだ方ですよ。　先の戦いで、メリャーナ様に軍を預けた国だけですから」

サコン「何にしても、次はマリンピアですね」

カトラス「待ちくたびれたぜ～」

この事態と言うか、訪問劇の立役者、カトラスが大袈裟に言ってのける。

そう。　先にカトラスがサコンに囁いた言葉、それは

『気合いと根性を発揮させるには、惚れた女に会わせるのが一番だろ！　女の前でカッコつけられない男なんざ、いる意味がねぇよ』

であって、カトラスはなんと、エヴァニーをサヤリに会わせてしまおうと画策したのだった。

マリー「しかし、メリャーナ様に内密で策を練るなど、私は感心しませんが」

ちなみに、この場にメリャーナがいないのは、『内密』の言葉が示すように、訪問する真の目的を伏せているからだった。

メリャーナには、

『この度、メリャーナ様のために軍を派遣した諸勢力とは、関係を緊密にしておかなければなりません。　いずれザキラと敵になった時、帝国ではなく、メリャーナ様個人に味方する気持ちになるよう、今のうちから親しく振る舞っておく必要があります』

と、サコンがもっともらしく進言していたのだ。

カトラス「けど、反対しなかったよな？」

真意を告げられない以上、メリャーナの行動に強い影響力を持つ人間を抱き込む必要があった。　そこでカトラスが選んだのが、実はマリーだったのだ。

マリー「はっきり言ってしまうと、私はあんな男など、メリャーナ様にとって、何の存在価値もないと思っています。　悪巧みに同意したのは、女に失望されて、さっさと自殺でも何でもしてくれないかと期待したからです。

そうすればメリャーナ様は、厄介事にお心を痛められずに済みますから」

サコン「あはははは…」

間に挟まれたサコンが苦笑いするしかないくらい、マリーは厳しい言葉を返してきた。

そう言えばマリーは、エヴァニーに母親扱いされており、そういう意味では被害者でもあったのだ。　それだけに、エヴァニーにいい感情を持たないのも当然かも知れない。

カトラス「ま、いいじゃないか。　自分の女を前にして、立ち直ればよし、直らず死ぬもよし。　どっちにもならなかったら、たぶん女が愛想を尽かすぜ」

マリー「サヤリ姫が悪夢から醒めるだけでも、まあ策の意味はあるでしょう」

これを一挙両得と言うには、あまりに酷い謀略な気もするが、麻薬に毒されたエヴァニーには、常識に従っていては、打つ手がないのも事実なのだった。

サコン「マリーさん。　それでサヤリ姫とは、お会いになれるんですか？」

マリンピアに行ったはいいが、会う機会があるとは限らない。

マリー「常識に従えばそうなるよう、手は回しました。　何なら自殺しやすいように、毒薬とカミソリとロープを、合わせて部屋に届けさせましょうか？」

カトラス「…女は怖いな、サコン…」

サコン「何で俺に振る？」

マリー「何か言いましたか？」

カトラス&サコン「いえ、何でもありません！」

一種独特なオーラを放つマリーを前に、２人は正直ビクつきながらも、策の準備に取りかかる。　それが終わる頃には、ガルダはマリンピア第一空港へと、その機体を滑り込ませた…。

第１０１章　転生のエヴァニー（前書き）

（7回目）

ユーリ「私を呼びつけるなんて、いい度胸してるじゃない？」

シクス「ラピスラズリを甘く見ないで？　本編じゃ決着つかなかったから、ここで…」

ユーリ「望むところよ」

エイス「よし言ったね？　はい、ウソ発見器装着ぅ～」

インドラ兵「収録スタンバイ、できてます！」

ユーリ「ちょ…」

シクス「という訳で、今回のゲストはエージェントUこと、ユーリさんで～す！」

ユーリ「ちょっと待ちなさいよ！　手紙には、どっちが本当のエースか白黒つけるって書いてあったのに、なんで収録なんかしてんのよ！」

シクス「あれ～？　エイスちゃん、もしかしてお手紙間違えちゃった？」

エイス「あたしは、言われた通り書いたよ～。　もしかしたら、『本当の』と『エース』の間に

【恋の】

って言葉を書き忘れたかも知れないけどぉ～」

ユーリ「…馬鹿馬鹿しいから、帰るわ」

シクス「逃げるの？」

エイス「ラピスラズリは、戦うだけじゃなくって、人生全部楽しんでるけどなぁ～？

エージェントは、戦いだけに必死になって、それでようやく引き分けなんだ？」

ユーリ「…言わせておけば…」

シクス「だったら、大人しく質問に答える。　はい、第1問」

エイス「私はロリコンである？」

ユーリ「何それ！　いいえ！」

『ピピピピピピ…』

シクス「さっそくいい反応っ！」

エイス「やっぱりね。　孤児の面倒みてたっていうから、そうじゃないかと思ったんだ～」

ユーリ「あ、あの子たちは違うわよ！」

エイス「あの子たち『は』ね～。　じゃ、第2問。　永遠のライバルが恋に落ちるのは、定番だと思う？」

ユーリ「いいえ！」

『ピピピピピピピ…』

シクス「今度もいい反応だね～。　最初敵で、ラストには恋人って、少年誌にはよくあるし」

ユーリ「だから何の話よ！」

エイス「さあね～？　でも、鋭い読者の方は、分かっちゃったんじゃないかな～？」

シクス「ラストまでに実るかなぁ～？　乞うご期待？」

（お分かりになりました？　続く）

第１０１章　転生のエヴァニー

重い沈黙が支配する一室。

そこにいたのは、マリンピア国王シノノメと、重臣のマンダラ、王女サヤリの３人。　サヤリは、先程から暗い表情で沈黙を貫いていたが、ようやく一言だけ言葉を発した。

サヤリ「…会いたくない」

マンダラ「そう仰せになりましても、メリャーナ様はもうお見えなのですぞ！　一国の王女が、会いたくないで済まされるとお思いなのですか！」

マンダラが必死の形相でサヤリを説くが、それにすらサヤリは聞く耳をもとうとしない。

マンダラ「いい加減になされませ、サヤリ様！」

シノノメ「…よい。　メリャーナ殿下には、私がお会いしよう」

さらに語気を強めたマンダラを押し止めたのは、黙ってやり取りを聞いていたシノノメだった。　しかし、シノノメの顔には生気がない。

マンダラ「シノノメ様！　ご無理をなされてはなりません！　今、身体を養生せねば、お命に関わります！」

マンダラがシノノメに声を掛け、改めてベットに横たえさせる。メリャーナ軍への無理な参陣がたたって、シノノメはマリンピアに帰るなり倒れてしまい、床から起きられない身体になってしまっていたのだ。

シノノメ「メリャーナ様は…　此度の参陣の答礼にお越しになられたのであろ…う？　ならば、私…が会わずして…　誰が会う？　軍を率いたのは…　他ならぬ私、なのだぞ…」

無理に作った笑顔が、どうしようもなく痛々しかった。

それに、言っている事は正しく聞こえるが、そんなものは代理を立てればいいだけの話だ。　王女のサヤリがメリャーナに会ったとしても、何の失礼にも当たりはしない。　全てはサヤリの我が儘でなのある。

マンダラ「サヤリ様っ！　病のお父上にこうまで言わせて、恥ずかしくはないのですかっ！！　国王、王女である前に、サヤリ様はシノノメ様の…」

サヤリ「そんな事っ！　私は生まれたくて、王女に生まれたんじゃない！　生んでくれと頼んだ覚えもないっ！」！

見かねたマンダラの叱責を、これ以上ない暴言で一蹴すると、サヤ

リは部屋を飛び出して行ってしまった…。

【2】

シノノメ「薬を持て。　それから…。　男が、この歳になって…化粧をする事に、な、ろうとはな…」

痛み止めの薬をいつもの3倍も飲み、さらに顔色の悪さを隠すために、厚い化粧を施す。　その姿は違和感を通り越し、ただただ涙ぐましい。

メリャーナ「…シノノメ殿下…。　私は『旧交を温めるのも兼ねて、サヤリ姫と会談を』とお伝えしたはずですが…」

当然、そんなシノノメを迎えたメリャーナは、悲しげな表情になってしまう。

シノノメが病を押して参陣したのは知っていたから、メリャーナも『サヤリを代理にするよう』　それとなく根回しをしていたのだ。

シノノメ「…何…を…　おっしゃいますか！　ほ、他ならぬ…　メリャーナ殿下をお迎えするので…す。　つい、年甲斐もなく心が踊ってしま…い、病など忘れて…」

それでも会見場に現れたシノノメは、決死の思いで笑顔を作る。
だがそれは、逆に痛々しさを強調するだけ。

メリャーナ「……。」

メリャーナ「……。」

シノノメ「メ、メリャーナ殿下？　どうなされ…た？　ご気分でも…　優れられぬか？」

立場がまるで逆な言葉を吐かれてしまうくらい、メリャーナは苦しそうな表情をしていたが…。

メリャーナ「…私、自分で言うのもなんですけれど、気は長い方だと思って参りました。　しかしこの度ばかりは、限界でございますわ…」

『ガタっ』と音がするくらいの勢いで、メリャーナは席を立つ。
その突然の発言と行動に、側の近衛兵たちがざわめき出す。

メリャーナ「シノノメ殿下。　予め、失礼をお詫びしておきます。
マリー！　サヤリ姫のいる所に連れて行きなさい！！」

シノノメに一礼すると、メリャーナは彼女らしからぬ勢いで歩み出す。　シノノメはその後を追おうとしたが、目眩と胸の痛みに襲われ、席から1歩も動けなかった…。

【3】

マリー「こちらでございます」

マリンピアの王宮の造りを知っているのか、マリーは無表情でメリャーナを導いた。

そして…。

パァァァーーーーン

そんな音が響き渡り、サヤリが床にうづくまる。　メリャーナが部屋に乗り込むなり、サヤリの頬を平手で打ったのだ。

サヤリは部屋に入られまいと抵抗したが、側に仕える侍女は、サヤリが掛けた鍵を片端から開けて、メリャーナを通してしまった。最後に掛けた内鍵も、マリーがドアごと蹴り破り、サヤリを守る物は何1つなくなった末の出来事である。

サヤリ「…ひっく…　うぅ…」

そしてメリャーナに打たれるや、その場に泣き崩れるサヤリ。

パァァァーーーーン

パパァァァーーーーン

さらに2回、同じ音が響く。　泣きじゃくるサヤリにも容赦なく、メリャーナはまた平手を加えたのだ。　怯えるサヤリが逃げようにも、その身体はマリーががっちり羽交い締めにしている。

メリャーナ「あなたには、人を好きになる資格なんかないわ。　好きになって、尽くしているだろう自分に酔しれたいなら、目障りだから余所でやってくださる?」

メリャーナは、平手以上に辛辣な言葉をサヤリにぶつける。

サヤリ「…あんたに何が分かるっ！　あん…」

マリー「メリャーナ様に無礼なっ！」

メリャーナを『あんた』呼びしたサヤリだったが、その言葉は一度限りだった。　身体を押さえるマリーが軽く力を込めただけで、サヤリは息ができなくなり、苦しそうに口をパクパクさせるしかできなくなってしまったのだ。

メリャーナ「マリー。　もういいわ。　サヤリちゃん…　いえ、このろくでなしには、私もほとほと愛想が尽きました。

少しでも人として成長していたならば、恋する男と会わせてあげようかとも思っていましたが、とんだ期待外れでした！」

吐き出された、意外な言葉。

マリー「…ご存じでいらしたのですか…」

メリャーナの言葉に、マリーはため息をついた。

メリャーナ「マリーの考えそうな事ぐらいは、ね？」

だがメリャーナの微笑みは、サヤリにとって、これ以上なく残酷な意味を持っていた…。

【4】

カトラス「あっちゃ～。『敵を騙すにはまず味方から』って言うが、その味方にさっそくバレてるぜ？」

そう呟いたのは、近衛兵に変装したカトラス。

カトラスはサコンを伴うと、同じく変装させたエヴァニーを引き連れ、会見場の端にスタンバイしていた。けれど、先にメリャーナが動いてしまったため、出ていく時期を失してしまったのだった。

カトラス「やっぱ、他人の恋路に口出しすんのは難しいな」

あっさり策を放棄して、帰り支度を始めるカトラス。

ナディア「ちょっと待っておくれよ。エヴァニーとサヤリ、一目ぐらい会わせてやれないのかい？」

そう言ったのは、現在進行形でエヴァニーの世話をしているナディ

アだった。

サコンとカトラスには、最初、彼女を同伴する計画はなかったのだが、いざ彼女から引き剥がすと、エヴァニーが暴れて手がつけられなくなった。　どうやら、リナレスと誤解しながらではあるが、ナディアが何らかの安らぎを与えているようだ。

カトラス「そう言われても、メリャーナの姫様があの調子じゃな…。
　迂闊な事しようもんなら、２人共取って食われちまうぜ？」

取って食うという表現もどうかと思うが、サヤリを心の底から見損なった風のメリャーナに

『実はエヴァニー本人をお連れしてます』

なんて、再会を懐かしむＴＶ番組のような演出を言い出せる雰囲気など、髪の毛ほどもないのも事実。

カトラス「三十六計逃げるが勝ちって言うだろ？　人生、諦めが肝心なんだよ。　な？」

ナディア「だけどさ…」

カトラスはナディアを説くが、ナディアは諦め切れない表情をありありと浮かべていた。

それは、戦いの真っ只中だったとはいえ、愛する２人を引き裂いた

側になってしまった、ナディアの良心の呵責からだったのか？　それとも、愛する2人に想いを遂げさせてあげたいと願う、純粋な心からだったのか？

しかしそんな気持ちすら、リターナの毒に骨の髄まで侵されたエヴァニーには届かない…

…と、誰もが思っていたのだが…。

エヴァニー「サ…　ヤ…」

そんな雰囲気を切り裂いた、エヴァニーの声。

ナディア「エヴァニー？」

エヴァニー「サヤリ…？」

ナディア「そうだよっ！　サヤリだ！　あれが誰だか分かるんだね？！」

周囲の様子も省みずに、声をあげるナディア。

濁った声だった。　呂律も回っていない。

しかしナディアは、そんなエヴァニーを見て涙ぐむ。　今まで数回しか見せた事のない正気に、戻っていると感じたのだろう…。

【5】

メリャーナ「…サコン。　カトラスまで…。　マリーだけではなく、あなたたちまで1枚噛んでいたのですか…」

それだけ騒げば、メリャーナが気がつくのは当たり前だった。　隠れていたドアの陰から出て、サヤリの部屋に入る。

サコン「申し訳ありません、メリャーナ様」

素直に頭を下げたサコン。

サヤリ「…エ、エヴァニーなのか?!　本当にエヴァニーなんだな?」

いきなり喜色を浮かべ、エヴァニーに駆け寄ろうとするサヤリ。
しかしそれは、マリーが阻止してしまう。

サヤリ「離せっ！」

マリー「離せませんね。　今のあなたでは、恋する男に駆け寄る資格はありません。　人としての思いやりを捨てたあなたに、本当に人が愛せるはずもない」

冷たく言い放つマリーと、暴れるサヤリ。

エヴァニー「…サヤリ…」

一方、目の輝きを取り戻したエヴァニーも、サヤリに駆け寄るかと思われた。　現実に、3歩は前に踏み出していた。

けれど…。

エヴァニー「わ、悪いな、サヤリ。　今、ちょっと…」

何故か、エヴァニーはサヤリから顔を背けた。

サヤリ「エヴァニー？」

エヴァニー「…いや…。　そうだ、病気なんだよ。　大した事はないんだが、もし伝染（うつ）ったらマズいから、近づくのは止めとこう。

サヤリはマリンピアの王女なんだし、もしもの事があったら大変だ。
お互い生きてる事は分かったんだし、今はこれで十分だろ？」

エヴァニーは、一字一句をしっかり語っていた。　ただし、冷たい汗を額に浮かべながら…。

【6】

エヴァニー「くそっ！！！」

霞む目、薄れる記憶。　心の底から愛したら人間の姿すら、白い霧の中に消えてゆく気がする。

エヴァニー「ぐ…　あ…」

苦しくなり、壁にもたれ掛かる。　サヤリの部屋では何とか正気を保てていたが、ガルダに戻って早々に、こんな有り様になってしまう。

エヴァニー「…お、俺は…。　サヤリの事すら、思い出せなくなるのか…。　俺にはもう一度、抱きしめてやる事もできないのか…」

エヴァニーが病気と偽ってサヤリに近づかなかったのは、自分の無様さを、サヤリにだけは悟られたくなかったからだ。　今も辛うじて正気を保ってはいるが、手が震え、身体が思うように動かない。

エヴァニー「…俺は…」

軍医「…悔しいか？」

自分の情けなさを噛み締めるエヴァニーに声をかけたのは、ガルダの老軍医だった。　さんざんエヴァニーを突き放し続けた張本人である。

軍医「一時の辛さから逃げるため、リターナなどに走った己の不甲斐なさ、身に染みたか？」

辛辣な言葉だった。　だが今のエヴァニーには、その言葉の正しさが痛い程よく分かった。

エヴァニー「…俺は…。　とんでもない事をしでかした。
俺が死んだなら、まだ救いはある。　だが俺は、生きながらにして道を踏み外した。　俺は、俺はサヤリに…　愛した女に顔向けできない！！」

憤りを込めて、拳を振り上げる。　そして、壁に拳を叩きつけたが…。

エヴァニー「何だこれは…」

軍医「ようやく気がついたか。　じゃが、もう手遅れじゃ」

エヴァニーの拳は、すぐ近くの壁すらまともに捉えられなかった。
しかも、手先の感覚がまるでない。

軍医「リターナの毒は、一度浴びたが最期、徹底的にその肉体、精神を喰らい尽くす。

ま、儂も医者じゃからの？　気休めの薬くらいは出してやらんでもない。　気長に付き合えば、万に１つくらいは、元の身体に戻れる

事があるやも知れんぞ？」

またしても、軍医の皮肉がエヴァニーの耳を抉る。

エヴァニー「気長に？　そんな呑気な事を言っていられるかっ！！」

軍医に掴み掛からんばかりのエヴァニー。

だが…。

軍医「甘えるでないわ！　リターナに限らず、麻薬から足を洗うというのは、己が犯した罪と、正面から向き合うという事じゃ。　お前が犯した罪の重さを考えれば、一朝一夕にどうにかできるものではないっ！！」

一喝され、失望したように背を向けられる。

エヴァニーはその背中を追いかけようとしたが、足がもつれてうまく動かない。　これがエヴァニーの罪の重さだとも言いたげに…。

【7】

軍医「…ふん。　最近の若い者は、すぐ何かに頼りたがる。反帝国レジスタンスのリーダーというから、敵ながら天晴れな男かと思えば、大層な見込み違いよな。　頭がこれでは、口だけが達者な無知蒙昧な輩の集まりであろう」

医務室に戻ってからも、軍医は暴言を吐き続ける。

ガタっ…。

一通りエヴァニーとグランズを罵った軍医が、物音がした気がして目線を上げる。　そこにいたのは、壁を伝うようにして、必死に後を追いかけて来たエヴァニーだった。

軍医「…何じゃ？　まだ何か用か？」

刺すような冷たい視線。

エヴァニー「お、俺はどう言われても仕方ない。　だが、仲間を…。
グランズの仲間達の悪口は訂正しろ…」

暴言を聞いていたのか、睨めつけ、反論するエヴァニー。

しかし、軍医に詰め寄ろうとしたエヴァニーは、些細な段差につまづいて転んでしまった。

軍医「そら見たことか。　足取りもおぼつかぬくせに、態度ばかりが大きいの？」

エヴァニー「態度だけ…　だと？」

エヴァニーは何かを掴むかのように、地に伏したまま、闇雲に手を伸ばす。

もう、周囲の景色がはっきりと見えない。　自分は何故ここにいて、何をしようとしているのか？　そんな事すら、気をつけていないと忘れてしまいそうに思えた。

エヴァニー「…俺は…」

ガランっ！！

エヴァニーの伸ばした手が、何かに触った。

軍医「何という事をっ！　ワグナー？　大事はないか？」

音を立てて床に倒れた物をよく見てみると、それは動物用のゲージで、中に入っていたのは、１匹の年老いた猫だった。　毛づやがくすみ、痩せ細り、余命が幾ばくもないと一目で分かる。

軍医「その汚い手をどけんかっ！　メリャーナ様の猫に、お前ごときが」

エヴァニー「猫…？」

意識の掠れつつあるエヴァニーに、軍医の暴言は届いていなかった。
彼は何かすがるように、小さなワグナーの身体に触ろうとした。

ワグナー「フシャャャアァァ！！！」

しかし、その手はワグナーに届かず…　いや、そのワグナー自身が、毛をそばだてて怒りの声をあげ、エヴァニーの手に噛みついていた。

見るからに弱り、最近はゲージの中で突っ伏すばかりだったはずなのに。

軍医「ワグナー…」

エヴァニー「…そうか…。　今の俺には、サヤリを抱きしめるどころか、猫を撫でる資格もないのか…」

涙が出てきた。　リターナに溺れた自分を、情けないと思った。
今の自分の姿は、自らの心の弱さが招いた結果だったのだと、不思議と納得がいった。

エヴァニー「…ふ…。　ははははは…」

そして、何故か笑えてきた。　涙は止めどなく溢れてくるのに。
情けなさすぎて笑うしかないからだろうと、そんな事を思った。

軍医「ついに気が触れおったか」

『それ見た事か』と言いたげな言葉。

エヴァニー「…残念だが、まだ正気だよ。　リターナでも忘れられないくらい、今の俺は惨めすぎる。　惨めすぎて、はっきり世界が見えてしまう」

うつ伏せになっていた身体を、仰向けにひっくり返す。　天井がやけに高く感じた。

エヴァニー「俺は…。　俺はどうしたら罪を償える？　このまま、惨めなままに死ねばいいのか？　そうして他人に指差し笑われるのが、俺にはお似合いなのか…？」

泣きながらで、しかも極端にか細く、聞き取りにくい声だった。けれどその言葉に依らずとも、エヴァニーの心根は不思議と澄んで見え、表情も明るかった…。

【8】

軍医「死んでも罪は消えはせん。　死に急ぐなど、臆病者のする事よ」

不意に軍医が棚を漁る。　鍵をかけてあるところを見ると、扱いに注意を要する薬品…　劇薬の類いを保管する棚のようだった。

エヴァニー「死に急ぐのは臆病者か…」

軍医「そうじゃ。　お前が臆病者でないと喚くならば、こいつを使ってみるがよい」

薬剤を手慣れた仕草で調えている。

軍医「こいつは麻薬治療に使う中でも、とびきり強力な薬じゃ。今のお前は、リターナを体内に取り込み過ぎておるために、並の薬では埒(らち)が空かぬ。　じゃが、こやつなら話は別じゃ」

軍医は厳しい視線を向けた。

エヴァニー「そうか。　そんなに貴重な薬を、俺にくれるというのか…」

軍医「儂が医者をしておった４０年の間でも、何度も手にしてはおらん逸品じゃ。　心して味わえ」

今すぐにでも、逃げ出したくなるぐらいの恐怖が押し寄せる。　その薬を打てばどうなるか、軍医は説明しなかったが、エヴァニーにはその意味が肌で感じられる気がした。

エヴァニー「……。」

無言で腕を差し出す。

エヴァニーの目は、不思議と澄んでいた。　その目は、若くして多くの仲間を惹き付けた、グランズのリーダーのそれだった。

しかし同時に、差し出された腕は、微かに震えてもいた。

軍医「…何じゃ。　やはり怖いのか？」

注射針をはめ、軽く注射器を指で弾く。

エヴァニー「武者震いだ。　気にするな」

エヴァニーはそう言ったが、それが虚勢だと、数多の死と生の境目を眺めてきた軍医にはよく分かる。　だがそんな強がりを、どこか好ましく感じた。

注射針が的確に静脈を捉え、薬剤が身体に流し込まれていく。　その様子を、軍医は冷静に眺めていたが、当のエヴァニーの目は早々に血走り、奥歯を噛み締め始めていた。

軍医「叫んでもいいんじゃぞ？　それで多少は気が紛れよう」

針を抜いた軍医が小さく言う。　けれど、その言葉１つすら耳に痛い。　全身がミシミシ軋み、燃えるように熱い。

エヴァニー「…残…念だが、そう、いう、甲斐性はない…んだ…」

余裕がないのは明らかだった。　叫ぶどころか、今にも卒倒しそうな顔色をしている。

軍医「やせ我慢か。　少しだけ、お前を見直す気になったわ」

皮肉めいてはいたが、それはこの老軍医が、エヴァニーに初めて見せた笑顔だった。

エヴァニー「…見直すの…は…　まだ早い…。　…この程度で…まさか…　終わり…じゃ…　な…い　…よな？」

全身から滝のように汗を流し、激痛に耐えているのが丸分かりの姿だった。　それでもなお、エヴァニーは反対の腕を差し出し、さらなる贖罪を求めた。

エヴァニー「…ま…だ…　足りな　い…な…。　あいにく…俺は、鈍…い方でな…」

そこまでするエヴァニーに、さすがの軍医も目を細めていた。

軍医「良い覚悟をしておる。　狂う時も一直線なら、償う時までもか。

…遠慮はせんぞ？」

奥歯をギリギリいわせ、拳を必死に握り締め。何とか2本目の注射が終わるまで、エヴァニーは絶叫せずに耐えた。

しかし…。

エヴァニー「ぐ…　ぐ…　ぐ…

ぐぎゃゃゃゃあぁぁ……

ひぐぅぅぅぅぁぁぁ……

おぉぉぉぐぁおぉぅぇ……」

身体が痙攣し始め、叫ぶ事すらできなくなる。膝を付き、爪で壁

を掻きむしる。　力を込めすぎて、爪が剥がれて血が流れ、壁に１０本の赤い線が描かれる。

奥歯を噛みしめすぎた口の中にも、血の味。　だが、それを感じる暇もないぐらい、床を転げ回っていた…。

【９】

小１時間の時が流れた。

ワグナー「フニュ～ン。　ニャアオォ～～～～ン　グルル…」

よろめきながらも喉を鳴らし、盛んに首筋を擦り付ける。

エヴァニー「…こいつは…？」

激痛と熱感と痺れの他…

とにかくエヴァニーは、身体に今までとは感触がある事に気がついた。

エヴァニー「…何だ？　俺なんかになついても、何も出てこないぞ

？」

まだひきつった顔ながら、僅かに見せた笑み。

軍医「ワグナーを侮るな。　猫じゃから気紛れではあるし、人にもよく慣れてはおる。　だが、物欲しさに媚びを売るような低俗な猫ではない。

こう見えて、皇女殿下と共に、帝国の栄衰を見届けてきた、誇り高い猫なのじゃ」

エヴァニー「誇り高い…な。　道理でさっき噛まれたんだな…」

笑い声が大きくなる。

顔はまだ苦しそうなままだったが、目には力が満ちていた。　罪を悔い、覚悟を決めた時の目とも違う。　これから生きる道を見定めた目だ…。

【10】

メリャーナ「どうしました？」

その数日後、身なりを改め、力強い歩みでメリャーナの元を訪れたエヴァニー。

エヴァニー「詫びを言いに来た。　俺のつまらない懺悔に付き合わせたせいで、貴重な命を1つ、失わせてしまった」

エヴァニーが抱いていたのは、メリャーナの愛猫ワグナー。　身体はもう冷たくなりかけていたが、その顔はその時のエヴァニーによく似て、穏やかで、誇り高い気品に満ちていた。

メリャーナ「…そうですか」

言って目を閉じるメリャーナ。

エヴァニー「少なくとも、猫に怒られないで済む身分にはなれたらしい。　人に誇れる道を進めるかは、これからだろうが…」

エヴァニーもまた目を閉じ、何を想っているようだった…。

第１０２章　攻勢戦略エージェント（前書き）

（８回目）

『フニャァ～～ン』

シクス「あっ！　可愛いネコちゃんはっけ～ん」

エイス「恋バナな冒頭文８回目～と。　あれ？　猫？　てか、シクスって猫派だっけ？」

シクス「うん。　ラピスラズリって、忠実な犬ってより、気ままなネコって感じがしない？」

エイス「そ～いう繋がりか。　で…　今回は猫の発情の解説？」

シクス「そんな訳ないでしょ。　ネコちゃんが身近にいた軍の恋バナだよ～」

エイス「ああ、あの人絡みか」

シクス「そ。　ゲストの方をお呼びしま～す。　元反帝国レジスタンス『グランズ』の、ナディアさんで～す」

ナディア「よろしくね～」

エイス「ようやく、大将が元に戻ったね。　おめ」

ナディア「ありがとね。　それはともかく、ここじゃ恋を暴露するんだって？　でも、グランズの恋愛事情は、見たまんまだったと思うけど？」

シクス「そうかも。　でも、一応発見器はつけるよ」

ナディア「じゃ、こっちも一応答えるよ」

エイス「第1問。　身近で、三角関係になった人がいた」

ナディア「はは…。　決まりだからね…。　いいえ」

『ピピピピピピピピ…』

ナディア「そりゃ鳴るよ」

エイス「一時期、昼ドラしてたもんね～」

シクス「第2問。　三角関係の1つが欠けて、関係は加速した？」

ナディア「いいえ」

『ピ』

シクス「あれ？　そうでもないんだ？」

ナディア「リナレスが、あんな死に方しちゃったさ…。　別にサヤリは悪くないんだけど、加速って訳にはね…。　悪化もしてないけどさ」

エイス「だから薬やってた時に、幼馴染みに走っちゃったんだ？」

ナディア「サヤリが加わってからは、どうしても戦いが多かったしね。　心のどこかで、安らぎ求めてたのかもね？」

シクス「じゃ、最後。　今は安否の…」

ナディア「あ、シベリアとあたしならないよ。　あいつとは親友。
それ以上でも、それ以下でもないから」

エイス「ちょ、いきなり喋ちゃダメじゃん」

ナディア「だって、あの兵がもう時間だから巻けって…」

（時間切れ。　続く？）

第１０２章　攻勢戦略エージェント

割れんばかりの拍手。　中には立ち上がっている者も多い。

ここは、パンドラールの帝国元老院議会の議場。　そこで今日、ザキラとメリャーナによる帝国軍勝利の報告がなされたのである。

元老院議員「通信ではありましたが、皆様お聞きのように、メリャーナ皇女殿下率いる軍が、フロンティアガードを戦わずして下しました。　先には、ザキラ宰相閣下がインドラの海軍に痛打を浴びせられており、ここ１０年近く続いた、大規模な争乱も終結は間近であります！」

画面のメリャーナが微笑み、議場のザキラは手を振る。　ここだけ見れば、帝国の将来は安泰に見えなくもない。

ザキラ「…時に殿下。　フロンティアガードも降伏したことですし、帝都に戻られてはいかがか？　あとは余人でも足りましょう。　わざわざ殿下のお手を煩わすまでもない」

ザキラが、何かを奥に含んだような笑みで語りかける。

メリャーナ「残念ですが、そこまで楽観できる状況にはないのです。　降伏したばかりのフロンティアガードは言うに及ばず、クアルーンの旧領には未だ残党が多く潜伏し、またアラビア諸国の恩賞の差

配も手付かず…。

一手誤れば、せっかくの勝利を無駄にしかねません。　幸い、帝都には宰相がおられます。　インドラと帝国全体は宰相にお任せし、私はしばらく、こちらに留まる事にいたしますわ」

かねてからのサコンの進言だった。

『帝国外部に力を持つことで、ザキラを牽制し、政治の主導権奪回の機会を伺う』

策が、発動した瞬間だった。　今やメリャーナは、本国、西欧のドラグノック卿に次ぐ、３番目に広大な領地を束ねる盟主になっている。

ザキラ「何と。　殿下は僻地に留まったまま、帝国に凱旋すらされぬおつもりか？」

わざとらしい驚きよう。　メリャーナにはそれが、演技に過ぎないとよく分かった。

メリャーナ「故事に言います。　勝って冑の緒を閉めよ、と。　今は気を緩めることのないよう、慎重にも慎重を重ねるべき時ですわ。帝都にての要件があるならば、心の利く者をやります。　万事、その者にお申しつけ下さい」

応ずるメリャーナに、隙はなかった…。

【2】

ザキラ「小娘風情が、いい気になりおって！」

議場から執務室に戻るや、不機嫌を隠そうともしなくなったザキラだった。

イエスマン「ダメダメですよぉ～　ボス。　怒ったら相手につけ込まれるだけ。　ここは、冷静に対処すべきところで～す」

いつもと変わらぬ調子のイエスマンが、ザキラに睨まれる。　けれど、主人に睨まれたぐらいでは、びくともしないのがこの男だった。

ザキラ「…策はあるのか？」

怒りはそのままに、けれど部下の言葉には耳を傾ける。　良くも悪くも、これが宰相ザキラ・ニカイドウの器だった。

イエスマン「イエ～ス、ボス。　こういう時はですね、表で手をきつ～く握っておいて、裏に人をやって、火をつけるんですよぉ～」

ザキラ「ほう」

イエスマン「Dさんに、スパっと殺ってもらっちゃいましょう。はぁ～い」

イエスマンが奇妙なノリで指を鳴らすと、いつの間にか目の前の床に、膝まづいていた1つの影。

ザキラ「Dで小娘を消すか」

フッ、と笑みをザキラが洩らす。

イエスマン「ノンノンノン。　ボス、だから冷静に。　短気は損気ですよぉ～」

意外にもイエスマンは、この凄腕エージェントによる、メリャーナ暗殺を否定した。

ザキラ「小娘を消すのではないのか？」

ザキラの顔が、また不快そうな表情へと変わってしまう。

イエスマン「それじゃ、裏で火をつけるんじゃなくって、鉈で脳天かち割ろうとしてるだけじゃないですかぁ～。　火をつけるってのは、こうするんですよ～」

ザキラに耳打ちするイエスマン。　誰かが聞いているはずもないのに、この男は独特のパフォーマンスをしたがる。

D〔…話し合いに時間がかかるなら、後から目標だけ量子波で送って〕

目の前にいるというのに、脳量子波で告げると、Dは姿を消してしまった。　暗殺者らしく、人前にあまり留まらないタイプなのだろうか？

イエスマン〔仕方ないですねぇ…。　短気はいけないと言うのにぃ～。　目標は、奴らまとめ役のですね…〕

イエスマンは、文句と暗殺目標を同時に送った…。

【3】

ザキラが対メリャーナで動く一方で、宇宙を一手に任された形のジェイソン。　彼は、情報通のエージェント、ハイドとイドゥンを忍び込ませると共に、部隊の再編を手掛けていた。

ジェイソン「エージェントP、Q。　任せておいた再編は終わりましたか？」

呼び出した2人を前に、報告を求める。

オタQ「任せてオタぁ～　凄腕おにゃのこを集めた…」

Pちゃん「あの部隊なら、指揮官があなただと知った途端、全員が逃亡しましたが？」

オタQ「はぅぅぅっ！！」

ジェイソン「……。」

Pちゃん「ご懸念には及びません。　逃げなくても、どうせ潰すつもりでしたし。　本当の内容はこちらです」

黙ってしまった上司を案じてなのか、Pちゃんは『正しいデータ』を画面に表示させる。　オタQと組んで長いせいか、扱いが手慣れているようだ。

ジェイソン「…ルナ2に、エージェントは置かないんですか？」

安堵の息を吐いたジェイソンだったが、すぐに次の疑問を指摘する。

Pちゃんが示した計画書では、ルナ2には大した将が配属されていなかった。　エージェントを集中して運用する一方で、手を抜いた形ようにも見え、ジェイソンにはそれが不安要素に映ったらしい。

Pちゃん「初戦に全力を傾注しようかと思います」

つまりは短期決戦か。

オタQ「ルナ2には、可愛いおにゃのこがいないから、吹き飛んじゃってもいいオタぁ～」

ジェイソン&Pちゃん「…ちっ！」

オタQ「ひいいいいっ！！」

真面目な検討に水を差された2人が、オタQを睨む。　睨まれたオタQが、壁まですっ飛ぶように下がった。

ジェイソン「いけますか？　いや、いけるでしょう。　しかし」

Pちゃん「おっしゃりたい事は、分かるつもりです。

しかし考えますに、単に多くの戦力を割くより、少数でも密かに事を進めた方が良い時もあるかと。　作戦そのものの成算は十分にあると思っています。　ぜひお許しを」

個人戦闘に特化するエージェントが多い中、Pだけは全体をよく見た。　その力は、ユービットでも頭角を見せており…

結局ジェイソンは、それを信じる事にした…。

【4】

三人衆とか、三巨頭。　アニメ風に言うなら、三羽ガラスやスリー

ウイングスなど。　もしザキラの配下をそう呼ぶなら、その3人は間違いなく、イエスマン、ジェイソン、そしてこのDR．マンソンの他にはいないだろう。

だが先の2人と違い、マンソンは今日も研究に没頭していた。　彼にはまるで、帝国…　ザキラをめぐる政治情勢の変化など、興味がないと言いたげに。

DR．マンソン「…儂のディアボロは、奴の力のみを引き出す事に成功していたはず…。　それが喋った、じゃと…？」

頭を抱え、懸命に考えを纏める。　しかし、思いつく考えのどれもが、事実と相反していた。　つまり事実に誤認がないなら、マンソンの論理が根本的に破綻していることになる。

DR．マンソン「馬鹿な…。　儂の30年に及ぶ研究が、間違っていたと言うのか…」

蒼白な顔をしながら、さらにキーを叩き、データを見直す。　だが、結果は変わらない。

？？？「…また袋小路か。　よく飽きないな」

その背中に声をかけた誰か。

DR．マンソン「飽きる飽きないで、やっておる訳ではないわっ！」
当たり散らすようにいい、実際近くにあったグラスを投げていた。

???「錯乱するなど、力が足らない証拠だな。　知力そのものか、感情をコントロールする力のどちらかが」

投げられたグラスは、言葉を発した人間によって静かに受け止められ、デスクに戻された。　いくら偶然近くに飛んで来たとはいえ、たいした反射神経だ。

DR．マンソン「嫌味を言いに来たなら、目障り、耳障りじゃ。どこかに逝け」

なおも感情を暴走させるマンソン。

???「逝け、とは酷い言い様だな？　たしかに俺は拾われた身だし、敵だった人間さ。　だが、実験という賭けには勝ったんだ。そろそろ約束通り、エージェント扱いをしてもらえないか？

俺の名前の頭文字はS…　エージェントSって事になるな」

また1人、ザキラにエージェントが増えたのだろうか？

DR．マンソン「エージェントSでも、エセエージェントでも、好きに名乗るがよいわ。　どうせ先代のSは、Wが殺してしもうたしの」

S「あいつがな…。　好きにはなれないが、やはり力は抜きん出ているんだな」

感心した風な声を出す、エージェントS。

DR．マンソン「ふん。　Wの噂話など…。　今、儂は忙しいんじゃ。　さっさと帰れ」

相変わらずの突き放しよう。　全てのエージェントの生みの親とも言っていいはずのマンソンだが、Sに対してはやけに冷たい。

S「逝け、次は帰れか…。　俺に帰る場所などないと、知っているはずだろう？　そんなに嫌なら、俺が1人でザキラとかいう奴に会って来てもいいんだぞ？」

DR．マンソン「ザキラ様を、呼び捨てにするでないわっ！　しか

も、とかいう奴とはなんたる言い種じゃ！」

研究一筋ながら、ザキラへの忠誠心が確かなのは、マンソンの特徴でもあった。　この時もそうで、ザキラを軽んじるかのような発言に、本気で腹を立てた様子だった。

S「だからこうして、同伴を頼みに来たんだ。　死の淵から救ってくれた、あんたの顔は潰せないし、礼を失して粋がる趣味もないしな」

個性が爆発している者の集団である、エージェントになりたがったにしては、このSという男は礼儀や常識をわきまえているようだった。　初めてザキラに会うのに、マンソンの紹介を求めたのだから。

DR．マンソン「…意外なものよ」

S「意外はこっちのセリフだ。　どうやったら、こうも頭が吹き飛んだのばかり集まるんだ？　この細胞に感染すると馬鹿になるのかと、真剣に悩みかけたぞ」

やれやれとでも言いたげに、Sは率直な感想を述べた。

DR．マンソン「…感染？　ああ、そうか。　まだ言っておらなんだの。

『エージェントは、みな何かしらの力を持ってはおるが、体内にDGを有しているのはお前だけじゃ』

たまたま感染したCを見ればわかろう。　常人ではもちろん、訓練したエージェントでも、直接耐えられる者は稀…　大抵は精神が崩壊してしまいよる」

続くマンソンの説明によると、DGの力を持っているのは、エージェント本人ではなく、MSに積んだディアボロシステムなのだそうだ。　そのシステムを操る立場にあるのがエージェント。

例えるならディアボロシステムがゾウで、ゾウ使いがエージェントなのだろう。

S「つまり、俺は特別な力を持った訳だな？　いや、いい話を聞かせてもらった」

満足気な笑顔を浮かべたSだった…。

【5】

そうしたやり取りの後、エージェントSとなったその男は、主のザキラに会っていた。

ザキラ「お前が新たなエージェントSか？」

イエスマン「僕が見つけた彼ですねぇ～？」

主人とその片腕が、それぞれの反応を示す。

DR．マンソン「…何が見つけたじゃ…。　DGを勝手に打っただけ、後の調整はみな儂に投げおったくせに…」

イエスマン「何か言いましたか？　ドクター？」

DR．マンソン「さあの？　歳を取ると、独り言が増えるというでな？」

わざと聞こえるように独り言を言う方も、それを聞こえなかった振りをして、嫌味を言うのもどっこいどっこい。　この2人は、相変わらず犬猿の仲のようだった。

ザキラ「DGを体内に有しながら、自我を保っていると聞いた」

イエスマン「これでボスも、伝説に1歩近づけたんですねぇ～？」

先の説明ともかぶるが、今までのエージェントは、エージェント本人の身体が、DG細胞に感染していた訳ではない。　ディアボロシステムに頼らず、DGの能力を操れるとなれば、それは1歩も2歩も前進した事になる。

DR．マンソン「…ザキラ様。　こう言うてはなんですがの、まださほどの期待は、されぬ方が良いと思いますのじゃ。

確かにこやつは正気を保っておりますが、いつまで無事いられるかは分からん。　現にCは狂ったまま、回復のきっかけすら見出だせておりませぬし…」

エージェントC、すなわちチャーリーは、インドラで暴走して帰還した後も、生死の境をさ迷い続けていた。

怪我でそうなった訳ではない。　精神がバランスを崩したためで、それは発狂したと言っても差し支えないぐらいの有り様だったのだ…。

だが、そんな慎重さを鼻で笑った男が1人。

イエスマン「臆病ですね～　ドクターも。　そんなん、エージェントにまとめて注射しちゃえば、3人や4人ぐらいは、使えるのが生

まれますって」

DR．マンソン「アホかっ！　ふざけた事を言うのも大概にせい！　今おるエージェントだけでも、調整にどれだけ苦労したか…。そんなに実験がしたいなら、お主が自分の身体に打てばよいではないか！！」

イエスマン「嫌ですよ～。　僕はボスと一緒に、作戦を練るのが仕事なんですからぁ～。　そんな怪しげな力なんていりませ～ん」

…こいつをどう評価していいか、常識のある人間ほど悩むことだろう。

いくら非人道的でも、３０年にも渡って研究を続けてきたDR．マンソンである。　それを闇雲にDGに感染させれば、何人かは適応するだろうと、何の根拠もなく発言したのだ。

仮にその通りになったとして、適応できず、発狂したエージェントたちはどうするのか？　その穴は埋めなければならないし、だいたい発狂させられたエージェントが、いくら何でも哀れ過ぎる。

ザキラ「イエスマン。　冗談を言っている暇があったら、頭を動かせ。　私の期待に応えないつもりなら、エージェントM共々、被検体という名前の生け贄になるぞ」

ジロリと視線が動いた。

DR．マンソン「ほれ見ろ！　さすがザキラ様じゃ。　お主などとは器の大きさが…」

ザキラ「エージェントM、DR．マンソン。　歳をとって、耳が遠くなったようだな？　もう一度言った方がいいか？」

そう言ったザキラの顔が歪み、苛立たしげに指先が机を叩く。　異変を感じたマンソンは、先のザキラの言葉を、ゆっくり反芻する。

『…イエスマン。　冗談を言っている暇があったら、頭を動かせ。　私の期待に応えないなら、エージェントM共々、被検体という名前の生け贄になるぞ』

DR．マンソン「…共々…？！　という事は、こやつだけでなく、儂も生け贄にすると…」

顔から血の気が引くのが、マンソン本人を含む、全ての人間から分かった。

DR．マンソン「か、畏まりました！」

マンソンは、蒼白な顔で部屋を飛び出して行った…。

【6】

マンソンが部屋を飛び出して行ってしまったため、1人残されたエージェントS。

S「あのドクターは、何十年もお前に仕えているそうだな？　それを脅すとは、部下を苛めて楽しむタイプか？」

マンソンがいなくなったせいか、ザキラにも遠慮がない。

イエスマン「ボスがそうだったとして、どうするんですかぁ～？…裏切ります？」

イエスマンの目が、異様な眼光を帯びた気がした。

ザキラ「私は能のない者は、認めぬ主義でな？　出しきれぬ者も同

義だ」

イエスマン「ボスは優しいですからね～。　能はあるけど出せない人間は、面倒を見てあげるんですよぉ～」

つまり、慎重すぎる性格のマンソンを本気にするべく、ザキラが一芝居打ったと言うのか？

そういえば、こんな芝居染みた人材活用術に弄された人物が、他にもいた記憶がある。　その人物は、元帝国貴族でありながら、エージェントとしても戦果を…。

S「面白い事を言うじゃないか。　どうせ行く当てもないしな。しばらく、ここにいる事にする」

静かに言っただけだが、それはつまり、ザキラに忠誠を誓うのとたいして意味は違わない。

イエスマン「それは頼もしいことですね～。　でも、その前に1つだけ訊いていいですか？」

イエスマンの目が、また凄味を帯びた気がした。

S「…何だ？」

イエスマン「あなたは、元々は敵だったと聞きましたぁ～。　それが何で、急に気が変わったんです？」

イエスマンの目はそのまま。　主人に代わり、新しい臣下の忠義を測ろうというのか？

S「質は違うが、ここには力が集まっていると思ったからだ。　力があれば、事実は後からついて来る。　俺は一度、力が無かったが故に全てを失った」

フッと息を吐く。

イエスマン「力、力って、腕っぷしばかりのお馬鹿さんは、すぐ落とし穴に落ちますよぉ～？」

S「違うな。　頭も力のうちだ。　知力、という言い方をするだろう？」

イエスマン「なぁ～るほどぉ～」

イエスマンは意外な顔をしたが、ザキラはどちらかと言えば、感心したような顔をしていた…。

第１０３章　ゲットの家出？（前書き）

（９回目）

シクス「よ～しよし」

ワグナー「グルルゥ…　ニャァーン」

エイス「恋バナ始め…　って、まだいたんだ、この猫」

シクス「えっとね～。　編集者のおばさんが、重要キャラのなのに出番が作れなかったって、罪悪感感じてるらしくって」

マヒロ「せめて冒頭文で、たくさん可愛がってもらうのよ～」

エイス「また、そんなミスをこっちに押しつけて～」

ミク「しょうがないよ。　それがお姉だから」

シクス「あ、あなたが、おばさんの妹さん？　姉に似ないで、運動神経よくて、機械音痴じゃないんだって？」

マヒロ「誰が…」

3人「操縦能力『2』はハウス！」

マヒロ「ふにゃ～～ん」

シクス「ところで、ここにいるって事は、ゲストしてくれるんだよね？」

ミク「いいよ～」

エイス「じゃ、さっそく1問目行っちゃう。　私は姉よりモテると思う」

ミク「いいえ」

『ピピピピピピピパピプ…』

シクス「反応しすぎて、何か変な音がするよ～」

マヒロ「こら～！　本人の恋の質問しなさいよ！」

エイス「同じ軍なんだし、ライバルとの力関係は重要でしょ」

シクス「部下に振られて、妹に負ける姉かぁ…」

エイス「はい、第2問。　年上キラーな自信はある？」

ミク「いいえ♪」

『ピピピピピピピピピビー！！』

シクス「まだ調子がおかしいよ？　とりあえず、反応は強いみたい」

ミク「昔から大人には可愛がられるよ？　これマジな話」

マヒロ「こいつこう見えて、悲劇キャラだから。　周囲が同情するし、しかも頭がいいから、大人の話題に平気で適応するんだもん」

エイス「両親は、目の前で爆死だっけ？　何て言うか、王子様の１人ぐらいいても、罰は当たらない境遇？」

ミク「でも、あたしは義理堅いから、お姉が行き遅れているうちは、身を慎むよ…」

シクス「ダメだよ！　それじゃ、一生お嫁にいけないよ？」

ミク「あ、そっか」

マヒロ「そこ！　納得すんな～！！」

（続く）

第１０３章　ゲットの家出？

周囲を沈黙が包んでいた。

エージェントとの戦いで、大きな被害を被ったからではない。　その原因は…

ゲット「知ってて黙ってったんだな！　サフラン１０が消えてた事も、街のみんなが死んじまった事もっ！！」

ゲットが問い詰めていたのは、今から一ヵ月半ほど前に起きた、帝国軍実験ＭＳ暴走事件だった。　この事件では、霧雨艦隊の数十隻の艦が沈んでいたが、同時にサフラン１０…

ゲットの生まれ故郷のコロニーも、大穴が空き、数え切れない人間が死んでいたのだった。

スティヴ「…そ、それはお前…」

答えに窮したスティヴが、すがるような目でリンダを見る。　一旦戦場に出れば　『鋼鉄の骨・アイアンボーン』と呼ばれるほどの彼だったが、相手がゲットとなると、そうはいかないらしかった。

ゲット「ユーリから聞いて、みんな知ってるんだぞ！　今まで俺を、除け者にしてたんだよなぁ？」

リンダ「除け者って、そんな訳ないじゃ…」

ゲット「ここまできて、言い訳かよっ！！」

怒り心頭のゲットには、もはや2人の言葉など届いていないらしかった。

だが本当の所では、エージェントであるユーリならともかく、リンダたちには、コロニー破壊の詳しい実状を把握しきれなかった。スティヴにしても、どうにもならない事をゲットに教えて、不安になってしまわないよう配慮しただけなのだが。

ゲット「どうしたんだよ！　答えろよっ！」

先には何も言わせないような事を言っておきながら、今度は黙ってしまった2人を怒鳴る。　ゲットはただ、憤懣を周囲にぶつけているだけだった。

ゲット「何とか言ってみろ…」

ゴトー「じゃあ言ってやろう。　お前は共に戦った仲間より、敵を信じるんだな？」

帰還してからずっと、ただならぬゲットの雰囲気を心配して、ゴトーたちもその場にいた。　ずっとゴトーが黙っていたから、誰も口を挟まないでいたのだが、そのゴトー本人が、ついに口を開いたのだ。

ゴトー「戦場で仲間を信じられない奴は、死ぬぞ?」

普段は無口だが、いざとなると熱い男だけに、ゴトーの言葉は重みがあった。　スティヴ以上の歴戦の傭兵という経歴も、それを後押しする。

ゲット「騙してた奴らを信じろって言うのか?」

だが、ゲットはそんなゴトーにまで食いつく。

ゴトー「順番が違うな。　お前はまず、敵の言葉を信じた。　仲間より先に。

『敵が仲間の連携を乱すため、嘘をついたかも?』　なんて、疑いもしなかったようだな。　その時点でお前は、リメンバーズに乗っている資格はない」

スティヴ「待てよ、ゴトー!　これはうちらの問題だ!　横からいらねぇ口を挟むんじゃねぇ!!」

明るくおちゃらけたキャラのはずのスティヴが、ゴトーの胸ぐらを掴んでいた。　目は、一直線にゴトーを睨み据えている。

ジルド「てめ、隊長に…」

ゴトー「いい。　俺は思った事を言っただけだ。　それ以上でも、それ以下でもない」

ゴトーはジルドを手で制し、甘んじて掴まれたままでいる事を選んだ。

リンダ「…あたしが全部、説明してやるよ」

そんな仲間割れを何とかしようとしたのだろう。　リンダが少し躊躇いがちながら、口を開く。

リンダ「まず、コロニーが帝国に殺られたのは事実さ。　正直、よく分からない事も多かったけど、壊されたって事は知ってた」

ゲット「やっぱりか！　俺を…」

リンダ「除け者にする気はなかったよ。　だけど　『ゲットにも教えよう』　って言ったスティヴを止めたのはあたしだ。　だから全部、あたしが悪い」

スティヴ「なっ！？　リンダっ？！」

スティヴが驚き、ゴトーから手を離す。　何故ならリンダの話はあべこべで、ゲットに話さないように強く主張したのは、スティヴの方だったから。

ゲット「…リンダが…。　みんな…　くそっ！！」

フレーネ「ゲットっ！！」

ハロ「ゲットマテ！　ゲットマテ！」

飛び出して行ったゲットを、フレーネとハロが追いかける。　一方でリンダは、足に根っこでも生えたかのように、その場に立ち竦んでいて…。

【2】

フレーネ「ゲット…」

黙って外を眺めるゲットを、フレーネが見つけるまで、そんなに時間はかからなかった。　いくら広い艦内とはいえ、誰にも見つからずに行ける場所には限りがある。　艦は、リンダとスティヴだけで動かしている訳ではないのだ。

フレーネ「ゲット。　みんなの所に戻ろう？」

ハロ「ゲットカエルゾ！　ゲットカエルゾ！」

普段は賑やかに感じるハロの声が、少しだけ耳障りだった。

ゲット「…嘘つかれて、除け者にされて、それで黙ってろっていうのかよ…。　仲間だって言うなら、隠し事なんかすんなよっ！！」

ゲットは泣いているのか？

スティヴは、故郷を失った事を知り、ゲットがショックを受けないように配慮したつもりだった。　それは彼なりの優しさで、そこにゲットが想像したような、悪い感情があるはずもなかった。

ただ1つだけ、スティヴは気がついていなかった。

ゲットにとって、地球降下からずっと共に旅したスティヴたちは、故郷のサフラン１０と同じか、それ以上の重みを持ち始めていた事に。　彼らがゲットに嘘をついていたという事実は、想像以上に深く、彼の心を抉ってしまったのだ。

フレーネ「ゲット。　そんな事ないよ？　みんなはゲットが心配だったから、嘘をついたんだと思う。

私はあのコロニーで眠る前の記憶がないから、あまり実感は湧かないんだけど…。　記憶があったとしたら、すごく辛いと思う。　そんな辛そうにするゲット、私は見たくない…」

ゲット「じゃ、俺が知らなきゃよかったってのか？　知らないでいれば、いつかコロニーは元に戻って、死んだ人たちも生きて帰って来たって言うのかよ！

えっ！？」

ゲットが、今まで見せた事のないような怖い目つきで、フレーネを見た。　その余りの形相に、フレーネの目が潤み、手が震える。

フレーネ「…ゲット…。　怖い顔しないでっ！　そんなゲットなんか、嫌いっ！！」

泣きながら、今度はフレーネの方が駆け出して行ってしまった。
その後ろ姿を見つめるゲットは酷く寂しげで…。

その晩、ゲットはリメンバーズから姿を消した…。

【3】

ナイル「うっぜ～。　何で俺らが、後片付けなんだよ」

スリス「しょーがないじゃん。　変にノンがやる気なんだし。　最近のノンって、ちょっと変だよね？」

ぼやきながらも、エージェントと戦った場所に舞い戻っていたのは、インドラの誇る強化クローン部隊、ラピスラズリ。　普段なら、実戦か訓練ぐらいしかやる事がない彼らだが、今回はリーダーのノンが

『調べたい物があるから』

と言って、戦場の後調査を名乗り出てしまったため、仲間全員が駆り出される羽目になったのだ。

セブンス「でもまあ、こうしてた方がのんびりできるけど？　ダインのおじさんはともかく、他の奴らは面倒臭さすぎるね」

セブンスがこう言うには、理由があった。

エージェントとの戦闘が終息した後、当然彼らは基地に帰還した訳なのだが、そこで待っていたのは、化け物と化したエージェントとの戦いを信じようとしない者達だった。　最も酷かったのはウィナスで、まるでラピスラズリが帝国に寝返ったかのような言葉遣いだった。

アイン「それに、フォルナのお墓ぐらい、作ってあげた方がいいかなって」

トゥーエ「お墓ねぇ」

シクス「お墓って、死んだ人がいたら開く式だっけ？」

エイス「いや、死んだ人が入る器のことでしょ？」

相も変わらず、こういった知識はないに等しいラピスラズリだった。

死への恐怖がないから、死んだ人の事をあまり考えない。　考えないから、そのために行う儀式についても、知らないのも仕方がなかった。

アイン「やっぱ、よく分かんないからいいや。　おじさんに任せとけば、うまい事してくれるでしょ」

宗教色の強いインドラだから、戦死した兵に対する弔いはきっちりしていた。　特に帝国軍と戦っての死は

『滅びではなく魂の昇華だ』

とされており、ラピスラズリとは違った意味で、死の恐怖を乗り越えた者もいる。

スリス「と・に・か・く。

ここはみんな吹き飛んじゃってて、もう何も残ってないよ。　おっさんが言ってた、もう1ヶ所の方に行こうよ～」

スリスはそんな事を言って、他の仲間たちを誘う…。

【4】

スリス「ひゃっほう～！」

スリスのＲＦドムが、風になったような速さで地を駈ける。
ＭＳが全力で走れば、その速さは、旧式のザクでも時速６０キロにもなる。　特に熱核ホバーを装備したドム系統の機体は、空を飛ぶ可変型や飛行型ＭＳを除けば、屈指の速さを誇るのだ。

エイス「やっぱ、ドムはいいよね～。　このずんぐりむっくりが、ドンってぶっ飛ばすあたりが、もう最高っ！」

これを正しく翻訳すると

『ドムは重装甲なのにも関わらず、抜群の加速力をしていて、その加速Ｇは慣れるとクセになるよね』

といったような意味になる。　その言葉通り、スリスとエイスは、他の機体に乗る仲間を大きく引き離していた。

ノン「小回りだったら、ザクのが効くんだけどね？」

苦笑いのノンが乗っているのは、ＲＦザク。

トゥーエ「まだ新型に乗ってるだけイイじゃん。　あたしなんか、昔のＭＳに逆戻りだよぉ～」

そして、前の戦いで機体を失ったトゥーエは、ゲルググＦｓ型に乗

らざるを得なかったようだ。　当然、ＲＦドムのペースにはついて行けず、遅れがちになっている。

エイス「そんなん、やられる方がマヌケなんだよぉ～。…っと、ここでエイス選手、一気に抜きにかかったぁ～！！」

自分で言いながら、前を行くスリスのＲＦドムに並ばせ、さらに加速させる。　辺りは人里離れた平原、しかも段差のない場所で、地面から浮いているドムの高速性能が、特に際立つ地形だった。

スリス「あっ、エイス！　抜け駆けか？」

同じくスリスも、負けじとスピードを上げる。　両機とも前の戦いでの損傷が小さかったため、カタログデータ通り…　いや、それ以上の速度を出しているようだった。

スリス「へへ～んだ。　そう簡単には負けないよ…

…って、エイスっ！　前、前っ！！」

エイス「前って…

ウソ?!　何でこんな所に人いんの???」

2機のRFドムの速度は、時速100キロを遥かに越えていた。
それでも、サーモセンサーが捉えた人影らしき物体を、ラピスラズリの誇る、超人的操縦技術を遺憾なく発揮して避けた…?

【5】

エイス「こら〜!　飛び出し禁止!　ドムは急に止まれなぁ〜い!!」

交通安全の標語みたいな言葉を言っているエイスだったが、そんな呑気な事態ではないようだった。

熱核ホバーを装備するドム系のMSは、周りに強烈な風を巻き起こすようにして走る。　直接接触しなくても、近づいただけで、生身の人間など吹き飛ばしてしまうのだ。

スリス「どこいった？　人跳ねたなんて言ったら、またおっさんの小言が始まるよ～」

軍人が、一般人を事故死させるような問題が厄介なのは、インドラでも同じようだった。　スリスは、違った意味で被害者の無事を祈りつつ、辺りを捜索した。

ナイル「あ～あ、殺っちまったな～」

アイン「これは、僕は悪くないよね？」

トゥーエ「死体埋めて、証拠隠滅しないと」

ここで常識的な反応？　を返さないのは、やはりラピスラズリ。それでも捜索には協力する気はあるようで、踏みつけてしまわないように気をつけながら、センサーで辺りを探る。

トゥーエ「あっ！　人間の体温みたいな反応みっけ！　これは埋めずに済むかっ？」

思いっきり物騒な事を言いながらも、トゥーエはゲルググから降り、反応のあった所を直に見てみる。　草の背丈が意外にあって、ＭＳに乗ったままでは目視が難しかったのだ。

アイン「トゥーエ！　もうちょい右…。　あと3歩前！」

アインがトゥーエに、スピーカーで、細かい位置を補正する。　草をかき分けたトゥーエが無事、人らしき物体を発見した。

トゥーエ「おっけー。　死んでないし、五体満足、骨も折れてないみたい。　イイ腕してるね～」

エイス「やっぱそう？」

スリス「任せて？」

褒められて嬉しそうにする2人。　事故が大した事なかったと分かって、ほっとしたのもあるのだろう。

トゥーエ「じゃ、あとはコイツ叩き起こして、口止めしとけばいっかな…

ってコイツ、ガキじゃん？　甘～いキャンディーあげるから、お父さんには黙っててね…　あれれ？」

？？？「…っつ…。　俺はガキじゃね～よ！」

トゥーエは返事をしたその子供を見て、トゥーエは静かな驚きを見

せる……。

第１０４章　エヴァニーの決意（前書き）

（９回目）

ミク「よし、お手！」

ワグナー「フニャ？」

シクス「猫にお手は無理じゃない？」

エイス「だいたい、お手してるかどうか、小説じゃ書きづらいし」

ミク「う～ん、ネタに無理があったか～。　責任取って、今回の冒頭文もうちの軍からゲスト出すよ。

ミサトっち～！」

ミサト「ミクだから仕方ないけれど、その呼び方やめてほしいのよね…」

ミク「細かい事は気にしない。　はい、ここに座った座った」

シクス「さっそくウソ発見器をつけま～す」

エイス「第1問。　はっきり言って、主人よりモテる！」

マヒロ「待てこら！　またその質問か～！」

ミサト「お嬢。　個人的にモテるのは君主の仕事じゃないわ。　万人に慕われてこその主で、だからこそマーガレットは纏まっているのよ？」

マヒロ「…ミサト。　上手いこと言って誤魔化したつもりだろうけど、そうはいかないわよ？」

ミサト「あら？　分かった？」

ミク「まだまだミサトっちも、詰めが甘いな」

エイス「とにかく、主人が一番モテないのはわかったから。で、第2問。　実は同僚とデキている？」

マヒロ「そんな事は認めなぁ～い！」

ミサト「…えっと、私まだ何も言ってないんだけれど…」

マヒロ「ミサトの同僚って言ったら、つまりケイさんの事じゃない！　デキてるなんて認めない！　仮にデキてても潰す！！！」

エイス「…うわ～。　パワハラだ～」

シクス「セクハラかも～」

エイス「第3問。　なんだかんだ言って、主人にも春は来ると思う？」

マヒロ「そんな訳ない…

…あれ？？？」

ミク「…お姉。　自分で否定してるうちは、春は来ないよ？」

ミサト「少佐はあんなだし、別にお嬢が悪い訳じゃ…」

シクス「あんな？」

エイス「どんな？？　じゃ、最後の質問。　実は身近な先輩はＢＬ…」

マヒロ「聞きたくなぁ～い！！！」

ミサト「…別に私、肯定してないけど…」

シクス＆エイス「今回、おばさん煩すぎだよ…」

（続く？）

第１０４章　エヴァニーの決意

エヴァニー「ちょっと、付き合ってもらえないか？」

ある朝、毎日の鍛練中のマリーに声をかけたエヴァニー。

マリー「…見て分かりませんか？　鍛練の邪魔です」

冷たく言い放ったマリーだったが、エヴァニーに退く気配はない。

エヴァニー「だから来たんだが？」

その言葉の直後、エヴァニーの繰り出した蹴りがマリーを襲った。

マリーはそれを腕でガードする。

マリー「無礼な…」

エヴァニー「礼を尽くしても、相手はしてくれないだろう？　だから襲った」

笑顔を見せたエヴァニー。　けれど、その目は笑っていなかった。

マリー「いいでしょう。　死んでも知りませんよ？」

黙って頷くエヴァニー。

それを見たマリーは、一気に間合いを詰めた。　右足から踏み込み、掌底。　それをエヴァニーが捌いけたと思った時には、マリーは既に左足を踏み込んでいた。

マリー「はっ！！」

マリーの右足が、エヴァニーを捉える。

エヴァニー「まだまだ！」

マリー「何がまだなのです？」

しかし、マリーの蹴りは変幻自在だった。　上げた足を下ろさないままに、エヴァニーの左足にローキックを極める。　ミドルローの二段蹴りだ。

エヴァニー「くっ…」

さらに足を入れ替えて、左蹴りをエヴァニーの胸板に突き刺す。
エヴァニーは苦しそうにうずくまり、呻くだけで精一杯になってしまった。

マリー「身の程を知りなさい」

吐き捨てるように言い、さっさとその場を後にするマリー。　だがマリーは、そのすれ違い様に声を掛けられる。

軍医「…ほう。　少佐が本気を出すとはの。　久し振りに良いものが見れたわ。　やはり早起きはするもんじゃな」

マリー「……。」

軍医「見込みがあるじゃろ？　リターナの毒が抜けたばかりで、まだろくに筋力も戻ってはおらぬが、気持ちは冴えておるな。　少佐が鍛えてやれば、化けるやも知れんぞ？」

ニヤリと皮肉めいた笑みを浮かべたのは、エヴァニーを人間世界に引き戻した、あの軍医だった。

マリー「…人間、そう簡単に化けられるものではありません。　私の相手をするには、下半身をもっと鍛えなければ」

軍医「そうか。　では毎日の走り込みを、3倍にするように伝えておこう。　これでよいか？」

マリー「……。」

マリーは、何も言葉を返さずその場を去ったが、その足音には、不快な響きはなかった…。

【2】

サヤリ「エヴァニーが言うなら、私に依存はない！　前に言ったと思うが、私は世界を変えるために、何かしたいと思っていたんだ！」

喜色満面のサヤリだった。　彼女は、あれだけ周囲に反発していたにも関わらず、エヴァニーが説得に当たった途端、手の平を返したように国を継ぐと言い始めたのだ。

メリャーナ「…分かりやすぎるわ、あの子は」

そんなサヤリを見て、がっくり肩を落とすメリャーナだった。　サヤリが王位を継ぎ、シノノメが安心するのを強く望みはしたが、この顛末はどう評価すべきなのか？

マリー「あれはあれで、良いかと思われます。　メリャーナ様の価値観に反する事と思いますが、自分の心に沿った生き方には、違いはありません」

だが、意外にもマリーは、それを責めなかった。　と言うか　『エヴァニーを説得に当たらせよう』　と発案したのが、実はマリーだったのだ。

メリャーナ「マリーの目には、何か違った物が見えたようね。　そう言えば、朝の鍛練のメニューを変えたんですって？　ここ3年くらい、変えた事なかったわよね？」

マリー「違った物などと…。　メリャーナ様以上の慧眼が、私ごときにあろうはずがありません」

極端に遠慮深くなる。　それが図星を突かれた時の癖だと、メリャーナはずいぶん前から気がついていた。

サヤリ「帝国を変える。　やり方は思ってのとは違ってしまったが、エヴァニーとなら実現してみせる！」

エヴァニー「ああ。　サヤリならきっとできる。　なんたってサヤリは、マリンピアの王女様なんだからな？」

エヴァニーにおだてられ、サヤリは終始上機嫌だった…。

【3】

シノノメ「サヤリがあんなに喜んだ顔を見るのは、どれだけぶりであったろうか…。　これで私も、安心して冥土に旅立てるというもの…」

そして、そんなサヤリの姿を最も喜んだのは、実の父であるシノノメだった。

メリャーナ「私は、シノノメ殿下を冥土に送り出すために、マリピンアに来た訳ではありません。　後を継ぐと決めたとはいえ、まだサヤリ姫は２０にもなっていない身なのですよ？」

だがメリャーナは、抗議らしい言葉を口にした。　そう言ったのは、シノノメが思っているほど、メリャーナはサヤリに何もできなかったと感じているからだろうか？

シノノメには伏せていたが、サヤリを平手打ちにした日以来、メリャーナはサヤリと一言も口を利いていない。　説得したのはエヴァニーで、サポートしたのはマリー。

だがそれを察しているのかいないのか、シノノメは静かに首を振った。

シノノメ「何をおっしゃいますか。　父である私よりも、サヤリに対して真剣になってくだされた殿下が、今さら…。　いくら感謝しても、感謝しきれぬくらいでございます」

メリャーナ「シノノメ殿下…」

メリャーナが声を詰まらせる。

シノノメ「…マンダラはおるか？」

マンダラ「シノノメ様。　マンダラめはここに」

重臣のマンダラが、シノノメの枕下に膝まづく。　その目が涙で濡れていた。

シノノメ「…とは言え、メリャーナ殿下は御多忙な身。　マリンピアごときに心煩わせる事があってはならん。　そなたがサヤリを支え、マリンピアを全うさせよ。

それから、サヤリ…」

サヤリ「…ち、父…　上…」

サヤリの言葉は、他の2人に比べてかなり細く、目もシノノメをチラチラ窺うように見ていて、何とも言いづらい雰囲気だった。

シノノメ「サヤリ。　そなたには、王として、父として、感謝されるような事は、何1つしてやれなかった…」

サヤリ「…父上…」

シノノメ「だから何も見習う必要はないし、むしろ私の轍を踏まぬよう気をつけよ」

静かに張り詰めた空気。　それがサヤリの肩に、重くのし掛かる。

シノノメ「ただし、言っておくことがある。

そなたは我が強く、折れる事を知らぬ。　それでは国の主は務まらぬ。　嫌であろうが、他人の言を聞け。　特に殿下の言はな…」

メリャーナ「…っ！！」

シノノメ「…っ」

サヤリ「……。」

三者三様の表情だった。　メリャーナは驚き、マンダラは納得、サヤリは戸惑いとでも形容すればよいのか？

シノノメ「…サヤリ。　返事をせぬか」

サヤリ「…は、はい…」

サヤリは、明らかに目が泳いでいた。　苦言を呈し続け、頬を平手で張り飛ばしたメリャーナを、サヤリはどう思っているのか？

シノノメ「そなたがマリピンアを飛び出す前、私に言ったことがあったな。

『今の帝国は間違っている。　そんな帝国に従う私も、また間違っている』

と…」

事実なのか、サヤリは黙ったままだ。

シノノメ「今この時から、マリピンアの主はそなただ。　だから、そなたが帝国に大義がないと思うのなら、私とは別の道を進んでも構わぬ」

マンダラ「シノノメ様っ！！」

マンダラが驚いたように叫ぶ。　シノノメの言葉は、そのまま受け取れば、帝国に逆らうとも取れる。　当然の驚きと言えよう。

シノノメ「だが、これだけは心に留めておくがよい。

たとえ帝国に何があろうと、メリャーナ殿下を裏切ってはならぬ。

国の有り様など、時代に流され、変わる時は変わる。　だが、人の心はそうではない。　己を案じてくれる人間を信じるのだ」

サヤリの目が、チラっとメリャーナを見上げた。

シノノメ「…よいな？」

サヤリ「……。」

シノノメ「よいかと訊いている」

サヤリの目線は右へ逸れ、さらに左へさ迷った。

シノノメ「聞けぬと言うなら、そなたに国を継がせることはできぬ。もう一度だけ訊く。　メリャーナ殿下を姉と慕い、その力となるな？」

サヤリ「…分かりました…」

力ない言葉ではあったが、その言葉にシノノメは、満足そうに頷いた…。

【4】

壮絶な言葉の後、シノノメは安心したかのように、急に穏やかな表情になっていた。　サヤリにも、それ以上の厳しい言葉は吐かず、メリャーナが部屋を辞する時には、娘を慈しむ、ごくありふれた父

親の顔をしていた。

マリー「また、重荷を背負われておいでですか？」

それでも部屋から出るやいなや、控えていたマリーに、そんな事を言われてしまった。

メリャーナ「シノノメ殿下の言葉を聞かなくても、マリーには分かってしまうのね」

シノノメの病床に呼ばれたのは、メリャーナとマンダラ、サヤリの3人だけで、余人は遠ざけられていた。他の臣下や、親族の見舞いにも普通に会っているようだったが、その時だけは例外だったようだ。

エヴァニー「背負い過ぎると潰れるぜ？　潰れた俺が言うんだから、間違いない」

笑ってそう言ったのは、エヴァニー。　自らの恥を語っているはずなのに、その表情は明るかった。

マリー「メリャーナ様に、無礼な口を利かないで下さい。　まだ蹴られ足りないのですか？」

マリーが右足首を軽く回す。

エヴァニー「ああ足りない。　少しは痛い目を見ておかないと、罪の意識が薄れるからな」

マリー「…ふん」

エヴァニーの軽口に、マリーは何を感じたのか？

エヴァニー「冗談はさておきまして？」

マリーの繰り出した柄の一撃を受け流しつつ、エヴァニーが言葉を繋いだ。

エヴァニー「サヤリの事、俺ごときが頼めるものではないと思います。　ですが、あいつはあいつなりに必死に考え、必死に生きてきました」

エヴァニーは急に頭を下げた。　言葉遣いまで変わっている。

エヴァニー「俺にできる事なら何でも致します。　何とぞ、サヤリの事をよろしくお願い致します」

平伏せんばかりに頼み込む。　それを見てメリャーナは、マリーが最近、エヴァニーの肩を持ち始めた理由が分かった気もした。

メリャーナ「できないと言ったら、どうするのですか？」

メリャーナの目が鋭くなる。

エヴァニー「俺が、地獄の底で学んできた事があります」

エヴァニーはメリャーナの問いには答えず、違った事を語り出した。

エヴァニー「それは、『勇気』と『無謀』の境目です。

今の俺がどう足掻こうと、マリンピアに…　サヤリにしてやれる事はありません。　俺には政治なんか分かりませんし、ＭＳに乗った事もない。　男１人、闇雲に拳を振るって、それで物事が成就するほど、世界は甘くありません」

沈んだ声だが、意思ははっきりしていた。　考え尽くして語られている言葉だと、メリャーナでなくとも感じただろう。

エヴァニー「ですから、何とぞサヤリにお力添えを。　そうして頂けるならば、このエヴァニー・ア・ヴェンジャー、メリャーナ様の

御為に、如何なる事を辞さぬ所存です！」

自分にできない事を認め、他人にすがるのは、一見すればみっともない。　けれど認めるのは勇気。　認めず、ただがむしゃらになるのは無謀なのだと、エヴァニーは悟ったのかも知れない。

メリャーナ「口で言うだけなら、誰にでもできます。　行動で示しなさい。

あなたがリターナから立ち直る時、地獄とやらを乗り越えた事は聞いています。　しかしそれは、自分のために為した事。　他人の為に同じ覚悟をできる人間は、そうはおりません」

メリャーナの目は、彼女らしからぬ厳しさを保ったままだった。

メリャーナ「…猶予は…」

エヴァニー「1週間で結構です。　それで俺の全てをご覧頂く！」

力強く宣言したその言葉、果たして勇気なのか、無謀なのか…？

第１０５章　計略的再会（前書き）

（１０回目）

エイス「１０回目～」

シクス「はぁ…」

エイス「あれ、シクス？　元気ないね？」

シクス「エイスちゃん…。　前のおばさんの絶叫が、耳に焼き付いちゃって。　しかも今回のゲスト、彼女なんだって」

サヤリ「恋バナするんだって？　何でも聞いてくれ」

シクス「私、ものすっごく何も聞きたくないんだ」

エイス「シクスって、我が道を行くタイプが駄目だっけ？　前に、リードしてくれる方がいいとか言ってなかった？」

シクス「男の人がリードしてくれるのは歓迎なんだけど、女がこういうのはちょっと…」

エイス「よし。　他ならぬシクスの頼みだから、あたしが何とかしちゃおう」

サヤリ「何を、さっきからブツブツ言っているんだ？　始めないのか？」

エイス「よく言った。　じゃ、さっそく第1問。　男に振られたら死にたくなる？」

サヤリ「何だその質問は！」

エイス「何でも答えるって言わなかったっけ？」

サヤリ「い、いいえ！」

『ぴぴぴぴぴ～』

シクス「いきなり音が変…」

エイス「あたしにかかれば、こんなもんかな？」

サヤリ「恋してるだから、仕方ないだろ？　振られたらショックだよな？！」

２人「重い女は嫌われるよ～」

エイス「第２問。　今の彼氏にとって、自分はふさわしい女だ？」

サヤリ「は…　いや、　いいえ！」

『ぴぴぴぴぱぴぷぺぽ…』

シクス「…このコーナーも終わりかな？　機械、壊れたみたいだし」

サヤリ「待て！　私のどこがエヴァニーにふさわしくないと言うんだ！」

２人「…さあ？　薬中の頃ならともかく、最近かっこよくなったし

ね、あいつ」

サヤリ「ま、まさか、エヴァニーを盗ろうって言うんじゃないだろうな？　この泥棒猫っ！」

シクス「それはないよ。　だって本編だと、あいつとラピスラズリは接点ないから」

エイス「それにさ？　あたしら、面倒臭い女とは関わらないし」

サヤリ「め、めめめ面倒臭いだと？！」

シクス「自覚ないんだ」

エイス「ま、いいんじゃない？　これから先のお楽しみってことで」

（終了）

第１０５章　計略的再会

評議会議員「これにて、定例評議会を閉会致します」

軽く拍手がなされた後、議員達が散って行く。

とはいえ、集まっていた場所はちょっとだけ目立つビルの、狭くはないという程度の会議室であり、とても一国の国政を決定しているという雰囲気はなかった。　そのあたりは、レジスタンスらしさが生きていると言ってもいいだろう。

グリフィン「意外と纏まっているのだな？」

そう驚いているのは、表向きにはフロンティアガードの新領主となったグリフィンであった。　ただし実権はほとんどなく、見方によっては人質ですらある。

茄子笛「そりゃミケさんが仕切ってるからな。　他の奴にやらせたら、決まるもんも決まりゃしない」

ベン「ミケルさんって、人望ありますからね？　熱烈な支持があるとは言いませんけど、実力は評価して

『付いていくぐらいなら』

って人が、ほとんどじゃないですかね？」

これが、フロンティアガードの実状だった。

代表者の合議によって方針が決まるが、その代表者が政治家とは限らない。　鉱夫の頭領をしていたり、資源を売る商人の組合長だったりという有り様で、お世辞にも精練されたメンバーとは言えなかった。

それら地元の代表者と粘り強く話し合い、さらに自警団の血気盛んな者たちを抑える。　できる人間は限られていた。

ミケル「そりゃどうもな。　俺も、好きで始めたんじゃないんだが？」

聞こえていたのか、苦笑いしているのは、噂のミケルフォード当人だった。

茄子笛「あれ？　前にミケさん　『ＭＳ乗るより興味ある』　なんて言ってませんでした？」

ミケル「そうだったか？　まあ、自警団のリーダーしてた時も、似たようなもんだったしな…。　何と言うか、そういう星の元に生まれてしまったらしい」

確かにこういうタイプの人間はいる。　どこへ行っても、気がつけばリーダーをしているタイプで、本人はそこまで敏腕だとも、他人

を惹き付ける人格者だとも自覚していないのだが、不思議と周りが纏まるのだ。

ミケル「ところで領主様？　廃鉱山の要塞化と、中国からの支援の話。　期待してもいいのか？」

領主様とは言ったが、ミケルの顔はにこやかなままだった。

グリフィンは、ミケル本人とはまださほど親しくはないが、自警団のリーダーである茄子笛とは親しくしていた。　その茄子笛とミケル、ベンは親友と言ってもいい仲だから、友人の友人として気を許しているのだろう。

グリフィン「おう。　我輩に任せておけ。　中国には、ＭＳファイターの知り合いがおってな。　ＭＳなら高性能なのが手に入る。　それに気風なのか、帝国に見下されるのが嫌いな奴も多くてな」

中国は随分前から、帝国の属国であった。

だが　『属国だからひれ伏して、何でも言う事を聞く』　とならないのが中国のしたたかな所で、数多くのＭＳファイターが集まり、戦力的に侮れない力を持つ中国は、属国という名前の同盟国と言えた。

茄子笛「高性能なＭＳなぁ…。　ジムキャノンは、優秀なＭＳだよな？」

茄子笛はそう言ったが、ベンは違った方向を向いていた。　ミケルはため息をついている。

グリフィン「昔を大事にする事、大いに結構。　だがリーダーともなれば、体裁の１つも整えんといかん場合もあるのだぞ？」

要は　『ジムキャノンなんか古くさ過ぎるから、早く乗り換えろ』　と言われている訳だ。

ここで周囲の状況を見ると、帝国軍は主力をガルスＪからギラドーガに移そうと、量産のペースを上げていた。　５年前の混乱で、旧式でもある物を使うしかなかった時代は終わり、むしろ軍事技術は急速な進歩を遂げ始めている。

つまり、いくら何でもザクやジムの時代は終わっていたのである。

茄子笛「分かりましたよっと。　ミケさんも何も言ってくれないし、こりゃ年貢の納め時ってやつですかね？　仕方ないから、ジム２とかネモあたりなら乗り換えてもいいっすよ？

あ、もちろんキャノン付きじゃなきゃダメですからね？」

ベン「…茄子の兄貴って、骨董品マニアだったんですね…」

ベンが呆れるのも無理はない。　ジム2は言うに及ばず、ネモも立派なジム系統のＭＳだ。　しかも、ギラドーガ級の最新ＭＳに比べれば、やや旧式がかっている…。

【2】

リョーマ「久し振りだな、ガイアクラッシャー。　相変わらず、脳味噌まで筋肉でできてるか？」

開口一番、挨拶とも思えない挨拶をしてのけたのは、グリフィンをファイトで大いに苦しめた、エンペラーファイターリョーマであった。

グリフィン「それは我輩のことか？　ガイアクラッシャーとは、我輩ではなく、技につけた名前ではなかったのか？」

リョーマ「まあ、堅いことは抜きでいこうぜ」

評議会場を出た一行は、そのままオデッサ近郊にある廃鉱山に来ていた。　産出量が落ち込んだために放棄された所で、閉鎖された今は、誰も訪れる事はない。

そこにグリフィンは、中国から運ばせたＭＳを隠していた。

降伏したフロンティアガードは、一応帝国の領地になるから、同じく属国扱いの中国と取り引きをしても、悪いというほどの事でもない。　だがグリフィンは、そういう所は慎重だった。

リョーマ「ざっと見て来たが、さほど古くはないな。　主要な坑道はＭＳが通れるぐらい広い。　電気さえ戻れば、十分に使える…

…そうだぜ？」

グリフィン「そうだ？」

ミレイ「だって調べたの、みんなあたしだもん」

盛大にため息をついたのは、リョーマ付きの整備士のミレイだった。

ミレイ「リョーマったら酷いんだよ？　こんな陰気な場所に、女の子を１人で行かせるんだよ？」

リョーマ「馬鹿野郎！　俺は明るい陽の下で、華々しく活躍する男なんだ！」

言ったリョーマは、真っ黒の革のジャケットとパンツ、インナーは白いシャツを着崩し、さらに黒い帽子を被っていた。　やはりシンクロはしているらしく、シャイニングガンダムは動くのだが、とても廃鉱山に来る格好ではない。

ミレイ「…目立たない事になると、途端にやる気なくすんだから…」

グリフィン「変わらんのは、お互い様のようだな？」

リョーマを見て、相好を崩すグリフィン。　強敵であり、ファイトでは容赦のない戦いをした2人だったが、ライバル故にお互いを認め合っているようだった…。

【3】

それから1週間ほど。　グリフィンは廃鉱山に籠り、要塞化を推し進めた。

とはいえ、元々通路はあるのだから、ＭＳ用に各部を拡張したり、出入口を増やすのが主な作業だ。　鉱山に出入口は少なく、そこを敵に押さえられてしまうと、動きが封じられてしまうからだ。

その代わり、地下奥深くに位置しており、空爆などまったく効果がないだろう。　下手をすれば、戦術核にすら耐えられそうな勢いだ。

ミレイ「だいたい、作業に目処はついたと思う。　ここ1ヶ所だけじゃなくって、他の所も作り直すんだっけ？」

グリフィン「頼めるか？　掘るのは得意だが、どこを掘ったらよいのかは、今1つ判らん」

要塞化の計画は、ミレイとフロンティアガードの鉱夫が、話し合って決めていた。　餅は餅屋とはよく言ったもので、やはりそういう所は、長年の経験がものを言う。

あとはそれに、ミケルと茄子笛が1つ2つ注文をつけるぐらいで、作業はすこぶる順調だった。

リョーマ「…よし、これぐらい広くなれば入っても…」

ミレイ「ちょっとリョーマっ！　サボってないで、少しは手伝いなさいよね！」

何かぶつぶつ言っているリョーマに、ミレイの雷が落ちた。　だがそれも無理のないことで、掘り始めてからずっと、リョーマは作業をすっぽかし続けていたのだ。

リョーマに言わせると

『シャイニングガンダムは戦うためのＭＦだから、穴掘りなんてみっともない真似、させられるか』

という事らしいのだが…。

鉱夫「つか兄ちゃん。　１つだけ野暮ったらしい事を言っていいか？」

リョーマ「…な、何だ？」

熱心に作業をしていた鉱夫の１人が、ふとリョーマに目をやる。

リョーマが何故か、１歩後に下がった。

鉱夫「足、震えてるぞ？」

グリフィン「なんと？！」

グリフィンが叫び、ミレイや他の鉱夫、さらにたまたま来ていた茄子笛までもが、リョーマを取り囲む。

鉱夫「たまにいるんだ。　暗いのが苦手な奴がよ？　ズバリ兄ちゃん、そんなクチだろ？」

リョーマ「ち、違う！　俺はただ明るい陽の下がだな…」

ミレイ「へぇ～。　リョーマとは長いけど、いつも光の当たってるトコしか行きたがらなかったのって、そういう事だったんだ～」

グリフィン「意外と言うか…。　お主、面白い奴でもあったのだな？」

リョーマ「いや、だから俺は…！！」

言えば言うほど、苦しさがバルバレのリョーマ。

ただ、情けなさをさらけ出すリョーマをよそに、要塞化の作業だけは、さらにペースを上げていったのだった…。

【4】

そうして、メリャーナに仕える誰もが何かに向けて動き出す中、メリャーナに本国からの使者が来訪を告げた。　ちなみにメリャーナ

は、まだオデッサには帰らず、マリンピアに留まったまま。

メリャーナ「シノノメ殿下の見舞いとは…。　この時期に、何故…」

シノノメが病気な事は、さすがに隠しきれなくなってはいた。　けれど、メリャーナが病床に呼ばれた翌日に使者が来た。　タイミングが良すぎる。

カトラス「情報、洩れてるんじゃないのか？　いっぺん調べた方がいいかもよ？」

ヤタガラスの勘が働くのか、カトラスはそんな事を言った。

情報漏洩は極端にしても、ザキラがメリャーナの動向に目を光らせているのは確かだろう。　だからマリンピアとの繋がりを警戒し、見舞いを名目に使者を寄越したのかも知れない。

マリー「と言うか、エージェントが使者というのも、露骨ですね」

メリャーナ「そうですね。　サコンの策のせいで、思い通りにいかないのが不満なのでしょう」

その言葉に、サコンが頭を下げた。

長年に渡るザキラとの争いで、決定的な弱味を握らせなかったメリャーナだったが、大局では常にザキラがメリャーナの上を行っていた。

皇子を陰から操ったのみならず、遂には自らが最高権力者たる宰相に就いて見せた。　メリャーナは、自身が失脚することも命を失う事もなかったが、巻き返しを計れたのは、サコンが幕下に加わってからである。

メリャーナ「それでマリー。　使者のエージェントとは誰なのですか？　また、Pとかいう准将なのでしょうか？」

一時期エージェントP、Pちゃんは、メリャーナに付きまとわれた事があった。　ザキラに忠実、かつ抜け目のないあの男が監視についている時は、メリャーナも思い切った行動には移れなかった。

それぐらいの強敵だったから、メリャーナが警戒するのも無理はない。

マリー「それがですね、使者のエージェントはですね…」

なぜかのマリー視線が、かすかに宙を泳いでしまう。

マリー「エージェントの称号は、EとSだそうで…」

告げたマリーの表情に、メリャーナは微かに首を捻る。

メリャーナ「聞いた事がないわね？　サコンの調べたデータにも、なかった気がします」

サコンも頷き、メリャーナはさらに眉をひそめた。

マリー「メリャーナ様。　ご存知ないのは、エージェントの称号だけです。　エージェントになる以前の２人の名前は…

エルフレアとシベリアです…」

告げたマリーの目が、２、３回不自然に瞬いた。

メリャーナ「…っ！！　…エルフレア殿…。　私の記憶が間違いでないのなら、その方は…」

メリャーナの顔色が、急に蒼くなった。　そして隣のサコンも、複雑な表情になる。

マリー「サコンも、エルフレア殿とお知り合いでしたか？」

サコン「ええ。　シュバルツ中佐の下にいた時に、少しですが…」

サコンが最初に会った時はまだ、訛りの酷いジャック一等兵に扮している時だった。　ただエルフレアは、サコンの変装を見破っていた節もある。

『君とは何か縁がありそうな気がするよ。　できれば今度は、ちゃんとした形で話をしたいけれどね？』

と言われた事を、サコンは不思議と覚えていた。

カトラス「サンザメヤの戦いにいた奴だよな？　ほとんどすれ違いだったけどよ」

カトラスがシュバルツに身を預けたのは、エルフレアがパンドラールへ旅立った後だから、カトラスとエルフレアに面識はない。　サンザメヤで共に戦ったとも言えなくはないが、カトラスとサコンは偽援軍を作っていて、主戦場には立っていないのだ。

サコン「あの時はドタバタし通しだったし…。　というか、あの手のオーラ出されたら、迂闊に近づけないだろ…」

エルフレアがメリャーナにぞっこんなのは、本人が戦場で叫びまく

ったせいで、公然の秘密と化していた。　その好意に、メリャーナが何か返事をしたという話は聞かないが、口を挟みづらいというのは分かる。

マリー「そしてシベリアなる者は、メリャーナ様が助けられたレジスタンスの生き残り。　2人をどうやってエージェントに引き込んだのは分かりませんが…。

これは、明らかにメリャーナ様への当てつけです…」

マリーの言は沈み、それ以上にメリャーナが沈んでいた…。

第１０６章　帝王の血（前書き）

（交替ムード満載）

インドラ兵「…これはもう駄目ですね…」

シクス「やっぱりかぁ～。　エイスちゃん、どうしよう？」

エイス「どうしようって、恋バナシリーズも１０回やったし、諦めるしかないっしょ」

マヒロ「ふっふっふっ…。　ついにこの場を、奪回する時がやってきたようね…」

ミク「でも奪回って、お姉とあたしは結構出てるよ？」

シクス「だよね～。　とにかくうるさいから、このおばさん」

ミク「ごめんね～。　歳取ると、つい口ばかり多く…」

マヒロ「こら～！　また話を勝手に纏めるなっ！！　あたしはまだ２２だっ！！！」

エイス「はいはい」

マヒロ「てめ…」

ミク「あんなお姉は放っといて、次のネタいくけど、いいかな？」

エイス「え～　ラピスラズリの出番わぁ～？」

ミク「あ、それなら大丈夫。　本編で迷子拾ったでしょ？　あれでしばらく食い繋げるから」

マヒロ「…食い繋ぐ…」

ミク「という訳だから、お姉は早く次を書くのだっ！」

シクス&エイス「そ～だそ～だ」

マヒロ「え、ちょ…　また、あたしはこんな役なの～？？？」

（次回からキャラチェンジ）

第１０６章　帝王の血

工場をＭＳが埋め尽くしていた。　そしてそこには、帝国出身の者が懐かしがりそうな雰囲気が漂う。

霧雨「へぇ～。　レイがザクの後継機を造るなんて、意外だったよ」

懐かしさを感じたのは、その姿のせいだったようだ。　披露された新型ＭＳは、帝国が世界制覇を果たした原動力、ザクに酷似していたのだ。

レイ「霧雨様が急かすからですよ。　設計を流用した方が開発は早いので」

霧雨「だから名機のザクを？　でも、５０年前のＭＳが参考になったのかい？」

レイ「ザク２ではなく、ザク３ですね。　マヒロ殿下から頂いた機体をベースに、霧雨の技術を組み込んだんです」

そう言えば、マーガレットでの技術指導の礼にと、マヒロは自分の専用ザク３をレイに贈っていた。　どうやらそれを活用したらしい。

リバル「名前は何にするんです？　やっぱり、ザク４ですか？」

霧雨「…リバル…。　３の次は４じゃ、芸がなさすぎるよ…」

霧雨は、少しだけ失望した表情を浮かべた。

名前などとも思うが、霧雨の事だ。『せっかくの新型ＭＳなのだから』　とでも思っているのだろう。　変な所で霧雨は子供っぽい。

レイ「『ザク・ウォーリア』と付けました。　実際は装備や仕様に合わせて、名前も変わるんですけれど」

霧雨「戦局に合わせての柔軟な変更は、ＭＳの原点だよ。　レイらしい、いい発想だ」

誉められたレイが軽く頭を下げる。　ＭＳに拘りがあるのが霧雨で、それをレイはよく理解していた。

マリアベル「月産はどれぐらいに？」

続いて理知的な質問を浴びせたのは、霧雨の副官筆頭のマリアベル。

作戦全体を睨むのが役目の彼女にすれば、自軍のＭＳの何％が新型で構成できるかは、重要な事項のはずだ。

レイ「無理をすれば今の３倍はいけますが、それよりも、ゲイツの強化に力を入れようと思います。　Ｒタイプへの改修で、１０％以上は能力強化できますし。　資源がマヒロ殿下頼みな以上、無理は

禁物です。　ザクは、ジンとシグーの置き換え用と考えて下さい」

霧雨「みんな任せる。　レイに任せておけば、間違いないからね」

霧雨は顔を綻ばせたままに、だが、即座に断を下した…。

【2】

霧雨侯爵「…薙華。　いい加減にしないか」

霧雨「何をです？」

霧雨侯爵「そなたを嫌いだから、言っているのではないのだ」

霧雨「僕も好き嫌いでやっているんじゃないんですよ。　それでは、新型ＭＳ部隊の訓練がありますので」

一応といった感じではあるが、一礼はして出て行く。

こうして見ている限りでは、好き嫌いの問題ではないという主張も、あながち間違っていないのかも知れない。　ただし２人の主張には、けして埋まる事のない溝ができて久しい。

侯爵が窓の外を眺めると、霧雨の言った新型ＭＳに、彼自身が乗り込むところだった。

たしか『ザク・ウォーリア』とかいう名前で、帝国の名機ザクにあやかったという話も聞く。　それを霧雨は、さっそく自分のオリジナルカラーにしたようだ。

霧雨侯爵「…薙華の人気、嬉しがるべきなのだろうが…」

レンカでは、日増しに霧雨の人気が高まっていた。

理由は簡単。　彼が女性と見紛うばかりの美形で、そのくせ帝国軍でも屈指のエースだからだ。　新型ザクに乗ると決まった時、真っ先に連絡を寄越したのが、軍需企業ではなく、写真出版社だというのがそれをよく表していた。

また、変なゴシップ記事の雑誌では、霧雨が本国に提出する書類の

『性別欄』に『霧雨』

と書いたらしい、などという噂が報道された事もあった。　侯爵にすれば、ただの書き間違いにしか思えないのだが、記事に言わせると　『霧雨は、男女の性別を超越した新人類である』　となる。

その霧雨が、ウケのいい強気の意見を吐くのだからたまらない。

美形が力強く宣言すれば内容を大して吟味しもしない。　庶民には、いつの時代にもそんな風潮があった。

霧雨侯爵「人気で戦いには勝てん。　勝てん戦いは、してはならんのだが…」

そんな呟きが窓の外、遥か遠くの霧雨に聞こえるはずもなかった。

いや、近くにいたとしても、聞こえなかったかも知れない。　霧雨の周りに群がり、盛んに黄色い声を上げる女性は、昨日よりも多くなっていたようだったから…。

【3】

画面を縦横無尽に飛び回るＭＳの群れ。　ほぼ、リアルタイムで送られて来ている映像で、タイムラグは１０秒以内という事だった。

霧雨・ミズサワの連携強化のため、マヒロが敷設を命じた専用通信回線で、ミノフスキー粒子散布に妨害されないレーザー回線を、連続で繋がせたのだ。

霧雨「そっちの調子はどうだい？　こっちはお陰様で、いい事づく

めだよ」

マヒロ「…そう」

上機嫌の霧雨に対して、意外にもマヒロの表情は曇っていた。ブラックが手に入れてくる密輸物資を霧雨に融通させた張本人が、霧雨の躍進を喜ばないのは何故だろう？

ミサト「…ダメね。説得はしたけれど、聞く耳持ってくれないわ。完全に本国を信じてない感じ」

マヒロの表情が暗い原因、それは暴走事件以来続く、マーガレットでの反帝国デモだった。

反帝国と言っても、帝国自体を倒そうと、怪しい連中が闇雲に武力蜂起を重ねた数年前とは質が違う。マヒロの統治を認め、その采配に不満を持っていなかったはずの人間が『本国を何とかしろ』とマヒロに迫るのだ。

霧雨「また反乱かい？　いい加減、武力で討伐したらいいのに。このザク・ウォーリアがあれば、半日で鎮圧して見せるよ」

マヒロ「……。」

一瞬、軍事だけを考えていればいい霧雨を、マヒロは羨ましく、同時に疎ましく感じた。　自分に戦いの才覚がないからこそ決断した道だったが、こうしてみると、政治政略の世界も甘くはなかった。

マヒロ「霧雨大佐。　討伐はするけど、それは扇動してる親玉だけよ。　彼らは強硬だけど、本国への不満はむしろ正当なものよ。彼らは敵のようで、実は味方かも知れないの。

…ブラック少佐！」

マヒロが後を振り返る。　控えていたのは、密輸の主犯であり、ザキラの策謀をマヒロにリークした、いわばマーガレットの黒幕だった。

マヒロ「デモの裏側を探って。　彼らの真意を知りたいの」

ブラック「……。」

ブラックが目だけで返事をした…。

【4】

？？？「…くくく…　そう来たか…。　煽っている当人にその裏側を探れとは、姉上も皮肉がお好きなのだな。　ははは…」

？？？「笑い事ではございません。　一歩間違えば、私の首が物理的に飛びかねないのですから」

？？？「命が惜しくなったか？」

？？？「いえ…。　陛下のため、この命は既に捨てております。なれど、あまりに腰が重すぎます。　今回の件とて、本国の擁護などせず、主張を取り入れても不都合のない内容のはず。　霧雨など、今や完全に独立国のつもりでおりますのに」

？？？「…なるほどな…」

？？？「『グアテマラ』が、捕縛されたと聞きました。　そこから事が露になるとは思いませぬが、奴らが動きつつあるのも事実。急がねば、時期を失する恐れもあるのです！」

？？？「…分かった。　切り札を使おう。　１週間もあれば準備は

整う。　その時お前は、適当な理由をつけて、姉上の艦隊をそちらに向けさせよ。　エサに食ってその気になれば良し、食らいつかねば、尻に火をつけるまで」

???「進言をお聞きいただき、感謝の言葉もございません…」

【5】

ジン「姉御っ！　俺って凄くねぇ？」

部隊の再編が終わっていた。　ザク・ウォーリアは、技量が優秀な人間から順番に与える事にしていて、さっきから飛び回っているジンもその1人。　もうすっかりザクにも慣れたようだ。

そんな光景を見て、頼もしいと喝采を上げるレンカ市民は少なくなかった。　それだけ本国が何もしてくれないと、宇宙の市民達は不満を抱えていたのだ。

霧雨「MSもできたし、サーライトも早くできないかなぁ～」

そしてそんな光景を見ながら、無邪気な事を言っている次期当主がいた。

レイ「…霧雨様。　何度も申し上げますが、サーライトに何を期待しておいでなのですか？

要塞１つ完成したところで、所詮はそれだけです。　本国が態度を改めるとは思えませんし、下手をすれば、事を荒立てる要因になるかも知れないんですよ？」

レイはずっとこの調子だった。

要塞を設計し、新型ＭＳも送り出す。　そんな彼が穏健派なのは似合わないが、仕事は滞ったりはしていない。　自分の主張と仕事に一線を引くタイプなのだろう。

霧雨「それを言うなら、レイの方がサーライトを重く考え過ぎだよ。　宇宙要塞１つ造っても、世界がひっくり返る訳じゃない。

もし本当にひっくり返したいなら、適当な隕石でも拾って来て、地球に落とした方が早いじゃないか」

レイ「冗談にしても、それはっ！！」

温厚なレイが珍しく霧雨を大声で咎めたが、霧雨はまるで聞いていない様子だった。　霧雨にしてみれば、隕石落としを否定したのだから、自分は穏やかな方だと言いたいのだろう。

霧雨「それよりもさぁ～。　何でマヒロは僕を呼んでくれなかったんだろうね？　せっかく、市民を煽っている奴らの根城が割れたってのに…」

不満そうな霧雨だったが、それにレイは黙して応えなかった。　落ち着いて考えれば、新型ＭＳを何十機も率いて討伐する相手でもないのが分かりそうなものなのだが、それよりも霧雨は、目の前のザクとサーライトに浮かれていたのだ…。

【6】

マヒロ「…意外に近くにいたんだ」

デモの内情を探らせたブラック少佐が、その根城を見つけたと言ってきたのは、つい2時間前だった。

ただ根城と言っても、何隻かの船で集まって、密かに話し合いを持つだけらしいのだけれども。　確かにデモを煽るのに、本格的な根城はいらない。

帝国軍下士官「レーダーに反応はありません。　完全にミノフスキー粒子に覆われています」

ブラック「秘密の話し合いですからな。　窓にカーテンを引くのは当たり前でしょう」

とりあえずあたしは、旗艦のグワダン級『スピッツ』と、ムサイ１隻、パゾク１隻だけで、現場に急行する事にした。　パゾクがいるのは、もしかしたら陸戦になるかも知れないと踏んだからで、中には数百人の兵達が乗り込んでいた。

帝国軍下士官「これは酷いですね…。　ミノフスキー粒子濃度、さらに上がります。　デブリも多くて、視界は極めて悪いです」

急がなければいけない時なのに、速度を上げられないのがもどかしかった。　これでは敵に逃げられてしまうかも知れない。

マヒロ「…どうしようか…。　まさか砲撃する訳にもいかないし…」

ミク「困った時のミクちゃん参上ぉ～。　どんなデブリも、あたしのファンネルならひょひょい避けちゃうよ？

…お姉と違って」

嫌味な奴がやって来た。　ある意味、こんな時に一番会いたくない相手だ。

マヒロ「ってか、あんた艦にいたんだ？」

ミクに『来てくれ』と頼んだ覚えはない。　という事は、偶然艦にいたところをそのまま連れ出されたって訳か。

ミク「勝手にスピッツ緊急出航させといて、よく言うよ。　あたしにデートの約束があったらどうするのさ？」

マヒロ「その時は、宇宙に放り出してあげるから心配しなくていいわ。　もちろんノーマルスーツなしで」

ミク「うわっ、酷っ！　それが世界でたった1人の、可愛くてたまらない妹に言うセリフぅ～？！」

やり取りはいつもの通りになった。　さっきは会いたくないと思ったけど、前言は撤回かもね？　焦る気持ちが、いくらか紛れぐらいはしたから。

マヒロ「でもこんななら、あたしが艦で来ずに、ケイさんに来てもらうんだったなぁ…」

デブリ帯なのは予想していたけれど、ここまでとは思っていなかった。　距離は遠くなかったから、小回りの利くＭＳで来た方が有利だったはずだ。

ただ今日は、たまたまケイさんが非番の日で、ミサトも他に仕事を抱えていた。

だから　『武装もしていないデモ扇動者の集まり』　とつい侮ってしまって、誰にも相談しないで動いた。　だからブラック少佐以外の誰にも、出撃も待機も命じていない。　今いるミクだって、偶然艦に乗っていたのを拉致しただけなのだから。

帝国軍下士官「デブリの質が変わります。　人工的にばら撒かれたものですね。　判別はできませんが、ダミーの可能性もあります…」

そいつらの根城とする艦が近いのだろう。

今もって動きがないのは、もう逃げられたか、逆に息を潜めているかだと思った。　いくら何でも、気がついていないほど相手も間抜けではないはずよね？

マヒロ「全艦、第一戦闘配備よ。　ＭＳ隊は、即時発進待機を…」

ただ雰囲気に流されるまま、小声で命じる。　こちらの声が相手に聞こえるはずもないのに。

ミク「あったしはどしよかなぁ～？　行こうかな～？　やめよかな～？」

1人だけ騒がしい奴がいたが、別に気にしなかった。　ミクの出撃が必要なほどの敵なら、もうとっくに戦闘になっているだろう。
つまり敵は…。

帝国軍下士官「デブリ帯、抜けますっ！！　…これは…。　馬鹿な！！」

マヒロ「そんな事って…」

あたしは目の前に現れた光景に、ただ呆然とする他なかった。　たかだかデモの親玉と想像していた、その先にいたのは…。

4隻ものアーガマ級巡洋艦！　そして、甲板にまで満載されたＭＳ。

帝国軍下士官「ＭＳ隊、全機発進を！　このままではっ！！」

このままでなくても、あたしの艦は沈む。　ここまで綺麗に待ち伏せされて、無事に済む訳がなかった。

…だが…。

ミク「…お姉。　おかしいよ？　艦が４隻もいて、ＭＳも一杯…。　なのに、全然人の気配がしないじゃん。　この感じ、まるでお化け屋敷じゃない」

マヒロ「えっ…？！」

言われて始めて気がついた。

ブラック「これはこれは…。　どうやら敵は、殿下の鮮やかな奇襲に驚いて、全てを捨てて逃げ去ったようですな？」

そうなのか？

しかし、これだけのＭＳと艦がありながら、逃げ出したりするものなのか？　まともに戦えば、互角どころの騒ぎではない。　たとえ

奇襲されたにしても、不利を跳ね返せるだけの戦力である。

マヒロ「…逃げた…　本当に？」

ミク「ブラちゃん！　お姉を嵌めたねっ！！」

戸惑い続けるあたしの先を行き、ブラックの腕を引いたのは、今まで見た事もない形相のミクだった。

ブラック「はて？　嵌めたとは？」

ブラックは惚けていたが、嘘をつくのは下手らしい。　顔が少しだけにやけていた。

マヒロ「…どういう意味？」

ミク「ニュータイプの勘って、そんなに当てにならない？」

ミクは、違う事を訊いてきた。

マヒロ「え？」

ミク「アーガマ級の定員数、何人だと思ってるの？　ＭＳにしたって！　これだけの数の意思が、忽然と消えられるワケないでしょ？　最初からアーガマには、誰も乗ってなかったんだよっ！！」

ミクが主張した、驚きの予想。

けれどその予想を『とんでもない』と否定するはずのブラックは笑っていた。　それはつまり肯定を意味する。

ブラック「お察しが早くて助かります。　端的に申し上げましょう。　これは我が主からの、心を込めた贈り物でございます。　この艦隊を率いて、殿下には血を流して頂きたい」

『血を流す』それはつまり、帝国本国と戦えという事だ。

マヒロ「あたしが贈り物なんかで心を動かす、安い女に見えますか？」

顔がひきつっているのが、自分でも分かった。　急に言葉遣いまで変わってしまった。

ミク「お姉。　残念だけど手遅れだよ？
ブラちゃん。　アーガマとスピッツの合流シーン、何枚記録したのかなぁ？」

ブラック「さぁ？　多すぎて数える方が困難では？」

あたしの艦の周りでは、出撃したＭＳ隊が、ピクリとも動かない敵艦を前にして逆に呆然としていた。　傍目に見れば、あたしの艦隊が別の艦隊を出迎えたように見える事だろう。

ミク「らしいよ？　その写真を本国に暴露されたら、お姉は速攻で反逆者決定だね。　出所もわかんない艦隊率いて

『裏切りません、絶対に』

なんて言って、誰が信じる？」

…そんな間抜けな人間、いるはずがない。　良くて査問会。　悪くすれば即座に討伐軍が編成される。

マヒロ「他人を遥か最上階に上げといて、勝手にエレベーターの電源切ろうって言うのね…」

ブラック「殿下は私を召し抱えた時から、既にエレベーターにお乗りだったのですよ。

せっかくだからお話しましょうか？　あの反本国デモを扇動していたのは、他ならぬ私です」

マヒロ「やってくれるじゃない…」

あたしは、背中にまで汗が流れるのを感じた。

…だけど。

あたしは同時に、何かが『ブチ』って音を立てて、切れてしまったような感覚も味わっていた。　例えて言うなら、遥か昔に地球で揚げた凧っておもちゃの糸が、切れてしまったかのように…。

マヒロ「全艦隊、ＭＳに通達っ！　該当アーガマ級とＭＳを全て鹵獲し、マーガレットに回航するっ！　曳航準備、急いでっ！！」

あたしの言葉に、ブラック少佐は目を細めていた。

マヒロ「せっかく最上階まで来たのよ？　トボトボ階段降りるような、セコい真似してる場合？　こうなったら空でも宇宙でも、飛んでやろうじゃないの！」

不思議な高揚感が、身体を包み込んだ気がした。

ミク「あ～あ。　ブラちゃん、覚悟しときなよ？　お姉ってこう見えて、キレると怖いよ？

たしか一昨年だったかなぁ？　お気に入りのファーストフードの売り切れ続出にキレて、コロニーの食糧生産計画の見直しなんかしちゃったから」

ブラック「それは頼もしい。　私、問題は大きい方がやり甲斐を感じる性分でして…」

えげつない策謀が、紛い物と呼ばれた皇女に流れる帝王の血に火をつけた…。

第１０７章　鬼の居ぬ間に（前書き）

（チャイム？）

キーンコーンカーンコーン…

ミク「は～い。　冒頭文新コーナー、物語史の授業を始めま～す」

マヒロ（知力７９）「…って、なんで授業なんかすんのよ！　しかもミクが先生？」

ミク（知力９３）「知力７９の分際で文句ゆ～な！　前の章で、ブラちゃんの計略に、見事に引っ掛かったクセに」

マヒロ「う〝…」

ブラック「お陰様で、我が主は自分の正体も明かさず、手も汚さず、憎っくきザキラと戦えます」

ミク「そんな感じで、物語が複雑化してきたから、分かりにくかった出来事を、ここで復習しちゃうのだ」

ブラック（知力９４）「私は、全部把握しておりますが？」

ヴァイス（知力７１）「姫さんが言ってることぐらいなら、まあ…。海賊と渡りをつけたり、最近、頭を使う仕事が多いからな」

ミサト（知力６０）「私はちょっと自信ないかも…。　復習はしておきたいわね」

ミク「人によっても違いはあるから、テストをしま～す！　成績別にクラス分けだよ。　他の軍にもテスト問題を送信しとくから、ちゃんと受けるよ～に！」

（次回、物語史開始か？）

第１０７章　鬼の居ぬ間に

一方その頃、レンカ。

掃除夫？「兄さん、何か見つかった？」

霧雨兵？「…いや」

掃除夫？「防諜が甘いのは助かるんだけど、決定的なのはないよね～。　新型ＭＳ部隊と宇宙要塞の建設で、反乱しようとしてるってイメージできあがるかなぁ？」

霧雨兵？「…弱いな」

さっきから、よく分からない事を話しているのは、それぞれ掃除夫と兵士の格好をした２人の男。　話好きなのか、掃除夫はやたらと口数が多い。

掃除夫？「よし。　ないなら作ろうよ、兄さん」

変に明るい声で兵士に話し掛ける掃除夫。　掃除夫が、一体何を作ろうと言うのか？

霧雨兵?「それは、親父の命令にはなかったな?」

掃除夫?「そこはアドリブってヤツだよ」

霧雨兵?「イドゥン、黙れ!　誰か来た」

2人に近づいて来たのは、軍服を着た士官と下士官だった。　2人を見つけて、少しだけ変な顔をする。

霧雨下士官「そこのお前、こんな場所で何をしていた?」

掃除夫?「何をって…。　掃除に決まってるじゃない」

霧雨下士官「お前じゃない。　そっちの兵の方だ。　配備中ではないのか?」

掃除夫?「ああ。　兄さんは休憩中に、話し相手をしに来てくれたんだよ。　こう見えて、僕たち兄弟なんだ」

兵士が問われたのに、何故か答えたのは掃除夫の方だった。

霧雨士官「それなら構わんが、少し静かにな。　この時間は、夜直

明けで寝ている兵もいるのだ」

重要な区画でもないせいか、騒音を少し咎められただけだった。兵舎の宿舎の入口であり、入るのに許可がいる場所でもない。

霧雨下士官「それに、口ばかりの男は出世しないぞ。　男はこう、背中で語る生き物でなくてはな」

少々古臭い考えな気もするが、戦場で命をかけて戦う軍隊では、そんな物なのか？

掃除夫？「けど1ついい？　出世って言うけど、掃除夫が出世しても、チーフぐらいにしかならないんだけど？　兵士の兄さんはともかく」

霧雨下士官「ふはははは…。　うまい事を言うな。　確かに、さっきからやかましいのはお前だけだしな」

掃除夫の軽口に、その下士官は笑い出してしまう。

霧雨兵？「昔から、口数ばかり多い弟でして。　御迷惑をお掛け致しました。　申し訳ございません」

兄と名乗った兵士は、上官に深々と頭を下げた…。

【2】

掃除夫？「いや～。　ヤバかったね、兄さん」

霧雨兵？「お前がかしましいからだ。　伝えたい事があるなら、脳量子波もあるだろうに」

掃除夫？「やだよ！　量子波って、何か暗いもん」

霧雨兵？「またそれか…」

将校と下士官がその場から去った後も、相変わらず五月蠅い掃除夫だった。　反省とか配慮という言葉は、この男には存在しないらしい。

掃除夫？「でもまあ、早めに仕事を片付けた方がいいかもね？　何日もいると、さすがにバレちゃうだろうし」

掃除夫は掃除道具の中から、何やらメモリーのような物を取り出す。

霧雨兵？「…何だ、それは？」

兵士姿の兄は、その内容を知らないらしい。

掃除夫？「う～ん…。　僕特製のウイルス？　うまくいけば、大パニック必至だよ」

可笑しそうな顔をする掃除夫。　話している内容からして、やはりただの掃除夫ではなかろう。

霧雨兵？「ならば私が行こう。　さすがに司令部や制御ルームには、掃除夫姿では潜入できまい」

掃除夫？「だろうね～。　こんなんだったら、僕も違うのに変装しとくんだったぁ～」

そしてその兵士は、休憩時間の終わりと共に、配置場所へ戻って行った…。

【3】

思った以上に、作業は難航してしまった。　曳航とは言ったけれど、こちらは3隻、アーガマは4隻。　引っ張らなきゃいけない艦の方が多いうえに、デブリが多すぎて、曳航ワイヤーが3回も切れてしまったのだ。

ミク「しょうがないなぁ～。　あたしが艦に乗り込んで、直接操艦するよ。　ブラちゃん？　艦の操作系は生きてるんでしょ？」

半日経ってもマーガレットに着かない事態に、ミクは違った方法を提案してきた。　未知の艦の核融合炉に火を灯すなんて、そう簡単にできる作業ではないのだけれど、ここはミクにすがるしかないのかな？

ブラック「兵の練度が高くないようですな。　もう少し、平時の訓練に力を入れておかれるべきでございますよ」

…よくも言ってくれるじゃない？

触った事もないタイプの軍艦を、曳いたり操縦したりするのが、どんなに難しい事か…。　天才肌のミクだから、軽々と言ってるだけなのに。

何せミクは、アーガマ級を見つけた時定員がどうとか言っていた。
　たぶん、アーガマ級の設計項目を、一通り覚えていたりするんだわ…。

マヒロ「ミク、お願い。　スピッツの機関室から要員を割くわ。それを指揮して、アーガマを動かして」

ミク「あいさ～」

ミクは軽く返事をし、事実アーガマは自力で動き始めた。　とは言え、結局作業に要した時間は、合計で2日にも渡ってしまった。

その間、領主のあたしが行方不明になっちゃったのは、さすがにマズかっただろう。

いくらケイさんがいてくれるとは言っても、どこへ行くとも告げてきてはいないのよね。　そして連絡をしようにも、誰かさんのお陰でミノフスキーは最大濃度だし…。

マヒロ「ま、幸いにも、その間にしなきゃいけない事は、山ほどあるんだけどね？　あたしと誰かさんの都合に、マーガレットのみんなを巻き込む訳にはいかないもの…」

効くはずもない皮肉を織り混ぜながら、あたしは新しい作業を始めた。　まず、兵士たちの経歴と、家族親族の在住データ一覧を…。

【4】

訓練に入ってから、もう2週間にもなる。

ジン「これならもう、姉御の足手纏いなんて言われねぇ、言わせねぇ！」

ザク・ウォーリアの操縦性は良くって、みんな早々と慣れつつあった。　さっき叫んでいたジンもその1人で、旧式のゲルググからザクに乗り換えて、毎日がお祭り気分のようだった。

リバル「霧雨様。　サーライトの発電システム、ドッキングベイ、防衛システムが稼働させられます。　内装の進捗具合を考えて、完成率は7割を越えた辺りです」

霧雨「ついに出来てきたね、サーライト」

そしてその主の霧雨も、おもちゃを買ってもらったばかりの子供のようだった。　よほどこの要塞が気に入っているのか、ここ最近はレンカに戻らず、サーライト近くに母艦を在泊させて、そこで寝泊まりしているくらい。

まだ7割の出来だから、内部はまだまだなのだけれど、外見だけなら立派な宇宙要塞だった。

レイ「霧雨様。　レンカには戻られないのですか？　本拠地を空け過ぎるのは、さすがに…」

霧雨「そんな事を言ったら、レイは最近どうなんだい？　どうせ訓練は急務だし、僕がいることでレイの負担が軽くできるなら、別に構わないでしょ？」

レイ「…ですが…」

レイは言わないけど、昨日は寝ていないはずだ。

今のサーライトで、設計者であり、建設責任者でもあるレイの仕事は、それこそ山のようにあった。　いくらリバルをつけたとは言っても、暇なはずはない。　それをサポートしないで、いつ働くって言うのかな？

霧雨「レンカにはマリアベルがいるじゃないか。　あと、ついでに叔父も」

レイ「…はぁ…」

『ついで』という言い方に、レイは呆れてしまったようだ。　僕も本気でそう思っている訳じゃないんだけれど、ついそういった言い方をしてしまう。

霧雨「…仕方ないなぁ…。　本当はまだ続けたいんだけど、訓練は一旦切り上げて、レンカに戻るよ。　そろそろ兵達にも休息が必要だろうから」

兵の休息がただの口実なのが分かったのだろう。　レイは黙ったまま、僕に頭を下げてきた…。

【5】

ケイ「主人を行方不明にさせるとは、それでも侍従か？　侍従武官は、一般の軍人とは違うのだぞ」

ミサト「申し訳ありません、少佐…」

ちょっと目を離した隙に、お嬢は自分の艦で出撃していた。　それを私は軽く考えて、追いかけもしなかった。

最近、マーガレット周辺は穏やかで、海賊行為が頻発するどころか、お嬢の恩赦抱き込みに応じて、投降してくる海賊が多かった。

むしろマーガレット内部の方が、反本国デモで騒がしかったぐらいなんだけど、そんな事が言い訳にならないのは、少佐の言葉からしても明らかよね…。

ケイ「レーダー反応が消えたのは、そう遠くない辺りだ。　ミノフスキー粒子濃度がかなり濃い。　従って発見できないのが、即撃沈とは言えないが…」

そこまで言った少佐は、私の方を見てため息をつく。

ケイ「…中尉には、侍従は向いていないのかも知れないな…」

ミサト「しょ、少佐っ！」

驚いて立ち上がる。

私がお嬢の侍従になって、もうすぐ４年になろうとしていた。　少佐は、お嬢が１５の時からずっとなのだけれど、私は前任者からの引き継ぎだったから、それだけなのだ。

ケイ「別に、中尉が無能だと言っている訳ではない。　侍従とは主人の影のように、常に側にあるべきもので…。

まあその主人が、侍従に違う仕事をさせたがるのだから、仕方ない面もあるのだが、それを考えても、中尉は侍従よりも他に、適当な役があるように思えるのだがな？」

ミサト「はい…」

少佐が言う意味は、よく分かった。　少佐の人を見る目が的確な事も、よく知っていた。

ふと私の脳裏に、パンドラールに残してきた、父の顔が浮かんだ。

なけなしの家財から賄賂を贈り、元老院の議員達に媚びへつらった父。　それがみな、私を出世させるためだと分かってはいた。　けれどそんな父に礼を言う気には、どうしてもなれなかった。

だから、遠く帝都を離れる事になる、お嬢の侍従に名乗りを上げた。

渋る父を

『皇族の侍従武官は、出世の王道だ』

なんて、適当な言葉で言いくるめて…。

ケイ「だが中尉。　自身の適性の話は後回しだ。　ここで主人を死なせたら、2人とも腹を切るしかなくなる。　後の事より目の前の事実だ」

ミサト「分かりました」

私は、すぐに部隊を率いて捜索に出た。　一方少佐は、マーガレットで全軍の非常呼集を行って、緊急時に備えるようだ…。

【6】

Pちゃん「オタQ！　いい加減ブリッジで、変な同人誌を読むのはやめなさい！　昨日ガンプラを取り上げたというのに、まだ懲りていないのですか！」

オタQ「…ボ、ボクは、このコたちに触ってないと、生きるエネルギーがなくなっちゃうオタぁ～」

ユーリ「じゃあ死んで」

オタQ「ひ、ひひひ酷いオタぁ～！

…でも、ちょっと気持ち良かった気もするから、試しにもう1回言ってほしいオタ」

ユーリ「……。」

あまりのオタQの暴走ぶりに、さすがのユーリも二の句が次げなくなる。

ところで彼女は、インドラでゴトーたちやゲットと一戦交えた後、Pちゃんの指揮下に入るよう命じられた。　また彼女の他にも、バーストン、フォーリュンなど、何人かのエージェントが宇宙に配属されたようだ。

ちなみに、敵前逃亡をやらかしたアッシュがお仕置き部屋、発狂したチャーリーは研究施設に収容されたらしいが、それは余談だろう。

Pちゃん「馬鹿は放っておきましょう。　みなさんには私の指揮に従い、霧雨が建設している宇宙要塞サーライトを攻撃してもらいます！」

オタQを除く、この場にいたエージェント全員が、Pちゃんの顔に注目した。

Pちゃん「霧雨は、宇宙要塞の完成と共に本国に反旗を翻すつもりであると、密偵からの報告がありました。　従って私たちは、事実関係が確認でき次第、宇宙要塞サーライトを奇襲攻撃します！」

バーストン「奇襲だからエージェントしかいないのか？」

『エージェントだけ』という表現は、必ずしも正しくはない。　母

艦のサダラーンには、選抜された帝国兵も乗艦している。　だから、出撃するＭＳがエージェント機のみになる、という解釈でいいだろう。

Ｐちゃん「霧雨の不意を突くための隠密行動、素早い動きが、今回の作戦の最重要事項です。　よって、数で押すような戦いはしません！　各員、１人で２０機は落とすつもりで戦いなさい！！」

Ｐちゃんの檄が飛び、サダラーンは単艦のまま隠密行動を開始した…。

【7】

部屋は奇妙な静けさに満ちていた。　そして、見張りに立っている兵士が１人、静かに座り込み…

いや、崩れ落ちる?!

霧雨兵?「密閉空間の空調は、複数用意すべきだ」

そんな中で、ただ1人動く兵士らしき男は呟く。

素早い手つきで複雑な操作をこなしていく。　何枚ものメモリを差し込み、超人的な速さでパスワードを解いていく。

霧雨兵？「完了した」

ほんの僅かな時間で作業を終えたらしい兵士は、作業以上の手早さで機材を片付け、その部屋を駆け去る。

掃除夫？「兄さん、こっち！！」

建物を飛び出した兵士の前に、駆け寄る１人の男は…　例の掃除夫もどきか。

掃除夫？「全力疾走だよ、兄さんっ！　プログラムが正常に起動していたら、１０分で発動するから！　だから１０分以内に逃げないと、僕らが捕まっちゃう」

２人が駆け寄った先には、不自然な光の歪みが見て取れた。　遠くからであれば、目を凝らさないと何も見えないだろう。

掃除夫？「９分１６秒！　ギリギリセーフ！！」

その声に合わせた訳でもあるまいが、そこに突如としてＭＳが姿を現した。　全高が２０Ｍ近くもあるＭＳが、こうも忽然と現れるとは、魔法でも使ったのか？

霧雨兵？「まもなくだ。　出撃する奴らに紛れて、このコロニーを脱出する。　情報が正しければ、今こいつらの主力は、コロニーにも要塞にもいない！」
掃除夫？「兄さんの調べた事に、間違いなんかあるもんか！」

その会話から１４秒後。

コロニー内…

いや、霧雨に所属する軍の全てに、緊急回線が開かれた。

それは

『ジオンコウコクニエイコウアレ』

文章そのものに意味はないが、これは帝国本国に対する開戦を命じた、秘匿命令信号文である。

数ヵ月前までならば絶対に有り得ない信号であり、もし発信されたとしても、まず誤報が疑われただろう。

しかしこの時のレンカは、帝国本国に対する不満が渦を巻いていた。
霧雨家に属する誰もが、先の暴走事件の責任も取ろうとしない本国を憎んでいたと言っていい。

時勢の風に乗ってしまった信号は、いつ誰が発信したかのかも不明瞭だったのにも関わらず、1人歩きを始める。

そして信号から15分後には、たまたま入港していた帝国本国籍の輸送艦『ベルファスト』が霧雨に拿捕されそうになり、それに抵抗する船員との間で、銃撃戦が発生してしまう…。

第１０８章　拾われた子？（前書き）

（テスト結果？）

ミク「はいはぁ～い。　じゃ、テスト返しま～す。　成績優秀者は特別講習が受講できるから、希望者は名乗り出てね？」

ブラック「さらに、知識を深める機会をもらえるのですな？」

ミク「そのと～り。　で、成績が悪いおバカさんは、強制的に補習だよ」

ミサト「…ちょっとマズいかも…」

ケイ「中尉…」

ミク「じゃ、発表するね！　名前呼ばれなかった人は、どちらでもない人！」

ミク「まずはメリャーナ陣営！　優秀者、サコン君、ミケル君。補習者なし！」

メリャーナ「順当ですわね。　サコン。　この機会に、さらなる知

略を身に付けてきて下さい」

サコン「承知しました」

ミク「傭兵陣営、優秀者ネロ君。　補習者、ジルド君！」

ジルド「げっ！　つか、隊長は合格なのかよ？」

ミク「ゴトー君は、三択問題が何故か全問正解だったから、ギリギリクリア」

ゴトー「戦場の勘が生きたな」

ミク「次、ザキラ陣営。　優秀者、イエスマン君、ジェイソン君、ザキラ君。　補習者…

いっぱいいるから、代表してアッシュ君！」

アッシュ「代表ってなんだよ？！」

ミク「帝国（属国も）、インドラ軍陣営。　優秀者、ダイン君、エッフェンベルグ君、ルムメニゲ君。　補習、サヤリ君！」

ウィナス「私がなぜ、優秀でないんですか?!」

ミク「テストの答えに、独善的な持論を書かな〜い！」

ミク「そして最後に、お姉と霧ちゃんの陣営なんだけど…」

マヒロ「ふん！　あたしは優秀だけど、ミクの授業なんか受けてあげないんだから」

ミク「心配しなくても、お姉は補習だから」

マヒロ「そうよね、私は補習に決まって…

…って、どうして???」

ミク「そりゃもちろん、お約束で」

マヒロ「何の約束よ〜!!」

ミク「とにかく、お姉は補習！　じゃ、次回から授業始めるから、

サボらないよ～に！！」

（次からしい）

第１０８章　拾われた子？

？？？「俺はガキじゃね～！」

トゥーエに助け起こされた小さな人影は、そう抗議した…

…のだが。

アイン「ガキじゃないって言うのって、たぶんガキだよね？」

セブンス「だな。　自分で意識してるトコが、実はガキ」

ナイル「つか、鏡見たことないだろ」

スリス「そういう事だから、やっぱりガキね」

ラピスラズリ「ガ～～キ！」

一斉攻撃に遭い、あえなくガキ認定されてしまった。　というか、このノリはどこかで覚えが…？

トゥーエ「ってか、あんたあの時のお子様でしょ？　エイスの彼氏…　もどきのゲット」

ゲット「そういうお前らは…　ラピラスズリ…　だっけ？？？」

微妙に間違えてしまうゲット。

トゥーエ「よし、予定変更。　やっぱり埋めよう。　エイス、穴掘って」

エイス「せんせ～い。　ビームランチャーが重くて、穴堀りできませ～ん」

アイン「しょうがないなぁ…。　じゃ、僕が…」

ゲット「待てよ！　勝手に話を進めんな！　つか、何で埋められなきゃならないんだよ！！」

トゥーエ「あたしらのチーム名、間違えたから。　あんなに遊んであげたのに」

ラピスラズリがチーム名なのか？　とか、ゲットと遊んであげたのではなく、ゲットを『使って』自分達が遊んだだけじゃないのか？　といった類いの疑問は、永遠に横に置いておく。

とにかく、リメンバーズから行方をくらましたゲットは、あてもなくさ迷ううちに、偶然通りかかったラピスラズリたちのＭＳに轢き殺されかけ、さらにからかわれ始めてしまった。

ゲット「だったら、覚えにくい名前つけんなよ」

トゥーエ「あたしがつけた訳じゃないし～」

スリス「僕もつけてな～い」

ナイル「俺も違うぜ？」

ノン「リーダーだけど、つけてないよ？」

ラピスラズリ「つか、生まれる前から決まってたみたいだよ？」

またもや一斉反撃。

ちなみに、彼らがラピスラズリと呼ばれるのは、強化クローン兵育成プラン『ラピスラズリ計画』で生まれたからだ。ラピスラズリという言葉は、計画には無関係の酒の名前で、一種のコードネームであるに過ぎない。

ゲット「だぁ～　分かったよ！　俺はガキで、お前らはラピスラズリっ！　これでいいんだろ！！」

降伏宣言。

トゥーエ「よくできました～」

ゲット「ムギュ…」

宣言したゲットは、ご褒美なのか、トゥーエに抱き寄せられ、胸の谷間に顔を埋められてしまう。　ちょっぴり嬉しい気もするが、これは明らかに、ゲットを大人とも男とも思ってはいないからだろう。

トゥーエ「でさ」

好きなだけ抱き寄せておいたのに、やっぱり飽きて、ゲットを放り出すトゥーエ。

トゥーエ「お子様、何でこんな人もいなさそ～なトコにいんの？　家出？　迷子？　行き倒れ？」

ゲット「俺はなぁ…！」

反論しようとした時、ゲットのお腹が

『グゥ～～～』

となった。　勢いを削がれ、顔が赤くなるゲット。

だが、それも無理はない。　リメンバーズを飛び出したまではよかったが、ゲットは食糧の類いをほとんど持って来てはいなかった。
　グライダーボートはあり、それで街に行けばと軽く考えていたのだが、インドラの地理に疎かったために道に迷い、そのまま死にかけた。

トゥーエが適当に言った言葉、それが全部当たっていたのだ。

トゥーエ「育ち盛りのお子様は、ママにおいしいご飯作ってもらわなきゃ。　アイ～ン！」

アイン「何でもいいんだよね？　食べられれば」

言ったアインがコックピットを開けると、ザック１つを片手にすると降りてきた。　さすがに手慣れている。

アイン「全部あげるっ」

投げて寄越したザックを受け止め、一瞬複雑な表情をするゲット。
　だが、背に腹は変えられないとばかり、真っ先に触れたレーションを口に放り込んだ。

トゥーエ「やっぱお子様は、こうでなくっちゃ」

ゲットの食欲に、満足げなトゥーエ。

アイン「よっぽどお腹すいてたんだね～。　インドラのレーションなんか、お世辞にもおいしいなんて言えないのに」

トゥーエ「やっぱアインもそう思ってた～？」

ゲットはかろうじて食糧にありつき、ラピスラズリもそれなりに遊べて満足し、万事丸く収まりかけていたのだが…。

【2】

シクス「…でも、どうするの？　この子」

旺盛な食欲で、レーションと乾パンを食べ続けるゲットを見ながら、心配そうなのはシクス。　フォルナ亡き今、ラピスラズリの中では数少ないまともなメンバーだ。

ナイル「焼いて食ってもマズそうだな？」

ゲット「ぶっ！！　ゲホッゲホッ！」

ナイルの冗談を真に受けたのか、盛大に喉に詰まらせたゲット。
こういった軽口を流せないうちは、ゲットはラピスラズリのカモのままだろう。

ノン「真面目な話、あたしたちもずっとここにいる訳にもいかないよ？　調査もあるし、時間に遅れるとまたうるさいのが出るから」

エイス「またぁ～？」

心底嫌そうにしたのは、軽いノリが好みのエイス。　誰もがおっさん（＝マンネ）の叱責など望んではいなかったが、エイスは特に苦手らしい。

ゲット「…調査なぁ…。　モグモグ…　お前らもぐ…　仕事とかすんだな？」

口に食べ物を入れたまま喋るのは、かなりマナーが悪いと思うのだが、それをラピスラズリは咎める気配はない。　小うるさいマンネを嫌うだけあって、そういった感覚には縁がないのか？

アイン「普段は訓練ばっかだけど、今回は特別かな？　ノンのリクエスト」

ノン「だってあの黒いＭＳ、どうしても引っ掛かるんだよね」

スリス「ノンが、めずらし～事になってたしね。　よく分かんないけど、あれが怒るってやつ？？？」

ノン「どうだろ…？」

ノン自身も、チャーリー戦で感じた感覚を、うまく言葉にできないらしい。

傍目に見れば、フォルナを殺された事に対する怒り、殺したチャーリーへの憎しみ、そんな辺りからくる感情の爆発にも見えるが、そこは『怒』を知らないラピスラズリ。　ノン本人を含めて、よく事態が呑み込めていないようだ。

ゲット「黒いＭＳかよ？　そういや、ユーリのＭＳも黒く塗ってあったよな…　…んぐ」

アインから貰った保存食をみんな平らげ、満足そうにゲットしたゲットだったが…。

彼はその直後、自分を見下ろす８つの視線に絡み取られ、背中に変な汗が流れるのを感じた…。

【3】

ウィナス「こんな子供を連れて来るとは、司令部を何だと思っている！」

アイン「あんたには訊いてないし、言ってもいない。　ねぇ、おじさん。　どう？」

ダイン「…いい眼をしているな」

ゲットの頭を静かに撫でたのは何と、インドラのカリスマ『楽園の剣』ダイン本人だった。

ゲット「そ、そうか？」

褒められて嬉しげなあたりは、子供らしい素直な所だろう。　ゲット本人に言うと、きっと怒るだろうが。

ノン「こっちが、あたしたちから見た調査の結果。　この子の話とじゃ、随分食い違ってるんだけど…」

ウィナス「やはり口から出任せか」

ダイン「ウィナス。　暇そうだから新しい仕事をやろう。先の戦いで傷ついた兵が抜けた分の、再編計画だ。　攻勢を強める可能性のある帝国への対策も含めて、具体的に突き詰めてもらおうか。　医療的見地からは、ナズーリが既に始めている」

ウィナス「…分かりました」

明らかな追い出しだったが、インドラにおいて楽園の剣たるダインに逆らう事は、何人たりとも許されない。　ウィナスもそれを知っているから、返事だけして部屋を出て行った。

マンネ「ダイン。　やはり、調査データに整合性はないように思います。　化け物の話が間違いか、またはＭＳの色が同じなだけで、根本的に異なる問題なのだと思いますが」

ノンから渡された調査データを熱心に見つめていたマンネが、ようやく口を開いた。

ダイン「壊れたＭＳが勝手に直り、再び動き出す…　な。　信じ難い話ではあるが、ラピスラズリが嘘をつかねばならない理由もないな」

冷静な判断力は、さすがインドラの総大将といったところだろう。
偏見や無駄な常識に囚われることなく、事実の奥深くに隠された物を暴き出そうと考える。

ダイン「少年。　その黒いＭＳについて、知っている事を聞かせてもらえないか？　お願いする」

そして、ダインがインドラに統べている最大の理由が、この礼を尽くした態度だった。　卑屈でもなく、尊大でもない。　そんな態度は、意外に難しいものなのだ…。

【４】

スリス「ダインのおじさんが、あんなに食いつくとは思わなかったよね～。　ちょっと退屈」

ナイル「でもまあ、自分で土いじりするよかマシだろ？」

シクス「って言うか、最近のノンちゃんの変わり様って、あのＭＳと関係あるのかな？」

ゲットの聞き取りに付き合っているのが、リーダーのノンと副リーダーのアインだけなため、他の６人は退屈そうだ。

そう言っていると、部屋のドアが開けられた。

アイン「終わったよ～。　はい、あげる」

ゲット「お、おい！　ちょ…　あ〝～！！」

複数の歓声と、ゲットの絶叫が聞こえた気がしたが、これもきっとゲットの運命だろうから、詳しくは後で語る。

歓声をあげなかったメンバー、ノンとアイン、さらにシクスの３人は、彼ららしからぬ真剣な表情だ。

ノン「ぶっちゃけ言っちゃうと、分からない事だらけ。　おじさんが言うにはね？　あたしの変化も、その黒いＭＳのせいなんじゃないかって言うんだけど、だとすると、前に戦った時はどうなるのかって話になるんだよね」

アイン「…前って、ユービットの帰りの時でしょ？　フィフスが死んじゃった」

シクス「あっちでも、黒いのと戦ったって言ってたよね？　その時は違ったんだ？」

ノン「あの時は楽勝だったし。　途中までは」

フィフスが撃墜された時、ＢＸ（ブラックエックス）…　エルフレア機が圧倒的に強かったかと言うと、そうでもなかった。　無謀な突撃をかけてきて、逆に追い詰めていたくらい。

あれはただ、最後の止めに失敗したエイスとフィフスの隙を、他の…　ディジョンとレナに突かれただけと表現しても、間違いではない。

ゲット「うぎゃ～！！！」

同じく、ありがちな叫びは無視。

アイン「もう１回戦うしかないんじゃない？　それでノンがどうなるか、観察」

ノン「アインって、そんな趣味があったんだ？」

シクス「女のコを見つめすぎると、警察に逮捕されちゃうよ？」

深刻になっても無理と分かれば、あっさりいつものペースに戻る。

ノンを含めて、ラピスラズリたちに何かが起こったと言うほどの変化は、今の所ないようだ。

…ところで…。

ゲット「待て！　待って…　いや、お願いぎゃ～～～！！」

ゲットの運命を直視してみよう。

エイス「ドッジボールぐらいで、情けないなぁ～」

ゲット「このどこがドッジボールだよっ！！」

ドゴーーーーン！！

と、ゲットが辛うじて避けた『ボール』が爆発する。

スリス「これも立派な『ボール』でしょ？」…確かに投げられていたのは、『ボール』に違いはなかった。　ただしその『ボール』とは、皮やゴムで作られた、中に空気を入れた球体ではなく、金属の

塊…

ゲット「ボール違いだろっ！　モビルポッド投げつけるヤツがあるかよっ！！」

そう。

彼らがドッジボールと称して投げていたのは、宇宙用作業機械から発展したモノ。　１２０ミリ砲を頭に付けた、あの『ボール』だった。　それを、ＭＳで投げ合って遊ぶのだそうだ。

ナイル「根性つくぜ？」

スリス「受け止められるぐらい上達したら、実戦で弾に当たらなくなるよ？」

ゲット「できるかっ！！」

ゲットの顔は、言うまでもなく蒼白だった。

いくら装甲がないに等しいボールとはいえ、直にぶつかれば、かなりの衝撃を受ける。　運悪く残っていた推進剤や弾薬に引火すれば、爆発してしまう事すらあるのだ。

セブンス「フィフスは得意だったけどな～。　あいつにドッジボールやらせたら、誰も勝てなかったな」

トゥーエ「フォルナは弱かったよね？　すぐ当たるんだもん」

思い出話に華が咲く。　遊び相手のはずのゲットが、完全にヒビってしまい、操縦どころではないからだ。

ゲット「はぁ…　こんなモンに、得意とかあるのかよ…。　どうせ同じ顔だろうけど、前に出やがれ！」

ゲットはヤケ気味に叫ぶ。

アイン「あ、それ無理だよ？　フィフスはもう死んでるから」

ゲット「…は？！」

話が終わったのか、話に割り込んできたアイン。

ノン「ついでに、弱い方のフォルナもね。　フォルナは前の戦いで」

ゲット「……。」

思わない話の流れに、ゲットは言葉を失った…。

第１０９章　ワグナー（前書き）

（1回目）

ミク「やっと準備が整ったね。　始めるよ？」

マヒロ「何であたしが、補習コースなのよ～。　知力低くないのに～」

ミク「７９じゃん。　〇栄の三國志ゲームだったら、たぶん軍師になれないよ？」

マヒロ「ゲーム違うし！

…って、ミクに言ってもどうせ無駄なのよね…。　さっさと始めて」

ミク「あいよ～。　今回は、帝国の歴史の復習ね？

さっそく問題。　物語始まってから、帝国は何をしていたでしょう？　ジルド君！」

ジルド「それなら簡単だ。　戦争してた！」

ミク「ジルド君は、次も補習ね」

ジルド「マジか？　つか、間違ってないだろ？」

マヒロ「…厳密に言うと、帝国はどこの国とも戦争してないわよ。
数少ない独立国の共和国とは、中立だし」

アッシュ「は…？？？」

ミク「お姉～。　答えはあってるけど、レベル上げすぎだよ～。
これじゃ補習にならないじゃん」

マヒロ「だったらあたしは卒業…」

ミク「ダメ。（即答）

…で、お姉の言った事を解説すると、帝国から見ると、インドラやクアルーン、フロンティアガードなんかはみんな、領地の反乱…独立紛争なんだよね。　西暦の頃によくあったやつ」

サヤリ「マリンピアは、もう帝国には従えないっ！　これからは自分の事は自分で決める！」

アッシュ「都合のいい時は味方してたくせに、乱れたら裏切る気かよ！」

サヤリ「ひぐっ！？」

ミク「同じよ～な事を、全世界で繰り広げてたんだ。　１０年もかかったけど、もうすぐ制圧に成功しそう。　物語の中でも、

マヒロ・霧雨　→　海賊

メリャーナ　→　フロンティアガード

ザキラ　→　インドラ、クアルーン（クアルーン平定戦はメリャーナ）

って感じで勝ってたよね」

アッシュ「じゃ、後はインドラに止めを刺せば、大勝利だよな？」

ミク「１年経ったし、原作ガンダムならそれで終わりそうなんだけ

ど…」

マヒロ「終らせないわよ～！」

ミク「そんな事言ってるのがいるから、まだ続いちゃうんだよね。
続く理由の掘り下げは、次の優秀者講座で！」

（だそうです）

第１０９章　ワグナー

マリー「メリャーナ様。　やはり、無理はなされない方が。　使者は我々で引見しておきます」

メリャーナ「これは私への試金石なのよ…。　ここで屈しては、いかにサコンの策があろうと、あの者に勝てない気がします」

サコン「…メリャーナ様…」

使者の名を聞いて動揺するメリャーナを案じて、マリーとサコンが名乗り出た代理を、肝心の彼女自身が峻拒した。

その表情は、一言で言えば『悲愴』

…そして、悲愴なメリャーナとは、対極な表情をした男が１人。

悲しいの対極で、嬉しいや楽しいというのではない。　悲愴感という感情を『表す』ことに対する対極…

無感情だ。

マリー「ご苦労」

エヴァニー？「はっ！」

会見場の扉を開け、メリャーナを迎える。　メリャーナが通り過ぎ、マリー、サコン、カトラス…

さらに、使者の2人が過ぎるまでドアを支え続け、全員が通ると、扉を閉め、メリャーナの背後に直立した。　一兵卒として愚直にメリャーナに仕える。　それが彼が、新たに選んだ道なのだろうか？

S「殿下。　内密な話が多くなります。　人は、できるだけ少ない方が望ましいのですが」

一番に口を開いたのは、エージェントSだった。　メリャーナらは、彼が助けたレジスタンス、シベリアではないかと疑っていたが、本人は絶対にエージェントSとしか名乗らなかった。

その彼が言った言葉の意味…　『人を少なく』は、重要な人物を部屋から追い出す、いわゆる人払いの要請に他ならない。

メリャーナ「これでも、人数は絞り込んだつもりなのですが。　マリーは私の侍従なのはもちろん、友と言っても差し支えない存在ですし、サコンとカトラスは知嚢、手足と表現できましょう。　それからこの者は…」

メリャーナの顔が、背後に向けられた。　そして、じっと一点を見据える。

マリー「直答せよ」

マリーが声をかけた。

主人の許しを得ず、勝手に声を発するのが非礼に当たるのは、いつぞやの将軍の例を省みるまでもない。　しかし、こうして声をかけられた以上、黙る方が逆に非礼であり…。　臆したと受け取られても、それは仕方ないであろう。

エヴァニー？「メリャーナ様の護衛を務めさせて頂いております、ワグナーと申します。　御使者の方を前に致しまして、大変失礼かとは存じますが、メリャーナ様の護衛は、命を賭すべき職分にございます。

何より、数多いる近衛の中で、ただ1人この場に入る事を許された栄誉、おいそれと諦める訳には参りません。　何とぞ、人払いの件はご容赦下さいますよう」

見事な言葉遣いと、礼節を弁えた態度だった。

しかし『出ていけ』と言われた事には、きっちりと抗っている。非の打ち所がないというのは、このような答えを指すのかも知れない。

S「……。」

エヴァニー…

いや、ワグナーをSは見据えたが、互いに目線をぶつけ合い、逸らす事はなかった。　互いに『グランズ』を支えてきた存在であるはずなのに、親しげに言葉を交わすどころか、本当の名前すら名乗ろうとしない。

無表情のままの2人の間を、静かだが重すぎる空気が流れる。　この2人は今、互いに何を考え、何を想っているのか？

エルフレア「分かりました。　護衛の役目、ご苦労です」

重い空気をエルフレアの一声が破る。

クアルーンに父と母を殺されたエルフレアにすれば、同じく帝国に乱を企てた2人は、元々は敵の味方だった事になる訳だが、それを知ったらどう思うのだろう？　それとも、他人の過去を追及したりはしないタイプなのだろうか？

メリャーナ「それでは、宰相よりの言付けをお聞かせ頂けるかしら？　わざわざ人を送ってくるからには、些事と済ませられない事が起きたのでしょうか？」

…いや。

エルフレアが何かを思うとすれば、レジスタンスに対する恨みより、メリャーナに対する想いが先だろう。

エルフレア「1つ1つは、さして重要でないかも知れません。ですが、細かな事を軽んじていると、思わぬ落とし穴に落ちる事もございましょう。　まずは互いの意思にズレがないよう、連絡を密にせよと言われて参りました」

けれど、メリャーナとエルフレアも、互いにそんな素振りを見せなかった。

いや、見せられなかったのか…？

【2】

ワグナー「どうぞ」

メリャーナ「ありがとう…」

会見を終えた時、メリャーナはすっかり憔悴していた。　一方で、無表情を保ち続けた、エヴァニー…

いや、ワグナー。

彼は、主人と決めたメリャーナに、言葉少なにだが、ごく自然にハンカチを差し出していた。

マリー「ただの布で拭いては、せっかくのメイクが乱れます。　まだ学び足りないようですね」

マリーは、汗を拭ったメリャーナの顔を、ものの数十秒で綺麗に整えた。　そのやり取りに、当のメリャーナは苦笑いしてしまう。

マリー「しかし、メリャーナ様の愛猫の名とは、いろいろな意味で大胆な事を…」

エヴァニーが名乗った偽名は、つい先頃死んでしまったメリャーナの飼っていた猫の名前から取ったものだったのだ。

ワグナー「その場しのぎの偽名で終わらせるつもりはありません。　どうせ一度は地獄に落ちた身です。　エヴァニーではなくワグナーとして、この命、如何様にもお使い下さいますよう」

メリャーナ「覚悟は確かに見せてもらいました。　願いは聞き届けます。　もちろんマリンピアも」

ワグナー「ありがとうございます」

深々と頭を下げるワグナー。　そこに、かつての無謀なレジスタンスの面影は、微塵もなかった。　そんな彼の覚悟を認めたのだろう。
　メリャーナは、願いを聞き届けることを承諾した。

カトラス「って事は、マリンピアの王位は、あの嬢ちゃんが継ぐんだな？」

メリャーナ「それに加えて、参戦の恩賞も考えなければならないわよね？　シノノメ殿下の落とされたバスラなど、多少の加増をしようかと考えているわ」

サコン「良い策かと思います。　メリャーナ様が直に治められるより、警戒はされにくいでしょう」

皇女が少しばかりの直轄領を持つぐらい、別に変でもなんでもない。
　それを他者に配慮しなければならないのは、何とも嘆かわしい事なのだろうが…。

それでもメリャーナは、慎重な道を選んだ…。

【3】

自室に戻ったワグナーを複雑な表情で眺めるのは、ガルダの中で最も彼と繋がりの長いナディアだった。

ナディア「エヴァニー…」

ワグナー「ワグナーだ」

聞き慣れた呼び名を、わざわざ拒絶してみせたワグナー。

ナディア「本気で過去を捨てるつもりなのかい？」

ワグナー「俺はグランズを、俺自身の不甲斐なさのために失った。ならせめて、サヤリだけでも守ってやりたい」

仲間達がリターナに溺れた自分に失望して、グランズを去った事をどこかで知ったのだろう。　ワグナーは、諦めと寂しさが入り雑じった表情をしていた。

ワグナー「それにだ。　メリャーナ様はもしかしたら、帝国を帝国じゃなくしてくれる存在かも知れない」

ナディア「…？　…それはどういう…？」

ワグナー「マリンピアに恩賞を与えると言われた。　それだけならどうという事はないが、よく見てみると、グラノーブルとカンタルダルが、マリンピアの領地に含まれている。

俺は、サヤリを頼むとしか言っていない。　にも関わらず、そうした事をする人なんだよ…」

グラノーブルは言わずと知れた、グランズのかつての拠点である。
　カンタルダルは、盟友ムサシと共に帝国兵の横暴から守った街。
そこを帝国領から、マリンピア領へと変えたのだ。　参戦の恩賞を名目にして。

ナディア「…あ…」

ワグナー「ナディアは昔、帝国軍にいたんだよな？　その時の帝国軍はどうだった？　全員が全員、鬼や野獣の集まりだったか？」

ナディア「難しい事を訊くね？」

ナディアは笑ったが、何故か肩を落としていた。

ワグナー「俺は思い出した。　ある晩

『ユギン公さえ、ご健在であられたなら…』

そう言って泣きながら、父さんが飲んでた事を…。　あの時はただ、ユギンって友達とケンカしたんだろうぐらいに思ってたが…。

調べてみたらユギンって、帝国屈指の名宰相って言われた人だそうじゃないか」

そう言えばエヴァニー…

いやワグナーは、帝国軍のエリート将校の息子なのだった。

ナディア「私が帝国軍にいたと言っても、ユギン閣下は遥か雲の上の人さ。　会った事なんか、もちろんないよ。　ただ言われてみれば、私が帝国軍を抜けようって決めた時、ユギン閣下はもう死んでいたね」

考えながら喋るナディア。　だがそんなナディアを見て、不意にワグナーは笑い出す。

ワグナー「あはははは…」

ナディア「なんだよ！　人が真剣に喋ってるのに…」

当然ナディアは、仏頂面になってしまう。

ワグナー「…あは…。　いや、ユギンって人がどんなだったか、よく分かったよ。　ナディアの説明はさすがに分かりやすい」

ナディア「…？？？　説明なんかあたしは…」

ワグナー「してるさ。　ユギン『閣下』って呼んだだろ？　かなり自然に。　グランズでさんざん帝国軍とやり合ったナディアが、まだ敬語を使う気になる人物だもんな。　そりゃあ、偉大な人だったんだろう」

ワグナーは、ナディアの肩を二、三度叩いた。

ナディア「私は別に…

…いや、そうかも知れないね。

かつての帝国が、理想郷だったなんて言うつもりはないよ？　でも、今の世の中よりはかなりマシで、今の帝国となら、比べる方が失礼ってもんだね。　あんたがメリャーナに賭けようとする気持ち、ち

ょっとだけ理解できたよ」

ナディアはそう言って笑って見せた。

ナディア「でもさ？　名前まで変えなくてもよかったんじゃないか？　エヴァニーが指名手配されてたのは確かだけど、降伏した事にすれば問題はないだろ？」

現にフロンティアガードの人間は罪に問われておらず、またクアルーンの残党も、メリャーナは可能な限り助命していたのだ。

ワグナー「ワグナーって名乗ったのは、それが理由じゃない。　さっき使者が来てただろ？　あの使者の1人、エージェントSとしか名乗らなかったが…。　あれは間違いなくシベリアだ。

顔に傷が増えてたし、声色が違ったし、体つきまでも変わったが、俺を一目見た時、下唇に指を添えた。　シベリアが考え込む時の癖だ…」

ナディア「何だって?!」

運命の皮肉に、ナディアは絶句せざるを得なかった…。

第１１０章　仕組まれた開戦（前書き）

（２回目、優秀者編）

ミク「優秀者講座始めま～す。　ジェイソン君、予習はしてきましたか～？」

ジェイソン「…何で私が、小娘の授業など…。　しかし出るからには、侮られる訳にはいきません。

確か帝国が、戦い続けていた理由ですよね？」

ミク「そうだよ？」

ジェイソン「それは、各地で反乱が起きたから。　一言で言えばそうなりますが、反乱の理由がさまざまで、時期も少しずつずれているので分かりにくいのです」

ミク「ほうほう」

ジェイソン「まず最初に反乱を起こしたインドラですが、これは単純に独立紛争でした。　これだけならよくある話で、いくら苦戦したとしても、最後には帝国が勝ったでしょう。　しかし…」

ミケル「その戦費のために、帝国は各地に重税をかけた。　フロンティアガードなんかは、それで領主と揉め、最後には反乱を起こした。　同じ反乱でもこっちは一揆に近いな」

サコン「そして、そんな帝国の足元を見たのがコロニー諸国。　彼らは　『今ならどさくさに紛れて、独立してしまえる』　と判断して、帝国の属国から抜けようとした…」

ネロ「それをみんな、核と毒ガスで鎮圧したんですか？　なりふり構ってないというより、もう無茶苦茶ですよね？」

ミク「…そこには、本来軍を統括すべき皇帝がいなかった、って理由があるんだけどね？　皇太子は戦死しちゃって、他の皇族も争いに巻き込まれて、１つになれなかったし」

ジェイソン「ザキラ様が、当時既に宰相であられたなら、帝国はこんなに乱れませんでしたね」

ミク「ジェイソン君の私見は置いといて、そんな無茶な鎮圧をしたから、そのやり方に反感を持ったり、怖がる人たちが出てきちゃった。

それがまた、別の反帝国レジスタンス運動に繋がっちゃって」

サコン「内憂外患ってやつだな。　反乱は終息に向かってるが、こうなると帝国の在り方が問われてくる。　編集者が三國志マニアだから、乗っ取りとか再興とかな。　〇巾の乱以降の時代に物語は突入していく…」

ミク「ちょっとサコン君っ！　知力１００だからって予見しすぎだよ！　ネタバレしちゃうじゃん！」

（そうなのか？　続く）

第１１０章　仕組まれた開戦

響き渡る銃声。

霧雨兵Ａ「今までよくも、宇宙をコケにしやがって！」

そして罵声。

霧雨兵Ｂ「手榴弾だ！　抵抗が激しい所は、まとめて吹き飛ばしてしまえ！」

帝国兵Ａ「…一体、何がどうなってるんだっ！　物資がいるからって来てみれば、なんで撃たれなきゃならない？！」

帝国兵Ｂ「知るか！　積み荷の代金が惜しくなったんじゃないのか？　だから、奪い取るつもりなんだろ！」

一通の暗号を盲信した、霧雨に非があったと言わざるを得ない。
しかし、そんな感情を作り出したのは、紛れもなく本国なのだった。

そして何より言える事。　それは…。

霧雨兵「反撃だと？　生意気な！」

帝国兵A「う…。　血…　血がぁ～！！」

事実がどうあれ、真っ先に倒れるのは、前線の兵士達だという悲しい事実。　レンカの港は、瞬く間に血で覆い尽くされていく…。

【2】

そしてそんな情勢は、レンカ全体に飛び火してしまう。

たまたま航行していた帝国籍の民間船に、霧雨のゲイツが迫る。
その民間船は民間船で、霧雨を騙る海賊と好意的?に解釈すると、ゲイツに猛烈に反撃し、結果2機のゲイツが損傷…。

最後には、手を焼いた霧雨機が、民間船を粉々に吹き飛ばした。

さらに別の場所では、レンカ市民が本国からの旅行者を襲った。
事の発端は酒に酔った客の悪行が原因だったのだが、止めに入った霧雨の兵が差別的な発言をした事から、周囲の客をも巻き込み、事態がエスカレートしてしまったのだ。

これなどは勘違いの典型で、仮に開戦が事実だとしても、滞在していた旅行者には安全に帰国する権利がある。　にも関わらず、この手の混乱が各所で拡がっていった。

原因は些細な策略。

しかしそれは、地球と宇宙の感情的対立という、開けてはいけないパンドラの箱を開けてしまったのだ。

『戦争とは、政治の延長である』

西暦の時代、どこぞやの偉人が言ったとされる言葉である。

しかし理屈に乗っとり、政治目的を達するための戦闘に終始した戦争は少ない。　多くは戦場の混乱と憎しみにまみれ、政治は置き去りにされた。

そしてこの戦争も…。

【3】

霧雨「何だ！　誰が、今この瞬間に本国と開戦しろなんて命じた！　僕はそんな命令発した覚えはないし、聞いてもいないぞ！！」

霧雨士官「…で、ですが現に…。　しかも艦隊は混乱しており…」

霧雨「ですがもへったくれもあるかっ！　すぐに部隊を掌握しろ！
できないなら、お前を宇宙に放り出すからね！！！」

霧雨士官「はっ、はいっ！！」

…状況が悪かった。　今、霧雨の首脳部は、３つに分かれてしまっている。

本拠のレンカに侯爵の叔父とマリアベル。

建設中のサーライトにリバルとレイ。

主力艦隊に霧雨本人といった具合だ。

ジン「姉御っ！　ついに戦うんだな？」

霧雨「…ジン。　悪いけど、少し静かにしててくれないか？　僕は今、とても忙しいんだ」

ジン「す、すまねぇ姉御…」

残念な事だが、ジンはこういった時の対処には役に立たないようだ。
つまり霧雨が全てを判断するしかない。

通信状況は、ミノフスキー粒子濃度が薄いのに悪かった。

この時点で、霧雨が守るべき要地は２つ。　本拠地のレンカと建設中の要塞サーライトだ。
レンカに何か異変があれば、いくら艦隊が無事でも何の意味もなくなる。　５年前の大乱を見るにつけ、コロニーが外部からの攻撃に弱いことも明らかだ。

ただし、そんな事は誰もが承知していたから、防御施設は整備されていたし、かなりの数のＭＳを配置してもあった。

一方のサーライトは、軍事要塞だから民間人は１人も住んでいない。
仮に失われたとしても、霧雨家が滅びる訳でも何でもない。

その代わり、建設中だから防御は甘くて、簡単に攻撃できてしまう。
配備されているＭＳも、多くが作業用に使っている旧式ＭＳばかりで、純粋な戦力とは言いづらかった。

霧雨「艦隊の針路を伝える！　全艦左４５。一斉回頭…」
両方に艦隊を分散する事もできたが、霧雨にその気はないようだった。　霧雨が艦隊を率い、一路目指すのは…？

【4】

霧雨侯爵「薙華に連絡は取れないのか？」

マリアベル「試みています。　しかし、現在トラブルが続出していて、通信に信用が置けません」

霧雨の混乱を煽ったもう1つの原因。　それは、本拠地に残った侯爵とマリアベルにあった。

侯爵は当主でありながら実権がなく、そんな侯爵を侮るマリアベルは、当初独自に動いてしまう。　それで解決できたならば、いつもの不仲で片が付いたであろうが、それに失敗し、貴重な時間を浪費してしまった。

ようやく拙い連携で2人が動き出した頃には、事件の発端となった本国の輸送艦ベルファストでは、帝国兵23人が殺され、霧雨もまた9人の死傷者を出していた。　他にも、明らかに霧雨側から危害を加えた事件が8件も発生していて、市街地での喧嘩騒ぎに至っては、把握すら困難だった。

それが一報から半日経った時点での、レンカの現状であった。

霧雨侯爵「サイバーテロだと言うのか…」

侯爵が呆然と呟く。

勝手に発信された暗号通信から、その後の通信途絶。　仕組まれたテロだという侯爵の推定も、あながち間違っていないかも知れない。

霧雨侯爵「…しかし、原因が何であれ、霧雨から手を出してしまった事に違いはない。　私が直に赴き、釈明してこよう」

侯爵は思い切ったように言うと、席から勢いよく立ち上がる。

マリアベル「それで、事態が終息するとは思えませんね」

この期に及んで、まだ冷たい口調のマリアベル。

霧雨侯爵「そういう問題ではないのだ。　過ちを犯したならば、素直に詫びる。　解決しようがしまいが、礼節を欠いた人間に、同じ人間を統治できようはずがない」

マリアベル「礼節で国は治まりません。　時代遅れです」

さらに突き放す。

霧雨侯爵「…時代錯誤。　かも知れぬ。　ならば私の死後、薙華がレンカを治めれば良い。　本国が許さねば、私が生きて帰ることは

あるまい。　つまりはそういう事であろう」

マリアベル「…艦は用意できませんよ？」

霧雨侯爵「シャトルの1機もあればよい」

マリアベルは冷たく言い放ったが、シャトルと護衛のＭＳだけはほどなく用意された…。

【5】

Pちゃん「派手にやらかしてくれましたね？」

言葉はそうだが、その声色に怒りの感情はこめられておらず、叱責といった感じもしない。　諦めのようにも聞こえるし、もしかしたら感心しているのかも知れない。

ハイド「…出過ぎた真似を致しました」

イドゥン「要は霧雨とドンパチを始める、大義名分が欲しかったんでしょ？　なら結果オーライ」

この事件が彼らの仕組んだ罠なのは、調べれば分かってしまうかもしれない。　けれど、最初に銃を射ったのは霧雨で、殺したのも霧雨だ。

世間の印象的には、圧倒的不利と言えるだろう。

Pちゃん「しかし、よくやったと褒めておきましょう。　ガンプラと同人誌を取り上げたら、今度はいかがわしい映像を徹夜で見ていた、頭の悪い誰かさんの千倍は役立ちました」

オタQ「ギクっ！」

ユーリ「0は千倍しても、0のままだけど？　マイナスだったら、余計酷くなるじゃない」

冷や汗を流すオタQの横を、ユーリが通り過ぎる。

Pちゃん「ユーリ。　意気がるの勝手ですが、あなたの立場は分かっていますね？」

ユーリ「…ちっ」

露骨に舌打ちしてみせる。　しかし、Pちゃんに気にする素振りは

ない。

バーストン「きっかけはともかく、霧雨が俺達と殺りたがってる事は分かった。　要塞は潰しは決定だな」

早くもＢＨＡ（ブラックヘビーアームズ）に乗り込んだバーストンから、出撃準備完了の報告が入る。

フォーリュン「ザキラ様のため、悪名を被る覚悟はできている。全てはザキラ様の御為に」

２番カタパルトには、ＢＳＲ（ブラックシェンロン）

そして…。

Ｐちゃん「オタＱっ！　あなたも行くんですよっ！

…それとも、どこか違う場所に逝きたいんですか？」

オタＱ「き、キ、キュウマ・オオタ、ＢＬ（ブラックレオパルド）発進するオタ…

…ぶげっ！！」

慌てすぎて、開いたドアではなく、壁に突っ込んでしまったオタQ。
出撃前の様子はさまざまだったが、とにかくエージェント達はサーライトを目指したのだった…。

【6】

イドゥン「僕はどうすればいいのかな？」

サダラーンに残ったエージェントは、指揮官であるPちゃんと彼ら2人だ。

ハイド「今回は戦力が限られている。　私たちの本業ではないが、司令と母艦くらいは守らせて頂く」

静かに進み出たのは、帰艦して間もないはずのハイドだった。

Pちゃん「ありがたい申し出なんですが、実は迷っているところでして。　霧雨の艦隊が、意外なほどしっかり纏まっています。　私たちに気がついてはいないようですが、サーライトの援軍に向かわれると厄介です。

どうしたものか、情報のプロとしての判断を聞きたいんですよ？」

ユーリを咎め、オタQを罵倒したPちゃんだったが、彼ら2人には礼儀正しかった。　もしかしたら、礼儀を知らない相手にだけ、容赦がなくなるタイプだったのか？

ハイド「霧雨の艦隊は、私の掴んでいる情報でも２０隻を越えている。　まともに戦うべきではないな」

Pちゃん「やはり、そういう判断になりますか…」

2人の意見は一致したようだ。　両面作戦を避けるのは戦術の基本であるし、そうでなくても、エージェント側はサーライトで手一杯だろう。

イドゥン「じゃ、決まりだね？　僕が霧雨をからかって来るよ」

明るい調子で言ったのは、情報のプロの片割れイドゥン。

Pちゃん「お待ちなさい。　1機で霧雨全艦を相手にすると言うつもりですか？」

イドゥン「そんな訳ないじゃん？　せっかくのミラージュ・コロイドなのに。　隠れて張り付くだけだよ。　いざとなったら分かんな

いけど？」

ブリッツガンダムはエージェント仕様になっても、ミラージュ・コロイド機能は健在だった。　レンカに密かに侵入した時、脱出した時にも、おそらく使ったのだろう。

ハイド「イドゥン。　１つだけ言っておく。　情報を扱う以上、なってみなければ分からないという発言はあり得ない。　方針はこうだ…」

ハイドはイドゥンに囁いた…。

【7】

これで残る戦力は、サダラーン自身を除けば、ＰちゃんのＢＡＭ（ブラックエアマスター）だけ。　予備のＭＳすらも積んではいない。

Ｐちゃん「打つべき手は打ちしましたね。　…ですが私も、本当なら戦いたいクチなんですけどね…。　指揮官

やオタQの世話係も、いい加減煩わしきなってきたところで」

Pちゃんが大きくアクビをする。　確かに彼はユービット以来、ずっとエージェント達の統率ばかりしてきた。

ハイド「ならば、たまには暴れてこられてはいかがか？　艦は私がお預かりしよう」

意外な申し出だったのか、Pちゃんは少しだけ驚いた顔をしている。

Pちゃん「なるほど。　持つべき者は、有能な副官ですね。　では有り難くお言葉に甘えるとしますか。　幸いBAMは可変機ですから、今からでも追いつけそうですし」

戦いに赴くというのに、Pちゃんはどこかにこやかだった。　これも厳しい指揮官の、意外な一面と言った所か？

ハイド「司令の戦果に期待します。　後はお任せ頂こう」

Pちゃん「頼みます」

ハイドが軽く手を上げた…。

第１１１章　レイの決意（前書き）

（よくありがちな…）

【自習】

アッシュ「やっぱ本編が佳境だと、こうなりやがんだよな…」

アッシュ「つか、俺もエージェントなのに、何で出番がないんだ？！」

（お休みなんです）

第１１１章　レイの決意

物凄そうな防御砲火が出迎える。　そして、１００機近いＭＳ群。

だが…。

フォーリュン「見かけに騙されるな、バーストン。　右翼は砲火がかなり手薄だ。　ＭＳも、１機１機の性能は大した事がないっ！」

ドラゴンハングがゲイツＲを捕らえ、そのまま頭部を握りつぶす。

その次はザク・ウォーリア。

けれど、迫った3機目はシグーで、４機目から後はジンの初期型だった。

バーストン「なるほどな。　因縁つけて、出来上がる前に襲う訳だ。　完成したら厄介だぜ、こいつはよ」

ＢＨＡ（ブラックヘビーアームズ）の掃射が、ＢＳＲ（ブラックシェンロン）を取り囲んでいた旧式ＭＳ群を一掃する。

味方ごと射ってしまいかねない攻撃の仕方だったが、フォーリュンは敵を引き付けつつも、バーストンの射撃からは器用に身をかわしていた。

ユーリ「ほらほら豚さん？　しっかり私を守らないとダメじゃない

？」

オタQ「なんでボクが、豚って言われなきゃいけないオタぁ～！　お前なんか守ってあげないオタよ～」

ユーリの暴言に拗ねたのか、オタQはあさっての方向を射っていた。
それは確かにゲイツ3機を粉砕したが、ユーリの支援にはまったくなっていない。

フォーリュン「仲間同士でいがみ合っている場合ではないぞ！　敵は私たちの１０倍以上なのだからな！」

牽制に火炎放射を使い、下がったジンをビームグレイブで斬り捨てた。　接近戦主体の兵装だから、本来は距離をおいての射撃戦は不利なＭＳなのだが、フォーリュンが躊躇いなく間合いに踏み込むため、半端に下がると逆にやられてしまう。

他方、ジンの横にいたザクは奮戦し、サーベルがＢＳＲを掠めた。
新型ＭＳの性能を信じて踏み込んだのが、かえって良い方向に働いたらしい。

フォーリュン「…やるな！」

霧雨士官「霧雨を舐めないでもらおうか！　大佐が戻られるまで、命に替えてもここは守るっ！！」

今度は射撃が、フォーリュンを唸らせる。

ユーリ「…ふん」

ジンがＢＳ（ブラックサイサリス）にまとわりつく。

ユーリの性格を考えれば、力任せに弾き飛ばしでもしそうなものだが、今日はなぜかおとなしい。　サーベルで１機を斬り捨てたものの、あとは回避に専念しているのか、ジンのなすがままだ。

オタＱ「お前なんか、やられてしまえばいいオタぁ～。　べ～～」

依然、協力する気はなさそうなオタＱだった。　その隙を突くべく、オタＱにゲイツが襲いかかる。　一般的な緑のカラーリングをしていない、黄色が鮮やかな機体だ。

オタＱ「砕け散れオタっ！」

ＢＬ（ブラックレオパルド）から、何発ものミサイルが飛び出し、ゲイツを直撃する。　熱源か赤外線による誘導らしく、ミノフスキー粒子下でも全弾を命中させていた。

オタＱ「ボクは豚じゃないオタぁ～！！」

さらにグレネードランチャー。　1機相手に、明らかに過剰な攻撃だ。

どうやら『豚』というフレーズは、オタQにとっての禁句であったらしい。　琴線に触れたのはユーリだが、さすがに味方は射てないので、代わりにゲイツで鬱憤を晴らす気なのか？

霧雨熟練兵「だが、効かんなぁ～」

オタQ「マジかオタタ？！」

命中率は驚異的だったのに、その黄色いゲイツには、傷1つついていなかった。

オタQ「ぬわわっ！　寄るな化け物！　…ぎゃふっ！！」

それればかりか、BLにビームを直撃させてきた。　咄嗟に腕で防いだが、それが不幸な事故に繋がってしまう。　グレネードランチャーが誘爆し、右手の半分が無くなってしまったのだ。

オタQ「お助けぇオタぁ～」

ユーリ「あら？　いい気味ね」

ジンの包囲を振り切ったユーリだったが、当て付けなのか、オタＱを助けようとはしない。　その間にも、ゲイツはバルカンをまったく受け付けない無敵ぶりを発揮しながら、さらなる攻撃を仕掛ける。

霧雨熟練兵「止めだっ！！　…ぐ…」

しかし、迫るゲイツの装甲が不意に弾け飛ぶ。　さらにビームが何発も掠めると、慌てた様子で後に下がった。

オタＱ「オタヲ？」

Ｐちゃん「いつもの事ですが、何をやってるんですかっ！」

駆けつけたのは、ＢＡＭ（ブラックエアマスター）、Ｐちゃんの専用機だ。

Ｐちゃん「ＰＳですよ！　報告にあったでしょうが！」

オタＱ「ＰＳ？　プレイステーションかオタ？？？」

Ｐちゃん「…頭が痛くなってきました…。　ユーリっ！！」

ユーリ「何かしら？」

Pちゃん「人質の命、惜しくないみたいですね？」

ユーリ「…っ！！　何よ、それ。　私の護衛がその豚って作戦じゃない！」

それでもBSは一気にスラスターを吹かし、ゲイツに迫った。

ビームを鮮やかにかわしながら、胴体を最大出力のビームサーベルで叩き斬る。　見事な攻撃には違いなかったが、ゲイツもさっきまでと異なり、無敵ではなかった。

オタQ「なんでオタ？」

Pちゃん「PSは実弾兵器用帯電気装甲、フェイズシフトの略です！　プレイステーションは西暦のゲーム機でしょうがっ！！」

そしてそんな装甲をしていたのは、試作機の一種、火器運用試験型ゲイツ改。　本来はPS装甲などを試験するために造られたMSで、実戦向きの機体ではないはずだが、それすら戦わなくてもいけないぐらい、今のサーライトには余裕がないのだろう。

ユーリ「知らなかったのかしら？」

Pちゃん「知ってて助けなかったあなたも同罪ですよ。　オタQが豚なら、あなたは猿回しの猿なのをお忘れなく」

Pちゃんの眼光は鋭いままだった。

ユーリ「…無理な突撃を仕掛けて、撃墜されても知らないわよ？」

再びBSが加速をかけ、視界から消える。

その後を何機ものジンが追おうとするが、そもそも推力が違い過ぎる上に、Pちゃんの援護射撃が的確で、追撃どころではなくなってしまう。

オタQ「…え…　えっとオタ…　…ぁ？」

ついでとばかり、そんなオタQにまでライフルは向けられていたのに気がつく。

Pちゃん「…オタQ？」

オタQ「行ってきますオタぁ～」

ＢＳに続き、ＢＬも突撃を開始した…。

【2】

レイ「残念ですが、思った通りになってしまいそうですね…」

レイが呟いたのは、サーライトの中央管制室。

現状で使える防御システムを全て使い、作業用ＭＳや試作機まで動員して防衛線を張ったが、付け焼き刃の防衛線だと見抜かれてしまったらしい。　大軍ではなく、少数精鋭の襲撃作戦らしいのも、迎撃を困難にしていた。

画面には、ゲイツＲをバルカンで射ち、姿勢を崩した隙にその脇を通り過ぎたＢＳが映像に映っていた。

レイ「…あのＭＳは…。　まさか？」

霧雨士官「最終防衛線まで、既に敵は到達しています。　今のサーライトでは、押し返すのは困難です」

この士官の言葉を借りずとも、戦況は明らかだった。　新型のザク

はたった数機しか配備されておらず、ゲイツRもさほど多くない。
これでは防御砲台の完成していない区画は、ザルも同然の備えだ。

リバル「しかし、霧雨様から預かった要塞ですよ！」

諦めムードに抗ったのは、同じく霧雨の側近のリバル。　拳を握りしめて、本当に悔しそうだ。

レイ「要塞は所詮要塞です。　しかも建設中の」

リバル「けれど、霧雨様が宇宙を統べるための、偉大な1歩になるべき要衝です」

強く主張したリバルに、レイは眉をしかめる。

リバル「レイ！！」

レイ「ついて来て下さい」

不意にレイは床を蹴り、手近な移動用のレバーを握る。　リバルは驚いた顔をしたが、結局はレイの背中について行く事にしたようだ。

そして、そんなレイが案内したのは、サーライトの一番奥のハンガー。

リバル「…このＭＳは…？　ガンダムですか？」

レイ「霧雨初のガンダムですよ。　宇宙を統べるというならば、ガンダムの１機もなくてはね？」

ガンダム１機がいたからといって、簡単に戦局が覆ったりはしない。

そんな事は誰もが知っているが、それでも

『ガンダムを保有している』

というインパクトは大きい。　元祖ガンダム、ＲＸ－７８を開発した共和国は元より、帝国すらもガンダムタイプのＭＳを開発しているのは、それが理由なのだ。

レイ「フリーダムガンダム。　ＰＳ装甲を搭載した、次世代のガンダムです」

レイは少しだけ誇らしげに、その機体を指差す。

リバル「なら、このガンダムで反撃すれば！　レイが開発した機体なら、地球のガンダムにも劣らないんですよね？」

期待を込めた眼差し。

これがガンダム伝説だった。　ガンダムがあれば何とかなると、根拠のない期待を持つ。

レイ「…そう事はうまく運ばないんです」

しかし、レイが口にしたのは、期待を裏切る悲しい事実。

レイ「無事完成していたなら、霧雨様にお渡ししていますよ。　このガンダムは本来、最新型の高出力ジェネレーターを搭載するんですが、それを完成させる事が、私にはできませんでした。

便宜上、従来型のバッテリーを積みましたが、決定的に出力が不足しています。　だからビームの出力が低すぎますし、ＰＳの稼働も１０分だけ。　持っているのが実弾の突撃銃なのも、みんなそのせいです」

リバル「…くっ…」

告げられた言葉に、リバルの顔が歪む。

レイ「乗って逃げて下さい」

そんなリバルに、レイが言い放つ。

リバル「…レイ？」

レイ「サーライトが敵の手に落ちれば、当然ガンダムは奪われます。かといって、せっかく開発したガンダムを爆破してしまっては、霧雨のガンダム保有は諦めざるを得なくなる。

だから、乗って逃げるんです。　サーライトは走って逃げたりできませんが、ガンダムはできますよね？」

レイはリバルに笑いかけた。

リバル「じゃあ、なぜレイが乗らないんですか？」

レイ「私には、マヒロ殿下から頂いたザク3がありますから。　NT専用機ですから、リバルには無理でしょう？」

リバル「消去法で、私が逃げる役目になるんですね…」

微かに沈んだ表情のリバル。

レイ「造った私が言うのもなんですが、占領されたサーライトを奪回するのは至難の業です。　それには、ガンダムの1機もないとね。　重要な役目じゃないですか」

屈託のない笑顔が、逆に心に深い爪を立てた。

リバル「…分かりました。　ガンダムは預かります。　そして必ず、霧雨様にお届けします」

言ったリバルが床を蹴り、フリーダムガンダムのコックピットに収まる。　灰色だったボディが、鮮やかなトリコロールカラーに染まった…。

【3】

それを見たレイも、ザク3に乗り込む。　他に残っていたのは、補給艦のコロンブス1隻だけだった。

レイ「できるだけ護衛はつけますが、けして戦わないように。　まだ未完成なのをお忘れなく」

リバル「…はい」

フリーダムがサーライトの外に出る。　すぐ近くに敵の姿はなかったが、外れたビームが要塞を焼いていた。　ビームが直接到達するぐらい、エージェント達がサーライトに肉迫しているのだ。

レイ「さあ、行ってください。　私が時間を稼ぎます！」

その言葉を合図にしたかのように、周りにいたジンやゲイツが集まり、フリーダムを護衛する態勢になる。　サーライトに残された数少ない戦力で、これが撤退する事は、サーライトの喪失を自ら決定したも同じだ。

リバル「……。」

飛び去るノズル光を見送り、レイはザク3を逆方向に加速させる。

レイ「さっき映像に映ったＭＳ。　黒く塗られて、改造した跡がありましたが、ＧＰ－２サイサリスですね…。　あれを投入して来るという事は、彼らにサーライトを占領する気はないようです。

また宇宙（そら）を核で焼くつもりですか！」

誰にも言った事はなかったが、レイの出身地は旧サイド４　キッソス。

５年前。　もうすぐ６年前になるが、帝国から独立しようと武力蜂起して、核で返り討ちにあったコロニーだ。　帝国の士官学校に合格して以来、ろくに帰った事もない故郷だったが、故郷には違いなかった。

レイ「サーライトが落ちたとしても、あの機体だけは残しておけません。　サイサリスがあれば、レンカも同じ災難に見舞われないとも限らないのですから…」

レイが目を閉じると、おぞましい殺意の塊が、大して離れていない所にいるのが感じられた。

レイ「ニュータイプの感性が役に立つのって、こんな時だけなんですよね…」

己の力に運命の皮肉を感じながら、レイはフットペダルを踏み続けた…。

第１１２章　捜索（前書き）

（３回目）

キーンコーンカーンコーン…

ミク「はい、補習授業始めま～す。　今回は物語本編の、第１章を開いてね～」

ジルド「…何か本格的に学校になってきたけどよ。　小説の中で、その小説読むっておかしくね？」

サヤリ「だよな～。　いくら何でも無茶振り…」

ミク「そこ！　成績悪いクセに私語しない！

…で、１章だと、あたしがお姉を率いて、海賊討伐してるんだけど…」

マヒロ「待てコラ！　率いてるのはあたしだ」

ミク「シャラップ！　私語禁止。　とにかくあっさり海賊を倒しちゃいます。　何故ですか？」

アッシュ「そりゃ、海賊が弱っちいからだろ」

ミク「他に答えは？」

マヒロ「…ずっと前から戦ってたからよ。　あれはいわば、決勝戦だけ放映された大会みたいなものよ」

ジルド「そうなのか？」

マヒロ「それを言っちゃったらあんた達だって、いきなり名の売れた傭兵してるじゃん。『物語の始まりが全ての始まりじゃない』からこそ、いきなり有名なんだもん」

ジルド「言われてみれば、当たり前だな…」

ミク「そんなんで、海賊相手に勝ちを重ねてきたお姉と、同じ立場の霧ちゃん（＝霧雨）が手を組んだんだから、まあ勝つよね」

マヒロ「苦戦はしたけど、決勝戦まで勝ち進んだ2チームが合同して、3位のチームと試合したようなものだし」

サヤリ「それ、卑怯じゃないか？」

マヒロ「ついこないだまで、後を継ぐの拒否ってた、王女失格は黙れ」

サヤリ「何だって？」

ミク「はいはい、そこケンカしない。　海賊相手とはいえ、戦争だからね？　楽勝できる作戦や外交をしたなら、それを考えた人が優秀なんだよ」

マヒロ「まあね」

ミク「だってお姉は、それしか能がないんだもん。　なんたって操縦能力2…」

マヒロ「まだその話題を引きずる気かぁ～！！」

ミク「だって、お姉からかうのがあたしの趣味だも～ん」

マヒロ「なんだとぉ～」

ミク「と言ったところで、補習終わり。　次回の優秀者講座もお楽しみに～」

（続くらしい）

第１１２章　捜索

並んで停泊する、２隻のザンジバル級。　だがその艦内の雰囲気は、あまりに違いすぎていた。

リンダ「…また行くのかい？」

スティヴ「当たり前だろ！　ゲットにもしもの事があったらどうするんだ！」

ゲットが行方をくらましたのが分かった朝から、スティヴはろくに睡眠もとらず、ただただゲットを探していた。　リンダも艦の乗組員も動員して、街の聞き込みをしたが、それらしい少年を見たという情報はなかった。

そんな有り様に、リメンバーズの艦内は日増しに騒がしくなり、フレーネは今日も泣いていた。

フレーネ「…わ、私が…。　私が嫌いなんて言ったから…」

フレーネは、ゲットがいなくなったのは自分のせいだと思い込んでいた。　いなくなる直前、怒るゲットをたしなめきれず、突き放してしまったのだという。

リンダ「フレーネ…。　あんたのせいじゃないよ。　元はと言えば、ゲットにウソをついたのは、あたしとスティヴなんだ」

何の慰めにもならないと知りつつも、リンダはフレーネの肩に手をやった。

その横で、スティヴのロングダガーが発進していく。　街に手がかりがなかったので、ＭＳで人里離れた場所も探すようにしたようだった。

フレーネ「…うぅ…。　ゲット…」

泣き止む様子のないフレーネに、リンダも困り果てた表情だった。

記憶が戻りきらないフレーネにとって、ゲットの存在がどれだけ大きいものか、１隻の艦を纏めるリンダにはよく分かっていた。　支えを失った人間は脆い。　ましてやフレーネは、まだ１０代の少女なのだ。

リンダ「…ゲット…。　一体どこに行っちまったんだい？　あたしらの事が気に食わないなら、それでも構わない。

でも、フレーネちゃんを悲しませないでおくれよ…」

リンダの悲しげな呟きが、今日もインドラの空をさ迷った…。

【2】

一方で普段と変わりなく、淡々と作業をしているのは、傭兵団の3人だ。　彼らは、前のエージェントとの戦いで傷ついたため、パーツを買い集め、日々修理に没頭していた。

ミア「隊長のイフリートと私のガンダムＭＫ－2は、パーツに融通が効くから助かるわ」

相好を崩したミアが言うように、それぞれザク2やグフ、ジム系統のパーツが流用できる2機は、壊れた部分を丸ごと取り換える事で、あっさり修理を終えていた。

だがそうもいかないのが、ジルドの百式だ。

ジルド「…何だよ、その目は。　百式だって量産されてるだろうがよ」

ネロ「量産型百式なんて、試作機と大差ない生産数ですし、何よりマイナー過ぎますよ。　量産されてれば、みんな整備が楽って訳じゃないんですよ？」

要は機体構造なのだ。　ガンダムＭＫ－2もイフリートも、多数生産されてはいないが、どちらかと言えば設計が手堅くて、変に凝っ

た造りをしてはいない。

ジルド「こ、高性能なＭＳは、メンテに時間がかかるもんなんだよ！」

ジルドが言っている事も間違ってはいないが、未だ修理が終わっていないのが百式だけとあっては、立場は微妙だった。　百式さえ修理できれば、傭兵団の活動が再開できるのだ。

インドラは帝国に近いだけあって、ほとんど毎日、どこかで戦火を交えていた。

ジルド「…でもよ…。　修理が終わったとしても、あいつら放ってどこか行けるか？　そりゃやっぱ、マズいだろ…」

ジルドが見た先にあるのは、リメンバーズ。

彼らがゲットを探しているのは、教えられるまでもなく分かった。
　スティヴなどは血相を変えていて、明日にでもコロニーが降ってくるかのような顔をしていたのだ。

ミア「隊長が『手伝うな』って言うんだから、仕方ないんじゃない？　街で話くらいは聞いてみたけど、なしのつぶてだったし」

ネロ「私も隊長に賛成ですね。　嫌がるのを無理矢理引き戻して、それが本人のためになるとは思えません。　戦闘中に行方不明になったのとは、違うんですから」

ジルド「だけどな…」

割り切れないジルドは、心配そうな表情のままだった。　ミアとネロは、そんなジルドを困ったように見ていたが、結局は百式の修理を急いだだけだった…。

【3】

メリル「パパ。　引いて」

ゴトー「…メリル。　いい加減にしろ」

メリル「やだ」

ゴトーはカードを引くが、その顔は完全に参っていた。

それもそのはずで、ゲットを探しに行こうとしないゴトーに、メリルはタロット片手にずっと付き纏った。　引かせたカードは、もう7枚目だ。

ゴトーが１００％当たると自慢するのタロットだったが、7回も同じカードが出続けるはずもない。　順に、『愚者（逆）』『女教皇（逆）』『愚者（正）』と続き、『教皇（正）』と『戦車（正）』が2枚。

意味は、最初の3枚が『勝手な行動』に準じた意味で、後の3枚が『教えと前進』と解釈できる。

ゴトー「気が済んだか？」

メリル「全然。　そのカードは、パパにあげる」

明らかに機嫌が悪かった。

どうやら、遠回しゴトーを、心の狭い怠け者だと罵るつもりのようだ。　今引いた7枚目、教皇のカードの逆位置の意味は　『狭量・怠惰』　である。

ゴトー「やれやれ…」

疲れた様子で立ち上がるゴトー。

メリル「…どこ行くの？」

くっついて来るメリル。　どうやら、まだ諦めていないらしい。

ゴトー「便所だ。　何だ？　してるところを見たいのか？」

ゴトーが、からかうように言った。　そう言って話題を逸らしたつもりだったのだろう。

だが…。

メリル「…興味ない。　パパのなんて、お風呂の時に何回も見てるじゃない。

それに…。　ジルドより小さいし？」

ゴトー「ぶっ！！　な、なな、何て事を言うんだ！　メリルにそんな事はまだ早い！

だいたい俺は小さく…。　いやその前にメリルは、ジルドと一緒に風呂に入っているのか？！」

メリル「冗談なのに。　適当に言っただけ。　からかわれるのが嫌

だったら、ゲット君を探してあげてよ」

ゴトー「誰が何と言おうが、探さないものは探さないからな！」

ゴトーは顔を真っ赤にしたまま、その場を去ってしまう。

ゴトー「…口だけは達者だなんて、変な所がマリアに似てきたな…」

憮然と呟くゴトーの横顔は、必ずしも怒ってはいなかったが…。

【4】

原野に1機のロングダガー。　その濃いグレーの塗装は　『鋼鉄の骨・アイアンボーン』　つまり、スティヴの専用機を示すカラーリングだ。

スティヴ「…いねぇなぁ…」

スティヴは、感熱センサーの感度を最大に上げながら、辺りをしらみ潰しに捜していた。

本来なら、対ＭＳ用の小型ミサイルを持つ歩兵を警戒するためのセンサーで、犬１匹逃さない精度を持つ。　これで捉えられないなら、その場に生きた人間はまずいない。

それにもずっと反応がなく、さすがのスティヴも途方に暮れていたその時、遠くから迫る機影が１つ。

スティヴ「反応は味方だが、一応な」

ライフルを構え、身を屈める。　味方の信号を信じない訳ではないが、故障と欺瞞を警戒して最低限の備えは残すのが、一流の傭兵のする事だ。

スティヴ「メガライダー？　つと、ゴトーのトコの嬢ちゃんか？」

目視した機影を見て、意外そうな顔をしたスティヴ。　メリルと言えば、どうしてもゴトーの側にへばり付いている印象が強い。

一方、メガライダーの側でもスティヴの反応を捉えていたらしい。
　見事な操縦で、ロングダガーの真横３メートルに１発で横付けにする。

メリル「…いた」

モニター越しに見ると、メリルだけではなく、フレーネまで一緒に来ていた。　そういえばメガライダーは支援メカだから、複座だったような気もする。

スティヴ「なんだお2人さん。　ピザの宅配なら、頼んでないぜ？」

焦る気持ちと、挫けそうになっていた気持ち。　それを両方とも押し隠して、スティヴは軽口を吐いた。

メリル「この子がいてもたってもいられないって言うから、連れて来たの」

フレーネ「えへへへ…」

フレーネが微かに頷く。

その笑顔は、無理して作られているのが、スティヴには分かった。
　メリルもおそらく察したに違いない。

スティヴ「人海戦術って言葉もあるしな。　嬢ちゃんたちはあっちを頼む。　お互い、目視できる範囲から外れないようにな？」

メリル「分かってる」

後方とはいえ、帝国軍が空襲に来てもおかしくはない地域だ。　そ

の辺りを、メリルもまた、理解しているようだった…。

【5】

それからしばらくして。　ザンジバルのハンガーでは、ある事が話題になっていた。

ネロ「あと何分ぐらいで来ると思います？」

ミア「あの隊長が、メリルに関する事だから…。　気づいてから、10分かからないと思うわ」

作業の手は休めていないが、2人は落ち着いた様子で言葉を交わした。　まあそれも当たり前で、メガライダーの出撃は、彼らが許可したも同じだったのだから。

ミア「フレーネって子も連れ出すって、あっちの艦に連絡はしてあるわ。　ネロも言う事はいったのよね？」

ネロ「もちろんです。　メリルも馬鹿じゃありませんから。　今頃は、アイアンボーンと合流しているでしょう」

そして、ただ出撃を許した訳ではなかった。　闇雲に探しても効率

が悪いし危険だと、スティヴのいる場所を教え、一緒に探すよう言い含めたのだ。

ジルド「…すまねぇな。　隊長が怒ると知ってるのに、巻き込んじ…」

ネロ「さっそく来たみたいですよ?」

どうやら出撃は、ジルドがメリルに味方したから決まったらしい。
けれどその詫びが入る前に、ハンガーに怒声が響き渡った。

ゴトー「お前らっ！　メリルを1人で行かせたのかっ!!」

ネロ「行かせましたが、何か?」

静かにだが、ネロは不遜とも聞こえる言葉を発した。

ゴトー「何だと?」

ネロ「メリルの腕は、隊長もご存知でしょう?　ましてや戦いに行く訳じゃないんですよ?」

ゴトー「そういう問題じゃない！」

ネロ「じゃあ、どういう問題なんですか？」

ネロは、微かにミアを横目で見たように見えた。

ミア「隊長。　メリルは心配なんですよ。

隊長がゲット君を探さないのは、理屈が通っています。　自分の意思で去った人間を連れ戻しても、そんな人間は真っ先に死にます」

ミアが語ったのは、傭兵たちの心得のようなもの。　戦場での迷いは、即、死に繋がるのだ。

ミア「だけど、そんな厳しさをメリルに求めるのは、まだ早すぎます。　友達がいなくなったら心配だし、探したくなるでしょう？」

ゴトー「…ちっ…」

ゴトーが舌打ちする。　理屈が合っているのは、分かってしまった顔だ。

ジルド「…俺はよ、隊長。　気づかないフリしてやるのも、親の役

目だと思うんだ。　いくら正しくても、親が見張ってるばっかじゃ、子供には窮屈なんだよ」

ゴトー「メリルは、俺を窮屈に思うような不良娘じゃない！」

ゴトーの口と身体は、違った事をしていた。　何故ならゴトーは、大声で文句を言いながらも、３人に背を向け、ハンガーを出て行ってしまったのだから…。

第１１３章　弔いの意味（前書き）

（４回目）

キーンコーンカーンコーン…

ミク「優秀者講座始めま～す。　範囲は、補修に出てきた海賊ね。
これ、『もう少し先で、お姉の本編に関わってくる』から重要だよ？」

ジェイソン「…重要？　たかだか海賊風情に勝った程度で、いい気になっているだけでしょうに」

イエスマン「エージェントＪ。　そんなんだから途中参加の僕に、参謀の座を横取りされるんで～す」

ジェイソン「何ですって？」

ミク「そこ、相変わらず仲悪いね～。　でも今のは、イエスマン君が正解かな？」

イエスマン「はぁ～い。　海賊を倒して処刑するだけなら、エージ

ェントJみたいなお馬鹿さんにもできますよぉ～。　でもこの格下皇女さんったら、

『元は敵だった人達と、何やら密談をしてる』

ようで～す」

ミク「そういう手段を選ばないところが、実はお姉のやり方でさ。だから帝国狩りのヴァイちゃん（＝ヴァイス）が、いつの間にか配下だし」

ジェイソン「目的のためなら手段を選ばないって、悪役じゃないですか！」

ミク「別にうちの陣営、正義の味方じゃないし。（断言）　バラしちゃうけど、お姉の尊敬する原作ガンダムの登場人物って

★シーマ・ガラハウ中佐★

だもん」

サコン「それで海賊なんだな。　まあ、原作シーマ艦隊は、国に見捨てられた一部のジオン軍が、海賊をやらないと生きていけなかった話だが…」

ミケル「こちらは国が生きていくために、海賊を軍隊として使おう

って話のようだ。　どちらにしても、反帝国レジスタンスなんかより、よっぽど狡猾でえげつない人だな」

マヒロ「わ～い、誉められた～」

ミク「補習者は出てくんな！

…とにかく、勝ったら全て終わりじゃないし、勧善懲悪に真っ向からケンカ売るから、この辺りは見物（みもの）だよ」

イエスマン「世に言う『清濁合わせ呑む』『毒を食らわば皿まで』ってヤツですね～。　これは悪役同士、面白い戦いができそうです～」

（続く）

第113章　弔いの意味

ゲット「…し、死んだってどういう…？」

告げられた、意外な事実。

アイン「死んだって意味分からない？」

ノン「もしかして、頭悪いのかな？」

ラピスラズリ「バーカ」

ゲット「だぁ～！　だから何でそうなるんだよっ！！　頭が悪いのはお前らだっ！

ふつう、仲間が死んだら悲しむだろ？　何でそんなに明るいんだよっ？！」

だが、ラピスラズリたちの意外すぎる反応に、深刻なムードはあっさり吹き飛び、ゲットは激しくツッコミを入れる。

セブンス「…って言われてもなぁ…」

スリス「分かんないものは、考えても分かんないでしょ」

エイス「というワケだから…。　ノン、説明よろしく～」

ノン「しょうがないなぁ…」

ため息をつき、編まれた髪を3、４回手で触る。

ちなみに、人が髪を気にする時は、防衛本能に関連しているらしい。
　ラピスラズリにそれが当てはまるかは分かり辛いが、何かがノンを警戒させた可能性もあるという事だ。

ノン「前に言わなかった？　あたしたちがクローンだって」

指が彼女自身の太股を、何回も行き来した。　やはりいつもの落ち着きはない。

ゲット「聞いたような、聞かないような…。　お前らが同じ顔な理由だっけ？」

ノン「そ。　全員が同じＤＮＡから『創られてる』の。　あたしが最初、試作品だから０番目の『ノン』」

アイン「僕は１番目だから『ア』イン」

トゥーエ「2はトゥーって読み方するよね？　それに『エ』をくっつけて、トゥーエ」

スリス「3、スリーだからスリス。　同じように、9のナイルまで続くよ」

ナイル「って、おい！　俺の紹介はそれだけかよ？」

シクス「あたし、紹介してもらえなかった…」

相変わらずなノリながら、ラピスラズリの名前の由縁が語られる。

ノン「だから同じ顔だし、体つきも似てる。　性別が男女5人づつなのも、たぶんわざとじゃないかな？　そして何より、あたしたちは一部の感情が欠落するように

『仕向けられた』

んだよ」

ゲット「欠落してっから、悲しくね～ってのかよ！」

ラピスラズリ「うん」

即答。　躊躇いがなさすぎて、ゲットはまた絶句する。

ゲット「…何だよ、それ…」

ラピスラズリたちは気にしていないようだったが、ゲットだけはみるみる顔が青ざめてくる。　かなりのショックを受けたらしかった。

エイス「そういうんだから、仕方ないんだって」

慰める側と、慰められる側があべこべだ。　エイスに頭を撫でられながら、ゲットは思わず涙ぐむ。

ゲット「お前ら、そんなんでいいのかよ？　仲間が死んでも泣けないで、それでも戦い続ける意味って、何なんだよっ！」

ゲットの悲痛な叫び。

ノン「違うね。　戦う事そのものが、あたしたちの生きる意味。戦うために創られたから戦うの。

死ぬのは悲しいって言うなら、戦わないのも同じ。　だってそれは、戦闘人形のラピスラズリにとって、死んだのと大して変わらない事だから」

意見が平行線という事は、議論をすればありがちだ。
けれどゲットと彼らでは、平行線ですらなかった。　まるで次元が違う。

エイス「ど～すんの～？　ノンがお子様泣かせた～」

トゥーエ「でもって、彼氏が泣かされて、エイスが拗ねた～」

エイス「誰が彼氏だ！」

エイスは、撫でている手に力を込めた。　これではゲットは、本気でいじめられているように見える。

ただ、ゲット本人はそれどころではないようだが。

ゲット「…俺…。　お前らが分かんね～よ。　戦うって事は、人が死ぬ事なんだぞ？　せっかく生まれてきた命を、どっちかが無くすって事なんだぞ？

それをなんで、笑ってできるんだ？

殺しても笑って、殺されても笑う。　だったら死んだ奴って、一体何なんだ？」

ノン「強いて言うなら、死ぬ事はそれ以上殺せなくなる事だね。そして殺した数だけが、あたしたちの生きた証明なの」

ゲット「…そ、そんなのって…。　人の生き死にって、そんなもんなのかよっ！！」

ゲットはエイスの腕を振り払い、泣きながらその場を飛び出した…。

【2】

何かにぶつかった。

身体の小さいゲットは、それだけで吹き飛び、尻餅をつく。

インドラ兵「誰だ、貴様っ！　何故子供が、軍の機密区画にいるっ！」

ぶつかられたとおぼしき兵が、乱暴にゲットを引き起こした。

インドラ兵「答えろ！」

胸ぐらを掴む。

ダイン「…やめないか。　泣いているぞ」

偶然側を通ったのか、ダインがゲットを一瞥する。

インドラ兵「はっ、ダイン様。　いや、しかし…」

ダイン「ならば今より、この1件は私が預ろう。　ご苦労だった」

インドラ兵「恐れ入ります！」

兵が駆け去って行く。　相変わらず、楽園の剣の権威は絶大だった。

ダイン「誰かと思えば、先刻の少年ではないか。　ラピスラズリとは、もう一緒ではないのか？」

ゲット「あ…」

ゲットは、ラピスラズリのペースに巻き込まれていたから気がついていなかったが、ダインに黒いＭＳの話をしてから、すでに数時間が過ぎていた。　もう陽は暮れつつあり、急速に辺りが暗くなる時間帯だ。

ダイン「子供ならば、帰宅を急がねばならぬ頃合いか」

当然、ラピスラズリとゲットの間で何があったか知らないダインは、そんな事を気にしていた。

ダイン「送らせよう。　家はどこだ？」

気を遣ったのか、ダインはそんな言葉をかける。

ゲット「家…か…。　もう家は…　帰る街も…　おばちゃんも…。　みんな」

ゲットは、泣き顔をさらにくちゃくちゃにした。　ラピスラズリの明るさに巻き込まれていて忘れていた、喪失感が溢れ出す。

ダイン「家無し、身寄り無しの少年がＭＳにな…。　なるほど、ラピスラズリが気に入る訳だ」

ダインはゲットの涙と僅かな言葉から、おおよその事情を察したようだ。　楽園の剣を務めるだけあって、穏和な中にも刃物のような鋭さがある。

ダイン「だがその割に、眼が怨恨に染まっていない。　やはりラピ

スラズリに近いな」

ダインがゲットに手を貸し、立ち上がらせる。

自分が何故ラピスラズリたちと比べられるのか分からなかったが、ダインの言葉は、不思議とゲットの耳に残った…。

【3】

翌朝。　ゲットはダインに連れられ、軍の関連施設を巡っていた。

ただ、巡っているとは言っても、ダインはゲットに何も告げなかった。　だからゲットも、ただついて行くだけだ。

???「やあ、ダイン。　朝の散歩かい？」

その部屋だけは、違和感を覚えた。

どうしてなのか考えてみると、話している相手のせいだと思えた。

他の人間は『ダイン様』の前では身体を硬くしていたが、この人物だけはそうではない。

ダイン「まあ、そんなところだ。　それよりもナズーリ、集計は出

たか？」

ダインは何かを頼んでいたのか、ナズーリと呼ばれた人物に訊ねる。
　見た目は判りにくいが、ナズーリという名前からすれば、女性なのか？

ナズーリ「とっくに。　死亡１万５０３、重傷３１２１。　軽傷は８７８４だよ」

ダイン「死者の数に比して、負傷が少ないな」

ナズーリ「艦ごと海に沈んだケースが多いからね。　旧式艦は人手が頼りなのさ」

２人の会話は、ゲットの想像の域を越えていた。　１万人が死んだという事態を、顔色１つ変えずに話しているのだ。

ゲット「…人が…。　そんなに死んでるのかよ…」

やはりゲットは、死者１万人以上という数字に、強いショックを受けたようだ。

ナズーリ「ダインも趣味が悪いな。　子供の前でこんな話をする。
　酷い奴だ」

そんなゲットを見てか、ナズーリはダインを皮肉るような事を言った。

ナズーリ「だけど、コロニーよりはマシじゃないか？　６年前に帝国は、１０億は殺した。　先月は数十万かな？　サフラン１０で」

次々に出てくる数字に、ゲットは声すら失う。

ダイン「趣味の悪さは、ナズーリ程ではなかったようだな。　私は言葉を失うまで、少年を怖がらせてはいない」

ナズーリ「違うね、ダイン。

まともな人間は、目の前の１人が死ぬと泣き、１０人が死ぬと怯える。　だけど１万人が死ぬと、自分はああならなくてよかったと、安心するんだよ…」

【５】

その後ダインは、ゲットをナズーリに預けると、多数の兵を前に、

演説のような事をして見せた。

その言葉に兵は皆泣き、怒りにうち震えていた。　いや、演説をしたダイン自身も泣いていた。

ゲット「何やってるんだ？」

演説に帝国語でない言葉が混じる事もあって、ゲットはこの集まりの意味が分からないようだった。

ナズーリ「インドラ軍流の葬式さ。　兵達は、ああやってダインが泣くのを見て、帝国の人間を１人でも多く殺そうと誓うのさ。　自分が死んだ時も、ダインにああして泣いて欲しいからね？」

ゲット「泣いても笑っても、結局殺すのかよ…」

ラピスラズリの笑顔と、インドラ兵やダインの泣き顔が、交互に胸をよぎった。

サフラン１０で死んだ人々は、どうやって見送って欲しいのか？
いや、自分が死んだとしたらどうか？

ナズーリ「葬式ってのはね、生きてる人間のためにやるのさ」

ナズーリの言葉に、耳を疑った。

普通に考えれば、葬式は死んだ人間がいるからやる。　それを、今現在生きてる人間のためだとは。

ゲット「…んなワケ…」

ナズーリ「あるよ。　だって人は死んだら、死体になってしまう。　自分の葬式なんて、どうやって見るのかな？」

ゲット「そ、それは…」

あまりの突拍子もない答えだった。

けれど、それは正しい。　死んだ人間が葬式で動いたら、ただのホラー映画だ。

ナズーリ「人は葬式をする。　『自分がしてもらいたいから』　ね。　先行投資みたいな物かな？」

葬式を先行投資と言うナズーリの言葉は、感情的には理解し難いものだった。　ただ、理屈だけ突き詰めれば、間違ってもいない。

ナズーリ「あ～あ。　死体と強化人間ばっか見てると、考え方がクールになりすぎちゃうよ。　こう見えても僕は、17歳の可憐な乙女なのにさ」

不意にくすっと笑ったナズーリに、何故かゲットは安心感を覚えた。
そしてゲットの心には、ある感情と決意が芽生え始めていた…。

【6】

ゲット「どうだっ！」

それから数日、ゲットは街外れの草原に通い続けた。

つまり、リメンバーズには戻らなかった訳だが、そうまでして作り上げた『モノ』が今、目の前にある。

ラピスラズリ「…何コレ？」

ただし招いた当人達に、思いっきりキョトンとされてしまったが。

ゲット「だぁ～！！　見りゃ分かるだろ！　墓だよ、墓！！」

あまり深くないが、穴が掘られたそこには、花とか食べ物とかが並

べられていて、組まれた木は十字架にも見える。　確かに墓地の用件は満たしていた。

ゲット「仲間が死んだんだろ？　墓作って、葬式ぐらいしてやれよ！」

スリス「してやれよって言われても、やり方知らないし」

ナイル「葬式なんてシケたのは、俺らのキャラじゃねぇよ」

アイン「だいたい埋めようにも、２人共死体なんか残ってないよ？」

フィフスの時は、援軍（＝サコンの偽兵だが）が迫る中であり、遺体を回収するだけの時間がなかった。　フォルナの時は、乗っていたＲＦゲルググが完全に破壊されてしまい、跡形すらも残っていなかったのだ。

ゲット「お前らが分かんね～つーから、俺が用意してやってんだろ！　それにな、シケてようが、埋めるもんがなかろうが、そんなん関係ない！！

葬式ってのは、生きてる人間のためにやるんだ。　死んだ人間を弔いながら

『もうこれ以上、仲間を失わないようにしよう』

とか

『死んだ仲間の分も頑張って生きよう』

とか、誓い合うんだ！」

ゲットは声高に主張した。

実際それらの理屈は、ほとんどがナズーリの受け売りだったのだが、ここでは無用な詮索はしない。

ノン「…何か、らしくない事を言い始めたよ？」

トゥーエ「豆腐の角で、頭でも打ったかな？」

思いっきり不思議がられている。

ナズーリ本人は言わなかったが、彼女は自身も強化人間の一員であり、医療知識はもちろん、知能指数が同年代の少女とは比較にならないレベルにあった。　そんな人間の言ってる事を丸ごと横取りしたのだから、不自然と思われても仕方ないだろう。

セブンス「でもな。　そいつの言いたい事、少し分かるかも」

セブンスが近くにあった花を折り、ゲットの作った墓に放り投げる。
乱暴に投げたものだから、花びらは散ってしまい、あまり供えたようには見えなかった。
けれど、あのラピスラズリが花を手向けたのだ。

シクス「フォルナちゃんが死んじゃったの、半分は私のせいだし。何かあげれる物ないかな？」

ナイル「ま、たまにはシケてるのも悪くないか」

スリス「でも、暗くする必要はないんだよね？　だって生きてる僕たちのためにやるんだし」

エイス「じゃ、パ～っといっとく？」

ゲット「やっぱそうなるのかよ…」

苦笑いするゲットを尻目に、騒ぎ出す7人。　おおよそ葬式らしさはないが、ラピスラズリらしくはあった。

ゲット「お前ららしいよ。　そんなに明るく見送られたら、思い残した事とか忘ちまいそう…

う…

う・え・お…

あ・い…！？」

アイン「埋めてあげるのって、一番好きな物がいいんだよねっ？」

ゲットのまとめムードが、一気に吹き飛ぶ。　いつの間にかＭＳに乗っていたアインが運んで来たのは、ゲットにとってのトラウマ、あの『ボール』だった。

スリス「そか。　フィフスって言えば、ドッジ『ボール』だもんね」

エイス「アイン、あったまイイ～」

ゲット「い、いや、どう考えても頭悪いだろ！　つか、まさかそれを投げ…

やっぱ…

うぎゃ～～～～～！！！！！」

辺りは土煙に覆われ、ゲットの力作もあえなく失われてしまう。
けれど…。

ゲット「マジでお前ららしいわ。　これなら、化けて出る気もなくなる。　絶対、成仏できること受け合いだ…

バタリ」

ノン「あ、死んだ」

トゥーエ「お子様も一緒に埋めなきゃ～」

こうして執り行われた、世にも奇妙なお葬式は、ラピスラズリたちの脳裏に焼き付き、ついでにゲットを物理的に激しく揺さぶって、
その幕を閉じたのだった…。

【7】

エイス「本気で帰っちゃうんだ？」

トゥーエ「あたしの遊び道具ぅ～」

葬式を終えた後、ゲットはラピスラズリたちに別れを告げていた。
彼らは散々引き止めたが、ゲットは遂に決意を翻さなかった。

ゲット「メチャクチャだったけど…。　メチャクチャ楽しかった、かもな？」

ゲットにしてみれば、ドッジ『ボール』を始めとして、ろくな事はなかったと言っていいだろう。　しかしゲットは、彼らの心の奥底にある何かに触れた気がしていた。

それが何なのか、うまく言葉にはできなかったが、不意に自分が拘っていた物が小さく思えた。

ゲット「お前らは、十分すぎるほど仲がイイじゃね～か。　俺の出る幕なんてね～よ」

ちょっとだけ、ゲットが寂しそうな顔をする。

アイン「もうすぐ着くよ。　誰か信号弾上げといて？」

空に１発、青い光が煌めいた。　その下に照らし出された、２隻のザンジバル級。

エイス「宅急便で～す。　料金は着払いでお願いするよん」

エイスのＲＦドムが、リメンバーズの正面１０メートルにまで滑り込む。

フレーネ「…ゲット…」

ハロ「ゲット、カエッタ！　ゲット、カエッタ！」

たった１０日足らずなのに、すごく懐かしい空気だった。　フレーネが感極まって泣き始める。

シクス「あ～あ。　エイスちゃんもトゥーエちゃんも、見事に振られたね」

エイス「シクスぅ～。　あたしは、お子様趣味はないって」

トゥーエ「あたしの相手をするには、もっと太く大きくならなきゃ」

よく意味が分からない発言も混じったが、ラピスラズリ女性陣は、静かな笑顔でゲットを見送るようだ。

ナイル「また遊びに来いよ～」

セブンス「右に同じっ！」

にこやかなのは、メンズの４人か。　ゲットと拳を突き合わせ、再会を誓い合う。

ゴトー「自分の本当の仲間が誰か、分かったようだな？」

力強く頷く。　そして…。

ゲット「みんな、今帰ったぜ！！」

ゲットの声が、リメンバーズ中に響き渡った…。

第１１４章　焼かれる宇宙（そら）（前書き）

（５回目）

キーンコーンカーンコーン…

ミク「はい。　物語史５回目は、ユービットの戦いを復習しま～す。
本編第３９章の戦いだね～」

アッシュ「ああ、ヤタガラスって名前のカラスが、朝出した生ゴミ漁る話だったか？」

マヒロ「…馬鹿すぎるわ…」

ミク「たぶん、自分の出てこない章は、飛ばし読みしてるんじゃない？

それはともかく、クアルーンがたった１０ページぐらいの戦いに負けただけで、それから物語に出てこなくなっちゃいます。　なんでかな？」

ジルド「今回は自信あるぜ！　親玉倒したからだろ！」

ミク「ジルド君、大正解っ！」

ジルド「やったぜ！」

ミク「実はクアルーンって、第１１章から戦ってるんだよね。　グラーフェンでエルフレア君の両親を捕らえて磔（はりつけ）にしたり、最初は優勢だったんだ」

アッシュ「そこで、俺達エージェントがだな…」

ミク「アッシュ君はまだ、名前すら出てきてない時期だけどね？」

アッシュ「う〜」

ミク「とにかく連戦連勝のクアルーンが、何とヨーロッパまで攻めて来て、帝国は大ピンチ」

マヒロ「仕方ないから、ザキラを宰相にして、反撃する事にしたと。　ヤタガラス隊が勝利のきっかけを作ったけれど、その脇で千機を越えるＭＳがドンパチやってた、かなり大きな戦いだったのよね」

ミク「それがサコン君の計略のせいで、司令部がパニックになるし、尊敬してたハヴィニーちゃんが死んじゃって、さあ大変！」

ジルド「隊長殺られたら、俺もショックで戦うどころじゃなくなる

ぜ…」

サヤリ「私がやられたら…」

マヒロ「マリンピアは栄えるわね」

サヤリ「なんだとぉ～」

ミク「また始まった…。　あ、本編じゃまだ会ってないけど、お姉とサヤリ君、仲悪いって設定だから。

とにかく、親分が死んじゃったせいで、軍はバラバラになって…。　残党はいるんだけど、かつての栄光はどこへやら。　メリャーナ君にいいようにされちゃうだけぇ～。

その辺りの説明は、次の優秀者講座でやるよ♪」

（続く）

第１１４章　焼かれる宇宙（そら）

ユーリ「この辺りでいいかしら？」

ＢＳ（ブラックサイサリス）を減速させると、左手に持った盾の裏から、バズーカのバレルを取り出す。

ＢＳは、原型機ＧＰ－２サイサリスの構造を受け継ぎ、核及びビームバズーカ発射する時を除いて、バズーカの砲身を分離、収納する構造になっていた。　そうする事で、ＭＳとしての機動力と、戦略兵器としての攻撃力を両立させたのだ。

ユーリ「要塞を叩き割るとなると、ただ射てばいいって訳にもいかないのよね…。　面倒臭いわ」

強化型アトミックバズーカの威力は絶大で、宇宙要塞サーライトといえど、半端な被害では済まないだろう。　ただユーリが言うように、二度と使えないように叩き割るつもりなら、少々工夫がいる。

幸い、他のエージェントが敵を引き付けているため、周囲に機影はなかった。　その隙にユーリは、ディスプレイにハイドとイドゥンが探ったサーライトの構造図を表示させる。　すると、破壊に適する射点が３つ、緑の光で示された。

ユーリ「ここから近いじゃない。　３０秒もかからないわ」

ユーリは、バレルが正常に接続されたのを確認すると、核弾頭の給弾プログラムに移行する。　その間にＢＳは、射点の座標に機体を重ねた。

ユーリ「バ～イ…。

…ちっ！　何だこいつはっ！？」

ＢＳが急に機体を翻す。

モニターに赤ランプが灯り、バズーカのバレルに被弾した事を知らせてきた。

レイ「見つけましたよ、ＧＰ－２サイサリス！　やはり、核弾頭搭載型のようですね！」

ユーリ「ザク？！　微妙に違うけど…。　どっちにしてもジャマよ！！」

幸い、被弾したバレルは折れてまではいなかった。　ビームが掠めただけだから、何とか発射はできるかも知れない。　ユーリはバレルを盾に格納し、対ＭＳ戦闘の構えに移る。

レイ「ＧＰ－２の弱点は、中距離兵装にあったはず。　高出力サーベルとバルカン、アトミックバズーカ。　しかし、中距離用のビームライフル装備がありません！」

ユーリ「やりにくい相手ねっ！」

サーベルで斬りつけるＢＳから離れ、ザク３は再度ファンネルを放つ。　今度は攻撃準備中でなかった事もあって、ビームが機体を穿つ事はなかったが、距離を取られてしまったので、反撃の手段がない。

ユーリ「不愉快な感じ…。　ゲットとはまた違う。　人の嫌う所をちくちくとっ！」

バルカンを射つが、距離が遠いのか当たらない。

目の前のザク３は、俊敏な機動ではあるが、そこまで圧倒的に押されている訳でもない。　落とされる気はしないが、代わりにこちらの攻撃が有効打にならない。

ユーリ「これじゃ、イナクトの方がマシじゃない！！」

レイ「伊達に１０年、技術士官をやってはいませんよっ！」

ユーリはかつての愛機、イナクトの名を叫んだ。　エージェント向けの強化機であるＢＳとでは、性能に差がある機体だが、近、中距

離における汎用性と小回りだけならＢＳを凌駕する。
そうしている間にも、ザク３のビームライフルが、ＢＳの右肩を掠めた。

レイ「行きなさいっ、ファンネル！！」

続くファンネルの連撃に、遂にユーリは直撃を浴びてしまう。　ファンネルによるオールレンジ攻撃を避けるためには、細かく、そして立体的な回避運動が有効だったが、それは大柄な機体をパワーで振り回すタイプのＢＳが、最も苦手とする機動だった。

ユーリ「豚っ！　どこにいるのよ！　支援はどうしたのっ！！」

たまらずユーリは、援護役のオタＱに助けを求める。

オタＱ「知らないオタよ～。　お前なんか落ちればいいオタ～

あ゛？！」

レイ「もう１機いましたかっ！　ですが、重装の機体ならっ！！」

ユーリを囲んでいたファンネルが包囲を解き、無防備に近づいて来た、もう１機の黒いＭＳを指向する。　火花と爆炎が散り、剥がれ

た装甲板がくるくると宙を漂った。

ユーリ「…最っ低…。　かえって足手まといなワケ?!」

援護されるはずのユーリが、逆にザク3に斬りつけていた。　ただ、BL(ブラックレオパルド)が囮になったのか、ユーリのサーベルが初めて、レイのザクに当たった。

レイ「バックパックの推力、15%ダウンですか…。　だけど、まだっ!!」

互いに傷は深くない。　当然、戦いが終息する気配はなかった…。

【2】

帝国軍下士官「暗礁宙域、抜けますっ!　ミノフスキー粒子濃度も減少傾向。　通信回復も時間の問題かと思われます」

本当にようやくだった。　あたしはこれで、2日にもなった消息不明から、ようやく脱出できた事になる。

マヒロ「ブラック少佐？　この借りは、いつか１０倍にして返してあげるわ」

ブラック「アーガマ級４隻と、リックディアス４８機を１０倍ですか？　それは楽しみですなあ？」

奥歯をギリギリと噛み締めた。

それと同時に、少佐に何を言っても無駄なのを悟った。　仮にも主君と言った人間を、堂々と罠にかける人物である。　本気であたしを、手駒か何かにしか思っていないのだろう。

マヒロ「ミク。　すぐに４隻とも、戦闘に使えるように調整できない？　何か、嫌な予感がするのよ」

ミク「…無茶言うなぁ」

アーガマ級とＭＳは得られたけれども、それだけでは何にもならない。

いくらオートメーション化が進んではいても、軍艦やＭＳをまったくの無人で動かせはしない。　普通なら訓練に何ヵ月も費やして、ようやく軍艦は戦えるのだ。

マヒロ「それを承知で、神様仏様ミクミク様っ！」

手を合わせてみた。

ミクには、さんざんからかわれているあたしだけど、これでも姉なのよね。　妹の思考パターンくらいは読める。　こんな時に拝み倒されてくれるのも、ミクの一面なのだ。

ミク「…お姉の予感は、悪い時には当たるからね。

仕方ない。　再開発中の商業区画に、高級アイスクリームカフェ建設で手を打とう」

マヒロ「乗った！」

…実はそうくるだろうと思って、もう誘致計画に組み込んであるんだけれども。

マヒロ「じゃ、ヴァイス少尉に連絡しなきゃね。　活きのイイのが、たくさん入ってるといいけど」

ミクの技術力と、それに見合うメンツ。　あしの勘が確かなら、撒いた種は刈り時だ。

帝国軍下士官「…殿下。　お楽しみのところですが、マーガレットから緊急信ですよ。　２５回目の発信だそうです」

マヒロ「あはは…。　ケイさんとミサト、怒ってるかなぁ？　最期ぐらい穏やかにいきたかったけど、それは無理みたいね」

あたしは自分で頬を叩いて、気合いを入れ直した…。

【３】

飛び交うファンネル。　それをサーベルで１基、潰した。　続いてバルカンでも１基。

レイ「オールレンジのファンネルを逆に落とすなんて、並のパイロットじゃありませんね？　ですがっ！！」

ザク３の射撃がＢＳを襲う。　３発まで余裕を持ってかわせたが、４発目はギリギリで、５発目は盾でようやく防いだ。　劣勢ではないが、細かく削られる感じがユーリの勘に触った。

ユーリ「何よ、こいつ…」

レイ「無理して避けて頂かなくても結構ですよ？　こちらの狙いは、機体ではありませんし」

ユーリ「まさか、知っているの？！」

ＢＳが核を射つには、バズーカの砲身と盾が絶対に必要だった。特に盾なしで核を射てば、ＢＳ自身が射った核の熱量に耐えられず、消滅してしまう。

ユーリ「だからかっ！」

盾を狙ってきたファンネルに、逆に盾をぶつけて破壊した。　核のエネルギーに耐えるぐらいだから、かなり堅牢だが、冷却装置を付け液体窒素を封入した、局部的にナイーブな盾でもある。

ユーリ「…ここは、一旦…」

退く。

その選択肢が頭をよぎった。　護衛のＢＬが返り討ちにあった今、ユーリだけで核の発射まで持っていくのは、常識的に困難だった。

撤退とまで言わなくても、他のエージェントに護衛を頼み、再度侵攻すれば。

ユーリ「…駄目…。　それじゃ、あの子たちが無事でいられる保証がないわ…」

退却を選ばせなかったのは、ユーリの置かれた立場だった。　Pちゃんが脅迫したように、彼女が姉代わりとなってきた孤児たちは、今、ジェイソンの手に落ちていた。

彼らは何も知らされていない。　だから姉同然のユーリが、エージェントとなり活躍しているから、貧相な孤児院を出れたと喜んでいる。

けれど事実は逆。　人質に取られた彼らを救いたければ、ユーリは永遠に戦い続けるしかないのだ。

ユーリ「この身に代えても、あの子たちだけは守り抜く！　そのためなら、他の人間が何人死のうが、私の知ったことじゃないわ！！」

悲しい決意が、戦いを加速させる…。

【4】

レイ「…リバルは、どの辺りまで行きましたか…？　この核弾頭が戦術核のレベルを越えていたなら、影響する範囲は…」

ＢＳ（ブラックサイサリス）は、黒く塗られただけではもちろんない。　機動力、出力が強化された他、核自体の威力も高くなっていた。　技術士官だけあって、レイはそんな所にまで着目したのだ。

レイ「完全に破壊するのが理想ですが、まずは手堅くいきますか！」

ファンネルが横一直線に並び、ビームを連射した。　動きが乏しいから、全体としての命中率は低い。

ただし、核発射に関する全ての装備を乱射から守るのは至難の技だった。　特に、巨大な盾は。

ユーリ「しまった！！」

盾の下部分をビームが貫通し、冷却装備が機能を失う。　液体窒素そのものは漏れていないようだが、これでは効率的な冷却ができず…　つまり、核は射てない。

レイ「まだですっ！　まだ終わりませんよ！！」

続けざまに、今度は左腕そのものを狙撃されてしまった。　腕が垂れ下がり、盾を構えることすらできなくなる。

レイ「勝負、ありましたね」

ユーリ「認めないわっ！」

辛うじてなし得た反撃で、ザク３は視界の半分を失う。　ＢＳのバルカンが、ザク３のメインカメラを捉えたのだ。

さらに苛立ちそのままに、ユーリはレイの機体を蹴り飛ばし、さらなるダメージを与えた。

レイ「…無駄ですよ。　ＭＳ戦でいくら有利に戦っても、核が射てなくなれば、あなたのチェックメイトです。

さあ、大人しく機体を捨てなさい！　そうすれば命までは取りません！」

しかしユーリは、抵抗を止めなかった。　レイのザク３も相当傷ついてはいたが、これでは攻め手を緩められない。

最早、修理できないまでに破壊し、サイサリスというＭＳをこの世から消すしかないのか？

ユーリ「ここで退けば、あの子たちは…。　それだけは、させないっ！！！」

ユーリは、盾を動かしすらできないにも関わらず、アトミックバズーカをセットし始めた。

まさか、冷却機能を使わずに、核を射つというのか？！　コックピットのあらゆる場所、赤い警告表示が明滅した。

レイ「止めなさいっ！　死にたいのですかっ！！」

ユーリ「私だけ生きて伸びて、一体何になるのよっ！！！」

ビームライフルが、胸部装甲を弾き飛ばした。　重装甲なＢＳでなければ、致命傷になってもおかしくはない。

レイ「ファンネルっ！」

何とかバズーカを射たせまいと、残ったファンネルを全部、一纏めにしてぶつけた。　何条ものビームが機体を溶かし、突き動かす。

けれど、ユーリは操作を止めない。

ユーリ「あの子達のためならっ！　私は悪魔にだって魂を売るっ！

！」

？？？「…ヨク言ッタ」

ユーリの背中に、圧倒的な悪寒が走る。　足がすくむ。

ユーリ「こんな時に？！」

？？？「コンナ時ダカラコソダ…。　サア、早速始メヨウカ…」

寒気が増した。　本能的に恐怖を感じ、不覚にも下半身から熱い液体を放出した。

？？？「何故怯エル？　私はオ前の味方ダ…。　分カラナイノカ？」

ユーリに…。

ＢＳに電流が走った気がした。　剥がれてしまったはずの装甲が復元され、それぱかりか左腕までもが動かせるようになる。

レイ「自己修復装置ですって？！

…違います！　この危険な感じは何ですか？！」

ユーリ「…デビルっ！！　あんた一体何者なの？　そう言えば、あいつも傷が治ったって…」

インドラ戦でＢＶ（ブラックヴァーサゴ）が自己修復しながら戦い続け、結果チャーリーが発狂した事は、記憶に新しい。

？？？「…何者カ…。　何者ナノダロウナ？」

ユーリ「とぼけるつもり？　ザキラとあの変態科学者は、私に何をさせようとしてるの？　答えなさいよ！」

必死に声を振り絞った。　そうしても震えは止まらない。　目が潤んでくる。

？？？「ザキラ？　科学者？　誰ダ、ソレハ？　地球ノ敵カ？」

ユーリ「…えっ？　あんた、あいつらに造られたんじゃ…　ない

の？」

震えが止まっていた…。

【5】

ゲット「やっぱリメンバーズには、俺がいないとな」

スティヴ「おうおう、言ってくれるじゃね～か」

スティヴが拳で、ゲットの頭をぐりぐりする。　ちょっと痛そうな気もするが、これも彼流の歓迎なのだろう。

フレーネ「ぐすっ…。　ずっとゲットが帰って来なかったら、私どうしようかって…」

フレーネがまた泣き始める。　よほど心配で、そして寂しかったのだろう。

メリル「また泣かせた…」

リンダ「その歳で女の子を泣かせるなんて、ゲットも罪作りな男だねぇ～」

ハロ「ゲット、ワルイヤツ？　ゲット、ワルイヤツ？」

罪作りを間違って翻訳してしまったのか、ハロの叫びは何か変だった。　ただ、ゲットが冷やかされているのは、何となく分かる。

メリル「…そんな悪い子は、これ引いて」

差し出されたのは、メリル名物タロット。　上機嫌なゲットは、気軽にそれを引き…

固まった。

ゲット「こ、このタロット間違ってんぜ！　何で死神なんだよ？」

ゲットが手にしたカードは、死神の正位置だった。　逆位置なら再生的な意味もあるが、正位置ではあまり救いがない。

ゲット「やり直しだぜ」

一方的に告げ、メリルにカードをシャッフルさせる。　もう一度引いたカードは…。

ゲット「また死神?!　どうなってる…　フレーネ?!」

フレーネ「…怖い…。　宇宙(そら)が燃えそうなの…」

突然フレーネが、頭を抱えて座り込む。

ゲット「大丈夫か、フレーネっ！　…って、メリルまで?!」

タロットが床に散らばり、メリルが無言のまま座り込む。　さっきまで微笑んでいた顔が、真っ青に引きつっていた。

スティヴ「どうした嬢ちゃんたち!」

ゴトー「宇宙で何かあったようだなっ!」

疑問を呈したスティヴを押し退け、ゴトーがメリルに駆け寄る。

ゲット「どういう事だよ!?」

ゴトー「メリルが、純粋培養されたニュータイプだって話、してな

かったか？　俺達が感じられない事も、メリルは察するんだ！！」

ゲット「ニュータイプって、あの宇宙の革新とかって難しいや…つ…　うげ…」

介抱しようとしてフレーネに触れたゲットまでも、突然震えだし、尻餅をついた…。

【6】

？？？「説明シテヤリタイ所ダガ、ソンナ時間は無イヨウダナ？」

レイのファンネル攻撃が勢いを増す。　軽い損傷ならば修復が追いついているが、それ以上となると厳しいのか？　直撃を受けた右脚が脱落したが、脚は生えてこなかった。

？？？「オ前が知リタイ事は、全テ記憶ノ中に送リ込ンデオク。サア、早ク決メルガイイ。　今のオ前では、コレ以上の力は出セナイ」

ユーリ「…私では？　力に制限があるの？　まあ、いいわ」

会話を打ち切り、動くようになった左手で盾をかざし、ザク３に突っ込んだ。　サーベルに残る手応え。

レイ「…何故、あれだけの攻撃を受けて動けるんですか?!　従来の技術概念をっ！　…覆す…何…か　があると　…でも」

驚く言葉までも科学的。　それは、技術士官一筋だった男の性(さが)か？

しかし、どんな技術に守られていても、乗っているのは生身の人間。
サーベルの攻撃を受けた際に割れたディスプレイの破片が、ノーマルスーツすら突き破り、レイの身体を切り裂いていた。

レイ「…い、意識が薄…　これでは…」

ビームサーベル。　右腕切断、ファンネル１基撃墜。

バルカン。　背部スラスター機能停止。
打撃と思われる衝撃。　機体大破、緊急脱出機能発動。

自動で脱出機能を働かせたザク３だったが、搭乗者のレイの意識は、既に失われていた。　そして、その脱出ポッドを省みるだけの心の余裕が、ユーリにもなかった。

ユーリ「射てるのね？　やるじゃない、デビル…」

使えなくなったはずの冷却装置など、なくなってしまった右脚を除く、全ての機能が復活していた。

ユーリ「…これで…　救われる？

違う。　救うのよ…」

ＢＳから伸びた、一筋の閃光。　それはサーライト表面を焼き尽くしただけに止まらず、その巨大な岩盤を３つに砕いた。

それ以下の破片は数えるのすら困難な数で、サーライトの破片と思われる飛来物のため、この日、ルナ２は迎撃ミサイルを発射した記録が残っている…。

第１１５章　霧雨の止（や）む日（前書き）

（６回目）

キーンコーンカーンコーン…

ミク「優秀者講座いきま～す。　範囲は、クアルーンのその後。
倒しちゃった当人のサコン君。　経過を説明しちゃって」

サコン「経過か。　ユービットまでは、補習でやったから割愛だな。
まずは勝ったからには追撃だが、これはラピスラズリが、補給拠点を襲撃することで阻止している。
これで１勝１敗な訳だが、決定的に違う事が１つある」

ミケル「やはりカリスマ…　大将の存在か。　合議制のフロンティアガードからすれば、信じられないが…」

サコン「個人の実力や魅力と、組織の結束と制度のどちらで国を維持するかは、一長一短だ。　西暦のとある国では、内閣総理大臣という国のトップが１年経たずにコロコロ変わっても、不思議と国が維持された例があるらしい」

ミク「サコン君、話題が逸れてるよ？　とにかく大将頼みのクアルーンは、再び１つに纏まる事ができなかったんだよ」

サコン「せっかくバラバラなんだから、各個撃破するが定石なんだが、あえてしなかった。　苦戦しそうな所は包囲するだけにして、本格的には攻めていない」

ミケル「そして、一気にフロンティアガードに迫るまで勢力を拡大して、和平を結んだ。　まあ、和平を最初に提案したのは俺だが、読まれていた節もある」

サコン「…バレてたか。　とにかく、先に大きな敵と手打ちにして、意気を失わせる事が狙いだった。　また西暦に例えるが、当時の中国と日本は、仲の悪かったみたいなんだ。　その日本の同盟国アメリカが、日本に無断で、中国と軍事同盟を結んでしまったどうなるか？」

ミク「平和な時代なら三者同盟もアリだけど、戦ってる最中にやられたら凹むよね。　ただでさえ自分達は、戦いに負けた後なのに」

イエスマン「しかも降伏すれば優しくしますよ～。　なんて言っちゃってましたよね？」

サコン「このまますんなりといくと、断言まではできないが、１つ

に纏まる事はないな。　俺とカトラスがいる限り、それはさせない」

ミク「サコン君の自慢話になっちゃったけど、クアルーンがもう物語で出てこない訳は分かったかな～？」

（続く）

第１１５章　霧雨の止（や）む日

激しい交錯。　その軍配は、黒いＭＳに上がった。

フォーリュン「敵ながら見事。　エージェントとここまで戦えるとは、霧雨侮り難し」

霧雨士官「…腕だけは尊敬に値する。　あくまでも、腕だけだがな？」

ザク・ウォーリアが爆発した。　たった1機でフォーリュンを足止めし続けた男の、壮絶な最期だった。

バーストン「フォーリュンをここまで苦しめるなんて、よっぽどだったんだな？」

ＢＨＡ（ブラックヘビーアームズ）の銃身が、音をたてずにくるくる回る。　つまりは弾切れであり、弾が切れになるぐらいの戦闘を、彼らは戦っていた事になる。

Ｐちゃん「久しぶりに暴れました。　まあ、これだけ殺れば十分ですか」

辺りの敵影は消えていた。　非力な敵が多かったが、それでも3機対約５０機の戦闘に、僅かな時間で勝利した事は、驚愕してもいいはずだ。

フォーリュン「…熱反応が急速に増大している…。　要塞本体の攻撃に成功したようだな。　結局、支援はできなかったが」

Pちゃん「一応オタQはつけましたし、陽動にはなったでしょう。　霧雨のMSは約100機。　その半分以上を落としたのですから」

恐るべきは、エージェント達の戦闘能力か…？

？？？「あ～れ～。　オタっタ」

Pちゃん「その声はまさか？」

BAM（ブラックエアマスター）が変型し、サーライトの破片とともに飛来したMSを受け止める。　装甲板がぐちゃぐちゃに溶けてはいたが、元の色が黒かったのは推察できた。

Pちゃん「オタQ。　何故あなたがここに？」

オタQ「あいつはムカつくオタ！　だから守ってやらないオタよ！

！」

言葉はともかく、どう見ても機体が大破しているのだが…。

Pちゃんの顔は…　最早言うまでもあるまい。

Pちゃん「…まさかと思いますが、返り討ちにあったとか…？」

オタQ「…ごめんなさいオタ」

Pちゃん「どこか宇宙（そら）の彼方へ消えなさいっ！！」

BAMが蹴りを入れ、オタQは再び流星になった。　ただし、仲間思いのバーストンがいたため、結果として流星は無事だったが…。

【2】

霧雨「間に合え…。　間に合ってくれっ！」

最大戦速で宙域を駆け抜けるのは、霧雨率いる主力艦隊。　現在この辺りにいる中では、圧倒的な戦力を有した集団だ。

霧雨「ＭＳだけ先行させる。　時間が惜しい」

霧雨士官「…しかし…」

その士官を、霧雨は凄い形相で睨めつけた。　美形なだけに、鬼気迫る表情が強調されて逆に怖い。

霧雨「君、さっきもだけど、何で一々僕に逆らうかなあ？」

士官が後ずさる。　そう言えばこの顔は、さっき艦隊の掌握が困難だと言い、霧雨の逆鱗に触れた人物ではないか。

ジン「姉御っ！　発進行けるぜっ！」

逆に、霧雨の子飼いとも言うべき、ジンの行動は素早かった。　予期していたのか、カタパルトにもう機体を載せている。

霧雨「僕もすぐに出るっ！」

怒鳴りつけた士官を完全に無視して、霧雨はすぐに自分のザクをカタパルトに載せた。

ところで実は、最大戦速のままでの発艦は、地味に難しい。　ＭＳ

に加速がつきすぎるし、かといって発進後に減速すれば、母艦自身も高速で進んでいるため、追い抜かれざまに激突してしまうのだ。
だから通常は、艦は速度を落とすか、停止してからＭＳを出す。

霧雨「進路さえクリアならいい！　急いでるって言ってるだろ！！」

それでも霧雨は発艦を急いだ。　そして、そんな事で自機を損傷させない技術も有していた。

…ところが。

？？？「兄さんの読みって、いつも当たるよね～。　焦るお馬鹿は軽はずみっと」

発艦したばかりの霧雨が、突如上からの衝撃を受け、叩き落とされる。

霧雨「何だっ？！」

しかも折りが悪い事に、衝撃を受け失速した霧雨のザクは、自らの母艦の進路上に出てしまう。

霧雨士官「急速回避っ！　右だっ！！」

間一髪、霧雨機と母艦の激突は避けられた。　しかし、その急な回避で乱れに対応できず、霧雨の旗艦と隣のサラミスが激しく接触する。

霧雨「…敵襲?!　どこに隠れて…?

まさか、ミラージュコロイドかっ！！」

粒子の飛散により、僅かに姿を覗かせたＭＳを見て、霧雨はすべての真相を理解した…。

【3】

佇むＢＢ（ブラックブリッツ）

まあ、ブリッツガンダムは元々黒いから、エージェント専用機との判別は非常に困難ではある。

それに何より、ブリッツガンダムはミラージュコロイド粒子を定着させる能力を持つために、機能発動中は目に見えない。　光の波長を、ミラージュコロイド粒子が変えてしまうのだ。

イドゥン「あ～あ。　3隻も沈んじゃった。　もったいな～い」

霧雨の旗艦が無理な回避をしたため、サラミスと旗艦がまずぶつかり、それに後続のマゼランが乗し上がるようにして追突し…　誘爆で全部沈んだ。

霧雨「こそこそと…」

イドゥン「もしかして、卑怯とか言わないよね？　隠れるのがこっちの仕事なんだから、隙を見せる方が悪いんだよ」

まさに大活躍のハイドとイドゥンだった。

レンカを掻き乱し、開戦のきっかけを作ったかと思えば、直後に霧雨の艦隊に張り付き、思わぬ妨害までする。　まさか3隻撃沈まで予期していたとは思えないが、霧雨にとっての疫病神は確定だろう。

霧雨「サーライトは目の前なのにっ！！」

すでにサーライトは、艦の最大望遠で捉えられる距離だった。　そ

れだけに、霧雨が焦った事だけを見て、一方的な非難はできまい。

イドゥン「でも残念～。　あの要塞は、もう死亡フラグさっ！」

イドゥンが指を指したから…

な筈はもちろんない。　おそらく戦闘の暗号通信を、傍受していただけだろう。　ただどちらにしても、サーライトに閃光が走り、３つに分解してしまったのは確かだった。

霧雨「この熱量っ！　ミラージュココロイドだけじゃなくって、核ミサイルまで使うかい？　これだから、地球人ってのはっ！！」

霧雨の頭の中で、何かが弾けた気がした。　次の瞬間、霧雨のザクはイドゥンの視界から消える。

イドゥン「うそっ？！　速いって！」

言葉で驚きながらも、ＢＢは機体を横に開いて、回避運動をしていた。　だがそれも間に合わず、機体にビームによる焦げ跡が残る…。

【4】

サーライトが3つに割れ、デブリが散乱する様子は、母艦のサダラーンからも遠望された。

帝国精鋭兵「デブリ飛来まで、あと約10分です。　迎撃準備始めます」

戦艦ともなれば艦体も大きく、身軽に回避とはいかない。　必然的に、破片は撃ち落とす形になる。

ハイド「たかがデブリと侮ると、思わぬ損傷を被るぞ」

帝国精鋭兵「お任せ下さい。　30年、ただ給料日だけを楽しみに、射手をやっていたのではありません」

初老の兵だったが、この歳で予備役に引かないという事は、それだけ腕に自信があるか、周囲に必要とされたかの2つに1つだ。

ハイド「結構。　…ん?」

帝国精鋭兵「破片にしては到達が早いですね?　戦闘による…　いえ、生きてますよ?」

すぐさまカメラがズームに切り替えられ、さらに主砲が旋回する。

指示されないうちに照準まで済ませるあたり、30年の経験は伊

達ではないようだ。

ハイド「ＭＳが2、スペースランチが1…。　青十字は確認できるか？」

青十字とは、救難活動に当たる作業艇やＭＳが掲げる表示で、これを掲げた機体には、あらゆる攻撃が禁止される。　その代わり『敵味方の区別なく救助を行わなければならない』という義務も背負うが。

帝国精鋭兵「青十字、ありません。　堂々と霧雨の識別を使っていますよ」

ハイド「こちらに気がついた様子は？」

帝国精鋭兵「こちらを指向しているようにも見えますが…。　お待ち下さい」

その兵が、艦内無線で何かを交信する。

帝国精鋭兵「和平の使者だそうです。　発光信号を確認しました」

ミノフスキー粒子による通信途絶を警戒してか、スペースランチは

無線ではなく、光で連絡を寄越した。

帝国精鋭兵「どうされます？」

ハイド「着艦させるか…」

帝国精鋭兵「畏まりました」

こうして、一度はランチを受け入れるかに見えたサダラーンだったが…。

ハイド「…待て。　今、この瞬間に和平の使者が来るだと？　乗っているのは誰だ？」

帝国精鋭兵「当主の霧雨侯爵本人だそうですが…」

ハイド「予定を変更するっ！」

ハイドの目に、強い光が宿った…。

【5】

霧雨兵「確認しました。　本国の艦です」

霧雨侯爵「大方、様子を見に来たルナ2の艦だろう。　単艦とはいえ、戦艦を出すところを見ると、事態を重く見てくれたのやも知れん」

霧雨から手を出した。　原因が何であれ、それは恥ずべき事実であり、詫びるべきと侯爵は信じていた。

霧雨士官「…おかしい…。　主砲が旋回している？」

霧雨侯爵「どうした？」

霧雨士官「いえ…。　あのサダラーン、こちらを狙っているようにしか思えないんです」

霧雨侯爵「当然であろう。　それだけの事を霧雨はしてしまったのだ。　疑われるのも致し方ない」

霧雨士官「…そうですか…」

アプローチは継続された。　艦影が大きくなり始める。

霧雨兵「緊急信っ！　サーライト陥落！　１０分前だそうですっ！！」

そこに届いたのは、サーライトが陥落したという知らせ。

霧雨侯爵「また誤信号か！」

あり得ない通信ではあった。　いくら建設中とはいえ、霧雨の誇る宇宙要塞がそう簡単に落ちるはずはない。

だいたい、本国と霧雨が揉め事を起こしたのは、僅か1日前である。
　このタイミングで、どこの誰がサーライトを攻めたというのか？

霧雨兵「分かりませんっ！　いくら新型でも、ＭＳのセンサーではサーライトは遠すぎますっ！！」

霧雨侯爵「何にせよ、着艦を急げ。　戦艦ならば、サーライトの現状を的確に把握しておろう」

霧雨士官「危険です！　もしサーライトを攻めたのが本国だとすれば、目の前にいる艦は、敵艦に他なりません！」

霧雨侯爵「敵とせぬために来たのだ！　今ならまだ間に合う！！」

皮肉というならば、このやり取り全てが皮肉に満たされていた。
何故なら、目の前のサダラーンは紛れもなく敵艦であるばかりか、あらゆる事の元凶だったのだから。

霧雨に裏工作を行って混乱させ、それを口実にサーライトを攻めた。
しかも、全ては事前に計画された通りに…。

【6】

掠めるビームを右へ左へ、ただひたすら逃げ回るだけのＢＢ（ブラックブリッツ）。

霧雨「ジンっ！　右へ回り込めっ！　僕は左から殺るっ！！」

イドゥン「3隻沈んだからって、そんなに怒んなくってイイじゃん。あれはどう見ても、ただの交通事故だって！」

それをジンと霧雨のザク・ウォーリアが、執拗に追い回す。怒り心頭の霧雨は、先に出撃していたジンを交えて、何とかイドゥンを追い詰めようとしていた。

霧雨「逃げてばかりいないで、正々堂々と戦えっ！」

イドゥン「何が正々堂々さ！　隠れたり逃げるのが、僕たち隠密の

役目なんだもん」

言っている事は正しい。　表立って戦いを挑むだけが戦争ではない。

とは言え、仮にもガンダムに乗りながら、こうも逃げてばかりの人間も珍しいが。

イドゥン「おおっと！！」

逃げ回った先に、偶然いたゲイツＲとサラミス。　それをイドゥンは、すれ違い様に撃ち抜いた。

霧雨「またっ！！」

イドゥン「だから危ないって！」

霧雨ザクの斬撃が、ＢＢの装甲を微かに焼き切る。　実弾には滅法強いフェイズシフトも、ビーム相手には普通の装甲だ。

イドゥン「ああ、もうっ！」

ＢＢが鮮やかな光を失う。

ジン「姉御？」

霧雨「諦めたかっ！」

イドゥン「そんな訳ないじゃん？」

次の瞬間、ＢＢはその姿を消していた。　ミラージュコロイドを発動したのだ。

霧雨「消えた？　でも熱源を辿ればっ！」

霧雨はセンサーだけを頼りに、何発かビームを放った。　そのうちの１発が、見事にＢＢを捉えていた。

イドゥン「うっそ！？　お兄さんって超能力者？」

ＰＳ装甲とミラージュコロイドは、機能の特性上、同時には使えない。　つまり装甲が薄くなったも同然のところに一撃を浴びたのだから、ＢＢの受けたダメージは大きい。

イドゥン「…ヤバいなぁ…。　何とかイイ手を考えないと…」

戦いは、命がけの鬼ごっこと化しつつあった…。

【7】

ハイド「落とせ」

冷酷な声がした。

帝国精鋭兵「この距離ならば、絶対に当てる自信があります。

…だからこそ、よろしいのですか？」

ハイド「時期を失した和平交渉に、何の意味があると言うのだ？

私達は既にサーライトを攻め、これを破壊した。

根がどこにあり、いつ生えたものなのかは関係ない。　霧雨という

枝葉は、紛れもない敵だ」

帝国精鋭兵「畏まりました」

再びモニターに向かった兵が、ボタンを押した。　そのちょうど3

秒後、１機のザクが蒸発して消えた。

霧雨侯爵「なっ、何故射つ?!　本国は、私の弁解すら聞く耳持たぬと言うのか?」

哀しい叫び。

しかし叫びを気にする素振りも、躊躇いすらも見せる事はなく、サダラーンの主砲は旋回する。　対空防御の弾幕ではなく、１発１発狙いを定めた精密射撃である事が、この射撃が誤認によるものではないと証明していた。

霧雨士官「侯爵っ!　お下がり下さいっ!!　本国は敵となったのです!」

霧雨「まだ諦められぬ!　人間…　話せば分かる…　っ!!」

ついに、その士官のザクまでもが砕け散った。　護衛を失ったスペースランチに、もはや為す術は…。

ハイド「数多の人間が生きる世の中に、絶対的な善し悪しなどはない。　もしあるのだとすれば…

それは頭の良し悪しだけだ」

霧雨侯爵「薙華…。　霧雨の全ては…　お前が…っ」

帝国精鋭兵「ザク・ウォーリア、スペースランチ、完全に消滅しました。　詳細を確認されますか？」

ハイド「いや、結構」

正面のディスプレイに背を向け、あくまで落ち着いた情報エージェント。　彼はその頭脳に、新しくどんな情報を書き込んだのか…？

【8】

霧雨「逃がすかっ！！」

さらに逃げ回ったＢＢを、霧雨はついに追い詰めた。　右の上下にゲイツＲ、左からはジンが回り込んでいる。

正面には霧雨がいて、その先…　イドゥンの背後には、３隻のマゼランが砲門を並べる。

イドゥン「これヤバい！　マジヤバい！　うっそ～」

やむを得ずか、マゼランに向かって全速力で突っ込むイドゥン。

マゼランの対空砲火は強力だが、自由に動き回るＭＳよりは組み易い。　一旦内懐へ入ってしまえば、返り討ちにしてしまう事もできるからだ。

霧雨「落ちろっ！」

マゼランからは射線をずらしつつも、霧雨はさらなる一撃を見舞った。　ＢＢの装甲が弾け飛び、それにマゼランの機関砲が追い撃ちをかける。　機体が火を吹いているように見えた。

霧雨「対空砲火を止めるんだ！　止めは僕が刺すっ！！」

マゼランに命じると、落ちていくＢＢを追いかけた。

ＢＢは何とか逃げようと、ふらふらと動くが、マゼランの陰に隠れるだけで精一杯。　すぐに霧雨に捉えられ…？

霧雨「いないっ?!　またミラージュコロイドかっ！」

機体をその場に止め、熱源を探る。　激しく動き回った機体だから、余熱がセンサーに反応するはずだ。　さっき見えたのが本当に炎なら、センサーに赤々と映ってしまうだろう。

イドゥン「…と思ったでしょ?」

霧雨「何っ!?」

イドゥン「惜しかったね、お兄さん?」

ＢＢがいたのは、マゼランのメインエンジンの上。　普通に近づけば、巻き込まれてしまいかねない危険な場所。

しかし同時に、あまりに高熱過ぎて、熱源センサーの目を掻い潜れる場所でもある。

イドゥン「ズドーン！」

放たれたビームが霧雨のザク、それもコックピットを直撃…

ジン「姉御っ！　危ねぇっ！！」

突き飛ばされた、霧雨のザク。　代わりに砕け散ったのは…。

霧雨「おいっ！　ジンっ！」

ジン「…姉御は…　こんな所で死んじゃいけな…」

言葉が終わるのすら待たず、ジンの機体が爆発する。　巻き込まれるのを防ぐため、反射的に突き飛ばしていた自分を、霧雨は酷く嫌悪した。

イドゥン「ちぇっ！　９回裏の攻撃は、犠牲フライでの同点止まりか」

その隙に傷ついたＢＢが逃走したが、霧雨には最早、追いかける気力は残されていなかった…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3669r/

ガンダム・ユーフォリア

2011年11月17日08時58分発行